刀使ノ巫女+α

tatararako

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

刀使ノ巫女のＯＰ　Ｓａｖｅ　ｙｏｕ　Ｓａｖｅ　ｍｅが主人公の心情を表しているんじゃないかと思い、書いてみました。

初投稿なので、拙い文章かもしれませんがお許し下さい。

お気に召さない方がいらっしゃれば、見ないようにお願いします。

誤字、脱字が有れば、教えて下さい。お願いします。

タグは後々増えてくると思いますが、お許しを！

目次

胎動編

切っ先が向かう先 1
オリキャラ紹介 5
御前試合と逃走 8
思惑が重なり 16
悪魔の証明 26
見えない傷 39
狂気の世界 50
もう帰れない 59
異常の定義 74
優しさ 85
閑話；ノロを受け入れた人の話 94
それぞれの刀使 103
スズメバチの巣 114
引き金 128
死闘 138
遠すぎた石廊崎 149
怪物の声 159
人と穢れの違い 171
姉と……。 180
心が揺れる 189
告白 201
病 211
偽りの姿 219

相反するコト 229
戦闘準備 238
前夜 246
代償 256
辿り着く先 266
一刻の望み 277
策謀の渦中へ 287
唯一の希望　1 298
唯一の希望　2 309
Ｓａｖｅ ｙｏｕ Ｓａｖｅ ｍｅ　1 319
Ｓａｖｅ ｙｏｕ ｓａｖｅ ｍｅ　2 331
Ｓａｖｅ ｙｏｕ ｓａｖｅ ｍｅ　3 344
決戦 356
苦渋 368
胡蝶の夢 379
落ちていく決意 390
燕　ノ　ユメ 400
荒魂 411
ひとつの太刀 423
ｅｐｉｌｏｇｕｅ　1 435
ｅｐｉｌｏｇｕｅ　2 446
波瀾編
虚偽の英雄 455
オリキャラ紹介　―波瀾編― 466
新型Ｓ装備の話　1 472

新型Ｓ装備の話　２　480
災いの警鐘　490
複数の目と呪い　501
壊れた歯車　512
箱根山戦１　525
箱根山戦２　536
箱根山戦３　547
箱根山戦４　559
箱根山戦５　572
箱根山戦６　586
箱根山戦　～その後～　595
荒魂達の狂騒　～余談前編～　604
荒魂達の狂騒　～余談後編～　617
埋伏の毒　631
荒魂と人の境界線　642
曖昧な境界線　654
二つの家族の場景　665
善き隣人　676
親の愛　687
痛みに耐えて、耐え続けてた。　699
心が折れそうだった。　711
認めさせる。１　722
認めさせる。２　733
死は救済　744
ふしぎの国　756

平和な国 770
狼が支配する国 781
非戦の国 793
軍隊の無い国 804
軍隊の居ない戦場 815
制限の無い戦い 825
濁されてゆく言葉（英語表記：ｗｏｒｄ、中国語表記：字） 836
静かなる侵略　者 847
噛み合わない者達 859
帰ってきた大荒魂 869
国中を巡って 881
独裁者の忘れもの 893
我が教え子、タキリヒメ 905
ネバーランド 916
不要な物など存在しない 928
過去の残り香 941
過去の遺り香 953
夜明け 965
綺麗な言葉に刺さる心 975
国家狂騒曲 987
組み合わせられた社交ダンス 998
売国奴達のワルツ 1010
残響のテロル 1021
この小説はうら若き公務員たちの提供でお送りいたします。 1

この小説はうら若き公務員たちの提供でお送りいたします。 2
生け贄達のマーチ 10
名前を得た怪物達が奏でる間奏 44
誰かのために、踊ると誓う人達。 56
自由と平等を謳うが、最も暴力的な少年聖歌隊 61
蠅たたきによる打楽器狂奏曲 66
荒魂達のカーニバル 78
次の狂ったお茶会が始まるまでの終曲 89
地球という船 100
タキリヒメの部屋 110
タキリヒメの問答 112
タキリヒメとの対話 115
タキリヒメとの邂逅 117
タキリヒメと刀使と荒魂達と感情と 119
刀使殺害事件特別捜査班調書 ―極秘― １Ｐａｇｅ 120
刀使殺害事件特別捜査班調書 ―極秘― ２Ｐａｇｅ 121
刀使殺害事件特別捜査班調書 ―極秘― ３Ｐａｇｅ 122
心を持たない者 123
生命を模しただけの荒魂 124
鵺子鳥 125
災厄の産声 126
荒魂共が囁く日 127
アサシンクリード 128

神様も泣いたり笑ったりする 1295
神の代理人 1307
獣という神が居る世界 1318
荒魂の力を頼った刀使 1329
霧を祓おうとする者達 1341
小さな可能性 1351
ソフィアの写シ 1363
ソフィアの二次創作 1375
御刀 1388
支配のタキリヒメ 1397
人の境目 1407
人の姿をした荒魂　前編 1420
人の姿をした荒魂　後編 1434
カミサマの嘆き 1448
カミサマになった後悔 1458
和御魂の声 1471
子供達の夢 1485
夢と現実 1497
東京２３区特別災害予想区域 1510
過去の亡霊 1522
冥加刀使 1535
死の崇拝 1548
ありがとうおかあさん。……ごめんねおかあさん。 1560
おとぎ話に彷徨うアリス達 1574
母 1586

灰色の世界 1597
世界平和 1609
コインの表と裏 1620
無敵ノ刀使 1632
裂けた空 1645
優くんが欲しかった物 1656
優くんが望んだセカイ 1667
ゆうくんのしあわせ 1678
御刀を向ける先 1690
御刀を持つ意味 1701
信徒の恋文 1710
ナザレの十字架 1723
毒麦が実るとき 1736
灰は灰に塵は塵に 1749
母の剣 1761
求めるニモ　求めた美奈都 1772
刀使ノ使命 1782
衛藤　可奈美は刀使である 1793
十条　姫和は復讐者である 1804
年の瀬の後 1815
自由となり 1825
結びの巫女 1836
篝火が向かう先 1847

胎動編
切っ先が向かう先

――母が死んだ――

私は葬式の時は泣かなかったが、時間が経つにつれ、その事実に打ちのめされ、一人縁側で声を押し殺し泣いていた。

少し、外に目を向けるとそこには、母と一緒に過ごした思い出がある庭があった。私はいつも母に剣術に勝てなかったこと、一緒に遊んで貰えたことを一つ一つ思い出し、更に目に涙を溢れさせていった。

ただ辛く、苦しかった。大好きだった母はもうこの世に居ないという事実に打ちのめされていた。

「ねーちゃ」

声が聞こえた――

弟の声が聞こえた。いつも自分の跡に子犬の様に付いて来て、自分の言う事を素直に聞いてくれる大事な弟。

でも、今は傍に居て欲しくなかったからその声に応えなかった。〃自分はお姉ちゃんだから、泣いている所を見られたくない。〃という理由だったから傍に近付いて欲しくなかった。

「……うるさい、あっち行って。」

冷たく酷い言葉を浴びせる。大事な弟じゃないのかというぐらい。

「ねーちゃ、苦しそう……。」

私はこの時、正常じゃなかったのだろう、近付いてくる足音と共に、私の心は辛苦から憤怒へと変わっていった。だからだろうか、私が次に吐いた言葉が暴言に近い言葉だったのが、

「うるさい……とにかく、どっか向こうへ行って!!」

弟は、言葉を詰まらせると足音が遠くに離れて行くのが聞こえた。その音と共に私の心は次第に憤怒から罪悪感に変わって行った。そして、私は一人になり孤独を感じていた。

「……ごめん……ごめんね。」

私は誰も居ない所で、誰も聞いていない謝罪を呟いていた。この

後、心の整理がついたら弟にちゃんと謝ろうと思った。ただ一言、酷い事言ってごめんと……そうしたら、また一緒にいられると、元通りになると信じて。

――――そんな未来を見ていた。――――

数年後、可奈美は人々を脅かす荒魂から守る〝刀使〟となり、美濃関学院中等部の二年生となっていた。

折神家主催の御前試合に参加する代表を決める学内選抜試合に優勝した可奈美は、美濃関学院の代表の一人として、同じ代表の柳瀬舞衣と共に、御前試合のある鎌倉行きの新幹線がある駅前にいた。

「いい？優ちゃん、美炎ちゃん達に付いて行けば大丈夫だから。あと、忘れ物は無い？」

可奈美は御前試合に付いて来ると言って聞かない弟の衛藤　優に迷子にならないよう、心配でそう何度も言いつける。しかし、このやりとりはけっこう長く続いているため、見送りに来た学友達からは過保護だなぁ……とか思われていたが、当の可奈美はそのことに気付いていない。

「うん、分かった。」

弟の優も抑揚の無い返事で無表情で返す。

「可奈美は降りる駅、間違えないでね。」

可奈美は思いもしなかった学友の攻撃に驚くが、姉としての最低限

の威厳を失わないために、頭を使って必死に反論する。
「だ、だ大丈夫だよ、舞衣ちゃんが居るから。」
「いや、それはどうかと思うけど……。」
しかし、至極真っ当な答えが返って来たため、沈黙するしか無かった。ふと、視線を隣に向けると、舞衣が執事の柴田と何か話していた。
「あの大人しかった舞衣お嬢様が美濃関学院の代表ならるとは……。」
「し…柴田さんやめてください…ハズカシイ。」
「本当にご立派になられました……。」
そんなやりとりをしている内に時間が過ぎてしまい、可奈美達が乗る新幹線がもうすぐ発車することを告げるアナウンスが流れ、二人は少し慌てて新幹線に乗り込ん……
「優ちゃーーーーん!ちゃんとお姉ちゃん達の言う事、聞くんだよーーーーーー!!」
で居らず、可奈美だけ弟の優に大きい声で手を振りながらそう言っていた。それに気付いた舞衣は可奈美の袖を少し引っ張って促し、ようやく二人は列車に乗って行った。
「最後まで、騒がしかったね。」
「可奈美、本当に大丈夫かな?」
美濃関学院の学友達はそう呟いていた。
「えと……鎌倉まで、お姉ちゃん達のお世話になります。」
と、会釈した優にそう言われ、美濃関学院の学友達は良い子だなぁとか思っていたが、同時に剣術バカの可奈美の弟とは思えないなぁ……とか、とても失礼な事を思っていた。

翌日……美炎達は優の面倒を見ながら鎌倉へ向かう新幹線に乗っていた。
美炎は、可奈美が御前試合に向かう前日に優が御前試合に行くと言って聞かないから、鎌倉に着くまで面倒を見て欲しいと頼まれていたり、向かう直前になってもあれだけ心配するのだから優はきっと、

手の掛かる子なのだろうと思っていた。
　しかし、優は新幹線の窓をぼんやり見ていたりして、大人しくしていたため、その道中は何事もなく、穏やかなものであった。
「優くんは今年で何年生になったの？」
　その後、美炎を除く彼女達は話題が無くなると、次の話題を可奈美の弟の優にし、優を質問攻めしていた。
「えっと…よ……四年生です……」
「優くんは何で御前試合に行きたかったの？剣術が好きとかかな？」
「うん…その、可奈ねーちゃんは一人にすると、心配だから……。」
　そのとき、一番心配かけている子が言うことかと、美炎達全員が心の中でそう思っていた。かなりのお姉ちゃんっ子なのだろう。
「あ、えっと、優くんは好きな子とかいるの？」
「えっ……ええと……。」
　そんな話を振られたため、少し困惑した顔で答えていた。その仕草が可愛らしかったのだろうか、優にお菓子とジュースをあげたり、少し体を密着させたりして照れている仕草を見て、楽しんでいた。美炎は、優がオモチャにされて大変そうだなぁと、そう思っていた。しかし、それを止める術を持っていないため、どうしようかと悩んでいた。この時、何故かちぃ姉ぇがここに居たら、苦労しながらも優を弄ぶのを止めさせてくれるだろうと思ってしまい、そう考えると〝姉〟って大変なんだなぁと思い、今更ながら優のお守りをするのが、少し不安になってしまった。
「いいなぁ、私もこんな弟が欲しかった。」
「ウチの妹や弟は生意気だし。」
「可奈美が過保護になる理由が分かるわ。」
　新幹線内にて、そんな他愛もないことをしている内に鎌倉に到着。
美炎と優達は御前試合へと向かうのであった。

オリキャラ紹介

衛藤　優

９歳の可愛らしい容姿の小学４年生。可奈美の弟。
よく可奈美に可愛がられていたため、可奈美を大切な家族の一人としており、可奈美の助けになろうと努力している。感情の起伏は少なく、大人しい子だが、理不尽な事には声を荒げて抵抗することがある。
身長は益子　薫より低い。
しかし、ノロを使って強化改造されたせいなのか残虐極まりない行動をするため、可奈美と姫和に気に掛けられている。

スレイド博士

フリードマン博士以上の天才だと自称するアメリカの科学者。しかし、本音はフリードマン博士に嫉妬しているがためにそう言っているだけの男。
主な研究はノロと人を融合させ、強化・進化させること。そして、軍が計画をキャンセルしたにも関わらず、〝協力者〟と共に優を浚って改造した張本人。

トーマス

元アメリカ海軍の少佐の初老の男性。実はフリードマンの弟。除隊後、フリードマン博士の会社の警備員をしていた傭兵だったが、フリードマンに誘われ〝舞草〟に加入。
その正体は折神　紫の牽制または暗殺するために送り込まれた工作員。過去に反米国家を少年兵を使って非人道国家として〝演出〟し、地図上からその反米国家を消した実績がある。

ローク

元アメリカ海軍の男性。４０代。
トーマスとは長い長い付き合いのようで、相棒的存在。除隊後、トーマスと一緒に〝舞草〟に加入。
その正体はトーマスと同じ工作員。

織田　ソフィア

綾小路武芸学舎高等部二年生の１７歳。身長は１７６ｃｍ。綾小路の制服を着用し黒色のベレー帽に灰色のトレンチコート、黒のジャングルブーツを装着しているという警察組織の一員としてはかなり問題の有る格好をしているが、織田防衛事務次官の養女であるためか、黙認されている模様。あの燕　結芽を凌ぐ実力を有すると噂される強大で危険な雰囲気を纏う刀使。仲間を集め、なにか目的があって動いているようだが……。

片手で人を持ち上げる程の腕力で殴ったり、掴み上げたり、柔術で転倒させ、写シを張らずに刀使と戦うといった狂戦士のような戦い方をする。戸籍上ロシア人とのハーフのようだが……？

御刀　蛍丸

刀身が３尺３寸４分５厘（約１００．３５ｃｍ）という長い御刀。来国俊作の大太刀で、本作を来国俊の最盛期の作品と評している者もいる。

流派　無住心剣術

「ただ太刀を眉間まで引き上げて落とす」という非常にシンプルな技法しか持たない剣術。しかし、千回の他流試合に千勝しているという剣豪を輩出した剣法でもあるため、油断は禁物である。そして、『相抜け』というお互いが打てない、打たれない状態になることを目指している。

大村　静

綾小路武芸学舎中等部三年生の１５歳。身長は１４３ｃｍ。

可愛らしい容姿と実力は平凡なため、気を許しやすいが、彼女の本当の姿は拷問と洗脳の時に発揮される。これには、家庭内事情による部分が多いようだが……。

御刀　物吉貞宗

相州貞宗の作の短刀のため、刀身は１尺９分５厘（３３．２ｃｍ）と

短い御刀だが、拷問や洗脳に使うことが多いため、問題が無い模様。

流派　直心影流

鹿島神宮鹿島之太刀を起源とするという。江戸時代にいち早く竹刀と防具を使用した打ち込み稽古を導入し、江戸時代後期には全国に最も広まった流派。型稽古は小太刀もある。

御前試合と逃走

「今年の大会は年少者が多いようですわね。」
　会場の視察と警備に来た親衛隊第二席の此花　寿々花がそう言うと、同じ理由で隣にいる第一席の獅童　真希が答える。
「御刀との相性は年少者の方が高いと聞くし。それに、あの中に何名か僕等より立派な刀使が居るかもしれないから、あまりそう言うものじゃない。」
「へえ、その口ぶりからすると、私達の世代は大会二連覇の獅童さんが終わらせたとでも？」
　寿々花の皮肉に真希は、
「…僕はそれ程自惚れていない、結芽を見てるとそう思う……それに、それ程の実力を持つ刀使が居れば親衛隊に入れるべきだと、思うからな。」
　実際、真希が所属する親衛隊は局長の折神　紫の警護から職務の同行、そして、作戦の指揮と書類仕事といった多種多様の仕事をこなすのに四名しか居らず、人手が足りて無かった。そのため、真希は少なくても四十名、多くても六十名は欲しいと思っていた。
「でも、剣術ばかり得意な奴ばかり集めても仕方が無いから、書類仕事や作戦指揮ができる人材も欲しいと思っている。」
「そんなに、人数が必要とは思いませんけど。」
「紫様も僕達も人間だからな、不意を受ければ死ぬことだってある。…それに、最近は政治的な影響力を強めているからその妨害と、舞草との戦闘を考慮すればそれぐらいは欲しいさ。」
　真希は、剣の腕は自分に次ぐ遣い手でありながら、参謀として親衛隊一の此花　寿々花。自身をほぼ犠牲にして、特殊な能力を持つ三席の皐月　夜見。自分よりも刀使の才能に恵まれた天才、四席の燕　結芽。三人とも、最高の人材ではあるが、失えば二度と手に入らない逸材だと思っている真希は人員を増やし、三人の負担を少しでも減らすべきだと思っていた。実際、会場の警備は親衛隊だけでは人手が足りないので、鎌府の刀使を借りていたりする。そして、特別刀剣類管理

局内の造反分子『舞草』との決戦、様々な勢力の妨害といったことを考えていた真希は人員を増やそうとしていた。
「まあ、そうですわね。」
寿々花は頷くしかなかった。
「ああ、お喋りしている間に、私の後輩とあなたの後輩の一戦が始まりますわよ。」
見ると、第一回戦、綾小路武芸学舎の山崎　穂積と平城学館の十条姫和の試合が始まるところであった。
「礼、双方備え。」
審判の合図に応え、お互いが礼をした後、御刀を抜く。
「写シ。」
写シ、刀使の基本戦術であり、最大の防御術。御刀を媒介として肉体を一時的にエネルギー体へと変質させる。写シで防御している間は、わずかな痛みと精神疲労を代償に、実体へのダメージを肩代わりできる。ダメージを受けるとその部分は消失し、身体機能も奪われていくが、写しを解除するまで実体へのダメージはない。そんな無敵のような術を両名共に展開するが、弱点もある。それは、写シで防御している間に異物が刺さったまま、写シを解除すると、実体にもダメージを受けるということである。
「始め！」
審判の声と共に、試合が始まる。姫和は迅移を使い、間合いを詰めたと同時に横薙ぎに斬る。相手は上半身と下半身が分かれるが、写シを展開していたため、命を失うことはなかったが、苦痛の声を上げ、倒れていた。
「勝者、平城学館十条姫和。」
「へえ、頼もしい後輩ですわね。もしかしたら、親衛隊は平城学館出身者が多くなりそうですわね。」
（小烏丸……？適合者無しだった筈だが……）
寿々花の茶化した物言いに、真希は耳が入っていなかった。それよりも目の前の疑問に集中していた。
「真希さん？」

「んっ？ああ、何か言ったか？」
「……なんでもないです。」
「？…何で剥れているんだ。」
そんな話をしている内に第二試合が始まりそうであり、二人とも試合に集中する。
「あの子は鎌府の糸見　沙耶香でしたかしら。」
「ああ、そうだ、高津学長がよく自慢気に話している子だな。」
とある事情のため、寿々花は憎らしい目で見ていたが、真希は鎌府女学院高津学長が沙耶香をいつも特別扱いするため、彼女は学院内でいつも孤立しているということを耳にしている。そのため、真希は複雑な心境で沙耶香を見ていた。
「…まあ、彼女が勝つだろうさ……」
「そーですわね。任務達成率１００％の紫様の右腕に相応しい刀使でしたわね。」
寿々花は忌ま忌ましげに言う。真希は沙耶香がどういう状態で居るか知っているため、そう言うなと心の中で思っていた。まあ、実績を見れば彼女の親衛隊入りは間違い無いだろうし、今言っても納得しないだろうから、入隊した後にでも寿々花にそのことを伝えておけば和解するだろうと考えていた。それに、結芽とも仲良くしてもくれそうだと楽観的なことも考えてもいた。
「礼、双方備え。」
第二回戦が始まろうとしている。
「写シ。」
両名、共に写シを展開。
「始め！」
という声と共に沙耶香は御刀を媒介として通常の時間から逸して加速する刀使の攻撃術の１つ、迅移を使い、流れるような怒涛の連撃で相手を倒そうとする。
「沙耶香さん、勝ちそうですわね。」
面白くなさそうに寿々花は言う。実際、沙耶香の対戦相手は防戦一方のため、観客の方からも鎌府の勝利で決まりだろうという声が上

がっている。
「いや…そうでもないかも知れない。」
　真希は、沙耶香の対戦相手があの速い連撃を全て、最低限の動きで、太刀筋を見切っているように見えた。そうして、その対戦相手は沙耶香の一瞬の隙を突いて、下から掬い上げるような斬撃で御刀を持つ沙耶香の左腕を斬り飛ばしてしまう。
　意外な試合結果に観客は驚き、会場内は大きな歓声を上げていた。
「…これは、また意外な結果になりましたわね。」
「あの子の名前は…衛藤　可奈美か……覚えておこう。」
「あの子を親衛隊入りにするんですの？」
「それは、この大会が終わってから考えるさ、あとは軽い身辺調査もするが。」
　身辺調査をする理由は、可奈美が舞草の構成員であるか、調べるためである。
「味方も疑わなければならないのは、辛いですわね。」
「全くだ。」
　しかし、可奈美が舞草と繋がっていないとわかれば、局長の紫に彼女の親衛隊入りを強く推薦しようと思っていた。それに、唯一親衛隊入りが一名も居ない美濃関学院から親衛隊入りを果たした者が居ることを大きく伝えれば刀使達の考えも改めるだろうという打算と、結芽のライバルになってくれるかも知れないという考えがあってのことでもあるが。
　その後も御前試合は進み、準決勝の柳瀬　舞衣と衛藤　可奈美の試合が始まろうとしていた。
「衛藤　可奈美さん、準優勝まで来ましたわね。」
「ああ。」
　寿々花にそう言われ、そっけなく答える真希。
（共に美濃関学院の刀使か……）
　僕達の時は美濃関は準決勝まで来た刀使は居なかったのだが……。
そのようなことを思いながら、寿々花が言うように僕らの世代は終わったのかもしれないと思い、少し物悲しい気分になっていた。

準決勝の試合が始まり、舞衣は会場全体が驚くようなことをする。
居合いの構えをしたのである。
「居合いなんて…？」
（正攻法では勝てないという判断か…？思い切りのいい子だ。）
寿々花は驚愕の声を上げるが、真希は可奈美の戦い方を思い出し、舞衣は居合いを使うことにしたのだろうと考えていた。たしかに、あれなら攻め難いかもしれないと真希は思う。だが、次の瞬間、真希は更に驚愕するのであった。
（片手で止めた……？）
可奈美は、舞衣の居合いを片手で押さえて止めていた。そのことに驚嘆した真希は、この大会が終わった後に可奈美の身辺調査を行い、何も無ければ局長の紫に親衛隊入りを強く推薦しようと決意した。

本殿の白州にて行われる御前試合決勝。可奈美と美炎達はそこに居て、可奈美はエールを貰っていた。
「ここまで来たら、優勝のみだ！」
「可奈美なら、落ち着いて行けば勝てるよ。」
「みんな、ありがとう。」
「可奈ねーちゃん。」
「ん、何？」
優に呼ばれた可奈美は、優の身長に合わせて屈んで、話を聞こうとしていた。
「これに優勝したら、夢が叶う？」
「…うん、一歩前進かな！」
「うん、僕も夢が叶って欲しいから、あそこで頑張って応援する。」
優は顔を綻ばせながら、自分の気持ちを伝えていた。そう言われた可奈美は、少し驚いた表情をした後、満面の笑顔になった。
「うん、お願い。優ちゃんが応援してくれたら、力が出るよ。」
「優くん、可奈美おねーちゃんは剣術が好きでここまで行けたんだから、必ず勝てるよ。」

「ちょっ、美炎ちゃん、プレッシャーをかけないでよ！」
　そうして、可奈美は美炎達の声援を受けながら、決勝戦に挑むのであった。しかし、可奈美は優を横目で少し見て、
「……でも、私、本当に剣術が好きなのかな？」
　可奈美の小さな呟きは、誰にも聞こえていなかった。
「これより、折神家御前試合決勝戦を行います。選手は前へ。」
　ついに始まる決勝戦。試合前による緊張もそうだが、本殿白州は異様なまでの静けさに包まれていた。その理由は、試合場を正面から見据えれる位置に、二十年前に現れた大荒魂の討伐の英雄にして折神家現当主でもある折神　紫が貴賓の観覧席にて上覧しているからだろう。その姿に観客席側から、なんて神々しい、変わらぬお姿で、私も頑張って毎日青汁を飲もう、といった声が上がっている。
「あの、二本持ってる人って凄いの？」
「ゆ…優くん、あの人は昔、とっても怖くって、刀使が何人居ても勝てないぐらい強い大荒魂を倒した、この国のヒーローみたいな人なんだよ？」
　舞衣は優の物言いに冷や汗をかきながらも、子供にも解り易く、そう説明する。
「じゃあ、あの二本を可奈ねーちゃんが倒せば、可奈ねーちゃんが一番強いって事になる？」
　そんなことを聞かれた舞衣は沈黙し、可奈美なら本当に挑んで行きそうだと少し思ってしまったが、とりあえず答えをはぐらかそうとする。
「あっ、優くん、そろそろ始まるから静かにしようね。静かにしてたらクッキー上げるから。」
　そう言われた優は、は～いと言って、言われた通り静かにしていた。
「これより、折神家御前試合決勝戦を行います。選手は前へ。」
「「はい。」」
　決勝に残った姫和と可奈美、両者は試合場で対峙していた。
「双方備え。」
　審判の合図と共に、姫和と可奈美は御刀を抜く。

「写シ。」
そして、姫和と可奈美も写シを展開。誰もが、この一戦で刀使の頂点に立つ者が決まると思い、固唾を呑んで見守っていた。
始め！の合図の前に姫和が迅移を使う。それは、舞衣が消えたと思う程の速さで、可奈美に向かわず、紫の方へ向かって行き、突きを放つ。
しかし、それを紫は容易く防いでのけていた。
「それが、お前の〝一つの太刀〟か？」
姫和は驚愕した、自分が持てる全てを注ぎ込んだ剣を容易く防いだことに。この日のために修練し、研鑽し続けていたことが無駄であると、眼の前にいる敵にそう宣告されているような気がした。しかし、姫和は挫けることなく、追撃を行おうとするが、
「がっ！」
後ろから真希が姫和を袈裟斬りし、写シを解除し行動不能にさせた。姫和の前に親衛隊の一人寿々花が紫を守り、背後は真希が上段の構えで油断無く立ちはだかっていた。此処で殺されると覚悟していた姫和だったが、意外にも殺す気は無いのか真希は周りの刀使達に捕縛を命じていた。だが、可奈美が何故か真希に斬りかかり、姫和を助けていた。
「迅移!!」
可奈美の言葉を受けて、姫和は迅移を使って逃走する。それを見た真希は追おうとするが、上から爆発したかのような音が数回鳴り、紫のいる天井部分だけが崩れて来た。
「紫様!!」
真希は間に合わないと思ったが、寿々花と夜見が迅移を使って紫を安全な所まで避難させていた。それを見て、安堵した真希だったが、一難去ってまた一難、結芽が勝手に可奈美達を追いかけた。
「結芽！…寿々花と夜見は紫様を安全な場所へ!!」
とにかく、結芽を一人にすることは出来ないと判断した真希は、寿々花と夜見に紫を守るよう指示し、結芽の跡を追うことにした。
一方、結芽は心躍っていた。強い刀使と戦えることに。

「私もま～ぜて。」
結芽は待ち構えるが、可奈美はそれに気にすることなく、姫和の腕を掴んで、屈んでいた。
「も～、つれないこと…しないでよ！」
結芽はその言葉と同時に、可奈美達に斬りかかりろうとするが……突然、瓦が自分の所に物凄いスピードで迫って来ていることに気付いた結芽は
「はぁ!?!!」
驚くが、流石は親衛隊というべきか、難なく横薙ぎで瓦を払う。その隙に可奈美は姫和と共に、御刀を媒介として筋力を強化する術、八幡力を使って跳躍し逃走。
「……アレ何?も～!!もう少しでおねーさんと遊べれたのに!!!」
そして、観客席側の方からも、問題が発生していた。
「柳瀬さん！優くんが居ない!!!」
今日は長い一日になりそうだと、舞衣と真希はほぼ同時に同じ事を思っていた。

思惑が重なり

御前試合会場は焦燥と不安に包まれていながらも、対応に追われていた。

屋敷の爆発により、テロの可能性が浮上したため、観客を安全な所へ避難させている最中であった。

真希は周りの刀使達に指示を飛ばして、困難な状況をどうにか収めようと動いていた。そんな時に、美濃関の生徒二人と自分の部下が何やら言い争っているのを見かけた。

「だからっ！あの中にまだゆ……友達の弟が居て、怖い思いしてるかも知れないから入れてよ!!」

「会場内は危険だから、入るなと命令が出ている筈です!!」

美炎は自責の念に駆られていた。友人の可奈美に任せられていたのに、あの騒動で少し目を離している隙に、居なくなってしまったのだ。どうにか、美炎は中に入り優を見つけ出そうとして真希の部下と言い争っていた。今も、あの大人しい子は爆発と騒動で怖がって、何処かに隠れているのかも知れない。

「どうした、何があった。」

真希は、何を言い争っているのか自分の部下に聞いてみた。

「はっ、会場な「親衛隊の獅童　真希さんですよね！九歳の子がまだ会場内に居るかも知れないんです！入れてください!!」

「お願いします！」

真希とその部下の会話に割って入って、必死に言う美炎と舞衣。

「おい、そんなことを……」

真希の部下は、そんなこと聞き届けられる訳無いだろうと言おうとしたが、

「わかった、その子の特徴は？」

意外にも、真希はその男児を探すため、特徴を聞き、何処かに連絡しているようだった。

「捜索隊を編成したから、安桜　美炎は此処で大人しく待っていてくれ。それと、結芽！」

真希は、美炎が避難場所から移動しないように伝え、結芽を呼ぶ。
「な～に？真希おねーさん。」
「結芽は捜索隊と共に会場内に逃げ遅れた九歳の男児を探して見つけてきてほしい。」
「え～、何でそんな事しなきゃいけないの？」
結芽は、真希にそう文句をいうが、
「勝手に紫様から離れた罰だ。それと、その子を安全な場所へ避難させなければならん。」
それを無視し、結芽に雑事を押し付ける。
「あっ……ありがとうございます!!」
美炎と舞衣は、今は難しいだろうに、親衛隊の一人を捜索隊に編成してくれたことを感謝していた。
「結芽、ちゃんと探すんだぞ。あと、柳瀬　舞衣だな、少し話しを聞かせて貰えるか？」
真希はそう言って、舞衣を事情聴取するため、取調べが出来る部屋へと一緒に向かう。そして、結芽は力なくうなだれ『横暴だ。』と文句を言いながら会場内に進むのであった。

しかし、優は何時の間にか可奈美達と行動を共にしていた。
「おい、下ろせ！」
あの後、可奈美と共に御前試合から逃げ出した十条　姫和は涙目で叫んでいた。
それは当然だろう。何故なら、優が姫和を俵担ぎして走っていたからで、姫和は尻を突き出しているような格好が恥ずかしくて、顔を茹蛸のように赤くしていた。
「え～、でも姫和ちゃん、あんな凄い迅移使って、写シも張れない状態なんだから、そうしてた方が良いと思うよ？」
「だからと言って、これは酷いだろう！……っスカートの中が見える

かも知れないだろう！」
　姫和のもっともな悲痛の叫びに、可奈美はしょうがないなぁ、と思い。
「じゃあ……優ちゃん、お姫様抱っこ。」
　優は可奈美にそう指示され、器用に俵担ぎからお姫様抱っこに変えていた。
「ひゃわあ!!?」
　姫和は驚きの声を上げ、優にお姫様抱っこをされていた。その事実に更に赤面し、押し黙ってしまう。抗議したら俵担ぎになりそうな気がして。
　姫和はなんとか声を出し、可奈美に神社へ向かうよう伝え、お姫様抱っこから開放される。
「……ハァ……ハァ……はー……なんとか、一先ず逃げ切れた…かな。」
　息を切らしながら、可奈美はそう答える。
「……ここまでだ、分かれよう。」
「えっ、でもそんな状態じゃ、すぐ捕まっちゃうよ…一緒に行くよ。」
　心配そうに言う可奈美、しかし、
「お前の目的は何だ……？」
　姫和は不思議で仕方なかった。面識も無いのに、ここまで付いて来る理由も無い。だから、姫和は可奈美の目的が分からなかった。
「ええと、ほら、あの、力が戻ったら、ちゃんと試合して欲しいから…うん、それだけ。」
　可奈美は視線を泳がせ、片方だけ口角を上げて、そう答えていた。姫和は少し訝しむが、これ以上付き纏われたくないので、御刀に手を付け、構える。
「そうか……なら、ここで決着つけよう。」
　その行動に、可奈美は〝待った〟をかける。
「いや、だから駄目だってば。」
「これ以上付き纏われるのは迷惑だ、ここで斬り合うか、さもなくば……」

姫和は、自分と可奈美の間に小さい何かが割り込んで来た為、話を中断する。
「…おい、何している、危ないから退け。」
「やらせない。」
そう言って、優は手を広げて、顔を膨らませていた。
「優、怪我はしたくないだろ、早く退け。」
たしか、名前は優だった筈、と姫和は思い出しながら言い、怪我をさせたくないため、退くように伝える。
「可奈ねーちゃんのやりたい事をやらせたいから、退かない。」
そう言われた姫和は、毒気が抜かれたのか、構えを解いて可奈美に向けて言う。
「…本当の目的は知らんが、邪魔をするなら見捨てる。」
「それって、付いて来ても良いってこと?」
「好きにしろ。」
「うん、好きにする!」
こうして、少女達の行く当ての無い逃避行が始まる。

舞衣は、真希から容疑者の親友という理由で聴取を受けていた。騒動の前日に不審な行動はあったか、局長の紫を恨んでいなかったか、誰かと連絡を取っていなかったか、といったことを聞かれていた。舞衣は心の中で親友を心配しつつ、うつむきながら答えていた。
「理由は……特に思い当たりません。」
「……そうか、時間を取らせてすまなかった、今日の所は部屋に戻ってもらっていい。あと、何か思い出したらここに連絡してくれ。」
舞衣は『はい、』と答え、退室した後、真希も退室し平城学館代表の岩倉　早苗の聴取を行っている部屋に向かおうとするところで、寿々花と会う。
「岩倉　早苗はどうだった?」
「シロですわね、何も知りませんわ。そちらは?」
「同じさ。」

お互いに進展が無かったことを伝え、紫の招集命令で来る平城学館学長と美濃関学院学長を出迎えるため、ヘリポートに向かいながら今後のことについて話し合っていた。

「しかし、真希さんは今回の騒動に舞草が関わっていると、お思いでして？」

真希はチャンスと思い、自分の推理を寿々花に言う。自分の失態を隠すために。

「天井が爆破されたのが余りにもタイミングが良すぎるからな。舞草か紫様の行動を妨害したい者達の仕業と思うだろうが、元々は十条姫和による単独の犯行だろう。何故なら、紫様の警護が二名しか居なかった千載一遇の好機があったにも関わらず何もせず、たった一回で終わっている。しかも、爆発物を撤退の援護にしか使わないのも妙だ、僕だったら爆発物を十条　姫和ごと巻き込んで生き埋めにして証拠を消すか、囮（姫和のこと、）の方に注意へ向けさせて親衛隊の分散を謀る。それに、衛藤　可奈美が十条　姫和と元々から協力者であったなら、僕が姫和を背後から斬る前に援護する筈だ、だから僕は元々は姫和による単独の犯行だと見ている。恐らく動機は単独で動いていることから私怨だろう。」

「何か、穴凹な推理ですわね。」

「そういう君はどう思っている？」

「そうですわね、私はあの二人以外、協力者が居るとお思いますわよ。」

「どうして？」

「女子中学生が爆発物を扱えないですから、協力者が渡したんでしょう。それに、撤退のために爆発物を使ったのは二人を逃がした後、行方不明（これは、生死を問わないという意味も含まれている。）にすれば特別刀剣類管理局の権威と発言力は低下し、紫様の活動を妨害するという計画だったのでしょう。」

「…まあ、どちらが正解にせよ舞草か協力者が彼女達に接触を図るだろうさ。」

理由は、無関係であろうがなかろうが、今後の活動の邪魔にならないようにする必要があるから、接触を図ると二人は確信していた。

「そのときまで泳がせるのも手ですわね、それと真希さん、何故あの時結芽の援護に向かったんです？貴女が向かわずに私か夜見の方が適任だと思うのですが？」

と、寿々花は笑顔で理由を問い質していた。真希は少し怖いと思ったのと同時にバレたかと内心毒づいていた。確かにあの時は爆発で動揺したにせよ、真希の判断ミスである。四名しか居ない親衛隊の中でも戦闘能力がトップクラスの二名が警護対象を離れ、警護対象の危機を増大させている。そのため、真希が援護に向かうのではなく、後方支援担当の寿々花か夜見に向かわせて戦力を均衡にするべきだった。だが、これは真希も後に気付いており、失態をウヤムヤにするため寿々花に自分の推理を語っていた。そういう打算だったのだが、物の見事にその目論見は外れてしまった。

「…気付いたときには鎌府の刀使は観客を守らないといけませんし、私達はキルゾーンの真っ只中に居て何時殺られるか不安でしたわ。その気持ち解りまして？」

「…む……すまない。」

「まあ、いいですわ。あっそう言えば結芽にペナルティを課したそうですわね。貴女もペナルティとして一人で両学長を出迎えて紫様のところへ案内して下さい。いいですわね。」

笑顔でそう言われればＹＥＳと答えるしかないと真希は、リーダーは大変だと思い、精神的ダメージでうなだれていた。

ヘリポートに一人で到着した真希は、既に直立不動の姿勢で紫の招集命令で来た平城学館学長五條　いろはと美濃関学院学長羽島　江麻の両学長を出迎えていた。

「ご足労感謝致します。」

「あら、真希ちゃん、親衛隊の制服がよく似合うようになって。」

真希は、昔世話になった五條　いろはにそう言われ、こそばゆい気持ちにはなったものの、おくびにも出さなかった。

「…紫様がお待ちです。どうぞ、こちらに。」

そう言って、真希は紫が居る執務室まで案内しようとする。

（親衛隊の制服が似合うか…さっき、ポカしたことを責められていた

んだがな……）

真希は憂鬱な気分になっていた。果たして、あれから自分は制服が似合うようになっただろうか？結芽が入った直後に荒魂の一掃作戦に参加し、一つの部隊を任されていた。しかし、任務は成功したものの、無様な戦いを演じてしまった自分はあの頃より少しは成長しただろうか？あの頃を捨て、少しは仲間を信頼し、常に冷静沈着で、前へ出たがる性格を直し、自らが理想とする指揮官に近付き、この制服が似合う人物になったであろうか。ただ自分よりも優秀な仲間に支えられて、ようやく一人前になっているんじゃないか、という思いがあった。無論、あの頃を人生の反省点とし精進しているが、それは慢心しているだけでは無いのかと自問自答していた。そんなことを思考しながら、紫の居る執務室に着いてしまい、ノックをし、平城学館と美濃関学院の両学長を此処へ連れてきた旨を伝え、扉を開け両学長を先に入室させる。

「久しいな。」

「お久しぶりです。局長。」

「お久しぶり、ホント紫ちゃんはあの時からお変わり無く。」

いろはは、紫の二十年前から変わらない姿でいることに、何かを思い出したのか声が少し弾んでいた。

「同窓会で呼んだ訳では無い。」

「あら、ごめんなさい、つい……」

「二人の生徒の潜伏先に心当たりはあるか？」

「ごめんなさい、特には……」

「私も、同じく。すみません。」

いろはは変わらぬ表情でそう答え、江麻は沈んだ表情で答えていた。真希は、江麻といろはが生徒思いの学長であることを思い出し、少しでも安心させるために発言する。

「柳瀬　舞衣、岩倉　早苗の両名の聴取は終わりました。無関係だと思われます。」

「そう。」

江麻は安心したようで、少し朗らかな顔になっていた。

「……質問を変えよう。平城学館学長、刀剣類管理局への届け出には小烏丸は平城学館預かり、現在は適合者なしとなっているが？」
「報告が遅れてしまい申し訳ありません。小烏丸があの子を選んだんです。」
「衛藤　可奈美は『千鳥』、十条　姫和は『小烏丸』の適合者であり、今もその御刀を所持している。」
「『千鳥』と『小烏丸』がですか……」
　思案気な顔をしていた江麻に真希は気付き、この事件にその二つの御刀は何か関係があるのかと思い、後で時間があれば少し調べて見るかと思っていた。
「十条　姫和、衛藤　可奈美の両名を確保。その為に二人はここに滞在し、尽力してもらう。真希、二人を案内してくれ。」
「了解しました。」
　真希は、江麻といろはの二人を作戦指揮所へ案内するため、二人を伴って退室する。紫は一人になったことを確認すると、この世のものとは思えぬ邪悪な笑みで呟いていた。
「…〝幼き二羽の鳥〟が〝器〟を持って来て、クレタカ……」

　一方、可奈美達はトラックに忍び込み、姫和が可奈美の名前を覚えていなかったといった一悶着があったが、無事に首都高速を通って東京に着いていた。
「おっき～い、高いビルがいっぱいだよ、優ちゃん。」
「うん、凄い。」
　可奈美は優の手の握りながら、優と一緒に輝いた目で周りを見ていた。
「はしゃぐな、目立つだろう。」
「あっ、ごめん。でも、姫和ちゃんは何で東京へ向かったの？」
「平城のある奈良と美濃関のある岐阜へのルートは警戒されていると考えて、東なら手薄だと予想して此処に来た。」
「なるほど！人も多いしね、何処か当てがあるの？」

「当てはないが、制服のままだと目立ちすぎる。服と御刀を隠せる物、あと宿も探さないと。」

そうして、可奈美の提案によりギターケースとパーカーを姫和が所持していた金で購入。パーカーを制服の上に着用し、御刀をギターケースの中に隠す。これで、変装を終えた二人は優を変装させるべく、服を物色。最終的に赤のジャケットから灰色のパーカーに変更し、ｈｏｍｉｎｉｓと刺繍された帽子を被らせていた。

「……こんな感じでいいだろう。」

優の変装を姫和が手伝い、そう感想を呟く。我ながら上手に出来たとか思いながら……。

「うん、ありがとう姫和おねーちゃん。」

「っ！……」

姫和は、優に満面の笑顔でそう言われ、顔を背けた。赤面しながら。

「姫和ちゃん…？ああ、なるほど。」

可奈美は、姫和を見て何か感付いたのか、ニヤニヤしながら近付いて来た。

「……何だ。」

「いや～、そういう事か～～、ふ～～ん。」

「ちがうからな。」

「何が違うのかな？かな？」

「少し黙ろうか…？」

姫和は顔を赤くしながら、可奈美を睨んでいた。そして、可奈美と姫和の間にまた小さい何かが入り込んでいた。

「喧嘩はダメ。」

「……そうだな、行くぞ可奈美。」

そう言って、姫和は優の手を握って会計を済ませ、宿を探すため店外に出る。可奈美も『待ってよ～。』と言って、しっかり後に付いて行った。

なんとか、宿を見つけた可奈美達は泊まろうとするが、

「あなたたち、未成年？三人だけ？」

年配の恰幅の良い店番の女性にそう聞かれ、姫和は不味いと思って

いた。だが、可奈美が、片方だけ口角を上げて、
「ええと、そうです。実はバンドとかやってて、二人でライブとかやろうと思って上京して来まして、…で帰ろうとしたんですけど帰りの駅まで行ける線路が荒魂のせいで壊れちゃったらしくって、明日の朝まで復旧しないみたいなんで出来たら一泊だけでもと……。一応、公衆電話で親に連絡してますので。」
「あらそうなの、大変だったわね。その小さい子は？」
「付いて来るって言って、聞かなかったんです。」
「お姉さんなのに、あまり感心しないわね。」
「ええと、すいません。一応、親から軍資金もとい、こういったときのために何日かの宿泊費は貰っていますので……」
「…いいわ、今日は此処で泊まっていきなさい。夜に女の子達がふらついていたらダメだからね。」
「すいません、ありがとうございます。」
と言って、可奈美は頭を下げ礼をする。こうして、可奈美達は一泊することができ、姫和はよくあんな嘘を吐けるものだと関心していた。

悪魔の証明

――――怖かった――――

朝、目が開いた時に一番先にやることがある。大切な弟が今も元気でここに居るか、消えていないか、或いは動かなくなっていないかと考える暇も無く、居る場所へ向かう。

好かった。遠くに行ってないし、消えてない、そしてまだ動いている。まだ此処に居てくれたことが素晴らしいじゃないか。

――――流した涙もきっと笑って話せる日が来る。――――

「じゃあ姫和ちゃん、優ちゃんをよろしくね～。」

と言って、既に可奈美は夕食を調達しに出かけていき、部屋には寝ている優と姫和が居た。

「……」

姫和はじっと寝ている優を見つめる。そして、俵担ぎされた報復として頬を突いていた。

（や……やわらかい……これが9歳児の頬か……）

姫和は感慨に耽っていた。ここでも優は年上の女性にオモチャにされる。

（何故だろう……ずっとこうしていたい。）

姫和は楽しんでいた。だが、次の瞬間彼女は驚くことになる。

「ん……んにゅ……」

（うぉ？……お……起きてしまったか？）

姫和は悪いと思い、優の様子を見るが起きる様子は無いようだ、ホッとした姫和は再開しようとするが、次の言葉で止めてしまう。

「お……おとうさん……」

「……」

姫和は悲しい気持ちになっていた。そうだな、この子も……そこで視線を感じ、ドアの方に目を向ける。

「……可奈美…」
「お邪魔だったかな～～。」
ニヤニヤした顔でこちらを見る可奈美が居た。
「可奈美、こっちに来て正座。」
姫和はちゃぶ台を叩いて、可奈美に正座を促す。
「えっ？」
「正座！」
「はっ、はいぃぃ。」
可奈美は即座に正座した。姫和は9歳児をこんなところまで連れてきたことについて説教しようとするが、
「ん、んみゅゅ……」
ちゃぶ台を叩いてしまったせいで、優が起きてしまった。
「……あれ、可奈ねーちゃん帰ってきたの？」
「あっ、う、うん、優ちゃん夕食にする前にコインシャワーに行ってらっしゃい。」
「うん。」
そう言って笑顔で答え、コインシャワーへと向かっていった。
「ところで姫和ちゃん、静かにしないとダメだよ。」
「あ、ああ、済まない。」
確かに夜に、逃亡中に騒いではいけないなと思い、姫和は静かにしようとする。可奈美に説教することを忘れてしまっていたが。
その後、可奈美達は就寝しようとするが、姫和は疑問を口にする。
「…その齢になっても、一緒に寝るのか？」
「えっ、部屋が狭いからだよ。」
「…可奈ねーちゃんのやりたい事をやらせたいから。」
「…そうか……」
姫和は、可奈美はかなりのブラコンではなかろうかと疑ってしまった。まあ、あんな素直で大人しい子が弟だと、ついつい甘やかしてしまうものなのだろうと勝手に結論付けていた。
「おかしな奴だ、私の目的も聞かないし。」
「目的って、ご当主様のこと？」

「そうだ。」
「…姫和ちゃんが喋りたくなったらで良いよ。」
「本当におかしな奴だ……。」
そう言って、姫和は眠りの中へ行ってしまった。

夢を見ていた。
ある日、十条　篝様という手紙が届き二十年前の真実を知る。そして、私は〝復讐〟か〝忘却〟かを選ぶ時、刀使の力を使い果たしてしまった母が年々弱っていき命を失う姿を思い出してしまう。だから私は〝復讐者〟となることを誓った、私は一人だ、目的を果たすまで進み続ける、だからこそ奴を憎む。それが私の存在意義だから……。後悔なぞ昨日にある。
「……あっ……」
朝になり、目が覚めた姫和は昔のことを夢で思い出していた。遠い記憶、母が亡くなったときの事、そして〝忘却〟を選ばず〝復讐〟を選択し決意した日を。だから、もう戻れない、この先に何が待っていようとも。姫和は自らの決意を再認識し、周りを見ると優が起きてることに気付く。
「起きたのか？」
姫和の問いにコクリと頷く優、そして……
「舞衣おねーちゃん達が来る。」
その言葉にハッとなった姫和は、可奈美の足を軽く蹴って起こす。起こされた可奈美は寝惚けながら、何があったのか聞いてきた。
「んあぁぁ……何？」
「追っ手が来る、早く此処を出るぞ。」
姫和は優をおぶり、小烏丸を持って、窓から外に出て行った。
「あっ、待って。」
可奈美も千鳥を持って、その後を追った。

「……思ったより早いな、どうしてこんなに早く特定出来たんだ？」
「ごめん……私のせいかも…」

――――可奈美は語る。それは、可奈美が夕食を買いに外に出ていたときのこと。――――

夕食を買い終えた可奈美は舞衣を心配させないように、公衆電話を使って連絡していた。

「……舞衣ちゃん？」

電話の向こうから《かっ、…可奈美ちゃん？》という声が聞こえ、舞衣に繋がったことに安堵する。今、何処に居るのかと聞かれた可奈美は、

「あっ、えっとここどこだろう？」

片方だけ口角を上げて、嘘を言っていた。実際は宿を探す時、周辺地図を見て此処が何処なのか知っていたが、今見つかると大変なことになるのは分かっていたので、何処に居るか分からないという答え方をした。

「ええと、色々迷惑掛けてごめんね、私は大丈夫だから心配しないで…あっ！ごめん小銭がなくて…私の荷物預かっといて。」

それだけを伝えると一方的に電話を切り、そのまま宿に戻っていった。

しかし、可奈美は舞衣がその後、学長から捜索許可を貰い、執事の柴田に公共放送のデータを送って居場所を杉並区と荒川区辺りであると特定し、時間帯から宿かホテルに泊まっていると推測、柳瀬グループの力を使ってようやく泊まっている宿を見つけるが、既にもぬけの殻であった。しかし、舞衣は挫けず、布団を触ってまだ暖かいことに気付き、近くに居ると思い周辺を探す事にした。

「…多分、あの時…公衆電話で友達に連絡しちゃったせいかも……」

それを聞き、じと～と見つめる姫和に可奈美はごめんと呟いていた。

「まあ、どうせそんなとこだろうと思った。おかしな奴だと思っていたが、普通に友人を気に掛けるところはあるんだな。」

「これからどうすれば良いの？」

優が姫和にそう尋ねる。何処に行けば良いのかと。

「そうだな…人が多い所の方がかえって人に紛れて目立たないかも知

れないな……」
　そうして、可奈美達は一日世話になった宿を後にし、人が多い所に向かう、
「だからと言って……観光に来た訳じゃないんだぞ！」
「だって、人の多い所なんてここしか知らないもん。私達くらいの子とか制服の子もいっぱいいるし、見つかりにくいんじゃない？」
　可奈美にそう言われ姫和は周りを見てみた、日曜のせいか人が多く居るようだった。
「確かに、人は多いが…」
　そんな感想をもらす姫和は、優と手を繋いでいる可奈美に手を引っ張られ、
「そんな所で立ってたら目立つって、普通に楽しそうにしてた方が自然だよ！」
　そう言われ、可奈美に導かれるまま、ぬいぐるみを見たり、パンケーキ屋に寄って行ったりして、彼女達は十二分に楽しんでいた、
「ごめんね～。借りたお金はいつかちゃんと返すから。」
　姫和が持って来たお金で。
　姫和はそんなことは気にせず、アイスクリーム屋を見つけると、何か閃いたかのように提案する。
「寄って行こう！今後の対策とか、どこに泊まるかとか、鎌倉に戻って行く方法とか、それ以外のこととか話し合ったりする必要もあるし！」
　姫和は早口で可奈美にそう提案し、同意を促す。
「えっ…ああ、うん。」
　可奈美は若干困惑しながらも、その意見に同意する。
　その後、可奈美はオレンジ味のアイス、優はバニラ味のアイス、そして姫和はチョコミント味のアイスを選んでいた。
「姫和ちゃん、チョコミントが好きなんだ…」
「まあ…そうだな、アイスの中では比較的口に会う方だからかな…」
「でも、チョコミント味って苦くない？歯磨き粉みたいにスー「ばかっ!!」ばかっ!?」

可奈美はチョコミント味の感想を言おうとしたら、大きな声で中断され、否定された。『ばか』と言って。
「チョコミント論争でその例えはもう言い尽くされているぞ！禁句と言っていいッ！それに、チョコミントで歯磨きなぞ出来ん。」
どうやら、姫和はチョコミント風味の菓子を愛好する人のようで、可奈美はそのチョコミント好きの地雷を難なく踏んでいったらしい。
「チョコミントって、美味しいの？」
優の疑問に姫和は、
「美味いぞ、優も食べるか？まだ売って……」
姫和は今まで見せた事のない程の満面の笑顔で自信満々にそう答え、自分が食べていたチョコミントのアイスを優の前に突き出すようにし、『食べたい』と答えたら、お金を渡して購入させてチョコミント好きを増やそうとしていたが……
パク。
っと、優に自分が舐めていたチョコミント味のアイスを食べられていた。
しかも、自分が舐めていた方を何事も無く食べていた。
「うん、最初スースーするけど、その後にチョコの味がして味わい深いから、けっこう美味しい。」
その行動に、その行為に姫和は口を開けて、茹蛸のように赤面して硬直していた。
（これって間接キスというやつか？ということは…いやいやいや待て待て待て相手は子供だからそんなに気にする必要ないだろ十条　姫和、ちゃんとしろこんな事で動揺するな児童に口移しした程度だろう、口移し？口移しということはやっぱりそういう事じゃないか、ここら辺はやはり男女ということにきちんと説明すべきではないのか十条　姫和、いや待て今此処で貞操観念も含めて教えるのはどうなんだ、ただの変態ではないか、どうやったらこんなことあまりしないように出来るんだ？あっても間接キスはキスの内に入らないと聞いたことあるから今のはセーフ、な訳ないだろ十条　姫和、キスはキスだ他の女にやるのは精神衛生上もとい不純過ぎて好くないからここは

……）

などと、姫和は心の中で早口になりながらも考えていた。

「もうちょっと、貰って良い？」

しかし、優の申し出を聞いてなかったため、

「優、すこ『ペロッ。』……」

更に、ペロペロとアイスを舐められていた。その事実に更に赤面する。

「あっ、コラッ優ちゃん食べ過ぎだよ。ご、ごめんね、後でちゃんと返すから。」

「えっ、……ああ……うん……」

可奈美の謝罪に、姫和は言葉少なく頷くだけしかなかった。そして、姫和は難題に立ち向かうことになる。

（どうやって食べようか……どこもかしこも優に食べられているか、舐められている……か…間接……間接キス……キス……どうしようか、食べないと変に思われるだろうし、でも……まだそんな間柄でないし、まだ学生だから早いし、ううん……）

姫和は、優に食べられ舐められたチョコミントのアイスをじっと見つめながら、そんなことを考えていた。

「姫和ちゃん、新しいのを買って食べたら？」

（それだっ！！）

可奈美の提案に姫和は心の中で歓喜した、この難題から逃れられると思ったからだ。そして、姫和は持っていたチョコミントのアイスを優に食べていいと言って渡し、足早にアイス屋に向かい、新しいチョコミントのアイスを手に入れていた。だが、

（き……気になって食べられん……）

優に渡したチョコミントのアイスは元々姫和が食べていた物であったのだが、何事も無く食べ続ける優が気になって横目でチラチラ見続けていた。結局、姫和は新しいチョコミントのアイスをゴミ箱へ送るしかなかった。

「ねえ、姫和おねーちゃんどうしようか。」
　優はこの後、どうすべきか姫和に聞いていた。
「すまん、ちょっと少しだけ考えさせてくれ。」
　しかし、当の姫和は顔を赤くして蹲っていた。
「漫画喫茶とかで寝泊りするのが良いんじゃないかな？もう民宿とかは泊まれないだろうし、」
　可奈美は、宿とホテルには柳瀬グループの手が回っていると考え、漫画喫茶といった宿やホテル以外の宿泊施設を利用しようと提案するが、
「可奈ねーちゃん、あっちに荒魂がいる。」
　突然、優が指差して可奈美にそう言ってきた。
「…は？……んっ、音？」
　姫和は優のその言葉に疑問に思うが、姫和の荷物から音が聞こえてきたため、中から取り出して見ると、かつて母が使っていた荒魂を感知するスペクトラム計が反応して震えていた。
　スペクトラム計とは、荒魂を探知するアナログ計器。約５センチ程の強化ガラス球の中に、少量のノロが入っており、ノロと荒魂が引き合う性質を利用、荒魂が接近すると振動するという方位磁石のような形をしている探知器。それを見ると、中に入っている少量のノロが一つの方向を指しており、その方向に荒魂が居ることを可奈美達に教えてくれていた。そして、その方向は優が指差している方向と同じだった。
「……どうしたの、行こうよ？」
　可奈美は荒魂を退治するため、スペクトラム計が反応している方向へ向かおうとするが、姫和が立ち止まっていることに疑問に思い、荒魂の居る場所に向かうよう言うが、
「いや、行くのは止めよう……管轄の刀使達に鉢合わせたら面倒だ……それに、私達だけで荒魂を退治してもノロの回収はできない、散らすだけだ。」
　姫和は今は逃亡中の身なのだから、行くべきではないと主張する。
「でも、被害が出るよりはいいよ…行こう。」

可奈美にそう言われるも、姫和は自らの目的を達成するために行こうとしない。
「それが、姫和おねーちゃんのやりたいこと？」
今度は優が姫和に聞いてきた。
「…何が言いたい……」
「だって、姫和おねーちゃん、お母さんが大好きでしょ。」
「今、関係あるのか!!?」
姫和はそう言われて激昂した。母のこと、自分の目的を土足で入って踏み荒らされたような気がして、
「関係あるよ、刀使だったお母さんが大好きだから、姫和おねーちゃんは刀使になったんでしょ？」
「……」
違う、〝復讐〟のためだ。と言えない自分がいたことに姫和は不思議に思っていた。確かに、この子の言う事は当たっている、母が嫌いなら〝復讐〟をあの時、選ばない。
「それと、病院で可奈ねーちゃんが言ってたんだ。刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟だって。それを聞いて僕は、強い刀使になれない僕は、僕を助けてくれた大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたいと思ったんだ。僕と一緒で姫和おねーちゃんもそんなお母さんが大好きだから、刀使になったんだと思ったんだ。だから、僕は姫和おねーちゃんと可奈ねーちゃんのために頑張りたいんだ。」
何故だろう、この子の言う素直な言葉が一つも否定できない。本当に〝復讐〟のために刀使になったのだろうか？この子の言うとおり、母に憧れて刀使になったんじゃないんだろうかという気持ちと、この子の期待に応えて上げたいという気持ちが強くなっていくことに、不思議と安らぎを感じる姫和は決意する。
「……そうだな、そうだ今行かなければ刀使じゃないな、〝正義の味方〟でもない、行こう可奈美、悪い奴等をやっつけに行こう。」
「……うん。」
姫和はわざわざ、子供にも分かりやすいように『悪い奴等をやっつけに行く』と言って、可奈美と共に荒魂の居る方向へと向かう。

（…〝正義の味方〟か……）

可奈美は少し悲しげな顔と共に過去を思い出していた。

「特別祭祀機動隊です！荒魂から離れて下さい!!」

荒魂が出現した現場は騒然としており、逃げる人々で既に一杯だった。可奈美と姫和はそんな人々を守るため、パーカーを脱ぎ捨てて可奈美は美濃関学院の制服で、姫和は平城学館の制服で敢然と立ち向かう。

「意外に…大きい。」

「ここで食い止めよう。」

「僕はどうしたらいい？」

可奈美と姫和は、羽がついた大きい百足のような荒魂を見て感想をもらしていると、優が可奈美達にそう聞いてきた。

「お前は危ないから、隠れていろ。」

「大丈夫、お姉ちゃんに任せて。」

姫和と可奈美は、優にそう告げると可奈美が前に出る。

「私が追い込むから、姫和ちゃんは後方から支援をお願い。」

「分かった。」

可奈美は先行し荒魂を斬りつけようとするが、荒魂は羽を使って大きく飛翔し避ける。荒魂は姫和を狙っているのか姫和の方へ向かっていくが、優が投げた拳大の石が荒魂の頭の部分に当たる。それに怒ったのか、逃げ遅れた人間が居るとでも思ったのか、荒魂は優に襲い掛かる。

「優!!」

姫和はそう叫び助けようとするが、前回の戦いと〝一つの太刀〟を使ったことが彼女を激しく消耗させていたため、優の元へ迎えない、ただ手を伸ばすことしか出来ない姫和は死んでしまった母のことを思い出し、絶望に囚われそうになるが、優は荒魂の突進を難なく翻して躱していた。

荒魂はそれが気に食わなかったのか執拗に優を襲おうとするが、それが大きな隙となり可奈美に片方の羽を切り飛ばされ、飛行能力を

失ったところを狙って、荒魂を両断しようとする。
だが、舞衣が突然現れ、荒魂を一撃で退治する。
「舞衣ちゃん!?ど、どうしてここに…」
可奈美は予想外の再会に驚くが、舞衣はこちらに御刀を向け、経緯を語る。
「可奈美ちゃんを追っていたら、荒魂の反応があってここに寄ったの……おかげでやっと会えた。」
「美濃関の追っ手か…」
「違うよ、舞衣ちゃんは私の親友で……」
「親友?なら、何故こちらに御刀を向ける。」
姫和の疑問に舞衣は答える。
「聞いて可奈美ちゃん。羽島学長が約束してくれたの、私と一緒に帰ってくれれば可奈美ちゃんの罪も軽くしてくれるって、でも条件があるの。十条さん、あなたには折神家へ出頭してもらいます。」
「残念だが、それはできないな。」
「協力しなくていいです、私が力尽くでねじ伏せるだけですから。」
「待って!二人共お願いだから、御刀を収めて…」
対峙する姫和と舞衣、お互いが譲れないがために、可奈美の制止の声が聞こえなかった。
「親友だから、優くんも可奈美ちゃんも私が助けます。」
舞衣は決意の声と共に姫和に切り掛かる。小さい何かが割り込むことに気付かないまま、舞衣は御刀を振り下ろしてしまう。
そして、舞衣は気付いてしまった。優が姫和の御刀を手刀ではたき落とし、舞衣の御刀の刀身を掴んで押さえている事に。
「…っ!……」
舞衣が動揺している隙に、優は御刀を掴んだまま奪い取り、投げ捨てる。
「優、何している!!」
姫和は優の肩を掴んで絶叫するが、優は至ってマイペースに答える。
「可奈ねーちゃんのやりたい事をやらせたいから。」

「だからって、お前が怪我したら悲しむだろう!!あと、今隠した手を見せろ。」
「…やだ。」
姫和は、優が背中に隠した怪我した方の手を見せるように言うが、拒否される。
「何でだ?」
「姫和おねーちゃんと舞衣おねーちゃんがケンカするの可奈ねーちゃんが望んでないから。姫和おねーちゃんの望みは聞かない。」
姫和は、とんでもない答えが返ってきたなと思い、舞衣に停戦を伝える。
「おい、そこの美濃関、そういう訳だ。」
「え……あっ、……はい。」
舞衣は人を斬ってしまったと思い、呆然としていたが、姫和の声で我を取り戻した。そして、姫和は自分の脱ぎ捨てたパーカーを千切って包帯代わりにし、優の手に巻く。
「お前……手が真っ二つになったらどうするつもりだったんだ?」
「大丈夫だよ、刀って物打ちで斬らないとあんまり斬れないって聞いているから。」
切っ先三寸のことだろう、確かに刀剣は先端の方で斬る方が、より強く深く切れるということは事実だが、9歳の剣術未経験の子供がそんなこと知っている訳がないと思い姫和は、
「可奈美、あとで少しだけ話があるんだが。」
「わ、私そんなこと教えてないから!」
可奈美が犯人だと決め付けるが、当の本人は無罪を主張していた。そして、可奈美も舞衣と同じく呆然としていたが、姫和の声で我を取り戻していた。
「ええと…ごめん、舞衣ちゃん…私も姫和ちゃんもまだ捕まる訳にはいかないの……。」
「可奈美ちゃん!どうして……」
「私、見たの……あの時、御当主様が姫和ちゃんの技を受け止めた時、何もなかった空間から二本の御刀を取り出して、その時後ろに良くな

いものが……」
「御当主様？良くないものって。」
「おまえ…まさか、あの時に見えて……」
「うん、あれは荒魂だった。」
「…荒…魂？な…なにを言っているの？…だって、そんなこと…あの方は、大荒魂討伐の大英雄で…」
「違う！奴は、折神　紫の姿をした大荒魂だ！」
「……じゃあ、折神家が管轄する、刀剣類管理局も伍箇伝も……」
「その全てを荒魂が支配している。」
　姫和が語る真実に言葉を失う舞衣。どうしてか、彼女の言っていることが嘘とは思えなかった。
「私も折神家を信用できない、だから、姫和ちゃんと一緒に行く。」
「本気…なんだね……。」
　舞衣の問いかけに、可奈美は頷く。可奈美の決意に舞衣は――――
「…可奈美ちゃんのやることはいつも本気だもんね……分かっているよ。行って、後の事は私がやっておくから。」
「舞衣ちゃん……ありがとう。」
「あと、これ……荷物は押収されちゃって、返して貰えなかったんだ。」
「舞衣ちゃんのクッキー……ありがとう。」
「十条さん。」
　舞衣に呼ばれ、姫和は振り返ると舞衣が頭を下げていた。
「二人のこと、よろしくお願いします。」
「……私は、自分のすべきことを果たすまでだ。」
　そう言って、姫和は小烏丸を回収し納刀。そして、可奈美と優は舞衣に手を振ったあと、姫和の後を追って、その場所をあとにし、舞衣だけが残っていた。
　舞衣も自分の孫六兼元を拾うが、優を人を斬った感触を思い出してしまい、公園の影で舞衣が食べていた昼食と再開することになる。
「人……斬っちゃった……」
　舞衣は一人寂しく呟き、孫六兼元に映る自分が酷く歪んでいるように、やつれているように見えていた。

見えない傷

――――最初は、私はただ嬉しかった。――――

私はあの大災厄時の特務隊の一員として、鎌府女学院の学長になった。しかし、役立たずだった私がこのような身に余る栄誉を貰っても良いのだろうかと紫様に思い切って聞いてみたことがある。だが、紫様は私にしか出来ない仕事があると言ってくれたのだ、ノロを人間に注入することで治癒や身体の強化に利用するという研究を任された時は喜んでいた。この研究が成功すれば刀使の被害は確実に減り、二十年前の罪滅ぼしが出来る。そしてこれは禁忌の研究だ、他の先輩方にやらせる訳にはいかない。汚れ役は私が一番良いのだ……。

あの男、スレイド博士を研究主任にするまではそう思っていた――。

あの男、フリードマン博士以上の天才だと自称するスレイド博士が無関係の人達をノロの被検体に勝手にしていたのだ。私はスレイド博士を非難するが、あの男はこう言ってのけた。

『刀使は貴重です。志願だとしても、スペアが無いと失敗した時が怖い。となれば、刀使でもない一般の人間、例えばホームレスや家出した子供を使ってノロに毒性がないか、人体にどのような影響があるか、を調べてからするのが当然でしょう。』

と言っていた。だがこれは嘘だった。この男は軍の依頼も受けており、ノロの軍事利用のために無関係な人達を実験台にしていたのだ。一般の人にノロを投与し、どれ程の身体の強化ができるかということであった。

だから……だからこそこんなにも死体袋があるのか!!それに怒りを覚えた私は彼を解雇し、放逐した。

『……まあ、良いですよ、それで良いのであれば……。』

彼は、そんな捨て台詞を言って去って行った。しかし、皮肉なことに彼の研究によって、ノロのアンプルは完成し、後は志願者を募るだけであった。

そして、私はあの男を放逐したことを後悔する。非道な研究を行っ

ていたことが公然となり、被害者の遺族がメディアの餌食にならぬよう、紫様や先輩方に迷惑を掛けぬように放逐したが、そんなものを恐れずに刑務所に送れば良かったのだ。鎌府の研究所が無ければ、あの非道な研究は出来ないと甘く考えていた責任が私にもある。だからこそ私は鎌府の刀使を引き連れ、スレイド博士の隠れ家を襲撃し、二度目の非道な実験を止めた。……止めたが既に遅かった、既に小さい子供が被検体となった後だった。しかし、その子がまだ息があることに気付き保護し、スレイド博士を拘留。表向きは狂った研究者が勝手に非道な実験を行っていたという事になっていた。その子の名前は知らない、まだ病院のベッドで寝たきりだろう……。再会する時はもう少し、この世界がその子達のことを〝被害者〟ではなく、〝英雄〟として扱われるまで私は進もうと思う。例えどんな道であろうとも、どんな結果が待っていようとも……。

「はっ、」

雪那は昔のことを何ヶ月ぶりの夢で思い出していた。過去の罪を……。

（ははっ、そうねぇ……今更引き返すことなんて……無理よね。）

そして、彼女はあの時に決意した。自分が任されていた実験に巻き込まれていった人達を自分なりの救い方で救おうと、それまで〝弱み〟も〝心〟も見せない、心が潰れそうになった時は酒とタバコで癒した、不眠が続き怒りやすくなりヒスおばと呼ばれても進む。理解されなくても良い、ただ自分なりのけじめを付けるだけだ。だからこそ、沙耶香を育てた。沙耶香は鎌府のいや……雪那の希望。だからこそ雪那は、沙耶香を紫に認めて貰いたかった。そうすれば、自分のしてきたことが間違いでは無かったことが証明されると、犠牲となった者達が化け物扱いされずに済むと信じていた。取れる手段は限られているのだから。

その後、雪那は身支度を済ませ、特別刀剣類管理局本部へと向かう。

公園の遊具の穴で雨宿りしていた可奈美達は、まず優の手の治療を姫和が傷口を流水で洗った後、ドラッグストアで購入した包帯と滅菌ガーゼで治療していた。

「そんな大怪我じゃないけど。」

「何時までもパーカーの切れ端じゃあ破傷風になるかも知れないだろ、手を出せ。」

優は今回は素直に手を出し、姫和の治療を受けていた。しかし、姫和は別の事を考えていた。

（しかし、意外にも手の傷が浅いような……気のせいか？）

舞衣という美濃関の刀使が途中で気付いて、加減したのだろうと結論付け、姫和はこのことを忘れていった。

その後、優が持っていた線香花火を可奈美達は楽しんでいた。

「こんな狭い所で花火か……」

逃亡中の身なんだがと、思いながら姫和も線香花火を持っていた。

「折角持って来てくれたんだし、楽しもうよ。」

「まあ、そう言うなら……」

姫和はそう言いながら、昔はよく母と夏に線香花火をやっていたことを思い出していた。

「綺麗。」

そんな無邪気なことを言う優が、家族と線香花火をしていたかつての自分と重ねて見ていた。そして、この時が一番輝いているようにさえ姫和は思っていた。ずっとこの光景が続けば良いのにと思うほどに……。

しかし、そんな時間も終わりを迎える。可奈美が舞衣のクッキーに電話番号が書かれている紙が入っていることに気付き、書かれていた番号を公衆電話でかけると、女の人の声が受話器から聞こえてきた、可奈美は紙に書かれていた困ったことが有れば此処に連絡してほしいといったことを伝えると、その女の人は指定した場所を言うと、そこで合流しようと言われ、切られてしまう。可奈美と姫和は状況が好転することを祈りながら、指定された場所へ向かうのであった。

「ここで良いのか？」
　姫和の疑問に可奈美は、
「うん、電話で此処でって……。」
（でも……、舞衣ちゃんの字じゃなかった…けど…、）
　そういった疑問が可奈美にはあったが、そう姫和に答えるしか無かった。そんな会話をしている内に指定された場所、タワーマンションの一室の前へ到着。インターホンを鳴らして待つと『は～い、ちょっと待ってて。』という女性の声が聞こえてきた。
「いらっしゃ～い。」
　ドアが開くと、眼鏡をかけた温和そうな女性が現れた。
「あの…手紙の……さっき電話した。」
「うん、可奈美ちゃんと優くんと、姫和ちゃんね。私、恩田　累よろしくね。ささっ、三人共早くあがってあがってー。」
　この一室の主と思われる恩田　累のテンションに少し呆然としながらも、可奈美達は部屋に入る。
「あ、あの…」
「一人暮らしだし、私の他に誰もいないから安心してー、ちょーっと散らかってるけどね。」
「お……お邪魔します……羽島学長のお知り合いなんです……よね？」
「羽島学長には良くしてもらってて、二人のことよろしくってお願いされたの。」
「罠…じゃないのか……」
「舞衣ちゃんがくれた手紙だから…罠なんかじゃない……と思う…」
　姫和は警戒するが、可奈美は多分信用できると答えていた。
「ほい、晩御飯。何も食べてないでしょ？」
「あ、ありがとうございます…」
　と感謝を述べる可奈美は晩御飯が入っている袋を開けると、ハンバーガーとポテトとサラダのセット、丁度3人分があった。
「ふふ、お前は何者なんだって顔してるね～。ま、仕方ないか。」
「……」

姫和の沈黙は肯定を表していた。
「私は美濃関学院出身の元刀使よ。今はもう引退して御刀も返納しちゃったけどねぇ。」
「え!?」
「と、いう事は――。」
「先輩ですね！流派は何ですか!?」「刀剣類管理局の廻し者!?」
可奈美と姫和は同時に喋ったあと、お互いの顔を不思議そうに見ていた。
「あははは、あぁ、あと私、管理局とか関係ないから心配しないでー。」
「この女の人って、可奈ねーちゃんの味方なの、それとも敵？」
ということを優から聞かれた可奈美の代わりに、累が若干困惑した答える。
「いやいや、味方味方。敵だったら家に入れないから。……まあ一応は大体の事は聞いているけど、余計な詮索はしないし、二人とも疲れているでしょ？今日はゆっくり休んで。…私がいない間もこの家のものは好きに使っていいから。」
「は、はい。」
「私、朝早いからもう寝ちゃうね、おやすみ～。」
「「……」」
可奈美と姫和の二人は暫く沈黙した後、お風呂場を借りる事にした。
「お風呂もすごく広かったよ～。累さんいい人で良かったね。」
「可奈美、少しいいか？あと、悪いが優は席を外してくれ。」
「じゃあ、優ちゃんはお風呂に入っておいで。」
「うん、分かった。」
二人にそう言われ、優は風呂場へと向かい、部屋に残ったのは可奈美と姫和の二人だけだった。優に席を外して貰った理由は優について疑問に思ったことが幾つかあったから、可奈美に聞こうとしていたが、その前に御前試合で見たものについて聞こうと思っていた。
「折神　紫の背後に見たというモノの話を聞かせてくれ。」
「う、うん、一瞬だったから、よくわからなかったけど姫和ちゃんを睨

んでるように見えた。」
「睨む…荒魂が……どんな形だった?」
「見たけど、形というか…ギョロッとした目があって……」
「目?見間違いじゃないんだな?」
「うん。」
「どうして、そう言い切れる?」
「えっ、ああと、私も刀使だから。」
　可奈美はそう言うが、片方だけ口角を上げていた。姫和は続けて聞く。
「嘘だろう、他に理由があるから折神　紫が荒魂だと気付いたんだろう?」
「えっ、どうして「お前は嘘を吐く時、口角を僅かに上げる癖があるからだ。」……。」
　可奈美はどうしてそういうことを言うのか?と言おうとしたが、姫和に遮るようにそう言われ押し黙るしかなかった。そして、可奈美は驚いていた、今まで舞衣しか気付かなかった癖を見抜いたことに。
「……何が言いたいの?」
「何が目的で私に付いて来た、本当の理由は何だ?」
「姫和ちゃんが、目的を喋れば言うよ。」
「…っ、じゃあ質問を変える。」
　姫和は自分も隠していることがあることを指摘され、押し黙るしかなかった。
「…一瞬だと言ったな、荒魂が消えたということか?」
「…消えたっていうか、刀使が『写シ』を張る時の感じ似てて…、隠世に潜った?みたいな…御当主様が御刀を取り出す時に見えちゃったって感じで……。」
「隠世から……取り出した?」
　あの天下五剣の大典太と数珠丸を隠世から取り出す事が可能なのか?と思う姫和は紫の恐ろしさに冷や汗が出る。
「ねえ、今からでも御当主様の正体をみんなに話して助けて貰うのはどう?」

「ダメだ、柳瀬　舞衣の反応を見るに他の奴が荒魂を見たということはないだろう、それに刀剣管理局も特別祭祀機動隊も折神　紫が完全に掌握している。揉み消されてお終いだ。」
「…姫和ちゃんは……やっぱり、もう一度御当主様に挑むつもりなの？」
「ああ、二度目はないと思っていたが、命がある限り諦めないつもりだ……。」
「……たぶん、一人じゃ勝てないよ。」
「なっ……」
「あんなに速い迅移を使った突きをなんてこともなく防ぐ、御当主様の強さは次元が違う気がする――。」
「……」
姫和が絶句しているときに、襖から優の声が聞こえた。
「もう終わった？」
「あ、うん終わったよ、じゃあ寝よっか姫和ちゃん。」
「あっ、ああ。」
可奈美にそう言われた姫和は、もう就寝時間だなと思い、布団に潜ることにした。――――
（私の持てる力の全てを注ぎ込んだ必殺奥義『一つの太刀』は最高速の迅移による突き、その速さは拳銃の弾丸をも凌駕する。迅移で加速していない者には回避はおろか目で追うことすら不可能なはず……だが、容易に防がれた！……いや待て、そもそも加速した私でさえ見えなかった奴の動きを、そして私の動きをこいつは…可奈美は目で捉えていた？）
姫和はこの姉弟のことを不思議に思えてならなかった。

「報告は以上です。」
　管理局本部に戻った舞衣は、荒魂との戦闘とノロの回収で姫和と可奈美を逃してしまい、戦闘で優を誤って傷付けてしまったという報告をしていた。
「時間の無駄でしたわね。」
「そうでもない、その9歳の子が御刀で斬られているから、出来る限り早く保護すべきということが分かったし、結芽の捜索命令は解除する。」
　結芽達捜索隊がその9歳の子供を探していたが、全く見つからなかったので、誘拐を恐れていたが、姫和と可奈美の二人に付いて行っている事実を知り真希は安堵したが、その子供がよりによって舞衣という刀使が誤って斬ってしまったということを知り、慌てたが直ぐに平静を保ち、迅速な保護が必要だと真希は思っていた。
「居場所を特定しただけでもお手柄よ、あなたは……今は休みなさい。」
「……はい。」
　舞衣は息苦しさを感じていた。失態を思い出していたから……
「事件発生から三十時間、現状この件はまだ内部で留め報道は控えています。学生達も調査しましたが、全員シロでした。恐らく、十条、衛藤の両名による犯行だと思われます。」
　真希は報告しなかったが、新たな疑問点があった。それは崩れた天井に、時限装置や起爆用の雷管、導火線、補助物といったそれらの破片類が現場に何一つ残っていなかったことである。とすれば、犯人は爆発物を使わず天井を力技で崩したことになる。やはり、寿々花の言うように協力者がいたのだろうかと思ってしまったが。
「もたもたするな、親衛隊!!何をしているんだ!」
「…鎌府学長。」
　真希は寿々花と同じく雪那を毛嫌いしていた。作戦指揮所で騒ぐことが理由の一つであった。
「報告にあった、追撃した刀使は貴様か…柳瀬　舞衣。何故、すぐに応援を呼ばなかった?」

「それは……ノロの回収が先だと判断しました。」
「そんなことは聞いていない！…あろう事か協力して鎮圧など…貴様、逃亡を幇助したのではあるま――――!!」
ガンッ！と大きな音がしたため、学長達と舞衣が音のした方に振り向くと……
「ごめんあそばせ。」
寿々花が椅子を思いっきり蹴った音であった。理由はこのまま雪那がヒートアップし他校の生徒を罵倒し続けてしまえば、伍箇伝内に亀裂が生じることを恐れたからである。それに気付いた雪那は黙るしかなかった。
「おお、それは良くないぞ寿々花、新しい椅子を柳瀬　舞衣と共に調達して来てくれ。」
わざとらしく真希はそう言って、寿々花と舞衣を退室させた。２ヶ月前に新しくしたばっかなのになぁ、と他の職員は思っていたが……。
「貴様ら親衛隊も何をしている。さっさと反逆者共を討ち取れ!!」
「出来ればそうしたいですが…我々親衛隊は紫様の警護命令が出ている為、動く訳にはいきません。」
「…まあいい、あとは我々鎌府が処理する。三名の消失点周辺の防犯カメラを解析して奴等の足取りを追え。…紫様に御刀を向けるなど…逆賊を育てた罪は重いぞ、両学長。」
「雪那ちゃん…」
「昔は先輩、先輩言うて可愛かったのに……いつからタメ口になったんやろ？」
雪那は言うだけ言って、退室した。誰だってこんなことしたくはない……だが、政治的な工作をする自分は、嘘でも強い自分を創って、進まなければならないと雪那は強く思った。紫の居る執務室に向かっていった。
「紫様、なぜ私にご命令頂けないのです。親衛隊が動けないのであれば沙耶香と鎌府にお任せを。」
そう言って、雪那は沙耶香を推してくる。

「お前を呼んだ覚えはない。」
「私の判断で参りました。」
全ては紫が沙耶香を認めてくれるために。
「夜見…紫様のお傍に居ながら……何をしていた！」
「申し訳ございません。」
夜見は無表情で抑揚のない声で返事をしていた。

「…みんな、帰っちゃうんだ。……」
朝となり、舞衣は学友達が何事も無く普通に帰って行くことに空しさと寂しさを感じていた。
「柳瀬さん。」
舞衣は呼ばれた声の方を向く、姫和と同じく平城学館の代表の一人岩倉　早苗が居た。
「あっ…岩倉さん。」
「帰る前に挨拶を、と思って。御刀持ってて大丈夫。」
「えっ、あ、まあ何とか。」
舞衣は優を誤って斬ったあと、医務室に行き、簡単なカウンセラーを受け御刀を所持できるまで回復していた。
「御前試合、あんな事になるなんて、びっくりしたよね。柳瀬さんは大丈夫だった?」
「はい、岩倉さんこそ。」
「私も親衛隊の人に取り調べを受けたの、でも私、十条さんのこと全然知らなくて。…十条さんね…何か悩んでいたようなの、去年編入してきてから学内でもあまり皆と話す方じゃないし…私がもっと相談にのってあげられたらって…。」

舞衣は、早苗の表情はどこか悲しげで、空しさを感じた。
「本当は、十条さんと一緒に帰りたかったな。」
「来るとき、一緒だったしね。」
「でも、柳瀬さんもでしょ。……衛藤さんと弟さん、無事だといいね。」
「はい、ありがとう…ございます。」
「それじゃ、元気でね。」
「はい、早苗さんも。……」
舞衣は早苗に手を振って別れると、外に目を向け二人の人物が歩いているのを見かける。鎌府女学院学長の雪那と可奈美が一回戦であたった鎌府女学院の糸見　沙耶香という生徒が並んで歩いていた。

「沙耶香。あなたは東京へ向かい、潜伏中の逆賊どもを討ち取る準備をするのよ。こちらは潜伏先を特定するから、それまで待機。」
「……はい。」
沙耶香は無表情でそう答えるが、雪那に頭を撫でられ、無垢な子供のように少し喜んでいた。
「確かに、試合で敗れはしたけれど、あなたこそ我が鎌府が誇る最高の刀使の一人であることは変わりないわ。」
このときの雪那の顔は晴れ晴れとした無垢な笑顔であった。憑き物が取れたように……。この場に江麻といった知人が居れば、まるで本当の彼女がそこに舞い戻ってきたかのようだったと答えていたであろう。
そして、この日を境に可奈美と姫和は徐々に追い詰められていくことになる……。

「よし、全快だ――――。」

姫和は『一つの太刀』を使ったことにより、弱体化していたが2～3日休息を取れたことにより、以前の力を取り戻していた。

しかし、大きな物音に慌て、襖を開けると……部屋がゴミで散乱していた。

「……何をしている。」

「お世話になったから、せめて掃除ぐらいはと思ったんだけど……」

「……汚くしているだけだな…」

「うっ、」

姫和の辛辣な言葉に大きなダメージを受ける可奈美。しかし、寝食を提供して貰っている身の上である以上、部屋の掃除をするのは当然かと思い、姫和は晩御飯の用意をし、可奈美は掃除機とフローリング、優はゴミ出しと掃除をしていた。

可奈美と優は掃除が終わると、姫和の手伝いをしていた。

「あっ、すまない優、そこの包丁を取ってくれ。」

姫和は芋を擦っていた優にそう言うと、優は包丁を持ち一瞬で回転させ、峰の部分を掴んで柄を姫和に向けていた。姫和はその手捌きに沈黙し、少し間が空くが。

「……ありがとう。」

と言って、気にしてないように振舞っていた。

「あっ、でも、すごーい！姫和ちゃん料理上手なんだね。」

「以前よく、母親に作っていた最近は全くだが…。」

「お母さん？」

「長患いの末、去年亡くなったがな。……」

「そっか…姫和ちゃんのお母さんも。…」

その言葉に姫和は少し驚いた顔をしていた。も、と言うことは可奈美もそうなのだろうと思った。

「たっだいま～、おー！引っ越して来たばかりみたいに、綺麗。」

夜、累が家に帰ってくると、まずそのような感想を述べていた。
「お世話になったんで、優ちゃんと姫和ちゃん、三人で部屋の掃除をしました。」
と、笑顔で答える可奈美。
「おお、いい匂い。」
食卓の上には、ぶり大根、焼き鮭と擦り芋、それに白いご飯という純和風のメニューが４人分揃えられていた。
「仕事から帰って美味しいご飯が待ってるっていいものなんだねぇ、ありがとう。」
「姫和ちゃんが作ってくれました！」
と、笑顔で答える可奈美。累はぶり大根を箸で取り、口に運ぶと。
「うん、美味しい～。姫和ちゃんって、意外に女子力高いんだ～。」
「べ……別にそれくらい…。」
姫和はそっけなく答えるが、照れているのが一目で分かるぐらい赤面していた。
「本当に美味しいよ、姫和おねーちゃん。」
しかし、満面の笑顔で優にそう言われると。
「そ…そうか……もっと、お替り、食べるか？」
「うん。」
９歳児の素直な言葉が余程嬉しかったのか、少し照れながらも姫和はそう答え、もっと食べさせようとし、その横で可奈美はニヤニヤとしながら見ていた。
「……。」
累はこの微笑ましい光景をずっと見ていたいと思ってしまったが、伝えなければならないことを思い出し、可奈美達に言う。
「……ええと、悪いんだけど、あとでちょっと二人に見てほしいものがあるの。」
「？」
可奈美と姫和の両名は不思議そうにきょとんとしていた。何を見せたいのだろうかと……。
そして、彼女達は大人に振り回されることになる。

「学長、居場所を特定できました。」
「何？」
「防犯カメラを解析し、衛藤、十条容疑者と思しき人物を追跡、タワーマンションの一室へ向かった模様。」
「上着を羽織っているが…、間違いない。この部屋の持ち主は？」
「部屋の持ち主は恩田累。元美濃関所属の刀使。１０年前に御刀を返納。現在は八幡電子に勤務しているそうです。」
「見つけたな……。沙耶香を突入させろ。」
「お待ち下さい鎌府学長。まずは機動隊で逃走経路を潰し、数名の刀使を以って突入すべきです。」
真希は雪那にそう進言するが、
「沙耶香は特別だ、心配ない。……沙耶香に突入命令を。」
そう言われると、真希は立場上何も言えず、ただ黙っているしかなかった。そして、９歳の子供が無事保護されるよう祈るしかなかった。

「了解、任務を開始します。」
沙耶香は与えられた任務を果たすため、行動を開始する。
雪那から貰った情報から恩田　累が車を所有していることを知り〝足〟を潰すため、黒いコートを羽織りフードを被って、制服と顔を隠し駐車場に向かっていた。累の車を見つけた沙耶香はサイドガラスを専用の道具で音もさせずに一瞬で割り、ドアを開けハンドルを両断、車を走行不能にする。防犯ブザーが鳴らなかったのが助かったが（尚、沙耶香は知らないが防犯ブザーが鳴らない理由は累がやかましいという理由で切っているから。しかし、そういった車は車上荒らしに狙われるのでマネしないように。）、これで標的がバラバラに逃走し、見失うことはないと思った沙耶香は駐車場を後にする。そのあとは非常階段、エレベーターといった考えられる逃走経路を全て封鎖してから突入したかったが、今回は自分一人しか居ないので、奇襲を

以って制圧することにした沙耶香はタワーマンションの窓から突入しようとしていた（尚、沙耶香は専用のピッキング道具を使って室内に潜入し、一人一人をストーキングで無力化することも考えていたが、発見されたときのリスクが高いため却下している）。標的は４人、情報通りであるならば、この中で注意すべきなのは刀使が二人、あとは女が一人と子供が一人だけ、二人いる刀使の中で最も手練れなのが衛藤　可奈美であると思った沙耶香は彼女を真っ先に戦闘不能にしたあとは十条　姫和のみ倒せばいいだろうと思っていた。姫和も相当な手練れではあるが〝無念夢想〟があれば勝てるだろうと考え、八幡力を使って跳躍し、黒いコートを脱ぎ捨てると同時に〝無念無想〟を使用する。沙耶香の目は淡く輝き、怪しげな虹色の光を纏い、不気味な雰囲気を纏いながら……。

――――沙耶香が突入する前――――

可奈美達は累に誘われるまま、パソコンルームに向かい、チャット画面を開いていた。そこにはＦｉｎｅｍａｎと名乗る謎の人物がメッセージを送っていた。

《ようこそ。グラディのご友人達。我々は君達を歓迎する。》

「…これは、一体…？」

「好きに答えてみて。」

「グラディ？」

「私のこと。」

（Ｆｉｎｅｍａｎ？誰だ……？）

姫和はキーボードに《あなたは？》と打ち込み、Ｆｉｎｅｍａｎにメッセージを送る。

《あなたは？》

《　Ａｌｌｙ　》

味方と返ってきた。

《たった二人の謀反者達。》

《手紙は持っているな》

Ｆｉｎｅｍａｎが次々とメッセージを送ってくる。
《立ち向かう覚悟はいいね？》
《Ｙｅｓ／Ｎｏ》
……姫和は決断を迫られていた。一瞬躊躇してしまった、もう二度と戻れないような気がして。…だが、何を戸惑っていると思っていた。あの日に全て決めたと思い、《Ｙｅｓ》と返信するべく、キーボードに打ち込みＦｉｎｅｍａｎにメッセージを送る。
《Ｙｅｓ》
《今日という日は完璧になった！》
「これは……！」
《以下の場所へ。》
姫和はそれに注目する。だが、優がなぜか窓の方へと向かう…。何処から持って来たのか鉄の棒らしき物を持っていた…。すると――

―

窓が割れ、鎌府の制服を着た刀使が襲い掛かって来た。つまり、鎌府から差し向けられた追っ手であると間違いない。
優は鉄の棒で横薙ぎになぎ払ったり、ガラス片を投げたりして、鎌府の追っ手沙耶香をベランダまで追い込み、外へ逃げた沙耶香と一緒に優も外へ向かって行った。
「おっ、おい。」
姫和は慌てて後を追おうとするが。
「可奈美、千鳥を持って来い！あなたは奥へ！」
可奈美はそう言われ、急いで千鳥を取りに行き、累は奥へ隠れていった。それを見届けた姫和は優のあとを追うため、ベランダから飛び降りていった。
そこには、とても異常な世界があった。
いや、全てが異常だった――――。
御刀を媒介として隠世と呼ばれる異世界より様々な超常の力を引き出す刀使が、９歳児と打ち合っているのだ。そのうえ、沙耶香は２段階以上の迅移を持続的に使用しているという離れ技〝無念夢想〟を使用しているにも関わらず、優が優勢であった。優が使っている御

刀と打ち合っても欠けることのない鉄の棒は相当な質量と硬度を持つのだろうと妙に冷静な分析をしていた姫和も奇妙な感覚に既に囚われていた。

だが、優の横薙ぎに見せた足を狙った攻撃に、沙耶香は回避するがバランスを崩し、追撃の横薙ぎを脇腹に受け、沙耶香の写シが剥がれる。それを見た姫和はこれで決着が付いたと思っていた。しかし――。

体勢の整わない沙耶香を優は無表情で、何も動揺することなく、沙耶香の頭をかち割るべく振り下ろしていた。

「なっ！」

本来ならば、姫和も写シを張らずに襲い掛かってくる沙耶香を斬る覚悟を持ってから挑むが、それに至るまで罪悪感を抱いたり、動揺したりするものである。だが、優にはそれが一切無く作業のように叩き潰そうとしていた。

しかし、沙耶香は〝無念夢想〟で回避、２段階以上の迅移を以って反撃するが、優に難なく鉄の棒で攻撃の軌道を変えられ、避けられる。

「おっ、おい、優!!」

姫和は優に止めるよう叫ぶが、聞こえていないのか両者共に止めることは無かった。

姫和は全てが異質で不気味にしか見えなかった。

姫和は止める事も出来ず、ただ呆然と見ているしかなかった。

次第に防戦一方となる沙耶香、沙耶香の頭に鉄の棒が迫って来る。

しかし――。

「駄目ッ!!優ちゃんッ!!」

可奈美のその言葉にハッとなった優は後ろに跳躍し、沙耶香との距離を開ける。

「退いて、優ちゃん。私が相手する。」

「大丈夫?あいつ可奈ねーちゃんを傷付けようとしたよ?」

「大丈夫、お姉ちゃんに任せて。」

八相の構えで可奈美はそう宣言する。沙耶香を止めるには斬るしかないと思っていた姫和は、人を斬った可奈美を優に見せたくないた

め、遮るように言う。
「お前に、斬る覚悟があるのか!?」
「斬らない!!」
　可奈美の強い宣言に、ハッと驚く姫和は黙って見守ることにした。
（この子の剣、前はこんなんじゃなかった。…剣から何も伝わってこない…？）
　可奈美は知らないが、それもその筈で沙耶香の〝無念無想〟は自己暗示的に無心状態に入ることにより、神力の消費を抑え、迅移などの技の効果時間を延長させるという技だが、自己暗示的に無心状態に入ることによって、行動が単純化してしまうという欠点があった。それを可奈美は〝剣から何も伝わってこない〟と感じていた。
　沙耶香は〝無念無想〟を駆使した最速の突きで可奈美に襲い掛かるが、
「そんな魂のこもってない剣じゃ――――。」
　最速の突きを可奈美は見切って、沙耶香の御刀の柄を掴み取ると、力強く言う。
「何も斬れない!!」
　可奈美は掴み取った沙耶香の御刀を時計回りに回して、沙耶香の御刀を奪い取って放り投げる。
「御刀を!?」
　その光景に姫和は驚愕していた。あの速い突きを見切ったうえ、奪い取って放り投げたのである。恐ろしい程の動体視力、姫和はそう感じずにはいられなかった。
「覚えてる？一回戦で戦った衛藤　可奈美。あの試合すっごく楽しかった…ずっとドキドキしっぱなしだったんだよ！」
　可奈美は沙耶香に手を差し出し、握手を求める。
「また、私と試合してくれない？」
　沙耶香は戸惑うが、可奈美が沙耶香の手を掴んで、
「約束。」
　笑顔で答える。沙耶香は空っぽだと思っていた自分の中に何か暖かいもので満たされていくような気がした。

（……私には、〝斬る〟という選択肢しかなかった。……だが、可奈美は……。）

可奈美は宣言通りに斬らなかったが、その弟の方は…。そう思った姫和は鉄の棒を何時の間にか持っていない優に詰め寄る。

「おい、何をしようとした？」

「えっ、…何って？」

「鎌府の……あいつの頭を何故叩こうとした？」

「えぇ？…悪い奴だから。」

「なっ？……」

意外な回答だった。だが、姫和は引き下がらず。

「おい、何で悪い奴なんだ？だからと言ってそれは良くないだろ？」

「何で？あいつ可奈ねーちゃんを傷付けようとしたよ？」

なんの抑揚も無く動機を答える優、それが当たり前のように、まるで、路傍の石を蹴るかの如く人の命を奪おうとしていた。

「……」

姫和は絶句し、優を見つめることしか出来なかった……。自分も人斬りに限りなく近いことをするため、反論することができない。

（この子は……）

何かが、おかしい――――。

何かが、壊れている――――。

何かが、ズレている――――。

姫和はそう思うも、この場を支配する狂気と不気味さ、そして異常さを払拭することができなかった。

そして、姫和はある決意をする。可奈美が沙耶香を握手しながら、横目でこちらをチラチラ見ていることに気付かないまま。

その後、沙耶香を累の家に置いて行き、Ｆｉｎｅｍａｎに指定された場所石廊崎へ向かうべく、累の車がある駐車場へ向かう。だが、

「あ～～～！車のローンが～～～～!!」

沙耶香によって、見るも無残な姿になった愛車を見るハメに会った

累は崩れ落ちる。
「あ、あの累さん、…色々巻き込んじゃってごめんなさい。」
「あぁ、いいよいいよ、応援呼ぶから……。」
累はそう言うと立ち上がり、スマートフォンを取り出し、何処かに連絡していた。
「あぁ、もしもしちょっと救援を……。」
累はスマートフォンで連絡したあと、県警が来る前に徒歩で累の家から遠くへ離れ、救援を待っていた。そこから、5分後可奈美達の前に一台のミニバンが現れ、止まった。既にミニバンの中にはガタイの良い外人が二人乗っていた。
「よう、大丈夫か?」
一人は流暢な日本語で安否を聞く三十代あたりの白人男性。
「これで石廊崎まで送る、乗れ。」
もう一人の方は初老の白人男性で、冷静な口調でそう言って乗車するように言う。
累が呼んだ救援だろう、累と可奈美達は乗車していった。

もう帰れない

　可奈美達は二人の外人が乗っているミニバンに乗り、石廊崎へと目指していた。
「え～っと、このお二人と累さんはどんな関係なんですか？」
　可奈美は累に質問する。
「え～っとね、実は私は〝舞草〟に参加していて、その仲間ってところかな？」
「〝舞草〟？」
　可奈美はそう疑問を口にし、初老の男性が答える。
「まあ、お前さんがチャットの相手をしていたＦｉｎｅｍａｎが〝舞草〟の幹部で、そいつが昔、経営していた会社の元警備員で今も雇われていると言えば分かるか？」
「Ｆｉｎｅｍａｎの……？」
　意外な顔をする姫和。
「そそ、運転している人の名前はローク、そしてこの爺さんの名前はトーマス。この二人、アメリカ海軍の元軍人さん達なんだよ。」
　累が可奈美達にそう説明すると、ロークという男は運転しながら、累に一言注意する。
「累、あまりお客さんに所属とか、そう言ったことは説明して欲しくないんだけど…。」
　ロークは身元がバレることを警戒してそのように言う。可奈美達が〝舞草〟に入るとは、まだ決まってないからだ。
「ローク、累、お喋りはそこまでだ、その先に警察の検問がある。左折して検問がまだ配置されてないルートをナビゲートするからその通りに行ってくれ。」
「了解です。」
「どうして、検問が有る場所が分かるんだ？」
　姫和の疑問にトーマスは耳のイヤホンを叩きながら、答える。
「あいつらの無線を傍受しているからだよ。」
「そんな……ことが？」

簡単にできるだろうか？少なくともこの二人はただの元アメリカ海軍の傭兵では無いだろうと姫和は思った。この二人は懐に何か隠していることは分かったし、何よりも後ろの荷室に何か得体の知れない物があるからだ。中身は爆発物か銃器だろうか？

「名前は姫和と可奈美と優だったな、さっきの戦闘で疲れたろ、お前達は休んどけ。」

トーマスは可奈美達にそう告げ、休むように言う。

「ありがとう、トーマスおじいちゃん、ロークおじちゃん。」

「あ、ありがとうございます…。」

礼を言う優とそのあとにお礼の言葉を言う可奈美。

「…すみません。」

警戒しながらそのように言う姫和。

「ハハ、まあ、気にしないで。」

気にしないようにと可奈美達に伝えるローク。姫和はえらく気を使わせてしまったかも知れないと思った。

刀剣類管理局本部、鎌府学長室に沙耶香と雪那が居た、そこで沙耶香は雪那に説教をされていた。

「沙耶香!!所在を特定し、奇襲して討ち漏らすとは……、少し過大評価し過ぎていたようね……。」

可奈美達を襲撃したあと、沙耶香は雪那の命令を受け、車でその場所を離れ刀剣類管理局本部まで送って貰っていた。

しかし、当の雪那はイライラが既にピークに達していたのか、学長室はタバコの臭いで充満していた。そのため、12歳の少女でしかない沙耶香はその姿を見るのが辛いため、あまり言い訳めいたことを言わないようにしようとし、ただ一言しか言えなかった。

「……申し訳ありません。」

沙耶香はそれ以外に言えなかった。

「くだらない御前試合などに興味はありません。」

雪那は何かの呪詛の様に呟きながら、沙耶香の御刀妙法村正を奪い取る。

「でも、任務の遂行率は１００％…それが、あなたの価値。」

そして、自らの夢である。彼女が世間に認められることが。

「少し……過保護に育て過ぎたかしら？」

雪那はそれだけ言うと村正を抜き、沙耶香に村正の切っ先を向けるが、

「っ……。」

雪那は誤って、沙耶香の左頬を傷付けてしまう。かつて自分が使っていた御刀の間合いを間違えてしまったのだ。そのことに雪那は顔を出さなかったが、心の中では激しく動揺していた。

雪那が刀使だった頃はこんな間違いは犯さなかっただろう。時間と過去、タバコと飲酒、ストレス（心の問題）という荒魂以外の化け物が彼女を刀使から、ただの心の脆い人へと変えてしまったのだろう。雪那はその事実を他でもない昔日の友でもある村正が自分に向けて言っているようにも思えた。そして今の自分が村正を持つに相応しくないとも……。

「……あなたはこの妙法村正の刀使として、この残酷で不条理な世の中に対して希望を与えなくてはならないの、そのための知識と力をあなたに与えた。全ては世間がこの研究とあなたの存在を認めて貰うため、あなたはそのためだけに存在するの、沙耶香。」

雪那は沙耶香と目を合わせることなく、沙耶香に背を向けながら言う。スレイド博士の研究で犠牲になった人、そして今も続くこの研究の被検体、自分自身……、沙耶香はその全てを救ってくれる救世主になってもらいたかった。あの男、スレイド博士と自分は違うのだと想いながら……。

その直後に、ドアのノック音が響く。

「空いてます！」

部屋に入ってきたのが、親衛隊第三席皐月　夜見であることを確認した雪那は、

「何の用だ！」

と辛辣に言って、弱い部分を見せないよう強い自分を作る。
「紫様がお呼びです。」
「紫様が？」
夜見にそう言われた雪那は沙耶香に鎌府学長室に待機と命じ、紫が居る応接室へと向かうのであった。

「鎌府学長。」
「はっ、はい。」
紫にそう呼ばれ、裏返った声で返答する雪那。呼ばれた理由が沙耶香が任務に失敗したため、沙耶香のことを欠陥品扱いされないか気が気でならなかった。
「私は追撃の許可を出した覚えがないのだが？」
どうやら、独断行動による叱責だったようだ。そのことに少しばかり安堵したのかいつもの口調に戻っていた。
「反逆者の所在を特定しましたので、早期に捕らえるべきと判断致しました。」
「勝手な真似はするな……。」
しかし紫は、いつもより憤慨しているようだった。
「で…ですが、この機を逃してしまえば御刀を持った危険分子がどのような被害と行動を起こすか分かりません。」
雪那は、可奈美と姫和の両名のことを突然御刀を振り回す危険な子供達だと思っていた。それもその筈で、雪那は目の前に居る紫の正体が二十年前に鎮めたはずの大荒魂ということを知らないのでこのような結論に至っていたのだ。
「高津学長、お言葉が過ぎます。」
「貴様……、それは刀使としての発言か。」
夜見は雪那の立場を悪くさせないように言ったつもりだったのだが、雪那にとって見れば紫さえ無事であれば他はどうでも良いというような発言にしか聞こえなかったため、憤慨していた。本来の雪那であればその考えに賛同していたであろう。だが、スレイド博士という良心の無い人間になりたくないという思いからその考えを否定する

ようになっていた。
「雪那。」
「はっ？……はい！」
雪那はいきなり名を呼ばれたことに驚き、声が上擦ってしまう。
「貴様はやるべきことを果たせ。」
「で、……ですが。」
雪那は紫に叱責されるが食い下がる。もし、可奈美達が犯罪を犯してしまえば、最悪のデモンストレーションになるからである。資金と頼る場所が無い可奈美達がいつ罪を犯すか気が気でならなかったのもあるが。
「……もういい、下がれ。」
「……分かりました。」
雪那はそう返事をするが納得はしておらず、悠長にしていれば刀剣類管理局の権威は失い、可奈美達は犯罪者の烙印を押されることを恐れながら、応接室を退室する。それを心配そうに見つめる夜見に紫は命令を下すのだった。

可奈美達は累の協力者トーマスとロークの送迎のお陰で、石廊崎からまだ距離はあるものの伊豆まで来ていた。
「……すまんが此処までだ、そのパーカーを着たまま車から降りろ。」
トーマスはそう冷酷に可奈美達に伝える。
「えっ、何でです？」
可奈美は疑問に思い、トーマスに理由を尋ねる。
「ここから先は検問が多すぎて通れん、こっから先は徒歩で向かう方が良いからな。大丈夫、ここのサービスエリアで案内人を呼んでいる。そいつに案内して貰え。」
検問が多いというのは試験官に会わせるための嘘であるが、可奈美達はそれに気付かず車から降りてしまう。
「大変だろうけど……頑張ってね。」

累の労いの言葉に頭を下げて礼をする可奈美と姫和。その後、ミニバンは発進し可奈美達から離れて行った。

「……あんな子供がねぇ、……化け物退治の先兵か……。」

ロークは悲しげな表情でそう呟やいていた。

車内で寝ていたとはいえ、ずっと車に乗っていたせいか、可奈美は背伸びをしながら姫和と話していた。

「ねえ、姫和ちゃん合流地点までまだ遠いの？」

姫和はそれを聞き、可奈美に自らの決意を切り出す。

「可奈美、お前には色々と助けられた礼を言う。……だが、ここで別れよう。」

「えっ、ちょっと姫和ちゃん、私も付いていくよ？」

「昨夜の件で分かった。私の剣とお前の剣は別物だ。」

姫和は搾り出すように言う。

「私は斬る剣、対してお前は守る剣だ…。この先は……斬る剣だけで良い。だから、もう良い。」

「そんなの勝手に決めないでよ、姫和ちゃんが勝手にそう思っているだけだよ。」

「可奈美……人を斬った事があるか？荒魂となった人を……。」

「えっ、……写シしか無いけど…どうして？」

「ここ最近は人が荒魂化する事例はほとんど無い。だが、私の母の時代にはそう珍しいことじゃなかった。」

姫和は自らの心の内を吐露する。

「荒魂化した人はもはや人ではない、稀に記憶を残し、言葉を話す個体もいるが荒魂は荒魂だ。刀使が御刀で斬って祓う、それしか救う手段はない。私達刀使は人々に代わり祖先の業を背負い、鎮め続ける巫女だ。だが、これから私がやろうとしている事は荒魂退治かもしれないが、限りなく人斬りに近い。」

姫和は可奈美と優の二人と出会い、一緒に居るだけで不思議と復讐心が揺らいでいく自分が嫌だった。まるで、自分自身を否定しているみたいで。

「お前は斬れない……だから、ここで別れるんだ。その子もいっしょ

に。」

姫和はそう言って、優も一緒に連れて帰れと可奈美に言う。そして、優のことは最初可愛らしい子供だと思っていたが、あの鎌府の刺客と戦い、無表情で虫けらのように殺そうとした優がだんだん怖くなってきた。……まるで、人斬りとなった自分を見せられているような気分となっていたからこそ、姫和はここで別れるべきだと決意した。

「まっ、」

「来るなっ!!……お前達は戻れ、可奈美は荒魂から人々を守れ、それもまた刀使として大事な仕事だ。」

姫和は大声で可奈美を制止させ、戻るように言う、幸い優は可奈美の言うことは守るようなので、可奈美さえ戻るようにすれば一緒に帰るだろう。もうこれで見なくて済む……あの子達が血で濡れることはない。そう思っていた矢先、姫和誰かに手を掴まれる。――――小さい手だった、優の手だ。

「おい、何をする。」

姫和は凄んで言う、手を離せと言わんばかりに……。

「行かせない、可奈ねーちゃんのやりたいことをやらせたいから。」

「人斬りをやらせることが良いわけないだろ?」

「それをどう決めるかは可奈ねーちゃんだよ。それに、今更戻っても可奈ねーちゃんの罪は軽くなるだけで、消えないんでしょ?そうなると可奈ねーちゃんは姫和おねーちゃんの追っ手として戦わなければならなくなるよ、それが良いの?」

どう転んでも人斬りに近いことをやらせることになる、そう言ってきたのだ。姫和はなにか反論しようにも何も言えなかった。

(こいつは……。)

何も考えていないようでいて、何か考えている子なのだと。

「だが、これは――――。」

「見つけマシタァーー!!」

しかし、突然の乱入者により話しを無理やり中断させられる。

「美濃関学園中等部2年・衛藤　可奈美と平城学館中等部3年十条

姫和デスネ。」
　金髪碧眼の外国人らしき長身の女性がそう尋ねて来た。
「そうだけど。」
「長船女学園高等部1年古波蔵　エレン！」
　可奈美がそう答えると、金髪碧眼の女性、古波蔵　エレンが御刀を抜き写シを展開、時代錯誤な名乗りを上げていた。
「で、隣にいるこっちが薫。折神家当主に刃を向けた不届き者！覚悟するデース！」
「クソめんどくさい。」
　隣からエレンとは対照的に背が低いツインテールの脱力している子供が現れた。名前は薫というらしい。
「……今度の刺客は長船か！」
「2対2だね。」
　姫和と可奈美はそれぞれ感想を述べながら抜刀し、写シを展開し身構える。
「ねえ、今度はあのちっこいのとでっかいのが敵なの？」
　優の発言で、場は凍りつき時が止まったかのようであった。
「……うおーし！すっげぇヤル気出てきたぁ!!あのクソ餓鬼折檻してやらぁ!!!」
「……今回の薫はやる気満々デスネ～。」
　薫はチビ呼ばわりされたことに憤慨し、刀身が長い御刀を構え写シを展開、殺意の目で優を睨む。一方のエレンはいつもそれ位やる気あればなぁとか思っていた。
「きえええぇぇぇぇ!!」
　薫は凄まじい掛け声と共に御刀を振り下ろす。見ると、道路はズタズタにされ、砂埃が舞っていた。
（なんて、威力。……なら。）
　懐に飛び込めば、と思い可奈美は間合いを詰めようとするが。エレンの肉体の耐久度と物理的な硬度を上げるが、短時間しか持続しない刀使の術の一つ金剛身を使った剣術と体術に翻弄され間合いを離されてしまう。

（タイ捨流と体術…!?間合いが！）
「可奈美！森の中へ行くぞ!!」
ここで戦い続ければ刀剣類管理局に通報されると思い、人目が付かない森の中へ姫和は優を抱えて向かおうとしていた。
「分かった!!」
あの長物は狭い場所だと不利かも知れないと思った可奈美はその案に乗り、森の中に入って行った。
「逃がすかぁ!!エレン行くぞ！」
「あっ、ハーイ。」
薫はチビ呼ばわりされたことに憤慨しているのか、真っ先に後を追う。それに続いてエレンも付いて行った。
そうして、戦いの場所は森の中となり。姫和と可奈美は距離を詰めようとするが、エレンによって阻まれてしまう。
「きえーーーーー!!」
そして、薫はその隙に御刀を振り下ろす。轟音と共に大地は割れ、樹木が倒れていた。
「だめ、この人達、息ピッタリで。」
「フフーン、私と薫はベストパートナーですカラー。」
薫とエレンの連携と統制の取れた戦いに思わぬ苦戦をしていた。
「ならば……。」
姫和はエレンに一直線に向かって行き、体当たりで薫との距離を空け、一対一に持ち込む。
「そう来まシタカ。」
「これで……。」
姫和は薫とエレンを分断させることに成功した。
「ふん。」
一方の可奈美は、薫が大太刀の御刀を投げてきたことに驚くも、それをなんとか避ける。
「何、荒魂？」
だが、小さい蛇の尾を持つ生き物が薫の御刀を掴んで、薫に投げ返す。可奈美はそれを見て荒魂かと思ってしまう。

「目が良いな、荒魂とは違うけど。」
「……なるほどね。」
　可奈美は何か納得したような顔をしていた。
「よいしょ。」
　が、優が倒れていた樹木を持ち上げていた。
「はっ？」
　その光景を見た薫は間の抜けた声をあげる。そして、優はその樹木を薫に向けて投げる。
「嘘ぉ！」
　あんな子供が何事も無く樹木を持ち上げて、こっちに投げて来たことに驚いていた。薫は御刀でこっちに向かってくる樹木を真っ二つにして、難を逃れる。しかし、振り下ろしてしまったため、大きな隙が出来てしまい、薫の喉下に可奈美の千鳥が突き付けられる。
「薫っ！」
　エレンが薫の救援に向かおうとするが、姫和が立ち塞がる。
「エレンとか言ったな、何故この場所が分かった？」
「フフーン、何故ですかね？」
　エレンに詰問する姫和。もし、紫の命令で動いていた場合、向かう場所がバレているということであり、累達が危ないことになる。
「……荒魂？」
　ふと姫和は可奈美の方を見ると、何か小さい生き物が可奈美の足に噛み付いていた。
「この子の言うことを聞くみたい。」
　しかし、この小さい生き物は優に思いっきり尻尾を踏まれ、悲痛の声を上げ、口を開けたと同時に耳を掴んで可奈美から離す。
「ねねっ！……おい何すんだクソ餓鬼!!」
「そっちこそ、可奈ねーちゃんに何してんの？」
　この小さい生き物の名前はねねと言うらしい。薫の非難の声に優は物怖じせずに反論する。
「荒魂を使役か……、質問に答えろ。」
「アッ、エーット、ワタシニホンゴワカリマセン。」

「ふざけているのか……。」
姫和はエレンの態度に若干怒りを覚えるも、平静さを保ち身構えていた。エレンはこれでいいと思っていた、あと5秒時間稼ぎすれば良いのだから。
「あれって…」
可奈美は上を見上げると、空から何かが降ってくるようであった。それに気付いた可奈美と姫和は迅移を使って退避していた。砂埃が晴れ、見るとS装備の射出用コンテナであった。
「あいつら、荒魂殲滅用の装備を出してきたのか?」
「え~っと、S装備って、これってピンチじゃない?」
「そうだな、あの装備は刀使の力を飛躍的に向上させる。」
姫和と可奈美は一気に形勢が不利になったことを悟る。
「お色直し完了デス。」
「完全武装薫、見参。」
S装備を纏ったエレンと薫が現れる。しかし――。
「ダッセェ。」
エレンと薫の二人に、9歳児の正直で無意識な精神攻撃をモロに受け、二人とも両膝を付け、頭を抱えていた。
「うっ、うっせえぇぇぇぇ!!デザイナーとか結構頑張って考えたんだぞこれぇぇぇぇ!!」
薫の悲痛の声が山中に木霊していた。その隙に可奈美と姫和の二人は優を連れてそそくさと逃げていた。

その後、可奈美達は突然降り出した雨から逃れるため、元は何かの店であったろう廃屋の中に居た。
「さっきは邪魔が入ったが、雨が上がれば別々だ。」
尚も、分かれようとする姫和。しかし、

「もう私は戻れないから、姫和ちゃんに付いて来るよ。」
　可奈美は拒否する。姫和にはそれが意固地になっているように見えた。だから、自らの目的を喋り、帰らせようとした。
「私が折神　紫を倒したい理由……お前には話しておく……。」
「……。」
「可奈美、二十年前に起こった『相模湾岸大災厄』は知っているな？」
『相模湾岸大災厄』――――。
　江ノ島に突如現れた史上最悪の大荒魂を折神　紫と現在の伍箇伝の学長達で編成された特務隊によって討伐された、二十年前に起こった事件。
「…その中に私の母もいた……。」
「え、お母さん？特務隊って六人だけなんじゃ…。」
「記録には残されていない、世に知れ渡っている事件の顛末は何もかもが虚偽だからな。」
　そして姫和は十条　篝様と書かれている手紙を出す。
「全ての真実は、この手紙に書かれていた。……この国いや世界の存亡を脅かすと言われたほどの災厄、忌むべき存在、純然たる穢れ、それが相模湾岸大災厄の大荒魂……そして、数多いる刀使の中で唯一やつを討ち滅ぼす力を持っていたのが、私の母だ。だが、完全には討ち滅ぼせなかった…やつは折神　紫になりすまし生き延びた。あの時、お前が見たものは英雄折神　紫の正体は討伐されたと伝えられるその大荒魂そのものだ！」
　姫和の告白をただ黙って聞く優と可奈美。
「刀使の力を使い果たした母は年々目に見えて弱っていった……そして去年、私が見守る中……その夜、私は誓った。母さんの命を奪って、なお人の世に堂々と居続けている奴を私は討つと！……母さんの無念は私が必ず果たすと決めた。」
　姫和は自らの決意を〝復讐〟を選んだ理由を話す。外は未だに雨が降り注いでおり、姫和の悲しみと怒りを表しているかのようであった。
「…私のやっている事のほとんどは私怨でしかない。だから、付き合

う必要は――――。」
「そうだね。」
　可奈美は姫和の目的を聞き、決心がついた。自分の目的を話す番だと……。
「優ちゃん、少し奥の方に居てお姉ちゃん達は大事な話があるから。」
「んっ、分かった。」
　優は可奈美の言いつけを守り、奥の方へ向かって行った。
「大事な話しって何だ?」
「私ね、姫和ちゃんの剣を受けて感じたんだ、姫和ちゃんの剣はなんて重たいんだろうって、姫和ちゃんの剣には強い意志が乗っているんだ、目的を成し遂げようって意志だから…重いんだって。」
「何が言いたい?」
「私も同じくらい目的があって来たんだ、だから戻ることができないし、帰れない。」
「だから、何が言いたいんだ?」
　姫和は可奈美が付いて来る本当の理由が聞けると思い、何度も聞き返す。
「ねえ、姫和ちゃん可笑しいとは思わない?たった一度だけ、少し荒魂の目が見えただけという理由で付いて来たのが…。」
「……。」
　息を呑んでいた。姫和は次の言葉をただ黙って待っていた。
「私ね、あの荒魂の目を何度も何度も何度も見た事があるんだよ。」
　何度も見た?何処で?姫和は何か恐ろしいことを聞いているような気がしてきた。
「あの荒魂の目、優ちゃんで見たことが何度もある……いや、中に居るといった方が正確かな。」
　何を言っているのか姫和には分からなかった。いや、理解しようとしていなかったのか、したくなかったのか。
「優ちゃんの中にはね……たぶん、御前試合で見た荒魂が居るみたいなの……。それで、姫和ちゃん。」
　……嘘だと言って欲しかった。そして、可奈美は聞いてきた。

「荒魂は荒魂だって言ってたよね？なら、優ちゃんも私の弟は荒魂か化け物なのかな？それとも姫和ちゃんも化け物って言うの？そんな事無いよね？仲良かったよね？今も好きだよね？ゾッコンだよね？あのときは嬉しかったなぁ～。」

いつもと変わらない可奈美の声なのに、今は悪魔の囁きにしか聞こえない。やめろ、そんなこと聞きたくない。姫和はそう叫ぼうと、可奈美を見た。

「でも、姫和ちゃんが優ちゃんを殺したら、……どうしよっか？……」

可奈美の顔は目を見開いて、こちらをじっと睨んでいた。今まで見たこともない顔で。

※このＳＳが意外にも暗くなりそうだったので、清涼剤として急遽作ったとじよんみたいなもの。

刀剣類管理局本部、鎌府学長室。

雪那「沙耶香!!……なにその格好？」

黒いトレンチコートと黒の帽子、サングラスといういかにもベタな変装をした沙耶香がいた。

沙耶香「ええと、さっきのアニメ本編の真希さんやタギツヒメが着てた黒いコートじゃなく、これなら次の任務に失敗しないと思って……。」

雪那「沙耶香……！（ついに、自分で考えられるようになったのね、嬉しいわ！）分かったわ、汚名挽回して来なさい！」

沙耶香「了解、任務を続行します。」

数分後――――

雪那「沙耶香！所轄に保護されるとはどういう事!!」

当たり前である。

異常の定義

舞衣は誤って優を斬ってしまい、カウンセリングを数回受けたあと、何事も無くいつも通りに荒魂を斬っていた。

しかし、出撃回数と撃破数が異様に伸びていたため、誤った報告ではないかと疑い江麻は調査したが、全て事実であるということを確認。直ぐさま再度カウンセリングを受けることになった。

「調子はどうだい、舞衣さん。ぐっすり眠れているかい?」

舞衣のカウンセリングを担当する精神科医はそう舞衣に聞いてきた。

「先生、最近はぐっすり眠れてますし、ご飯も美味しく食べれてますよ?いったい何を聞きたいんです?」

「最近君が仕事に過剰なまでに没頭していると聞いてね、トラウマを体験した多くの人はそうなる事が多いからちょっとした確認。」

舞衣はやはりかと思っていた。ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）を疑われているのだ。

「先生、単純な理由ですよ。私は親友の大切な弟を間違えて斬ってしまった。その事実は変わりませんけど、あの子は刀使が正義の味方だから大好きなんですよ?それなのに、刀使の一人である私がいつまでも悔やんだまま立ち止まっていたら、あの子と孫六兼元に怒られますよ。だから、自分の出来る限りの事をやっていたらそのように見えただけです。何も問題ありません。」

と舞衣は笑顔で答える。それを見た精神科医は「大変だね、君も。」と曖昧に答えるしかなかった。

「ですから、診断書には好きに書いて貰っても構いません。休む事も必要なのは解っていますから。」

精神科医は舞衣の顔を見るが変わったところはなかった。

それを聞いた後、精神科医は数回質問をして、何処か精神に異常が無いか調べて見るが、問題無さそうなので部屋に退室するよう伝えた。そして、退室した舞衣は思案していた。

(今日の先生は何だかしつこかったなあ、でも、なんとかいけるかな?

荒魂を斬ることまで取り上げられたら、可奈美ちゃんと並び立てることができなくなるから、……それは止めて欲しいなぁ。）

舞衣はカウンセリングを数回受け、御刀を持てるようになったあと、試しに藁束を斬ってみたのである。すると、自分の剣が鋭くなっているような気がしたのだ。

そして、舞衣は人一人斬れば剣術の腕が一段上がるということを思い出し、荒魂を斬ってみたのである。荒魂を斬った感触が、優を斬った感触と似ていたため、舞衣は出撃回数を増やし、荒魂を斬っていった。最早、彼女にとって、荒魂は動く藁束のようなものとなっていた。

そして、彼女は気付かない、精神科医がしつこくなく、いつも通りだったということに……。

その後、舞衣の診断書には。――――

柳瀬　舞衣は可奈美、姫和の両名の追跡の途中、誤って一般人を斬ってしまい、心的外傷を負い御刀を持つことが億劫となっていたが、なんとか持つことが可能になるほど回復。その後の経過観察の結果、心的外傷体験は彼女の戦闘能力、判断力に悪い影響を与えていないと判断する。

むしろ、その体験が彼女を強くし、使命感を強く与えていると考えられる。前にも増して彼女は集中力、判断力が高まっており、そのうえ冷静である。

診断の結果、柳瀬　舞衣は身体的・精神的には全く問題が見受けられない。

診断結果；戦線復帰可能

と書かれていた。

雨の中、エレンと薫は今後のことを話し合っていた。

「薫はどう思いマシタ？あの三人？」

「能力的には問題ないし、ショックしたふりしたら状況を理解し撤退したのも悪くねぇ……けどなぁ、あのクソガキも連れて行って来いってどういう料簡だよ、あのおば…上司は。」

エレンの問いに薫は疑問と自らの評価を伝える。

「あのクソガキどう考えても狂犬だろ、何か枷付けないと危ねえぞ。」

薫の言葉にねねも「ねー！」と言って、抗議しているようだった。ただし、薫の本音はこれから起こるであろう戦いにあの子まで巻き込むのはどうだろうと思っていた。

「……まあ、分からなくも無いですけどネェ。」

エレンは前の戦闘を思い出していた。あの小さい子供…名前は優であったろうか、相棒の薫よりも背が小さく歳も9歳の筈なのに樹木を持ち上げて投げることをしたうえ、ねねを何の躊躇いも無く危害を加えたことになにか言いようの無い寒気を感じていた。今までもねねのことを荒魂呼ばわりしていた人は居たが、あそこまで危害を加える〝人間〟は初めて見たのだから。

「……とりあえずはまぁ、あの二人と合流しまして、トーマスおじさんと一緒に帰りマショ。」

「……そうだな、それが良い。そのあとは、休暇を取ろう。」

エレンの発言に薫は賛同し、可奈美達を迎えに行く。あのクソガキは気に入らないし、巻き込みたくないが、上司命令なので黙って従うことにした。

一方、廃屋に隠れていた可奈美達は、雨が上がったので外に出ていた。

「雨も止んだし、行こう優ちゃん、姫和ちゃん。」

「ああ。」

姫和はこのあと、どうすれば良いのか考えていた。あのままこの二人を帰しても、無事平穏という訳にはならないかも知れない。鎌府の刀使と長船の刀使が戦闘を報告し、紫が優の正体に少なからず気付い

ている可能性が高く、帰ってしまえば手紙に書かれていた折神家の人体実験に使われるかも知れないと考えていたのだ。

――――自分は一体どうすれば良いのだろう。

姫和は母の仇を討つために今まで努力してきた、荒魂は荒魂だと思っていた、人斬り近いことをやる覚悟を持っていた。…だが、それを成すためにはあの子を……優を殺さなければならない。そして、巻き込んでしまった、……もう帰れないところまで。

その事実を姫和が追い詰めていた。そこまでの覚悟が足りなかったと言えばそこまでだろう。だが、子供殺しの外道に堕ちることになるかも知れないなど、誰が想像できる、誰が危惧する。

姫和は可奈美の方をチラリと見る。廃屋の中に居た時に「でも、姫和ちゃんが優ちゃんを殺したら、……どうしよっか?……」と聞かれ、姫和は「……まだ、荒魂じゃない。スペクトラム計に反応はない。……」と答えるしかなかった。なら、スペクトラム計に反応があれば私は殺すのか?……あの子を?何故?可奈美が言っていたように荒魂だから?化け物だから?

(……違う、違う!!あの子は荒魂なんかじゃない。私の母を立派な刀使だと言ってくれた。私のことを醜い復習鬼ではなく、正義の味方と言ってくれた。チョコミントのことを不味いとは言わなかった。……そんな、そんな子を殺す事が刀使としての務めなのか?それなら、どっちが化け物なんだ!!母さん……父さん、教えてよ。私は正しいことをしているの?)

姫和は心の整理が一つもつかなかった。紫を倒せば、全て終わると思っていた。けど、違っていた、進んだ先にはあの子が居た。

『荒魂化した人はもはや人ではない、稀に記憶を残し、言葉を話す個体もいるが荒魂は荒魂だ。』

ふと、自分の言葉を思い出す。じゃあ、他人を化け物扱いするお前は何なんだ?

『刀使が御刀で斬って祓う、それしか救う手段はない。』

そのために、子供を殺すのが、良くしてくれた人を苦しめるのが素晴らしい手段なんだな?

『私達刀使は人々に代わり祖先の業を背負い、鎮め続ける巫女だ。だが、これから私がやろうとしている事は荒魂退治かもしれないが、限りなく人斬りに近い。』

自分で良い事を言っているつもりか？大層な覚悟だ。なら、今近くに居る自分を慕ってくれる恩人の弟を冷たい刃で赤い海に沈めてやればいい。いや、鎮めてやればいいんじゃないか？祖先の業を背負う立派な巫女さん？

姫和はかつての自分の決意が、冷たい刃となって自分に返って来ているようだった。そのことが姫和を重く圧し掛かっていた。

「や～～っと、見つけマシタァ。……こんなところで、仲良く雨宿りしていたのデスネ。」

「さっきの！」

その声に振り向くと、つい先ほど森の中で戦っていた長船の二人だった。それに可奈美達は気付くと身構えるが……。

「オメデトウゴザイマ～～ス。」

「お前らを舞草に歓迎しまーす。」

突然、そのようなことを言われ、キョトンとする可奈美と姫和。

「「……えっ？……」」

しかし、姫和は少し色々あったので少しイラつきながら答える。

「ふざけるな！これ以上邪魔をするのなら!!」

「ダイジョーブ、そんなに急がなくても石廊崎は逃げまセンよ。」

「あの、エレンさんと薫ちゃんでしたよね？合格ってどういう意味ですか？それに、どうしてそこへ向かっていると……。」

可奈美は疑問を口にする。それに薫は同い年であると反論する。

「待て！俺はエレンとタメだぞ!!」

「あっ、私はエレンちゃんが良いデース！」

「うん、エレンちゃん、薫ちゃん。」

それを聞いた薫はうな垂れる。そして、エレンの半分くらい身長があれば良いのになぁと。

「畜生、確定しちまった。」

そのため、うな垂れている薫。しかし、

「可奈ねーちゃん、アレは味方ってこと？」
優は可奈美にそう聞き、可奈美は「そうだよ。」と答える。
「エレンおねーちゃんと薫おねーちゃんとは仲良くしないといけないとね。」
薫は優の言葉に素早く反応し、一気に近付く。
「いっ、……今のもう一回。」
「薫おねーちゃん。」
そう言われた薫は優の手を強く握る。そして、ただ一言。
「ありがとう……。ありがとう。」
薫はこの場で一人だけ、年上扱いしてくれることに涙目で少し喜び、抱擁をし、感動していた。…姫和は睨んでいたが。
そんな薫に代わって、エレンは可奈美の疑問に答える。
「合格とは文字通りの意味ネー。お二人は舞草のテストに合格しまシタ。私達舞草は折神　紫率いる変革派に抗い御刀と刀使の在るべき姿を取り戻すべく行動する組織デス。ですので、三人とも舞草へ歓迎しマス。」
「折神家に抵抗する組織……それじゃあ姫和ちゃんと目的は一緒ってこと？」
「ＹＥＳ！その通りデース。」
「やったね、姫和ちゃん味方が増えるよ。」
可奈美は喜ぶが、姫和は……。
「〝舞草〟か……Ｆｉｎｅｍａｎに聞き覚えは？」
「あのアバターは趣味が悪いから止めろと言ってマスね。」
姫和は、エレンという娘はＦｉｎｅｍａｎという幹部と親しい仲であることは解ったが、情報を聞き出すため、色々聞いてみる。
「なるほど、お前達は試験官というわけか。……そんな人をいいように試すような連中を誰が信用する？」
「それは……痛いところを言われましたネェ。」
「文句はあのオバ…上司に言え。」
エレンは困ったような仕草をし、薫は自分達の上役に言えと反論する。

「それに、穢れである荒魂を刀使が使役するだと？それでは折神　紫と同じじゃないか！」

　姫和はねねには荒魂呼ばわりし、優は荒魂扱いしないという矛盾には気付かず、このような発言をしていた。

「ノープロブレムです、見てください。」

　エレンはそう言って、スペクトラムファインダーを見せ反応が無いことを可奈美達に見せる。

「何？……スペクトラム計が反応しない？……私のもだと？」

「ねねは確かに荒魂デスが、同時に祢々切丸の代々継承者と常に共に在る益子家の守護獣でもありマス。」

「オレは守られた覚えは無いが……。」

　薫に辛辣なことを言われ、『ええっ!?』っという顔をしながら薫を見るねね。それを聞いた姫和は……。

（そうか……荒魂が人を守るか……。）

　そうだ、スペクトラム計に反応が無ければ何も問題ない、荒魂じゃない。一つの例、ねねを見てそう思い、安堵する姫和だったが。

「未だ荒魂や隠世については不明点も多く解明のためにも、ねねは特殊なケースとして上から認められているんデス。」

「そうか、だいたい解った。では〝三人とも歓迎する。〟とはどういうことだ？刀使は二人しか居ないぞ？」

　それを聞いた姫和は〝三人とも舞草へ歓迎する。〟というエレンの発言を思い出し、何故〝三人〟なのだろうとふと思った、9歳の子供をどうするのかと。もしかして、何かの実験に利用されるだけではないかと疑っていた。

「ああ、俺も知らんが上司が連れて行けと言うんだよ。」

　姫和はこのとき確信した。こいつらには何一つ知らせず、命令した上司が優を研究室か何処かへ連れて行こうとしているだろうと思った姫和は御刀に手をかけるが――――。

「見て、姫和ちゃん。この子とっても可愛いよ！」

　しかし、姫和は呆気に取られる。ねねというのが、可奈美の胸元に抱きついていたのだ。それに気付き優の方を見た姫和は。

「ねっ、ねっ！可奈ねーちゃん、可奈ねーちゃん！僕にも触らせて、触らせて！」

可奈美の回りをグルグル回る無邪気な子供が居るのを知った。しかし、ねねは尻尾を踏まれたことと、耳を引っ張られたことを思い出し『ヒイィ……。』という表情をしながら、更に可奈美の胸元にうずくまる。

「……嫌われちゃった。」

しょんぼりとする優を見たねねは悪いと思ったのか、優に近付く。

「！……良いの？」

優にそう言われ、ねねは「ネネー。」と返事する。肯定と捉えた優はねねを優しく撫でていた。そのときのねねは正に至福の顔をし、極楽という気持ちを出していた。

「凄いデスね、ねねはビッグなバストを持つ女性が大好きなのデスけど……。」

「将来胸がでかくなる女の可能性を嗅ぎ分ける程の巨乳好きが？……まさか、ソッチ方面に行く訳ねぇしな。即堕ち2コマみてぇーだな。」

そして、更に撫でて貰う為、優の胸元に飛びつき安らいでいた。ふと、姫和の胸を見るが、見込みがないと思ったのかそっぽ向く。

「……あとで覚えてろ。」

意図を理解した姫和は怒りを表す。そして――――。

「あっ！…可奈ねーちゃん、姫和おねーちゃん荒魂に囲まれてる。」

「!?」

可奈美と姫和は身構えるが、薫とエレンは何を言っているか解らなかった。しかし、このあとのねねの反応で直ぐさま反応する。

「ネネーーー!!」

その声と同時にねねは優から離れ、可奈美達は大群の小型の荒魂に襲われるが、全員散開し難を逃れる。エレンは皆とはぐれてしまうが、冷静に事態を対処していた。

「はぁ、みんなと離れ離れになりましたネー。……妙に統制の取れた荒魂、スペクトラムファインダーに反応なし、折神家から支給された最新式なのデスが……。ということは真っ黒ということデショウか、

せっかくS装備を持ち出して誘い込んだ訳デスから、何か決定的な証拠さえあれば良いのですけど。」
エレンは少し思案し、何か閃いたかのように手をポンと叩く。
「これで行きマショウ！」
それだけ言うと、エレンは夜の森を駆けていった。
一方、可奈美達は、
「追って来ない？……どういうことだ？」
「わかんない。けど、私達ここまで追い立てられたような……？」
「エレンちゃん達、大丈夫かな？」
「さあ、これは奴等の差し金かも知れんしな。」
優を攫うために……とは言わずに。
「やっぱり、信用できない？だったら、利用しちゃえば良いと思うよ。」
「え？」
「ほら、姫和ちゃんの目的に必要ならそうするべきだと思うし、それに私もそのつもりで連れて来たんでしょ？」
そして、可奈美自身も優の安寧のために、姫和を利用している。紫が元凶の可能性が高いため。
（本当に……能天気なふりして、油断ならないと言うか。）
姫和は可奈美にそんな感想を抱いていた。とっくに利用されていることに気付かず。
「でも、私や優ちゃんのこと少しは……。」
しかし、可奈美はこの場に優が居ないことに気付く。そして、
「優ちゃんが居ない……また、私、一人……お母さん……そんなの……嫌……。」
可奈美は思い出していた……。母が死んで、一人で泣いていたときのことを。
（もう……一人は嫌だ……。）
小刻みに震える可奈美を見た姫和は声を懸けようとするが、
「探そう!!優ちゃんを!!今、直ぐに!!!」
可奈美は姫和の肩を強く掴み、鬼気迫る表情と大きな声でそう言われた姫和は、

「わっ、……分かった。」
としか答えられなかった。姫和は可奈美に対して、何処か危ういところが有るように感じていた。

優は小型の荒魂に連れ去られた先には、親衛隊の真希と寿々花が居た。
「流石は夜見、良い仕事だ。」
「無事、あの子を〝人質〟にして衛藤　可奈美を投降させる。もしくは〝脅迫〟して十条　姫和を捕らえさせる。…ここまでは順調ですわね。」
「寿々花、言葉が悪いぞ。〝人質〟じゃない、〝保護〟だ。それに、〝脅迫〟じゃない、〝協力〟して貰うんだ。」
寿々花と真希は、夜見の能力で可奈美達を分断、優を孤立させ、真希と寿々花が優を捕らえた後、可奈美に姫和を捕らえさせるという作戦であった。
「……誰？」
優は親衛隊の二人と対峙していたが、至ってマイペースであった。
「親衛隊第二席、此花　寿々花ですわ。まあ、諦めて一緒に「ああ、二本のおまけの人達か。」……。」
紫のことを二本と言い、親衛隊のことをおまけと言ってきたことに、寿々花は明らかに怒気を放っていたが、真希に抑えられる。
「寿々花、子供の言うことだ気にするな。……案ずることはない、君を安全な場所に――――。」
「可奈ねーちゃんに知らない人達に付いて行っちゃダメって言われてるからムリ。」
真希は冷静に付いて来るように言うが、拒否される。
「真希さん、ああいうワガママな子は折檻してでも連れて行かないと。」
「……そうだな、少し痛いが我慢してくれ。」
真希と寿々花は峰打ちで気絶させてから連れて行こうと思考を切り替えた。

※性懲りもなく続けるおまけ『　利用　』

可奈美「やっぱり私も一瞬で三段階の迅移に達したいなぁ……。」

姫和「だからダメだ。…我が家の秘技だと何度も言ってるだろう。」

可奈美「じゃあ、私が十条　可奈美になれば良いんだよね。……気に入った、家に来て弟を《ハートマン軍曹》して良いよ。」

姫和（ド……ドクズゥ!!）

終わり

優しさ

真希と寿々花が優と対峙する数分前。

南伊豆、特別祭祀機動隊仮野営地――――。

真希は野営地内を歩き、寿々花と夜見の待つ作戦室へ向かっていた。

その道中、特別祭祀機動隊仕様にされた軽装甲機動車を数両と機動隊員が持っている折曲銃床式の８９式を見かけ、物も人間と同じようにその場に合わせて変わっていくものなのだろうと、ふと思ってしまった。

しかし、本来なら８９式ではなくオプションパーツの豊富さと精度、自衛隊と弾薬共有可能であり、世界の軍・警察が使われている実績を持つＭ４が特別機動隊（ＳＴＴ）に配備される……。

ハズだったが、８９式の配備先を増やし量産効果による防衛費削減を狙う防衛省や財務省といった省庁の横槍、既に８９式を警察の特殊部隊に配備している警察庁のお達しと刀剣類管理局に所属する機動隊員の殆どが警察関係者であること、再訓練の手間や国内の製造メーカーの保護といった理由から、特別機動隊には８９式が正式配備することが決定してしまった。（その代わり、紫が軽装甲機動車を何両か配備して貰うよう取り計らえたことを親衛隊は知らない。元々、Ｍ４の配備を検討しようとしていたのは、装甲車の配備が目的であったのだから。）

そのような複雑な経緯を持つ８９式だが、日本人の体格に合わせた形状と少ない反動から、銃の使用経験が無い真希も非常に的に当てやすいといった感想を抱くほどであった。

そんなことを考えながら、パイプ椅子に座る夜見と寿々花が待つ作戦室に向かい、入室する。

「遅いご到着で……。」

「そっちが早いんだ。」

寿々花の軽口に真希は軽く流し、パイプ椅子に座る。

「夜見、紫様の警護と海上保安庁に連絡は……。」
「高津学長と結芽が担当しています。それに、海上保安庁には真希さんの指示通りに海路の封鎖をして貰いました。」
「ごくろう、手間を掛けさせた。」
真希は夜見に〝紫の口〟から、雪那に警護を担当してもらうよう伝えていた。理由は結芽一人だけだと、政治工作といった搦め手に弱いので、そういったことに精通している雪那と鎌府の刀使が本部に残っていれば紫の警護は磐石となるからである。
あとは可奈美達が舞草と共に船を使って海上ルートから逃亡するのを阻止するため、海上保安庁にも協力の打診をして貰っていた。
「さて、始めるが……。地図から見てここに潜伏している可能性が高いと僕は思っている。」
そうして真希はテーブルの上にある南伊豆周辺の地図のとある一点に指を指す。そこは可奈美達が潜伏している廃屋だった。
「……なるほど、サービスエリアにあった戦闘の痕跡と、彼女達の移動距離から、その廃屋に潜伏しているとお考えで?」
「ああ、雨も降っていたしな、……夜見そこで頼みたいことがある。」
「何でしょう?」
「その廃屋に偵察と五人の分断目的で君の〝能力〟を使って欲しい。……あと、その五人の中に小さい男の子が居るから僕等が居るこのエリアまで誘導して欲しい。」
「……どうしてでしょうか?」
夜見は真希にその意図を聞いてくる。
「理由は報告の無いS装備のコンテナが2基射出されたということを聞いたことと戦闘の痕跡が有ることから、衛藤　可奈美と十条　姫和は舞草と接触していると考えていい。…そうなるとこちらの刀使の数は三人、向こうは四人で数的不利だ……。だから、衛藤　優を〝保護〟したあと、弟を溺愛している衛藤　可奈美にこの事件に〝協力〟して貰う……。そうすれば、こちらは四人、向こうは三人となりこちらが有利だ。十条　姫和と舞草の構成員を二名捕えることができるチャンスだと僕は見ている。」

真希の作戦に、夜見は疑問を口にする。
「待ってください、どうして敵が四名だと思うんです？舞草が衛藤可奈美と十条　姫和に協力するとは思えないのですが。」
「恩田　累のマンションから出て鎌倉から離れていることを踏まえて、舞草と何らかの方法で連絡を取り集合場所に向かっていると考えるのが自然だろう。あとは、サービスエリアで戦闘があったにも関わらずそういった報告が無いこと、S装備を使っていることから、舞草の構成員にテストか何かをさせられていたんだろう……。」
「しかし、S装備を使って二人とも処理したと考える方が妥当では？」
「元々から処理する場合だったら、南伊豆に来る前に三人を罠に嵌めて、遺体となって僕等の元に帰って来ているさ、必要ないからな。」
真希は、暗にその場合は三人を口封じで殺していると言っていた。
「……そうですね、場所もあちらの方が知っていますから、それくらいは楽にやれるでしょうね。」
夜見は真希の答えに納得し、理解した。だが、一方の寿々花は、子供を利用することに理解はしているが怪訝な表情をし、
「……手段は選ばないのですね。」
と言うしかなかった。それに真希はこう答えながら、……寿々花がそう思うのなら、勇敢な指揮官は男にしか与えられない称号なんだろうなと、心の中で真希は思っていた……。
「手段は選ばないんじゃない、選べないのさ……。」
「……でもまぁ、それしか手が無さそうですし、親衛隊だからと言って一対一なら負けないという自惚れは何の役にも立ちませんものね……。」
相手に油断せず、果断に攻め込むことが肝要。そう理解し、寿々花は真希の作戦に賛同する。
「……私もその子が傷付かずに済むなら、問題有りません。」
夜見も真希の作戦に異議を唱えることは無かった。
「そうか、二人の意見も聞けて良かった。では先ず、夜見は……。」
そのような経緯があって、夜見は五人を撹乱し、真希と寿々花は優の確保に向かう。

そのため、このような戦闘が起きていた。
だが、真希は自分が異常なところに居ることに気付いていた。目の前にいる子供は親衛隊二人を相手取っているのだ。そのうえ、背を崖にして前のみ攻撃を集中させ、川で足を取らせて機動性を落とす、もしくは川に棒を当て水しぶきでこちらの視界を遮る、といった地形を上手く利用して戦っているから始末が悪い。
完全に時間稼ぎをしている。ということは、時間が過ぎればこちらが不利であることに気付いているのだ。そして、こちらの〝子供の保護〟という真意に気付いている。
「……僕達はただの子供を無事〝保護〟するという計画だったハズだけど、なんか強いし、上手くないか、……あの子？」
そうしたことから、真希は愚痴をこぼしていた。
「貴女が計画したんでしょうが！……まあ、〝いつどのような行動をするか知っているみたい、〟という感じがして気味が悪いですわね。」
寿々花は真希に自分の感じたことを素直に伝える。
「全くだ、……それに妙だな、あんな子供に荒魂の気配が？」
9歳の子供に荒魂の気配を感じるのだ、御前試合ではそんな気配は無かったが、何があったのだろうか？
しかし、やはり9歳の子供が荒魂の気配をさせているのは、不気味な組み合わせとしか思えなかった。
「……全くといっていい程、一撃すら与えられないですわね。」
「結構……時間が過ぎているからな、早めに片を付けないとマズイ。」
真希と寿々花が苦戦している理由は様々にある。まるで、先読みしているかのような行動もそうだが、9歳児なので斬ることと峰打ちで叩くのに躊躇うのだ。そのうえ、相手の背が低く当て辛いこと、相手は棒を使ってくるため、刀使と荒魂が主な相手である真希と寿々花は

いつも通りに戦えなかった。
（こっちから、攻めない方がいいな。）
優にはそんな気持ちがあった。理由はこの二人にも〝小型の荒魂みたいなことをする能力がある〟という警戒をしていた。おおよそ、荒魂の力によるドーピングみたいなものではなかろうかと思っていたため、迂闊に向かっていってそれを使われると厄介なので、防御に徹していた。それに無理に倒す必要がない、待っていれば可奈美達が必ず助けに来てくれると信じていた。
（あのときのように、きっと助けに来てくれる。僕は知っている。だって、一番強い刀使だから。）
だからこそ、どんなことがあってもあのときのように助けてくれると信じられる。そして、可奈美は自分のために強い刀使になってくれると言ってくれた、だから優はどんな目に合っても……。
「怨まないよ。」
優は自分の決意を小声で言っていた。そして、長い攻防戦は一人の女性の声によって終わる。
「優ちゃん！助けに来たよ!!」
可奈美達がこちらに来たのである。
（しまった!!）
真希は優と可奈美達が合流する前に捕えたかったが、時間切れとなり一気に形勢不利となってしまった。それにより、真希は一瞬動揺し、動きが少し鈍ってしまった。
「真希さん!!」
その声に反応し、嫌な予感がした方を振り向くと、優が鉄の棒をこちらに向けて投げていた。
「ちっ、」
真希は舌打ちしながら、なんとか御刀薄緑で防ぐ。
（重い…!!）
意外に質量はあるのか、弾くのに苦労してしまった。その隙に優の接近を許してしまい、正面に対する防御をするが、拳大の石を側頭部に受けてしまい写シが剥がれ、真希は一瞬気を失ってしまう。そこに

優は真希にとどめの一撃を与えるべく、そこらへんにあった拳大の石を拾って、大きく振りかぶるが……。
「優ちゃん、逃げるよ!!」
可奈美にそう言われた優は真希に興味を無くしたのか石をそこらへんに投げ捨てたあと、突然姫和が現れ、優を抱えて迅移を発動し森の中へ移動。それを見届けた可奈美は八幡力で持っているのか、優の鉄の棒をその手に持ち、一緒に森の中へと撤退していった。
「……してやられましたわね。」
流石に一人で立ち向かえば、負けるのは確実なので追わず、真希の方に近付き手を差し出す。しかし、手で遮られると。
「……真希さん?」
「寿々花、少し遠いが綾小路に応援を要請しよう。あと、夜見にも撤退の指示を。」
南伊豆の管轄は美濃関だが、今回は鎌府は本部の守りをする必要があり、美濃関の生徒も捕えなければいけないため、それらを鑑みて綾小路に応援を要請しようとしていた。
「……分かりましたわ。」
真希の指示を聞き、肯定する寿々花。
「……大変なことになった、寿々花。」
そして、真希は寿々花にあることを伝える。
「あの子供は、……僕達と同じだ。」
「!!」
それだけで、寿々花は真希が何を伝えようとしているか分かった。あの子供はノロを使って身体の強化がされていると……。
「ということは、つまり。」
「舞草だろうな。」
そう言って、真希は自分の力で立ち上がると、あの子供を強化したのは舞草だと確信してしまった。
「舞草は……必ず……潰す。」
真希という彼女は様々な顔を持っている。
一つは、異性同性問わずに人気があり、刀使の憧れの存在として希

望を与える顔――――。

一つは、良く女性を口説くようなことを言っては寿々花に叱られる童のような顔――――。

一つは、仲間思いで面倒見が良いため、結局は親衛隊のまとめ役をするときの真剣な顔――――。

そして、最後の顔は……獰猛な獣のように獲物を必ず仕留めるという獅子の顔――――。

今の獅童　真希の顔は獅子の顔をし、舞草を必ず潰すと決意していた。ノロを人体に投与する技術を外に広めるべきではないと思いながら。もし、広がれば確実に少年兵が増えることは間違い無いのだから。

「寿々花、力を貸してくれ、これ以上あのような子供を創ってはいけない。」

そして今の真希は勘違いしていた。優をノロを使って強化したのは舞草であると。しかし、そのような結論に至るのは仕方が無いことである。そのような施設と技術を持てるのは折神家か鎌府、舞草しか考えられないのだから……。

「良いですわよ、何処までもお手伝いしますわ。」

寿々花は、真希の言葉の真意を理解していた。子供をあのように強化して、これ以上少年兵が増えることを防ぐために舞草を壊滅させるのだと。そして、寿々花もそれに協力することを誓った。

そして、この二人は同時刻、紫に向けて元気に刃を向ける12歳の燕　結芽が居た事を知らなかった。

そして、同時刻、刀剣類管理局本部内の一室では――――。

「ええと…糸見…沙耶香ちゃん?……ちょっと、いいですか…?」

舞衣は沙耶香から可奈美が無事であるかどうか聞くために来てい

た。あれから上達した自分と一緒に戦うといういつかの約束を守るため……。

「？」

このあと、舞衣は沙耶香から可奈美の近況を聞き、安堵したのか、

「可奈美ちゃん、あれから無事なのね！…良かったぁ…！」

「……」

舞衣を見て、沙耶香は不思議に思っていた。何故、この人は他人のことをそこまで気にするのだろうかと……

「あっ、ごめんね？沙耶香ちゃんの前でこんな事言ったら駄目だね。」

「別に勝てなかった事は事実だもの……。」

「さ、沙耶香ちゃん鎌府だよね？寮に帰らないの？」

「この部屋から出るなと、命令を受けているから。」

「…え？高津学長に……？」

舞衣にそう聞かれ、頷く沙耶香。そして、暫しの静寂が訪れるが。

（あっ、ほっぺたケガしてる。）

舞衣は知らないが、その傷は雪那が誤って付けた傷である。

「……ちょっと、ごめんね。」

舞衣は、優しく微笑みながら、いかにも子供っぽい絆創膏を沙耶香の頬の傷に付ける。

「えっ……？」

「ん…これでよし……と、子供っぽいのでごめんね。上の妹がこれ…好きだから。」

舞衣は何故か沙耶香のことを妹と同じ様に可愛がってしまった。人恋しさ故か、自分なりの癒しを求めたからか……。

「……別に…気にしない。」

沙耶香は素っ気無く返す。

「そうだ、沙耶香ちゃんは甘いもの好き？」

「……うん、好き。」

「良かったら、これを食べてくれると嬉しいな。」

そう言って、舞衣は〝荒魂を斬りまくった手〟で作ったクッキーを差し出す。

「？……良いの？」
「良いよ、ちょっと落ち着こうとしてたら、作りすぎちゃって。」
荒魂を斬りまくったことに、なにかの癒しを求めたのか多く作りすぎてしまったクッキーではあるが……。
「じゃあ、見つかると怒られちゃうし、もう行くね。……可奈美ちゃんのこと教えてくれてありがとう！また、勝負してあげてね？」
そう言って、舞衣は退室しようとするが……
「あっ、出来たらその前に私とも勝負してね。」
本来の舞衣はこんなことは言わなかっただろう。しかし、今の彼女は荒魂を残忍なくらい斬ることができる狂気の部分と他人を気遣うという優しさを持つ、アンバランスな人間となっていた。
舞衣はそれだけ言うと、退室した。
「あっ、クッキー。」
沙耶香はそれを見ると、袋を開け、一つクッキーを手に取りサクッと音をさせながら食べる。
（……おいしい、……それに、暖かい。……）
そして、沙耶香は舞衣から何か心が温かくなるようなモノを与えてくれたように感じていた。しかし、沙耶香は知らない。
……沙耶香から癒しを得た舞衣はこの後、沙耶香に見せた微笑みをしながら荒魂を斬り刻んでいったことに。沙耶香は知らない、舞衣にそんな一面が生まれていることを……。

朝となり、南伊豆山中の特別祭祀機動隊仮野営地では、来客が来ていた。
「そこで、止まれ。ここは現在、特別災害予想区域となっているため一般人の通行は……。」
「怪しい者じゃ、ございマセーン。通りすがりの刀使デス。」
エレンが単身、仮野営地に現れ潜入しようとしていた。
この先には、残酷で不条理な物しか無いという事実に気付かず、無垢な少女のまま向かっていく。

閑話；ノロを受け入れた人の話

真希は優との戦闘のあと、夜の森を歩きながら仮野営地へと向かい、歩きながら真希は過去を思い出していた。

自分がノロを受け入れ、親衛隊に入る切っ掛けとなった、事件のことを……。

自分が始めて、荒魂と化した人と戦ったあのときのことを……。

大会二連覇し、あのときの僕は舞い上がっていたのかも知れない。

かつての自分を見てみると、ハッキリ言って視野狭窄に陥っているとしか思えなかった、恥ずかしいことに……。あのときの僕は若く、刀使としての誇りを十二分に抱いていた。しかし、あの事件が僕を変えていった。変わらないのは自分が持つ御刀薄緑くらいなものだった。

（どうしようか……。）

僕はこの時、迷いがあった。親衛隊に入るには強化薬の投与が必要らしく、それに戸惑いがあった。あのときの僕は青く、刀使に誇りを持っていた。それ故に少しだけ考える時間が欲しいと言って、少しだけ時間を貰っていた。だからこそ、僕は外の景色を見て回れば何か掴めるかも知れないと思い、外出していた。

そうして、あのときの僕は平城学館の制服を身に纏い、外の空気を吸いながら特に意味も無くぶらついていた。公園のベンチで一人座っている御老人、誰かを待っているのか煙草を吹かせながらブランコに座るサラリーマン、犬と散歩中の女性、お腹が大きくなっている妻と同行している夫を見かけていく。そして、登校中だろうか小学生の児童が「あっ、刀使さんだ！」と言って手を振っていたので僕も微笑みながら手を振って返していた。そうすると、小学生の児童達は「頑張って～！」といった黄色い声援をしてくれた。その声を受け僕は思った。

（やっぱり……、辞めて置こう。）

親衛隊に入るのは辞退しようと……、僕はああいう子供達とこのような平和な風景を守るのも刀使としての使命だと再認識したのだ。そして、それに相応しい人間にもなろうとあの子供達に僕にも誓った……。

その後、事件が起きた。小学校にて荒魂と化した人が現れたという報告があり、事実、スペクトラムファインダーに反応があった。そこへ僕は一人だけ走って向かっていた。

（急がないと……！）

不運にも、刀使が到着するには時間が掛かるので、たまたま近くに居た僕が一人で現場に急行していた。僕は手を振って応援してくれた子供達を思い出しては急いで走っていた。迅移を使って、現場に急行するということも考えたが、神力の消費を抑えるため、結局は走って行くことになった。

現場に到着した僕はバリケードテープで規制線を張って立ち入らないようにしていた制服の警官に、特別祭祀機動隊の身分証明書を見せ中に入れてもらい、現場の指揮官にどのような状況か教えて貰っていた。

「状況はどうなっているんです？」

そう聞かれた現場指揮官らしき壮年の男性はこちらに気付くと、親切に教えてくれた。

「ああ、平城学館の刀使か助かる。今、応援の刀使は此方に向かっている途中で、荒魂は警官を負傷させ、銃を複数所持しているという極めて危険な状況であり、小学校内に立て籠もっていて荒魂の数と何処に居るか判らないから君は此処で待「女の子を！早く救急車を!!」判った！その子は他の奴が運んで行くからお前は既に避難している人達を守れ!!」

現場指揮官と話している最中に、若い警官が小さい女の子を抱えていた。既にその女の子の血は乾いているのか黒くなっていたが、意識

は辛うじて保っていた。
「いいえ!!病院まで!病院まで連れて。」
若い警官は少しパニックになっているようだった。無理も無いあんな光景を見れば誰だってそうなる。
「大丈夫だ、大丈夫だ!!他の奴に任せろ!!」
壮年の現場指揮官は若い警官を大声で叱責していた。それだけで今の状況がどれほど危険な状況か僕には分かった。そのとき、銃声が二度か三度くらい鳴る。それに、僕は応援してくれた子供達を思い出しスイッチが入ったのか、それとも頭に血が上ったのか、無謀にも小学校内に入ろうとした。
「すいません、突入します!」
「あっ、おい!!」
現場指揮官の声を無視し、僕は小学校内に入って行った。あのときは浅はかで青かったと思う、スペクトラムファインダーがあれば直ぐ見つかると思っていた。しかし、
(……何処に居るか分からない。)
完全に失念していたのである。スペクトラムファインダーはこの当時、おおまかな位置しか示さないのである。故に、僕は広い校内を当ても無く探していたのだ。
そして、僕は広い校内を散策するハメに遭い、転がっていて起きない用務員の中年の男性、怯えて竦んでいる児童達、……そして、誰の血か判らない黒い血溜り、この児童達が健やかに育つべく建てられた神聖な学び舎は地獄のような場所に変わっていた。そして、その証拠に至る所に赤黒い血の様なものが壁にべったりと付いていて、時折鳴る銃声に悲鳴と怒号が聴こえていた。
そんな状況下であるというのに、荒魂を見つけられず、僕は未だに彷徨っていた。理由は勝手に突入したことによって、荒魂の特徴を聞いていなかったこと、更に無線を持っていなかったので自分が居る所が分からないという間抜け過ぎることが原因であった。そのうえ、頭を冷やし冷静になって考えてみると、荒魂が既に避難している人達の方へ向かうか、小学校の外に出てしまえば、更に犠牲者が増えるとい

うことを今更気付いてしまった。そのため僕は来た道を戻るという二度手間のようなことをしていた。その道中、制服の警官二人組みと出会う。

「!……平城の刀使か。」

１８０ｃｍくらいの長身が特徴の男性警官の一人が僕に気付き、胸倉を掴み壁に押し付けた。

「何を……。」

「お前、何ゾンビのように彷徨っているんだ!?」

「荒魂を殲滅に……。」

「何言ってやがる!訓練を思い出せ俺達を殺す気か!?俺達を殺す気か!!」

それを言われ、僕は頷くしか無かった。言われてみれば援護も無く突っ込めば、銃を持った荒魂に不意を突かれ僕が負傷か死亡してしまえば最悪の事態に元通りになってしまう。それに、僕が進んだ方向が荒魂の居る所と逆方向であれば、警官達もただでは済まないのだ。そして、銃声が鳴り僕と警官の二人はハッとする。

「良いな……持ち場に戻れ、既に避難している人達を最優先に守れ、自分の仕事をするんだ。」

僕を壁に押し付けている警官はゆっくりと落ち着かせるようにそう言うが、その警官の相棒、色黒が特徴の男が驚くべきことを言ってきたのだ。

「いや、相棒このままその刀使さんも連れて行こう。」

「何言ってやがる、お前も可笑しくなったのか!?」

「違う落ち着け、応援の刀使と機動隊員が到着して既に避難している人達を守っているから、外に出る問題も無いってことさ。」

「……やっとか、銃声からして近くに居るだろうからこのまま進もう。」

僕はこのときにやっと、援護を受けながら進むべき方向を得たのだった。

僕達は進んで行った、無線連絡に導かれ――――。

僕達は進んで行った、荒魂を斬って鎮めるために――――。

僕達は進んで行った、元は白い壁だったのに、今は赤黒いナニかが点々と染まっていて、ナニかが倒れて動かない廊下を通って――――。

そして、色黒の警官が一人の少女に寄り添って泣く女性が居ることに気付き、避難させるために話してかけていた。

「大丈夫ですか？」

その女性はすすり泣きながら、こちらに答えていた。

「この娘……意識が……目がぁ……。」

「分かった、その娘はこっちで助けますから、早く避難してください。」

色黒の警官にそう言われた女性は、悲痛な表情しながら避難していった。

「…報告、報告。幼い少女が5―4教室手前で倒れています。」

色黒の警官は無線で報告し、その娘を救助しようとしていた。

《荒魂と接触したか？》

「いいえ、まだ生徒は学校内に残っている模様。」

《…荒魂を鎮圧することを最優先にしろ、これ以上野放しにするな。》

しかし、非情な答えが返ってきたことに僕は怒りを感じた。しかし、後になって考えてみたらこの判断は間違っていないと思うようになっていった。二次被害を防ぐため、荒魂の鎮圧を最優先しただけなのだから。

「…了解、行くぞ。」

色黒の警官は暗い顔をしながらも先に進むことを決意したようだった。

そして、僕達が進んだところに音楽を聴きながら廊下を進む児童が居て、その生徒が進む廊下の先に銃口が生えたように現れた。それに気付いた長身の警官は駆ける。

銃声が鳴り、長身の警官は倒れてしまう。僕がその生徒を引きずるように迅移を使って安全な所まで移動し、色黒の警官が援護射撃をした頃には既に荒魂は姿を消していた。

一撃だった――――。

一撃で全てが変わり――――、

一撃で僕を叱咤してくれた〝人〟は〝肉塊〟となり――――、
一撃で僕を呆然とさせていた――――。
「……相棒はもう駄目だ……、無線はお前が使ってくれ。」
色黒の警官が血で濡れている無線を渡す。頭でそれが最善の行動だと理解しているが、心がそれを許してくれなかった。しかし、僕はそれを受け取り、使う選択をしたのだ。きっと、彼もそれを望んでいる。
「あいつなら許してくれる、……行こう、荒魂はあっちに行った。」
そうして、僕は彼の無線を装備し、彼を置いて行った。何故か僕はこのとき、彼から「自分の仕事をするんだ。」という声援を受けたような気がした……。
足音と時折聞こえる銃声から、荒魂は図書室に居ることが分かった僕達はそこへ向かっていた。
「いた、……あそこだ。」
黒い野球帽を深く被っていて、荒魂化している部分が多く、黒いトレンチコートを羽織っているため、姿は良く分からないが、もう手遅れだというのが良く分かる。
「……おれが囮になる、一気に片を付けてくれ。」
色黒の男の判断に僕は頷いた。図書室の中には逃げ遅れた生徒が居て、銃口がその生徒達に向けられていて人質になっていたのだ。そのため、迅速に鎮圧しなければならなかった。
色黒の警官が全力疾走し荒魂が注意をそちらに向けている間に、僕が迅移を使って距離を詰め、荒魂を斬って祓うという作戦で行くことにした。
「俺の合図に合わせてくれ……3。」
僕は一呼吸する。
「2…。」
僕は御刀薄緑を抜刀する。
「1…。」
僕は息を吐き、決心する。
「ＧＯ!!」

色黒の警官の大きな声と動きに合わせ、僕も動く。作戦通り、色黒の警官に注意が向いているのか、荒魂は色黒の警官に撃ち続ける。
そして、僕は迅移を使って一気に距離を詰め、死んでしまった長身の警官を思い出しながら、薄緑を振り下ろして――――――。

あの惨劇から数日後、僕は休暇を貰い、あの惨劇の場所へと向かっていた。今回は御刀を持っていない。
理由は……色々ある。小学校の担任が僕を見かけて近寄ってくる。
「ああ、どうもあの時は助けて頂きありがとうございます。」
「……はい。」
定例通りの言葉に僕は気の抜けたような返事をする。
そうして、僕は担任の案内のもと、廊下を歩く。
今では、あの惨劇が無かったかのように生徒達が普通に教室に居て、普通に授業を受けていた。あの惨劇は何かの夢であったかのように……。
僕はその白い廊下を歩いているときに、音楽の授業があるのか合唱の歌が聞こえていた。
みんな生きているから、嬉しいし笑う。トンボも蛙も命有るものは友達だという歌詞だった。……今の僕には、その歌が僕を責めているような気がした。
「皆、貴女には感謝しています。本当に、本当にありがとうございます。」
「……はい。」
僕には、それだけしか答えられなかった。そして、目的地である、荒魂を討った場所である図書室に到着していた。
そこで、僕は、思い出していた。
荒魂を斬った時のことを……。あのとき、薄緑を振り下ろしたあと、残っていたのは刀使の僕と幼い男の子だけだった。
たぶん、荒魂化した人というのはこの子なのだろう。……その証拠に、その男の子の周りはノロが飛び散っていた。

振り下ろしたあとの記憶が無い、……本当にこの子なのか？間違いじゃないのか？一瞬だけ思ったが、色黒の警官の声で僕は真実を知る。

「良くやった！荒魂を討ちたお……。」

沈黙がこの図書室を支配していた。そして、幼い少女が僕を化け物のように見ていたのが真実であり、間違いの無い事実だった。

「……報告、……報告。荒魂を鎮圧しました……。」

震えた声で、搾り出す声で僕は報告した。

泣くこともなく、現実を直視することが出来ず、固まって動揺するだけだった。そして、自分の薄緑を見ると、ノロがべったりと張り付いているハズなのに、そのノロが赤黒く血のように見えてしまった。そして、今の薄緑が恐ろしく見えてしまった、神聖なる武器ではなく、ただの殺人道具に思えて仕方なかった。

そうして、僕は薄緑を平城学館に預けここに居た。

今の僕は薄緑を持たずにその場所に居たのだ。

何でここに来たのか僕にも分からない。……贖罪しに来たのか、それとも懺悔に来たのか。……誰が許してくれるんだろう。

「……私ね、教師辞めようと思うんです。」

案内してくれた担任が突然このようなことを言ってきたことに、僕は驚く。

「……この子、いじめを受けてたみたいで、……私、見てみぬふりをしてたんです。……この怪我は天罰だったのかも知れません。そして、私がちゃんと見ていればこんな事にならなかったんじゃないか？……今はそう思えて仕方ないんです。」

担任は腕の怪我を見せてくれた。僕は、ただ黙って聞いていた。懺悔を聞いているようだった。

「……ですので、貴女だけ悪いんじゃないと……思います。私はこれぐらいしかできませんが……。」

「ならば、辞めない方が良い。……今度はそういった子供達を増やさないようにして下さい。」

僕には、それだけしか答えることができず、図書室から退室する。

……僕はこの惨劇で失った、
一人の戦友も――――。
一つの誇りも――――。
一度の誓いも――――。
全て失ったように感じた。だからこそ、僕は決意した。
犠牲者の弔いか、死んだ戦友の為か、あの男の子の為か、……理由は色々ある。そして、いつも通り平城学館に来て、いろは学長に相談をしてもらった。
「どうしたん、真希ちゃん？急に相談なんて……。」
いろは学長は優しく微笑みながら、聞いてくれた。その声が僕を不思議なほど落ち着かせてくれていた。
「学長、……お話が、紫様に連絡したいのですが。」
そして、僕は紫様と出会い、ノロを受け入れることにした。荒魂となっても悔いは無い、それ相応の事をしてきたのだから。
理由は色々ある……。
力無き正義はただの無力。
毒には、毒を。
力でなければ守れないものがある。
そして、何時かこの実験が人とノロを分離することが出来る技術の礎となればと思いながら。……ああいった子供達が救われる場所が有ります様にと願いながら、僕は親衛隊に入隊し、ノロを受け入れた。
その後の僕は、親衛隊の戦友に恵まれ、親衛隊の誇りを得て、新しい誓いを持てた。

ここは、残忍で理不尽な世界――――。でも、僕はそこで今も戦い続けている。

それぞれの刀使

その昔、一人の刀使沢田　加矢がいた。しかし、この少女は運が悪かった。

何故なら、彼女は優秀な刀使であるという評価を受けたが故に、折神家主導の荒魂殲滅作戦の前衛の戦闘員として、真希の部隊に配属されてしまったこと。

そして、荒魂との戦闘で友人が目の前で死亡、別の戦闘でもう一人の友人は五体満足で帰ることが出来ず数日後に自殺、同じく刀使となった自慢の妹は戦闘のストレスで薬に手を出し、更正施設送りとなったことがあった。

「……みんな、どうなるんだろう。」

それらを見たり、聞いたりした少女の心は次第に〝心の病〟に蝕ばまれ、追い詰められていった。……それ故か、少女は数人の仲間の誘いに乗り、本部への出向前に脱走する。

黒髪ロングの子、和葉。脱走する理由は家に帰りたい。

サイドテールが特徴の佳奈芽。脱走する理由はイジメが辛いから。

その二人と共に少女は、当てのない逃避行をした。しかし、御刀を持ったままなのは、刀使との戦闘に備えてだがその選択が少女達を追い詰めていた。そして、何時になっても顔を出さない和葉、佳奈芽、加矢の三名のことを不審に思った刀剣類管理局本部は、宿舎に置かれているスペクトラムファインダーと無断欠席が長く続いていることから、荒魂討伐に向かったのではなく、脱走か何らかの事件に巻き込まれたと判断し、刀剣類管理局本部は刀使三名の捜索部隊を編成し、追撃に当たらせた。御刀を持っていることから、半狂乱となって襲い掛かってくることも考えられるため、状況によっては死傷も止む無しという命令を捜索部隊が受けていることを脱走した少女達は知らなかった（これは、強盗といった犯罪による民間への二次被害を防ぐためでもある。）。

「コンビニ開いてて良かったね。」

そんなことになっているのに気付かない少女達は、今は呑気にコン

ビニ食を食べていた。
「パーカーとか有って良かったよね。」
少女達三人は御刀をゴルフバックの中に隠し、パーカー等を羽織って変装していた。
「ねえ、これからどうするの？」
「……そうだね、自由なんだからもっと、もっと楽しもうよ。世の中は穢れを無くそうと必死に頑張っているんだから。」
佳奈芽の発言に加矢は気楽に答える。もっとも、この発言は先が見えない自分の気を紛らわすために言った言葉だった。
「…簡単に言うよな、加矢は……。」
和葉は笑って、加矢の発言に苦言を呈す。
「あーもー、和葉君はどうしてそんなことを言うかね。」
加矢も笑って、おちゃらけたことを言って、場を和ませようとした。
この少女達二人は加矢にとって今はもう数少ない友人であり、腕の立つ刀使でかなり強い。そして、加矢自身もかつては御前試合に出場したことがある刀使の一人でもある。その三人が力を合わせて行けば、どんな刀使が来ても大丈夫だと思っていた。
「頑張って、逃げよう。お母さん達のところへ行こう。」
そして、少女達は捕まれば、三人とも敵前逃亡で処刑されると思っていたため、伍箇伝にも刀剣類管理局本部にも帰る気は無かった。実際は、そんなことは無いのだが……。
そして、少女達は知らない、既に捜索隊は編成され、実家と友人知人の家から関わりのある場所は徹底的に捜索され、監視されていることに。
「そうだね、そこまで行ければ安全だよね。」
少女達は親の所へ行けば、どうにかなるだろうと楽観的に思っていた、そう思わなければならなかったとも言えるが……。
「そう言えば、和葉ってまた胸大きくなったね。」
佳奈芽は和葉に、突然そんな話をする。
「…何の話かと思えば。」
「ほらぁ、やっぱり男の人はさ、胸が大きい方が良いのかなとか、思う

じゃん。私、小さいし……。」
「…知らないよそんなこと、男じゃないんだし、おまえは馬鹿か。」
「あ～も～、バカって言った、バカって言った方がバカなのに。…しょうがない、揉んで確認するかぁ。」
手をワキワキさせながら、和葉に近付く佳奈芽。
「お前、ちょっと、近付くなって！」
「へへ～ん、良いじゃん、良いじゃん。ちょっとぐらいさぁ。」
ワーキャー言いながら、加矢の周りを回ったりして、和葉と佳奈芽は騒いでいた。特に意味も無いことは、この三人には理解していた。しかし、騒がなければ平静で居られなかったのだ、やっと手にした自由と青春、この世界にはそれが詰まっていると思わないと、精神が保てなかった。
「……全く、騒がしいんだから……。」
加矢は和葉と佳奈芽が騒がしくしているのを見て、微笑ましく思い、この光景が何時までも続けばと願っていた。

カプセルホテルで朝を迎えた三人は、喫茶店に寄り。
「あの先輩、あの子と付き合っているでしょ？」
「いやいや、佳奈芽さんよぉお前バカだろ、バカだろ、私達は女学院出身だぜ？そんな訳無いって。」
「え～～、でもさぁ、加矢はどう思う？」
「まあ、そう言った話は他にも聞いたことあるけど。」
「はあ？マジで？…そんなことあるもんだね。」
「だから言ったじゃん、そう言うのがあるんだよ。」
「お前なに？そういうの好きなの？ちょっと離れてくんね？」
「あ～～、ヒッドイ、私はさ、こういう話は喫茶店での定番だと思うんだけど。」
「百合の話でそんなんある訳無いだろ。作るなよ。」
「違うよ、恋バナだよ。」
「でもさ、どんな男なら良いのよ？」
加矢の疑問に和葉と佳奈芽は……。

「あ～～、そう言えば。」
「どんなんが良いんだろうねぇ。」
逃走経路とか話し合わず、状況に合わない話を長いこと話していた。現実を忘れられるように。
その後は……。
「あ～～、このクマさんのぬいぐるみ、和葉に似てなくない？」
「……なんでだよ、私は人間なんだから似てるわけないだろ。」
「え～～、絶対似てるよ。」
「確かに。」
「はぁ？加矢まで!!」
ショッピングモールで見かけたクマのぬいぐるみを話の話題にして盛り上がったり。
「うおおお、敵つえぇぇぇ。」
「和葉ちゃんファイト！」
「……私、クレーンやっているね。」
「おおう、頑張って来いよ。」
（クレーンで何を頑張れば？）
ゲームセンターで和葉と佳奈芽は対戦ゲームで盛り上がり、加矢はクレーンをしていた。
「はぁ～～、緊張したぁ。」
「案外、バレないもんだね。」
「……良いのかな、こんなことして。…結構、楽しかったけど。」
「つっても、金無くなると困るのアタシ等だし……。」
「そーだよ、そーだよ、腹が減ったらとか言うじゃん。」
「まあ、そうだね。」
数軒のコンビニを回り悪戯小僧の気持ちになって、食料を万引きしていた。……自分達がどれ程のことをしているか気付かず。
そして、少女達なりに自由と青春が詰まっている世界を充分に楽しんでいた。

だが、ガラスの靴の魔法が解け、一気に現実へと引き戻される。
山の中で寝袋を使って野宿しようとしたら、その山中にて自分達を追撃してきた部隊に見つかってしまい、戦闘が始まってしまう。
だが、正確には戦闘というより、一方的な暴力であった。
捜索部隊の分隊長でもあり、強大な刀使の一人でもあるが、綾小路の制服を着用し黒色のベレー帽に灰色のトレンチコート、黒のジャングルブーツを装着しているという警察組織の一員としてはかなり問題の有る格好をしている織田　ソフィアによって、三人は打ち倒されていた。
ソフィアの副官的ポジションにいる綾小路武芸学舎出身の山崎穂積は、ソフィアの戦い方を思い出していた。狂戦士、たった一言で表現するならそれが最も相応しかった。
迅移を使った突きで写シを張っていない刀使の一人加矢を突き刺すという不意打ちで、加矢を戦闘不能にする。もう一人の刀使、佳奈芽は応戦するが、鳩尾に膝蹴りを受けた後、首を絞められ、御刀で深く刺されたまま写シを解除してしまったため、重傷を負い、そのあとはゴミのように投げ捨てられたため、佳奈芽も戦闘不能になる。最後の一人和葉は勝ち目が無いことを悟り、降伏の道を選ぶ。
「……抵抗もせずに、待つというのか……。」
ソフィアは静かにそう告げると、和葉は涙を流しながら頷く。
「だが、私は〝獣〟を求めている。……〝被食者〟に用は無い。」
それだけ言うと、ソフィアは和葉の首を刎ねてしまった。そこには、赤い血を撒き散らした和葉とつまらなそうにしているソフィアが居た。
「隊長、これは問題に……。」
綾小路の刀使佐織と美咲が抗議するが、反論は許さぬということなのか、ソフィアを心酔する部下と穂積が峰打ちで佐織と美咲を倒し、御刀を奪い取り拘束する。
「隊長、どうしますか?」
「……刀使の誇りとかを抱いている者は要らん、殺れ。」

意識が朦朧としていたが、その会話だけ聞こえていた加矢は自分の耳を疑った。仲間同士で殺しあっていることに……。

「ねぇ隊長、私にその人達をください。」

「……いいだろう、お前は〝獣〟を育てるのが上手いからな。……好きに使え。」

ソフィアに付き従う刀使大村　静はそう言われると早速、さっき捕えたばかりの二人の綾小路の刀使の中で気の弱そうな方の美咲に近付く。

「……ねえ、咲紀、お願いがあるの。」

「……違う、私は美咲っていう名前が……。」

「違うわ、貴女の本当の名前、姿、素晴らしさ、…どれを取っても分かってくれないし、知ろうとしないわ。……こいつらにはね。」

静は美咲にそう微笑みながら最後は冷たい言葉で言って加矢、佳奈芽、佐織の三人を指差していた。そして、名前を使ってさりげなく〝自分自身〟といったモノを否定する。

「それと、咲紀、貴女に協力して貰いたいことがあるの?……テレビやゲームでもやっているような物だから安心して。」

「えっ?」

静はそう言って、美咲を引き込む。

「死にかけの女二人と、さっき捕えたばかりの使えない女、どっちが死ねば良いと思う?」

元々、この三人は始末するのだが、美咲にはそれを伝えない。伝えると罪の意識を植え付けることができないから。

「!?」

「咲紀、貴女の協力が必要なの。私だけじゃ決められないから。」

「そ…そんなの決められない!」

「そう、おいで咲紀、一人じゃ辛いだろうから私も手伝ってあげる。」

静は美咲を立ち上がらせると、咲紀の拘束を解き、自分の御刀を持たせ、背後から両手を掴み固定し、拘束された佐織の前へと進んだ。

そうして、

「せぇーの。」

背中から八幡力で押された美咲は拘束されている佐織を刺してしまう。それを恨めしい目つきでこちらを見る佐織に恐れをなしたのか、美咲は必死に何度も何度も刺していた。

「あーっ、そこの二人、死にかけなのに勝手に見ちゃダメよ。」

静にそう言われ、美咲は奇声を上げながら、佳奈芽の方へ向かい、型も何も無くただ振り下ろすだけの滅多切りに防御すら出来ずに斬られる、最初は斬られる度にビクン、ビクンと痙攣していたが、やがてピクリとも動かなくなっていた。そして、加矢の方へ向かうと、加矢を刺していた。

加矢はこのとき思った、この血だらけの美咲の鬼の様な形相（ぎょうそう）の姿を見て人の姿をした荒魂だと感じてしまった。それを誰に伝えることも無く死亡する。

「わぁーー、凄いわ！美咲、一人で三人も殺しちゃうなんて、凄い、凄いわ!!」

静は大喜びで咲紀とは呼ばず、本来の美咲の名前を呼んで、拍手喝采する。

「ちっ……違う、私じゃない。これ……これは、これはそう、貴女が……。」

「えっ、私もう手を離してるけど。」

美咲はそう抗議するが、静は何時の間にか手を離しており両手をヒラヒラさせていた。そして、よく見ると御刀を掴んでいるのは美咲の血塗れの両手だけだった。こうして、美咲は〝自分は重罪を犯し、もう戻れない。〟というのを植え付けられる。

「んもう、照れなくていいのに、私達は強い子が大好きだから、何時でも歓迎するわよ。だから、こいつらなんかよりも今の貴女の方がよっぽど素敵よ美咲。」

その言葉のあとに、周りから笑みと拍手を送られた美咲は呆然としていた。そして、美咲は何故か自分は正しいことをしている様に思ってしまった。

「…ありがとう……皆……ありがとう……、美咲は頑張りました。」

そして、美咲は、周りの人達に感謝の言葉を述べていた。……死ん

だ目をしながら。
　こうして、自由と青春を求めた三人の少女達はその代価として数多の罪を犯し、罰を受けることになった。しかし、それは正当な裁きではなく、冷酷な私刑そのものを受けることになった……。
　和葉は、捕食者を目の前にし、それに気付かず命を落とし。
　佳奈芽は、人を獣にするための生贄にされ、命を失い。
　加矢は、滅多刺しにされ絶命。最後には人も荒魂の様になることを知る。
　佐織は、誇りも矜持も全て踏み躙るために利用され、命の灯は消えた。
　この四人はこの場で等しく皆、人の手によって命を散らされ、踏み潰された。
　そして、一人残った美咲はソフィアを心酔する部下の一人となる……。

　そして、少し時は流れ――――。
「何故、犠牲がこんなに出た？」
　一人の年かさの私服警官がソフィアに問い詰める。
「…三人の抵抗が激しかったため、応戦しました。結果、脱走した刀使三名死亡、こちらは刀使一名死亡。」
「……そのようなこと聞いていない。もう少し穏便に「はっきり言いますが、刀使相手にあなた方の従来通りのやり方ではこちらは運が悪ければ全滅だ、忘れてはなりませんよ？ああいった者が化け物を日夜相手している事に。」……。」
　ソフィアは４つの死体袋を指差して私服警官にそう伝え、更に続ける。
「動機は不明ですが、最前線へと配置転換される直前に脱走する者なぞ幾らでも居るでしょう。何ら不自然なことはありません。それに、捕まれば死刑になると思っていたフシがありましたので。」

「…ならば、美咲さんに少しだけでも話を……。」
「彼女は先の戦闘で〝かわいがり〟をしてくれていた先輩を失ってしまったらしく、少し疲れていますので此方で解決致します。」
ソフィアは美咲は暗にＰＴＳＤであるということを仄めかし（このあと、精神科の方へは行かないが……。）、それを理由に面会拒絶し私服警官に入り込む余地を与えることなく、反論もさせずにいた。
「では、私はこれで。」
ソフィアはそう言って、手を振りながら事後処理を警官達に押し付け、ソフィア達は特別祭祀機動隊のトラックに向かって行った。
「あれ、何です？」
後輩の刑事がソフィアのことを尋ねる。
「…死神だよ、薄気味悪い死神。偉いさんの娘だか何だか知らねえが、あんな格好許すなよ。」
私服警官は不気味そうな目で睨みながら、そう答えるしかなかった。
しかし、私服警官は気付かない。ソフィアという少女の本当の姿を、ソフィア達はそのようなことをして着々とシンパと兵を集めていることに……。

刀剣類管理局本部執務室。
「それで、ご用件は？」
局長の紫はつまらなさそうに電話の相手織田防衛事務次官に用件を促す。
『いえ、ただ私の娘が……その危険な任務へ向かったということなので、その……。』
要は自分の大切な娘を危険な所へ送って欲しくないという内容であった。
「……分かりました。今後は〝本人が志願しなければ〟、そういった任務に就かないよう配慮します。」

『ああ、ありがとうございます。それを聞けて安心しました。今後とも良いお付き合いをお願いします。』

織田防衛事務次官はそれだけ言うと、電話を切った。

「……どちらからのお電話で？」

秘書の様に佇む夜見は、電話の相手を尋ねる。

「織田防衛事務次官からだ、自分の妾の娘がそんなに大切らしい。」

ああ、とだけ言うと、夜見は興味を無くしたかのようにいつも通りに前を向く。

「……そう言えば、隠し子とか結構居るな此処には。」

「隠すのにうってつけらしいですから、此処は……。」

隠すのにうってつけの理由は、伍箇伝は警察庁に属するため、ゴシップ記者が立ち入ることが難しいことから、隠し子を入れるのに適しているからという話がまことしやかにあるからである。

「神聖なる御刀に選ばれた若き勇者達が集いし場所の本当の姿は伏魔殿か……。」

何か中二病染みたことをまた言っているな、と思いながら職務に励もうと前向きに考える夜見であった。

「しかし解せぬ奴だ……、何を考えている？」

紫ことタギツヒメの言葉は小声であったため、誰も聞こえていなかった。

時は戻り、親衛隊と優の戦闘後、援軍として来た織田　ソフィアと大村　静の両名が南伊豆山中にある特別祭祀機動隊仮野営地まで来ていた。

「綾小路武芸学舎の援軍として織田　ソフィア、大村　静の刀使両名はただ今到着致しました。現場指揮官の獅童　真希隊長にお目通りを。」

こうして、少女達の運命は激しく動くことになる。

可奈美達は石廊崎まで6キロという所まで進んでおり、其処で可奈美と優は話していた。
「ねえ、優ちゃん聞いてくれる？」
「んっ、何？」
可奈美は優と同じ目線になるように屈んで、抱擁していた。
「……あんまり、人を殺しちゃうのはダメだよ。お姉ちゃん悲しむから。約束、約束だよ。」
「んっ、分かった。」
可奈美にそう言われ、優は頷いていた。
初めからこうすれば良かったのだ。…そうすれば、優は人殺しをしなくて済む。急いで強い刀使になる必要も無い、これで少しは剣術に打ち込めるかも知れない、可奈美はそう思い、少しだけ何かに救われたような気がした。
「……。」
姫和はこの光景が不気味に見えた。普通の人が見れば、美しい姉弟愛に見えるかも知れない。しかし、何処か壊れていて、儚げで、狂っているように感じた。そして、
「ねーっ。」
「わっ、」
「あっ、ねねちゃんだぁ。」
可奈美はいきなりねねが飛び込んできたことに驚くが、優は喜色満面であった。
「こいつが、居るということは……。」
そう言った姫和は辺りを見回すと、薫が居た。
「薫ちゃん、無事だったんだね！」
「……合流地点まで送る、行くぞ。」
薫はそれだけ言うと、石廊崎方面へと歩く。しかし、ねねは反対方向へ行き、優を引っ張って何処かへ連れて行きたいようだった。

「ねね！」
　薫がそう言うと、ねねはしょんぼりとしていた。
「お前、もう一人はどうした？」
「エレンちゃんはどこ？」
「……。」
　薫はエレンが仮野営地に行ったことを可奈美達に伝える。それを聞いた可奈美はエレンの救出に行くことを強く主張したことにより、薫もそれに折れる形で可奈美達と一緒に仮野営地に向かうことにした。

　南伊豆、特別祭祀機動隊仮野営地にて、真希は増援として来たソフィア達と話していた。
「綾小路からの増援は刀使二名のみか……。」
「何か不満でも？」
「いや、……もう少し多くの人数が来ると思っていたが、現在の綾小路は人手不足か？」
　少し機嫌の悪い真希は、奇抜なコスプレしている刀使と能力は平凡がいいところの刀使が来た事に不満を隠さずに尋ねる。
「ご心配無く、突然緊急を要すると言われたので、たまたま近くに居た私達だけが増援として向かっただけのことです。」
　その答えに真希は色々と聞きたいことはあるが、特別刀剣類管理局の仮本部としても機能する綾小路武芸学舎との関係が悪化するのは避けたいため、詰問するのは止める事にする。
「……まあいい、君の武勲はかねがね聞いている。活躍を期待している。」
「光栄です。」
　ソフィアはそれだけ言うと、静を付き従えて、さっさと親衛隊が居るテントから離れて行った。

「……隊長、歓迎されてませんねぇ～、睨まれてましたよ。」
　満面の笑みをした静は茶化したことをソフィアに言うが、そう言われた本人は動じることなく微笑みながら返答する。
「別に構わない、多分お前がスタンフォード大学の実験みたいにやり過ぎたせいだろう。」
「え～、違いますよぉ、あれはただの〝しつけ〟ですよ。〝しつけ〟、大人も子供もそれに従えば素直でとっても良い子になるんですからぁ。」
　静は自分が行っている拷問を〝しつけ〟と称していた。
「そんでもって、この〝しつけ〟は立派な刀使だったお母さんとお父さんが最初に教えてくれた物ですよ?…まあ、3回までは失敗しか無かったですけどねぇ……。」
「やっぱりお前じゃないのか?」
「え～～、隊長も斬りまくっているのに?それに、おとうさんじゃないのに、おとうさんって呼んでるじゃないですか?」
「あまり外でそう言うことは言わないでくれ。あと、〝しつけ〟のこともあまり表立って言うな。」
「何でです?」
「色々あるのさ、……色々な。」
　そのとき、静は一瞬ソフィアが何かに怒っているように感じた。
「…分かりました。けど、私のやっている事を悪く言わないで下さいね。私、悪い事してませんから。」
「ああ、分かった。お互い気を付けよう。」
　このとき、少女達はまるで長年付き添っていた友人と楽しく談笑しているようだった。

　その後、寿々花と真希は仮野営地に来たエレンと会っていた。
「長船女学園高等部1年、古波蔵　エレン。」
「……御前試合に出場していたな。」
「あの～そろそろ手降ろしてもいいデスか?あなた達と戦う気なんて

これっぽっちもありませんから。」
　そして、折神家の不正の証拠を手に入れるために潜入することにしたエレンは、堂々と正面から入って行き、真希と寿々花に詰問を受けていた。
「……そうですか、まず一つ聞きたいことがあるのですがよろしいですか？」
「ハイ、良いデスヨ。」
「こんな所で何をしていた？」
　真希は鋭い目付きでエレンを睨みながら、このようなことを聞いてきた。
「いや～試合の結果がアレだったじゃないデスカ～。このまま手ぶらで帰ったら学長に大目玉くらっちゃうカナーと思いまして、紫様襲撃犯をとっ捕まえて手柄にしようと思ったんデスヨ。」
「へぇ、…で南伊豆に来たと？」
　寿々花は違って、穏やかな笑みを浮かべながらエレンに聞いてきた。
「バケーションしていたら、何か山で爆発があったじゃないデスカ？それで紫様襲撃犯が暴れているんじゃないかと思いまシテ、そうして探索していたら何か野営地が有ったのでもしかしたら襲撃犯を捕まえるために設営した仮野営地なのかなと思いまシテ、何かお手伝いをして手柄上げれば学長も許してくれるカナー？とか思ったんデスヨ。」
「で、今は一人なんですの？」
「ハイ、今は一人デス。」
「……まあ、良いでしょう。一応、御刀と携帯を預からせて頂きますわね。」
「え～っと、何でデス？」
　エレンは御刀と携帯を没収する理由を寿々花に聞いていた。真っ当な理由も無く没収される様なことが有れば、口八丁で上手く言いくるめようと思ったが、
「貴女のお友達の益子　薫さんが、昨夜うちの皐月　夜見に御刀を向

けたからですわ。」
　あまりの衝撃の発言にエレンは思わず「えっ？」っと言ってしまった。
「まあ、貴女がどうやって此処まで来たか、お友達の益子　薫さんについて色々とお訊ねしたいことが有るので、御刀と携帯を預からせて貰ったあと、テントの中でゆっくりと話し合いましょうか？」
　エレンは表情も変えず、頭の中でどうするべきか必死に考えていた。今、此処で逃げ出せば親衛隊に追われ確実に捕まるだろう。しかし、此処で御刀を失い、長時間拘束されれば、戦闘はおろか逃走もままならないのは避けたいところでもある。選択肢は二つあり一つしか選べない。そして、エレンは。
「分かりましたー。協力シマス。」
　笑顔で後者を選択した。
「ご協力感謝致しますわ。」
　そして、寿々花も笑顔で応え、エレンの御刀と携帯を没収したあと、近くに居たＳＴＴの隊員に真希と話があるため、遅れるからエレンをテントの中へ案内するように伝え、寿々花は真希を連れてエレンから離れて行った。

「……僕に尋問するな？どういうつもりだ。」
「そのままの意味ですわ、冷静ですらない貴女とあの娘を引き合わせたら血が流れますもの。」
　寿々花は、頭に血が上っている真希がエレンを尋問すれば、流血沙汰になることは避けられないうえ、完落ちさせるのは困難になると思い、真希は尋問から外れるべきと言っていた。
「……紫様から頂いた指揮権を蔑ろにする積もりか？」
「真希さんともあろうお方が地位を盾にするとは。」
　真希と寿々花の間で行われる御刀を使わない攻防、一瞬訪れる静寂が時を進めて行き。そして、
「……はぁ、前回の戦いで少し頭に血を上せていたようだ。……すま

ないが寿々花、あの金髪女の面倒は任せる。」
　軍配は寿々花に上がり、真希はエレンの尋問を寿々花の担当とすることにし、自身は森の方へと向かって行った。頭を冷やしに行ったのだろう、長い付き合いの寿々花は何となくだがそれを察し、何も言わず見送っていった。
「少々、意地悪が過ぎたかしら。…冷静さを欠いているのはわたくしも同じですのに。でもまぁ、貴女が舞草の仲間だとしたらそれなりの代償を支払ってもらわねばなりませんね、古波蔵さん。貴女方は最大の過ちを犯したのですから。」
　寿々花もまた、真希と同じく舞草は〝何の罪も無い子供を改造して、戦闘員に仕立てている〟と思い込んでいたからこそ、このようなことを言っていた。……赤い目をさせながら。
　そうして、寿々花は既にコンビニ弁当を食べ終わっていたエレンの居るテントに入り、早速尋問を開始していた。
「ごちそうさまデシタ～。」
「お口に合いまして？」
「コンビニのお弁当はお漬物も一緒にチンするのが玉に瑕デスネ～。」
「そう？私、あれはあれで嫌いではありませんけど？」
「変わった人デスネ～。」
　まずは、寿々花は警戒されないよう、高圧的な態度で接さず、和やかな雰囲気で進めようとしていた。
「良く言われますわ。…まずは、長船女学園高等部１年、古波蔵　エレンで間違いありませんわね？」
「ＹＥＳ！」
「よろしい発音で、ではもう一つ、この事情聴取の内容は貴女がどうやって此処まで来たか、お友達の益子　薫さんについて色々とお訊ねしたいことが有る。…ご理解出来ていますわね？」
「ＹＥＳ！」
「あと、この事情聴取に不服は有りますか？」
「問題ありマセン。」
　寿々花はまず、相手の名前と経歴に間違いは無いか、この尋問がど

のようなものであるか、尋問の意図を理解したか、意義や不服の申し立てはないか、などの説明をしていた。目的は緊張状態をほぐし、信頼関係を構築するためである。

「…山で爆発があったと仰っていたでしょう?実はアレ未登録の所属不明のS装備のコンテナですの、音は一回だけでしたか?」

「う〜ん、だと思いマスけど……?」

エレンは正確なことは判らないと答え、はぐらかすことにした。理由は舞草が何人居るか解らせないためであるが。

「……なるほど、では益子　薫さんとはどういう関係で?皐月　夜見に御刀を向けた理由は何かご存知ですか?」

「薫とはベストパートナーですケド、何かの間違いじゃないデスカ?薫は理由も無くそんなことしません。」

「へえ、何か思い当たることが有るんですの?」

「薫は特撮ヒーローものが好きで、刀使になりマシタ。」

「へえ、でも今はその友人を放ったらかして、何をしているんですの?」

「えーっと、面倒くさがりなところもあるんで先に帰っちゃったと思っていたんですケド。違ったみたいデスネ。」

「うちの夜見に御刀を向けているとは思いも寄らなかったでしょう?」

「ソウデスネー。」

しかし、エレンはヤレヤレとした表情でこう言っていたが、内心はエレンも意外だったのだ、何故そのようなことになったのか見当もつかなかった。自分が疑われていて、カマをかけているのでは無いのかとも思ったが。

「それで、貴女一人で山の中に向かおうとしましたの?」

「いやー、まあほらぁ、手柄上げとかないと、うちの学長って結構怖いんで。」、

「フフフ……失礼、なるほど、それはお気の毒に。」

ぼそぼそと寿々花に理由を話すエレンに、寿々花は少し〝怖い学長〟のワードで何故か高津学長のことを連想してしまった自分に笑っ

てしまった。
「あと、古波蔵ってどこかで聞いた気がしていましたの、で、先程思い出しましたわ。ＤＡＡＰＡから出向しているＳ装備開発チームの主任技術者がそんな名前だったと。確か…ジャクリン・アン古波蔵でしたかしら？」
「ジャクリーンならママデス！ついでに言っておくとママと一緒に働いている古波蔵キミタケがパパデスよ！」
「そう、確かそのジャクリーンさんのお父様が天才科学者リチャード・フリードマンでしたかしら？確か、ノロの軍事利用の第一人者にしてＳ装備開発の先駆けとなった人だった筈でしたわよね？」
「ＹＥＳ！けど、グランパだけデハ……。」
　エレンは流石にフリードマン一人だけでは、無登録の機体を射出することはできないと言おうとしたが、
「ああ、存じ上げています。いくら開発責任者とはいえ無登録の機体を射出することはできませんわ。Ｓ装備の開発・生産は全て折神家の管理の下に行われてますもの。ただ、５年前自らが創業した技術開発企業を売却後忽然と姿を消されたらしいですわね？」
「ＹＥＳ！」
「そのフリードマン博士が日本に入国した形跡があるのをご存じかしら？そして舞草と接触していたら……。」
「藻草？お灸デスか？」
　エレンは寿々花のことを話が分かる人だと思い、つい洒落を言ってしまう。そして寿々花は、エレンの様子を見て自分に気を許していると判断し、一気に攻勢に出た。
「そして、舞草に拉致されて、ノロの軍事利用、延いては人体実験のために使われていたとしていたら、貴女はどう思います？」
　エレンはつい驚愕の表情をしてしまった。何故、そんな話になっているのか？全く理解出来なかった。
「ああ、何故こんな話をしているかと言いますと、昨夜舞草の構成員と思われる人とばったり出会って、真希さんと共に交戦したんですが、…どうもノロで相当強化されているらしいんですの。」

「えっ、ちょっ、ちょっと待ってクダサイ。グランパがそんなこと……。」

「ええ、心中は察しますが、あくまで可能性の話です。どちらにせよ、フリードマン博士は危険な状況であることは間違い無いと言えますので薫さんの確保にご協力をと……。」

「勝手な事ばかり言わないでクダサイ！グランパは……そんなことしてイマセン。」

エレンはついカッっとなり、座っていた席から立ち上がるが、乗せられてはマズイと判断し、声を抑えた。

「……ええ、分かっています。お辛いでしょうが、フリードマン博士と薫さんの確保に協力を……。此処に暫く居てもよろしいのですし、何か思い出したらご連絡を。」

寿々花は微笑みながらそう言って退室したが、エレンは静かに席に着くとこう思っていた。これでは、此処に御刀も携帯も無い状態で薫とフリードマンが見つかるまで、何時までも留まらなければならない。

（早く見つけて帰らないとマズイですネ。）

エレンは今、籠の中の鳥のような気分であった……。

寿々花はエレンのことと目撃情報を報告しに真希の所へ向かったが、

「……限度というものを知らないんですの？」

「何の用だ？」

辺り一面、穴が空いていたり、樹木が倒れていたりしていた。そんな場面に出くわせばそんなことを言いたくなると寿々花は思ったが、

「未確認ですが、南伊豆町の山中で目撃した情報が入りましたわ。制服のまま山の中を走り回る女子中学生と子供はそうはいないと思いますけど…。」

先程入った情報を真希に伝え、指示を仰いでいた。

「そうか。」

「あれ、興味ないんですの？」
「偽情報かも知れん、正確な情報かどうか調べてくれ。あと、金髪女はどうだった？」
「ほぼクロだと思っていますわ、単独で山岳装備も無しに山に登ろうとしていたり、舞草のことを藻草と言うぐらい知らないのに、何か知っているようなことを仰ってましたし。」
　寿々花はエレンのことをクロだと思っていた。前述の通り山岳装備も無いのはそうだが、フリードマンの安否を気にする発言をしなかったことが妙だと思ったのだ。
「それで、偽情報だと思う根拠は？」
「金髪女が捕まってすぐにそんな情報が入る、出来すぎだ。…もし、匿名のタレコミが警察じゃなく、此方に連絡して来たのなら間違い無いだろう。」
「ええ、刀剣類管理局に匿名のタレコミだそうですわ。」
「……だとしたら、ここは動かないほうが良いな。本部に連絡して金髪女を送って貰おう。あの女狐、証拠が無いからどうしようもない。」
「……どうせでしたら、誘いに乗るのが良いのでは？」
「？…どういうことだ？」
「少し、お耳を……。」
　寿々花は真希に近付き、耳打ちしていた……。

「……二班、三班とともに私と寿々花、増援の刀使を連れて目撃情報のあった場所へ向かうから、古波蔵　エレンのことを頼む。」
「了解です。」
　エレンの居るテント内に移動していた真希は一人のＳＴＴの隊員にそう告げると、退室していった。
「そういう訳だ、この嬢ちゃんは俺一人で護衛すっからお前さん等は休憩して良いぞ。」
「えっ、良いのか一人だけで、二人居た方が良くないか？」
「良いよ、何か逃亡中の刀使はやったらと腕が立つらしくてな、人員が

要るらしいから結構人が割かれるみたいだぜ、後々大変だから今の内に休んどけってさ。」
「おお、そうなのか、じゃ悪いけど頼むわ。」
エレンはチャンスだと思った。機動隊員の数が少なく、刀使の数も夜見一人であれば潜入活動しやすいと思ったからだ。
（……なら、行動開始と行きましょうか。）
まずは、この目の前に居る見張りの機動隊員を一人黙らせることから始めることにしたため、席を立つ。
「あっ、あの～～デスネ。」
「んっ、何だ？」
「そ、そのぉお花を摘みたいなぁ～ナンテ。」
頬を赤らめたエレンを見た機動隊員は、
「あっ、あぁ、来たばっかりだから知らんよな、場所まで案内するから付いて来てくれ。」
バツの悪そうな顔をした機動隊員は後に続くよう促すが、エレンに背を向けた瞬間、その機動隊員は倒れてしまった。
「ふっふっふーん。ご愁傷様、刀使が得意なのは剣だけとは限りマセンヨ。」
その後は、警備の数が少なかったので、難なく越前康継と携帯を取り戻すと、携帯で夜見を監視していた。
「なるほど、薫が御刀を抜いた理由はこれデスカ。」
夜見がノロを注入しているところを見て、薫が御刀を向けた理由はこういうことだったのかと理解したエレンはこの映像とノロのアンプルを手に入れればあとは撤収するだけと思い、夜見が居たテント内に侵入し、ノロのアンプルを手に入れようとするが。
「！」
何かの気配を感じたエレンは後ろを振り向きながら一閃。昨夜襲ってきた蛾のような荒魂を斬っていた。
「人が悪いデスネ～。気付いていたならそういってクダサイ。」
「紫様に仇なす輩にそのような配慮の必要を認めません。」
「じゃあこっちも遠慮はいりませんね？手先は器用なんデスヨ～。」

そう言って、エレンは夜見と対峙し、いつの間に取ったのかノロのアンプルを一つ見せ、器用にも軽く手首を捻らせるとノロのアンプルを消したように見せていた。
「……では、こちらも遠慮はいりませんね、真希さん?」
今、何て言った?ここに居ないはずの真希の名前を呼んだことにエレンは驚愕する。
「ああ、遠慮はいらんぞ、狐が尻尾を出してくれたからな。」
「彼女の場合は狸の方がお似合いと思いますけど?」
御刀を構えたまま後ろを振り向くと、そこには居ないはずの既に御刀を抜いている寿々花と真希が居た。
「……なっ、ナンデ?」
「何でいるのかって言う顔だな?当てが外れたな、御刀さえ持っていれば刀使一人どうということはないと思っていたか。」
「何時から疑っていたンデ?」
「最初からだよ、最初から、自分の女の勘でこいつは怪しいと思っただけだ。」
実際は、山岳装備を持たずに単独で行こうとしたことに疑問を抱いただけだが。
「あなたが言うと、説得力有りませんネェ~。」
そうは知らないエレンは女っ気の無い真希に挑発目的で言うが、
「そうだろ?そんなこと言う奴からチャチな罠に引っ掛かる。」
真希に挑発し返された。
「……ハッ!」
エレンはこの場から脱するため、夜見に斬りかかるが防がれてしまい、代わりに真希の突きと袈裟斬りを受け、そして何とか踏ん張り写シを再度張るが、夜見の足払いの斬撃でバランス崩され、最後に寿々花の突き技を受け、ダウンしてしまう。
「グッ……。」
「ご愁傷様、機動隊員は全員カカシだ。殴られたら気絶するように伝えている。で、お前がホイホイ此処に来た所を捕えるって寸法だったんだが、…聞こえてるか?」

エレンはまどろみの中で、真希のそのような言葉を聞きながら、気を失っていった。
「で、撮れたか？」
「ええ、バッチリ。」
真希の問いに寿々花は隠しカメラを取り出し見せた。エレンが親衛隊に斬りかかったという証拠を得るために。
「それが無いと色々と面倒になるからな、大事にしとけよ？」
「で、この狸が持っているカメラと御刀はどうします？」
「カメラは破壊しておけ、御刀は…事情聴取に使えるからこっちで管理して置こう。」
こうして、エレンは親衛隊の手に落ちてしまった。

「やべぇな、やべぇ。」
遠くから仮野営地を望遠鏡で監視していた薫はそうぼやく。
「？……何が？」
可奈美は薫のぼやきに疑問の声を上げる。
「エレンが捕まったかも知んねぇ。」
「どうして？」
「…車両が俺のタレコんだ場所に行かずに直ぐ帰りやがった。」
「……ということは。」
「ああ、確実にエレンは今危険な場所にいる。」
薫の計画では〝制服のまま山の中を走り回る女子中学生と子供を見た〟という匿名のタレコミで仮野営地に居る部隊を分散したあと、エレンを救出しようとしたが、車両部隊が目撃情報のところへ行かず、直ぐ帰って来たのである。
「どっ、どうするの？このままじゃ！」
「慌てるな、……あの数じゃ無理だ。…少し、頼りになる援軍を呼ぶから待ってくれ。」
刀使が五名、ＳＴＴの隊員が大勢居るところに、いくら腕が立つとは言え刀使が三名で特攻すれば、袋叩きにされるのは目に見えてい

た。

「おい、そいつらは誰だ?」

姫和は誰が来るのか問い質していた。

「お前等が良く知っている奴等だよ。」

薫はそう言って、無線機で連絡を取っていた。

引き金

援軍を待つこと数分、バラクラバを被り、野戦服とチェストリグ、銃を所持し完全武装した男達が現れ、可奈美と姫和は御刀を構える。
「待て待て、俺達だよ。」
その男達は、ロークとトーマスの二人と他四名であった。
「えっと、ロークとトーマスさんですよね？何しに来たんですか？」
「まあ、エレンの救助作戦の援軍に来たと言えば解るかな。」
「……なあ、援軍はこれだけか？」
見たところ六名しか居ないことに、憮然とした顔で薫を睨む姫和。
「仕方ねえだろ、一線級の部隊は直ぐこれねぇんだし、どうにかするしかねぇよ。」
「……まあ、言いたいことは色々あるだろうが、エレンは幹部の娘でな助けにゃならん、可奈美と姫和、薫はこの黒いコートを着てくれ、優はちょっとこっち来てくれ。」
トーマスは手招きして優を呼ぶ。
「うん、分かった。」
「ちょっ、ちょっと、優ちゃんに何をさせる気ですか？」
トーマスが、優を戦闘に参加させようとしているのではないかと思い、抗議する可奈美。しかし、
「……可奈美、少し話しがある。」
「？」
トーマスは可奈美に少し耳打ちすると、可奈美は一瞬で青ざめた顔になり、呆然としていた。それに気付いた姫和は可奈美に近寄る。
「おい、どうした可奈美、良いのか？」
「……どうすることも出来ないよ、あまり反対すると、優ちゃんの正体が皆にバレちゃう。」
可奈美はトーマスに協力しなければ弟の正体をバラすと脅され、従わざるを得なかった。そして、可奈美はこのとき思った、優の正体を隠すためには舞草に協力し紫を倒さなければならないことに。

そうして、可奈美と姫和、薫の三人は黒いコートにフードを被ったあと、御刀も刀身と柄といった部位意外は灰色のテープを巻いて変装をしていた。

「なあローク。爺さんはあの子をどうする気だ?」

薫は、まだ優と話し合っているトーマスは何をしているのか、ロークに訊ねていた。

「……トーマスは、親衛隊と特別機動隊を出し抜いてエレンの居る場所を見つけて欲しいって、言っているんだと思うよ。」

「……つまり、あいつに偵察させるってことか?」

「まあね。」

「そうか、ねね、あいつの護衛を頼んだぞ。」

薫はねねに、捕まらないように優の護衛として付けようとしていた。それを聞いたねねは優の元に近寄って行った。

「あれ?ねねちゃんも一緒に行くんだ。」

優にそう言われ、「ねー。」と胸を張るねね。優はねねと一緒に行けることに喜んでいるようでもあった。

「…薫ちゃん、ありがとう。」

「別に、こっちこそ巻き込んで悪いしな。」

顔を綻ばせながら感謝の言葉を口にする可奈美とそれをぶっきらぼうに返す薫。

「薫こっち来てくれ。」

トーマスに呼ばれ、薫は何事かと思い向かう。

「優にこの制服を着せてやれ。」

そう言われ見てみると、一体何処から入手したのか鎌府女学院の制服を渡されていた。

「……おい爺、そんな趣味があんのか?」

「違う、敵地に行かせる以上、変装しなければならんからな。」

薫に疑いの目を向けられ、否定するトーマス。理由は他にもあるが……。

「何で俺なんだよ。」

「女物の服はどうすれば良いか分からん。だから、お前に頼んでい

る。」
　トーマスにそう言われた薫は9歳の子供に女装させるのは流石に気が引けるため、共犯もとい援軍を呼ぶことにした。
「…そうかよ、お～い、ヒンヌー娘手伝ってくれ。」
「おい、誰がヒンヌー娘だ!」
　薫にヒンヌー娘と言われ、怒りの声を上げる。
「いや、手伝って欲しいことがあってな、こいつをこの制服に着替えさせるのを手伝ってくれ。」
　薫が姫和を選んだ理由は、可奈美だと怒られそうな気がしたからである。
「なっ、何?!」
　アレ?何でこんな反応してんだコイツ、とか思ったが薫は特に気にしなかった。
「おお、そうだトーマス爺がやれって言うから困ってたんだ。」
「あ、ああ良いぞ。それくらいなら容易いことだ。」
　姫和はそう言うと、優の上着、ズボンを脱がせ、トランクスと白いYシャツ姿になった優の姿を見つめたあと、鎌府女学院の制服を着せることに成功した。そこには、小さい頃のサイドテールの無い可奈美に鎌府の制服を着せるとこういう姿だろうと思えるような格好をした優が居た。
「どうかな?似合う?」
「あっ、ああ、似合うぞ。」
　優は見せびらかせるように、スカートをフリフリさせて薫と姫和に見せていた。そのことに、姫和は何処か嬉しそうだったことに薫が気付かない訳が無かった。
(あっ、こいつそういう奴か。)
　そう思った薫はふざけることにした。
「いやいや、メイクも施さなきゃダメだろう。」
　そうして、どこから出してきたのかメイク道具を取り出し、優にメイクをした。
「口紅は濃い色は似合わねぇから、薄い色にして……目もパッチリに

アイメイクをして……肌もスキンケアしないとな。」
「おお、可愛らしく仕上げていくな。」
段々と可愛らしさが上がる優に感動していた姫和は、薫に賞賛の声を上げる。その言葉を受け、薫は俄然やる気になっていった。
「へっへっへっ、こういうことは好きだぜ俺。」
メイクが完成し、優は元々可愛らしい子であったが更に自分達の手で可愛らしく仕上がったと思ってしまった姫和と薫。
「凄いな、お前のことを尊敬するぞ。」
「へへ、照れ臭えや。」
姫和に賞賛され、少し嬉しそうにする薫。9歳の男の子を上手くメイクしたということに喜ぶべきことかと思うが……。
「だが、ツインテールにするのはどうだろうか、似合うと思うのだが？」
「何!?髪型を変えるということは考えてなかった。そうだな、顔も可奈美と似てるし似合うかも知れん、……お前、天才かっ!?」
「フッ、それ程でもない。」
早速、姫和は白いリボンでツインテールにして結んでいく。
「これでどうだ？」
「ああ、完璧だな。俺達って天才じゃね？」
「そうかも知れんな。」
互いに互いを賞賛し合う薫と姫和。このときばかりは凄く仲が良さそうであった。
「ねえねえ、似合う似合う？」
「ああ、すごく似合っているぞ。」
「お前の姉も大喜びだぜ、きっと。」
薫と姫和は好き勝手なことを言っては大喜びし、自分達は最高の仕事をしたと思い込んでいた。そして、誰かに背中を叩かれ現実に戻されるまでは――――。
「んっ？誰だ今良い……とこ……ろ……。」
「おい、どうしたヒヨ……ヨ……ン……。」
振り向くとそこには笑顔だが、恐ろしいオーラを放つ可奈美が居

た。
「ねえ、何しているのかな？」
「あっ、えっと……その。」
「いや、なんていうか……。」
　薫と姫和はとたんに居た堪れない気持ちになっていた。そんなことをしている場合では無いと思い出したからだが……。
　その後は、ロークの取り成しにより可奈美の怒りは収まり、優に施されたツインテールは無くなり、メイクは完全に落とすことになってしまった。

　とある野営テントの一室、真希と椅子に両手足を縛られたエレンが居た。
「ゲホッ！ゲホッ!!」
「……少しは何か思い出せたか？」
「……何の話なのかサッパリ。」
　エレンは真希に過激な〝尋問〟を受けていた。
「舞草は人と荒魂の融合の実験に成功したのか？」
「貴女方のようなことは一切していまセンガ？」
「嘘を吐くな！昨夜は荒魂が中にいる９歳の子供と出合ったぞ、それはどう説明する？」
　エレンの頭を掴み、顔を近付けさせた真希はそう恫喝する。
「……貴女達と一緒にしないでクダサイ。」
「まだ、そんなことを言うのか？…それはそうだ、お前達は刀使のあるべき姿だとか言っているが、本性は子供に荒魂を入れて兵隊にする過激なテロリストみたいな集団だからな。」
「……今の貴女達のことでは無クテ？」
　それを聞いた真希は、親衛隊の仲間を侮辱されたと思い、エレンに容赦なく殴りつける。
「黙れ、皆確固たる信念を持っている。…理解出来んだろうがな。」

真希はそれだけ言うと、医療用ステンレス容器から一本の注射針を取る。
「！……そ、それで何をするつもりデス？」
「安心しろ、メスカリンだ。」
そして、エレンは両手足を椅子に縛られているため、ろくな抵抗もできずにクスリを打たれてしまう。
「なっ、ナンデスカコレ……？」
「今さっき打ったやつは自白剤にも使われてた物でな、意識が朦朧としてきただろう？少し静かにしていろ。」
真希にそう言われたエレンは、言われた通り、意識が朦朧としてきたが、何故だか多幸感と気分のよい浮遊感を感じていた。その後、酩酊状態に近いエレンは真希に黒い袋を頭に被られる。
「貴女という人は、限度というものを知らないんですの？」
「……何の用だ？」
寿々花が来た時には、真希と椅子に両手足を縛られ黒い袋を頭に被らされたエレンが居た。そのうえ、エレンはところどころに殴られた跡があった。
「そこまでやる必要があるとは思えませんが？」
「口を割らないからさ、そうすれば痛い思いをせずに済んだだろう。」
「クスリも使ったんでしょう？」
「……ここまで強情ならこのエセ外人を本部に送った方が良いだろう。そうすれば、時間と物は幾らでもある。」
「……つまり、お仲間が此方に来ると？」
「援軍が来る前にここを撤収しようと思う。自白剤を使った理由はこのエセ外人をあいつらの荷物にするためさ。」
つまり、真希の考えはこうであった。今頃、可奈美達四人は薫当たりが舞草本部から援軍を呼び、エレンの救出作戦を実行するところだろうと踏んでいた。そのため、その援軍が来る前に早期に本部まで撤収しようとしていた。当然、その動きは察知され、エレンの救出に向かい奪還されることも考えられるので、真希はエレンに自白剤で意識を朦朧とさせ、エレンの戦闘能力と思考を奪い逃亡を阻止し、尚且つ

可奈美達の誰かにエレンを担がせ移動速度を落としたうえ、エレンを庇うように戦わせれば上手く行けば全員捕縛することが可能かも知れないと思い、エレンに自白剤を投与していたのだった。
「こんなところに何時までも居て舞草の援軍がやって来て、血の池になるよりマシさ。……あと、寿々花、ここにＳＴＴの男性隊員は立ち入らないようにしてくれ。」
「了解しましたわ。」
だが、真希はこのとき気付いていない、少数だが援軍が既に到着していて、エレン救出作戦を練っていることに。
そして真希は、国家公務員の一員として問題のある尋問を遠くから見ていた者が、寿々花意外に二人居ることに気付いていなかった。ソフィアと静である。
「……なあ、静、あんなので口を割ると思うか？」
「無理でしょ、ただ殴っているだけとか、まるで青春漫画の一ページみたいだぁ。としか思えませんけど？」
「……お前なら、どうする？」
「そーですねぇ、せっかく縛っているんですから。……立った姿勢のまま、大音量の音楽か録音した彼女自身の悲鳴を何日間も聞かせて楽しませてあげたり、お外に出して鬼ごっこを何度もしてあげたり、犬と一緒にお散歩するのも良いと思いますよ。」
分かりやすく言うと、大音量の音で睡眠妨害して思考をまともに考えさせなくさせるか、悲鳴を聞かせて不安にさせたり、わざと逃がして何度も捕まえて逃亡の意志を無くさせたり、狭い個室で凶暴な犬をけしかけて捕虜を襲わせ怖がらせるところを見物するといった内容であった。
「どれもこれも、凄いことをやるな。」
「でしょ？これをやると反抗的な子も大人しくなって、素直になるんですよ？〝しつけ〟の素晴らしさ、理解できました。」
「ああ、本当にな。」
ソフィアも微笑みながら、静に返した。

その後、別の場所で昨日から仮野営地を監視していたスナイパーチームの『ＳＴＴが撤収を始めている行動をしている。』という報告を受けたトーマス達は行動を開始する。そして、トーマスの作戦の説明を受けた可奈美と姫和と薫は位置に付き、優とねねは仮野営地に向かって行った。

「……おい、上手いこと行くのか、この作戦？」

トーマスの言っていた作戦はこうである。

フェーズ１、トーマスと可奈美達とは別に居るスナイパーチーム２名による、ドローンも使用しての監視をし、フェーズ３の可奈美達の突入を援護し誘導する。可能であれば写シを張る前の真希・寿々花の二人のどちらかを〝無力化〟（尚、写シは集中力が途切れたりした場合は強制的に解除されるということなので、胴体に当てることも〝無力化〟したとして考えても良い。）する。

フェーズ２、優とねねが仮野営地に偵察に向かい（この際、優は親衛隊に捕まっても良しとする。）、エレンの居場所を突き止める。

フェーズ３、ねねと合流した後、トーマス達の火力支援で親衛隊の何名かＳＴＴ隊員の多くを負傷させ、写シを張った可奈美達も突撃しやすくし、エレンを救出。可能であれば優の救出もする（例え救出に失敗しても、幾らなんでも子供相手に尋問せず、保護するだろうというトーマスの説明で薫は納得している。）。

フェーズ４、エレンの救出を確認した後、トーマス達も発煙弾と発煙手榴弾で煙幕を作り、可奈美達の森の中への撤退を援護しつつ撤退。

フェーズ５、そのまま、石廊崎まで走り、撤収を支援するチームの支援の元、迎えの〝バス〟に乗り撤収する。

以上が、トーマスの作戦である。（但し、可奈美達は知らないが、これは表向きの作戦である。）

「……大丈夫だよ、姫和ちゃん、優ちゃんは人を殺さないって誓ってくれたから。」

可奈美は石廊崎に向かう途中の道路で約束したことを思い出し、少

し微笑みながら語っていた。
「……ああ、それは大丈夫さ。そして、必ず優を見捨てず助けよう。」
「俺もそれには賛成。」
姫和と薫はトーマスの〝表向きの作戦〟に逆らい、優が囚われたら必ず救出しようとしていた。9歳の子供を見捨てることはしたくないという理由だが。

エレンに殴られ、気絶していたフリをしていたSTT隊員は休憩をしていた。まだ、エレンに殴られた頭部が痛む、医務室に行くべきだったかと思っていたがそれほど酷くはないのでテントの裏で休憩していたが、突然後ろから物凄い力で引っ張られ、転倒してしまい、一瞬気を失ってしまう。
後ろに居たのは、鎌府女学院の制服を着ている〝少女〟だった。そして、その〝少女〟に首を物凄い力で絞められる。
STT隊員は「かはっ、」という声を出すのが精一杯だった。
可笑しい、STT隊員はそう思った。見たところ鎌府女学院の制服を着ているが、御刀を持っていない。御刀を持っていない刀使は普通の少女と変わらないハズなのは、エレンで証明されている。なのに、振りほどけないし、首を掴む手を離すことができない。それに、何か呟いているようだった。聞いてみると確かにそう言っていた。
「…殺さないように、…殺さないように。」
少し低いソプラノボイスでそう呟いているのが聞こえ、STT隊員はこの〝少女〟に不気味さを感じていた。そのため、恐怖に駆られたSTT隊員はこの〝少女〟の腹に殴打するが、効いていないのか、表情は眉一つ動かさず、無表情だった。そして、腹を殴った報復か顔を何度も殴られ、STT隊員は抵抗する意志を削がれ、気絶していった。
気絶する前にSTT隊員は思った、人を痛め付けるのに、なんら良心の呵責も無く、ただ流れ作業の様に遂行するこの〝少女〟は荒魂に化けた人間か悪魔ではないかと思った……。

そして、優は若干ビクついているねねのことを不思議に思いなが

ら、そのねねの誘導の元、エレンの居るテント内に侵入。そこで優は痣だらけで両手足を縛られ、頭を黒い袋で被されたエレンを発見し、救助しようとするが。

「そこまでだ。」

何処からともなく、真希、寿々花、夜見の三名が現れ、囲まれる。

「降参してください。」

夜見が無表情で言う。

「抵抗するのは痛い目を見るだけですわよ?」

寿々花が抵抗は無意味だと言ってくる。

「……エレンおねーちゃんを傷付けたの?」

優は静かにそれだけ言って、親衛隊の3人に聞いてみた。

「ああ、僕がやった。君には手荒な……。」

マネはしないから、大人しくしてもらう。というセリフを言い終わる前に、発砲音が数回鳴り響く。

寿々花は優を見ると、優の履いているスカートに穴が三箇所空いていたことに気付く。つまり、優はスカートのポケットの中に拳銃を隠し持っていたのだ。

「ぐっ……うぅ……。」

優は真希に向けて銃弾を3発撃って、腹に当てていた。写シを張る前だったので、真希の腹部は赤く染まり、呻き声を上げていた。

死闘

真希が優に撃たれる数分前――――。

「……侵入者か？」

無線機越しに聞こえてくるＳＴＴ隊員の報告を真希は聞いていた。

『はい、鎌府の制服を着ていますが画像を送って確認させたところ、そのような生徒は存在しないとのことです。』

「そうか、可能な限り交戦するな、こちらで処理する。」

『了解しました。』

真希はその正体不明の刀使をエレンの居る場所に誘い込むため、ＳＴＴ隊員には出来る限り手を出さないように命令していた。

「寿々花、夜見、客が来たようだ。報告の内容から昨夜会った子供だろう。」

「今度は３人がかりという訳ですか……。」

「ああ、単純だが、それが一番良い手だろう。」

「それでもダメだった場合はどうしますの？」

「……そのときは結芽があの子と戦うことになるな。」

そして、真希の発言により、親衛隊３人全員が重い気分になっていた。１２歳と９歳の戦いを見ることに忌避感しか無いからだ。

「……それだけは、避けたいですわね。」

「ああ、だから此処で終わりにしよう。」

こういった事情から、ＳＴＴ隊員を遠ざけ、親衛隊だけで確保しようとしていたが――――。

「ぐっ……うぅ……。」

結果は、真希は腹部に銃弾を３発受け、重傷を負ってしまった。

そして、優は続けて拳銃（Ｐ２２６）をスカートのポケットから出し、真希の頭部を狙って２発撃とうとするが、寿々花の体当たりを受け、外してしまう。

（チッ、殺せてない。）

優は真希を殺せていないことに、苛立ちを覚えながらも撤退するため、事前に貰っていた音響閃光手榴弾を2つ投擲。突如、テント内に耳がつんざくような轟音と目が眩むような光を受けた寿々花と夜見は一時的に感覚が麻痺し、優を見失ってしまう。そして優はその隙に〝御刀を隠世から取り出し〟、エレンを縛り付けている椅子ごとエレンを俵担ぎで担いでいき、テントの外に出て、八幡力で跳躍して可奈美達と合流しようとしていた。

同じく、真希が優に撃たれる数分前――――。

可奈美達から３００ｍほど離れた位置にいるロークとトーマスはＡＫ１０３を構えながら、仮野営地を監視していた。このとき、トーマスは少し思い出していた。

事前に可奈美達に教えていた作戦は薫や姫和に、優が荒魂であることに気付かれないようにするため、嘘の作戦を言っていたこと。本来の〝雇い主〟からノロで強化された人間の情報を少しでも入手してくること。可奈美達と合流し、そのまま帰りの〝バス〟に乗るため、野戦装備しかしていなかったため、狙撃銃は一丁しか持ってきていなかったこと。……そのため、本当の作戦は、

フェーズ1、トーマスと可奈美達とは別に居るスナイパーチーム2名による、ドローンも使用しての監視をし、情報を集める。

フェーズ2、優とねねが仮野営地に偵察に向かい、エレンの居場所を突き止める。

フェーズ3、優は、真希か寿々花を不意打ちで負傷させ（作戦前に、写真を見せてどちらかに不意打ちしてほしいと伝え、音響閃光手榴弾を渡していた。）、エレンを救出した後、トーマス達は仮野営地に向けて制圧射撃、優は可奈美達の元へ向かう。

フェーズ4、可奈美達の近くにいるトーマスの部下2名は優にエレンを渡されたら、石廊崎まで先に撤収。その後、優は仮野営地に戻り、

殿となってＳＴＴ隊員の多くを負傷させるとともに、可奈美、薫と共に刀使を引き付ける。そして、姫和は隙を突いて、長距離から一つの太刀で親衛隊の寿々花か真希を戦闘不能にする。

フェーズ５、ＳＴＴ隊員、刀使の多くが戦闘不能になったことをスナイパーチームが確認した後、スナイパーチームも撤退時に使用したあと置いて帰る予定の軽迫撃砲で発煙弾を使って撤退を支援し、全員、石廊崎まで走り、撤収を支援するチームの支援の元、迎えの〝バス〟に乗り撤収する。

そして、仮野営地の方から発砲音が聞こえてきた。

「〈…あいつ、撃ったのか!?〉」

ロークは驚いていた。刀使には写シがあるから銃は効かないと、Ｆｉｎｅｍａｎから聞いていたため、親衛隊の一人も倒せていないという難しい状態から始まるのではないかと思ってしまったが、優がひょっこりとテントの中から現れたことに安堵する。

「〈効果が有るか分からんが、親衛隊の一人ぐらいは戦闘行動が出来ないくらいにしてくれれば良いんだがな。……各員、ロシア語で喋れ。〉」

ロークとトーマスがロシア語で喋れといった理由は、自身の出自を推測させないためと、可奈美達に聞こえても問題が無いようにするためであった。そして、無線越しに聞こえる部下の『〈了解。〉』という返答にトーマスは静かに少し頷いて、次の指示を出していた。

「〈スナイパーチーム意外、仮野営地に向けて制圧射撃。〉」

ロークとトーマスはＡＫ１０３で、部下のマイケルとシェパードの二名はドラムマガジンを装着し軽機関銃代わりにしているＡＫＭで制圧射撃をしていた。しかし、何故彼らはロシア製の銃を使っているかというと、薬莢などの痕跡から自身の出自を推測させないためと〝雇い主〟にそう言われたからである。スナイパーチームもドラグノフ狙撃銃と地対空ミサイルのストレラ３、ＲＭ―４１軽迫撃砲を所持。入手先もシリアやアンゴラといった場所や元はテロリストが所持していた物といった物ばかりだった。

「薫達はそのまま待機してくれ。姫和は〝一つの太刀〟で親衛隊を狙ってもらうから其処から動かないでくれ。」
ロークは日本語で薫達に待機の指示を出していた。
「あわわわわわ!?」
一方、親衛隊の方は優の後を追うため、写シを張りテントの外に出ていたが、寿々花は突然の銃弾の雨に〝真希が拳銃で重傷を負ったことを思い出し、〝驚いてしまい、寿々花は写シを張っていることを忘れ、意味も無くテントの中に隠れてしまった。
夜見も一人で突出するのは危険と判断したのか、寿々花と同じように装甲車の陰に隠れていた。
そのため、優はエレンを担いだまま可奈美達と合流していた。
「可奈ねーちゃん、ただいま。」
「あっ、うんおかえり。」
優のただいまに、気の抜けた声で返事をする可奈美。
「エレンおねーちゃんをお願い。」
そう言われ、エレンを渡されたＡＫＭＳを所持しているトーマスの部下2名はエレンを椅子から開放すると、一人がエレンをおんぶをして、もう一人は発炎筒を幹線道路の方に投げたあと、二人共何も言わず石廊崎の方へと走って行った。
「てっ、おい!!一緒に戦うんじゃないのか!?」
姫和は抗議の声を上げると、トーマスの部下は「Ｉ　ｃａｎ　ｎｏｔ　ｓｐｅａｋ　Ｊａｐａｎｅｓｅ.」と〝英語〟で答え、薫が答える。
「実はな、ロークとトーマスしか、日本語は喋れねぇんだ。」
「……。」
姫和は何とも言えない気分となっていた。と、そこで、
「ねねちゃんお願い。じゃあ、行ってくるね。」
可奈美達にそう告げた優は薫の傍にねねを置くと、優は仮野営地に向かって行った。
「おっ、おい待て!!」
「まっ、待って!!」

姫和の声も聞かず、行ってしまったため、可奈美も写シを張り、あとに付いて行く。

そうして、優は御刀を隠世に戻し、代わりに折曲銃床式の８９式を隠世から取り出すと、ＳＴＴ隊員に向けタン、タン、というリズムで発砲し、足や腕といった所を当てていた。

「えっ？」

可奈美は素っ頓狂な声を出すと、自分が見たものを疑った。人に向けて発砲したことが信じられなかった。〝人を殺さないと〟約束したハズである。

「なっ、……何これ？」

――――何で言う事聞いてくれないんだろう？――――

可奈美は理解できなかった。今までは素直に言う事を聞いてくれたのに、何故？……可奈美は優が暴走している様に見え、このときはすごく恐ろしく見えてしまった。

（う、……嘘だ、嘘だよこんなの。……誰か、嘘だと言って。）

可奈美は呆然と〝ＳＴＴ隊員が痛みで呻き、もがいている光景〟を見てしまった。

気分が悪くなった――――。

どうして、こうなった？

何がいけなかった？

何が間違っていた？

だが、可奈美に思案している時間は無かった。立ち直った寿々花と対峙しなければならなかったからだ。

「「……。」」

両者は無言で対峙していたが、寿々花の方から口を開いた。

「…貴女方は何も思わないんですか？」

顔を隠しフードを被っている可奈美が誰なのか分からなかったので、寿々花はこのように訊ねていた。

「？」

可奈美は何を聞いているのだろうと思った。

「あんな子供をノロ漬けにすることに……！」

それを言われた可奈美は思った。それは貴女達が一番言ってはならないことだろうと……。

「……それを言うの？優ちゃんがああなったのは、貴女達のせいだよ……！」

可奈美は怒りに震え、寿々花にそう言い放った。

「えっ？」

確かに、この謎のフードの刀使は〝優ちゃん〟と言った。それを言うのは、可奈美ぐらいしか居ないので、対峙しているのは可奈美本人ということになる。ならば何故、彼女は舞草に協力するのか？脅されているのならば、このまま、親衛隊の元へ保護を求めてくるハズだ。なのに、何故荒魂と人体の融合を非合法に行う舞草に協力するのか？

このとき、寿々花は新たな疑問を抱いてしまった。

そのとき、まだ新人のＳＴＴ隊員の一人は見ているものが信じられなかった。幹線道路の上に居て被弾を物ともせずに、無表情で近付いてくる鎌府女学院の制服を着た〝幼い少女〟が折曲銃床式の８９式を使って、淡々と仲間の手足を撃ち貫いている光景が現実であることに、

「うっ、うあああああ!!!」

「あっ、おい!!」

新人のＳＴＴ隊員は半狂乱となって、優に向かって銃を発砲しながら突撃していったが、右足を二箇所を撃たれ、倒れてしまう。

「ぐっ!!」

それでも、優がこちらに背を向けたことにチャンスと思い、どうにか匍匐で背後から近付き、背後から取り押さえようと、飛び掛る。

「！」

優は突然飛び掛って来たＳＴＴ隊員に後ろから容易く押さえつけられ、バックマウントを取られ、左手で首を絞められていた。

「おまえ、人を痛めつけてそんなに楽しいか!?おい!!」

「……？」

ＳＴＴ隊員は無表情で手足を撃つ優の姿に、戦慄し、人を痛めつけて楽しむ人間と勝手に思ってしまった。そのことに、優はこの男の言っていることが、何を怒っているのか理解できなかった。

（……まぁ、どうでも良いか。）

それだけ思うと、優はＰ２２６という拳銃をＳＴＴ隊員の左手の指に狙いを付けて、発砲した。

続けて、もう一方の腕にも一発放ち、指と腕を撃たれた痛みでＳＴＴ隊員は獣の様な叫び声を上げていた。

その隙にバックマウントから脱出する。当然、左手で首を絞められていたため、優は首から血を流していた。

「……うるっさいな、騒ぐな。」

優は首を撃ったので、しわがれた声で言うと、バックマウントを取っていたＳＴＴ隊員の顎を８９式の銃把で殴り気絶させる。そして、気絶させたＳＴＴ隊員を盾にしながら、８９式で応戦していた。

（……でも、人を痛めつけて楽しいって、どういうことだろう。）

しかし、優は何故かそれが気になった。理由は分からないが、何となく気になったのだ。

（……人を痛めつけて楽しい、……痛める、……傷つける。……楽しい、……嬉しい。……何が嬉しいんだろう？）

暫し、考えていたが、戦っている理由を思い出してみた。ふいに可奈美の顔が浮かんできた。

――――良く頑張ったね。――――

――――偉いね。――――

こいつらを倒せば可奈ねーちゃんは喜んでくれる、笑ってそう言ってくれると思ってしまった。

可奈美のやりたいこと、お母さんみたいに強い刀使になること、それを言ったとき、嬉しそうだったことを思い出していた。そのとき、優の顔は無垢な子供のように微笑んでいた。

（あぁ、そっか。）

そして、優はテントの裏に隠れている他のＳＴＴ隊員を牽制射撃し

ながら確信した。
（……これが、楽しいってことなんだ。……そうだよね、そりゃ嬉しいよね、大切な人が喜んでくれたら。）
　可奈美の障害となるものを全て排除すれば可奈美は喜んでくれるハズ、そうすれば可奈美は夢を実現させることができると思ってしまった。そして、
「～～♪」
　優は心なしか鼻歌を歌いながら、８９式をＳＴＴ隊員に向けて撃ち続けていた。
　そして、この日優は、〝人を痛めつける楽しさ〟を理解してしまった。

　ソフィアは驚いていた。鎌府女学院の制服を着た〝幼い少女〟が折曲銃床式の８９式を使って、無表情に撃ち続けていたと思っていたら、ＳＴＴ隊員と少し話しをしたあと、鼻歌を歌いながらＳＴＴ隊員に向けて撃ち続けているのだ。そのことにソフィアは歓喜した。
「……静。」
「何です？」
「……あの子が欲しい。」
　また始まった。と静は思った。この人は周りがドン引きするような戦いをする人間が大好きなのだ。その人を勧誘するぐらい。
「……むっちゃ暴れてますけどいけます？」
「２対１なら勝てるだろう。…けど、ああ、なんて素晴らしい。さっき気絶させた男を何事も無く盾にしていることも良いが、鼻歌を歌いながら防弾チョッキを避けて手足を撃って嬲り殺しにしている姿も素敵だ。だが、しかし、やはり私的にポイントが最も高いのは自身も首に重傷を負っているのにも関わらず戦い続けていることだろうか。まだ、あんなに小さい子なのに、あのようなことをしているのが本当に素敵だ。将来有望だと思わんか？」

そう言って、ソフィアはうっとりとした顔をしながら、興奮気味に早口で語り、鎌府女学院の制服を着た〝幼い少女〟を見つめていた。
「そうと決まったら、善は急げだ!!写シを張るのはあの銃弾が邪魔だから仕方ない、あの子を手に入れるぞ、静っ!……静、聞いているのか!!」
「あ～～、はいはい。分かりました。」
気が乗らない静はしぶしぶソフィアの命令を聞くことにした。
そして、ソフィアと静の両者は写シを張り、優の方へ向かって行き、背中から切り掛かっていき、優はまともに受けてしまう。
「!」
御刀で斬られると焼けるような痛みが来るが、それを何とか耐え、８９式を鈍器のように使ってソフィアに反撃しようとしたが、御刀で受け、鍔迫り合いをしていた。
「初めまして、私の名前はソフィアと言います!以後、お見知り置きを!!何故、あんな嬲り殺しのような事をしたんですっ!!!」
優はこのソフィアと名乗る笑顔で興奮気味に近付いて来た不気味な刀使についてこう思った。強い刀使と戦うことが好きな可奈ーちゃんに近付けてはいけないと。
「……なんとなく。」
優はそっけなく答えると、ソフィアは強く思った。
(スバラシイッ!!)
ソフィア的に同じ人間だと思わせてしまうような返答をしてしまったため、優は知らない内にソフィアの好感度を多いに上げてしまっていた。
しかし、優は何とか反撃しようとするが、静の援護の斬撃をまたまともに受けてしまう。
(……急に見辛くなったな。それと、人だから殺り辛い。)
実はこの〝先を読む能力〟には、致命的な弱点がある。一対多の状況になれば、先を読む相手が多く処理落ちの危険性がある。そのため、見た相手の可能性が多過ぎると脳が処理落ちし却って隙が出来てしまう。そのことを知らない、知ることが無かった優は全てを見通そ

うとし、却って弱体化していることに気付かず、ＳＴＴ隊員の銃撃をまともに受け、容易く後ろを取られ、ソフィア達の攻撃もかわせずに居た。

「やはり、２対１なら勝てるな。」

尚、ソフィアは知らないことだが、親衛隊の２人を相手取ったことを知らなかった。多数のＳＴＴ隊員の援護があったからこそ、まともに戦えていることと、可奈美との約束『人を殺さないこと。』を守っていたからである。では親衛隊は何故、殺そうとしたのかと言うと、姫和の『荒魂化した人はもはや人ではない。』ということを知ったため、優は親衛隊から荒魂の気配を感じたので、『人では無いから、殺そうとした。』だけであった。

「待ってろ！今行く!!」

薫は優を援護すべく向かうが。夜見に妨害されてしまう。

「ここは通しません。」

「……ッチ！」

薫は夜見の荒魂を操る能力を警戒し、止まってしまう。

一方、姫和は無線越しのロークのスナイパーチームの指示の元、〝一つの太刀〟を使って寿々花を倒すという指示を聞いていた。そのため、小高い丘の上にある森の中に潜み、隙を伺っていた。

（……まだか？）

姫和はスナイパーチームの指示を待っていた。可奈美が迅移で離れたと同時に〝一つの太刀〟を使用するので、その合図を待っていた。

ただ、待つということに姫和は焦りと緊張を感じていた。

（早くしないと。）

優と可奈美達が傷付くことを恐れ、今まで以上に焦り、緊張していた。そして――――、

『ＧＯ!!』

ロークから聞いていたスナイパーチームの指示を聞き、〝一つの太刀〟を使う――――。

そして、結果は失敗に終わってしまった。
可奈美の迅移のタイミングが完璧過ぎたのだ。寿々花は得意の〝相手の迅移に合わせて、迅移を発動した〟ため、姫和の渾身の〝一つの太刀〟を運良く避けられてしまった。
（……しまった。）
当然、姫和は極度に消耗して、能力を低下させてしまい。一気に形勢が親衛隊側に傾いてしまった。
更に、悪いことに。
「今、どんな状況だ？」
真希は軽く止血をしてもらったあと、戦線を復帰し、状況をＳＴＴ隊員から聞いていた。

遠すぎた石廊崎

「畜生、パッパか撃ちまくりやがる。」
　一人のＳＴＴ隊員は、撃っては移動を繰り返し、場所を特定されないようにしていたトーマス達の、敵の姿の見えない銃撃に愚痴りながらも応戦していた。すると、テントを御刀で斬って、テントの裏から真希が現れる。
「今、どんな状況だ？」
　真希は軽く止血をしてもらったあと、戦線を復帰し、状況をＳＴＴ隊員から聞いていた。
「ハッ、現在正体不明の刀使４名の襲撃に寿々花隊員らが交戦中です。」
「……寿々花達は？」
「善戦しているようです。」
「善戦？……鎌府の子は？」
「ソフィア隊員と静隊員が交戦、善戦しています。」
　真希は妙な話だと思った。昨夜は寿々花と二人掛かりで争い優は善戦していたのに、何故あの二人には苦戦するのか、疑問に思いソフィア達の戦いを観察することにした。
「……？」
　妙だった……。
　優の動きに先を読むかのような行動をしていないのである。つまり、相手が強過ぎるのではなく、状況が違っているからこそ苦戦しているのでは無いのかと思い、仮説を立ててみた。
「……もしかして、集団戦闘を知らないのか？」
　真希は、優が多対多の戦闘の経験を知らないから、苦戦しているのではないのか？そう仮説を立てていた。そして、真希はこのあと確信する。
（……大村　静ですら一太刀浴びせている。やはり、そうに違いない。）
　刀使としての実力は平凡である静でも、優を後ろから一太刀浴びせ

ていたため、真希は間違いないと思い（気付いていないが、人を殺してはいけないという約束をしていることも要因の一つだが。）、腹の負傷をおして寿々花達のところへ向かおうとするが、一人のＳＴＴ隊員が倒れているのに気が付く。
「……あの隊員は？」
「彼は鎌府の子に憤りを感じたのか、一人で突出して行って、ものの見事に返り討ちになりました。……ですので、お気になさらず。」
　ＳＴＴ隊員は、あの隊員を見捨てて先に寿々花達の救援に向かって欲しいと真希に伝える。
「まだ生きているか？」
「恐らくは。」
「分かった、少し待っててくれ。」
　真希はそれだけ言うと、写シを張り、銃弾に臆することなく倒れているＳＴＴ隊員の救出に向かった。
　そして、銃弾の雨を何事も無く進み、そのまま銃に狙われないように八幡力による跳躍でテントの裏に戻り、ＳＴＴ隊員を置いていく。
「頼む。」
「りっ…了解。」
　周りのＳＴＴ隊員は皆、驚嘆していた。腹に銃弾を3発受けているにも関わらず、銃弾の雨に怯まず、一人のＳＴＴ隊員のために救出する彼女のタフさに。
「……すまない、少し８９式を借してくれ。」
「はっ？……ハッ、どうぞ！」
　真希は一人のＳＴＴ隊員に８９式を貸して欲しいと言うと、その隊員は先程の行動もあってか、理由も聞かずに真希に自分が使っている８９式を渡す。
　８９式を借りた真希は、先程の八幡力の跳躍により何か上空を飛んでいるのがたまたま見えたので、銃口を空へ向けると3点バーストで発射し、３００ｍ上空に居たドローンに3発とも当て、撃ち落としていた。
「……すげえ、刀使って剣意外も扱いこなすんだな。」

「あんな高い所を良く当てれるな。」
　これには、ＳＴＴ隊員も賞賛の声を上げるしかなかった。そして、真希も、
（……当たって良かった。）
　と思っていた。何事も無く当てることが出来て真希はホッとしていた。外しでもすれば、寿々花に何て言われる分からない。
「…ありがとう、君の手入れが行き届いている銃にみんな助けられた。」
　そう言って、真希は８９式を元の所有者に返す。
「ハッ！光栄です。」
　だが、これで、此方の士気は上がるだろう。ＳＴＴ隊員の顔を見ると、活気に満ちていた。確実に此方に流れは傾いている、そう実感している真希だった。
「すまないが、僕は寿々花の所へ行く。」
「分かりました。……指揮官殿が敵に目に物見せてくれたぞ！俺達は撃ってくる奴等を全力で抑えるぞ!!」
　皆、ＳＴＴ隊員の班長の言葉に大きな声で「了解！」と答えていた。そして、真希はその声を背に受けながら、可奈美達の方へ向かって行った。

　そして、トーマスはドローンを操縦していた2名のスナイパーチームの驚愕した声を無線機越しに聞いていた。
『〈ウッソだろっ！ドローンを撃ち落としやがった！〉』
「〈何か有ったのか？〉」
『〈トーマス、ドローンが撃ち落とされた！〉』
　トーマスは旗色がだんだんと悪くなっているのが、感じられた。刀使達は苦戦中、自分達もドローンの援護で敵の位置が分かり有利だったが、その支援すら無い。
「〈……スナイパーチームはスナイパースコープと双眼鏡で敵の位置を教えてくれ。〉」

『〈…了解。〉』

ドローンが墜落したことにより、此方の士気は下がり、敵の士気は大いに上がっていることだろう。確実に追い詰められているのは間違い無いとトーマスとロークは思っていた。しかし、可奈美達を置いて逃げることは出来なかった。そのため、トーマス達は可奈美達はＳＴＴ隊員に切っ先を向ける事はかなり難しいだろうと思い、なんとか可奈美達に行かせないように足止めするだけしか出来なかった。

「〈改めて見ると刀使って、すげぇな、トーマス。〉」

「〈…無駄口喋っている暇はそのうち無くなるぞ。〉」

マイケルが軽口を言うが、雰囲気を変えたいのと、緊張感を和らげようとしていること、そして自分の気持ちを切り替えたいのだろうとロークは思い、特に否定もせず軽口で返していた。

一方、優はソフィアと静の二人がかりを相手にしながら、可奈美達に向かわないようＳＴＴ隊員の動きにも注意を向けていた。

「……君、何人倒した？」

ソフィアは何となく優に訊いてみた。

「？」

「ＳＴＴ隊員……鎧を着込んだあの人達を何人倒した？」

「……知らない。」

優はそっけなく答える。

（…良い子だ、とても良い子だ。他人の生死に全く興味が無いのか。）

その返答にソフィアは喜んでいた。

（…何か気持ち悪いなぁ、この人。ニタニタしてるし。…むーっ、殺しちゃダメだったな。）

しかし、優はソフィアのことを気味悪がっていた。早めに消しておきたいが、それだと可奈美との約束を反故してしまうため、悩んでいた。

（どうしよっかな、手足を撃ち抜ければ良いんだけど。）

写シを張っているため、それも無理だろうと思いどうすべきか悩ん

でいた。
　一方、薫の方も危機が訪れていた。
「待たせた。」
　真希が薫の方へ向かって行ったのだ。
「……うわぁ。」
　正直、勝てる気がしなかった。薫はこのときそう思った。
「……夜見、鎌府の制服の子を頼む。寿々花とソフィアは交代して、寿々花は静と夜見の両名を指揮しながら鎌府の子を確保。ソフィアはフードを被っている謎の刀使二名と応戦。僕はこいつを相手にする。」
　夜見、寿々花、静の三名掛かりで優を倒し、ソフィアは可奈美、消耗している姫和の両名を相手取り、真希は薫の相手をするというふうに指示を出し、皆従っていた（ソフィアだけは不満気だったが。）。
　そのため、寿々花と夜見、ソフィアの三名は迅移で移動し、今までとは違う者と対峙していた。
「そういう訳だ、貴様はどんな技を見せてくれる?」
　ソフィアはニヤニヤと笑みを浮かべながら、可奈美と姫和の二人を相手にしていた。
「可奈美、相手は一人だ、一気に畳み掛けるぞ。」
「分かった。」
「……来い、刀使。」
　ソフィアは〝侮蔑〟の意味を込めて、可奈美達に返した。そして、
「…!写シを解除した?」
　刀使の基本戦術の写シを解除した事に、可奈美は驚愕するが、姫和は挑発しているように思えた。
「……貴様、舐めているのか!?」
　姫和は激昂した。写シが無くても勝てるとでも言っているように見えたからだ。
「…すまんが、刀使が相手だと、こういった戦い方が一番好きなだけだ。そもそも、写シを使ったのは銃弾に当たって早々に退場するのが嫌だっただけのこと…。」

「そう言うことだろう！……まあ良い、すぐに片付けてやる!!」
　姫和は峰打ちで相手を気絶させようとしたが、容易く弾かれ、柄頭による殴打の反撃を可奈美が割り込んで横薙ぎに斬って牽制し、姫和を守り、一旦ソフィアから距離を取る。
「大丈夫？」
「すまない、可奈美。」
　可奈美は相手に峰の方を向けていた。
「……チッ、殺さずか。…羊め。」
　ソフィアは心底不服そうな声を出していた。自分の理想とする世の中に、刀使も被食者も必要無いからだ。だから、不満そうであった。
　そして、薫は真希と一対一で戦っていたが、既に薫は一回写シを剥がされていた。
「……やっぱ、強ぇえな親衛隊は。」
「二度目か、あと何度張れるんだ？それで最後か？」
（…たく、柄じゃねぇけど……。）
　エレンを助けられなかったこと、親衛隊が相手とはいえ無様に負けていること、可奈美達に流石に頼り過ぎていること、それらを思うと、薫は奮起し二度目の写シを張っていた。
「……ねね、やるぞ。」
「何か知らんが、終わらせる。」
　真希は何かしてくると思い、警戒しながら、止めを刺すべくゆっくり近付いてくる。
「ふんぬぅ!!」
　が、薫が横へ大きく振りかぶると、
「やられっぱなしは、癪なんだよおおおおお!!」
　御刀祢々切丸をブン投げた。
「やけくそにでもなったのか？」
　だが、真希は難なくしゃがんで躱すが、
「ねー!」
「なっ？」
　ねねが祢々切丸を掴んだ反動を利用して、真希に切り掛かってい

た。その背後からの奇襲に対応出来ず、真希はねねからの斬撃を受け、写シが剥がれてしまった。
「ねねっ！パァーーーッス!!」
そう言うと、薫は全速力で静の方へ向かい、ねねから投げ渡された祢々切丸をキャッチし、
「きえええええええ!!」
静に向けて、大上段から振り下ろしていった。
「ぐえっ。」
静は薫の大きな一撃を受け、ダウンしてしまう。
「優、森の中へ逃げるぞ！」
薫は発炎筒を寿々花に投げ、先に森の中へ。
「……分かった。」
優はそう言われ、ソフィアの方に向けて発砲し、右腕に当てる。
「可奈美、逃げるぞ!!」
可奈美は呆然とするが、姫和の声でハッとなり姫和と共に森の中へ逃げて行った。
それを見た優も森の中へ逃げて行くことにした。
「……頃合いか。」
ソフィアは撃たれた右腕を見て、赤く染まっていくのが見えていた。
（まあ、撃たれたので追撃は困難。言い訳としては充分か。……しかし、鎌府の制服の子は無事、舞草と合流してくれれば良いのだが。折神家に渡したくないしな……。）
ソフィアはそれだけ思うと、静に近寄り、無事かどうか確認してみた。
「……大丈夫か？」
「……何とか、いやぁ凄い愛を受けましたよ。」
写シが剥がれたタイミングが悪かったのか、頭から血を流していた静は笑顔でこう返していた。この娘は暴力をその人の〝愛情〟として受け取る部分がある。ソフィアは静のそういった部分を思い出していた。

「また、あの〝獣〟に遭えると思うか？」
「……随分、気に入ったみたいで。」
「あの鎌府の制服の子は２０人くらいは手傷を負わせたぞ。そんな素晴らしいのは、そうそう居ないだろう？」
「かも知れませんね。」
静とソフィアは楽しそうに談笑していた。

「深手を負った負傷者から先に治療を受けさせろ、それから……。」
そして、真希は負傷者の移送、追撃部隊の再編成といった雑務に追われていたが……。
「……。」
ふらぁっと、真希が倒れそうになったところを寿々花が後ろから支える。
「お疲れのようですので、私に。」
「……頼む。」
寿々花は真希を目立たせないように医療テントの中へ入れ、治療を受けさせた。そして――――、
「報告、皐月　夜見隊員が、単独で追撃に向かったとの事です！」
寿々花は、その報告に驚きつつも、直ぐに付き合いが長く親衛隊の秘密を知っているほど信頼の置けるＳＴＴの隊長と連絡を取り、負傷者の治療を優先しながら、追撃部隊の編成を行う事にした。

その後、可奈美達は森の中でトーマス達と合流していた。
トーマス達も所々被弾しているのか、血を流していた。
「大丈夫かよ？」
「心配無い、どいつもタフだからな。」
頭から血を流しているロークは笑顔でそう答えていた。
「エレンも無事救出したし、これで石廊崎に着けば、ハッピーエンドだな。」

薫は軽口を叩くが、
「そうは行きません。」
親衛隊第三席皐月　夜見が可奈美達の目の前に居た。
「……おい、3対1で勝てると思ってんのか？」
「ええ、3対1と言っても、一人は消耗していて、もう一人は写シが一度しか張れないのは分かっていますので。……ですので、奥の手を使います。」
夜見はノロのアンプルを8本取り出し、自らに刺し、注入する。
「はっ、……ああっ、がっ！」
夜見は苦しみながらも、耐えていき、目から角の様な物が生え、片方の目は赤く輝いていた。その異形に、誰もが恐ろしい物を鬼でも見るかのようであった。
（これが手紙にあった人体実験…人とはこれほどまでにおぞましくなれるものなのか？）
姫和は今まで感じたことの無い畏怖を感じていた。しかし、逃げることはせず、薫と共に向かって行った。
「〈……なあ、ロック。〉」
「……？」
突然、マイケルが禁止されていた英語で喋ってくる。
「〈決して諦めない。〉」
それだけ言うと、薫と姫和は写シを剥がされていて、窮地に追いやられていた。それを見たマイケルとシェパードは、
「〈来いよ！俺達が相手だぁ!!〉」
「〈バカ！止めろっ!!〉」
ロークはロシア語でそう叫ぶが、マイケルとシェパードは足を止めず、走って行く。
窮地に陥った仲間を助けるためか、それとも10代の少女を前線に送ることに何かしら思うところがあったのか、理由は分からない。だが、最後くらいは英語で言うべきだったのかも知れない……。
異国の地で、他国の言語を喋らされ、アメリカ人として愛国者として扱われずに散って逝くことになるかも知れない。なら、最後くらい

は英語を聞かせても良いだろうとロークは何故かそう思ってしまったが、自分は兵士だ、そんなことは出来なかった。

マイケルとシェパードはかなり被弾しているにも関わらず、夜見の方へ向かって行き、囮となっている間に優とロークは姫和と薫を夜見から遠ざける。姫和達も分かっているのか、何も言わなかった。

自分達は刀使が必要だからこそ、彼女達の弾除けにもなり、捨て駒にもなる。ロークはそのことを思い出しながら、マイケルとシェパードが夜見に斬られながらも、どうにか組み付いて、少しでも時間を稼ごうとしていたところを見ていた。……いや、見ることしか出来なかった。

しかし、マイケルとシェパードは宙を舞った、ノロで身体強化された腕力で投げ飛ばしていたのだ。

(畜生……。)

恐ろしい怪力、マイケルとシェパードの両名はそう思いながら、地面に着いたときに打ち所が悪かったのか絶命した。

「こっちだよ!次は私が相手になる。」

そして、可奈美が夜見の注意を引き付けようとし、数合打ち合うが、〝何か〟でぬかるんだ地面に足を取られ、転倒してしまう。そして、夜見は片手で可奈美の首を絞めていった。

「斬れ、可奈美っ!!そいつはもう…人じゃない!!」

可奈美はこのとき死を覚悟した。〝殺さない、殺させない〟という不殺の精神を貫くために、命を投げ出したからだ。

しかし、可奈美に死は訪れなかった。夜見は大きく弾き飛ばされたからだ。マイケル…いや、マイケルの遺体が飛んできたのだ。

「お前……、何してんの?」

優がマイケルの遺体を投げたのだ。そして、優の目も妖しく金色に輝かせながら夜見を睨んでいた。

そして、姫和は何故かスペクトラム計を出し、見てしまった。反応が二つある事に……、その方向は優と夜見の方に向いていた。

怪物の声

可奈美達が逃げて行った先の森の中はスナイパーチームがＲＭ－４１軽迫撃砲を使って煙幕を発生させており、煙だらけであった。

「……どうです?.追撃部隊の編成は?.」

「…親衛隊の事情を知っている私の信頼できる部下を何人か付けます。事情を知らないあの綾小路二人と同行させるのはマズイでしょうから。」

「…申し訳ありません。そちらも大変でしょうに。」

事実、ＳＴＴ隊員の負傷者が多く、仮野営地は野戦病院さながらの状態となっていた。

「いえ、…あとこれをお持ちください。」

そう言って、ＳＴＴの隊長は発煙手榴弾と閃光音響手榴弾をそれぞれ一つずつ渡してくれた。

「これは撤退するときに使って、もしもの場合は逃げ延びてください。」

「……助かりますわ、ありがとう。」

寿々花はＳＴＴの隊長に礼を言うと、数名のＳＴＴ隊員と共に夜見の援護に向かうのだった。

「私が先行します。皆さんは後に続いて下さい。」

そうして、寿々花はＳＴＴ隊員数名と共に可奈美達が逃げて行った森の中へと進んでいった。

そして、時は戻り優は夜見にマイケルの遺体をぶつけていた。

「お前……、何してんの?.」

そして、優の目も妖しく金色に輝かせながら夜見を睨んでいた。

そして、姫和は何故かスペクトラム計を出し、見てしまった。反応が二つある事に……、その方向は優と夜見の方に向いていた。

そのことに気付いた姫和は、何も見なかったかのように、そのことから目を背けるように、ただ事実を隠すように、スペクトラム計をスカートのポケットに捻じ込んでしまった。

（……今のは、そう、そうだ少し疲れているから、あんなモノを見たんだ！）

遂には、自分すら偽り、母の形見の一つスペクトラム計を真正面から見ることが、事実を見ることが出来なかった姫和。

（……一つの太刀の影響だ、それに、色々あったから、まとまらないから、……だから、こうなってしまったんだ！）

スペクトラム計から目を背ける姫和、未だに何をすべきか見定まらない姫和、一人ただ苦しむ彼女は何処へ向かうのだろうか？

そして、優は夜見と対峙するが、

「……ダメ!!……ゲホッ、ゲホッ！……優ちゃん、殺しちゃダメ。」

可奈美にそう言われた優はそれを忠実に守ろうとするが、満身創痍であるうえ、相手も手強く、時間が限られているのでどうすべきか考えていた。

（……う～ん、でも手加減って難しいし。でも、可奈ねーちゃんの言うことは守りたいし、せめて可奈ねーちゃんみたいに刀を上手に振れればなぁ。）

迅移や八幡力を使えれば簡単にできそうだが、御刀を持たないと出来ないうえ剣術経験が無いので、困っていた。

（あっ、そうだ!!）

優は何か閃くと、御刀を隠世から取り出すと自分自身の体の中に入れるように突き刺していた。

痛むのか少し呻き、血が流れたが、それに構わず更に深く、

深く――――、

深く――――、

深く腹に突き刺していった。そうして、優は腹に御刀が突き刺さったままの体で、歪で何かが生えたような異形な姿形をしながら迅移を発動し、一気にシェパードの遺体を持って夜見に近付く。

「！」

夜見は水神切兼光を振り下ろすが、優は冷静にシェパードの遺体を盾にしてそれを防ぐ。

夜見は水神切兼光で深く斬ってしまったため、シェパードの遺体から抜くのに手間取ってしまう、優はその隙にシェパードの遺体から手を放すと、夜見の右腕を取ってあらぬ方向に曲げてしまう。

「ぐうっ、……あがぁぁぁ!!」

夜見は流石に痛みに耐えられなかったのか、水神切兼光を手から離し、獣のような悲鳴を上げる。更に、優は追撃と言わんばかりに足蹴りを夜見の右膝部分に思いっきり踏ん付けるように蹴り、足首と膝をあらぬ方向に曲げ、歩行を困難にさせる。

しかし、夜見も黙ってやられるわけにもいかないのか、左ストレートを優にお見舞いしようとするが、難なく躱し左腕を掴んで左足を足払いして転倒させ、夜見を仰向けにするとマウントポジションを取り、優は夜見の鳩尾に何度も何度も殴打していた。

（……殺さないように、……殺さないように、……殺さないように。）

優は心の中で呪詛のように何度も呟きながら、夜見を何度も殴打していた。その光景を見ていた可奈美は何も言わず、優を止めるべく近付こうとするが。制御しきれない程のノロを注入したせいか、夜見は体の中にあるノロを暴走させてしまい、赤い火柱のように上げていた。

「優ちゃん!!」

可奈美は叫ぶが、赤い火柱のように溢れてしまったノロに近付けずにいた。

何も出来ない自分が悲しかった――――。

刀使なのに、御前試合に出場できたのに、何も出来ない――――。

１４年も頑張ったのに、あと４年しかないかも知れないのに、何も出来ない――――。

どうすれば良いのか分からず、立ち尽くしていた。そして、火柱はやがて静まり、優は立っており夜見は気絶しているようだった。

（……良かった。）

可奈美は優が無事そうでホッとするが、優は夜見の髪を掴んで持ち上げていた。
「……良かった、生きてる。」
一見、優は乱暴だが、夜見の命が無事かどうか診ているように思えた。
「じゃあ、もう良いや。」
しかし、その後優は興味が無くなったかのように、夜見を雑に投げ捨てていた。
そして、周囲は静まり返っていた。
時が止まったかのように、静寂が支配していた。
優と夜見の戦闘に畏怖したためか、それとも夜見を人間扱いしない優に誰もが恐怖を抱いたからか、この場に居る誰もが、優のことを化け物のように見ていた。
優は、そのことに全く意に介していないのか、姫和に近付き、あるお願いをしてきた。
「……ねえ、姫和おねーちゃん、助けてほしいことがあるの。」
「……えっ、…あっ、何だ。」
姫和は反応し、優に何事か訊ねていた。
「……僕に刺さった刀を抜いて欲しいの。」
姫和は耳を疑った。
「はっ？……優、何を――――。」
「じゃっ、お願い。」
優はそれだけ言うと、姫和の腕を掴み、優の腹に突き刺さった御刀を握らせるとそのまま後ろへ下がっていった。
「！」
姫和はそれに気付くと、傷口が広がらないように強く握ってしまった。そのため、姫和の手に人の肉から刀が抜ける感触を充分堪能するハメにあう。
「……うっ。」
姫和は気持ち悪い気分になるが、傷口が広がらないようにするため、落とすことも、目を逸らすこともできなかった。そして、やっと

御刀が全て抜けると、姫和は激しく動揺していた。
「姫和おねーちゃん、大丈夫？」
優が心配そうな声で姫和にか大丈夫か訊いてきた。そのため、姫和は返答するため優を近くで見てしまった。そこには、多数の銃創と、神聖な御刀によって出来たいくつかの切創、そして首から血が流れていたことを示す跡、人を殴り過ぎてボロボロになった拳が、優の体にあった。
何故、こうなるまで気付かなかったのか、…多分、みんな初めての戦闘任務であったため、そこまで見れなかったのだろう。姫和はそう思うと居た堪れない気持ちになっていた。
「降参しなさい!!」
そして、寿々花と数名の銃を構えたＳＴＴ隊員が可奈美達の前に横列に並んで、現れていた。
「……もう追いついてきたのか。」
姫和はそう答えるが、窮地に立たされていたのは間違いない。優は満身創痍、薫も姫和自身も写シを張れないだろう、残っているのは可奈美一人とトーマスとロークしか居ない。絶体絶命だった。
「待て。」
森の奥から、女性の声が響いてきた。そこには可奈美達と同じ格好をしている女性、いや刀使が居た。
御刀は可奈美達と同じく灰色のテープを巻いて何の御刀かまでは判らなかったが、形勢は逆転しているように思えた。
「……どう？親衛隊の一名をそっちに返すから、私達を見逃してくれない？こちらとしても、これ以上は犠牲を出したくないから。」
正体の分からない刀使は寿々花にそう提案してきた。
「……。」
寿々花は考えていた。このまま夜見を連れて仮野営地まで戻るか、ＳＴＴ隊員と共に可奈美達を捕まえることを先決させるか、どちらを取るか悩んでいた。そして、何か引っ掛かっていた。疑問に思うことはあるが、寿々花は夜見の命を優先し、前者を取った。
「……分かりました、ここは一旦引きます。」

「…賢明です。」
そうして、寿々花は夜見を担いで仮野営地に帰って行った。
（……スペクトラムファインダーが反応しませんでしたわね。……一体何故？）
新たな疑問。それは夜見は制御しきれない程のノロを注入し自身を強化、遂には暴走させたハズである。なのに、この通り敗北して気絶している。あの舞草にノロ漬けにされた子供がやったのは間違いないが、それならば、夜見に対抗するためあの子供もそれ相応のノロの力を使って倒さなければならないため、スペクトラムファインダーに反応があっても良い筈である。なのに、反応しない。
（一体、何が……？）
寿々花は可奈美が言った貴女達のせいという発言と、優にスペクトラムファインダーが反応しないこと、そんな新たな疑問を抱きながら、仮野営地に戻って行った。
「あの～、どちら様でしょうか？」
可奈美は森の中から現れた正体不明の刀使に訊いてみた。
「はぁ～～っ、焦ったぁ。」
「え～っと。」
今までの口調を捨て、軽い口調となっていた正体不明の刀使に可奈美は少し戸惑うが。
「私、恩田　累、久しぶり可奈美ちゃん。」
「えっ、累さんですか？」
この正体不明の刀使は、刀使では無い恩田　累だった。では何故、寿々花も可奈美達も刀使だと思ったのか？答えは累が可奈美達と同じ格好をしていたため、誤認してしまったのだ。可奈美達に御刀を灰色のテープで巻かせて見分け辛くさせたのはこういった意味もあったのだ。
「さあ、お喋りは終いだっ！向こうがこっちに戻ってくる前に帰りのタクシーに乗るぞ!!」
トーマスは大きな声でそれを言うと、ＲＭ―４１軽迫撃砲と地対空ミサイルのストレラ３を捨ててきたスナイパーチームと合流しその

二人にマイケルとシェパードの遺体を持たせ、帰りのタクシーへと向かって行った。

「目標、ロスト。…申し訳ありません。」

寿々花に可奈美達の追撃を命じられたソフィアは静と共に可奈美達が潜水艦に乗艦している所を眺めながら、寿々花に嘘の報告していた。

『……そうですか、あとは海保と警視庁に任せますので、貴女達も帰投して下さい。』

「了解。」

ソフィアはそれだけ言うと、笑みを浮かべながら仮野営地に戻ろうとする。

「大丈夫なんですか?」

「実際、私達は見失っている。」

こうして、可奈美達は親衛隊の追撃から逃れられたが、

舞草側の損害、

・エレンの越前康継の奪還に失敗。

・トーマスの部下マイケルとシェパードの死亡。

親衛隊側、

・ＳＴＴ隊員に多くの負傷者、死者は無し。

・親衛隊の真希、夜見の両名は重傷を負い、暫く出撃は不可能となり、動ける隊員は寿々花と結芽のみとなる。

という幕切れとなった……。

舞草が誇る最大戦力の一つ潜水艦ノーチラス号にて、可奈美と姫和はＦｉｎｅｍａｎことフリードマン博士と会い、治療を終え私服に着

替えていたトーマスと共に個室で話をしていた。
「……愛しの孫を救ってくれてありがとう。可奈美くんと姫和くん。」
と言って、フリードマンは頭を下げる。
「あっ、いえ。エレンちゃんは友達ですので。」
「ありがとう、本当にありがとう……。」
可奈美は当然のことをしたと言うが、フリードマンは今も頭を下げたままであった。
「おい、フリードマン。話が進まないからそこまでにしとけ。」
トーマスが話しの本題に入れと急かす。
「……分かった。可奈美くん、君の望みは弟を元に戻したいということだね？」
「……はい。」
可奈美は舞草なら、優の中にいる荒魂を抜く方法が有るのではと思い、訊いていた。
「……可能だと思う。だけど、ノロを抜く機械類は折神家が独占所有していると思われるから、それまで協力してくれないか？」
「はいっ、勿論!!」
可奈美は大きな声で返事をし、舞草に協力する意志を見せる。
「……ありがとう。済まないが可奈美くん、姫和くんとご家族のことについて話すから、少し席を外してくれないか？」
「分かりました。」
フリードマンはトーマスの二人で姫和と話したいことがあるため、可奈美には席を外して欲しいと頼まれる。それを快諾した可奈美は弟が救える可能性があることを知り、笑顔で退室していった。
「……姫和くん、折神　紫を大荒魂と一緒に討つということだが……。」
「それが、母のやり残したことですから……。」
「少し、待ってくれないか？」
「はっ？」
意味が分からなかった。何故、フリードマンが勝手にそのようなことを言うのか。

「何故、そんなことを?」
「あの子供、優は多分あのままだから殺さないで欲しいってことさ。」
フリードマンに代わって、トーマスが説明する。
「おいっ、荒魂を抜くことが出来るんじゃないのか?」
「あくまでも可能性の話だ。だが、先の戦闘で重傷を負ったろ?致命傷にならないよう、負傷した箇所は荒魂化して傷を治したんだろう。」
「……ということは。」
「荒魂を抜いちまえば死ぬな、多分。……上手く抜けたとしても洗脳に使った薬の影響で様々な障害が出て人並みの生活を送れるかどうか……。」
「洗脳!?どういうことだ!!」
姫和は驚いていた、洗脳という言葉に。
「そういや、何も説明していなかったな。多分、優をああいう風にしたのは、恐らく鎌府だろう。ノロの軍事利用の一環として命令をこなす忠実な戦闘マシーンとして改造しようとしたんだろうな。そして、俺は優に鎌府の制服を着せた。」
トーマスは悪びれた様子を見せず、デモ活動のために行ったと姫和にそう告げる。
「……お前、あんな子供を利用して何とも思わないのか!?」
姫和はそう言うと、座っているトーマスの胸倉を掴む。
「何とも思わんな、少年兵はベトナムやアフリカで幾らでも見た。それで、大人の言いなりになって、世界平和のために戦うとか言ってた奴は死んだ。」
「……お前!」
姫和は子供を犠牲にすることに何とも思わないと答えたトーマスのことを人間ではない化け物かナニかのように思えた。
「ああ、ついでにな、それで非があるんだったらお前にも非が有ると思うが?」
「何……!」
「俺が優に鎌府の制服を着せたもう一つ理由はな、人を痛めつけやすくするためだ。」

「……何を言って。」
　姫和は意味が理解できなかった。どう関連するのかが。
「アフリカで見たことなんだが、少年兵ってのはな奇抜な格好をするんだ。何故だか分かるか?」
「知るわけ無いだろ。」
　姫和はただ世迷言を言っているだけだと思った。しかし――――、
「自分じゃない別の誰かになりきって、自分の心を守って過酷な戦場を生き延びようとしたんだよ。」
「……だから私にも非があると?殺人に協力したと?」
「ああ、そうだ。楽しそうに服を着替えさせたり、メイクやら、髪型弄っていただろ、…少しは楽しめたか?」
「ふざけるな、……ふざけるな、そんなことが!」
　姫和は大声でその行いを避難する。だが、トーマスは続けて言う。
「許されないってか?だが、この世の中を見てみろ、お前達の制服な、影で胸を強調するデザインだとか、派手だとか、普通じゃありえない奇抜な服装だとか散々言われているのを知っているか?」
「だから何だ!?」
　姫和はトーマスを強く睨むことしか出来なかった。言いたいことが少しずつ分かってきたからだ。
「俺とお前達、伍箇伝のやっていること、どう違う?奇抜な衣装を着せ、御刀に選ばれた特別な存在だと言い武器を使って切り刻むことを教えるそんな教育という名の洗脳を施し、戦わせていることを!……まるで俺がさっき言った少年兵そのものじゃないか。」
「そんなことは無い!私は先祖の業を――――。」
「お前さんの言っている先祖は正しかったのか?それとも神様がそんなことを言ったのか?刀持った女児を戦わせるとは、とんだ悪趣味な神様だな。しかし、そんなことを言うんだから優を殺しちまうのか?」
　姫和は、〝優を殺す〟という言葉を聞き、押し黙ってしまう。
「……いや、そんなことは。」
「だろうな。あの子供はそのために造られたような兵器だからな。」

姫和は驚いてしまう。それはどういう意味かと……、
「ノロの軍事利用は刀使の身体能力を上げるためだけが目的だと思ったか?違うな、一般人でも刀使を倒すためだ。」
「!?それって、どういう……。」
「そのままの意味さ、国はお前達を恐れたんだ、獲得工作か何らかの理由によってお前達が俺達を裏切った時の対抗手段として、ノロで強化し荒魂に飲まれないよう殺人に抵抗感を抱かせず、命令に疑うことも無く、自らの犠牲を払ってでも目的をこなす子供を造ったんだ。そうすりゃ、相手は子供だから心理的動揺を突けるし、暗殺もしやすい。」
「まさか……そんなことありえない。」
姫和は信じられなかった。この男は嘘を並べ立てていると思った。もし、認めてしまえば、自分達があのような子供を生んだといえるから。
「嘘だと思うか?実際、アメリカ海軍の少佐だったときに聞いた話だ、お前は優を殺すことに戸惑っている。先祖の業を忘れ、殺していないのが証拠だ。刀使失格だな?」
トーマスは折神家を糾弾するために優と姫和は必要だと思っていたので、荒魂を恨んでいる姫和に優を殺さないように釘を刺していた。
「……違う、私は。」
姫和はトーマスの胸倉を掴んでいた腕を離してしまう。
「違わない。……そう言えば、もう一つ言うことがあったな。」
もう何も言わないで欲しい。何も聞きたくなかった。
「俺の故郷はアメリカなんだが、そこでシリアルキラーに多く見られる共通点があるんだよ。」
姫和は耳を塞いでおきたかったが、何故か耳を傾けてしまった。
「それはな、幼少期に女物の服を着せることだよ。……で、姫和おねーさまは次は何を着せるんだ?巫女装束か?水着の方が好みか?それとも、何かのアニメのコスプレでもさせるか?」
姫和はそれを聞いた瞬間、怒りに任せトーマスの顔面を思いっきり殴った。

「……もう話は終わりか？なら、退室させてもらう。」
姫和は涙を流しながら退室し、足早と部屋を退室していった。
「……言い過ぎじゃないか？」
フリードマンはトーマスを強く非難していた。
「事実を言ったまでだ。」
「刀使が羨ましいからって、そこまで言うかね。」
「何の話だ？」
「君はベトナム戦争から帰ったとき、赤ん坊殺しだとか言われたことを根に持っているんだろ。その逆に、彼女達は賞賛されている。それが、気に食わないからあんなことを言ったんだ。」
「俺がそんなことをするか？」
「現に今している。」
フリードマンの言い分をトーマスは静かに聞いていた。
「……煙草が欲しいな。」
トーマスはそれだけ愚痴るように言っていた。

人と穢れの違い

刀剣類管理局本部内――――。

結芽は真希と夜見が本部内にある医務室へと担架で運ばれているところを生気を失った目で見ていた。真希は腹部に3発の銃弾を受ける重傷だったが、一番酷い状態なのは夜見である。夜見の左足の足首は強く捻挫しているが、左足の膝関節と左腕は骨折しているうえ、鳩尾と腹部辺りにアザが出来ており、完全に治癒するまでは出撃は不可能となっていた。

そして、結芽は一人のＳＴＴ隊員にあることを尋ねていた。

「ねえ、真希おねーさんと夜見おねーさんをあんな風にしたの誰？」

「……鎌府女学院の制服を着ていたこと意外は……。」

「そっ、分かった。」

結芽はそれだけ聞くと、踵を返すが、何故か自らの過去と自分の両親の事を思い出していた。

真希も――――、

夜見も――――、

寿々花も――――、

紫様も――――、

結月学長も――――、

何もかも自分から離れて行き、居場所が無くなってしまい、不気味な白い部屋に白いベットという居場所に戻されるんじゃないかという焦燥感を抱いてしまった。

（……絶対、絶対に許さない。）

その鎌府の制服の子を必ず見つけ出して、真希と夜見の仇を取るということ、〝親衛隊〟という大切な居場所を守るということを自らの御刀ニッカリ青江をしっかりと握りながら決意していた。

一方、潜水艦ノーチラス号内にて、治療を終え私服となっているロークとコック長が食堂で何やら英語で喋っていた。
「〈……でかい鶏肉だな、太らせる気か？〉」
「〈これから、パーティーだからな。テーブルの用意をしろ、豪勢な食事を提供してやる。〉」
ロークは鶏肉やらＷＡＬＴＳというオレンジジュースやらを持って来たコック長の手伝いをしていた。可奈美達の辛労をねぎらうためにささやかなパーティーを行おうとしていたのだ。
「〈ロークはお嬢様方を呼んできてくれ。日本語が解るのはお前とトーマスだけだ。〉」
コック長はそう言いながら、日本語が喋れるロークに注文していた。
「〈分かった、お嬢様方のエスコートをしてくるよ。〉」
まだ、治療中で病院食を食べているエレンをパーティーに呼べないのを心苦しく思いながら、可奈美達を呼びに行った。
数分後、ロークは可奈美達を食堂へ案内していた。
「……今度は何の用だ？」
「あれ？でも良い匂いがするよ。美味しそうな匂い。」
さっきのトーマスの事もあって姫和は警戒するが、可奈美と驚異的な回復力で復活した優は、食堂から美味しそうな匂いがして期待していた。其処には、山中で共に戦ったトーマスの部下達がせっせと食事の用意と飾り付けをしていて、累と薫は既に食卓に着いていた。
「……キレイだね。」
優は自分達を暖かく迎え入れてくれる『Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｍｏｋｕｓａ．』と書かれている垂れ幕。見るからに高そうなテーブルクロスを敷かれた食卓の上に、高価そうな燭台とフルーツの山が飾り付けられ、これまた豪勢な食事に驚いていた。
「どういうつもりだ、貴族の真似事か……？」
姫和は何が起こっているのか良く分かっていなかった。それを見たロークは、

「お嬢様方とその小さなナイトに、三ツ星の味と最悪のサービスが売りのレストランの最高の御席を御用意させて頂きました。どうぞ、こちらへ。」

ロークは可奈美達を食卓の席まで案内し、座らせていった。

「お姫様方、テイスティングを。……本当はローストチキンにはシャルドネやリースリングといったワインが良いんだけど、それはこの戦いが終わった後も生き残ってからのお楽しみってことで。」

可奈美達にロークはワイングラスに不釣合いだがオレンジジュースを注いでいく。それを飲む姫和は、

「……うまい。」

と言って、少し感動する。冷めていた心が少しずつ解けていく。

「これは、自慢のシェフが作ったチキンです。」

〈これを食べてから美味いって、言って欲しかったな。〉」

そして、ロークは給仕係の様に優と姫和、そして可奈美にメインディッシュのローストチキンを置いていき、コック長はそんなことを英語でぼやいていた。可奈美はそのローストチキンを一口食べて、

「……これ、すっごく美味しいよっ!!」

笑顔で可奈美はそうロークに伝えると、日本語が分からないコック長はロークに可奈美が何を言ったか訊いていた。

〈何を言っているんだ?〉」

〈美味しいってさ。〉」

〈当たり前だ、と伝えてくれ。〉」

コック長はぶっきらぼうにそう言うが、顔は綻んでいた。

「それじゃ、始めよう。乾杯!…cheers!」

ロークの乾杯を合図に、累と薫、飾り付けを終えたロークの部下達は食卓に着き、大勢の人数でパーティーを楽しんでいた。

可奈美が優にフルーツを取って来て、皿に盛り付けていったり、薫がトーマスの部下達の分を掠め取ろうとし、怒られていたり、累とロークがそれら一人一人を見守っていたりしていた。

その光景を一つ一つ見ていた姫和は両親が居た頃を思い出し、目に涙を浮かべる。

「姫和ちゃん……？」
　可奈美は姫和が泣いていることに気付き、声をかける。
「……コック長、辛くし過ぎじゃね？」
「〈コック長、辛くし過ぎだろ。〉」
　薫は日本語で、ロークは英語でコック長に姫和が泣いていることを誤魔化すため、コック長にダメ出しをした。そのため、コック長は意図を理解し、「Ｏｈ，……ｓｏｒｒｙ．」と答える。
「……いや、済まない。…そうじゃないんだ。……凄く美味しい。……今まで食べた物より凄く美味しいんだ。」
　姫和は、そういえば、こんな風に大勢で食事をしたのは何時以来だろう。そんなことを思ってしまい、このパーティーで両親と一緒に居た頃を思い出して涙を流していた。
「それは、良かった。……それで悪いけど、少しお願いがあるんだが。」
　それを聞いたロークは可奈美達にとあることを願い出る。
「……何です？」
　可奈美がローストチキンを頬張りながら答える。
「……俺達の仲間が二人やられたろ？それをエレンには黙ってて欲しいんだ。」
　ロークは真面目な顔でそう言ってきた。
「……何でなんだ？」
　姫和は、ロークに顔を見られない様にしてそう答える。今の自分の顔を見られたくないのと、何故そのようなことを言ってきたのか分からなかったからだ。
「エレンがさ、研究職に行きたいらしいから、俺達の仲間が死んだことを気に病んでその足を引っ張る訳にいかないし、それにマイケルとシェパードの二人も敵にやられたなんて情けないこと言われたくないだろうから。……だから、黙っててくれ。」
　エレンが研究職に専念してもらいがために、ロークは可奈美と姫和、薫、そして優にそうお願いしていた。
「あっ、はい、分かりました。私もエレンちゃんの夢が叶って欲しいですから。」

「俺も。」
「良いよ。」
「……はい。」
　可奈美と薫、優はそろって承諾するが、姫和は優を見た後に可奈美を見つめると暗い表情をして応える。
「皆、感謝するよ。」
　ロークは可奈美達が承諾してくれた事に安堵する。
（……。）
　ロークのお願いで、姫和はこれまでのことを思い出していた。
　母が成し遂げられなかった事から始まり、可奈美の思いを知る事ができたがそれが叶わない可能性が高いことを秘匿しなければならない自分、そして今のローク思い。それらの思いが姫和に重く圧し掛かって来るようだった。
「姫和ちゃん？」
「……んっ？可奈美何だ？」
「姫和ちゃん、何か元気無さそうだけど。」
「そっ、そんなことないぞ、……ただ、此処まで来るのにいろいろあったなと思って。」
「そっか、……姫和ちゃん、これだけは言えるよ。私の剣が守る剣なら私は、姫和ちゃんの目的と、優ちゃんと姫和ちゃんを守るよ。」
「それは……、人斬りの手助けをするという事だぞ。」
「違うよ、姫和ちゃんは御当主様、…人に化けた荒魂を斬るそれだけだよ。それ以外は私が斬らせない、それが私の覚悟だよ。だから、姫和ちゃんの重たそうだから、半分私が持つよ。」
　可奈美は姫和が一人で抱え込んで、苦しんでいるように見えた。だからこそ、可奈美は自分なりの覚悟を語り、姫和の負担を少しでも減らそうとしていた。
「……そうだな、ありがとう、それが叶ったらまた三人で一緒に遊びに行こう。」
「うん！」
　この日、姫和は可奈美と優の三人であのときのように遊ぶ約束をす

る。……優が元通りになる確率は低いことと、大荒魂を鎮めるには自らの命と引き換えに大荒魂を隠世に引きずり込むというものであり、二度とこの世には戻れないことを隠しながら。

そうこうしている内にこのパーティーも終わる頃になる。

「ちょっと皆良いか?…注目してくれ、マイケルとシェパードに。」

ロークはグラスを掲げて言うと、この食堂に居る者全員はマイケルとシェパードに黙祷していた。

そして、次の日の朝食はとても侘しい物であったと姫和と可奈美は記憶する事になる。

「報告は以上です。」

舞草の最大戦力の一つ潜水艦ノーチラス号にて、トーマスはパーティーに参加せず自室で、舞草の上層部とトーマスの本来の雇い主であるＣＩＡの高官にノートパソコンの通信から先程の山中の戦闘の報告をしていた。

『トーマス、彼は必要かね?』

ＣＩＡ高官が、優に対してトーマスがどのような評価を下しているか質問する。

「戦力として見れば親衛隊を退ける程ですので充分でしょう。しかし、あの子供は折神家にとってみても、舞草にとってみても、我が祖国にとってみても核爆弾のような〝物〟ですからな。」

『……あまり騒ぎ立てて、ノロと人体の人体実験を折神家が主導していたことが発覚せずに、事態を収拾することは貴方方も望んでいることでは?』

舞草の幹部の一人が意見を述べる。

『確かに、このような事が発覚し日米両政府に責任が問われ、遂にはノロの軍事利用が各国共に活発化するのを避けたいからこそ、兵と潜水艦をあなた方に渡しましたが、あの子供を保護する理由が特にありま

せんが？』

　アメリカ政府のＣＩＡ高官は、政府からノロの管理を一任されている折神家の当主が大荒魂であり、そのうえノロの人体実験を行っている主犯だと発覚し日米両政府に責任が飛び火するのを恐れたため、折神家主導の刀剣類管理局ではなく、自分達が支援する舞草主導の刀剣類管理局にするためにトーマス達と潜水艦を舞草に送ったこと、優を永遠に折神家に対して使えるカードとしてこの世から存在を抹消し、早々に処分すべきと言っていた。

『ゆか……局長の中に居る荒魂が例の子供にも宿っていたら、舞草の戦力で処理できるでしょうか？幸い、〝柊の娘〟を確保出来ましたが、一人しか居ませんので今はそのときではないと思います。』

　舞草の幹部の一人真庭　紗南は優の中に居るのが大荒魂であるという報告を聞いているため、すぐに〝柊の娘〟こと姫和の五段階の迅移で姫和と共に隠世の彼方へと逝ってしまえば。紫の中に居る大荒魂と対峙したとき、こちらには対抗手段が無いので、今はすべきではないという主張を紗南はしていた。

『……となれば、荒魂同士殺し合わせるのが、一番ということかね？』

「それがよろしいかと。」

　トーマスは紗南が何か言う前に、それが当然のように答える。紗南は何か言いたそうな顔をしていたが、トーマスは気にする事も無く続けていた。

「それに、〝柊の娘〟と〝例の荒魂〟ですが、話していて気付いたのですが何か特別な関係になっていると見受けられます。」

『……と言うと、どういうことかね？』

　トーマスの姫和と〝例の荒魂〟こと優の関係に対する私見をＣＩＡ高官に話すが、ＣＩＡ高官は話の意図が分からなかった。

「〝例の荒魂〟は鎌府がノロの軍事利用から産まれた刀使に対抗できる兵器。つまり、本来なら殺し合うべきですが、その〝柊の娘〟は〝例の荒魂〟を慈しんでいたり、その話を聞いても斬ろうとはしなかったことを鑑みると、何らかの特別な感情を抱いていてもおかしくはありません。それを利用して〝柊の娘〟を戦いに引き込むというのが

一番だと考えられます。」

つまり、トーマスは姫和が優のことを大切な存在になっているならば、それを利用して大荒魂との戦闘に引き摺り込み、最終的には舞草のために戦ってもらおうという魂胆であった。

『可能かね？』

「〝柊の娘〟の友人らしき人物を説得しましたので、その友人は〝例の荒魂〟の姉で、姉についていく習性が〝例の荒魂〟にあるようなので、〝柊の娘〟は付いて行かざるおえないでしょう。」

トーマスは可奈美を優は荒魂である事をバラすと言ったり、優を元通りにする事ができるように教えたりして、舞草に協力しなければならないように誘導。これにより、可奈美は舞草に協力することになり、優もそれに付いて行くことになれば、二人のことが大切な姫和も付いて行かざるおえない状況に追い込むことができるため、優と可奈美を利用しようという話をトーマスはしていた。

『なるほど、それならその子供にノロを集約させれば、何も問題は無いか……。』

「刀使に対抗する兵器に、こんな使い方が有るとは私も思いませんでした。」

ＣＩＡ高官はそれなら生かしておく理由になると納得し、トーマスもこれを思い付いたときは、ノロ漬けの子供にこんな使い道もあるのかと思ってしまったほどであった。

『……。』

紗南は無言でその話を聞き、それ以外の舞草の他の幹部達はその考えに揃って賛同していた。

「以上で、よろしいでしょうか？」

『……特に問題は有りません。』

紗南はそれだけ言うと、この会議の終了を宣言し、通信の回線を切ると、それに倣って他の舞草の幹部達も切る。そして、ＣＩＡの高官だけがトーマスとの通信を繋げたままとなっていた。

『〈〝柊の娘〟をそうやって追い詰め、自らの任務を完遂しようとするとは、流石だ。〉』

「〈少年兵（刀使）には複数の少年兵（荒魂）を、そのうえ、敵陣中枢で死亡してくれれば体内にあるノロがスペクトラム化、荒魂となって敵を壊滅させるという計画を思い付く貴方方ほどではありません。〉」

お互い英語で喋りながら、ＣＩＡ高官は感心したという事をトーマスに言うが、トーマスは無表情でそう切り返した。

ノロの軍事利用は清らかな子供（刀使）が穢れた子供（少年兵）に殺されるという計画の他にも、一つのチームにノロを投与させ、敵部隊の中枢でノロのスペクトラム化を起こし、刀使の居ない敵部隊を壊滅するという計画でもあった。だが、ノロを世界各地にばら撒けば、刀使の数を増やさなければならなくなるので、結局は折神家の権威と権力を集中させることになるため、この計画は中止したハズだったが……。そのことにトーマスは疑問に思う。

『ノロで強化された人間の戦闘データをこれからも収集してくれ、引き続き可能であれば彼女の暗殺もだ。』

米軍にも影響を与える刀剣類管理局の権威を下げることと、今も政府によって御刀とノロの管理を任されている折神家がノロの人体実験を行っているということを隠蔽するため、紫の暗殺をトーマスに依頼したＣＩＡ高官はそうトーマスに言っていた。

「承知しております。」

トーマスはそう言うと、ＣＩＡ高官はトーマスとの通信を切り、一人物思いに耽っていた……。

（しかし、刀使を見ていると、あのベトナムの悪夢を嫌でも思い出す……！）

今回の仕事は、反米国家の反政府勢力を焚き付けて親米国家にする工作よりも、敵国の銃を敵国の友好国にばら撒いて関係を悪化させたりする工作よりも、面倒な仕事を引き受けてしまったと思うトーマスがそこに一人ポツンと居た。

姉と……。

　其処にはその先が見えないほどの長い階段と鳥居が有って、私のお母さんがそこに居た――――。
「男子三日会わざればって言うけど、どうしてどうして捨てたもんじゃないね。良い顔している。」
　私は長い階段に座り、その反対側にお母さんが一緒に座っていたことに気付いた私は、
「えっ、そ、そうかなぁ？」
　と答えていた。私もそれを優ちゃんに実践すれば少しは変わってくれるかなっと、思ってしまう。
「何か覚悟を決めたね？」
　お母さんが私の心を読んだかのように言ってくる。
「友達に比べたら、大した事じゃないよ。……でも、頑張るって決めた。」
「……なんで？」
「私は、その子を死なせたくないから。」
　そのときの私の言葉に嘘偽りは無い。姫和ちゃんは優ちゃんと仲が良いから、きっとその繋がりを優ちゃんも大事にしてくれるハズ、だから私が強い刀使になる時までの時間が延びると思ったから、姫和ちゃんも大切な友達の一人。
「うんうん、分かるよその気持ち。私もさ、友達のためなら命の半分は惜しくも無いし。」
「そこは、全部じゃないんだ……。」
　でも、私とお母さんの気持ちに〝ズレ〟が有るように何となく感じた。でも、そんなことをあっけらかんと言うお母さんを見ると、そんなことを考える私は自分自身のことを卑屈な人間だと思ってしまい、自己嫌悪してしまう。
「そんなことより可奈美、早くやろうやろう！」
「うん、今日こそは一本取るからね！」
　私は勇ましいことを言って、お母さんに挑むも、結果はほぼ負けと

いう結果に終わってしまう。そして、お母さんが、
「……可奈美、何か悩んでいる？」
「えっ、そ、そんなことは「嘘っ、顔に出てる。」……。」
また、嘘吐くときの癖が出たのかな？直ぐにバレちゃった。
「ほれ、言ってみ。」
その言葉が今の私には辛いことを吐き出せる瞬間だと思った。だからお母さんには正直に言った。
「……ねえ、私は間違っていたのかな？」
「何を？」
「何で私の弟は暴力的なことを止めないんだろう。」
「……。」
「私、何か間違っていた？何も間違っていないよね？なのに、何でなの……。」
「可奈美。」
「御前試合の代表に選ばれるほど強くなっても、命懸けで無刀取りをやっても他人を傷付けることを止めないし、人を殺さないって約束をしても優ちゃんは他人を傷付けたり、優ちゃん自身が私のために傷付いて帰っていく。……それが辛いの、だから全てを薙ぎ払って、全てを守れるような力が欲しかった。そうすれば優ちゃんは戦わなくて済むハズ、……なのに、なのに何で何年経っても叶わないの？ねえ、どうして？どうしてあの子は酷い目に遭っているのに何で止めないの？あの子は私が救ってくれたから当然って言うけど私は何もしてないのに、何かしたことは無いのに、舞衣ちゃんみたいに姉らしいことも出来なかったのに、……どうして、私のためにあそこまでするの？聞いてみれば良いって言うかもしれないけど、それが今は怖いの!!何をするか分からない、分からないの……。」
お母さんは私の独白を黙って聞いてくれていた。そして、私の独白はまだ続いていた。
「神様は一体何をしているの？何を見ているの？どうして、御刀は女の子ばっかり刀使にするの？……ねえ、知ってる？優ちゃんは特撮モノのヒーローに憧れていたけど、叶いそうにないから私のために諦め

たの、男の刀使がこの世に居れば、この世に有れば！優ちゃんは可笑しな子供だと言われなかったし！苦しまずに済んだ!!……私は皆に騙す必要も無かった。ねえ、どうしてそんなに神様は悪趣味なの？何か意味は有るの？教えてよ。」

「そうだね、……でもそうやって悩むことも必要なことだよ。」

それを聞いた私は「それって、どういう意味？」と聞く前に夢は覚めて、そして忘れる。そして、私は起こしてくれた姫和ちゃんに付いて行って朝食を取りに食堂へ向かう。昨日は晴れ晴れとした気持ちだったのに、今日は何か辛い、……何でだろう？

刀剣類管理局本部内の一室――――。

「沙耶香、来なさい。」

「……はい。」

雪那にそう命じられた沙耶香は席を立つと、雛鳥の様に雪那の後に付いて行く。

（親衛隊が二名もやられ出撃が困難な状況となれば……。）

雪那はそれだけ考えると、沙耶香をチラリと見る。

沙耶香がかつての自分の戦友とも言うべき妙法村正に選ばれたとき――――。

沙耶香はあまり自己表現が苦手だったが故に一つ一つ教えるのに苦労したとき――――。

沙耶香が――――。沙耶香は――――。

様々な思い出が蘇っては消えるのを繰り返していた。何も思わないことは無い。天才刀使にするまで苦労して育てた沙耶香をノロを継ぎ足して強化改造することに嫌悪感を抱かないことはない。しかし、此処で立ち止まれば今まで犠牲になった者は報われない。ただ、死んだだけになってしまうのだ。それが何よりも許せなかった。

（認めてもらわなければならない。……鎌府、いや、沙耶香を！）

紫に沙耶香のことを『完璧な刀使』として認めてもらえば、ノロを

体内に入れられた人間のことを奇異の目で見られることは無くなる。ただの犠牲ではなく、少しでも意義の有る犠牲とするために、そう思い雪那は行く先が煉獄であろうとも前へ、前へと進まなければならなかった。

途中、美濃関学院の学長江麻とその生徒である舞衣を見かけるが、声をかけずに通り過ぎようとしたが――――――、

「沙耶香ちゃん！」

沙耶香を呼び止める声が聞こえ、その方向に目を向けると、舞衣と沙耶香が楽しそうに談笑しているのが見えた。

「出られて良かったね。」

「……うん。」

「私達も今、美濃関に帰る事になったの。」

「……そう。」

沙耶香が少し寂しそうな顔をしていたことを雪那は見ていた。

「じゃあ。」

そして、舞衣はまた会えることを夢見ながら、沙耶香から別れようとするが、

「？」

誰かが裾を引っ張っていることに気付き、舞衣は振り向くと沙耶香が裾を引っ張っていた。舞衣は沙耶香が何か話したいことがあるのかと思い、立ち止まる。

「……クッキー美味しかった。」

「うん、ありがとう！良かったら、また作るね。」

「……うん。」

「ねえ、携帯持ってる？良かったら連絡先を交換しよ？」

「うん。」

沙耶香はポケットから携帯を取り出すと、舞衣と連絡先を交換しようとする。

「沙耶香っ!!」

突然の雪那の大きな一声により、沙耶香は「はいっ。」と答え、直ぐに雪那の元へ駆け寄った。

「……。」

雪那は少しだけ沙耶香を見つめると、携帯を取り上げ、あの美濃関の生徒舞衣の連絡先を削除すべきか考えた。だが、あまりにも酷い事を考えている自分が居る事に気付き、己を嫌悪し、直ぐに取り止めることにした。

「行くぞ。」

そして、自分を誤魔化すように沙耶香に付いて来るように言うと、歩き出した。

進む――――、進む――――、

ただ進む。死刑執行の場へと赴く死刑囚のように重い足取りで、沙耶香と一緒に歩いていた。そして、研究所に到着し、沙耶香を手術台の上に寝かせ、安静にさせる。

「……沙耶香、貴女は私が見つけられた唯一の最高の器。」

ノロのアンプルをじっと見つめる雪那は更に呪詛を呟く。

「これは紫様から私が、いや鎌府に直々に命じられた大いなる研究の成果。これを満たしたとき、貴女という器は完成するの。何も考えず、何も感じることは無い。」

「学長、ノロのアンプルはまだ完成品ではありません。」

ノロと人体の融合を研究している現在の研究主任が雪那に、沙耶香へのノロの注入はまだすべきでは無いと抗議していた。

「分かっている。しかし、親衛隊の被検体三名が負けたのだ。例の組織の連中も我々同様の研究を成功し、実戦投入している疑いが有る。なら、紫様の御身を守るためには彼女の強化は必須だ。」

「……しかし。」

「分かっている。成功すればそれで良し、失敗すれば私の独断と言って置いてくれ。」

研究主任もそれを言われると何も言えないのか、黙ってしまい、事の推移を見守るしか無かった。

「……何も?」

それは、私が感じた熱くなった気持ちも感じることが出来なくなるのだろうか?

それは、私が感じた暖かい気持ちも感じることが出来ないのだろうか？

そうなった私は、それで良いのだろうか？沙耶香は一瞬、それを思ってしまった。

雪那はノロのアンプルを沙耶香の首筋に近づけ、頬に可愛らしい絆創膏を見つける。誰かが気を使って傷に貼ってくれたのだろうか？ならば、失敗し沙耶香が荒魂化したときのことを考え、その誰かが荒魂化した沙耶香に気付くことがないようにするため、その絆創膏を剥がすことにした。

「あっ。」

それに沙耶香が反応したことに気付かなかったため、雪那は沙耶香の次の行動に驚くことになる。

沙耶香が、雪那のノロのアンプルを持つ手を払い退けてしまった。それに、雪那は驚愕の表情で沙耶香を見つめる。

「……沙耶香？」

（……私は……？）

そうして、沙耶香は御刀を持って窓に向って走る。

「沙耶香、待ちなさい!!」

雪那は止めようとするが、それすらも聞こえていないのか、それとも振り払ったのか、それすらも理解できぬまま沙耶香は窓を割って、外へ逃げて行った。

「……ここは任せるっ！」

「はっ、はい。」

雪那に強く言われた研究主任はそう返事するしかなく、雪那の後ろ姿を黙って見るしかなかった。

（……本当はこれで良かったんじゃないかな、最近のあの人を見るとそう思う。）

何かから逃げるように酒とタバコに溺れる雪那を見ていた研究主任はそうは思っても、他の研究員と共に沙耶香が割ったガラス片を片付けるしかなかった。

沙耶香は衝動的に外へ逃げ、何となくコンビニへ寄り、どうしてなのか舞衣に夜遅くに電話をかけていた。
『もしもし!?』
「!」
舞衣が電話に出てくれた……。それだけなのに、沙耶香は次の言葉が出てこない。任務をこなす、言う事を聞くだけしかしていなかった沙耶香は他人とコミュニケーションを取るのが極端に苦手だったのだ。そのため、
「……あっ、……えっと……。」
どういう風に喋れば良いのだろうか?
ただ分からない――――。
舞衣がどんな人か――――。
どんなふうに優しい人か分からない――――。
こうやって、間が空くだけでも沙耶香は辛かった。何かが咽の奥に引っ掛かっているような感触、思考が定まらず焦る気持ちが積もっていき、出口の無い迷宮へ入ってしまったかのような感覚に囚われ、不思議な間が二人の電話の中で出来てしまう。
『どうしたの、沙耶香ちゃん?』
それを聞いた沙耶香は、抜け出せない迷宮に救いの手が差し伸ばされたような気がした。だが、
「あっ、あの……。」
どう喋れば良いのか分からない。……何を話題にすれば良いのだろう?何の話題にしたら良いのだろう?思考が定まらない。今の答えで良いのだろうか?そんな不安を抱いていたが、
『早速ありがとう、電話をかけてくれて。……夜更かしさん同士、少しお話しよっか?』
問題無いようだったことに沙耶香は少し安堵するが、コンビニの店員に少し見られていたので、外に出て話すことにする。
『大丈夫、ちゃんと聞いているから。』

「……あの。」
『んっ？』
　少しだけだが電話をして、話して、心が弾む。しかし、何を言えば良いのか分からなかったことと、舞衣に迷惑がかかるような気がしたので早々に電話を切ることにした。
「……やっぱり、何でもない。」
　それだけ言うと、沙耶香は携帯電話から耳を離すと目を閉じて、
『えっ、沙耶香ちゃん？』という舞衣の声を気にも留めず、終話ボタンを押してしまった。
　無意味な静寂が訪れる。携帯に登録されている舞衣の字を見つめ、沙耶香は戸惑っていた。
「……どうして、私。」
　何故、逆らったんだろう。その考えだけで頭の中がぐるぐる回っているようだった。
「ずっと、言う事聞いてきたけど、アレが入ってくると、……消える、消えちゃう。」
　沙耶香はノロのアンプルを見て恐怖を覚えた、何か大切なモノを失いそうで……、理由は分からない。しかし、沙耶香自身が空腹であるという音が鳴り響き、どうしたものかと考えてしまう。
「あっ！」
　声が聞こえ追っ手が来たと勘違いした沙耶香は逃げ出す。
「待って、沙耶香ちゃん！」
　ついさっきまで聞いていた声に呼び止められ、沙耶香は振り向く。そこには舞衣が居たため、沙耶香は口を開けて驚いてしまう。
「見つけた、沙耶香ちゃん。……遅くなってゴメンね、この辺りのコンビニ全部回っていたから。」
「なん……で…私何も……。」
　そして、再び空腹を知らせる音を沙耶香が鳴らしてしまい、舞衣に気付かれてしまう。
「お腹減ってるの？じゃあそこのコンビニで、…でも中学生が夜中に買い食いなんて駄目だし……。あっ、そうだ！」

舞衣はそう言うと、ポケットの中からお手製のクッキーを出し、沙耶香に渡そうとする。
「あっ、……クッキー。」
沙耶香は食べるべきかどうか悩むも、空腹には勝てなかったし、それに好意を無下にはできなかった。そのため、沙耶香は申し訳無く思いながら食べ、舞衣の話しに付き合っていた。内容は上の妹は基本的にわがままで、舞衣を困らせるのが趣味ではないのかと舞衣自信が疑う程であるらしい。
「その癖ね、本当に困ってる時に限って『助けて～。』なんて絶対に言わないの。おかしいね、バレバレなのに。」
「なんで…わかるの？」
沙耶香はそれが不思議だった。何故、仲違いしないのだろうか？
「分かるよ、だってお姉ちゃんだもん。」
（あっ、…これあの時と同じ……。）
舞衣に抱きしめられる沙耶香は、可奈美に握手してもらったときと同じだと思い、この暖かい気持ちは何なのか考えていた。
「沙耶香ちゃん、み～つけた。」
しかし、沙耶香を探していた結芽に見つかってしまう。
結芽が沙耶香を探していた理由は、雪那が沙耶香のことを探し回っているのを見て、結芽は自分が見つければ自分のことを認めてくれる人が増えるかも知れないという考えで探していたからであった。
ただ、自分を認めて欲しいが故に……。

心が揺れる

話は遡り、舞衣は着信名が沙耶香と表示されていたところを見て、沙耶香からの電話着信だと思い、電話に出る。
「もしもし!?」
『!……あっ、……えっと……。』
しかし、不思議な間ができたことから、沙耶香は何を喋っていいのか困っていることを見抜いた舞衣は沙耶香に優しく声をかける。
「どうしたの、沙耶香ちゃん?」
『あっ、あの……。』
「早速ありがとう、電話をかけてくれて。……夜更かしさん同士、少しお話しよっか?」
良かった、この子とは仲良くできそうだと思い、舞衣は笑みを浮かべる。
夜更かし同士、少し喋りながら、孫六兼元の刀身を布で拭き、その御刀に映る自分自身の姿が酷く歪んで映っているのにも気付かず、純真そうな顔で笑っていた……。

「沙耶香ちゃん、見~つけた。」
話しは戻り、沙耶香を見つけた結芽は笑顔でそう答えていた。
「貴女は、親衛隊の?」
舞衣は彼女のことを思い出していた。確か、折神家親衛隊の四席であったろうか?何にせよ、舞衣は結芽を警戒していた。沙耶香に何をするか分からないからでもあるが、
「じゃあ、帰ろっか?高津のおばちゃんが待ってるよ。」
沙耶香は怯えた顔をして、数歩後ろに下がる。
「あれ?もしかして帰りたくない?そっか~困ったな~。…ね、どうすればいいと思う、お姉さんっ?」
舞衣はこの後、どうやってやり過ごすか考えていた。親衛隊相手に真正面から戦って勝てるとは思えないし、何より沙耶香が嫌そうだっ

たので見捨てることができなかった。
「沙耶香ちゃん？」
「私が帰ればそれで済むから…。」
舞衣は沙耶香が自分から離れて行くことに気付き、沙耶香を呼び止めてしまう。
「沙耶香ちゃんはそれで良いの!?」
「！」
舞衣の声に反応し、沙耶香は止まってしまう。
「私、沙耶香ちゃんの事情とか全然知らないけど、本当に良いの？聞かせて、沙耶香ちゃんの気持ち。」
沙耶香は舞衣の言葉を受けて、小刻みに震える。だが、沙耶香は声は小鳥の囀りのように小さかったが、どうにか勇気を振り絞って、素直に本当の自分の気持ちを絞り出した。
「私…嫌……。」
その答えは、拒絶であった。
「嫌……だ……。」
一つ一つは小さかった。だが、確かな、そして強固な意志を沙耶香は絞り出す。
「……うん、分かった。」
舞衣もそれに応えるかのように、強く頷く。
「じゃあさ～、鬼ごっこしよっか？１０数えるまで待っててあげる。それまでに私から逃げ切れたら、見なかったことに、知らなかったことにしてあげる。…いーっち。」
「沙耶香ちゃん！」
邪悪な笑顔のまま何事も無く数を数え始めた結芽に、舞衣は八幡力を使って沙耶香を連れて撤退を選択した。
（そうこなっくちゃ、そうじゃなきゃ私の凄いところ、見せられないじゃん。）
心の中で一人そう呟いた結芽は、その後も律儀に１０数えるまで待っていた。
一方の舞衣はいつもなら当ても無く逃走するが、今回に限っては冷

静に、周囲を見渡し、戦闘を想定し2対1の状況を上手く有利に持ち込める場所を探していた。できれば広い平野であれば良いと思っていた。しかし、

「！」

舞衣は自分が望む戦場に到達する前に結芽に見つかってしまい、数度の打ち合いをしながら後退したため、何処かの神社の境内が刀使同士の真剣勝負の場となってしまった。

「ちっ……。」

しかし、舞衣は口角を上げ笑っていた。心が躍っていた、いつもやっている荒魂を斬ることとは違う興奮が舞衣を更に活力を与える。

「もうお終い？まだまだこれからだよね⁉」

口角が上がり笑っている舞衣を見て喜んだ結芽は、得意の平突きで躍りかかるが、沙耶香が払い退けたのでターゲットを沙耶香にする。

「わぁ～、なんちゃって。」

しかし結芽は追撃を防ぐため、左足を狙った足払いと薙ぎ払いで間合いを空けると、沙耶香からの反撃の上段斬りを薙ぎで軌道を逸らし防御するだけでなく、流れるような薙ぎ払いと突きで沙耶香を退がらせると、沙耶香を追う結芽、そのあとは迅移を交じえた激しい剣戟に移る。

（どうして、……私。）

舞衣は上手く沙耶香を援護できないことに苛立ちを覚えていた。あれほど荒魂（怪物）を斬ってきたのに、まるで上達していないような感覚に陥っていた。

「やるねぇ～、沙耶香ちゃん。でもまだ、そんなもんじゃないよね？」

そう煽られ、沙耶香は目を妖しく輝かせるが、突然の舞衣の居合いに驚き中断する。

「びっくりした～。」

しかし、不意打ちの居合いですらも難なく躱されてしまう。

（お姉さんもちょっとはやる人みたい。けど、本当にちょっとだけね……。）

結芽はそう心の中で感想を零し、舞衣をターゲットに変更し、迅移

で一気に間合いを詰め、舞衣の左胸を突く。
「まだまだ行くよっ!!」
そして、舞衣の腹を足蹴りして御刀を抜き、流れる様な剣戟で一気に舞衣を追い詰めていた。
「くぅっ!!」
可奈美との間に隔絶した才能の差、あれほど刀を振るっていても上達しないうえ可奈美との約束を守れそうにない自分自身、それら一つ一つが舞衣を焦らせ、苦悩させた。その証拠に、写しが徐々に剥がれていき、舞衣の顔も口角を上げ笑っていた顔から、鬼のような形相で無理に勝とうとしていた。
「だめ……やめて。」
沙耶香が悲痛な声を出すが、誰も聞いていないのか二人共怖い顔をしながら打ち合っているように沙耶香は見えた。
(痛い…痛いよ……。)
沙耶香は舞衣と結芽の戦いを悲痛な目と悲痛な思いで見ていた。そして、可奈美と舞衣がくれた、あの熱くて、温かい、空っぽの自分を満たしてくれるモノ。それはきっとどんなモノよりも大切で失ってはいけないモノだと解った。
(私は……これを……そして、舞衣にもっ!!)
だから、舞衣にはあの優しさを失って欲しくない。そして、空っぽだった少女は、
「くぅっ!」
舞衣の左腕は肘から斬り飛ばされ、写シが完全に解除される。そのことに舞衣は結芽を強く睨む。
「もうおしまいかな?だったらお休みの時間だよね!」
結芽は峰打ちしようとするが、突然舞衣が消え、空振りに終わる。
「んなっ!?」
何故、そんなことが起きたのか、それは舞衣の上に沙耶香が重なって倒れていることから、沙耶香が舞衣に横から飛びついたからであった。
「沙耶香ちゃん、どうしてそんな危ないことをっ!!」

舞衣は沙耶香が突然飛び出してきたことに危ないからという理由で、怒るが。

「……だって、舞衣が…怖い人になって欲しくないから……。」

「……えっ、えぇ?」

舞衣は驚いた、沙耶香の飛び出した理由がたったそれだけなことに。

「……そんなに怖かった?でも、なんで?」

「私は、貴女に、温かくて、熱くて、空っぽだった私をイッパイにしてくれた。……コレを、私は失いたくない、捨てたくない。」

沙耶香は泣きながら舞衣に自分の正直な気持ちを全てぶつけていた。

「……。」

舞衣は黙って聞いていた。

「だから、だから貴女もコレを失わないで、……捨てないでっ!!」

沙耶香は叫んだ。自分の初めて生まれた感情を――――、

気持ちを――――、

温かさを――――、

優しさを――――、

舞衣も失って欲しくないと叫んだ。沙耶香は目一杯力の限り叫んだ。

「……そっか、ゴメン、沙耶香ちゃん。……ありがとう。」

「うん……私もありがとう。」

舞衣は沙耶香をそっと抱き締め、温かく抱擁した。それを見ていた結芽は――――、

(ナニ……ナンナノ……。)

自分が入学式まで両親に愛情を注いで貰っていた過去、親衛隊の皆と楽しくやっていた今を思い出し、自分の中にドス黒い何かが入ってくるようだった。

(この人達は何をしているの……?)

戦闘のただ中で、沙耶香は舞衣の胸にうずくまっている所を見て、結芽は子供が親に甘えているように思えた。そのことに、

怒りか――――、
悲しみか――――、
それとも別の何かの感情かは結芽は分からなかったが、イラついていた。
「何をしている、結芽っ。」
「鎌府の……高津学長？」
突然の雪那の登場に、舞衣と沙耶香は驚く。
「お前如きの出る幕ではないのよ、下がりなさい。」
「……ハイハイ、分っかりました～～。」
それだけ言うと、結芽は早々にこの場から離れようとする。そして、
（……うん。知ってるよ、知ってる、弱いから群れるんだ。はぁ～～、弱い人達を倒しても……、つまんないから帰ろ。無駄な時間を使っちゃったな。）
結芽は胸を押さえながら、そう思うことにした。弱いから群れると、天才刀使だとか誇大広告に釣られたから呆れているのだと。そう思いながら、結芽は舞衣達から離れて行った。
「沙耶香、ワガママはおしまいよ。さぁ鎌府に戻りなさい！」
「沙耶香ちゃん。」
「うん。」
沙耶香は雪那と舞衣の両方に言われ、自分の足で立つ。
「そうよ沙耶香。お前は親衛隊共のような欠陥品とは違う完璧な刀使にな…「私は…、私は……、あなたが望む刀使にはなれない…ううん…なりたくないです。」え…何を…言ってるの？」
沙耶香は雪那を真正面から見て、強く言う。自分の思いを正直に……。
「空っぽのままでいいと思った。でも…私をいっぱいにしてくれるこの熱……温かさを失くしたくない！……だから、この熱をくれた人ともう一度戦いたい。一緒に居たい。」
「……そう、それで？」
しかし、返って来た返答は冷たい物であった。

「……そう、貴女なの？沙耶香をこうしてくれたのは？」
雪那は舞衣を睨む。
「高津学長、今の言葉は酷過ぎます！」
舞衣は沙耶香の手を握り、雪那に強く言うが、
「どこが？」
それしか返さなかった。
「貴女は……、何処まで、沙耶香ちゃんを何だと思っているんですか!?」
「道具だ。それ以上でも、それ以下でもない。」
「私は、…人を物のように扱うことしかできない貴女を私は認めません。私がいる限り、沙耶香ちゃんをいいようにさせたりはしない！」
「ではお前は何故沙耶香を助けた？」
「私は沙耶香ちゃんは妹みたいで、守らなきゃいけないからです。」
「本当か？沙耶香の力を道具のように利用しようとしただけではないのか？」
かつて、鎌府の学生が沙耶香の力を利用して、荒魂の撃破数を稼いだことを思い出していた。そのことが判明して、沙耶香の面倒をよく見るようになってから『高津学長からえこひいきされている。』などという陰口が言われていたが、雪那としては苦痛ではなかった。
「そんなことは、ありません！ただ、私は沙耶香ちゃんに助けて貰えたから、今度は私が沙耶香ちゃんを守るだけです！」
「はぁ～～？お前にそんなことができるのか？ノロを注入され、ある意味では荒魂に近い沙耶香のことを一生助けてやれるのか!?」
「えっ？」
舞衣は雪那が何を言っているのか分からなかった。
「私は沙耶香を完璧な刀使にするべく、色々なことを実行し、教えていったわ。だからこそ、沙耶香に更にノロを注入しようとした。」
「貴女は……何故そんなことを！」
「……何故？沙耶香を完璧な刀使にするためだけだ。」
「なっ、……何を言っているんですか？」
「刀使になった者はいずれ老い、病、肉体的損傷、才能の優劣、全ての

苦悩に苛まれる。もし、このノロを人体に注入し力とする研究が成功し、全ての苦悩から解放されるとどうなる?そうなれば、鎌府のこの悪辣な研究は人類を救う偉大な研究に変わっていく。」

舞衣は絶句していた。自らの悪辣な研究を偉大な研究に変えるために、沙耶香を犠牲にするということに。

「折神家や柊家のように素質や宿命を連綿と受け継がれ、いつしか親の想像を超える力へと到達してくれる。それと同じく私が行った非道な研究もその責任と宿命は連綿と受け継がれていき、偉大な研究へと変えてくれる。だが、ある意味この非道な研究の親として、犠牲になった者が惨い結末を迎えただけなどと、…親としては、そんな悲劇の結末を望んでいない!!」

「……ただ、そのために沙耶香ちゃんを犠牲にして、切り捨てるんですか!?」

「もしも、私や沙耶香が果たせなくとも、鎌府が私の跡を引き継ぎ、悲願を叶えてくれるだろう。…そして、いずれこの研究が成功すれば、荒魂による事故は激減し、殉職する刀使の数も減ることになる。そうなれば、沙耶香のような刀使が新しい刀使としての姿となる……。そして鎌府の子供達、いや私達の末裔達は幸せになり、勝利と敗北の関係も無く私達の大きな財産となるだろう。そのためなら、私はこの研究の踏み台、道具になっても構わない。……私はそれを誇りに思う。」

このときの雪那は死んでいるような、恍惚とした笑みでそれを平然と答える。これで、黒い袋(死体袋)の中にいた実験に使われた〝子供達〟に少しでも報いることができればと思いながら。

「……貴女は、狂っています。そんなことが許されるハズがない!!」

「……語り聞かせるだけ無駄な話だったな。特に美濃関学院内でも上位の実力者で、温室育ちのお嬢様にはな!!」

「貴女のような人が何を!!」

舞衣と雪那の言い争いは長く続くと思われたが、沙耶香が手で舞衣を制し、雪那に一言だけ伝える。

「……今まで、お世話になりました。」

「そう、なら何処へでも行きなさい。……でもこの子に柳瀬グループ

のお嬢様に捨てられたときは此方に戻ってらっしゃい。」
「私は、そんな事しません、貴女とは違います!!」
舞衣は大きな声で雪那にそう力強く宣言する。それに続き沙耶香も強く雪那を見据える。
「……わかった、もういい、貴女達に時間を与えるから、納得がいくまで足掻くが良い。忘れるな、お前達が求めるものは此処には無い、何処を探したって見つかるはずがない。それを確かめてきなさいっ！希望を失い、捨てたときにお前達は此処に必ず戻って来る。私はそれを何時でも待つわ。」
「私は決して貴女のように諦めない。自分から逃げたり、沙耶香ちゃんを捨てたりしないっ!!」
「私も舞衣と一緒。この温かい気持ちを捨てない!!」
舞衣と沙耶香は雪那を強く見て、決別の意を叫び、雪那から離れて行った。
「それは楽しみだ。」
雪那の呟きに気付かず。

一方、ノーチラス号内にて、姫和は累と少し話していたことを思い出していた。
『姫和ちゃん、私はこうも思うんだけど。……簀さんの本当の望みは姫和ちゃんが無事であれば良いと思っていたんじゃないかな?だから、柊の姓じゃなく十条の姓にしたんだと思うの、だから……。』
勝手な事を言うなと、人が勝手に母の無念を解釈するなと、そして私を理解してくれる者はいないと姫和は強く思ってしまった。
『ありがとうございます。けど、できることからやろうと思います。』
それだけ言って、さっさと姫和は累から離れ、海の中をただぼんやりと見ていたら、優と出合い、何気なく聞いてみた。
「どうした?·そんなところで。」

「んっ、海の中が見たいから。」
「そうか、……済まない。嫌じゃなかったか？女物の服を着せられて。」
　姫和はトーマスが言っていたシリアルキラーの特徴の一つ、幼少期に女装をさせられたという言葉を思い出しながら、優に聞いてみた。
「そんなことないよ。刀使になったみたいで楽しかった。」
「！」
　その発言に、姫和は寒気を感じていた。まるで、トーマスの言っていた通りになっているようだった。
「ねえ？どうしたの姫和おねーちゃん？パーティーのときも元気無さそうだったけど。」
「いや、その……。優は辛くないのか？」
「何で？」
　優は不思議そうに視線を泳がす姫和を見つめる。
「……いや、何でもない。」
　しかし、姫和は聞けなかった。『荒魂は荒魂だ。』と言ったことに傷付いてないのかと怖くて訊けなかった。
「ねえ、姫和おねーちゃん自分のやってきた事に間違いが有ったと思っている？ならそれは違うよ、何も間違っていない。」
「どうして、そう言える！お前も……。」
　荒魂みたいな者なんだぞ、と言えなかった姫和は黙るしかなかった。
「だって、ようやく分かったんだ。昔、可奈ねーちゃんも僕のことを化け物のように見る理由が、……姫和おねーちゃんの言っている通りだよ、荒魂は荒魂なんだって。だから、そのことに気付かせてくれてありがとう、姫和おねーちゃん。」
　その言葉を聞き、姫和は絶句していた。何でそんなことを言うんだと。
「姫和おねーちゃんは凄いよ、色んなことを知っているし、可奈ねーちゃんに決着を挑まれるくらいだもん。それに、お母さんのために今まで一人で頑張って来たんだから、姫和おねーちゃんの言っている事

は何一つ間違っていないよ。……だから、姫和おねーちゃんのことを何も知らない癖に悪く言う奴と邪魔する奴は一匹残らず僕がやっつけてあげる。だから、僕は可奈ねーちゃんと同じくらい姫和おねーちゃんのことが大好きだし、会えて嬉しかったし、少しでも助けになりたい。」

優は屈託無く、無垢で、何の疑いも無く姫和のことを信頼していると答えた。洗脳の影響か、姫和には分からなかった。

「……バカ。お前は荒魂なんだろう?なら、私が斬ってしまうのに、死ぬかも知れないのに怖くないのか?」

姫和は膝を曲げ、優と同じ目線で話す。しかし、

「う~ん、確かに死ぬのは怖いけど、……けど、姫和おねーちゃんがそれだけで強い刀使になれるなら斬られても良いかな。」

それを聞いた姫和は小鳥のように鳴き叫びたかった。それは間違っていると。

「……バカッ!!なんでそんなことを!」

けど、姫和は最後まで言えなかった。亡き母の思いを自ら踏み躙ることなど出来なかった。

「だって姫和おねーちゃんが僕を斬ったら強い刀使になれるんだよね?だったら、可奈ねーちゃんを一人にしないであげて、そうすれば何時か可奈ねーちゃんが強い刀使になって、僕を助けてくれたら、それで充分だよ。」

「何を言っているんだ?そんなこと……。」

「昔、可奈ねーちゃんと約束したんだ。強い刀使になったら僕を助けてくれるって、よく分からないけど、可奈ねーちゃんが強くなったら僕にとっても良い事なんだから。可笑しな話じゃないでしょ。それに、それだけで可奈ねーちゃんが喜ぶならそれで良いと思うんだ。」

優は自らの決意を語ると、姫和を純粋な瞳で見つめていた。姫和はこのとき思った。母の思いを捨てられずに、その考えは間違っていると言えず、教え諭すことが出来ない自分を呪った。

「……ああ、そうだな、…でもまだダメだ、お前は荒魂なんかじゃない。もし、そのときになったら私が斬ってやる。だから、それまでずっと

傍に居てくれ、ずっと一緒に居てくれ、そしてチョコミントを一緒に食べよう、約束だ。」

「良いよ、僕はあの味が好きになったから。」

姫和は履行出来そうに無い約束をし、その間にこの子を救うことが出来たらと思っていた。そうしたら、何時か三人で又何処かへ行けると思ったから。

そして、姫和は泣いている自分の顔を見せないように優に抱きつく。

「えっと？姫和おねーちゃんどうしたの？」

「良いだろう少しくらい、……私だって色んな事は有る。だから、このままで甘えさせてくれ……。」

「……変なの。」

「変じゃない。辛くなった人から慰めてもらうものなんだ。……だから、間違っていない。」

ほとんど涙声で姫和はそう答え、顔を見せないように抱擁していた。

この子と可奈美だけがこんな風に私を認めてくれる。純粋に信じてくれている。だから、裏切りたくない。中に居る荒魂から解放して、必ず救う。普通の男の子にすると姫和は心に固く誓っていた。

（だから、ずっと、ずっと一緒に居させてくれ、……神様。）

告白

刀剣類管理局内本部の一室――――。

ソフィア、穂積、静と他５名は、親衛隊の真希と夜見両名の負傷により人員に欠員が出たため、局長紫の自衛戦力の増強という理由で出向し、本部内に居た。

「三人で本部に行くことになるなんて、珍しいですね。」

いつもは自分達の所属する集団（クリーク）の内で、穂積かソフィアが残るが、それをしなかったことに不思議に思った静はソフィアにその意図を尋ねていた。

「穂積と静には、…本部内を見て貰う必要があったからな。……今後の…ために。」

「今後のこと……ですか。」

「そうだ、我々は…教訓を与える…ために行く。」

ソフィアは、筋トレしながらの意味深な説明にも、穂積は意図を理解したのか、頷いていた。

「……まあ、本部って行ったことないですし、良いですけど。」

そう言って自分を納得させようとした静は、興味が無いがソフィア達と本部への出向に同行するのであった。

「ところで腕立て伏せをやっている理由は何です？」

そう言った静は、ソフィアの背中に乗って腕立て伏せを手伝い。穂積はストップウォッチを持って、腕立て伏せを何分で何回したかを計測していた。

「やってみるか、……結構引き締まるぞ？」

「いや、流石に隊長みたいにゴリラみたいになりたくないんで……。」

ソフィアの身体はしなやかだが、筋骨隆々である。

「穂積、私達が去った…あとどうした……。」

「御安心を、昔から所属し信頼できる者を綾小路内に数名残らせ、何か有れば連絡するように伝えておきました。」

「それで良い。」

これで、自分達が行ったあとの綾小路内に残っている集団（クリーク）は工作さ

れる心配は無いとソフィアは汗を流しながら思った。
「ねえ、おねーさん達、ソフィアっていうおねーさん知らない？」
　こんなときに誰だろうと思った静は声のした方へと見る。そこには親衛隊の第四席の燕　結芽が居た。
「あっ、ああ親衛隊第四席の結芽さんじゃありませんか、一体、何の御用でしょうか？」
　静は親衛隊の一員燕　結芽から、突然声をかけられた事に驚く。そして、内心はストップウォッチと計測から目を離さない穂積と黙々と腕立てをしているソフィア等が結芽の事を無視するどころか応対すらしないことに心底呆れていた。理由は、心証を悪くする行動は控えて欲しいからだが。
「……ソフィアっていうおねーさんを探しているんだけど？」
　しかし、助かったというべきか、二人にことなど気にせずに静に質問を続けてくれた。
「あぁ、ハイ……私が乗っかっているこの人です。」
「……この人？」
「ハイ、そうです。」
「……まあ、良いや。おねーさん、私より強いって噂が本当なら私と試合してくれない？」
　タイミング良く穂積が腕立て伏せの終了の合図を出し、静はホッとするとソフィアから降りると、ソフィアは立ち上がり結芽と対面する形となっていた。
（でっかい……。）
「理由を聞かせてもらっても？」
　結芽は真希おねーさんより身長が高いのかもと、そんな感想を抱いていたら、ソフィアに話しかけられ、少し驚くがいつも通りに喋っていた。
「して欲しい理由は、…その噂が本当で私がおねーさんを倒したいから。」
「……分かりました。ですが、朝のトレーニングで疲れているので、夕方頃でよろしいでしょうか？」

「良いよ、楽しみにしているから。」
結芽はソフィアと試合をする約束をすると、部屋から退室して行った。
「珍しいですね。隊長がそんな約束をするだなんて。」
「……理由を聞きたいか？」
「はい。」
穂積は不思議に思った。普段からソフィアは御前試合のことを棒ふり選手権等と侮蔑して、出場を辞退するぐらい試合が嫌いなのに、何故結芽とは試合をしようとするのか、疑問に思っていた。
「……理由はだな。そうだな、何故アレに出撃許可があまり出ないか分かるか？」
ソフィアは陰で結芽のことをアレ呼ばわりし、穂積に問い掛けていた。
「……なるほど、治らない物ですね。」
「そうだ。」
「どうやってするんです？」
いつもなら、荒魂との戦闘で死亡したように見せかけたり、犯罪を犯すほど追い詰め自暴自棄となったところを合法的（反撃してきた等。）に殺したりすることといったことをやっていたが、最近は出来ないのでソフィアにどうするのか尋ねていた。
「まあ、後々分かる。ところで穂積、どうだった？」
「２分で８０回です。」
「……そんなものか。」
ソフィアは憮然とした顔で言っていた。

「舞衣ちゃーーーーん!!」
舞衣と沙耶香は、柳瀬家の執事柴田の送迎と江麻学長の手引きにより舞草の隠れ里に到着し、可奈美達と合流する。

「えっとね！舞衣ちゃん私えとえと…とにかく私は舞衣ちゃんに話したいことといっぱいあるんだ～！…あっ、沙耶香ちゃんも、聞いた通りだ！本当に沙耶香ちゃんも来てくれた～！」

　可奈美は舞衣と沙耶香の二人が来てくれたこと、親友と友人が来てくれたことに心の底から喜んでいたのか、舞衣に飛び掛り、沙耶香を熱烈な握手で歓迎していた。

「……。」

「……えっと。」

　しかし、優は沙耶香をただ見つめていた。そのことに不思議がる沙耶香だったが、

「あっ、優ちゃん紹介するね。友達になった沙耶香ちゃんです。」

「そうなんだ。…こんにちは。」

「あっ、えっと……、う、うん。」

　可奈美は何かを感じ取ったのか、とっさに沙耶香のことを友人と紹介し、沙耶香は友達と言われたことに少し照れながらぎこちなく優に挨拶を返してしまった。

「ウェルカ～～ム！舞草は二人を大歓迎しますねー！」

　御刀を持っていないエレンとそれに続いて薫、姫和が顔を見せるが、薫の頭の上には、ねねが居るので。

「ねね～～～。」

　舞衣の胸元へとダイブし、至福の時を得ようとする。

「少しは自重しろ、このエロ魂。」

　しかし、それは叶わず薫にしっぽを掴まれ阻止され、しょぼくれる。

「あっ……十条さん。」

　舞衣は姫和に気付くが、理由も聞かずに斬りかかったことを考えれば、どういう風に話しかけるか悩むが、一台の高級車が近付いて来た。そうして、その車から一人の女性、意外な人物が現れた。

「ようこそ舞草へ、若き刀使達。私は、折神　朱音と申します。」

　折神家当主で、刀剣類管理局の局長でもあり、姫和の因縁の相手折神　紫の妹折神　朱音であった。

その後、可奈美達は舞草の拠点にて、朱音が語る二十年前の相模湾代災厄の真実を静かに聞いていた。

曰く、大荒魂のタギツヒメを鎮め、後の記録からその存在を抹消された柊篝と藤原美奈都――――。

曰く、藤原　美奈都と柊　篝には、衛藤　可奈美と十条　姫和という娘が居たこと――――。

曰く、藤原　美奈都は当時の折神　紫よりも飛び抜けて強かったこと――――。

そして、二十年前の大荒魂はあの当時よりも強大になっているとのこと朱音は語っていた。

「まさかその大荒魂が可奈美ちゃんが見たって言う…。」

「そう、タギツヒメ。…私の姉だった、折神紫です。」

その後は、美奈都と篝、紫も無事に帰還。政府と刀剣類管理局は、高い知能を有する荒魂の存在は様々な混乱を招くと判断され、奥津宮にいたタギツヒメの存在を隠蔽された。

そして、隠蔽の決定を下した紫は本来８名いたはずの特務隊から柊篝と藤原　美奈都の名は外し、タギツヒメの鎮め方を語らず、大災厄の２年後折神家の当主の座に就いたあと、篝と美奈都以外の特務隊五名は伍箇伝の各学長に就任し。篝と美奈都の二人は命こそ助かったが、刀使として戻ることもなく、穏やかな家庭を築いていったこと。

ほどなくして、英雄として迎えられた紫の統制の下、刀剣類管理局特別祭祀機動隊の組織はより強化され、荒魂による被害を最小限に抑えると、世論の評価を上げ、他国との協力により次々と新技術が開発されていくといった歴史を語っていた。

「しかし、誰も２０年前に置き忘れてきたものに気付く事はありませんでした。」

そして、朱音は美奈都の訃報を報せた篝の反応と言葉を聞き、大荒魂討伐の真実を調べる決心をし、大災厄で紫が用いた方法、折神家の中でも一部の者のみに伝えられてきた鎮めの儀を古い文献を手掛か

りに突き止めた。
「それは、柊篝の命と引き換えにタギツヒメを幽世に引きずり込むというものだったのです。」
　それを聞き、可奈美と姫和は暗い表情になる。過酷な宿命を知ったからか。
「命と引き換えに、隠世へ……？」
「そんな事が可能なのか？」
　舞衣と薫は疑問に思う。そのため、紗南が補足するように迅移の説明をし、可奈美達に問い掛ける。
「可能だ。刀使は御刀の力を使い幽世の様々な層の力を使うが、稀に幽世の深淵にまで到達する力を持つ者もいる。篝先輩の迅移がそれだ、迅移は幽世の層の時間の流れの違いを利用し加速する技だ。深く潜れば潜るほど加速する。だが、理論的な限界値まで突き詰めたら、どうなると思う？」
「一瞬が永遠に近づき無限になる。戻って来られなくなる。」
　沙耶香が紗南の問いに答える。
「そうだ、篝先輩は無限の階層まで到達できる能力の持ち主だった。御刀で相手を刺し貫き理論上最高速での迅移を行う。そして、相手もろとも幽世へ引きずり込む。」
　紗南の説明にエレンと薫が「ナント……。」や「心中技ってことか……。」と言って、驚愕の声を上げていた。
「篝先輩は、そんな役目を担わされていた。最初から命を捧げて荒魂を鎮める覚悟だったんだ……。」
「ですが、篝さんは生還されています。それは、美奈都さんがぎりぎりで篝さんを救ったからです。」
「それでも、二人は文字通り命を削ったのだと思う。刀使の力を失いその数年後に命まで……。」
　朱音と紗南の話を聞いた舞衣は、それが原因で可奈美の母美奈都は死んだのだと思うと、辛い気持ちを抱いてしまった。
「おかしいデスネ…二人がタギツヒメを幽世へ追いやったなら折神紫は何者なのデス？」

「じゃあ、聞いてみたら良いんじゃない？」
エレンの疑問に優は妙なことを言ってきた。
「……ハイ？」
「だから、タギツヒメっていう名前知ってるよ。僕の中に居る。」
「えっ、そうなんデスカ……？」
エレンはリアクションに困ることを言われ、どうしたものかと思うが。
「だから、ちょっと代わってもらう。」
優はそう言うと、いきなり倒れる。
「えええええっ!!ちょっと優ちゃん!?」
可奈美の声を聞いたためか、優はすっくと立ち上がると、
「……我は、タギツヒメ。」
そんなことを言い始めた。雰囲気が変わったこととその迫力感から、優の中に居る荒魂と変わったのだろうと気付き、朱音はタギツヒメに何か聞き出せればと思い、訊いてみることにした。
「はっ、拝顔を賜り光栄です。タギツヒメ。」
「ふん、発言を許すぞ。それなりの対価はあるだろうな？……えーっと、その、紫の妹。」
胸を張って答える優、もといタギツヒメ。しかし、この発言により、先程緊張していた朱音は、心の中で盛大にズッコけていた。
「……私は、折神　朱音と申します。早速ですがお尋ねしたいことが有るのですが、宜しいですか？」
「ふっ、ふん、誰に向かって言っている？我は神ぞ、聞く内容もよく吟味して話せ。つまらん話は許さんぞ。」
9歳児相手に少し頭を下げている朱音というシュールな光景に可奈美達は何とも言えなかったが、しかし、相手は二十年前の大荒魂である。朱音も対応を間違えないよう、考えてから話そうとした。そして、長く沈黙していた朱音に何かを思ったのか、タギツヒメは急にソワソワしだし朱音をチラチラ見ては、話し掛けて欲しそうにしていた。
そんな行動をするタギツヒメを見た者全ては、『この荒魂、何か残

念っぽい。』と思ってしまった。
「……それでは、率直にお伺いします。あなたは我々に仇名す者でしょうか?」
朱音は二十年前の大荒魂と比べ、何とも言えない気分になったが、努めて冷静に質問を続けていた。
「……おぉ、やっと何か尋ねる気になったか!…そうだな、我が生涯の伴侶が敵と認識しなければ何もせぬぞ?」
今、何と言っただろうか?生涯の伴侶?誰のことだろうかと思った朱音は。
「……再度お伺いします。生涯の伴侶とは誰のことですか?」
恐る恐る朱音はタギツヒメに尋ねるが、当のタギツヒメは胸に手を当て答える。
「衛藤　優、この者だ。それでか知らんが我はいらない子扱いされて分離させられてしまってな……。」
物哀しい顔になったタギツヒメを見て、朱音はこのタギツヒメも辛いことが遭ったのだろうと思ったが。
「まあ、いつも陰気な後ろ向きの辛気臭いのと、何でも型に嵌めようとする面倒なのと別れることができたし、嫌がらせで鬼丸国綱を盗んで逃げたことができ、伴侶と一緒に暮らせることに何の不満は無いぞ。というより毎日相手してもらって我は嬉しいぞ。今思えば、我が伴侶が3歳のときに一目惚れして良かったと思う。」
「……そ、そうですか……。」
タギツヒメの物凄い笑顔の告白にエレンと沙耶香以外の可奈美達も若干引いていたが、特に薫は心の中でねねを見てこう思った。
(……荒魂って、巨乳好きとか、ショタコン…いや、変質者しか居ないのか?)
薫は『荒魂であっても考えて斬る。』ということを思い出し、何とも言えない気持ちになった。しかし、そんな雰囲気に耐えられなかったのかタギツヒメが赤い顔をしてこう言い放った。
「なっ、何か悪いか!?まだ3歳の子供が好きになって何か悪いかっ!他の人間には無いあの純粋無垢さが良かっただけだ!バーカ!アー

ホ!!うーつけー!!」
　手をブンブン振りながら言うタギツヒメのその行動によって、自身の威厳やらなんやらは今日無くなったことにタギツヒメは気付いていなかった。
「だとシタラ、ヒメヒメは優のことが好きなんデスネ？可愛らしいデース。」
　何となく親近感が湧いたエレンが陽気にそんなこと聞き、フレンドリーに接しようとするが。
「黙れホルスタイン。あと、その無駄な脂肪の塊でお前の頭が悪く見える。」
「ナンデそんなに辛辣なこと言うんデーースッ!!」
　タギツヒメはエレンを思いっきり睨みつけると、かなり辛辣なことを言っていた。そのことにエレンはショックを受け、薫に慰めてもらった。
　エレンは気付いていなかったが、薫と姫和は女の勘でタギツヒメはこっち側（貧乳）だと思い、少し親近感が湧いていた。
「しかし、本当にこいつはタギツヒメか？そうとは思えんが？」
　姫和は率直に感じた感想を述べる。
「うるさい貧乳、私の伴侶と少しくらい話して仲良くなったくらいで勘違いするな。あれはどう考えても友愛だ。」
「ハァッ!?貧乳だと、お前も絶壁だろう!!」
「なんだとっ!!」
　こうして、口喧嘩の試合開始（ゴング）が鳴り響き、姫和とタギツヒメはお互い〝貧乳〟に対する悪口で戦っていた。
「お前が言うな！エターナル胸ペッタン!!」
　姫和はそれを聞き、タギツヒメを殴ろうとしたが、身体は優のままなので殴れなかった。そのため、暴言でやり返すしかなかった。
「エターナルウゥッ……！そういうお前はヒメヒメ・ザ・ナイペッタンじゃないかっ!!」
　タギツヒメも殴ろうとしたが、身体が優のため傷付けたくなかったので、殴ることが出来なかった。そのため、姫和と同じことをしてい

た。
「なにを言う、そういう貴様は貧相だろうがっ!!」
「ひんそうっ……!ホライゾン胸が言うなっ!!」
「なんだとっ!薄い胸がっ!!」
「お前に言われたくないっ!ぺったん女っ!!」
「貧乳っ!!」
「絶壁っ!!」
姫和とタギツヒメの口喧嘩は長く続き、段々と貧相な言葉しか出なくなっていくと共に、最終的に冷静になって、両者が自分で言っていた言葉を思い出しては自己嫌悪に陥るまで、このしょうもない戦いは続いていた。
そんな大荒魂のタギツヒメと〝胸の大きさ〟で喧嘩をしている姫和の姿を見て、朱音は天国にいるであろう篝に言っていた。
（篝さん、……貴女の娘さんは、立派に育ちましたよ……。）
何故か、朱音の目には涙が頬を伝っていた。

病

姫和とタギツヒメのしょうもない戦いは二人共自滅で終わり、朱音は気を取り直し質問を続けていた。

「……では、タギツヒメ。貴女はどのような経緯で姉さまに憑依し、どうやってこの少年に憑依したのですか？」

「そ……その前に……水をくれ……。」

「ふっ、ふん。お前は水道水で充分だろ？」

「何を言うかっ、乳無し!!」

「まだ言うかっ、変態!!」

朱音の問いに、タギツヒメはその前に水を飲んで咽の渇きを潤したいと所望するが、姫和の挑発に乗り、再度のどんぐりの背比べのような罵り合いに発展すると思われた。

「……二人共、少し静かにして。じゃないと、干からびるまで水を飲ませないよ。」

「うっ、……すまん、可奈美。」「申し訳ありません、お義姉さま。」

しかし、可奈美の静かな怒りの一言により、姫和とタギツヒメの両者は押し黙る事となる。

「勝手にお義姉さまと呼ばないで、まだ認めていないから。」

「そんなぁっ、お義姉さま～～っ。」

タギツヒメは可奈美のことをお義姉さまと呼ぶが、可奈美に拒否され涙ぐむタギツヒメは朱音に慰めてもらっていた。

朱音は少し思うところはあるが、努めて冷静にタギツヒメを慰めてどうにか復活させ、水を飲み終わった後、少し休憩させ、再び質問するのであった。

「……もう一度、お尋ねしますタギツヒメ。姉さまとこの少年とはどういう経緯で憑依したのですか？」

再度、タギツヒメに質問した朱音は、今のタギツヒメを見て落ち着くと、自然体で訊くことができた。

「紫とは交渉を持ち掛けて、賛同させた後に同化したぞ。……まあ、その後は紫が未来のお義母上様とそこの貧乳の母がその後どうなった

か凄く気になっていたらしくてな、紫の身体が壊れては不味いと思った我等は、お忍びで見に行く事を許可してやったのだ。」

「……なるほど。」

未来のお義母上様という不穏なワードをスルーした朱音はそれを聞いて、安堵と不安を抱いてしまった。紫の精神は完全に乗っ取られていないのだろう。早く助けたいが、どうする事も出来ず、病弱が理由で刀使にすらなれなかった自分の至らなさに歯痒さを思う。

そして、貧乳と言われた姫和はタギツヒメを睨んでいたが。

「その時だったか、まだ3歳の伴侶と出会って一目で惚れてしまってな。そのときの紫は我の意識の侵食に抗ってて大変そうだった……。危うく、紫が我の伴侶を無理矢理押し倒すところであった。私はそこまで汚れたくないとか言って、紫はどうにか我の侵食に抗っておったぞ。まあ、それが発端となって、辛気臭い奴と面倒な奴に目をつけられてな、紫の中から追い出されてしまったわ。」

「そっ、……そうですか……。」

朱音はそれを聞いて、紫に対してなんとも居た堪れない気持ちを抱いてしまった。

「……まあ、我はかっ神であるから、伴侶がが愛人の十人や二人くらい持ってても何にも抱かんしし、むしろそれぐらいの、それぐらいの甲斐性とかが無いとお、務まらんから何があったとしても、何があったとしても、何があったとしても、……我は心が広いから何の問題無いデスヨォっ!!」

朱音はそれを聞いて、タギツヒメが手とか足とか怯えるように震え、口調も変わり、早口で噛みながら説明しているのに気付き、こう思った。

（……手が震えてますね。少し早口でしたし。）

無理して虚勢を張っているのだろうと朱音には分かってしまった。

（…つーか、手が震えてる……。）

（…手とか震えていて、しどろもどろに喋っていマスシ。口癖が私みたいになってマース……。）

そして、薫とエレンもそのことに気付いていたが、特に気にしな

かった。しかし、やはりそれに気付いたタギツヒメは段々と赤面となると、
「ううう……。」
自分で言っていたことを思い出しては部屋の隅に座り、落ち込んで恥ずかしがっていた。
それを見た朱音は厄介な性格だなぁ……とか、思いながら努めて冷静に喋りかけた。
「……てっ、照れないで下さい、タギツヒメ。」
「てっ、てて照れてないぞ！神である我が照れる訳ななかろう!!かっ、勘違いするなぁ！……えーっと、えーすまん紫の妹!!」
タギツヒメは自分で言ったことを思い出し、照れてしまったことにより動揺してしまい、朱音の名前を忘れたので、そのことを詫びながら必死でそう言っていた。
「……まっ、まあ、そのだな、そんなこんなでノロの軍事利用という依頼を受けたスレイドという名のクズ科学者だったか。……そいつが我と愛しの伴侶を一つにしたのだ。」
そして、タギツヒメは誤魔化すため、別の話題に無理矢理にしかも不自然に変えていた。
（（やっぱり、恥ずかしかったんだ。））
しかし、残念なことに皆気付いていた。
「……やっぱり、アイツも鎌府の研究に一枚噛んでいたか……。」
「グランパ、アイツってことは知り合いなんデスカ？」
タギツヒメがスレイドという名前を出し、フリードマンは知っているかの様なことを言うと、エレンはそれについて聞く。
「……まあね、彼はノロと人間を融合させ、強化・進化させる研究をしていたまともじゃなくなった奴だよ。昔は突っ掛かって来て、よく競い合っていて、真面目だった。僕と違って研究資金に苦労していたから、充分な研究が出来ず、日の目を見ることはなかった。その後は、…そこまで落ちぶれることになるとは思わなかったけど。」
「んで、今はマッド野郎になっていると？」
「二十年前に少し会ったけど、……昔の彼は間違ってもそんなことを

するような人じゃなかったけどね。」
　薫はスレイドのことをマッド野郎と蔑み、フリードマンにスレイドのことを訊いていた。そして、フリードマンはスレイドの人となりを語り、ノロと人体の融合をするような人ではなかったと答えた。
「ほう、ではそこな年寄りはスレイドのことを知っているそうだな、息災か？」
「……盗んだノロを使って、個人で人体実験をしたということで捕まっているので、今は刑務所の中に居ます。…どうして、そんなことを聞くんです？」
　タギツヒメがスレイドの所在を聞いてきたことに、疑問に思ったフリードマンは訊いてみることにした。
「彼奴はな、我を謀ったのだ。……普通なら、〝龍眼〟によるあらゆる可能性を見せられれば、その力を抑えきれず暴走する。しかし、我が伴侶はそうならない、何故だと思う？」
「龍眼って何？あらゆる可能性？」
　可奈美はタギツヒメにそのことを尋ねる。
「分かりやすく言うとな、可奈美お義姉さま自身がそこの貧乳を何度も何度も切り刻んでいる……いや、あらゆる方法で殺す光景を無理矢理見せられているとしたら、どう思う？」
　可奈美は絶句した……。
　優はそれに何度も耐えていたのかと思うと、居た堪れない気持ちになる。
「それを耐えるために、暗示や薬物によって精神を壊し、無理矢理安定させたのだ。自分の研究を人に認めさせ、見返すためにな！……その代わり、表情が豊かだった優は、感情の起伏は少なくなってしまったがな。」
　タギツヒメの言うように、昔の優はよく可奈美の後ろに付いて行き、よく笑っていたし、泣き虫だった。けど、今は笑うときは有るが、基本無表情だ。きっと、スレイドに連れ去られたという影響で心を固く閉ざしてしまったのだろうと思ったが、違った。優を連れ去ったスレイドに改造されてしまったのが原因だったのだ。

よく見る、よく聞く、よく感じ取る――――。
何一つ出来ていない自分を強く責めた。大事な弟だと思っておきながら、何一つ見えていなかった、何一つ理解しなかったことに、可奈美は自分自身が無様だと思った。
「ごめんみんな、少し外に出るから、優ちゃんのことよろしく。」
「あっ、可奈美ちゃん外まで案内してあげるから……。」
そして、山中での戦いで痛みに呻くＳＴＴ隊員のことを思い出した可奈美は気分が悪くなり、外に出ることにしたため、それに気付いた累も一緒に付き添うことにした。
「一つ訊いて宜しいですかな、タギツヒメ？暗示や洗脳はどのような内容なのですか？」
フリードマンはタギツヒメに優に施された洗脳の内容を尋ねていた。
「……人を殺すことに疑問を持たないこと、目的達成のためなら自己犠牲も厭わないこと、この二つだけの筈だ。」
所属する組織とその指揮官には忠実であることも入れる予定だったが、その組織も指揮官も居なかったので省かれているといったことは、流石にタギツヒメも言わなかったが……。
姫和はそれを聞き、思い当たる節があった。
初めて会い、敵対していた沙耶香と真希を動揺することも無く殺害しようとしたこと――――。
親衛隊の夜見との戦闘の際、御刀の力を使うため、何事も無く御刀を自分の腹に刺したこと――――。
これらの行動は、その暗示や洗脳によってなされた結果なのだろうと確信した。
（……となれば、そいつが……。）
姫和は静かにスレイドという者に対し、憎悪と怒りの感情を抱いていた。
「我はあるとき気付いたのだ。どんなに焦がれていてもだ、所詮我は荒魂で伴侶は人の子であった。そのとき、我は深い孤独を知った。…当初我は、人間共に報復をしようと思ったが、それを知って空しさを

覚えてな、どんなに人間共をボッコボコにしても我はボッチで悪役のまま、気は晴れんだろうということにな……。それであろうなぁ、辛気臭いのとスレイドというあんな小汚い出世できなさそうな無能科学者のたわ言を聞いて、協力してしまったのは……。」

「どんな協力をしたのですか?」

タギツヒメの話を更に深く追求するため、朱音は先を促す。

「人体に大荒魂との融合を完成させることだ。……確かに、伴侶と一つになれた。しかし、我が伴侶から抜ければ、ノロで強化された身体は無くなり、投薬と暗示の影響で優は薬物依存と様々な副作用によって短命化することになるとは思いも寄らなかった。だからこそ、我は伴侶のために全ての力を出していない。出してしまえば伴侶がどうなるか分からんから傍に居てやるべきだと思った。……そういうことだ。」

「なっ、何っ……!」

そして、タギツヒメの説明に姫和は衝撃を受ける。たとえ、優から上手くノロを抜いても救えないのではないかと思ったからだ。そして、可奈美も辛いままなのではないのかと……。

「そして、我は決意した。この礼はスレイドという奴にきっちり返そうと思っておる。……生皮を剥いでじっくり苦しめてやるとな。」

タギツヒメは物騒な決意を語っていた。それを聞いた朱音達は荒魂らしさを感じ、背筋が凍る思いをしたが、

「……なぁ、もう良いか?余り、身体を乗っ取り過ぎて嫌われたくないから、伴侶と変わりたいのだが……。」

タギツヒメは朱音にそう申し立てていた。

「あっ、はい。また何かお尋ねしたいときはお願いします。」

「ふん、我が伴侶がそれを望んだら、また表に出てやる。」

タギツヒメはそう言うと倒れ、優と変わる。

「……あっ、どうだった、何か分かった?」

優は半目で眠たげに朱音に訊いていた。

「ええ、あなたのお陰で色々と分かりました。ありがとうございます。」

朱音は優に本心でそう言っていた。まだ、姉が大荒魂に完全に乗っ取られた訳ではないことが分かり、少し安堵することができたからだ。

「ねえ、朱音おねーさん。ヒメちゃん悪口言ってなかった？」

「……えーっと、ヒメちゃんとは、誰のことですか？」

何となく察してはいるが、とりあえず朱音は優にヒメちゃんは誰のことか尋ねていた。

尚、優の中に居るタギツヒメは『紫の妹ぉ……！それ以上、我には無い大人の魅力で伴侶に近付くでない!!』と叫んでいたが。

「タギツヒメだから、ヒメちゃん！僕の大切な人。」

「そっ……そうですか……。」

二十年前の大災害を引き起こした大荒魂相手に渾名をつける9歳児に、朱音は妙な気分となっていた。

尚、ヒメちゃんと呼ばれたタギツヒメはキャーキャーと騒ぎ、ゴロゴロ転げ回りながら悶絶し、『ふぅ……。』と言って満足していた。

「色んな人に悪く言うけど、照れ隠しだから、気にしないであげて。」

と、笑顔で言ってきた優に朱音は、

「はい、存じております。」

と、優しく語り、朱音は優の頭を撫でながら微笑んでいた。

舞衣は、その光景を見て、ほっこりとした気持ちとなり、

エレンは、優がタギツヒメのことを渾名までつけて仲良くしていることを知り、荒魂と人間の融和は可能かも知れないと思い、

沙耶香は、タギツヒメの行動を見て、『……まるで子供。』という辛辣な評価を下し、

薫は、ショタコンとか通り越したナニかのタギツヒメと比べ、ねねはまだマシな方であることを再確認し、

ヒメちゃんことタギツヒメは、『ゆぅかぁりぃぃぃ！……の妹。伴侶の顔に無駄にでかい胸を近付けるな。』と言って、最後まで朱音の名前を言えず、胸の大きさで朱音に嫉妬していた。

そして、姫和は――――、

「おい、優、タギツヒメとは、……あいつ、タギツヒメとは仲が良いの

か？」

ふと、そんなことを訊いてしまう。

「うん、とっても大事な友達だよ！」

そんなことを訊かれた優は、タギツヒメのことを大切な存在だと、笑顔で答えた。

「！……そうか……。」

姫和は、優の笑顔が今まで見たこともないほどの笑顔であるように感じてしまう。そのうえ、父を奪った荒魂であり、母を殺したタギツヒメでもあり、今度は〝大切な存在〟さえも目の前で奪おうとしていると思った姫和は、優の中に居るタギツヒメに対して何かドス黒い感情を抱き、拳を強く、強く握り締めていた。

母のことを立派な刀使と言ってくれた優――――。

自分のことを大好きだと言ってくれた優――――。

唯一、自分のことを全て認めてくれる優――――。

それなのに、今まで見せたこともないほど、タギツヒメのことを嬉しそうに大切な存在だと語る優――――。

それらを一つ一つ思い出しては身が裂かれるような思いを抱き、ただただ苦しい気持ちになる姫和。小さな子供を思ってのことなのか、母の無念を晴らしたいのか、それともタギツヒメが羨ましく妬ましいのか、姫和は今も気が狂いそうな感情に支配されそうになっていた。

（……くそっ、今まで見たこともないくらい、何であんなに嬉しそうにするんだ!!そいつは大荒魂で、可奈美と優を苦しめている元凶で、化け物なんだぞっ!!なのに、何でこっちにはそんな顔を見せてくれないんだ。……なぁ、何故なんだ？何がいけないんだっ!?）

それが、どういった感情かも分からず、何故憤っているかも分からず、ただただ苦悩する姫和は心の中で慟哭していた。

父も母も他界し、折神紫の暗殺に専念するため徹底してクラスメイトたちと距離を取っていたため、ずっと一人だったことにより、見返りの愛を無意識に求めていることに気付かずにいた……。

偽りの姿

刀剣類管理局本部訓練場――――。

その中で、結芽とソフィアはお互いに迅移を駆使し、激しく凄まじい剣戟を繰り広げていた。

ソフィアは結芽の突きを振り下ろしで軌道を変え防ぐと、大太刀の利点を生かし、大脇差の利点を潰すため、横薙ぎに斬り、結芽をバックステップで回避させると距離を空けさせる。それに気付いた結芽は迅移で懐に飛び込むと胸辺りを狙って突きを繰り出すが、ソフィアは身体を僅かに横に逸らして躱すと、刀身を短く持って巻き上げるように斬るが、〝少し遅れたため〟なのか、結芽は難なく躱す。

突き、薙ぎ払い、袈裟斬り、振り下ろし――――。

幾度も打ち合い、長い時間が過ぎ去っていった。そんなただただ長い剣術の試合を見ていた穂積と静は、

「写シを一回斬らせたのは、わざとですね。」

「……時間を長引かせて症状を悪化させようとしているんでしょう。普段の隊長なら体格差を活かして戦う筈ですから。」

そんな感想を結芽には聞こえない声で漏らし、ソフィアと結芽の戦いを見ていた。

現在、写シを二回斬られた者の負けというルールの試合をしており、両者共に写シを一回斬られて残り一回となっていた。拮抗した戦いを見せているが、ソフィアが服を掴んで柄頭や肘で殴打したり、首を絞めたり目潰しをしたり足を踏んだりといった反則行為をしなかったこと、写シを解除して戦ったり、身体を掴んで持ち上げて斬ったりしないところから、本来の戦い方をせずに手加減して戦っていることが穂積と静には分かっていた。

「これ、いつまで続くの？」

「隊長がマズイと思ったら、即斬ると思いますよ。」

結芽の症状を悪化させるためとはいえ、１回戦からズルズル戦い、３回戦まで長引いていた。そして、穂積の予言通り、ソフィアが上段斬りで結芽の右腕を切り落とし、結芽の写シを剥がしていた。

「ほらね。」
「ほんとだ。」
穂積と静はそんな会話をしつつ、このただただ長い退屈な試合がやっと終わり安堵していた。
「あぁーもぉーっ!!もう少しなのに勝てなかったぁーーー!!」
結芽が悔しそうに手をブンブン振りながら、大きな声で叫んでいた。
「いや、結芽さんも中々手強かった。それでなのか、結芽さんとの手合わせが楽しく、つい夢中で時間が忘れるほど戦いました。」
ソフィアはそう言って結芽に手を差し出し、立ち上がらせる。言っていることは本心ではなく、嘘だが……。
「……うん、私もおねーさんと戦えて楽しかった。」
嘘を言うソフィアとは対照的に結芽は正直に、強い人と戦えて嬉しかったと答える。
「ところで、その鞘についてるシールとストラップ、……もしかして。」
「うん！親衛隊のおねーさんたちに買ってもらったの！」
ソフィアは鞘についてるシールとストラップを利用し、相手に親近感を与え、近付こうとした。
「おねーさんも、イチゴ大福ネコ好き？」
「最近知ったばかりなので詳しくありませんが、……知り合いに好きな人がいますので、良ければその者と一緒にどうです？」
「そっか！じゃあ今度、一緒にその人とも、お買い物に行きたいな！」
ソフィアの誘いに乗ってしまった結芽は、そう答えてしまう。
「良いですね、何名か誘って大勢で行った方が楽しいでしょうし、いつか行きましょうか。」
ソフィアは心の中で『行ける日が有ればな。』と思いながらそう答えて、結芽の信頼を得る。
「……ねえ、おねーさん。私達、違う形で出会ってたら、お友達になれたかな？」
そう言ってきた結芽にソフィアは信頼を得たと確信し、次の手を打つ。

「ええ、なっていましたとも。…同じ学院に居たとしたら、毎日試合を申し込んでいると思います。結芽さんの戦い方はずっと見ていたいので。」

ソフィアは結芽が病で苦しみもがく姿を想像し、それを見たいと心の中で思いながら、結芽にそう答えていた。

「同じ学校かぁ……。ふふ……とっても楽しそう。だからこそ……残念だなぁ、悔しいなぁ。」

「何がです?」

結芽の独白に、ソフィアは既に結芽の病については知っているが、尋ねる。

「……ねぇ、おねーさん。……私のこと、忘れないでね……。」

「ええ、貴女の戦い方は印象に残るので、ずっと忘れません。天然理心流の極地しかと見届けました。」

と、そんなことを言ってくれたソフィアに感動したのか、結芽は嬉しそうに答える。

「……ありがとう、おねーさん。また、試合してくれる?」

結芽にそう尋ねられ、ソフィアはそれを快諾する。

「ええ、勿論。」

「……うん、次はもっと強くなってくるからねーーーっ!!」

ソフィアに結芽はそれだけ言うと、走りながら訓練場から退室していった。

「……という訳だ。何か質問は?」

結芽が退室し、この場に居ないことを確認すると、穂積にそう言ってきた。

「結芽さんのことを気に入ったんですか?」

「どうして?」

「結芽さんのことを忘れないって仰ってましたが。」

穂積の問いに、「ああっ、それか。」と言い、ソフィアは穂積にこう答えた。

「あれはな、そう言えば喜ぶし、何より今後も病でアレが苦しむ姿を拝めると思えば、愉しめるし忘れられんだろう。そして、アレの心理を

考えたら、ボロ勝ちして勝負を挑まれなくするより、僅差で勝った方がもう少しで勝てると思わせることができ、勝つまで何回も挑まれる可能性が高くなる。だから、そうしたまでだ。」

ただただ結芽の苦しむ姿を見て愉快に感じたかったから、一試合ずつ長期戦に持って行き、病状を悪化させようとしたこと。僅差で勝ち、勝負を挑まれるように誘導しようとしたことを告白していた。

「……なるほど、そんなやり方もあるんですね。」

「そう、あの歳で追い詰められたらどうなるか見物だろう。ああ、それを考えると愉しみでしょうがない。」

ソフィアはそれだけ言うと、邪悪な笑みを浮かべていた。

(でも、本音は結芽さんが恵まれていることに、嫉妬しているからこそなんでしょうけど。)

しかし、穂積はソフィアが別の理由で動いていることに気付いていた。

「……ゲホッ、ゴホッ！……ハァ、ハァ。待ってて、…もっと強くなって、……私、頑張るよ。」

このとき、結芽が一人で孤独に血を吐いていることに、誰も知らなかった。

舞草の隠れ里にて、姫和は――――。

『紫の事は私とここにいる舞草がなんとかします。だから……。』

姫和は朱音の言っていたことを思い出し、外を出て思案していた。

子供ばかりに戦わせたくないということなのだろう、…言いたいことは分かる。

『…姫和おねーちゃんのことを何も知らない癖に悪く言う奴と邪魔する奴は一匹残らず僕がやっつけてあげる。』

しかし、幼子との約束を思い出し、これは自分が為すべきことであることを再確認する。

『……これだけは言えるよ。私の剣が守る剣なら私は、姫和ちゃんの目的と、優ちゃんと姫和ちゃんを守るよ。』

『…人に化けた荒魂を斬るそれだけだよ。それ以外は私が斬らせない、それが私の覚悟だよ。だから、姫和ちゃんの重たそうだから、半分私が持つよ。』

そして、恩義に感じていた人からの声援を思い出し、改めて決意する。紫は、タギツヒメは自分が討つと……。

『うん、とっても大事な友達だよ！』

「……。」

だが、優が言っていたことを思い出すと、胸が張り裂けそうな気持ちになっていった。

今まで見たこともないくらい、嬉しそうな顔をしていたことが気になって仕方なかった。

タギツヒメに対して嫉妬と羨ましく感じ、優に対しては憧憬の眼差しと恋慕の感情を向けて欲しいという綯い交ぜな感情を姫和は抱きつつあった。

「あっ……。」

しかし、累と一緒にいる可奈美の姿を見ると、その考えは吹き飛んでしまった。

「可奈美。」

ふいに、可奈美の名を呼んでしまう姫和。もう大丈夫なのか心配して可奈美に近寄る。

「……姫和ちゃん……。」

少し元気なさそうだったが、可奈美はいつものように返事をしてくれた。

「大丈夫か……？」

「うん、平気。」

姫和に聞かれ、目を合わせずに手をパタパタと振る可奈美。

「ごめん、姫和ちゃん。可奈美ちゃんに付いてもらって良い？ちょっと、用事があって……。」

「わかりました。」

累は仲の良い姫和と一緒なら可奈美も落ち着けるだろうと判断し、可奈美達から離れる。そのため、この場には姫和と可奈美の二人が残っていた。

「……姫和ちゃん、私一つも気付いてなかった。……姉としては失格かな?」

姫和は黙って聞いていた。何も言えなかった。血の繋がった兄弟姉妹が居ない一人の姫和には。

「でも、もう少しで優ちゃんとの約束を守れると思う。舞草がこの戦いに勝てば、きっと優ちゃんから荒魂を抜くことができて、普通の男の子になれるから。」

「……あっ、……そうだな。」

姫和は少し微笑みながら、そう答える可奈美に何も言えずにいた。

『荒魂を抜いちまえば死ぬな、多分。』

『しかし、我が伴侶から抜ければ、ノロで強化された身体は無くなり、投薬と暗示の影響で優は薬物依存と様々な副作用によって短命化することになるとは思いも寄らなかった。』

トーマスとタギツヒメ、この二人の話を知らない可奈美のことを思い出し、姫和はどう言えば良いか分からなかった。

もう優は人並みの生活を送れないと、真実を言うべきなのか、姫和はどうすれば良いのか分からなかった。

「……そうだな、そうだ。…それまで、一緒に半分持ってくれるか?」

「……もちろん。」

姫和は可奈美にそう言って、嬉しそうに反応する可奈美を見るのが辛かった。嘘を虚偽を吐いてしまった恥と罪悪感に姫和は押し潰されそうになっていた。

何故、本当のことを言わないのだろうか?ただ、単純にこの関係が壊れることが嫌だっただけなのだろうか?それとも、自分自身が非難されることに臆病なだけなのだろうか?……関係のないことまで考え始めてしまう姫和。ただ、ストイックに真っ直ぐに進む子は悩み、曲がりくねってしまった。

「……おい、何をしているんだ、こんなところで。」

ふいに、トーマスが現れると、警戒し身構える姫和と可奈美。
「……すっかり嫌われたな、俺。」
「当たり前だ。」
トーマスの軽口に、姫和は軽蔑していた。
「トーマスさん、一つ訊いて良いですか？」
「……何だ？」
「何で、優ちゃんにあんなことをするんです？」
可奈美はトーマスにそんなことを訊いていた。
「……んなもん、あの子供が荒魂だからさ、あと鎌府の制服を着せたのも〝ごっこ遊び〟させて人を殺しやすくさせるためと、高津学長の脅しだ。……ついでに言うとだ、次に親衛隊と戦闘になったら優か鎌府の制服を着ている沙耶香を囮にして、お前達は背後か側面を叩いてもらうつもりだった。」
「おいお前っ！……可奈美？」
姫和はトーマスの考えに怒るが、可奈美がそれを手で制すると、
「あの！トーマスさん！私と剣の立ち会いしませんか!?」
と宣う。その一言に思わず『ハァッ？』という表情をする姫和とトーマス。
「お前なぁ……、何のつもりだ。俺は剣術なんていう棒振りなんかやったことないんだぞ？小さい頃からコレしか知らん。」
と言って、懐から拳銃を見せるトーマス。事実、９歳の頃から３０—０６スプリングフィールド弾を使用するボルトアクションライフルを携え、父親と共に狩猟に出かけていたことから間違いではない。
「トーマスさんは一度も私達を見てくれてない、それじゃお互い歩み寄ることもできないから。……だから、…その、……お互いよく見れば私達の事もよく知り合えるんじゃないかなって……。」
「おい、拳で語り合えばどうにかなるみたいな考えじゃないだろうな……。」
「う、うん……。」
姫和とトーマスは若干呆れながらも、言いたいことは分かっていた。理解しあえば蟠りも無くなると。

「いいや、そりゃ無理な話だな、……刀を振り回すことに嬉々として行う殺戮者に何を語り尽くせばいい？……ただ言えることはお前達みたいなのが、人々に偽りの正義と栄光を見せ、憧憬の念を抱かせ、それに誘惑されたＳＴＴ隊員や刀使の数をいたずらに増やしていき、そんな夢みたいな幻想を抱いた者達がどれだけの血を流して死んでいったと思う？」

「……可奈美。私は今確信した。…こいつはこういう外道だ。人々の代わりに祖先の業を背負い鎮め続ける巫女なんだということに理解などしない。」

理解し合えることなど無いとスッパリと言うトーマスに、姫和は冷たく言う。

「……これで分かったろう可奈美？俺とお前らとでは考え方がまるで違う。俺達の国に何故〝銃〟が必要かあまり考えたことないだろう？それと同じように、俺は少年兵のような刀使のことなんか理解に苦しむ。ここは女子供が武器を持って襲い掛かるベトナムか？……もっと言うとだ、優とお前達はどう違う？荒魂と化した人まで斬ってしまおうとするお前達とどう違う？」

「何が悪い？祖先の代から続け、母から受け継いだことだ。お前に何が分かる!?」

「フッ、ほらこれだ。そんな〝呪い〟にいつまで拘るつもりだ？いい加減気付いたらどうだ、お前なんかに人は殺せない、中途半端に終わるのが関の山だ。……代わりにあの荒魂、優に頼んだらどうだ？」

「何だと？」

「そうすりゃ、お前の恨みは晴れるだろう？母の願いだか何だか知らんが、タギツヒメを同時に始末できる。今の世の中、どう足掻いたところで戦いは無くならない。なら、最短の方法で決着をつけることが最善だろう？…だが、そんなことをする俺は悪辣か？それでも良いさ、喜んで呼ばれてやる。俺は刀使ではないからこんなことしか出来ん。だが一つ言える、正義でなんか世界は救えない。それを歴史が証明している。何も変わらない。」

姫和はトーマスの考えを聞き、相容れない存在だと理解するが、可

奈美はこう尋ねた。
「じゃあ、何でトーマスさんは戦うんです？何も変わらないのに？」
「……何で戦うか、お前にしては良い質問だな。……そうだな、とある親友と『世界平和のために。』とかいつもバカみたいなことを言っていた。だがその親友はベトナムで靴磨きをしてくれた少年に爆殺された……。いいか、平和なんて存在しない、ありえねぇんだよ。」
　可奈美の問いかけにトーマスは気付くことなく流暢に喋っていた。
「なあ、天国や神の国でも戦いが有ったことを知っているか？元天使のサタンやら、北欧神話やらを読めば幾らでもそんな話が出てくる。……天国や神の国でも穢れた戦争が起こる。戦争は人の営みだ、歴史だ、無くそうとするなんてバカげている。……いつもどうして、戦うんだと訊かれればこう返してやる。『ただ、勝ちたいだけ。』とな、お前だってそうだろう？試合に勝ちたいって思ったことぐらいあるだろう？」
　そうして、トーマスは最後に憎まれ口を叩くが、可奈美はこう返した。
「……だいたい分かりました。トーマスさんも正義を信じたことが有る人だよ。」
「！……何を根拠にそんなことを言いやがる!!」
「根拠は有るよ。だって、本当に悪辣な人は自分で悪辣とか言わないし、世界平和を望んでいた親友を悪く言わなかったから。……見えた気がしました、貴方の事が。かつての貴方は正義の味方のようになりたかったんでしょう？私には貴方が何に裏切られ、何に絶望したかは分からない。けど、そんなことばかりしていても、何にもならないよ。いずれ本当の自分と向き合わないと本当に欲しかった物は手に入らない。……うまくは言えないですけど、これだけは言えます。」
　このときのトーマスは可奈美の話を聞き、昔を思い出していた。
――――世界平和のため、安全な世の中を夢見て軍に志願した親友と自分。
――――戦争が終わり、地獄から自分の国に帰れば、〝赤ん坊殺し〟と、〝殺人鬼〟と罵られていた。

――その後、昔の仲間は皆、クスリに溺れるか、自ら命を絶っていた。

――戦友も、親友も国のために、理想のために戦ったが、賞賛されず孤独に消えて逝った。

何故かトーマスは、つぶさにそれを思い出していった。

「ハズレだ、ハズレ、お前に何が分かる。…バーカ。」

トーマスはそれだけ言うと、可奈美達から離れて行った。

相反するコト

「博士、例のアンプルは？」
「一応解析中だが、ここの施設で無理だった場合、長船の友人達に運んでもらいたい。」
「分かりました、アンプルが想像通りのものなら折神家と鎌府が行っている非道を白日の下に晒すことができます。」
「我が孫達が危険を顧みず手に入れたプレシャスだ。無駄にはせんよ。」
　紗南の問いに、このアンプルを入手するまで犠牲になったシェパードとマイケルを思い出したのか、少し苦笑しながら答えるフリードマン。
「褒めてクダサーイ！」
「よーしよしよし。」
　紗南はマイケルとシェパードが戦死したことにエレンが気付かれないようにするため、湿っぽくなった気持ちを誤魔化すようにエレンの頭を力強く撫で回していた。
　力強く頭を撫で回されたエレンは「わふわふわふ。」と犬のような声を出して喜んでいた。それを見ていた紗南は幾分か心が晴れていく気分となっていた。
「これは賞与ものだな。期待してるぞ。」
「なら喜べ、もっと出世させて、もっと忙しくさせてやる。」
　紗南の意図に気付いた薫が軽口を言うが、仕事量を増やし更に忙しくさせてやるという返答に薫は「おぅぃ。」と奇声を上げ、やぶへびであったことを痛感するのであった。
　しかし、そのアンプルに可奈美が見た〝荒魂の目〟が現れていたことに誰一人気付いていなかった……。

その後、舞衣と沙耶香はジャージに着替え、優と共に布団を敷いていた。

「こっちに来てすぐなのに凄い話聞いちゃったね……。」

「私はこれからどうすればいい？」

ふと、沙耶香は舞衣に尋ねていた。

「どうって…普通に……。」

「私は今まで戦うことしかしなかったから。」

「……沙耶香ちゃん。」

「でも、戦うと何も考えなくなる。それで、この温かい気持ちも失いそうで怖い。……でも、みんなの役には立ちたい。」

沙耶香は悩んでいるのだろう。雪那に温かい気持ちを捨てないと言ったが、その後はどうすればいいのか分からないのと、戦うと無心になってしまうのが怖いのだろうと舞衣は思った。だが、舞衣の方もどう答えるべきか悩むが、

「沙耶香おねーちゃん。戦いたくないなら止めないけど、勿体無いと思うよ？」

「えっ？」

突然、優がそんなことを言ってきたことに驚く舞衣と沙耶香。

「だって、大切な人のために戦うと嬉しいし、温かい気持ちになるって〝他人〟に教えてもらったから。それなら、沙耶香おねーちゃんが荒魂を退治すれば他人に感謝されるし、稽古に励んで剣術が上手くなれば可奈ねーちゃんも喜ぶから、きっと刀使を続けた方が温かい気持ちになると思う。……それに、沙耶香おねーちゃんは温かい気持ちを捨てずに頑張っているから、僕なんかじゃなれない、強くて立派な刀使さんになれているから。怖がらないで。」

「……。」

沙耶香は優にそんなことを言われて、嬉しかったのか、少し照れながら頭を撫でていた。しかし、優が言っていた〝他人〟は山中での戦いでバックマウントを取られたＳＴＴ隊員のことであることに舞衣と沙耶香は気付いていない。

「……ありがとう。優。」

「んっ、どう致しまして。」
沙耶香に頭を撫でられていた優は、気持ちよさそうにしていた。そして、舞衣はそんな光景を微笑ましく見ていた。
（うん、私、強くなる。……ずっと、自分は強いと思ってた。与えられる任務をこなすのは簡単だった。だけど、そんなのちっぽけだった。……今はもっと強くなりたい。強くなって……みんなの役に立ちたい。可奈美や、……姫和よりも、……そして、この子の目と期待に応えたい。）
沙耶香は内なる炎を燃やしていた。小さい子の期待に応えるべく。

明日に向けて、皆就寝するところ、
「ヤダ。優ちゃんと一緒が良い。」
男女別れて就寝すると決めたそんな中、優を抱き抱えた可奈美だけがそんなことを言っていた。
「いや、その歳でそれはなぁ……。」
薫はもう9歳だからロック達が居る部屋で寝かせれば良いと言ったら、可奈美が反発したので困惑していた。
「……あっ、えっと、薫ちゃん実は……。」
薫は舞衣の話を聞いて納得することにした。
曰く、母が死に、一人になったのが辛かったこと――――。
曰く、優がまた居なくなり、知らない内に消えることに恐怖していること――――。
可奈美はそんな精神状態だと知らされた薫はしぶしぶ諒解し、優に向けてこう言っていた。
「おうい、良かったな。こんな綺麗なお姉さん方と一緒の部屋に寝られて、素直に喜べよっ!!」
フハハハと高笑いしながら、薫はこう宣言していた。
「やったね！優ちゃん!!」
「お前が喜ぶんかいっ!!」
可奈美と薫がそんな大きな声でコントをしていたら、

「おまえらっ、煩いぞ。……早く寝ろっ。」
舞草の刀使のリーダー格の1人でもあり、戦闘指揮官の米村　孝子にこっぴどく怒られることになってしまった。

「ねぇ、姫和ちゃん。……なんだか不思議だね。こうしてみんなで一緒に寝られるなんて……。例のアンプルが手に入って、舞草の人達が本格的に動けるようになって、私達は助かるかも知れない。……だから、ありがとう姫和ちゃん。……姫和ちゃんの行動が起こした結果なんだから、姫和ちゃんの頑張りは間違いじゃなかったんだよ。……うん。」
可奈美は物思いに耽っていた。
最初は荒魂の目が見えたため、折神家のことが信用できず、当ても無く姫和と一緒に逃亡することに不安だったが。今はこうして沙耶香と舞衣が居ることに、仲間として戻って来たことに感動していた。
「可奈美……お前も折神朱音のように後は舞草に任せろと言う気か？」
「言わないよ。」
姫和は、可奈美に優が今どのような状態か言えていないのに、感謝の言葉を言われることに酷く罪悪感を感じていた。
「二人ともうるさいデスよ～、特にひよよん。怒られたくなければ寝てクダサイ。」
「なっ！」
孝子にまた怒られるのを見るのが嫌なのか、エレンは先程の事を言って、注意していた。
「黙って寝ろ。……明日は頼んでもないのに舞草の先輩方が稽古をつけてくれるんだ。マジでしごかれるうえに、これ以上怒らせると何されるか……。分かったなら、前みたいなタギツヒメと仲良くしていたお喋りみたいなことは止めて、さっさと寝るぞ。」
ねねも「ねーっ。」と言って声を出していて、薫もこれ以上孝子達を怒らせたくないので早く寝て備えるようにと言っていた。
それに可奈美は「はーい。」と答え、優を抱き枕にして目を閉じて眠

りにつく。しかし、姫和は〝タギツヒメと仲良くしていた〟と言われたことに引っ掛かっていた。

姫和は夢を見ていた――――。

幼い少女が白い布で覆っている人に向ってすすり泣いている夢。

「……どうかしたのか？」

不憫に思った姫和は、その幼い少女に近付き声をかける。

「……母さんと父さんが死んだ……。」

それを聞き姫和は、その少女に「誰に？」と訊いてしまう。

「……荒魂。」

それを聴いた姫和は、おもわずその幼い少女の顔を見てしまった。

「……どうしたの、お姉さん、……怖いの？」

「……名前は？」

「十条　姫和。」

幼い頃の自分に似ているような気がする幼い少女が居た。そして、自分と同じ名前であることから、もう一人の自分のようなものだろうと姫和は理解していた。

「どうして荒魂なんかと仲良くする？そんなに相手にしてくれるのが嬉しかったのか？」

「……違う！あの子は、優は荒魂なんかじゃない!!ただの子供だ……。」

「嘘ばっかりだ！あの子自身が荒魂だと認めたとき否定しなかった!!だったら、あのトーマスとかいうジジイが言っていたように荒魂同士が殺し合えば荒魂を斬って鎮めることも、母さんの願いだってやり遂げることも出来たのに何でそれをしないんだ!!?」

自分によく似ている幼い少女はそう言って自分を糾弾していた。

「それは……。」

しかし、姫和は何も言い返せなかった。

「私はお前の考えが分かるよ。嬉しかったんだろう？自分はこんなに

苦しんで頑張っているんだから、一人くらい自分を認めてくれる人がいて、その人が自分のことを賞賛してくれることを。……頑張りの見返りが欲しかったんだろう?だから、お前は母の形見でもあるスペクトラム計を潜水艦の中に置いて来たんだ。」

幼い少女は鬼女のように顔を歪ませ、姫和を激しく罵っていた。しかし、姫和は復讐鬼になるとこんなふうになると見せられているかのように思ってしまった。

「振動して中のノロが優の方に指し示すのを見ることになるのが嫌だから、……そんな理由で置いて行ったんだ。……母さんの思いを散々利用した挙句、踏み躙って捨ててきたんだ!!……そんなお前が母の使命だとか、人々の代わりに祖先の業を背負い鎮め続ける巫女だとかよく言うよ。……ただの単純に自分を良く言ってくれる子を周りに置いて、良い気になってるだけだ!!違うかっ!!!……そんなお前が刀使なんかであるもんか!母の思いを利用して気に食わない者を痛めつけたかっただけなんだお前はっ!!!」

「!!ちっ、違う私は……!!」

姫和は自分の言葉が段々と小さくなっていくのが分かっていった。分かっていたが、叫ばずにはいられなかった。

「タギツヒメを討つ理由はただ僻んでいるだけだろう?……父さんも母さんも荒魂に奪われ、今度は大切な者も奪われることにイラついたから斬るんだろう?」

「!……何時までも過去にしがみつく怨念が全てを分かったかのように言うなっ!!」

姫和は鏡に向って言っているような気持ちとなっていた。自らも〝忘却〟を選ばずに、〝復讐〟を選んだのだから。

「でも、これだけは言える。祖先はお前みたいな子供なんか認めない。ただの人殺しだって責めるだけだ。」

幼い少女は姫和に冷たく言い放つ。殺人鬼だと。

「……そんなことはない!子供を殺すことに祖先が喜ぶはずないだろうっ!!」

「でも、お母さんの時代のときは多く居たんだろう?……お前はこう

言ったじゃないか？」

幼い少女がそう言うと、『ここ最近は人が荒魂化する事例はほとんど無い。だが、私の母の時代にはそう珍しいことじゃなかった。』という声がこの二人っきりの空間に響くように聞こえていた。

「母さん達はこんなこともしていたかも知れないのに、お前が、お前だけが特別扱いされる訳無いだろ。」

「……。」

姫和は、幼い少女に責められ、何も言い返せなかった。そして、後ろから声がして振り向くと、

『オマエハ、デキソコナイダ!!』

『ヒトゴロシッ!!』

『シンジャエッ！』

『オマエナンカ、イキテイルカチナドナイッ!!』

非難の声がたくさんと聞こえていた……。

辛うじて、これだけは聞こえていたが、声を出していたのは自分の祖先だと何となく理解した姫和の精神に深手を負わせるのには充分であった。

「……ちっ、違う。私は人殺しなんかじゃない、……嫌だ！私を人殺しと言って責めないでくれ!!」

耳を塞ぎ、身体を小さくして蹲るしかなかった姫和は、懐かしい声がはっきりと聞こえた。

「……姫和？」

母親の簀の声だった。今の姫和にとっては一筋の光明に思えてならなかった。

「母さん？」

姫和は、ただ簀の声がした方に向って走った。顔を見ず我武者羅に。

「……姫和、大丈夫だった？」

「うん、母さんも……！」

しかし、姫和は見てしまった。

「姫和？……どうして、母さんを捨てたの？」

スペクトラ計を手に持ち、ゾンビのように腐乱した姫和の母の顔が目の前にあった。

姫和はそれに驚き、簪を突き飛ばしたあと。そんな簪から目を背け、逃れるように、慌てながら逃げた。

逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて逃げて。

逃げていたが、姫和は遂に簪に手を捕まれ……。

「私の思いを踏み躙る貴女なんか……、産むんじゃなかった。」

と姫和は、ゾンビのような簪に言われたような気がした。

そこで目を覚ました姫和は息を荒げ、ふと隣にいる可奈美と優を見る。

月の光に照らされて、安らかに寝ている姉弟の姿がハッキリと目に映り、それを守りたい自分とタギツヒメを許せない自分という相反する自分が居ることに気付くもどうすることもできなかった。

「……。」

しかし、潜水艦まで戻ってスペクトラム計を取って来る気にもなれず、可奈美と優と向かい合う形で眠ることにした。

本当は、またあの夢を見るのが怖いので可奈美と優と一緒の布団で眠りたかったが、そこは何とか向かい合う形で我慢し、目を閉じてどうにかして眠り、今度はあの夢の続きを見ることなく、眠ることができた。

刀剣類管理局本部――――。

「……特にこれといった故障は無いですね。」

「これといって、特に有りませんですの？」

山中での戦いにて、優から荒魂の気配を強く感じた寿々花は、スペクトラムファインダーがそれに一切感知しなかったことに疑問に思

い、当初は銃撃戦も有ったので故障かと思い直してもらおうと修理してくれるところまで、足を運ぶが、
「ええ、山中での戦いでしたから電波状況が悪かったのでは？」
しかし、何の問題も故障もなかった。それに寿々花は強く疑問を抱くのであった。
何故、反応しないのか？答えは、優の中に居るのがタギツヒメであり、そのタギツヒメへの反応を強くすれば、紫自身にも反応してしまう恐れがあることと、特殊な出自故に反応させることが出来なかったからである。
そんなことは知る由もない寿々花だが、新たな疑問と疑惑を抱かせるのに充分であった。
折神家によって細工がされ、最新式ながら偽情報を流すスペクトラムファインダーで真実を探求する寿々花。それとは対照的に、アナログながら真実を示すスペクトラム計から目を逸らす姫和。二人はあまりにも違う道を行くことになってしまった。
「……そうかも知れませんわね。お手間を取らせて申し訳ありません。」
寿々花は自身のスペクトラムファインダーを診てもらった職員から微笑みの顔を向けると、スペクトラムファインダーを返して貰い、そそくさと退室していった。
（……まずは、真希さんが復活するまで、色々と早急に且つ気取られることなく調べないと……。）
そんなことを思いながら、寿々花は情報を集めていた。最悪の場合、折神家が敵に回る可能性を考えての行動だが、果たしてあの折神紫に気取られることなく、真希がいない一人の状況で調べられるかどうか不安ではあるが、真希が帰ってくる前にやっておくべきだと思い、寿々花は行動する。
ただし、寿々花は結芽のことを見る暇もなくなっていったが――。

戦闘準備

刀剣類管理局本部――――。

夜空と星が輝く空の下で、ソフィアは穂積と何名かの部下の刀使を傍に置き、誰かと電話をしていた。

「そうか、あの子は、あの〝刀使〟の弟か……。」

電話越しの相手の話を聞き、ソフィアはあからさまに失望したかのような声を上げると、電話越しの相手に失望したかどうか問われるが、そんなことはないと答えていた。

「いいや、俄然興味を抱かせる。重要なのは〝戦う姿〟だ。」

ソフィアは舞草に居る内通者を通じて山中の戦いで出会った、あの鎌府の制服を着ていた少女、もとい優のことを訊いていた。

特にソフィアは見ることができず、気になっていた親衛隊第三席の夜見を破った戦いはどんなものであったかを内通者に尋ねていた。

「……味方の死体を盾にするとは、それは私でも思いつかなかった。やはり、あの子は素晴らしい。〝あの刀使〟には勿体無いほどにな。」

〝あの刀使〟とは可奈美のことであり、どうすれば優をこちら側に引き込めるかを考えていた。やはり、あの子はこちら側であるべきだと……。

ソフィアは〝悪逆を尽くした自分〟ですら思いつかない戦い方をするあの子はこちら側に居るべきだと強く思い始める。そして、知らない所でソフィアの好感度を上げ続けていることに優は今も気付いていない。

「いいや、こちらこそ。」

親衛隊と刀剣類管理局本部の内部といった有益な情報をありがとう、と電話越しの相手に言われたソフィアはこちらも有益な情報を貰えた（内容・衛藤　優の情報のみ。）ことに感謝の意を述べると、電話を切った。

「……何が気に入ったんです？」

「何が？」

「燕さんをああいう風にして、その子を気に入る理由が解りませんの

で。」

　嬲り殺し同然のことを笑いながらする。さっきまで味方だった者の死体を盾にする。何食わぬ顔で夜見に重傷を負わせる。そんな人の皮を被った鬼のような少年を気に入る理由が穂積は分からず疑問を口にした。

　普通に考えれば、燕　結芽は刀使であるが故か、そんな外道染みた戦い方はせず正々堂々と戦うところはあるうえ、まだ１２歳であるにも関わらず親衛隊の中ではトップの実力を持つ、ノロが体内に入っているとはいえ、それは優にも同じことが言えるので論外とすれば、残忍な戦い方とノロまみれの少年を味方に加え社会的なダメージを負うよりも、品性も実力も刀使として高い才能がある結芽を味方につける方がまだ良い（演技であったが、ソフィアが結芽と楽しく談笑できたことを鑑みれば可能であると思える。）と思えてならない穂積であった。

「……手負いの獣は苦しませずに処分すべきだろう?それに、親衛隊を見てどう思う?」

　穂積は、そういった理論で動いていることを理解しようとしたところ、返す刀で急にソフィアに問い掛けられ、言葉が詰まる。

「まるで、苦楽を共にし、親友や家族といった関係を築き上げていった善人のように見えるだろう?だが、友情、親愛、和解。……そんなものは全て紛い物だ。少しすれ違っただけで互いに刀を取り、斬り合う。しかし、もしもその中に私が見つけられなかった〝狼〟がいたら、そんな紛い物を捨てさせてやり、鎖を外して解き放つべきではないか?」

　友情、親愛、和解。そんな思想は紛い物であり、鎖でしかないと断言したソフィアは本性を剥き出しにして答えた。

「かつて、刀使は誇り高く何者にも屈しなかった。……だが、今や戦い方も忘れ、権力を前に簡単に跪く。」

　ソフィアは刀使に対しての持論を侮蔑の感情を曝け出して語り、

「最も悲惨なのは荒魂だろう。……この獰猛な獣達は一箇所に閉じ込められ、生命の自然な行いたる争いまでをも禁じた。」

そして、貯蔵庫に一箇所に集められた荒魂に対しての持論を語ると、

「皆が皆、臆病過ぎるだけなのだ。紛い物を拭い去り、誰かが背を押し、本性を自覚させ、生まれ変わらせてやらねばなるまい。」

腕を振り上げて、感情的に、ソフィアは自らが抱く思想を熱く語っていた。

「それで、それをするにはどうするんです?」

しかし、穂積はまるで興味がないように冷静に問い掛けていた。

「簡単だ。……火種を、大儀を与えてやればよい。舞草には折神　朱音、折神家には燕　結芽がいる。」

穂積の問いにソフィアは意味深に答えるだけに留まった。

(狼の時代が訪れる。……そのときは、〝羊〟を〝狼〟にしてやろう。)

この先、どうなるかも分からず……。

可奈美達が舞草の先輩の集団戦の稽古をつけて貰い、フリードマンが可奈美達にS装備と折神　紫についての考察を語っていた頃――。

とある一室にて、孝子と聡美、トーマスとロークが居た。

「……つまり、紫様にも龍眼が有るってことですか?」

「ああ、優に訊いたから間違いない。」

ここに集まる前にロークは優に龍眼の弱点と能力を訊いて、集団戦の訓練に役立てればと思い、孝子や聡美にも分かるように説明していたところであった。

「紫、もといタギツヒメは躊躇することなく龍眼を使うだろう。そうなりゃ、一対一だと勝ち目は無いな。」

「……弱点は視る範囲を広げて脳を処理落ちさせることか……、やは

り今やっている集団戦の稽古は重要だ。孝子、集団戦はどんな感じだ？」

トーマスは対紫戦では、一騎討ちは厳禁だということを言い、ロークは孝子に可奈美達の集団戦の成績はどうかと尋ねていた。

「一人一人はまずまずですが、集団戦はまだまだです。」

「ですけど、舞衣という子は明眼が使えますので、自信をもって貰えれば優秀な指揮官となり、集団戦も良くなると思います。」

孝子の集団戦はまだ一線級ではないことを伝え、聡美は舞衣の評価と将来について発言し緊張した場を和らげようとした。……つまりは、まだ時間は要るということだろう。ロークはそう理解した。

「……できれば、少々無茶でも良いから、早く一線級にしてほしい。行動を起こすなら、親衛隊の二人が負傷して、防備が薄くなっている今がチャンスだ。」

ロークはエレンという舞草の中でも一線級の実力を持つ刀使が御刀を失った状態のうえ、こちらの兵士も死者が出ているので、親衛隊が四人体制に戻れば、紫に近付ける難度が劇的に上がる。そのため、ロークは焦ってこのような発言をしていた。

「……それは止めた方が良いでしょう。たぶん、舞衣は今自信が無い状態なので、あまり無茶をすると精神がやられると思います。」

しかし、舞衣は可奈美に何らかのコンプレックスを抱いていることに気付いていた孝子はそれに異を唱えていた。

「めんどくせぇな、そんなもん矯正させれば良いだろう。」

「矯正して、折角集団戦のことを教え、明眼と透覚を併せ持つ数少ない刀使を潰して良いならそうしますが。もし、そうなったときトーマスさんは責任を取って、可奈美達に説明してくれますね？」

トーマスは軍隊方式で物を考えて言う。すると聡美はトーマスの言葉通りの矯正をして、矯正に失敗したときの全ての責任をトーマスが持ち、可奈美達の反発と非難を受ける覚悟があるならと言って、微笑んでいるが、目が笑っていない顔で強く抗議していた。

「……という訳です。こちらとしては矯正とスパルタ方式にする気はありません。」

「それにトーマス、舞衣は柳瀬グループのご令嬢だ。精神病になって帰らせたら舞草と刀使のイメージが悪いものになっちまう。」

孝子は集団戦の訓練を監督する立場として発言をしたあとに続いて、ロークも女子中学生に矯正したくないので、それらしい理由を言って孝子達を援護する形の発言をする。

完全に三対一となったトーマスは両手を上げて降参の意思表示をする。

「……しかし、親衛隊もどうしましょうか？真希と夜見という二名が居ないですが、親衛隊最強の結芽、前回と前々回の大会で準優勝をした実力を持つ寿々花の二名が居ます。それに綾小路に潜伏している草からの情報によると、綾小路と鎌府からの増援が居るという報告を聞いています。……これらの防備を突破しなければならないのは現状では至難だと思いますが……。」

集団戦はこちらが訓練の監督をすると決まったと思った孝子が親衛隊達と戦闘になった際の対抗策の話に持って行こうとする。

「……それなら考えてある。……綾小路と鎌府からの増援は舞草の刀使に任せよう。」

トーマスは綾小路と鎌府からの増援は舞草の刀使でも充分対処できると言い、

「寿々花と真希、指揮と前線にも立てるこいつらが一番厄介だが、子供に甘いところがあるのを突いて、優を囮にし孝子達が側面か背後で攻撃。」

９歳の子供を使った囮作戦で背後と側面で奇襲して倒すと述べ、

「結芽は功名に逸るところがあるから、突出させて本隊と分離、連携の取れた三名に任せ、一人が正面に立ち向かって、写シを解除してやられたふりをしたあと残りの二人は背後から結芽を奇襲し、結芽が背後の二人に気を取られたところを正面の奴が不意討ちする。」

正面に当たった人はわざとやられ、油断したところを残りの二名が背後から奇襲し、背後に意識が集中したところをやられたふりをした人が不意討ちをすると答え、

「夜見は無念無想を使える沙耶香と舞衣が適任だろう。」

夜見は親衛隊の中では実力が高くないが、ノロの強化が厄介なので、足の速く実力も高い沙耶香に当たらせ、小型化したノロの集団の攻撃を翻弄してもらい、舞衣が仕留める

「紫は衆目の目があれば大荒魂の力は使わないだろうから、一番連携が取れていて実力もある姫和と可奈美、役割が空いた者が援護に向かい当たらせる。……それが、一番だろう。」

龍眼の弱点である集団戦に脆いという弱点を考慮し、実力と連携が一番取れている可奈美と姫和に当たらせ、それでも倒せない場合は手の空いた者も動員して数の暴力で押し切ろうとしていた。

だが、恥も外聞もなく後ろからの不意討ちや9歳の子供を使った囮作戦などといった外道な作戦をトーマスは孝子達に言ってのけていた。ロークはそんなことを女子中高生にやらせることに渋い顔をしていたが。

「……まあ、今の私達では、親衛隊に真っ向から挑んで勝てる訳も無いので、そうするしかないですね。」

孝子はエレンという戦力を失っている今の状態で、折神家との戦闘まで発展した場合はそうすることでしか勝てないことは承知していた。何より、大荒魂を討伐するということ、刀使としてあるべき姿に戻すことを掲げているが、どのようなことを言ったところで舞草のことを反社会勢力、いわゆるテロリストとしか見られないのは理解していたので、卑怯な作戦もやってのけようと思っていた。

「……じゃあ、この話は以上だ。まだ時間はある。可奈美達が集団戦でも一線級になるまでには決めよう。」

ロークはこれ以上、トーマスが刀使達の反発を招くような発言をする前にさっさと切り上げ、終了させた。

一方、寿々花は――――。

「お加減はどうです?」

「……身体を動かせないから退屈で仕方ない。」
　刀剣類管理局本部内に有る病室に居る真希の見舞いに訪れており、他愛の無い会話をしていた。
「夜見は？」
「……重傷ですわね。」
「……そうか、もう少し見てやるべきだったな。」
　夜見は物静かで何を考えているか分からない部分があるため、どうして一人で突出し、そんな無謀なことをしたかは分からないままだった。
「ところで、結芽は迷惑を掛けていないだろうな……。」
「ええ、特に問題は無く。」
　昔、親衛隊権限とかを使って部下を困らせていたことを思い出した真希は、寿々花に尋ねていた。そんな真希に苦笑をしながら右手で顎を撫でると、書類を渡していた。
「……これは？」
「報告や回覧です。真希さんや夜見さんの空いた部分を埋める形で出向してきた刀使のリスト、夜見さんの容態とＳＴＴ隊員の弾薬使用数のリストといった書類です。目を通しておいてくださいね。」
「……そうか。」
「それでは、私はお暇させて頂きます。」
　そう言って、寿々花は真希の居る病室を退室しようと席を立ち、退室しようとすると、真希から「書類済まないな。」と言って手を振り、寿々花もそれに応えるように手を振って退室していた。
「……。」
　真希は誰も病室に居ないことを確認すると。書類を一枚一枚丁寧に見ていた。
（……対刀使用のボウガン、……スペクトラムファインダーの修繕依頼の費用。違う、そうじゃない。寿々花は何かを伝えようとしていた。）
　寿々花は右手で顎を撫でていた。これは二人で決めた不味いことになっているのを知らせるサインであった。真希はこの書類から何

かの暗号があると思い、鉛筆で白い部分を黒く塗りつぶす。すると、
（スペクトラムファインダーの修繕依頼書に何か書かれているな、
……衛藤　優に荒魂の強い匂い、の文字から伸びている矢印を辿ると、……反応なしで修繕。……特に異常なし!?）
　真希は立ち上がりそうなほど驚いていた。親衛隊の夜見が使役する荒魂に反応しないのは、夜見の能力は秘匿しなければならないという説明を紫に受けていたため、夜見に反応しないのは納得できる。しかし、優は親衛隊でもなければ、刀剣類管理局とは関わりがない一般人、もしくは舞草が製造したノロで強化された人間だと思っていた。しかし、夜見と同じ様に反応しないのは何故だろうか？優の中に居る荒魂が紫と同質のタギツヒメであることを知らない真希は疑問を抱き、一つの結論に導く。
（スペクトラムファインダーに紫様による不正、……いや、衛藤　優と折神家に何らかの繋がりが……？いや、紫様はこれを知っているのか？）
　となれば、今の自分の状況は不味いだろう。スペクトラムファインダーの不正を知った自分は何処で、何時背中を刺されるか用心しながら舞草と戦わねばならない。それに、紫も何らかの理由で脅されている可能性もあるため、慎重に行う必要があると思っていた。
（……まずは情報が欲しい。寿々花一人では……、一刻も早く身体を治さないと。）
　真希はそう考えを改めると、鉛筆で黒く塗りつぶした部分を消しゴムで消し、退院したあとのことを考えていた。

前夜

数日後、可奈美達は舞草の先輩方と集団戦の稽古を付けて貰ったあと、露天風呂に入り疲れを癒していた。

「個人戦も楽しいけどチーム戦って楽しいね。私達って、まだあんまり実戦経験ないから攻撃手とか遊撃手とかってなんだか新鮮！」

可奈美は、舞草のリーダー格の一人孝子に褒められたことに上機嫌だった。

「うん…可奈美ちゃんは強いね。」

舞衣はあまり元気がなさそうに、力無く応える。

「舞衣ちゃんだって！聡美さんと対峙した時薫ちゃんと打ち込みのタイミングかぶっちゃって、一瞬遠慮したでしょ？あのまま打ち込んでたら一本！だったよね？」

「そんなとこまで見てたんだ……。」

元気良く言う可奈美を見て、舞衣は落ち込んでしまう。あれほど、荒魂を斬っても斬っても、剣術の腕が上がらない。いや、下がっているように感じられた。だが、実際は荒魂ばかり斬っていたために対荒魂戦においては上がっているが、対刀使戦においてはさほど上がっていないことに気付いていないことが原因だった。

「見たっていうか、見えたっていうか……。」

「やっぱり可奈美ちゃんは強いよ。お母さんのあんな話聞いてそれでもまだ戦おうとしてる。ううん。聞いたからかもね……。でも、私には……。」

知らず知らずの内に舞衣は親友の可奈美に弱音をぶつけていた。

そんな舞衣に可奈美は、

（……よく言うよ。）

心の中で毒づきながら呟いていた。

可奈美は、舞衣は昔から自分なんかより良くできた子だと思っていた。妹二人の面倒をよく見ていて、よく分かっている。そのうえ、お菓子作りも上手だし、忘れ物をしたときも貸してくれたり、座学も優秀で可奈美自身もよく助けてもらっていた。

その一方、自分はどうだろうか？最愛の弟だと思っていたのに、化け物のような目で見てしまい、何も理解していなかった。そして、面倒も見れてなかった。いや、むしろ何も見ていなかった。そんな剣術しか脳がない自分を舞衣は凄いと言ってきたことに、可奈美は嫌味のようにしか思えてならなかった。そんな舞衣に可奈美は苛立ちを募らせていた。

そして、舞衣自身も可奈美が自分に対してそんなコンプレックスを抱いていることに気付いていなかった。

その後は、姫和は舞衣に『因縁が有るから戦う理由が無ければついていく必要がない。』と言って、戦いに巻き込まれないようにしていた。エレンと薫が楽しげに喋っているのとは対照的に、舞衣と可奈美の気持ちが沈んでいることに気付くこともなく。

露天風呂から出た可奈美達は身体を拭いていたところ、

「なんだか外が騒がしいね。」

トントンカンカンと何かを建てている音が聴こえ、何事かと可奈美は言う。

「そりゃそうデスよ。なんてったって、今日はお祭りデスから。」

「……お祭り？」

「この里では、年に二回やるそうだ。」

「へぇ～。楽しみだなぁ、お祭り。」

お祭りと聞いて心を弾ませる可奈美。しかし、本来であれば可奈美は舞衣に後で行ってみようと訊くが、舞衣に苛立ちを募らせたことも有って、何も言わなかった。

「あれ？私の制服なくなってる……。」

「私のも……。」

可奈美がまず真っ先に自分の美濃関学院の制服が無くなっていることに気付くと、舞衣もそれに気付く。そうして、可奈美達は自分達の制服が無くなっていることに気付き、姫和が一つの結論に至る。

「まさか……優が？」

姫和は声を出して、一応男性である優が制服を盗んだのではと言うが、
「もぉ～、それは酷いよ姫和ちゃん。」
「それは幾らなんでもないと思うけど……。」
「……姫和、考えすぎ。」
「まだ子供ですからそれは無いデスヨ。……ねねデスネ。」
「だな、俺は優にねねはどうしてたか訊いてみる。」
五人とも寝所を共にした優が何も問題を起こさなかったことと、まだ子供だからそれは無いだろうと迅移よりも早く結論付け、色々と前科が有るねねが犯人だと決め付けていた。だが、当のねねは露天風呂が空くまで優と一緒に遊んでいたことは五人とも知らなかった。（つまり、冤罪である。）
「お前達の制服なら、クリーニングに出しといたぞ。」
「夕方には仕上がるそうよ。それまでは……はいこれ。って、何着ているの？」
何故か、沙耶香は裸ではなく、誰の物か分からない黒のトレンチコートを着ていた。
「いつでも、任務に出られる格好で待機しておかなきゃと思ったから。」
入浴する前、沙耶香は制服のまま入浴しようとしたため、舞衣が慌てて止めて風呂は裸になって入るもの、学校の制服と他の皆もこの露天風呂は使うから汚してはいけないということを沙耶香に教えていたという一悶着があったことを可奈美達は思い出していた。
「沙耶香ちゃん、そんなの何処にあったの？」
「隅にあったから拾って着た。」
裸に黒のトレンチコートという露出狂一歩手前の格好をしている沙耶香を見た舞衣は呆然とし、もしやと思い訊いてみる事にした。
「……もしかして、その格好で外に出ようとしていた？」
「うん、ねねを探さないといけないから。」
舞衣は高津学長は今まで沙耶香に一体何を教えていたのだろうかと思ってしまった。

「……とりあえず、脱いで。」
「でも、流石に裸で外に出るのはちょっと……。」
とりあえず舞衣は沙耶香に黒のトレンチコートを脱ぐように言うが、沙耶香は裸で外を出るのは流石に恥ずかしいと言っていた。
「……いいから、ほら孝子さん達が浴衣持ってきているからそれに着替えよ。」
舞衣にそう言われた沙耶香はしぶしぶ黒のトレンチコートを脱ぎ(割と気に入っていた。)、浴衣に着替える。
「ほら！姫和ちゃんも早く着替えようよ。」
「今はそんな浮かれてる場合では……。」
「お祭りだよ。今日浮かれないでいつ浮かれるっていうの！」
「おっ、おい……。」
それを見た可奈美も姫和にかなり強引に押して言い、着替えてもらった。
「……。」
姫和は、鏡に映る浴衣を着た自分を見つめていた。舞草の先輩方が稽古をつける前日に見た小さい頃の自分が出てくる夢の内容を思い出し、本当にこんなことをしている場合だろうかと悩んでしまった。
しかし、
『お祭りだよ。今日浮かれないでいつ浮かれるっていうの！』
そんな可奈美の笑顔を思い出し、今日だけでもと思い、お祭りに行くことを決意する。
「……行くんじゃないのか？お祭り。」
そして、姫和が皆にそう尋ねたことが合図となり、可奈美達はお祭りを楽しむことにした。

どうしてこうなった……、姫和はそう思った。
少し前までは可奈美と一緒だったのだが、偶々優と合流し、そのまま可奈美と一緒に見て回ると思っていた。しかし、
『あっ！舞衣ちゃんと見て回る約束してたんだった!!じゃ、そう言う

事だから姫和ちゃん、優ちゃんをお願いねっ!!』

と、やや早口気味で、そんなことを突然言い出したと思ったら姫和と優を置いて何処かに行ってしまった……。可奈美自身は優が姫和と仲良くなれば、優が無茶をしなくなるかもと思い、二人っきりにしようとしていた。

『……何処か見て回ろうか？』

『うん。』

といったやりとりのあと、姫和は優に何と言えば良いのか分からず、フランクフルトとバナナチョコと何のシリーズか分からない特撮物の仮面を買ってあげて、時だけが過ぎていくのであった。

「……。」

そして、今姫和は優と二人っきりで見て回ることになっていた。

「……ねえ、姫和おねーちゃん。」

姫和は急に話を振られ、優がこちらの手を繋いできたことに驚くと

「なっ、何だ？」と姫和は応えていた。

「……一つの太刀だったけ？おっきい荒魂倒すのに使う技。」

「ああ、そうだが、何だ？」

おっきい荒魂というのは、多分紫の中に居るタギツヒメのことだろうと姫和は理解していた。

「……使っちゃダメ。…使っちゃダメだよ。姫和おねーちゃんが消えるくらいなら、そのおっきい荒魂、僕の中に入れる。」

「！……優、気持ちは嬉しいが、それだと可奈美が悲しむから、それだけは止めてくれ……。」

姫和は消え入りそうな声で、可奈美が悲しむから止めて欲しいと懇願していた。

しかし、本心は、まるでトーマスが言っていたこと通りになっているように思えたこと、自分を苦しめる小さい頃の自分が出てくる夢の続きを見せられているように感じたこと、タギツヒメと融合し一体となった優を本当に斬らなければならなくなることを恐れて優に懇願していた。

「でも、姫和おねーちゃんが消えたら、可奈ねーちゃんはもっと悲しむ

はずだから、……だから、消えて欲しくない。それに、潜水艦に乗っていたとき約束してくれたよね？可奈ねーちゃんを一人にしないって、いつか強い刀使になった可奈ねーちゃんが救ってくれるなら、大丈夫だよ。それに、刀使が居なくなったら、荒魂をどうするの？だから僕が一度死んだくらいでどうってことないよ、きっと。」

「……。」

姫和は思い出していた。

『だって姫和おねーちゃんが僕を斬ったら強い刀使になれるんだよね？だったら、可奈ねーちゃんを一人にしないであげて、そうすれば何時か可奈ねーちゃんが強い刀使になって、僕を助けてくれたら、それで充分だよ。』

潜水艦内でした約束のこと。ただ時間を先延ばしして、何時か解決する術があればと思って言った言葉が、約束が、

『昔、可奈ねーちゃんと約束したんだ。強い刀使になったら僕を助けてくれるって、よく分からないけど、可奈ねーちゃんが強くなったら僕にとっても良い事なんだから。可笑しな話じゃないでしょ。それに、それだけで可奈ねーちゃんが喜ぶならそれで良いと思うんだ。』

今、また自分に冷たいナイフのようになって帰って行き、刺さったのか自らの心がズキズキと痛み始めていた。

その後、夕暮れとなり、可奈美達は累とフリードマンに本日の祭りのメインイベントに招待され、神社の社内で神楽を見つつ、フリードマンの説明を受けていた。

曰く、数はだいぶ減ったものの、この国にはまだノロを祀る社がいくつかあるとのこと。

曰く、ノロは御刀の材料、玉鋼を精錬する工程で不純物として分離された物で、人の持つ技術ではそれを消し去ることはできないとのこと。

「でもそのまま放置すると荒魂になっちゃうから折神家が管理して

るって……。」
「ふむ。不正解だな。」
「えっ!?」
と、可奈美が社内で騒いでしまったため、話を中断し、一旦外へ出ることになった。
「嘗てノロは全国各地の社でこんな風に祀られて来た。それを今のように集めて管理するようになったのは明治の終わり頃だね。主に経済的な理由から社の数を減らしたかった政府が合祀を進めていったんだ。当然ノロはそのままではスペクトラム化し荒魂になってしまう。そうならないように当時の折神家がノロの量を厳密に管理していた。……でも、戦争の足音が大きくなるにつれ軍部を中心にノロの軍事利用を求める声が高まり箍が外れてしまったんだね。」
（……軍事利用。）
フリードマンの説明を受けた姫和は優のことを見る。
「ノロの持つ神性、つまり隠世に干渉する力を増幅させ、まさに君達刀使にのみ許された力を解明し戦争に使おうとしたのさ。戦後、米軍が研究に加わったことでノロの収集は加速した。表向きは危険なノロは分散させず一か所に集めて管理した方が安全だと言って日本中のノロが集められていった。…しかし、思わぬ結果が待っていた。」
そして、刀使に対抗する兵器を作るため、子供をノロで強化して集団で不意討ち、または心理的動揺を突くという計画が有ったことをフリードマンは伏せていた。
「ノロの結合、スペクトラム化が進めば進む程彼らは知性を獲得していった。」
「それって、ノロをいっぱい集めたら頭のいい荒魂が出来上がったっていうことですか?」
「ねっねっ!」
可奈美の言葉にねねは、優に向けてえっへんと胸を張っていた。
「フフッ……簡単に言えばそういう事だね。」
ねねと優の一幕を見て、少し微笑んでしまうフリードマンは平常心へとすぐに切り替え、説明を続けていく。

「今や折神家には過去に例がない程の膨大なノロが貯め込まれている。それが……。」
「タギツヒメの神たる所以か。」
「問題はそれだけではないわ。もしもその大量のノロが何らかの弾みで荒魂に、いえ大荒魂になってしまったらもう私達にコントロールする術はないの……。」
「あの相模湾大災厄の時のようにね。」
「どういうことだ?」
「あの大災厄は、大量のノロをアメリカ本国に送ろうと輸送用のタンカーに満載した結果起きてしまった事故。…つまり人の傲慢さが引き起こした人災だ。」
そう言いながらフリードマンは過去のことを思い出していた。
「彼らの眠りを妨げてはならなかった……。」
輸送用のタンカーから大きな荒魂が出て来たことを……。自分達が何をしたのかを……。
「ノロは、人が御刀を手にするために無理矢理生み出されたいわば犠牲者なんだ。元の状態に戻すことができないのならせめて社に祀り安らかな眠りについてもらう。それが今の所我々にできる唯一の償いなんだ。」
フリードマンが語る相模湾大災厄の始まりとノロの真実を聞き、可奈美達は呆然として立っていた。
(犠牲者…荒魂が……。)
そう思えることができれば、斬らなくて済むかも知れない。姫和はふとそんなことを考えてしまう。
(それじゃ、私のやって来た事って……、何だったの?何を信じてたら良いの!?)
しかし、舞衣は可奈美に追い着くために、数多くの荒魂を藁束扱いし、戯れのように切り伏せていた。
足を失い倒れてもがく荒魂に何度も突き刺して、突きの練習代わりにしたり。
荒魂を的にして、新しく覚えた技の練習台代わりにしたり。

つぶさに思い出していった舞衣は苦しむ思いをし、抜け出せない迷路に迷い込んでしまったこのようだった。
「刀使たる者、御刀を使い荒魂になってしまったノロを祓い鎮める。その行いはちゃんと人を救ってきたわ。でも……。」
「刀使の起源は社に務める巫女さんだったそうだね。荒魂を斬る以上その巫女としての務めも君達はちゃんと受け継いでいかないといけないってことさ。」
フリードマンと累の大人達の言葉は、舞衣には入らなかった。
今まで、伍箇伝すら折神紫によって曲げられた事実を教えられ、それを信じ続けていた優等生の舞衣は何を信じれば良いのか分からなかった。
(私は……、どうしたら良いんだろう……。)
誰も気付いていなかった。舞衣が暗い表情をしていたことに。

「……では、貴女達は我々と行動を共にすると言うのですね?」
「はい、歪みを正し、刀使を本来の役目に戻すと言うのであれば目的は同じです。私はその元凶、折神紫を倒す。」
決意は変わらないという顔をする可奈美と姫和を見た朱音は、浮かない顔をしながらフリードマンの方を見ていた。
「……優秀な刀使が増えるのは喜ばしい事だと思いますが?」
しかし、フリードマンの方は冷静に返していた。
「貴方は……そうですね。気持ちは分かりました。舞草は貴女達を……。」
フリードマンに何か言いたげな朱音だったが、自分がどのような決断をしようともそれを尊重すると言った以上どうすることもできなかった。しかし、突然襖が開けられ、トーマスが顔を出す。
「……朱音様、フリードマン、良く聞いてくれ。お客さんが来た。」
それを聞いた朱音とフリードマンは撤退することを決定。そのあとは、皆迅速に動き、迎撃と撤退の準備をしていた。
トーマスとロークはケースから突撃銃のＡＫ１０３と拳銃のグ

ロック17を取り出し、弾倉を入れると弾を薬室に装填。あとは銃に何か問題ないかを確認し、黒のトレンチコートを羽織った後、バラクラバを被る。

孝子は聡美と一緒にエレン達や舞草の戦力を呼びに行き。神社へと集めて、防備を固めていた。

「敵はSTT隊員と何名かは刀使を連れている。おそらくSTT隊員は俺らを殲滅する用、刀使はこちらの刀使に対抗するためだろう。だが、ロークが報告のために米軍基地に発つ前なのが助かった。」

「山中の戦いでストレラ3を捨ててきたから、連中はヘリを使って神社に強襲をしない。まだ時間は有る。朱音様を潜水艦へ送ることができればこっちの勝ちだ。」

山中の戦いにて、地対空ミサイルのストレラ3を置いてきたことにより、刀剣類管理局側は敵(舞草)が地対空ミサイルを所持しているということを知ったため、対空兵器の脅威が無いことを確認しない以上ヘリによる強襲は難しいだろうという判断を下すことは間違いないとトーマスとロークは推測していた。

「なら、私が志願者を集めて、神社で迎え撃ちますので、朱音様をお願いします。」

聡美は自分から殿を務めると言っていた。

「……済まない、聡美。また後で。」

「ええ、貴女も気をつけて。」

孝子は聡美を置いて行くことに浮かない顔をするが、聡美は笑顔で孝子を送っていった。

この後、親衛隊最強の燕　結芽と立ち会うことになるとは思いもせず……。

代償

ＳＴＴ（特別機動隊）が舞草の隠れ里に突入する数日前――――。

この日、ＳＴＴ内は誰がこの対刀使用のボウガンを使うかで揉めていた。

理由は女子中高生に向けてボウガンを使うこともそうだが、何よりも慕われていて、戦友とも言える刀使に対して、使用を間違えれば大事に至る対刀使用のボウガンを刀使に向けて撃つことに忌避感を覚えていた。そのうえ、撃った後も刀使を相手に仕事をしなければならないので、そのストレスは生半可なものではないことは明らかであった。そういった理由もあって、この対刀使用のボウガンを使いたがらなかった。

「隊長。やはり、皆反発しています。作戦を再検討するか、この対刀使用の武器は使用すべきでは無いと思いますが？」

そんなことが起こっているので、分隊長が隊長に意見を具申する。

「……上は刀使への対抗手段としてアピールする必要があるから使えと言ってきている。」

「クソ、なんですかそれ？」

分隊長は上の命令の内容に毒づいていた。

「だから、ただ持っているだけで良い。」

「はっ？」

「だから、刀使に向けて必ず使えとは言われていない！親衛隊一名と手練れの刀使を何名か増援として呼んでいる!!」

今回の作戦で、手練れの刀使を数名増援として呼べたのは、親衛隊二名を倒す程の実力を有する者が居るということ、荒魂化した刀使に対抗するにはやはり御刀で斬って祓うのが一番有効であることを上に伝え、何とか納得させたからでもあるが……。

「……りょ、了解　。」

分隊長は憤慨している隊長に驚くも、彼の意図を理解した。この対刀使用のボウガンを極力撃たず、持っているだけに留まらせ、反乱分子に所属する刀使の制圧に使われたということにするのだろう。

「……クソ、上は何考えてんだ。」
しかし、この隊長はＳＴＴ隊員のみで荒魂化した刀使を含めた造反組織の制圧作戦という当初の作戦よりも、幾分かはマシになったと思うしかなかった。
そして、親衛隊一名は燕　結芽、手練れの刀使は織田　ソフィアとその部下数名であることに何も疑念を抱かなかった。

時は戻り、舞草の隠れ里にて――――、
「あなたは？」
「折神紫親衛隊第四席燕　結芽。四席って言っても一番強いけどね。」
「抜刀！」
聡美は仲間に合図を出し、御刀を抜かせると、親衛隊の中なら間違いなく最強の実力を持つ結芽と対峙していた。
本来なら、拠点の神社にヘリで強襲する予定だったが、山中の戦いにて廃棄されていた地対空ミサイルを見つけたことから舞草が地対空ミサイルを入手していることが判明。そのため、結芽はヘリを使わずに徒歩で神社まで来たのだが……。
（なんて強さ……。）
結芽が神社へ向うその道中、舞草に所属する刀使が数多く居たにも関わらず、全員写シを解除され、倒されていた。
「……おねーさん達も弱すぎ。」
憮然と何か納得しない顔をしながら結芽は階段を上り、境内に入ると、破れかぶれの突撃をしてきた正面の刀使三名を流れるように容易く斬り伏せる。
すると、突然入り口の死角から二名の刀使が側面と背後から奇襲する。
「そんなんで……。」
しかし、結芽は容易く八幡力で二名の刀使の頭を飛び越えると同時

に頭を軽く叩くように刀使を一人斬り倒すと、もう一方の刀使は背後から斬り伏せる。だが、正面に注意を向けさせるために生垣から舞草の刀使が二名突然現れ、正面の二方向から結芽を奇襲する。

「……なにそれ？」

しかし、即座にタイミングが微妙に合っていないことに気付くと、わざと後ろに下がりながら隊列を伸ばすと、一番近くに居た刀使と鍔迫り合いに持ち込ませ、もう一人の方の刀使の視線から鍔迫り合いをしている刀使の身体の陰に隠れられるように誘導し同時攻撃を封じる。だが、最初に切り伏せられた刀使の一人が腹這いで結芽に近付き、足を狙って気合と共に斬りつける。

「もらったっ！」

「だから何っ!!」

結芽が吼える。すると突然、鍔迫り合いを止め、真横へ流れるように移動すると同時に鍔迫り合いをしていた刀使の脇腹をばっさりと斬る。鍔迫り合いをしていた刀使は結芽の正面に、腹這いで足を斬ろうとしていた刀使は結芽の背後にそれぞれ居たため、鍔迫り合いをしていた刀使は腹這いの刀使の上に倒れ掛かってしまった。となれば当然、腹這いの刀使の行動を阻害してしまうことになる。そして結芽は残った一人の刀使を真正面から容易く倒すと、腹這いの刀使も立ち上がりかけているところを狙って迅移で近付き、逆袈裟斬りで倒してしまう。

（……足りない、違う。）

結芽は愚痴るようにそう思うと、聡美の方を向く。左右に広がっているところから、包囲して倒す腹積もりだろうと思った結芽だったが、そんなことは気にせず真ん中に居て、一番強そうな聡美に一直線で向って行くとそのまま拝殿の入り口近くまで押し切ってしまう。これには、聡美も虚を突かれた。理由としては死角からの奇襲、生垣からの強襲、やられたふりをした刀使の攻撃。それらを使ったため、警戒し、端の刀使から攻撃するものと思ってしまったからだ。そのため、陣形に穴が空き、連携が崩れてしまう。

「なんて強さ……。」

「お姉さん達も弱すぎ。」
聡美は策を講じて倒すこともできず、連携をも簡単に崩してしまうことに驚愕する。しかし、一方の結芽は少しイラついていた。例の鎌府の制服を着た〝少女〟を見つけ出し、〝時間の有る内に〟真希と夜見のやられたことをやり返そうとしていた。しかし、見つからない。そのことが彼女を苛烈にさせていた。
結芽は聡美を足払いで転倒させ、陣形が崩れた舞草の刀使達を襲うと、迅移と八幡力による跳躍を使って、巧みに一対一に持ち込ませ、全員倒してしまうと、立ち上がろうとしていた聡美の咽を突いて、倒していた……。
（足りない。……こんなんじゃ、全然……。）
結芽は心の中でそう愚痴ると、銃声が聞こえたので、そちらに向かうことにした。
そして、ＳＴＴ隊員等は舞草の刀使を殺さずに全員打ち負かし、気絶させた結芽の活躍を素直に賞賛していた。

時を少し戻して、一方の可奈美達は大昔の水源の一つを使って、潜水艦へ向っていた。
「やはり既に手を回されてたか……。」
まだ中には突入していないのか、他の乗組員やコック長が捕まっている姿も無ければ、中に入って銃撃戦をしている様子もない。何をしているのかと孝子は物陰から見て伺っていた。恐らくスペクトラムファインダーを使っているところから、潜水艦の中に荒魂が居ないか調べているのだろう。
「撃ってくるデスカ？」
「多分ね。彼らはスペクトラムファインダーを装備してるだろう？舞草の構成員は人間だよ。あんなものが必要だと思うかね？」

エレンの質問にフリードマンが答える。
「それじゃあ……。」
「伊豆でのことを思い出してクダサイ。目の前に荒魂がいたというのにスペクトラムファインダーはぴくりとも反応しませんデシタ。」
「まさか官給品に細工を!?」
舞衣はそのことに驚いていた。そんなことをまでするとは思わなかったからだ。
「おそらくそうだろう。あれはS装備同様折神家からもたらされた技術で作られたものだ。今ならそう御刀に反応するよう設定されているといったところか……。」
フリードマンの推測が当たっている証拠か、ＳＴＴ隊員の所持しているスペクトラムファインダーが反応する。
「荒魂の反応複数あり!すぐ近くです!」
「気をつけろっ!すぐに刀使さん達に応援の連絡を!」
皆、ゾクリとした。官給品のスペクトラムファインダーにはあいう使い方もあることに。
「このままだと我々は荒魂として処理されるぞ!」
「〝荒魂〟が〝人を荒魂呼ばわり〟するか!」
姫和はそれに憤慨し、そう嘆く。すると優が突然動き出し、ＳＴＴ隊員の方へと向かって行った。
「「えっ?」」
可奈美と姫和は同時に素っ頓狂な声を思わず上げてしまった。何をする気なのか全く分からなかった。〝人は殺さない〟約束をしているハズであるから……。
「おい、止まれっ!!」
優を見たＳＴＴ隊員は短機関銃のＭＰ５を構え、すぐに警告をするが、
「待て待てっ!あれは男の子だっ!!荒魂になったのは刀使だ!!!」
ＳＴＴ隊員の分隊長が男の子と言って目標の刀使ではないと解りやすいように撃つのを止めるよう隊員達に命じる。大方、迷子の子供が戦闘の音を聞き、怖くなって保護を求めに来たのだろうと思ってし

まったのが理由だった。だが、次の瞬間、ＳＴＴ隊員にも可奈美達にも予想しないことが起こった。

その男の子は、何時の間にか鉄の棒を振り上げていた――――。

その男の子は、何の躊躇いも無く振り下ろしていた――――。

そしてＳＴＴ隊員の頭は潰れたトマトのようになっていた――――。

誰もが誰も、この状況を説明できず、この状況を理解していなかった。

「――――！」

次の瞬間、ＳＴＴ隊員等は銃撃を受けていた。

トーマスとロークの援護射撃である。但し、ロークは単発で撃ち優に当たらないようにし、トーマスは連射で優を気にせず撃っていたという違いはあるが……。しかし、隠れる場所が無いＳＴＴ隊員達は一方的に為す術も無く銃弾のシャワーを浴びてしまう。

（この〝荒魂〟なんか脆いなぁ。何匹も居るからさっさと倒すか。）

銃弾でも倒せることを理解した優は早速突撃銃の８９式小銃を隠世から取り出し、まだ立っているＳＴＴ隊員に向けて単発で撃っていた。

「えっ、ちょっ、ちょっと……。」

優が〝人〟を殺していることに気付き、そのことにやっと頭が回った可奈美は、

「優ちゃん!!」

と半狂乱になりながら、弟の名前を叫ぶも返事が無いことから、銃弾の音で聞こえていないことに気付き、向かおうとする。そのことに気付いた孝子が、

「姫和！見せるなっ！見せるなっ!!」

孝子もこの異常な状況に呑まれているのか、やや狂ったかのような指示を出す。だが、姫和は意図をすぐさま理解し、可奈美を抑えていた。

「離してぇっ!!」

半狂乱になった可奈美は、鬼女がそこに居るかのような叫声と歪ま

せた顔をしながら、姫和を睨んでいた。
「舞衣！エレンも抑えておいてくれっ!!薫も可奈美と朱音様を頼む!!私達が切り込む!!」
孝子はそう言うと自分の部下を引き連れ、ＳＴＴ隊員達と優が交戦している場所へ向かう。
「行かないと……！私が……行かないと…私は約束も、したのに!!」
舞衣とエレンにも押さえられるが、それでも前へ、優の元へ向かい、凶行を止めようとする。だが、見ていないのは幸いだったかも知れない。ボウガンの矢を二の腕で防ぐ、奪った銃と武器で殺す、鈍器でＳＴＴ隊員の頭を潰す、死体を銃弾の盾にしたり、ＳＴＴ隊員の首を踏んで骨を折るといった凶行を笑顔で行っているのを見ずに済んだのだから。
「離して……はなしてったら……。」
可奈美の耳にも聞こえていた。
銃撃の音が――――。悲鳴の声が――――。呻き声が――――。血飛沫が――――。
可奈美の精神をすり減らしていき、遂には嗚咽混じりに声を上げ、止め処なく涙が溢れさせ、心が張り裂けていった。
結局、何もできなかった――――。
剣術バカの自分が優を助ける方法を何年間も探し続けた――――。だから、必死になって、優が戦わなくても済むように剣術が強い自分を作った――――。
だが、一つも叶わない、届かない――――。
銃撃と悲鳴の声が奏でる不吉な音楽が止むと、全てが終わったことに気付いた可奈美は力が抜け、ただただ膝を地面につけて咽び泣いていた。
「……っ！」
姫和は走ろうとした。優の元へ、問い質すために。……しかし、それよりも早く沙耶香がＳＴＴ隊員の死体を漁り短機関銃のＭＰ５とスタングレネード等を回収している最中の優に問い質していた。
「何で!?何でこんなことするの!!?」

沙耶香は優の両肩を掴むと、物凄い剣幕で言っていた。大切な人のために戦うことは嬉しいことだと言っていた子が何故こうも容易く人を殺すのか理解できなかった。あれは嘘だったのかと思う程に。

「何でって？姫和おねーちゃんが言ってたよ。これ、荒魂だって。それよりも姫和おねーちゃんを悪く言うのは許せない。」

優はいつもの如く、無表情でそれが当然といった風に答えていた。

「何言って……！」

沙耶香は優が何を言っているのか分からず、戸惑う。しかし、少し前の姫和の言葉を思い出していた。

『〝荒魂〟が〝人を荒魂呼ばわり〟するか！』

まさかと思い沙耶香は優に聞いてみることにした。

「……もしかして、荒魂呼ばわりする荒魂だから？」

「そうだよ。やっぱり姫和おねーちゃんって凄いや、僕も大体分かるつもりだったけど、これぱっかりは全然分からなかった。」

「……何で、そう思うの？」

沙耶香は優に何気なしに訊いてみる。

「？…姫和おねーちゃんも可奈ねーちゃんは嘘なんか吐かないよ。だって、立派な刀使だもん。だから、悪く言う奴と邪魔する奴は一匹残らず倒すだけだよ。それに、これが僕が唯一可奈ねーちゃんの役に立てられることだから。」

優は二人を疑うことはせず、自分がやるべきことだからやっただけと言っていた。

「……でも、そんなのは間違っている。もう戦っちゃダメ。」

沙耶香はどう間違っているのか言えなかったが、これだけは間違っていないと心から思った。

「……何で？何でそんなこと言うの？」

だが、優は恐ろしく禍々しい雰囲気を漂わせ、

「沙耶香おねーちゃんは、姫和おねーちゃんと可奈ねーちゃんのことを嘘つきだって言うの？何でそんな酷いことを言うの？」

心が急激に冷えるような声でそう沙耶香に尋ねてきた。

「そんなこと言う人は〝刀使〟じゃないよ？人に酷いこと言う人と嘘

なんか吐く人は人に感謝される訳ないよね？」

昔、可奈美に刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟だと教えてもらい、それを頑なに信じている優は沙耶香のことを〝姫和と可奈美のことを詐欺師呼ばわりする酷い人〟と認識し始め、沙耶香に殺意を向ける。荒魂の匂いがする邪魔物だと思い……。

「……！」

沙耶香は優のことを怖いと思ってしまい、優の肩から手を離してしまい、言葉を詰まらせてしまった。そんなときに姫和が、

「いや、優、こいつらは荒魂だ。沙耶香はこういうこと（戦闘）は初めてだから、気が動転していただけだ。」

優の両肩を掴んで、自分の方へ目を合わせると優しく諭すように言っていた。

「……そうなんだ。ごめんね、沙耶香おねーちゃん。」

姫和の説明に納得したのか、沙耶香に酷い事を言ったと思い謝罪していた。

「……えっ、あっ、……うん。」

沙耶香は姫和に何も言うなと言わんばかりに睨まれていたことと、可奈美をこれ以上悲しませたくないと思ってしまったため、そう答えるしかなかった。

「……朱音様今です！お前達も早く潜水艦に乗れ!!」

トーマスが大きな声で言うと、孝子達は朱音と可奈美の二人には、ＳＴＴ隊員達の死体を見せないようにするため、優先させて潜水艦に乗せていった。しかし、ロークはあることに気付いてしまう。

「舞衣!!危ない!!!」

まだ、息があったＳＴＴ隊員が拳銃のＰ２２６で写シを張っていない舞衣を狙っていたことに気付いてしまったロークは走った。

「えっ？……ろっ、ロークさん!?」

舞衣はいきなり、後ろから抱き締めてきたロークに驚くが、銃声の音が響いたことで抱き締めてきた理由が分かってしまった。ロークは自分を銃弾から守ってくれたのだ。……そして、ロークは舞衣をしゃがませると、首と右肩を撃たれたことに素早く気付き、拳銃のＧ

17を抜くと、こちらに撃ってきたSTT隊員に発砲し、胴体下当たりを数発当てる。STT隊員も負けじと、ロークの側頭部、腹部を数発当てる。子供達に危害を加えさせないようロークは気を失いそうになりながらもSTT隊員に向けて、数発撃つ。STT隊員も一人でも倒すべく気力を振り絞ってロークを撃つ。そんなことを繰り返していく内に、ロークは足を撃たれ、倒れてしまい。STT隊員も優に首の骨を折られ、力を失ったのか、腕をパタリと下ろしていた。

「ろっ、……ロークさん?」

伏せていた舞衣はロークが血を流しながら、倒れていることに気付き呆然としていた。

「……Fuck!!Fuck!!」

それに気付いたトーマスは累とフリードマン、潜水艦の乗組員達等に重傷のロークと倒れている舞草の刀使達、そして何が起きているのか理解できず呆然としていた舞衣を潜水艦の中まで運ぶように素早く指示していた……。

ほとんどの者が潜水艦内に乗り込み、孝子とトーマス、そしてSTT隊員の死体から使える物を物色していた優だけが残っていたそんなとき。

「フフフ…。」

笑っている結芽がそこに居た。そして、暗がりの洞窟の中だったためか、STT隊員が死体となっていることに気付いていなかったことは彼女にとっても幸いだったろう。

「……誰?」

優は、結芽のことを睨みながら何者か尋ねていた。

「折神紫親衛隊第四席燕　結芽。四席って言っても一番強いけどね。」

結芽は無邪気にそう答えていた。

辿り着く先

「折神紫親衛隊第四席燕　結芽。あーあ、間に合わなかったかー残念。」
「神社にいた刀使はどうした？」
　聡美のことを案じた孝子が結芽に訊く。
「刀使？あれが？全然手ごたえ無かったんだけど。でもこの御刀持ってた人はちょっとはマシだったかな～。」
　結芽は孝子の言葉を聞き、いつも通り自分が凄い人だと覚えてもらうため、煽るように言い、聡美の御刀を放り投げる。
（ああ、……こいつか……舞衣おねーちゃんと沙耶香おねーちゃんをイジメていた奴は……。荒魂だし良いか。）
　しかし、優にとっては敵でしかなく、殺すべき〝荒魂〟だと認識し始め、どうやって殺すか考えていた。
「良し、孝子も今の内に早く潜水艦の中へ。」
「いや、あの子が……。」
　トーマスは孝子に潜水艦の中へ入るよう言うが、孝子は９歳児の優を置いて逃げることができなかった。
「あいつなら自力でどうにかできる。……今、親衛隊と争って逃げ切れられる奴が居るとしたら、……あいつだ。それに、舞衣達を纏められるのはお前だけだ。」
「……分かりました。」
　錯乱している可奈美と舞衣を慰められるのは孝子しか居ないとトーマスに言われ、孝子は大人しく従った。
（聡美。……すまない。）
　孝子は聡美の御刀を見ながら、潜水艦の中へ乗り込んでいった。
「優！可奈美ねーちゃんを一人にするなよ!!」
　トーマスも優にそう言って、必ず帰って来るように言っていた。それを聞いた結芽はお子様を相手にしなければならないのかと落胆する。
「やるの？あんたみたいな子供が？あの長船のおねーさんかなんなら

可奈美おねーさんに助けてもらっ「要らないよ。」」
結芽は優に怪我しない内に孝子か可奈美のどちらかと代わってもらうように言う前に、優は鉄の棒を振り下ろし、大きな破壊音と共に砂埃を上げて姿を眩ませていた。
「！しまっ……。」
結芽は慌てて砂埃の中に入って行こうとするが、不幸なことにＳＴＴ隊員の血で足を滑らせ、転倒してしまう。しかし、幸運なことに足を滑らせたことにより、〝何か〟が飛んで来たのを気付くことなく躱すことができた。
「ちっ……！」
それを見た優は始末することができなかったことを残念がるが、その隙に御刀を取り出すと八幡力を使って跳躍し、ノーチラス号の甲板上まで着地。潜水艦の中に乗り込んでいった。
「うっ。」
そして、結芽は見てしまった。何に足を滑らせてしまったのかを……。
「……何これ？」
そして気付いてしまった。足を滑らせたものは親衛隊の制服を朱く染め上げ、ベットリと穢していったことに、結芽は寒気を感じてしまった。
左を向いても――――
右を向いても――――
後ろと正面を向いても――――
ＳＴＴ隊員の死体だらけであった。
ふと、先程飛んで来た〝何か〟を見ると頭がパックリと割れ、血だらけの無惨なＳＴＴ隊員の死体があった。
「！……うわぁっ!!」
結芽は仰天の声を上げてしまう。そして、結芽はＳＴＴ隊員の死体が皆、漏らしていることに気付いてしまった……。そんな死体を見た結芽はいずれ自分も死んでしまうと、こうなってしまうのかと強く思ってしまう。

「……そんなの、嫌だよ。そんなのって無いよっ!!」
誰も居ない所で結芽は死にたくないと叫ぶ。そして、結芽は気分が悪くなり、口を左手で押さえ、四つん這いになり、血を吐いてしまう。
……何度も何度も咳き込んで。
「……ハァ、ハァ。……怖いよ。ヒッグ、…ヤダよぉ。……そんなの……。」
血で汚れてしまった左手の手のひらを見て、結芽はやがて来るであろう〝無惨な死〟に恐怖し、ただただ無力な子供のように、孤独に泣き叫んでいた。

誰も居ない暗い洞窟の中で――――。

その数時間後、潜水艦ノーチラス号内にて――――。
(何やってんだよ、お前。……お前、英雄にでもなりたかったのか？バーカ……。バーカ……。)
トーマスはロークにそんな気持ちを抱いていた。死体袋に入っているロークに向かって……。
また、〝大切な人〟が〝ただの物〟となっていった――――。
また、友人が天国への水先案内人へと転職していった――――。
また、自分だけが生き残ってしまった――――。
「……そんな、……ロークさん、私のお陰で……日本語が上手になったって……言っていたのに。……これじゃあ、もう喋れないじゃないですか……。」
「ごめんなさい……ごめんなさい……ロークさん……私が、……わたしのせいで。」
(お前まで、女子供泣かせてんじゃねぇよ。……お前までそんなことしたら、俺はどうすりゃ良いんだよ?……バーカ、……バーカ。)
舞草の刀使達と舞衣、そして累はロークの死体袋の前で嗚咽しなが

ら涙を流していた。それを見たトーマスはロークにそんなことを思いながら、愚痴っていた。
（しかし、今後はどうするかだな……。）
今や自分達は大規模テロの容疑者となっている。となれば、アメリカ本国へ亡命しても帰される可能性が高い。
「……フリードマン。可奈美は〝使える〟か？」
「……全く、君は変わらないね。少しは気を使ったらどうだい？」
「柄じゃねぇ、今更。」
フリードマンは〝使える〟と言ってきたトーマスに注意していたが、トーマスは変える気はないと返答しロークの遺体がある部屋から退室するのであった。

一方、朱音は孝子から可奈美と舞衣のことを訊いていた。
「……そうですか。舞衣さんと可奈美さんは……。」
「ええ、舞衣は少し塞ぎ込んでいます……。可奈美はいつも通り振舞っていますが、どう見ても、あれは無理をしているだけです。」
孝子は、いつも通りにしている可奈美とロークが死に自身を責めている舞衣を思い出したのか、目を瞑り顔を伏せていた。
「……ですが、あの子のお陰で孝子さん達は――――。」
「ええ、だから私は可奈美に、あの小さい子にも、何も言えないんです！……失礼しました。少し熱くなっているようなので頭を冷やしに行きます。」
朱音に言われたことに少し柄にもなく、ムッとしながら孝子は答え、朱音の居る部屋から退室していった。
（……可奈美には辛い思いをさせてしまった。……もしも、私が先に斬り込んでいたら……。）
だが、そのような仮定のことを考えていても無意味なことに気が付かないほど、孝子は思い詰めていた

舞草の隠れ里跡地――――。

この日、結芽は気分が沈んでいた。

さっきまで一緒に居たＳＴＴ隊員の無惨な死体を直視したこと、そして自分も〝いずれはああなる〟のではないかと戦々恐々としていた。

「……ここで何をしているんです？」

取り巻きを連れたソフィアが近付いて話しかけて来た。結芽はそんな気分ではないと態度で表しながら応えていた。

「……何？」

「貴女にお伝えしたいことがあるので。」

一体なんだろう？結芽はそう思いながらソフィアの話を聞くことにした。

「ＳＴＴ隊員等が貴女の活躍のお陰で、助かったそうです。……皆、結芽さんのことを忘れないそうです。強くて立派な刀使が居ると……。」

それを聞き、結芽の瞳に活力が蘇ってきた。……そうだ、自分には〝これ〟があると。

「……そうだね。だから私はもっと戦おうとしていたんだったね。」

結芽は呟くように言うと、立ち上がり。前を向くようになる。

「……そうなんだ、だよね。……ソフィアおねーさん、私は真希おねーさんに言われたから鎌倉に帰らなきゃいけないんだよね。代わりに特別機動隊の人達に『ありがとう、私、頑張るよ。絶対！』って伝えておいて。」

結芽は満面の笑顔でソフィアにそう告げる。

「ええ、後のことは我々綾小路が引き継ぎますので……。」

ソフィアはそう言って結芽を見送り、舞草の隠れ里跡地に残るのであった。……そして、結芽が見えなくなったところで、

「……意外にしぶとくて良かった。まだ死なれては困る。」

氷よりも冷たい言葉を結芽に投げかけていた。そして、携帯を取り出すと、

「……私だ。優くんだったかな?そちらの人達との会談を用意してくれ。」
舞草の内通者に話しかけ、会談を用意するように要請するのであった。

数時間後、姫和はとある一室で物音がしたので不審に思い室内に入ると、優が短機関銃のＭＰ５のマガジンを抜いたり、レバーを引いたりして動作を確認しているところを見てしまった。
「……。」
姫和は知らないことだが、前回の戦いでＳＴＴ隊員は山中の戦いにて突撃銃の８９式小銃を使っていたが、舞草の隠れ拠点を制圧する任務の性質上近距離戦が多くなることを予測。精密に且つ迅速に銃を所持する外国人傭兵を制圧する必要があるため、ＳＴＴ隊員達はＭＰ５を使うことにした。
（これ、持ち易いし使い易いな。）
警察向けとして造られ、多くの人々の命を守り続けていたであろうＭＰ５は今や特殊部隊御用達短機関銃とも呼ばれていた。しかし、全長を短くすることもできるため身長の低い子供にも合い、そして反動がマイルドな上９ｍｍパラベラム弾を安全に射撃することができ、クローズドボルト撃発のためか命中精度も高いこともあって当てやすい。そんなＭＰ５を持っている９歳児の優を銃の知識が無い者が見れば、子供に使われる銃として造られたかのように見えてしまうことだろう。
「……。」
実際、姫和の瞳にはそういう風に映っていた。
しかし、止めない。注意することすらもできない。
『〝荒魂〟が〝人を荒魂呼ばわり〟するか!』
――――自分の心ない言葉が引き金となって、この９歳の子供を殺

人鬼に仕立て上げてしまった。
――――いや、この世の中がこんな子供ですら犠牲にするのに何も感じなくなっているようにも見えた。
――――子供を戦闘用に変えていくことに全てが賛同しているようにも感じられた。
「……それ、使えるのか？……」
何処から聞いたのか覚えていないが、銃を扱うにはそれ相応の訓練が必要であることを思い出してしまった姫和は何気なしに優に訊いてみた。そして、問い掛けられて姫和に気付いた優はこう答えた。
「うん、友達が教えてくれたから。」
「……そうか……。」
自分は何を訊いているんだろうか？
「……ねえ、姫和おねーちゃん？」
「……何だ？」
珍しく優の方から何か尋ねてきたと思った姫和。
「……みんな何で泣いているの？」
何気なしにそんなことを訊いてくる優。そして、姫和は絶句する。
「みんな、ロークおじちゃんの前で悲しんでいるけど、何だかよく分からない。……おかしいのかな、僕？」
姫和はそれを聞いて、タギツヒメが言っていたスレイドという狂人が優の感情を奪ったことを思い出していった。
「……いや、……おかしくない……お前は、おかしくない。……まだ子供だから分からないだけなんだ……」
姫和はそう言って、優を抱き締める。
――――不安を感じないよう、
――――矛盾を気付かせないよう、
――――この関係が壊れないよう、
ただ優しく語りかけ、おかしくないと言う姫和。
（……なんだか……落ち着く……）
姫和に優しく抱き締められた優は眠りに誘われていた。まるで、自分の悩みごとが安心して、忘れさせてくれるようだった。

「……。」
「……眠りこけてしまったか……」
こうなれば、子供にしか見えないのに、と思う姫和。しかし、誰かが覗いている気配を感じそこを見ると、
「何をしているのかなぁ～～。」
ニヤニヤした顔でこちらを見る可奈美が居た。
「……ちょうどいいところに来てくれた。可奈美、聞いてくれるか？」
「え？」
可奈美は少し驚いた顔を見せる。姫和は何を言うつもりなのかと思っていた。
「……決めた。私は決めたぞ、可奈美。……私はこの子のために戦う。」
姫和はそう言うと、寝ている優の頭を撫でながら答えていた。
「姫和ちゃん。お母さんのことは……。」
「少し、冷静になって考えてみたんだ。母の思いは一体どんなものか直接聞いていない。だから、本当に折神　紫を討つこと自体が、本当に母の思いを無念が晴れるのか分からない。」
それに、と言い姫和は続ける。
「……私の母がこんな子供を殺すことを望むなら、喜ぶのなら、……私はそんな思いを斬り捨てる。」
だから、と言い姫和は目を見開きながら決意を語る。
「……私も、優を救いたい。可奈美手伝って良いか？」
「でも、優ちゃんは……」
「あれは私が……考えもなく人を荒魂呼ばわりした罰なんだ……きっと。だから、私も背負う。この子を普通の子供に戻せば、また元通りに、三人で一緒に何処か行こう。……約束だ。」
「……でも、歯磨き粉みたいなチョコミントは有るんでしょ？」
「ハァ？お前だけはあの味の良さが分からないようだな。優は分かってくれるのにな。」
「え～、うっそだぁ～～。」
「本当の話だっ！何で疑うっ!!」

こうして、チョコミントについて語る姫和の話しを聞きながら、可奈美は『ありがとう、姫和ちゃん。』と思っていた。

辿り着く場所も見えないまま……。

「……この作戦も終わって帰れそうだな。」

「ああ、あんな殺人ボウガンはもう拝みたくはない。」

ＳＴＴ隊員達は、聡美達舞草に所属すると思われる刀使達を車で護送していた。

仲間が無惨な死体になってしまったことに思うことはある。だが、御刀で殺害されたのではなく、銃と何か物凄い力で潰されたことが死因であることを鑑みると、外国人工作員等が殺傷した可能性が高く、年頃の少女達に暴力を振るうことに抵抗感が強いのが理由である。

「……この子らも可哀そうにな、勝手な大人達に振り回されて……」

「ああ、捕まって、そのあと長船とかの生徒達はどうなるんだろうな……。」

この二人のＳＴＴ隊員は長船と美濃関、そして平城も大規模テロの容疑で取り調べを受け、その後も長船と美濃関、平城の刀使達が管理局内から、世間からも白い目で見られることになり、今後どのようになるのか不安であった。そんなとき――――、

「……おい！牛が通っている、止めろ。……何だってんだ？」

「どうせ、牧場から逃げ出した牛を戻してるところなんだろ。……ちょっと、聞いてくる。」

一人のＳＴＴ隊員が車から降り、牛を誘導している男に近付いて話しかけていた。

「どうしました？」

「いや、すいません。……牛が何頭か逃げ出しまして……申し訳ないが少し待ってくれ。」

ＳＴＴ隊員はやはりかと思ってしまった。そのため、少しでも手助

けして早く護送を済ませようとしていたが――――

突如、ＳＴＴ隊員は地面とキスすることになる。

何が起こっているのか考え、自分は何者かに倒されたと理解するには少し時を要したが、何者かが即座に足でＳＴＴ隊員の両腕を抑えると、手際良く結束バンドで親指と親指を結んで拘束する。。

「なっ……何が?」

そして、ＳＴＴ隊員は状況を把握するため、周りを見ると既に他のＳＴＴ隊員達も自分と同じように拘束されていた。

バラクラバにゴーグル、深緑の戦闘服を着用している謎の集団のことをＳＴＴ隊員達は当初は舞草に所属する外国人工作員なのではと思い始めていたが、余りネイテイブとは言えない外国語を喋っているところから違うのかも知れない。一体、何者なのだろうか?もしも、過激な団体だったら拘束し御刀を取り上げた刀使達が危ないと判断し暴れるが、ビクともせず、もがくので精一杯であった。

そのとき、ＳＴＴ隊員は首を絞められ、気を失ってしまった。

「少しは大人しくしろ。」

気を失う前にＳＴＴ隊員は、深緑の戦闘服を着ていた男達が日本語を喋っていたように聞こえた。

聡美達は驚愕していた。

深緑の戦闘服を着用している謎の集団は音も無く、気配も無くＳＴＴ隊員達を素手で気絶させ、拘束していた。事実、聡美達がここに集められるまでは一切気付かなかった。

「貴方た――――」

貴方達は何者なのか?と言い終わる前に聡美は両腕を拘束していた物が突然外されたことに驚き、不思議がると、聡美達は気付いてしまった。

「えっ……手が?……!!」

後ろに謎の集団と同じ格好をした者達が何時の間にか居て、その者達が拘束を外してくれていた。

聡美はこの謎の集団達が音も無く、気配も無く何時の間にか現れる幽霊のように思えてならなかった。そして、その謎の集団から指を指された方向を見ると、御刀が入っているであろうケースを見つけ、皆そちらに注意を向けた瞬間、謎の集団は既に消えていた……。そのことに、聡美は何かが蠢いているように感じるのであった。

一刻の望み

鎌府女学院学長室――――。

「長船、美濃関、平城の刀使の帯刀権の一時的な剥奪、武装を解除しました。また、折神　朱音の行方は海上保安庁が全力で…」

「……糸見　沙耶香と柳瀬　舞衣の行方はどうなっている？」

鎌府女学院職員からの報告を遮った雪那は舞衣と沙耶香の安否をまず第一に尋ねていた。

「その二名も現在鋭意捜索中とのことで…」

「甘い！海自にも圧力をかけて捜査させなさい。」

それを聞いた雪那は海自にも圧力を掛けてでも協力させるように指示していた。

「ですが……」

「これまで我々がどれだけ連中に貸しを作ってきたと思う？それにだ、むしろ今まで静観して来た奴らの防衛力とやらを見せて欲しいものだと思わんか？」

雪那は若干苛立っていた。舞草の潜水艦の侵入と逃亡を許してしまったこともそうだが、所属が分からない工作員の動向、入手先がアンゴラやらと何かと喜ばしくない所から入手したであろう銃器類、それらの解決も協力もせず今まで静観していた防衛省にも協力と責任を取らせるように言っていた。

「ハッ！…失礼致します！」

そのことを理解した鎌府女学院職員は、足早に部屋を退室して行った。そして、学長室に一人残った雪那は、

（沙耶香…あなたの居場所はここだけなの……！）

そう心の中で呟いていた。

「誰？」

可奈美は開口一番に、潜水艦ノーチラス号に乗船してきた黒のトレンチコートと黒のハット、黒ずくめのマニッシュスーツを着用し、黒

のサングラスという格好をした怪しげな女性達（ソフィアとその部下三名。）に向かって感想を洩らす。

舞草に援助の話をしたいと、突然通信に割り込んで要求してきたことには驚いたが、こちらの通信に割り込めるということはこちらの位置はすぐに特定できるということでもある。そのため、この黒ずくめの長身の女は堂々と潜水艦ノーチラス号の中に乗船していた。その後は、ソフィアの申し出通り、朱音・可奈美・姫和・優の四人とソフィアと部下三名だけで、会談することになった。

「朱音様、お初にお目にかかります。……私の名はグンルと申します。」

グンルという偽名を名乗るソフィア。無論、正体を隠すためである。

「……分かりました。ではグンルさん、援助をするとはどのような？」

「このままでは紫の元へは辿り着けないでしょう？私が海自の哨戒網を抜けられるようお手伝いして差し上げましょう。」

朱音は、このグンルと名乗るソフィアを警戒していた。海自の哨戒網を知っているということは少なからずとも、刀剣類管理局か政府側、紫派の人間であることは間違いない。

「……何故、そのようなことを我々に協力するのですか？」

朱音は相手の真意を探るべく、ソフィアに真意を訊いてみた。

「何故ですか？……そうですね、折神　紫率いる変革派に抗う者は舞草の他にも居るということは伝えておきましょう。」

「……理由はそれだけですか？」

「確かに貴女方は大荒魂討伐の英雄に祭り上げられ、紫は刀剣類管理局の長となり、特務隊の面々は伍箇伝の各学長に就任しました。しかし、紫の統制の下刀剣類管理局はより強化されました。それによってどうなったと思います？」

「……。」

朱音は、ソフィアの話しを黙って聞いていた。

「各省庁への圧力と影響力は飛躍的に増してしまい、それを疎ましく思う者。S装備とそれらを運ぶコンテナ等の開発費により、政府予算

を奪われそれを妬む者。紫という存在に危機感を抱き、失脚と破滅を望む者。……思いつく限りではこんな理由でも貴女方に協力したい者は沢山居るでしょう。」

「貴女はどれに該当するんですか？」

「ふむ……難しい質問ですね。……全て当てはまりますので。」

朱音はソフィアのことを警戒していた。しかし、舞草は壊滅してしまったため、選択肢のない朱音は、

「分かりました。ご助力感謝します。」

苦渋しながら、その申し出を受けるしかなかった。

「賢明な判断。ありがとうございます。」

ソフィアから手を差し出され、朱音は握手をする。契約は成立したかのように……。

それを見た可奈美は話が終わったと思い、ソフィアに尋ねてみた。

「あの……グンルさんの流派は何です？」

「……可奈美。」

灰色のテープを巻いていたが御刀らしき物をソフィアが携えていたことに、目敏く見つけた可奈美はいつもの様に流派を尋ねていた。そんな可奈美に姫和はいつも通りで安心するような不思議な気持ちを抱かせるのであった。

「……無住心剣術ですが、それが何か？」

「じゃあ、何時か立ち合いしませんか？」

「……それでは、何処かに降りれたらやりましょう。まだ哨戒されていない所がありますので。」

そうして、ノーチラス号は二人の立ち合いのためにソフィアに言われた場所へ向かうのであった。

ソフィアに指定された場所へ到着すると、朱音と姫和、そして優とソフィアの部下三名が立ち合い人となって見守る中、可奈美はソフィアと対峙していた。

（強い……、多分、今まで戦って来た人よりも。）

何度か打ち合い、そして、純粋にそう思った。無住心剣術と聞いていたが、その流派には無い技（柄頭で殴打、足を踏んできたり。）を使ってくるところから、ほぼオリジナルなのだろう。実際、可奈美の推測は当たっており、〝人を何人か殺めて〟鍛えた技であり、相抜けを哲理とする剣術とは真っ向から反する戦闘スタイルを得ていた。

（……良し、ちゃんと見てくれているな。）

一方のソフィアは優がこの立ち会いを見ていてくれているか、気になってチラリと何度も横目で見ていた。

ソフィアが可奈美の申し出を受けた理由は優に可奈美より強い自分を見せ、認めさせるのが目的であったからである。つまり、可奈美より、剣術なんかより、己の力を9歳の子供に誇示したかったという少し、いや大分問題のあることをしていた。

しかし、そんなことに当然ながら気付く可奈美は、

（この人、何で優ちゃんばっかり見ているの？）

何気なしに可奈美は、このグンルという女性は手を抜いているようにも思えた。そのため、可奈美は納刀するとソフィアにこんなことを尋ねた。

「……ありがとうございます。グンルさん、いや本当の名前は何て言うんです？」

これには流石のソフィアでも、驚いた顔をしていた。どこで気づいたのだろうか？と。

「……どこで気付きました？」

「山中の戦いで会ったことのある構えと戦い方だったのと、それにグンルっていう名前で呼ばれていた刀使が居なかったですし、それにその構えをした人は確かソフィアとか呼ばれていたような気がしたから、多分そうかな～って。」

それを聞いたソフィアは御刀を納刀すると、可奈美に目と鼻の先まで近づくと、

「……確かに私の名前は織田　ソフィアと言います。」

仕方ないと思い、ソフィアは正直に本名を名乗った。

「但し、私のことを言い触らせば、この話は無かったことにし、貴女方の潜水艦を拿捕するようにしますのでどうかご内密に。そして、朱音様達もどうか賢明なる判断をお願いします。」

そして、ソフィアは、朱音達と可奈美を脅していた。

舞草が壊滅的被害を受けた次の日の朝。刀剣類管理局本部内にて、結芽は上機嫌であった。

「～～♪」

「どうしたんだ結芽?」

「……多分、真希さんが復帰できたからではないからでしょうか?」

それは、真希と夜見が戻った事が嬉しかったからである。そして現在、親衛隊四人全員、同じ卓で座っていることにも幸福を感じるほどに……。

「……夜見さん、真希さんより早く現場に戻ったそうですけど、大丈夫ですの?貴女の怪我が一番酷い筈ですが?」

しかし、寿々花は気掛かりなことが有った。夜見は、まだ万全な状態でもないのに戻って来たことに。

「私は主に後方支援担当なので、極力戦闘に加わらなければ何も問題は有りません。……それに、今は舞草を壊滅に追い込んだと言えども、油断のならないことには変わりありません。」

だが、夜見は寿々花の申し出を遮るように言っていた。寿々花もそれを言われると何も言えなかったのか、押し黙るしかなかった。

「……そういえば、結芽が一人で舞草の拠点を壊滅したんだってな。済まなかったな、一人ぼっちにさせて、辛くなかったか?」

だが、捕えた舞草のリーダー格含む、刀使が謎の集団によって逃げられたことを真希は結芽に気を使って伏せていたが。

「大丈夫!!あんな弱い人達、真希おねーさん達まで読んで手を煩わせる程でもなかったよ。」

結芽は負傷した真希達のことを気にして、ＳＴＴ隊員のことを伏せつつ、このように言っていた。
「……そうか、結芽、良く頑張ってくれた。」
「真希さん、報告したいことがあるのでよろしいですか？」
真希は、寿々花の報告の旨があることを伝えられると、「ああ。」と答えていた。
「紫様の指示で、各県警が長船、美濃関、更に平城まで大規模捜査され、各学長は拘束されたようですわ。けれど、真希さんは大丈夫ですの？いろは学長に会いに行く時間はありますけれど？」
報告しながら寿々花は〝左手の甲を右手の人差し指で叩く〟合図を送り、真希はそれに気付くが、自然に答えていた。
「問題ないさ。……直に本当にやっていたかどうか分かる。」
真希は、紫や折神家がクロであれば、いろは学長を助けようと心に誓っていた。
「…格好の良いこと、おっしゃいますわね。」
茶化したかのように言う寿々花。
「信頼しているからな。…それで、それ以外にも何か報告は有るか？」
真希は、寿々花を信頼していると言っていたのだが、あまり直接言うと気付かれる可能性が有るため、いろは学長を信頼しているようにも取れる発言をしたうえで、話を広げていた。
「…利害によるものか、或いは他に動機が有るのかも知れませんが、折神家関係者の女は紫様の妹君折神　朱音様だそうです。」
「そうか。……そのことはあまり誰にも言うな。結芽、良いな？」
「…私、そんなに子供じゃないよ。」
子供扱いされるのに不満げな顔をする結芽。だが、感情をよく表に出してしまうために、子供扱いされることには気付いていなかった。
「はい、承知しました。…刀剣類管理局内で紫様に不満を広げないように、ということでよろしいでしょうか？」
寿々花は、真希に確認を取っているようにしていた。
「そうだ、姉妹喧嘩に巻き込まれた、と思われてしまうとマズイからな。」

「ああ、そうですわね。機動隊員全体の士気に関わりますものね。」
今、気付いたかのように振る舞う寿々花。
「ああ、それに刀使の写シ対策のための武器を持って行ったらしいが、現場の機動隊員等には不評だったからな。」
「……楽になった、という訳ではなさそうですしね。…それに、刀使を撃った後も、刀使を相手にしなければならないのは、辛いものでしょう……。」
真希のＳＴＴ隊員達の辛苦の話を聞き、寿々花は悲しげな顔をする。
「……そんなことがあったんだ。後で何か励ましのお手紙を書いて送ったら喜んでくれるかな？」
結芽は、舞草の隠れ里に残っているであろうＳＴＴ隊員達に何かしてあげればと思い、そんなことを言っていた。
「……ああ、それが良いな、結芽が書いてくれたらきっと喜ぶさ。」
結芽の思いやりのある言葉につい破顔してしまう真希。
「…だからといって、汚い字で読みづらい、下手に大人ぶった文章はやめて欲しいですわね。」
本心ではないのだが、寿々花は結芽に少し辛辣なこと言っていた。
「もーっ、結芽だってちゃんと勉強してるもん！」
「…まあ、本当かしら？」
〝左手の甲を右手の人差し指で叩く〟ことをしながら寿々花は結芽を茶化していたが。真希は、結芽と寿々花が談笑しているのを尻目に寿々花からのサインを解読していた。
（……紫様の指示、…格好の良い、…利害によるもの、…はい、承知しました。…ああ、そうですわね、…楽になった、…だからといって、…まあ、本当。……これらを繋げると……。）
〝左手の甲を右手の人差し指で叩く〟という合図の間に喋った寿々花の会話の頭の文字を繋げてみると、
ゆ　か　り　は　あ　ら　だ　ま
となったことに、真希は心の中では激しく動揺するが、表情としぐさは特に変わったところもなく、いつも通りにしていた。

（……尻尾は掴んだが、厄介なことになったな。……どうする？告発したところで証拠も無い。……一度、寿々花の家で作戦を練っておくべきか。いや、それだとゆか…いや、荒魂に感付かれるか？）

真希はどうにかこの状況をなんとか打破すべき策を熟考するも、どれも時間と人員が足りなかった。そして、刀剣類管理局本部職員が何人かで此方に近寄ってきていることに気付く。そして――――、

「折神家親衛隊第一席獅童　真希、同じく第二席此花　寿々花。先程、貴女方両名は折神家親衛隊の任を更迭されました。」

真希と寿々花、そして結芽もこの発言を聞いて、凍り付いたかのように呆然としていた。そして、先程の職員の発言の内容が頭の中に入った真希は、努めて冷静な態度と心を保ちながら、応対していた。

「どういう事だ？更迭の理由は？」

「獅童　真希、貴女のスペクトラムファインダーから五條　いろは容疑者と頻繁に通話とやりとりをしていたそうですが？」

「……そんな記憶は無いが？」

実際、真希はいろはとここしばらくは連絡はしていない。真希は本当に何を言っているのか分からなかった。

「失礼ですが、貴女のスペクトラムファインダーを渡す前に通話記録等を調べさせてもらいました。すると、いろは容疑者を通じて舞草と通じていたこと、局長を排除させる等の内容のやりとりをしていたことが発覚しました。」

「莫迦な、そんなことをしていない!!僕のスペクトラムファインダーを今調べれば分かるだろう!?」

「既に消去済みや改竄されている可能性があり、今調べたところで貴女の嫌疑が晴れることはありません。親衛隊内部に内通者が居るという情報を受け、局長も断腸の思いで内密に捜査をするよう我々に要請されました。結果、貴女が舞草と通じていた証拠を多数確認済みです。大規模テロの容疑並びにスペクトラムファインダーの改竄と外国人工作員への関与が認められれば証拠隠滅、外患誘致罪などにも見なされる可能性があり、本来であれば実刑を受けてもらいたいところですが。貴女の功績を考慮し、この事態が終息するまで貴女の親衛隊

権限並びに帯刀権を剥奪、身柄を拘束させて頂きます。」
　この職員は、淡々と真希に対する罪状とこれから予測されることを述べていた。一見、身柄を拘束するだけかと思われるが、異性同性問わずに人気がある獅童　真希が不正を行い逮捕されたと広まれば、刀剣類管理局内部が混乱してしまう可能性があるため、朱音を逮捕するまで拘束し、事態が終息した後に公表。親衛隊から除隊させ、帯刀権を永久に剥奪する気なのだろう。
「これはどういうことですの？一体、誰の権限で!?」
　流石の急展開な事態に声を荒げる寿々花。しかし、
「此花　寿々花、貴女にも同様の嫌疑が掛けられている。加えて、貴女は綾小路の学生を唆し、内乱を誘発した疑いが掛けられている。貴女にも獅童　真希と同様の措置を取らせて頂きます。」
「…情報提供者は誰だ?.そいつはどうやって調べたんだ?.」
「〝内部告発〟だと言えば分かりますか?.」
　しかし、彼は定型通りの発言をしたつもりだったが、失態を犯していた。四名しか居ない親衛隊の〝内部告発〟と発言してしまったからだ。寿々花と真希は論外として、結芽にそんなことができるわけがない。だとすると、
（夜見か……、彼女はこちら側ではないのだな。）
「そっ、そんなの絶対何かの間違いだって!.真希おねーさんがそんなことする訳ない!!」
　結芽はそう叫ぶと、真希と寿々花を守ろうとし、おもむろに御刀に手を伸ばしていった。それに気づいた真希は大きな声で結芽に命令した。
「結芽!.止めろ!!……分かった、大人しくしよう。」
　真希は結芽の将来と身を案じ、結芽に強くそう命じると、真希と寿々花は大人しく御刀を職員に渡し、拘束され、連行されていった。
　結芽は何が起きているのか分からなかった。ただ、この幼い少女でも、大事な人と大事な物が踏み潰されてしまったことには理解できていた……。
（……夜見おねーさん、……あんたが!.）

そして、誰がこのようにしたのか結芽でも気付いていた。

策謀の渦中へ

「夜見おねーさん、何であんなことをしたの……」
　結芽は、夜見をとある個室まで連れて行くと問い詰めていた。
「……私は自らの職務、…紫様の身辺を御守りするのを全うしただけです。」
「何かの間違いかも知れないでしょっ!?真希おねーさん達は、潜入するためにそんなことしたのかも知れないのに!!」
　結芽は信じることができなかった。あんなに真面目だった真希が、たまに口喧しかったけど親身になってくれた寿々花が、不正を行っていたことが信じられなかった。
「……燕さん、それはありません。そういった任を与えられていれば、紫様がご存じないわけがありません。…ですので、残念ですけど、真希さん達は……。」
　しかし、夜見はいつも通りに淡々と機械のように状況を話すが、今の結芽にはそれが癪にさわるのであった。
「何なのっ!夜見おねーさんにとって私達は友達でも、仲間でも無かったの!?……そんな酷い人だと思わなかった。」
　結芽は涙を堪えているのか、身体を震わせながらも、強い口調で夜見を非難していた。
「…燕さん。……私は……。」
「もういいっ!!…喋りかけないで、私だけでも真希おねーさん達の無実を証明してやるんだからっ!!」
　夜見は結芽を説得しようとしたが、取り付く島もなく、走りながら退室する結芽の背中を見つめることしか出来なかった。
　そして、夜見は思い出していた。

　夜見が復帰する数日前ーーーー。
　夜見は来客の応対をしていた。
「……何用でしょうか?」

「いやぁ、実は困ったことがありましてね。」
来客者は大村　静だった。
「……何にお困りかは知りませんが、私にご助力できるかどうかは期待しないで下さい。」
夜見は自分とは無関係と言わんばかりに突っぱねていた。
「……高津学長に関わりがあることでもですか？」
敬愛している雪那の名前を出され、表情が乏しい夜見でも動揺が顔に出ていた。
「……どういうことですか？」
「簡単なことですよ。真希さんと寿々花さん等が何やら嗅ぎ回っていましてね。……もし、私達の学長が行っていることが公になると、綾小路も只じゃ済まないんですよ。ですから、貴女の協力が有れば全て丸く収まるんです。」
静の話にのめり込む夜見。普段の夜見なら、そんな怪しい話は乗らないのだが、雪那にも関わりがあるため、
「……何をすれば良いんですか？」
協力をすることを決めてしまった。
「……そうですね、でしたら夜見さんは真希さんと寿々花さんのスペクトラムファインダーにこのアプリをインストールして貰って、親衛隊内部に内通者が居ると言って頂ければ全てこちらで行いますので。」
つまりは、こういうことだった。静が用意したアプリ（遠隔操作ウィルス）を真希と寿々花のスペクトラムファインダーに入れ、そのアプリで静達が真希と寿々花の両名が舞草と通じていたように遠隔操作した後、夜見が親衛隊内部に内通者が居ると紫に報告。そうして、真希と寿々花を内通者に仕立て上げたのであった。
その話に夜見は、なんの取り柄も無く非力であった自分を親衛隊に抜擢されるほどの力を授けてくれた雪那を助けるために、
「……そのアプリを二人のスペクトラムファインダーに入れれば良いんですね？」
夜見は真希と寿々花を裏切り、自らの手を穢してしまうのであっ

た。

「……私はああするしかなかった。……そうしなければ、そうしないと、高津学長は、本当に……本当にきっと、壊れてしまう。だから、私は。」

雪那が不正を行っていることを分かっていながら誰にも相談できず、敬愛している雪那を守るため、一人で全てを抱え込んでしまった夜見。そして、不意に親衛隊の思い出を一つ一つ思い出していく。

『そうですか。夜見さん、せめて四人の時は今みたいにお話ししてくださると嬉しいですわ。』

寿々花さんが、何もない私に仲良くしてくれたこと。

『夜見、今は気にするな。だが、任務中は君の意図が明確に、かつ即座に伝わらないと最悪の場合、死者が出る。それは、夜見も避けたいだろう?』

真希さんが、つい方言が出てしまったが、笑うことも無く、ただ優しく諭してくれたこと。

『たまには、あのオバチャンに怒っても良いんじゃないの?』

結芽さんが、ただ純粋に私のことを気に掛けてくれたこと。

「……燕さん……真希…さん……寿々花……さ…ん……」

夜見は堪らずに、声を必死に圧し殺していた。

涙を流すことを、泣くことを自分自身が許せなかったから。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……!」

しかし、感情を抑えることができなかった夜見は目に涙を溢れさせては、泣いている顔を見せないように両手で覆うように顔を隠して、何度も、何度も謝罪の言葉を一人で呟いていた。

「……ですが……燕さんだけは、必ず!……私がノロの実験台になってでも……治療法を……!」

真希達を裏切った自分はもう親衛隊に戻れない。けれど、自分が実験台でも何でもなれば、ノロを使った治療法が確立して結芽だけは助かるかも知れない。

最早、夜見にはそれに縋るしか、そして贖罪の方法がそれしか思い

浮かばなかった。例え夢物語と嘲られ、愚かな思考だと罵られようとも……。

一方、結芽は今まで、親衛隊権限を使って部下を困らせたり、隊の指揮を放って勝手に一人で動いたりしていたため、人望があまり無かったこと。そのうえ、真希と寿々花の無罪を証明してくれそうな相手がいない結芽は信頼しているソフィアに連絡していた。

『……ソフィアおねーさん！真希おねーさんが!!』

ソフィアの携帯から焦っている結芽の声が聞こえていた。早く助けないと本当に犯罪者にされてしまうかも知れないという思いがあったからだ。

「落ち着いて下さい。真希さんが逮捕されたことは承知しておりますが、彼女がシロであるという証拠を見つければ意味がありません。」

焦っている結芽を落ち着かせるとともに、信頼を得ようとするソフィア。

『そんなこと言ってられないよ！』

しかし、結芽は、真希を犯人扱いしないソフィアに頼って良かったと思う半面、焦っていた。

「……そのためには、結芽さん貴女の親衛隊権限を使って、我々を呼びつけて下さい。紫様の護衛に必要だと言えば納得しますし、真希さん達を貶めた者達に気付かれないでしょう。」

現在ソフィア達は、結芽に代わって綾小路の刀使達と共に舞草の隠れ里の後始末をしていることになっていたため、結芽の親衛隊権限を使って本部に戻ろうとしていた。

……だが、実際は朱音と密談をしていたことに結芽は気付いていない。

『……そっか、そうすれば堂々とソフィアおねーさん達がこっちに来れるもんね。』

ソフィアおねーさんは考えてくれている。結芽はそんな思いを抱

き、ソフィアを信頼するようになる。
「ええ、恐らく舞草のスパイが真希さん達を貶めたのでしょう。本部の警備を脆くして、紫様を何らかの方法で殺めようとしているのかも知れません。しかし、事は慎重に動く必要があります。狡猾なスパイが逃げてしまうかも知れませんので。」
最もらしいことを言って、真希と寿々花を貶めた犯人は舞草の連中だと思わせ、折神家本部に再び入り込もうとするソフィア。
『うん、分かった。ソフィアおねーさんの言うとおりにする。』
だが、結芽はソフィアの悪意に気付かぬまま、言われたとおりにしようとしていた。
「ええ、宜しくお願いします。」
『ううん、こっちこそ宜しくね、ソフィアおねーさん。本当にありがとう。』
ソフィアの携帯から、結芽の笑顔が見えるくらい無邪気で元気な声が聞こえていた。
「ええ、こちらこそ。……必ず、舞草の連中を一網打尽にし、真希さん達の無実を晴らしましょう。」
そして、お前に相応しい最高の舞台を用意しておいてやろう。と、邪な考えを抱くソフィア。
『ううん、こっちこそお願い。宜しくね。』
結芽はそう言うと、電話を切ったのか、通話終了の音がソフィアの携帯から流れていた。そして、
(……まあ、私が静に命じて、夜見を脅して真希と寿々花を捕まえさせたんだがな……。それにしても、まだまだ元気そうだな。舞草の拠点を一人で壊滅したときに死んでいれば、生き恥を晒さずに済んだろうに。)
そう心の中で結芽を嘲りながら、ソフィアは携帯をポケットの中に入れていた。
そして、真希と寿々花を捕まえさせ、夜見を陥れ、結芽を孤立させたのはソフィアだったことに誰も気付いていなかった。
(御養父上は今どんな顔をしているのやら。)

そして、この世の者とは思えぬ邪悪な笑みでソフィアは刀剣類管理局に赴くのであった。

一方、潜水艦ノーチラス号にてソフィア達が去ったあと、朱音やフリードマン、トーマスと累の四人が今後のことについて話し合っていた。

「……平城も警察によって封鎖された今、米軍基地へ向かうべきでは？」

長船、美濃関、そして平城が警察に制圧された今、米軍基地で匿ってもらい再起を図るということを、累が朱音に進言していた。

「どうかな？……恐らくだが、俺等を拿捕して折神家に引き渡すだろうな。自分達は無関係だと証明するために。」

しかし、トーマスがそれに異を唱える。

「？…何故そう言い切れるんです？」

累は不思議がっていた。今まで、潜水艦や兵を援助してくれた米軍が今更、手の平を返すとは思っていなかったからだが。

「ＣＩＡ長官と全く繋がらねぇ。……恐らく、俺達を見捨てたんだろう。」

「……となると、いっそ国外に逃げようっていう選択肢も無くなったという訳か……。」

トーマスの説明を聞いたフリードマンは、母国アメリカは隠世技術の恩恵を失いたくないがために、舞草を折神家に売ろうとしているのだろうと納得した。舞草の支援者の一人であるＣＩＡ長官と連絡が取れないということは、アメリカ政府は無関係であるとする腹積もりなのだろう。

「一気に窮地に追い込まれたね……各地に潜伏中の舞草のメンバーも監視が強くなって身動きが取れないらしい。……問題は、邪魔者がいなくなった奴等が次に何をするかだ。」

そう言って、肩を落とすフリードマン。最早、舞草も壊滅的打撃を受け、母国アメリカを頼ることすらできない状態へとなってしまった。

「……２０年前のようなことが起こるということでしょうか？」

「……それで済むかな？……今や折神家に集められたノロの総量はあの時以上の筈だよ。」

累の疑問に、フリードマンは真剣な表情で答えていたが、

「朱音様っ！大変ですっ!!」

突然、孝子が扉を突き破るかのように入室して来たことに、フリードマンは苦言を呈す。

「何だね？騒がしい。後にしてくれないか？」

「優が！……優は我々舞草にノロを注入された改造人間であると、先ほど折神家からの発表がありました!!」

しかし、孝子は苦しげに、息を吐きながらも報告していた。

「！……何故そのようなことを!?」

孝子からの報告を聞いた朱音も動揺していた。何故、今頃になってそのようなことを公表するのかと疑問を抱いたからだが……。

「折神家は、優という少年は舞草にノロを注入され、強化された存在であると同時にその子供を見かけたら保護をするようにとお達しがあったそうです。」

一息ついた孝子は、少し冷静になって朱音達に説明していた。

「……つまり、優をノロ漬けにしたのは俺達であると公表したうえで、社会的信用と発言力を失わせ、保護して優の中に居るタギツヒメとも同化することを紫の中に居るタギツヒメは目論んでいるってところか。」

紫の中に居るタギツヒメは徹底的に舞草を潰し、あわよくば優の中に居るタギツヒメとも同化し、二十年前の力を得ようとしているとトーマスは推測していた。

「このことは可奈美くんには？」

「いえ、まだ……。」

フリードマンは孝子にこのことを可奈美に伝えているのかどうか

尋ねると、孝子はまだ秘匿していると答えるのであった。
――しかし、扉の軋む音に反応した朱音達は孝子が入室してきた扉の方を見ると、そこには可奈美が居て、朱音達の居る部屋に入室して来た。
「ねえ?……今の本当?」
可奈美は死んだ目をして、朱音達に訊いていた。
「……御当主様、そんなことをしたの?ねえ?」
そして、可奈美は感情を抑えることができなかったのか、目に涙を浮かべ朱音達に詰め寄って来た。
「じゃあ、私がやってきたことって何?必死に剣術を学んだのに、親にも友達にも嘘を吐いてきたのに、剣術が好きな子だと自分自身をも欺いていたのに、……結局、結局何だったの!?ねえ!!教えてよっ!?!!」
全ては優の中に居るのが荒魂であると気付かれないようにしていたことだった。
父親にも、友達にも、あの宿の店番の恰幅の良い女性を相手にしてきたように無理して嘘を吐いていた。
人を斬らない、斬らせないようにし、沙耶香を相手に無刀取りをやったのは優が真似して人殺しをしないようにするためだった。
剣術が好きだと言って必死に剣術を習得していたのは、強くなって優が戦わずに済むようにと思っての行動だった。

しかし、可奈美は朱音達の話を偶然聞いてしまい、それが全て無駄になったと思ってしまった。
このままだと、優は荒魂扱いを受ける。それは絶対に避けなければならなかった。しかし、それは潰えてしまった。可奈美の心は次第に黒く染まっていった。

「……して、そちらの方は?」
紫は今日、祭殿には赴かなかった。理由は、協力者の一人織田防衛

事務次官が防衛省は刀剣類管理局と協力体制を敷き騒動を治めるために、協力を打診しに来たという名目のもとに来ていたので、紫はその応対をしなければならなかった。

「…背広組はこちらを支持していますが、制服組は……。」

「そちらには厄介な敵が居ると？」

「警察の影響力が増すことに脅威だと思っているようなので。……ですが、大荒魂を討てるのですか？親衛隊が二名抜けている状態なのに……。」

「さして影響はない。代わりの人員はリストアップして貰っている。」

「それならば問題はありませんか……。しかし紫様、貴女がノロで強化した親衛隊に完成されたS装備を装備させた部隊で、貯蔵室に有る大荒魂を放って討伐し、我々の権威と影響力を増大させるという計画に、間に合うのですか？」

つまり、紫が率いている変革派の目的は、貯蔵室にある大量のノロを別の場所に移動（例えば、敵対派閥に運ばせておいている最中に荒魂化させ社会的信用を失うことができればなお良い。）させ、二十年前の災厄を再現したかのように大荒魂を出現させる。そうして、紫が編成した新たな特務隊、もとい親衛隊と開発させたS装備を使用し討伐すれば、変革派の権威と影響力は飛躍的に増大させることができる。要は自作自演によって、自分たちの派閥を強くしようとしていたのであった。

そして、織田防衛事務次官は変革派の支援者兼協力者の一人であった。

「さして問題は無い。……だが、舞草ではない輩がこちらを妨害してきたからな。そちらも充分気を付けてくれ。」

そして、紫が率いる変革派は未だに舞草以外にも敵は多く居た。

「はい、承知しております。そちらもお気を付け下さい。……ところで、舞草の方でも親衛隊と同じようにノロで強化された子供が居るとか聞きましたが、そちらで何か有ったのですか？」

織田防衛事務次官は此処で躓いてなるものかと心の中で思いつつも、紫のことを配慮しているかのような発言をする、実際は紫の腹を、

弱味を探ろうと尋ねていたのだが。

「……恐らく誰かが我々の研究を漏らしたのだろう。そうして、その子供を完成させたら、その子供達を主力にしてクーデターでも起こそうとしていたのかも知れん。……更に言うと、スペクトラムファインダーにその子供が反応しなかったのは長船が何らかの方法でこちらのアンプルを強奪して注入したのだろう。おおよそ、反抗作戦を行う時の戦力を得るためといったところだろう……。」

紫の中に居るタギツヒメは、優にスペクトラムファインダーが反応しなかったのは、優の中に居るのが自分の半身だったからこそ反応しなかったとは言わず、夜見に使っていたのと同じアンプルを使用したからだろうと、最もらしいことを言って騙していた。

「……そうすると舞草はまるで悪の秘密結社のようなことをするのですな、必ずや断罪しなければなりませんなっ！」

流石に彼も子供を戦力として使うことに憤慨しており、そのようなことをする舞草のことを軽蔑していた。……しかし、今の紫の説明はタギツヒメの嘘であることに気付かず、彼もその少女達にノロを注入し強化させることに協力していたということを棚に上げての発言だが。

「……だが、その子供にスペクトラムファインダーが反応しない理由も言わない訳にはいかないだろう。……そうだな、未だ荒魂と隠世について不明な点が多いから、その子供と荒魂が融合したことによるものか、舞草が何らかの方法で反応しないようにしたのかは不明だが、スペクトラムファインダーに反応しない荒魂となったということにしておこう。ましてや、そんな荒魂が居たとしたら折神家としてはそんな荒魂を特殊なケースとして保護しない訳にはいかないだろう？今後のスペクトラムファインダーの改良のためにも。」

紫の中に居るタギツヒメの話を聞いていた織田防衛事務次官は、疑問を呈すのであった。

「……それで納得してくれるでしょうか？それに、舞草が我々の研究の成果ノロのアンプルによって製造できたと公表されるかも知れないのでは？」

「問題ない。大規模テロを起こそうとしていた舞草の連中がそれを言ったところで誰が信じる？それに、今までそのことを公表しなかった理由は何だと思う？おおよそ、千鳥を持った刀使に遠慮をしていたのだろう。……だが、何者かがその子供の情報を噂で流している。……ならば、こちらも無反応という訳にもいくまい。」

紫の中に居るタギツヒメはそう言って織田防衛事務次官を頷かせたのであった。そして――――、

（……私が〝タギツヒメ〟であることに発覚してしまうリスクは大きい。しかし、親衛隊は二名しか居らず、加えて謎の武装組織、そのうえスペクトラムファインダーに反応しない子供が噂として出回っている。……公表して、あの幼き二羽の鳥達を挑発したから、必ず〝器〟を連れて此処に来る！……そうなれば、必ずかつての力を取り戻せることができれば、私の勝ちだ!!）

紫の中に居るタギツヒメは焦っていた。親衛隊も半数になり、そのうえ敵対行動を取る謎の武装組織が何をするのか不明であるため、早急に優の中に居るタギツヒメと同化し力を取り戻すことを先にすることにした。そのため、優がノロで強化された改造人間であると公表し可奈美と舞草を怒らせ、向こうから襲撃して来るように仕向け、待ち構えていた。

（……こういった博打勝負は一度だけではない。私がかつての力を取り戻すのが先か……。それとも、私が破滅を迎えるだけか……。）

そして、紫の中に居るタギツヒメは大きな賭けに出ていた。

唯一の希望　1

優がノロで強化された改造人間であると公表された次の日の朝、ノーチラス号にて可奈美達は寝室に居り、ベッドに腰掛けていた。
なまるで誰かが死に静かに弔う場所、葬儀の時のように静まり返っていた。
「私、……戦いたい。」
不意に舞衣が突然、自らの決意を語り始めていた。
「だって、こんなの酷過ぎる。……私はみんなみたいに戦う理由も無くて、ただ可奈美ちゃんや優くん、沙耶香ちゃんが放っておけないっていう理由だけで付いて行って来たから、……ただ、状況も分からないまま、何の覚悟もなく流されるまま此処まで来て、紫様…ううん、大荒魂のこととか実感が無かった。」
「舞衣……？」
そして、舞衣が話をしているときに沙耶香は気付いた。舞衣が徐々にかつての狂気を孕んでいた顔をしていたことに……。
「けど、ロークさんが殺されて、聡美さん達があんな風にされて、優くんのことが公表されて、色んな人が利用されて犠牲にされていく……。だから、私は改めて思ったの。このまま好き放題やられて、踏みにじられて、黙ったまま足蹴にされるなんて許せないって！」
舞衣はそう言うと、腰掛けていたベッドから立ち上がると、皆に聴こえるように自らの決意を、本心を語っていた。
「大荒魂は私達のことをただの子供の集まりか虫けらのようにしか思っていないのかも知れない。…けど、虫けらでも覚悟を持って挑めば獅子も殺せる。そのことをあの大荒魂に、私達がただの子供の集まりじゃないってことを血と骨を代償にしてでも教えてやりたい！…そして、あんな荒魂を倒してみんなに平穏が戻るなら命なんか失ったって怖くない、それで今まで犠牲になった人達のための弔いになるなら、戦って血の一滴が枯れるまで、戦い続けてやるって覚悟を決めた。」
舞衣は拳を強く握り、力強く宣言していた。

「まっ、舞衣「ああ、そうだな。俺も里のみんなの仇を討つって決めた。このまま好き放題されて、足蹴にされて黙っていられるか。」

狂気に歪んだ舞衣を沙耶香は止めようとするが、薫に遮られ、沙耶香は何も言えなかった。そして、沙耶香は気付かなかった。薫も怒りを瞳に宿していたことに。

「残った刀使は私達だけなんデスよ?そもそもこの状態でどうするんデスカ?」

エレンは舞衣にこの状況でどのようにするのか、尋ねていた。

「鎌倉に戻ります。大荒魂を討つことができれば、聡美さん達だけでも解放される筈です。」

舞衣の作戦は至極単純な、特攻染みた強襲作戦であった。

「敵は一人じゃありませんヨ!大荒魂に辿り着くまでにはきっと沢山の障害がありマス。」

エレンが真っ当な反対意見を言うと、沙耶香はホッとしていた。私と同じような考えを持っている人が居ることに安堵していた。

「十条さんは、一人でここまで来て。そして、一太刀入れました。そして優くんも幼いながらも覚悟を持って私達のために付いて来てくれました。だったら、私達もそれぐらいの覚悟を抱いて、立ち塞がる者はどんなことをやっても全て倒していって、十条さんのように一太刀だけでも入れます。」

「……そうだ、こいつは、姫和はずっと一人でやって来て、一人で待ち続けてやっとの思いで一太刀入れたんだ。…だったら六人居る俺達ができない訳がねぇ。そんでもってなぁ、9歳のガキも頑張ってんのに、俺らがダセェ姿晒す訳にはいかねぇだろ。」

舞衣の話に感化されたのか、或いは優の殺人の影響か、薫も徐々に狂気に染まり、舞衣の作戦に賛同していた。

「……そうですネ、ここまで来たら、ロークおじさんと傷付いた舞草の人達の分を返すまでやりまショウ、殺るか殺られるかデスネ。」

沙耶香は驚いていた。まさか、エレンが賛同するとは思わなかったからだ。そして、沙耶香はエレンのことを見て気付いてしまった。エレンも舞衣と同じ様な目を見開いた狂気を孕んだ目をしていたこと

に。
「姫和ちゃんやろう。……大荒魂を倒したらみんなを守って、感謝されて、そして優ちゃんも姫和ちゃんもみんな元通りになるから、また三人でチョコミントを食べに行こう。」
大切なものを踏みつけられた可奈美は、静かに憤り、そして記憶には無い〝誰か〟の言葉を思い出して、何をするべきか決めていた。
「……そうだ、ここまで来たら大荒魂を討つまでやるまでだ。そうすれば、優も可奈美もみんな元通りになる。だから、だから頑張って大荒魂を討とう可奈美。」
大切なものを何度も踏みつけられた姫和もまた、狂ったことを語り、紫は人間ではなく大荒魂であると、大荒魂を討つことで全てが元通りになると己に自己暗示をかけるように可奈美に語っていた。
「ここまで来るのに、多くの舞草の人達が傷付き倒れマシタ。……ですから、仇とかじゃなくて少しでも弔いに、みんな笑顔になるナラ。私は、私も何かお手伝いしマスっ!!」
「まっ、待って!!」
しかし、ここで沙耶香が遮る。狂ってきている皆を止めるために。
「……違う、違う。私達は、荒魂を倒すのが目的だから、敵討ちとか弔いなんてする必要……。」
沙耶香は必死に考え、自己発言が苦手ながらも自分なりに可奈美達を説得しようとした。
「必要だよ。僕たちが殺らないと僕たちが殺られる。エレンおねーちゃんが言っているように、殺るか殺られるかだよ。だったら、僕も可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんの邪魔する奴はいらないから、潰すだけだよ。」
優はいつも通りの無表情で、冷たく身も凍る殺気を発して沙耶香を見て答えていた。
「…でっ、でも。」
しどろもどろながら、沙耶香は必死に可奈美達を狂気に向かわせないよう説得しようとするが……。
突如、視界が歪んだのかのように可奈美達の残像が見え、可奈美達

は皆、一様に驚いていた。
そして、これは可奈美達にだけではなく、日本全国の刀使に起こっていた。

それに驚いた可奈美達は、何かを知っていそうなフリードマンに直接尋ねてみたら、他にも、朱音、累、孝子、トーマスの四名が居た。
「フリードマンさん、何か知っているんですか?」
しかし、その現象は数分経つと消えて無くなってしまった。
「ああ……、この現象は刀使達にしか起こらない。以前同じ現象が確認されたことがある。２０年前の事だ。おそらく隠世で何か大きな変化が起こったのだろう。」
フリードマンは、二十年前にも同じことが起きたと説明し、
「そして、その現象のあとに大荒魂が出現した。」
そのあとに大荒魂が出現したことを話した。つまり、この現象は大荒魂が出現する前兆であると可奈美達に教えていた。
「これは国家レベルの災害です。一刻の猶予もありません。この事をすぐにでも人々に知らせなければ。」
「どうするんですか?」
朱音の人々に知らせるということに、累は今や犯罪者のように扱われている舞草がどのようにして人々に伝えるのか訊いていた。
「まっすぐ横須賀へ向かって下さい。報道陣を集められれば、私が全てを話します。折神家が隠していたことを、タギツヒメのことを全て。」
朱音は何が起ころうとも自分の姿を曝し、自らが知っている全ての真実を明かそうとしていた。
「……それが明らかになれば、最早この国だけで済む問題ではなくなるかもしれないな。だが、折神紫がそれを許すとは思えん。最悪の場合もあり得ます。」
紫の中に居るタギツヒメが黙って見ているだけとは思えなかったフリードマンは、朱音を制止しようとする。
「私に何が起きようと、舞草には協力者がたくさんいます。」

しかし、朱音はそれで黙って言うとおりにせず、行動しようとする。
「駄目です！朱音様の代わりはいません！」
「逆に言えば、貴女さえ無事ならチェックメイトにはならない。」
孝子も朱音を制止する方に加わり、どうにか朱音を抑えようとするが、
「…ならば、横須賀から私達は別行動をとります。大荒魂を討てば全てが終わる。」
姫和はそう言って、沙耶香を除く可奈美達の決意を語る。紫を荒魂扱いしていることに特に何とも思わなくなっていたことに気付く事もなく。
「君達は……。」
しかし、フリードマンは可奈美達がいつもの可奈美達ではないことに気付くも、止めることはできなかった。彼もまた、可奈美達が舞草に参加することを止めなかったのだから。
「フリードマンさん止めないで下さい。優くんが化け物扱いされて、ロークさんが殺されたから、私達は決めました。…戻る場所はもう無いのかも知れない。けれど向かった先に何か有るのなら、其処へ向かうだけです。この先何が待っていようと、たとえどんな障害が立ちはだろうと、覚悟を持ってそれを壊して行くだけです。」
舞衣は決意を語る。たとえどんな結末が待っていようとも、たとえどんな先が待っていようとも。
「……累さん、私、どうやってみんなを止めたら良い？間違っているのをどうやって言ったらいい？こんなことを言おうとしている私は間違っている？」
そして、自己表現が苦手な沙耶香は累に尋ねていた。皆が狂気に歪み、熱く狂っていくのを止められないことにどうしたらいいのか分からなかった。
「貴女達は悪くはないわ。悪いのは、御刀を持たせて、責任を押し付けている私達大人なんだから。…だけど、例えこの場にロークさんが居ても、もう止まらない。だから、今は彼女達の傍に居てあげて、貴女はもう、そんな大事なことができるから……。」

しかし、累は可奈美達を舞草に参加させ、刀使たる者は御刀を使い荒魂になってしまったノロを祓い静めると伝え、散々利用することしかしなかった自分に今更何が言えるのだろうか?そんなことが過った累はそれ以上は何も言わなかった。いや、言えなかった。

「しかし、朱音様。今の我々舞草の言い分を聞いて集まるでしょうか?」

今や舞草は極悪非道の組織と報道されており、果たして報道陣は呼びかけに応じるのだろうか?と累は疑問を朱音にぶつけてきた。本音は可奈美達の無謀な特攻を止めたいからだが。

「それなら、あの……グンルに協力を求めて、報道陣を集めましょう。トーマスさんと累さんお願いできますか?」

累の疑問に朱音は信用できるかどうか分からないがソフィアを頼って、報道陣を横須賀に集めてもらうように話を付けて欲しいとトーマスと累に指示していた。

(……あの人、ソフィアを頼るんだ。大丈夫かな、信用していいとは思えないし、何より子供っぽいし。)

そんな話になったことに可奈美は心の中でそう呟いていた。

「ところでどうやって折神紫の下に辿り着く?」

不意にトーマスにそんなことを聞かれ、

「え?それは……」

言葉に詰まるエレン。そして、

「……ねぇ。アレ、使えないかな?」

エレンの代わりに答える可奈美。

「……アレって何だよ?」

しかし、抽象的過ぎる可奈美の答えに薫は何を言いたいのか分からなかった。

「ええと、その、S装備のコンテナで屋敷まで飛ばしてもらうのが良いかなって思ったから……。」

可奈美の意外な返答に一同は驚くとともに、一筋の光明が差したかのような気持ちになっていた。

「S装備のコンテナを使って折神家の屋敷に乗り込むとは思いつかな

かった。だが、可奈美がそれを思いついてくれたお陰で紫を倒すことができるかも知れん。」

トーマスは素直に可奈美の考え称賛していた。

「朱音様が囮になってくれている間にお前達が本丸を攻め落とす。単純な作戦だが、この状況なら一番の手だな。」

トーマスはソフィアから入手した屋敷の見取り図と祭殿への道のりが書いてある地図を机に広げ、作戦を練っていた。

「……ですが、その誘いに乗るでしょうか？』

累は疑問に思ったことをトーマスに尋ねていた。

「いや、誘いに乗るさ、少し前にネットで二十年前の大荒魂のことと、折神家が隠していたことを公表すると広めておいた。…だから、誘いであっても彼女は乗らなきゃならない。……だが、六つしかないコンテナを誰が乗るかだが……。」

その疑問に、トーマスは既に大荒魂が誘いに乗るように工作をしていたと告げる共と共に、誰が折神家に突入するかは決めていなかった。

「……優、可奈美、姫和、舞衣、薫、沙耶香の六名が適当だろう。親衛隊は結芽と夜見の二名しか居ないが、強敵であることは間違いない。こういった人選はそれが理由だ。」

可奈美達を一瞥し、そう結論付けるトーマス。

「……でも、「うん、それがいいね。優ちゃん、一緒に行ってくれる？」

沙耶香は、優を突入するメンバーから外してもらうよう言おうとするが、可奈美に遮られてしまう。

そのうえ信じられないことだが、可奈美は優も折神家の屋敷まで連れて行こうとしていた。……理由は、目を離していたら何をするか分からないからであるからだが。

「……そうだな、連れて行った方が良いだろう。」

姫和もそれに賛同した理由は、傍に居ると必ず助けると約束したことと、可奈美と同じく目を離していたら何をするか分からないからである。

まさか、可奈美と姫和の二人が優を連れて行くことに賛成するとは

思わなかったため、沙耶香は押し黙るしかなかった。
「これで、突入するメンバーは決まったな。……あのソフィアという女から、突入する時間には紫は祭殿に必ず居ることが分かった。だが、行く前に祭殿への道を頭の中に叩き込むことと、睡眠はちゃんと取っておけ、分かったな？要はお前達六人だ、必ず紫を倒してこいっ!!」
この言葉に沙耶香以外の可奈美達は瞳に決意と狂気を滲ませながら頷いていた。

一方、結芽はソフィアと合流し、舞草と全面抗争する前に立ち会っていた。
結果は、結芽がソフィアの喉を寸止めして勝利していた。
「やった！勝てた!!」
結芽は余程嬉しかったのか、声を上げて自分の気持ちを出していた。
「…お見事。強くなりましたね。」
そのことにソフィアは素直に笑顔で称賛の声を贈っていた。
「…ありがとう、ソフィアおねーさん。少し自信がついたよ。それで、悪いんだけどソフィアおねーさん、これからどうしたらいい？」
ソフィアに対して結芽が開口一番に真希と寿々花を救出するにはどうすべきかと尋ねていた。
「……単刀直入に言います。舞草を殲滅し、舞草の首魁を捕まえて真希さんと寿々花さんとは関係が無いということを証明するしかありません。」
ソフィアは、不治の病を患っている結芽に更なる舞草との戦いに赴かせるよう誘導していた。
「つまり、私が舞草を倒しちゃえば良いんだよね？」
結芽は自分の考えが当たっているかどうか、ソフィアに尋ねていた。

「ええ、そうです。しかし、そう簡単にはいかないでしょう。彼らは今も捕まっていないところから、海自の哨戒網の情報を何処かから手に入れているのでしょう。」

ソフィアは、自らがその情報を舞草に流していることは言わなかった。

「…舞草のスパイの人がそうしているってこと？」

ソフィアのことを信用している結芽は疑うこともせず、舞草のスパイが情報を流していると推測した。

「恐らくそうでしょう。」

なに食わぬ顔をして、舞草が悪辣なことをしていると結芽に思わせるソフィア。

「…私、そーゆうの嫌い。」

元々幼少の頃から御刀に認められ、親衛隊の中でも一番実力が高いこともあってか、ノロの力に頼らず、刀使としての誇りが高いせいか、正々堂々とした戦いを望んでいた。

「……では、この話を知っていますか？かつて柊家は折神家の裏を司っていたということを。そして、刀使の中でも荒魂に近しい家系であることに。」

急な話に「えっ？」と結芽は驚いた表情と声を上げて、ソフィアの話に注目していた。

「そして、荒魂と近しい家系であるが故に荒魂と融合できる力を持っていました。その力は表である折神家も同じく持っています。」

「……つまり、荒魂を身体の中に入れて強くなれるってこと？」

その力が有ったからこそ、ノロのアンプルが製造されたのだろうか？と推測してしまう結芽。

「そうです。それは今の親衛隊に近しい物があるでしょう？……だからこそ、私を打ち倒した貴女がやるべきだ。」

ソフィアはそう言って、ノロのアンプルを結芽に渡すように目の前に差し出していた。

「……ソフィアおねーさん、私達のこと知っていたの？」

しかし、結芽はソフィアに対して疑問を抱いていた。ノロのアンプ

ルを知っているということは自分の病気のことを知っているということになり、それを知ったうえで、激しい戦いに赴かせたのかと？

「ええ、貴女が強い刀使になりたいことも。ですので私に勝った貴女にはその希望を棄てず、舞草に打ち勝つのです。そして、思い知らせてやるのです。」

そして、ソフィアは急に熱を込めて結芽に語り聞かせる。

「本来あるべき刀使の姿は、その身を犠牲にしてでも戦い続けた者であることをっ！そしてその姿で全ての刀使、いえ全ての己が人生に絶望を抱いた者の希望となるのです!!」

ソフィアの話を聞いた結芽は、不思議な魅力に取り憑かれていた。

「……私が……人の希望に……？」

結芽はそうなれば、私のことをみんな憶えていてくれるかも知れないと強く思い始める。

「分かった。…私、絶対に勝つよ。」

結芽はそう言ってソフィアが用意したノロのアンプルを手に取っていた……。

「……よく思いつきますね。あんな話。」

そして、結芽が立ち会っていた部屋から退室した後、静が室内に入って来ていた。

「……何か用か？」

静の声に応えるソフィア。

「いやだって、結芽さんとの立ち会いはわざと負けたでしょ？……悪いですねぇ。もしかして、決死な思いで戦わせるためですか？」

静の推測にソフィアは、

「……だったらどうする？有名になりたいなら、応援するべきではないか？それに、今の病弱な状態のアレに〝薬〟を継ぎ足してやろうとしているだけだぞ？」

わざと負けて、結芽を死地に赴かせる芝居をし、ノロのアンプルを受け入れるためにしたと答えていた。

「……さて、静。横須賀に来る朱音を出迎えに行って来てくれ。あと、

そのことを〝他の連中〟にも広めておいてくれ。」
ソフィアは静に、舞草の残党にも朱音が横須賀湾に現れることを広めるように命じていた。

唯一の希望　2

先が見えない階段と鳥居がある場所。私は此処に来ていた。
「そっか、六人で行くんだ。」
「うん、みんなが姫和ちゃんや優ちゃんのために戦ってくれるから。」
かなりオブラートに説明したけど、気づいていないのかな?お母さんがただ黙って聞いてくれるのが、せめてもの救いだった。
「良かったね。……でも強いよ、紫は。」
お母さんがそう呟いて教えてくれた。
「分かってる。…御刀を持ってるところを一回見たから……。」
けど知っている。…勝てないかも知れないけど、もうやるしかない。みんな行っちゃうし、優ちゃんを一人にしたくなかったから。
「そっか、まぁ強いっていっても私程じゃないけどね～。」
お母さんは若干茶化して言っていた。
「え～、自分で言うそれ?」
「あっ、信用してないな?この～。」
そして私とお母さんは互いに笑っていた。何が可笑しいんだろう?でも、少しだけ気が晴れたような気がする。……きっと、私のことを気遣ってくれたんだろうな、ありがとうお母さん。
「……ねぇ可奈美。刀使って素敵だと思わない?人を守って、感謝されて、剣術も学べる。最高だよね。」
私は御当主……ううん、大荒魂と戦うことに恐れを感じていた。…けれど、今のお母さんの温かい言葉が心の隅まで届いたような気がして、私に進む勇気をくれた。
『違うよ、姫和ちゃんは御当主様、…人に化けた荒魂を斬るそれだけだよ。』
私は姫和ちゃんに話した自分の決意を思い出していた。そうだ、私は御当主様を倒すんじゃなくって、人に化けた大荒魂をみんなで一緒に倒しに行くんだ。だから、何も悪いことをする訳じゃない。ただ、刀使としてやることをやるだけなんだ。……だから、悪いことじゃないよね?

「うん！」
そう思うだけで私は自然と笑みがこぼれていく。これは正しいことだって、ハッキリと分かった気がしたから。
「そのうえ、福利厚生はばっちりだしね！」
そんなボケを言ってきたお母さんに私は笑いながら、「え～、そこ～!?」とツッコミを入れていた。そして、私は目が醒めてしまった。
「可奈美ちゃん、そろそろ時間だよ。可奈美ちゃん！」
舞衣ちゃんが起こしてくれたみたいだった。
「ん……おはよう…。」
私は何か良い夢を見ていたのかな?すごく気分が良かった。

「……みんな、そろそろ横須賀だよ。準備はできた?」
累はどこか悲しげであったが、悟られないようにできるだけ普段通りに話していた。そして、舞衣は「はいっ。」と鋭い目つきで答え、可奈美達は御刀を携えていた。
「ねぇ!大荒魂を倒したらみんなで何処かおいしいもの食べに行かない?」
可奈美はこの戦いに勝利したら、みんなで何処かへ行こうと言っていた。
「そういうことなら、ここの潜水艦のコック長が『無事に帰ってきたら、食べたい物を何でも作ってやる。』って、言ってたわよ。」
累は、あとでコック長と相談し、こんな提案をしようと思っていた。
「オォ～～!お腹太いデース!!」
「わざと間違ってるだろ……。」
エレンのボケ?に対してツッコミを入れる薫。
「やった!姫和ちゃんデザートは勿論チョコミントアイスだよね?」
「人をチョコミントのアイスがあればいいみたいに言うな。」
「じゃあ僕が貰って良い?」
「いや、だからといって要らない訳じゃない。」
可奈美の言葉に姫和は反論し、それに優はチョコミントを代わりに

食べると言うと、姫和はそれに反応する。
「コース料理は確定なんだな。」
そんな可奈美達のやりとりを見た薫はここのコック長は大変なことになりそうだなと思い、微笑みながら呟く。
「フフ……みんな無事に戻って来てね。」
そんな可奈美達のやりとりを見た累も少し安堵したのか、自然と笑みがこぼれ、無事に帰ってきてほしいと嘘偽りの無い本心を出していた。
「十条さん?」
ふいに姫和が近付いてきたことに気付いて姫和の名字を呼ぶ舞衣。
「お前が全体の指揮を執ってくれ、お前の指示があればきっと大荒魂に辿り着ける。」
「え!?」
「お前にはその力がある。孝子先輩達もそう言ってただろ?」
「十条さん……。」
「姫和でいい。舞衣、大荒魂を討伐して元通りにしよう。」
「うん。姫和ちゃん!」
舞衣と姫和は楽しそうに談笑していた。
(何で笑っていられるの?……人を殺してしまうかも知れないのに。)
しかし、そんな会話を見た沙耶香は、姫和と舞衣に何か危ういものを感じるのであった。
こうして、彼女達は立ち向かって行きました。……あの日へと。

横須賀湾――――。
聡美達、舞草のメンバーが揃って集結していた。
「聡美さん、まだ朱音様は来ていませんね。」
「……そうですか、なら折神　紫の手の者に見つからないよう、建物の陰に隠れて朱音様を陰ながら見守っていましょう。」

何故、彼女らが此処に居たのかと言うと、各地に居る舞草のメンバーに匿ってもらっていたのだが、横須賀湾に朱音が現れると聞き、居ても立っても居られず、横須賀湾に集結していた。

「……来ました、高津学長です。」

既に報道陣が来ており、強行手段は取らないだろうが、聡美達は念のために鎌府とＳＴＴ隊員等の動きを見張ることにした。

「……何も無ければ良いのだけれど。」

続々と朱音を確保するために集まってくるＳＴＴ隊員と鎌府の刀使達を見ては、聡美はそう願わずにはいられなかった。

一方、雪那側――――。

（折神　朱音、紫様の実の妹を捕えたということは秘匿し、あくまで折神家関係者を捕らえたと公表すべきだろう……。下手をすればこの一連の騒動、ただの姉妹喧嘩と言われかねん。何としてでも私の手で捕まえ隠居してもらうことにしなくては……。）

舞草の首魁折神　朱音が横須賀湾にて投降を申し出たため、紫は雪那に朱音を捕えるように命じていた。そのため雪那は車で横須賀へ向かっていた。しかし、

「何故、マスコミがいる？」

既に横須賀湾に報道陣が大挙していたことに驚愕していた。

「有事の際に備えろとＳＴＴ各員と刀使に伝えろ。……絶対に報道関係者を巻き込むな。」

雪那は、ＳＴＴ隊員を指揮しているサングラスの隊員に有事に備えて車の中に居たまま無線で命令していた。

『ハッ、既に隊員等は集結しており、複数の狙撃班は配置について即時対応が可能です。』

既に何班かに分け、狙撃体勢に入っており、命令が有れば即座に実行できるとサングラスの隊員は言っていた。

「……分かった。但し、折神　朱音を撃つな。後々、厄介なことになる。」

『ハッ？しかし……。』

雪那の命令にサングラスの隊員は納得がいっていないような、気の抜けた返事をしてしまった。
「投降してきた折神　朱音を撃ってしまえば、舞草の残党が何をするか分からん、それに報道陣の目の前で射殺すると、刀剣類管理局は投降してきた人間でも直ぐ射殺する物騒な組織だと言われかねん。…だが、山中での戦いで接触が有った武装工作員等が銃火器で武装していた場合は撃って構わん。」
雪那の朱音を撃てば刀剣類管理局は悪印象を与えかねないのと、トーマス達は重火器で武装していた場合は射殺しても構わないという返答に納得がいったのか、『了解しました。』と二つ返事で返していた。

「みなさんっ!私は折神朱音です、私の話を聞いてくださいっ!!!」
朱音は、報道陣にも聴こえるように拡声器を使っていた。その声と、言葉に報道陣は「折神　朱音!?」「本当か!?」という様々な反応をし、刀剣類管理局の局長である紫の妹が非人道組織と云われている舞草に所属していたことに皆が驚いていた。
「今、この国には大きな危機が迫っています!２０年前、いえ、それ以上の災厄が起ころうとしているのですっ!!!」
朱音は声が潰れそうなほどの気迫を持って語り聞かせていた。その理由は、可奈美達を折神家屋敷へ行かせる支援をするためである。
そのため、朱音は自らが囮となって、投降を刀剣類管理局に申し出ていた。紫を警護する刀使を一人でも多く誘き出すために。
「二十年前の災厄の元凶、大荒魂は再び蘇ろうとしています!…刀使のみなさんは感じていたでしょう?先程の不思議な現象を、それは大荒魂が現れる前兆です!最早一刻の猶予もない!!」
その言葉に雪那は眉をピクリと上げる。過去の経験から、もしや敵は他にいるのではと勘ぐり、鎌府の刀使達にも動揺が広がっていた。
「どうか皆さんのお力をお貸しくださいっ!!」
その言葉と同時に潜水艦のハッチが六ヶ所開いた。それに雪那は

気付くが時既に遅く、六つのＳ装備のコンテナは打ち上げられていた。朱音には一筋の希望に見えたことだろう。
「これは攻撃ではありません！今飛び立ったのは、…私達の希ぼ――」
次の瞬間、ここに居る刀使達全員にとっても、雪那にとっても、ＳＴＴ隊員達にとっても信じられないことが起こった。
朱音が全てを言い終わる前に突然倒れたのである。…たった一発の銃声と共に、腹部から血を流し、ノーチラス号の甲板に紅い花を咲かせている朱音を見て、ＳＴＴ隊員の誰かが命令を無視し、勝手に撃ってしまったのだろうかと雪那はつい思ってしまった。
「誰が撃った!?」
『わっ、…分かりません！』
雪那も堪らずそう感情的に叫んでしまい、サングラスの隊員も困惑していた。雪那は報道陣の目の前で、最悪の結果を見せてしまったと実感していた。そのうえ、
「よっくもおぉおぉおぉおぉっ!!」
「外道共がっ!!」
「まっ、待って！」
聡美は仲間の刀使に対して止まるよう叫ぶが、止まらない。里のことを、仲間のことを、そして朱音が撃たれたことにより思い出し、その仇を取ろうと血走った目と般若のような顔をして鎌府の刀使に向かって行く。
「なっ、何だ?長船かっ!?」
「各刀使は報道関係者と学長をお守りしろっ!!」
長船の刀使達が鎌府の刀使とＳＴＴ隊員等に突撃してしまい、混戦となってしまう。
「……くそ、これじゃあ味方に当たってしまう。」
そして、混戦となったことが幸いしてか、味方に当たることを懸念して、対刀使用の武器をＳＴＴ隊員等はまともに使用することもできず、援護すらできなかった。
だが、剣術の型も無く、ただただ暴力と怨恨、その他憤怒の感情の

まま御刀を振り回す戦いがそこにあった。
「学長!・今のうちに!!」
ＳＴＴ隊員等は、雪那を逃がすために肉の壁になり、ヘリで逃げるよう伝えていた。
「……済まないっ!・そちらも無事で!!」
雪那も此処に留まっていては却って鎌府の刀使とＳＴＴ隊員等の邪魔になると判断すると、足早にヘリに乗る。
「本部まで、早くっ!!」
ヘリのパイロットに刀剣類管理局本部に戻るよう指示していた。
恐らく、沙耶香は本部へ向かったのだろうと思い、雪那にとっては何があっても向かわなければならなかった。
「本部は今危険ですっ!!」
しかし、ヘリのパイロットはＳ装備のコンテナが打ち込まれた本部に戻ろうとする雪那を止めようとしていた。
「構わんっ!・会わなければならない子達が居るっ!!」
ヘリのパイロットにそう告げて、雪那は本部に戻るよう強く命令していた。それに、根負けしたヘリのパイロットは本部へ向かうことにした。
そして、地上では――――、
「えっ?・何っ、キャア!?」「なっ、何だ何だ!?刀使同士で刀を向け合っているのか!?」「おいっ、ここは危険じゃないのかっ!!さっさと逃げるぞっ!!」「現場は繋がっていますか!?刀使同士が戦闘をっ!!」
各報道陣の目には、憤怒の感情のまま刀を振るう、血で血を洗うかのような抗争になったと映っており、自分達にも矛先が向くのではと気が気でならなかった。
命令に従い、賊に対抗しようとする者――――、
仲間を喪い、せめてもの弔いをしようとする者――――、
我先にと、恥も外聞もなく逃走する者――――、
この場に起こっていることは真実であると伝えようとする者――――、

名誉が、想いが、血が、狂気が、この横須賀湾を狂騒の舞台へと変えていった。

とあるビルの屋上。制服を紅く染め上げていた鎌府の刀使三名と青いアサルトスーツと防弾チョッキを紅く染め上げ地に倒れ伏す何名かの狙撃班がそこに居た。

「隊長、……折神　朱音を撃ちました。」

鎌府の刀使、いや、ソフィアのシンパが仲間と共に狙撃班を全員御刀で殺害し、警察の特殊部隊にも配備されている狙撃銃ＰＳＧ―１を強奪。その狙撃銃で朱音を撃っていた。

『良くやった、……お前のことは忘れん。』

携帯から、ソフィアの指示を聞いた鎌府の刀使は「了解」と呟くと、携帯を切っていた。そして、その鎌府の刀使は傍にいる仲間二人に向かってこう言った。

「……みんな、先に逝くね。……後のことはお願い。」

その鎌府の刀使はおもむろに刀身を素手で掴むと、自らの喉下に躊躇うことなくそのまま突き刺して、自ら命を絶った。

「……ごめん、また必ず迎えに行くから。」

その鎌府の刀使の仲間は、喉下を突き刺し自殺した鎌府の刀使を見てそんな言葉を投げ掛けると共にその場から速やかに離れて行った。

その後、朱音を狙撃した犯人は硝煙反応が出たこの自殺した鎌府の刀使であると発表される。そして、幾分かは舞草の自作自演では？紫の密命を受けた刀使なのでは？といった推測がなされ、しばらくは持ち切りになっていた……。

そして、静は少し離れた所から、その様子をほくそ笑みながら見て、ソフィアに報告していた。

「……隊長、これで良いんですよね？」

『そうだ、これで刀剣類管理局は俗悪な組織として映るだろう。』

ソフィアはその報告を聞き、喜んでいたようであった。

「でも、質問なんですけど、……何で朱音を射殺しなかったんです?」
しかし、静には疑問だった。朱音を始末すれば良いのではと……。
『撃って殺したらどうなると思う?』
ソフィアの問いかけに、
「まあ、舞草は壊滅しますね。」
静は思ったことをそのまま言っていた。
『そう、ただ舞草は潰れ、変革派の勢いは増すだけだ。だが、それでは意味が無い。…朱音を殺さぬよう苦しめれば、その姿を見た舞草は変革派を躍起になって潰そうとし、やがては舞草と変革派が互いに憎しみあい潰し合うだろう。…そして、その中から真の戦士たる〝狼〟が生まれる。我々は勝利を得るために此処へ来たのではない。この世に教訓を与えるべく本部に赴いたのだ。…お前も機を見て速やかに離脱しろ。』
「分かりました。」
そして、このソフィアと静のやりとりの数分後には、この横須賀湾に居る報道陣の一人があることに気付き、声を上げる。
「おっ、おい何だアレはっ!!?」
そして、その声に反応して見ると、都市の光が徐々に消えていくことに気付いた皆は狂騒し、やがてポツポツと全ての光が消えると、横須賀湾一帯と刀剣類管理局本部も停電していた。
この大規模停電と聡美達の乱戦の隙に、エレンは御刀を失い写シが張れない状態のため、狙撃される危険があるにも関わらず、決死の覚悟を持って朱音を救出し、ノーチラス号を横須賀湾から離れるように指示した。
その後、朱音を医療施設の有る部屋まで運んでいき、エレンは遠ざかる横須賀湾を見ては、全員無事であるようにと祈っていた。
「退け、退けっ!!」
聡美は朱音が乗っている潜水艦ノーチラス号が遠ざかっていることに気付くと、停電して暗闇となったこの機に乗じ撤退することにし、静達もまた暗闇に紛れて姿を消すのであった。
(……これで終わると思うか?お前達舞草は朱音を逃がすために報道

陣の前で騒乱と大停電を起こしたと殆どの人は見るだろう。……そうなれば、変革派と舞草は憎悪しあい、互いに争いあう。）

ソフィアの宣言通り、世の中は暗闇となった横須賀湾の如く、更に混迷へと向かっていく。

私がまだ幼かった頃は幸せだった。そして、ここからが全ての始まりだった。

お母さんが私の弟となる男の子を授かり、頑張って産んでくれたことに私は今も感謝している。まだまだ仲が良いお母さんとお父さんが、名前は優しい子であるようにという思いを込めて優と名付けていたことが私は印象的だった。そして、私は生まれたばかりの弟、優ちゃんの頬を指先で突くと、まだ赤ん坊の優ちゃんはそれに反応して、私の指先を小さな手で掴んで喜んでいたことに、私は思わずはにかんでいた。

すごく小さな手に触れられる反面、私は〝おねえちゃん〟としてやっていけるかどうか不安もあった。けど、私は初めて見る新たな命に目を輝かせてしまって、出来るか出来ないかは考えてなかったけど、とにかく〝おねえちゃん〟としてやっていけるように目指した。

でも、私と一緒で純粋に剣術が好きでお母さんとお父さんの願い通りに優しい子になってくれたら良いな。

「よろしくね。」

私はずっと仲良く暮らせれば良いなとも思い、優ちゃんに笑顔で挨拶していた。

まだ幸せだった頃。

私は、身体がだんだん弱くなっていくお母さんの助けに少しでもなりたくて、優ちゃんの面倒をお母さんの代わりによく見ていた。

「大丈夫？優ちゃん。」

「うん、ゴメンね。……ジャマしかしてない。」

優ちゃんは身体が弱くて、大変だったけども、私に迷惑掛けていると思っているせいなのか、私の言うことを守ってくれた。だから、手間の掛からない良い子だったよ。

「大丈夫、優ちゃんは悪くないよ。おねえちゃんに任せて！」

私は目を輝かせて答えた。
「……うん、ねーちゃ、ありがとう。」
それに、いつも私の後ろにちゃんと付いて来てくれた。だから、私には優ちゃんが必要で、優ちゃんは私が必要なのだと思った。
「それに、お医者さんが言っていたでしょ?大きくなったら身体が強くなれるから、強くなったら剣術を一緒に頑張ろう?ね?」
「うん、ねーちゃの言うこと、聞く、ボクも剣術やる。」
それに私の言う事を何でも聞いてくれたから、身体が弱いこともあって、剣術ができないのが残念だけど、大きくなれば身体も強くなれるとお医者さんが言っていたからそれまで我慢する!だから、だからそれまでずっと一緒に居る。そんな未来を見ていた。
だからかなのか分からないけど、大事しなきゃいけない子だと思えたのかも知れない。けど、たった一人の弟ができたことが嬉しかった。だからお母さん、ありがとう。優ちゃんはとっても優しい子だよ。
「それに、優ちゃんは邪魔とかじゃないよ!、お母さんとお父さん、優ちゃんが居てくれたから、いなくなって欲しくないから私は頑張れるんだよ。……だから、ずっと一緒に居ようね?」
「……うん!」
これで、私も一人前の〝おねえちゃん〟だよね?お母さん!!

「……可奈美、優のことお願い。……あの子に親らしいこと……あまりしてやれなかったからさ……。」
とある病室で、とても弱っているお母さんが白いベットで寝ていた。私はもうそろそろで会えなくなることに気づいてしまったから、励まさないといけないと思った。
「大丈夫だよ。私、……私、おねえちゃんだし、お母さんみたいに強い刀使になって、全てを守り抜いてみせるよ。」
私はそう強がって泣きそうになるのを堪えながら、できるだけ笑っ

て答えてあげた。
お母さんはそれに安心したんだと分かった。やっと、笑ってくれたから。
「……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。」
お母さんにそう言われ、私はお姉ちゃんとして頑張ろうと思う反面、上手くできるかどうか不安もあった。
「……任せてよお母さん、私はお母さんが言っていたように、大好きな剣術を学んで、荒魂から人を守って感謝されるような刀使になるんだから、優ちゃんもみんなも守るよ。」
私がそう言うと、お母さんは安心したかのように、嬉しそうに笑ってくれていた。
そして、これが私とお母さんの最期の会話となった。

お母さんが死んで、お母さんとの思い出がある庭先の縁側で一人泣いていた。
そして私はささいなこと、ほんの些細なことで酷いことを言ってしまった。
「……ごめん……ごめんね。」
ただ一言、酷い事言ってごめんと……ただ一言、ちゃんと謝れば良いだけなのに、面と向かうと喋り辛かった。
「あっ、……。」
「あぅ。」
私は何て言えば良いのか分からなかった――。
優ちゃんも私を見ると、言葉が詰まってしまい。少しだけ震えていたようにも思えた。
何で、……何で何で何で何で何にも言えないの？また昔みたいに元通りになりたいだけなのに、少しの勇気があれば進めるのに、どうすればいいのか分かっているのに、この先に何が待っている

のかが怖くて考える暇もなくて、ただ黙っているだけしかできなくて。
「……。」
「……。」
お互い何も言えなかった……。目の前の壁を壊していくこともできなかった。
優ちゃんが何も言わず、通り過ぎてしまったのは、心が張り裂けそうだった。

そして、優ちゃんが居なくなった――――。
夜になっても帰って来なかった……。
（……ごめん、お母さん。）
私はどうすれば良いのか分からなかった、おねえちゃん失格だった……。お母さん、ごめん。私、約束守れなかった。
もし、優ちゃんが居なくなったらどうしよう。そのことばかり頭に過ぎって、剣術のことなんて考える暇がなかった。いつも髪を縛っている黒いリボンが無いのも、そのせいかも知れない。大事な人も守れないのに、刀使になる資格があるの？
……刀使になる資格なんてない。……お母さんを裏切った。
そんなことばかり考えていたとき、ふとお父さんが、優ちゃんが無事に帰って来たと教えてくれた。
「……ただいま。」
そこには、傷だらけで泥まみれの優ちゃんが居た。それに、私は思いっきり優ちゃんの頬を打つと、私は涙を流しながら、顔をくしゃくしゃにして叫んでいた。
「バカ！何してたのっ!!」
頬を打たれ赤くしている優ちゃんは私に何かを差し出していた。
――――黒いリボン――――
私がいつも髪留めに使っている黒いリボン。
そんな物のために――――、

身体が弱いのに――――、
必死で探してくれた――――。
その、ただ見ている真実に私は堪らず声を上げ、優ちゃんを抱き締めてしまった。
「……バカ……ばかぁ、そんなことなんかで……。」
「でも、……ボクは身体弱いから、こんなことしかできない。」
優ちゃんも涙を堪えられず、私に謝罪の意味も込めて、言ってきた。
「……ばかぁ、ばかぁ、そんなものより、優ちゃんが、だいじにきまってるよぉ……。」
私は想っていたことを正直に打ち明けた。
「……ゴメンね、また一緒に居てくれる?」
「……うん。」
そのあとは、私も、優ちゃんもお互いに涙が枯れるまで、その日は泣いていた。

そうして私は今みたいに優ちゃんと些細なことで一方的に怒鳴ったり、辛く当たったりした。けど、今も髪を束ねるのに使っている黒いリボンのお陰で、前よりも優ちゃんのことを見て、よく聞いて、仲良くなれた。
そして、優ちゃんも美濃関学院に入学して、幼いながらも刀使意外の方法で私を助けたいと言っていたときは、嬉し過ぎて言葉が出なくなったときがあり、今も憶えている。
幸せな日々だった――――。
身体の弱い優ちゃんの面倒を見つつ剣術の稽古もしていた私は、辛いと思ったこともあるし、投げ出したいこともあったけど。
「えっと、ボクは男だから……、刀使になれないから、大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。」
けれど、優ちゃんが言ってくれた、背中を押してくれる手から響く声のように、私に力をくれた。私はこういった子達を荒魂から守っていると思うと、刀使になろうとしたことは間違いじゃなかったと心から思えた。

私、みんなが居てくれたら頑張れるよ。ありがとう、優ちゃん。だから……、だから、全てを守るよ、ここから――――。

けれど、そんな私の決意を嘲笑うかのように、残酷な運命が私を構ってきた。

早く家に帰ることができてお母さんとお父さん、そして優ちゃんに会えると思っていた。けど、居る筈の優ちゃんが居なかった……。

それに私が驚き、お父さんに言うが、前と同じと思ったのか、昼に居なかっただけという弱い理由なのか、はたまた運悪くお父さんの仕事が忙しいのか、気にも留めてくれなかった。

だけど、夜になっても帰ってくるどころか、優ちゃんが履いていた靴が道路に落ちていて、その付近に血痕らしきものが複数有ったことで、お父さんも慌てて警察にやっと連絡してくれた。

そのときの私は、何も出来なかった。

大人が私の上を通り過ぎて解決に向けて動いてくれていた。結局私は、神剣たる御刀に選ばれていても、何も出来ないただの子供でしかないという事実が、……何日も、何日も何日も何日も見せられていることが、それが真実であるということがただ辛かった。

そして私は何故だか分からないけど、警察の人や周りの人の目を見て、その人達が何を考えているのか分かってしまった。

『はぁ～～、ダルイなぁったく。』

……何で、そんなこと言うの？

『どうせ、大方家出かなんかだろ？騒ぎ過ぎなんだよ？』

……そんな事、どうしてわかるの？

『親の教育や躾が悪いからこうなるんだろ？』

……おかあさん、おとうさん、ゆうちゃんのわるぐちはいわないで。

『もう死んでるんじゃないの？何日経っていると思っているんだよ。』

……カッテナコトバカリイウナ、ナニガワカル。アナタタチガソンナコトヲイウナラ、ナニヲシンジレバイイノ？

そうして私は心が動揺していたこともあってか、時間が数日間、い

や数年間だったのか曖昧になる程の、……優ちゃんが居ない時間が過ぎて行った。

孤独だった――――。

お母さんが死んだ日を思い出すほどに、御刀に選ばれても、そんなこと等意味がないかのように、辛く、目の前が見えなくなるほどの暗い時間が流れていて、どうすればいいのかわからない。

私は何のために御刀に選ばれたのだろうか?何のために剣術を磨いて、強くなろうとしていたのか?私はそんなことを考えては消え考えては消えを見えるようで見えない答えが見えるまで繰り返していた。

『こういった事件は、日が経つと生存確率は著しく低くなることが……。』

その映像を映す箱から映る、テレビドラマなのかトークバラエティなのか今の私ではもうよく分からない番組の話を聞いてしまった私の心は、日が経つと同時にその話が病のように段々と蝕み、テレビの話の仮定が現実へと置き換わって行っているようにも思えていって、そして優ちゃんとは永遠にもう会えないような気がした。

お母さんも、優ちゃんも、いつか私の知っている人はみんな消えてしまうのかも知れないという脅迫観念が、私から孤独という恐怖を教え、私の思考を奪っていく感触が不快だった。

『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』

お母さんの言葉を思い出す。

――――私はお母さんとの約束を守れなかった。

――――ワタシハケンジュツイガイトリエガナカッタ。

そうして、何もせず怠惰な日々を過ごした私は江麻学長から鎌府の刀使さん達が優ちゃんを悪い博士から救出したという知らせを聞いた。だけど、そのことに私は納得できなかった。何故、私達を数日も会わせてくれなかったのか?その答えは、お父さんと病院に行くことになったことで、何となく嫌な予感がして、何となく悪いことになっていそうだと、

そして、それは当たっていた。

――――ゴメン、約束守れなかった、お母さん、ダメな子だ、ワタシ。

お母さんに心の中で謝罪をし、優ちゃんを呆然と見て、私とお父さんは当然のように心が混迷していた。

意識は戻っておらず、痩せ細っていて、女児のように髪が伸びていたから、居なくなった当時の姿とはかけ離れていた。身体の弱い優ちゃんがどれほどその悪い博士に雑に扱われていたかすぐに分かってしまうぐらいに酷い状態だった。

お父さんもその姿を見て、咽び泣き、お母さんへの謝罪の言葉を呟いていた。

そのあと、どうすればいいのかなんてもう分かっていた私とお父さんは優ちゃんの居る病室へ何度も通っていた。いつか意識が戻るんじゃないかと、流した涙もきっと笑って話せる日が来ると信じ続けていた。

でも、意識が戻らない日々が続いて、私は諦めたくない思いからあることを神様に藁にもすがる気持ちで優ちゃんの手を掴んで、叫んでいた。

「……神様、お願い。……また優ちゃんと一緒に居たい……！だから、だから今度は理不尽に怒ったりしない。酷いことも言わない。……ずっと一緒に居たいから、せめてお母さんとの約束を守りたいから、優ちゃんだけでも全てから守りたい。ここからでも良いから!!」

そんな願いが神様に通じたのか、優ちゃんの意識は戻ってきた。

「お……おはよう……。」

その声を聞いた私は、まだベッドの上で安静にしている優ちゃんを抱き締めて、わんわんと声を上げて泣いていた。

それからの私と優ちゃんはしばらく会うことができなかった。江麻学長とお父さんが私を除け者にして、大人達が難しいこと言って私に優ちゃんとは何故か会わせてくれなかった。

そして、目を見て気付いたことがある。江麻学長が、周りの大人達が、優ちゃんのことをまるで腫れ物のように見ていたことに、だから

優ちゃんの味方になれるのは私しかいない、大人達は信用できないと強く思った。

そんな辛い目に遭ったから、今も笑うことがなく元気がない優ちゃんを元気付けようと、まずは話すことから努力してみた。けれど、笑ってくれない。でも、大人達にあんな怖い思いをさせられたら無理もないことだと思った。

だから、私は優ちゃんにあることを誓った。

「ねえ知ってる優ちゃん。お母さんが刀使は人を守って、感謝されて、剣術も学べる、最高だって言ってた。けど、私はこうも思うの、刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟なんだって。」

私が突然こんなことを言い出したため、優ちゃんは首を傾げる。

「だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても救ってみせるよ。」

「……そうなんだ。だったら僕もそんな大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。」

私はこの日にやっと笑顔を見せてくれた優ちゃんと約束した。お母さんのように全てを薙ぎ払えるような全てを守り抜けるような強い刀使になることを約束した。

このときの私は、無邪気に強い刀使になって、私が〝正義の味方〟になれば、優ちゃんのこともみんなのことも守りきることができれば、お母さんとの約束を守ることができる。

だから、このときの私は刀使になって活躍すれば、テレビに出てくる勧善懲悪物の〝正義の味方〟のようになれると思った。そうすればお母さんとの約束も、……今度こそ優ちゃんを助けてあげられると本気で信じていた。

優ちゃんがやっと病院という名の白い檻から抜け出すことができて、一緒に家に帰ることができた。

元通りになった。これ以上欠けることがなくなったと心から思っ

た。だけど、優ちゃんが一人で喋っているところを見て、全てが変わった。

優ちゃんは、影にある目?……違う、ナニカと喋っていた、楽しそうに。当然、私は混迷し荒魂と喋っていると気付くのに私は少し遅れてしまった。けれど、そんな訳ない、何度も見えたけどそんな訳がない。

――――私の弟が荒魂な訳がない。

――――ダカラ、アレハナニカノミマチガイダ。

そう思えば後は楽だった。

お父さんが優ちゃんが一人で喋っている時があると言われたときは、

「きっとアレだよ。……一人遊びで、何かの役になって遊んでいるだけだよ。」

私はお父さんを相手に、必死に嘘を吐いて優ちゃんを守った。

そして友達に私の弟がどんな子なのか見てみたいとそう言われたときは、

「あっ、でも今は酷い風邪引いているから安静にさせて、……ごめんね。」

私は友達相手でも平気で嘘を吐いた。でも辛い……。

「……良いなぁ、上の妹は結構わがままで私を困らせてばっかなんだよ?」

更に舞衣ちゃんが妹のことを話してくれる。

「でもね、本当に困っているときは何も言わないの。おかしいよね、ばればれなのに。」

そして私と違ってよく見てて、よく喋れていた。対して私は、優ちゃんのことを喋り過ぎて、みんな優ちゃんのことを荒魂扱いして、いや私の大切な物が全て無くなってしまうのではないかと思い、何も喋れなかった。

「……う、うんそうなんだ……。」

そんな舞衣ちゃんを見て本当の仲の良い姉妹とか姉弟はこうじゃないのかと、舞衣ちゃんの方が〝おねえちゃん〟として立派なんじゃ

ないかと私はいつも思っていた。だから私は、本当は優ちゃんのことを何と思っているんだろう。優ちゃんは私のことを本当はどう思っているんだろう。……それを考えるだけで辛かった、惨めだった。

『だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても救ってみせるよ。』

私は〝おねえちゃん〟としては失格かも知れない。けれど優ちゃんとの約束を思い出した私は剣術を頑張った。好きな剣術でもっともっと上を目指した。そして手を伸ばして、掴んでいけば力になって必ず優ちゃんとの約束を守れると思い頑張った。

けれど、もう一人の私が囁いてきて、私は自問自答する。

『このままわざと剣術の試合が長引けば、決着が付かなければ優ちゃんのことを見なくて済むね?』

違う、そんなこと言わないでっ!

『違わないでしょ?どんなに強くなっても、どんなに自分の好きな剣術を磨いても救えないかも知れないと思ったから、こうやってわざと手を抜いて剣術を楽しむためという方便を造るために剣術バカな自分を演じて逃げたんでしょ?』

違う、私は本当にお母さんとの約束を守りたくて、本当に優ちゃんを助けたかったから、だから私は剣術を頑張っていつかあの日のように、普通の子に戻って欲しかったから今まで頑張れた!!お父さんも友達にも舞衣ちゃんにも嘘を吐いた!だからこれ以上、優ちゃんとの約束まで嘘にしたくないっ!これだけは本当の気持ちっ!!

『嘘。』

だけど、そんな私の叫びを『嘘。』と言ってばっさりと切り捨てるもう一人の私。いや今の私の本性なのかも知れない。

『でも気付いているんでしょ?相手を倒して倒してみーんなやっつけちゃったら行きつく先にあるのは、優ちゃんも誰も居ない孤独。あなたは優しいし、友達思いで弟思いかも知れないけど、結局はそれが怖くて剣術に逃げて、しかも全力を出してしまえばすぐに立ち会いが終わって優ちゃんを見なければならないから、約束が守れないかも知れ

ないからわざと手を抜いて立ち会いを長引かせた臆病。結局は冷たくて自分本位なだけじゃない。』

いつ誰に言われたか分からないけれど、〝優しいし友達思いだけど冷たくて自分本位〟と言われたことを思い出し、何も言い返せなかった。

『大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。』

けれど、優ちゃんがそう言ってくれるだけで、私はまだまだ止まらない、まだまだひたすらに進めると、頑張れると思えた。

それを信じて前を向き、目を開いた、〝冷たくて自分本位〟というのは利己的かも知れない。けどこれまでの私とこれからの私の全てを壁にぶつけて壊していけば、そしてこの先は何が待っていても、流した涙もきっと笑って話す日が来る。

けど刀使は、〝正義の味方〟は18歳辺りになってしまったら力を失って返納するか。私以上の適格者が現れたら変換しなくてはならないことを知った私は、もう4年かそれよりも少ない時間で優ちゃんを救わなければならなかった。だから、私は、上が見えなくなるのも怖かった。……そんな、そんな未来もずっと見ていた。

「……今なんと？」

スレイドを捕らえて、一人だけ辛うじて生きていた子供を保護した雪那は、政府関係者並びに警察官僚の指示に食って掛からんばかりの顔で聞き返していた。

「…スレイド博士の罪状を全て公表することはできない。彼の行ってきたノロと人体の融合は米国政府も関与していることが公にされてしまえば、日米関係に大きな亀裂が走る。それは即ち、国防と貿易関係、そのうえＤＡＲＰＡの技術協力を得られなくなればＳ装備の開発が停滞する可能性が多いに有る。よって、我が国はスレイド博士を略取・誘拐罪とノロの不正持ち出しのみに限定する。……異論はあるかね？」

雪那は納得出来なかった。新たな犠牲者も出ていて、苦労して見つけて捕らえたにも関わらず、日米関係が大事なのでスレイドの凶行を無かったことにしろと言われたからである。

「……つまり、彼を見逃すと？」

搾り出すかのように言う雪那。

「幸い、ノロの実験に協力してくれた者達は、故郷にもまともな戸籍がない者達ばかり、隠蔽は可能だ。」

実験に使った被検体の全ては、少年兵や僅かな金銭で売られる子供達ばかりだったから幸いと言って、無かったことにしようとする警察官僚。

「それにだ、君等がそんなことを言う権利はないと思うが？それに局長もこの判断を受け入れている。」

紫の名を出され、これ以上の発言は控えてしまう雪那。

「それにだ、江麻学長もこの件について、既にノロと人体の融合をさせられた被害者が居ることを公表しないで欲しいということを言われてな。……その被害者の人生が潰れないようにだろうな。」

警察官僚が、隠蔽しなければ被害者の子供の人生が無茶苦茶になると告げ、雪那にも賛同するように迫っていた。

「……。」

汚いやり方だと、今更そんなことを言うのかとも思った。

しかし、雪那は被害に遭った子供の人生を奪う真似はしたくなかったのか、結局は政府関係者と警察官僚が指示した隠蔽に加担するしか無かった。

「そう言えば雪那君、被害に遭われた子供の名を聞くかね？」

警察官僚は意地悪く、雪那にそれを尋ねる。

「……必要ありません!!私にどうしろと言うんです？……悪党を処刑できなかった悪党がその子の名を知ったら、隠蔽した江麻学長を利用するかも知れませんよ？……それに、貴方方の家族や友人があのマッドの犠牲者になったら同じことが言えるのですか？」

結局は何も救えなかったと思った雪那は何かが壊れた感触と共に、狂った笑顔を警察官僚に向けて言っていた。

衛藤　優は暗い空間にポツンと居た。

暫し、何故此処に居るのか考えていたら、外で遊んでいたときに刀使に斬られた後のことが思い出せなかったため断念する。

そして、可奈美がいないことと知っている人が誰一人いないことに寂しかったが、優は自分を呼ぶ声が聞こえ、誰かいるかも知れないと思い、そちらを向く。

「……えっ、えっとな、我は、我は……。」

「……？」

もじもじとしきりに何か言いたげなタギツヒメがそこにいた。

だが、このときの優はタギツヒメと初めて会ったため、何と言えばいいのか分からず、首を傾げるしかなかった。

「何恥ずかしがってんの？タギツヒメ。」

だが、優より少し年上の知らない外国人の女子がタギツヒメを長年

連れ添った友達のように呼んでいた。
「うっ、うるさいわ！……わ、我は何から喋れば良いのか分からんからこうなっているだけだ！」
「なっ？やっぱり無理だったろ？」
今度は肌が浅黒く優より少し年上の外国人の男の子が、その外国の女子と話していた。
「ええい！うっさいわ!!」
しかし、タギツヒメは外国人の男の子の言い方に怒ったのか、殴り倒していた。
「またケンカしてる。アハハ。」
すると今度は優よりも身長が少し低く、肌が焼けているのが特徴の知らない女児がタギツヒメと外国の男子のケンカを見て笑っていた。そんなやりとりを見た優は寂しさが吹き飛んだのか、クスリと笑ってしまった。
「あれ、元気でた？あっ、私はミカ。んで、あの自称神がタギツヒメ。そしてタギツヒメに張り倒されたのがジョニー。あとそれに笑っているのがニキータ。」
知らない外国の女子、もといミカが優に周りの人間のことを自己紹介をしていた。
最初にタギツヒメと呼んでいた知らない外国の女子の名前はミカ。
タギツヒメに張り倒された男子がジョニー。
そして、タギツヒメとジョニーのケンカを見て笑っていた女児がニキータ。
優は早速みんなの名前を覚えれたことと、友達ができたことが少し嬉しかった。
優はあとで、ここから出たら可奈美に紹介しようと思っていた。
「おい、ミカそんな紹介ねぇだろ。……アレ？お前日本人？」
ジョニーが優にそう尋ねると、優は「うん。」と答えた。
「……おっかしいなぁ、日系人はジジイの実験に付き合わされることはないと思っていたんだけどなぁ。」
優は気になることを言われ、ジョニーにどういう意味なのか尋ねて

いた。
「えっ?あのジジイに何かの人体実験にされたんじゃないの?」
ジョニーは優をまじまじと見つめながら、訊いていた。
「ええと、気付いたらここに居たから……よく分かんない。」
優も刀使に斬られた後、ここに居たので、何と答えればいいのか分からなかった。
「……て言うか、その子がこっちに来るってタギツヒメが言ってたじゃない。」
ミカは呆れながら、ジョニーにそう説明していた。
「……ああそうだったな。俺はジョニー、昔四十人の部下が居て、何人も撃ち殺した本物の男だっ!すげぇだろ!?」
ジョニーは南アフリカの出身で、少年兵達のリーダーだったらしく、銃の扱いと人を殺すことに長けていたことを優に自慢する。
「けど、父親みたいに信じていたボスに裏切られて、グアンタナモに送られたあとは何故か日本に送られて、あのジジイの実験に付き合わされて、化け物扱いされて死んじまった。」
そして、ジョニーは自らの過去を優に教えていた。
父親のように信じていた所属していた組織の長に裏切られ、辿り着いたところがスレイド博士によるノロと人体の融合実験の被検体扱いされ、最終的に荒魂化、タギツヒメと融合することになった記憶が優の中に流れていく。
「でもまあ、タギツヒメとニキータ、ミカみたいな奴等に会えたなら、そんな人生でも良かったさ。」
だが、ジョニーは大人達に良いように使われた人生でも、タギツヒメ達に会えたことを心から喜んでいることを優は分かってしまった。
「……そしてジョニーは単細胞。いっつもそんな話ばっかするんだから。」
ミカは暗い話をするジョニーを嗜めていた。
「うっせぇ、……お前は路地裏で花を売ってた話しろよ?」
「……サイッテー!」
己の過去を茶化されたジョニーに、ミカはジョニーを思いっきりビ

ンタして張り倒し、更に不遜な事を言ったジョニーはタギツヒメとニキータからも追い討ちを貰っていた。
「ちょっ！待って待って!!謝るからっ!!」
ジョニーは必死で謝罪の言葉を言うが、
「今までで一番最低だったぞっ!!」
そんなことでタギツヒメが許すハズも無く、
「バーカ！バーカ!!」
更に年下のニキータまで侮られるハメに遭い、ジョニーは袋叩きにされていた。
優も路地裏で花を売るという意味が分からなかったが、ミカにとって辛すぎる過去であることは分かってしまった。
「でもさ、優ちゃんも大変だったね。大丈夫？」
そして、ミカの両親が貧困から脱するために僅かな金銭を得るとミカを捨て、向かった先の大人達から〝玩具〟にされていた記憶が、そのときの感情が優の中に流れていった。
「でも、失ったものは多いけど、手に入れたものもあるよ。」
その後は客から病気をうつされ、生ゴミと一緒に捨てられるところを、スレイドがミカを買い、病気を持った子供もノロを注入して治療することができる被検体として実験場まで連れて行き、ノロを注入させられる。
そして、結果は荒魂となり、タギツヒメと融合することになる。
「でも、私なんかよりニキータの方が酷い目に遭っているんだけどね。」
それと同時に、優の中にニキータの過去が流れていった。
ニキータは赤子のときから乞食マフィアに誘拐されたあと、手足を切断され歩くことも手を使うことも困難となり、目を抉られ失明し暗い世界しか見れない、そんな同情される稼ぎのいい物乞いに仕立て上げられ、最終的にはジョニーとミカと同じくノロを注入させられ、荒魂にされた、人生を不意にさせられた子供だと知ってしまった。そして優は、みんな辛いことが遭ったのに、自分はどうすることもできないことに歯痒さを感じていた。

「……でもね、ニキータ言っていたの、目が見えて、手で触れられたり、歩けることが新鮮で毎日が楽しいって。……私も、ニキータも、ジョニーもそう。親に、金に、大人に踊らされて酷い目に遭ったけど、タギツヒメやジョニー、ニキータや優みたいな子に、……みんなに会えたならそう悪くない人生だと本気で思えるよ。」

自分達に同情していることに気付いたミカは笑顔で優にそう話していた。

「タギツヒメは自分のことを荒魂だとか言うけど、私達にはよく分からないから……。優は何か知ってる?」

二十年前の大災厄を引き起こした大荒魂。殺戮しか知らない少年兵。春を売ることになり生ゴミ扱いされる少女。金のために不具にさせられてしまった幼女。荒魂でもそんな子供達でも、平等に接することができていた。

荒魂と人間の共生が実現している小さな世界が其処にあった。

「う〜ん、可奈ねーちゃんは悪い奴って言うけど、……とてもそうには見えないよね?」

もじもじしていて、他のみんなと仲良く接するタギツヒメを見た優は、可奈美が言っていた世に現れ人々を脅かす怪異とは思えなかったのでそんな感想を抱く。

「……だよねぇ、大人達が勝手に決め付けただけじゃない?」

悪い大人しか知らないミカはそんな感想を述べると、タギツヒメと出会った頃を思い出し、優に話していた。

「人間風情が何用……おい何故纏わりつく?」

最初の頃のタギツヒメは、まだジョニー達に敵意を向けていたのだが、

「ねーねー、何でそんなに肌がキレイで白いの?何で瞳の色が輝いているの?」

「ええい、纏わりつくなぁ!!というか我が、荒魂が恐ろしくないのか!?」

ニキータに纏わりつかれ、質問攻めされたタギツヒメは困惑し、自分が人間を襲う荒魂であると言って、ジョニー達を恐れさせようとする。

「……荒魂って何だ?」

「聞いたことないから知らない。」

ミカとジョニーは外国出身で、日本のことをよく知らなかった。そのため、荒魂と刀使、ノロのことすらも知らなかったため、こうしてミカ達は何事もなく普通に接して来た。

「……いや、だからと言ってな、我をどうとも思わないのはおかしいと思うぞ。」

「何で?」

荒魂を恐れないことはおかしいとタギツヒメは言うものの、ニキータにキョトンとした顔で訊かれると言葉が詰まりそうになるが、タギツヒメはどうにか説明しようとする。

「……まず我は、荒魂は人間に対する恨みがあって人を襲うのだぞ?」

「俺が南アフリカで少年兵になった理由は、家族を殺した政府側の人間に復讐するためで、人殺しやら略奪やらをしまくったから、俺はお前とどう違うんだ?」

タギツヒメは荒魂は人間に対する復讐心から人を襲うと言うが、ジョニーは家族の復讐のために何人も人を殺してきたから同じであると答えた。

「……我は穢れておる。」

「私、相手をさせられた大人に汚れた女とか売女とか言われたことあるから私って荒魂?」

しかし、ジョニーの言い分をものともせず、タギツヒメは穢れがあるから人間にとっては有害であると言うと、ミカは相手をさせられた大人達から汚れた女といった罵声を浴びせられたことがあったので、自分は荒魂なのかと尋ねられてしまい、さすがのタギツヒメも困惑してしまう。

「……それにホラ、肌も不気味に白いし、人間とは違うのだから人間ではなかろう!?コレで分かっただろう!!」

「ニキータは足と腕が片っ方が無かったり、両目が潰されていたわたしのことをみんな気持ち悪がっていたから、……わたし荒魂だ、やったー。」

だが、タギツヒメは諦めず、自分は人とは違うと必死になって言うが、ニキータが金のために不具にされた自分を周りの人達が不気味がっていたために自分は荒魂だと思い、友達と一緒なことが嬉しいニキータ。

「あっ、おいそんなズルは無しだ、無し！俺だって荒魂だろぉ!!なっ、タギツヒメ!!」

「そうよ、だったら私も荒魂でしょっ!!そうでしょタギツヒメ!!」

仲間外れが嫌なのか、どちらが荒魂かで言い争い、どちらが荒魂なのかとタギツヒメに尋ねてくるジョニーとミカ。

「……何故荒魂になりたがる?」

タギツヒメはそれが心底理解できなかった。

「そりゃあ、人間とは違うなんかスゲェのなんだろ?そんなスゲェのになりたいからだよ。」

対等に扱ってくれて、話してくれる。そのうえ、どちらが荒魂かで言い争うミカ達に、タギツヒメは何とも言えなかった。だからなのかは分からなかったが、タギツヒメはミカ達のことを荒魂呼ばわりせず、

「……何でもない、今のは忘れてくれ。」

と言って、自分が人間とは違う荒魂なのだと言っていたことを取り消そうとしていた。

「オイオイ、まさか自分は『我は神ぞ。』とか思っちゃっていたら、違ってたから恥ずかしいのか?キャーワタシ、タギツヒメは『我は神ぞ。』とか言っちゃって恥ずかしいわって。」

しかし、ジョニーはそれを見逃さず、茶化して来たのであった。

「……うっさいっ!!」

そして、タギツヒメは茶化して来たジョニーを張り倒すのであった。

「まあ、そんなことがあってさ。」
　ミカ達がタギツヒメと出会った頃の話を聞いた優は、
「……何でみんな荒魂になろうとしたの？」
　とミカに尋ねていた。
「う～ん、……まあ、羨ましかったからかな？タギツヒメがさ、荒魂だから人間とは違うとか言ってたから、だったら荒魂って凄いことなのかなって思っちゃってさ、私達も荒魂になれば周りの人達にいいように扱われることも無くなるかもとか、タギツヒメと同じ荒魂になればタギツヒメも喜ぶかなと思ったから、私も荒魂になろうと思ってさ、タギツヒメに私達と荒魂はどう違うのか尋ねてみたら、……そんなに違ったとこはなかった。」
　ミカ達は荒魂になろうとした理由を語る。最初はタギツヒメが荒魂は凄いみたいなことを言われ、その力が有れば今まで馬鹿にしてきた人達を見返せるかも知れないとタギツヒメを一人にすることはないと思い、自分達も荒魂になろうと思った。だから、荒魂と人間の違いをタギツヒメに訊いてみた。すると、そんなに違いがなかったことにミカ達は気づいてしまい、それ以来、荒魂になりたいと言わなくなっていた。
「……そうだね、荒魂だって友達になれる子が居てもおかしな話じゃないよね。……だったらさ、みんなでタギツヒメのことなんて呼ぼうか決めようよ？」
　そして優も、タギツヒメとミカ達のことを荒魂だとは思えず、友達になりたかった。だからこそ、優はタギツヒメの呼び方をみんなで考えようとしていた。
「わたしも考えるー。」
「おお、良いなそれ。」
　ニキータと復活したジョニーもそれに賛同する。
「……う～ん、だったらどんなのが良いかな？」
「じゃあさ、ヒメちゃんで良いと思う。」
　ミカがどんな呼び方がいいのかみんなに尋ね、優がそれに答えてい

た。
「そっちの方がいいー。かわいいー。」
「私もそっちの方が呼びやすいから、それで良いよね？」
「……う、うむ。」
ニキータとミカはそれに賛同し、タギツヒメは俯きながら答える。
「ええ、こいつそんな可愛いか？」
「死ねぇ!!」
しかし、ジョニーだけはタギツヒメをヒメちゃん等というあだ名に相応しいとは思えないと言ってきたと同時に、またもタギツヒメに張り倒されてしまう。
「……ダメ？」
「ああ、いいよいいよ、タギツヒメもそっちの方がいいらしいし、ねっ、ヒメちゃん？」
「！……う、うむ。ありがとう。」
優はジョニーに反対されたため、ダメだったのかミカに尋ねると、ミカはその呼び方で決定したことを優とタギツヒメに伝える。それを聞いた優は嬉しそうに笑っていて、タギツヒメは優と真正面で話すのに照れ臭かったのか、俯きながら答えていた。
「……じゃあ、よろしくねヒメちゃん。」
優とタギツヒメ、ミカとジョニーとニキータは現世に生きていて、辛いことが沢山あったが、笑って話す日を迎えていた……。

その後、優とタギツヒメとミカ達は色んなことを喋って、色んな遠い国のことや文化を知って、おにごっこやままごとといった色んな遊びをして過ごしていた。そして――――、
「あれっ、可奈ねーちゃん？」
優は何処からか可奈美の声を聴き、其処へ向かおうとする。すると、優だけが一筋に光っている先に吸い寄せられ、次の瞬間、目の前には無機質な白い天井、白いベッド、白いカーテン、泣いている可奈

美。

まず優は泣いている可奈美に、「おはよう。」と言って、可奈美を安心させるために自分の無事を伝えていた。そうすると、可奈美はあっという表情をして、優を強く抱き締めていた。

そして、優は気付いた。自分の中から、タギツヒメ、ニキータ、ミカ、ジョニーの声が聴こえたことから、自分の中にタギツヒメ達が入っていることに。

(……どうしよう、僕。)

友達のタギツヒメ達を見捨てて、自分だけが生き残ってしまったと強く後悔してしまった。

(……どうしたら、助けられるんだろう?)

どうすることもできないことを悟り、暗い表情をする優。

それを見た可奈美は、優が怖い思いをしたから元気が無いのだと思ったため、ある誓いを言う。

「ねえ知ってる優ちゃん。お母さんが刀使は人を守って、感謝されて、剣術も学べる、最高だって言ってた。けど、私はこうも思うの、刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟なんだって。……だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても〝救って〟みせるよ。」

その話を聞いた優は、昔のことを思い出していた。

『大丈夫だよ!優ちゃんのことは何でも知っているから!!』

可奈美は既に忘れているが、身体の弱い優を気遣い〝姉〟として振舞おうとして、嘗て言った言葉。それを優は(おねえちゃんは何でも知っている。)と思い、誓いの言葉をこう解釈していた。

(……そっか、可奈ねーちゃんは分かっているんだ、僕の中に助けなきゃいけない友達が居て、僕もヒメちゃんもミカさんもニキータちゃんもジョニーくんも救ってくれるんだ。)

優は昔から助けてくれた可奈美の言う事を無条件で信じていた。だからこそ、いつも可奈美の言う事を聞いていたし、いつも後ろに付いて来ていて、無条件で信じ続けていた。

「……そうなんだ。だったら僕もそんな大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。」

そして、優も可奈美と同様に誓いを立てる。大切な友達のタギツヒメとミカとニキータとジョニー達全員を救ってくれる、大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになるため、

（……だったら、身体が弱くて男だから刀使になれない僕にできることは、可奈ねーちゃんの邪魔をする奴は全員倒しちゃえば良いんだ。）

そう思い、胸に刻んでいた。自分にできることはこんなことしか出来ないから、

（……だから、大好きな可奈ねーちゃんを護ることができれば、可奈ねーちゃんが強い刀使になれれば、みんなを救ってくれて、可奈ねーちゃんが喜んでくれる。それなら、何人も倒しても何人潰しても悪いことじゃない。）

可奈美が強い刀使になれば、みんなを救ってくれる。その目的を果たせるのなら、例え、夥しい流血と元々人だった肉塊を作ったとしても、それは悪いことじゃないと、罪ではないと結論付けていた。だからこそ、

（……みんな、力を貸してくれるよね？）

そして、優は語りかけ、

タギツヒメから、龍眼を引き継いだために、刀使相手でも戦えた。

ニキータから、楽しむことを教えてもらったために、笑うことができた。

ミカから、いつも慰めの言葉を言い続けてくれたために、辛いことにも耐えられた。

ジョニーから、銃とナイフの使い方を教えてもらったために、邪魔をする者を排除できるようになった。

優はそうなれたことが嬉しかった。いつか、ただひたすら進んで行けば、可奈美が辛い事も悲しいこともきっと笑って話す日へと導いてくれる。全ては大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになる、優はそう固く信じ続けていく。それ故に、可奈美を疑うこと、可奈美の邪魔をする敵を排除すること、それらを行うのが自分自身の存在意義であ

ると思い始める。例え、流血の道しか無くとも、それが優の覚悟であった。

だからこそ、優は荒魂であっても、刀使であっても、親衛隊であっても、ＳＴＴ隊員であっても、どこの誰であれ、邪魔をする者は排除する。例え、それで自分が死んだとしても、可奈美が強い刀使になって自分達を救ってくれるだけで充分だったから、可奈美が履行できる約束であるかも考えず、全く疑わず、優はただひたすら進んで行くのみであった……。

「……。」

この日、江麻学長は悩んでいた。

親友の息子衛藤　優が荒魂と人体の融合実験の被検体となっていたことに、いかにすべきか悩んでいた。

公表すれば、親友の忘れ形見の人生が狂ってしまう。

かといって、隠蔽すればスレイドという悪党を処罰することができなくなる。

「……どうして、こんなことに……。」

彼女は己の無力感を感じながら、そう呟くだけで精一杯だった。

そして、彼女は決断するしかなかった。

優が荒魂と人体の融合実験の犠牲者であることを隠すことを、……親友の忘れ形見が何事もなく平穏な人生を送ってほしいがために。

「美奈都……貴女は今の私を見たらどう思う?……」

そして、江麻は隠蔽しようとしている今の自分の姿を美奈都が見たらどう思うであろうかと。そんな自問自答している中、不意に恩田累からの着信があった。

『……もしもし、学長ですか?少しお話が……。』

その後、累から舞草という組織が存在すること、朱音から聞かされた二十年前の真実、紫が大荒魂であることを知り、舞草に協力することとなる。

僕の名前は衛藤　優と言います。

僕は大好きなカッコイイ刀使の可奈ねーちゃんの友達と共に、かまくら?か何処か忘れましたけど、御前試合という名前だったと思います。その場所へ向かっていました。

そして、可奈ねーちゃんは、順調に勝ち進んでいました。それを見て、可奈ねーちゃんが嬉しそうなのが、僕も嬉しかったです。

そのあとは、可奈ねーちゃんが二本（紫のこと。）に斬りかかった緑の服（姫和のこと。）を助けたから、大変なことになると分かってしまったので、僕も一緒に行くことにしました。

「これ以上付き纏われるのは迷惑だ、ここで斬り合うか、さもなくば……」

そう言って、緑の服は御刀を構えて威嚇していたのが気に食わなかったけど、

「ええと、ほら、あの、力が戻ったら、ちゃんと試合して欲しいから…うん、それだけ。」

僕のために強い刀使になろうとしている可奈ねーちゃんがそう言ったから、この緑の服を殺すことができなかった。

「…おい、何している、危ないから退け。」

「やらせない。」

だから僕は手を広げて遮ることしかできなかった。例え、この緑の服に斬られても、この緑の服が強い刀使となって、可奈ねーちゃんが倒してくれたら可奈ねーちゃんが強い刀使になる。だから、斬られても大丈夫だと思った。

でも、僕を斬ることもできなかった緑の服は何か常に偉そうだったけど、可奈ねーちゃんのために色々用意してくれたり、僕の服も考えてくれたり、チョコミントっていう美味しい物をくれたから悪い人じゃないかも知れない。……名前は姫和おねーちゃん、ちゃんと覚えておこう。

次の日には、荒魂が出てきたから、可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんが少し言い争っていた。

けど、何となく姫和おねーちゃんが悩んでいると思ったから、僕は思ったことを言ってみた。

「それと、病院で可奈ねーちゃんが言ってたんだ。刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟だって。それを聞いて僕は、強い刀使になれない僕は、僕を助けてくれた大好きでカッコイイお姉ちゃんの助

けになりたいと思ったんだ。僕と一緒で姫和おねーちゃんもそんなお母さんが大好きだから、刀使になったんだと思ったんだ。だから、僕は姫和おねーちゃんと可奈ねーちゃんのために頑張りたいんだ。」

僕は姫和おねーちゃんも可奈ねーちゃんと一緒で頑張っているから、応援したくなって、僕が思ったことを素直に伝えてみた。すると、姫和おねーちゃんはそれに応えて頑張ってくれた。それを見て、僕は姫和おねーちゃんも助けようと心に決めた。そうすれば、姫和おねーちゃんは可奈ねーちゃんと立ち会いしてくれて、強い刀使にしてくれる。そして、可奈ねーちゃんが僕達、いや僕も救ってくれる。だから、可奈ねーちゃんの親友の舞衣おねーちゃんに斬られたって大丈夫だよ？何で姫和おねーちゃんはそんなに慌てるんだろう？……よく分からない。いつか、可奈ねーちゃんが救ってくれるから腕の一本くらいどうということはないのに……。

その後は、累さんのお家に厄介になりました。

お世話になったから、可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんの僕を含めて三人で部屋の片付けとか、ごはんの用意をしました。それに、累さんが喜んでくれたのが僕は印象に残りました。

それから、累さんが話があるとかで私室に招かれると、パソコンで姫和おねーちゃんは誰かと連絡を取っているところに、誰かがこの部屋に窓から入って来るなり、可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんに刀を向ける奴が来る〝先〟が見えたから、僕はそいつを倒すために窓の前に立つ。すると、案の定うさぎみたいな奴（沙耶香のこと。）が現れた。……こいつは、可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんを傷付けようとした。それで、このうさぎを倒す理由は充分だった。……こいつは可奈ねーちゃんにとっても、姫和おねーちゃんにとっても邪魔にしかならないから要らない。このうさぎは動きがすばしっこいけど、単調だから倒し易い。

「駄目ッ!!優ちゃんッ!!」

けど、可奈ねーちゃんに止められたら仕方が無い、可奈ねーちゃん

の邪魔をしてはいけないし、嫌われたくないから。……でも今の内に殺しておいた方が良いと思うけどなぁ……、どうせ、後で邪魔しに来るんだし。

次の日には、でっかい（エレンのこと。）のと、ちっこいの（薫のこと。）が邪魔しに来た。

昨日のねずみと同じだから倒そうと思ったけど、可奈ねーちゃんでも充分勝てる〝先〟が見えたから僕は可奈ねーちゃん達に任せることにした。……強い刀使になりたい可奈ねーちゃんの邪魔はしたくないから。……けど、可奈ねーちゃんの足に噛み付く邪魔な〝物（ねねのこと。）〟はなんかムカついたから踏んづけた。

そして夜になると、またでっかいのとちっこいのと邪魔な物が現れた。

言っていることがよく分からないから、どうしようかと思って可奈ねーちゃんに聞いてみた。

「可奈ねーちゃん、アレは味方ってこと？」

可奈ねーちゃんは、「そうだよ。」と答えてくれたから、味方なのだろう。

でっかいのじゃなくてエレンおねーちゃん、ちっこいのじゃなくて薫おねーちゃん、それと邪魔物じゃなくてねねちゃん。……覚えておこう。

その日の夜はすこぶる最悪だった。

何が最悪だったかと問われれば、二本のおまけの人達（真希と寿々花のこと。）に僕を安全な所へ連れていくとか、勝手なことばかり言ってきたことだ。

「寿々花、子供の言うことだ気にするな。……案ずることはない、君を安全な場所に――――。」

……うっさいなぁ、なんかゴチャゴチャと勝手なことばかり言って

いるけど、僕を救ってくれるのは可奈ねーちゃんじゃなければいけないから、おまけが勝手に決めるなよ。……だから、可奈ねーちゃんの邪魔をするおまえらなんか要らない。

でもまた同じこと言ってきたら、……〝僕〟が〝僕〟で、〝可奈ねーちゃん〟が〝可奈ねーちゃん〟でなくなっちゃうから、ちゃんと片付けないと……。

「ねえ、優ちゃん聞いてくれる？」

その次の日の朝、可奈ねーちゃんが話しかけてくれた。こういう時って、大事なお話しだからちゃんと聞いておかないと。

「……あんまり、人を殺しちゃうのはダメだよ。お姉ちゃん悲しむから。約束、約束だよ。」

理由は良く分からないけど、人を殺すのは良くないことらしい。ジョニーくんに人殺しをさせていた大人とか、ニキータちゃんやヒメちゃん、ミカさんのことをいいように使っていた大人達とかは殺しちゃいけないの？とか、荒魂とそんな人達はどう違うのとか、おねーちゃん達は人と同じで悪い奴も良い子もいる荒魂を斬りまくっているのに何で人は殺しちゃいけないの？とか、訊きたかったことは沢山有ったけど、可奈ねーちゃんを疑うのは〝僕〟ではないから疑うことを止めて、

「んっ、分かった。」

とだけ返事をした。

まっ、いいか。人を殺さない。つまり、殺さなければ良いだけだから手足を潰せば動けなくなるし、あの邪魔をして来た二本のおまけの人達はなんか荒魂の気配がしたから多分、姫和おねーちゃんが言っていた荒魂化した人？だと思う。そういうのは人じゃないらしいから、おまけの人達は何匹でも潰して良いか。それ以外は手足を潰せばいい訳だし……。

……知らない間にエレンおねーちゃんが捕まっちゃったらしい。
ねねちゃんも悲しそうだから、必ず助けないとね。
それと、刀使の制服を着ておまけの人達を殺す……じゃなくて、潰しに行くことになった。……何だか、刀使の制服を着てると荒魂を倒しに行く刀使になったみたい。ジョニーくんがお面とか被ったり、ドレス着たり、妖精の羽とか着けて戦うと何も感じないし、気分が良いって言っていたけど、本当だったね。
……それを考えると、楽しくなってきた。だから、何匹潰しても何にも思わないで戦える。

そして、おまけの人達がまた二匹、いや三匹も増えた。
いいかげん鬱陶しい。……どうしようかヒメちゃん達に聞いてみたら、
『敵の言うことなんか信じんな。さっさと倒して帰ろうぜ。』
『そうよ、そんなこといって、騙す奴が多いんだから、気を付けないとダメよ！』
と悪い大人の甘い言葉に騙されて、散々利用されたジョニーくんとミカさんがそう教えてくれた。
『この人達、甘そうな人だから不意を突けば良いんじゃないかな？』
『よし、なら優。隠世から武器を取って不意を突けばよいぞ。』
ニキータちゃんはそういうのに詳しいなぁ、物乞いをやらされていた頃に悪い大人達から物を恵んでくれそうな人を教えてもらったんだっけ。
……なら、ヒメちゃんが言っていた通り、ポケットに手を入れて、そこから隠世に入れた拳銃を取って、撃てば良いか。
じゃあ、鬱陶しいから……そろそろ消えろ。
あっ、仕留められなかった……。ゴメン、可奈ねーちゃん。役に立てなくて。
でも、エレンおねーちゃんを助けてあげれなかったら可奈ねーちゃんは悲しむ筈だからそっちを優先する。

そして僕はジョニーくんが言っていた通りに、黒い服を着た人達（ＳＴＴ隊員のこと。）が可奈ねーちゃんの所に行かないように、幹線道路の上に陣取ることにした。そうすれば、おまけの人達と黒い服を着た人達を分断することができるから、可奈ねーちゃんはおまけの人達を相手にするから、可奈ねーちゃんは強い刀使に近付けるかな？夢が実現できるかな？

今日、僕は色んなことを教えてもらって、教わった。

「おまえ、人を痛めつけてそんなに楽しいか!?おい!!」

言っている意味が分からなかった。

殺していないから、別に悪いことじゃないでしょ。何言っているんだろう？

……とりあえず、重たいから〝コレ〟を退かそう。さっき使った拳銃で〝コレ〟の指を撃つか、痛くて呻く筈だから、その間に抜け出して、殴って気絶させよう。

……でも、人を痛めつけて楽しいって、どういうことだろう。

……人を痛めつけて楽しい、……痛める、……傷つける。……楽しい、……嬉しい。……何が嬉しいんだろう？

そんなことを考えていたら、ふと可奈ねーちゃんのことを思い出しちゃった。

――良く頑張ったね。――

――偉いね。――

……ああ、こいつら倒したら可奈ねーちゃんは喜んでくれる。だから僕は、〝人を痛めつけて楽しむ〟ことと〝大切な人のために戦う〟ことを教えてくれたこの他人に感謝しよう。

ありがとう、大切なことを教えてくれて。……やっと、可奈ねーちゃんが喜んでくれるかも。それを考えると嬉しくなって、鼻唄歌いたくなってきた。

……これが、〝楽しい〟ってことなんだ。

今日も役に立てなかった……。
笑いながらこっち来た変な女(ソフィアのこと。)が邪魔過ぎる。お陰で苦労したし、そのうえ可奈ねーちゃん達を怪我させてしまった……。
……やっぱり、殺した方が良いんじゃないかな?ああ、いけない。可奈ねーちゃんを疑ってはいけない。可奈ねーちゃんはきっと意味があるから、〝人を殺してはいけない。〟って言ったんだ。だから、僕はそれを守らなきゃ……。可奈ねーちゃんの約束すら守れない弱い僕が悪いんだから。
……許さない。おまけ(夜見のこと。)の一匹が可奈ねーちゃんの首を絞めたから、それだけでコイツを殺す理由としては充分。荒魂化した人は人じゃないから、殺しても何も問題無い。
でも、可奈ねーちゃんがコイツを殺してはいけないって言ってきたから、僕は殺さないようにするため、身体に御刀を自分に刺して、コイツを倒しに行った。
僕は肉の塊となったシェパード?おじさんを持つとおまけの御刀を防ぐ盾にして、おまけが御刀を抜くのに一苦労している間に腕を折って御刀を持たせなくさせると、剣術は足腰が大事だと可奈ねーちゃんが言っていたから足を折ってやった。
でも、しぶといなぁ、まだコイツ殴りかかってくる。
時間が無いから、決着をつけるか……。
……殺さないように、……殺さないように、……殺さないように、……殺さないように。
あっ、殺しちゃったかな?……ああ良かった。可奈ねーちゃんとの約束を守らなきゃいけないから、死んでなくて良かった。
じゃあ、もうコイツとは関係ないからいいや。
……やっぱり、みんな変な目で僕を見る。何でだろう?
パーティーが終わって、潜水艦から覗ける海の中を〝みんな〟で見

ていた。
　ジョニーくんもミカさんもニキータちゃんも、あとヒメちゃんも初めて見るのか嬉しそうな声をしていた。
　見たことない魚とか一杯居るのが楽しいから、僕もみんなで見るのが楽しかった。
「どうした?そんなところで。」
　そんなとき、姫和おねーちゃんが話しかけてくれた。
　……でも、パーティーのとき何で辛そうだったんだろう。
『荒魂化した人はもはや人ではない、』
　ああ、そうか。姫和おねーちゃんが言っていた通りだ。
　僕は、僕は荒魂なんだ。……だから、みんな変な目で見ていたんだ。
可奈ねーちゃんもそんな目で見るときがある……。だから僕は、姫和おねーちゃんが立派な刀使になれるように、前へ進めるように、
「姫和おねーちゃんは凄いよ、色んなことを知っているし、可奈ねーちゃんに決着を挑まれるくらいだもん。それに、お母さんのために今まで一人で頑張って来たんだから、姫和おねーちゃんの言っている事は何一つ間違っていないよ。……だから、姫和おねーちゃんのことを何も知らない癖に悪く言う奴と邪魔する奴は一匹残らず僕がやっつけてあげる。だから、僕は可奈ねーちゃんと同じくらい姫和おねーちゃんのことが大好きだし、会えて嬉しかったし、少しでも助けになりたい。」
　僕は思ったことを素直に言う。……本当に僕は荒魂になったかも知れないけど、悔いはない。
　荒魂になっても、ヒメちゃん、ミカさん、ジョニーくん、ニキータちゃんが、そして可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんや薫おねーちゃん達が居る。……大切な友達が居るなら、大切な人に出会えたなら、何も怖くない。それだけで、僕は、……僕はみんなに会えたならそう悪くない人生だと本気で思えるよ。

　またうさぎに会った。

でも、何時の間にか可奈ねーちゃんと仲良くなったらしい……。
……まあいいか、可奈ねーちゃんがそれで良いなら何も問題ない。
宜しくね、沙耶香おねーちゃん。……名前は覚えておこう。
それと話していて分かったけど、沙耶香おねーちゃんも大変なんだな。……何をすれば良いのか分からないんだ。だったら、僕は〝大切な人のために戦う〟ということを言おう、そうすれば、沙耶香おねーちゃんも〝強い刀使〟になってくれると思うから。
元気が出るなら、僕は背中から押す手のように、僕の考えを、声を響かせて、〝強い刀使〟になって貰うよう僕もがんばろう。
……大切な人、尊敬できる人が増えた。探してたものは近くにあって、そして一杯有った。……本当に、ミカさんの言っていた通りだ、みんなに会えたならそう悪くない人生だと本気で思えるよ。

そして祭りの日、僕は姫和おねーちゃんが一つの太刀を使って、おっきい荒魂を倒そうとしていたことを事前にヒメちゃんから教えてもらった。
……一つの太刀を使うと、姫和おねーちゃんが消えちゃう。
……そんなの嫌だ。大切な人が消えるくらいなら、僕がそのおっきい荒魂を入れればいいんだ。そうすれば、僕が強い荒魂になれば可奈ねーちゃんか姫和おねーちゃん、もしくは可奈ねーちゃんの友達が僕を殺せば強い刀使になって、可奈ねーちゃんが強い刀使になれば僕を救ってくれる。……それが、僕の全て。……それしかできない僕の全て。

祭りの夜、僕の大切な人達を傷つけようとする人達が一杯来た。
……どうしよっかな、可奈ねーちゃんとの約束だから、人は殺せない。困ったな、先に殺しておかないとシェパード、マイケルだったかな?みたいに可奈ねーちゃん達が殺されちゃう。役に立てない。大

切な物、想い、人、全てを守ることができない。
「荒魂が人を荒魂呼ばわりするか！」
……ああ、そうかあれは荒魂だったんだ。気が付かなかった。
やっぱり、姫和おねーちゃんは凄いや。……だったら、殺せる。大切な物を全て守れる。だから、全員殺そう。可奈ねーちゃんは喜んでくれるかな？
「おい、止まれっ!!」
「待て待てっ！あれは男の子だっ!!荒魂になったのは刀使だ!!」
だから、死んでね。

そうして、全てが終わった。
この人達、良い人だな。こんなに一杯武器をくれる。色んな武器が手に入った。……けど、沙耶香おねーちゃんが、
「何で!?何でこんなことするの!!?」
沙耶香おねーちゃんが騒いで来た。……どうしたんだろう？僕は荒魂を倒しただけで、可奈ねーちゃん達をバカにしたのが許せないのもそうだけど、……僕にしかできないことだと言ったら、
「……でも、そんなのは間違っている。もう戦っちゃダメ。」
そんなことを言ってきた。
何なのそれ？言ってる意味が分からない。僕は可奈ねーちゃんを強い刀使にすれば、僕は、僕達は救われるから頑張っているのに、何それ？
それに、沙耶香おねーちゃん達は散々荒魂を殺しているのに、どうして人は殺してはいけないの？
もういいや、可奈ねーちゃん、コイツ許せない。消せば何もかも無くなる。……それでいいや、コイツが居なくなれば、僕達は救われる。
……僕達は救われて、可奈ねーちゃんは夢だった強い刀使になって喜んでくれる。……それが、幸せなんだ。それを邪魔(戦闘)するな。
「いや、優、こいつらは荒魂だ。沙耶香はこういうことは初めてだから、気が動転していただけだ。」

そうだったんだ。知らなくてゴメンね。沙耶香おねーちゃん。

……けど、可奈ねーちゃんは辛そうだった。何がいけなかったんだろう？

……そうだ！記念日にしよう。たくさん、たっくさん邪魔な奴等を一人で排除できた、とっておきの記念日、……そうすれば可奈ねーちゃんは喜んでくれる。それまで助けられないけど、待ってて、ゴメンね。

優は、コンテナの中で思い出していました。

友達のお陰で、荒魂と人はそんなに変わらないこと――――。

そして、この世界は子供すらも平気で利用する人達が居ること――――。

そんな世界から、可奈美がいつも自分を守ってくれたこと――――。

そして、可奈美がタギツヒメとミカ、ジョニー、ニキータ、そして姫和と薫達、大切な〝思い出〟と〝宝物〟を引き合わせてくれたこと――――。

それらをつぶさに思い出し、大切な〝思い出〟と〝宝物〟全てを守れるなら、荒魂となっても何も思わない。何も感じない。

例え自分が荒魂扱いされ、斬られたとしても、何時か、可奈美が強い刀使になり、自分とタギツヒメ、ミカ、ジョニー、ニキータを救って、姫和とも笑って話す未来を見ていたからこそ、可奈美を信じることができました。

そして、優もマイケルとシェパード、ロークの様に大切な〝宝物〟と〝思い出〟を失いたくないので、折神家本邸へと向かいました。例えこの身が果てようとも――――。

決戦

S装備のコンテナが射出され、可奈美達が折神家本邸へ突入した同時刻――――。

刀剣類管理局は騒然としていた。

「おいっ！何がどうなっている!!」

「それよりもさっきのS装備のコンテナは何処に着地したんだっ!?」

先程、鎌倉一帯が停電した影響で、作戦本部は一時的に機能が麻痺してしまった。そのため、S装備のコンテナが何処に着地したか未だ不明のままであった。

「報告！美濃関、平城の管轄区、並びに付近にて荒魂が多数現れたため、救援を求めると……！」

「そんなものは今は後回しにしろっ！賊を討伐するのを優先だっ!!」

美濃関と平城の帯刀権を剥奪し、武装解除させてしまったため、荒魂討伐ができる刀使が居なかったのにである。いかに作戦本部が混乱していたか分かる。しかし、彼等は気付いていない。この報告は折神家の警備の数を減らすための嘘であることに……。

「直ぐに美濃関の地区は鎌府に、平城の地区は綾小路に、付近の荒魂は警備の刀使に対応させて下さい。賊は我々親衛隊のみで対処します。」

折神家親衛隊第三席皐月　夜見が作戦本部にそう指示していた。

「……しかし、賊はS装備のコンテナの数から、恐らく6名ほど侵入しました。鎌府は美濃関に向かわせず、こちらに向かわせるべきでは？」

作戦本部室の管制指揮官が今からでも鎌府の刀使を何名か応援を要請すべきではと具申していた。

「……紫様からの指示です。今この状況で荒魂を放置してしまえば刀剣類管理局の信頼は地に落ちるでしょう。……ですので、賊は我々だけで対処します。」

刀剣類管理局の局長からの指示と言われ、「分かりました。」と言い

従う管制指揮官。……しかし、本当の狙いは優の中にいるタギツヒメを吸収する処を誰にも見られたくないからなのだが、それには誰も気付かなかった。

夜の鎌倉は、もとい折神家本邸は不気味なほど静寂に包まれ、月の光だけが頼りだった。

そんな中、可奈美達六名はただひたすらに進む。一つの目標に向かって。……折神　紫を倒すことを胸に誓って、ただひたすら無言で祭壇へと向かって行った。

そうして、姫和と可奈美が最初に出会った門の前まで進み、本来ならば昔日を思い出し感慨に耽っていたであろう。しかし、可奈美達五人が纏っているS装備（優は、刀使専用の装備を纏っても効果があるかどうか分からないので辞退している。）の稼動限界時間を考慮してか、彼女達は何も言わず、薫も誰かに頼まれた訳でもなく、猿叫と共に祢々切丸で門を破壊する。しかし、そこで――――。

「…折神紫親衛隊第四席、燕　結芽。」

白州の上で、結芽が名乗りを上げて立ち塞がっていた。笑顔もなく、誰も通さないという意志が見て取れるほどに……。

「親衛隊っ、……一つ聞かせろっ！穢れたノロを注入させた折神　紫を、そのノロの力を頼ってでも守る意味がどこにあるっ！」

姫和は、荒魂を注入された年下の子供に何かしら想うところがあるのか、説得しようとしていた。

「！……何も知らないくせに、……でもおねーさん達ひとつ間違ってる！私は、私は戦いに荒魂なんて1ミリも使ってないもん、これはぜーんぶ私の実力なのっ!!」

しかし、結芽にとって姫和の説得は侮辱以外の何物でもなかった。そのため、結芽は姫和の言葉を拒絶していた。

（……私は、時間のある内におねーさん達を全員倒さなきゃいけない、……だから！）

そして、結芽も時間が限られているため、親衛隊という場所を守るため、結芽という人が居たことを一人でも憶えてもらうために、結芽は先ずは舞衣を狙おうとするが、

「うわっ!!」

優が短機関銃のＭＰ５でこちらを狙っていることに気づき、慌てて写シを張り、何とか銃弾を受けずに済むが、小さい子供が何食わぬ顔で発砲しつつこちらに近付いてきたことに驚愕する。

「なっ……!」

そして、優は空となった弾倉を抜いて結芽に向けて投げ、注意をそらしている隙に銃把で殴り掛かり、鍔迫り合いに持ち込むと、結芽を力技で可奈美達から離していった。

「……こいつは任せて、僕がやる。」

「っ!」

どうやら、優は結芽を相手にする気らしい。それを知った可奈美は止めようとするが、

「行くぞ、可奈美!」

可奈美を無理矢理引っ張って祭殿へと走る姫和。それに驚き、思わず抗議の声を上げる可奈美。

「ちょっ、ちょっと姫和ちゃんっ!?優ちゃんを一人にっ!」

「……いいからっ!!」

しかし、舞衣に大きな声で遮られるかのように言われ、思わず押し黙る可奈美。

「可奈美、大丈夫だ!あの親衛隊が言っていただろう?〝戦いに荒魂なんて1ミリも使ってない。〟と、ならあいつは〝人〟だ!それに、優はあいつに負けない。」

姫和は結芽のことを先程の問答でノロによる強化がされていないただの〝人〟であると納得していた。それならば、優は一度親衛隊二人を同時に相手取ったことがあるため、負けはしないと思っていた。

「私達の誰でもあの親衛隊を一人で抑えるのは、二人でもどうか……。私達には……時間がないから、私達の最大戦力は間違いなく優くん、でも優くん一人だと大荒魂の相手は無理だから、龍眼に対抗するには

多人数を割かなければならない。ならツーマンセルに長けていて、実力もこの中では高い可奈美ちゃんと姫和ちゃんだけでも大荒魂の元へ届けないといけない……、優くんがそれを言ってきたから、だからっ!!」

舞衣は、事前に聞いていた龍眼対策のために、一人でも多くの戦力を、S装備の稼動時間を割かせず、大荒魂の元へ向かうことが最善だと判断し、優単独で結芽の相手をさせることにしたことを語る。

「……ごめん、舞衣ちゃん。」

舞衣が苦渋の末に判断したことを理解した可奈美もそれに同意するしかなかった。姫和の〝結芽が荒魂を1ミリも使っていない人〟であるから、〝人〟は殺さないと約束してくれた優が何もしないことを信じて、可奈美は先に進むことを決断した。そして、

「……ねね、頼んだ。」

薫は、可奈美を少しでも落ち着かせるため、ねねに優のお目付け役を任じていた。

「……薫ちゃん……。」

「気にすんな、ねねもあいつのこと気に入っているらしいからな……、だから、早く終わらせようぜ。」

薫は、ぶっきらぼうにそう答えていた。

「……ありがとう、皆。」

可奈美は、誰にも聞こえないぐらいの小さな声で、そう呟いていた。

結芽と優は、既に鍔迫り合いの状態から、互いに向かい合って対峙している状態へとなっていた。

「なんで余計な真似するの!?」

結芽は邪魔をしてきた優に抗議する。

「……敵だから。そんでもって、沙耶香おねーちゃんと舞衣おねーちゃんと、そして神社に居た人達の仇だから。」

そして優もいつも通りの無表情で、バッサリと結芽の抗議を真っ向

から叩き斬っていた。
「だから何!?そんなの弱いのが悪いだけでしょ！知ってるよ、結芽知ってる。弱いから群れているんだ、だからあんたは荒魂に頼らなきゃ誰にも勝てない。だからあんたは此処に置いてかれたんだっ!!」
結芽は思いつく限り、〝自身の体験〟を元に、優を罵倒していた。
「あのさぁ、……一つ言っていい？」
しかし、優は何となく、それが結芽の罵倒になると理解し、
「そんなに言うほど強くないおまえが言っても、何にも思わないんだけど？」
結芽に返していた。尚、優の強いか弱いかの基準は可奈美である。そのため、結芽を見て最終的に可奈美よりも強くならないと龍眼で分かってしまったため、優は結芽のことを自分が強いと勘違いしていて、親衛隊の中で群れているのに群れている人は弱いと言ったり、荒魂の気配がするのに荒魂に頼っていないと言ったり、舞衣や沙耶香、舞草に居た刀使の人達を侮辱したことに優は結芽に憤りを感じていた。
「……はぁっ!?!!」
しかし、結芽もその言われように憤慨した。真希や寿々花、夜見が在籍している親衛隊の中でもトップの実力を持つ自分がそんなに強くない？結芽はそんな訳が無いと強く思った。認めてしまえば、真希や寿々花、夜見が弱いと認めることになるため、ただの子供の強がりであると思っていた。
「……もういいよっ！すぐに片付けて追いかけるんだからっ!!」
結芽はそう言い放つと共に疾走し、優を御刀ニッカリ青江で気絶させようとするが、いとも容易く攻撃を流され、反撃されてしまったことに驚愕する。
「んなっ!?」
結芽は、荒魂の気配がするので多少は身体能力が上がっているだろうとは思っていたが、こうまで容易く躱わされるものなのかと、疑問に思ってしまった。彼女は知る由も無いが、優は龍眼を使って先を読み、それに対応していただけに過ぎなかった。

「……何かコイツ鬱陶しい。」
そして、優は結芽のことをただの荒魂と化した人で、自分の〝宝物〟となった舞衣や沙耶香のことを侮辱し、自分のことを強いと勘違いしている鬱陶しい〝邪魔物〟としてしか見ていなかった。

そうして、可奈美達は五人となり、祭殿へと向かう道中。
「親衛隊第三席皐月　夜見……。」
夜見がこれ以上は通さないと言わんばかりに立ちはだかっていたため、可奈美達五人は立ち止まってしまう。そして、
「やはり帰ってきたわね沙耶香、……どう?この世に貴女の望んだ物が有った?それとも貴女が望んで得た物は何の価値も無いことに気付いて、捨てて来たのかしら?」
「……高津……学長……。」
雪那が可奈美達、いや舞衣と沙耶香の前に姿を現した。その姿を見た舞衣は緊張しているのかゴクリと咽を鳴らしていた。
「まあ、どちらにしろ良いわ。貴女達二人がそいつらを捕らえてくれるのなら、今までのことは水に流してあげるけど、どうする?」
雪那は、舞衣と沙耶香が可奈美達を捕らえれば、今までの罪は免除すると言ってきた。それに舞衣は雪那を真正面から見据え、
「そんなつもりで戦いに来たんじゃありませんっ!!あなただってもう分かっている筈です。折神　紫は忠誠を尽くすべき人ではないとっ!!」
「だからどうだと言うのだ。……あの女は、犠牲にした者を見捨て、私に非道なことをさせて労いの言葉すらなかったあの女に……。」
このときの雪那の小さな独白のような呟きは、誰にも聞こえなかった。
「それよりも、お前と沙耶香が信じてきた理想はどうなった?ただ現実という名の暴力に屈しているではないか?……どこに居ようと理想と現実は相容れぬ物だ。一つになることはない。現に優しさや愛

情、友情といった物を求め、私の元を去ったお前達は今は何を抱いて此処に来た？復讐、怨嗟、そんなものを抱いて此処に来たのではないのか？」

「だとしても、沙耶香ちゃんも可奈美ちゃん達も渡しません。そして、私もあなたの元に戻る気はありません！……あなただって、本来なら此処に居るべき人じゃないはずです。」

「もし此処を離れて何が変わる？犠牲は犠牲として終わるだけだ。……お前が私の前に現れて、沙耶香を連れて行ったときこうなる運命だったのだろうな……。あの二人だけは生かして捕らえろ。」

雪那と舞衣、どちらも一歩も引かずに互いの主張をしていた。そして、埒が明かないと判断した雪那は夜見に沙耶香と舞衣のみ捕えろと命じる。

「うわっ!?」

突如、横から濁流のような荒魂の群れを受けてしまう薫は、可奈美達と離れてしまう。

「薫ちゃんっ！」

「くそっ……囲まれている！」

可奈美は薫の身を案じる声を上げるものの、冷静に他の皆と共に方円の陣形を組み、突如現れた夜見の荒魂の群れを対処していた。

「……左前方！一気に突っ込んで!!」

舞衣は司令塔として、皆を荒魂の群れが無い所へ誘導し、夜見の対処をするために一人残ろうとするがっ……。

「きえええええっ!!」

突然、猿叫と共に大上段からの振り下ろしで、夜見の荒魂の群れをまとめて排除し、祭壇への道を作っていた。そして、薫は、

「ここは任せて先に行け！よし！今度は言えた言えた。…とりあえず我が生涯に悔いなし！」

「薫ちゃん！」

軽口を言ってここに留まり、夜見を一人で倒すつもりでいた。

「いいから行け！…こいつには色々と借りがあるからな。それに、一人でも多く行かなきゃなんねーだろ！」

笑顔で可奈美達にそう告げる薫。
「……早く来てね！先に行って待ってるから!!」
「おう、直ぐ行く!!」
可奈美は薫にそう告げると、薫もそう返事をすると、可奈美達は紫の元へと向かって行った。
「……貴女一人でですか。」
「ああ、そうだよ。オメェらなんかなぁ、沙耶香や舞衣が相手するより俺一人で充分だっ!!」
薫はそう言って、夜見を倒すと宣言していた。
「……すみませんが、今回は前のようには行きません。いや、負ける訳には……。」
夜見も、結芽のこと、真希と寿々花のこと、……そして、雪那のこと。それらを背負って戦う覚悟を決め、このときばかりは勝利を得んとしていた。

薫の言いつけ通り、優が人を殺さないように見守るねね。ねねの視線の先には、鉄の棒を持った優とニッカリ青江を持つ結芽が数回打ち合っており、互いに一歩も引かなかった。
「……くそ！時間、無いのに…！」
そして、結芽は苛立っていた。
自分よりも年下で、刀使ですらない男、そんな子供に一本も取れず、時間だけが過ぎていくことに……。
理由は、結芽は初めて自分よりも背が低い子供と戦っていること（相手の懐に飛び込んで突きを放つ得意技等が使えなかった。）と、棒を使う相手とは初めて戦うため、荒魂や刀使を相手にするのとは勝手が違ったからだが、心身共に余裕のなかった結芽はそれに気付けなかった。
「可奈ねーちゃんが心配だから、終わりにしよう。」
「…ナメんなぁっ！」

優はそう言うと、また結芽に鍔迫り合いに持ち込んでいた。
「同じ手なんか……！」
しかし、今回は違った。何故なら結芽に、強烈な光と音が襲いかかったからである。
「何、これ……？」
そのため、結芽は数秒ほど視覚と聴覚を失うが、直ぐにニッカリ青江を振って、近付けさせないようにしていた。しかし、
「うぐっ……！」
何かが足に深く刺さった感触がした。結芽は数秒経って視覚と聴覚が機能し始めると、何が刺さったのか理解した。
（…対刀使用の矢!?）
そう、優は鍔迫り合いと同時にＳＴＴ隊員の死体から奪ったスタングレネードで目眩ましをし、対刀使用の矢を投げて結芽の足を動き辛くさせていた。
「私は認めないっ!!こんな戦い！……ゲホッ、ゲホッ。」
結芽は強い自分を認めてもらいたいが為にノロの力に頼らず、刀使として、正々堂々とした戦いを求めていたことを告白していた。しかし、心身共に追い詰められていたためか、遂に左胸を押さえて血を吐いてしまう。それを見た優は左胸が弱点だと判断し、更に追い詰めるように、何度も鉄の棒で左胸を狙って殴り掛かっていた。
「私は……、もっともっと戦わないと！」
結芽は叫んでいた。例え、左肩の鎖骨が鉄の棒で叩かれ、砕ける感触がしても……。
「でないと、私のすごいとこ、見せられないっ!!」
結芽は叫んでいた。例え、左胸を鉄の棒で強く叩かれ、吹き飛ばされても……。
「……負ける訳には……。ゲホッ、ゲホッ。」
結芽は立ち上がっていた。例え、血を吐いても、足に矢が刺さったまま写シが解けて、血を流し歩きづらくとも、戦おうと、今の受け入れ難い状況に抗おうしていた。
「……あのさぁ。」

しかし、優は結芽の痛々しい姿を見ているうえで答える。
「ごちゃごちゃとうるさいんだけど？」
ただ何も動じず、ただ何も抱かず、ただ冷酷に言い放っていた。そして、結芽は背筋が凍る思いをし、気付いてしまった……。
目の前に居る子供は、自分のことを〝人〟として見ていないこと。
（違う……、）
目の前に居る子供は、自分が欲している〝勝利〟や〝名誉〟を何一つとして求めていないこと。
（……今まで色んな人と出会った。）
目の前に居る子供は、到底理解出来ない存在であることに。
（……けど、こいつはもう、人間じゃない！）
そして、目の前に居る子供は、自分が許容できない化け物だと思ってしまった。
「このぉ、……化け物っ!!」
結芽は、優のことを人間ではない化け物として見ることしかできなかった。いや、見なければならなかった。
結芽自身が言っていた〝強い刀使〟のというのが、目の前に居る子供に当て嵌まっているような気がしてしまったから……。
目の前に居る敵を何の感情も無く、ただひたすら名誉も賞賛も無く作業のように殺し、残虐な手段も選ばない子供のようになるような気がしたから……。
そして、自らが求めた〝強い刀使〟になろうとすれば、目の前に居る残虐な子供みたいになるぞと、その子供に言われている様な気がした……。
だが、そんな風になってしまったら、果たして自分は誰かに憶えてもらえるだろうか？気味悪がられるだけでは無いのか？それが事実だと、今の結芽には到底受け入れることが出来なかった。それを認めてしまえば、自分は目の前に居る子供の様になるために頑張っていたことになるから。
だからこそ、結芽は優に打ち勝ち、自分が正しいと証明しなければならない。だからこそ、再度写シを張り、がむしゃらにニッカリ青江

を振り回していた。しかし、優は冷静に結芽の攻撃を見切ると、鉄の棒を捨てて注意をそらし、ニッカリ青江の柄を掴み、結芽の足を踏んで動きを抑え、結芽の脇腹に何度も何度も対刀使用の矢を刺していた。

「…ぐっ!…ゲホッ!……このぉっ!!」

写シのお陰で死にはしなかったが、何度も腹に刺され、何度も腹が焼けるような鈍い痛みをする思いは精神的に辛く、結芽は集中力を途切れさせないように必死であった。

「…こんのぉっーーーー!!」

結芽は悲痛な叫びを上げながら、優を蹴り飛ばして離すことに成功する。しかし、優は蹴り飛ばされると同時に対刀使用の矢を投げて、結芽の左胸に刺していた。

「あぐぅあっ…!」

結芽は悔しかった。

(こんなのに……私がっ……!)

こんな手を使う化け物に勝てないことに……。しかし――。

「ね……ね……ねね……。」

突如、ねねが優の目の前で両手を広げて立ちはだかり、身体を張って止めようとしていた。これ以上、手を汚して欲しくないから……。

「?……ねねちゃん、何しているの?遊んでるの?」

だが、優には理解し難い行動であった。ねねが何故敵を庇うのか?何故自分の邪魔をするのか?理解できなかった。

「……ねえ、退いて?危ないよ?」

優はやさしい声音で、笑顔でねねに結芽を殺せないから退くように言う。

「……退かないと、困る。」

しかしねねも、結芽もこの優という子供を荒魂よりも末恐ろしい化け物か何かの様に思えてならなかった。

(……どいつもこいつも、邪魔ばかりっ!!)

多分、この子供は本当に退かなかったら、ねねですら何事も無く手に掛けるであろうと結芽は思った。刀使として正々堂々と戦う信念

を持っていたら、この優という〝鬼〟のような子供には勝てないと判断し、せめて真希、寿々花だけでも救えたらと思い、ポケットの中にある物を使うことを決意する。

「夜見、奴は薬丸自顕流を使う。……だが、あの長大な得物で連続で攻撃することは難しい筈。初撃を回避して、間合いを詰めれば勝機は有る。」

雪那の説明を聞いた夜見は頷くと先ず、自らの腕を御刀で傷付け、大量の荒魂を放出、夜見と薫の間に放出した荒魂を壁のようにして、薫を押し潰すかのようにゆっくりと移動させていた。

「……またそれかよ。一瞬で全部ぶっ潰す！」

薫は夜見が造った荒魂の壁を大上段からの振り下ろしで荒魂の壁を一刀両断に斬っていた。

「居ない!?」

しかし、荒魂の壁を両断したその向こう側に夜見の姿は無かった。

（となると、あの荒魂の壁の狙いは囮。……なら、間合いを詰めて来る筈っ!!）

薫は夜見の狙いが荒魂の壁でこちらの視界を遮っている内に間合いを詰め、こちらが不利となる接近戦に持ち込もうとしていると直ぐに判断。薫は周りを見て夜見の姿を探すと、左から回り込むように近付いて来た夜見を発見。

既に振り下ろし、夜見がかなり近くまで来ているため、再度同じ攻撃ができない状態であった。

（接近戦に持ち込めば勝てると思ったか、……だが今のオレはＳ装備がある！）

すると、薫は右手で祢々切丸を持ったまま、

「ツラァ!!」

Ｓ装備と八幡力の力を加えた左ストレートで夜見を吹き飛ばそうとする。そして間合いを空けて、祢々切丸でもう一撃加えようとするが、

――――夜見は左腕一本で難なく薫の左ストレートを止めていた。

「なっ!?」

薫は驚愕する。Ｓ装備と八幡力の力を加えた左ストレートを難な

く左腕一本で止めたこともそうだが、何よりも夜見が既に右目から荒魂の目が有る角を生やしていたことに途轍もない危機を感じていた。

（……やべぇ、こんな状態のコイツにここまで近付かれたら……！）

そして、薫は気付いた。荒魂の壁と左から回り込むように接近してきた本当の狙いは、ノロのアンプルで強化したことに薫に気付かせることなく難なく近付き、２ｍを超える大太刀が不利となるように間合いを詰めるためであった。つまり、荒魂の壁を造り、そちらに注意を向けている隙に夜見は迅移で右に移動し、荒魂の目がある角を薫の目から隠すために、薫から見て左から回り込むように接近していた。

「……今回ばかりは前のようには行きません。いえ、負ける訳には……!!」

夜見は自分が持つ全てを賭けて、薫に勝利せんとしていた。

「ぐっ……！」

そして、薫が動揺している隙に一撃を加え、薫の写シを剥がしていた。

「にゃろっ!!」

しかし、薫は諦めず、祢々切丸を横薙ぎに斬って、夜見との間合いをどうにか空け、仕切り直すことに成功していた。

「……先ずは、一本。」

（……くそっ、写シを一回斬られた。）

夜見に写シを一度斬られたことを言われ、危機感を募らせていく薫。……既に夜見は角を生やしている状態となっており、そのうえ写シを一回斬られて、使用回数は減らされている。あの状態の夜見を相手に真正面で打ち合えるかどうか、そんなことを考えていると、

「……ふむ、私を狙って来ないところを見ると、どうやら人は斬れないようだ。私を狙わせて、夜見がその隙を突いて攻撃する積もりだったが、……不要だったようだ。夜見、私のことは気にするな。」

雪那は薫を精神的に追い詰めるため、心が読まれているように思わせるために薫がどんな人物であるかを言い、夜見が雪那を気にして戦っていたかのように薫に伝え、夜見にはまだ余力があるかのように思わせようとしていた。

（ウッソだろっ！今まであのババアを気にしながら戦っていたのかよっ!!）

夜見が雪那を気にして戦っていた部分は雪那の造り話であり、実際はそんな作戦は立てていなかった。しかし、偽情報（ブラフ）としての効果は覿面だった。

（くっそっ！なら、あのババアをとっちめて、人質にすりゃあ何とか凌げるか!?）

薫は動揺し、夜見が全力で向かって来る前に雪那を人質にしてでも、夜見に投降を促そうかと考え、構えを変える。

「……なるほど、構えを変えたか。夜見、今更私を狙ってくる筈だから、その隙を狙え。私諸共でも構わん。」

そして、薫は雪那の話術に更に動揺してしまう。

（……くそっ！分が悪いっ!!エレンが居りゃあ、どうにかなったかな……。）

写シを一回斬られ、そのうえ敵には的確な指示を出すセコンドと強化された夜見が居るという状況に、薫はいつも共に戦ってくれたエレンが居ればこの場から脱することが出来たのでは?と内心で思う程、自分では気が付かないぐらい追い詰められていた。

「……今、恐らく仲間が居ればこの場から脱すると思っているだろう。奴は相当焦っている筈だ。夜見、奴が他の五人を見捨てて逃げるようなら紫様の元へ向かう。」

雪那は一人で残ったところから、薫は仲間意識が強いのだろうと推察し、薫の選択肢から撤退の文字を排除するため、逃げるようなら他の五人を襲うと挑発をしてきた。それに薫は、

「……ざっけんなよ。そこの親衛隊には色々と世話になったんだ。借りを返すまで付き合ってもらおうじゃねぇかっ!!」

その挑発に乗ってしまった。先に行った可奈美達のために、退くことを考えることを放棄し、薫は夜見に向かって行った。

「…行きなさい、あの御方の、いえ元親衛隊の一人として……！」

元親衛隊と小さく呟いた夜見は再度自らの腕を御刀で傷付け、荒魂を放出し薫の周りを旋回しながら、徐々に近付かせていた。

そんないつもとは違う雰囲気を見せる夜見に雪那は、少し妙だと思ってしまった。

（……今日の夜見は何かいつもと違うような？）

しかし、雪那は知る由も無い。ソフィア達に脅され、雪那を守るために真希と寿々花を切り捨て、もう親衛隊には戻れないと覚悟した夜見は目の前に居る薫を倒すことに専念していることに。

（……何の真似だ、また何か企んでいるのか？）

薫は夜見の妙な荒魂の使い方に怪訝に思うが、どのみち厄介であることは変わりないため、手当たり次第に斬りまくることにした。

「そんなに血を流すのは辛いだろっ？」

薫は夜見を挑発するが、

「先に果てるのは、あなた達です。」

全く意に介せず、負けるのは可奈美達であると宣言する夜見。

「んなろぉっ!!」

その宣言を否定するかのように、薫は祢々切丸を振り回して囲んでいる夜見が操る荒魂を斬って薙ぎ払おうとするが、一向に数が減っているように思えなかった。そんな折に、薫の真上に夜見の荒魂が集まってきている所から、その荒魂の群れを使って上からこちらを押し潰そうとしていると判断した薫は、

「させっかぁっ!!」

飛び上がって真上に居る荒魂の群れを猿叫と共に斬り払う。

だが、荒魂の群れごと天井を斬ってしまったため、天井が崩落してしまい、その真下に居た薫は巻き込まれてしまう。

夜見の狙いは薫が天井ごと荒魂の群れを斬り、その崩落した天井ごと薫を生き埋めにすることであった。そのために、放出した荒魂を薫を囲むように布陣し、薫の攻撃を誘発し勢いに乗せ、その勢いのまま天井ごと荒魂の群れを斬らせ、天井を崩落させ薫に打撃を与えていた。

薫は崩落した天井の生き埋めになるも、写シのお陰か致命傷は避けることができたが、最早写シを張る余力が無くなり、立ち上がるのが億劫となる程に体力と精神力を削られていた。

「もう写シも張れませんか……。」
夜見はそう言うと、薫に向かって近付いて行った。
（これは少しばかり、……本当にヤベェかも。）
片目から荒魂の角を生やした夜見が此方に一歩一歩ずつ迫って来る。しかし、どうすることもできない。
「お覚悟を。」
（……ワリィ、エレン。）
死を覚悟し、目を閉じてこの場には居ないエレンに先に逝くことへの謝罪を心の中で呟く――――。

「……ここが、祭殿。」
可奈美が辺りを見渡し、物々しい雰囲気に気圧されそうになっていた。
「みんな気を付けて、雰囲気が変わった。」
「多分、ここに……。」
舞衣も何かに気付き、皆に注意を促していた。そして、姫和もやっと此処に辿り着いたと思い、紫が何処に潜んで居るか探していた。
「――――戻ってきたか、幼い二羽の鳥よ。」
そして、紫は奥の洞穴のような所から姿を現したことにより、可奈美達四人は身構える。
「巣立ちを迎えたか、今だ雛鳥のままか、剣（つるぎ）を持って証を立てるがいい。」
そして、紫は写シを張る。そのことに姫和は驚愕する。
「荒魂が写シを……？」
「親衛隊の人達だって使ってたし、不思議じゃないよ。」
驚愕した姫和を宥めるためか、親衛隊を引き合いに出して可奈美は説明していた。
「みんな、囲むよ!!」

そして、舞衣の号令の元、可奈美達は紫一人を相手に一対多の状況に持ち込めば処理落ちし隙が出来る龍眼対策のために、四人で囲もうとする。

「なっ……！」

しかし、紫は後ろに下がり、壁を背にして迎え撃つ体勢となっていた。

「何故、打って来ない？」

姫和はつい疑問を口走ってしまった。

「……時間は〝我〟の味方だ。その鎧の稼動時間が過ぎれば良いだけだからな。」

紫の言う通り、可奈美達には時間が無かった。Ｓ装備の稼働時間内に倒さなければならないうえ、何時増援が此方に到着するか分からない状況である。寡兵による強襲作戦である以上、敵の増援が到着すれば不利になるのは目に見えている。そのため、可奈美達は焦ってしまった。

「…全力で畳みかけるぞ、舞衣！沙耶香！可奈美！」

「うん！」

「ええ！」

「……はい。」

可奈美と舞衣は頷き、沙耶香は俯きながら「……はい。」と答えるしかなかった。可奈美達は一斉に紫に向かって行って、紫を包み込むように半包囲し、三方向から攻撃をする。しかし、どの攻撃も容易く払い、避け、紫には一つも届かなかった。

（ストームアーマーの打ち込みを片手で!?……稼働時間が過ぎれば良いというのは嘘ではないということかっ。）

加えて、Ｓ装備の正式名称ストームアーマーを装着したことにより、身体能力が飛躍的に向上しているにも関わらず、片手で捌かれていることに可奈美達に動揺が広がっていた。……つまり、稼動時間内に倒せなければ完全に不利となってしまうことに他ならなかったのだ。しかし、三方向による同時攻撃でも通じない以上、打つ手が無かったのも事実だった。事前に聞いていたとはいえ、先が視えるとい

う未来視たる能力を持つ龍眼がこれ程のものとは可奈美達は思ってもいなかった。

「本当に視えているのか……？」

姫和は、ついそう呟いてしまった。

「……そうだ。我が眼は全てを見通す。お前達の身体能力、秘めた力、思考。あらゆる可能性を見通しそこから最良の一手を選択する。……そして、今の我は〝タギツヒメ〟だ。」

今の紫はタギツヒメに精神が完全に乗っ取られていることを告げ、

「そして、お前を敢えて見逃した。その結果は全ての糸をお前が手繰り寄せ、舞草共は壊滅に至った。」

姫和のお陰で、反対勢力の舞草を表に出し、壊滅することができたと告げる。

「そして今、殺されるために……いや、我に〝器〟を献上するために舞い戻ってきた。」

「〝器〟？……まさかっ！」

姫和は一瞬訝しむが、気付いてしまった。

「そう、名は衛藤　優だったか？その者が我の一部を持っていてな、回収しようにも舞草と美濃関の学長が邪魔だったが、お前のお陰で回収しやすくなった。……お前のお陰でな、本当にありがとう。」

「…貴様っ!!」

「!…ダメッ!!」

可奈美の制止も聞かず、姫和は紫ことタギツヒメの挑発に乗ってしまう。掌の上で良い様に使われたことにカッとなり、平常心を失い、真っ直ぐ突っ込むが、

「!?」

姫和は一瞬だが、紫の身体を乗っ取ったタギツヒメの後ろに優が居たような気がした――――。

幻であることは姫和は分かっていたが、しかしそれだけで紫への攻撃を躊躇してしまった。

紫を斬ったあと、どうなるのかを考えてしまったから、紫とタギツヒメを斬ったあとは優も斬らなければならないような気がしたから

攻撃を躊躇してしまった。
（……斬れない、のか？）
姫和は知らず知らずの内に御刀を持つ手が震えているような気がした……。

「ねえ、ねねちゃんそろそろ退こうか。」
ねねは優にそう言われるも、一歩も引かず、結芽を庇うかのようにねねは優の目の前で両手を広げて立ち塞がっていた。
（……こんなのに、…私がっ!!）
結芽は気力を振り絞って、何とか立ち上がる。例え、血を吐いても、足に矢が刺さったままでも、親衛隊を、真希と寿々花、夜見を守るために戦うことを止めなかった。
（……ごめん、真希おねーさん、寿々花おねーさん、……）
結芽は心の中でそう呟くと、ポケットの中にあるノロのアンプルを握り締めて、自らの首筋に打っていた。
「……うっ、…ぐっ、……がはっ！……」
結芽は苦痛に耐え凌ぎながら、新たなノロを身体に受け入れていた。
「あっ。」
それを見た優は、呆気に取られ、
「ねっ!?」
ねねは結芽がそれを入れるとは思わず、呆然としてしまった。自分のしたことは無駄だったのかと、余計に状況を悪くしただけではないかと……。
「これなら、……きっと!!」
結芽はソフィアがくれたノロのアンプルを打ち、力が増していく感覚がしてきたことに素直に喜び、守りたい物が守れるような気がした。……自身が荒魂と化してしまうという危険も考えず。

「はあああああっ!!」

そして、結芽はノロのアンプルにより右目から荒魂の角が生え、そのまま優に向かって突撃すると、縦横無尽に迅移で斬りかかり、結芽と優は数度打ち合っていた。

(…これなら、勝てる!)

結芽は荒魂の力を使わずに勝利し、自分の存在を皆に認めさせることが目的で戦い続けた。

(絶対!ここから先へは進ませないっ!!)

しかし、結芽はここ最近、血を吐く回数が多くなり生きていられる時間が少ないこと、真希と寿々花が裏切り者扱いされたこと、それらが重なって、結芽は親衛隊を〝元通り〟にするには、先ずは目の前の敵を倒すことを第一にした。

(敵が目の前に居るなら、潰さないと可奈ねーちゃん達が危ない。……例えどんな奴でも。)

そして優も、シェパードとマイケル、そしてロークが物言わぬ肉塊となったとき、敵が目の前に現れたなら、殺される前に殺さなければならないと〝学習〟してしまった。なら、可奈美達を物言わぬ肉塊にさせないためには、どんな敵が現れても、殺さなければならないと〝理解〟してしまった。例え目の前に居るのが、回復不可能な病に身体が蝕まれている少女であっても。

(私は、どんなことをしてでも!必ず勝利して!!)

結芽は、荒魂の力を使って勝利し、真希と寿々花の嫌疑を晴らそうとしていた。自身の信条をかなぐり捨ててでも、それを叶えようとしていた。

(僕は、どうやったって刀使になれない。……僕は弱いから、役に立てないなら、どんなこともしてやる。)

そして優も、自身が刀使になれない〝男〟だから、荒魂となった自分が可奈美の役に立つには、可奈美が強い刀使になるには、如何なる手段を使ってでも、邪魔をする敵が現れたなら常に全力で手早く殺すことを決めていた。

(真希おねーさん、寿々花おねーさんが戻って、元の四人の親衛隊に

!!)

また来年に花見をしよう。そう言ってくれた親衛隊の皆と紫との約束をつぶさに思いだし、安らぎを与えてくれた場所を守るためなら、鬼にでも、化け物にでもなってでも目の前の敵を倒そうとしていた。

(……可奈ねーちゃんは僕に〝命〟をくれた。ううん、みんなが〝思い出〟も〝宝物〟もくれた。)

可奈美の声で此処に戻れたこと。姫和のお陰で此処まで来れたこと。舞衣、沙耶香、エレン、薫、ねねが居てくれたから〝思い出〟と〝宝物〟が手に入れることができた。優はそのことを思い出すと、やれることをやろうとした。

(……鳴の羽返し?ならっ!!)

優が突然両手を広げたことから、鳴の羽返しではと感じ、それならばと結芽は自らが得意とする突き技を囮として、峰打ちで倒そうとするが、

優は自ら前に進んで突き技を受け、深々とニッカリ青江を身体の中に入れていった。

「…うっ!」

結芽は、人を初めて斬った感触に不快な思いを抱くが、優は御刀が刺さっていることに気にしていないのか更に進み、結芽にとっては不幸なことに平突きであったために深く刺さる。そして、優は結芽の腕を掴んで、

「…捕まえたっ!!」

と、若干微笑みながら、血を吐きながら近づいてくることに、結芽は言い様のない畏怖を感じていた。

「……あんたは、何なのよっ!!何で、そんなことまでしてまでっ!!」

「……何でって?可奈ねーちゃんの邪魔する奴を潰すのは僕だから。」

結芽は理解できなかった。

彼女にとっての戦いとは、正々堂々と華々しくする物だとしか理解していなかった。理由は、幼い頃に御刀に選ばれ、自分よりも年上の人とも稽古をして勝ち、神童と謳われたことから、真剣勝負とはこう

いうものだと理解していた。
だが、優は元少年兵のジョニーを介して、戦いとは自爆特攻してでも、狂気に身を委ねてでも、如何なる手段を使ってでも勝利するものだと知った。そのうえ、マイケルとシェパード、ロークが死んだことにより、敵が現れたら直ぐに殺さないと可奈美達が殺されると認識したことにより、更に自分を鑑みない行動をするようになってしまった。
こういった経緯により、結芽はこんな剣術以外の容赦のない攻撃と特攻染みたことをする優のことが理解できなかった。
そして、優も自分勝手な理屈を言う結芽のことを邪魔をする敵としてでしか認識しなかった。
お互いに他者のために戦うが、その他者の〝生きて欲しい〟という思いに両者は気付くことがなかった。
「…がっ！」
そして、優に左胸を殴られ、突き倒された結芽はニッカリ青江を手放してしまい、優の身体にニッカリ青江が突き刺さったまま、結芽は唯一の武器である御刀を失ってしまった。
「……まだ、まだだよ！」
だが、結芽は裂帛の声を上げながら立ち上がり、素手でも戦おうとしていた。

胡蝶の夢

タギツヒメの後ろに優の幻が見えた姫和は攻撃を躊躇してしまう。
「姫和ちゃん!!」
そして、姫和の危機を知らせる舞衣の声が聞こえず、タギツヒメが姫和に攻撃を加えようとしていることにも気付かぬまま姫和は立ち竦んでいた。
「ぐっ……!」
そのうえ、可奈美が姫和を庇い、可奈美の身体に紫の突きが刺さる。
「…可奈美っ!」
姫和は可奈美の苦悶の声で状況に気付き、自分の所為で可奈美は傷付いてしまったと深く後悔する。
「……ぜっやあああああっ!!!」
だが、写シの上とはいえ身体に御刀が突き刺さった状態のまま、紫に組み付き、柔術の要領でタギツヒメを投げ飛ばしていた。
これにより、タギツヒメは壁を背にして迎え撃つことができなくなり、急いで立ち上がろうとした所を舞衣がノロを祭るための祭壇箱を思いっきり投げてタギツヒメの動きを阻害。その隙に、可奈美は鬼気迫る表情でタギツヒメに一太刀入れ、右腕を弾き飛ばしていた。
(……この器ではこれ以上の演算は無理か、何?)
しかし、可奈美の千鳥によって斬られた部分に異変が生じ、タギツヒメは何が起こったのかと驚いてしまった。
(……千鳥と小烏丸。藤原美奈都と柊篝の二人と同じく現世に在らざる物。我と同質の存在に、何故その可能性が見えなかった。……そうか…紫!!)
「みんな!今の内に右側を狙っ……!?」
舞衣は右腕が無いタギツヒメに更に攻撃を与えるため、右側を狙おうとするが、急にタギツヒメが苦悶の声を上げたことに異様な雰囲気を感じ、舞衣は可奈美達を手で制止する。
「討て、……その御刀で私を討てっ!!」
一瞬、可奈美達は紫の精神が戻ってきたのではないかと思ってしま

い、攻撃の手を止めてしまう。だが――――、
紫は苦痛の声を上げると同時に髪が巻き上がり、そこから四本の腕が生えていき、禍々しい姿となり、姫和はあまりの出来事に呆けてしまい、紫の姿に「……鬼…か…？」と呟いてしまった。

薫は写シを張れる精神力がもうないため死を覚悟するものの、刀と刀が打ち合う剣戟の音を聞き、何事かと思い薫は目を開くと……。全身甲冑と御刀を携えた正体不明の刀使が目の前に居て、夜見の御刀を自らの御刀で受け止めていた。
「……っ？」
そして、その正体不明の刀使は横薙ぎに斬って、夜見との間合いを空けていた。
「……お前、何者だ？」
薫はこんな全身甲冑を纏うような人と知り合いに居た覚えが無かったため、何者かと尋ねていた。
「……あちらに親衛隊の真希と寿々花の両名が居ます。彼女らは紫の本性を知らないので協力を仰ぎなさい。」
「……分かった。」
薫は誰かは知らないが、夜見に御刀を向けていること、真希と寿々花のことを教えてくれたことから味方であると判断し、そちらへ向かうことにした。
「…！」
夜見は、薫を逃がさないようにするため、追おうとするが、正体不明の刀使が夜見の前に立ち塞がる。
「……私が相手をしてやろう。」
その正体不明の刀使は薫がこの部屋から離れていったところを見届けると、兜を外し、正体を現していた。

「……貴女は……！」
その正体を知り、顔を歪ませ、激昂する夜見。正体不明の刀使の正体は――――、
「……良い表情だ。」
綾小路武芸学舎の刀使、織田　ソフィアであった。
「何故、貴女まで裏切るのですか？」
夜見には理解できなかった。変革派の重鎮である織田防衛事務次官の養女で綾小路武芸学舎の彼女が裏切る理由が夜見には分からなかった。
「……何故？分からないのですか？貴女方が蒔いた種が最終的にこうなっただけのことであると。」
しかし、ソフィアは真意を語らなかった。
「どういう意味で？」
そう言いながら、夜見は雪那を守るように移動し、それを悟られぬように行動していた。
「ぐっ！」
「……高津学長！」
夜見は、雪那の呻き声に何事かと振り向くと、ソフィアの部下なのか黒服の刀使達が雪那を気絶させていた。雪那を助けようと一瞬そちらに気を向いてしまったため、
「あぐっ！」
ソフィアに後ろから斬られ、写シを剥がされ、使用回数が一つ減ってしまう。
「……一つ言いましょう。私を倒さずに雪那を助けようとすれば、雪那の命は無いと思え。」
「……どういうこと、ですか？」
「簡単なことですよ。雪那を救いたければ貴女が私を殺せば良いのですから。」
夜見は雪那の方をチラリと見る。既に雪那は気絶しており、頭に黒い袋を被せられ、拘束させられていた。そのうえ、綾小路の刀使達が雪那の首筋に刃を当てているので、今は従っているフリをして隙を伺

い、可能であれば雪那を救出しようと決め、このソフィアが主催するどちらかが死ねば助かるという悪辣なゲームに参加するという意志を見せる夜見。

「……本当に、貴女を殺せば学長の命は。」

「ええ、命は助けます。」

その言葉に安堵した夜見だが、剣の腕前は結芽と互角かそれ以上であるソフィアが相手では正攻法では勝てない。ならば、どのようにして勝利をもぎ取るかを考えていた。

（……剣術の腕はあちらが数段上、そのうえ甲冑を身に纏っていますので、今の荒魂の数で全てぶつけても有効打にならない。ならば、ノロのアンプルで荒魂を補充して大量の荒魂でぶつけて転倒、もしくは撹乱させれば、勝機はまだあります。……高津学長。）

夜見はそう判断すると、ノロのアンプルを打ち、薫戦で殆ど失った荒魂の補充をしようとするが、

「……制御できない程入れると、雪那を攻撃してしまうのではないのか？」

夜見はソフィアのその言葉に一瞬躊躇し、雪那を少し見やると、

「どうということは……ぐっ……!!」

構わず、ノロのアンプルを入れようとしたところ、左腕に激痛が走り何事かと思い見ると、投げナイフが刺さっていた。写シを張る前にソフィアが投げナイフを投げたのだ。刺さった箇所に血が流れ、ナイフが刺さった激痛によりノロのアンプルを落としてしまう。

（あっ！）

夜見はノロのアンプルを落としてしまったことに驚き、慌てて右腕でノロのアンプルを取り出そうとするが、ソフィアがそれを待ってくれる筈がなく、夜見に斬り掛かっていた。そのため、防戦一方となり、荒魂の補充ができない状態となってしまう。

それだけでなく、ソフィアは防刃グローブを着用しているのか、夜見の水神切兼光の刀身を掴んで、刀身を上に上げると、夜見の腹を両断するように斬り裂くと、夜見の写シをもう一度剥がすことに成功する。

「くぅっ！」

そのため、夜見は気を失いそうになるが、雪那と結芽、真希と寿々花、そして紫のことを思い出すと、どうにか気を振り絞ってすんでのところで気絶することなく気を確かに持つことができた。

だが、今の夜見の状態は荒魂の補充が容易にできないうえ、写シも張れないという圧倒的に不利な状況へと追い込まれていた。

「だが、貴女のお陰で助かりましたよ。いや本当にありがとう。」

「……何を、言っているんです？」

夜見は、ソフィアが何を言っているのか理解できなかった。

「貴女が雪那を守るために、真希と寿々花を売ったらどうなりましたか？」

その言葉に夜見は、結芽と仲違いしたこと、親衛隊にはもう戻れないことをつぶさに思い出していた。

「結芽は病に苦しみながらも奮闘し、徐々に精神と身体をすり減らしたことでしょう。目の前に真犯人が居るというのに、その滑稽な姿を見るだけで笑いを堪えるのに必死でしたよ。いや、本当に。」

ソフィアは微笑を浮かべながら結芽が苦しむ姿は愉快であったと告白すると、夜見は苦虫を噛み潰したかのような顔をする。

「そして結芽はあの少年と、衛藤　優くんと戦ってくれているのは僥倖だった。あの少年なら確実に結芽を追い詰め、私が渡したノロのアンプルを使わざるを得ない状況に持っていってくれるだろうとな。」

しかし、今のソフィアの発言に夜見には疑問があった。

ノロのアンプルはそんな簡単に手に入る代物ではない。なら、彼女はどうやってノロのアンプルを入手したのか？

「どうやってノロのアンプルを入手したのか気になりますか？答えは簡単です。任務で撃破した荒魂のノロを少量ずつくすねて、スレイド博士からノロのアンプルの作り方を教えてもらっただけのことです。」

夜見はスレイド博士という名から、雪那が忌み嫌う人間の一人であることを思い出し、眉をピクリと上げる。この女はそんな人間とも付き合いがあるのかと。

「ですが困ったことに私達もそんなものを造ったのは初めてでして、いかんせんあのマッドでも久しぶりのことらしく、ノロの量を間違って〝病弱な体〟にとっては致死量となるようにしてしまったかも知れません。」

ソフィアは微笑を浮かべ、わざとらしく両手を上げて、手をヒラヒラさせていたことに夜見は憤っていた。

「……あなたという人は……どこまでっ!!」

夜見は激昂の感情に流されるまま、ソフィアに向かって左腕が負傷していることもあって片手で水神切兼光を振るうが、全て躱されてしまい、逆に足払いを受け、片膝立ちの状態にさせられると、左肩を鎖骨ごと深々と斬られ、左腕でノロのアンプルを首筋に打てない身体にされてしまい、容易に荒魂の補充ができなくなってしまう。

そして、ソフィアは夜見がノロのアンプルで既に強化されていることを警戒し、後ろに下がり間合いを空けていた。

「そして私の同志が今頃、結芽が荒魂と化しているところを撮影しているだろう。」

「…まさか!?」

「…そうだ、結芽が私の渡したノロのアンプルで荒魂と化してしまえば、結芽は組織の〝歪み〟を証明する証拠となり、穢れの元である荒魂の討伐を名目に力と権威を得た刀剣類管理局と折神家は、自ら穢れの元である荒魂を製造していたという〝歪み〟を白日の元に晒すことになる。」

「何故、そのようなことを……!?」

「私の理想を具現化するためには必要なことだからな。……そして、鎌倉で起きた大規模停電、管理局内部の争いを衆目の目に晒し、そのうえ荒魂を使った人体実験を折神家と刀剣類管理局が主導していたという〝歪み〟が浮き彫りになれば、刀剣類管理局と折神家は社会的地位を大きく失うことになるだろう。…そして、貴女のお陰で親衛隊は一人が死亡、二人は背任者となり席が空き、その代わりの人員は私の同志が抜擢されるよう働きかけ、折神家内部に入り込めるようにする。……いや、最悪親衛隊という組織が無くなり、新しい組織となる

かも知れないな。」
　ソフィアは夜見が雪那を守るために行動したことがどのようなことになるのかを話し、精神的に追い詰めようとしていた。
「……あ、……ああ……。」
　ソフィアの話しに夜見は落胆していた。敬愛する雪那を守るためとはいえ、このソフィア達に一時的に協力したことによって、このようなことになるとは思いも寄らなかった。
「そして、衛藤　可奈美と十条　姫和の両名が怨むことになった紫を討ち取ることになれば、紫の非情な命令によって特務隊から抹消された刀使を親に持つ娘達が、その元凶の親の仇とも言える紫を討つため様々な障害を乗り越え、親から受け継いだ使命を自らの命を費やしてでも果たす。国が制御できない英雄だった折神　紫とは違う、〝国が望む制御し易い新しい英雄〟が現れる。……まるで、親子愛を訴えかけ、努力すれば報われる素晴らしいお話しになったでしょう?」
　ソフィアは告白する。折神家と刀剣類管理局を徹底的に貶めるためだけに、可奈美と姫和を争いに巻き込ませ、紫を怨み最悪相討ちとなれば、紫を排除することができ、そのうえ国が制御し易い新しい〝英雄〟が誕生すると言ってきていた。
「……まさか、舞草の刀使を解放したあの武装集団も、海自の哨戒網を舞草が抜けられたのは、……!」
「ええ、警察にマウントを取られるのが嫌だと言ってきた防衛省の制服組が私に協力してくれましたよ。……その他にも、紫を排除しようと動いていた官僚と議員も数多く居ましたから海自の哨戒網を入手するのは割と楽でした。……それと夜見、元からお前にはスレイド博士に〝協力〟してもらおうと思っていた。」
　そこで夜見は気付く。自衛隊の制服組が舞草の刀使を助け、そして政府の一部の人間の意志が紫を排除しようと動いていたことに、……そして、ソフィアがそれを話すということは夜見と雪那もただで帰す気など毛頭無く、夜見を元からあの雪那が毛嫌いするマッドへの手土産にする積もりであると理解してしまった。
「……私は、私は貴女をっ!!」

夜見は涙を流しながら、型も何も無く、ただ振り下ろすだけしか斬り掛かれなかったが、それで夜見とっては充分であった。
「許さない、赦さない、許せない、許せない赦せない赦せないっ!!」
このソフィアという者を赦す訳にはいかない。雪那も、紫も、真希も、寿々花も、結芽も利用し尽くし、ゴミのように扱うこの外道を何が遭っても赦してはならなかった。だからこそ、届かずとも振り下ろし続けた。
「……燕さんは、貴女のことをとても信頼していたのに、なのに！貴女は燕さんのことを踏み躙ったっ!!」
叫びながらも、嘆きながらも、傷付いていても、心がズタズタにされていても、水神切兼光をソフィアに向けて振り下ろし続けた。
「燕さんは、きっと、対等の仲間ができて、だから私は貴女をっ!!」
声が枯れようとも叫び続け、涙を流しながら嘆き、血を流しながら、心が乱れ思考がまともに機能しなくても、水神切兼光をソフィアに向けて振り下ろし続けた。
「結芽さんの〝誰かの記憶に残りたい〟という夢については叶えましょう。」
だが、ソフィアの発言に夜見はハッとなる。このソフィアでも結芽に何かしら負い目を感じているのではと、ありえないことを夜見は思い至ったからだ。
「結芽さんは〝荒魂の力に頼った刀使〟として、皆の記憶に残ることになりますので。」
せせら笑いながら答えたソフィアに、絶望と激昂の感情がない交ぜになったまま夜見は撤退の二文字を頭から捨て、半狂乱となり人の声とは程遠い声を上げながら、真正面からソフィアに斬り掛かっていた。
（そうだ、もっとだ！）
夜見が感情を表に出し、感情に流されるまま、ソフィアに殴り掛かる勢いで、御刀で斬り掛かって来たことにソフィアは内心驚喜乱舞していた。

（……友情、親愛、そして〝平和〟。そんな物は人が造った人工物であり、ただの虚しい妄想でしかない。……憎悪、殺意、そして〝戦争〟という自然物の前に霧散するしかない。）

ソフィアは、憤怒の感情のままがむしゃらに御刀を振り下ろす荒魂の角を生やした夜見の姿を見て、自らの思想の正しさを実感していた。

（……だが、足りない。そんな程度の怒りでは到底私は満足し得ない。）

しかし、ソフィアはそんな夜見を見て足りない部分を実感し、落胆する。

――友情、親愛という無価値な物を後生大事にする。

――身を焦がすほどの殺意と怒りが足りない。

――如何なる手段を使ってでも、得ようとしない。

（だから、利用されて終わる。）

ソフィアは心の中で夜見をそう評すると、夜見にとどめを刺すべく、右腕の手首を打ち御刀を手から落とさせ、首を掴んで持ち上げると、そのまま腹に深々と刺して壁に押し付け、動きを封じる。夜見を壁ごと突き刺しているのを見たソフィアはまるで蝶の標本のようだと、つい思ってしまった。

（……そして、優くんから与えられた鳩尾の傷はまだ癒えていないことは知っている。）

そして、夜見がまだ鳩尾の傷が治っていないこと知っていたソフィアは掴んでいた夜見の首を手から離すと、夜見の鳩尾を何度も何度も叩きつけるかのように殴り続けていた。

「がっ！……ごっ！……げはっ!!」

手甲を装備していること、八幡力と筋トレで鍛え抜いた力も加わっていることと、鳩尾の傷が癒えていないこともあって充分な効果があり、夜見は苦痛の声を上げる。

夜見は己の無力を呪い――――。己の至らなさを呪い――――。己のしでかした事を呪っていた――――。

「…ぐっ、……げふっ。」

夜見は次第に弱々しい声となって、ソフィアに殴られながら、思い出していた。

嘗ての自分は御刀に選ばれない程の力しかなかったこと――――。

そして、そのちっぽけだった自分が雪那と出会ったことによって、親衛隊に抜擢されるまで色々と助けてくれたこと――――。

だが、夢から醒めるかの如く、全てが崩壊していくことを恐れ、悪魔と契約を結んだことによって、今まさにその罰を受けているかのように思えた――――。

まるで胡蝶となって、様々な人のお陰で親衛隊第三席となったうたかたの夢を見ていたら、悪魔と契約した罰なのか、親衛隊になる前の以前のちっぽけな自分に戻ってしまったかのように一方的にやられてしまっていた。

（……高津学長……。）

そして、最後は雪那のことを想いながら、彼女は気を失ってしまった。援助を受けていながら無様な結果となり、己の不甲斐なさに謝罪の意を込めて、雪那の名を心の中で呼びながら……。

――――――――♪

「……そちらはどうだ？」

不意に携帯が鳴ったので、ソフィアは電話を取っていた。

『……隊長、結芽さんがノロのアンプルを打ち、荒魂の角を生やしたところは録れました。』

穂積はソフィアの指示通りに、親衛隊の結芽がノロのアンプルを打ち、荒魂化した状態の映像を録り、その映像で刀剣類管理局と折神家を糾弾する証拠を得たということをソフィアに報告していた。

「ご苦労、こちらも夜見が荒魂を産んでいるところを録れている。これで紫と管理局はただでは済まんだろう。……良い働きだ、お前を親衛隊に抜擢するよう働きかけよう。」

『ありがとうございます。ですが、辞退させて頂きます。』

「何故だ？」

ソフィアはこれには思わず疑問に思った。

『親衛隊になるより、隊長の側で働いていた方が楽しいので。』

本心なのか分からない落ち着いた声量で、そう答える穂積。
「……フフッ、なるほど、それならば良い。」
意外な答えにソフィアは思わず上機嫌となり、笑みを浮かべる。
（……これで紫と政治的な繋がりがある御養父上……いや、織田防衛事務次官は失脚、防衛省に居られるかどうか。……それに、あの益子薫が真希と寿々花を紫の元へ送り、紫に刃を向けることになれば親衛隊には戻れなくなるだろう。代わりの人員は私の同志を親衛隊に抜擢させ、折神家内部にも影響力を強めれば、政治的に弱体化した紫も易々とこちらに何かを仕掛けることはできまい。）
そして、ソフィアは自らの思い描いた通りに動いていることにほくそ笑んでいた。
「隊長、夜見と高津学長は如何致しますか？」
「……高津学長は静に渡してやれ、手段は問わんから鎌府の研究成果を必ず聞き出せと伝えておけ。夜見はあのマッドの手土産だ。どんなものかは知らんが、新しいノロと人体の融合実験をするらしい。」
自身の部下である黒服の刀使にそう尋ねられたソフィアは、雪那から鎌府の研究成果を聞き出すために、そういったことが得意な静に雪那を渡しておくようにと言い、夜見はスレイドの新たな実験の被験体として送れと指示を出していた。
（……この二人が行方不明となれば、騒乱が起こったとしても、主犯は彼女達だと思い、朱音か紫が血眼になって探すことだろう。）
そんな計算もあって、彼女達を生かして利用しようとしていた。
まさに、道具のように扱っていた――――。

落ちていく決意

刀剣類管理局の窓の無い個室（逃亡防止と心理的圧迫感を与え、自供しやすくさせるという目的もある。）にて、親衛隊第一席の真希と同じく第二席の寿々花が幽閉されていた。理由は人気がある獅童　真希と此花　寿々花が不正（ソフィア達が仕組んだことだが。）を行ったことが広まれば、誰が味方で誰が敵かで味方同士で疑い、刀剣類管理局内部が混乱してしまうという事態に発展することを恐れてのこともそうだが、折神家親衛隊の中でも有名な二人が背任していたことが公になれば、折神家も政治的なダメージを受けてしまうことになるため、それを避けるために真希と寿々花の両名は朱音が捕まり、事態が終息するまで背任を公表されることなく刀剣類管理局内にある個室で軟禁されていた。

「……またあの現象か？」

視界がぼやけたかのような現象を見た真希はまず危機感を抱いていた。

「紫様はもう、いえ何時からかは分かりかねますが、本当に荒魂かも知れませんわね……。」

寿々花も真希と同じく危機感を抱いていた。紫は既に居らず、荒魂となっており、力を増したためこのような現象が起きたのだろうと推測していた。

「だとしたら、ここで大人しくしていたら不味いな。」

「あのような現象を二度も起こしておきながら私達に何もしないということは、……荒魂は誰かと交戦中と見て良いでしょう。」

「ああ、先程の六つぐらい起きた地震の様な揺れから、舞草……朱音様達が何かで突入したのだろうから、ここで待つ訳にはいかないな……。」

真希と寿々花は仮に紫の姿をした荒魂が勝利すればどうなるかを推測していた。恐らくだが、生かしておく理由がないので殺しに来るのは間違いないのだが、脱出しようにも頑丈な扉が一つしかなく、御刀が無ければただの女子高生ぐらいの力しか出せないので、壊すこと

もできなかった。
（警備の人間が居ない今が最大のチャンス、だがどうやって抜け出す？）
　真希と寿々花の逃亡防止のために居る警備の人間が賊の対処を優先したせいなのか、もしくは新たな荒魂の事件に対処したのかまでは定かではないが、扉の向こうに人の気配が無いことから居ないと分かっていたのだが、真希と寿々花はこの窓が一つも無く殺風景な部屋から脱出する方法が何一つ浮かばず、そのうえ巡り巡ったチャンスが目の前に有ることもあって、時間だけが過ぎていくことに焦りを感じていた。だが――――、
「キエエエエエッ!!」
　誰かが猿叫を上げたことから、真希と寿々花は急いで頑丈な扉から離れると、頑丈な扉はいとも簡単に歪な形となって、破壊されてしまった。……そして、猿叫を上げた人物がこの部屋の中に入って来ており、姿を見ると、
「……益子　薫か？」
「何用で？」
　所々に服が汚れている薫だった。
　そのことに驚く真希と寿々花、舞草の一人である薫が隠れ里を襲撃した仇を取るために来たのかと思い、冷や汗が出ていた。これも、紫が仕組んだことではなかろうかと……。
「……なあ、ワリィ助けてくれねぇ？」
　しかし、意外な言葉にキョトンとする真希と寿々花。
「奇遇だね、僕達も助けて欲しかったんだが。」
　そのため、真希は罠である可能性も考慮し、薫の真意を探ろうとしていた。
「……ワリィが、冗談言っている場合じゃねぇんだ。……大荒魂が復活しようと……してるんだ。」
　薫の言葉に、真希と寿々花は驚愕するが、一旦冷静になると紫に取り憑いているのは、その大荒魂ではないかと推測してしまった。
「その大荒魂とは何ですの？」

寿々花は少しでも情報を得るべく、薫を問い詰めるかのように聞き出していた。
「……２０年前の大荒魂だよ。相模湾で……起きた奴がまだ……折神紫に取り憑いてやがった。」
薫は夜見に与えられたダメージが尾を引いているのか、息も絶え絶えになりながらも真希と寿々花に話していた。
「つまり、紫様はその大荒魂に操られているという訳なのか？」
薫の話を聞いた真希は、紫は２０年前の大荒魂に操られているだけなのかどうか、問い質していた。
「ああ、多分な……。」
薫は、真希の質問の内容に肯定の返答をしていた。
「証拠は有るんですの？」
しかし、寿々花は山中の戦いにて、散々にしてやられたこともあって、薫の話に懐疑的であり、こちらを嵌める何かの罠かも知れないと思い込んでいた。
「……証拠は無ぇよ。」
「なら、貴女の話をどうして信じられると思いまして？貴女方は、夜見さんと真希さんをあんな目に遭わせた貴女方の言うことにっ!!」
「嘘付くなら、もっとましな話をするよ。……それにな、お前達に言われたくねぇよ。……エレンをぶん殴ったりしたことも、マイケルとシェパードとロークや里の皆もお前達のせいでなっ！……やり返してぇよっ!!」
寿々花の言い分に、薫も熱く反論する。そのため、寿々花は思わず閉口してしまう。
「……けどな、それよりもやらなきゃいけないことが有るんだよ。……だからよぉ、今のボロボロな俺が、可奈美達のところへ行っても、ロクな戦力にならん。……だから、お前達に頭下げてでも、……いや、この国は２０年間も奴に騙されせっせとノロを集めていた。……責任取らせようと思ってな、親衛隊。」
そして、薫は既に写シも張れない自分が行くよりも、自分よりも強く、こちらの味方になりそう（紫、もとい大荒魂の命で、捕まってい

ることからのおおよその推測でしかないが。）な真希か寿々花を今も大荒魂と戦っているであろう可奈美達の元へと、自分の代わりに向かわせようとしていた。

「……すみませんが、私達も御刀を没収されておりまして、行っても戦力になりませんわ。」

だが、今の真希と寿々花は、反逆者の烙印を押され、御刀を没収されて此処に居り、自分達の御刀が何処に有るのか不明のため、ただの女子高生と変わりない者が行っても戦力にならないと寿々花は言うが、

「……いや、寿々花。御刀なら有る。」

「へっ？」

突然真希が、自分達の御刀が没収されて何処に有るのか分からないのに、妙なことを口走ったために、思わずすっとんきょうな声を上げてしまう寿々花。

「こいつの御刀を借りる。お前はそれでも構わんだろう？」

「……ちっ、しゃあねえ。」

真希はそう言うと、薫の祢々切丸を掴んでいた。それを見た薫は自身の愛刀を真希に託すことにした。

「えっ？ちょっ、ちょっと真希さん!?幾らなんでもそれは無謀と言うものですわよっ!?他人の御刀を使えば、神力を引き出す効率が悪くなりますし、いくら真希さんでも扱い慣れていない御刀で大荒魂を倒すのは無理ですわ!?」

しかし、寿々花は真希が大荒魂の元へ向かうことに反対していた。理由は、神力を引き出す効率が悪くなるうえ、吼丸と祢々切丸では刀身の長さから全く違うため、間合いの取り方も何もかも違う他人の御刀で、２０年前の大荒魂に向かうのは、流石の寿々花でも真希の身を案じ、反対していた。

「寿々花、勝算が無ければこんな提案をする訳がない。……それに、この複雑な迷路から脱出する最初で最後の機会（チャンス）なら、勝負をしたい。……益子　薫だったか？何でも良い、奴の弱点や特徴は何か知っていないか？」

「……そうだな、あいつは……龍眼っていう未来が見える能力（ちから）を持っている。……けど、弱点は視る範囲を広げて脳を処理落ちさせること、……だから、一対多の状況に持ち込めば勝ち目は有る……！」

薫は真希に、紫の中に居るタギツヒメの能力を教え、少しでも真希に情報を与えていた。

（……そうか、だから御前試合のとき、紫様は十条　姫和の突きを躱せたのか！）

その情報により、真希は薫の言っていることが真実であると確信したと同時に、今まで何故そのことに疑問に思わなかったのかと後悔していた。

「……でしたら、貴女が行くなら私も……。」

「…いや、寿々花は此処に残って益子　薫を頼む。御刀は一本しかない。……今ここで逃げたら、結芽に大荒魂相手に尻込みしたと言われるだろうし、……それに、益子　薫を疑えば、紫様のことを調べてくれた寿々花も疑うことになるからな。だから、昔のように行こう。僕は前衛（ポイントマン）で君は後衛（バックアップ）だ。」

真希は、例え何があろうとも、ボロボロになってまでこの事を伝えた薫と今まで支えてくれた寿々花を信じることを決意し、あとは２０年前の大荒魂の元へと向かうまでだと決めていた。

「……ですが、貴女を失うことになれば、親衛隊を指揮するのは誰なのです!?なら、私が行くべきです!!」

しかし、寿々花は一歩も引かず、真希の代わりになる者は居ないと言って、真希を守るためか、真希を失いたくないためなのか、自身が鉄砲玉になると言い始めた。

「寿々花、聞いてくれ。この御刀は見たところ２ｍ以上はあるから、実質〝打ち〟か〝振り下ろし〟、可奈美達のところへ向かうという点から集団戦であることから、ある程度の〝薙ぎ払う〟くらいしかできないだろう。それらを踏まえて考えると、寿々花の鞍馬流の『巻き落とし』や『変化』は刀の微細な操作が必要だから、選択肢が少なく、間合いも何もかも違う他人の御刀でそれをやるのはまず無理だ。だが、僕の新道無念流は〝力の斎藤〟と言われるほど単純な力技が多くて

ね。だから、この御刀と相性がどちらが良いかと言われれば、単純な力技が多い僕だろう。」

真希は、大太刀の利点を生かせるのは自分であると言って、寿々花を納得させようとしていた。

「……ですが。」

「寿々花、僕達は刀使だ。国民から荒魂を守るのも使命だと言ってくれたろ？なら、君の推測も、考えも全て信じるさ……。だから、今益子　薫を信じれないなら、僕を信じて欲しい。」

真希はそう言うと、真剣な表情で真っ直ぐに寿々花を見つめて、そう答えていた。

「……そうですわね、分かりました。恐らくですが、その大荒魂は最大の力を発揮するためにノロの貯蔵庫か祭殿で待ち構えると思われますわ。……それと、間違っても刺し違えてもっていうのは辞めて下さいませ。私は、何時までもお待ちしておりますので。」

寿々花は真希に背を向けて、俯いているのか顔を見せないようにタギツヒメが居るであろう場所を真希に伝えていた。

「……ありがとう、行ってくるよ。」

真希は、薫から受け取った祢々切丸を担ぎながら、寿々花の言葉を背に受け退室し、ノロの貯蔵庫へと走って行った。

――――例え、この身に何が降りかかろうが、何が起ころうとも。

「くそ……！」

紫が禍々しい姿となって、数分経つが可奈美達は未だに有効打を与えられないまま、時間だけが過ぎていくことに姫和は苛立ちを感じていた。

S装備の打ち込みを片手で防ぐことからある程度の予想はできていたが、その力は凄まじく、S装備が無ければ今頃気を失っていたこ

とは容易に想像が付く程であった。加えて、不規則にしなる鞭のように動く四本の腕（内一本の腕は御刀を持っていないが、殴打してきていた。）を見切ることが難しく、尚且つ〝龍眼〟による未来視が不意討ちや奇襲を容易く躱してしまうことによって、打てる手段が無くなりつつあったことでS装備の稼動時間が過ぎようとしていた。

そうこうしている内に、衝撃の風が吹く程の振り下ろしに、床が耐えられなくなったのか崩れてしまい、下のノロの貯蔵庫へと下ろされてしまう。

「可奈美ちゃん、一度退いてっ!!沙耶香ちゃん、後ろ!!」

舞衣は陣頭指揮を取りつつ、守備手が居ないにも関わらず明眼と透覚を使って敵を探りながら、敵の猛攻をどうにか躱し続けていた。

（……無念無想はダメ。行動が単純になるから、先が読める相手には相性が悪い。）

沙耶香は〝無念無想〟を使うことを放棄した。理由は行動が単純化してしまうため、先を読むことができる相手にはすこぶる相性が悪いと判断したからであった。

（……写シを張るのは、あと一回ってところかな?）

可奈美は姫和を庇った際、突かれながらも紫こと大荒魂を投げ飛ばしたことにより、かなりの精神力を損耗していた。

（……っ!）

そして、姫和は、紫の後ろに優の幻影を見たときから、紫に一太刀を浴びせる覚悟ができなかった……。

もしも、紫を斬ってしまえば、次は優を斬らなければならないような気がしたため、斬ることを躊躇い、敵が目の前に居るのにも関わらず、未だに迷っていた……。

「!.姫和ちゃん、少し後ろに退がって!!……あっ。」

姫和に、いつもの太刀筋の鋭さが無いように思えた舞衣は一旦後ろへと退がるように指示を飛ばすが、その隙を狙ったかのように大荒魂は舞衣に猛攻を加えようとしていた。避けられない、そう覚悟する舞衣だったが、

「うおおおおおおおおおお!!」

突然、真希が乱入してきたため、大荒魂は舞衣への攻撃を中断し、真希への対応を優先した。
「しっ、獅童さん!?」
真希が突如現れたことに驚いた舞衣は、思わず真希をさん付けで呼んでいた。
「話は後だ！益子　薫の代わりにはならんだろうが、少しくらいは役には立ってみせるさ!!」
真希は、薫の代わりとして戦列に加わることを可奈美達に伝え、その証拠として紫、いや大荒魂に薫から借りた祢々切丸の切っ先を向けていた。
「お前……裏切るのか!?」
姫和は真希がそのような行動を取るとは思えなかったので、真希に対し、このようなことを言ってしまった。
「ああ、相手が紫様じゃなければ問題無いだろうっ!!それに、益子　薫から２０年前の大荒魂だと教えて貰った!!」
真希は姫和への返答として、薫から話を聞いたことを伝えると、大荒魂に打ち込みで斬り掛かる。
「そういう訳だ。この〝力〟はありがたく使わせてもらう!!」
真希はそう宣言すると、薫から借りた御刀で戦うというデメリットを荒魂の力でカバーしようとしていた。
「……何人来ようとも結果は変わらん。折神　紫を超える刀使はこの世に居ない。」
美奈都が生き返らない限りは、と大荒魂は心の中で呟いていた。
しかし、真希を加えた可奈美達五人でも、状況は改善されなかった。
いや、先を視ることのできる能力（ちから）が全ての攻撃をいなされ、
「沙耶香ちゃん！……あっ!!」
大荒魂は御刀を持っていない腕で拳大の石を掴んで、舞衣に向けて投げ、当てると同時に御刀で斬って、写シを剥がして舞衣という司令塔から真っ先に倒し、連携を取り辛くさせる。
「舞衣っ!!……うっ。」
それと同時に、隙を見せた沙耶香を的確に突いて写シを剥がして倒

すと、一対多の状況から脱していき。
「うぐっ、……くそっ!!」
そして、二人がやられたことにより、空いた腕を総動員して真希に猛攻を加え、写シを剥がすと、三人目を瞬く間に倒してしまった。
『バッテリー残量ゼロ。機能停止と共に、装甲を強制パージします。』
そのうえ、可奈美と姫和のS装備はバッテリーが無くなったというアナウンスが流れると、機能を失い、強制解除されてしまう。
(……こっちは二人、S装備も無くなったから、大荒魂の攻撃を何とか受け流さないと……。)
龍眼対策の数の差による暴力も、唯一の対抗手段のS装備も失い打つ手が失われつつあることを実感しつつある可奈美。
「我は、禍神。」
突然、大荒魂がそんなことを言ってきたため、少し呆けてしまう可奈美と姫和。
「脈々と受け継がれてきた折神家の務め。」
そして、大荒魂は語る。
大荒魂は、生存の道を模索していたこと――――。
紫は、美奈都と籌の命を救うために、大荒魂と同化したこと――――。
紫と同化した大荒魂は隠世の浅瀬に潜み、傷を癒していたこと――――。
「しかし、紫は二人の生還を選んだ。」
可奈美と姫和の母達を人質に紫と同化したことを告白していた。
それと同時に大荒魂が動き出し、身構える可奈美と姫和。しかし――――、
「やっと、来たか!!」
大荒魂がそう言うと、大きな破砕音と共に、大荒魂の頭上から天井が崩れ、大荒魂が後ろに退がって躱したことにより、可奈美達二人と大荒魂の間に大きな土埃が舞い、可奈美達二人と大荒魂の間合いが空く。
その瓦礫の土埃から、鉄の棒が現れ、紫に襲い掛かってきた。

「やっと、来たか……〝器〟が。」
そして、土埃から鉄の棒を持ち、ニッカリ青江を携えた優が現れ、
「……行こう、みんな。」
紫に憑依した大荒魂と対峙していた。

燕　ノ　ユメ

『おお、素晴らしい！』
『御刀に認められた！』
『まさか、この歳で……。』
　幼い頃の燕　結芽は、幼くして神性なる御刀に選ばれ、周りの大人達に賞賛されていたことがあった。
『わぁ……。』
　そのため、まだ幼かった彼女はその事実に顔を綻ばせてしまい、剣術にのめり込むのは必然だったとも言える。
『ふんっ！』
　天然理心流を学び、何処かの道場にて大勢居た刀使を一人で倒していた。
『あれだけの刀使を一人で……。』
『まさに、神童。』
　そのことに、周りの大人達はまた賞賛してくれていた。
『えへ……。』
　その賞賛が嬉しかったのか、結芽の顔は素直に喜んでおり、天然理心流の剣を更に磨いていった。母も、父も、そして周りの人達からの賞賛を得たくて、更に張り切っていった。
　そして、その努力が実ったのか、結芽は綾小路武芸学舎に入学できた。そのことに喜んでくれていた両親の顔、周りの大人達に囲まれ、幸福に満ちた表情を浮かべる結芽。

　――――しかし、幸福を得た代償なのか、彼女に不幸が訪れる。
『ゲホッ……ゲホッ……。』
　彼女に不治の病が襲ってきたのだ。そして、結芽の居る病室のカーテンの外から両親の声が漏れ聴こえていた。
『一体こんなになるまで何をしていたんだっ!!』
　父親のヒステリーな怒号が響き渡る。眠っていると思われている結芽にも聞こえる程に……。

『貴方はいつも私に任せっきりじゃない！私だって、もう耐えられないっ!!』

母親が大きな声で癇癪を起こしながら反論していた。結芽が起きていることにも気付かず……。

『俺は仕事で疲れているんだっ！お前が家のことをしっかり見ていないからこうなったんだろう!!』

『私だって、育児にあの子の病気の面倒を看ていたのよ!!けれど、貴方はいつもいつもそう言って、あの子のことを何も見てくれなかったじゃないっ!!』

今では、いつも聴こえてきて、いつもケンカばかりしている両親。それを聴きながら横たわる結芽は一人、罪悪感に苛まれていた。

パパ、ママ、ゴメン。私が〝弱い体〟だったから、ケンカばかりさせてしまって――――。

結芽はそう思うだけで、両親への罪悪感で一杯だった。どうにもならない自分が悲しくて、情けなくて。

『ねえ、この子のご家族は？』

『それがもうずっと……。』

そして、幼いながらも結芽は気付いてしまった。自分の家族はもうバラバラになってしまったのだろうと……。

そして、幼い結芽は何故御刀は私なんかを選んでしまったのだろうかと考えてしまう。〝弱い〟身体の自分ではなく〝強い〟身体を持つ子を選べばよかったのにと思い、更には今まで頑張ってきた剣術が全て無駄になったと思ってしまうほどに……。

『選ぶが良い。』

そんなとき、結芽にとっては一条の光が差してきた。

『このまま朽ち果て、誰の記憶からも消え失せるか、刹那でも光輝き、その煌きをお前を見捨てた者達に焼き付けるか。』

そう言って、紫は結芽にノロのアンプルを差し出していた。

それを見た結芽はノロをその身に宿す決意をする。見捨てた者を見返すためではなく、凄い自分を見せれば両親が帰ってきて、また綾小路に入学する前の自分に戻れるような気がしたからだった。だが、

まだ幼かった結芽は知らなかった。紫が此処に来る前に、両親が既に親権に関すること、強化薬の投与といった何枚もの書類にサインをしており、穢れの元であるノロをその身に宿すことに同意していたことに……。

――――そして、何時しか幼い頃の思いは結芽の記憶から無くなり、凄い自分を見せれば、例え自分が居なくなっても誰かが自分のことを憶えてくれる。というふうに変わっていってしまった。――――

「おっきい～～!!」

こうして、晴れて親衛隊に任命された結芽は折神家の屋敷前に来ており、始めて見る大きなお屋敷に目を輝かせて見ていた。

それと同時に、病院のベッドの上では得ることもなかった久しぶりの太陽、空と雲、静謐な空気、そして立てるようになった身体。それらが今の結芽にとっては新鮮なものであり、些細なことながら幸福なことであった。

(お部屋がいっぱーい!!)

とにかく見る物、肌で感じること全てが新鮮だった。

だからなのか、時間も忘れ、目的も忘れ、ただ今を大切にし、今を忘れないようにしていた。

「……紫様達何処に居るんだろう……ん?」

真希達に心配されているのを他所に、探検をしていたら此処が何処なのか分からず、迷子になってしまった。しかし、

「すっごーーーーいっ!!」

いつの間にか、鎌倉の町を一望できる場所へと着いていた。

結芽は病院のベッドの上で寝たきりだった自分には到底見ることも叶わないと思っていた景色を見て、純粋に、ただ思ったことを顔に出して、素直に喜んでいた。

(……こんな凄いのを見れるとは思えなかったよ。)

鎌倉の町を一望し、自分は穢れの元であるノロをその身に宿したが、この景色を見て、それが間違いではないと確信していた。ノロを

受け入れなければ、このような景色を目で見ることも、肌で感じることもできなかったのだから……。

「……煙？」

しかし、煙がモクモクと立ち上っているのを見かけ、何事かと思い、その場所へ駆けつけて見ると、誰かがおにぎ……おむすびをこしらえていた。

（……同じ服？）

となれば、自分と同じ親衛隊であろうか？と結芽は思い、あることを尋ねてみた。

「……ねえ、あなた親衛隊？だったら強いんだよね？」

結芽は、強い親衛隊を倒せば、自分のことを凄いと認めてくれるかも知れないと思い、勝負を挑もうとするが、

「親衛隊第三席　皐月　夜見です。おむすび食べますか？」

「……え？」

親衛隊第三席と自称する夜見の意外過ぎる返答に答えに詰まる結芽。何故、おむすびなのか？何故、食べなければならないのか？疑問はたくさんあるが、好意で差し出された以上、結芽はそのおむすびを食すべきだと思い、一つ食べてみた。

「なにこれ超おいしい！」

意外においしかった。

「おむすびが一番おいしいです。特にこれは紫様に用意して頂いた最高級のお釜とお米で作った特別製です。」

何故かは分からないが、自慢気に語る夜見。

「ははは！変なの。」

それを聞いた結芽は、思ったことを口にしてしまう。

「変でも問題ありません。これが私に与えられた任務です。」

が、夜見は何とも思っていないのか、いつもどおりに無表情で答えていた。

「そんな任務、私はやらないよ。強さと関係ないもん。」

結芽も求める物が違うと言って、そんな任務はしたくないと言ってのけていた。

「はい、燕さんはそれでいいと思います。」
夜見もいつもどおりの無表情で、お釜の中の米を見ていた。
「よくわかんない…じゃあなんでそんなことやってんの?」
「炊き立てのご飯のおむすびこそ、最大のおもてなしだからです。」
〝おもてなし〟とはどういったことなのだろうか?結芽は疑問に思うものの、夜見がまたおむすびを手渡してきたので、
「さっきよりおいしい!」
その手渡してきたおむすびを手に取って、食べてみると、何故なのかは分からないが、つい先程の最高級のお釜とお米で夜見が作ってくれたおにぎり……もといおむすびよりもとてもおいしく感じていた。よく分からないが、おもてなしというだけでこういったふうに変わるものなのだろうかと結芽は思ってしまい、感動してしまった。
「皐月と一緒だったのか燕……何をしていたんだ?」
結芽はその声に気付くと、二人組の女性が居た。結芽を探しに来ていた寿々花と真希であった。真希は、頬張る様におむすびを食べる結芽と夜見を見て、何をしているのかと尋ねていた。
「燕さんの歓迎会です。」
「歓迎会だったの!?」
夜見の「燕さんの歓迎会です。」という返答に、思わず驚く結芽。
こうして、何とも不思議で、変わっていて、珍しいおむすびだけが振舞われる歓迎会が催されることになる。それを結芽は、
(……でも、こういった歓迎会も良いかも知れない。……だって、変わっている歓迎会だけど、みんな今日の日のことを忘れない筈だから……。)
一風変わっているからこそ忘れられない歓迎会になったと思い、誰にも気づかれぬよう顔を綻ばせる結芽。それと同時に、〝親衛隊〟という居場所が出来た日でもあった。
――――それと同時に、結芽は失うことも恐れてしまうようになった。――――

石廊崎近くでの山中の戦いのあと、真希と夜見が病院に搬送されて行く場面を見ていた結芽は、その仇を討つことを心に誓っていた。

――――イチゴ大福ネコを買ってくれたり、色々と優しくしてくれ、気を使ってくれた真希。

――――出会った当初、おむすびだけしか振舞われなかったが、忘れられない歓迎会を催してくれた夜見。

（……絶対、絶対に許さない。）

それらをつぶさに思い出してはニッカリ青江しっかりと握り、決意していた。そして、

自分が、あの場所に居れば真希と夜見が傷付かずに済んだかも知れないという自責の念――――。

若し自分が銃弾も飛び交うあの場に居たら役に立てただろうかという自問自答――――。

真希は、自分のことを〝切り札〟と言ってくれたから、自分は負けてはならないという焦燥感――――。

それらの感情が綯い交ぜになり、いかにすべきか迷い始める結芽。

そんなときに、沙耶香が居なくなったことに少し騒ぎがあったことを知り、

「たしかあの子も天才って言われてるんだっけ……捕まえたらみんなびっくりするかなぁ？真希おねーさん達喜ぶかなぁ？」

自分が見つければ自分のことを認めてくれる人が増えるかも知れないという考えと真希と夜見が負傷したこともあって、少しでも二人が喜べばと思い、沙耶香を探しに行くことにする結芽。しかし、結芽は沙耶香と舞衣の二人の抱擁している所を見て、黒い感情に押し潰されそうになった。

「……そっか、ゴメン、沙耶香ちゃん。……ありがとう。」

「うん……私もありがとう。」

舞衣が沙耶香をそっと抱き締め、温かく抱擁していた場面を見て、自分が綾小路の入学式まで両親に愛情を注いで貰っていた過去、親衛隊の皆と楽しくやっていた昔を思い出し、現状と比較してしまった。

自分は真希と夜見を負傷させられ、二人がしばらく帰って来れない

こと。なのに、沙耶香は特に何も苦労せずにそれらを手に入れているように結芽は見えてしまった。
（ナニ……ナンナノ……。）
しかし、結芽は最終的にこう思うことにした。
（……うん。知ってるよ、知ってる、弱いから群れるんだ。はぁ～～、弱い人達を倒しても……、つまんないから帰ろ。無駄な時間を使っちゃったな。）
それらの思いが結芽の中で交差しており、日に日に結芽の心に傷が広がっていった。そのためか、自分よりも強いと噂されていたソフィアに突っ掛かり、もっと強くなって今度は真希と夜見のことを自分が守ろうとした。
「……ゲホッ、ゴホッ！……ハァ、ハァ。待ってて、…もっと強くなって、……私、頑張るよ。」
しかし、結果は敗北。だが、結芽には目標が出来たことに喜びを感じていた。
――――あんな強い人を倒せば、私はきっと凄い人として憶えてくれる。――――
真希と寿々花、夜見もそれを望んでいるハズ。〝弱いから両親に捨てられた〟という過去からそうであると自ら思い詰めていた。
だが、結芽は気付かない。真希達は結芽が健やかに生きていて欲しいことを切に願っていることを知らないままで……。

「折神家親衛隊第一席獅童　真希、同じく第二席此花　寿々花。先程、貴女方両名は折神家親衛隊の任を更迭されました。」
結芽は、耳を疑った。
そんな訳ないと思った。
「もういいっ!!…喋りかけないで、私だけでも真希おねーさん達の無実を証明してやるんだからっ!!」
しかし、現実は残酷で、結芽の元から真希と寿々花が離されてしまった。自分の居場所の一つ、夢の様な場所〝親衛隊〟が消えて無く

なるということから抗おうとした。
「ええ、貴女が強い刀使になりたいことも。ですので私に勝った貴女にはその希望を棄てず、舞草に打ち勝つのです。そして、思い知らせてやるのです。」
だからこそ、ソフィアの言葉は魅力的に聞こえた。
「本来あるべき刀使の姿は、その身を犠牲にしてでも戦い続けた者であることをっ！そしてその姿で全ての刀使、いえ全ての己が人生に絶望を抱いた者の希望となるのです!!」
だからこそ、絶望を抱いた者の希望となれば、私のことを忘れる人は居なくなると、強く思い始める。いや、自らが思い描く夢が叶うような気がした。
「分かった。…私、絶対に勝つよ。」
だからこそ、短命な燕は悪魔からノロのアンプルを受け取ってしまった。……自分の命が消えかかっていること、いつも見守ってくれた真希と寿々花の二人だけでも助けるため、今起きている苦境から抗い続けるために。

時は戻り――――。
「ゴフッ！……ガハァ!!」
優との対決から、ノロのアンプルを打った結芽は数分後、大きく喀血する。
（胸が、……焼けるように、痛い……!!）
元々、身体の中に荒魂を宿していても、病気が完治した訳ではなかった。そのため、無理に体を動かすと病気が悪化するので、戦闘に加わる事を極力止められていた。
（……嘘っ!?……何で!?）

そして、彼女、結芽は知らない。止め処なく血を吐き続けていても。
「ゲホッ!ゴホッ!!……ゴハァッ!!」
ソフィアが、本部の訓練場で結芽の試合の申し出を受け試合を長引かせていたのも、舞草の拠点を単独で戦わせたのも、無理に体を動かして症状を更に悪化させるためであることに。
それ故に、症状が悪化し弱った身体でノロを更に追加してしまったため、身体の中に居る荒魂が強くなってしまい、今の弱った身体では制御できなくなり、更に症状が悪化。最早、まともに立つことすらままならなくなる。
(……私、どうなっちゃうの?)
舞草の拠点を潰しに来たとき犠牲になったＳＴＴ隊員のように穢れて死ぬのだろうか?それとも、荒魂になってしまうのだろうか?それを思うと、
(……イヤだ。嫌だよぉ……。)
涙ぐみながら、どちらもそうなりたくないと心の中で叫ぶ結芽。
「……イヤ……嫌だよぉ……荒魂に……なりたくないよぉ……。」
子供の様に泣きじゃくりながら、そう叫ぶ結芽。それを見ながら優は何の感情も抱かず、結芽に止めを刺すべく、ゆっくりと近付く。
(……ねえ、このおねーちゃんどうにかできない?)
不意に優の中に居るニキータが結芽を不憫に思ったのか、結芽を助けることはできないかと優にそう尋ねる。
(えっ?でも、敵だし。)
(そうだぜ、こいつ敵じゃん。味方の被害が出る前にさっさと殺しとこうぜ。)
優と中に居るジョニーが敵を助ける意味などないと言って、ニキータの結芽を助けたいという思いを却下していた。
(コラッ!男子共、女の子には優しくしなさいよっ!!)
(優も、ジョニーも酷いっ!!)
(……優、今回ばかりはミカとニキータがこう言っておるから、止めて置け。)
優の中に居るミカとニキータ、そしてタギツヒメがこう言ってきた

ため、どうするべきか悩む優。そのことにジョニーはあることを優にお願いしていた。

（かーーーっ!!女共はこんなときには団結してメンドくせぇ。……優、やってくれるか？）

（うーん、やってみる。）

優はそう言うと、結芽に向けて手をかざして、荒魂化した結芽ごとノロを吸収していった。

（もう、此処でお終いかぁ……まだ全然足りないのに……もっとすごい私を……みんなに焼き付けたいのに。）

吸収されつつ、自らのたった一つの願いに思いを馳せていた。

ただ一つ、私はいずれ居なくなり、遠い所へ逝く。その前に、〝私が居た〟ということを一人でも憶えて欲しかった。そんなときに、結芽の前に落ち葉が落ちてきた。

（あっ……。）

その落ち葉は結芽の吐いた血で紅く染まり、視界がぼやけて見えるせいか、命が消えかかっていることによる幻覚か、桃色に見えた。ちょうどそれは、命の灯が消えそうな結芽にとっては桜の落ち葉としても見えたため、夢心地で、結芽にとっても、みんなにとっても忘れられない花見のことを思い出していた。

――桜が……桜が綺麗でよかったよ～！結芽～～!!

真希が酔っ払って、イチゴ大福ネコを撫でていたこと。

――真希さんは女心がわかっていらっしゃいませんわ。結芽ばかりかまって。

寿々花も真希と同様、酔っ払っているのかと思っていたら、ノンアルコール０，００％だったこと。

――折角の花見だ。戴こう。

紫が花見なのに、焼きそばを食べて一風変わったことをしていたこと。

――荒魂には難しかったようですね……。

夜見が写真を撮るのに荒魂を使うものの、失敗したこと。

――――でも、みんなでいられてよかった。今年の桜は今年しか見れないもんね。――――

（……ゴメン。……私だけ、一足先に見ちゃった。）

結芽は一人だけ抜け駆けするように夜桜を見てしまったことに真希達に心の中で謝罪していた。

（……私、悪い子だったね。……でも、こんな悪い子でも、……なんにもいらないから、憶えていてくれていれば…それで良いんだよ……。）

そして、真希、寿々花、夜見、紫、相楽学長のことを一人一人を思い出しては、そう願わずにいられなかった……。

そして、優と紫が対峙したノロの貯蔵庫にて――――。

その瓦礫の土埃から、優と鉄の棒が現れ、紫こと大荒魂に襲い掛かるが、大荒魂は二刀の御刀を使って容易く受け止めていた。

「……行こう、〝みんな〟。」

鉄の棒と〝ニツカリ青江〟を携えた優が現れる。

可奈美が、〝みんな〟を救ってくれることを夢見ながら。

荒魂

時は戻り、御前試合決勝戦――――。

優は、龍眼で姫和が紫に斬り掛かるが失敗し、それを助ける可奈美という未来が見えたため、可奈美が危ないと思った優は誰にも見つからないように裏手に回り、隠世から御刀を取り出すと、八幡力と迅移を使って紫の居る貴賓の観覧席のちょうど真上、屋根の上まで飛んで上がり、御刀を隠世に戻すと、御刀の代わりに鉄の棒を取り出す。そうして、荒魂の力を使い屋根に鉄の棒を思いっきり数回叩きつけて、天井を崩し紫を生き埋めにしようとした。そのため、紫が生き埋めになったと思った者、紫の安否を気にする者、爆発の様な音に驚く者が居たため、本殿白州にて行われていた御前試合は騒然となり、優も頃合いを見てこの場から離脱しようとするが、

「あっ、何あいつ？」

よく見ると、結芽が可奈美に御刀を向けていた。

（……可奈ねーちゃんの、邪魔するなよ。）

そう思うと、優はそこら辺に有った瓦を掴むと、結芽に向けて力一杯投げつけていた。それに驚いた結芽は難なく横薙ぎで斬り払うが、その隙に可奈美達が八幡力で跳躍し、逃げおおせたことに安堵すると、優も鉄の棒を隠世に戻し、再度御刀を取り出すと可奈美達とは別方向へ八幡力で跳躍し、御前試合が行われていた本殿白州から姿を消し、可奈美達と合流。

そこから、可奈美と姫和、そして優の物語が始まった――――。

そして、優と紫が対峙したノロの貯蔵庫にて――――。
「……行こう、〝みんな〟。」
鉄の棒と〝ニッカリ青江〟を携えた優が現れる。
『ああ、やっちまえ優!!』
『頑張って、優ちゃん!!』
優の中に居るジョニーとミカが優に声援を送り、
『こいつ倒したら、ニキータ達、助かる?でも良いのヒメちゃん?結芽おねーちゃん?殺して欲しくないんじゃない?』
『……そうだな。だが、あれは我とは関係無い。だから、あんな荒魂は早々にやって良いぞ。そして此処に居る皆を救おう、優!!』
そして、優の中に居るニキータはタギツヒメの事を案ずるが、タギツヒメは問題ないと言って、優にその大荒魂を倒すように言っていた。
『……良いよ、紫様ごと倒して……。」
しかし、結芽は真希と寿々花を救えず、夜見に酷い事を言ったまま優の中に取り込まれたうえ、大荒魂に精神を支配されている紫を見て、何もできなかった自分を恥じてなのか、顔を俯かせながら紫ごと大荒魂を倒すように半ば投げやりに答えていた。それを怪訝な表情で見つめるジョニー。
土煙の中から現れた優は、鉄の棒を紫こと大荒魂に向けて振り下ろすが、大荒魂は二本の御刀を交差して容易に受け止めていた。
「やっと、やっと来たか!あのときのように攻めて来るとはな、だがお前が来た所で折神　紫を超える者などっ!!」
大荒魂は歓喜していた。やっと一つになり、やっとかつての力を取り戻せることに喜んでいた。
「……紫って誰?」
しかし、優は紫のことを二本の御刀を持っている他人ぐらいにしか思っていなかったので、紫のことは何一つ憶えていなかった。そのため、優は紫が誰のことか分からないので、紫とは誰のことかと大荒魂に尋ねていた。
「……私が操っているこいつのことだっ!!」

そう言われた大荒魂は、紫の力を得たことを自慢気に語りたかったのか、誇らしげに言っていた。

『なあ、結芽。あの目ん玉の下に繋がっている奴って、結芽が言ってた紫様とかいう奴か？』

優と大荒魂が戦っている最中に、ジョニーは大荒魂のことを目ん玉と呼び、結芽に紫という者は大荒魂の下に繋がっている者なのかどうか尋ねていた。

『えっ？……そうだけど、どうしてそんなこと？』

『良ぅし、聞いたな優!!結芽が紫様とか言っていたから、結芽にとっては大事な奴ってこった。なら、俺達にとっても大切な奴ってこった。なあ、優!!』

突然、ジョニーがそのようなことを言ってきたことに、驚いて目を見開く結芽。

『えっ、…どっ、どうしてそんなこと。私、あんたたちの敵だったんだよ!?それに、私は悪い子だから、きっと罰（バチ）が当たったんだよ。だから、気にしなくて――――』

『そんなの関係ねぇよ。それに、〝私が操っているこいつのこと〟ってことは、望んで俺たちの敵になった訳じゃねえってこったし、あの目玉にとっちゃどうでもいい奴なんだろ?それと此処に居る奴等は皆仲間だ。仲間の大切な者は俺達にとっても大切な者だ!…なあ、そうだろお前らっ!!』

真希も寿々花も助けられずに夜見に酷い事を言ったこと、そしてあなってしまった紫をどうすることもできないことに消沈し、負い目を感じ、自らを〝弱くて何一つできない悪い子〟と一方的に思い詰めてしまっていた結芽を気遣ってなのか、そう強く宣言するジョニー。

『…まあ、当然よね。だから優ちゃん！二本は殺しちゃダメだからねーーーっ!!』

『そうだね。あの目ん玉はどうでも良いけど、結芽おねーちゃんは大切な仲間だよね。』

『……ウム、仕方ない。』

それに、ミカとニキータ、タギツヒメはそう言って、ジョニーの考

えに賛同していた。
（……分かった。できる限りやってみるよ。）
そして、優もジョニーの考えに乗ることにした。
『……みんな、ありがとう……。』
結芽は、自分のために紫を救おうとしてくれるジョニーとミカ、タギツヒメとニキータに誰にも聴こえないくらいの声量で感謝していた。
だが、結芽は気付かない。確かに、彼らは結芽のことを大事な仲間だと言っており、そのために紫を助けると言っていた。一見、暖かい善人の様に見えるが、それと同時に彼らはＳＴＴ隊員達を傷付けたことも、殺したことにも何も抱かない冷酷な部分を持ち合わせる者達であることに。
「……じゃあ、お前ってそんなに凄くないんだね。」
優は大荒魂からの攻撃を受け止めながら、目ん玉こと大荒魂の言っていたことを総合的に考えた結果。〝紫を超える者は居ない〟と言っていたことから、この目ん玉は紫以下であると解釈し、そう返答していた。
「……キサマァ!!」
９歳児に小馬鹿にされたことに気づいた大荒魂は、優に力押しで迫る大荒魂。
「…ちょっと、しつこい!!」
力押しに対抗すべく優は、強大な大荒魂の力を利用するように鉄の棒を時計回りで掬い上げるように回して、大荒魂へのカウンターとして紫の股関節辺りを狙うが、大荒魂は後ろへ退がると、難なく躱していた。
「小童如きがっ、どのみち何もかも見通す力がある限り、我に傷を付けることすら叶う――――。」
大荒魂が全てを言い終わる前に、優は鉄の棒を垂直にし、紫の顔面、足と腕の関節を特に狙って、突きながら追撃していた。
「そのようなもので……。」
優の追撃を大荒魂は紫を僅かにずらして躱しながら優に近付くと

右手に持つ御刀を振り下ろして、鍔迫り合いに持ち込んでいた。
「……力と反応は、あっちの方が上、これがノロの量の差なのかな？
……！」
　優は顔を歪ませながら、力を分散させるため鉄の棒を少し右斜めにして大荒魂の振り下ろしの斬撃をどうにか防ぐ。しかし、大荒魂は優が持つ鉄の棒の形に合わせて、滑らせるように鉄の棒を掴む優の左手の指を狙って斬ろうとしてきたことに、優は気付くと鉄の棒を左手の指だけパーの形にして回避するも、相手は二本も御刀を持っていたため、もう一方の左手の持つ御刀で横薙ぎに斬り掛かってきた。それに反応した優は回避できないと瞬時に判断し、刀の強く深く斬れる切っ先の部分で斬られるぐらいならばと、間合いを詰めるかのように前に進み、切っ先以外の刀の部分を腹で受け止め、受けるダメージを可能な限り最小限に抑えようとした。そのため、相手の懐に飛び込むこと同時に致命傷を避けることができた。
「……！」
　しかし、致命傷を避けたとはいえ無傷ではないので、痛みに堪えるかのような表情をする。だが、それでも優は攻撃の手を緩めることなく、相手の懐に飛び込めたという優位性を最大限発揮させるため、鉄の棒を短く持ち、紫の側頭部を狙って叩きつけようとする。だが、大荒魂はその攻撃も読んでいたのか、間合いを空けるため、優を蹴り飛ばしていた。
「ぐっ……！」
　優は体重が軽いので、蹴り飛ばすこと事態は容易であった。そして
……、
「……我は子供といえども容赦はせぬぞ。」
　優がノロで強化されたのは、対刀使用として強化されたのであって、荒魂用に強化された訳ではない。
　今まで、御刀から超常の力を引き出すことができる刀使を相手に優位に戦えたのは、年下の子供を斬らねばならないかも知れないという心理的動揺を突いていたことと、先読みが可能な龍眼が使えたからであること、刀使が知りえることもない剣術以外での銃といった近代兵

器と対刀使用の矢を使った奇襲攻撃。それらの攻撃が通じる相手であったからこそ今まで戦えたが、今の相手は二十年前の大荒魂であるため、子供を相手にするという嫌悪感から来る心理的動揺を生じさせることはできなかった。

「そのうえ、ノロの量は我の方が上だ。お前の様な壊れかけの器とは違う。」

優は龍眼を使って、鉄の棒を振り回して攻撃するが、相手の大荒魂は優の攻撃を難なく二刀の御刀を以って、力を受け流すように躱していた。それもそのはずで、相手は２０年分のノロで更に強化された大荒魂である。相手の大荒魂の方がノロの量、質は共に優より上であった。となれば、龍眼同士の戦いでは大荒魂の方が一歩先に行っていた。

（……この棒だと先の攻撃が読める相手には相性が悪い。けど、銃なんかじゃ効き目がない。）

優が持っている鉄の棒は質量が有るので、大振りになり、先を読むことができる龍眼という能力を持つ大荒魂相手には不利であった。そのうえ、銃やスタングレネードといった近代兵器、対刀使用の矢は荒魂相手に通じる物でもなかった。

「優ちゃん!!」

「今行く!!」

可奈美と姫和もどうにか援護しようとするが、両名共にＳ装備を失い。更には、可奈美は既に損耗していることと、姫和は斬ることに躊躇うようになったことにより、鞭のようにしなり、他方向に斬り掛かってくる４本の荒魂の腕を掻い潜ることもままならなかった……。

そして、優は一人で大荒魂と対峙する格好となってしまう。

（……銃も矢も効かない、こいつが相手だと、この棒じゃ相性が悪い……。やっぱり、真正面から戦うのは苦手だな。……なら！）

優が持つ武器。子供を相手にするという忌避感からくる心理的動揺を突く、近代兵器等の道具による不意討ち、御刀以外の武器での搦め手、そして龍眼による未来視、今まで使ってきた戦い方が全く通じない相手にいかにして立ち向かうべきか優は悩んでいた。どうやっ

て、この大荒魂を殺すべきか。
「所詮貴様などに、我らの間に入ることは――――！」
大荒魂はそう言うと、大きく振りかぶるが、優が突然後ろへ跳び退がると瓦礫の後ろへ隠れ、その瓦礫に鉄の棒を叩きつけて土埃を起こす。
「悪あがきをっ!!」
優が起こした土埃から、鉄の棒が現れ紫に向かって真っ直ぐに突くかのように来るが、大荒魂はその攻撃も予知していたかのように鉄の棒を払い除ける。しかし、優は鉄の棒を投げ、鉄の棒を囮にして別方向から大荒魂に近付こうとしていた。
「接近さえすれば。……！」
先程、この大荒魂は間合いを詰めれば、優を蹴り飛ばしていた。つまり、大荒魂との間合いを詰めることが出来れば、御刀の切っ先の部分で相手を斬ることも、突くこともできないから、間合いを詰められると、対抗手段は蹴り飛ばすことぐらいしかできないのかも知れないと判断した優は、迷うことなく零距離まで近付き対刀使用の矢か素手で、紫の腹等といった部分を殴るか刺し続ければ、紫を纏っている写シが剥がれ、手足を負傷させれば、この大荒魂を相手にすればいいだけなので、この大荒魂を殺すことができるかも知れないと思い、紫に接近する優。
「言った筈だ。…我には全て視えている。」
しかし、龍眼によって全て見破られているのか、大荒魂は既に其処から優が現れることが分かっていたかのように立ちはだかっていた。
「あっ……！」
優は、大荒魂の初撃の右からの突きをどうにか回避するが、もう一方の左側からの御刀を掬い上げるかのような逆袈裟斬りは、鉄の棒を失い、対刀使用の矢しか持っていない状況であったために、避けられないと判断すると、左腕を犠牲にして、御刀からの攻撃をどうにか避ける。
「……優ちゃん!!」
可奈美の悲痛な声が上がる。

（……こっちの先の行動を読むから不意討ちが全く通じない。剣術なんて使えないけど、あいつ殺せないから使うしかないか。）

それと同時に、優は対刀使用の矢を紫に向けて投げると、大荒魂は紫に向かって投げられた矢を弾いたので、その隙に結芽が使っていた御刀ニッカリ青江を持って構える。

「……くっ、うおおおおおお!!」

優を傷付けた大荒魂に激怒したのか、可奈美は雄叫びを上げながら大荒魂に突っ込んで行く。

「……愚かな。」

その言葉と同時に大荒魂は、荒魂の腕で伸縮自在なゴムの様に伸ばして、姫和に襲いかかっていた。

「ぐっ……!」

荒魂の腕が持つ御刀の突きを受け、姫和の写シは剥がれ、転倒してしまう。

しかし、可奈美はそれに構わず、冷静さを欠いたまま、ただ一点に向かい、遮二無二に真っ直ぐ突っ込んでしまったため、突然紫と荒魂の腕が同時に迫って来たことに驚愕する。

（……あっ！）

可奈美は避けられないと思い、悪手ではあるが、つい目を閉じてしまう。

「うわぁっ!!」

しかし、可奈美は突然突き飛ばされ、何事かと思い大荒魂の方をを見ると、

「……あっ、……あぁっ……。」

優が可奈美の身代わりとなって、大荒魂の攻撃を一身に全て受けていた。

（……私が、……私がもっと〝強い刀使〟だったら、……こうならなかったのかな……。）

その光景を見て、意気消沈し呆然と見つめることしかできない可奈美。

「本来であれば我らの間に力の差はない。……だが、人ごときを必要

とした愚かな貴様と不要とした我。それがこの結果だ。」
勝利を確信した大荒魂は、優の中に居るであろうタギツヒメに向けて、侮蔑の意味の言葉を投げかけると同時に、優を放り投げる。
（……ねえ、ヒメちゃん。あいつヒメちゃんのことバカにしなかった？）
しかし、優はタギツヒメことヒメちゃんに大荒魂が言っていたことが気になり、尋ねていた。
『……えっ!?い、いやそんなことはないと思うぞっ!!』
そのことを尋ねられた優の中に居るタギツヒメは何か不穏な物を感じ取ったのか、そんなことはないと言っていた。
「……いや、絶対あいつ言った。…それぐらい分かる。…あいつ絶対許さない。…絶対赦さない。…殺せないのは絶対嫌だ。…絶対ヤダ。…絶対コロス。」
小さな声で呪詛の様に呟く優。
（だからヒメちゃん、全力出して。…じゃないと、あいつ殺せない。）
『いやいやいやいやいやそれをしたらお主の身体がどうなるか分からんのだぞ!?それに、そんなことしたら可奈美お義姉様が泣いてしまうし我がメチャクチャ怒られ――――』
優はタギツヒメに力を抑えることを止め、全力を出す様に言っていたが、タギツヒメはそれを行うと優の身体がどうなるか分からないので止めるよう必死に説得していた。
（……いいからやれよ、僕はどうなっても良い。だけどヒメちゃんのことをバカにしたあいつ許せない。……だからどんなことをしてでもあいつ、あの目ん玉を殺す。）
だが、優はタギツヒメの警告を全く意に介さず、自身の身体がどうなろうが気にも留めず、全力を出すようにタギツヒメに指示していた。
『……そうだ、優、ぶっ殺せ。』
『何も仕返しできないの、悔しいだけだもん。』
『殺そう。絶対!!』
優の中に居るジョニー、ミカ、ニキータも優の中に居るジョニー、ミ

カ、ニキータの三人は紫の中に居る大荒魂を殺すべしと言ってきていた。

『えぇ……。何もそこまでしなくても。』

しかし、同じく優の中に居る結芽が何もそこまでする必要はないのでは?と言ってきていた。

『うっせぇ!!何言ってるか知らねぇけど、あの目ん玉がコケにしやがったのは分かるんだよ!!』

『そうよ!!やり返せないままなんて絶対イヤッ!!』

『絶対殺したい!殺したい!!殺したい!!殺したい!!』

だが、彼らは自分達の仲間であるタギツヒメを馬鹿にされたのが、何よりも不愉快であった。だからこそ、彼らは大荒魂を殺すべしと叫んでいた。

――――しかし、彼らは気づかない。

優が沙耶香を手にかけようとした時も、真希を拳銃で撃った時も、優がＳＴＴ隊員を惨殺したことも特に止めなかったのに、自分達の仲間が侮辱されればその相手を殺すことに何も抱かず、自分勝手な言動をしていることに。

そして、タギツヒメが全力を出せば優の身体がどうなるか分からないというのに、気にも留めず無責任な行動を取っているということに考えもしなかった。

『……ぬ、ぬおおおぉぉぉぉぉぉーーーーっ!!』

そのため、タギツヒメは全力を出して優の身体を壊したことにより、可奈美に嫌われたくないこともあって全力を出すのに一旦は躊躇したが、結局は優の言う事を聞かなかったがために優に嫌われてしまうことを恐れ、叫びながら抑えていた力を解放することにした。

「さて、どうする?母と同じ秘術を使うか?その御刀を当てる事ができれば、だが、お前達の剣は私に届くことはない。折神　紫を超える刀使はこの世に……。」

明らかに戦意を失っている姫和と可奈美に向けて言う大荒魂。しかし、優が満身創痍でありながら立ち上がっていることに気付き、そ

ちらに顔を向ける大荒魂。
「……優ちゃん？もういい、もういいよっ!!ここは大丈夫だから、お姉ちゃんに任せて!!」
　可奈美は悲鳴に近い声を上げながら、優だけでも逃がそうとする。
「……もういい、お前だけでも逃げろっ!!」
　姫和は、尚も立ち上がり戦い続けようとする優に向けて〝逃げる〟ように説得する。せめてあの子の命だけでも守ろうと、姫和は外れてでも大荒魂に〝真の一つの太刀〟を使おうと意気込む。
「……ダメだよ、可奈ねーちゃん、姫和おねーちゃん。……こいつは〝僕等〟をバカにした。それだけでこいつを殺す理由は充分にある。」
　しかし、優はそう言って逃げることを拒否した。
「……愚かな。」
　大荒魂は、それだけ言うと可奈美と姫和の両名を荒魂の腕の腕力で弾き飛ばし壁にぶつけると同時に、優も荒魂の腕が持つ御刀で刺し貫いていた。
「筋は良い。…だが、母親には遠く及ばぬ。所詮は雛……ん？」
　大荒魂は可奈美と姫和をそう評しているとき、優がその荒魂の腕を掴むと、後ろに跳びながら、荒魂の腕を御刀ニッカリ青江で斬って千切っていた。
「だが、一滴の雫が落ちた――――。」
　大荒魂はその行為は所詮小さな悪あがきだと思い、高を括っていたが、次の瞬間、可奈美と姫和、この大荒魂でも驚愕する事態が起きる。
　それは、ガリッ、ガリッ、っと何かを噛っている音が聞こえたので、その音の元を見ると、
「……何を、…している？」
　先程斬って千切った荒魂の腕を優が噛んでいた音であった。
（……噛み千切れないな。）
　そう言って、優は噛み千切るのを止めて、荒魂の腕の切断面から赤い液体状となっているノロを吸い取っていた。
「……何か、ゲテモノは美味って聞いたことあるけど、チョコミントアイスみたいに美味しくないな…。鉄の味がする。」

幼い子供が事も無げに、未だ痙攣している荒魂の腕の切断面を咥え、ノロを飲んでいることに可奈美と姫和、そして流石の大荒魂もこの少年の行動に恐れを抱き、呆然と見入ってしまっていた。

「さぁ、……殺ろうか。」

その宣言と同時に優の身体は変化していった。

――――優の右額から鬼の角の様な物が生え、

――――可奈美と同じ色に近かった優の右目の瞳の色はタギツヒメと同じ色となり、

――――可奈美と同じ色に近かった優の髪の色は右半分のみ夜見と同じ白い色となり、

――――そして、斬られた優の左腕は荒魂の腕の様に太く、黒くなっていた。

ひとつの太刀

（……あの子童の瞳と髪の色が変わり、角が生えてきたということは、自身の身体をノロに侵食させ、荒魂の力を強めると同時に、身体能力と龍眼の強化を図った……。といった所か。）

大荒魂は自身の荒魂の腕を咀嚼する優の姿を見て、動揺するが、優の身体の変化によって冷静さを取り戻した後、身体の変化は自身の身体能力と龍眼の強化をするために、自身の体をノロに侵食させ、荒魂の力を強くしていった結果だろうと結論付けていた。それならば、２０年分のノロを取り込んだ自分の方がまだ有利であると判断すると、

「だが、その程度で我に勝てると思って――――!!」

その言葉と同時に大荒魂は優に斬り掛かるが、荒魂の腕が持っていた御刀が優の身体に刺さったままだったので、優は自身の身体から一気に引き抜くと、紫に向けて投げる。大荒魂は優が投げてきた御刀を弾いて防ぐが、その代わりに優の接近を許してしまう。

「何!?」

大荒魂は驚愕していた。相手は剣術経験の無い子供であるのにも関わらず、地を這う蛇の様に動き、紫の鳩尾を狙った〝平突き〟に、大荒魂も流石に身長差から避けることしかできなかったが、何よりも〝天然理心流の平突き〟を使ってきたことに驚愕していた。

そして、大荒魂にとってはありえないモノが視えてしまっていた。優の動きが、結芽の動きと似ている部分が多く感じ取れていた。

左足を狙った足払いと薙ぎ払い、反撃の上段斬りを薙ぎで軌道を逸らし防御するだけでなく、薙ぎ払いと共に流れるような突き、迅移を使って突然背後に回ると同時に宙を舞うかの様な回転斬り、そして踊る様に跳ねながら剣を振るい続ける。

その迅移を駆使した縦横無尽の動きと、尚且つ流れるかの様な連撃にさしもの龍眼も対処不能なのか、大荒魂は優に有効打を与えることはできなかった。

……尚、優が結芽の動きを本当にできるようになったわけではなく、荒魂の力を強くしたことによる、強化された身体能力任せに打ち

込んでるだけのことであり、実際はできていない状態である。
しかし、大荒魂も黙ったままなのはさすがに不味いと思い、打開策を講じる。そして、大荒魂はあることに気付き、仮説を立てていた。
（燕　結芽のノロを吸収して、その記憶から天然理心流を模倣しているのか？だが、その様な事で……。）
以前、結芽とは何度も立ち会ったが紫は何度も白星を上げていため、脅威ではないだろうと高を括り、二刀の御刀で斬り掛かる。
「……ありえないっ。」
だが、当たらない。二天一流の技が何一つ当たらない。
「ありえないっ!!」
龍眼による未来視で視ても、何一つ当たらないという結果が出ていた。
「……あのさぁ。」
不意に優が大荒魂に向かって、言い放つ。
「ごちゃごちゃとうるさいんだけど？」
ただ喧しいだけだと……。
大荒魂はその言葉に憤り、荒魂の腕を使うと、一瞬だが対処が遅れた様に感じていた。
（……もしや、龍眼ではなく燕　結芽の記憶から紫の動きを読み取って攻撃を対処していたのか？）
それが、紫の二天一流を避け続けられ、荒魂の腕の対処に遅れた理由ではないかと推測していた。
（……ならばっ!!）
大荒魂は荒魂の腕による最速の突きで〝優を刺せるか〟どうかを龍眼で確認していた。すると、優は避けられず、串刺しにすることができたことにより、推測通りであったと内心ほくそ笑むと、大荒魂は龍眼の予測通りに荒魂の腕による最速の突きで優の腹を串刺しにしていた。
「……ありがとう。力を貰うよ。」
優はそう言うと、笑顔で荒魂の腕を掴み、後ろに下がると同時に荒魂の腕を斬って千切り、荒魂の腕の切断面を咥えていた。

（……しまった！）

先程と同じ様に吸収されると判断した大荒魂は慌てて優に接近するが、また同じ様に迅移を駆使した縦横無尽の動きと、尚且つ流れるかの様な連撃を受けることになり、大荒魂は先程の激しい剣戟へと戻されてしまった。

（……我は奴の誘いに乗ってしまったのか!?）

大荒魂は、優が荒魂の腕の対処に遅れたのは、荒魂の腕を使わせ大荒魂と分離させ、その部分のみ吸収するためにそう見せたブラフではないのかと思い込み始める。

ただ実際は、大荒魂の推測通りであり、何度も紫に挑み続けた結芽の記憶とタギツヒメが持つ龍眼の未来予測で紫の肩の動きのみを視て対応していたことと、

『相手が先読みしてくるなら、相手よりもとにかく素早く動いて息つく暇を与えずに攻撃っ!!遅れんなっ!!』

結芽の厳しいスパルタ指導と結芽独自の龍眼対策の戦法を頼りに二天一流の攻撃を躱し続けられただけのことである。それを悟られぬよう、客を相手に嘘を使っていたミカが、敵を殺す術を覚えているジョニーが、

『あっ、そうだ。あの伸びる腕を使わせてたら勝てると思い込ませて、今みたいな伸びる腕を引き千切って吸収すれば、あの目ん玉動揺するんじゃない？』

『おお、そうだな。それに、俺が考えた千切った腕をもう一回喰えばあいつビビるんじゃね？』

といったアドバイスを優に伝え、言われた通りの行動をし、大荒魂の力を奪い取れていた。

（ならば、あの雛共を人質にして……何っ!!?）

龍眼の攻撃が通じないと見るやいなや、大荒魂は早期に決着をつけようと、可奈美達を人間の盾にして、勝利を得ようとしていた。しかし――――、

（……何だと!?）

可奈美、姫和、舞衣、沙耶香の誰かを人質にしても、

――――全て、その人質ごと大荒魂を斬ろうとする優の姿が龍眼を通して見えていた。――――

（……何故だっ!!）

大荒魂は驚愕した。

『折神紫、我は取引を提案する。』『我と同化しろ、さすれば藤原美奈都と柊簪の命は救われる。』

嘗て、こういった人の心の良心を利用し、紫を脅して、紫の身体を乗っ取ることが出来た。そのため、大荒魂は人の心の良心を理解できるが故に人の良心を利用することができた。……しかし、目の前の少年は可奈美のことを大切にしている筈である。なのに、龍眼を通して視た優は、何故か可奈美を人質にしても、何事も無いかのように斬り殺していたことに、大荒魂は先程の荒魂の腕を喰うといった行為を事も無げに行う優のことを思い出してしまい、この少年に恐れを抱くようになる。

『あの目ん玉。こっちのこと怖がってる。』

優に畏怖の念を抱いてしまった大荒魂は、恵んでくれる人の見分け方を教えられ、物乞いビジネスに従事し、感情の機微に聡くなったニキータによって大荒魂が動揺していることに気付かれてしまい、優に動揺していることを知られてしまう。

「なんだ……？お前は、一体？」

しかし、何故龍眼を通して見た優は何事も無いかのように斬り殺してしまえるのかと言うと、大荒魂が知る由も無いことだが、タギツヒメが言うには刀使に対抗できるようにするため、スレイド博士による、

『……人を殺すことに疑問を持たないこと、目的達成のためなら自己犠牲も厭わないこと、この二つだけの筈だ。』

洗脳と暗示によって、優はそのような内容を植え付けられていた。
そのため、目的達成のためなら自己犠牲も厭わないこと、という洗脳を受けていたため、タギツヒメのことを馬鹿にした大荒魂を殺すことを〝目的〟として、無意識にすげ変わっていた優は可奈美達のことが見えなくなっていた。
だが、優は此処に来る時、天井を突き破って来ていた。下に可奈美達が居るのにも関わらずにである。つまり優は、瓦礫が可奈美達の下敷きになることを全く考慮していない訳であり、後先考えない衝動的な行動を行う前兆は有ったのである。
しかし、大荒魂は目の前に居る少年が理解出来なくなり、次第に化け物か何かのように思い始める。
そのため、大荒魂は龍眼が出した荒魂の腕による最速の突きが有効、人間の盾は無意味といった〝最良の結果〟を信じていいものかどうか判断しづらくなりつつあった。更に――――。
『ですが困ったことに私達もそんなものを造ったのは初めてでして、いかんせんあのマッドでも久しぶりのことらしく、ノロの量を間違って〝病弱な体〟にとっては致死量となるようにしてしまったかも知れません。』
病弱な身体にとっては致死量となる程の多量のノロを結芽から受け継いでいること。
『半年前は紫様が肉体の自由を奪われながらも、内側からタギツヒメの力を抑えていてくれた。だが今は違う、タギツヒメは紫様という枷から解き放たれた。』
可奈美達が知りうることではなくなるかも知れないが、本来の世界線の真希が言うにはこのときの大荒魂は弱体化しており、
『人体に大荒魂との融合を完成させることだ。……確かに、伴侶と一つになれた。しかし、我が伴侶から抜ければ、ノロで強化された身体

は無くなり、投薬と暗示の影響で優は薬物依存と様々な副作用によって短命化することになるとは思いも寄らなかった。だからこそ、我は伴侶のために全ての力を出していない。出してしまえば伴侶がどうなるか分からんから傍に居てやるべきだと思った。……そういうことだ。』

そして、タギツヒメも全力を出さなかったが、優に言われ、全力を出すことにし、

『でないと、私の凄いとこ、見せられないじゃん。』

自分の存在を他者に認識して欲しかった結芽は、最強の刀使と云われている紫に何度も挑み勝利を得ようとしたが、ソフィアに横槍を入れられ、ついぞ叶うことはなかった。

しかし、結芽が紫に挑み続けてきたからこそ、優は大荒魂が使う紫の二天一流を躱し続けることができた。

母の愛を知らない優が自身の身体を犠牲にして、タギツヒメの力を強め、身体能力と龍眼の力を底上げしたこと――――。

生まれたときから貯蔵槽の中に居た記憶しか無いタギツヒメが持つ龍眼のお陰で、一手先が見えていたこと――――。

ジョニーが家族を失い少年兵となり、銃と戦い方を教えたからこそ、此処まで来れたこと――――。

親によって花を売ることになったミカが客を相手に嘘を吐いていたため、はったりで相手の龍眼を封じれたこと――――。

ニキータが物乞い仕事を心無い大人達にさせられたことにより、人の感情の機微を読み取るようになったこと――――。

そして、両親から捨てられた結芽は最後の最後まで自身の運命に抗うためにノロを受け入れ、自らの天然理心流で紫の二天一流に挑み続けたことにより、結芽の天然理心流が紫の二天一流に拮抗していた――――。

そういった要素が一つ一つ繋がり、優と大荒魂の戦いは、今や龍眼やノロの量と質の差ではなく、純粋に結芽の剣か紫の剣かどちらかが優れているかという真剣勝負となっていた。

『……ありがとう、……みんな、ありがとう。』

結芽は真希と寿々花を救えず、夜見に酷い事を言ってしまったまま命を失ってしまったことに無念を抱き、自分の人生は剣術は一体何だったのかと意味はあったのかと思ってしまうほど思い詰めてしまっていた。

しかし、自分が持つ天然理心流の技が、あの現最強の刀使と云われている紫を相手に五分の勝負に持ち込めているのを見て、意味はあったと優と此処に居る子供達に教えて貰っているかのように思え、結芽は小さく誰にも聞かれなかったが、感謝の意の言葉を呟くと共に、結芽の心と血潮は昔日を思い出すかのように熱くなり、手を奮わせながら、その光景を見続けていた。

こうして、外敵の脅威によって仲間を奪われ、傷付けられ、ついには命を失ってしまった燕は今再び、飛び立つ不死鳥の如く復活し、親衛隊最強と謳われた結芽の剣（つるぎ）は今再び最強の座に君臨する紫の二刀流に挑もうとしていた。

「……もっと、……もっとちょうだい。ヒメちゃん。」

そして優も理由はよく分からなかったが、結芽の天然理心流で勝ちたかった。

だからこそ、自身の身体がノロに侵食されるという激痛に苛まれながらも、更に笑顔で力を引き出そうとする優。そのためか、右額から生えた角は更に大きく、耳を覆う形となり、荒魂の腕となった左腕も更に太くなっていった。

（何だ……？何なんだお前は？そうまでして何故戦える!?）

満身創痍となり、最早荒魂と言っても過言ではないかのような姿となりながらも、熊の形をした鍔とイチゴ大福ネコのシールを貼った少女趣味溢れる御刀を携えるこのアンバランスな少年に大荒魂はある種の恐怖を感じていた。

『……やはり、我等は滅ぼされる運命にあるのか……。』

大荒魂のどこか自己否定的で自身の存在意義を見出すことを原動力とする分身が勝手にそう結論付けていた。
（……うるさいっ!!お前も考えろ!!）
大荒魂は感情的に、自己否定的な半身にこの窮地を脱する方策を考えろと言っていた。
『ここは逃げるべきではないのか？』
それに応えるかのように、人間への支配欲を原動力とする分身にここは一旦退却すべきであると進言されるものの、
（やっと、ここまでしてのけたのだぞっ！あんな子供（ガキ）に後ろを見せてたまるかぁっ!!）
と言って、人間への支配欲を原動力とする分身の進言を却下していた。そのため、
『……ここが引き時か。』
人間への支配欲を原動力とする分身が、そう小さく呟いたことに気づかないままであった。
「くそっ!!舐めるなぁっ!!」
しかし、残った荒魂の腕で優の御刀を持っている方の腕を抑えつけると、もう一方の荒魂の腕で刺し貫き、壁に押しつけるということをやっと思いついた大荒魂は、荒魂の腕二本で優を壁に押しつけると、
「がっ！」
優は後頭部に壁が当たり、意識が朦朧となる。
そこへ、大荒魂が、
「悪あがきも、これで終わりだあぁぁぁぁぁっ!!!」
咆哮と共に優に向かって、二刀の御刀で切り刻もうとしていた。―

―

少し時は戻り、真希はおぼろげながら気を取り戻し、周りを見ていた。

すると、剣戟の音が聴こえたので、そちらの方へ目を向けると、大荒魂と戦っている者がいることに気付いてしまう。
（……あれは、誰だ？）
大荒魂と単独で打ち合っているということは、それ相応の実力を持つということである。何者であるか見てみると。
（……結芽？）
忘れもしなかった。目標としていた一人の子の動きは。だからなのか真希の目には、優ではなく結芽と大荒魂が打ち合っているように見えた。
その光景に、真希は残酷な運命を乗り越えようとしていた〝結芽〟に希望の光明を見い出していた。
（……結芽、……そうだお前は僕達の切り札で親衛隊最強だ。……だから、紫様に乗り移っている不躾な荒魂を……倒せっ!!）
真希は立ち上がろうとするが、立ち上がることすら億劫であった。しかし、自分も親衛隊の一員である。結芽を一人にしておく訳にはいかない。
（……立て、立つんだっ!!）
どうにか意識だけで這い上がろうとする真希。だが、結芽が大荒魂の荒魂の腕が持つ御刀で刺し貫かれると、虫の標本のように壁に押しつけられる光景を見て、奮起する。
真希は残った力を総動員させて、祢々切り丸を再び持ち上げ、意識を全て大荒魂に集中し、
「悪あがきも、これで終わりだあぁぁぁぁっ!!!」
意識が混濁しているにも関わらず、大荒魂の咆哮だけがやけにクリアに聴こえ、そのように喋ったような気がした。なら、結芽が危ない。そう反射的にそう思った真希は、
「結芽えぇぇぇぇっ!!」
獅子のような咆哮を上げ、大荒魂と優の間を狙って御刀祢々切り丸を回転させながら投げていた。その技は、奇しくも山中の戦いで薫にしてやられた技と同じであった。そのため、残っていた荒魂の腕は全て斬られて吹き飛ぶか、喰われてしまった。

（……おそらく、僕の方に攻撃するだろう。……結芽、必ずその隙狙って勝て。……そうして、名を上げてみんなに……憶えていてもらうんだ。）

そう思いながら真希は、結芽が大荒魂を討ち滅ぼす未来を夢見ながら、意識を失い、倒れていった。

「……おのれぇ……!!」

怨めがましい顔をした紫、もとい大荒魂が真希の方へ向いていた。その光景を見た結芽は、手を握り締めながら、優に向けて大きく叫ぶ。

『立てっ!私の剣術を使っておいて、負けんなぁっ!!』

結芽の叫びにハッとなる優。押さえつけられていた荒魂の腕は力を失っているため、自由に動けるようになり、そして――――、

『そうだっ!結芽の技貰っておいて、負けてダセェ姿晒すんじゃねぇ!!』

ジョニーの荒っぽい声援が右足を立たせ――――。

『そうよっ!!ここまでお膳立てしたんだから、負けんじゃないわよっ!!』

ミカの激しい声援が両足を立たせ――――。

『結芽おねーちゃんは弱くないってこと、証明させてあげてっ!!』

ニキータの必死な声援が意識をハッキリさせる――――。

大荒魂は優が真正面から来たため、驚きつつも迎え撃とうとするが、それは叶わなかった。

優の突きが、まるで同時に三方向に放たれたように見えたため、先を読むことができる龍眼を持ってしても躱すことができなかったからだ。

大荒魂は今の〝三段突き〟とも云える技に驚愕するしかなかった。

但し、今の〝三段突き〟は荒魂の力を強くし、身体能力を底上げして三箇所をただ早く突き技を放っただけのことであるため、もし大荒魂が〝荒魂〟としてではなく、〝剣士〟として立ち会っていたら、すぐさま対処したことであろう（例を挙げると、可奈美がやったようにわざと刺し貫かれて、優を押さえ付けて、反撃する等。）。

「……お前は一体何だ!?……こんな未来ある筈が……!!」

しかし、大荒魂は荒魂として本気を出すことを選んでしまったため、対処ができず、為す術なく〝三段突き〟を受けてしまう。
「……何か、……剣術ってこうするんだね。ありがとう結芽おねーちゃん。」
結芽に剣術を教えてもらった優は感謝の意を述べると、少し昔のことを思い出していた。
『それに、お医者さんが言っていたでしょ?大きくなったら身体が強くなれるから、強くなったら剣術を一緒に頑張ろう?ね?』
少しだけだけど、剣術を使えるようになった自分を見たら、可奈美は喜んでくれるかも知れないと思い描きながら。
「この……。」
そして、大荒魂は、
――――自身の一部である荒魂の腕をことも無げに喰べる。
――――幼い子供が、死を恐れぬ死兵の如く突き進んでくる。
――――親類縁者を人質にしても、それごと斬ってくる。
――――龍眼を持ってしても、対処できない〝三段突き〟を使う。
これらを思い出しながら、優のことをこう評し、こう叫んでいた。
「化け物があぁぁぁぁぁっ!!!」
大荒魂は、本当の怪異は荒魂ではなく、この少年のことではないかと思い始め、激しく動揺し、型も何もない、大振りの上段からの振り下ろしで斬り掛かろうとしていた。
しかし、相手を動揺させ倒すという目的で強化された優にとって、その行動は最大のパフォーマンスを発揮することができる物でしかなかった。
結果、写シの上とはいえ紫の片腕を弾き飛ばし、天下五剣の内のひとつの太刀童子切安綱という御刀を手元から失わせる。
更に優は追撃を行うべく、御刀を持っていない方の腕から近付くと、元々ひとつの太刀であったニッカリ青江が結芽の強さを証明させるかの如く、宗像三女神の名を冠する大荒魂を女の幽霊を斬ったという逸話通りに大荒魂を斬っていた。
そして、斬られた大荒魂は人間とも、獣とも言えない金切り声を上

げていた。
『……済まんが、我はやらねばならぬことがある。ここを離れさせてもらう。』
『……同じく。』
そして、自己否定的な半身と人間への支配欲を原動力とする分身はそれだけ言うと、斬られた部分から天にも昇る程の紅い奔流を二本打ち上げると、本体を見捨てて逃げていた。
「……キサマらっ!!」
それを苦々しく見つめる大荒魂。しかし、それが大きな隙となり、
『あの目を斬れ!!そうすれば紫は意識が戻る筈!!』
優はタギツヒメからの指示を実行するため、自分の身体に刺さった御刀を抜くと、迷うことも躊躇うこともなく荒魂の目に向けて、御刀を投げ、当てると同時に姫和の〝ひとつの太刀〟のように迅移を使った平突きで大荒魂を突き刺していた――――。
大きな悲鳴を再度上げる大荒魂。優は突き刺した御刀を支えにして、荒魂化した腕の方で大荒魂の中に入れると、大荒魂のノロを吸収しようとする。
「……こせ。……ヨコセ。モット、ヨコセェ……!」
優は狂気を孕んだ瞳で、大荒魂が持つノロを全て吸収しようとしていた。
『……使っちゃダメ。…使っちゃダメだよ。姫和おねーちゃんが消えるくらいなら、そのおっきい荒魂、僕の中に入れる。』
嘗て、お祭りの際に交わした約束を守るため。
(……本当に、……本当に喰われるっ!!)
本当に全て奪われてしまうのではないかと思い始めた大荒魂は、自身のノロを殆ど囮にして、恥も外聞も無く紅い奔流となって、彗星の如く天に昇って逃れていった。
囮となったノロを全て吸収した優は、流石に満身創痍となりながら、ノロを身体に侵食させたことにより、優は気を失う。……可奈美と姫和の声を聴きながら。

epilogue 1

鎌倉の騒乱から数日後、刀剣類管理局本部――――。

優と可奈美達は鎌倉の本部にて、傷を癒していた。

特に優は、大荒魂タギツヒメを取り込んでいることもそうだが、紫が大荒魂に取り憑かれていたという事実をしばらくは隠匿するという政府の意向により、刀剣類管理局本部の医務室に幽閉されていた。

優は、その医務室のベッドで意識を一週間ほど失っており、その間だけ優の中に居るタギツヒメ達と声だけだが、話すことができた。

『……でな、優と我の馴れ初めはな。』

『ふ～～～ん、凄いね。』

『その後はな、我を信頼してくれたのかかなり話せるようになってな!!』

『へぇ～～～。』

結芽はタギツヒメの惚気話に付き合わされているのか、そんな会話が聞こえてきていた。結芽の方は、ミカからいつもの病気だから気にしないでと言われていたので、空返事であったことに気付かない興奮気味のタギツヒメであった。

『……ただいま。』

優はそれを気にせず、意識のみでタギツヒメ達と話す。

『ふお!!おっ、おかえりなのだ!!』

『荒魂って、こんなのばっかなのかな……。』

話しかけてきた優にタギツヒメは驚き、口調はおかしくなっていた。フレンドリーに話しかけられ、それを見た結芽はタギツヒメのことを斬り祓う対象とは見なくなっていた。

『おお、大丈夫かーって、大丈夫じゃねえか。』

ジョニーはいつも通りに気さくに優と話す。

『ね、ねえ、やっぱりさ、私が意識乗っ取って、戦った方が良かったんじゃあ?』

一方、結芽は優に大荒魂と戦わせていたことに後になって気に病むことがあったのか、優にそう尋ねていた。

『……何で？』
『いや、何でって、私のワガママに付き合ってもらったような物だし、それに、私が意識乗っ取って戦った方が、優に痛い思いさせずに済んだし、……ううん、いややっぱり私の方が強いから私がやった方が良かったんじゃないかと思っちゃってさ。』
結芽は大荒魂との戦いが終わった後、皆自分の剣術が強いと証明するために戦ってくれたような物であると気付き、それならば優が戦って傷付くよりも、自分が意識を乗っ取って戦えば傷付かずに済んだかも知れないと思い始め、そう言おうとしたものの、つい強がりで自分の方が強いから自分がやった方が良かったと言ってしまった。
『……そうかもね。でも、腹に刺されるの自力で立てないくらい結構痛いよ？耐えられる？』
『……うっ！そっ、それくらい我慢できるしっ!!』
優はジョニーの少年兵だった記憶から、腹を撃たれたジョニーの仲間がもがきながら死んでいく姿や、ジョニーが腹を撃たれて自力で立ち上がれない程の激痛に苛まれていたことを覚えていたため、優はそんな思いを結芽にさせたくなかったため、そう答えていたのだが、結芽は強がりで耐えられると答えていた。
『べっつに良いじゃん。誰が意識に居ようとさ、誰がどう思っても結芽があの目ん玉倒したんだから、気にしなさんなって。』
ミカが後ろから結芽を抱き締めると、そう言ってきた。
『……でも、それって結芽自信が強いんじゃないよね。荒魂の力とか、優を痛い思いさせて自分は安全な所へいて偉そうに言ってただけだし、優が凄いだけじゃないかな。』
しかし、結芽は引き下がらず、自分が凄いのではなく、優が凄いだけではと言っていた。タギツヒメ達は自分は凄いと言ってくれるが、そうは思えなかったし、何よりも他人の功績を自分が掠め取っているようで嫌だった。
『な～～に言ってんの！荒魂の力だったっけ？そんなもんあの目ん玉が好き放題使ってたんだから、ズルじゃないわよ。それに、優は自分で決めてそうしたんだから、水を差すようなこと言いなさんなって、

優はさ、剣術なんて知らなかった自分に剣術を教えてくれた結芽に痛い思いをさせたくなかったんだから、結芽の写シの代わりになるって言ってたんだよ。だから、あの目ん玉は剣術が一番強い結芽が居なかったら勝てなかった。だからさ、結芽はあの目ん玉をボコボコにするほど強かったんだよ。それで良いじゃん！』

しかし、ミカは結芽と優、タギツヒメ達が居なかったら大荒魂に勝てなかったと言い。そのうえで、結芽の今まで培ってきた剣術が紫を上回ったからこそ勝てたと伝えていた。

『……そんなこと言うの、ズルいよ……。』

ミカにそう言われ、涙が堪える結芽。

『まあ、良いじゃん。結芽があの目ん玉なんかどうってことないぐらい強いってことさ。なっ、皆!!』

結芽を宥めるかのように優しく言うジョニー。

『アレ～～～?いつものジョニーなら冷やかすのに、何でか妙に結芽ちゃんだけ優しくない?』

『ジョニーよ、今のお主結構分かり易いぞっ。』

『うっ、うっせぇやい!何かワリィかっ!!』

妙に結芽に優しくしていたジョニーに、何かを感じ取ったニキータとそれに乗っかったタギツヒメは一緒にジョニーを茶化すかのように言うと、ジョニーは歳相応に顔を真っ赤にして声を荒げていた。それを合図に、ジョニー意外のタギツヒメ達は年相応に笑っていた。

『そう言えば、同年代の友達ってこれが初めてなのかも。』

結芽は綾小路武芸学舎に入学してから、同年代の友人は居なかったことを思い出しながら、入学式以来の幸福を噛み締めていた。

単純だが、好きな人に囲まれ、幸福に包まれる。ごく平凡な世界であった。

一週間後、意識を取り戻していた優は、ベッドから無言で立ち上がっていた。
「君、まだ立ち上がると。」
「どうってことない。」
それを見た医者は、優に安静にするよう言うものの、優はそれだけ言うと、医務室から退室しようとしていた。
「……。」
それを見た医者は、満身創痍であったにも関わらず、予定よりも早く立ち上がったことと、角を生やし、左腕が荒魂の腕となっている優の異形な姿も相まって、ただただありえない物を見るかのように見ていた。
しかし、そんなことも意に介さず、いつも通りの表情と仕草で廊下を歩いていると、真希と寿々花の二人が待ち構えていた。
「……おまけの人達か。」
「まだ、言いますのぉ?」
優はいつも通りに真希と寿々花のことを未だにおまけの人達と勝手に名付けた渾名で呼んでいた。そのことに寿々花は怒気を含めて、勝手に渾名で呼ぶことを非難していた。
「……何で名前で呼ばないんだ?」
真希は、寿々花をどうにか抑えながら、優にそのことについて尋ねていた。
「よく知らないし、憶えていても仕方ないから。」
「……そうか。」
真希は寿々花を抑えながら、親衛隊第一席であり、大会二連覇の実績を持つため、周りの人間はそのことに特別視しており、大体は賛辞を送るかライバル視してくるかのどちらかであったため、優の『知らない。』という返答は真希にとってある種の新鮮さを感じていた。
「ところで、君は何故結芽が使っていたニッカリ青江を持っているんだ?」
しかし、真希はそのことを尋ねたくて寿々花と共に、優を待ち構えていた。ただ無惨に結芽を殺して奪ったのなら、容赦はしないと心に

決めて。
「？……何でそんなことを聞くの？結芽おねーちゃんのこと知ってんの？」
だが、意外な返答に思わず、真希と寿々花は動揺する。
「……何故、結芽だけおまけの人呼ばわりしないんですの？」
寿々花は、不満を隠さずに結芽のみおまけの人と呼ばない理由を訊いていた。
「それは、僕達の仲間だからだけど。……それよりも何で結芽おねーちゃんのこと知ってんの？」
寿々花は、「ややこしい子ですわね!!」と言って頭を抱えていた。
「僕等は親衛隊に所属していて、結芽も親衛隊所属だったんだ。」
しかし、真希はどうにか気を取り直して、結芽の仲間だと言わずに優の疑問に返答していたため優は、
「ふ～～ん、そうなんだ。」
と興味無さげに答えていた。もしも、真希と寿々花が結芽とは仲間だったと答えていたら、優は真希と寿々花も仲間として認識し、今後おまけの人と呼ばれることはないということに真希と寿々花は気付けなかった。
そして、優も結芽の記憶から真希と寿々花のことを知ってはいるが、石廊崎での戦いもあり、結芽と同じ所属先に居たとはいえ、こちらの味方とは限らないので警戒していたため、名前で呼ばず、渾名で呼んでいた。
「でもこれだけは言える。結芽おねーちゃんが強かったから、僕等は勝てたんだよ。」
結芽の剣術が強かったからこそ大荒魂相手に勝利できたことを、無表情だが優は念を押すように真希と寿々花に伝える。
「何故、そう言える。」
「僕の中に結芽おねーちゃんが居るからだよ。……そんでもって、一番強い剣術を教えてもらった。」
真希は優に真意を問うかのようにそう訊いてみた。すると、優は真希を見据えながらこう言っていた。結芽が強かったから、大荒魂を討

伐できたと。優はそのことを伝えることによって、ただ何となくだが、結芽という人が居たことを一人でも憶えてもらうことができると思っていた。

「……そうか。」

真希はそれだけ言うと、優に対する戦意を失っていた。

「お前ら！何をしている！」

突然、そう叫ばれた真希はその声がした方に顔を向けると、鬼の形相をした姫和が居た。

「……何もしてませんわよ。」

寿々花は両手をヒラヒラさせながら姫和にそう答えて、何も危害は加えていないと伝えていた。

「そうか、ならもう良いな。行こう優。」

姫和は真希と寿々花にそれだけ言うと、優をひったくるように手を捕まえて強く握ると、真希と寿々花から離れていった。

「あっ、ちょっと……！」

「良いんだ、寿々花。」

それに驚き、話はまだ終わっていないとばかりに止めようとする寿々花だったが、真希がそれを遮っていた。

「もう良いんだ寿々花。結芽は……ちゃんと、必要とされていたからこそ、いや、結芽のことを大切に思っているからこそ、大荒魂を討伐した結芽のことを忘れるなって、言ってきたんだ。……もうそれだけで充分だ。仇を討つことを考えていた、けどそんなのは居なかった。……だから、そんなことしてもきっと、結芽は喜ばない。……今の結芽は幸せだ。だから、あの子を見守って上げよう。」

真希は涙を堪えながら、結芽が親衛隊から卒業してしまったことを受け止め、寿々花にそう話していた。

「……親衛隊に一人、欠番がでましたわね。」

「ああ、そうだな。……でも、元親衛隊の結芽はまだ居る。だから、笑われないように、僕達も強くなろう。一緒に。」

真希は、寿々花の手を握りながら目を真正面から見ながら、寿々花に自らの決意を語る。強くなろうと……。

「……良いですわよ、何処までもお手伝いしますわ。」
そして、その決意に同意する寿々花であった。

姫和は優と共に歩きながら強く、強く握りしめていた。
「……姫和おねーちゃん？」
優の手を包みこむように、もう二度と離さないかのように、手を離してしまえばもう会えないかのように、自分の魂が優ごとどこかへ去ってしまいそうな気がしたから、手を強く握っていた。
それを不思議そうに見る優。すると、姫和は突然振り返って、
「……。」
じっと優のことを見つめていた。
鬼のような角を生やし、右目の瞳の色と右半分の髪の色が変わり、左腕が荒魂の腕となっている優を見つめていた。そんな優の状態でも姫和は優のことを荒魂として認めなかった。決して認めなかった。
「……優、私は平城に戻ることになった。けど……。」
そして、姫和は搾り出すように言う。
「……刀使は続けようと思う。」
自分の決意を語る。
「……だから、安心してほしい。ずっと側に居る。」
そうして、姫和は自身に解けない強い呪いを自らかけていた。
ただ、認めたくなかった。優が〝荒魂〟であることを、ただ、認めたくなかった。自分が思い描いた母の思いを自ら捨ててしまったのだから、最早、彼女に残っている選択肢は優と可奈美を救うことだった。
「……うん？」
優はよく分かっていないのだろう。首を傾げながら答えていた。
それを見た姫和は、クスッと笑ってしまった。
「……約束しただろう？私は、私はお前を助ける。……だから、可奈美も助けたい。それまで、ずっと一緒にいる。だから、優も何処かへ行かないでくれ。ずっと側に居て、またチョコミントアイスでも食べに

行こう。可奈美と一緒に三人で。」
「うん。僕もチョコミントアイス好きだから、待ってる。」
「ああ、チョコミントアイスが美味しいのは当然だろ？」
姫和は、今も飛べない子烏は鳴いていた――。
ただ、優が消えることになってほしくない。ただ、ずっと側に居てほしい。それだけを願って……。

――だから、ずっと側に居てほしい。私は、私はそう願っている。――

「――報告は以上です。」
薄暗い部屋の中でトーマスは本来の雇い主であるＣＩＡ長官にパソコンの画面越しでこれまでの経緯を報告していた。
『……ふむ、望んだ結末ではなかったが、まあ、これで良しとするか。』
ＣＩＡ長官の言う望んだ結末というのは、紫に取り憑いた大荒魂が優を殺し、タギツヒメと同化させ、それに激昂した姫和が〝ひとつの太刀〟で大荒魂を隠世の彼方へと送ってもらうことである。
つまりＣＩＡの目的は、姫和を利用し、米軍がスレイド博士に依頼したノロと人体の融合という非道な人体実験の証拠となる衛藤　優と米軍への影響力を日増しに増す折神　紫の抹殺。この二人を抹殺し、刀剣類管理局による米軍への影響力を無くし、米軍がノロと人体の融合実験を行っていたという証拠を消すために舞草に兵を送る等して協力していた。
「……それは残念でしたな。」
『ああ、全くだ。このために君達を送ったり、自衛隊の制服組やら、日

本政府の官僚やらに掛け合ったりしたのに、……結果は兵士を無駄に死なせてしまうわ、〝例の荒魂〟は処分出来ず刀剣類管理局の手の内となり、こちらの弱みを多く握られてしまった。……散々だ。』

トーマスは恨めがましく返答するが、ＣＩＡ長官はそれに気にせず浪費しただけの結果に毒づいていた。

（よく言う、さっきまで見捨てようとしたくせに……！）

トーマスは、舞草が窮地に陥っていたときに連絡が取れないようにしていたＣＩＡ長官を心の中で非難していた。

『……まあいいさ、君の過去の報告通りなら、〝例の荒魂〟はまだ使い様はある。』

「と、言いますと？」

ＣＩＡ長官の不穏な言い方に、怪訝に思ったトーマスは何をする気なのか尋ねてしまった。

『確かに局長と〝例の荒魂〟は始末できなかった。しかしだ、鎌倉でノロを漏出してしまい、騒乱も起こしてしまった。……それだけでも、充分なほど管理局は信頼を失墜したのだから良しとしようではないか？それに、そんな状況で管理局もおいそれと〝例の荒魂〟を公表しないだろう。仮に公表してしまえば、紫が大荒魂に支配されていたことも公になるだろうしな。』

「……。」

『無論、君にはこれからも〝例の荒魂〟とタギツヒメの処理を任せるよ。手段は問わない、君の手腕に期待している。』

ＣＩＡ長官は、トーマスに優とタギツヒメの暗殺を命じていた。

「紫は如何しますか？」

紫も暗殺するのかとトーマスはＣＩＡ長官に問うていた。

『……紫も紫で、鎌倉に大量のノロを漏出し、土地を穢したことは心苦しかろう。〝自殺〟したとしても不思議ではあるまい。……しかし、もし〝自殺〟してしまえば折神家と管理局は大変なことになるなぁ？』

ＣＩＡ長官はトーマスに、紫を暗殺すれば大量のノロを漏出したことへの自責の念で紫は自殺したとして処理され、折神家と管理局を貶

めることができると言っていた。
「それに、相模湾大災厄のことを探られたくないというのも有るのでは？」
　トーマスは意地悪く、ＣＩＡ長官に言う。
『そうだな、当時の政府は愚かな選択をした。アメリカ国内に大量のノロを持ち込もうとするなど、アメリカ国内にも荒魂事件を起こそうという積もりだったのかと思うほどにだ。…荒魂関連の研究は在日米軍基地で行えば良いものをっ！何のための世界中に展開している軍事力だ!!』
「……輸送船が何故沈んだのか、貴方も貴方で探られたく有りませんからなぁ。」
『……トーマス君、君のお陰でノロを大量に運んでいた輸送船はアメリカの地に着くことは無かった。君はアメリカ国民とアメリカという国家を救ってくれた英雄だ。……それはこの国の裏の歴史に記される。』
　トーマスが意味ありげな台詞を吐くと、ＣＩＡ長官がトーマスを宥めるかのように、輸送船が沈んだお陰でアメリカがノロによって大地を汚すこともなく、荒魂事件に巻き込まれることもなくなったと伝えていた。
「汚れ仕事は今日に始まったばかりじゃありません。」
『だろうな、だからこそ君にこの仕事を任せられる。……次は紫に取り憑いていた大荒魂が三つに分離したらしい。〝例の荒魂〟をその三つと合わせた後のことを宜しく頼むよ。ああ、そうそう今回ばかりも日本政府は協力的であると思うよ。』
　ＣＩＡ長官は、暗に優を始末するようトーマスに伝えると、通信を切っていた。
「……。」
　だが、トーマスは返答することもなく、ただ真っ黒な画面しか映さないパソコンの画面をじっと見つめていたるかのように、動かなかった。

優と姫和の間に非道な者達の手が忍び寄っていた。

epilogue 2

姫和と優の会話の時を同じくして――――。

「養父上、飛行機の用意ができました。」

暗闇の部屋の中から、ソフィアと穂積が現れていた。しかし、その表情は二人とも何処か冷めていて、機械のように無感情であった。

「……済まない。何から何まで、手を煩わせてしまった。私は良い娘を頂いた。」

「いえ。」

織田防衛事務次官はソフィアに労いの言葉を掛け、手を差し伸べるも、ソフィアに避けられると織田防衛事務次官は少しハッとなり、避けたことについて言及はしなかった。

「……しかし、私のせいで辛い想いや、迷惑を掛けるかも知れないが、それにめげず、刀使の職務を、自分の信じたことを全うしてくれ、それが私の唯一の願いだ。」

織田防衛事務次官は養父として伝えるべきことを伝えようとしていた。ソフィアにただ健やかに、立派な女性として成長することを望んでいた。

――――彼女の悪行を知らないまま。

「もうこんな時間か……。愛しい愛娘に幸あれと思えど、辛い目に遭わせてばかりで親らしいことは何一つ出来なかった。本当に済まないと思っている。私は刀使という立派な職業に就き、職務をこなす愛娘に敬意を抱いている。……それを忘れないでいてくれ。」

「……承知しました。それでは、養父上お気をつけて逝ってらっしゃいませ。」

織田防衛事務次官は、腕時計を見ると空港へ向かう時間となったことに気付き、ソフィアに一時の別れを伝えると、ソフィアが手配してくれた飛行機へと織田防衛事務次官は向かっていった。

……だが、ソフィアの仰々しいお辞儀をしていた時の顔が不気味なほど笑顔であることと、不穏な空気に気付かないままであった。

「……隊長、空港なんて手配していたんですか？」
不意に穂積がそのようなことを聞いてきたため、ソフィアはほくそ笑みながら、こう答えていた。
「元より〝そのつもり〟だった。」
飛行機の手配など元から手配していなかったと。
――――この日以降、織田防衛事務次官は行方不明となり、一切の所在も分からないままとなる。――――

官房長官の要請により、警察庁に出向していた朱音はとある部屋に案内され、入室すると同時に度肝を抜かれていた。
警察庁長官、統合幕僚長、内閣官房長官等といった、自衛隊と警察並びに内閣府の重鎮が多数参席しているのを見て、国家安全保障会議のようなことを始めるのではないのかと思い、萎縮してしまったからである。
「折神　朱音局長代理。そう萎縮しなくて良い。昨今の情勢下に自衛隊並びに警察庁、刀剣類管理局はその任務を全うするにあたっていかなる方針で臨むべきか……、それを討議するためである。」
「局長代理……ですか？……」
官房長官は萎縮しなくて良いと言うが、朱音は突然の局長代理に任命という人事に驚く。
「そうだ。紫局長が職務を果たすことができる状態ではなく、そのうえ鎌倉で起きた騒乱と広がった混乱を鎮めなければならなければならない。そのためには今後も刀剣類管理局並びに特別祭祀機動隊は変わらず荒魂事件に対応する必要があり、刀剣類管理局と特別祭祀機動隊を指揮統制し、社会に要らざる混乱を排除しなければならない。ともすれば、折神家の人間である君が局長代理ではあるが適任であると判断したまでだが、不服はあるかね？」
官房長官は表情も無く、機械的に朱音に尋ねていた。
「……いえ、至らぬ身ではありますが、謹んでお受け致します。」

辞退することは不可能であろうと思いながら、朱音は局長代理の就任を拝命していた。

「……折神　朱音局長代理。早速質問だが、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題に関する報告に不備は無いかね？」

官房長官が朱音に大荒魂が三つに分割されたこと、関東一円に荒魂が降り注いだという報告に嘘偽り、誤りが無いか尋ねていた。

「はい。先日、提出致しました報告書通りです。タギツヒメ、いえ局長に取り憑いていた大荒魂は三つに分かれました。現在は、その後の足取りを――――。」

「……いや、そうじゃない。大荒魂のことではなく、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題を解決に導いてくれた美濃関学院中等部二年の弟君は現在どうなっているか包み隠さず、報告してくれたまえ。」

朱音は大荒魂の行方を追っているのではないのかと思い、現在は鋭意捜索中であると答えていた。しかし、警察庁長官がそれを遮り、可奈美の弟衛藤　優の現在の状況を伝えて欲しいと言ってきたのである。それを尋ねてきたことに、朱音は不審に思うが、タギツヒメに関連することであろうと気づき、朱音はタギツヒメのことを伏せ、はぐらかすことにした。

「鎌倉特別危険廃棄物漏出問題に巻き込まれ、現在療養中であります。そのような状態でありますので、家族はもちろん、面会は不可と――――。」

「よく分かった、その弟君は大荒魂の一部を取り込んでいるということだな。」

しかし、朱音は既に優がタギツヒメを取り込んでいることを政府が知っていることに驚愕していた。

「朱音局長代理の反応を見るにどうやら本当らしい。……彼が〝タギツヒメ〟を取り込んでいるのはラングレーから教えてもらってね。」

朱音は、ＣＩＡが日本政府にその情報をもたらしたということなのだと知る。

「それと、公安調査庁と情報本部、ラングレーやアメリカ国防情報局も協力して外から客は居ないか調べてもらっていたが……、国家安全保

障局長。」

「各省庁からの報告を集約し、結論を申し上げますと。我が国を脅かす勢力の工作員等の目立った動きはないことから、まだ鎌倉で起きた事件の詳細を得ていないと思われます。美濃関の弟、大荒魂の分身が拉致、獲得工作されることはしばらくないと思われます。」

外からの客は居ないか、特に工作員等の目立った動きはないということは、敵対国家の動きを監視しており、優が拉致される、大荒魂の分身に外国人工作員が接触するといった行動は今のところはないということろだろうと朱音は結論付けていた。しかし、朱音は何故そのようなことをするのか理解できなかった。

「……何故、私が呼ばれたのでしょうか？会議の内容を聞くと、条例によって定められた刀剣類管理局の指揮下にある特別祭祀機動隊の職責を逸脱するような内容ばかりだと思われるのですが……。」

しかし、朱音は何故だか分からないが、何十年前か施行された条例、荒魂意外の事件に特別祭祀機動隊が介入してはならないというのを引き出してでも、一秒でもこの会議室から抜け出したい気持ちであった。

「まあ、待ちたまえ朱音局長代理。君も大荒魂を追っている最中に敵国工作員と接触するという事態は避けたいところだろう？どんな報復があるか分からんしな。……ここからが本題だ。」

陸上幕僚長が朱音を抑え、まだこの場に居るよう言っていた。

「……今後、刀剣類管理局は警察庁から独立した組織として活動してもらう。」

「！……それはどういう。」

朱音はこの日、警察庁長官の発言によって二度驚愕した。鎌倉で起きた事件の数日後の決定から朱音は、刀剣類管理局は警察庁から見捨てられたのではないのかと思ってしまったからだ。

「まあ、落ち着きたまえ。鎌倉の失態から政府は組織改編を決定してな。こういった事件が発生してしまうと、警察の指揮下では刀剣類管理局は荒魂事件の対処に充分な活動ができないのでは？ということで決定したのだ。つまりは、今後刀剣類管理局は荒魂事件に対処する

際、防衛省、警察庁ともに緊密に連携することができ、事件の対処に当たれるという話だ。」

「……つまり、刀剣類管理局は国の行政機関に格上げされ、荒魂事件の対処に自衛隊、警察庁の支援が独自に得られるということで間違いないでしょうか？」

陸上幕僚長が言うには、刀剣類管理局は警察庁から独立し、独自に防衛省、警察庁の支援を得られるということだった。

「その通りだ。今後も何かあれば言ってくれたまえ。可能な限り支援はする。」

陸上幕僚長は警察庁長官の渋い顔とは対照的に、笑顔で朱音にそう言っていた。

（おおよそ、鎌倉で起きた事件が警察庁まで累が及ばないようにするための措置なのでしょうが……。）

だが、朱音は鎌倉で起きた事件の数日後にも関わらず、あまりにも話がうますぎると思い、何かあると勘ぐっていた。おおよそ、鎌倉での失態が警察庁にまで責が及ぶことを嫌っての措置であろうと朱音は推察していたが、何故警察庁長官が渋い顔をしていたのかは分からなかった。

「次にだが、鎌府学長高津　雪那氏と折神家親衛隊第三席皐月　夜見の消息が掴めていない。そのため、鎌府の学長は誰に就任するのであったかな……。」

「同じ女子校の学長であるため、長船女学園の真庭　紗南学長が学長を代行してもらう予定でしたが、横須賀湾にて舞草、いえ長船の刀使と鎌府の刀使が斬り合いを演じてしまったことにより、両者の関係に深い溝ができてしまいました。そのため、今この状況で真庭　紗南学長を鎌府の学長として代行してもらうと長船の刀使達が鎌府の刀使よりも立場が上になったと思い込み、鎌府の刀使達も大半が舞草の構成員であった長船を贔屓にしていると思い込み、更にその関係は悪化の一途を辿るものであると推察されます。」

未だ渋い顔をしている警察庁長官は雪那の行方が未だ不明であり、鎌府の学長が不在のままでは校務に支障がきたす恐れがあるため、鎌

府学長の後任は誰になるのか朱音に尋ねていた。
　それを尋ねられた朱音は、横須賀湾にて起きた長船の刀使と鎌府の刀使の斬り合いによって、鎌府の刀使と長船の刀使の仲が急速に悪化してしまったのである。結果、長船女学園学長の紗南が学長代行となってしまえば、鎌府の刀使達が最悪離反することになるかも知れないため、鎌府の学長代行になるのは長船関係者意外の人となることに決定したことを伝えていた。
「ですので、美濃関学院の羽島　江麻学長を鎌府の学長代行とします。理由としては先ず美濃関と鎌府の担当区域は隣接しており、距離的に大した問題は生じないでしょう。そのうえ美濃関はコンピューターによる部隊運用シミュレーターを個人が使用出来るレベルに落とし込んだりしているので、最新装備を回してもらっている鎌府との技術力の差は無いことと、美濃関は他の四校とも積極的に交流を行っているようなので、協力体制は支障も無く行えるものと思われます。」
「朱音局長代理、本部長は紗南学長のようですが、支障は起こさないでしょうか？」
　しかし、警察庁長官が本部長が件の紗南学長であることに疑問を呈すが、
「長船も鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の解決に奔走したことは事実ですので、何らかの勲功は無ければならないと離反する恐れがあると思われます。紗南学長には長船女学園と本部長という職を兼任することになるので多忙になると思われますが、紗南学長には了承の意を得ています。それと、鎌府の指揮についてですが、鎌府は折神家と関わり合いが深いので、今後は獅童　真希、此花　寿々花の両名が鎌府の担当区域の荒魂事件の指揮をとるという形で行こうと思います。今の鎌府でも、折神家親衛隊への評価は高いので、特に連携等による問題はさして無いでしょう。」
　と朱音は言って、警察庁長官を説得していた。但し、本部長を任せられる信頼できる人材は紗南意外居なかったことと、今の鎌府が折神家親衛隊への評価が高いのではなく、正確に言えば信奉者が多いのが理由ということは伏せてはいたが……。

「……ふぅむ。しかし、特務隊の副隊長で『鬼の結月』と云われた指揮能力を有していた綾小路武芸学舎相楽　結月学長であれば問題は無いと思われるが、朱音局長代理、それでは良くないのかね？」

だが、官房長官は特務隊の副隊長という実績の有る結月学長では良くないのかと朱音に尋ねていた。

「彼女は変革派の一人であり、ノロのアンプルを秘密裏に製造していたという疑惑があります。彼女に担当区域と権限を増やすということはあまりよろしくはないということです。」

しかし、陸上幕僚長が朱音が言おうとしていたことを先んじて言ってしまったため、朱音は言葉に詰まってしまう。

「何？彼女が、かね？」

「情報本部への報告が遅れましたが、陸上幕僚監部が得た情報です。確かであると思われます。」

「……ふむ。」

官房長官は顎に手をやると、思案していた。

「朱音局長代理。それは確か、かね？」

「ええ、間違いはないと思われます。」

官房長官は搾り出すように朱音に問い、朱音もタギツヒメから得た情報を搾り出すように、答えていた。

「……そうか、なら刀剣類管理局の人事はそれで問題無いとして。〝タギツヒメ〟を取り込んだ美濃関学院中等部二年の弟君のことについてなのだが……、」

この会議の本題が来たと思い、心の中で身構える朱音。処分しろと言うのであれば、抗議する積もりでいたが、

「今後も刀剣類管理局預かりということでよろしくお願いしたい。米国の協力要請が有れば、その要請を受けるように。」

意外にも寛大な処置に若干拍子抜けしてしまった朱音であった。

「あと、彼には戦闘訓練、及びノロの吸収を行わせるように。」

だが、朱音は官房長官の言葉に一瞬刻が止まったかのように硬直してしまった。優に何をさせようとしているのか分かってしまったからだ。

「三つに分かれた荒魂が何時こちらに牙を向くか分からん情勢だ。ならば、怪物には怪物を、今こちらの手札にある大荒魂の片割れを強化し、こちらが優位となるようするのが賢明であろう?」

「先程、ラングレーから彼の戦闘の情報をもらってね。彼が得意とする武器、珠鋼製の棒を精製してくれ、珠鋼を棒状に加工する際ノロが出てくるだろうからその少年に吸収してもらえば、三つに分かれた荒魂に対する戦力強化と今後横須賀湾の乱闘によって刀使の離職率は上がり刀剣類管理局の戦力低下は免れないだろうからその補填を同時に行えるということだ。」

「加えて、ノロの力が強まればノロの性質から、その少年に荒魂が何匹か寄って来ることだろう。荒魂を探す手間が省け、頻発する荒魂事件をある程度はコントロールすることができるということだ。」

官房長官、統合幕僚長、警察庁長官がそれぞれ、自らの思惑を語る。彼らは9歳の子供に荒魂の力を強めさせ、三つに分かれた大荒魂に対抗できる戦力として確保し、且つ荒魂を誘き寄せるための撒き餌として利用するといっていたのである。

「……子供に、そのようなことをさせろと、命じろというのですか?」

朱音は子供を良いように利用することについて、精一杯反抗していた。

「刀使を荒魂殲滅に遣っている刀剣類管理局が妙なことを聞くな?それに、件の少年はSTTの隊員を何名か死傷させているようだから、贖罪としての機会を与えようというのだ。……本来であれば厳罰に処すべきところだが、三つに分かれていることによって二十年前以上の大災厄を未然に防ぐことが可能であれば、こその優遇措置である。そのことを良く理解してほしい。」

しかし、全く意に介さないかのように官房長官はそれが最善であると朱音に言う。

「……しかし、それは!」

「朱音局長代理、これは政府の決定事項であり、覆されることはない。」

朱音は流石にその決定に異議を唱えようとするものの、自らの権限ではどうすることもできない状況に、悔やむことしかできなかった。

しかし、何処かで覆せるチャンスは在ると信じ、手を強く握り締めながら、命令を受諾したかのように答えていた。
「……分かりました。」
「宜しい。それでは、この会議はこれにて終了し――――」
朱音は苦悶の表情を浮かべながら、官房長官の会議の終了宣言が耳に上手く入らなかった。
そして、本当の怪物とは、二十年前の大災厄を起こし死者を多数出した大荒魂なのか、子供でも容赦なく怪物扱いし犠牲にしていく国なのか、朱音には判断しかねることであった。

――――無垢な子供達は罪を重ねながら化け物と呼ばれた者と遂には一つになれたが、非情な大人達がその子供達を化け物扱いし、その仲を引き裂こうとしていた。――――

波瀾編

虚偽の英雄

大荒魂との戦いから、四ヶ月後――――。

鎌倉特別危険廃棄物漏出問題にて刀使達、いや刀剣類管理局への風当たりは強くなったこともそうだが……。

何よりも折神家親衛隊第三席夜見と同親衛隊第四席結芽の両名が鎌府学長高津　雪那の開発したノロのアンプルを使用したことにより荒魂化したことが発覚したことにより、刀剣類管理局の権威と信用は地に落ちてしまい、存続が危ぶまれたが、関東にて荒魂事件が頻発したことにより、どうにか存続することができた。しかし、刀剣類管理局は舞草が中心となって新体制となったことにより新たな問題が起きてしまった。それは、舞草が綾小路武芸学舎へ〝刀使〟を名前を変えてスパイにしていたことが発覚したことにより、やっと新しい組織が中心となったことに刀使の親達が安堵した矢先の不祥事に、そんな危険なことをさせる組織が新しく中心となったのならと思った親達によって刀使を辞めることになった者と、横須賀湾にて騒乱を起こした舞草が中心となった新体制に不満を抱いたＳＴＴ隊員の離職率と原隊復帰が増加したことによって、刀剣類管理局の指揮下にある特別祭祀機動隊の戦力は低下していった。……そういったこともあり、ソフィアの思惑通り、世界は混沌へ向かっていくと思われていた。だが、親衛隊に何名か死亡、もしくは除名させ席を空け、空いた席に自身のシンパを入隊させ、自身の権力の増大を目論んでいたソフィアの思惑とは外れ、獅童　真希と此花　寿々花の両名が復帰できたこと。可奈美と姫和の手によって紫が死亡し折神家の権威の失墜を望んでいたが、実現しなかったこと。

そういったことから、全てが全てソフィアの思惑通りになった訳ではなかった。

輸送ヘリのけたたましい音を聴きながら、可奈美はそんな今の現状を思い出していた。
「……可奈美？」
「あっ、……うん、大丈夫。」
沙耶香の声で気が付いた可奈美は、沙耶香と共に東京都湾岸線に出現した荒魂の対処のため、展開している特別祭祀機動隊の応援として現場に急行していたことを思い出し、気を引き締め直していた。
「……沙耶香ちゃん、この任務が終わって本部へ帰ったら、手合わせお願いできないかな？」
「……良いけど……。」
「本当!?ヤッター。」
だが、可奈美は作戦中にも関わらず、いつも通りの感じで沙耶香に立ち会いを所望していた。
「……良いの？本当に？」
「何が？」
しかし、沙耶香は少し考え込んだあと、可奈美に立ち会っても良いのか尋ねていた。
『降下地点到着まで３０秒前、Ｓ１、Ｓ２、Ｓ装備を機動後、写シを展開し、降下準備に入って下さい。』
ヘリの女性パイロットからの無線が入る。それと同時にＳ１（単純だが、Ｓ装備を装着しているためそう呼ばれている。）と呼称されている可奈美と、同じくＳ２と呼称されている沙耶香等は御刀の調子を見つつ、指示通りにＳ装備を起動、写シを展開し、降下する準備に入っていた。

東京都湾岸線沿い――――。
橋架線上に巨大な蛇のような荒魂が蠢いており、その荒魂が向かう先には五人小隊の刀使とＳＴＴが待ち構えていた。

「……。」

五人居る刀使の内の一人、綾小路武芸学舎中等部一年の内里　歩は初めての実戦の空気に気圧されていた。

「一斉射の後、斬り込む！タイミングを合わせろ、訓練通りやればできる！」

その証拠に、自分よりも実戦経験が有るであろう隊長格の鎌府の刀使の指示を受けていても、御刀を握る手は未だ震え、いつもよりも御刀が重く感じてられていた。

「ハァッ……ハァッ……。」

隊長格の鎌府の刀使意外にも、美濃関の刀使二名、そして平城から上位の実力者で無外流の遣い手が加わってはいるが、自分が上手くやらなければという不安に押し潰されそうになり、吐く息も妙に重かった。

「来るぞ……抜刀！」

そうこう悩んでいる内に、目標の荒魂が視認できるほどの位置まで近づいてきていた。そのため、事前の作戦通り、ＳＴＴからの支援、もとい援護射撃が実施される。

「写シ!!」

隊長格の鎌府の刀使が刀使の基本戦術である写シを張るように指示され、意識を集中して写シを張る歩。

一斉射を受ける巨大な荒魂を見て、今からあそこへ飛び込むことになると思い、戦いに集中するためか御刀を再度強く握る。

「良し、斬り込む！」

ＳＴＴの支援による一斉射が充分効果が出始めたのか、自身の身体を天にも昇るかの如く上体を高く揚げていた。それを見た隊長格の鎌府の刀使はそれを好機と判断して、今から斬り込むことを指揮下の刀使達にも指示を出していた。

遂に、あの大きな蛇のような荒魂の身体に飛び掛かるように斬り込むときが来たと思い、ゴクリと唾を飲み込み、必死に覚悟を決めようとする歩。しかし、次の瞬間、自身が斬り込むことはなかった。

突然乱入してきた2機のヘリの音と共に、荒魂はそのヘリから強烈

なライトを浴びせられ、たじろいでしまう。その隙になのか、自分のはるか頭上から、いや恐らく乱入してきたヘリから何者かが降ってくると同時に、その乱入者、S装備を装着している者が荒魂の角と足を何本か両断していた。荒魂は、その斬られた激痛に苦しむかのように人ともつかない大声を上げていた。その隙にもう一名、S装備を着用している鎌府の刀使が降りていくと、2機のヘリはライトを消し、荒魂を中心に旋回していき、注意を引き付けようとヘリに搭乗していたSTT隊員は狙撃銃（尚、300WinMag仕様のM1500である。本銃を使用した理由は、フルオートでは友軍誤射を引き起こしかねないことと、タイ捨流による肉弾戦では荒魂に対して直接的なダメージは与えられないが、体勢を崩したりするのには有効であることが立証されたため、大口径が使用できるボルトアクションの狙撃銃が今回の上空支援に適していたからであった。）で荒魂の頭部らしき部分を狙い撃ち、上空支援をしていた。

強烈なライトと上空支援の効果が有ったのか、荒魂は刀使二名を無視し、旋回しているヘリを注視していた。

そのお陰か、S装備を着用している刀使二名は楽々、荒魂の胴体を両断していき、徐々に荒魂の戦闘能力を奪い、遂には美濃関の制服を着たS装備装着の刀使が八幡力で跳躍し、荒魂の頭部と胴体を両断すると、その一撃が致命傷となり東京都湾岸線沿いに現れた荒魂はノロへと還っていった。

――――こうして、内里　歩は衛藤　可奈美と邂逅したのであった。――――

討伐された荒魂はノロへと還り、回収班がノロを専用の車輌に収容していた。

「応援の衛藤　可奈美です。」
「糸見　沙耶香。」
　今回の荒魂事件の解決に出動していた刀使達の隊長格である鎌府の刀使に、S装備を解除し自己紹介する可奈美と沙耶香。
「応援感謝します。以後は我々が……。」
「はい、お願いします。」
　鎌府の刀使は、応援に来てくれたことを感謝する旨と以後の処理は自分達が済ませることを可奈美達に敬礼しながら伝えていた。
「あっ、あのっ!!お二人は4ヶ月前のっ?」
「……えっ?あぁ、はい。……そうです。」
　突然、入ってきた歩の問いかけに、可奈美は口角を僅かに上げながら答え、そして、可奈美は思い出していた……。
　鎌倉特別危険廃棄物漏出問題事件以後、大荒魂を倒したのは優とタギツヒメ達ではなく、可奈美達となっていることに、可奈美は内心優に対して日に日に罪悪感を募らせていた。……まるで、他人の功績を自分が掠め取ったかのように思えたからもそうだが、大荒魂を倒したという多大な功績を残した優に対して、国は、刀剣類管理局は、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の真実を秘匿しつつ、ノロの性質を利用した荒魂を誘き寄せる撒き餌として、三つに分裂した大荒魂に対するカウンターとして保有すべく、管理局本部内から無断で外に出てはならないという軟禁に近い状態にされていることが可奈美を苦しめる要因となっていた。そして、
『あの人衛藤さんじゃない?美濃関の。』
『あの人達が大荒魂を倒した?』
　それら全てを目の前にいる歩や他の刀使達に打ち明けることもできず、何も出来なかった自分が賞賛されるということが辛く圧し掛かり、自分が大荒魂を打ち倒した英雄という役を、虚偽を吐き続けなければならないということが可奈美を苦しめていた。
（……何も、約束守れなかった。……何も、……ナニモ。）
　可奈美は鬼の角を生やし、自分と同じ色に近かった優の右目の瞳の色は金色となり、自分と同じ色に近かった優の髪の色は右半分のみ白

い色となったことに、自分が知っている弟ではない化け物か何かに一瞬感じて見えてしまったことに可奈美はそれを強く恥じ、そのうえ母のような強い刀使になるという約束を未だ果たせていない状況に、優に対して更に深い負い目を感じ、遂には自分から優に会うのが怖くなってしまった。

　可奈美は、母のような強い刀使になれず、結果的に刀使である自分が大荒魂を倒せなかったばかりか優が大荒魂を倒してしまったことにより、管理局本部から外に出られないという状況に追い込んでしまったことに、可奈美は優に何時か『嘘つき』と、そう言われそうな気がして、意図的に避けていた。

「出向で特別任務部隊に参加しています!!綾小路中等部1年、内里歩です!!」

　少し今の現状についてのことを考えていた可奈美は、歩の大きな声で伝えてきた自己紹介でハッとなり、辛うじて歩の名前は聞くことができた。

「あっ、……歩ちゃん。」

「私も、鎌倉の本部に居ます!寮で可奈美さんや糸見さんを何度かお見かけしたころがあって!!「内里、警戒任務中だぞ。」

「……はっ、はい!」

　歩は今の可奈美の状態を知らぬまま、押しに来たのであった。しかし、可奈美が口角を僅かに上げていたことから困惑していると判断した鎌府の刀使に止められてしまう。

「……じゃあ、また後でね。」

「あっ、……はい!!」

　歩が止まってくれたことに安堵した可奈美はそれをこの窮地を脱するチャンスと思い、いつも通りの笑顔で歩に後で会おうと言い、足早に本部へと送ってくれる車に乗ろうと向かって行った。

「……。」

「可奈美、大丈夫?」

　暗く沈んだ表情をしている可奈美に沙耶香は気して、尋ねる。

「何、沙耶香ちゃん?」

しかし、可奈美は、誰にも悟られないようにいつも通りの笑顔を沙耶香に向けていたが、どこか作り物めいた笑顔であることには気付いていた。だが、沙耶香自身、可奈美に何も言えずじまいであった――――。

「米軍所属艦艇の奪取、都市部への不明機射出、並びに綾小路武芸学舎へのスパイ行為、折神家親衛隊の二名のノロの投与……国民がどれほどの不安を抱き実害を被ったか、又どのように受け止めているのでしょうか？」

国会にて、朱音は一連の出来事の証人喚問を受けていた。

「折神証人。」

議長の声に応えるかのように、朱音は男性議員の質疑に答えるように毅然と壇上に立っていた。

「一部の特祭隊により２０年前の大災厄のような事態は未然に回避することができました。また、管理局の一員として、そして綾小路武芸学舎に居る彼女の行動によって、我々は最良の手段を討てたと認識しております。そして、親衛隊の二名と鎌府学長は現在行方不明中であり、この三名の行方を追いつつ、現在調査中であります。」

「しかし、特別危険廃棄物の大量漏洩、漏出が起こりました。管理局は今後どのような対応をするのかお聞かせ下さい。」

男性議員は狙い済ましたかのように、次の質疑を繰り出していた。

「折神証人。」

議長は朱音に男性議員の質疑に答弁するよう朱音を呼んでいた。

「漏出した特別危険廃棄物に関しましては、対策本部と特別任務部隊を設置し、全力で回収に当たっています。これにより、我々刀剣類管理局は、一年以内での収束を見込んでいます。」

「管理局内部で何が行われていたのか、国民は知りたいのです！当事者の前局長折神　紫氏からの説明を求めますっ!!」

「局長は現在療養中であります。したがって、局長は証人喚問を受け

られる状況ではありません。」
　朱音と政権与党へと返り咲きたい野党に所属する男性議員とのやりとりは、この議会にて何度も行われていることであった――――。

　そんな証人喚問という政治劇が終わり、刀剣類管理局への帰路の途上、甲斐　志郎陸将補から呼ばれていたので、朱音は護衛の者と共に待ち合わせ場所である国会のとある一室へと入室すると、甲斐は護衛の者を側に控えさせ既に立ちながら待っていたので、朱音は甲斐の横まで来ると、「……何か御用でしょうか？」と甲斐に尋ねていた。
「突然申し訳ありません。昨日、無人偵察機の演習中にて、箱根山周辺に荒魂の群れを確認しました。ついては、特別祭祀機動隊の支援を得たい。」
「つまり、自衛隊との共同作戦によって、荒魂を殲滅したことを宣伝したいと？」
「ええ、自衛隊と共同で荒魂の群れを殲滅したことを宣伝すれば、刀剣類管理局の信頼は少しばかり回復することでしょう。それに、防衛省は約定通り刀剣類管理局の要請が有れば、支援致します。」
「……どのように支援するのでしょうか？銃火器では荒魂に効果は有りませんが？」
　朱音は内心、ＳＴＴ隊員の離職者が増え、支援してくれる戦力は咽から手が出るほど欲しかったが、刀使を捨て駒にするようなら、拒否しようと思っていたが、
「野営地の設営と、スペクトラムファインダーのレーダー技術を組み込んだ無人偵察機グローバルホークと新無人偵察機システムが荒魂の規模と数を観測し、そちらにその情報をデータリンクで提供します。山間部の戦闘を考慮し、送る人員は第１２旅団か第一空挺団、並びに情報処理隊隷下の無人偵察機隊といった部隊を送ります。それと……ですが……。」
「……それと？」
「……うん……むぅ……。」

朱音は、甲斐が歯切れが悪そうに言い含めてきたことに、疑問を抱き、何が遭ったのか尋ねてみた。

「……まだ公表はされていない極秘事項なのですが、いずれ刀剣類管理局にも解答を求めると思われますので、まずはこちらを。」

甲斐は、決断したのか『極秘』と赤文字で判が押されている封筒を朱音に差し出していた。朱音はそれを受けとると、その封筒は『極秘』と書かれているにも関わらず、既に開封されていることに眉を顰めるが、甲斐が既に中を拝見している物なのだろうと解釈し、気にせずに中の資料を拝見することにした。

「……なるほど、〝市ヶ谷に姫〟が居るということは分かりました。ですが、先ほどの荒魂討伐の話とどう関係が？」

その資料は、市ヶ谷に〝姫〟が匿われていることを示す内容が含まれていた資料であった。

「政府の一部は〝市ヶ谷の姫〟を手放したくないようです。ですが、〝姫〟を全面的に信用している訳ではないので、今回の荒魂殲滅作戦には、彼の少年を〝市ヶ谷の姫〟に対抗しうる戦力にするべく、…加えて荒魂を引き寄せることと、〝姫〟の存在を隠匿するための囮役として戦線に加えることが決定しました。しかし、私の私見ですが、あの〝姫〟は人がどうこうできるというものではないと判断し、先んじて対策の打診のため、貴女の意見を伺おうと思いました。それと、貴女に公開することと、国民に公表することは政府はまだ認めていませんので、できれば吹聴するのは控えて頂きたい。いずれ同様の内容が記された資料を渡されることと思われます。」

甲斐の話しを聞いた朱音としては、政府が大荒魂の一部の〝姫〟を大事にし、世界を大荒魂から守った優は大荒魂を秘匿するための囮として、荒魂を誘き寄せる餌として利用していることに思わず眉を顰める。しかし、『極秘』と赤文字で判が押されている封筒の中の資料を許可無く朱音に渡して拝見させているため、守秘義務規定に甲斐は抵触することになるかも知れない。だが、それは甲斐も承知の上で朱音に知らせたのだろう。

「……貴重な情報、数々の支援、ありがとうございます。」

「いや、防衛省も貴女方を支援する兵装具の予算が通ったことに喜んでおります。……いや、一番喜んでいたのは、下らない政治的な理由によって充分な支援が出来ぬままであったと嘆いていた若い佐官と曹士であったな。」

（なるほど、４ヶ月前の会議で、警察庁長官が渋い顔をしていたのはそういった事情が有ったということでしょうか……。）

朱音は、兵装具の予算が通った、という甲斐の言葉に恐らくだが、刀剣類管理局を警察庁から独立させるという決定を仕向けたのは防衛省であると推測していた。

一部の警察内部に、相模湾岸大災厄と鎌倉特別危険廃棄物漏出問題を利用して、刀剣類管理局隷下の特別機動隊（通称ＳＴＴ）に強力な軍用兵器を配備すべきであると主張していることは朱音も聞いていた。だが、警察の真の目的は強力な軍用兵器を配備して貰い、警察庁への政府予算の増額と権限拡大を狙っていることは誰の目から見ても明らかであった。その動きを察知した防衛省は、警察の権限拡大を阻止すると同時に、Ｓ装備の開発やコンテナ等の運用により、年々増加する警察庁への荒魂対策の政府予算を少しでも奪うために、表向きは刀剣類管理局を行政機関に格上げし、独立させ、自衛隊と警察が刀剣類管理局を支援することによって荒魂対策の予算が自衛隊にも分配されるように仕向けたのだろう。ともなれば、嘗ての古巣警察庁は政府予算の増額と権限拡大を結果的に阻止してしまった刀剣類管理局を味方として見てくれないであろうと朱音は思慮していた。

……だが、甲斐並びに防衛省の目的はそれだけでは無かった。

「……しかし、あまり、良い気分ではありませんな。子供達を戦線へと誘（いざな）うことになるのは……。それも、大荒魂を討伐した少年を怪物扱いするのも。」

「ならば、どうにかなりませんか？」

朱音は、今や政治的に危うい立場となった優をどうにかできないか甲斐に意見を尋ねていた。

「……力は尽くします。しかし、政府は〝姫〟よりもＳＴＴ隊員を死傷させた少年のことを疎ましく思っているようです。彼の少年は表

向きは大災厄の被災者として扱われ、戦線に赴く際は人に協力的な荒魂として扱われるようです。」

甲斐は憂いに満ちた表情を浮かべながら、こう答えていた。しかし、果たして彼の行動が、それが、優にとって、関わりのある者達にとって、救いになるかどうかは別として……。

オリキャラ紹介　―波瀾編―

タギツヒメ側

衛藤　優

９歳の可愛らしい容姿の小学４年生。可奈美の弟。

よく可奈美に可愛がられていたため、可奈美を大切な家族の一人としており、可奈美の助けになろうと努力している。感情の起伏は少なく、大人しい子だが、理不尽な事には声を荒げて抵抗することがある。

身長は益子　薫より低い。

しかし、その本性はノロを使って強化改造されたせいなのか残虐極まりない行動をするため、可奈美と姫和に気に掛けられている。

だが、荒魂の力を強めるため、自身の体をノロに侵食させ、大荒魂との戦いに辛勝するものの、荒魂化した人間とも取られる姿と化してしまい、戻れなくなってしまう。そのため、政府から大荒魂の分身に対する対抗策として、荒魂と化した人間が大荒魂を倒したという事実を隠蔽するため、刀剣類管理局の医務室にノロと人体の分離という名目の元、軟禁に近い状態となっている。

ミカ

優の中に居る荒魂となった少女。元々、東南アジア出身の少女で路地裏で花を売っていたところ、客から病気をうつされ、生ゴミと一緒に捨てられるところをスレイドが買い取り、荒魂と人体の融合実験に参加させられる。

二キータ

優の中に居る荒魂となった南アジア出身の少女。見入りが良いので障害者として目をつぶされ、物乞いビジネスに従事させられていた。そして、荒魂と人体の融合実験に参加させられる。

ジョニー

優の中に居る荒魂となった南アフリカ出身の少年。元少年兵で、グアンタナモ経由で在日米軍基地に送られ、ノロの実験体となる。

科学者
スレイド博士
フリードマン博士以上の天才だと自称するアメリカの科学者。しかし、本音はフリードマン博士に嫉妬しているがためにそう言っているだけの男。
主な研究はノロと人を融合させ、強化・進化させること。そして、軍が計画をキャンセルしたにも関わらず、〝協力者〟と共に優を浚って改造した張本人。

アメリカ工作員
トーマス
元アメリカ海軍の少佐の初老の男性。実はフリードマンの弟。除隊後、フリードマン博士の会社の警備員をしていた傭兵だったが、フリードマンに誘われ〝舞草〟に加入。
その正体は折神　紫の牽制または暗殺するために送り込まれた工作員。過去に反米国家を少年兵を使って非人道国家として〝演出〟し、地図上からその反米国家を消した実績がある。

ローク
元アメリカ海軍の男性。４０代。
トーマスとは長い長い付き合いのようで、相棒的存在。除隊後、トーマスと一緒に〝舞草〟に加入。
その正体はトーマスと同じ工作員。
折神家親衛隊による舞草の拠点襲撃時、朱音を潜水艦へと逃がす途上、戦死する。

ソフィア側
織田　ソフィア
綾小路武芸学舎高等部二年生の１７歳。身長は１７６ｃｍ。綾小路の制服を着用し黒色のベレー帽に灰色のトレンチコート、黒のジャ

ングルブーツを装着しているという警察組織の一員としてはかなり問題の有る格好をしているが、織田防衛事務次官の養女であるためか、黙認されている模様。あの燕　結芽を凌ぐ実力を有すると噂される強大で危険な雰囲気を纏う刀使。仲間を集め、なにか目的があって動いているようだが……。

片手で人を持ち上げる程の腕力で殴ったり、掴み上げたり、柔術で転倒させ、写シを張らずに刀使と戦うといった狂戦士のような戦い方をする。戸籍上ロシア人とのハーフのようだが……？

御刀　蛍丸

刀身が３尺３寸４分５厘（約１００．３５ｃｍ）という長い御刀。来国俊作の大太刀で、本作を来国俊の最盛期の作品と評している者もいる。

流派　無住心剣術

「ただ太刀を眉間まで引き上げて落とす」という非常にシンプルな技法しか持たない剣術。しかし、千回の他流試合に千勝しているという剣豪を輩出した剣法でもあるため、油断は禁物である。そして、『相抜け』というお互いが打てない、打たれない状態になることを目指している。

そして、この流派を選んだ最大の理由は師を打ち破り、自らの力を誇示したことが気に入ったから。

大村　静

綾小路武芸学舎中等部三年生の１５歳。身長は１４３ｃｍ。

可愛らしい容姿と実力は平凡なため、気を許しやすいが、彼女の本当の姿は拷問と洗脳の時に発揮される。これには、家庭内事情による部分が多いようだが……。

御刀　物吉貞宗

相州貞宗の作の短刀のため、刀身は１尺９分５厘（３３．２ｃｍ）と短い御刀だが、拷問や洗脳に使うことが多いため、問題が無い模様。

流派　直心影流

鹿島神宮鹿島之太刀を起源とするという。江戸時代にいち早く竹刀と防具を使用した打ち込み稽古を導入し、江戸時代後期には全国に最も広まった流派。型稽古は小太刀もある。

防衛省

甲斐　志郎

陸上自衛隊の階級は陸将補。４０代半ば。陸上幕僚監部指揮通信システム情報部部長。

二十年前は江ノ島にて陸自の部隊を率いていた。それ故か、目的達成のためならば、非情な手段を取ることもあり、無人機を扱う部隊を強引な手段で創設したり、別班という非公然組織を使って他国に内政干渉しているとも、反体制派の監視をさせているとも噂されている。

中谷　啓祐

現防衛大臣。甲斐とは防衛大の同期であったが、自衛隊を退官後に議員となり、防衛大臣に任命された経歴を持つ男性。甲斐とは同い齢。

三木

階級は一等陸佐で、役職は統合幕僚監部運用部運用第二課長に就いている。（統合幕僚監部は、陸海空の三自衛隊の統合運用に関する幕僚機能を発揮する組織であり、その中でも運用部運用第二課は部隊の運用と災害派遣に責任を持つ部署である。）

江仁屋離島での訓練を評価・視察に来ていたので、奄美大島分屯基地に来れたのだが……。

見た目は薫曰く、姫和から堅物さを増して、面白みが無くなったような人物であるとのこと。

自衛隊　長期出向組

西田　保

陸上自衛隊第２師団第２５普通科連隊所属、階級は二等陸佐。

刀剣類管理局に戦術データリンクを導入する代わりに、荒魂対策の研修のために長期出向している自衛官のリーダー的存在。どこか爽やかな好青年さを感じさせる顔立ちだが、４０代前半。

沼田　剛

西田と同じく陸上自衛隊第２師団第２５普通科連隊所属、西田の最古参の部下で階級は一等陸尉。

西田の長期出向に同行しており、西田のサポート役として、副官的な役割を担っている。大柄な身体とは裏腹に情報収集と分析を任されることが多い。

勝田　亨

西田と同じ所属で、同じ理由で長期出向に同行している西田の部下。二等陸尉。

軽い言動をするが、ムードメーカーとして振る舞い、隊の緊張を和らげようとしている。

古河　蛍

階級は三等陸尉。西田と同じ所属で、同じ理由で長期出向に同行している西田の部下で、愛らしい容姿と声とは裏腹に格闘微章保有者で腕っ節だけなら西田と沼田を倒すことができる実力者。

鏑木　霞

階級は一等陸尉。西田の部下の中では、沼田に次ぐ古参の部下で、発言力も西田の隊の中では沼田に次ぐためか、手厳しい意見をズバズバ言うことが多い。

蛍が唯一恐れる存在。

一般人

望月　和樹

高校卒業後は派遣社員として正社員を目指したものの、内定を取り消された後は職を転々とするフリーターとなる。

唯一優しくしてくれた記憶がある綾小路武芸学舎学長相楽　結月に憧れ、天然理心流を学ぶも御刀を持った刀使の力を見て挫折し、剣術以外の方法で自分にだけしか無い物を模索中。

外国勢力

汪

かつては石油閥のエースとして期待され、石油企業の董事長となれたのだが、現総書記の習と政治的な対立をしていた前総書記の江が後ろ盾となっていた過去が仇となり、非主流派として粛清されかけていた所、中華人民共和国公安部の提案に乗ることでどうにか生き残っている状態である。

新型S装備の話　1

防衛省市ヶ谷――――。

「横田基地から米軍所属のグローバルホークの支援、刀剣類管理局の警察庁からの独立、そのうえＡＨ―６４Ｄ、ＯＨ―１改、スキャンイーグルから新無人偵察機システムを各方面から持って来る。……何と言って良いのか、いささか強引な手段ではあったのでは無いか？」

甲斐の防衛大の同期であり、現防衛大臣である中谷　啓祐は長年の友でもある甲斐に詰問していた。

「心配ない。こちらのことは気付いておらんし、それに二十年前に起きた相模湾岸大災厄が再び起きる可能性が有るのであれば、防衛省は刀剣類管理局と一層緊密な協力体制を取り、一刻も早く国民の刀剣類管理局への信用を回復させると同時に、来るであろう大災厄への対応は急務であるし、それに自衛隊にも荒魂対策の資金を無人機の研究へ注ぎ込めることができるのは、自衛隊の無人機の開発と運用研究、指揮通信能力が発展することは、今後起きるであろう自衛隊の省人化と無人機の導入が増えている各国の対策となることを考えれば悪くはないだろう？」

中谷の詰問に対し、元同期であるためか、甲斐はややフランクに自らの考えを防衛大臣の中谷に話す。

朱音の推測通り、防衛省、いや、甲斐の企みは警察の重武装化による予算の増額と権限拡大を防ぎつつ、表向きには防衛省は刀剣類管理局と協力体制を組み、その見返りとして、防衛省にも荒魂対策の予算を計上してもらい、その予算でスペクトラムファインダーのレーダー技術を搭載した無人機の開発と試験運用を行い、無人機の運用実積を伸ばし、世界中に拡散している無人機への対策研究と戦術研究を強化し、いずれ立ち向かうこととなるであろうドローン戦争に対応しようとしていた。

「それにだ。この荒魂掃討作戦が成功すれば、戦術データ・リンクによる空と海の、それらの後方支援の元で行われる陸上戦闘の有用性が国会でも認められれば、戦術データ・リンク対応可能な陸上装備が増え

るだろう。ただでさえだ、創設当時から、〝専守防衛たる自衛隊は米軍との連携によって最大の能力が発揮できるように設計され、戦略が立てられていて、〝その米軍は戦術データ・リンクと無人機の開発が進んでいるというのに、優先順位が低いとはいえ、〝我々陸自だけが未だに無人機の開発と戦術データ・リンク対応可能な兵器は少ない状況であり、〝米軍との連携に支障が生じるかも知れないという状況は好ましくない。」

甲斐は続けて、〝専守防衛たる自衛隊は米軍との連携によって最大の能力が発揮できるように設計され、戦略が立てられていて、〝と〝我々陸自だけが未だに無人機の開発と戦術データ・リンク対応可能な兵器は少ない状況であり、〝といった部分を少しばかり声を大きくして強調し、防衛大臣の中谷に聞こえるように伝えていた。

甲斐が無人機と戦術データリンク可能な装備を急いで配備して貰う理由は、細長い島国という地理的な環境から防衛上の正面が広いため、侵攻部隊は上陸地点を選択する主導権を保有し、空挺・ヘリボン部隊等による奇襲を行うことが予測されている。だが、その全てを洋上で全て撃破することは海上自衛隊・航空自衛隊のみでは困難と考えられ、陸・海・空各自衛隊は、相互に緊密な連携の下に、それぞれが持つ特性・能力を十分に発揮して防衛に当たるということが必須であるという見解を自衛隊は示している。（無論、日米安全保障条約に基づいて自衛隊と米軍とが共同して、防衛に当たることは言うまでもないことも記載されている。）

そのためには、陸上自衛隊も、殆どの護衛艦・哨戒機・潜水艦など戦術データ・リンク可能な装備は充実、無人機も既にＱＨ―５０Ｄを１，５００時間以上運用しており、アヴェンジャー・ＭＱ―８Ｃ等といった新しい無人機も導入予定である海上自衛隊、Ｆ―４以外の戦闘機・早期警戒機・地対空誘導弾等といった装備が戦術データ・リンクが可能であり、そのうえ無人偵察機グローバルホークが三沢に配備される予定で、無人機研究システムの研究も今も継続中である航空自衛隊、並びに最強の同盟軍でもある米軍の装備更新に遅れることなく、且つ相互に緊密な連携に齟齬が生じさせないようにするべくしてい

た。

中谷が言う強引な手段を甲斐が使う理由はこういった込み入った事情も含まれていた。だからこそ、甲斐は陸上自衛隊にも、無人機・戦術データリンクの研究と開発、その発展の必要性を訴えるため、中谷に〝専守防衛たる自衛隊は米軍との連携によって最大の能力が発揮できるように設計され、戦略が立てられていて、〟と〝我々陸自だけが未だに無人機の開発と戦術データ・リンク対応可能な兵器は少ない状況であり、〟といった部分を強調して説明していたのであった。

「……まあ、お前が２０年前のことで、個人的な感情でそれを推進していないことを願うばかりだが。」

中谷が物憂げな表情で甲斐に問い詰めていた。

「２０年前？……確かあの時は、江ノ島にて相模湾岸大災厄で出動して、部隊の小隊長をしていたが、それと何の関係が有るんだ？」

しかし、甲斐は何を尋ねているのか、皆目検討が付かないといった顔で聞き返していた。

「……いや、何でも無い。この荒魂掃討作戦で、新無人偵察機システムと個人データ共有システム、並びに観測ヘリコプター用戦術支援システムを実戦に近い環境下で運用試験を共に行おうということだな。だが、この二つの無人装備は実用性に欠けるとの報告を受けていたが？」

中谷は、甲斐の腹を探るかのように、尋ねていた。

「そうだ。新無人偵察機システムは信頼性が未だ低く、実戦レベルではないのが辛いところだからな……。この荒魂掃討作戦にて、新無人偵察機システムとスキャンイーグルの運用データを蓄積していき、二十年前以上の災厄が起きる前に実戦投入できれば、とは思っている。だが、掃討作戦中に何らかの不慮の事故で喪失し、航空支援を失うのは痛い。だからこそ、個人データ共有システムと観測ヘリコプター用戦術支援システムの実地試験という名目で何とか、ＯＨ―１改とＡＨ―６４Ｄも用意できた。」

痛い所を聞いてくる中谷に、甲斐は渋い顔をしながら、そう答えていた。それ故に、ＯＨ―１改とＡＨ―６４Ｄをどうにかこうにか引っ

張り出してきたのだった。それと同時に、このＯＨ―１改、ＡＨ―６４Ｄを一つでも喪失しようものなら、甲斐への非難は免れないものとなることは確実であった。

「それにだ。よく横田から米軍所属のグローバルホークの支援を得られたな。」

中谷は、ある疑問があった。それは、三沢基地の基地改修のため、現在は在日米軍の横田基地に北の敵性国家への警戒監視強化を理由に配備されている米軍所属グローバルホークが荒魂掃討作戦に参加してくれることに、どういう経緯があったのかということであった。

「ああ、それはな、長時間飛行できる無人航空機グローバルホークにスペクトラムファインダーのレーダー技術を組み込ませることで、どれほど荒魂掃討作戦が通常より有利になるか知らしめたいんだろう。その性能を見せて、購入機数を増やそうという魂胆だろう。」

早い話がスペクトラムファインダーのレーダー技術を搭載した無人航空機の性能を見せて、刀剣類管理局にも購入させようという腹積もりなのだろうと、甲斐は話す。

「だが、この掃討作戦が可決されたのは、２ヶ月前の新型Ｓ装備のプレゼンが効いたのだろうな。」

中谷はそう言いつつ、２ヶ月前の新型Ｓ装備の説明会を思い出していた。

時は戻り、中谷が言う２ヶ月前の新型Ｓ装備のプレゼンテーション当日――。

そのプレゼンテーションに中谷の派閥に所属する議員と甲斐も出席していた。

「折神家と米軍が共同で開発しましたストームアーマー、通称Ｓ装備は刀使の身体能力及び防御力が飛躍的に向上する荒魂殲滅用の強襲装備であります。その中でも我が八幡電子はＳ装備開発の一端を携わらせて頂きました。」

八幡電子システム課に所属する恩田　累は、折神家主催の新型Ｓ装備のプレゼンテーションの司会をすることになり、定型通りの挨拶か

ら始めていた。

「しかし、Ｓ装備は使用する刀使の身体能力及び防御力を飛躍的に上昇させますが、その反面、稼働時間が予備電池を含めても３０分以内であり、個人の戦闘能力を強化させるのみという欠点を抱えたままでした。……しかし、この新型Ｓ装備に内臓されているバッテリーは特別希少金属利用研究所が研究を進め、改善されたことにより稼働時間が大幅に延長されました。そのうえ、防衛装備庁からのデータリンクシステムと先進個人装備システム等の技術提供により、刀使の防護力及び攻撃力を向上させ、刀使の生残性と任務遂行率を高めることが可能となりました。」

そして、累は新型Ｓ装備は従来の性能よりも向上したことをこのプレゼンテーションに出席している甲斐以外の刀剣類管理局や防衛省の重役とＤＡＲＰＡの技術が使われているため米国側の監督役として参加している米軍将校、並びに政府のお偉方に説明していた。しかし、当のそのお偉方達は半信半疑であった。

「……データリンクシステムと先進個人装備システムによって、戦闘能力と生残性が向上したとのことですが、一体どのように向上したのでしょうか？」

一人の自衛官が累に質問をぶつけてきた。どのように防衛装備庁の技術提供を使っているのかと。

「データリンクシステムによって、ＵＡＶ等と情報をリアルタイムで共有することにより、上空から荒魂の数と規模を先んじて視認することができ、過去に起きた箱根山の討伐作戦において刀使が不意討ちを受け、孤立することを防ぐことが可能となります。そのうえ、無線アンテナ、赤外線ＬＥＤ、ＴＶカメラ、ヘルメット・マウンテッド・ディスプレイ等を装着した統合ヘルメットの機能を付けたバイザーによって、無線ネットワークを通じてデータリンクシステムに対応したＵＡＶと防衛装備、同じ新型Ｓ装備を装着した刀使同士が見ている画像は新型Ｓ装備を装着している刀使と指揮官にも配信されます。それだけでなく体温、血圧、呼吸、心拍数、運動反応をＳ装備に内臓された各部位のセンサーで測定し、そのセンサーを制御するモニター及

びデータ信号を送信する制御装置が指揮所等にあるモニター等を通じて指揮官にリアルタイムで新型S装備装着者の状態と生体反応をも含めた情報を共有することにより、新型S装備を装着した刀使を指揮する指揮官は、刀使の健康状態を考慮しながら、より組織的な荒魂討伐が可能となると言えます。」

　刀使に高度なデジタル通信機能を持たせて情報ネットワーク化すると共に、各種装備によって戦闘能力と生残性を向上させるというものであった。

「それは、モンゴル帝国の情報戦略やナポレオンの大陸軍（グランダルメ）のように、連携して諸兵科が対処するようなものなのでしょうか？」

　この真面目そうな自衛官は、嘗てのモンゴル帝国のように、遠征における組織だった軍事行動を支えるために遠征に先立ってあらかじめ情報を収集、敵情を分析し綿密な作戦計画の策定。それと同時に実戦においても、先鋒隊がさらに前方に斥候や哨戒部隊を進めて敵襲に備え、また中央アジア遠征ではあらかじめモンゴルに帰服していた中央アジア出身のムスリム商人、ヨーロッパ遠征では母国を追われて東方に亡命したイングランド貴族を斥候に加え、情報提供や案内役を務めさせていたことから、きわめて情報収集に力がいれられており、優れた連絡網と馬を使った機動性を生かした軍事行動が取れたこと。

　そして、もう一つは嘗てナポレオンが率いていた大陸軍（グランダルメ）のように、菱形状の隊形で各頂点を位置する軍団の互いの距離は一日行程とされ、どの軍団が強力な敵と対峙しても、２４時間前後で援軍として到来する方形布陣と各軍団に対応力を持たせるためそれぞれが補給・行軍・戦闘を行なえるように編成し、全体の膨大な情報と連絡を処理できるよう中央司令部を置いたことにより、各軍団を広域に分散させたまま行軍させ、共通する目標へと同じタイミングで到達（ナポレオンの時代で、これをやろうものなら普通は統制が取れず、バラバラになり行軍どころではなくなる。）させることができたこと。

　これら二つと同じ意味なのかと自衛官は、専門外の累に特に気にせず質問をしていた。

「えっと、まあ、……そういうことです。」

累は突然専門外過ぎる質問に当然困惑をし、そのように答えるしかなかった。

「では、私の方からも質問させて頂きます。私が所属する防衛省は刀剣類管理局と連携することになりました。ああ、無論、荒魂事件に対してのみであり、指揮権は刀剣類管理局にありますので皆様ご安心を、流石に年端の行かない少女達にレンジャー訓練を施すほど、愚かではありませんので。……さて、話を戻しますが、ＵＡＶと防衛装備の連携が可能と言われましたが、それは自衛隊の艦船、航空機、車両に装備されているデータリンクシステムにも対応されているのでしょうか？」

甲斐は困惑していた累に助け舟を出すため、システム課に属する累の得意そうな話題で場の雰囲気を変えようとしていた。

「荒魂事件によっては海上保安庁、防衛省にも協力の要請があると思われますので、それも考慮し、データリンクシステムにも互換性があるかどうか運用試験したところ、問題無く作動したとのことなので、命令系統に問題が無ければ連携に支障は無いと思われます。」

甲斐に質問された累は、命令系統に問題が無ければ連携に支障はないと、釘を刺しながら答えていた。

「……ほう、それは実に素晴らしい！となれば、自衛隊の無人機とデータリンクシステムの運用が進めば、更に新型Ｓ装備の性能が向上すると見てよろしいのですね？」

すると、甲斐は釘を刺されたことに気にした様子も無く、突然大きな声を上げ、喜色満面の笑みでそう答えていた。

だが、この一連の累と甲斐の会話は事前に取り決めていたことであり、そのことについては周りのお偉方は知らなかった。

「ＵＡＶとの、無人機との連携を考慮なされているようですが、その無人機が破壊される恐れは無いのでしょうか？」

中谷の派閥に属する議員が無人機を破壊されれば、連携が取れなくなるのではと質問していた。

「それは心配ありません。最新の研究により、ノロのスペクトラム化、またはノロ同士が融合することで脳のようなものを形成し高度な知

能を有していきます。その過程で感情が芽生えて荒魂となる。全ての荒魂が最初に抱く感情は喪失感と言われており、この餓えにも似た喪失感を埋めるためにノロは本能的に結合を求めます。その課程で結合を繰り返し、より知能が発達すると喪失感は怒りに変わります。自分の一部である珠鋼を奪った人間に対する怒りです。荒魂が人を襲う根本的な原因はそこにあると考えられていますので、無人機が荒魂を威嚇、または攻撃しなければ襲うことはまず無いと思われます。」

累の荒魂が人を襲う原因を聞き、お偉方は荒魂を鎮めるための唯一の武器が荒魂を生み出したそもそもの原因とは何とも皮肉な話であろうと思い、声を唸っていた。

「ま、まあ見ていただくのが一番ですね。場所を変えましょう。」

累は、場の空気を変えるべくそう言うと、甲斐と議員、お偉方達は場所を累と共に移動して行った。

そして、このプレゼンテーションに参加している者達は新型S装備の性能を知ることとなる――――。

新型S装備の話　2

累達が移動した場所は、長船女学園傘下の普天間研究施設（沖縄県宜野湾市）であった。

「今回は〝珠鋼搭載型のS装備が運用試験〟に使われた試験場で、新型S装備の運用試験を行います。」

累の今居る場所の説明を受けた米軍将校は、何か思うところがあるのか、一瞬渋い顔をしていたが直ぐに表情をいつも通りにしていた。

「まず始めに、このシュミレーションに参加している刀使達は平均的な実力しかありませんが、チーム戦は得意な子達です。そして、荒魂が何処に居て、数と規模がどれほどなのかは、このシュミレーションに参加している刀使達は知らされていません。限りなく実戦に近付けるためです。」

一同は累の説明を聞きながら、試験場を見ていた。思っていたよりも試験場は広く、構造物を模したブロックがあり、入り組んだ地形を想定した試験場へと改装されているようだった。だが、このように改装された理由は、荒魂事件が都市部の多い関東に頻発しているため、特に市街戦を考慮した物となっているからである。

……しかし、

『殲滅する荒魂は蟲型三体、大型は存在しない。』

「……分かりました。」

このシュミレーションに参加している米村　孝子は事前に荒魂の数と規模をシュミレーションが始まる前に知らされていた。

だが、本来は、荒魂が何処に居て、数と規模がどれほどなのか知らされていないことと、このシュミレーションに参加している刀使達は平均的な実力しかないが、チーム戦が得意な子達であると累はお偉方に説明していた。しかし、実際はシュミレーションが始まる前に荒魂の規模と数を知ることができ、加えてこのシミュレーションに参加している刀使は米村　孝子と小川　聡美が率いる一線級の部隊である。

このことから導かれる答えは、このシュミレーション自体、新型S装備を容認してもらうための茶番にしか過ぎず、刀剣類管理局にとっ

て新型Ｓ装備は、起こりうるかも知れない２０年前以上の大災厄に対抗する装備を一つでも用意するためでしかなかった。

『では、始めて下さい。』

累のマイクによって拡声された声を合図に、シュミレーションが開始された。

孝子を隊長にし、聡美は副隊長、他四名の刀使（なお、この四名は、舞草の拠点に居た者達である。）の部隊は、開始宣言と共に動き、お互いの死角をカバーしながら（そのまま、荒魂の方角へと一直線に進めば、茶番であることがばれるための演技である。）荒魂を見つけ、殲滅するべく進んで行った。

「なるほど、データリンクシステムでお互いの視界を情報共有し、死角をカバーしながら進んでいるのか……。」

その動きを見て、平均的な実力を持つもののチーム戦が得意といったことは嘘ではないなと、このプレゼンテーションに参席しているお偉方は感嘆の声を上げながら思っていた。

……しかし、甲斐と中谷の派閥に属する議員はこのシュミレーション自体、茶番であることは既に知っていたのであった。

試験結果は、Ｓ装備の性能の恩恵もあり、孝子達の部隊損耗率はゼロであり、孝子達が相手をしていた荒魂三体はノロへ還っていた。孝子達の完全勝利である。

これを見たお偉方は、最初のシュミレーションはＳ装備の基本スペックを見せるための試験だろうと思っていた。何故なら、従来のＳ装備の性能と変わらず、変わったところがあるとすれば従来の物より稼動時間が延長したぐらいであろうか?と思うぐらいであった。

「次は３０分後に、大型の荒魂を一体投入して第二試験を行ないます。」

累がそう言うと、孝子達は次の試験までに試験場を離れ休憩し、３０分後には、孝子達と今度は大型の荒魂一体と蟲型三体が試験場に入っていった。

そして、第二試験が始まり、先ずは荒魂の数と規模を構造物の上から視認した刀使一名が、孝子達五名に蟲型三体と大型の荒魂一体が

映っている画像とS装備が算出してくれた荒魂の移動予測ルートを孝子達に転送していた。そして、孝子達はその移動予測ルート上に待ち伏せ、荒魂の群れを構造物の角から視認した孝子と聡美が荒魂の群れの前に突然現れ、注意を自分達に向けさせると、残りの刀使達は蟲型の荒魂三体を奇襲で瞬時にノロへと還していた。そして、残りの大型の荒魂一体を五人で対峙し、真正面からぶつかるのではなく、側面や背後を狙って攻撃し、注意が自分から逸れたところを見計らった孝子は荒魂の首の部分を狙って、大型の荒魂の首と胴体を斬り離すと、大型の荒魂はノロへと還っていった。この試験を見ていたお偉方一同は驚愕し、感嘆の声を上げていた。理由は、第二試験は孝子達は以前よりも増して統率が取れ、苦戦も無くファーストルック（敵を先に発見し、）、ファーストショット（先制攻撃）、ファーストキル（存在に気付きもしないうちに殲滅する。）で排除してのけたことと、広域データリンク網によってあらゆる戦闘情報を受信・送信できることによって、第一試験よりも手強い荒魂を相手にしているはずなのに、その第一試験よりも早く倒してしまったことにである。

「こんなに早く倒すとは……！」

そのことに、刀剣類管理局の幹部は驚嘆の声を上げる。そのため、周りの者達も声がした方に注目してしまった。

「蛇足かも知れませんが、私がまだ美濃関出身の刀使であった頃はS装備も無かったので、あの大型の荒魂を相手にするときは数名から数十名の刀使が部隊を組んで対応するものでした。」

本来なら、孝子達が相手をしていた大型の荒魂は数名から数十名の刀使が数分かけて対処していたものだと累は説明する。敵情を事前に把握し、統率が取れ、優位な状況で戦うことによって大型一体と蟲型三体の荒魂の群れを僅か数秒で倒してしまう事実に、美濃関出身の元刀使である累の説明もあって、この試験を見ていたお偉方はこれほどまでに変わるものなのかと驚嘆の声を上げてしまうほどであった。

「次の第三試験は1時間ほどの休憩の後、先程の大型の荒魂を別々の所から三体を出し、新型S装備の性能を完全に出してもらいます。」

累はこれが本番であるかのように、新型S装備の性能を完全に引き

出し、その力をお偉方に見てもらおうとしていた。
『討伐対象の荒魂、大型三体のみ。三方向に分かれて行動している模様。』
『聡美とエレンを分隊長にして部隊を二つに分け、大型の荒魂を各一体につき三人で討伐。その後は、こちらが送ったポイントに二つの分隊を合流させ、残りの大型一体は全員で討伐しろ。』
そして、第三試験が始まる前に、聡美達は試験相手の大型の荒魂三体の規模と位置を通信手から知らされていた。その1時間後に第三試験が開始されると、第三試験は孝子が部隊を率いておらず、聡美が部隊を率いており、孝子の代わりにエレンが加わっていた。そして、孝子の指示通りに聡美とエレンは部隊を二つに分け行動していた。しかし、聡美達はまるで、元から倒すべき荒魂は三体居ることが分かっているかのように、各一つの分隊は各自が担当する大型の荒魂の方に、ほぼ一直線で向かって行った。
「……これは、一体どういうことかね？」
政府の高官は累に何故、刀使達は知りもしない荒魂の数と規模、居場所を知っているかのような行動を取ることができるのかと、訊いていた。
「こちらのモニターをご覧下さい。」
累の声に応えるかの様に、このシミュレーションに参席している一同はモニターを注視していた。
『Ｓ１、Ｓ２、Ｓ３共に損傷無し。』
『Ｓ４、Ｓ５、Ｓ６同じく損傷無し。荒魂との戦闘のストレスは３，０以下。Ｓ６のみ血圧が３，５となった以外異常なし、戦闘行動には支障はありません。』
『Ｓ１、Ｓ２、Ｓ３も３，０以下、同じく戦闘行動に支障はありません。』
すると、そこに映っていたのは、孝子と他何名かが居る何処かの作戦指揮室を映し出していた。
「……このように、作戦指揮所と他の装備が新型Ｓ装備と情報共有することができれば、スペクトラムファインダーのレーダー技術を搭載した航空機、車輌が観測した情報をモニターで観ることができ、新型

Ｓ装備を着用した刀使にその情報を転送することができます。それによって、彼女達は荒魂の所へ一直線へ向かうことができたのです。そのうえ、新型Ｓ装備の各部位に搭載されているセンサー類が刀使の心身状態をモニタリングすることができ、内臓されているＧＰＳによって居場所が分かることができます。これらの技術を応用し、発展すればスペクトラムファインダーのＧＰＳにも反応することが可能となり、荒魂掃討作戦に参加している刀使全ての生残性と安全面は飛躍的に向上することでしょう。」

　累は、モニターに映っているものは何なのか説明していた。

「この作戦指揮所は特別な施設でないといけないのでしょうか？例えば、指揮所が攻撃され放棄しなければならない場合、臨時指揮所として陸自指揮システムや野外型システムにも連動は可能でしょうか？」

　自衛官が、陸自指揮システムや野外型システムでも臨時の作戦指揮所として機能するか累に尋ねていた。

「新型Ｓ装備のデータリンクシステムは個人装具システムの技術提供が元になっておりますので、防衛省のＣ４Ｉシステムにも問題無く繋がります。今後、新型Ｓ装備の技術が発展すれば、荒魂掃討作戦に参加中の刀使全員に生体状況を確認することができるセンサーを装備させることが可能となります。そうなれば、防衛省と刀剣類管理局にも配備されている軽装甲機動車に搭載可能な隊員モニタ装置で刀使の心身状態を観ることができ、安全面の向上も図ることが可能となるでしょう。」

　累の説明にこのシミュレーションに参席しているお偉方は納得したのか、唸り声を上げていた。

「これが新型Ｓ装備の性能です。既存の兵器にスペクトラムファインダーのレーダー技術を搭載したＵＡＶ等が新型Ｓ装備とデータリンクすれば、彼女達は何処に荒魂が居て、数と規模はどれほどかを知ることができ、刀使だけで戦っていると思うことはなくなり、彼女達の心労は軽減されることでしょう。」

　累は政府の高官の疑問に、ＵＡＶの上空監視による支援のお陰であると答えていた。

そうして、孝子達は大型の荒魂三体を、

エレンが、大型の荒魂の真正面に現れ、囮となっている隙に構造物の天井からエレンと組んでいる刀使二名が突然現れて不意討ちで荒魂に深手を負わせると、深手を負った荒魂は力と勢いが弱まり、その隙に三人掛かりで胴体をバラバラにして討伐。

聡美が率いる分隊は、大型の荒魂を真正面と背後二名から同時に襲い掛かり、聡美の分隊に所属する刀使が大型の荒魂を背後から斬って深手を負わせると、その深手を負わせた刀使は囮となり、その隙に聡美が大型の荒魂の首と胴体を切り離すことに成功するという連携技で討伐。

最後は、エレンの分隊と聡美の分隊が合流した後、ＵＡＶを荒魂の目の前に出し、それに注意を向けている隙に、刀使二名が足を切断する等して深手を負わせ、力を弱まったと判断すると、六人掛かりで荒魂を背後と側面から攻撃。最終的には大型の荒魂をバラバラにし、討伐を成功していた。

「再度申し上げます。これが、新型Ｓ装備の性能です。今後、防衛省と警察庁の支援が有ることも想定すれば、既存の自衛隊の諸職種に属する防衛装備との連携も可能であり、刀使の生残性と戦闘能力は更に向上することでしょう。市街地での荒魂討伐も増えていることを考慮すれば、これほどまでに荒魂殲滅の装備として適した装備は現段階において存在しないと言えるでしょう。」

結果は、聡美達新型Ｓ装備部隊の損耗率ゼロという勝利であったこともそうだが、何よりも累が止めの説得をお偉方にした効果が有ったのか、皆が一様に唸っていた。

「……しかし、実地試験はどうやってやるかだな。」

「我が陸自が無人機にスペクトラムファインダーを搭載した試験機が有ります。それで、荒魂の反応を観測できれば……、実戦を兼ねた試

験も可能と思われます。」
「それよりもまずは正式発表は控えておいた方が良いでしょう。新型S装備を使った荒魂掃討が確実に成功するとは限りませんので。」
「確かに、失敗すれば高価なオモチャを造ったとして、国民から無駄遣いだと批判されかねん。２０年前以上の災厄が起こる可能性を考慮すれば、刀剣類管理局への批判が強まるのは避けたい。」
「我が海自としても、これ以上批判が高まり、刀使の希望者が減ることになるのは避けたいところです。それに、護衛艦にS装備を射出する機構を備えることができましたので、そのときは我々も参加させて下さい。」
　そして、様々な思惑があるのか、皆が皆小声で何やら話し込んでいる者も現れ、騒然となっていた。

　そして、時は戻り、新型S装備のプレゼンテーションからの２ヶ月後、甲斐と中谷の居る防衛省市ヶ谷――――。
「あのプレゼンの後に、荒魂の群れが箱根山で観測されたお陰で、実地試験ができると喜んでいたな。」
　中谷があの２ヶ月前のプレゼンを思い出し、それが元で荒魂掃討作戦が立案されたと振り返っていた。
「だが、あの新型は使い様によってはこちらの装備更新が捗るいい口実になるとは思わんか？」
　そして、甲斐は蛇のような鋭い目付きで中谷にそう語っていた。
「……そういえば、私の派閥に属する議員がこの新型S装備には装備庁の技術提供があったということを聞いたそうだが、お前さん、何か関わっているんじゃないのか？」
　中谷はそんな甲斐に臆することなく、甲斐に防衛装備庁の技術提供に関わっていないか問い詰めていた。
「そんなことはしとらんよ。」
　甲斐はせせら笑いながらそう答えるが、実際は関わっており、S装

備の性能と信頼性が向上すれば、その関連技術で自衛隊が開発中のパワードスーツに転用し、自衛隊用のパワードスーツの早期の配備を目論んでいた。つまり、観測ヘリコプター用戦術支援システムと個人データ共有システムといったデータリンクシステム、並びに新無人偵察機システムといった無人機の早期の実戦投入と運用法の確立を新型Ｓ装備を纏った刀使に担わせようということであった。甲斐は、あくまで国防の任を預かる陸上自衛官の一人として国防戦力の拡充と、昨今の情勢を鑑みて無人機とデータリンクシステムの運用法の確立をしようとしていただけに過ぎなかった。

しかし、どう言い訳しようと甲斐の行なってきたことは、１２～１８歳くらいの刀使を、少女を、子供を出しに使っていた事に変わりはない。

「……そうか。」

中谷も甲斐をこれ以上問い詰めることはしなかった。

「それにだ。グローバルホークの支援を確約してもらったとき、ラングレーからあの少年（衛藤　優）のことを宜しくお願いされたよ。……あの少年は２０年前の大荒魂を本体の意思を含めると四つに分割してくれたうえ、荒魂を誘い出す餌となり、荒魂の素となっているノロを詰め込める物として大いに役に立ってくれる。そして、仮に裏切ったとしても〝柊の娘（十条　姫和）〟と〝鎌倉（衛藤　可奈美）での英雄殿〟がこちらに居る。人の世を脅かす荒魂を神聖なる御刀によって斬って祓うのが刀使のお仕事だったな。そうだろう？」

甲斐は、蛇の様のように目を細め、中谷にそれを告げる。衛藤　優が大荒魂を全て吸収し、暴走したとしても、政府に属する刀剣類管理局の刀使である可奈美と姫和の二人が優を始末できるだろうと甲斐は踏んでいた。甲斐にとって優は、姫和と可奈美とは違い、優は荒魂化した人間でしかなく、荒魂は荒魂でしかなかった。

「甲斐、朱音はこちらの事は気付いていたか？」

「いいや、気付いておらんかったよ。」

中谷は、そう言って甲斐に尋ねると、望んでいた答えが返ってきたためか、安堵していた。

何に気付いていたか?と言うと、甲斐が４ヶ月前に行っていたこと、紫（正確には、２０年前の大荒魂だが、）率いる刀剣類管理局に聡美が捕縛された際、その聡美達を救出した謎の武装組織を指揮していたのは甲斐であった。

何故、そのようなことをしたのかと言うと、警察の能力ではこういった事件には対処できないといったことを政府に思わせると同時に、刀剣類管理局をより荒魂退治の専門組織として独立させ、警察と自衛隊が刀剣類管理局の支援をするという名目の元、荒魂対策の予算を自衛隊にも計上してもらうというのが目的であった。

そのために、海上自衛隊の哨戒ルートを別班が調べ、その哨戒ルートを繋がりがあるソフィアに通じて舞草に知らせ、聡美達は謎の武装集団に扮した特殊作戦群を使って救出した。

甲斐が、朱音を支援する理由は、この裏工作の内情を知るソフィアという後顧の憂いを排除するためでもあった。

つまり、甲斐は省益のために、朱音を持ち上げ、ソフィアを始末しようとしていた。

「だが、古波蔵の娘御がよく新型Ｓ装備に協力したな。それにだ、彼の少年（衛藤優）を掃討作戦に参加させることができるのか?反対する者が多いと思われるが、強行しようものなら、反発もでかくなり、刀剣類管理局との共同作戦かラングレーとの約束も戦線に加えなかったということでご破算となるぞ?」

中谷は、エレンがＳ装備を人殺しの道具として扱われることを良しとしないことを聞いていたことと、衛藤　優を掃討作戦に戦線に加えると反発が起き、共同作戦処ではなくなるうえ、優を戦線に加えなければＣＩＡからも反発を受ける可能性があることを伝えたうえで、甲斐にどうするのか尋ねていた。

「古波蔵一家には〝Ｓ装備〟を軍事利用する気が無いことを伝えている。それに、刀剣類管理局も彼の少年を戦線に加えなくてはならなくなる。そうすれば、ＣＩＡは何も言わなくなるだろう。」

甲斐はＳ装備を〝軍事利用〟しようとは考えておらず、Ｓ装備の技術と性能を転用した自衛隊用のパワードスーツに〝復興支援〟や〝

防衛任務〟に使うだけの予定であり、言葉通りにS装備を〝軍事利用〟しようという考えはなかった。

……そして、甲斐は意味深に優は戦線に出なくてはならなくなると中谷に伝えていた。

「我々にとって最も好ましいのは、大荒魂が幾つかに分かれ力を失い、彼の少年（衛藤優）が荒魂事件を抑える役割を果たし、タキリヒメがいつか我々に協力してくれることになる現状だ。できればこのまま維持したい。」

甲斐は、優を荒魂を誘き寄せる餌と荒魂の素となるノロを入れる入れ物として利用することにより、頻発する荒魂事件をある程度抑えコントロールしようということと、タキリヒメは市ヶ谷に封じ込め、協力を得てS装備といった隠世技術の恩恵を我が国が独占できるようにしようという考えと魂胆しかないことを中谷に語っていた。

災いの警鐘

一方、鎌府女学院――――。

「「真希さんっ!!おはようございますっ!!」」

「あっ、うん。…おはよう。」

真希は朱音の命により、鎌府女学院に出向しており、朝から熱烈な歓迎を受け、

「真希さんっ！飲み物買って来ましたっ!!」

「ああ、うん、済まない。頼んでもいないのに買ってきてくれて……。」

そのうえ、鎌府の刀使から何か貰うことができ、

「真希さんっ!!」「真希さんっ!!」「真希さんっ!!」

「……。」

そして、一時間ごとに鎌府の刀使から何かできないかを聞かれるのが、日常となりつつあるとき。

時は過ぎて、刀剣類管理局本部の食堂。

「……寿々花、疲れた。」

「モテモテですわね。まあ、頑張って下さい。」

真希と寿々花は紗南から重要な知らせがあると言われ、刀剣類管理局本部へ赴き、他の刀使も使用し混雑している食堂にて待ち、テーブルに突っ伏した状態で寿々花に助けを求めていたのであった。しかし、当の寿々花は口に手を当て、そんな真希の姿をニヤニヤしながら見ていた。

「いやいやいや、これ以上は無理だよ！四六時中何所に居ても見つかってそんなこと言われるのは流石に辛いよ!!」

だが、真希は引き下がらず、待遇の改善を求め抗議し、救いを求めていた。

「……何が不満ですの？戦闘指揮官が慕われることは理想的で良いことだと思いますが？…まあ、ハーレム状態みたいですが。」

真希が鎌府の刀使達に多数慕われている状況を寿々花はハーレム状態といって茶化していた。

「僕は女だよっ!!」
真希は、寿々花にハーレム状態と言われ、刀使は女性にしか務まらないことと、自分は人類の生物学上女性であるとツッコミを入れていた。
しかし、真希がこのように、これほどまでに鎌府の刀使に慕われているのには理由がある。それは、元々鎌府は折神家と関わり合いが深いこともあって、折神家親衛隊とも関わり合いが深かった。そのためなのかは不明だが、元々から折神家親衛隊のことはかなり信頼していたと言っていいだろう。
――――だが、それだけの理由で慕われているのではない。
幼い子供をノロ漬けにしたうえ、大規模テロの関与（舞草の拠点が襲撃され壊滅に近い損害を被った後、それが公式発表されていたため、一部の民間人もそれを未だに信じている者が一定数居る。）、そして横須賀湾で起こった報道陣の前での斬り合いの際に生じた混乱と刀剣類管理局の社会的地位の低下といった、一連の要らぬ騒乱を引き起こした舞草は鎌府にとって、これらの諸問題を引き起こしたテロ組織であり、長船もそのテロ組織を支援しテロを幇助していた組織であると鎌府は思うようになっていった。そのため、舞草の幹部の一人である長船女学園学長真庭　紗南が刀剣類管理局本部長に就任したことが鎌府にとって見ればテロ行為によって得たものとしか見ることしかできず、朱音の懸念通り、鎌府の神経を逆撫でてしまうことになってしまった。そのうえ、舞草の首領であった現局長代理の折神朱音が実の姉でもある折神　紫をテロ行為によって追いやったかのように鎌府は見え、折神家の警護と横須賀湾の混乱の鎮圧に駆り出された鎌府には何の恩賞も無しであったことから、朱音は折神家と刀剣類管理局を実効支配するために、同じ舞草の一人である真庭　紗南を本部長にしているのではないのかという噂が鎌府の間で勝手にされるようになっていた。
鎌府がそんな状態の中、元折神家親衛隊の中でも特に人気が有る獅童　真希と此花　寿々花の両名が鎌府女学院の刀使達を指揮することとなったことを鎌府が聞き、どういう訳かこんな話が出回ってし

まった。

鎌府を、刀剣類管理局を好き勝手にしようとする紗南と朱音の野心を挫くべく、元折神家親衛隊の獅童　真希と此花　寿々花の両名が、刀使達の離職率が上がっている状況を上手く使って、わざわざ鎌府の指揮を買って出てくれたと――――。

現局長代理の折神　朱音が刀剣類管理局を実効支配するためだけに、その仲間である真庭　紗南を本部長にし、反体制側の舞草を支持していた長船だけを贔屓にするうえ、旧折神　紫派であった高津　雪那が鎌府学長であったがために鎌府を除け者にしようとしていると鎌府側が一方的に思い込んでいる矢先に、御前試合で素晴らしい実績を持ち、信者ができるほどの人気を得ていて、鎌府にとっては要らぬ混乱を引き起こしているテロ組織でしかない舞草を壊滅に追いやり、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題においても独自に判断し解決に尽力していたという話を聞いていた（尚、ソフィアの策謀で舞草と通じていたという嫌疑は朱音を逮捕するまで、そのまま公表されることがなかった。故に今現在も公表されておらず、鎌府の側はそのことを知らないままであり、仮に伝えたとしても、今のこの鎌府の状態では、信じない可能性が大きい。）ために、鎌府の間では真希と寿々花の評価は、刀使としての使命を忠実に守り、その使命を全うすべく律儀に刀剣類管理局の指示に従う者達であるという評価と栄誉を真希と寿々花は意図せず得てしまい、鎌府の刀使達にとっては、救いの神の様に盲目的に見えてしまい。紗南本部長に対抗する神輿として勝手に担ぎ上げている状況でもあった。

「……まあ、冗談はさておき、鎌府と長船がこのままなのは非常によろしくないことですし。刀使の離職者が増えつつある現状において、実戦経験が豊富にある鎌府が離反することになるのは避けたい事実ですし。そのまま、特に真希さんが慕われていれば楽なんですが、そうも行きませんものね。」

寿々花は、机に両肘を立てて寄りかかり、両手を口に持っていくと、

刀使の離職者が増えつつある現状の中で、荒魂事件発生率の高い首都圏の担当だけに実戦経験も豊富であり、装備も優先的に最新のものが多く配備されているため、S装備等の扱い方も熟達している鎌府の刀使達が離反することは避けたいと思っているのか、苦悶していた。

「ああ、長船も長船で、鎌府のことを朱音様を撃つ訓練校だとか言って、お互いが憎悪している状況は座視できることではないしな。あの新型S装備は各自の連携によって性能が上がる物だから、長船と鎌府の関係は何らかの方法で改善しなくてはならない。」

真希の言うとおり、長船女学園側も鎌府のことを横須賀湾にて起きた鎌府の刀使（実際は、ソフィアのシンパだが。）による朱音を狙った射殺未遂事件が尾を引いており、長船の刀使達は鎌府女学院のことを朱音様を撃つ訓練校と揶揄しており、そのうえ事情を知らない長船の刀使達は舞草の拠点を襲撃し壊滅に追いやった親衛隊を許せない者も多数居て、その親衛隊が鎌府の指揮をしているということがより一層、長船の鎌府に対する憎悪と敵意を助長させる結果となってしまっていた。

そんなこともあって、真希も寿々花に同意し、鎌府と長船の関係が悪化していることが発覚するという不祥事が起き、刀剣類管理局への風当たりが一層厳しくなることはどうにか防ぎたかったのある。

「……僕等が仲良くしろ、っと言って仲良くなれるなら良いけどね。それとなく言ったとき『真希さん、貴女は騙されています!!』って言われたときはどうしようかと思ったよ。」

前に真希や寿々花が鎌府の刀使達に、長船との関係を改善するべきでは?と尋ねてみたところ上記のようなヤンデレ染みた返答が返ってきたため、真希と寿々花はその後もこれといった解決の手段が思い浮かばず、今まで何の解決策も、何の改善策も見い出せず苦悩していた。

「まさか、ここまで鎌府の刀使達が思い詰めていたとは思いませんでしたわ。」

寿々花も、親衛隊の頭脳的存在として扱われていたことを承知していたにも関わらず、今の今までこのことに気づかなかったことに自分

自身を恥じていた。
「僕もこうなることを危惧できず。僕が鎌府に慕われるという状態を良しとしたままでしかできないのは、嘗て紫様から頂いた折神家親衛隊第一席の称号と荒魂討伐の作戦指揮を任せられた獅童　真希とは思えない失態だ。」
　真希も、自らの失態を自嘲するほど気に病んでいるように見えた寿々花はそれで立ち止まる訳には行かなかった。
「……だとしたら、鎌府の刀使達に大きな功績を与える機会がある仕事を与え、それを成し遂げることができれば、少しは改善されるかも知れません。」
　そのため、寿々花は真希にある賭けに出る提案をしていた。
「……どうやって？」
　真希は、寿々花に『どうやって？』と言って、その賭けに乗る魅力と理由を欲して尋ねていた。
「今日、紗南本部長に理由を話して荒魂殲滅作戦か何かの大掛かりな作戦に鎌府が参加することができるように取り計らった後、鎌府の刀使達には、朱音様と紗南本部長達が鎌府と長船の関係悪化と刀使の離職率が上がったことで刀剣類管理局の戦力が落ちたことを憂慮し、鎌府の協力を得るために、鎌府を快く思わない元舞草の重鎮達の制止を振り切ってでも、朱音様と紗南本部長が鎌府に功績を与える機会を設けるべく動いているという根も葉もない噂を流し、紗南本部長にお願いした大掛かりな作戦を鎌府の刀使達が中心となって解決すれば、朱音様達と鎌府の関係が改善され、長船の刀使達も鎌府の方達のことを悪く言えないはずですわ。……都合良く大掛かりな作戦が有ればの話ですが。」
　寿々花は冷や汗をかきながら、このような賭けにでることを提案していた。
「下手をすれば長船と鎌府は功績の取り合いに発展するかも知れないが、……何もせずズルズルこの状態が続いて、僕等が噂通りの人物ではないことがバレたら関係改善の道は閉ざされるどころか、状況はますます悪くなるばかりだろうしね。毒を以って毒を制することがで

きるかは勝負に出るしかないな。今日、紗南本部長に呼ばれたのは僥倖だったな、寿々花の案を話して許可を得ることができれば実行しよう。」

しかし、真希と寿々花は気付かなかった。その案には、抜けているところがあることに……。

そして、本部長に栄転した紗南と五名の自衛官が居る一室の中で、真希と寿々花は予定通りに紗南と会合し、鎌府の状況から伝え、寿々花の案を話していると、

「おお、そうか。実はな、箱根で荒魂の群れを討伐する作戦を計画中で、そういう事情なら鎌府の刀使達を中心に編成して当たってくれ。指揮と人選は真希と寿々花、お前達両名に任せたいが、良いか?」

しかし、都合良く大掛かりな荒魂討伐作戦の立案中だったことが幸いし、あっさりと許可が出たことに真希と寿々花は若干拍子抜けはしたものの、心の中でツキがでたのかもと思いつつ、直ぐに気持ちを切り替え、返答していた。

「…本部長、ありがとうございます。たしか、防衛省と刀剣類管理局は協力体制に入り、自衛隊の協力を得られる、ということを聞きましたが?この方達と何か関係があるのでしょうか?」

真希は、五名居る自衛官(真希が自衛官であることに気付けたのは、彼らが陸自の常装を着用していたからである。)を横目でチラリと見やりながら、紗南にこの部屋に居る五名の自衛官と何か関係が有るのかと含みを持たせながら尋ねていた。

「そうだ。箱根で米軍所属の無人機がな、スペクトラムファインダーの性能向上のために試験飛行をしている最中に偶然にも荒魂の群れを発見したから、これを討伐して欲しいと陸自から連絡が有ってな。そこでだ、彼らは我々刀剣類管理局にも戦術ネットワークリンクシステムを導入できるように支援する代わりに、自衛隊内にも荒魂対策の部隊を作る際のノウハウを得るべく長期出向という形で来てくれた。獅童、此花、彼らを宜しく頼む。」

紗南はそう言って、五名の自衛官が此処に居る理由を話すと、真希はそれに頷き、五名の自衛官を見る。
「陸上自衛隊第２師団第２５普通科連隊所属二等陸佐の西田　保です。長期出向の間、部下共々長くお世話になりますが、何卒、宜しくお願いします。」
屈強な身体つきだが、どこか爽やかな好青年さを感じさせる西田保二等陸佐が大きな凛とした声で、真希と寿々花に自己紹介をし、握手を求めていた。
「いえ、こちらこそ。陸上自衛隊第2師団の精強さは此処でも聞き及んでおります。その実力を拝見し、基幹連隊指揮統制システムの導入の支援とこちらの指揮管制官にご教授して頂けるのはこちらも感謝するところです。」
真希は、何処か政治的な、そして謀略の匂いを感じてはいたが、好意を無下にして刀剣類管理局にとって数少ない支援者を失う訳にも行かなかったので、これからも共に協力して行こうという返答の意味を込めて西田と固い握手をしていた。
「ありがとうございます。我々も真希さん達の御前試合での実績と鎌倉特別危険廃棄物漏出問題での活躍を聞き及んでおります。そのような素敵な方達と共に作戦を遂行でき、そのうえ我々だけでなく習志野の一部小隊に荒魂対策のことをご教授して貰えるのは、荒魂対策に通じている部隊が無い自衛隊としてもありがたいことです。」
西田もそう言って、刀剣類管理局と防衛省の固い同盟が結ばれたかのように真希との握手を握り返していた。

真希と西田が固い握手を交わした後、最寄の駐屯地に帰還し、進捗状況等の報告を済ますと、帰還した駐屯地のとある一室にて西田達は刀剣類管理局への長期出向に対することについての話をしていた。
「どう思います?我々が基幹連隊指揮統制システムのような物を刀剣類管理局に導入するための支援と同時に、荒魂対策の真髄を教授して

もらうことによる情報共有ということが目的の今回の長期出向のこと。」

西田の副官的立場にあり、西田よりも体躯が更に大柄な男性沼田剛一等陸尉は不意に西田に今回のこの長期出向のことについて尋ねていた。

「……そうだな、警察庁は先の鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の責任を取らされる形で、刀剣類管理局がより専門的な組織となるよう独立をさせられることになり、通るはずだった荒魂対策の政府予算を縮小されてしまったからな。だが、防衛省は刀剣類管理局への支援を名目に荒魂対策の政府予算を得た。やけに防衛省側が得するようなことになったのは、何かキナ臭いものを感じるが、獅童さんと此花さんは此方のことを状況が状況なだけに疑ってはいるが、嫌悪している訳ではないのがせめてもの救いだな。今回の我々の長期出向の第一の課題はいかに彼女達の信頼を勝ち取るかだ。」

西田はこの長期出向の最初の目標を掲げ、各隊員達のわだかまりを解消させようとしていた。

「……しかし、よく認められましたね。国会内部にも今回の防衛省と刀剣類管理局の人事交流と共同作戦は反対意見が多いんでしょう?」

だが、沼田は西田に国会の内部にも、自衛隊が刀剣類管理局を援助又は支援することを国連や各国が軍事行動と見なし、非難され、児童の権利に関する条約といった国際法に抵触する恐れがあることと、国連加盟国である我が国が国際連合安全保障理事会決議１２６１から続く国連決議に反する行動を取ることによる外交上の損失を恐れた野党や子供の権利に関するＮＰＯ法人から根強い反対意見があることを西田に伝えていた。

「俺達は〝暴力装置〟ということですね。大災厄から我らの守るべき国民を守ろうってことなのに。そんでもって、年下の子と仲良くできるチャンスだと思っていたのに。」

西田の部下である勝田　亨二等陸尉は西田と沼田の会話に割って入り、その会話の内容を茶化したようなことを言っていた。

「へぇ～～、勝田二尉はそんなこと考えてたんですか?でしたら、代わ

りに私とご一緒しません?年端の行かない子供にイタズラする不届き者を処罰するための予行演習ですけど。」

同じく西田の部下であり、自衛官に似つかわしくない可愛らしい声で予行演習に付き合って欲しいと言って、微笑んでいる格闘微章保有者の古河　蛍三等陸尉に言われた勝田は、

「……すいません、今のは冗談です。幾らなんでも甲斐陸将補がせっかく頑張って構築した防衛省と刀剣類管理局の協力体制を反故にするような行動はしないから。」

と言って、蛍に早口で説明し、謝罪する勝田。

「……まあ、ハードルは未だ高そうですな。」

沼田は勝田と蛍の会話を無視して、西田との話を進め。そのような状況下であるにも関わらず、防衛省のお偉方達が防衛省と刀剣類管理局による共同作戦をしようという魂胆が沼田には見えなかった。

「だが、甲斐陸将補が防衛省と刀剣類管理局の協力体制にご執心だからな。あの人のことだから、強引にでも推し進めるんじゃないか。」

西田は甲斐の目的達成のためならば、非情な手段を取ることもある人となりを推測し、表向きは防衛省と刀剣類管理局の協力体制は鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の解決のためと言いつつ、刀剣類管理局の支援のためと言って無人機とデータリンクシステムを使い、精度を高めようとする魂胆は容易に想像できた。

「……西田二佐。発言宜しいでしょうか?」

西田の部下の中では、沼田に次ぐ古参の部下であり、発言力もある女性自衛官の鏑木　霞一等陸尉は西田にあることを尋ねようとした。

「ん?何だ。」

西田も鏑木が何を尋ねたいのか聞こうとしていた。

「9歳の子供がこの作戦に加わるということを聞き及んだのですが、それは見送るべきだと思います。参加しなければならない何らかの特別な事情があるのかも知れませんが、刀剣類管理局に所属する特別祭祀機動隊と自衛隊が出動している作戦に参加することになれば、どのような理屈であろうと、その9歳の子供を戦闘行動に加担させたことになるのは自明です。下手をすれば我が国の行政機関が幼い子供

を軍事利用していると言われることとなり、年端も行かない少女達に危険な荒魂討伐任務を行なわせているという問題が再燃され、反対の声が大きくなり、そのような世論状況となれば、自衛隊は問題を引き起こしたとして責任を取らされることとなり、自衛隊と刀剣類管理局の協力体制は解消されることとなります。そうなれば、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の解決の目処が立たず、刀剣類管理局は更なる批判を受け、このような状況に引き込んだ自衛隊は刀剣類管理局側から白い目で見られることになり、甲斐陸将補がご執心している防衛省と刀剣類管理局の協力体制は今後しばらく形成されることはないと言えます。そうなれば、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の解決できなくなり、国民の不満が大きくなるだけという最悪の結果に終わることになる可能性が高いです。ですから、法的上民間人である9歳の子供に戦闘行動させるのは、如何なる理由があるにせよ問題になると私は進言します。」

そう言って、鏑木は9歳の子供が刀剣類管理局に所属する特別祭祀機動隊と自衛隊が出動している戦線に加わっていることが発覚すれば、防衛省と刀剣類管理局は国民からの信用を失うことになってしまうばかりか、防衛省と刀剣類管理局の協力体制がご破算となり、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の解決の目処が立たない刀剣類管理局は更なる批判を受け、自衛隊も幼い子供を軍事利用しているという世論を形成したとして責任を取らされることになり、今後しばらくは防衛省と刀剣類管理局の協力体制ができなくなることを西田に強く訴えていた。

だが、鏑木の本音は、刀使でも自衛官でもない〝民間人〟である9歳の子供を戦闘に駆り出すことに否定的であるだけであり、戦闘に参加させないように誘導しているだけである。

「……そうだな。だが、上はそう思っていないらしい。荒魂を討伐できる力の無い私達にできることは充分過ぎるほどの援護をしてやり、一人でも家に帰らせることだ。それと、その9歳の子供について、私が甲斐陸将補から聞かされたことについて、今から話そう。」

この後、鏑木達は9歳の子供衛藤　優が今現在置かれている状況の

ことを聞かされるのであった。

複数の目と呪い

そして、衛藤　可奈美達が東京都湾岸線沿いで荒魂討伐をする前のとある一日の朝、優は刀剣類管理局の医務室の一室にいつも通りに一人で起きていた。

真っ白い部屋に、真っ白いベッド、真っ白い家具にカーテン。……全てが飲み込まれるような白い部屋に一人だけ、優はそこに居た。……自分が軟禁されている事実を知らず、ただ待ち人をぼうっと待ち続けていた。そんなことを思っていたら、不意に扉がガラッと開かれる。

「おはよう。」

「あっ、……おはよう。」

待ち人可奈美が来てくれたと思い、扉の方を見てみると、笑顔を向けてくれる姫和が一人で来てくれていた。

「……ねえ、姫和おねーちゃん。」

不意に優が姫和に尋ねてきたため、姫和も「ん？何だ。」と返してしまった。

「可奈ねーちゃんは何時戻ってくるか分かる？」

優にそう尋ねられた姫和は、言葉が詰まってしまうが不審がられないように目を合わせずに答えていた。

「……可奈美は、その、少しアレだ。荒魂がよく現れるようになったから、急に任務が来てな。それで、私が可奈美代わりに来たんだ。……済まんな。私では不服だよな？」

姫和は伏し目がちにそう答えていた。

「あっ、……うん、そんなことないよ。いつもありがとう姫和おねーちゃん。」

姫和の話を聞いた優は、少し遠慮がちに答え、子供らしい屈託のない笑顔を姫和に向ける。

その笑顔を見守りながら、姫和は少し前のことを思い出していた。

「つまり、どういう事なんです？」

優の容態を担当している担当医の話を聞いていた可奈美と姫和は衝撃を受けていた。

「私達も精一杯手を尽くましたが、衛藤　優君は大荒魂との戦闘で荒魂の力を強くするために自身の身体をノロに侵食させた結果、あのような姿となってしまったようです。そんな状態でノロを抜いてしまえば、重要な臓器を荒魂化して抑えていた部分も無くなることになり、そうなると命は……。そんな訳ですので、元の姿に戻すことは不可能です……。現状は荒魂化した部分からくる拒絶反応とストレスを抑えるため、鎮静剤と免疫を抑える投薬等を追加し、ノロの毒性からくる人体への影響を緩和させるぐらいしか対策法がありません。……。」

担当医は残酷なことを可奈美と姫和に告げていた。優は大荒魂を倒すためとはいえ、荒魂の力を強くさせるため、身体をノロに侵食させたことにより、荒魂化した部分が増えたことによってノロの毒性からくる拒絶反応とストレスが増大し、鎮静剤と免疫を抑える薬等を追加し投与しなければならないという話を医者から聞き、可奈美と姫和は、優はノロ漬けで終わることなく、薬漬けにもされるのかと思うと眩暈がしてきたのであった。

「……そうだとしたら、優ちゃんは、優ちゃんはどうなるんです。」

可奈美はこの後の説明を訊くことを恐れたが、訊くことにした。いや、訊かなければならなかった。

「……政府から直々に、その、衛藤　優くんは鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の〝真実〟を秘匿するため、この部屋、…いや、この刀剣類管理局本部から許可無く外出することは許されなくなりました。そして、表向きは可奈美さん達が大荒魂を静めたということになるそうです。」

可奈美は絶句していた。優はその名誉を受けることもなく、自分達がその〝偽物の英雄〟として振る舞わなければならないことに、そして〝優を救う〟という約束の達成が更に遠のいてしまったことに。

「何でだ。……何でこうなるんだ?」

姫和は声を震わせながら、己の思いを吐露していた。

「……可奈美さん、姫和さん、本当に申し訳ありません。そして、お願いもあります。」

担当医も神妙な顔をし、意を決して、あることを頼み込んでいた。

「優君は必ず、……今後は、今後は必ず荒魂討伐に加わらせるようにして下さい、寿命が縮むことになります。」

可奈美と姫和も担当医の言っていることが理解できなかった。何故、優をまた荒魂討伐に参加させなければならないのか。そして、寿命が縮むとはどういうことなのか。

「……ただでさえ、荒魂化した部分からくる拒絶反応を抑えるため、現在は免疫を抑える薬等を追加して、ノロの毒性からくる人体への影響を緩和させているというのは説明しましたね?」

担当医の言葉に可奈美と姫和はただただ頷く。

「それだけでも、多大なストレスとなるのですが、優君が外に出て可奈美さん達に会いたいと、あの子は可奈美さんと姫和さんのために戦っていると言っていたから、つい口が滑って、それは辞めるべきだと言ってしまったんです。すると、あの子は荒魂討伐に加わらなければ自分が生きる意味が無いと言って、パニックを起こさせてしまい、それを鎮めるために許可も得ず、薬を投与しました。済みません。……ですが、もしあの子を戦闘に加えなかったら更なるストレスを与えることとなり、それらを抑えるために投薬の量が増えることになると、薬物依存や寿命の短命化といった障害が出るかも知れません。なので、できれば優君と一緒に過ごしてあげ、極力戦闘に加えさせるようにしてなるべくストレスを与えないようにして下さい。」

つまり、敵を倒すことに自分の存在意義を見い出してしまった優に、敵を倒すことを否定したり、戦わせなければストレスを増大させることになり、そのストレスを抑えるためには多量の投薬を注入しなくてはならなくなってしまい。最悪、薬物障害等を起こす恐れがあることを担当医は可奈美と姫和に伝えていた。

だが、担当医は優がジョニーとミカ、ニキータやタギツヒメ、そして結芽が優の中に居て、友達である彼らのことを荒魂扱いされることを危惧した優は、タギツヒメ達のためにも戦っていることを言わずに

隠していたことを担当医は気付かなかった。そのため、可奈美と姫和は優の中に居る者達のことに今も気付かぬままであった……。

「……だが、今の話を聞けば、戦わせて手傷を負えば！更に荒魂化が進むことになるのじゃないのかっ!!」

姫和は担当医の話を聞き、戦闘に参加させても大荒魂を倒したときのように手傷を負えば、更に荒魂化が進むことになると声を荒げて言い、問題の解決にはならないと言っていた。

「……無茶なお願いであることは重々承知しております。ですが、優君を少しでも長生きさせる方法は、出来る限り傍に居てやり、普段の生活でも出来る限りストレスを与えず、極力戦闘に参加させ、その戦闘で手傷を負わせることなく任務を完了させるしか方法がありません。……お辛いでしょうが、何卒ご協力の程お願いします。」

頭を下げる担当医の姿に、可奈美と姫和は何も言えず、どうすることもできないという無力感に襲われていた。

こういった事情があり、姫和は優を箱根の荒魂討伐作戦に参加させなくてはならないことに居た堪れない気持ちとなる。

「……そろそろ、食事にしよう。行こう、優。」

姫和は気持ちを変えるべく、優の手を引きながら食堂へと向かうこととなった。

優の身体が殆ど荒魂化し変わり果てた姿。

優を戦闘に加えないことは関係無く薬漬けにされること。

そして、

「あっ、あの人平城の十条さ……。」

「……うわっ。」

その刀使達が優を化け物か何かのように見ているように見えた姫和は、心の中であることを呟いていた。

無数の目――――。

荒魂と変わらない憎悪の目――――。

羨望の眼差しを向ける目――――。

汚い物に向ける嫌悪の目――――。

渇望の心を抱いている目――――。
そんな無数の目――――。
そんな無数の目から、私は色んな瞳があることを知った――――。
鎌倉特別危険廃棄物漏出問題で有名となった姫和を見て、黄色い声を上げていた刀使達だったが、優の姿を見るなり、化け物のように見て、そそくさと目を合わせないように歩いていった。
「……。」
姫和は、その刀使達が優を化け物扱いするかのような行動を見せたことに、憤りを感じ、殴り倒したい衝動に駆られ、その刀使の方へ振り向くが、
「姫和おねーちゃん、行こう。」
優にそう言われ、姫和は優を化け物扱いした刀使達を無視し、食堂へ向かうことにした。
「……ああ、そうしよう。」
姫和は、優の声に応え、柔和な顔を向けると同時に思い出していた。
優は、表向きには鎌倉特別危険廃棄物漏出問題で被害を受け、現在の姿となり、刀剣類管理局本部内にある特別な医務室でノロと人体の分離を行なっており、現在は手探りの中で治療中となっている。
……だが、本当は大荒魂を倒したのは優で、今の姿となっているのも大荒魂から勝利をもぎ取るために必要な代償として支払った結果であることも、特別な治療室は無く軟禁に近い状態であることも、あの刀使達にはどうせ分からないことだろう。どうせ、……そう、どうせ分からない。あの子達が優のことを言い触らすこともないだろう、そんな知恵など無い。と、姫和は心の中で冷酷な声を発しながら決め付け、食堂へと進んで行った。

食堂に着き、姫和は優と食事をすることにした。しかし、
『……ネエ、十条サンダヨネ?アノ人。』
『アレ、荒魂?』
実はチョコミントアイスを買って、何も知らない優を喜ばせようとしていた。だが、今は取り出しても嬉しくない。

『違ウ、違ウ。アレハ、アノ子ハ鎌倉デ起キタ事件ノ被災者ダヨ。デモ、アソコマデクルト荒魂ジャナイノカナ？ハハハ。』
『チョット、ソンナコト言ワナイノ。アハハハ。』
そして、チョコミントアイスを渡すと、喜んでくれた。この子はチョコミントアイスが好きで居てくれる。だけど、分かってくれる子が一人増えたのに、心がズキズキと痛む、痛む、痛い。
『デモアアナルト、荒魂ナノカ分カラナイナ？』
『ハハハハハハ、違イナイ。』
そんな声が聴こえる。そんなふうに言っているように聴こえてくる。
男の声？女の声？それとも、……私が勝手に言われていると思い込んでいる幻聴？
現実と妄想の区別が曖昧な気分になるほど、姫和は判断が覚束なくなる。いや、あるいはもう既に狂っていたのか？あれほど好きだったチョコミントが幾ら有っても、心が押し潰されそうになる。
「どうしたの？姫和おねーちゃん……。」
優は、姫和が辛そうに見えたのか、捨てられた子犬のような目で見て、姫和を伺っていた。
「…あっ、いや、何でもない。……それよりも優、少し砂糖を入れる量が増えたな。」
姫和は、何を考えていたのか優に悟られたくないかのように、目を逸らしながら、はぐらかすかのように優が飲む紅茶に入れる砂糖の量が増えたことを指摘する。
「……うん、何だか。お砂糖の量を増やさないと味が、……ううん、何でもない。やっぱり、良くないことかな？」
指摘された優は、砂糖の量を増やし過ぎるのは身体に良くないことは聞いていたため、姫和に申し訳なさそうに、そう尋ねていた。
「あっ、…いや、……それなら仕方ない。今日だけだぞ。」
姫和は優に向かって胸を張りながらそう答えつつ、『……無茶なお願いであることは重々承知しております。ですが、優君を少しでも長生きさせる方法は、出来る限り傍に居てやり、普段の生活でも出来る

限りストレスを与えず、極力戦闘に参加させ、その戦闘で手傷を負わせることなく任務を完了させるしか方法がありません。……お辛いでしょうが、何卒ご協力の程お願いします。』という優の容態を看ている担当医の言葉を思い出し、砂糖の量を無理矢理減らして、不味い者を飲食させてストレスを与えるのは良くないことだと思い、微笑みながら優にそう言って、ただただ甘やかしていた。

「うん、ありがとう。」

優も姫和に屈託の無い、純真な笑顔を向けて感謝の言葉を贈っていた。

だが、姫和は時計を見ながら、この食事の時間がもうすぐ過ぎてしまうのが辛く、悲しい思いに駆り立てられていた。

ふと、外を見ると剣術の稽古をしている刀使と指導している者の姿が見え、剣術が上達していることを褒められたのか、その刀使は破顔していた。今の姫和はその光景を見るだけでも、思い出していた。優が何をさせられているのかを……。

それは、姫和が優と共にＳＴＴ隊員が使う射撃訓練場へ赴いた際のこと――――。

銃声の音が聴こえていた――――。

だが今、姫和の耳はその銃声の音を拾い、その耳をつんざくような発砲音が聴こえていた。……だが、その音はモニターの奥から発せられているのであって、姫和の近くで発砲している訳ではない。

しかし、姫和はそのモニターを凝視していた。いや、しなければならなかった……。

『……だから、安心してほしい。ずっと側に居る。』

姫和は優との約束を守るため、射撃訓練場にも赴いていた。

そのモニターには優がトーマスの指導の元、銃の訓練をしていた。的は人の姿形をしているところから〝人間を相手にした訓練〟であることが一目で分かる。いや、分かっていながら、姫和は止められなかった。

理由は、正式な米国政府からの要請であり、現在の優の状況は刀剣類管理局預かりとはいえ、米国からの要請があればその要請を受けねばならないことになっていた。そのため、刀剣類管理局に属する国会公務員であり、一人の刀使でしかなく、そのうえ紫に取り憑いていた大荒魂を打ち損じてしまったことで事態を混迷させたことに強い責任感を感じていた姫和はそれを遮ることも辞めさせることもできなかった。加えて、その大荒魂を打ち損じ、三つに分かれてしまった分身の対抗策として政府の大人達に利用されていることもそうだが、刀剣類管理局内部に居る旧折神　紫派が何かしらの動きを見せているというかなり角度の高い情報を得た刀剣類管理局と防衛省の報告を聞いた政府が先の鎌倉での騒乱を契機に刀使の人数が減り、荒魂事件が増加したこの状況下において、旧折神　紫派の動きまで対処できるかどうか不明であるために刀剣類管理局は優に荒魂だけではなく、人間相手を想定した戦闘訓練を施すことで、旧折神　紫派の動きにも対処できるようにしていた。そのため、元特殊部隊出身者であるトーマスがその訓練の担当官として派遣されていた。

「……。」

姫和は、虚ろな目でその光景をぼんやりと見つめていた。

姫和は、この時間が一番嫌いだった。

段々と優は銃の扱い方が様になってきており、素人目で見ても、どこかの映画やドラマで見た何処かの特殊部隊隊員役よりも様になっている動き方をし、人型の標的を何事も無く正確に打ち抜いている9歳の子供を見るのは不気味で、どこか恐ろしげで、それらを見るだけで姫和は紫に取り憑いていた大荒魂を倒せなかったことを後悔し、心が、……心が張り裂けそうであった。

自分が大荒魂を倒せなかったせいでこうなった。

それを思うだけで姫和は何も言えず、何も止められず、何もできなかった。

剣術が上達するのを夢見て訓練に励んでいる刀使達とそれを教え褒める指導員。

救われることを夢見て銃の訓練に励んでいる優とそれを教え褒めるトーマス。

この二つを重ねて見てしまい、自身が大荒魂を討てなかったばかりにこのような事態を招いてしまったことを強く恥じ、自分を責めていた。

そのうえ、この刀使と指導員、優とトーマスを重ねて見ることによって、自分が持つ神性を帯びた珠鋼で出来た御刀も氷のように冷たい鉄で出来た銃と変わらないのでは?ただ人を殺せる物騒な物ではないのか?と強く思うようになってしまった……。

『荒魂化した人は最早人じゃない。稀に記憶を残し言葉を話す個体もいるが荒魂は荒魂だ。御刀で斬って祓う。それしか救う手段はない』

最早、刀使としての使命も、自らの復讐も、所詮は人を殺したことの罪悪感を紛らわせるための美辞麗句にしか姫和は思えなかった。そして、姫和は本部に出向してきた刀使達の剣の訓練を見るだけでも、優が銃を撃つこの光景を思い出してしまい、訓練をする気にもなれなかった……。

姫和は、そう思うだけで剣術が人殺しの手段の一つに思え、剣術をやるだけで辛くなってきていた。けれど、辞める訳にはいかなかった。

『荒魂化した人はもはや人ではない、』

無知な自分は、酷く、心無いことを言ってしまったから、

『おい、優、タギツヒメとは、……あいつ、タギツヒメとは仲が良いのか?』

『うん、とっても大事な友達だよ!』

『!……そうか……。』

例え、私のことを見ていなくて、私よりもタギツヒメが大事であっても、

『あれは私が……考えもなく人を荒魂呼ばわりした罰なんだ……きっと。だから、私も背負う。この子を普通の子供に戻せば、また元通りに、三人で一緒に何処か行こう。……約束だ。』

罰を受け、その罪を償うために可奈美との約束、優を普通の子供にして、三人で一緒に何処かへ行きたかった。

『……約束しただろう?私は、私はお前を助ける。……だから、可奈美も助けたい。それまで、ずっと一緒にいる。だから、優も何処かへ行かないでくれ。ずっと側に居て、またチョコミントアイスでも食べに行こう。可奈美と一緒に三人で。』

復讐のために生きてきた人斬りになろうとしていた私に、〝正義の味方〟だと、〝刀使〟だと言って認めてくれた。

『それと、病院で可奈ねーちゃんが言ってたんだ。刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟だって。それを聞いて僕は、強い刀使になれない僕は、僕を助けてくれた大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたいと思ったんだ。僕と一緒で姫和おねーちゃんもそんなお母さんが大好きだから、刀使になったんだと思ったんだ。だから、僕は姫和おねーちゃんと可奈ねーちゃんのために頑張りたいんだ。』

『姫和おねーちゃんは凄いよ、色んなことを知っているし、可奈ねーちゃんに決着を挑まれるくらいだもん。それに、お母さんのために今まで一人で頑張って来たんだから、姫和おねーちゃんの言っている事は何一つ間違っていないよ。……だから、姫和おねーちゃんのことを何も知らない癖に悪く言う奴と邪魔する奴は一匹残らず僕がやっつけてあげる。だから、僕は可奈ねーちゃんと同じくらい姫和おねーちゃんのことが大好きだし、会えて嬉しかったし、少しでも助けになりたい。』

私のことを理解してくれて、支えてくれる人が荒魂だと言われたくない、認めたくないから立ち向かう。

……守りたかった。だから、姫和は止まらない。止められない。た

だ真っ直ぐ突くように進み続ける。自分が夢見た三人と一緒で好きなことをして、過ごしていきたいから。

（……だから、私は可奈美も優も必要だ。）

……そんな、ほんのささやかな、叶って欲しい幸せを姫和はただただ願っていた。

壊れた歯車

米国政府の要請でトーマスは、優に対人を主とした戦闘訓練を施すために来日していた。

まず、トーマスは優の装備を選ぶことから始め、メインアームは主に米軍で使われ続けているＭ４を近代化改修し、ジャムといった故障を少なくさせたＨＫ４１６にＴｒｏｙ ｔｙｐｅと呼ばれるワイヤー伸縮ストックと銃身を９インチ銃身（２２８ｍｍ）に交換したショートカービンモデルのＨＫ４１６Ｃにレイルハンドガード下部に射撃時の安定性と操作性向上のためバーチカルフォアグリップと耳の保護のためＱＤＳＳ―ＮＴ４サプレッサーを装着したカスタムモデルをメインアームに採用したのは、優の薫よりも低い低身長と小さい体格を考慮し、尚且つボディアーマーで武装した相手にも５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾で対処でき、トーマスが持つＭ４カービン銃（だが、ＡＣＯＧサイトを装着し、カスタマイズされているが。）とＳＴＴ隊員達が使う８９式小銃との間で弾薬共有できるよう５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾を使用できるという条件に合っていたのが理由である。

そして、サイドアームには優の手の小ささから、９ｍｍパラベラム弾を使うコンパクトサイズの自動拳銃が適当であると判断し、石廊崎の山中にて優が使っていたＰ２２６という自動拳銃と同じ会社製であり、個人の護身用や警察など、法執行機関の秘匿携行（コンシールド）用として開発され、Ｐ２２６よりも装弾数が７＋１発（弾倉によっては６＋１発）と少なくなり、トーマスが持つＭ１９１１Ａ１と弾薬共有できないうえ、作動方式も違うが、小型の自動拳銃Ｐ２３８の９ｍｍパラベラム弾仕様であるＰ９３８を採用し、ヒップホルスターに収めて携行していた。

そのため、二つの銃の扱い方を熟達するため、ＳＴＴ隊員達も使う射撃訓練場にて銃の訓練を施していた。

そして、優は射撃訓練後に周囲を確認してから、自動拳銃Ｐ９３８にセーフティをかけると、ヒップホルスターに収める。これは、射撃後に周辺警戒をして敵がいないことを確認する癖をつけさせるため

にトーマスが教えたことである。
「……上出来だ。成長したな、偉いぞ。」
優の対人を主とした戦闘訓練を担当していたトーマスは、優が指示通りに人型の標的（マン・ターゲットのこと。）を全て二発ずつ命中させたためなのか、優に優しげにそう答えていた。
そして、銃はリアサイトとフロントサイトを一直線に合わせて標的を狙うことと、引き金を引く際は力み過ぎず弱すぎない力で引き金を引き、狙ったところの中央の部分からズレることなく狙って撃つことと、角の死角からの射撃とカッティングパイといった射撃技術を教えると、銃の反動と衝撃に恐れることなく直ぐに実践し、言われた通りの動きで的に当てたこと。
そのうえ、ナイフを何処かのアクション映画の様に水平に構えたり、左右に持ち替えたりせず、そして最初から急所を狙おうとはせず、ナイフを抜くと同時に敵の利き腕の腱か大動脈を切断後、足の大動脈か腹部を突き、痛みで膝を付かせると喉か頚動脈を切断、或いは頚椎を突くといった何通りものナイフでの戦い方を教えると、直ぐにその通りにできたこと。
それを見たトーマスは、初めは優のことを石廊崎の山中の戦いにて起きた夜見との狂気染みた戦い方を見て、不気味に思っていた。可奈美には人を活かす〝活人剣〟の才能が有るとしたら、優は〝殺人〟の才能が有るのだろうかということを考えてしまい、優の事をどう教育すれば良いのかという気持ちに駆り立てられていた。
……そんなことを考えてしまったからなのか、トーマスは優のことを気にし、そんな中で数ヶ月も接している内に人となりを知り、親近感を湧くようになっていった。
「トーマスおじいちゃん、ありがとう。」
優はトーマスにナイフと銃の扱い方を教えてもらったことに、疑うことを知らないかのような屈託のない笑顔で感謝の意の言葉を述べていた。
「……。」
その姿を見たトーマスは優のことを利用しているにも関わらず、感

謝の言葉を送られたことに何とも言えない気持ちになり、
『ありがとうございます、教官。』
『敵の首を持ち帰ってきます。』
『これで、国に居る友人や彼女のために戦えます。』
トーマスが教官だった頃のことを思い出していた……。
理想に燃え、キツイ訓練に音を上げず、素直に従っていた純朴な若い訓練生達のことをつぶさに思い出し、トーマスは嘗て指導していた訓練生達と優を知らず知らずの内に重ねて見てしまっていた。
（……皆、皆、国に還れた。）
但し、その訓練生達は天使になるか、病死するか、国に帰った後に自殺していたりであった。
（KIA）
「……ああ。」
トーマスは優の感謝の言葉に対し、気の抜けた短い返事をしていた。
そして、友人も、教え子も、マイケルとシェパード、ロークも自分の元から離れていったことを痛感していた。そして――――、
（……何で今更、こんな子供ですら使い捨てるように利用していたのに。……弱くなったな、トーマス。）
嘗ての自分なら、こんな甘さを出さなかったことにトーマスは〝弱くなった〟と痛感し、冷酷さを失ったことに焦りを感じていた――――。

「フルーツタルトだ！」
時は戻り、東京都湾岸線に現れた荒魂を討伐した可奈美は紗南から貰ったケーキの箱の中にフルーツタルトが入っていたことに、思わず声を弾ませる。

「……おいしそう。」
同じく沙耶香も甘い食べ物を貰えてご満悦なのか、顔を綻ばせていた。
「貰っちゃっていいのかな?薫ちゃんの分は残しとかないとだね。」
可奈美は、今しがた紗南に連行された薫の分も残して置こうと沙耶香と相談し、決めようとしていた。
「あっ、……うん、そうだね。あと、「あっ!衛藤さん、糸見さん!」
沙耶香は薫の分も残しておくという話から、とあることを思いつき、あることを提案しようとするが、歩が可奈美と沙耶香を見かけたため、声を掛けていた。
「あっ、歩ちゃん……。」
しかし、可奈美は声に少しばかり覇気がない返事をする。
「早速また会いましたね!」
だが、歩の方は、可奈美に会えたことが余程嬉しかったのか、今の可奈美の状態に気付くこともなく、可奈美とは正反対で弾ませた声を上げていた。
「あっ、ちょうど今、本部長にケーキ貰ったんだ。」
可奈美は、今の覇気がない状態を歩が気付くことに恐れ、無意識に歩にも紗南から貰ったケーキを分け与えて、気付かれないようにしていた。
「良いんですか?!」
歩は、その申し出が余程嬉しかったのか、顔を綻ばせていた。
だが――――。
「あっ、でも。薫の分も残しておかないといけないけど、優の分も残して置こう。可奈美。」
そして、沙耶香にそう言われた可奈美はそこだけはやけに良く聞こえたため、時が止まったかのように動きが固まり、凍り付いていた。
「えっと、優って誰のことです?」
歩は優とは誰の事か尋ねていた。
「可奈美の弟で、今ここで治療中。」
歩の疑問に、沙耶香は真面目に誰のことか答える。そのことに可奈

美は〝英雄の仮面〟が剥がれ落ち、沙耶香のことを睨んでいた。
憧れている可奈美に弟が居ることを知った歩がどのようなことを言い、どのような行動を起こすのか可奈美には容易に想像できたからである。
「えっ！そ、そうなんですか!?!!じゃあ、行きましょう!!」
歩は驚いた。治療中ということは身体が悪いということである。それに、子供が一人寂しく待っているのは良くないことなのだから、可奈美と優は引き合わせるべきだと歩は思ってしまった。
「……あっ、いや、その、悪い風邪だから歩ちゃんにも風邪がうつったら大変だから、歩ちゃんまで付いて行かなくてもいいよ。」
可奈美は顔の片方だけ口角を上げ、急なことだったため、碌な嘘を吐けぬまま答えていた。
そして、可奈美は今の状態の優を見せると、歩がどんなことを思うのか、容易に想像でき、それが現実となるのが恐かった。
「大丈夫です！私、それぐらいならどうってことありません。私の分のフルーツタルトもその優ちゃんに上げて下さい！私も一緒に行きますから!!」
歩は可奈美に気を使って、そう答えていた。優のことを気遣ってくれる歩に何も言えず、次の言葉が思い付かず、言葉が詰まる可奈美。
「さあ、行きましょう!!」
言葉が詰まった可奈美は、歩に何も言えず、沙耶香と共に優の居る病室へ向かうしかなかった。

そんなとき、食事を済ませ、食堂を後にした姫和は優と共に病室に戻っていた。
「優、実は渡したい物があるんだ。」
姫和はそう言って、紙袋の中から灰色のパーカーとｈｏｍｉｎｉｓと刺繍された帽子を優に渡していた。

「わあ、……ありがとう。」
優は綻んだ顔をして、姫和に感謝の言葉を伝えていた。
「はは、そんなに嬉しいか、だったら着て見せてくれないか？」
姫和はそう言って、優に灰色のパーカーを着せ、ｈｏｍｉｎｉｓと刺繍された帽子を被らせようとしていた。……理由は、姫和自身も意味が無いのは分かっているが、優に人間用の服や帽子を着せて、荒魂ではなく人間であることを証明しようとしていた。ただ、儀式めいたことをしようとしていただけであった。
「……姫和おねーちゃん。」
「どうした？そんな声を出して。」
優の悲しげな声に思わず振り向き、何事かと優しい声で尋ねる姫和。
「……ゴメン、帽子が上手く被れない。」
姫和はそれを見て、自分を強く恥じた。角が生えているのだから、上手く被れないのは当たり前である。どうして、そんなことですら気付かなかったのか……。自分は馬鹿なのかと強く責めていた。
そして、灰色のパーカーを着て、帽子が被れなかった優の姿を見て、灰色は白とも黒ともはっきりしない意味を持つところから、〝荒魂〟とも〝人間〟とも明確にはできない立ち位置に居て、帽子に刺繍されているｈｏｍｉｎｉｓはラテン語で『人間』という意味を持つことを思い出し、ｈｏｍｉｎｉｓと刺繍された帽子が被れなかったことから、まるで、この世界も優のことを〝人間〟として扱わないと言っているかのように連想してしまった。
（……そんな訳ないっ!!こんなの何の意味も無いっ、そう意味なんか無いっ!!）
だが、姫和は自ら〝人間〟であることを証明させるために、灰色のパーカーを着せ、ｈｏｍｉｎｉｓと刺繍された帽子を被らせようとしていたにも関わらず、それを忘れ、捻じ曲げ、都合の良いように変えていた。
――――そして、姫和はこの世界が全て敵であるかのように思えてしまった。

「姫和おねーちゃん？」
　呆然としていた姫和を不思議そうに見る優。それに気付いた姫和は、
「あっ、……ああ済まない。その帽子はサイズが合わなかったみたいだな。済まない、」
　優の呼びかけに気付いた姫和は、誤魔化すように、帽子を取ると、紙袋の中にしまっていた。
「ううん。それ貰って良い？」
　だが、優は姫和に気を遣って、帽子を受け取ろうとしていた。
「良いのか？」
　驚く仕草を見せる姫和、内心は悪いことをしたと後悔の念で一杯だった。
「うん、良いよ。」
　笑顔を見せる優。それだけで姫和の心は救われる気持ちとなっていた。そのため、姫和はｈｏｍｉｎｉｓと刺繍された帽子を優に渡そうとする。だが、
「失礼します！あっ、あれが優ちゃんですか!!?」
　そんな中に歩が突然入室してきた。そのため、姫和はｈｏｍｉｎｉｓと刺繍された帽子を優に渡せぬままであった。
「誰だ、お前。」
　姫和は突然入室してきた歩に警戒していた。
「あっ、え～っと私は内里　歩と言います！あの、衛藤さんと糸見さんの話を聞いて来ました。それと、可奈美お姉ちゃんが来たよ！優ちゃ……!!?」
　可奈美が来たことを告げれば、優が喜ぶと思い、優ちゃんと呼ぼうとした歩は優の今まで歩の視点から死角となっていて見えなかった右側の顔が見えてしまった。その姿は、右額から鬼の角の様なノロの角が生えているのが見えてしまったため、歩は硬直していた。
「えっ、……あぁ、あの、えっと、……？」
　歩は突然のことで、頭が回らなかった。
　あれは、荒魂なのか、人間なのか、戸惑ってしまったのだ。

「どうしたの？」
　沙耶香は歩の表情を伺うように見つめていた。何をそんなに強張った表情をするのか、沙耶香は分からなかった。
「えっ、あの、……？」
　だが、歩には、優が荒魂にしか、化け物にしか見えなかった――――。
「あっ！可奈ねーちゃん、お帰りっ!!」
　しかし、優は可奈美が帰って来たと思い、喜んで迎えて、可奈美に抱きついていた。
「……うん、……ただいま……。」
　可奈美は俯いたまま返事をしていた。そして……、
（優ちゃんは次に私に何を言うんだろう、何を考えているんだろう、分からない、……分からない、分からない、分からない分からない分からない分からないっ!!）
　可奈美の心は、恐怖に支配され、手が震え、心臓の鼓動が早くなったのを感じ、全てをかなぐり捨ててでも逃げ出したかったが、金縛りを受けたかのように動けなかった。この後、優は何を言うだろうか？そんな考えが可奈美の心を支配していた。……嘘吐き、役立たず、出来損ない、裏切り者、のろま、嫌い、馬鹿、愚図、嘘吐き……。
　可奈美は、覚えている幾つもの悪口を思い出しては消え、頭の中でぐるぐるぐるぐると何時までも回り続け、思考が纏まらなかった。
　歩は可奈美が頻発する荒魂事件で忙しいから、優にあまり会えないのだろうと思い、可奈美と共に優に会えば、優は歩のことを警戒することがなくなり、優と仲良くなれば、可奈美の代わりに優の面倒を見ることができるようになり、尊敬の念を抱き始めていた可奈美の助けとなり、可奈美と優は喜んでくれると思っていた。
「えと、あの、……優くん、私はその、お見舞いに来ただけだから、その、私はお腹が大きいから、フルーツタルト食べる？」
　……だが、実際は、その優が殆ど荒魂のようになっていることに、度肝を抜かれてしまう。そのため、歩は優から目を逸らしながら、フルーツタルトが入っている箱を手渡す。

目を逸らすのは良くないとは分かっていても、歩は優から目を逸らしていた。優のことを荒魂、いや化け物としか思えなかったから……。

「！……歩おねーちゃん、ありがとう。」

フルーツタルトをくれた歩に、笑顔で感謝の意を述べる優。だが、優のことを恐れるかのような仕草を見せる歩に姫和は、

「……ええと、確か、内里　歩だったな？少し外で話したいことがあるんだが良いか？」

歩を呼んで、外へ出ようとした。

「えっ？……あっ、はい！」

歩は自分はとんでもないことをしたのではと思い、気が動転としていたところへ、有名な平城の姫和から呼ばれ、外へ出ることに同意してしまった。

「……済まないが可奈美、沙耶香、優のことをお願いしていいか？」

姫和にそう言われ、頷く可奈美と沙耶香を姫和は一瞥したあと、歩と一緒に外へ出る姫和。

歩は有名人の一人姫和と一緒に外に出ていたことに、先程の件もあって気まずかったが、胸倉を突然誰かに掴まれ、驚く。

「うぐっ……!?」

突然のことに息を詰まらせる歩。歩の胸倉を掴んでいたのは、鬼の形相をした姫和だった。

「……何を、…するんです？」

「お前っ、優を化け物扱いしたろ？荒魂扱いしただろ!?どうなんだっ!!」

歩は姫和が何故胸倉を掴むのか理由を聞こうとしたら、姫和は間髪入れず、歩が優を化け物の様に見ていたことを叱責していた。そのた

め、歩は有名人の一人でもある姫和が鬼の形相をしながら、急に胸倉を掴んできたため、
「だっ、だってどう見ても、荒だ「はぁっ!!?」……。」
気が動転してしまい、歩は思っていたことを正直に口に出してしまう。
「誰が、誰が荒魂だって?よく聞こえなかったな?」
歩に対して、姫和は怒りを顔に出し、詰問する。
「……そ、それは「優だと言うのか!!?」……。」
更に歩の胸倉を掴む力を強める姫和。それに、歩は恐怖のあまり、言葉がまともに発せないまま、条件反射的に何も考えられず頷いてしまう。
「……お前っ!!」
歩は心の中では、言ってはいけないことを言ってしまったと、言うつもりがなかったことを言ってしまい、後悔していた。姫和はそれを聞いて、振り上げた手を歩の頬に打ちつけ、悲鳴を上げる歩。
「お前なんかに何が分かるっ!!お前なんかに何がっ!!!」
確かに姫和の言うとおり、優を化け物、というよりも荒魂ではないのか?と歩は見て思ってしまった。だが、だからといって、姫和にここまでされる理由はないと思ってしまったのと、無理矢理そう言わせたのは姫和ではないのかと思い、歩は姫和に対して沸々と怒りが湧き上がってきた。
「一体何なんですっ!!あなたに何の関係があるんです!?」
歩は声を荒げて、抗議していた。それに姫和は、
「お前がそんなふうに見ていたら、優は、……優はストレスを感じて、残り短い命すら無くなるんだ。もし、そうなったらどう責任取るつもりだっ!?」
と言って歩を非難していた。
「だから、あなたに何の関係があるんですっ!何を知っているんですっ!!あなたがそうやって周りを脅すから優くんの敵を作って荒魂だとか化け物だとか言われるようになって、余計に短い命を減らしているんじゃないんですかっ!!?」

だが、歩は姫和の非難に臆することなく、姫和の行動が優の敵を増やすことになると言って、姫和に言い返していた。
「何だとっ……。お前も知らない癖に、お前も、大荒魂を倒したのが私達じゃなく、優だということを知らないで……、お前みたいなのがっ!!優を批判してっ!化け物のように言って!!」
「……えっ?」
姫和は大荒魂を倒したのが、可奈美達ではなく、優だと言ってしまう。極秘事項であるということを忘れて、言ってしまう。歩は、その証言に驚愕するしかなかった。そこへ、
「十条さんっ!!」
早苗が大きな声で叫んで、姫和を羽交い締めにして割って入り、歩を姫和の拘束から開放していた。
「十条さん、何をしているのっ!!」
姫和を羽交い締めしつつ歩から離すと、歩の胸倉を掴んでいた姫和を叱責する早苗。
「それは!コイツが、優を化け物とか言うからっ!!」
それに対し、歩への暴行を自分なりの正当性を子供のように主張する姫和。
「十条さんっ!!……ごめんなさい、今の内に。」
それを聞いた早苗は、姫和を叱責し黙らせると、その隙に歩を逃がそうとしていた。だが、歩は驚くべきことを聞いて、呆然としていたため、立ち尽くしたままであった。
「早く行って!!」
早苗が大きな声を出すと、歩はハッとなり大慌てでその場から離れていった。
「何で、こんなことをしたの、十条さん?」
この場から、歩が離れていったことを確認した早苗は姫和への羽交い締めを解き、姫和に歩への暴行を働いた理由を子供に優しく諭すかのように尋ねていた。
「あの綾小路が、優を化け物だとか言ったのが悪い!!何故逃がしたっ!!」

だが、優しく諭すように尋ねた早苗でさえも噛み付く姫和。
「十条さん、……十条さんにとって、あの子は何？」
早苗は姫和を落ち着かせるため、ゆっくりと件の優のことをどう思っているのか聞いてみるのであった。
「それは……。」
早苗の詰問に何も答えられない姫和。自分にとって、優はどんな存在なのだろうか？恋情、愛情、友情？どれに当て嵌まるのか姫和でさえ分からなかった。だから、答えられなかった。
「十条さん、少しおかしいよ。何であの子が絡むとそうなるの？」
「……。」
早苗の問い掛けに姫和は上手く答えられなかった。
自分が何を求めているのか、答えられなかった。
「……じゃあ、岩倉さんはどう思っているんです？あの子のこと。」
姫和は自分が優に何を求めているのか分からないからだろうか、早苗に優のことをどう思っているか聞いてみた。
「ええっ？え～っと、どうって言われると、良い子だと思うけど、やっぱり少し怖いかな、だって病室で暴れたって聞くから。」
「そうか、ならいいです。」
早苗の返答に姫和は愕然とすると共に、早苗に一人で勝手に失望し、早苗に対し拒絶の意思を示し、壁を作り始める。
「十条さんっ!!」
早苗は姫和の背中に大きな声をかけるが、振り向くことはなかった。そうして、一人自室に戻った姫和はベッドの上で優に何を求めているのか思案を巡らせていた。そして、
「……約束しただろう？私は、私はお前を助ける。……だから、可奈美も助けたい。それまで、ずっと一緒にいる。だから、優も何処かへ行かないでくれ。ずっと側に居て、またチョコミントアイスでも食べに行こう。可奈美と一緒に三人で。……三人で、……三人で。」
姫和は何かを思い出したかのように、一人だけで、呟くように、壊れた機械のように、呪文のように、目を見開いて、決意を持って、小

鳥のように鳴いていた。

壊れた歯車に、誰もが気付かぬまま、誰もが動き始めていた――――。

箱根山戦1

その日の夜――。

「……それで、何かあったのか？」

作戦本部室に居た紗南は、突然姫和に内密に話したいことがあると言われ、誰も居ない個室まで移動し、姫和に話したいことは何か尋ねていた。

「突然申し訳ありません、本部長。綾小路武芸学舎中等部一年の内里歩が優のことについて何か探っていたようです。」

姫和は歩のことについて少々、いや、かなりの嘘を吐いて紗南に報告していた。

「……確かなのか？」

紗南は眉を顰めながら、事が事だけに神妙な面持ちで姫和に尋ねていた。そして、紗南と姫和の二人の会話は続いていた。歩の処遇をどうするかについてだが。

「確証は持てませんが、可奈美に接触して優の病室に入りました。…何の意図も無く、そのような行動を取るとは思えません。」

「……つまり、綾小路側のスパイだとでも？」

「いいえ、……本人は自覚しているか、自覚しているかは分かりません。しかし、刀剣類管理局内部に居る旧折神　紫派が何かしらの動きを見せているという信憑性の高い情報がある以上、優の居る場所と中の病室がどうなっているかを知っている内里　歩を旧折神　紫派で、今もその影響の強い綾小路に帰すのは得策ではないかと……。最悪、旧折神　紫派が綾小路に居る歩を通じて機密事項が探られ、舞草が中心となった新体制に対して、何かしらの体制を揺らがせるような活動をする可能性は無くはないと思われます。」

姫和は現在の刀剣類管理局の風当たりが強い現今の状況と旧折神紫派が何かしらの動きを見せている情勢を先ず紗南に説明したあと、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題で現れた大荒魂を優が倒したという事実を覆い隠すため、公式な発表では優は鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の被害を受け、荒魂に身体を侵食されている状態となっているた

め、現在は刀剣類管理局の特別な病室で治療中ということになっており、優の居る病室を見た歩から通じて特別な病室ではないことを旧折神　紫派が知り、その矛盾点に気付き、大荒魂をどうやって討伐したかを探られ、優が大荒魂を倒したという事実を公表される恐れがあると指摘していた。

「……では、どうすべきだと？」

「内里　歩の特別任務部隊への出向期間を延ばしてこちら側に引き込みましょう。そうするだけで、こちらの内部情報は漏洩されることもありません。その間に優を別な……安全の場所に移しましょう。」

そう言ったあと、姫和は自分の目論見通りに事が運ぶように祈っていた。

「……よし、分かった。そのように手筈は整えよう。十条の言うように、現今の刀剣類管理局への風当たりは一層厳しい物となっている。下手なスキャンダルは避けたい。先ずは、中等部一年の歩ですら容易く優の病室へ行けるのは不味いな……。もう少し警備は厳重にした方が良いだろう。」

紗南は少し考えたあと、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の〝真実〟を秘匿するために優を軟禁に近い状態にしていること。

敵性勢力の工作員が優を獲得工作してくるか、その家族を脅かしに来ることの可能性を考慮すれば、もう少し優とその家族の身辺の警護を厳重にするべきかも知れなかったと後悔をしていた。そのため、紗南は姫和の要求を呑むことにした。

「……ありがとうございます。本部長。」

姫和は柔和な笑顔を造り、まるで心配事の一つが減ったかのような仕草を見せながら、紗南にお礼を言っていた。

「いいや、そこは私が気を付けねばならなかったことだ。済まないな、十条。」

本部長という役職に身を置きながら、その危険性に気付かなかった不備を詫びる紗南。

「いえ、私も可奈美と優が息災であれば問題ありません。……こちらこそ、紗南本部長のご助力がなければ実現できなかったことなので、

こちらこそ突然の無茶を聞いて頂き感謝しております。」
「……そうか。では、私は優の警護を厳重にするよう取り計らおう。」
紗南は姫和にお辞儀をされ、そして礼も言われたためなのか、何とも言えない気持ちとなり、苦笑しながら短く返事をし、信頼していた篝の娘であることもあってか姫和と篝を知らず知らずの内に重ね、微笑んでいた。
「お願いします、本部長！」
そして、姫和も可奈美と優の身辺を守れることに喜んでいるかのように、少し大きめな声で、且つ早口で返答していた。その反応に初々しさと友人への気配りを感じた紗南は笑顔と片手を上げることで了承の意思を示していた。
しかし――――、
（……これで、内里は刀剣類管理局本部から出れなくなった。後はどうにか、内里を〝荒魂との戦いにて戦死〟にすれば、リスクを排除できる。……何もかも消せる。何もかも……。）
姫和は内心、歩を特別任務部隊への出向期間を延ばし、〝荒魂討伐作戦中による戦死〟にすれば、自分のことを一番理解してくれる優の秘密が漏れる事がなく、安全を守ることができ、紗南に気付かれることなく、自分と優の居る空間が壊れることが無くなると、そう思い描いていた……。

次の日――――。
そんな一幕があったことを知らずに自室に戻っていた歩は、綾小路武芸学舎学長相楽　結月に綾小路に帰還する旨をスペクトラムファインダーの通話機能を使って伝えていたのだが……。
「……えっ?それってどういうことでしょうか?」
しかし、歩の想定していた返答が返ってくることはなかった。それは特別任務部隊への出向期間が延びたことを告げられたためである。
『君は東京都湾岸線沿いにて発生した荒魂との戦闘において、活躍をしたそうだな。真庭本部長から感謝の言葉を贈られた。そこでだ、真

庭本部長は将来性のある君をどうしても手元に置いておきたいと言われてな。済まないが、しばらく、いやもう少しだけ本部に残ってもらえないだろうか？』

荒魂との戦闘で活躍？私が？誰かと間違えているのではないのか？と、疑問が幾つか出てきたが、姫和のことを思い出してしまい、長期出向のことを断り、綾小路へ帰ろうと考えていた。

（……私、あの人と組むの嫌だな。あの人に何されるか分かったものじゃないし。あの人が居ると優くんが可愛そうだよっ！……あっ。）

だが、可奈美と優のことを思い出し、

（……でも私、優くんと衛藤さんに悪いことしたな。衛藤さん、悪く思ってないかな？だったら、そのことをちゃんと誤らないまま勝手に帰るのは酷いし、ダメだよねっ!!それに、本部長と学長の期待に応えないとっ!!）

先程の病室での優との邂逅で歩は自身の行動、優のことを荒魂に見えたとはいえ、腫れ物のように扱ったことを優と可奈美の二人が気を悪くしたなら、ちゃんと謝罪しなくてはと思い、残留することを決意する。

「……相楽学長、分かりました。その話、謹んでお受けしますっ！」

こうして、歩は綾小路に帰ることなく、本部に残ることを了承してしまった。……姫和の陰謀で、特別任務部隊に残るように仕組まれていたことに気付かぬまま。

三日後、ＡＭ：８：００。

箱根山山中特別祭祀機動隊仮野営地――。

その仮野営地内にある作戦指揮所のテント内にて、箱根山の荒魂掃討作戦の指揮官を務めることとなった真希と指揮官の補佐を務める寿々花、そしてＳ装備を装備する許可を得た可奈美、姫和、舞衣、そして沙耶香といった何名かの鎌府の刀使達とＳＴＴ隊員達。それと荒魂パーカーを身に纏い、フードを被りながらスポーツマスクとグ

レー系のゴーグルを装着し、旧折神家親衛隊の制服を着用している、恐らくは元親衛隊の刀使(尚、着ている制服と怪しげな格好だけに、誰も話しかけなかった。)。最後に陸上自衛隊から刀剣類管理局に出向している身のためビジネススーツに着替えている西田達五名と何名かの第一空挺団と第12旅団所属の普通科の隊員達。この三者が作戦会議に参加していた。

「それでは、今回の作戦について説明する。数日前、米軍所属の無人偵察機グローバルホークが箱根山周辺を演習中、荒魂の群れを観測し、自衛隊からの要請を受けた刀剣類管理局は人里へ向かう前に討伐するべきであると判断し、上層部の協議の結果、自衛隊との共同作戦を立案。実行に移されることとなった。そのため、本作戦の一時間前に航空自衛隊北部航空方面隊第3航空団隷下の第302飛行隊所属のF―35Aが四機編成で威力偵察を行い、荒魂の数と規模を観測してくれた。そして、陸上自衛隊は作戦が開始されると同時にスキャンイーグルと新無人偵察機システムといった無人機が情報収集するが、もし、その二機が使用不能となった場合はOH―1改が1機とAH―64Dが1機といった情報共有する能力を持つ回転翼機とそれらを支援するAH―1Sが6機が引き継いで情報収集することになる。そのうえ、間接照準射撃で撤退を支援するための99式自走155mりゅう弾砲6輌が配備されており、火力支援可能だ。そして、米軍は無人偵察機グローバルホークが遥か1万1000mもの上空から箱根山周辺を偵察し援護してくれるということとなっている。まず荒魂の規模は――――。」

そして、真希が作戦の概要を他の刀使とSTT隊員達や自衛官等に説明していた。

荒魂の規模は数が多く、数名の刀使で対処する大型の荒魂も多数確認されたこと、待ち伏せも注意しなくてはならないことと、自衛隊と米軍の支援内容も説明していた。

「……だが、それだけで飛行能力を有する荒魂が居ないという理由にはならないと僕は考えている。本作戦に使用される横田基地米軍所属のグローバルホークが遥か上空から荒魂の数と規模を観測し、事前

にＦ―３５Ａが観測した荒魂の数と規模が合っているか、飛行能力のある荒魂が居ないことが確認された場合のみ、援護に駆けつけて来てくれた有人機のＯＨ―１改とＡＨ―６４Ｄを本作戦に参加させる。これは、乗員の命も関わってくるので、そういった部分も熟考したうえで作戦予定を変更することがあることも頭に入れておいてくれ。」

真希は作戦の概要を説明し終えると、各員の持ち場を説明し始めていた。

「第一小隊は前線の指揮と襲撃、小隊長は僕だ。」

第一小隊は真希が指揮を執り、第二小隊と共に荒魂の殲滅を担当するということであった。尚、新型Ｓ装備は１０着しか先行試作されなかったため第二小隊に１０着全て装備させることになっている。

「第二小隊の担当は遊撃と第一小隊と共に襲撃、小隊長は戦闘と指揮をこなせる柳瀬に任せる。遊撃を担当していることから戦闘回数が多いことも考慮し、先行試作された新型Ｓ装備１０着を全員装備、人員は一線級の実力を持つ衛藤、沙耶香といった歴戦の刀使を配属させる。……だが柳瀬、君なら上手く指揮できる。」

「……はいっ！」

真希の励ましの言葉に舞衣は返事をするが、これから指揮する精鋭揃いの部隊を上手く指揮できるかどうか不安でもあった。

「第三小隊の小隊長は岩倉、陸上自衛隊の第一空挺団と第１２旅団の第１３普通科連隊と共に緊密に連携し、第一、第二小隊の援護、撤退支援を頼む。」

「あっ、はい。分かりました。」

真希の指示に元気が無さそうにする早苗。理由は、姫和が新型Ｓ装備を上手く扱いこなせないがために第二小隊配属とならなかったばかりか、真希を全く信用していないがために第三小隊配属となったため、早苗と同じ小隊の配属となったものの、未だ、早苗は姫和との間にわだかまりが有るせいで、まともに話せなかったことを少し気にしていた。

「寿々花は、西田さん達とＳＴＴ隊長と共に野営地に居て増援を送る場所や火力支援の要請といった前線部隊の後方支援を頼む。それと

刀使達と共に野営地と後方部隊の護衛、並びに撤退路の確保を頼む。」
「……いつも通り、貴女が前衛で、私が後衛ということですわね。」
「そうだ、指令役を頼む。あと、新人の刀使も付けるから、その面倒も頼む。」
「いきなり、実戦ということはさせられないという判断からでしょうか？」
「ああ、指揮通信から後方部隊の護衛。それと、撤退路確保という重要な役が多いところに新人のことも頼むのは済まないとは思う。……だが、「荒魂討伐作戦の雰囲気に少しでも慣れさせるのが目的ということですわね？」…ああ、そうだ。多忙だが頼む。」
　寿々花は指揮通信から撤退路の確保という多忙な任を預かったにも関わらず、歩を含む新人の刀使達の世話という真希の指示に嫌な顔を一つもせず、受け入れていた。
「……各小隊については説明した通りだ。まず、第一小隊と第二小隊を先行させ箱根山周辺の荒魂を討伐する。やり方は荒魂がこちらに気付いていない場合によるが、大型の荒魂の場合は第二小隊がＳＴＴ隊員によるサプレッサー付きの短機関銃で荒魂の注意をＳＴＴ隊員に向けさせ、その隙に新型Ｓ装備を纏った刀使が側面、或いは背後を強襲して斬って祓う。弱い荒魂が相手だった場合は、いつも通りに斬って祓ってもらっても構わない。そして第一、第二小隊の支援を担当する第三小隊は第二小隊の新型Ｓ装備のバッテリーを運んでもらい、各ブロックの荒魂が居た区域を一つ一つ制圧する。それと、もしもの話だが、荒魂が早期にこちらの存在に気付いてしまい、多数の荒魂がこちらに向かって来た時は第一小隊が囮となって戦線を維持し、続く第二小隊が荒魂の陣形の隙を突いて陣形を乱れさせ、陣形の穴を突き壊滅的打撃を与える。第三小隊は第一小隊の支援と陣形の穴を塞いで貰う。もし、作戦の続行が困難であると判断した場合は陸上自衛隊の９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲とＡＨ―６４ＤとＡＨ―１Ｓの編成による火力支援による撤退支援を行なってくれる手筈となっている。……以上だ。何か質問は？」
　真希は周りの刀使達とＳＴＴ隊員、自衛官達に分からないところが

あるか質問をしていた。
「……Ｆ―３５Ａと言いますと、最近ニュースで言われているあの最新鋭のやつですか？」
　真希の説明を聞いていたＳＴＴ隊員の一人が真希に質問する。
「そうだ、何か不明な点があるのか？」
「我々刀剣類管理局に情報をもたらすため空自が支援してくれたのはありがたいですが、Ｆ―３５Ａは最新鋭のステルス戦闘機だと聞いています。ですが、荒魂に対してステルスは効果があるとは思えないのですが何故、空自は今回の荒魂に対する威力偵察で三沢の臨時Ｆ―３５Ａ飛行隊が適任であると判断されたのでしょうか？」
　ＳＴＴ隊員は、荒魂相手には効果が無いと思われるステルス戦闘機で威力偵察した理由を今回の作戦指揮をすることとなった真希に何かしら知っているかもしれないと思い尋ねてみた。
「今回の作戦で空自がＦ―３５Ａを威力偵察に使ったのはステルス戦闘機だからという理由ではなく、元々Ｆ―３５はネットワーク戦争を前提に造られた戦闘機であり、ＥＯ―ＤＡＳといった各種先進的なセンサー類によって得た情報を直接基地や司令部に送ることができるネットワークシステムを持つことと、空自が保有するマッハの速度で飛べる航空機であるということで荒魂に対する威力偵察の任務に適していると判断された。……とまあ、こんなところだが、我々刀剣類管理局でいうところの明眼を使える刀使が上空からの監視をしてくれていて、その見た情報を地上に居る各刀使達にスペクトラムファインダーが持つ画像付きメール機能で知らせてくれていると思ってくればいい。」
　真希は、Ｆ―３５ＡはＥＯ―ＤＡＳといった各種先進的なセンサー類と直接基地に画像情報といった情報を送ることができるデータリンクシステムを持つこと、マッハの速度で飛行できるといった理由で今回の荒魂掃討作戦が行なわれる箱根山にて荒魂の数と規模を上空から威力偵察するのに適しているのがＦ―３５Ａ（元々、Ｆ―３５はネットワーク戦争を前提に作られた戦闘機であるため、偵察機としても非常に優秀であり、事実アメリカ海兵隊もおよそ２０２５年の上陸

作戦時にも弾着観測や偵察に使う予定である。）であると空自は判断したとＳＴＴ隊員に説明していた。

「荒魂の数と規模の情報を得るため上空から監視した後、Ｆ―３５Ａパイロット達はまだ荒魂が隠れているかこちらに気付いていないことも想定し、ＪＤＡＭを投下、その後飛行可能な荒魂が居ることも想定し、誘い出そうと低空飛行による機銃掃射を行なった際、僚機のＦ―３５Ａが低空飛行で機銃掃射を行なったＦ―３５Ａを荒魂が威嚇していたことを確認してくれていた。…そういったことから、もし飛行能力を有する荒魂が存在していたら、ＪＤＡＭの投下で騒音があり、低空飛行で身を晒して機銃掃射をしたにも関わらず飛行能力がある荒魂がＦ―３５Ａを追いかけて来なかったという理由で、今から討伐する荒魂の群れの中に飛行能力を有する荒魂は居ないというのが刀剣類管理局並びに航空自衛隊の見解だ。だが、もう一度言うがこれは推測の域に出ていないため、充分警戒すべきことであると僕は思う。」

真希はＦ―３５Ａが威力偵察を行なった理由とその効果を質問をしたＳＴＴ隊員のみならず、他の刀使や自衛官達にも聞こえるように説明していた。

そして、これは真希が説明することは無いと判断し省いているが、もし低空飛行で機銃掃射を行なったＦ―３５Ａが飛行能力を有する荒魂に追われた場合はマッハ１．２で即時離脱する予定であった。

「米軍所属のグローバルホークが箱根山周辺で演習をしていたと言いますが、何の演習をしていたんです？」

米軍に不信感を抱いているのか、姫和は他の人の目もあることを考慮し、出来る限り丁寧な言葉使いで真希に質問をしていた。

「……中の構造といったことは機密に関わることなので詳細を省くが、索敵範囲を伸ばした新型のスペクトラムファインダーに搭載される予定のセンサー技術のテストであると聞いている。もし、このテストが成功すれば、新型のスペクトラムファインダーが配備されることとなるらしい。……それまでは吉報を待ってくれ。」

真希の発言に周りの刀使達は騒然としていた。グローバルホーク

を飛ばしたのは、新型のスペクトラムファインダーに搭載される予定のセンサーが積まれているという情報に驚いたこともそうだが、新型のスペクトラムファインダーが研究、開発されており、そのテストが成功すれば、その索敵範囲を伸ばした新型のスペクトラムファインダーが配備されるかも知れないということにだ。

「あと、これは皆に聞いて貰いたい。本作戦は撤退も許されない防衛戦ではないことを頭に入れておいてくれ。先程も言ったが、危険と判断したら即時撤退し、体勢を立て直すことも許可されている。それ故に、作戦が瓦解したら陸上自衛隊の９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲とＡＨ―６４ＤとＡＨ―１Ｓの編成による撤退支援を行なってくれる手筈となっており、爆撃と砲撃に乗じて速やかに撤退すること。……以上だ。」

真希は体勢を立て直すことと撤退は許可されていることを各員に伝えていた。

そして、作戦会議が終了し、皆が持ち場に戻ろうとする中。

「寿々花、夜見と高津学長の行方は？」

真希は、内々に寿々花に夜見と雪那の行方を追わせていた。寿々花は代々折神家に仕える京都の名門此花家の令嬢であるため、此花家の力を使って夜見と雪那の捜索していた。

「……いいえ、まだ見つかりませんわ。一番可能性のある綾小路に居ると踏んでいるのですが……中枢まで調べるのに、警備が厳重なのもあって、やはり時間が掛かりますわ。」

寿々花は、誰か聞き耳を立てていないか周りを横目で見た後、真希にだけ聞こえるように小声で伝えていた。

「……そうか、引き続き捜索に当たってくれ、見つかったら先ずは僕だけに知らせてくれ。朱音様の指示を仰いで、どうするかは判断しよう。」

真希は無念そうに寿々花にそう小声で伝えていた。

「…分かりました。」

寿々花も短くそう言うと、自分の持ち場へと向かって行った。

夜見さえ戻れば元の四人となり、全員揃うと夢見ながら……。

箱根山戦２

箱根山山中特別祭祀機動隊仮野営地――――。

基幹連隊指揮統制システム搭載の中型トラック内。

「航空自衛隊から提供された情報と米軍所属から提供された情報を照らし合わせましたが、荒魂の数と規模は作戦前から変わりないようです。再度逆探をかけましたが、やはり荒魂からのレーダー波は確認されません。」

そこには、情報収集と分析、並びに戦況報告を担当する沼田一等陸尉から、航空自衛隊のＦ―３５Ａから送られた情報に間違いが無く、そのＦ―３５Ａから送られた情報と米軍所属のグローバルホークから送られた情報を照らし合わせた結果から荒魂の数と規模は作戦前から変わりが無いことと、荒魂から妨害電波やレーダー波がないことからネットワーク等を扱う電子戦の概念が荒魂側に無いことと、妨害電波やレーダー波を発することができる新種の荒魂が居ないことを寿々花に報告していた。

「Ｓ装備刀使５名のフィジカルチェック。Ｓ１からＳ５、心拍数、血圧、全て正常、異常無し。」

「同じく、Ｓ装備刀使５名、Ｓ６からＳ１０、同じく異常無し。」

同じく、鏑木一等陸尉がＳ１からＳ５（尚、Ｓ１は舞衣、Ｓ２は沙耶香、Ｓ３は可奈美。）の心身のバイタリティとＳ装備のバッテリー残量の担当をし、古河三等陸尉がＳ６からＳ１０の心身のバイタリティとバッテリー残量の担当をしていた。その二名の報告から、Ｓ１からＳ５、そしてＳ６からＳ１０までの新型Ｓ装備の刀使達全員の心身に異常が無いことを意味し、新型Ｓ装備刀使全員が荒魂討伐作戦の任務を遂行することについて何も問題が無いことを寿々花に伝えていた。

尚、今回古河と鏑木がＳ装備の刀使のオペレーターを務めることになったのは、女性同士であれば話しやすいという理由である。

「最新気象情報によりますと、現地に低気圧が接近するとの予報がされています。最も明日の正午までは快晴、天候の急変は無いとのことです。」

今現在の天候は快晴であり、天候が明日の正午まで変化が無いということは援護する機体として陸自の無人ヘリコプター機ＦＲＳと回転翼航空機ＡＨ―６４Ｄ及びＯＨ―１改といった航空機が使えることを意味し、偵察活動、人員輸送、航空支援が可能であることを示していた。

「……真希さん、通信感度は良好ですか？作戦予定通りにヘリコプターの支援は可能です。応答を。」

寿々花は一連の報告を聞き、早速真希にもそれが伝わっているかどうかを尋ねると共に、前線への通信は確保出来ているかどうかを尋ねていた。

『ああ、問題無く聞こえているよ、寿々花。感度は良好だ。』

その真希の応答を聞いたと同時に寿々花は、現在の状況を整理していた。

予測通り、荒魂はレーダー波と妨害電波を発していないことから、第５の戦場と言われているサイバー戦争という概念はまだ荒魂には無いということ。新型Ｓ装備を着用している刀使の心身の状態は現在異常が見られないということ。前線への通信は確保されていることが真希との通信で確認済み。天候は不順ではないのでヘリといった航空機が使えるため、航空支援とヘリボンによる戦線への増援が可能。陸自の特科部隊も展開が終了し、砲撃による火力支援が可能であること。

今のところ、作戦計画通りである。……そう判断した寿々花は、各小隊に最終ブリーフィングを行なう。

「……分かりました。では、第一小隊から第四小隊へ最終確認。第一小隊と第二小隊は先行し箱根山周辺の荒魂を討伐。討伐方法は荒魂がこちらに気付いていない場合によりますが、大型の荒魂の場合は第二小隊所属のＳＴＴ隊員によるサプレッサー付きの短機関銃、ＭＰ５ＳＤ６で荒魂の注意をＳＴＴ隊員に向けさせ、その隙に新型Ｓ装備を纏った刀使が側面、或いは背後を強襲して斬って祓う。弱い荒魂が相手だった場合は、いつも通りに斬って祓って下さい。そして第一、第二小隊の支援を担当する第三小隊は第二小隊の新型Ｓ装備のバッテ

リーを運んでもらい、各ブロックの荒魂が居た区域を一つ一つ制圧。それと、もしもの話ですが、荒魂が早期にこちらの存在に気付いてしまい、多数の荒魂がこちらに向かって来た場合は第一小隊が囮となって戦線を維持し、続く第二小隊が荒魂の陣形の隙を突いて陣形を乱れさせ、陣形の穴を突き壊滅的打撃を与えてください。第一、第二小隊の支援を担当する第三小隊は第一小隊の支援と陣形の穴を塞いで貰います。もし、作戦の続行が困難であると判断した場合は陸上自衛隊の９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲とＡＨ―６４ＤとＡＨ―１Ｓの編成による火力支援によって撤退支援を行なってくれる手筈となっていますので、撤退は許可されております。故に、無理に殲滅する必要ありません。」

最終ブリーフィングを終えた寿々花は各小隊に作戦成功を祈る旨を伝えていた。

「…以上です。では、現刻より荒魂掃討作戦を開始。作戦通りに完遂することを祈ります。」

作戦開始を真希に告げる。

『了解、今から特別災害予想区域に入る。』

箱根山の特別災害予想区域、つまり荒魂掃討作戦の作戦区域に入ることを真希は各小隊に伝えていたそんな中――――。

「第一小隊並びに第二小隊に通達、敵の荒魂が一体、こちらに急速に向かっています。荒魂のタイプは刀剣類管理局のデータベースによるとムカデ型、会敵予想時間は約２０秒。」

他の部隊への通信を担当する西田二等陸佐から、ムカデ型の荒魂が真希達に急速に接近していることを襲撃を担当する第一部隊及び第二部隊に報告していた。

尚、女性でもない西田二等陸佐が他の部隊への通信を担当しているのは９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲と野戦特科射撃指揮装置を使用する特科部隊、並びにＡＨ―６４ＤとＯＨ―１改そしてＡＨ―１Ｓを擁するヘリ部隊との通信を行なう際、出向している自衛官の中で階級の高い西田二等陸佐に任せるのが適任であると判断されたからである。

『……一体のみか、丁度良い。』

数名で対処するムカデ型が急接近しているにも関わらず、真希はいつも通りに、冷静な態度を崩さずに応えていた。ここで、あの荒魂を自分が倒せば他の刀使達の士気はぐんと上がるだろうと頭の中で計算しつつ、運が良いなと真希は思いながら、他の刀使達よりも前へ出ていた。

『真希さん、あと数秒でこちらに『分かっている。アレは僕の獲物だから、手を出すな。』…はい。』

真希とその配下に居る刀使の会話から、どうやら真希が単独であのムカデ型を相手にするようである。

そんな会話が聞こえた数秒後、今にも火花が散りそうな程の刀剣と何かの硬い物質が打ち合う金属音が複数回聞こえてきたため、恐らくだが、真希とムカデ型の荒魂の戦闘が発生してしまったのであろう。しかし、唐突にそんな事態になったにも関わらず、西田達は努めて冷静に、慌てず、新型Ｓ装備のＴＶカメラを通じて、真希とムカデ型の荒魂の戦闘状況を見ていた。

そこには、Ｓ装備も装着していない真希が、数名で対処するほど強力なムカデ型の荒魂を相手に単独で圧倒していた場面が映っていた。

（……なんと。）

これには西田も、いや恐らく中型トラック内に居る者達の全員が、新型Ｓ装備に内蔵されているＴＶカメラを通じて写っている真希とムカデ型の荒魂の戦闘を注視していた。皆、西田と同じで、流石は大会二連覇を成し遂げたことで折神家親衛隊第一席に就任した経歴を持つ獅童　真希であり、刀使の中でも屈指の実力者であることを再認識すると、真希と荒魂との戦闘を固唾を呑んで見ていたのである。

そうして、真希は一撃一撃が鋭く重い攻撃で一瞬の隙を作り、その隙を見逃すことなく突いて、強力なムカデ型の荒魂を一刀のもとに切り伏せるとノロへと還していった。

『……すごい。』

『あれほどの荒魂を一刀のもとに……。』

そんな真希の活躍を見た他の刀使達は感嘆とし、称賛の声を上げて

いた。
『お見事です、真希隊長っ！』
『いや、このくらいなら大したことはない。』
そして、ムカデ型の荒魂を真希が討伐したところをＳＴＴ隊員は透かさず真希に賛辞の言葉を送っていた。
ＳＴＴ隊員が真希に賛辞の言葉を送った理由は、〝本来ならば数名の刀使がチームを組んで討伐するほど強力なムカデ型の荒魂を前線指揮担当の真希が単独で倒した〟ことを宣伝することが目的で、周りの刀使達にも聞こえるように賛辞の言葉を送っていた。
ＳＴＴ隊員の賛辞を送る声を聞き、状況を知った刀使達からしてみれば、先ず自軍指揮官が手本を見せるかのように、この荒魂掃討作戦の中でも最も手強いであろう荒魂を単独で討伐して見せたのである。そんなものを見てしまったり、聞いてしまった刀使達の士気は嫌でも上がるものであり、そうなってしまえば、真希への信頼は上がり上司と部下の関係は確固たるものとなり、荒魂掃討作戦の効率と遂行率、そして今後の部隊運営にも好い影響が出るというものであろうと、真希は後のことまで計算していた。
荒魂をたった一体討伐しただけのことで、古今東西の諸将が万年苦慮したことであろう兵の士気向上を簡単にしてのけたことに真希は内心過去の英傑達や教科書に載っている将兵達にどう思っているのか聞きたかったが、反面怖い位物事が上手く行っていると危惧しながら、こう宣言した。
『さあ、山狩りだ。』
真希は部下達がこの箱根山での荒魂掃討作戦は勝利という名誉が得られると確信させるべく、まるで、今からハイキングでも行くかのように山狩り宣言をし、更なる士気の向上を狙っていた。
その効果はあったのか、この人の下で戦えば、大丈夫であると確信した目をしながら、ＳＴＴ隊員達も周りの刀使達も皆、やる気に満ちた顔と目をしていた。
そのときの真希はこのときばかりは隊長の役割が余程愉快だったのか、作戦報告書の文面によく現れていたと朱音局長代理、中谷防衛

大臣の両名は後年答えている。
　しかし、その反面、先程のイレギュラーで真希は衛藤　優の中に居る強い荒魂の力に引かれてさっきのムカデ型の荒魂が急接近したのかも知れないと不安に感じたせいなのか、この荒魂掃討作戦には不安要素があり、作戦前にその事について危惧していたことをつい思い出してしまっていた。その危惧とは、荒魂パーカーを身に纏い、フードを被りながらスポーツマスク（尚、変声機が仕込まれている。）とグレー系のゴーグルを装着し、旧折神家親衛隊の制服を着用している者は、公には世界初の男性の刀使であると言われており（その際、他に男性の刀使が居ないかという適正検査を受けるという無意味な応募や美濃関や平城といった共学の刀使養成学校から御刀の適合者が居ないか検査をした、といった多くの騒動があったのではあるが、今は端折らせて頂く。）、白いウィッグを着けているとはいえ衛藤　優であると知っているのは可奈美達と朱音や甲斐といった限られた刀剣類管理局の職員と政府閣僚だけであり、それ以外の者に荒魂と融合している優がこの作戦に参加していることが世界各国にバレてしまえば、ノロで強化された子供は隠世の力を使いこなせることが知れ渡ることとなり、反政府勢力や紛争国といった勢力がノロの軍事利用をするため、ノロの力で強化された少年兵を積極的に導入することになる恐れがあり、それらを討伐することになった刀使達は精神的に壊れてしまうこととなり、刀使の更なる病気退職及び離職率の増加とノロで強化された子供が増加するのを防ぐため、そして優の命を少しでも長くするため、優を変装させ戦闘に参加させていた。そして公的には、世界初の男性の刀使として生体実験等にされるのを防ぐために刀剣類管理局の元で保護、正体を隠しているということになっている。そのため、荒魂の力で強化された優がこの作戦の戦闘に参加していることは隠さなければならなかった。
　そしてもう一つは、ＡＨ―６４ＤとＯＨ―１改が一機ずつしかないため、仮に無人機とこの機体も墜落してしまえば、上空からの充分な偵察情報が得られなくなることを危惧していた。できれば、もう少しＯＨ―１改とＡＨ―６４Ｄの作戦投入機数を増やして欲しかったが、

陸自のＡＨ―６４ＤとＯＨ―１の調達数は少数しか配備されていない（我が国のＡＨ―６４Ｄの現在の導入機数は本当に少ない。）ことを鑑みれば、致し方ないのだろうと真希は結論付けると同時に、今後の刀剣類管理局の方向性について考えていた。

（……以前、僕と寿々花が箱根山で荒魂掃討作戦中に荒魂の伏兵によって本隊と分離、孤立させられたことが今後も起こることと常に自衛隊や米軍の支援があるとは限らない現状を考慮すれば、現在の特別祭祀機動隊の刀使の人員は減りつつある以上、特別祭祀機動隊にも作戦区域全体の情報を入手できる無人機の導入は必要になってくるだろう。……戦場の霧が無ければ前のように孤立することは無くなる、…かも知れないしな。）

今後も特別祭祀機動隊の刀使の人員が減りつつある昨今の現状を鑑みれば、以前折神家親衛隊を中心にした箱根山の荒魂掃討作戦中に起きた荒魂の伏兵による本隊との分離と孤立状態に陥ったことが再度起これば、以前のように夜見や結芽が救援に来て、一命を取り留めることが有るかどうか……。といったことを考えていた真希は、今後特別祭祀機動隊にも小型の無人機が必要になるかも知れないと予見しつつ、考えながら進んでいった。

だが、政府が市ヶ谷に居る〝姫〟に対抗する手段を得るために、この荒魂掃討作戦で討伐された荒魂のノロを優に投与させ、優の中に居る荒魂の力を増大させようとしていること、そして珠鋼と御刀との併用で能力がどれ程ブーストされるかどうか、荒魂と珠鋼を近付けることによって穢れが清められるかどうかを実証するために優が着ている親衛隊の制服の一部装飾には珠鋼が使用されているという実験動物の様な扱いを受けていることに真希も、可奈美達も知らないまま、気付く事も無かった――――。

「ブロックＩ周辺も荒魂の殲滅完了しました。次はどこへ？」
　第二小隊を率いる舞衣は、９番目の区域ブロックＩ周辺の荒魂を殲滅し、ブロックＩが安全地帯となったことを鏑木一等陸尉へと報告していた。
『了解しました。これにより、箱根山周辺の荒魂の戦力は約６５％まで減衰。ブロックＩの制圧は第三小隊へと引き継ぎ、第二小隊は続けて舞衣さんから見て右方向のブロックＪへ向かい、周辺の荒魂の殲滅と周囲の安全確保をお願いします。ブロックＪ周辺の荒魂の種類、刀剣類管理局に保管されているデータベースから照合。大型のムカデ型一体、他の９体は脅威度の低い蟲型であることが確認されました。ブロックＪ周辺に居る荒魂の位置と構成、地形のデータを送ります。』
　鏑木一等陸尉の声を聞きながら、舞衣は新型Ｓ装備のバイザーに表示されている基幹連隊指揮統制システム搭載の中型トラックから送られたブロックＪ周辺の荒魂の位置と規模、詳細な地形のデータを確認し、作戦を組み立てていく。
　今回、第二小隊を舞衣が指揮することとなったのは、真希が指名したからであり、その理由は大荒魂相手に指揮手として立ち回れたこともそうだが、真希自身ももう１６歳であることを鑑みて、何時刀使としての力を失うことになっても良いように、後進を育てるつもりで新型Ｓ装備と部隊指揮の慣熟訓練を兼ねた第二小隊の指揮という大役を舞衣に指名していた。
　……決して、真希自身、機械オンチの所為で新型Ｓ装備が扱いきれなかったとか、ドローンの操作が上手く出来なかったとか、そんな理由ではない。
「確認しました。これより第二小隊はブロックＪ周辺の荒魂を討伐します。」
　舞衣は鏑木が荒魂の位置と構成を送ってくれた鏑木に感謝の意を込めた言葉を送ると共に、自らが指揮することとなった新型Ｓ装備を装着する１０名の刀使達が所属する第二小隊と共にブロックＪの周

辺に屯している荒魂を殲滅すると言って、行動を開始しようとしていた。特に気を付けねばならないのは大型の荒魂一体のみで、他は大したことのない弱い荒魂であった。

「みんな聞いて、可奈美ちゃんと沙耶香ちゃんで大型の荒魂を討伐、他のみんなは大型を相手にせず、弱い蟲型の荒魂を相手にして。……可奈美ちゃん、沙耶香ちゃん大丈夫？」

舞衣は、可奈美と沙耶香にブロックＪ内に居る一番強い荒魂を二人だけで相手にすることに問題は無いか尋ねる。

「大丈夫、舞衣ちゃん。このタイプの荒魂は沙耶香ちゃんと二人で倒したことあるから。」

「舞衣、問題ない。」

すると、可奈美と沙耶香の二人はＳ装備のバイザーに表示されているブロックＪ周辺に居る荒魂を確認し、その荒魂を見た二人は前に戦ったことがある種類であることを思い出し、第二小隊を指揮する舞衣に特に問題は無いということを伝えていた。

「ゴメン、お願いね。……あと、機動隊の皆さんにもお願いしてもらいたいことがあるのですが。」

「はい、何でしょうか？」

舞衣はそう言って、特別機動隊（別名：ＳＴＴ）の隊員等を手招きで呼ぶと、特別機動隊の隊員達はそれがさも当然であるかのように応えていた。

「今までは機動隊の皆さんにＭＰ５ＳＤ６で荒魂に当てて指定ポイントまで誘き寄せるようお願いしました。」

舞衣は第二小隊を指揮することが決まったとき、第二小隊に所属するＳＴＴ隊員が持つ武器がどのような物か真希に聞いて確認をし、ＭＰ５ＳＤ６がどのような武器か知っていたため、ＳＴＴ隊員にも解るように銃器の名前を言って説明していた。

「そして、今回はコレを使ってみようと思います。」

そして、舞衣はペットボトルの中に詰まっている物、ノロが詰まっていることをＳＴＴ隊員等に見せていた。

「……それを、どうするのですか？」

当然、何に使うのか解りかねず、舞衣に真意を訪ねるＳＴＴ隊員。
「最新の研究で荒魂はノロとの結合を求める性質があるようです。だから、コレを荒魂の近くに投げて、注意をこのノロに向けさせると同時に結合を求める荒魂の群れを一直線に向かわせ、隊列を乱します。その後はＳ装備刀使７名が蟲型の荒魂を重点的に襲撃し殲滅、大型の荒魂は最初にこのＳ装備刀使に注意を向けると思われますので、その隙にＳＴＴ隊員の皆さんが制圧射撃で大型の荒魂の動きを牽制しつつ、注意を新たにそちらに向けさせて下さい。その後はＳＴＴ隊員等に誘導させ、沙耶香隊員含む３名のＳ装備刀使が大型の荒魂を正面と背後または側面から襲撃し、討伐します。それで行こうと思いますが、何か質問はありますか？」
ノロとの結合を求める性質を持つ荒魂の近くにノロを置き、ブロックＪに居る荒魂達を指定ポイントまで誘き寄せ、隊列を伸び切らせると、９体居る蟲型の荒魂を可奈美と沙耶香以外のＳ装備刀使７名で殲滅後、大型の荒魂は可奈美、沙耶香と他一名のＳ装備刀使がＳＴＴ隊員の制圧射撃後、大型の荒魂の背後や側面といった死角からの襲撃を以って弱らせ、討伐するという作戦を舞衣はＳＴＴ隊員等に説明していた。
「荒魂がそのノロに気付かなかった場合はどうしますか？」
「その場合は発砲をお願いして注意をペットボトルに向けさせます。」
……やはり、危険過ぎますか。」
ＳＴＴ隊員は目標の荒魂がそのノロに気付かなかった場合はどうするのか尋ねられた舞衣は、銃で誘導するということを提案するが、ＳＴＴ隊員がやりたくない場合は取り止めようとしていた。
「いいえ、それで刀使の皆さんのお役に立てるなら、我々は問題ありません。命令を。」
しかし、ＳＴＴ隊員等は直立不動で姿勢を正して返事をし、その命令を受諾する意志がＳＴＴ隊員等にあることが見てとれた。その厚意を見てとった舞衣は謝意の言葉をＳＴＴ隊員等に送っていた。
「……ありがとうございます。」

しかし、ペットボトルの中に詰まっているノロは、その前のブロックIに居たノロに還した荒魂の一部を切り取って、ペットボトルに詰め込んだ物であることに、舞衣の凶行に誰も気付くことなく、次の行動はその作戦を行っていた。

箱根山戦３

第二小隊に所属するＳＴＴ隊員の一人が双眼鏡にてブロックＪ周辺の荒魂を環視し、第二小隊を指揮することとなった舞衣に報告していた。

「……柳瀬隊長、現在荒魂に動きはありません。」

この報告により、Ｓ装備刀使の作戦行動に荒魂はまだ気付いていないということが舞衣は知ることができた。

『解りました。そのまま、動きに変化は無いか監視し続けて下さい。』

ノロとの結合を求める性質を利用し、荒魂の近くにノロを置き、ブロックＪに居る荒魂達を指定ポイントまで誘き寄せ、荒魂の隊列を伸び切らせると同時に、伏兵と待ち伏せでブロックＪの周辺に居る荒魂を殲滅するべく、舞衣はＳ装備を装着した刀使達の展開が終了するまでＳＴＴ隊員に双眼鏡で荒魂の監視をさせていた。だが、ＳＴＴ隊員が双眼鏡で監視しているとはいえ、ブロックＪに居る全ての荒魂を監視することは不可能なので、大型の荒魂のみを監視することになっていた。丁度、ムカデ型の荒魂の周辺に蟲型の荒魂が屯している状態であり、ムカデ型のみ監視するだけでも都合が良かったと言える。

『…投下します。』

舞衣からの無線通信が来たため、ＳＴＴ隊員等は気を引き締める。

何時、こちらに向かってくるか、思った方向に向かわないかも分からないので、双眼鏡で監視をしているＳＴＴ隊員は目を凝らして見ていた。

「…柳瀬隊長、予定ポイントに向かっていきました。」

そして、何事も無く、荒魂はこちらの思惑通りに誘導されていったことを確認したＳＴＴ隊員は舞衣に予定通りに事が進んでいることを報告していた。その報告を終えたＳＴＴ隊員は周りの隊員達に装備している短機関銃ＭＰ５ＳＤ６を構えるよう指示し、大型のムカデ型に狙いを定め、指示があるまで発砲は控えるよう周りの隊員達に厳命していた。

このノロを使った誘導による奇襲殲滅作戦はタイミングが重要で

ある。

もし、Ｓ装備刀使達の展開と準備が終わる前にＳＴＴ隊員達が発砲してしまえば、荒魂達がＳＴＴ隊員達の方に向かい、せっかく良い位置に就いたＳ装備刀使達は奇襲に絶好なポイントを放棄し、ＳＴＴ隊員を守るために戻らなくてはならなくなり、奇襲を以って殲滅するどころではなくなるのだ。

そう思うだけで、ＳＴＴ隊員等は緊張が走る。しかし、不思議な物で訓練の賜物か、呼吸を整えていくだけで次第に思考がクリアになっていき、冷静になっていくことができた。これならば、例え目の前に荒魂が出てきてもパニックになることなく指示が出るまで発砲はしないだろうと誰もが思い始めていた。

『今です。』

そして、舞衣からの短いながらも火力支援を要請する通信を受け、即座に大型のムカデ型へと制圧射撃を加えるＳＴＴ隊員達。

ムカデ型の荒魂は音も無く、どこからともなく撃たれていること、後ろから刀使達が急に現れ、蟲型の荒魂を一方的に倒していく様に驚いたのか、慌てているようであった。

その隙に、ＳＴＴ隊員達は立ち上がると同時に発砲を続け、こちらの存在をムカデ型に晒すと、ムカデ型は御刀を持つ刀使を相手にするよりは良いと判断したのか、若しくは一方的に蹂躙されている仲間の仇か、いや、それとも獲物が間抜け同然に姿を晒してくれたと思ってくれたのか……。

どちらにせよ、あのムカデ型の荒魂は予定通りに罠とも知らずに向かって来てくれている。ＳＴＴ隊員達は荒魂が向かってくるという恐怖と戦いながら、囮の任務を全うするために撃つのを止めて背を向けることにした。そうすることで、こちらを獲物だと誤認してくれるだろうと思いながら、荒魂に背を向けて走るＳＴＴ隊員達。その狙いは的中したのか、更にこちらを追うムカデ型の荒魂はこちらを蹂躙することは叶わず、Ｓ装備刀使二名、可奈美と沙耶香の両名による待ち伏せと奇襲により、声を上げる間もないまま、ムカデ型の荒魂はノロへと還って逝った。

「スゥ、……フゥッ。……柳瀬隊長、ムカデ型の荒魂は予定通りにノロへと還りました。繰り返します、ムカデ型の荒魂は予定通りにノロへと還りました。」

流石に荒魂に追われるのは、予想よりも精神的に多大な苦痛であったのだろう。

ＳＴＴ隊員達は気付かなかったが、多量の汗をかき、動悸が早くなっていた。ＳＴＴ隊員達はその状態から脱するために、息を吸って吐いてから、心を整え、舞衣にムカデ型の荒魂を予定通りにて討伐されたと報告していた。

一方、作戦区域の幾つかの地点を制圧した第二小隊隊長の舞衣の指揮下に居る沙耶香はブロックＪ周辺に居る荒魂の残敵掃討をしていた――――。

苦痛でもがいている荒魂を見つけると、止めを刺してノロへ還し。そして、また苦痛で喘いでいる荒魂を見つけると、止めを刺してノロへと還す。それをプログラミングされた機械のように、何度も……、何度も何度も何度も何度も単純作業のように、無念無想を使っているかの如くそれを何度も繰り返してきていた。……まるで、心が無いかのように。

「……。」

以前の〝温かいもの〟を知らなかった沙耶香であれば、斬られたことにより、もがき苦しんでいる荒魂に止めを刺すことに戸惑うことなく斬って祓っていただろう。しかし――――、

「……何で、こんなことしてるんだろう。……私。」

もがき苦しむ声を上げる荒魂、ノロを噴き出しながら痛みで呻く荒魂、恨めしそうにこちらを見つめている荒魂、仲間を庇っているのか

死にかけている荒魂に覆い被さる荒魂。この光景を何度も何度も見た沙耶香は、……いや、今や〝温かい感情〟を知った彼女にとって、フリードマンに教えてもらったこと、

『ノロは人が御刀を手にするために無理矢理生み出されたいわば犠牲者なんだ。元の状態に戻すことができないのならせめて社に祀り安らかな眠りについてもらう。それが今の所我々にできる唯一の償いなんだ。』

を思い出し、人間達のエゴによって捨てられたノロが結合して生まれた被害者とも言える荒魂を何故こんなふうに斬り殺さなければならないのか、理解ができなかった。

「……何だろう、この気持ち、……何でこんなことを……。」

嘗ての沙耶香は、天才と言われても何も感じず、任務を遂行するだけだった。

……空っぽでいることは楽だったから。

だが、心の何処かで天才と言われていたことに、誇りを感じてしまったからだろうか――？

それとも、可奈美との立会いで〝温かい〟ものを感じてしまい、〝剣術〟や〝刀使の使命〟というものの考え方が変わってしまったからだろうか――？

自問自答する沙耶香は、背後を狙う、又は一人が囮となっている間に致命傷を与え弱らせる。そんな不意討ち同然の真っ向勝負とは言えない戦い方をして、弱らせた荒魂を一方的に止めを刺している状況を、より正確に言えば虐殺染みたことをしていることに、言い知れぬ何かを感じていた中。

「ちっ、まだ〝生きてる〟っ！」

あるS装備刀使一名が舌打ちをすると共に、死にかけている荒魂を見かけると、足で踏みつけると同時に何度も何度も突き刺して、止め

を刺していた。
「たく、邪魔くさいことして。」
そして、もう一人のS装備刀使は、仲間を庇うためか死にかけている荒魂に覆い被さる荒魂を邪魔そうに蹴り飛ばして退かすと、死にかけている荒魂相手に御刀で斬ってノロへと還すと、蹴り飛ばした荒魂も何の遠慮も無く足で抑えると何度も突いてノロへと還していた。
そして、舌打ちしていたS装備刀使と荒魂を蹴り飛ばしていたS装備刀使は止めを刺す際、非常にサディスティックな笑みを浮かべながら、荒魂を斬り殺していたことに沙耶香は気付いていた。
「……実戦て、結構呆気ない物だね！」
「これが、……S装備の力なんだ……。」
「この装備差なんだから、当然の結果じゃない!?」
周りの同じ第二小隊に所属する先程とは他のS装備刀使達も今まで苦戦していた大型の荒魂を一方的に倒せたことに、喜びを感じ、ある種の万能感に酔いしれ、一種の高揚感を覚えてしまったせいか、わざわざ荒魂を足蹴にしてから止めを刺していたり、わざと急所を外しながら斬り殺していたり、普段ならそんなことをしないであろう彼女達のどこか必要以上に行なう加虐的な行動を見た沙耶香は周りのS装備の刀使達の笑顔がどこか歪んだ顔をしているように、人間とは違う物に見えてしまっていた。
（……何が……楽しいの？……）
沙耶香は、周りの新型S装備の装着した刀使達の顔が澱んで見えると同時に、嘗ては箱根山に施設が有ったことを示す標識が残っており、それと同時に『非核恒久平和宣言都市』と和やかな絵と共に書かれていたモニュメントを、その願いを込めた象徴をただ思うところがあったのかは沙耶香自身分からないものの、ただ、ぼんやりと見ていた。
「……。」
その『非核恒久平和宣言都市』と和やかな絵と共に書かれているモニュメントを見て、何故だか、穴が空いた心の隙間に風が入って来たかのように、心の中に冷たい何かが入り込んで来たことに沙耶香は寒

気を感じていた。

ここは、元々は人が溢れていて、穏やかな平和を願って建造したモニュメント通りに子供も大人も笑い合う素敵な場所であったのだろう。錆びている遊具が、店であった廃屋が何の店であったかを見るだけでそれを物語っていた。

そして、沙耶香は刀使の離職率の増加によって、関東のみに荒魂発生率が上昇したとはいえ、関東で遠く離れた所に住んでいた人達の処でも荒魂が発生してしまえば、対応が遅れるため、その対策として疎開同然に避難して行った者が居たということをニュースか何かで見たことを思い出し、この地帯もそれだったのではないのかと沙耶香は思い始めてしまう。そうだったなら、自分達は四ヶ月前の大荒魂との戦いで、何も出来ずノロを漏出してしまったことをしてしまったのだから、ここ意外も、いや、ここ意外の何処かに住処を捨てざる負えなかった人達はどれだけ居るのだろうか？

「……。」

沙耶香はそれを考えるだけで、思考がそのことについて一杯となり、纏まらなくなり、心も罪悪感によって生まれた苦痛を燃料として、心臓の鼓動が早くなったことを痛感していた。

単純作業のように繰り返し、まるで、心が無いかのように荒魂に止めを刺すと同時に、〝自分〟が自分で無くなる感覚――――。

四ヶ月前の大荒魂との戦いで、何も出来ずノロを漏出してしまったことによる罪悪感から来る、〝心〟という魂が何処かへ逝ってしまう浮遊感――――。

温かい場所が寂れて、今や加虐的な行動をする者がその大地に立ち、誰も居ない冷たい場所となっていることを認められず、〝周り〟が無くなるかのような錯覚――――。

『私も舞衣と一緒。この温かい気持ちを捨てない!!』

何時の話だったか、誰の決意だったか、そんな遠い話の様に感じ、遥

か昔の話だったような感じもしたが、紛れもなく嘗ての自分が雪那に向かって啖呵を切って言った嘗ての決意。なのに、何故そんな決意から遠く離れてしまうような所へ来ているのだろうか?どうして、こんなことをしているのか、今では求め欲した所から遠く離れた場所へ向かっているのか、解からなかった……。

どうしてこうなったのかが、解からなかった……。

どうして此処に居るのか、解からないのだ……。

どうしてこうなったのかが、解からない……。

解からない。分かラない。解カらない。解らナい。解カラない。判ラない。解からなイ。わからない。解かラナい。……ワカラナイ。

『沙耶香さん、心拍数と血圧が急に上がり、呼吸も上がっていますが、何か問題がありましたか?』

鏑木は沙耶香の心拍数と血圧、呼吸が急に上昇したことについて、何があったか優しげな声で尋ねていた。だが、鏑木が沙耶香に軽度のパニックの兆候が見られることを沙耶香に聞こえないようにマイクを握って、寿々花と西田に報告した後に尋ねていたことだったが……。

尚、マイクを握って沙耶香に聞こえないようにしたのは、パニックの兆候があることを聞かれると沙耶香の真面目な性格から無理をするだろうと判断し、聞こえないようにしたためであること。そして沙耶香の呼称はS2だが、パニックを起こしていることを考慮し、鏑木は沙耶香を落ち着かせるために名前で優しげな声で呼んでいた。

「……はい、……大丈夫、です……。」

沙耶香は途切れ途切れながらも異常が無いことを伝えていた。自らの心の内にある蟠りを無理矢理抑え込みながら……。

しかし、沙耶香の預かり知らぬところで西田達と寿々花は、ノルアドレナリン値が急に上がると伴い、血圧と心拍数、呼吸が増大した今の沙耶香について仮野営地の基幹連隊指揮統制システム搭載の中型トラック内にて話し合っていた。

「……やはり、軽度のパニックに陥っていると思われます。誰かに交代させるべきでは？」

鏑木が、直属の上司である西田二等陸佐と総指揮官に任命された寿々花に異常が見られる沙耶香を後退するべきであると進言していた。

「只の戦闘によるストレスの可能性は？」

寿々花は荒魂との戦闘によって生じたストレスが心拍数と血圧を増大させ、呼吸も上がったのではないのかと鏑木に尋ねていた。

「他の隊員も糸見隊員と同様に心拍数は上がっていますが、糸見隊員の任務を遂行することを第一とする気質と中等部の頃に主力の一員として活躍していた経歴から、現在の状態を考慮すれば、荒魂の戦闘によるものであるという可能性は低いと思われます。」

寿々花の質問に鏑木は、沙耶香は元々内に不満を溜め込み何一つ文句を言わず指示に従う性格であること、中等部一年で荒魂の討伐任務に参加しているベテランであるにも関わらず、心拍数の増大と脳波に異常が見られるということは荒魂との戦闘以外によって生じたのではなく、何らかの外的要因によってストレスを受け、軽度のパニック又はパニック障害に陥ったと鏑木は考えていた。

そのため、心身に多大な負担を強いている状態の今の沙耶香を退げ、第三小隊の誰かと交代すべきであると西田は寿々花に進言していた。

「……つまり、沙耶香さんは荒魂の戦闘による物ではなく、何らかの理由でパニックに陥っていると、……あの子の生真面目な性格なら、考えられますわね。S装備の稼動限界時間は？」

その進言を受け入れた寿々花は箱根山周辺に居る荒魂全体に目立った動きが無いことを作戦区域の全体図を写し出している大型モニターで確認した後、S装備の稼働時間限界間近であることを理由に

第二小隊のＳ装備のバッテリーを第三小隊の何名かに第二小隊に届けて来させる間に第二小隊を休憩させ、Ｓ装備のバッテリーを持って来させた数名の第三小隊と合流後、沙耶香を第三小隊の一人と交代させ、その数名の第三小隊と共に沙耶香を後方に退がらせることを決意。Ｓ装備のバッテリー残量の確認を担当する鏑木と古河にＳ装備の稼働限界時間を尋ねていた。

「Ｓ１からＳ５の稼動限界時間は約３０分。」

「同じく、Ｓ６からＳ１０の稼働限界時間は約３０分。」

寿々花に尋ねられたため、定型通りに新型Ｓ装備の稼働限界時間を報告する鏑木と古河。

「でしたら西田さん、第三小隊の何名かをＳ装備のバッテリーを運ばせましょう。Ｓ装備のバッテリーを交換できましたら、第三小隊の中で腕の立つ人と沙耶香さんを交代。……それで行きましょう。ああ、あと沙耶香さんには私から指揮所に戻ってきて手伝って欲しいと伝えて下さい。そう言えば戻ってくるでしょう。」

あとは沙耶香に戻ってきてもらう理由を添えれば、沙耶香は従うであろうと踏んだ寿々花は鏑木と古河、西田に伝え、そう指示していた。

そんなやりとりがあったことを知らず、第二小隊の指揮を担当している舞衣は、

「第二小隊を預かる柳瀬です。指示通り、ブロックＪ周辺の荒魂の反応は消滅しました。次は何処に向かえば良いでしょうか？」

沙耶香の状況を知らないまま、舞衣はオペレーターを務める鏑木一等陸尉に次に向かう地点への指示を乞うていた。

『……分かりました。では、次はブロックＮをお願いします。この区画に居る荒魂を討伐することができれば、荒魂の戦力は約６０％まで減衰します。ですが、Ｓ装備のバッテリー残量は残り少ないので、回収班と第三小隊の５名の刀使がＳ装備のバッテリーを持って、そちら

へ向かうよう西田二等陸佐が手配しました。それまでS装備のバッテリーとノロの回収班が来るまで待機していて下さい。』

鏑木一等陸尉がそれに応え、既に第三小隊からS装備のバッテリーを持った5名がこちらに向かっているという援護の話を聞き、安堵する舞衣。

舞衣は当初、少しも笑顔を見せない鏑木一等陸尉が苦手であったが、こうして話してみると、……いや、今でもムッツリとした堅い顔で応答しているであろうことが声から分かるが、少しミスしてしまったときに焦ってしまうものの、鏑木から優しげな声で落ち着くように言われたときは心底驚いたものである。

「分かりました。それまでここで待機します。…みんな、大丈夫？ここで一休みしよう。……沙耶香ちゃん？」

ふと、沙耶香の方を見やると、沙耶香が汗を多く出していることに違和感を感じ、沙耶香に何があったのか尋ねていた。

「沙耶香ちゃん？……沙耶香ちゃん！」

「……えっ、……あっ？」

やはり、何処かおかしい。舞衣はそう判断すると、

「……沙耶香ちゃん、どうしたの？休憩にしよう？」

「あっ、……うん、ごめんなさい。」

沙耶香を休憩させるため、優しく柔和なでそう言って、休憩するように伝え、沙耶香を岩の上に座らせる。

「可奈美ちゃん、悪いけど様子がおかしいから沙耶香ちゃんの傍に居てあげて。」

『…うん、分かった。』

沙耶香を座らせると同時に沙耶香に悟られないよう小声で、無線通信を使って可奈美に様子のおかしい沙耶香の傍に居てもらおうとしていた。

理由は、

「……第二小隊を預かる柳瀬です。沙耶……糸見隊員の容態が悪いので、後ろに退がらせて貰いたいのですが。」

この通信内容を沙耶香に聞かせないためである。もし、この通信内

容を沙耶香に聞かれでもしたら、後ろに退がることを頑なに拒否することがあるため、可奈美に沙耶香を見てもらうと同時に監視してもらうことにした。

『……確認しました。第三小隊にはその旨を伝えておりますので、その場で待機をお願いします。』

そうして、鏑木から沙耶香を後方に退がらせることが容認されたことに安堵する舞衣。沙耶香は何かと我慢する子なので、気を使わないといけないと舞衣は思っており、もし沙耶香を後方に退がらせなかった場合は、無理にでもそうさせようとしていた。

「ありがとうございます。それで、どのようにするのでしょうか？」

『既にこちらのモニターで、糸見隊員の心拍数及び血圧といった値が異常を示しておりましたので、此花指揮官と協議し、第三部隊の人員と糸見隊員を交代し、糸見隊員は第四小隊へ、第三小隊の欠員は第四小隊から補充され、再編成される予定です。』

舞衣は、すんなりと沙耶香を後退させて貰えたことに感謝の意を述べていたが、沙耶香は中等部の頃から鎌府の主力として活躍していた実戦経験豊富な刀使である。

にも関わらず、何故こうもすんなりと受諾してくれたのか疑問に思い聞いてみると、新型Ｓ装備に内蔵されている各種センサーで体温、血圧、呼吸、心拍数、運動反応を測定することができ、その情報をリアルタイムで後方の指令所や作戦指揮所に送られることを思い出し、その情報を以って、沙耶香の状態が悪いことに早く気付いたのだろう。

そう理解した舞衣は、沙耶香の〝お姉さん役〟であるにも関わらず、何一つ気付かなかったことに恥じると共に、この新型Ｓ装備は凄い物だと感心していた。

リアルタイムで戦況とドローン等の偵察によって得た今から向かう作戦区域の荒魂の数と構成、地形を表示し続けてくれるのは、作戦を立てる際にはこれらの情報は必要不可欠であり、この機能は一見地味だが助かるのである。

そして、舞衣は新型Ｓ装備を見て、アップデートされる内容を思い

出していた。このS装備は各センサーから収集した情報を元に機能を改善したり、荒魂の行動データが蓄積されている物、例えば美濃関学院にあるシュミレーターの様な物と連動することができれば敵の行動予測をし、疑似的にではあるが龍眼のように先手が取れることが可能となるよう順次アップデートされると聞いていたと同時に、舞衣は複雑であった。

理由は、そのアップデート内容に熱探知、暗視なども盛り込まれることとなっていた。つまり明眼の様な機能をも追加されることが明記されていたのだ。

（……何だか、機械で全て賄われていくみたい……。）

そう思うだけで、数少ない明眼を使える舞衣としては何とも言えない気持ちとなっていた。

（……ううん、今はこの掃討作戦を成功させなきゃっ!!）

しかし、舞衣はそんな感傷的な気持ちを払い除けるかのように、今はこの掃討作戦を遂行することにだけに集中し、気持ちを切り替えようとしていた……。

箱根山戦４

箱根山の荒魂掃討作戦前――――。

とある研究所、或いは何処かの製造所にて、珠鋼を加工し、太く大きくトゲが付いた棒状の物に製造、そのうえ御刀と同等の能力を持たせたかったらしいが、今現在の技術を以ってしても不可能だったらしく、残念そうにしていた。

最初は、珠鋼で出来た棒だけの要求だったが、大荒魂の片割れに対する戦力確保、旧折神派の不穏な動き、関東を中心に頻発する荒魂事件、それに反するかのように刀使の離職率の増加といった多くの不安要素があった。そのため、戦力の増強と確保が第一とされ、御刀と同等の力を持つトゲの付いた太い棒の製作へと要求水準が上がってしまい、造ろうとしたが悉く失敗。そのうえ、特別希少金属利用研究所が珠鋼を媒介として、隠世から無尽蔵のエネルギーを取り出すことと、ノロと珠鋼を接近させノロの中にある〝穢れ〟を減少させるという研究を優先することを決定。

そうしたこともあり、希少金属の珠鋼をたかが棒を制作するのに使用するよりも特別希少金属利用研究所が研究する物の方が何倍も価値があるため、珠鋼製の棒を製造するために使用する珠鋼と研究資金、人員は全て特別希少金属利用研究所の研究に使われることとなった。

こうして、珠鋼製の棒を製作し、その関連技術で新たに御刀に近い物を製造と同時に不純物として取り除かれるノロを優の中に居る荒魂タギツヒメの強化のために使い、戦力を増強する計画はボツとなったのである。

……そのことに、朱音がホッと胸を撫で下ろしていたと同時に、

あんだけ造れと言っときながら、もしかしたら出来るのかも知れないと不安だったけど、結局は失敗してる。……ざまぁみろ。

といったような近いことを小声で口走っていたとか何とか証言する者が後年になって居たが、真偽の程は定かではない。

そんなことがあって、官房長官室にて甲斐陸将補と中谷防衛大臣の二人とこの事について協議していた。

「……と、まあこんな訳がありまして、今現在の技術を以ってしても、御刀と同等、或いはそれに準ずる物は製作不可能、或いは不要であると判断致します。」

「……ふむ。朱音の言っている通りとなった訳か……。」

御刀の製造方法の復興を目指す研究施設、並びにそれらを支援する関連企業から、御刀と同等の力を持つ物は現段階を以ってしても製作不可能ということを聞いた中谷防衛大臣とその隣に居る甲斐陸将補は官房長官に説明していた。

「ですので、無理に御刀やそれに準ずる物を製造しようとすればノロの総量が増すだけのこととなるかも知れません。となれば、我が国が得られる物は何も無いこととなり、刀使の負担は増加するにつれ、離職率も更に増えることとなると確信しております。」

「……分かった、総理と関係閣僚には私が伝えておく。甲斐陸相補、君の計画に添うようにしよう。」

その計画とは、今も不況が続いており、経済的な理由から社の数を減らしたかったため、討伐された荒魂の一部分及び御刀を新たに制作する研究は凍結。荒魂討伐でノロを得た場合は優に投与して市ヶ谷の姫に対抗する戦力として確保するというものであった。

「今はそれが最善かと。」

「関東を中心に荒魂は増加している中で刀使の離職率の増加といった現今の情勢下を思えば、頭が痛いことだな。……彼の少年には我が国の国益のための礎となって貰おう。」

「では、そのことを朱音局長代理に伝えておきます。これで、彼女は私達のことを少しは信用することでしょう。」

「……頼む。」

御刀を新たに製造する関連技術は国益となることと、荒魂を集約させることにより経済的な理由から社の数を減らすことができ、優に入

れてノロの総量を結果的に減らすことができれば、荒魂の出現をより限定的なものにすることとなり、政権の支持率は上昇するということで決定されることとなった。

（……これで、彼の少年の処遇は少しばかり優遇されたこととなり、朱音のこちらに対する心証は良くなるだろう。）

そして、甲斐は優を利用してこちらに対する朱音の心証を良くし、こちらの要求を少しばかりか呑んでもらえるようにするということを腹の中で考えていた。

そんなことがあって、太く長いトゲ付きの棒ではなく、タギツヒメが持っている鬼丸国綱は柄の部分を長大にし、長巻のように改造した物を使用することとなる。

そのため、優が持っている武器は、

持ち易く扱い易いよう柄の部分のみ長くし、長巻に改造された鬼丸国綱。

メインアームとして使用するＨＫ４１６Ｃのカスタムモデル。

そのサブウェポンとして採用されたＰ９３８。

対刀使用の数本の矢。

結芽の御刀、ニッカリ青江。

離職した刀使が持っていた短刀の御刀の鍔を取り、サバイバルナイフのように改造した短刀の御刀。

それらが優が持つ武器であった――――。

そして、時は戻り、箱根山の仮野営地内の基幹連隊指揮統制システム搭載の中型トラック内――――。

「……此花指揮官。突然申し訳ありませんが、お願いがあります!!」

唐突に、綾小路からの出向組で箱根山の荒魂掃討作戦に第四小隊所属で参加している内里　歩は、寿々花にあることを進言しようとしていた。

「……貴女は、確か綾小路からのでしたわね。何か？」

歩の突然の申し出に、寿々花は何か用なのかと言いたげに尋ねていた。

「中等部一年内里　歩ですっ！……私を第三小隊の方へ向かわせて戴きたいと思い、此花指揮官に申し出ました!!」

「……。」

寿々花は歩の第三小隊に加えて欲しいという申し出をどう受け、答えるかを考えていた。

内里　歩。

寿々花と同じ綾小路武芸学舎出身で、同じ鞍馬流の遣い手であり、表向きは先の東京湾の荒魂討伐にて活躍し、箱根山の荒魂討伐作戦に参加。

だが、実際は二十年前の大荒魂に取り憑かれていた紫の指示の下、ノロのアンプルを研究し、二十年前の大荒魂討伐の際には特務隊副隊長として活躍したこともあって、今も五箇伝内に置いても強い発言力を有する相楽　結月が衛藤　優の情報を得ることによって発言力が更に増してしまうことを危惧した刀剣類管理局と政府の上層部の意向により、特別任務部隊に長期出向中という経歴をざっと頭の中で思い出していた寿々花は、第三小隊に配置換えすべきかどうか考えていた。

（中等部一年で実戦経験は無し、そのうえ私と同じ出身校と流派、本来なら、怪我をして引退されるのを避けるため、実戦を積ましてから送

るのが妥当でしょう。……とはいえ、私としては、このように自主的に仲間の危機に対して、やる気を出している後輩を無下に断り、士気が下がるのは避けたいところ。それに、この作戦で活躍したことにして、こちらの手元に置いておきたいのも事実ですし。）

寿々花は同じ鞍馬流で出身校であるせいか活躍の場を与えたいことと、歩の活躍によって中等部全体の士気を上げたいという気持ちもあり、結月に優の情報を得ることなく、こちらの手元に置いておきたいことも事実であった。

しかし、歩は実戦経験は多くないため、怪我をして引退になることは避けたいことでもあった。

（まあ、どうあれ私の一存で決めることはできませんわね……。）

考えに考え抜いた結果、寿々花は前線の指揮を担当する真希の判断を仰ってから決めることにした。

その一方、歩は――――、

（衛藤さんの助けにならないと……！）

寿々花が自身のことで悩んでいるということに気付かないまま、別のことを考えていた。

大した実力は無いことは歩自身一番解っていた。

（でも、私、衛藤さんの弟さん、……優ちゃんに酷いことしたから衛藤さんに悪いことしたから今度は……ううん、役に立たなきゃダメだよねっ!!）

だが、歩は化け物の様な目で優を見てしまったことを強く恥じ、可奈美と優に対して悪いことをしたと思い、ちゃんと謝りたい、今度は化け物のように扱いたくないといったことばかり考えていた。

だからこそ、可奈美に役に立てる処を見せて、少しでも頼りになるという処を見せようとしていた。

それ故に、可奈美に少しでも近付くために、第三小隊に配置を換えてもらおうとしていた――――。

「……内里　歩さん。」

「……あっ、はいっ!!」

寿々花に名前を呼ばれ、反射的に応える歩。

「……真希さんから許可は得ました。岩倉　早苗さんの指示の下、無理は為さらないように。」
「……はいっ!!」
　戦況の流れは此方が圧倒的に有利であること、第三小隊に配置を換え、優のことを知っている可能性がある歩が後方支援を任務とする第四小隊と前線部隊の援護を任務とする第三小隊で文武共に活躍したと報告し、前に寿々花がやったように綾小路から連れて行き、鎌府所属に換えて傍に置こうと判断した真希は第三小隊へと配置を換えることにした。
　こうして、歩は第三小隊へと向かうこととなったのであった。

　一方、再編成を終えた第二小隊は指定された荒魂が居るブロックNを制圧後、ブロックOへと向かおうとしていた――――。

「えっ!?」
　しかし、ブロックO周辺の数と規模の情報を司令部から貰おうとしたその時、
「ちょっ、ちょっと!?」
　第二小隊に所属するS装備刀使三名が舞衣の指示も無く、勝手にブロックSへと勝手に向かって行った。
「待ってっ!其処はまだ、敵がどれくらいなのか!!」
「大丈夫ですよっ!!S装備があればどうってことありません!!」
　そのうえ、舞衣の制止も聞かずに、ブロックS周辺の荒魂の正確な規模と数も解からぬままS装備の性能を信じ、突っ込んでいった。
　先ずはUAVといった無人機が荒魂の数と規模、制圧する地形情報を入手、その情報を元に作戦を立て、殲滅することになっていたが、S

装備刀使三名はそれを待たずに敵勢力下へと勝手に突入してしまう。
そのうえ、
「……えっ？」
彼女達は運悪く、荒魂の大群が居る処へと向かってしまった。そのため――――、
「うっ、わあぁぁぁぁ!!」
驚いたＳ装備刀使三名は大声を上げながら第二小隊が居る方へ撤退した。そうなると、彼女等を見つけた荒魂もそうだが、更に運が悪いことに周辺の荒魂が彼女等の大声を聞いてしまったことにより追いかけてきてしまったため、数が劣る第二小隊は想定以上に居る大勢の荒魂と対峙することになる。
「皆っ！ブロックＪへっ!!」
舞衣は完全に数的不利のうえ、横と正面という三方向からの攻撃を受けるという不利な状況に居ることに素早く気付いたため、後退を決断。
大群の展開に不利となる廃屋等の建築物や遊具等の構造物があり、防御地点としても適しているブロックＪへ向かい、救援を待つことにした――――。

そして、ブロックＧに居た第一小隊の真希達は――――。
「何だと？」
『ええ、ですので、真希さんは直ちにブロックＪに居る第二小隊の救援に向かって下さい。』
第二小隊が多勢に無勢ということを後方の寿々花から聞くこととなったため、真希は第二小隊の救援に向かうことを決断した。
「……分かった。僕らはブロックＬの襲撃を中止し、ブロックＪへ向かう。」
『支援は？』

「攻撃ヘリの航空支援、それと第三小隊もブロックＪへ向かうよう伝えておいてくれ。」
『分かりましたわ。』
廃屋等が点在しているブロックＪに居るということは、其処で防御体制に入っているのだろう。となれば、今第二小隊は包囲されているのか、それとも想定以上の大多数に攻め立てられて、危機に瀕しているかどちらかなのだろうと真希は推測していた。
となれば、直ぐに救援に向かい、第二小隊と第一小隊が荒魂の群れを挟撃し、包囲網を解くようにし可能であれば敵を殲滅するか、若しくは想定以上の大多数によって第二小隊が攻め立てられていれば航空ヘリによる航空支援と第三小隊の造園を受けると同時に撤退すべきかも知れないと思い、航空支援の用意と第三小隊を第二小隊の救援に向かうよう指示を飛ばしていた。
しかし、それが仇となるのはまだ真希も知らない。
そして、真希率いる第一小隊はブロックＪに到達し、第二小隊の姿は荒魂の群れで見えなかったが、戦闘状況からして大型の荒魂が居ないことが幸をそうしたのか、廃屋らしき建物に籠ってどうにか防いでいるようであった。
「かなり囲まれているな。君は中央へ、他の皆は左右に展開!!」
「……。」
真希はその状況を見るやいなや、第二小隊は荒魂の群れに包囲されている状態であると判断し、第一小隊を荒魂の包囲の外から攻撃、優を中央に配置し、荒魂の攻撃を優に集中させると同時に他の刀使達が荒魂の側面を攻撃、包囲網を切り崩してから、第二小隊の救援に向かおうとした。
尚、優のことを君と呼んだのは身元がバレないようにしているだけのことである。それを解っているのかは定かでは無いが、優は頷いて返事をしてくれていた。
「真希隊長、この子単独だけでは危険です!」

しかし、真希が率いる第一小隊所属の刀使から単独のみの中央への攻撃は多数も居る荒魂の群れに突っ込ませるのは幾らなんでも危険であると諫めていた。

理由は親衛隊の制服を着用している優は公には世界初の男性刀使であるとされている。しかし、薫よりも低身長であることを考慮すれば、自分達よりも年下、それ処か小学生低学年の男児ではなかろうかと思われていても不思議ではなく、そんな子供を戦線に加えることに異議を唱えていた。

「大丈夫だ。〝この子〟は僕より、……親衛隊に入隊していたら一番と言えるほど強い。」

「!……はい!」

真希が優のことを自分よりも強いと答えて、皆を納得させていた。

とはいえ、大会二連覇を成し遂げ、親衛隊に抜擢された真希が自分よりも強いといっても、殆どの者が半信半疑であったが……。

「……いくぞぉっ!!」

真希は攻撃の合図を大声で発すると共に、荒魂の群れに突っ込むと、荒魂の気配が強い優を中央に突っ込ませることによって、荒魂の攻撃を中央に集中させると同時に注意を左右に展開した刀使達から逸らせながら、荒魂を討伐するよう指示していた。

そのため、一番槍は優だった。

御刀ニッカリ青江を携え、真正面から荒魂の群れへと突っ込んで行った。

御刀ニッカリ青江は熊を模した鍔と、鞘はイチゴ大福猫のシールが貼られているという何とも少女趣味満載な御刀であり、それを使い荒魂を次々と討伐していく。

その姿を見た他の刀使達は彼の少年は凄まじい実力者であると再認識すると共に、男の刀使が使うには特徴的な御刀を使っているところ、突出した強さ、天然理心流を遣っているところから、ある刀使はこう思ったのであった。

(……あの子って、もしかして燕さん?ニッカリ青江だよね?アレ……。)

親衛隊の服を着ている少年の正体は現在行方不明であり、〝荒魂の力に頼った刀使〟として有名となった燕　結芽ではないのかと疑われていた。

（……でも、背が低いし、……違うのかな？）

そもそも、顔と姿が見えないのだから性別は男かどうか分からないうえ、特徴的な御刀ニッカリ青江を携えているのだから、そう思われてしまうものであろう。

しかし、一貫して無口であることから結芽とは真逆の性格であること、どうみても結芽より背が低いことから、結芽ではないだろうと結論付けられた。

だが、親衛隊の服を着た少年の活躍は目覚ましく、瞬く間に荒魂を討伐していった。

これには、他の刀使達も負けていられないと同時に、子供に情けない姿は見せられないと奮起していた。そして、真希は第二小隊と連絡しようとするも、通信状況が悪いのか、上手く繋がる気配が無かった。

「どうだ！繋がったか!!」

真希の声に応えるかのように、ＳＴＴ隊員が無線通信機を使って、第二小隊の者に何度か連絡を取ろうとするが、何故か上手く繋がる気配は無かった。

「……ダメです！繋がりません!!」

それを聞いた真希は、包囲され孤立されているうえ、籠城していることにより士気は下がっているであろう第二小隊とどうにか連絡を取って援軍が来たことを知らせ士気を回復させると同時に、近況を知りたかったため、どうにかして連絡をしたかった。

そのため、真希は誰もが驚くようなことした。

「分かった。少し待ってろ!!」

真希はそう宣言すると、荒魂の群れへと真正面から突っ込み、そのまま何事も無く第二小隊と合流していた。それができた理由は優が中央へ突っ込んだことにより、攻撃が集中してしまい、包囲が一か所だけ薄くなっていたところを真希が突破しただけである。だが、殆どの人間はそれに気付かず、真希の実力であると誰もが疑わず思ってい

た。
「どうした？」
　まるで、馴染みの店に来たかのように廃屋の中に入り、舞衣に尋ねる真希。
「……すいません。私がS装備の性能を過信し、深追いしてしまいこのようなこととなりました。」
　このような状況となった理由を尋ねられ、舞衣は自らの過失であると真希に伝えていた。
「違います！私が勝手にしたことが、こんなことにっ!!」
「私もです!!」
「舞衣隊長の指揮に問題はありませんでした!!」
　それを聞いた新型S装備刀使三名は、新型S装備の性能を過信し、敵中枢部に深追いしたのは自分達であり、舞衣に過失はないと真希に伝える。
「……なるほど、良く分かったがまだ巻き返せる。今から第一小隊で包囲に穴を開けるから、第二小隊はそのまま防御を維持してくれ！もう少しで、僕達以外の援軍はやって来て包囲を切り崩し、穴を開ける！そこから脱出してくれ、以上だ!!」
　真希はそれだけ伝えると、また荒魂の包囲の中へ向かい、そのまま第一小隊に帰って行った。
　それを見た第二小隊の刀使達は、
「嘘でしょ。」
　と呟いていた。
　しかし、この突飛な行動を見た誰もがこの後、真希は何事も無く第一小隊へと帰り、その指揮をしていることを疑わなかった。そして誰もがこの作戦の成功を信じていた。
　実際、その通りに真希は第一小隊に戻り、普段通りに指揮をしていた。
　仲間の危機から救いに来たことを伝えるためだけに、敵中枢を突破し救援に来たことを伝えに行き、帰りもそのまま何事も無く敵陣突破するという真希の姿を見た第一小隊と第二小隊全員の士気は上がっ

ていく。その反面荒魂達は、勢いに圧されているのか、はたまた真希のどう見ても常軌を逸した行動に恐れをなしたのか、確実に浮足立ち、そして統制が取れなくなり、一匹、また一匹と荒魂を確実に討伐し、次第に包囲に穴が開き始めていた。

そして、第三小隊の足音とヘリの音が聴こえたことにより、形勢は完全に逆転したかのように誰もが思えた。

真希は念には念を入れて、撤退支援が必要かも知れないと思いヘリの航空支援を要請したが、この状況では必要無いだろう。ならば、他のブロックに居る荒魂がこちらに来ないよう陽動をしてもらおうかと思ったが、

異変が起きることとなる。

その異変は、ＡＨ―６４Ｄの飛行が何か一瞬ふらつき、機首を下に向け、きりもみしながら墜落していったのである。

幸い、爆発炎上は無かったものの、墜落の音で荒魂はそちらに向かうだろう。そして――――、

『真希さん！ＡＨ―６４Ｄのパイロット一名、生体反応ポジティブです!!』

ＡＨ―６４Ｄのパイロット一名が幸運なことに生存していた。しかし、ＡＨ―６４Ｄは乗員２名であることから考えると、一人は確実に死亡したことになる……。

『……墜落した場所は、ブロックＭ、ブロックＭです。』

「……パイロット一名は生きているんだな？ブロックＭに向かっている荒魂は何体だ？」

『はい、生きています。ブロックＭに向かっている荒魂はおよそですがムカデ型が四体。』

「獅童さん、何かあったんですか!?」

包囲の穴を突いて、脱出していた第二小隊の隊長を務めていた舞衣がヘリの墜落音を聴き、何が起こったのか真希に尋ねていた。

そして、舞衣を見た真希はある決断をした。

「…陸自のヘリが墜落した。新型Ｓ装備を着用した者達のみ、そのヘリの搭乗員の救援に向かって、救助の隊員が来るまでムカデ型の荒魂を四体相手に持ち堪えてくれ、出来るか？」

陸自のヘリ搭乗員を救出するためには、強力な荒魂が迫って来ていることを考えれば、救助の隊員には実力のある刀使の援護が必要と判断。第二小隊に所属するＳＴＴ隊員は第一小隊へと編入され、第二小隊の新型Ｓ装備を着用した者のみで救援に向かうことを舞衣に指示していた。

「ヘリでの救助は無理なんですか!?」

「不運なことにヘリが着陸するのに難しい場所のようだ。」

不運なことに、ＡＨ―６４Ｄはヘリが着陸できない場所に墜落してしまったらしく、ヘリボン等での救助が難しいとのことらしい。しかし、墜落地点の近くにヘリが着陸できるところがあり、そこから救助の隊員を送ることはできるが、荒魂と鉢合わせする確率が高いため、刀使の援護が必要らしく、そのためにＳ装備を着用し身体能力が上がった刀使ならば救助の隊員の援護に間に合うと判断し、第二小隊のＳ装備刀使のみで墜落地点へと向かうことにしたのだ。

「分かりました。じゃあ皆、付いて来て!!」

そのため、

第一小隊はブロックＪに集まった荒魂の群れを抑え、墜落地点へと向かわせないようにする。

第二小隊はＡＨ―６４Ｄの墜落地点へと向かい、救助の隊員が来るまで持ち堪え、救助の隊員の援護をする。

第三小隊は第一小隊と共に荒魂の群れの殲滅。

箱根山の荒魂掃討作戦は第二ラウンドへと進んでいく――――。

箱根山戦５

第二小隊は、Ｓ装備の能力のお陰か、それとも目が良い可奈美が先導しているお陰か、起伏が激しく歩き辛い山の地形を迅移と八幡力を使わずとも、軽々と疾走していた。

これなら、ＡＨ―６４Ｄの墜落した地点に荒魂よりも早くに着くことだろう。

しかし、足止めはするべきかも知れない。

ふと、そのようなことを頭に掠めた舞衣はＳ装備のバイザーに表示されている敵荒魂の位置を見て、ブロックＬにりゅう弾砲で火力支援を要請し、足止めをすることにした。

「すいません、ブロックＬにりゅう弾砲で火力支援をお願いします。」

『……了解。ブロックＬに近付かないで下さい。』

舞衣から、ブロックＬに火力支援の要請を受けた臨時指揮所は直ぐ様、陸自の特科部隊に舞衣の要請を伝えた。

そうして、臨時指揮所から火力支援の要請を受けた特科部隊は９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲で支援を行うべく、スペクトラムファインダーとＳ装備のＧＰＳ反応、それと陸上自衛隊の無人機ＦＲＳから得られる観測情報を元に、味方の位置とムカデ型の荒魂の移動経路を算出し、味方に当てず、荒魂だけを砲撃しようとしていた。

数十秒後、りゅう弾砲が着弾したのか、ブロックＬ当たりの方角で轟音が鳴り響き、土煙が上がっていた。

『ブロックＬに着弾を確認。……荒魂、りゅう弾砲により進行が止まりました。』

臨時指揮所から、りゅう弾砲によって荒魂の進行が止まったことを告げられるが、一時的なものであろうことは舞衣は分かっていた。

だが、これで少しだけでも時間稼ぎにはなる。

舞衣と可奈美含むＳ装備刀使達はその内にブロックＭに到着し、墜落したＡＨ―６４Ｄを中心に方円の陣形を組み、ムカデ型の荒魂が何時来ても良いようにしていた。

「大丈夫ですか!?」
舞衣の声を聞いたＡＨ―６４Ｄのパイロットは、安堵する。
助けが来てくれたのだと……。
「……助かった。」
「自力で出れそうですか？」
「足腰が少しおかしい。……立てそうにない。」
舞衣は生存しているＡＨ―６４Ｄのパイロットは女性であった。
そして、このとき舞衣は知らなかったが、ＡＨ―６４Ｄの女性パイロットは脊椎の圧迫骨折と大腿部の粉砕骨折で動けない状態だったので、致し方なかった。
「分かりました。肩を使って下さい。」
「……済まない、助かる。」
そのため、舞衣は肩を貸してＡＨ―６４Ｄの女性パイロットを救出しようとしていた。
ＡＨ―６４Ｄの前席操縦席に座っているパイロットは恐らく、いや間違いなく死亡しているにも関わらず、舞衣はそのことに気にすることなく後席に座っていた女性パイロットの救出をしようとしていた。
その姿を見た刀使達は、危険を鑑みずＡＨ―６４Ｄの後席に座っていた女性パイロットの救出に向かったことに素直に称賛する者と、ある種の不気味さを感じる者が居た。
そんなとき――――。
『右方向から荒魂接近、会敵予想時間は約３０秒程。交戦に備えて下さい。』
後方の指揮所から、ムカデ型の荒魂が迫って来ていることを告げる通信が入る。
「……分かりました。すみませんが、ヘリの機銃かミサイルで支援をお願いします。」
舞衣は、それに合わせてヘリの部隊長にロケット弾か機関砲での支援を願い出ていた。
『了解、１０秒後に攻撃開始します。離れて下さい。』
ヘリの部隊長は荒魂に実弾は効果が無いということは知っていた

が、こちらを囮にしてムカデ型の荒魂を殲滅するか、土煙に紛れて撤退するのだろうと思い、ＡＨ―１Ｓの近接航空支援をしようと行動する。

１０秒後、ヘリの近接航空支援が始まった。

機関砲、ロケット弾といった攻撃ヘリＡＨ―１Ｓが持つ全ての武器がムカデ型の荒魂に襲い掛かる。それと同時に荒魂の周りは聴覚を失うと思えるほどの轟音、視界を遮るかのように土煙が上がり、一瞬だけ荒魂の目と耳が封じられた。

だが――――、

「間接標準で援護、お願いします。」

『了解。』

舞衣はそれを見るやいなや、ＦＦＲＳのセンサーで捉えた荒魂の位置と刀剣類管理局にあるデータベースを元に指揮所が合成画像を作成。それらの情報を新型Ｓ装備に送り、土煙の中に居るムカデ型の荒魂が見えるようにしていた。

攻撃ヘリの近接航空支援により、土煙と轟音によって目と耳を封じられた荒魂。

陸自の無人ヘリの間接標準による支援の元、敵荒魂の位置を正確に得られる新型Ｓ装備刀使。

あとは一方的であった。

さしもの、複数人の刀使が相手をしなければならないほど強力な荒魂も目と耳が封じられれば、無力だったのだ。

こうして、ムカデ型の荒魂四体は舞衣達に何ら損傷を与えることもできぬまま討伐され、何事も無く救援の部隊と合流。

そのまま、ヘリの着陸地点へと向かうべく、救援の部隊はＡＨ―６４Ｄの女性パイロットを担架で運んで行ったが、前席に座っていたパイロットには黒い袋に入れられ、運ばれていった――――。

一方、第三小隊――――。

姫和は歩に気付かれないように横目で窺っていた。
何時、何処で始末すべきか。
「……。」
そればかりを考えながら、小烏丸を掴んでいたら、ふと思い出してしまった。
『それと、病院で可奈ねーちゃんが言ってたんだ。刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟だって。それを聞いて僕は、強い刀使になれない僕は、僕を助けてくれた大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたいと思ったんだ。僕と一緒で姫和おねーちゃんもそんなお母さんが大好きだから、刀使になったんだと思ったんだ。だから、僕は姫和おねーちゃんと可奈ねーちゃんのために頑張りたいんだ。』
果たして、歩を斬ったとして優が望んでいた物は得られるだろうか？
姫和はそう思っただけで、斬る気力を失ってしまう。
（……何をやっているんだ。……私は……。）
私は刀使、あの子の望むような存在でなければならない。だから、人殺しは良くない。
私は刀使、あの子が求めていた、理想でなければならない。だから、人殺しは良くない。
私は刀使、あの子は弱いから、見守らなければならない。だから、人殺しは良くない。
私は刀使、あの子を救う、その代償に母の想いを踏み躙った。だから、人殺しは良くない。
私は刀使、あの子は期待していた、その期待に応えようとした。だから、人殺しは良くない。
私は刀使、あの子を笑顔にし、本当の幸せを得てほしい。だから、人殺しは良くない。
私は刀使、あの子を人間にして、幸せにしたい。だから、人殺しは良くない。

（……そんなことをして、優が喜ぶか!?）

それを念仏のように何度も念じた姫和は、歩を殺す算段を辞めようとしていた。

一方、第一小隊はブロックJにて多数の荒魂を抑えるため残っていたが、優が先頭に立って囮となってくれているため、他の刀使達は易々と荒魂の討伐ができた。

その中でも、優は生身の方の右腕で荒魂の角を掴んでもう一方の荒魂に投げ、〝殺さないよう〟に斬る。

もしくは、不意に近づいて来た荒魂は右腕で殴って吹き飛ばし、倒れたところを手足のみを斬って〝殺さないよう〟にしていた。

或いは、御刀で弱らせた荒魂の口の中に右腕を入れ、ノロを奪い、動くことすらままならないぐらい力を奪った荒魂を他の刀使の前へと投げ捨てる。

そんなふうに、残り少ない生身の部分を酷使したため、掌は生傷だらけで、腕を噛まれ、拳はボロボロであった。

だが、ノロによって強化された身体を持つためか、そんな腕になっても右腕は動き続け、普段通りに動いていた。

だが、本来なら右腕を負傷されることも、不殺をする必要はなかった。

何故なら、荒魂達は優のことを〝同類〟と思っており、その〝同類〟に殺される理由が分からず、戸惑っていたのである。

その隙を突いて殲滅、或いは強化された龍眼を使えば傷一つ付くこと無く荒魂を殲滅することは可能な筈である。なのに、それを行う理由は、優がそれを望んでいたからである。

（……これで、少しは強い荒魂に近付くかな?……それと、可奈ねーちゃん喜んでくれるかな?）

右腕を酷使していた理由。
それは、ただ単純に生身の右腕もノロに侵食させ、右腕も荒魂の腕に変えるため。
（ヒメちゃん、ニキータちゃん、ミカさん、ジョニーくん、結芽おねーちゃん、皆と一緒になれるかな？）
人が忌避する荒魂に近付く理由。
それは、ただ単純に優の中に居る〝友人達〟と同じ存在になれるのが嬉しいから。
（……それに、〝強い刀使〟と立ち会うのが嬉しいって言っていたから、僕が弱らせた奴を他の人が斬っちゃえば、その人が〝強い刀使〟になる可能性があるから、なら殺さないようにすれば良いよね。……殺さないように、……殺さないように。）
荒魂を弱らせている理由。
可奈美が〝強い刀使〟と立ち会わせたら喜ぶと思ったから。
そのうえ、結芽もそれを望んでいたことを知ってしまったから、刀使という者は〝強い刀使〟と立ち会うことが嬉しいのだろうと結論付けていた。
（……こうやると、近付いてくるんだ。へぇ～。）
荒魂を鬼切国綱で殺さぬよう地面に突き刺して、身動きが取れないようにし、他の荒魂を誘き寄せる理由。
それは、〝知る〟という愉しみができるから。
（……ノロを奪うの……何か気持ちいい。）
荒魂からノロを奪う理由。それと同時に荒魂を弱らせるように斬る理由。
それは、ノロを吸い取ると満たされる気持ちになるから。
（……御刀で斬るの、何か楽しい。）
それは、何とも言えない渇きを満たすことができるから。
（……どれだけ斬ると、殺しちゃうことになるんだろう。）
それは、敵を蹂躙することに何とも言えない充足感を得られ、満たされるから。
（……御刀ってこういう扱い方ができるんだ。）

それは、ただ単純に、刀使になれない者が一方的な力で、余力を残したまま荒魂を殺し、ただの子供ではないと証明できることに何とも言えない甘美な快楽と充足感を得ていた――――。

「ねえ、君大丈夫!?」

誰かに右腕を掴まれてしまった。その右腕を掴んだのは――――、歩だった。

「取り敢えず、退がろう!……ひゃあ!!」

歩は正体は知らないが親衛隊の服を着ている者、優が大怪我をしていることに見かねて後ろに下がり、傷を治して貰おうとしていたが、歩は何かに躓いて転んでしまう。

そのため――――、

「シャアアアアアッ!!」

それを見た優が弱らせた荒魂は決死の思いで歩を襲い、活路を見いだそうとする。

「ひゃあっ!!」

殺られる!!……そう覚悟した歩だったが、そのときは訪れることも無かったため、薄っすらと目を開ける。

すると、其処には優が荒魂を討伐している所を見てしまう。

だが、親衛隊の服を着ている者の正体を知らなかったため、他人行儀に答えてしまう。

「……あっ、ごめんなさい。……助かりました。」

そう言われた優は『口調から、人物を特定されることを防止するため、他人と喋る』ことを禁じられていたにも関わらず、歩を相手に喋りかけてしまう。

「……ううん、大丈夫?」

そして、優は続けて喋る。声は機械で変えられているとはいえ、子供であることは誰もが分かるぐらいの口調であった。

「……あの、ゴメンなさい。可奈ねーちゃんを宜しくね。」

(あっ!!)

可奈ねーちゃんという言葉から、この親衛隊の制服を着ている者の正体が誰なのか簡単に想像ができた。

（でも、素顔を隠しているということは……。）

正体を知られるのは不味いことなのだろう。ならば、私はどうするべきかを考える。そして答えは、

「……任せて、でも先ずは治療を受けよう。」

「えっ？」

歩は優を後方へ連れて行き、治療を受けさせようとした。だが、それを拒むかの様な行動を見せる優。

「コラッ！私の方がおねえちゃんなんだから、言うこと聞きなさいっ!!」

しかし、歩にそう言われた優は素直に言うことを聞いていた。理由は優自身も分からない。

多分、優は、歩は可奈美に必要な人であるような気がしてならなかったから、怒ることも否定することもできず、ただ、何となく聞かなければならないような気がして、言うことを聞いていた。

だから、後方に退がることにした。

……それに、もう殆ど討伐している状況から見れば、退がっても問題無いだろう。優はそう思うと大人しくすごすごと後方に退がることとした。

そして、その光景を遠巻きに見ていたのが、

姫和だった。

（……どうして。）

どうして、あんなに素直に従うんだろう？

どうして、あんなに良い顔するのだろう？

どうして、あんなに朗らかな笑顔なんだろう？

どうして、あんなに手を繋いでるんだろう？

どうして、あんなに隣に近付いているんだろう？

どうして、あんなに仲良くしてるんだろう？

どうして、隣は私じゃないのだろう？

姫和は恨めしそうに、悔しそうに、その光景を眺めることしかできなかった。

そして、この箱根山荒魂掃討作戦は、
損失　ＡＨ―６４Ｄ一機、
死者一名、負傷者二名、軽傷者六名で終わる。

箱根山による荒魂掃討作戦後。

真希は、舞衣、それと先ほどの独断で荒魂の居る地区に攻撃を開始し味方部隊を窮地に追いやってしまった新型Ｓ装備刀使三名、寿々花といった六名が一室に集まっていた。

この部屋に来た三名は先程の箱根山における荒魂討伐作戦で起こした行動によって、第二小隊を危機的状況へと招いたことに関する叱責だろうと思い、三人共、覚悟していた……。

しかし、先ず真希は叱責するどころか、柔らかい言葉で勤務態度、成績、以前の功績等といったことをとにかく褒めていた。それに内心驚く三人。

「――――又、以前にも君達は荒魂討伐任務を幾度も成功させていることは僕の耳にも聞き及んでいる。そして、今回においても敵地に残ってしまったヘリパイロットの窮地を救うべく危険から救出したことは感謝の意の言葉を贈られている。……以前の功績と今回のこの件においても、とても良い働きをしてくれた。僕の方からも感謝す

る。」

だが、真希がそれを行った理由は、先ずは神君家康公が嘗て『松のさかへ』にて部下の叱り方について記されていることを明記させて戴く。

『召し使う者が何か仕落ちし不調法ありと報告された時、その者によく心得させ、今後は改めさせるようにすること、これが主人にとって特に重要な事である。

私（徳川家康）は若年よりこれを専ら心がけてきた。そのため今では異見を加えた者で、誤りを改めないという者はなくなった。

ここで気をつけるべきは、とにかく何であっても、人が身動きできないような状況にしてはいけないと言うことだ。先ず誤りをした者に、その事ばかり言って叱りつける、そんな事をするからその家臣は心得違いをし、主人を恨むようになってしまい、それまでよく勤めていた者であっても、不足の心が出来て勤めなくなり、主人を疎むようになる。

これは全く、主人の異見の仕方が悪いため、人を捨てるというものである。』

ということを実践するため、先ず失態したことについて何度も叱りつけることをせず、過去の功績等を言って、その三人の心を落ち着かせると同時に悦ばせるようにしていた。無論、この方法は『松のさかへ』にも、

『人に対しての異見の仕方というのは、先ずその者を呼び出し、側に一人、取り成す者をあらかじめ置き、それ以外の者を下がらせ、いつもより言葉を和らげ、

「以前にもその方は、この時は何々の手柄を致し、あの時は良き勤めをした。」などと、その者の心を悦ばせ、その上で、

「かような不調法は、その方には似合わぬことだ。」

そう能く能く申し聞かせ、「くれぐれも今後は相改め、前々の通りに

心がけてほしい。」と伝える。そうすれば大体は、その理屈に従い、身の過ちを取り分け相改めるものなのだ。』

と（それと、王書というイスラームの訓示書にも書かれていること、立花道雪も似たような逸話を残しており、そのうえ〝他人が叱られているのを見ると生産性がだいたい3割落ちる〟という研究、客の前で部下に説教垂れるのは客からみたら購買意欲も食欲も下がるので辞めて欲しいという意見もある。）記載されている。

そのうえ、真希は気付いていなかったが、この三名の刀使達の荒魂掃討作戦以前の功績を褒め称えたことから〝この人は自分達のことを良く見ていてくれている信頼できる人物〟と思わせることができ、更に信頼されるようになっていた。

だが、真希にも不手際があると言えばある。

それは、真希と寿々花、それと舞衣を同席させ、三名の刀使達に要らぬ心理的な圧力を加えたことである。もし、三名の刀使達の精神が脆い場合、このことで心理的な圧迫感と緊張感を与えることとなり、安心させることができなくなるのだ。従って、真希の話しに要らぬ解釈をしたり、緊張か呆然とすることによって聞くこともままならず、心得違いをする可能性が大きいからだ。

しかし、それには真希なりの理由があったのであるが、幸運にも三名の刀使達はそれを気にするといった表情と仕草をしていない所から、問題は無いようであった。

「……しかし、だからこそそんな君達には、S装備の能力を過信し過ぎた行動は相応しくない。」

そして話は戻るが、先ず褒め称えることにより、再度言うが幸運なことに叱られたことで放心することは無く、失態を隠したり、挽回しようと躍起になることもなく、信頼している真希の言葉を三名の刀使達は素直に能く聞くようにしていた。

だが、真希は最後は叱責だけで終わらせず。

「そして、これは幸運にも新型S装備の限界と性能を知ることができた君達だからこそ頼むことだが、これからも新型S装備を着用しても

らう。跡に続く刀使達のために新型S装備を学び、それらを教えてやって欲しい。……君達のことはヘリパイロットを救うべく奮起していたことを良く良く陸自と朱音様に伝えているから、そういったことは安心してもらいたい。」

と柔らかい口調で三人を諭し、尚且つ目的を与え、能く働けるようにしていた。これは、

『主人たる者は、一人でも能き人材をつくり、どんなに軽い身分の者であっても、科人が出来ないよう心がけ、身を慎むことが肝要だ。

何であっても、行き届かない事はある。まして並々の者は総じて抜けがちなものだ。

そういった行き届かない所は、主人が行き届くように心がけ、不調法にならないように致して召し使う事、

これが主人の心がけの第一である。

召し使っている者へ、科を申し付ける時、その多くは実際にはその主人自身の科なのだ。』

といった理由もあることと、ただ叱るだけ叱り過ちを正す以外の余計な物が発生するよりも良いこと、刀使と言えど思春期の少女であることに変わりないこと、優自身が荒魂の強い影響により暴走することも考慮すれば、このような言い方となるしかなかった。

「さて、これでこの件は終わりだ。……柳瀬、寿々花、今後はそれで頼む。」

「はい。」「解りました。」

そして、舞衣と寿々花を同席させた理由は二つあるが、その一つは三人の刀使達の弁護としての役割と三人の刀使達の今後について納得させるためでもあった。

「では以上だ、宜しく頼む。」

「「はいっ!!」」

真希は三人の刀使達にそう伝えると、退室させていた。三人共、真希に頼まれたことを誠実に且つ、忠実に守ろうと心に決めていた。

その後、真希は三人の刀使達が退室し、足音が遠ざかっていくのを感じたあと、

（……全く、よくもそんな事が言えたものだ。……獅童　真希。）

真希は、自分は幼い子供を利用して勝っているだけの存在なのに、偉そうなことをほざいている自分自身に対して、心の奥底で毒づいていた。

「柳瀬、今回は助かった。色々と無理難題を押し付けてしまったようだ……。」

「いえ、お気になさらないで下さい。助かる命が助かってよかったと思います。」

だが、真希は直ぐに心を入れ替え、ヘリパイロットを救出した舞衣に感謝の意を述べていた。

「……ありがとう。今日はゆっくり休んでくれ。」

「はい。では、お言葉に甘えて。」

真希に今日は休んで欲しいと言われた舞衣はその言葉を受け取って、自室に戻って行った。それを確認した後、真希は寿々花に、

「寿々花、柳瀬はヘリパイロットに肩を貸して救出したと聞いているが、間違いないか？」

「……ええ、ヘリパイロットに確認を取りましたので。」

「……そうか。」

寿々花と話した真希は顎に手をやりながら、思案していた。

それは、失態をした三人の刀使達が失態の事で追い詰めることが無いように功績を与えるためとはいえ、舞衣達にヘリパイロットの救出に向かわせたが、死体が近くにあり、そのうえ苦しんでいるヘリパイロットの姿を間近で見てしまったことにより、舞衣達の精神にダメージを負う可能性を考慮せず、舞衣達にＡＨ―６４Ｄの墜落地点へと行かせたのは間違いだったかも知れないと真希は考えていた。

そのうえ、沙耶香が突然取り乱したことも気になっていた。

「……寿々花、第二小隊に所属していた者達全員に戦闘による精神的苦痛が無かったかを確認するため、カウンセリングをするようにしてくれ。僕は朱音様にこの作戦の経緯を報告してくる。」

「分かりました。」

それを懸念した真希は朱音に今作戦の経緯と成果を報告するため、第二小隊のカウンセリングを受けさせるよう寿々花に頼んでいた――。

箱根山戦6

刀剣類管理局局長執務室にて、真希は朱音に箱根山における荒魂掃討作戦の経緯と結果、作戦に参加した隊員について報告していた。
「今回の荒魂掃討作戦にて、衛藤の剣の実力は凄まじい勢いで上達しております。又、剣術に関して造詣が深いところから、剣術の指導役が適任かと思われます。その下に内里　歩を就けるのが最良であると私は判断致します。」
そして、可奈美を特別任務部隊の隊員に剣術を指南する役に就け、歩をその下に付かせることを朱音に進言。可奈美の下に歩を付けたのは、歩が可奈美のことを憧れていることを伝え聞いているからであり、憧憬の念を抱いている相手の指導であれば身に付き易いだろうという判断である。
「そして、今回の荒魂掃討作戦にて……内里　歩は活躍、……もとい此方に引き留めておきたいので、鎌府に籍を替え、その活躍を事実にするため、衛藤の下に付かせて内里の実力を飛躍的に向上させようと思います。」
真希は、綾小路武芸学舎学長の結月に優の情報を掴ませないためには歩を此方側に引き留めつつ、その活躍が嘘偽りではないことにするため可奈美の指導の下、歩の実力を向上させることを目論んでいた。
「岩倉、柳瀬の両名は明眼を駆使した状況判断能力に優れた指揮官として活躍できると思います。特に、柳瀬は戦闘能力にも秀でていて、人望も高く、僕よりも新型S装備を使いこなしていました。もし、僕が刀使としての力を失うか、御刀を持てなくなったら、柳瀬が僕の後釜に良いかも知れません。」
真希は、自身が刀使としての力を失う、もしくは御刀を持てなくなったときは舞衣を自身の後継者にして欲しいことを朱音に伝えていた。
「……少し、気が早くありませんか?まだ、力を失うということではありませんでしょう?」

「ええ、ですが僕ももう16です。遅いことではありませんし、後進が活躍できる場へと整頓したいのです。いつまでも現役などとふざけたことは言えませんしね。」

朱音はまだ悲観的になることでは無いのではと真希に告げるが、真希は御刀が力を発揮できるのが若年の傾向が強いという理由で後進達が活躍できるようにしたいと自らの考えを言っていた。

「それと、後ほど寿々花から報告があるのですが、柳瀬と糸見両隊……いえ、第二小隊全員にメンタルケアを目的としたカウンセリングをしてもらいたいのですが。」

「……それはどうして？」

「柳瀬は先程の掃討作戦にて、攻撃ヘリのパイロットを救出したのですが、その際に近くにヘリパイロットの死体が有ったにも関わらず、それを気にもせず救出したそうです。……内心、そのストレスを抱え込んでいるか、それとも少々ワーカーホリック気味かも知れません。そのストレスが何処かで爆発するかも知れませんし、もしワーカーホリック気味で、その症状が進み過ぎると部隊内で不和を引き起こしてしまうかも知れません。」

第二小隊全員にメンタルケアをさせる理由の一つは、舞衣が攻撃ヘリのパイロットを救出した際、近くにヘリパイロットの死体が有ったことで、内心ストレスを抱え込んでいるか、ワーカーホリック気味かも知れないため、そのストレスを緩和すべきだというのが理由であり。

「糸見も先程の掃討作戦中に原因は分かりませんがパニックを起こしたらしく、何らかストレスが爆発したのかも知れません。糸見隊員は鎌府女学院の初等部から第一線で活躍するベテランです。今、この時期に貴重な戦力を失うのは大きな痛手となりますし、今後のことを考えれば必要だと判断しています。」

第二小隊全員にメンタルケアをさせる理由の一つは、真希は刀剣類管理局と刀使の風当たりが強いため刀使の離職率が急増している昨今の状況が気がかりであったこともそうだが、沙耶香が突然パニックとなったことで、もしも、このパニックが刀使全体の心理に大きく関

わることであるなら、早期に発見し、緩和、対策を講じる必要があったためであり。
「ですが、糸見と柳瀬隊員のみでなく、第二小隊全員が孤立し包囲されたことを考えると、その精神的影響が無いかどうかも確認すべきだと進言致します。」
　第二小隊全員にメンタルケアをさせる理由の一つは、孤立し、窮地に陥り包囲された際に生じたストレスを緩和させることだった。
「それとですが、陸自等に送る箱根山における荒魂掃討作戦中に使用された新型Ｓ装備に関する報告等は柳瀬が中心となって作成中でありますので、今しばらくはお待ちください。」
「……分かりました。」
　真希は朱音に新型Ｓ装備の使用に関する報告書は舞衣達にしか書けないので、そのことを報告していた。そして、
「それと今回、第二小隊が危機に陥り、状況によっては撤退もあり得たため、航空ヘリの支援を要請しました。尚、墜落理由は不明ですが、結果は貴重な兵員であるＡＨ―６４Ｄのパイロットを一名死なせ、もう一名のパイロットと他数名も負傷させてしまいました。朱音様、申し訳ありません。」
　今回の損害について真希は無念そうな表情をして、朱音に報告していた。
　陸自のヘリのパイロットを一名死亡、もう一名は負傷。そのうえ、ＳＴＴ隊員と刀使達に重軽傷を負わせてしまったことに朱音と支援者に迷惑を掛けることになったことを詫びていた。
「……いいえ、真希さん。今回のＡＨ―６４Ｄ……で間違いないですね。そのヘリの墜落理由は陸自の整備が上手くいかなかったことが原因のようです。」
「……と、言いますと？」
　しかし、意外なことを告げられた真希はどういうことか朱音に尋ねていた。
「今回の件はヘリの重要な部分に使う金属製ボルトが破断したことが原因だそうです。そして、その破断理由は……メイン・ローター―・ヘッ

ド、の保管中に腐食防止剤が劣化してしまい、構成品同士が固着した結果、…アウトボード・ボルト、に摩擦が発生し破断したのが理由だそうです。」

朱音は陸自から提供された事故報告書を見ながら、聞き慣れない専門用語に戸惑いつつも真希に説明していた。

「……つまり。」

「ええ、陸自側が有効な再発防止策として報告しているのは、点検要領の見直し、保管要領の見直しと記載されています。」

「……そう、ですか。」

真希は何か納得行かないかのような表情をしながら、応えていた。

だが、妙ではあった。

荒魂の攻撃をＡＨ―６４Ｄが受けて墜落したとは思えず、何が原因で墜落したのかは分からなかった。

だが、自分が責任を取ることで第二小隊の面々に責任が及ばないように先程は謝罪の言葉を述べていたが、無意味に終わったようであった。

「……ですので、今回の件について陸自側は真希さん達の指揮に問題は無かったとするようです。」

「……はあ。」

あまり調達数が少ない攻撃ヘリの一機を損失したのだから、今回の件を持って刀剣類管理局を糾弾するものかと思っていたが、そうならなかったことに驚く真希。何か事情が有るのだろうか?と勘繰るものの、そういった下種の勘繰りは良くないと思い、その考えを直ぐに破棄した。

「分かりました。すみませんが朱音様、少し管理局から離れさせて戴きたいのですが……。」

「それは、何故ですか?」

真希の突然の申し出にどういう理由か朱音は尋ねる。

「陸自の隊員の葬儀に出席させてもらえないでしょうか?我々は陸自の支援に助けられましたので……。」

「……そうですね。それなら私も出席した方が良さそうですね。」

「ご足労お願いします。朱音様の護衛として私と三名の刀使も同席します。」

こうして、朱音が死亡した陸自の隊員の葬儀に出席することが決定され、真希、件の三名の刀使が護衛として同席することとなる。

その後、真希は散々な目に遭うのだった……。

刀剣類管理局本部――――。

姫和は優の居る病室に居た。だが、変わっているところがあった。

白い壁、白い静謐なベッドは変わらないが、姫和が病室の場所を変えるように紗南を説得し、手配するよう仕向けた窓と扉に鉄格子が増えていることを除けば、何の変哲も無い病室だった。

「色んな物が増えたね。」

「……ああ、優を付け狙う奴が増えているからな、当然の処置だろう。」

優の問いに、姫和は目を伏せながら答える。

その行動の意味は、優に牢獄のような部屋に押し込めた事に対する罪悪感なのか？

それとも、優の居る病室を牢獄のような部屋にした事について、聞かれたり、責められたりするのが怖いからか？

もしくは、優の居る病室を牢獄のような部屋にしたのが姫和であると気付かれるのが、怖かったからか？

姫和は理解できなかった。

「……それより、聴きたいんだが。」

「？」

だが、姫和は尋ねたかった。

（……どうして、歩と一緒に居たんだ。私じゃ、駄目なのかっ!!?）

と、尋ねたかった。

だが、聞き出そうとすることで不機嫌となった優に自分のことが不要だと言われるのが怖くて聞けなかった。

ただ、優が自分のことを見捨てて行くのが、とても怖かった。

大荒魂を討伐することすら出来なかった自分が、優にまで捨てられたら、母の想いを捨ててしまった自分に何が残るのだろうかと不安で仕方なかった。

「……箱根山で怪我をしたそうだが、辛くなかったか？」

「……うん、大丈夫。」

だから、訊くこともできなかった問い詰めることをしなかった。

そのため、姫和は優の右腕を握りながら、箱根山での事を優しげな声で聞いていた。だが、姫和の頭の中は別の事を考えていた。

（十条さん、……十条さんにとって、あの子は何？）

姫和は、早苗に言われた言葉を思い出す。

自分にとって、優は何なのだろうか？何を抱いているのだろうか？

――友情？

――愛情？

――それとも、恋情だろうか……？

こんな姿を見た母は私のことをどう思うだろうか？きっと、軽蔑するだろう。

だけど、だからといって、貴女のことを素敵な人だと言ってくれたあの子を〝殺せ〟と言うのでしょうか？私のことを一番理解してくれる子を荒魂扱いして、斬って祓うのは正しいことなのですか――？

私には到底理解できません――。

だから、私は貴女が優のことを斬って祓わないことを軽蔑するなら、私も貴女を軽蔑する――。

だって、優は私と同じで〝母さん〟と呼べる人がいないから、私の好物を美味しいと言ってくれたから、私にとって大切な存在となった

のだから――。

……そんな優を自分にとって大切なものをタギツヒメなんかに母や父のように盗られたくない。例え盗られても、奪えばいい。こちらは奪われてばかり、それぐらい、全てを奪ったタギツヒメから奪っても良いだろう――？

……そこまで考えていた姫和は、優を抱き締める。

「……優、不自由させるが、ずっと私が傍に居るだけじゃあ不満か？」

姫和は、優がこの牢獄のような病室が嫌とは思っていないか訊いてみた。

「本当に？」

だが、優が嬉しそうに顔を綻ばせたことに姫和は安堵していた。

「ああ、本当だ。」

この子だけは私の全てを認めてくれる――。

この子だけは私を否定してくれない――。

この子が居れば、私は刀使でいられる――。

この子のお陰で、私は充たされていく――。

それ故に姫和は、優が大事だった。そして、この牢獄のような病室を〝優と共に居られる神聖な場所〟で〝美しくて、居心地が良い天国のような場所〟と思うようになる。

（……そうだ。たかが少しぐらい一緒に居た程度だ。私にはこの場所が、優と一緒に居られる場所が有る。）

それだけで、歩に対して優越感を感じる姫和。

それだけで、優の事を知りえているかのように感じる姫和。

だからこそ、姫和は歩がこの聖域を踏み荒らさなければ何も問題ないと勝手なことを思うようになる。

（……そうだ、優は人間だ。人間なんだ。この優しい暖かさ、優しい声、優しい手。帽子が被れなくたって、服も着れるし、美味しい物を食べて美味しい言える。……全て人間の証だ。全て荒魂には無いものだ。）

それだけで、優は人間だと大きな声で言える――。

それだけで、好きな物も欲しい物も与えられる――――。
それだけで、好きな物を食べさせてあげられる――――。
それだけで、優は怪物とは言わせない――――。
他者から見れば、姫和の行ったことは〝異常〟に見えることだろう。
だが、姫和にとって、この牢獄のような病室は優と姫和だけの特別で神聖な場所に思えていた。
そして、姫和にとって、この牢獄のような病室は優と姫和を繋ぐ大切な場所であると信じていた。
だからこそ、姫和にとって、優は人間だと言える。優は大切な存在だと言える。
それ故に、母を失った時から、ずっと一人だった姫和にとって、優は母が居ないという同じ境遇で、チョコミントアイスが好きでいるという多くの共通点を持つことから特別視し、特別な繋がりを感じるようになっていた。
誰かに必要とされたかったから――――。
だからといって、誰でも良い訳ではない――――。
だから、自分と多くの共通点を持っていたことが理由だった――――。
それが理由で、特別な繋がりが有るように感じた――――。
だからこそ、優の感心を自分に向けたかった――――。
そして、できれば優の心と愛してくれることを独占したかった――――。

だが、何をどう言おうと、自分よりも幼い子供を自分の思い通りに閉じ込めて、好きにしているという事実から、
いびつで、鉄格子で固めているが、中は幸福だが、浜辺で子供が作る砂の城に籠っているという事実から、

姫和は目を背けていた。そして、

「……そうだ。今度から私が食事を作って持っていくから、わざわざ食堂に行かなくてすむぞ。」
「……そうなんだ。」
優に自分が食事を作るから、もう食堂に行かなくていいことを伝える姫和。
しかし、優の少し元気が無さそうな返事を聞き逃していた。
「だから、今日はぶり大根と焼き鮭と擦り芋、それに白いご飯だが、好物か？」
「……うん、食べたことないけど、姫和おねーちゃんが作ってくれた物なら食べれるよ。」
「？…そうか。」
食べたことない？それに姫和は少し疑問に思うが、そういった純和風のメニューは食べたことがないのだろうと理解して、特段気にしなかったために、
そして、箱根山の荒魂掃討作戦によって得たノロは既に優に注入されている事実を姫和は知らないままであったがために、
その砂の城は少しずつ崩れていることも気付かずにいた。

箱根山戦　～その後～

防衛大臣室――――。

中谷防衛大臣と甲斐陸将補が箱根山における荒魂掃討作戦について話し合っていた。

「幾許かは我々の思惑通りの結果になったな。」

「ああ、これで新型S装備とデータリンクシステムの運用データを元に、我が自衛隊のC4Iシステムの運用能力の向上、及び多次元統合防衛力や海外派遣に役立てるというものだな。」

中谷と甲斐は荒魂掃討作戦にて、データリンクシステムと統合作戦の運用データを得られたことを喜んでいた。

何故ならば、その運用データを元に高機動パワードスーツと情報通信能力を高め、いずれ起こるであろう海外派遣にて発生する抵抗勢力との戦闘への参加、国内外で発生する災害派遣と非正規戦といった安全保障に関わる問題への対策として応用することが可能だからである。

つまり、この箱根山で行われた荒魂掃討作戦自体、自衛隊のC4Iシステムの運用下にある戦場において電子戦能力の無い相手（電子戦能力が無い相手とは、いわゆる正規軍並みの装備を持たない民兵組織。国内に侵入した敵特殊部隊。国家に所属しないテロ行為を行う非正規集団、いわゆるテロリスト等。）を想定とした電子戦を含む統合戦。及び、無人機を活用した間接標準による敵部隊への攻撃といった戦術がどれほど有効であるか、どのような運用が最適であるかを荒魂を使って試すという側面もあった。

つまり、他国に知られることなく荒魂掃討作戦を隠れ蓑にしつつ、C4Iシステムを運用試験。その戦術を確立させることが目的であった。

だが、そのために刀剣類管理局を利用していたという事実は変わらないのである。

「だが、甲斐。お前はそれだけのために此処へ来たのではあるまい？」
　中谷の言う通り、甲斐は中谷に箱根山の荒魂掃討作戦で起きたＡＨ―６４Ｄの墜落理由の件で訪ねていた。
「ああ、すまないが先ずは、困ったことが分かった。」
　甲斐はそう言うと、中谷にＡＨ―６４Ｄの墜落理由についての報告書を差し出す。
　中谷は、防衛大以来の旧知の仲である甲斐が何か歯切れが悪そうにしていることに気付き、とても悪いニュースの前触れであることは中谷は分かっていたのだが、見ない訳にもいかなかった。
　その報告書には、荒魂掃討作戦で起きたＡＨ―６４Ｄの墜落理由が書かれていた。
　その内容は、主回転翼の羽根と回転軸をつなぐ『メインローターヘッド』内部の金属製ボルトの破損が原因で、羽根が分離、そのまま墜落したと書かれていたが、問題はその〝金属製ボルト〟は〝米国の航空会社〟から発注して貰った物であるという事であった。
　米軍でも同様にＡＨ―６４Ｅで起きた金属製ボルトの耐久性に問題が有った件と何か深い関わりがあるのだろうと中谷は直ぐ様理解した。
「先ずはお前さんから報告させて貰った。」
　つまり、今現在この情報を掴んでいるのは私だけということか、と中谷は理解していた。
　だが、この報告書通りであるとすれば、調達予定のＶ―２２の調達が遅れるか、今後取り止めることとなるか、もしくは既に配備されているＣＨ―４７といった米国製ヘリコプターまで追及され、最悪米国製ヘリ全てが飛行停止となり、在日米軍も防衛省も旧折神派の動きに対応できない恐れがあったため、中谷は苦悩していた。
　要するに、この金属製ボルトの耐久性の問題は既に偽装されていたのか、何時から問題が有ったのかが不明であり、どこまで波及するかが分からないので、無暗に糾弾することができないのである。それと同時に、数少ない航空戦力を飛行停止で失い、不穏な動きをする旧折神派への対応が遅れるという事態を防がなければならなかった。

「きっと、野党は大喜びで米国製ヘリを使用することについて問題にしてくるだろうな。……何とかならんか？」

中谷は甲斐にそう尋ねていた。

もし、金属製ボルトの耐久性が昔からあり、他のヘリにも使用されていたならＶ―２２の調達が遅れることになり米軍との共同作戦にて不都合が起きるかも知れないことと、最新鋭兵器とデータリンクシステムの統合運用により不穏な動きを見せる旧折神派への対応をするという戦略が根元から崩れる可能性が有るからである。

「その金属製ボルトに使う腐食防止剤が劣化し、構成品同士が固着した結果、発生したことにしよう。それだけでもこちらの失点は大きいが、対外有償軍事援助を活用したアメリカからの正面装備調達費が膨れ上がり、今現在の陸自の台所事情は改善されるどころか悪化していることは事実だ。それを原因としよう。」

甲斐はそう言うと、更に続けて言う。

「そうして、整備、維持といった兵站関係の問題改善が急務であると報告。それが、今のところ一番妥当だろう。」

つまり、甲斐は墜落原因が件の〝米国の航空会社から発注して貰った金属製ボルト〟ではなく、〝整備といった今も続く改善が見られない兵站状況の悪さ〟が問題であるというふうに問題点を挿げ替えようとしていたのである。

そのうえ、

「……後は、数名の刀使達がヘリパイロットの救助に尽力してくれたことを大々的に発表し、感謝状を贈ろう。獅童　真希の性格を考えれば、そう言ってくれた我々のことを協力が無ければ荒魂掃討作戦は上手くいかなかったと述べるだろうしな。……そうすれば、この件を学園の土地代でご執心の野党はこれ以上探ろうとは思わんだろう。」

甲斐は真希の性格を考慮し、こちら側からそれなりの態度を見せれば、感謝の意を述べることだろうと言っていた。

無論、甲斐は社会的地位を落とした今の刀剣類管理局が数少ない協力者を糾弾する訳ないだろうが……。という腹積もりも有ったのだが。

「それに、彼の少年のお陰で荒魂についての色々な情報を得られた。この情報は様々なことに利用できるのではないか？それだけでも、充分過ぎる程の収穫だろう。」

そして、甲斐は優のお陰でノロと珠鋼を近付ければ時間共に穢れが減少することが観測されたこと、

珠鋼と御刀を併用することで能力はブーストされることが確認されたことから、優にはまだまだ利用価値が有るということを甲斐は中谷に告げるのであった。

甲斐はどこまでも、どんな人物でも利用できるところは利用しようという人物であった。

「……わかった、そうだな。」

整備不良とも、操縦ミスとも取られない提案であるうえ、社会的地位が落ちた刀剣類管理局と優を実験して得られた情報を利用すれば、責を軽減することができ、この件を有耶無耶に出来るだろうと踏んだ中谷は甲斐の提案を呑む。

「今回の事故は人為的でも、故意でもない。不幸によって起こった事故だ。……そのため、私は涼しい顔をして、ＡＨ―６４Ｄのしばらくの飛行停止処分と再発防止策を命じるとしよう。それで充分だ。」

中谷は重い声で、甲斐に背中を見せながら、そう伝えた。

「だが、これで多数の荒魂群の対処法として、他組織との共同作戦が有効である。ということが立証された訳だ。」

そして、中谷は他組織との共同作戦を確立したこの結果に内心喜んでいた。

『――――先日、箱根山にて刀剣類管理局と自衛隊の統合作戦による荒魂掃討作戦が実施されましたが、その際に陸自のヘリＡＨ―６４Ｄが〝金属製ボルトが破断したことによって、墜落した〟ことを発表し、中谷防衛大臣はこの件について、ＡＨ―６４Ｄは飛行停止処分とし、関係部署と地元へは理解を得るため、再発防止策について説明をすると表明しており、――――。』

その後のニュースには、荒魂掃討作戦中にＡＨ―６４Ｄが〝金属製

ボルトに使う腐食防止剤が劣化し、構成品同士が固着した結果、発生したもの。〃であると公表され、広く伝わることとなった……。

一方、真希は華やかな贈呈式とは逆に苦悩していた。

（どうしてこうなった？）

「――――また、貴女は箱根山にて発生した荒魂掃討作戦を成功させただけでなく、その作戦に従事した隊員一名の窮地を救うべくご尽力なされ、かけがえのない隊員の命を救って頂いたと同時に、現職隊員の士気高揚に寄与されました。」

それは、葬儀が終わった後、防衛省側から呼ばれたため、出向くしかなかったこの贈呈式の事である。

真希の目の前にいる陸自の方面総監は、新型S装備を装着させた精鋭のみで編成された第二小隊を陸自のパイロットを救出するために送ったこと、第一小隊と新人を含む第三小隊のみで荒魂の大群を相手に討伐し、荒魂掃討作戦を成功へと導いたことを評価し、述べているのだろう。

陸自側からにしてみれば、真希は荒魂に包囲され孤立してしまった第二小隊を敵陣突破し救出したり、その後も新兵（初の男性刀使と思われている優とか歩とか。）を率いながら自分の戦力よりも多い大群の荒魂を相手にするという危機的な状況であるにも関わらず、最精鋭の部隊を陸自のパイロットの救出のために送り救出を成功させ、負傷者は出たものの士気を失い統率を失うこともなくその大群の荒魂を討伐してみせたのである。そのことに、陸自の幹部は感動したらしく、こういった場を設け、感謝状を贈ろうということになったのである。

……そして、この陸自の総監も真希も、甲斐が若干脚色し彼と陸自

の幹部に伝え、ＡＨ―６４Ｄの問題から目を逸らすプロパガンダとして利用しようとしていたということには気づいていていない。

だが、真希にしてみれば、孤立し包囲された第二小隊を包囲から突破して救出できたのは優を囮にして包囲の隙を作ってそこを突破したという下劣な戦法を使っただけであり、大群の荒魂を討伐できたのも強力な荒魂が陸自のヘリに向かったのと優を中央に配して囮にして他の刀使達を側面攻撃させたという、これまた人道的に反するような戦法で勝っただけであり、真希的には褒められるようなことはしていないという認識である。実際に優は大怪我をして帰って来たのだから……。

「よって、ここにその功績を称えるとともに深く感謝の意を表します。」

他者から見れば、陸自が荒魂掃討作戦の指揮をしていた真希に陸自のヘリパイロットの救助に尽力してくれたことに対し感謝状を贈っているように見えたことだろう。

「ありがとうございます。……ですが、私の指示を信じて従ってくれた特別祭祀機動隊の皆、掃討作戦の際に防衛省、並びに米軍の支援が無ければこの作戦は成功しなかったでしょう。こちらこそ、多大なる支援を感謝しています。」

しかし、真希は必死で他の刀使達の奮闘と防衛省と米軍のお陰でもあると述べていた。

それを言う理由は、自分が荒魂掃討作戦の指揮をしていた責任者という立場上、リップサービスとして言わなければならないのも事実だが、この荒魂掃討作戦の目的は鎌府の刀使達の自信を付けさせることが目的であったのだ。

……だが、真希が孤立した第二小隊を敵陣突破して救出したり、そのうえ自身も新人の刀使を含む部隊を指揮しながら荒魂の大群を相手にしなければならないのに、第二小隊を陸自のヘリパイロットの救出に向かわせ、陸自のヘリパイロットの命を救ってしまった活躍をしてしまったがために、その活躍を聞いた幹部自衛官達はこぞって感動（甲斐の宣伝効果もある。）してしまい、特別感謝状を贈呈することと

なったのである。
　要は、鎌府の刀使ではなく、真希が活躍したという形となったのである。
「なんと……、謙虚な姿勢でしょうか。やはり、貴女に受け取って貰いたい!!遠慮せずに、どうぞ!!さあ!!」
　感謝状を贈呈しようとする方面総監は更に感動しちゃったのかは不明だが、やたらと暑苦しく、やたらと表情が激しくなったと真希は思った。
　そんな幹部自衛官の勢いに負けたのか、それともその齢でもガタイが良いというせいなのか、真希は感謝状を受け取るしかなかった。
　そんな話が陸自の中だけで広まったなら、問題は無かった。
　問題は無かったのだ。
　だが、問題はその前の前の事である。
　第二小隊に配属されていた三名の刀使達が自分達が失態をしたにも関わらず、それを叱責するどころか、それを優しく諭してチャンスをくれたということと荒魂掃討作戦で真希が活躍したことを脚色を加えながら刀剣類管理局に広めてしまったのだ。
　当然、その話は他の鎌府の刀使達も（尚、三名の刀使によってかなり脚色されている。）聞いてしまったため、鎌府の刀使達はこぞって真希に感動し、彼女を更に尊敬するようなったのである。

　だが、それを聞いてしまった長船の刀使達は、真希が防衛省を懐柔してから刀剣類管理局を乗っ取ろうとしているのではないのか?と疑うようになってしまう。

　考えてもみてもらいたい。横須賀港にて鎌府女学院の刀使（まだ判明していないが、ソフィアもシンパである。）が朱音を撃ったこと、雪那が旧折神派であった二つのことから鎌府女学院自体に疑惑を抱き、その疑惑を抱いている鎌府の刀使達から信頼されている元折神家親衛隊第一席獅童　真希が防衛省から感謝状を貰ったのである。その旧折神派に対抗してきた舞草所属の長船の立場として見たら、疑惑を

抱いている鎌府の刀使達から今も称賛を受け、旧折神派の頭目である紫を今まで警護していた元親衛隊の真希が防衛省から感状を貰ったのは、真希がこれを契機として自身の勢力拡大を目論んでいるのではないか?と在りもしない疑惑を抱いてしまうものである。

そして、真希の弱点は今現在他人からどう見られているかということに関して察することがあまり得意ではないのだろう（その証拠に寿々花が居る。）。

その証拠に、寿々花は真希が防衛省から特別感謝状を贈られることを真希から聞いたときは、

「……そうですか、その後は大変でしょうけど頑張って下さい。」

と哀れむような目で寿々花は真希を見ていた。

「……?どうした寿々花?」

「考えても見てください。真希さん。鎌府と長船の関係が悪化しているこの状況下で鎌府の支持が多い私達が防衛省から感謝状とお礼の言葉を貰って私達が喜んだら、長船の刀使達はどう思うでしょうか?」

それを言われた真希は固まり、復活した後に鎌府と長船の仲のことに気付き、上記のことが考え付いたのである。

「……どっ、どうしよう寿々花?断ろうか?」

「いや、そんな話を理由も無く足蹴にしたら防衛省側も不信感を抱くでしょうから、辞退するのはお辞めになった方がよろしいかと。……ですので、頑張ってください。全く気付かなかった私もお供しますので……。」

断ろうとしたが、元とはいえ真希は折神家親衛隊第一席であり、朱音の身辺の警護と同行を許され、朱音と紗南にこの荒魂掃討作戦を一任された立場である。

下手に断ることによって防衛省側から要らぬ不信を抱かせるのは朱音に負担を増やすだけのことになるので、避けたいところである。そのうえ、長船と鎌府の仲が悪くなるから断りますとも言えないため、下手に断ろうものなら真希と刀剣類管理局のイメージが悪くなり、刀使達からも防衛省側からも信頼されなくなるかも知れないた

め、断ることができなかった。
無論、この感謝状を贈ったことでＡＨ―６４Ｄのことを有耶無耶にしようとしている甲斐がそれを許す訳が無いので、どの道不可能である。
（……じ、自分の仕事ぶりを評価されることは本来なら喜ばしいことなのだろう。しかし、しかし時と場合によるのではないのか……どうしてこうなった？）
早い話が当初の目的を忘れ大活躍をしたら、自分が所属している組織の対立が一層激化しそうでヤバイ!!
……ということである。
真希はこの苦難にどうするべきか考えてみた。
1、活躍を否定する。
無理。もう既に長船にも、鎌府にも、刀剣類管理局と防衛省に広く知れ渡っている。
2、隠蔽する。
無理。もう既に長船にも、鎌府にも、刀剣類管理局と防衛省に広く知れ渡っている。
3、デタラメだと言う。
無理。そんなことしたら、もう信用されなくなるし、組織対立は防衛省も混ざって更に混沌と化すかも知れない。
結果、無理だった。
……助けて、紫様!!と真希は叫びたかったが、そんなことができる筈もなく、結果諦めるしかなく、状況を受け入れるしかなかった。
そんな真希は自分の思惑とは真逆に順調に評価され、順調に出世できて行くのだろう。
争いが激化した渦中に飛び込むといったいろんなストレスを抱えながら。
そして、後進を育てるという目標の達成が離れていくのではないかと危惧しながら。

荒魂達の狂騒　～余談前編～

箱根山における荒魂掃討作戦が完了した次の日にて、優の中に居るタギツヒメ達は談笑やら遊びやらしていた。

そんな中、結芽はまたまた（しかし計約３０回以上）タギツヒメのノロケ話を聞かされていた。

「――――（中略）――――でな、優がな、それでな？――――（省略）――――。」

「へーすごーい（棒）」

しかし、あるとき思っていたことを結芽は思い切って聞いてみることにした。

「ねえ、ヒメってさぁ、優と付き合ってんの？」

結芽はタギツヒメをヒメと呼んで、優とタギツヒメは今現在進行形で付き合っているのかどうかを尋ねていた。

ぶっちゃけた話、同じ話ばかりで先が進まないので結芽は退屈だったから、その先の話が聞きたいので聞いてみた。

「」

それを聞かれたタギツヒメは　ピシッ　と音が鳴るぐらいの勢いで止まった。すると、

「……ふっ、フハハハハハ!!誰に聞いておる？」

急に尊大な態度を取るタギツヒメ。

流石は一応大荒魂というべきか、迫力は充分にあった。

「われは神ぞ。そんなことぐらい造作もない！お前に我の魅惑のトーク術をしかと見せてくれるわっ!!」

タギツヒメは語気を強めて言う。しかし、

「えっ!?ということは言うの!?」

結芽は目を輝かせて、タギツヒメにそう聞いてきた。

結芽が目を輝かせた理由は、病室で何時か見た月９の恋愛ドラマみたいな展開が目の前で起こるのが見たかったこともそうだが、タギツヒメを応援したいという気持ちが有ったのもある。

「そうなんだ。なら私も応援するよ！……場所は何処にしようか？」
　ウキウキ笑顔でタギツヒメに迫りながら、そう言い続ける結芽。それに、タギツヒメは、
「……あっ、ウム。それは我に任せてくれ。お主のお陰で腹は決まった！その礼としてお主に恋愛のなんたるかを、神髄を見せてやろうぞぉぉぉぉっ!!」
「うん！ヒメも頑張ってね!!」
　結芽もお年頃なのか、タギツヒメのそういった話は嬉しそうにしていた。
　……対照的にタギツヒメの目は死んでいた。

　そして――――、
「……なあ、ミカよ。」
「そんで、どうすんの？」
　タギツヒメはミカの横で震えて、蹲っていた。
「……何であんなことを言ってしまったのだろうか？」
「いい加減、その癖は直した方が良いと思うけど。」
「魅惑のトーク術って、なんなのだぁっ!?……我、一度も恋愛とか優に告白なんぞしたことないぞぉぉぉぉ～～～っ。」
（なら、言わなきゃ良いのに……。）
「うっぐぅ、ひっく、ふぇぇん。」と蹲りながら泣き叫ぶタギツヒメを見て、ミカは何となくそうなるだろうと思っていた。
　というか、ニキータ相手に一度やらかしている。

このタギツヒメは悪い癖があるのだ。
『我は神ぞ。』とか、『人間風情が。』とか言うがあれは自分は凄いんだぞ、ほらもっと相手しろよというタギツヒメなりの最大のアピールであり（そして、今現在も最高にカッコイイとも思っている。）、要するに構って欲しいということなのである。
だが、それを無視したり自分が望む答えが来なかったら恥ずかしがって、そのアピールした相手を攻撃して有耶無耶にしたり、無かったことにしようとするという実にめんどうくさい子でもあるのだ。
なお、タギツヒメが今まで一度も告白できなかったのは告白するのが恥ずかしいだとか、フラれたらどうしようだとか、そんなしょうもない理由ではないとタギツヒメは述懐している。
そう、タギツヒメは沙耶香の言うとおり、
まるで子供なのである!!
「……素直に結芽に話したら解決するんじゃない？」
「ばかものぉっ!!我は神ぞ！一応大荒魂の一部なのだぞ！」
タギツヒメはよく分からない理屈をミカに唱えていた。
「つまり、我には威厳が必要なのに、最近の結芽ときたら我のことを残念な奴に見ておるのじゃぞっ！可奈美お義姉様を納得させるにはＩ☆ＧＥ☆Ｎがとても重要なのじゃ!!これ以上失ってたまるものかっ！」
「ああ、うん。……ソウダネ。」
いや、今みたいなことを言うから威厳とか失うのではないのかとミカはタギツヒメに言いたかったが、特に言わないことにした。
「……ていうか優を奪ったら良いんじゃない？あの可奈美って人から。」
さらっと爆弾発言をするミカ。
「ばっ、ばかものぉっ!!先ず我は龍眼を通して勝てるかどうか視たけど、どう殴り掛かっても軽く受け流されて十倍にして返されるとか全く勝てる気がしないぞっ!!というか、龍眼持ってる我が全く相手にならん時点で可奈美お義姉様どんだけ化け物なのだ!!?あれはチートだチート!!不正行為!!!龍眼なんてゴミみたいではないかっ!!!」

要は勝てる気がしない。……とのことらしい。

だが、チートだの不正行為だのタギツヒメも爆弾発言しているが、タギツヒメが言っていた通り前に可奈美から優を奪おうと龍眼を使って勝とうとしていたのだ。

『うんぬぅおおおおおおお!!唸れ!力を引き出せ我が龍眼!!可奈美お義姉様の弱点を探るのじゃあああああ!!!』

そのため、タギツヒメは可奈美から勝利をもぎ取るため、龍眼を使って可奈美を凝視していた。

……今のところ、それぐらいにしか使われていないタギツヒメの龍眼が不憫でしかならないが、全ては優を手に入れるためである。

『……うんぬぬぬぬぬぬぬぅ!いくら予測精度を上げても勝ち方が全く見えん。それに何故か知らんが目と脳が痛いいいいぃ。けれど我慢我慢っ!龍眼の精度を気合いで上げろぉっ!!タギツヒメ、お主はこう見えて大荒魂の一部でやればできる子なのだぞおぉぉぉ!!』

目玉を飛び出るのではないのかと思うほどの変顔をしつつ、タギツヒメは可奈美を龍眼もといほぼ眼力で凝視していた。

そんなことをやっているから威厳がなくなるのだが……。

『げぇっ!なんじゃこいつ!?全力出されたらどう打ち込んでも、全く一本を取れないんじゃがっ!!?何じゃあのチート!?』

そして、龍眼の力（タギツヒメの場合は主にそんなことしか使われない残念仕様。）をフル稼働しても勝てないという事実に、そしてどうあがいても敗けるという結果に可奈美のことを『なんじゃこいつ!?』と素で言うくらい驚き、とてつもない敗北感を感じてしまったのである。

以来、タギツヒメは可奈美から好感を得ようと必死になるのであった。

そんな会話をしていたら、タギツヒメは元気と自信を失ってしまったため、マズイことを言ったかも知れないと思い、ミカは元気になることを言うことにした。

「じゃあ、あの姫和さんだったら？」

「あっ、それは勝てる気がするぞ。あいつは胸が大和平野でアホだか

らな。」
　ミカはタギツヒメもアホだし、大和平野並みに胸が無かったような気がするが今回は特に気にしなかったし、言うこともしなかった。
　だが、タギツヒメは何故かは分からないが勝てるような気がして自信を取り戻したらしい。
「……じゃあ、無理矢理襲ったら？」
　さらに、色々とマズイ爆弾を投下するミカ。
「ばっ、ばか。そんなこと簡単にできるはずなかろっ!!」
　顔を真っ赤にして手をブンブンと回して抗議するタギツヒメ。
　その反応を見たミカは（今まで、散々生涯の伴侶とか言っているのに、優を目の前するとそれが言えないんだよね。）とタギツヒメの本性を思い出していた。
『我は神ぞ。』とか『人間風情が。』とかがカッコイイと思っている中二病患者であり、その結果無駄に虚勢を張ったことで相手に悪く言い過ぎたかも知れないと苦悩したり、本人相手にストレートに生涯の伴侶とか今も言えなかったりする。そんなタギツヒメのことを……。
　早い話が、嘗てタギツヒメが朱音に言った〝生涯の伴侶〟発言は、お前ら手出すなよ？という意思表示でしかなく、子供染みた行動を取るのである。しかも、タギツヒメは自分は偉大な存在であることをアピールするため、口調も古風な言い方をしていたのだ。
　そう、高度な知能を有すると累に言われることとなるタギツヒメの本性は沙耶香の言うとおり、
まるで子供なのである!!
　しかし、タギツヒメは何故優にここまで好意を抱いているのかミカは不思議でならなかった。
　実際、躊躇いもなく拳がボロボロになろうとも気絶するまで人を殴ったりするわ、自分ごと銃で撃つことも躊躇わないわ、紫に取り憑いていた大荒魂を倒すためにタギツヒメに全力を出すよう脅すわ、今思い返えば優という9歳の男の子はとんでもない子だと思うのだが……。
「……ねえ、ヒメはさあ、優のどこが良かったの？」

「フッ、それが分からぬとは、お主もまだまだよ「あっ、そう。じゃあ一人でがんばって～。」
そのため、ミカはタギツヒメに優のどこが良かったのか尋ねようとしたが、タギツヒメの言葉についイラッとしてしまい一人で頑張れ、と言って立ち上がりその場を離れようとした。
「うあぁぁぁーーーんっ！今の嘘だからっ！嘘だからぁっ!!」
だが、それを見たタギツヒメは普段の口調からはかけ離れた言葉使いで且つ、素早い動きでミカの足を掴んで止めようとしていた。
恥も威厳もかなぐり捨てるタギツヒメの姿を見て、先ほどの威厳とやらの話はどこへ行ったのだろうかと思うミカであった。
だが、そのタギツヒメの必死な姿を見たミカは手の掛かる妹みたいだなと思い、クスリと笑いながらなんやかんやで手伝うことを決めた。
「……しょうがない。手伝いますか。」
「おお、ありがたい。ミカ様ぁ。」
ミカは軽くそう言うと、タギツヒメは涙を流しながら土下座しながら感謝していた。
こうして、タギツヒメは順調に自らの行いによって威厳を失って行き、駄女神への道へと突き進むのであった。

「……という訳で、ジョニー呼んできました。」
「オーっす！」
「いやいや、意味が分からんぞ？」
タギツヒメは何故、この場にジョニーが居るのか疑問であった。
「まあ、ジョニーを優役にして告白の練習しよう。」
「なっ、なるほどっ!!」

タギツヒメはミカのジョニーを優と見なして、告白の練習をするという提案に（何て、天才的な発想だ!!）と、感動していた。

……いや、別にそんな凄いことじゃねーだろという声が上がるだろうが、今までタギツヒメは人間相手に恋愛なんぞしたことないのだから許して欲しい。

つまり、タギツヒメは生まれてから今まで恋愛など考えたこともないのであり、色恋沙汰のことについては小学生以下の知識なのである。

故に、コウノトリが子供を運んでくる、キャベツから産まれてくるといった話を信じるくらい、

まるで子供なのである!!

「じゃ、それじゃあ早速やってみようか。」

「ふぇっ!?ぶっつけ本番は流石に……!!」

「えっ、マジでぇ？」

ミカの一声に反応したタギツヒメは産まれたての子鹿の如く震え、白い顔を真っ赤にしていたが、ジョニーはすこぶる嫌そうであった。

「我だって、嫌じゃぞ。だが、目を閉じて目の前に居るのが優だと思えば良い。」

「……どんだけ嫌なんだよ。」

タギツヒメはそう言って目をつむると「目の前にいるのは優、優、優。」と何度も連呼していた。

その姿はジョニーとミカに何かしらの畏怖の感情を抱かせる物であった。

……一応、再度伝えておくがタギツヒメは誕生してこのかた、恋愛は知らないし告白もどうすれば良いのか知らずに過ごしていたのである。

そんなタギツヒメが愛の告白やその雰囲気に持っていく方法など簡単にできるものではないのだ。

現に、タギツヒメは心拍数が上昇したことで落ち着けなくなり、高度な知能を有する彼女の頭の中はどう言えば良いのかと考えるばかりである。

だが、そんな目を閉じているタギツヒメも勇気を出すのであった。
「……わっ、」
タギツヒメは紡ぐ、愛の告白を、
「……わっ、我と。」
タギツヒメは必死にしどろもどろになりながらも、
「……わっ、我とつきあｔ「いや、それ無理。」……。」
タギツヒメは何とか必死に『告白』という言葉を出すが、ジョニーに「いや、それ無理。」と言われ固まってしまった。
一見、タギツヒメへの嫌がらせでジョニーはそうしているように見えるだろう。しかし、このジョニーという男、心に決めた女がいるため正直に答えただけである。
そう、この男ジョニーもまた空気を読まないうえ、タギツヒメのために行う告白の練習であることと優の役するということも忘れ、己自身の正直な気持ちをストレートに言ったジョニーもまた、まるで子供なのである!!
その瞬間、タギツヒメは地面に膝を付けて、
「うあぁぁぁぁ――――――――んっ!!!!」
子供のように泣きじゃくるのであった。

「うおぉぉぉぉーーーーーーーーん!!!!無理って言われたっ!!!!無理って言われたっ!!!!むりってゆわれたぁっ!!!!」

思わず、いつともの口調からかけ離れた言葉が出るほどにタギツヒメは泣きじゃくっていた。
タギツヒメは頑張ってジョニーのことを優だと思って必死に愛の告白の言葉を紡いだが、結芽のことが好きなジョニーが空気を読まずに「いや、それ無理。」と言ってしまった。そのため、タギツヒメはガチ泣きである!!
それを見たミカは、
「ねえ、ジョニーちょっと来て。」
と言って、手招きでジョニーを呼ぶと、すかさずジョニーの胸ぐら

を掴むと、
「お前、何やってんだよ?」
低く、冷たい声でジョニーを叱責していた。

そんなこんながあり、タギツヒメを泣かしたことを結芽にバラされたくなければ、タギツヒメの告白が上手くいくよう結芽に告白しろと言われたため、ジョニーは泣く泣くその告白をどう言うか必死で考え、必死で練習していた。
「……いや、コレ上手くいくのか?」
ジョニーが不憫に思えてならないタギツヒメはどうにか止めようとする。
「いや、あいつが失敗したところで笑い話にはなるでしょう。」
だが、気にすることなくミカはジョニーが結芽に告白するところをタギツヒメに見せて、少しでもそれを参考にし、タギツヒメの告白を成功させようとしていた。
早い話がジョニーのする結芽に伝える告白は、成功すればそれを参考に、失敗したとしてもこちらの損害は無いうえ、笑い話になるということである。
早い話が当て馬であった。それを何食わぬ顔で行うミカは、まさにド畜生である。

そんなこんなでミカは呼んでいた結芽がジョニーを見かけて、声をかけるところを見て、タギツヒメを肘で小突く。
タギツヒメはジョニーに(済まん……。)と思いながら、ジョニーの恋が成功するように祈っていた。

「どしたのー？何か用？」
「……うぇっ？あっ、えっと、そうだな、ちょっと伝えたいことがあってさあ。」
ズカズカと近付いてくる結芽とは対照的にジョニーは顔を赤くしながら、結芽に返事をする。
「んぅ――――？」
小首を傾げながら、ジョニーを見る結芽。
「おっ、……オレ……。」
それに、ジョニーは動揺しながらも、
「……おっ、オレは……。」
ジョニーは紡ぐ、愛の告白を、
「……おっ、オレはス……。」
「……ス？」
伝えようとする。ジョニーは必死にしどろもどろになりながらも結芽を前にして、決断する。
「……オレは……オレはスキヤキが食いたい！」
「……？」
告白することを、しかし、結芽は困惑した。
「……？」
「……？」
タギツヒメも困惑した。
ミカも困惑した。
ジョニーは何を言っているのか？誰もワケガワカラナカッタ。
「……いや、ほら。俺、日本ってところ知らねぇしさ。……スキヤキとか聞いたことがあるから、いつか食べてみてぇなぁ～～。とか、思った訳よ。」
ジョニーは日本にある〝スキヤキ〟なる物を知り、それを食してみたいと言っていた。
……単に、「好きです。」と告白できなかっただけであるが。
「あ～。でも、今は無理だと思うけど。」
流石の結芽も困惑しながら、答えるしかなかった。

「いやっ！良いよ、約束してくれたら良いんだよ。いつか人間になったら上手いスキヤキを皆で食べようぜ。」
「！……うん、そうしよう。皆で何時か行こう。」
こうして、ジョニーは結芽にいつかスキヤキを一緒に食べようと約束？することができました。
「じゃっ、またなっ!!」
「えっ？ちょっと……。」
ジョニーはそれだけ言うと、結芽から離れるように足早と去って行った。

満面の笑みでタギツヒメとミカの居る所へと戻って行ったジョニーは一言、親指をグッと見せて、
「やったぜっ!!」
と言っていた。
「「何がっ!!?」」
それに、タギツヒメとミカは何を成し遂げたのか、とジョニーに尋ねる。
「いやいやいやいや、オレ結構頑張ったと思うぜ？スキヤキ食うことはどうにか誘えたぞっ!?」
ジョニーは自慢気に言うが、誰がどう見ても言えなかっただけにしか見えなかった。
「……いや、あのさ。当初の目的忘れてない？スキヤキってどうゆう物か分かってる？」
「……ハッ、しまった!!」
どうやら、ジョニーはスキヤキなる物がどのような物か知らないようである。
たまたまどこかで聞いたことがある言葉を使っただけのようである。
「スッ、スキヤキって何だ？誰か分かる奴いるか？」

「そんなの知る訳ないでしょっ！てゆうか、何？初心な童貞丸出しの告白!?つっかえないわね。」
「はあ？はあっ!?はあぁっ!!?童貞ちげーしっ!!単にどう言えば良いか分からないだけだしっ!!お前だったらどうすんだよ!?お前だったら男落とす術知ってるんだろ!?!!」
　ミカは〝スキヤキ食べたい〟という告白をしたジョニーにもう少しマシな言い方はなかったのかと詰問していた。それに、立腹したジョニーは路地裏で花を売っていた経験があるミカだったら、どう言うのかと挑発していた。
「……ちっ、仕方がないわね。良い？ヒメ、とっておきの技を教えてあげる。」
　ジョニーに触れられたくない過去を言われたためか、不機嫌そうにミカは答える。それに、ジョニーは悪いことを言ったと思い、バツが悪そうな顔をして、ミカを見ていた。
　だが、それに気にすることなくミカはタギツヒメにとっておきの技を教えると言って近寄る。
「先ず、近付いて。」
　ミカはタギツヒメに目と鼻の先まで近づくと、
「押し倒して。」
「ん？」
　タギツヒメを突き飛ばして、馬乗りになるミカ。
　それに、ジョニーは嫌な予感を感じてしまう。
「……んで、ズボンを脱がせ「ハイ、ストップ。」」
　ジョニーに「ハイ、ストップ。」と言われ、中断させられたミカは不機嫌そうであった。
　ミカが路地裏で花を売っていた頃の技をタギツヒメに教えようとしていたことに気づいたジョニーはミカを止めていた。
「何すんのよ。折角タギツヒメに男を１００％落とす良いことを教えようとしたのに。」
「いやいやいやいや、それ絶対アウトだろっ!!優は一応９歳児なんだぞっ!!?トラウマ物になるようなことすんじゃねえよっ!!」

ジョニーがミカを止めた理由は二つ。
その一つ目はタギツヒメがミカから教わった技を使い、9歳児の優にトラウマを残さないようにするため。
「何よ、どうせ男なんて下半身見せたら金くれるくらい喜ぶもんでしょ？」
「いやいや、相手のことも少し考えてやれよっ!!!」
ジョニーがミカを止めた理由の2つ目は優がミカの路地裏で花を売っていた記憶を引き継いでいて、その記憶が元で〝そういった行為全般〟に嫌悪していたら先ず間違い無くそれを行った者を始末するだろう。それを防ぐためである。
「……とりあえず、分かったことがある。お前ら、まともな恋愛経験とやらが無いのだな。」
タギツヒメは御刀以上の切れ味の一言でミカとジョニーのことをズバッと言う。それに、固まる二人。
早い話がこの場に居るタギツヒメ、ジョニー、ミカはまともな恋愛をしたことがないのであった。

荒魂達の狂騒　～余談後編～

「という訳なのだが、全く進展しないのだが……。」
　タギツヒメが結芽に要らぬ見栄を張り、優に告白することとなり、そんなこんながあって、タギツヒメは悩んでいた。いかに優に告白するか、いかに結芽に対して威厳を保つか。
「……難しいわね。イイもん見せたら終いだと思っていたんだけど。」
「な訳あるかっ。」
「……もしかしてなのだが。」
　ミカとジョニーの会話を聞いていたタギツヒメはある事を思う。
それは、
「我等、まともに恋愛とかしたことないのではないのか？」
　タギツヒメの重い言葉にミカとジョニーは顔を伏せ、重苦しい雰囲気を出していた。
　その鋭い一言により、タギツヒメ達は恋愛とか分からない者同士で話し合っても解決しないのだろうかと思い込んでいた。
　そんでもって、三人はこのままだと春は訪れないんじゃないのかと自問自答していた。
「……痛いところ突くなよ。それじゃあ、解決できねぇよ。」
「……ごめんね、ヒメ。私、同年代の子と付き合ったことないんだよね……。」
　何かこの状況を打破することのできる起死回生の一手は無いか？
三人はそれを考えていた。
「……こうなれば、ニキータにも聞いてみるとするか……。」
「すまん、面目ねぇ……。」
「まあ、何もしないよりは良いわよね。私、結芽の足止めを兼ねた女同士の話しをしてくるね。」
　タギツヒメは藁にも縋る思いでニキータにもどうすれば良いかを尋ねることとし、ミカは結芽がこっちに来ないようにするために足止めを兼ねたガールズトークをしに行ったのであった。

「どしたの？みんな？」
　救援として来たことに理解しているのかいないのか分からない返事をしてタギツヒメ達の所へ来たニキータ。
「……ああ、実はヒメがな、また調子乗っちゃって……。」
「あっ、うん、そうなんだ……。」
　ジョニーは耳打ちでニキータに現在の状況を教えていた。それだけでニキータは何が起こったのか理解した。
　タギツヒメが見栄を張ったことで一騒動が起こったのだろうと……。
「……う～ん、私もこういったことは詳しくないけど、先ずは優の好きな物とか趣味を調べてタギツヒメと共通点が無いか調べるのが良いかな？」
「どうして？」
　優とタギツヒメとの間に好きな物等で何か共通点が無いか調べるべきだと言ったニキータに、その真意を問うジョニー。
「……えっとね、好きな事で話し合えれば話しは弾むよね？それを利用して、話しやすくして相手の好意も得られるって、教えてもらったことがあるから、それで話しやすくなったら告白すれば良いんじゃないかな？て、思ったの。」
「なっ……なるほど。」
「こやつ、天才か？」
　ニキータの説明に感嘆とするジョニーとタギツヒメ。
　早い話がニキータはタギツヒメと優との間に同じ共通点を見つけ、その共通点を主とした会話をして、タギツヒメにとって告白させやすくしようとしていたのである。
　例を挙げるとするならば、
　２００１年６月１６日にアメリカとロシアが首脳会談したときの話ではあるが、早朝に聖書を読むため夜早々と寝床につく程に敬虔な信徒であるアメリカ大統領がロシア大統領の十字架のネックレスを

見て、「あなたは共産主義者でＫＧＢ諜報員だったのに、十字架の首飾りをしていますね。お母さんの形見ですか。」と直説的に尋ねたため、ロシア大統領は「そうだ。」と言い、マルクス主義の下でロシア正教の信仰が禁止されていた少年時代に母親の計いで洗礼を受けた経緯をアメリカ大統領に静かに語った。

この上記の経緯により、アメリカ大統領の心は動かされたのか、「私はこの男（ロシア大統領のこと。）の眼をじっと見た。彼が実にストレートで信頼に足る人物であることが判った。」という言葉を残す程にロシア大統領を信頼するようになったとも云われている。

上記の首脳会談が理由ではないだろうが、ニキータはこれに近いやり方で優とタギツヒメを親密にする方向へと持っていこうとしていた。

「そうと決まれば、ちょっと優に聞いてくるわ。」

ジョニーは優の好きな物を聞くべく、優に尋ねていた。

「おーい、優。」

「何？」

「優って好きな物ある？」

「好きな物……？」

ジョニーに急にそう尋ねられた優は、首を傾げるしかなかった。

「ほら、剣術とか好きか？」

「……よく分からない。」

「いや、ほらお前のねーちゃんって、剣術好きだろ？だから、何か好きな剣術もあるかなって。」

「振って、斬れれば何でも良いかな。」

どうにか、話題を恐らく優の好みであろう剣術に持っていき、優の好みを訊き出そうとしたが、優はしれっと斬れれば何でも良いと答えたことにガクッとしていた。

「いや、何かあるだろう？例えば構えがカッコイイだとかあるだろ？何か一つぐらいさ。」

「う～ん、特には。」

ジョニーはならば可奈美という刀使の姉が居ることから剣術には

興味あるかもと思い尋ねてみたが、返答は悲しいものであった。
しかし、ジョニーは諦めず、剣術が駄目なら可奈美が使っている刀には興味あるだろうと思い、刀に関係のある話しをすることにした。
「なら、アレだ、アレ。好きな物とか欲しい物とか何か無いか？」
「欲しい物？」
「そうそう、可奈美だっけ？剣術やってるから自分も刀欲しいとかそんなんあるだろ？」
しかし、ジョニーは失態を犯していた。優には可奈美という刀使の姉がいるのだから、刀に興味があるだろうと思い込んでいたのである。
早い話が優は刀には興味がないことを知らずに訊いたのである。
「うーん、刀じゃなくて、斧とか、バールとか、鉈とかの方が良いなぁ。」
「……何故に？」
そのため、ジョニーは玩具とか、ぬいぐるみとか子供らしい物を欲しがるだろうと思い訊いていたのだが、優は斧だとか物騒な物が欲しいと答えたことに流石のジョニーも欲しい物がそんな物だとは思わなかったため、優に対して（コイツ、本物のやべーやつだな。）という認識を更に強めることとなる。そんなジョニーの気持ちを知らずに優はジョニーの質問を欲しい武器は何か？と解釈したため、そのように返答したのだが、ジョニーは全く気付かなかったのである。
「刀使同士で争うかも知れないとか、話題になってたから、だったらそれが邪魔になったとき対処できる物が有れば便利だな、って思ったから今欲しいなって思ったの。」
「……いや、結芽が使ってた刀とかで良いんじゃねえの？」
「それもそうだけど、刀使だった結芽おねーちゃんの刀が血で汚れるの何かヤダなぁ。」
「変なこだわり持ってんなぁ。」
「そりゃあ、……刀使さんが持つのが……御刀だったけ？」
「いや、知らんのかーい。」
刀使が持っているのが御刀という名称だったような気がするのか、首を傾げながら答える優の姿を見たジョニーは案外可愛いなと思っ

た。しかし、ジョニーはそう聞かれても、刀使とかいう者に対して興味がないため、刀使の姉を持つことから詳しいであろう優にツッコミを入れていた。
「うん、話を続けるけど。」
「マイペースだな。」
優の返答にガックシしながら、ジョニーは刀以外の凶器を欲しがる理由を訊くことにした。
いや、ジョニーとしてもそんなものは訊きたくないが、タギツヒメの告白が上手くいくために訊いて、少しでも情報を手に入れようとしていた。
「まあ、ジョニー君の言う通り、刀って人を斬る物だから他の物と変わりないし、別にそれで倒しても良いかな?て最初は思ってたんだけど、刀使って人を守って感謝されるべきだから、だったら御刀で人を斬っちゃうのは善くないよね?だから、僕はあの御刀の代わりになる物が欲しいの。」
「……いや、可奈美って人から人を殺さないこと約束したんだからそれ守れよ。な?」
「?……そんな約束してたっけ?」
「いや、してたよ。」
首を傾げる優の姿を見たジョニーはため息を吐きながら、優に人殺しをさせないようにしていた。
「お前が約束破っちゃダメだろ?」
「……そうだね。」
「そうだよ。」
ジョニーは優から好きな物を聞き出すことを諦め、休日に何をしているのかを尋ね、違う方向から優の好きな物を調べようとしていた。
「じゃあ、最近どこか行った?休日は何してる?」
「病室から出てないかな。……あとは姫和おねーちゃんと話してる。」
「いつも観てる番組とかは?」
「……最近は病室から出てないから、観てないなぁ。」
「……そうだったな。」

ジョニーは優の好きな物を調べようとしていたが、前の返答と同じく素っ気ないものであった。しかし、その返答を聞いたジョニーは優が今現在監禁状態であることを思い出し、何も言えなくなってしまっていたのである。

「……すまん、分からなかった。」
「……うん、まああれだけ喋れれば充分だから、気にするな。」
「仕方ないよね。」
そのため、ジョニーはタギツヒメとニキータに上手く訊くことができなかったことに対する謝意を述べていた。
「……皆、すまんな。後は我はやろうと思う。」
だが、タギツヒメはこれ以上迷惑を掛ける訳にはいかないと思ったのか、後は自分の力のみでこなそうとすることを宣言するが、その宣言にジョニーとニキータは動揺する。
「えっ？お前大丈夫なん!?」
「ね、ねぇヒメちゃん。もう少し時間をかければ解決するかも知れないし……。」
ニキータとジョニーは何とかタギツヒメに思いとどまるよう説得する。
「……すまない。だが、これ以上我としてもお前たちに迷惑を掛けられん。」
ニキータとジョニーに背中を見せながら、上記の台詞を吐くタギツヒメ。
その時ばかりはジョニーとニキータはタギツヒメがカッコイイと思えてしまったとかなんとか……。
「……そうか、頑張れよ。」
「今のヒメちゃんなら、いけるよ！」

ジョニーとニキータは目を輝かせて、タギツヒメのことを見て応援していた。それを知ったタギツヒメは、
（……どうしようか？もう、後に引けなくなったぞ。）
心の中で泣きながら、タギツヒメは優の元へ向かうのであった。

「ヒメちゃん、どしたのー？」
「……お、おう。少し用事があってのぉ。」
タギツヒメは優を呼んで、一人で頑張って告白することにした。
「ワクワク。」「ドキドキ。」
それを結芽とニキータはワクワクしながら見守り、成功したら歓待を以って出迎えようとしていた。
「ねえ、大丈夫でしょうね？」
「まあ、心配なのは分かる。……でもさぁ、ヒメがああ言ってたし、後は信じようぜ。」
「……そうね。」
その一方でジョニーとニキータは不安であった。
タギツヒメが上手くやれるかどうか不安だったのだ。しかし、タギツヒメが一人でやると言っていたので、成功することを信じ見守ることとした。
「……あ、あの、その、す、少し話したいことがあってのう。」
「ん？」
タギツヒメが何やらモゴモゴしながらも伝えようとしていることに気付いた優はタギツヒメを見ていた。
「……あ、あのな。」
優を前にして、タギツヒメは紡ぐ。

「……そのぉ、何というか。」
　告白の言葉を紡ごうとした。
「……いいお天気じゃな？」
「……うん？」
　だがしかし、内心は焦っているせいか、その内容は告白の言葉ではなかった。
（……あぁぁぁぁーーーー!?もう我、何言ってるんだろう!!?）
　そしてタギツヒメは内心物凄くテンパっていた。
「ねえ、大丈夫なの？……アレ。」
「……いや、まだ失敗した訳じゃねえし、……うん、まだ大丈夫じゃ……ねえかな？」
　その様子を遠巻きに見ていたミカとジョニーはどうすべきか悩んでいた。失敗したと見て救援に向かうべきか、それとも。
「……用事はそれだけ？」
「あっ、いや！それだけじゃなくてな!!な!!……我は優に、伝えたいことが、あるんだ。」
　だが、ミカとジョニーの心配を他所に、しどろもどろになりながらもタギツヒメは優に告白しようとしていた。
「……その、我は、」
「……。」
　タギツヒメは必死に言葉を紡ごうとし、告白しようとどうにかこうにか奮起していた。その姿を黙って見守る優。
「……その、あのぉ、……う、……優と、その、えっと、我はス……。」
「ス？」
　タギツヒメは必死に言葉をひねり出そうとしていた。
　ミカとジョニー、そしてニキータとの練習の成果を出そうとしていた。
　そして、タギツヒメは――――!!

――――場面は変わり、刀剣類管理局本部内に居た姫和は上機嫌であった。

その理由は、

『姫和おねーちゃん、スキヤキが食べたいんだけど、良い？』

『!!……ああ、もちろん良いぞっ!!』

と優がスキヤキを食べたいと言われたためであり、姫和は二つ返事で了承。そんな訳で姫和は優の要望に応えるべくスキヤキを頑張って作ることにしたのであった。

牛脂、砂糖、醤油、酒といった調味料。そして、ネギ、しいたけ、エリンギ、シラタキ、春菊、そして１００ｇ３０００円もする牛肉といった食材を揃えており、万全であった。

特に、１００ｇ３０００円もする高級肉はこの日のために買って来たといっても過言ではない。

何故なら、平成生まれの小学生の子供が好きな食べ物ランキングは、

１位／カレーライス
２位／寿司
３位／鶏のからあげ
４位／ハンバーグ
捕捉事項：７位／焼肉

といった肉料理が上位に入る傾向であり、対して平成生まれの小学生の子供が嫌いな食べ物ランキングは、

１位／ゴーヤ（にがうり）
２位／セロリ
３位／ピーマン
４位／梅

といった野菜類が上位に入るということを姫和は有名な情報雑誌

からリサーチ済みであり、ならば勝負に出るところは牛肉であると確信した彼女は、普段なら一切れも買わない高級牛肉を奮発して買っていたのである。

そのうえ、姫和は刀使に対する風当たりが強いこと、中学生ぐらいの刀使の制服を着る少女が１００ｇ３０００円もする高級牛肉を買うのは流石に目立つという理由で、サングラスにマスク、野球帽にコートという出で立ち（姫和なりの完璧な変装。）で購入したのである。

この女、本気である。

早速姫和は調理し始めていた。

先ず牛脂を鍋一面に広げる。その上に薄切りの牛肉を広げ、その肉の上に砂糖をまぶし、砂糖の甘さが肉に染み付いてから醤油、酒を入れるという関西風の味付けで進めていた。

そして、肉６０度、ネギ７０度、焼き豆腐９０度、シラタキ６０度、しいたけ５０度、エリンギ３０度の角度で入れるのが好ましいと聞いた姫和はその通りにし、シラタキのカルシウムの成分が肉を固くしてしまうので肉から離して入れるということも細かく守っていた（※なお、一般財団法人日本こんにゃく協会はそんな事実はないと言っているので、安心して一緒に入れて食べても問題ありませんとのことです。）。

その後、春菊を入れてふたを閉めると野菜から水分がにじみ出るのを3分間かけて待つ。

事実なら、この3分間は〝神の時間〟と呼ぶらしい。しかし、姫和はそれを聞いたとき、恥ずかしいから言わないようにしておこうと心に決めていた。

そんな手間暇を掛けて、スキヤキを完成させた。

……9歳児の優の笑顔を想像しながら。

時間を費やして調理したスキヤキを優の元に持って行く。

「優、食べようか。」

姫和はそう言って、優の居る病室へと持って行った。

しかし――――、

「……あの、そのな、……なんか、本当にスマン。我のせいで。」
「？……あっ、……そうか、タギツヒメか。」
優の雰囲気と口調がいつもと違うのに気付いた姫和は、我という呼称を使ったことで、優の現在の中身がタギツヒメであることが分かった。
何故、優がタギツヒメに変わったのか、経緯を語ろう。
それは、場面は変わって優にタギツヒメが一世一代の告白をするとき、

『……我はスキヤキが食いたいぞっ!!』
タギツヒメは告白の練習の成果を出したのであった……。皮肉にもジョニーと同じ内容であったが……。
その光景にタギツヒメ以外の皆が「えっ？」と言いながら、呆然とするしかなかった。
『……スキヤキ、……スキヤキが食べたいの？』
『！……そそそそうなのだ!!アハ、アハハハハ……。……アハハ。』
優の質問にタギツヒメはＹｅｓと乾いた答えと共に答えるしかなかった……。
ただただ、「好きです。」と言えなかった自分を悔やみ、恥じていたのであった。
『分かった！食べさせてあげるねっ!!』
『わっ、ワーイ。』
こうして、タギツヒメは力ない返事で応えつつ、スキヤキを食べられる権利を得たのであった。
せっかくのチャンスを得ることもできず、そのうえタギツヒメは結芽に自ら残念な本性を晒してしまったのであった……。

「……という訳なのだ。何かホントスマン……。」
「……そうか。」
そんな経緯があり、タギツヒメにスキヤキを食べさせるため、優は姫和にスキヤキが欲しいと言ったのである。

そして、タギツヒメの説明を聞いた姫和は、謎の連帯感と謎の共感をタギツヒメに対して今日抱くのであった。

ほらいずんどうめいが出来そうなぐらい……。

「……とりあえず、いただきます。」

「ああ、どうぞ。」

タギツヒメの食事を始める際の挨拶の声を合図に、姫和と二人で無言の食事を始める。

特にスキヤキの肉は旨かった。流石１００ｇ３０００円もする高級肉であり旨かったが、両者の心は何とも言えない気分となったのである。

（……分かっておった。こうなるオチになるのは分かっておったしっ!!）

だが、タギツヒメは内心でこうなるオチになることは分かっていたと強がりを言って、無理矢理自分自身を納得させようとしていた。

（……なんだろうか、この気持ち。何故１００ｇ３０００円もする肉なんて買ってしまったんだ?）

そして、姫和も冷静になり、何とも言えない虚しい気持ちとなっていき、１００ｇ３０００円もする高級肉を何故買ったのかということについて自問自答をしていた。

「……いや、それよりも泣きながら食うなっ!!こっちも悲しくなるだろうっ!!」

「ええい、うっさいわぁっ!!こうなりゃ、ヤケ食いじゃあっ!!!」

だが、タギツヒメが泣きながらスキヤキを食べていたので、それを姫和が注意したため、最初の無言の食事から一転、騒がしい食事となっていた。

「もう、こうなったのも全て可奈美お義姉様が悪いのじゃっ!!龍眼が役に立たないとか何じゃあのチート!!!おかしくないか!!?」

「おっ、おい……。」

優への告白が上手く行かなかったせいか、可奈美に八つ当たりを始める大荒魂の片割れことタギツヒメ。当然、姫和はそれを止めようとするが、それが原因なのか、余計にヒートアップするタギツヒメ。

「だいたい、立ち会い立ち会い立ち会い立ち会いと何回やれば気がすむのだあの脳筋剣術バカもといキチガイバーサーカーは、そのせいで我は可奈美お義姉様に勝って優を奪い取るということができんからこそ、こんな苦労をしているというのに……、というか何なのだあのキチガイ剣術オタクバーサーカーは!!我の龍眼が児戯に等しいとか、あれはチートだチート、もしくは不正行為!!」

「……。」

可奈美に対する鬱憤を吐き出すかのように更にヒートアップするタギツヒメ。それを黙って聞いている姫和。

「というか、幾つになってもあの調子だと嫁の貰い手が居るのか?キチガイ剣術オタクバーサーカーとか、かなり需要が限られると思うのだが……。そうなると、可奈美お義姉様を置いて我が生涯の伴侶と先に付き合うこととかできんから結局苦労するの我ではないかっ!!」

更に更に鬱憤を吐き出すタギツヒメ。

「というか冷静に考えてみたら我は頭のいい方であって、神でもあるのに、可奈美お義姉様は立ち会いをプレゼントすれば喜ぶ脳ミソ緩いチョロインだからな!そこを考えると我の方が敬われるべきであろう!!?」

『……ふぅん?』

「……ファッ!?」

可奈美を不正行為、チート、脳筋剣術バカ、キチガイ剣術オタクバーサーカー等と呼んでいたタギツヒメは、何処からともなく可奈美の声が聞こえたせいか、顔を真っ青にし、声を上擦らせながら周りを見回していたが、可奈美の姿が見えないことに顔を歪ませる。

「……タギツヒメ、言う事がある。」

姫和の声に応えるかのように、タギツヒメは姫和の方へと顔を向ける。

「……実はな、この病室は監視カメラで見られていて、スピーカーで向こうに居る可奈美と会話できるようになっている。」

「……もしかして、今の会話は?」

「全て、可奈美に聞こえている。」

「」

タギツヒメは刻が止まったかのように固まっていた。

『……ねえ、タギツヒメ。……誰が、脳筋剣術バカで、誰がキチガイ剣術オタクバーサーカーだったけ？』

「いいいえ、いえいえいえいえいえ可奈美お義姉様に、そ、そぉんなことは言っておりませぬぅ!!」

『へぇ。じゃあ、誰が不正行為したのかな？』

「!……ハイ、可奈美お義姉様本当にスイマセン。本当に、スイマセン。我、心を入れ替えて参る所存でございます。」

可奈美は優しげな声で誰が脳筋剣術バカなのか？誰がキチガイ剣術オタクバーサーカーなのかとタギツヒメに尋ねているが、誰もが怒っているということは気付いていた。

そして、自称神ことタギツヒメはプライドも威厳もかなぐり捨てて監視カメラを前にして綺麗な土下座を敢行していた。

こうして、タギツヒメを中心とした一騒動は終わったのであった。

そして――――。

「――――（中略）――――でな、優がな、それでな？――――（省略）――――。」

「……うん、そうなんだ……。」

あの告白騒動以来、結芽はタギツヒメに対して憐れみの目で見ることになった。

そして、タギツヒメは結芽の最近の自身の扱いが悪くなっているように思い、悩むこととなる。

埋伏の毒

箱根山にて荒魂掃討作戦が開始されている同時刻にて、綾小路武芸学舎学長執務室――――。

「……では、燕　結芽が何処でノロのアンプルを入手したか、もしくはそれを使用した理由については知らないと？」

綾小路武芸学舎学長相楽　結月はソフィアに鎌倉での大量のノロが漏出した事件、四カ月前の折神家で起きたことについて詰問していた。

「ええ、ですが、親衛隊の結芽隊員がそのようなこととなっているとは思いもしませんでしたが……。」

「となると、結芽……親衛隊第四席がどのようにしてノロのアンプルを入手したか本当に分からないのか？君は第四席の結芽と親しかったようだが？」

「そのような話が出回っているとは知らなかったのですが、親衛隊第四席とは交流を持っていたのは事実です。……しかし、ノロのアンプルを何処で得たのかについては私にも分かりかねません。」

ソフィアが結芽と個人的な交流を持っていたのを認めた理由は、結芽がソフィアと立ち会いをしていたという目撃情報があること、親衛隊の権限を使ってソフィア達を招聘したという事実がある以上、隠すことはできないと判断したからである。そのため、ソフィアは結芽と個人的な交流を持っていたということだけは嘘偽りなく結月に答えていた。

「ただ、石廊崎にて親衛隊との共同作戦を失敗に終わらせてしまったのですが、そんな私を紫様護衛の任に指名してもらい、本部へと出向したにも関わらず、燕　結芽隊員がノロのアンプルを使い〝荒魂の力に頼った刀使〟としてしまったことで刀剣類管理局の名に傷を付けたことに関しては、私の責任ではあります。」

ソフィアは悔やんでいるかのような顔をして、石廊崎での親衛隊との共同作戦を失敗に終わらせたうえ、紫の護衛として本部に出向し、

結芽の近くに居たにも関わらず、結芽の近況に気付かなかったばかりに〝荒魂の力に頼った親衛隊の刀使〟として結芽は有名となってしまい、刀剣類管理局の名に傷が付いたことは自分の失態であるとソフィアは白々しく言っていた。そのソフィアの悔やんでいる姿に、わざとらしさを感じた結月は若干勘に触ったが、表情に出さず、出来る限りいつも通りに接するようにしていた。

「……ふむ。では、大規模停電後はどのような行動をしたのか述べてもらおう。」

ソフィアは、この査問委員会のような事実確認をするということは結月学長はこちらを疑っているということだろうか?と勘繰っていた。そのため、ソフィアは内心〝障害でしかない結月学長を如何にすべきか?〟を考えてながら、結月の詰問を返答することにした。

「……大規模停電後、私の隊は周辺の荒魂出現の対応に追われました。」

「ノロの回収車の手配をしていないようだが?」

「恐らくですが、突然の大規模停電による混乱が原因で誤報が多くなったのでしょう。……不安に駆られた市民が何かと見間違えたか、それともスペクトラムファインダーに何かが起こったのかは定かではありませんが、荒魂は居ませんでした。」

いけしゃあしゃあと嘘を述べるソフィア。実際は荒魂出現の対応に追われていたのではなく、刀剣類管理局の威信を低下させるために荒魂と化した燕　結芽の撮影をし、スレイド博士の依頼遂行と鎌府の研究成果を得るために皐月　夜見と高津　雪那の両名の拉致工作をしていたのである。

「……では、質問を変えるが、鎌府女学院の高津学長と親衛隊第三席の皐月　夜見が行方知らずなのだが、それも知らないと?」

「私の部下が、何やら黒っぽい服を着た怪しげな者を見たと言っております。可能性としてはこの者が怪しいでしょう。」

「……そうか。」

その黒っぽい服を着た怪しげな者が自分の部下であるということを省きながら説明するソフィア。人数、顔といった特徴を省いて説明

したのは、後の説明で齟齬が生じるのを避けるためである。
「……分かった。では、もう一つ尋ねるが君の部隊は勇猛であると聞いてはいたが、紫の警備任務に就いてからは特に目立った活躍はしていないようだが、何か有ったのか？」
　これ以上、同じやり方でソフィアを問い詰めても無意味であると判断した結月は、別の方向から攻めようとしていた。
「……私の部隊は、いや刀使は荒魂という異形の怪物を討伐するのが主任務である以上、警備という専門分野から外れたことをしたので目立った活躍はできなかった。……というのが、私の見解です。それと、私個人の見解ではありますが、今後の我が隊の課題は、……いえ、局長襲撃ということが有った以上、今後の特別刀剣類管理局の課題は重要人物の警護も視野に入れ、現在局長代理である朱音様の警備体制を見直すか、警備を専門とした部隊を新たに創設することが必要であると思われます。……それが、私が紫様の警備に就いたときに得た唯一の成果であります。」
　しかし、ソフィアは涼しい顔をして答えて、結月の攻めを空振りで終わらせていた。
　実際、ソフィアが紫の警備に就いたときだけ、目立った活躍をしなかったのは事実である。
　その理由は、結芽と夜見を追い詰め、親衛隊を瓦解させる工作と朱音に海自の哨戒ルートの情報を朱音に秘密裏に渡していたため、本来の紫の警護という任務が疎かになっていたのが真相ではある。にも関わらず、ソフィアは元々刀使は荒魂退治を専門としていたのに、警備という専門外の任務をしていたから不備が有ったと弁明し、そのうえで自らの部隊と同様に刀剣類管理局は警備も含めた組織改革をしなければならないと提言していた。
「……なるほど、刀剣類管理局の警備体制に不備が有ると？」
「親衛隊が瓦解している今、それが急務であると考えられますが？」
　そうして、ソフィアは結月の自分への疑いの目を刀剣類管理局の警備体制の不備という問題へと意識を変えさせようと目論んでいた。
「……それと、これは一部の学生内での噂なのですが、第四席は件の少

年に討たれたという話が広まっています。真偽の程は如何に？」

「……それを聞いてどうする？」

「そうですね、……親衛隊第四席燕　結芽は我が母校の出身者でもありますので、その〝お礼〟がしたいですね。本部長となった長船学長も綾小路にスパイなどを送り込みましたから。」

　そのうえで、ソフィアは優が結芽を殺したのでは？と一言添えていた。その目的は、結月が結芽のことを大事にしていたことはソフィアは知っていたので、それを利用する形で結月の疑惑の目をソフィアから優に変え、結芽を殺した優を保護する今現在の舞草中心の刀剣類管理局と、その本部長でもある長船学長の紗南に疑いの目を向けさせようとしていた。

　そして、ソフィアが言う〝お礼〟とは、結芽を始末してくれたことに感謝しているという意味であり、決して仇討ちをするという意味ではない。

「結芽は血の滲むような努力で綾小路随一の実力者となったのでしょう。それは学長自身が一番お分かりのはず、……結芽が相手では並大抵の刀使が適うはずもありません。とすれば、誰が倒したのでしょうか？」

「……。」

　ソフィアの芝居がかった話を聞きながら、結月は少し苛ついていた。

　結芽が件の少年こと優に惨殺される場面を少しでも想像したのもそうだが、四ヶ月前の結芽に起きたことを契機として疑っているソフィアが結芽のことを何食わぬ顔して下の名前で親しげに呼んでいることが最大の要因でもあった。

「そういえば、件の少年は一時期舞草がノロに人体へ注入した改造人間であったとか折神家が公表していましたね？鎌倉でのノロの漏出事件と横須賀湾での大規模停電によって、結局は有耶無耶となりましたが……。それと長船のスパイと何か関係が――」

「……そうか、分かった。時間を取らせて悪かった。また、何か分かったなら、連絡してくれ。」

スラスラと芝居を続けるソフィアに、結月は今後の刀剣類管理局にとって不穏なことを喋るだろうと判断し、否定の言葉と共にそれを遮る。

「どうして、止めるのです？」

「仮に事実だとしても、私が管理局を二つに分けることになるような事態とそれによって生ずる混乱は避けたい。」

「……元綾小路の学生が犠牲となっているのにですか？」

「管理局の風当たりが強い今、そんな不確実な噂を頼りに衝突を起こせば、どのような謗りを受けるか分かるだろう？……今の発言は聞かなかったことにする。」

ソフィアの結芽への復讐をすべきだという誘いに結月は刀剣類管理局を二分にして、国民の不安を煽るようなことをしたくないのと、綾小路の学生達を争いに巻き込みたくないがためにソフィアの言い分を叱責する結月。

なお、叱責だけに留めたのは、仮に帯刀権を奪えば、その理由を問われることとなり、結果ソフィアの考えが旧折紙　紫派に広まり、それに感化した一部の学生が過激化するのを妨げるためである。

「……そうですか、では失礼致します。」

ソフィアはそう言うと、綾小路武芸学舎執務室から退室していった。

「……。」

結月は、ソフィアが退室したことを確認すると、何やら思案した後は電話を取っていた。

『もしもし。』

「……結月だ。穂積か？」

結月はソフィアの副官的立場である穂積と連絡を取っていた。

『……学長。どうかしましたか？』

「ソフィアが最近、妙に活発的になっている。何か心当たりはあるか？」

『……そこまでは。』

「……そうか。」

穂積はソフィアの副官的な立場に居る人物だが、元はソフィアの動向を探る、もしくは動きを制限させるべく送り込まれた結月のスパイである。

『……申し訳ありません。中々、ガードが硬いようで……。』

「いや、ご苦労だった。あの女は何やら行動を起こそうとしている節がある。スパイ活動を中止し、こちらに戻ってこい。」

これ以上、ソフィアのグループに潜伏するのは穂積が危険だと判断した結月は、撤収するよう指示をするが、

『……学長。まだ何も掴めないまま撤収はしたくありません。苦労してターゲットのすぐ近くまで近付きました。あともう少し、もう少しなんです。』

「しかし、『学長。』」

結月の撤収するようという指示を却下する穂積。しかし、結月は再度撤収するよう穂積に伝えるが穂積にそれを遮られる。

『私は自分を偽って潜入し、辛いと思ったことはあります。しかし、この任は重要なことであると私も理解しております。』

「……分かった。但し、少しでも不味いと思ったら撤収しろ。成果は問わん。」

『……ありがとうございます、学長。』

しかし、〝使命感〟がそうさせるのか、穂積は撤収することを固辞していた。

結月はここまで決意が固いのであれば、撤収させるのは無理だろうと判断し、穂積に自身の生命を第一にしたスパイの活動の継続を命じた。

その数日後、そんな状況の綾小路武芸学舎にて、一人の男が来ていた。

（……来るのが、早すぎたかな？）

その男、望月　和樹はとある噂を聞き、綾小路に尋ねて来たのである。

その噂は、綾小路が荒魂を人体に注入する実験をしているだとか、刀剣類管理局の仮本部としても機能するほど折神家と密接な関わりがある綾小路が何のお咎めもないこと、そのお咎めもないことから横須賀港の大規模停電は綾小路も一枚噛んでいるのではないのかといった噂である。

普段の彼なら、そんな話は気にも留めなかった。

だが、彼からしてみても、舞草が中心となって再編成されつつある刀剣類管理局。それにも関わらず、舞草が中心となった刀剣類管理局が旧折神　紫派に属していた綾小路が何のお咎めもないのは妙なことであり、今も尊敬している相楽　結月学長が何か身動きが取れない状況か、若しくはあの舞草と何らかの関わりを持ってしまったのかと勘繰り、此処に赴いた――という経緯があったのである。

相楽学長は大丈夫だろうか――？

そんな思いを抱きながら、綾小路の門近く前まで来ると、綾小路の刀使に学長からアポは取っていると説明したのだが、やっと確認は取れたのか、綾小路武芸学舎の校内に入れたのである。

こんなフリーターだから、長いこと待たされたのだろうか――？

まともな職に就ければ良かったのだろうか――？

和樹には、そんな思いが過るが、現在この国は不況なのである。そんな理由で働き口が派遣社員しかなく、精一杯頑張ったが、勤め先から突然不況で仕事が無く、内定を取り消され、解雇を言い渡され正社員になれなかったのである。

不況となったのは無理な増税が最大の理由であると誰もが解りきったことではあるが、荒魂被害による道路と建物の復旧、対荒魂装備の開発、社会福祉の充実といった理由を財務省から述べられると皆、従順な犬のようにそれを受け入れ、そのしわ寄せが自分のような非正規の労働者を追い詰めている。と和樹は思うものの、食費も抑えなければならない生活では、何かしら活動をするという気力もなかった。

なお、和樹は知らないことだが、四ヶ月前に局長襲撃があったため、警備が前より強化されているのだが、局長襲撃事件が公表されなかったため、和樹は知らないのであり、まともな職に就けなかった自分はこんなに待たされ、こんな扱いを受けるのだろうか?と内罰的なことを思ってしまう。

(……学長は今どうしているだろうか?)

だが、そんな思いとは裏腹に未だに思いを引き摺り続ける結月に一目会おうと、和樹は綾小路の刀使三名の案内に導かれるまま、綾小路武芸学舎にある学長執務室へと向かうのであった。

「……学長、お久しぶりです。」

和樹は先ず結月に挨拶していた。

面倒を見てくれていて、今も尊敬している彼女を見て、少し安堵していたが、体つきから見て、少し痩せたようにも見えた。

「……和樹君、何の用だ?」

「いえ、ただ学長がどうなっているか見に来ただけというか……。」

和樹はどう話そうか悩んでいた。

天然理心流を学んだ最大の理由でもある憧れの結月学長と近くに話せることでやはり緊張してしまったのか、和樹はなかなか本題に入れなかった。

「……要件はそれだけか?なら、帰れ。」

結月は若干苛つきながら答えていた。苛ついていたのは、ソフィアが妙な言動をしたからだが、その場面に居合わせていない和樹は結月さんらしくないなとつい思ってしまい、和樹は臆してしまう。

「……その、結月学長。尋ねたいことがあって……。」

しどろもどろに言いやがって、もう少ししゃんと出来ないのか――
――？
和樹は、心の中で愚痴る。
「何だ？」
結月に問い詰められたため、和樹は更に臆してしまうが、若干焦り、しどろもどろになりながらも答えていた。
「……その、荒魂を人に融合させる実験をしているという話を聞いたので、それで結月学長に何かあったのかなと思って、それで居てもたってもいられなくなって、大変お世話になった結月学長に何かあったらと思いまして、僕に何か出来ることとか有れば手伝おうと思いまして……。」
自分は何を言っているんだろう？何ができると言うのだろうか――
――？
和樹は、そう心の中で愚痴る。
「……ああ、そういうことか。」
結月は、和樹の自分の身を案じて来てくれたという意外な返答に少し拍子抜けしたのか、それとも気が和らいだのか、結月の苛ついていた気持ちは少し治まっていた。
「……案ずるな、何の問題はない。此処のところ少し鎌倉でゴタついていてな、それで余計な行動をしてしまって、そういう噂が立ったのだろう。君が気にすることはない。」
それに、彼は刀使だった妹さんが怪我で引退したという暗い過去がある以上、彼にはこれ以上、この件には首を突っ込んで貰いたくないのも理由の一つだった。
「……そうだったんですか。」
和樹は、そう返事するものの、
本当に――？
と問い質したかった。だが、和樹は定職に就かず、今もフリーターの自分がこれ以上何を問い詰めても結月を苦しめるだけだと思い、それ以上は何も言えず、退室して行った。
そして、退室した和樹を見ている者が二人居た。

「……あんな男を使うんですか？何の力もないのに？」
「そうだ。刀使でもない力の無い男だからこそ、出来ることがある。」
ソフィアと静の両名であった――――。

綾小路武芸学舎学長執務室から退室して数時間後、和樹はとぼとぼと力なくうなだれながら歩いていた。
先ほどの何の進展もなく終わらせてしまった結月との会話をした自分に苛立っていることもそうだが、この間まで、派遣社員としてとある会社で働いていたのだが、派遣切りに遭い、解雇されてしまったことで自暴自棄気味だったこともある。
『――――荒魂事件に巻き込まれて遅れただぁ!?こんなご時世にお前は何刀使さんのせいにしてんだよっ!!』
後ろ向きな気持ちだったせいか、解雇される前のことを思い出してしまう。
高校を卒業し、派遣社員として会社に勤めていたものの、刀使だった妹が怪我を理由に辞めてしまったことがトラウマでその会社に馴染めなかったことが原因で上司と反りが合わず、勤めていた会社を辞めた。そのときの上司は、和樹にとって良い上司ではなかった。
とにかく自己責任論者で、今もバブル世代の考えに染み付いていたので、気弱な和樹のことを嫌っていたのだろう。
――――あのときは本当に荒魂事件のせいで電車が遅れたのに、あの上司、僕の言い分を全く聞きもしやがらない。
和樹は、そんな今のカッコよくない自分自身の過去を思い出し、更に心が空しさと、悲しさ、苛立ちを内心感じてしまった。
最初の勤め先がそんな上司が居るところだったから、ケチが付いたのか、その後の和樹の人生は落ちるのみであった。

再就職先を見つけようと躍起になっても、奇妙な圧迫面接で不採用となることが多く。

やっと、再就職先が見つかったとしても、待遇が悪すぎるブラック企業であり、しかも不当解雇されてしまう。

大した職も見つからないことに親から「早く正社員になりなさいよ。」といったことを言われ続けることに、まともな就職先を得られた妹と比べられることに、やるせなさと不甲斐なさしか感じない自分に嫌気を差しながら歩き、自分が住んでいる安アパートに着くと、自分のロッカーに封筒が入っていた。

普段の和樹なら、気にもしないだろうが、宛名が綾小路武芸学舎と書かれていたせいもあって、学長からだろうか?と有りもしないことを考えながら、その封筒を手に取り、中の手紙を見るのであった――。

荒魂と人の境界線

和樹は自分のロッカーに入っていた封筒の中に入っていた紙に書かれていた場所まで来ると、一人の可愛らしい少女が待っていた。
「望月さん、ですよね？」
声を掛けられ、ドキッとする。
和樹は、今まで女性とまともに喋ったことが無い、いや正確には会話すらしてこなかったのだ。
和樹の内気な性格が災いして、女性に対して苦手意識があった。そのため、先ずはどう喋るべきか迷っていた。
「……えっ、えと、そうです。」
少し情けない顔をしながら答える和樹。
それに、気づいているのか気づいているのか、今の和樹には分からないが、待っていた少女はそんな和樹のことを理解していた。
「……そうですか。はい、こちらにどうぞ。あ、あと私は大村　静といいます。宜しくお願いしますね。」
「あっ、はい、よろしく……。」
和樹は、しどろもどろになりながらも静に応えていた。そうして、静に導かれるままにある部屋へと案内される。
その部屋には、既に外国人らしい女性と何人かの刀使が居た。
「先ずは初めまして、望月さん。私はソフィアと言います。」
「あっ、……どうも。」
綺麗な女性から声を掛けられたせいか、動揺する和樹。
「……あの、どうして僕を呼んだんですか？」
和樹は此処に読んだ理由をソフィアに尋ねていた。
「……実は、我が母校の綾小路の立場が危ういこととなりましてね。そのために、貴方の協力が欲しいんですよ。」
「……どういうことです？」
和樹は、ソフィアの急な協力の申し出を訝しんでいたが、和樹は自分でなくてはならない理由があるのだろうかと心の中で少し期待し

ていた。そう、就職先で失敗し、不況のせいで今もフリーターになるしかなく、何の取り柄も無い自分に何か出来ることが有るのならと期待し、和樹はそれが本当なら少し嬉しいと思い始めていた。
「今現在の刀剣類管理局は舞草が中心となっているのは知っていますね？」
「ええ。」
「それ故に、紫派であった綾小路の政治的立場は非常に危ういものとなりました。そのため、貴方の協力が必要なのです。」
「……。」
和樹はソフィアの話を黙って聞いていた。
だが、ソフィアの話には、嘘が入り混じっていた。
綾小路学長の結月は、大荒魂に憑依されていた紫と協力してノロを使った新薬を開発していたのだから旧折紙　紫派と言えるのであるが、実際の綾小路の政治的立場はまだ健在であり、危ういものではない。その理由としては、結月と同じく朱音も綾小路と事を構えて、刀剣類管理局を二分するような事態を避けたいのが理由であり、朱音としては特段綾小路をどうこうする積もりは無いのである。
しかし、刀剣類管理局がそのような状況となっていることを知らない和樹にとっては唯一の情報であったので、綾小路の刀使であるソフィアの話を信じてしまう。
「今、綾小路はその紫派と管理局派で分かれており、分断寸前という状況です。」
「えっ？」
流石の和樹もその話に度肝を抜かれた。だが、実際には紫派と管理局派は存在しない。
より、正確に言うとソフィアと旧折神　紫派を中心とした派閥と旧来から綾小路に所属する結月を中心とした派閥に分かれているのが事実である。
だが、そんな裏事情まで知りもしない和樹はそれを信じてしまう。
「実は、我々紫派は内密に荒魂と人体の融合をしていたのですよ？」
「……は？」

和樹は度肝を抜かれていた。
何故そんなことをバラすのか？
何故そんなことを言うのか？
考えが纏まらない――――。彼女達は何が目的なのだろうか？といったことを和樹は考えていた。
「現在の綾小路は舞草が中心となった管理局に糾弾されております。……もし、この研究が公となれば結月学長は綾小路を去らねばならず、そのうえ今の刀剣類管理局ならば、これ幸いとばかりに大規模停電と横須賀湾での乱闘騒ぎの責を取らせることで自らの権力と権威を磐石にしようとするでしょう。綾小路出身の刀使達もどうなることか……。」
和樹は唖然とするしかなかった。
荒魂と人体の融合を綾小路がやっていた――――？いや、結月学長はこのことを知っているのか？と和樹は疑問に思うが、先程、ソフィアが『我々紫派は内密に……』と言っていた。なら、結月学長とは何も関係が無いのかも知れないと思ったが、和樹はソフィアに〝結月学長は関係無いのか？〟と尋ねることができなかった。
もし、和樹が思った通りに関係が無い場合、彼女達に結月学長以外はどうでも良いのか？と思われそうな気がしたことと、そのままの足でソフィア達が管理局に突っ込むのではないかと危ぶんだため、和樹は何か良い言い方は無いかと考え込んでしまう。
そして和樹は、この前結月に会ったばかりだというのに、そんなことすら気付かなかったことに……。そして、綾小路がそんな状況に陥っていることに気付かなかった自分に罪悪感を感じていた。
そのため、
――――何が自分にできることはないか、……よくもそんなことが言えたな、和樹!!
と、和樹は内心愚痴る。……尊敬している結月学長がそのような状況に陥っているのに、何も気付かず、のほほんと何かできることはないか？と尋ねた自分を恥じていた。
「それを知った我々はあのノロのアンプルを使って、管理局を襲撃し

ようと思います。」
「なっ!!」
考え込んでいる和樹を尻目にソフィアは更に和樹にとって目眩がするようなことを言う。
そんなことをすれば、生徒のことを一人一人大事にする結月は悲しむだろうと思い、なりふり構わず止めようとする。
「そんなの、そんなの間違ってるっ!!」
和樹はソフィア達を叱責していた。
年頃の少女が荒魂を自らの体の中に入れてまで、綾小路のために戦うのは、どう考えても忌むべき考えだと和樹自身も思ったし、それよりも刀使同士が、いや年頃の少女達が血で血を争うこととなるのは見たくないのである。
「とは仰いますが、今や管理局は舞草の言われるがままです。その証拠に彼らは古来のやり方と言って荒魂と強調すべきだと言いつつ、荒魂と人体の融合をしているのです。そのうえ、鎌倉でのノロ漏出事件、横須賀湾での大規模停電の責を負わせようとしているのです。……そんな管理局に一矢報いて何が悪いのでしょうか?そんな横暴を見過ごすことができますか?」
だが、ソフィア側も一歩も引かず、刀剣類管理局の横暴に立ち向かうとそれっぽいことを言っていた。当然、ソフィアが語っていた鎌倉特別危険廃棄物漏出問題と横須賀湾での大規模停電の責を綾小路に取らせるというのは虚偽である。
だが、和樹は今の刀剣類管理局が舞草中心の組織へとなっていることと、鎌倉でのノロ漏出事件の失態以降は荒魂事件を頻発させてしまったことにより、今の刀剣類管理局は前よりも風当たりが強くなったことは和樹も知っているため、その風当たりを緩和させるため、権力と権威を磐石にするため、尊敬する綾小路学長の結月に責を取らせる事にしたのだろうと和樹は勝手に思い込んでしまった。それ故に、和樹は今の刀剣類管理局は舞草が好き勝手なことが出来るように、独裁が行われているかのように感じてしまった。
そのため、刀剣類管理局にソフィア達が反乱を起こそうとしている

ことを言えば、政争の具にされてしまい、憧れている結月が只では済まないだろうし、ここに居る刀使達も暴走し手酷く傷付いてしまう恐れがあった。だから、和樹はソフィアの反乱を刀剣類管理局に伝えるという選択肢を放棄してしまう。

そのため、和樹は今も生徒を大事にしていて、今も憧れている結月とその生徒達、管理局を二分した刀使同士の争いを回避し、救う手段は何かないかを必死で考える。

(…考えろ、考えろっ!!少しでも良いから、何か彼女達の矛を収められるだけの理由を!!)

和樹は刀使としての力もなく、ただのフリーターでしかなかった自分にできることを求めた。渇望した。

(先ず、今の刀剣類管理局は信用できない……!)

そして、和樹は結月とここに居る刀使達を苦しめている今の刀剣類管理局を全く信じず、ソフィア達が行う決起を刀剣類管理局に伝えるという選択肢を棄てていた。

(……そして、どんなことがあっても刀使同士の争いを回避させる!)

刀使達、いや年頃の少女達が傷付くようなことを一時的でも良いから、避けられる方法。

(……そのために、僕にできることは……!!)

そして、思いつく。

「……なら、僕をそのノロのアンプルで強化してくれ。」

「!……それで?」

ソフィアは事が上手く運んだと内心喜びながらもその心を気付かせることもなく、和樹にその後はどうするのか尋ねていた。これで、和樹を説得させることはないだろうと思いながら……。

「そのノロのアンプルは刀剣類管理局に一矢報いることができるほどの強力なんだろう?それなら、僕に入れる方が良い?」

「……理由は?」

和樹はとにかく何でも良いから、彼女達を止めようと躍起になっていたためか、自分の体に荒魂を入れて強化しろと言ってしまった。自分でも、何故こんなことを口走ってしまったのか理解できなかった

が、言ってしまった以上、どうにかそれに賛成するようにしなければならないと必死に思い、それを行うに値する理由も述べなければならないと、和樹は必死に考えていた。
「確か、親衛隊の二人がノロの力に頼ったとかで糾弾されていたよね？」
「ええ、そうですが？」
「なら、綾小路に関係がなく、刀使でもない僕がやれば、綾小路の名前と君達が傷付くことは無いよね？」
「そうですね……。」
ソフィアはそう言うと、申し訳なさそうに俯きながら答える。
だが、親衛隊の二人がノロの力に頼ったというよりも、正確にはソフィアが結芽をノロのアンプルを自らの身体に入れるよう唆したうえ、荒魂化させて優に殺されるように工作し、夜見は騙して協力させたうえ、荒魂化するほど追い詰めたあとにスレイドに贈与したのだ。
しかし、そんな事実を和樹は知ることはなかった。
「……成功しなかったら、君達はどうなる？君達にはまだ将来があるんだ。だから、それは僕が受け入れる。君達が受ける必要も無いんだ。それに、僕は刀使じゃないから、君達には迷惑を掛けないから、君達も自分の身体は大事にしてくれ。」
彼女達の将来がそんなもので潰れるくらいなら、碌な職に就けないフリーターで、将来も無い男がやるべきだろうと、和樹は判断した。
（それに、僕は……結月さんのこと、何一つ気付けなかった……今度は、僕が助けるんだ。）
和樹は、そう心の中で罪悪感を感じながら呟くと、更に自らの決心を固く、強くする。
そして、結月学長のお陰で今まで生きてこれたから、その恩返しをする時だろうと思い込み始める。それに、もう自分には失う物など、何も無いのだからと、和樹は心の中で納得させて……いや、そう思い込むようにしていた。結月と刀使達が傷付かないようにするため、自身の身体をノロの力で強化し、今の刀剣類管理局を相手に戦うしかないと……。

「……協力、感謝致します。」
あとは、彼の進むレールを用意するだけ、……ソフィアは内心そう呟きながら微笑んでいた。

数時間後、和樹の体内にノロの入れて強化する手術を終えたスレイドはソフィアと話していた。
「……夜見さんを使うことができないから、彼を使うということですか？」
「不服か？」
「出来ないことは無いが、私は元々、鎌府で年若い子の刀使達に神聖な荒魂を入れて強化するという実験をしていたのだよ。……私の実験は、こう、もう少し若い子の方が脳の適応能力が高いから……その、ねえ？」
スレイドは元々、鎌府の研究機関で刀使とノロが融合し強化するという実験をし、そして刀使でもない子供に荒魂を注入して身体強化をするという狂気の実験をしていたのである。そんな彼でも、成人男性に荒魂を入れて、刀使以上の力を付けさせるというのは初めてであった。
「つまり、子供が良いと？」
「そうだよ。でも、この研究は素晴らしいとは思わんかね!!?」
だが、研究の話に少しでも触れたのが良くなかったのか、急に声を上げ、饒舌になるスレイド。
「ええ、力を得られるという点に置いては素晴らしい研究であると常々思っております。」
「……まあ、大体の人はそう思うだろうねぇ、そう思うよねぇ？……でも、私がこの研究に打ち明けるようになったのは、やはり、やはりというか、あの２０年前に大量のノロを持ち帰ろうとした輸送船に乗っ

たのは正解であった！正解であった!!……そうでなければ、私は私の道を導いてくれる〝神〟に遇えなかったであろう、〝神〟の恩寵に受けることもなかっただろう、〝神〟の福音を聴くこともままならなかっただろうっ!!もし、〝神〟に遇えなかったなら、私は冒涜を犯す配信者となったままだったろう……。」

スレイドはその時を思い出したのか、やや興奮気味にその時のことを語っていた。

２０年前の大荒魂のあの禍々しい姿に見蕩れたことから人体と荒魂の融合の研究は始まったと、そして彼にとって大荒魂の姿は神々しく見えたと云って。

「そして、その後にその〝神〟から荒魂と人体を融合の研究をしろと言われれば！これこそ私が信ずる〝神〟が与えたもう使命だとは思わんかね、思わんかねぇっ!!!!……あの時、誘われたときは正に〝神〟からの天啓だと思うたのだよ。」

スレイドは妙な言い方をするが、要はスレイドは２０年前の大荒魂と出会ったことで自身が進むべき道を垣間見たと述べていたのである。

「……ドクター、貴方は無神論者であった筈ですが?それに、人を襲う荒魂はどう思われます?」

だが、それなりに付き合いのあるソフィアは何を言っているのかは理解していた。だが、少し意地悪を言いたくなり、それを言ってみることとした。

「私は今や改心し敬虔なる信徒の一人となったのだよ。……しかし、もし、そのような迷える子羊が居たら、神の信徒が教え諭さねばならんだろう?いや、神の元へ還らせるべきかも知れん。」

ソフィアの意地悪な質問に、スレイドは２０年前の大荒魂を信仰する敬虔な信徒の一人であると自称し、そのうえで人を襲う荒魂は迷える子羊として処理し、自身が信仰する神の供物にすると大真面目に言っていた。

「しかし、しかしだ。管理局が昔はノロを祀っていたということを隠していたのはいけない、いけない子供達だ。それに、荒魂だからとい

う実に下らない理由で神ではないというのもそもそもだ。そもそも可笑しな話ではないかぁ？神の言葉を記した聖書通りであるなら完全なる神が不完全な人の姿をしていること自体が可笑しいではないか？あのような御姿こそ神に相応しいとは思わんかね。思わんかねっ!?」

そして、スレイドは自らの持論を語る。

神の御言葉を記した聖書に神は完全な存在であり、人は不完全な存在であると書かれていて、その通りであれば完全たる神が人と同じ姿な訳がない。ならば、２０年前に自分が見た大荒魂の荘厳なるあの御姿こそ、神と呼ぶことに相応しいと熱く語る。

「……まあ、私としても２０年前の姿を拝見したく思いますが。」

「そうであろう。そうであろう！君のような信心深き者が共にすれば、我が神は嘗ての御姿でこの地に舞い戻られるであろう。」

そのうえで、スレイドはタギツヒメを２０年前当時の姿に戻したいとソフィアに語る。それに、ソフィアは同意していた。

「……だが、その〝神〟の御心を今なお管理局は理解できないでいる。……嘆かわしい、実に嘆かわしいことだ。」

「どう嘆かわしいので？」

「考えても見たまえ考えてもみたまえ!?たかが荒魂と人体を融合させることが何が悪いことなのだ？御刀が使われている珠鋼とノロは元々一つであったのだろう？ならばノロと珠鋼はどう違うというのかね？周りが〝ノロは穢れの元〟だという言葉だけで振り回されているか怖がりなだけではないのかねぇ!?……理解のない人間ばかりだからこそ敬虔なる私を世間は背信者としたのだ。」

「……世間がもっと間違っていると？」

「そうだそうだ！奴等の言っていることが正しければ、清く美しい御刀が選んだ少女が荒魂と殺し合うということの方が最も素晴らしい形であるということなのだろう。だが、そんな彼等はそう嘯きながら、その嘯いたその口で、〝子供達に任せるのは忍びない〟と言うのだ!?なら私が子供にノロを注入することの何がいけない？ノロに選ばれし子供達であると何故思わん!!?」

自身を認めなかった世間に対して言っているのか、熱を込めながら言うスレイド。

「ノロと融合できた彼等はただ単にノロに選ばれただけだっ!!御刀に選ばれた者を刀使と呼び敬うこととどう違うと言うのだぁっ!!!狂っているのは私か、それとも御刀が選んだ子供と荒魂が織りなす殺し合いを観たがる世間がそんなに、そんなに素晴らしいことなのかっ!!?なら、〝子供達に任せるのは忍びない〟と言いつつ子供達が殺し合う場を整える彼等の方がイカレてるよぉおおぉぉお!!!」

そして、狂人と言われたスレイドは叫ぶ。

何がいけないことなのかと?何が間違っているのかと?たかが、力の無い子供達に刀使と同等にしようとしてるだけではないかと、もしそれが禁忌の考えであるならば何故彼等、刀剣類管理局やそれを許す人達でごった返す世界も狂った世界ではないのかと叫んでいた。

そして、スレイドは禁忌を犯した大罪人として扱われ、それらを行ってきた刀剣類管理局やこの世界の人間達には何もお咎めが無いのは笑劇(Farce)だと叫ぶ。

「……フフ、そうですね。私も大荒魂を復活させることは賛成です。ですが、彼の方はどうなのです?」

「ああ、ノロを彼に注入して強化することはできたが、良いのかね?」

「何がです?」

「まあ、どうにかして血を媒介にしたあらゆる荒魂の召喚とその使役を行えるようにしたよ。けど、彼は歳を取り過ぎているから脳がノロを適応しようとしないんだよ。そのせいで身体の方はアレルギーが出て、拒否反応していてね。結果、彼の身体は常に起こる激痛で常時危篤、内臓の殆どが機能不全を起こしているから飲料ぐらいしか栄養補給ができない。そんな身体だから攻撃方法は自分が召喚した荒魂の使役ぐらいだよ。そのうえ荒魂を召喚したらノロのアンプルで補充しなければならないから、更に荒魂化は進行するけど?」

「構わん、彼の生死は問わない。」

「良いのかね?彼、理由は何なのかは分からないが、一応は君達の身を案じていたのだろう?」

ソフィアから和樹をどう改造したか尋ねられ、今まで子供と荒魂の融合の研究をしてなかったスレイドは初めて成人男性の人体にノロを入れるという無茶な改造をしたせいで、身体は既にボロボロで使える攻撃手段は夜見のような荒魂の召喚と使役のしかないうえ、使役できる荒魂を御刀で斬り祓われ失うとノロのアンプルで補充しなければならないが、補充すればするほど荒魂化が進むと伝えていた。そのことにスレイドは彼を戦力に加えることに難色を示していた。

「それで充分です。あとは、貴方が鎌府から逃げ出した旧折神　紫派の元研究員という立場を忘れず、はしゃぎ過ぎないようお願いしたいところなのですが？」

「ああ、うん。そこは気を付けるよ。君達のお陰で檻から抜け出せたしね。」

スレイドの問いかけにソフィアは和樹の改造内容に納得したのか、満面の笑みを浮かべていた。

だが、その次の瞬間、ソフィアはスレイドに今の身分は舞草から逃げ出した旧折神　紫派の元研究員という身分であることを忘れるな、と釘を刺していた。その注文にスレイドは大規模停電の闇に紛れて刑務所から出してくれたことに感謝していることを述べつつ、大人しくすることと、和樹に自身がスレイドであることに気付かれないようにすると誓っていた。

「……でも、次に使うのは子供が良いなあ。」

「大人しくしていれば、見つけますよ。」

「!!……あぁぁぁ、ありがとう、ありがとう!!これで、イチキシマヒメも喜ぶよぉ。」

だが、スレイドは次の実験に使う素材は子供が良いとソフィアに注文すると、快諾してくれたことに歓喜していた。

「……ハァッ、……ハァッ、……み、みんな、僕が……マモルんだ……。」

そんなふうにソフィアとスレイドに言われているとは知らずに、和樹は綾小路と結月、刀使達の安否を案じながら、身体に激痛が走ることに慣れないせいか、這いつくばるように動くしかなかった。

（僕は覚悟した。……けど、）

白髪頭に右目が荒魂の目の様に変化している自身の姿を鏡で見ながら、もう結月の所へ、うだつの上がらないフリーターだった頃には戻れないだろうと確信していたのだった……。

曖昧な境界線

刀剣類管理局局長執務室――――。

朱音と真希、そして甲斐とその護衛といった数人が居た。

「この度は協力を受け入れて下さって、大臣も感謝しております。これで幾許かは失った信頼を取り戻せれば良いのですが……。」

「２０年前以上の災厄が起こる前に失った信頼を取り戻せれば良いのですが……現状、まだその道は遠く、ゆ……〝男の刀使〟を入れても戦力が足りず、現場の刀使達は疲弊していく一方です。」

「……転校希望者がそれほど、多いということでしょうか？」

「S装備の性能向上とデザインを変え、それと連携できる無人機を使ったことによる安全面を宣伝しましたが、世論は未だに刀剣類管理局に批判的です。」

朱音と甲斐は刀剣類管理局を取り巻く今の現状を憂慮していた。

箱根山戦で新型S装備とドローンを装備した特別任務部隊が活躍したという宣伝をして、現職の刀使の負傷者数を減らしていること、箱根山で荒魂掃討作戦を行ったことで着実に荒魂討伐を遂行していることで、国民の安全を守っているとアピールしていた。つまり、〝刀剣類管理局は無人機とS装備を有効活用し、刀使の安全面を考慮しており、そのうえで頻発する荒魂事件にも対応していく〟という姿勢を見せ、国民の信頼を取り戻し、刀剣類管理局の風当たりの強さを緩和したかったが、空振りに終わり、それを危惧した親達によって転校する者が増える一方だった。

「……となれば、少ない戦力で有効活用する。という方針で行くしかありませんな。ですが、このような状況下に置いても残ってくれる刀使が居るのは防衛省としても非常にありがたいことです。」

甲斐の言っている通り、今の刀剣類管理局は正式には刀使ですらない優を〝男の刀使〟と偽ってまで戦力に組み込まねばならないほど、常に逼迫していた。そんな中でも、刀使としての活動を続けてくれる者が居てくれることは朱音にとっても、甲斐にとっても非常にありが

たいことであった。

「今後の刀剣類管理局は古来のノロと寄り添うやり方を推していく予定です。ですが、残った刀使の何名かは荒魂に対する憎悪が強い傾向にあり、人がノロと寄り添うという考えは受け入れられるかどうか……。」

朱音としては、今後の刀剣類管理局の在り方を甲斐に伝えていた。だが、それには多くの障害があった。

それは、残った刀使の何割かが、親や友人といった人が荒魂の被害を受けたことが許せなかったという理由で志願して来た者がおり、戦力が低下した刀剣類管理局はそんな彼女等を無視する訳にはいかなかった。それ故に、人とノロが寄り添うという考えを何時公表すべきか、悩んでいた。

「……中々、険しい道となることでしょう。自衛官の隊員数が減りつつあるこちらとしても、一つ一つ荒魂討伐をするよりも融和政策を採るのが最善。出来る限りのお手伝いさせてください。」

甲斐としても朱音の人とノロが寄り添うという考えは賛同していた。但し、朱音はノロを清め鎮めることで荒魂の被害を減少させたいのに対し、甲斐は人も荒魂も政府の統制下に置くという形に取りたいのという違いがある。

「……そういえば、獅童　真希くん。自らの後任を柳瀬　舞衣か岩倉　早苗にすることを希望していたらしいが、何か理由はあるのかね？私としては、鎌倉で活躍し、剣術の実力も最も高いと言われている衛藤　可奈美だと思っていたのだが？」

甲斐は話題を変えて暗い気分を払拭しようと思ったのか、朱音の隣に直立不動で居た真希に後任のことについて尋ねていた。真希の後任は可奈美かと思っていた甲斐にとってはとても意外であったため、真希の自分の後任を舞衣か早苗にしたいとする理由を問い質していた。むしろ、甲斐としては政治感覚の無い可奈美であれば、こちらが操り易いために『鎌倉で活躍し、剣術の実力も最も高いと言われている――――。』と言って、さり気なく真希と朱音に可奈美を推し、可奈美に貸しを作ろうとしていた。それに、舞衣のことは柳瀬家のご令嬢

であるにも関わらず、御前試合に出場できるほどの実力を有し、尚且つ鎌倉では可奈美達を指揮し活躍していたことしか知らないため、もし柳瀬グループのご令嬢である舞衣と同じく、京都の名家出身である此花　寿々花と同様に政治交渉の場にも同行することが可能であるほどの能力を有しているのであれば、利用しにくいかも知れないからである。故に、甲斐は舞衣と早苗を後任に推した理由を真希に尋ねていたが、そのうえで甲斐は舞衣を警戒していると真希に悟られないようにするため、真希の後任を舞衣だけでなく、早苗の理由も真希に訊いていた。

……もし、舞衣がこちらの想定通り、政治交渉の場にも同行できるほどの能力を有していれば、政治感覚に疎い娘を陰で操るといったことが難しくなるかも知れない。

……そう、憂慮する甲斐であった。

「はあ……まあ、何と言いますかご存じの通り、個人差はありますが若年の刀使ほど御刀との親和性が高いのです。そのため、僕はもう１６です。そろそろ年齢的に何時刀使の力を失うことになるか、それとも僕以上に吼丸の力を引き出せる者が現れ、何時交代となるかも知れませんので僕自身の後任と彼女等が働き易いように考慮すべきであると朱音様に具申したまでのことです。」

「ふむ。」

真希は、甲斐が随分とこちらのことを調べているなと思いながら、自身の後任を求めていた一つの理由を述べていた。刀使としての力を発揮できるのが若年の傾向が強い故に、その年齢を超えると刀使としての力を失うか、吼丸に真希以上の適合者が現れたら、交代しなければならないシステムであるのを考慮し、自身の後任がそろそろ必要なのかもしれないと思ったことを伝えていた。

「あと、お恥ずかしい話しですが、どうも僕は新型Ｓ装備に追加された機能を上手く扱えなかったのです。そんな理由もありまして、新型Ｓ装備を使いこなしていたうえ、戦闘能力が高く、指揮能力もあるので彼女等が適任だと思えたのです。」

そして、舞衣と早苗を自身の後任にしたもう一つの理由を甲斐に説

明していた真希。
　しかし、真希自身、岩倉　早苗は委員長を務めていた経験もあって指揮能力が高いことは認めるが、目立った実績の無い早苗の言うことを他の部隊が聞くかどうか、といった懸念がある。これは、真希自身の御前試合の大会二連覇による栄光と親衛隊という立場によって指揮統制できたと思っている経験則によるところが大きい。
　そして、柳瀬　舞衣も鎌倉での活躍という目覚ましい実績はあるものの、真希としては何か大きな作戦で舞衣が指揮官としての功績と経験を積ませたかったというのも本音であり、不足している戦闘力の面は沙耶香と可奈美といった実力のある刀使に補佐させる予定だったが、その沙耶香が箱根山戦以降から、不調であるという懸念材料があった。
　だが、そのことを防衛省である甲斐に伝えることはないだろうと真希は判断して、敢えて話さなかった。
「ふぅむ。なら、鎌倉での活躍をこちらでも聞いている衛藤　可奈美では良くないのかね？」
　だが、甲斐は真希の推薦に反して、政治的判断が無く利用しやすいであろう可奈美を推していた。個人的な理由としては鎌倉でのノロ漏出事件を解決し、有名であるためカリスマ性はあるだろうから、刀剣類管理局にとっても、それが最良であるようにも感じたからでもある。
「ええ、そう思うでしょう。……ですが、衛藤　可奈美はどうも誰かを指示するというのが得意ではないらしく、チーム戦をしていたときは専ら柳瀬　舞衣が陣頭指揮をしていたそうです。」
「……なるほど。」
　これ以上、可奈美を真希の後任に推すといったことを述べれば、刀剣類管理局の人事に防衛省が口を挟むのかと言われかねないので、矛を収める甲斐。
「ふむ、それほど新型Ｓ装備は使いにくい代物でしたか……。」
（？……あっ!!）
　真希は、甲斐が新型Ｓ装備の開発に色々な援助を行っているのは

知っていた。それ故に、甲斐が残念そうな表情をしたことに真希は甲斐を批判しているかのような答え方をし失敗したのではないかと不安になる。

それは、真希は舞衣を指揮官にし、沙耶香と可奈美といった親交があり実力の有る刀使等を補佐に付けるという体制にしたかったのである。そのためには、休養中の紫や朱音、紗南といった権力も権威もある大人達の後ろ盾も必要である。朱音局長代理と紗南本部長からは了承を貰っているが、甲斐陸将補はまだである。だが、防衛省の幹部を頷かせるには、それ相応の理由が必要である。だからこそ真希は新型S装備を扱いこなせない自分よりも、使いこなしていた舞衣達を推す意味もあって、自身は追加された機能を上手く扱えなかったと言ったのだが、自衛官としてキャリアコースに進み、長年勤めていた甲斐にとってみれば侮辱とも取れる発言だったかも知れないと真希は憂慮していた。

(……こ、こんな時はどうすれば良い!?やはり、寿々花も連れてくるべきだった!!)

真希は、自分から刀剣類管理局と防衛省の連携にヒビが入るかのような発言をしたことは迂闊であったと後悔していた。そして、こういった場に馴れている寿々花を連れてこなかった愚かな自分を引っ叩きたかった。

そんなとき甲斐は、

(……ふむ、私と朱音を目の前にして私も危惧していた新型S装備の欠点を堂々と言うか、……かなり潔く、〝好漢〟ではないか。)

真希のことを上役であろうと関係なく発言すべきことはする堂々とした人物であると好評価しつつ、〝好漢〟と内心呟いて女性として見ていなかった。だが、そんなふうに評価されていることに真希は全く気づいていなかった。

何故、真希はそのことに気付かなかったかというと、真希にはある欠点があった。それは、相手の好意に鈍感過ぎるというものであり、寿々花もこの欠点には頭を悩ますほどであった。現にこうして甲斐に好評価されているにも関わらず、真希は明後日の方向へ向かってい

るのである。
「……そうか、ならそんな君に尋ねたいのだが、……この戦いをどう予測する？」
（……そこまで、嫌っている訳ではないようだ。）
そして、甲斐に叱責されることなく今後はどうなるかと尋ねられたことに、真希は安堵していた。もし、先の発言を嫌味だと捉えているならば、尋ねることはないからだ。
故に、次もしくじることがなければ問題無いだろうと真希は勝手に判断していた。
真希が、そんな状態であることにも気付かずに甲斐は、何故か、真希に現在の刀剣類管理局はどのように進むべきかを尋ねていた。
「甲斐陸将補。」
「失礼、勝手なことを致しました。ですが、諮問しているのではなく、私自身が荒魂討伐に置いて浅学であり、刀剣類管理局と協力関係にある自衛隊の幹部の一人としましては現場を知る者からの意見をどうしても聞いておきたいのです。」
だが、朱音に叱責されたことで、自身が真希の所属する機関の長の目の前で何の断りもなく勝手に刀剣類管理局の方針に関わるような質問したのはとても非礼な行為であったと思い、素直に謝罪の言葉を述べ、非礼を許してもらおうとしていた。
（……協力関係にある防衛省の甲斐陸将補にこうまでお膳立てをされたら、答えないのは失礼にあたるか……。それに、一度しくじっている以上、ここで挽回しなくては朱音様に要らぬ心労を掛けてしまうかも知れない!!）
真希は、荒魂討伐の作戦指揮官でしかない自身が刀剣類管理局、並びに協力してくれる防衛省含む各省庁の方針に関わることを述べて良いものかと考えるが、協力関係にある防衛省の幹部である甲斐がどうしても聞きたいと言って発言を促していた以上、こちらとしては何も答えない訳にはいかなくなったのである。
だが、真希は一応、話していいかどうか顔を朱音に向けるが、朱音は頷いて了承の意を込めた返事を真希に送る。

「……では先ず、近況からお伝え致します。現在、東京を中心に頻発している荒魂事件に対応すべく、伍箇伝から刀使をかき集め特別任務部隊を臨時編成を致しました。これは、各方面の刀使を特に頻発する関東方面に一極集中させ、運用しているという状態です。しかし、我が国がそのような状況下にあるのにも関わらず、敵性のある周辺各国は未だ領空と領海侵犯を続けており、昨今の情勢は油断ならぬ状況に在りますが、自衛隊員の人員不足といった問題と戦車と火砲の削減の決定もあり、戦車と火砲は本州から各方面隊に集約、その代わりに機動戦闘車が本州に配備される予定です。これは、敵性国家の上陸部隊を本州で相手をする際、先ず機動戦闘車が足止めし、その間に戦車部隊を交戦地域へ到着するという編成であります。そんな状況下において、機動戦闘車及び戦闘部隊の輸送に必要な道路、鉄道網に被害をもたらす荒魂被害は防衛省においても憂慮する事態であると判断し、我々刀剣類管理局と協力しております。」

先ず、真希は手始めに、可能な限り自衛官にも分かり易いように、刀剣類管理局と防衛省の近況を伝えていた。

「ですが、急遽編成したため、各刀使達の質にムラがあり、組織立った行動は難しいこと、そのうえ強力な荒魂相手に経験の少ない中等部の一年が前線に駆り出されるほど、人材が不足し、人員と装備などに慢性的な負荷がかかり、各部隊の練度や活動量を維持できなくなるおそれが生じている状況であります。従って、各部隊、部署との連携を主眼に強化した新型Ｓ装備の特性を考慮しますと、今後は状況に即応できる精強な部隊が必要となります。」

「……具体策は？」

「先ほど申しました機動戦闘車と戦車部隊の例と同様に、実力のあるＳ装備刀使の部隊を航空戦力で迅速に送る。……これにより、荒魂事件が頻発する関東区域に実力が高く、Ｓ装備で強化された刀使を迅速に送ることが可能であると愚考致します。」

「つまり、関東地方限定ではあるものの、現地の刀使が足止めをしている間にそのＳ装備刀使部隊を航空機による集中的な機動運用により、頻発する荒魂事件に対処するというところか……。しかし、刀使は空

挺訓練を受けさせねばならないように思えるのだが?」
「はい。ですが燕　結芽が五箇伝のヘリから降りる際、リペリング降下をせず刀使の力で降下したことがありますので。」
「……なるほど、それと同様のことをS装備で強化した刀使にやらせる、ということか?」
「その通りです。」
「なるほど、視えてきた。」
　要するに、現地の刀使が機動戦闘車であるとするならば、S装備刀使は戦車部隊のようなものかと甲斐は理解していた。
　そのためか、甲斐は真希が提言するS装備刀使による即応性の高い部隊の創設に魅力を感じていた。
　理由は、このS装備刀使による即応部隊が活躍し、その有用性を実証すれば、甲斐が予てから推し進めたかった自衛隊のサイバー・電磁波領域の強化が可能となる。そのうえ、真希の言うS装備刀使による集中的な機動運用の実効性が確立されれば、防衛省が構想する多次元統合防衛力の実証性が証明され、それらを推し進める防衛省も評価され、防衛予算が増額されるというものである。
（……それに、周辺各国も動き始めている。スタックスネットという事件が有った以上、サイバー戦の能力の向上とハイブリッド戦争に対応した安全保障政策と戦略の研究は急務だ。）
　スタックスネット
　Ｍｉｃｒｏｓｏｆｔ　Ｗｉｎｄｏｗｓで動作するコンピュータワームであり、２０１０年6月に発見された。
　インターネットから隔離されたスタンドアローンのコンピュータ・システムにも、ＵＳＢストレージを経由するという手段により感染する。そのため、以前はネット経由の攻撃に対し比較的安全であろうと信じられていた産業用制御システムにおいて感染・実害を生じさせるという点が衝撃的であり、２０１０年6月に発見されイランの核施設を標的とした攻撃で有名。また、２０１０年9月には、イランのエスファハーン州ナタンズに所在する核燃料施設のウラン濃縮用遠心分離機を標的として、スタックスネットを使ったサイバー攻撃が実施さ

れた。この際には、遠心分離機を制御するプログラマブルロジックコントローラ（ＰＬＣ）がスタックスネットによって乗っ取られ、周波数変換装置が攻撃されたことにより、約８４００台の遠心分離機の全てが稼働不能に陥ったこともあった。

これにより、サイバー攻撃によって核施設や重要施設を一発の銃弾を撃つこともなく機能不全ないし、攻撃することが可能であると立証されたのである。

そのうえ、周辺各国は既に正規戦、非正規戦、サイバー戦、情報戦等を組み合わせたハイブリッド戦争を行っていることが確認されている（というよりも、ＣＩＡが舞草を支援するため登録されていない潜水艦と公的身分はフリードマンが経営する警備員の正規兵扱いされないトーマスとロークを送っていたりする。）ため、国防を預かる甲斐としては焦っていたのである。そんな理由もあり、甲斐はサイバー攻撃の対策と発展、そして最終的にはハイブリッド戦争に対応する安全保障政策と戦略の研究は必須であり、重要なことであった。

（間に合えば良いが……。）

甲斐は我が国がサイバー戦とハイブリッド戦争の対抗策に遅れ、その脅威に晒されることにより、自国の国益が損なわれることが無いことを願っていた。

そんな理由もあり、甲斐は真希の提案に乗るのだが、それを真希はまだ知ることはなかったのであった。

「……その部隊には、何が必要となるかね？出来れば、その部隊に関する詳細な内容を書類に記載し、朱音様に見せてみてはどうかね？…宜しいでしょうか？」

甲斐は朱音に目を配らせ、それで良いか尋ねていた。

「……それは是非、私も見てみたいですね。」

朱音もその気になったのか、真希が構想する部隊がどのようなものか詳細な書類にして送って欲しいと、真希に指示を下していた。

朱音としても、現場で活躍する刀使の意見を聞き、それを汲み取って、少しでも荒魂事件の増加で疲弊している刀使達の辛労が減るのであれば、というのが本音である。

「はっ、承りました。」
朱音と甲斐が自分の話に乗り気であることに真希は内心ほくそ笑んでいた。
理由としては、部隊編成上必要のため新型S装備の導入数を多くして貰うように要請し、刀使の個人の戦力を向上させ、人員不足による刀使全体の負担を軽減することが可能となるかも知れないからである。
そのためには、先ず朱音様に閲覧してもらうが、甲斐に送る書類には新型S装備以外にも多くのヘリとUGVやUAVといった必要以上の物資が必要と書き、甲斐に一回断らせたあと、真に必要な物のみを記載した書類を書いて送り、新型S装備の導入数を増やして貰おうとしていた。
(……ハイブリッド戦争は平時と有事の境界線を、あらゆる物を曖昧にするとも言われていたな。そう思うと、奇妙な物だな。荒魂を刀使と偽って戦場に送る。……誰もそのことに疑問も抱かずに。)
甲斐はハイブリッド戦争のことを考えていたせいか、衛藤　優という〝荒魂〟が〝刀使〟と偽って活躍していたなと思い出してしまった。
スペクトラムファインダーを改竄すれば、誰も〝荒魂と化した人間〟だと思わない。だとすれば、スペクトラム計が指し示すだけで荒魂扱いし、斬って祓うのは本当に正しいことなのか?荒魂と人の境界線も曖昧なのではないのか?
……本当に奇妙なことを考えていると甲斐は改めて実感していた。

「……お父様?」
そして、真希は知らないが、舞衣の一本の父親からの電話が引き金となって、始まる苦難。

それから、後に彼女達と真希はエライ目に遭うこととなる。

二つの家族の場景

「……舞衣、美濃関学院を辞めなさい。新しい学校は父さん達で決めているから、すぐにでも転入できる。」

舞衣は、「えっ？」とつい口に出すほど動揺してしまった。

急に、舞衣の父親柳瀬　孝則から電話が来たことから、こうなることはある程度は予測はできたが、真正面から言われると動揺するものがある。

「話が違います。高校卒業するまでは私の好きにしていいと……言っていたじゃないですか？」

「事情が変わったことぐらい理解できるだろう。任務中に怪我をする刀使も増えてるそうじゃないか、お前も随分と危険な目に遭ったんじゃないか？」

確かに、鎌倉でのノロ漏出事件以降は荒魂事件が頻発し、任務中の刀使が負傷をする事例が増えているのは事実だ。

だが、舞衣はそんな状況下に置かれても刀使を辞める気はさらさら無かった。

自分を庇って亡くなった人、不調気味の沙耶香、……そして、可奈美に追い着きたい思い。それらを無視して、刀使を辞めることなど舞衣はできなかったのだ。

「……確かに、任務中に怪我をする刀使は増えています。……ですけど、この孫六兼元は私を選び私は刀使になることを選びました。覚悟ならできています。」

「軽々しく覚悟なんて言うもんじゃない！」

舞衣の『覚悟』という言葉に反応してか、それとも『覚悟』という言葉を使うほど必死になって戦う娘に何もしてこれなかったことに不甲斐なさを感じていたのを思い出してなのか、もしくは今の今まで刀使という職業が危険なものであることに気付いていなかった自分を恥じていたのか、孝則は語気を荒げて反論していた。

色々な物を背負い、刀使を辞める気などない舞衣。親として、刀使

という危険な職業を辞め、平穏に過ごして欲しい孝則。
刀使を辞めるか辞めないかで言い争う娘と父。
そのすれ違う娘と父を可奈美は遠巻きに見て、何とも言えない気持ちとなるが、何故、この場に可奈美が居るのかというと、舞衣に父親の説得に協力して欲しいと言われ、呼ばれたからである。
それは、遡ること数時間前――――。

舞衣は父の孝則から、少し話したいことがあるから家に戻るようにと言われた時のこと。
「……。」
舞衣は悩んでいた。
父からの急な呼び出しは、もしかしたら刀使を辞めるように言われるかも知れないと勘繰り、如何に対処すべきかを考えていた。
「あっ、舞衣ちゃーーん。」
だが、そこに可奈美が手を振って、こちらに駆け寄って来るのを見て、舞衣はあることを考えつく。
「……可奈美ちゃん、お願いしたいことがあるの。」
「……えっ？」
突然、何だろう。
可奈美は疑問に思いながらも、舞衣に何かあったのかを尋ねる。
「どうしたの？舞衣ちゃん。」
「……その、お父様から家に戻るよう言われたんだけど、もしかしたら刀使を辞めるよう言ってくると思うから、可奈美ちゃん一緒に来て、助けてくれる？」
「うえぇ？う、うん分かった。…でも、私なんかで良いのかな？」
可奈美は、舞衣が刀使を辞めさせられるかも知れないと言われ、驚きながらも舞衣を助けることを了承する。
しかし、舞衣の家庭の話に割り込んで良いのかと考えつつも、自分

に自信が持てない可奈美は自分では何の助けにもならないのでは？と舞衣に尋ねていた。

「ううん、そんな事ない。可奈美ちゃんが親友で、とても強くて立派な刀使さんってことはお父様に聞かせているから、可奈美ちゃんがお父様の説得に協力してくれれば上手く行くよ。」

「……へぇ。」

可奈美が強い刀使と言われ、〝喜んでいない〟ことに気付かない舞衣。

舞衣が思っている〝剣術好きな少女〟であれば、強い刀使と言われると喜ぶものなのだが、今の可奈美は剣術好きな少女ではなく、優を救うために他人を欺き、利用し、冷たいぐらい自分本位だが、友達思いで、立派な〝姉〟であろうとする子であった。

だが、優を救うと思いながら、何一つ出来ず、それどころか更に荒魂化が進んだうえ、優が荒魂と融合した経緯を隠すため、優の活躍を掠め取り、その掠め取った活躍で名ばかりの英雄を演じることで、嘘を嘘で塗り固めたことで、そうすることによって得ることができた羨望と尊敬の眼差し。

そんな嘘で塗り固められた女のことを、親友の舞衣は強い刀使と褒め称えたのである。そんな舞衣を可奈美は、

『あの人衛藤さんじゃない？美濃関の。』

『あの人達が大荒魂を倒した？』

剣術の指導員となった際に、羨望と尊敬の眼差しで見る後輩達の視線。だが、誰が大荒魂を撃退したのかはこの二人には、いや誰も分かっていない。

『私達とはまるで次元が違いました！』

『私達なんて相手になりませんから…』

鎌倉で活躍して以降、立ち会う前から言われる孫謙と諦めが混じっている声。だが、誰が大荒魂を撃退したのか分かっていない。

……誰も理解していない。ダレモワカッテイナイ。

今の舞衣が言っていることと見つめる目が、優が大荒魂を撃退したのに、誰もそれを知らずに呑気に自分を鎌倉での英雄だの大荒魂を倒

した凄い人だの勝手なことを言う者の声と目に似ているように感じてしまった。特に、舞衣が可奈美のことを剣術好きな少女と勝手に思っているところがよく似ていると、いや、何も知らず自分を称賛する者と舞衣は同じものであるのだと可奈美は感じていた。

自分の本性は剣術好きな少女ではないというのに、……可奈美はそう心の中で愚痴りながら。

そんな理由もあって、可奈美は舞衣に呼ばれ柳瀬邸へ一緒に向かうこととなったのである。

そして、今現在この場には可奈美と舞衣、孝則と舞衣の母柊子の四人がソファに向かい合う形で座っていた。

だが、可奈美は親子喧嘩の仲裁のために呼ばれたのかと思い落胆していた。

舞衣は私のことを便利に使える道具のように、都合良く利用できる物としか思っていないのだろうか?そんな卑屈な考えが、今の可奈美には過っていた。

可奈美という人物は元々、

『やっぱり、信用できない?だったら、利用しちゃえば良いと思うよ。』

『姫和ちゃんの目的に必要ならそうすべきだと思う。そもそも私もそのつもりで連れて来てくれたんでしょ?』

という考えを持っている。故に、彼女は〝優しい反面、冷たいぐらい自分本位〟という子でもあった。

そのうえ、今の可奈美は優の中に居るのがタギツヒメ、いや荒魂であることを隠すために、顔を歪ませながらも、苦しみながらも、友人や親といった人達に嘘を吐き続け、そして自らをも欺き続けていた。

だが、その罰なのか、大荒魂を撃退したのは自分ではなく優であるにも関わらず、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の真実を隠すため、英雄の役を演じ続けねばならないこととなり、それは可奈美にとってみれば、優の活躍を掠め取って偽物の英雄をしていることと同義であった。

……それら二つを14年間近くやらされていた今の可奈美は、舞衣

が自分のことを道具のように扱っているという卑屈な考えに固執してしまっていた。

だが、舞衣の方は可奈美を利用しようとは考えておらず、ただ単に、よく立ち会ったことと、同じように切磋琢磨していた可奈美のことを父によく話していたため、父も信頼しており、その可奈美も刀使を辞めさせようとする父の説得に来てくれれば、父も納得してくれるかも知れないという淡い考えで可奈美にも同行してもらいたかっただけである。

だが、何と言おうと舞衣は可奈美を父の説得に利用しようとしていたことに変わりはないとも言えるのだが、そのことに舞衣は気付かない――――。

そのうえ、

『あれ!?舞衣お姉ちゃんだ!――――』

如何にも純粋で、可愛らしい舞衣の一番下の妹詩織が刀使として活躍する舞衣が家に帰ってきたことが余程嬉しかったのか、笑顔で出迎えてくれた。

だが、そんな詩織を見た可奈美は、優がほぼ荒魂化してしまった以上、自分の家では、もう二度と見ることが叶わない光景なのだと、つい自嘲してしまう。

『おかえりーじゃないでしょ、また制服のままごろごろして。』

『ん、これ終わったら着替えるよー。』

『皺になっちゃうじゃない。ほら脱いで、もうすぐお父さん達が帰って来るんだからちゃんとしなさい。』

『え!?帰って来るのお父さん?』

『ていうか、日本にいたんだ。』

『じゃあ、もしかしてお母さんも?』

『うん、一緒だって。』

柳瀬邸にある普遍の一面。

一番上の妹美結が気だるげながら、舞衣の言うことを聞き、詩織が父と母の帰りを手放しで喜ぶ。

普通で、世間一般の、三人の姉妹のとても仲睦まじく、微笑ましい

家族の場景。
　嘗ての可奈美が欲して止まなかった、理想とする家族の場景が其処に在った。
『こら！立ったまま食べないの！』
『ハイハイ。』
『ハイは1回！』
　なのに、事も無げに暴力と殺人を行う弟、何を考えているのか全く理解できない弟、もうどう接していいのか分からないから、優のことは姫和任せの自分。
　まるで、正反対のような状況下に置かれている可奈美にとって見れば、舞衣の家庭が見せてくる家族の場景は虚しさと無力感を可奈美に与えることとなった。
『そんな細かいこと言ってるから彼氏できないんだよ、舞衣姉は。』
『余計なお世話です!!』
　可奈美は舞衣と美結の口喧嘩を見て、舞衣の言っていたことを思い出していた。
『……良いなぁ、上の妹は結構わがままで私を困らせてばっかなんだよ？』
『でもね、本当に困っているときは何も言わないの。おかしいよね、ばればれなのに。』
　昔、美結のことを舞衣はこう言っていた。
　妹のことをよく見てて、よく喋れていた。剣術バカの自分よりも、親友の舞衣は優れた〝おねえちゃん〟だったことに、嫉妬した頃の思い出。
　対して自分はどうだろうか？
　今の自分は弟のことを邪魔物のように扱っていないだろうか？何か一つでも理解できたことはあったろうか？
　……自分が、何一つできなかった。自分が夢見て、欲しがった光景が柳瀬邸に在った。
　そんな舞衣と妹達の光景を遠巻きに眺めながら、苛立ちを感じながら、無力感に打ちひしがれる可奈美。

母親との約束を守るため、弟の中に荒魂が居ることを隠すため、友人と親に顔を歪ませながらも、心が何処かに痛みを感じながらも、血を吐くように嘘を吐き続けていた。

だけど、剣術好きな少女を演じたのは、弟の事から逃げられる唯一の場所である立ち合いに長く居続けるための言葉、相手の剣術が見たいと言うための理由付け。

そして、嘘に嘘を重ねた罰なのか、優を救うと言いながら、今や優の活躍を掠め取り、その掠め取った活躍で鎌倉での英雄という嘘をやり続けることとなり、後輩から刺さる尊敬と憧憬の念。

……それを何年間も続いたことで、卑屈となった少女は在りもしないことを考えてしまった。

何故、自分を此処に呼んだのか？舞衣は妹との仲の良さを見せて、私に自慢したかったのだろうか？

そんな考えが過るほど、卑屈となった少女可奈美は、舞衣に対して言いようのない憎悪の感情を沸々と湧き上がらせていった。

「……舞衣、忘れないで欲しい。お前もこの家の一員だということを。」

舞衣の身を案じ、心配しているということを話す孝則。

だが、舞衣は、

「……柳瀬という家に、刀使が居ては体面が悪い、ということですか。」

「ん？」

刀使をどうしても続けたいためなのか、家の体面を守るために孝則は刀使を辞めさせようとしているのだろうと曲解していた。

そのため、孝則は舞衣の妙な物言いに怪訝な表情をする。

「舞衣。」

舞衣の物言いを嗜める柊子。

だが、舞衣は射殺さんばかりの視線を実の両親に向けつつ、止まらない。

「もし、そうなら私は刀使を続けなければならないんじゃ無いんですかね？」

「……何を言っている？」

孝則は、舞衣が何を言いたいのか真意が分からなかった。
「荒魂が大量発生している時期に私が転校すれば柳瀬の家の者は困難に立ち向かうことなく、逃げ出す者だと物笑いの種になるということです。ゴシップ誌が好みそうな話であると思いますけど?」
「……舞衣、そんなことは気にしなくて良い。私が何とかしよう。」
「お父様が手を回せば、余計に柳瀬の家の者は一般大衆とは違うのだと言われると思いますけど?こういうの、上級国民って言うらしいですね。柳瀬の家はそう言われるんじゃないですか?」
「いや、私はそんなことを言おうと!……した訳じゃないんだ。」
孝則は、今この状況で声を荒げて、舞衣から刀使を辞めさせようとしても、誰も納得しないだろうと判断し、どう言って良いものか戸惑ってしまったのか、後になって声を抑えていた。
「舞衣、お父さんはそう言いたいんじゃないのよ。ただ、貴女のことが大切なの。」
「私にとっては、柳瀬の家も刀使としての私も大事です。柳瀬の家が悪く言われれば美結と詩織がどうなるんです?」
柊子は孝則の気持ちを代弁して、舞衣を説得しようとしていた。
だが、舞衣は自身の妹美結と詩織を引き合いに出してでも、両親を説得しようとしていた。それは、柳瀬の家のためでなく、舞衣の家庭に有る家族の場景を守りたいためではなく、犠牲となった者達のために、沙耶香のために、そして可奈美に追いつくためにも刀使を続けたかっただけである。
だが、孝則は気付いていないが、柊子は母の感なのか柳瀬の家のためでなく、舞衣は自分のために刀使を続けたいがために自分の妹達も利用しているのではないのかと気付いていた。
それに、孝則と柊子は、可愛い娘の舞衣が例え本当のことを言っていても柳瀬の家のために犠牲になることは許せなかった。
「……舞衣ちゃん、嘘は止めようよ。」
だが、可奈美の遮るような物言いに舞衣は不思議な顔をする。
「えっ?……可奈美ちゃん?」
「だって、舞衣ちゃんが嘘吐いてることぐらい誰でも解かるよ?」

その可奈美の声は極寒の大地の如く冷たく、可奈美の瞳は舞衣を射抜くかのように見つめていた。
その可奈美の変貌に舞衣は驚き、何事かと可奈美に問う。
「可奈美ちゃん?」
「だって、舞衣ちゃん。『柳瀬の家のため。』とか言っちゃって悲劇のヒロインっぽく振舞っているけど、刀使を続けたいだけなんでしょ?そんな下手な芝居を観てると笑っちゃうよ。」
舞衣は、可奈美が約束を反故し、突然こちらを糾弾するかのようなことを言ってきたことに驚いたこともそうだが、剣術が大好きな可奈美は舞衣が刀使を辞めることに何も思わないということなのだろうかと疑問に思う。
「どうして、そんなこと言うの?私は可奈美ちゃんに追い着きたくて今まで頑張ってこれたのに。」
「……舞衣ちゃんが私に追い着く?ふざけたこと言わないでよ。もうかなり実力の差が開いていると思うんだけど?そんなんことで覚悟だとか言わないでよ。」
可奈美は、舞衣のことを実力の差は開く一方で、弱いと散々とこけ下ろし、舞衣を批判していた。
母の約束を守るため、弟を救うべく他人も親友も欺き、自らを剣術好きな少女と偽ってでも、弟と母のために強い刀使になることを望みながら〝覚悟〟を持って挑んだ可奈美にとって舞衣の言う〝覚悟〟という言葉は安く、そして軽く感じたうえ、可奈美にとって舞衣が家族と共に平穏に過ごせるという道を可奈美に追い着きたいという理由だけで放棄する意味が今の可奈美には分からなかった。だからこそなのか、可奈美は妹を利用してでも刀使を続けようとし、覚悟という言葉を軽々しく使う舞衣が理解できなかったし、信用できなかった。
それに、舞衣は激昂し反論する。
「へぇ?そんな可奈美ちゃんはどうなの?一人で鎌倉へ行けた?どうせ迷子になって、出場出来るかどうか怪しかったじゃない!?」
「何が言いたいの?」

舞衣の言い分に何が言いたいのかを尋ねる可奈美。
「だって可奈美ちゃん一人だったら、御前試合に行けなかったじゃない。……それだけじゃない。部屋は片づけられないし、前から忘れ物ばかりで私に頼ってたよね？勉強も教えてあげないと進級できるかどうか怪しかったよね？」
舞衣は可奈美のことを忘れ物ばかりで、部屋の片付けもできない。そして、勉強も一人ではできないと非難していた。
「そんなんで、弟さんを助けることができるの？」
舞衣の嘲笑とも、侮蔑とも取れる言い方に可奈美は激昂し、舞衣の頬を殴る。
舞衣の発言を認めないかのように、その声を払い除けるように、それが事実であるかの様なことを否定するかのように、可奈美は舞衣に掴み掛かっていた。
「舞衣ちゃんに何が分かるの？……私は頑張った、頑張ったけどこうなった!!ああなったんだよっ!!」
可奈美は叫んでいた。
どれほど母との約束を守るため、弟を如何なる手段を使ってでも救おうとした。覚悟を持って挑んだ。だが、そんな安い覚悟では挑んでも意味が無かったと言わんばかりに、優は自身の身体の殆どを荒魂と化し、大荒魂を倒した。結果は優を救うどころか、更にその道は険しく、遠くなってしまった。
「なのに、舞衣ちゃんはっ!!私に追い着きたいとか、しょうもない理由でっ!!安い覚悟で刀使を続けようとしている!!」
「可奈美ちゃん一人でどうにかできると思っているの!?一人でしょうもない意地張ってるから、しょうもない結果になった。そうなっただけじゃないっ!!?なのに、そんな貴女に私の覚悟を否定する権利は無いっ!!」
可奈美に殴られ掴み掛かられた舞衣は、可奈美の襟首を掴み返し、反論していた。可奈美に刀使を続けること、自らの覚悟を否定する権利は無いと激昂しながら応えていた。
「覚悟も無い人なんかにっ!!」

「人のことが分からない人にっ!!」
「脳カラ!!」
「臆病者!!」
そうして、大荒魂を対峙したという経験を経たせいか、互いに気が強くなった可奈美と舞衣は更にヒートアップし取っ組み合い、殴り合いになりながらも己の言い分を通そうとしていた。
「……止めないかっ!!二人共っ!!」
だが、舞衣の父孝則の制止の声も聞かないまま、暴れる可奈美と舞衣の二人を見た舞衣の母柊子は執事の柴田達を呼んでどうにか暴れる二人を抑えることができた。
可奈美と舞衣の両者は孝則と執事達に取り抑えられ頭が冷えるまで、鼻血を出し顔にアザができるほど暴れて、殴り合い、口で罵り合っていた。
「……取り敢えず、もう遅いから可奈美さんは今日は我が家に泊まりなさい。親御さんへの連絡は私がしておくから、それで良いな、舞衣。」
「……分かりました。」
孝則の話に舞衣は納得したかのような返答をしていた。
だが、怒りの熱が収まらない舞衣は可奈美を見ないまま、自室へと向かって行った。
舞衣が理想的な〝おねえちゃん〟であることに嫉妬した可奈美。
可奈美に追い付きたいがために、焦ってしまった舞衣。
二人も何処か似ていながらも、ほんの些細なことで擦れ違うこととなってしまった……。

善き隣人

舞衣の両親である孝則と柊子は、刀使と刀剣類管理局の風当たりが強い昨今、夜に刀使が一人で出歩くのは流石に危ないということで可奈美を一日だけ泊まらせることとし、可奈美には自分達の寝室を使わせ、自身等はリビングに敷いた敷布団で眠ることにしていた。

「……私は、間違っていたのだろうか？」

そんなとき、リビングに居た孝則は不意に妻である柊子にポツリと言葉を漏らしていた。

「……何がです？」

「私は、舞衣が彼女を連れて行くと聞いたとき、彼女にも協力してもらえれば、舞衣を説得することができると思い連れて来ても良いと言ってしまった。……娘の友人を利用しようとした、その腐った性根がこのような事態を招いたのかも知れない。……私は、結局のところ自分の都合でしか考えられない愚かな父親だ。」

簡易な敷布団を敷いたリビングで孝則はそう言って、猛省していた。

舞衣に可奈美を連れてくることを許可したのは、今現在の刀使達の近況を可奈美に聞き、過酷な状況であると言わせ、それを素にして親友思いの可奈美を説得。舞衣の刀使を辞めさせることに可奈美にも協力してもらい、舞衣を納得させ、刀使を辞めることに同意させる。そして、刀使を辞めた舞衣には、その後も平穏に過ごしてもらいたい、というのが孝則の望みであった。

だが、結果は、舞衣と可奈美の二人はお互いを傷付け、殴り合い、決裂してしまった。

……このような大惨事になってしまったのは、自らが相手を利用しようとした天罰なのか、孝則の望みとは大きく外れ、娘は親友と仲違いし、このまま刀使を辞めさせても、娘はそのことで一生悔やみながら過ごすことになるような事態に追い込まれたのではと孝則は思い悩むこととなり、それがこの結果ではないのかと悔やんでいた。

「……そうですね、そうかも知れませんね。なら、どうします？」
「……そうだな。」
柊子にそう問い詰められるが、今も意気消沈している孝則はどうすべきなのか悩んでいた。
どうすれば、娘は親友と仲直りできるのかと。
「だったら、二人を連れてあそこへ行けば良いんじゃないかしら？」
「……あそこ？」
「ホラ、あなたが出資を決めた研究所ですよ。」
孝則は柊子にそう言われ、稲妻が走ったかの如く、ある事を思い付く。
あの二人に、出資をしている研究所の研究を見せれば、もしかすると……。
「……そうだな、それが良いかも知れん。済まんな、いつも迷惑を掛ける。」
「ふふ、良いですよ。でも、あなたって。」
「何だ？」
「舞衣にはとことん甘いんですから。」
柊子は夫孝則のことを舞衣には甘いと評しながらも、可奈美と舞衣の仲直りが上手くいくことを願っていた。

次の日の朝、舞衣と可奈美は一つも目を合わせることもなく、可奈美は高級そうな車の助手席へ座り、舞衣は後部座席の孝則の隣へ座ると、孝則の事前の指示の下、運転手はある所へ車を回す。
「ここは？」
「この前まで特別希少金属研究開発機構と呼ばれていた場所だ。聞いたことくらいあるだろう？」
「ええ。でも刀剣類管理局の体制が変わって閉鎖されたんじゃ……。」

「国主体の独立行政法人としてはな、うちが資金を提供し民間の研究機関、特別希少金属利用研究所として再スタートさせた。」

舞衣と孝則、そして助手席に座る可奈美の三人は、孝則と柊子の思惑もあって、高級車に乗り特別希少金属利用研究所へ向かっていた。

特別希少金属利用研究所。

元々は、特別希少金属研究開発機構という国主体の独立行政法人であったが、刀剣類管理局の体制が変わったこと、社の再建と荒魂事件の増加による被害の復興予算が増大したことで財政悪化が合わさったことにより、政府機能の更なる民間委託が提起され、その槍玉の一つに上がったのが、今や風当たりの強い刀剣類管理局と深い関わりがある特別希少金属研究開発機構であった。

そういった経緯もあり、表向きは鎌倉で失態を犯した刀剣類管理局といった国家機関とは関わりが薄い〝民間の研究機関〟となっているのではあるが、実際は、稀に折神家や伍箇伝に属する特別な刀工が厳しい管理の下で珠鋼を取りだし新しい御刀に再生されることで使われることもある希少金属珠鋼と軍事利用もされることがあり今現在でも折神家の管理下にあるノロを使う研究機関でもある以上、外国企業の企業買収（或いは、国の工作。）によりノロと珠鋼といった希少金属、隠世に関する研究とその関連技術を持つ研究員が国外へ流出するのを防ぎたかった政府はどういう形であれ、国家機関とは完全に関わりの無い完全な民間の研究機関とするのは流石に良しとしなかった。

そのため、政府は上記の〝刀剣類管理局の体制が変わった〟ことと、政府機能を縮小し財政悪化の対処をしていることを国民に理解してもらうため、特別希少金属研究開発機構の一部を民間委託することとなり、特別希少金属利用研究所が発足。こうして、大企業とはいえ柳瀬グループがノロや珠鋼等の研究をし、S装備の改良を手掛ける研究所の運用権を得ることができたのはこういった経緯があったのである。

そんな理由もあって、柳瀬グループは特別希少金属利用研究所の運用権を得ることができ、特別希少金属利用研究所は広義に解釈すれば

国有機関ともいえ、狭義においては民間の機関ともいえる。これまた曖昧な境界線上に居る研究機関であった。

ただ、政府側としても、刀使の娘が居る大企業の柳瀬グループが運用権を得るのは、非常に喜ばしいことであった。理由としては、刀使の娘が研究に協力すれば、隠世に関する研究は大いに進むことができ、破綻に瀕した大企業の借金を国が肩代わりすること自体何も不自然なことではないといった利点があった。そういった理由もあり、政府側も柳瀬グループの幹部に孝則の方針に従う、いや賛成するように企業工作もしていた。

そういった事情もあって、孝則は〝民間の研究機関〟と言わなければならなかったし、自分が代表を務める企業に何食わぬ顔をして企業工作する政府をあまり信用すべきではないと実感し、舞衣には刀使、ひいては政府機関に関わる仕事には就いてほしくなかったのである。

「利用……？」

「そうだ、珠鋼に御刀以外の利用法がないか探ってる施設だ。」

そんなことになっているとは露知らず、舞衣は車の窓の外から見える特別希少金属利用研究所を見ていた。

山林の中にある、白くて小奇麗な建物。そこで、珠鋼を使った研究をしているとのことだ。

「これは？」

「ここでは、現在珠鋼を媒介として隠世からエネルギーを取り出す研究が行われている。」

「そんな事が可能なんですか!?」

舞衣はそんなことが可能なのかと驚愕していた。

「……。」

だが、可奈美は特別希少金属利用研究所の研究内容。珠鋼を御刀以外の利用法がないか探っている施設であると聞いた途端、物憂げな顔で山林の中にある白くて小奇麗な建物を見つめていた。恐らく、舞衣

の父孝則が私と舞衣を此処に連れてきたのは、先日の刀使を辞めることと関わりのある話なのだろう。それと、珠鋼を御刀以外での利用方法を探る施設。それらを繋ぎ合わせれば、おおよそは何が行われているのかは察することができる。

つまり、御刀に代わる荒魂に対して有効な武器か、それとも刀使という職業に関わりがある研究が進んでいるのか、どちらかだろうと可奈美は推測していた。

だが、仮に〝刀使〟が必要じゃなくなった世界が実現したとしよう。そんな世界で私は、剣術しか取り柄のない少女は必要なのだろうか？と可奈美は思い悩む。そして、

『結芽おねーちゃんに教えてもらったんだよ。』

そして、思い出すのは優が居る病室で優に聞いた話。優に強い刀使になれたのかを聞かれないようにするために、可奈美は優が大荒魂をどうやって倒したのか尋ねていた。

そこで聞かされたのは、親衛隊第四席の燕　結芽の剣術を使ったという答え。そこからはじき出されたのは、恐らく結芽も他の親衛隊と同様に半ば荒魂と化していたのだろう。だからこそ、優は結芽を吸収することができ、結芽の剣術を形だけでも手に入れたのだろう。

その推測に、可奈美は身震いした。理由は、結芽の剣術が私よりも上だと優が思っていたら、可奈美は耐えられなかったのである。

可奈美は〝優にとっての理想の存在〟であり、〝かっこいいおねえちゃん〟でなくてはならなかった。そのため、１４年間も剣術を頑張ってきたのだ。なのに、大荒魂を討伐できるほどの力を有する結芽の剣術を知ってしまったら、優は私のことを軽蔑でなくても、落胆するのではないのかと可奈美は恐れていた。なのに、舞衣の父親は刀使が使う御刀以外の方法で荒魂をどうにかしようとしている。それは、今の可奈美にとってみれば優を救うために頑張ってきたことを無駄にする所業ではないかと感じていた。

なら、こんなことで邪魔されたくない。蹲きたくない。

それ故なのか――――、

私は過ぎ去った時間を思う戻らない過去を悔やむ〝おねえちゃん〟にも成れない私剣術以外何も無い自分私以上に強い人が居れば代わりになる物か者が有れば私の存在する意味は私は不要となるそんな中で刀使を辞めさせようとして子供らしさを押し付けてくる大人は勝手だそれら全てが虚しさを感じるそれら全てが纏わりつくそれら全てが鬱陶しいそんな世界だからこそそれ以外の〝力〟を持つ者が妬ましくなる……。

………モシ、ワタシガトジジャナクナッタラ、……ナニヲ、ナニヲスレバイイノダロウ?……ドウヤッテ、キタイニコタエレバイイノダロウカ?

可奈美はそんな焦燥と不安を抱き、目的を失い、優に軽蔑されることを恐れた。

恐れた。

『嘘つき。』

優から、そう言われることを恐れていた。

「理論上はね。珠鋼とは現世にありながら隠世に影響を及ぼせる金属です。その特性を利用することで現世と隠世の境界を曖昧にしこの世に存在してなかった物質を現出させる。これが、可能になれば従来の物理法則を無視した無尽蔵のエネルギー源を手に入れられるんで

すよ。」
　可奈美が考え事をしていると、急に男の声が聞こえ、その声がした方向へ顔を向けると、知らない男と女が居た。

「……あなたは？」
　可奈美は苦悩していることを気取られないよう、至って自然な表情を向けながら、二人はどういった人達なのかを尋ねる。
「ああ失礼。……僕はここの研究主任をやっている古波蔵　公威といいます。」
「妻のジャクリーンよ、よろしくね。」
　男は古波蔵　公威と名乗り、女の方は公威の妻でジャクリーンと名乗っていた。
「こちらこそ……えっ？古波蔵って……。」
　公威とジャクリーンに笑顔で応対する舞衣。だが、古波蔵姓で、外国人を嫁にしている公威。こんなピンポイントな家族構成と姓名から導き出される答えは一つしかなかった。
「ハイ！エレンのパパさんとママさんデース。」
　が、舞衣が言うよりも早く、ジャクリーンが古波蔵　エレンの両親であると告白していた。
「驚いたかな？」
「あ…フリードマンさん！どうしてここに？」
「君の父上に請われてね。ここの研究所の名誉顧問に名を連ねてるんだよ。」
　それと同時にフリードマンも突然現れたことに、舞衣は驚くしかなかった。
「しかし、孫娘に続いて娘夫婦とも知り合うなんて君はよくよく私のファミリーと縁があるようだね。」
「あなたたちのこと聞いていますよー、マイマイ。カナミン。」
「……マイマイ？カナミン？」
　そして、孝則はマイマイとカナミンというのは、どういう意味なのだろうか？と疑問に思う。

……もしかして、最近の子はそういうマイマイとかカナミンという言い方が流行っているのだろうか?と、素っ頓狂なことを孝則は考えてもいたが。

「エレンさん……二人の娘さんがそう呼ぶんです……私の事。」

「私はカナミンと呼ばれています……。」

「そっ、そういうことなのか……。」

孝則は娘とその親友がそう呼ばれていることに、何とも言えない気持ちになり、目を背けるしかなかった。

『主任、近接反応実験が終了しました。データの解析に移りたいのですが……。』

不意に、珠鋼を使った何らかの実験をしていたのか、次の作業に移りたいという報告がされていた。

「分かった。ノロは保管場所に戻しておいてくれ。」

此処の研究主任を任されている公威は、二つ返事でそれを了承していた。

だが、ノロという単語に舞衣は反応する。

「あれは……何の実験なんですか?」

「珠鋼とノロを接近させることで、起こる反応を観察しているんだよ。」

「ここでは、実験にノロを使ってるんですか!?」

舞衣は語気を強めて、公威等にノロを実験に使っているのかと尋ねる。

ノロは丁重に敬い祀るということが良いと教わった舞衣にとってみれば、真逆のことをしているようにしか思えなかった。

「どうやら、舞衣君は過剰にノロを恐れてるようだね。」

「恐れているのではありません!敬っているのです。それを教えてくれたのはフリードマンさん、あなたじゃないですか!」

「確かに、ノロは分散させ社で祀っておくべきだと言ったね。だが、それはベターなやり方ではあるがベストではないんじゃないかな?」

しかし、フリードマンはここにきて、自身が嘗て言っていた丁重に敬い祀るやり方はベターではあるが、最善の方法ではないと言ってき

たのである。
　そんなフリードマンの発言に、舞衣はその話を信じて良い物かどうか動揺する。だが、４カ月前は、丁重に敬い祀るべきと言っていた人物が、急にそのやり方はベストではないと言い出せば、誰もが動揺し、信ずるに値するものかどうか迷うものである。
「ノロには意識もあり意思もある。タギツヒメやねねを例に挙げるまでもなくね。」
「ノロが、祀られることを望んでないと言われるんですか？」
「放っておかれるよりかは遥かにマシだよ。でももっといい方法があるんじゃないかということさ。例えば、薫くんとねね、優くんとタギツヒメの様なね。」
　フリードマンにもっといい方法は、薫とねね、優とタギツヒメにあると言われた可奈美と舞衣は彼等のことを思い出す。
『ねね～～～。』
『少しは自重しろ。このエロ魂。』
　舞衣の大きい胸に惹かれ、飛び込もうとするねねを制止する薫。まるで、姉と世話のかかる弟という感じがして、微笑ましい。
　一方、優とタギツヒメは、
『なっ、何か悪いか!?まだ3歳の子供が好きになって何か悪いかっ！他の人間には無いあの純粋無垢さが良かっただけだ！バーカ！アーホ!!うーつけー!!』
　３歳児の頃から優に好意を抱いていたというタギツヒメの告白。
　それを思い出した舞衣と可奈美は、
「取り敢えず通報ですね。」
　舞衣はタギツヒメをヤバい奴と認識し、警察を呼ぶと言い、
「ぶん殴りたいです。」
　可奈美は指を鳴らしながら、タギツヒメに苛ついていた。
「……えっ？」
　ノロの穢れの正体は寂しさなのではないのかと思っているフリードマンは、薫とねね、優とタギツヒメの様に善き隣人となるべきだと言っていたつもりなのだが、舞衣と可奈美の意外な返答に仰天するし

かなかった。

善いサマリア人。
ルカによる福音書１０章２５節から３７節

２５　すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら永遠の生命が受け継ぐことができるでしょうか。」
２６　イエスが、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか。」と言われると、
２７　彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい。』とあります。」
２８　イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」
２９　しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれのことですか。」と言った。
３０　イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。
３１　ある司祭がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。
３２　同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。
３３　ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばを来ると、その人を見て憐れに思い、
３４　近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

３５　そして、翌日になると、デナリオン銀貨を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

３６　さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

３７　律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

新約聖書　新共同訳より。

では、彼等とっての善き隣人とはどのような者であろうか――――？

親の愛

とある夏の遠い日のこと――――。

刀使のとしての才能が有る妹と御刀にも相手にされない僕。どちらを優遇するかは子供の僕でも解りきったことだった。そして僕は妹よりも愛されなかった。いわゆるネグレストをする両親と共に日々を過ごしていくうちに、自分がいかに矮小な存在かを植え付けられる。

でも、そんな暗いことばかりの幼かった頃の僕の思い出には、いや僕が居た町には刀使さんが居て、その年上のお姉さんだけは僕に優しかった。……とても暖かくて、優しい人だった。

その人はこの町、古くて寂れたこの町にとっては有名人で僕とは正反対の明るくて、とても僕なんかでは真正面から見るのも眩しいと思うくらい、綺麗な人だった――――。

僕はそんな綺麗な人に初恋をして、幼いながらも恋心を抱いていた。けど、その当時、いや、大人になった今もそうだけど、今の僕にはこの心の中に在る愛を伝える勇気など無かったのだ。だからなのか、僕はその人を遠くから見ることしかできなかった。でも、それで僕はそれで満足だった。満たされていた。満足していた。

こんな僕を相手にしてくれる刀使さん。こんな僕に唯一優しくしてくれる憧れの人。あの人の瞳には、僕なんか映っていないのかも知れない。だけど、ヒーロー物によく出てくる一般市民Aぐらいには見てくれていると僕は思いたい。……でも、僕はそれで良かった。彼女が特撮物に出てくるヒーローだとすれば、僕は荒魂という怪獣に襲われ怯える一般人Aという関係だけでも充分だった。

それだけで、僕は彼女に優しくされている。僕は彼女の役に立っている。そう実感できるだけで親に無視され、期待されていない辛い人生の中でも生きていけた。

親に期待されなかったのは、僕が刀使じゃなかったから、そもそも僕が女として生まれなかったからだろう。そんな状況下において神

様、僕に〝男の刀使〟とかの特典ぐらい付けてくれよと怨んだこともあった……。

そんな日々を一日一日過ごしていたある日のこと。

その暖かくて、優しかった人は荒魂討伐から僕達の元へ帰って来た。

でも、あの眩しかった笑顔を見せてくれた人はもう笑ってくれない、もう初恋を抱いた愛しき人は顔も向けてくれない。何故なら、あの優しかったお姉さんは運悪く強い荒魂に出逢って、冷たい棺の中に入って、僕の住む町に帰って来たのだから――――。

なのに、お姉さんの頑張りを無下にするかのように、刀剣類管理局は鎌倉で大きな失態を犯した。だったら、あの刀使のお姉さん。あの優しかったお姉さんは何のために頑張ったんだろう――――？

だから、僕は鎌倉でノロを漏出した不甲斐ない刀剣類管理局が余計に嫌いだった――――。

「……。」

その刀使のお姉さんは今の半ば荒魂と化した姿を見たらどう思うだろうか――――？

和樹は、あの優しくて、刀使だったお姉さんは今の自分の姿を見てどう思うだろうかと考えていたせいなのか、いつも尊敬していて、いつも優しくしてくれていた刀使のお姉さんが居て、その人に初恋を抱いていた昔の少年時代のことを夢で見ていた。

「……お姉さんはどう思う？……でも、僕は結月さんのことも……。」

だけど、もうどうすることもできない。

（……もう、僕は荒魂のようなものだから、過去はもう振り返らない。振り返らなくてもいいんだ！）

自分の身体は身体を這いずり回る激痛による寝不足とどうしようもない飢えと渇きに耐えながら、髪が白髪となっても歩いて行った。

そんな身体でも、和樹は荒魂の召喚という力を頼りに特別希少金属利用研究所へフードを被って向かうのであった。

一方、特別希少金属利用研究所――――。

「……ま、まあ、ノロには意識もあり意思もある。……私が言いたいのは、ノロの穢れの正体は寂しさなんじゃないかと思ってるんだ。タギツヒメやねねを見ているとそう思えたんだよ。ノロを祀るというのは彼らを忘れず関心を持っているという意思表示に他ならないんじゃないかな。あの里でのお祭りのように。」

フリードマンは何とか気を取り直し、可奈美と舞衣に説明を続けていた。

ノロを敬い祀るのではなく、ノロと対話することが必要であり、善き隣人としているべきではないのかと……。

「ノロは……何をそんなに寂しがってるんですか？」

「彼らは、珠鋼を求めているんだよ。……人の手によって、無理矢理分離させられた分身をね。」

そして、フリードマンは説明を続ける。

ノロは人の手によって分離された珠鋼を求めていると。

「あの実験は珠鋼と近づけることで、ノロの穢れが清められるのを実証するためのものなんだよ。」

「実際、距離と時間に比例して穢れの減少は計測されていマース。」

フリードマンの説明に公威は補足する。

ノロに珠鋼を近づけさせ、どのような反応をするかという実験であったと。

「……それって、つまり。」

「……うん。荒魂の中にある穢れが清められることができるかも知れない。」

可奈美は優の中にある荒魂の穢れを清められるかどうかフリードマンに尋ねていた。

答えは清められる可能性があるということである。だが、フリードマンがどこか歯切れが悪かったことに可奈美は気付いていた。

「……そうなんですか。」

この研究が進めば、優を人間に戻すことができるかも知れないと喜ぶ一方、

『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』

……任せてよお母さん、私はお母さんが言っていたように、大好きな剣術を学んで、荒魂から人を守って感謝されるような刀使になるんだから、優ちゃんもみんなも守るよ。と答えたことを思い出し、

『ねえ知ってる優ちゃん。お母さんが刀使は人を守って、感謝されて、剣術も学べる、最高だって言ってた。けど、私はこうも思うの、刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟なんだって。』

と言って、優に聞かせていたことをも思い出す。

もし、珠鋼で荒魂の穢れを完全に除去できたら、優は私のことをどう思うであろうか？

……私は、何の約束も守れない、何も守れないのではないのか？と。

「それって、まるで母親に抱かれて安心する子供のようだとは思わないかい？」

「でも……。」

「……そう、残念なことにノロと珠鋼を再結合させる方法はない。」

だが、舞衣とフリードマンの話から、まだ研究は成功していないのことに可奈美は気付き、その事実に安堵していた。

まだ、刀使でいられる――。

まだ、〝正義の味方〟でいられる――。

まだ、約束を守れる〝理想の存在〟でいられる――。

……まだ、母から教えられ、研鑽した剣術は使える――。

可奈美は、不安定な心を呪詛のような言葉を心の中で呟くだけで、不思議と心が落ち着いてきた。

そして、可奈美の推測通り、ねねも嘗ては他の荒魂同様渇望のままに暴れ回る存在であったが、歴代の益子と長い年月を経て過ごしてい

くと共に、穢れが抜け、小さく可愛らしい今の姿へと変わったのであり、優もそれが可能といえば可能である。だが、それは長い年月と数世代の時間を必要とするため、可奈美が生きている内に叶うものではなかった。

「あの子はね、ニモと言うんだ。寂しがり屋のリトル・ニモ。……私はね、あの子の声が聞きたいんだよ。本当に望んでいるものが何なのか、それを教えてもらうためにね。」

「私はこの話を聞いてここへの出資を決めた。刀使を辞めなくても良い、できれば将来お前にも協力してもらいたい。」

フリードマンは、荒魂は何を抱き、想うのかを解明することで、刀使が荒魂を御刀で斬って倒さなくてもいい未来の礎となる技術になると舞衣と可奈美に話し、理解してもらおうとしていた。

孝則もフリードマンの話を聞き、特別希少金属利用研究所へ出資することを決めたが、娘のために会社の金で出資すると言えば柳瀬グループに属する役員達が納得しないため、新興の大企業である柳瀬グループが社会福祉に貢献しているとアピールして会社の信用と知名度を上げること、珠鋼及び隠世関連の研究は国に莫大な国益を齎し、柳瀬グループにも巨万の富が得られる事業であると説明。そして、孝則自身も不本意ではあるものの、政府から会社が傾いた際は公的資金が得られることと政府側の助力も使って、柳瀬グループの役員達を説得したのである。

こうして、孝則は苦労しながらも何とか柳瀬グループは特別希少金属利用研究所へ出資することに向かわせることに成功したのである。

そして、孝則が「刀使を辞めなくても良い、」と言ったのは、舞衣の刀使を辞める意志が無いのなら、戦線から遠ざけ、後方に回せば良いだけの話しであり、フリードマンの研究を手伝えば、刀使達に貢献できると言って納得させようとしていたのだ。だが、孝則はできれば舞衣が特別希少金属利用研究所の研究にずっと協力してくれれば、とは思うものの、流石にそこまで無理強いすることはなかった。

「私は……。」

――――わたしには、何ができるんだろう?

フリードマン等の話を聞き、舞衣は刀使となった際に思い悩んでいたことの一つ、自分は何を成し遂げることができるのだろうか？で思い悩んでいた時期の頃のことを思い出していた。

最初は刀使がみんなを守れる仕事だから、立派な仕事だからという理由で刀使となったものの、本当は立派な仕事を目指したのではなく、みんなを守れる刀使に憧れただけ、憧れだけで良いのかと思い悩んでいた時期のことを思い出していた。

……なら、父の誘いを受けるべき、なのだろうか？

父もここを出資すると決めたとき、会社の人間を説得するのに大分苦労した筈である。父の苦労をそんな自分のワガママで水泡に帰して良いものなのかと舞衣は自問自答する。それに、鎌倉での漏出事件で、いままでのやり方ではみんなを守れる刀使になれるような気がしなかった。

そこまで考えた舞衣は孝則に、

「マイマーイ！カナミーン！お久しぶりデース!!」

「エ……エレンちゃん？」

「……どうしてここに？」

ピンク色のフリフリしたいかにも少女趣味満載な服装で来たエレンの突然の登場に、舞衣は出かかった言葉を飲み込み、可奈美は驚きながらもここにいる理由を尋ねていた。

「それよりも、今日もお二人は仲が良いデスネー。」

しかしエレンは、可奈美と舞衣の二人が一緒に来ていることから、二人は今日も仲が良いと言って茶化そうとしていた。

「違います。」「違うよ。」

「……エッ？」

だが、可奈美と舞衣の親友と呼べるほど仲の良い二人が険しい表情で、それを否定するという意外な返答に仰天するしかなかったエレンだったが、その直ぐ後に孝則から昨日、可奈美と舞衣の二人が揉めたことをエレンは聞くことになる。

特別希少金属利用研究所のテラスで舞衣と可奈美、エレンの三人でお茶会をしようとしていたが、可奈美がもう少し観ていたいと言ったため、エレンと舞衣の二人だけでお茶会をしていた。
「じゃあ、エレンちゃんは研究のお手伝いに？」
「イエス！それと、ノロを取り扱っていマスので、警備も兼ねて、って処デスカネ。」
ノロは荒魂を引き寄せる性質を持つ、故に刀使を警備に就かせることが不可欠であったのだが、エレン自身、父と母と同じ研究職に就きたかったため、その研究の手伝い兼研究所の警備を志願したのである。
「……そうなんだ。エレンちゃん、刀使を辞めた後のことも考えてるんだね。」
「いやぁ、それが警備の話を聞いたグランパが久しぶりに家族水入らずだーって喜んでいたんデス！でもこれって、公私混同ってやつデスよね？」
「違うと思うけど……。」
狙ってやっているのかは分からないが、何ともピントの外れた会話をするエレンを見て、舞衣は久しぶりに和やかな気分となるのであった。こんな穏やかな気分で会話したのは何時以来であろうかと思うほどに。
「エレンちゃん、その格好はもしかして……。」
舞衣は、エレンの趣味から外れているであろう服装はもしかして、と思い尋ねてみた。
「そうデス！これパパからのプレゼントなんデース！任務には向いてませんけど、折角だから来てる所を見てもらおうと思いまして。」
「そうだったんだ、私はとっても可愛らしくて似合ってると思うよ。」
舞衣はそう言って、乾いた口を潤すためにお茶を一口入れるのだが、
「……マイマイパパって素敵デスね。」

「す…素敵……？」

突然エレンが孝則のことを〝素敵〟だと言ったことに舞衣は驚き、口に入れていたお茶を零しそうになった。

「ここが閉鎖されていたらパパとママは路頭に迷う所デシタ。グランパはお金持ちデスから、その気になれば助けられたんデスけど、公私混同はよくないって。」

「ああ、だから素敵なんだね。」

エレンの両親が路頭に迷わずに済んだのだから、孝則のことを〝素敵〟だと言ったのだろうと解釈する舞衣。

「ところで、マイマイパパはどうしてここに資金を提供したんだと思いマス？」

「それは……珠鋼の研究はお金になると思ったから、かな？」

エレンの問い掛けに舞衣は内心間違っているのは分かっていたため、歯切れ悪く金のためだと答えた。

「違いマスネー。お金になる研究してたら、そもそも潰れそうになんかなりません。珠鋼でノロの穢れを祓えるようになったら、多分刀使は必要なくなりマース。マイマイが危険になることもなくなる。だから何としてもその技術をって、そんな風に思ってるんじゃないデスか？」

「……。」

舞衣は俯きながらエレンの話しを静かに聞いていた。

舞衣は解っていた。金銭のためという理由だけで、父孝則が特別希少金属利用研究所に出資するはずがないことは……。それに、父は柳瀬グループの代表とはいえ、父の意向だけで柳瀬グループの出資を決めることなど不可能であることも、だとすれば、企業の役員や幹部を説得するのには大分苦労したであろうことを舞衣は容易に想像できた。

「うちの家族は特殊なんデス。パパもママもグランパもみんな研究に人生をかけているような人で、今はこうして同じ場所に居ますケド、それってとっても珍しいことなんデス！」

「……うちと一緒だね…。」

「でも、パパは私の誕生日にはプレゼントを送ってくれるんデス！顔を合わせる事はできなくても必ず毎年新しい洋服を、」
「じゃあその服……。」
「イエス！古波蔵エレン、１６歳のバースデープレゼントデース！子供っぽいデスよね～。正直私の趣味じゃありません。わかってないんデスよね～。……でも、でもデスよ。この服にはパパの愛がそれはもう目一杯詰まってるんだ～って、それだけは断言できますよ。」
「マイマイ。あなたはどうデスか？」
「私は……。」
舞衣は、エレンの親の愛の話しを聞き、父孝則の思いを実感した今、父の話しに乗るべきだろうかと揺れ動きつつあった。

一方、大村　静とイチキシマヒメは静の実家にある地下室に居た。
「……はあ、陰気な所に閉じ込められるとは。」
「そんなこと言わないでよイチ子ちゃん。ここは私にとって、とっても思い入れのある処なんだよ？」
静は誰もが素直になる躾部屋だと言っていたが、イチキシマヒメはどこか不気味な雰囲気がある悪趣味な部屋としか思えなかった。
左を見ても、右を見ても異様な気配が在るのだ。むしろ、この部屋には何かが在るとしか思えなかった。だが静は、薄暗く、何かの気配がするうえ、赤い照明しかないこんな場所で雪那から鎌府の研究成果を訊き出し、しかもこの場所で何食わぬ顔をして寝食を行っていたのである。
イチキシマヒメは静が、自身と近い考えを持つ科学者スレイドと同様に常軌を逸しているとしか思えなかった。……いや、彼女等に保護を求めたのが運の尽きだったのかも知れない。とイチキシマヒメは考えを改めることにした。

ソフィアは元から何を考えているのか分からない女であり、あのマッドのスレイドと共にしようとは思えず、可愛らしい容姿の静と一緒に過ごすという選択をしてしまったのだが、その選択は間違いであったとイチキシマヒメは後悔していた。

そのうえ、この静と共に過ごしていく中で特にイチキシマヒメが驚いた静の行動は〝躾〟というものであった。

「……なあ、静よ。それは〝躾〟になるのか？」

「えっ？知らないの？……と言っても、お父さんとお母さんに教えてもらったことだから今も私はそれを探求して、お父さんとお母さんが何を思っていたのか知りたいんだけどね。だから、これは〝躾〟なんだよ？」

背中を板に固定して頭に袋を被せ、頭を下に向けた逆立ちの状態で顔の上、あるいは袋に穴を空け、口や鼻の穴に水を直接注ぎ込むことを〝躾〟というらしいことをイチキシマヒメは知識として吸収する。あんな苦しいことが〝躾〟なのかと、あんなことが〝教育〟であり、この国の昔の人間はそれを乗り越えることが尊いことであるということに静から教えられ、イチキシマヒメは驚愕する他なかった。

「……そういうものなのか？」

「うん。あとはタバコを押し付けられたり、壁に突き飛ばされたり、腹や顔を殴られたり蹴られたあと狭い部屋に押し込められたり、そんな痛い思いをして乗り越えることができたら、親の愛と神様の愛が分かるようになるんだよ。」

イチキシマヒメの問いに、静は満面の笑顔で答えていた。これは〝躾〟なのだと、これは〝教育的指導〟だと、これは〝修正〟だと静は満面の穏やかな笑顔でイチキシマヒメに答えていた。

「……何故、そう言い切れる？」

「だって、お父さんとお母さんは『これは貴女を思ってやっているの。』と言って私に愛を注いで、『私の娘なら、これぐらい耐えてみせろ。』と言って期待してくれていたの。だから、これは〝教育〟で〝親からの愛〟なの。」

幾日もの歳月と、暴力に支配され、それに耐え続け、悠久とすら思

える時間の中で静が辿り着いた答え。
　それは、両親が与えてくれる水責め、罵られる言葉、身体に残る損傷とタバコの火傷跡だけが両親が唯一与えてくれた〝愛情〟なのだと認識し、一日一日を過ごしていったとイチキシマヒメに伝えていた。
「……そうか、お前は必要とされていて、我は誰からも必要とされていない……。」
　イチキシマヒメは静の話を聞き、無性に物悲しくなった。何故かと言われれば、自分を神と言って敬ってくれる者はあの暑苦しいマッドだけであるという状況であれば、タギツヒメやタキリヒメであれ物悲しくなるものであろう、とイチキシマヒメは述懐していた。
「……はあ。」
「元気ないね。それに、イチ子ちゃんが不要ってどゆこと?」
「我は我がこの世界に存在する意味を求めた。我々荒魂はこの世界にとって不要な存在なのだろうか?不要なものが存在する意味は?模索しやがて見つけた。人と荒魂を融合させる術を、人という種を進化させる術を、我は見つけたのだ。この世界に存在する意味を、故に我は全人類を荒魂と融合させ、種としての人類の進化を促す。……だが、理解してくれる者はあのマッドくらいしか居ないということに我の思い描いた理想は正しくなかったのではないか、と思うようになってな。」
　イチキシマヒメは意味のない行為だとは思うものの、静に自らの理想を言って聞かせていた。
　だが、静はイチキシマヒメから深い悲しみを感じたのか、あることを提案する。
「目的を見失ったんだね?……なら、私のように探そうよ?」
「というと?」
「私もね、親から一身の愛情を受けて育ったんだけど、誰も私の親の愛を理解してくれなかったんだ。……だけど、私はこう思ったの、私は親の愛情を理解できなかったからみんな理解できなかったんだって。だから私は〝躾〟の探求をしてお父さんとお母さんの愛情を本当の

意味で知る必要があると思って、悪い人を〝躾〟していったの。そうすることで、視えるものが増えたの。」

「……つまり、どう言いたいのだ？」

「イチ子ちゃん、私のお手伝いしてみない？」

静は天使のような笑顔で、イチキシマヒメに悪魔の様な提案をするのであった――――。

痛みに耐えて、耐え続けてた。

綾小路武芸学舎内――――。

「隊長、和樹氏に柳瀬氏の息が掛かった研究所を襲わせるということですが、宜しいのですか？」

穂積は、ソフィアが和樹に特別希少金属利用研究所を襲わせる意味を尋ねていた。

「それはだ、我々が関与したという証拠を可能な限り残さないのが彼であり、夜見が使った蝶型の荒魂を和樹が使って襲うことによって捜査を攪乱させることが目的であることを考慮すれば、彼の方が適任であると判断したまでだが。……不服そうだな。」

「……。」

穂積の態度を見て、ソフィアはそう判断し、更に話を続ける。

「我々の理想とする世界を構築するには権力が必要だ。だからこそ、我々は空席となった親衛隊の席を我々が占有する必要があったのだが、それは叶わぬ物となった……。」

ソフィアは理想とする世界を得るために、結芽と夜見を罠に嵌め、真希と寿々花を陥れ、親衛隊の席を空席にしたのだが、結果は空いた席を自分達のシンパで埋めるということができぬまま、ソフィア達は結芽の一件以来から綾小路学長結月に疑いの目を向けられ続けていた。

「それ以前に、我々は結月から目の敵にされている。そこで、あの男だ。」

結月から疑いの目で見られ続けているソフィア達の状況を一変する手が、あの男と呼ばれた和樹であるとソフィアが言っていた。つまり――――、

「あの男を使えば、ノロの強化薬の研究は飛躍的に向上し、尚且つ夜見と同様の蝶型の荒魂で刀使関連の施設を襲えば、夜見と雪那に疑いの

目を向けることができる。そのうえ、彼は結月と面会している以上、和樹氏と結月は何らかの関係があるように見せることもできますね。」

　要するに、ソフィアにとって、和樹は未だ投与のリスクがあるノロの強化薬の完成度を高めるための実験台であり、刀剣類管理局への疑いの目を夜見に向けさせるための囮でもあったのかと穂積はソフィアに尋ねる。

　しかし、ソフィアはまだ何かあるのか、微笑みながら答えていた。

「そうだ。鎌府の研究データを静が高津から訊き出したが、投与のリスクは未だに高いからな。あの男は実験台にも使え、囮にも使える。だが、もう一つあるだろう?」

　ソフィアにそう問われ、穂積は首を傾げる。一体、他に何があるというのだろうかと、

「あの男は自分が荒魂となってでも頑張れば、本気で刀使を救えると思い込んでいるのだぞ?本心をひた隠してな。それで奴は荒魂と融合したのだ。なら、奴を見た結月はどう思うだろうな?どう心が痛むだろうな?……愉しみだろう?」

　ソフィアは結月を精神的に追い詰めるために、結月の知り合いでもある和樹を選んだのだと言っていた。

　ただ、利用するために使っていると。

「まあ、そんな男の話しよりも、優の居所は見つかったか?」

　ソフィアは和樹のことより、優の方に興味があった。

「……現在、鋭意捜索中であります。」

「必ず見つけ出せ、彼は二十年前の残り香だからな。」

　ソフィアは、スレイドから優が二十年前の大荒魂の一部と融合していることを聞き出しており、予想通りの人物であったことに喜んでいた。

（……彼が、彼こそがもしかしたら私の理想を叶えてくれる。そして、私の最大の理解者となってくれるかも知れない……。）

　優のことばかり考えていたせいか、ソフィアは優だったら和樹に対して、そして自身に対してもどのようなことをするのだろうか?と思

い始める。
（……だが、彼なら、あの男をどうするだろうか？……それに、彼は私をどうするだろうか？どう傷付けて、どう殺して、どう壊して、どう奪い尽くすのだろう？そして私に、どのような力を、救いようがない暴力を見せてくれるのだろうか？）
ソフィアは優に対してそのような感情を抱きつつ、自分を傷付け、どう壊して、どう奪い尽くして、どう殺すのかを待ち焦がれていたことに誰も気付かなかった。

特別希少金属利用研究所――――。
和樹は御刀を握り締めつつ、自らの二の腕を見ていた。
「……ハァッ……ハァッ！……」
荒魂を召喚するためには、自らの血を代償にしなければならない。そのため、和樹は今から自らの腕に傷を付けなければならないのだが、和樹は動揺していた。
それも当然で、和樹の人生は今まで暴力とは無縁の人生を送っていたのであり、自分の腕を傷付ける行為など一つもやったことなどないので、どれぐらい腕を切ればいいのか分からないのである。それ故に、和樹は怯え、手を震わせながら、腕に御刀を持って行き、そして切る。
「……うっ……づぅ、あぁあぁあぁあああ……。」
そのうえ、どれぐらいの量の血を出せば良いのか分からないうえ、御刀を握ったこともないため、余計に深々と刺してしまった。
和樹の予想以上の痛みと多量の血が溢れ出て、少々パニック気味となる。
「あぁあぁあぁあああああぁぁぁ……血が、血が！」
今の和樹の精神状態は、リストカットに失敗し、血が多く出てきたことに動揺した自殺志願者に近い精神状況でもあった。それ故に、血

を止めなければと矛盾したことを考えるほど、慌てふためいてしまう。

「……あっ……あぁ！」

だが、自らの血を代償に無事荒魂を召喚できたこと、蝶型の荒魂が自分の命令に素直に聞くことで自信を取り戻し、今なら刀使が相手でも勝てそうな気分となった和樹は、

「……はは……ははははは。……これなら、これなら！」

和樹は妙な自信を得る。

これで、僕はこの体中に這い回る激しい痛みを乗り越え、刀使と同等の力を手に入れた。そして、その力で刀使を救えるのだと一人で喜んでいた。

所詮は偽りの力、胡蝶の夢のようにうたかたの夢だと気付かずに……。

可奈美は、ニモと呼ばれているノロを窓越しに見つめていた。

「……ねえ、何がそんなに寂しいの？」

フリードマンが言うには、ニモという名が付けられたノロは孤独を感じているらしい、……孤独。孤独という言葉が思い浮かんだ可奈美は自分も似たようなものなのだろうと実感していた。

だからなのか、ニモに親近感を感じた可奈美は返事が返ってくることはないことを理解しつつも、ガラス張りの向こうに居るニモに喋り続けていた。

「……私って、剣術が大好きなのかな？心の何処かで私、優ちゃんのこと疎ましく思ってる私って本当に何なのかな？」

可奈美は同じ孤独を感じているであろうニモに自身の悩みを語っていた。剣術の深い見識と理解を買われ、剣術の指南役を任命された後に苦悩することになったことを思い出していた。

『ありがとうございました。』

『可奈美さんって、剣術が好きなんですね。』

鎌府の練兵場において、剣術の上達を夢見て、必死に自分に向かって来る刀使の卵達。それを見て、どの程度の強さか冷静に判断し、自分以上の実力者ではなく、高みへと昇らせてくれる者ではないと理解してしまい、何処か心の奥底で冷めた目で彼女達を視る可奈美。

昨日の舞衣との殴り合いも、舞衣に殴られても写シを張ったみたいに痛みを感じなかったうえ、心の何処かで何故そこまでムキになるのか分からず、冷めた目で、冷めた心で舞衣を見る自分。

そんな冷めた目をする自分と一生懸命に剣術の上達と社会の役に立とうとすることを夢見る刀使の卵と舞衣。どちらが刀使として立派なのか？どちらが剣術好きな少女なのか？……自分は御刀を持つべきなのか？

（私、何処か冷めた目で、……心の奥底であの子達も、舞衣ちゃんも見下していたんだ。）

そして、潜在的孤独に打ちひしがれ、舞衣に怪我させた自分は荒魂のようなものではないかと？心を失った今の自分は人間なのか？と可奈美は思い悩んでいた。

そのうえ、可奈美はエレンの両親がたゆまぬ努力によって確立させた荒魂の穢れを清める研究。その研究が成功すれば、刀使の力が不要となり娘のためになると判断し出資する舞衣の父。１４年間という月日を犠牲にしてまで研鑽に励んだ剣術は大荒魂に通じず、１２歳の結芽の剣術は通じたという事実。……どうあがいても荒魂化が進む優。

それらの事実が、疎ましく妬ましく感じている自分がいることに、可奈美は辟易としていた。

自分は何て嫌な女で、醜いのだろう――――。

可奈美が一人、ニモを見つめながら自問自答をしているとき、突如として特別希少金属利用研究所内から警報が鳴り響き、騒然とする。

「何事かっ!?」

見ると、蝶型の荒魂が群れをなしてこちらに来ていることが伺えた。つまり――――、

「何処かに、夜見さんが？」

今も行方不明の夜見が此処に襲撃を仕掛けたのだろうか？と、推測するものの舞衣は先ず、父とエレンの両親に危害が及ばないようにしなければならないので、こちらに向かって来る荒魂の大群をどうにか対処しなければとならないと思い、舞衣はエレンと共に荒魂の大群の許へと向かおうとするが、

「……エレンちゃん、舞衣ちゃん、二人は此処の研究員を守って、私一人で充分だから。」

だが、可奈美の単独でやるという意見にエレンと舞衣は驚いていた。しかし、可奈美は元気無く、俯きながら低い声で言っていることから、可奈美が無理をしていると気付いたエレンは、単独では無理だと判断し、協力を申し出ていた。

「カナミン、イッパイ無理していることは分かりマス。……なので「良いからっ!!一人で良いっ!!」」

しかし、可奈美はエレンの協力の申し出を大きな声で制止し、気迫の大声を上げながら、蝶型の荒魂の大群へと向かって行った。

可奈美は剣術の型も何も関係無く、ただ子供のように刀を振り回していた。

自身が抱えるどうしようもない苛立ちをぶつけるように、ただ我武者羅に振り回していた。

可奈美の流派は柳生新陰流。自ら先を取るより、『相手の動きや考えを読み、それに乗って勝つ。』ことをスタイルとし、将軍家御流儀とされた歴史を持つ剣術流派である。だが、今の可奈美は柳生新陰流の教えを反するかのように、自ら攻撃を仕掛けていた。

可奈美は荒魂の大群に真正面から向かって行ったのである。そして、可奈美は獣のように吠えながら、荒魂に向けて剣を振り回す。自身が抱える悩み、妬み、失望、……軽蔑。

自身がそのような暗い感情が有ることを否定するかのように、その暗い感情を断ち切るかのように剣を荒魂にぶつけて、子供のようにた

だただ振り回していた。
(……この、このぉっ!?!!)
だが、多勢に無勢。可奈美は一瞬の隙を突かれて、写シを一回分失うほどの痛手を受ける。
「カナミン!!」「可奈美ちゃん!!」
それを見たエレンと舞衣は流石に救援に向かおうとするが、
「来ないでっ!!!」
可奈美の鬼気迫る表情に両者は臆してしまい、止まってしまう。
可奈美自身、約束を守れず優を苦しめてしまったのだから、例え自分もそれ以上に傷付いたとしても、これは自分に科せられた罰だと思っていたため、エレンと舞衣を必死に戦列に加わらないように大声を張り上げ、止めていた。そして、
「私はっ!剣術が好きだよっ!!刀使をやり続けることももっ!!!そうじゃなきゃっ……そうじゃなきゃ私が思う心も嘘になるから、そうしたくないからっ!!」
可奈美は叫ぶ、自分は剣術好きな少女であると、刀使であることを失いたくないと。母と優との約束も嘘にしたくなかったからだと声を上げながら、型もなく荒魂を相手に我武者羅に振る。
「私よりも強い奴がいたらそれで良いのっ!?私よりも凄いものがあれば……それに挿げ替えれば、本当に救ったことになるのっ!!?」
可奈美は誰かに向かって叫ぶ。
母から教わり、自分が14年という時間を費やして研鑽を積んだ剣術が、12歳の結芽の剣術より劣っているのでは?と痛感する可奈美は声を上げる。――――自分以上に強い者が現れたとして、それだけで何もかも救われるものなのか?
母と弟との約束を守るため、親も友人にも笑顔の仮面を被り、嘘を吐き続け、14年間も彷徨い続けた可奈美は血反吐を吐くように叫ぶ。――――自分の剣術以上に凄い物が創られれば、本当に私達は救われるのか?
「なのにっ!危険だけという理由だけで、刀使を続けたいことは良くないことなの!?ねえっ!!?」

私自身の手で、母から教わった剣術で、母との約束を守りたい。優との約束を守りたい。

母から受け継いだ唯一の物、唯一の繋がりである剣術は無価値ではないということを証明したい。

刀使の仕事を誇りだと言って教えてくれた母を、死ぬまで笑ってくれていた母を否定したくない。

「だったら、強い刀使になろうとしている私は、……私の、私達のやり方は間違ってるって言うのっ!!そんな訳ないっ!!そんなこと、認めないっ!!絶対に、認めないっ!!!!」

母との約束。優を救う。そのために、強い刀使になると決めた。それだけは嘘にする訳にはいかなかった。だから１４年間も笑顔の仮面を被った。隠してきた。我慢してきた。研鑽してきた。精進してきた。前へと進んできた――――。

「だって私は、私はぁっ!!!」

『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』

――――私は、強くて、優しくて、頼れる存在になりたかった……。剣を通じて解かること、お母さんが残してくれた物は、何の意味もないことじゃないから……。

「……ハァツ……ハァツ、まだ、……まだぁっ!!」

写シを数回剥がされ、もう写シを張れない状態であっても可奈美はまだ挑もうとしていた。

例え写シが張れなくても、傷付けばいい。――――それはそれで、優ばかり苦痛を受けたことにならないし、母に対する贖罪ともなる。

そう考えた可奈美は、写シを張らずに荒魂の群れへと再度突撃しようとするが、荒魂の群れは急に勢いを無くす。それは、

(えっ?……止まれ止まれよ荒魂共!!何を考えているんだあの娘はっ!?)

禁忌の力を使って刀使を救うことを決めた和樹が必死に止めたからである。

「離してっ!!離してよっ!!」

鬼の形相で、舞衣を責める可奈美。

「可奈美ちゃんっ!!何をしているのっ!!」

「マイマイはカナミンをお願いします!!」

しかし、逆に舞衣に叱責された可奈美は押し黙ってしまう。その隙にエレンは少し慌てながら、可奈美を舞衣に任せ、エレンが荒魂の群れの前に躍り出る。可奈美の救助の時間を稼ごうとするために。そして、可奈美は舞衣に羽交い絞めされ、建物内へと連れて行かれる。

「外人?……荒魂達、そいつを攻撃しろ。」

だが、和樹は先程の写シを張らずに突っ込んできた刀使とは違う、新しい刀使が現れると、その外人と思しき新しく現れた刀使を攻撃目標に変えた。

「……勢いが増して来まシタネ。カナミンを後退させて良かったデス。」

そのため、エレンと舞衣は荒魂の群れを召喚した者が刀使を殺める意志が無いことには気付かなかった。だが、舞衣は可奈美を建物の中へ避難しているため、エレンは単独でこの荒魂の群れを相手にしなければならなかった。

「今なら、ノロがある場所の警備も薄いハズ。」

一方、和樹は特別希少金属利用研究所にあるノロを奪取するために動く。

理由は、ソフィアから特別希少金属利用研究所にあるノロを奪取することができれば、政府と刀剣類管理局が民間施設と偽ってノロの研究を行っていることを糾弾することができると言われたからである。しかし、秘密裏にノロを民間施設へと運び、誰にも知られず妙な実験をする刀剣類管理局はやはり信用できないと和樹は断定し、特別希少金属利用研究所に有るニモと呼ばれたノロを奪取しようと決意を新たにする。

（……大丈夫、僕は荒魂を操る力とこの御刀が在れば!!）

ニモを奪取することができれば、刀剣類管理局は糾弾されて新しくなるはず……。和樹は激痛に苦しみ、思考が定まらないまま、そんな夢物語を夢見ていた。

可奈美は、研究所の通路で俯いたまま止まっていた。

「……。」

「可奈美ちゃん……。」

小さく蹲る可奈美を見て、舞衣は可奈美の名前を呼ぶ。

「……何？」

「可奈美ちゃん。幾ら何でも、あの戦い方は……。」

可奈美と喧嘩したとはいえ、舞衣は流石に自分を鑑みない戦い方をする可奈美を気にして説得しようとしていた。

「……だから？」

「だから、もう少し「今までの戦い方じゃ足りないんだよ。私、才能ないから、人の何倍も努力しなきゃいけないの。だから、私は好きでそうしてるだけ。それの何がいけない訳？」

舞衣は可奈美の先程の無茶な戦い方を諫めるべく、

「……そんな戦いばかりしていたら、優くんは喜ばないよ……。」

舞衣に、『優くんは喜ばないよ……。』という言葉が引き金となって、可奈美は立ち上がる。

「……舞衣ちゃんの何が解かるの？何でもかんでも持ってる舞衣ちゃんに何が解かるの？」

しかし、可奈美の返ってくる言葉は拒絶。舞衣ちゃんは優のことを何一つ解っていない、優ちゃんは私に〝かっこいいおねえちゃん〟であることを望んでいるのだ。やはり、何不自由なく過ごせる家族を持つ舞衣に何か解かるのかと。

「……私はそんなこと……ただ、可奈美ちゃんのためを思って。」

「私のため？」

だが、舞衣は可奈美の身を案じて言っているといって、可奈美を説得するが、舞衣の〝可奈美のため〟という言葉に反応する。

「……私のためって何？剣術以外取り柄の無い子供（ガキ）の何のためになるっていうの？」

可奈美は舞衣に壊れた笑みを浮かべながら、舞衣を問い詰める。

「優ちゃんは痛みも何もかも耐えて、頑張っているのに、私は……私って、何ができた？舞衣ちゃんは私のこと〝強い刀使〟とかいうけど、〝強い刀使〟って何？」

「……可奈美、ちゃん？」

「みんな、みんなみんなみんなみんなみんなっ!!私のこと大荒魂を倒したとか、強い刀使だとか、凄い人扱いされているけどっ!!それは、…それは全部嘘なんだよっ!!大荒魂を倒したのは優ちゃんであって、私じゃないんだよっ!!?」

可奈美は舞衣の襟首を掴みながら叫ぶ、今手に入れている地位、名声は全て虚偽であると。

「なのに……なのに、みんな見知っているかのように分かった気でいるんだ。けど、そんな子達が強い刀使になることを目指して、剣術の上達を夢見ていたんだ。そんな子達を相手にして、私は、コイツは大した実力が無い。コイツは私を高みに昇らせてくれない。って、心の奥底の何処かでバカにしているんだ。……ねえ、私は、私は本当に舞衣ちゃんのいうようにとても強くて立派な刀使さんなの？……私は、どっちが本物の英雄で、どっちが本当の剣術好きな少女なのか、本当の自分はどうなのか、分からないんだよ。」

可奈美は自身の思いの丈を全てぶちまけるかの如く、舞衣にそれを打ち明けていた。

「……だから、もう私のことを強い刀使とか、立派な刀使さんだとか言わないで？……腹立つから。」

心が折れそうだった。

「――――荒魂事件に巻き込まれて遅れただぁ!?こんなご時世にお前は何を刀使さんのせいにしてんだよっ!!」

また怒られた。

またあの上司から言われる一日が始まった。

あの上司はバブル世代故なのか、彼は未だ右肩上がりの経済状態であった頃のことを忘れられないのだと和樹は元々そういう人物だったのかをも考慮せず、偏見混じりのことを思っていた。だが、タクシーなり何なり呼んで、沢山有る仕事を少しでも片づけるために直ぐ来いだのと直ぐ怒る、いや怒鳴れば良いと思っているパワハラ上司であれば、愚痴の一つも言いたくなるというのが和樹なりの考えである。

……それに、お笑い草だ。

荒魂事件のせいで電車が遅れているのだから、皆同じ行動するのは当然だ。だから、僕は何度も携帯でタクシーを呼んでも来なかったうえ、それを連絡をしても上司は怒鳴ってばかりであった。

この仕事を辞めれば良いのかも知れない……。けど、増税ばかりしているこの国の政府の行動によってなのか、不況はずっと続いているこのご時世で再就職先などあるのかどうかという不安もあり、辞めるという行動が取れないままであった。それに、この国はレールさえ外れなければ、外国のように銃で殺されることもなければ、犯罪も多くない治安の良い国なのだ。これ以上は贅沢というものかも知れない。と和樹は考えを改めると今日の仕事を片付けようと、自分の席に着いて仕事をし、就職先でも安月給でも我慢し、そう過ごしていた。

だが、不況を理由に内定を突然取り消され、和樹は解雇されると同時に、会社の社長から、

「ウチより全然大きい会社だからさ、大丈夫だから。」

と言われ、会社の社長の紹介で建設作業請負の会社へ再就職することができたのであった。

だが、そこは寮完備と週休二日制と謳いながら、実際は労働者を集めるためのブラフでしかなく、派遣社員を厄介払いするためにあるような更に待遇の悪いブラック企業であり、以前勤めていた会社の社長はこのブラック企業の実態を知っていて、和樹といった派遣社員を厄介払いするために紹介し、そこへ再就職させたことは知る由もなかった。

そうして、和樹は建設作業請負の会社へ再就職できた。そんななか、

「和樹サンッ!!」

カタコトの日本語で和樹を呼ぶ声が聴こえ、そちらの方を向くと、外国人研修生のミンが居た。

彼は、建設作業請負の会社に再就職してから3ヵ月の和樹が仕事を教えている若い子であり、しかも気が合うのか、和樹が気兼ねなく話せる数少ない人である。そのうえ、最先端の技術を学び、それを自分達の村へ持ち帰って、故郷の振興に貢献し、親兄弟達を楽させたいという熱意を持って来日したことに和樹は感化されたのか、ミンを親友のように信頼していた。

いや、幼少の頃から気弱な性格で、自分に自身がなかったがために、親友と呼べる存在が居なかった和樹にとって、ミンは唯一の親友でもあった。

そんな彼に「気を落とさナイデ。」と言われれば、つい此処の上司に対する愚痴も多くなるものであり、またミンもその被害を受けている一人であったのだ。

最初は、「日本語もっと勉強しろっ!!」だの、「分からないフリをするな!!」とか言われていたものだが、最近は此処の性質の悪い上司に怒鳴られる回数も減ってきている。和樹はそれだけで、ミンの待遇が少しだけでも良くなったことに自分のことのように喜んでいた。

「……ありがとう、慰めてくれて。」

「イエ、和樹サンはボクに優しかったカラ、とても助カル！」

そんな会話でも、和樹はミンに対して友情を感じ、嘗てない程の幸福を噛みしめていた。

だが、ミンはその数日後、解雇された。

理由は業績悪化としか聞かされなかった。

そういった事件があったにも関わらず、和樹は前の会社よりも低い月給でやりくりし、アパート代と光熱費等を支払わなければならなかったので生活費のために仕事に励まなければならず、土日も無いかのような仕事の忙しさに忙殺され、気に留めることもできなかったため、ミンが解雇されたことも忘れていってしまった。

だが、そんな努力など無意味であったかの如く、和樹は建設作業請負の会社から、またも解雇されてしまい、次の就職先を見つけようと躍起になっても、不況が長く続いていることもあって、奇妙な圧迫面接で不採用となることが多かった。

そんな日々を過ごしていたら、とあるニュースサイトでミンの名前と顔写真が載っていた。

――麻薬の運び人として。

動機は単純。金銭であった。

ミンは、この国に来る際、多額の借金をしなければならなかったが、貧しい村出身の彼に来る仕事は安定性も無く、親兄弟を養えるほどの給与が得られる仕事が無かったために、来日して、裕福な国で働らくと同時に勉強し、故郷に送金と多大な貢献をして、親兄弟が裕福になることだけを夢見て、この国で働いていた……。

だが、ミンは悪質な管理団体と受け入れ企業によって、給与のピン

ハネ、偽装請負、最終的には不当解雇されていたことに気付くこともないまま、明日の生活と故郷への送金も事欠き、借金の返済の目途すらも立たなくなった彼には、この故郷から遠い地でもあるこの国で、言葉で意志の疎通もままならないうえ、知人も居ない彼にとって、無人島に放り出されたのと同じであった。

それほどまでに追い詰められていたミンは、やっと知り合えた同郷の人間から、金になる仕事があると言われ、それに乗ってしまった。麻薬の密売だと知らずに……。

そうして、ミンは資金をほんの少しずつだが、貯めることができ、借金と親に送金ができていた。しかし、それが長く続くことはなく、遂に警察に捕まってしまう。無論、その後のミンのコースは国外退去。自国にて、借金苦を理由に自殺したとのことである。

和樹がそれを知ったのは、再就職先として勤めていた建設作業請負の会社に突然解雇された数日後のことであった。

ニュースサイトで彼の手紙の一部であったが、ミンは故郷に帰りたいこと、教えられた仕事とは違う仕事をさせられて苦労したこと、この国は良い国だと教えられたがそれは嘘だったことが綴られていて、それを和樹は見ることができた……。

そして、和樹は心の中で、ミンのような人間を殺した僕は、殺人者ではないのか？何故、僕は殺人者と糾弾されないのか？だとしたら、みんな〝人を殺すことは良くない〟と言うが、結局は法にさえ触れなければ、どれだけ人を陥れ、殺しても罪にならないのだろう。

と和樹は、〝殺人〟は道義的に良くないということではなく、法に触れるから良くないのだという禁忌の考えを過らせながらミンを失った悲しみをどうにか乗り越えようと、必死に心の中にある虚しさを押し込めようと、安月給で、しかも交通費や仕事道具の貸し賃が自己負担なうえ、派遣社員をぞんざいに働かせる上、文句を言う者は即クビで真面目に働いてる者も一時的に雇ったらクビというブラック企業の典型ともいうべき会社に勤めることができ、とにかく頑張って働くことにした。

……だが、やはりというべきか、其処でもクビになり、また新たな

就職先を探す毎日となるのであった。

働こうとした。いや、頑張って働いて生きないと死んでしまったミンに悪い気がしたからという理由で、和樹はまともに働いて、生きたかった。だからなのかは分からないが和樹は刀使の妹がいて、その妹が怪我をしたことは言えたのだが、ミンのことは誰にも打ち明けなかった。

親友を利用したくなかったからなのか、〝自己責任論〟と〝若者の○○離れ〟という言葉が蔓延る世界に言いたくなかったのか、それは和樹にも分からなかったが、確実に言えることは今まで暗い性格のせいで友人と呼べる者が居なかった和樹にとって、初めての友人でもあるミンを悪く扱いたくなかったこと。初めての友人だと思っていたミンがそのような状況に陥っているにも関わらず、何一つ気付かないまま、ミンを貶めた社会の歯車の一つとなっていたことに、ミン以外の外国人研修生をも殺した気分となり、内向的な性格は更に進んでいき、ミンのことは結月にも喋らなかった。

――――でも、どんな辛いことが遭っても耐えられた。……僕には、結月さんがいるのだから、その人が僕を大切にしてくれた記憶が有ればどんなことがあっても、耐えられる。

明日があると思える。

頑張れる。

和樹の中で、心を支えてくれた人結月が居れば、どんなことでも乗り越えられるような気がした。

心が折れずに済んだ……。

和樹は、柳瀬グループという大企業の支援を受けた研究所を見て、

嫉妬の感情が燃え上がったせいか、それとも刀剣類管理局のためなのか、この国に居る愚民のためなのか躍起になって戦う刀使の姿を見て、何か思うことがあったのか、昔のことを思い出していた。

そして、どうにかニモが居る研究所のエリアに入り込むことができた和樹は、研究所の警備が手薄であったことも幸いし、ニモを奪取することに成功したのだが、

「ぜっやぁぁあぁぁあぁっ!!」

可奈美が裂帛の声と共に自身に突撃し、斬り掛かっていたことに和樹は気付かなかった。

(……えっ!?)

だが、可奈美は蝶型の荒魂が襲撃しに来ているところから、夜見が研究所を襲っているものだと思っていたため、知らない人間がノロを盗んでいることに驚くものの、可奈美は斬り掛かっていたところを瞬時に後ろへ飛ぶことによって、和樹を斬らずに、御刀を当てずに済んだ。

(……また出たっ!?!!)

一方、和樹は可奈美がどこからともなく現れたことに驚愕する。この少女はもう写シが張れない筈である。なのに、まだ向かって来るのだ。そのうえ、もう一人刀使が迫って来ている以上、和樹は自分が戦闘の意志が無いことがバレるリスクはあるものの、自分が召喚した荒魂に可奈美を襲わないように命令するしかないと思っていた。しかし、和樹はあることに気が付く。

(……いや、写シが張れないなら、やり方はあるはずっ!!)

写シは御刀を媒介として肉体を一時的にエネルギー体に変質し、そのエネルギー体にあらゆるダメージを肩代わりさせる無敵とも思える術だが、その写シを使用しているときは精神疲労が伴ううえ、体を両断されるような大ダメージを受けて解除されると(死にはしないが。)精神的に大きく疲弊してしまい、写シが張れなくなって、気絶することもある。ということは、この写シを使わずに迫って来ている刀使は、もう写シを張れないほど疲弊しているか、感覚を鈍らせてトチ狂っているかだが、そんなトチ狂っている奴が刀使になれる訳がない

し、そうそう何人も居るはずないだろうと判断した和樹は気力を奪って気絶させるべく、荒魂の群れを可奈美の身体にぶつけるか、可奈美に荒魂の群れを纏わりつくよう和樹は荒魂に指示する。

……荒魂と融合した影響なのか、自身の刀使を救いたいという考えと刀使に荒魂をぶつけるという行動が、相反するということに気付くこともなく。

そして、可奈美は和樹がそんな精神状況であることに気付かぬまま、再び突撃しようとする。普通の人間が相手なら、八幡力で組み敷けば、良いと判断して。

それに対し、和樹は御刀で自らの腕を傷付けて、大量の荒魂を放出し、可奈美に襲わせる。

(こんなものっ!!)

それに可奈美は知らない人が放った蝶型の荒魂に動じることなく、荒魂の群れに突っ込む。

和樹の初撃は可奈美が御刀千鳥で荒魂の群れを二分して躱すことはできたものの、第二撃は真上からの強襲と先程の戦闘の疲弊もあって、躱すことはできず、雪崩のような荒魂の群れを上から押さえつけるかのように可奈美を押さえつけると同時に蝶型の荒魂は可奈美に一斉に纏わりつき、戦闘能力を奪おうとする。

「可奈美ちゃんっ!!」

舞衣は可奈美の名を大きな声で叫びながら、荒魂の群れに埋もれてしまった可奈美を救出しようと動いていた。

(よし、今なら。)

可奈美を救出しようと動く舞衣を見た和樹はその隙に森の中へ逃げ、追跡をかわそうとしていた。

「可奈美ちゃんっ!可奈美ちゃんっ!!」

数分掛けて、荒魂の群れに埋もれてしまった可奈美をどうにか救出したが、蝶型の荒魂が可奈美の鼻と口を塞ぎ、窒息させていたのか、可奈美は急性呼吸困難と痙攣を起こしていた。

舞衣は、窒息しかけていた可奈美を救出するべく、胸部突き上げ法

と背部叩打法で気道の中まで侵入している蝶型の荒魂を排出させた。
　この場合は、ニモを奪った知らない人を追うべきなのかも知れない。と舞衣は一瞬思うものの、ニモを奪った人が放った荒魂が夜見と同質の物であるという保証もないうえ、荒魂を使役していたということは正常となったスペクトラムファインダー（とは言っても、機密保全のために親衛隊のノロと優のタギツヒメには反応しないようになっているが……。）に反応するはずである。ならば、後でニモを奪った知らない人こと和樹をスペクトラムファインダーで捜索すれば良いと判断したこともそうだが、
（……それに、まだ荒魂が居る。）
　和樹が放った荒魂はまだ残っているのだ。
　なら、この場に写シを張れない可奈美を残して森の中に入った和樹を単独で追うのはエレンの両親とここに居る研究員、そして父に危険が及ぶことを危惧して、未だ残っている蝶型の荒魂の掃討を優先することとした――――。
　微睡みの中で、少女は夢の中へと落ちる――――。
　其処には霧がかっていて、その先が見えないほどの長い階段と鳥居しかないものの、少女が若かりし頃の母と唯一出逢うことができる場所。
「友達に言われたの？」
「ううん、後輩の、剣術を教えることになった子達にかな……。」
　少女は若かりし母に話す。
　少女は剣術を人に教える立場となったこと、そして相手をする刀使の卵達から言われたことを伝えていた。
「ふーん、でもまあ、可奈美が師匠を差し置いて、人に剣術を教えるとはねえ。」

「えっとそれは……師範代が師匠の代わりに出稽古に行ったということで許してくれない？」

若かりし母は、少女に茶目っ気が働いたのか、冗談めかして少女に言う。少女もそれに気付いて、冗談気味に応える。

「……まあ、そういうことにしておこうか。でもまあ、その子達がそう言うのも無理ないと思うよ？今の可奈美、結構強いから。」

今の紫よりも強い。ということを省いて少女に話す若かりし母。

理由は少女が今後も精進し、慢心させないことためである。

「そうかな……。」

少女は、自嘲気味に応える。

理由は何一つ果たせていない自分が強い等と若かりし母に言われても、納得できるものではないから。

「そうなの。」

「でも、私が大荒魂を倒したんじゃないんだよ？」

「でも、この私から三本も取った。」

「……それ、負けてるってことじゃないの？」

「いいや、私の剣ってとんでもなくムラがあるんだよね。友達の言葉を借りれば、とんでもなく弱い時があるとか言われるくらい。だから、そんな私を何度も勝ってきた可奈美は、もう免許皆伝なんだよ。」

「……そうなんだ。でも。」

若かりし母は少女に告げる。

少女は充分に強いのだと母に告げられても、納得できないでいた。いや、納得したくなかった。そうでなければ、上が無くなるから、先が見えなくなるから。

「でも、私のしたことって、お母さんがしたことを……前よりも酷くしただけなんじゃないかって……それなのに、免許皆伝とか。」

「じゃあ、友達を見捨てることができた？」

「ううん！」

「じゃあいいじゃん。大体そんな事言い始めたら、私が江ノ島で大荒魂を倒しきれなかったのだって、悪かったってことになるよ。」

「おか……師匠は一つも悪くないよ！」

少女は若かりし母に酷いことを言ったのでは?と思い、母は一つも悪くないと告げていた。母には笑顔でいてもらいたいから……。

「じゃあ可奈美も間違っていないよ。充分過ぎるほどのことをやったんだよ。」

そうして、母は少女に有無も言わせぬように、告げた。

少女は充分なほど、頑張って来たのだと。

「私にしてみれば充分自慢できる娘だよ。でもね、そんな娘を育てた親はよっぽど立派な人だったんだね~。」

「……いや、自分でしょ?」

「だーかーらー、私じゃないってば。……強いて言うなら未来の私?」

「うん。とっても立派なお母さんだったよ。」

「だろうね、だって私だし。……だから、そんな自慢の娘が行き詰まるのはよっぽどのことだから、辛かったら逃げて、誰かに頼ることは〝恥〟じゃないよ。」

若かりし母は少女に告げる。何が遭っても、自分だけは娘の味方であり続けると。

「そういうとこ……まんまお母さんだよ。」

少女は母の温もりと、師匠としての激励を受け、心が温かくなるようだった。

――――そして、可奈美は夢から醒め、病室のベットから起き上がるものの、母との一連の出来事は忘れており、誰の言葉だったか忘れてしまったが、心の何処かで〝誰かに頼るのは恥じゃない。〟ことを思い出していた。

しかし、

『なのに、舞衣ちゃんはっ!!私に追い着きたいとか、しょうもない理由でっ!!安い覚悟で刀使を続けようとしている!!』

『……だから、もう私のことを強い刀使とか、立派な刀使さんだとか言わないで?……腹立つから。』

親友を拒絶した事実は変わりないのだと、可奈美は再認識し自己嫌

悪することとなる。
「私は……私は、無力だ。」
自分は嫌な女なんだと。無力でバカな女なんだと。

認めさせる。1

可奈美が眠る病室前――――。

ただ静かに、何かを待つかのように、舞衣とエレンがそこに居た。

「……舞衣。」

孝則に舞衣は呼ばれるものの、孝則の方へ顔を向けることなく、ただ一点、可奈美が居る病室の扉を見つめていた。

そして、

「……ごめんなさい、お父さん。私のために研究所を支援することを決めて、会社の人を説得するために駆けずり回って、私のために色々してくれて一杯感謝しています。……けれど、」

舞衣は、自分なりに孝則へ精一杯の感謝の意を籠めた言葉を言い表していた。しかし、

「……けれど、今の私には掛け替えのない親友が居て、それと同じくらい私のことを大切に思っている人が居ることに気付かない世間知らずの子供です。」

舞衣は絞り出すかのように、自分を語る。ただの世間知らずの子供だと。

「そんな、世間知らずの子供のワガママを一つ聞いてくれますか？」

「……ああ、良いぞ。」

舞衣にワガママを一つ聞いてくれるかどうか尋ねられた孝則は、病室で昏睡している可奈美に関わりがあることなのだろうと推察し、聞こうとする。

「だから、私は……私は、可奈美ちゃんに勝負を挑んで、負けたらお父さんの言う通りに刀使を辞めます。」

何故？と、孝則は問い掛けようともせず、訊こうともしなかった。

「……私は、覚悟とか大それたことを言いました。けど、本当はお父さんの言うとおり、私は覚悟を軽々しく使っていただけなのかもしれません。私は可奈美ちゃんのように剣術が凄くないし、エレンちゃんの

ように将来の目標も無かった。」

今までの自分は何かと他人と比べ、卑下していた。だけど、今は違うと言える。

『……だから、もう私のことを強い刀使とか、立派な刀使さんだとか言わないで？……腹立つから。』

上記の可奈美の言葉で舞衣は気付いたからだ。可奈美も自身と同様にコンプレックスを抱いていたのだと、可奈美も舞衣と同じく思い悩んでいるのだと気付いたから、なら、もう答えは決まっている。

「可奈美ちゃんは凄いとか、可奈美ちゃんに憧れているとか、そんなことばかりしか言わなかったし、思わなかった。そんなんだから、私は可奈美ちゃんに辛いことばかり押し付けてばかりいて、それなのに私は可奈美ちゃんの親友面をしていた。だから、私は可奈美ちゃんに……可奈美ちゃんに憧れるのを辞めます。」

だから、舞衣は決意する。可奈美の背負っている物を自分も背負えるほどの人物となるために、自分も同じ立ち位置に昇るためにやるべきこと。

「……私は可奈美ちゃんに認めてもらう。……違う、可奈美ちゃんにせめてもう一人だけで抱え込む必要はないということを分かって欲しい。」

可奈美（親友）の背負っている物を自分も背負えるほどの人物となるために、可奈美への憧れを捨てることを決めた。

「だから、今の可奈美ちゃんに無様に負けるくらいなら、重荷になるくらいなら、辞めた方が可奈美ちゃんのためになる。」

可奈美と同じ立ち位置に昇りたいなら、可奈美から勝利を得たいのなら、そして助けたいのなら、自分の全てを賭ける。いや、賭けられる。親友の一人を助けるためなら、何でも、命だって張ってやれると思ったから。

「だから、お父さん。行くね？」

「……ああ。」

舞衣の御刀を持つ理由、決意、信念、覚悟……。いや、目にしたもの、手にしたものが全てだと答えていた。

孝則はそれらを静かに聞き、舞衣が可奈美の居る病室へと向かうことを許し、扉を開けて入るまで舞衣の後ろ姿を見守っていた。

「ありがとうございマス。」

エレンが舞衣のお願いを聞いてくれた孝則に感謝する。

「やっぱり、マイマイパパは素敵デスね。」

「……どうかな。刀使を続けられるかどうかは舞衣次第だ。」

「刀使を続けられるかどうかは、言っていまセンヨー？」

「……ハハハハ、そうだったな。」

孝則は舞衣が刀使として続けていくことを許した訳ではないから、素敵ではないとエレンに返すが、エレンに刀使を続けるかどうかは問うていないと言われた孝則は、刀使を辞めさせたかった自分が、いつの間にか舞衣が刀使を続けられるかどうかは舞衣次第であると答えている自分が可笑しかったのか、笑いながら肯定するしかなかった。

『全く驚かされますなぁ。子供というのはいつの間にか強く大きく成長してるのですから、……親が思ってる以上にね。』

『その時親はどうするべきなんでしょうな。』

舞衣の後ろ姿を見ながら、孝則は不意にフリードマンの言葉が過った。

（……どうすべき、か。）

フリードマンにそう言われた孝則は、何も答えられないでいた。

だが、今の孝則なら、こう答えるだろう。

きっと、御刀に選ばれた舞衣、刀使となった舞衣、可奈美といった友人に恵まれた舞衣……それらの出来事を通じて、目にしたもの、手にしたものを得た今の舞衣が、孝則が知っていた過去の舞衣を塗り足していって、孝則が知らない舞衣となり、孝則が思い描いていた下書きに突き立て、孝則も知らない可能性を描いていく舞衣の姿を手助けしよう。

孝則が唯一、頭で考えず、自らの心に従って導き出した答えであった。

「だから、後悔はするようなことはするな、……舞衣。」

可奈美は、今現在舞衣の申し出によって、美濃関学院の折神家御前試合代表選抜大会で使われていた場所にて、舞衣と勝負することになった。

そして、エレンがこの勝負の見届け人としており、フリードマンと孝則はこの試合を観戦することとなっていた。

勝負方法は、どちらか一人が『参った。』と言うか、気絶した方が負けとなるとのことであった。

多分、こんなルールとなったのは、舞衣は自分の力を示したいのだろうと可奈美は推察していた。

「……舞衣ちゃん。この勝負に負けたら刀使を辞めるって本当？」

「そうだよ。……可奈美ちゃんに負けたら、私は刀使を辞める。」

「それで、舞衣ちゃんは私を動揺させようっていうの？」

可奈美は、舞衣に刀使を辞めると言ったのは、こちらを同情させる、もしくは動揺させるための〝ブラフ〟なのかと尋ねる。

ただし、可奈美はただ嫌味を言うために言っているのではなく、舞衣を挑発し、怒らせ、攻撃一辺倒に誘い込むためであった。これは、舞衣の剣術は毎回の攻撃のバリエーションが変わるという特徴を封じる目的と、舞衣の正眼を崩すには向こうから攻めてもらう必要があるからである。

「そんなつもりは無いよ。これが私なりの覚悟、けじめ、……未練を断ち切る。これが私の考える可奈美ちゃんへの必勝法の一つ。」

だが、舞衣はそんなつもりはないと、きっぱりと宣言する。

どうやら、安い挑発程度では動じないということなのだろうと可奈美は舞衣を観ていた。だが、舞衣の勝利を得んとする気迫の目を見

て、こちらから仕掛けなくても攻めてくるだろうと可奈美は確信していた。

（……可奈美ちゃん。私はいつも貴女に憧れていた。）

そして、舞衣は可奈美がそのようなことを考えているとは露知らず、可奈美との思い出を思い出していた――――。

（……可奈美ちゃんは凄かった。剣術は高等部の先輩方にも勝つし、勝てる人なんて居ないんじゃないのかなって思うぐらい。）

中等部ながら、美濃関学院の代表になるほどの剣の腕を持つ可奈美の強さに惹かれた舞衣は、可奈美のことを明るい目標として、どこか遠い存在のように見ていた。そして、遠くから憧れているだけでいた。

（……だけど、今までのように憧れているだけじゃっ、そのままでいたら可奈美ちゃんに追い付けない。ただ苦しませているだけだ!!）

だが、これからの舞衣は、ただ可奈美に憧れるだけの存在ではなく、可奈美の負担を一緒に背負える者となるためにこの勝負に勝ちたかった。それには、可奈美への憧れを捨て、自身の刀使の進退を賭けることによって、自身の心の揺れとなるであろう障害を無くし、己自身の心を無に近付けていった。これは、己自身の心を無に近付けることによって、他人の言行や行動に敏感に察知することができる可奈美に悟られないようにするための術として舞衣が考案した一つの策である。

（今度は、私が助ける番。私は、私のやり方で可奈美ちゃんに追い付くんだっ!!）

一方の可奈美も、舞衣との思い出を思い出していた――――。

一番上のお姉さんで、柳瀬グループの令嬢という裕福な家庭に育った娘だけど、努力家で、クッキーを美味しく作れる、家族思いの優しいお姉さんという自分の理想に近い存在だった。だからこそ、可奈美は立派なおねえちゃんとなるために舞衣に接近し、親友というポジションを得ることができた。

『凄いなぁ、可奈美ちゃんは……。』

だが、舞衣に、いつもいつも言われていたこと。

剣術の面では、いつも優れていて、勝っていたから言われていたこと。

『……良いなぁ、上の妹は結構わがままで私を困らせてばっかなんだよ？』

……しかし、舞衣の話を聞いている内に自分とは違って、舞衣は自分なんかではとても到達できないくらいにとても立派な、とても良いお姉さんであると分かってしまい。どうしても越えられないコンプレックスを抱くようになった。

何よりも〝おねえちゃん〟をちゃんとできてて悔しかった。妬ましかった。……ただ、単純に羨ましかった。

（……どうして、優ちゃんはああで、舞衣ちゃんの妹達は立派に育ったんだろうか？）

優が荒魂扱いされることを恐れて何も言えず、理解しようとしなかった自分。

対して、妹達のことをよく喋り、よく理解していることが分かる話から、妹達の面倒を良く見ている舞衣。

……それを考えるだけで、可奈美は舞衣に劣等感を抱いていた。そして、全てに劣っているかのように感じていた。

だから、どんなに剣術で舞衣に勝っていたとしても、どれほど勝ち越していったとしても、どれだけ舞衣に褒められても、可奈美の心は全く晴れなかった。それどころか、日増しに舞衣を妬ましく思う気持ちばかり強くなっていき、次第に舞衣が重く、そして疎ましく思うようになっていった。

だから自分はそれに耐えられなくなって、御前試合の際、姫和と一緒に逃げたのだろう。と可奈美は述懐していた。

……親友面の仮面を被りながら、その実、舞衣を疎ましく思っていたのだ。何という身勝手で、醜い女なのだろうと可奈美は内心自身のことをこう評していた。

（だけど、舞衣ちゃん。それでこの勝負に手を抜くことはしないよ。）

だが、それで負い目を感じて、手を抜くことはしないと可奈美は心の中で決意する。

（この勝負に勝てば、本当の意味で舞衣ちゃんに〝勝つ〟ことができると思うから……。）

今まで、剣術の試合で勝利を得ても、何とも言えない敗北感と挫折を感じていた。だが、この勝負に勝てば、舞衣に抱いていた劣等感といったものを自身の手で拭い去ることができるような気がしたから可奈美は勝利する気でいた。

『だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても救ってみせるよ。』

そして、約束を守るため、舞衣に勝てば強い刀使になれるような、一歩近付けるような気がしたから、この勝負を受けた。

……それだけだった。

「……だから、倒すっ!!」

可奈美も、己の主張を通そうとし、

「……私は、助けるっ!!」

舞衣も、己の主張を通そうとしていた。

全ては両者が互いに自らの主張を通して、前に進むためにこの勝負に勝つことを決意すると、試合場へと足を進める。

４ヶ月以上前の折神家御前試合の選抜大会なら、審判も居て、竹刀だったが、今は真剣でもある御刀を握っている。

だが、両者は審判が居ないにも関わらず、自身の判断で御刀を抜き、写シを張る。そうして舞衣は『正眼』に構えると、可奈美も技のバリエーションが多い舞衣を警戒して、対応力に優れる『無形の位』で構え、対応しようとしていた。

まず、舞衣の方から動く。

可奈美の面、小手、肩を狙った舞衣の気迫の声と共に振り下ろす袈裟斬りの連撃を可奈美は冷静に後ろに移動しつつ、捌きながら隙を見つけようとしていた。

そして、隙を見つけた可奈美は舞衣の袈裟斬りを御刀で受け止めな

がら、舞衣の御刀の柄の部分を掴んで、足を引っ掛けて無刀取りを仕掛けるが、舞衣は体当たりでぶちかまし、無刀取りを妨害したうえ、引っ掛けてきた足を利用して、可奈美のバランスを崩していた。

バランスを崩したということは受けづらいはず、舞衣はそう判断し、その一瞬の隙を見逃すことなく、上段からの袈裟斬りで可奈美の写シを斬ろうとする。しかし、可奈美は身体を捻り、下段から巻き上げるように舞衣の袈裟斬りを払い、御刀同士の打ち合う音が響くと同時に可奈美は直ぐ様、舞衣のガラ空きとなった腹目掛けて胴抜きを行おうとする。

しかし、舞衣もそれを読んでいたのか背中から倒れるように倒れ、どうにかギリギリ躱し、腹這いとなって可奈美の方に御刀を向け威嚇。可奈美は足を斬られるか腹を刺されることを警戒して不用意に近付くことはしなかった。

そのため舞衣は、その隙に立ち上がろうとするが、可奈美は舞衣が立ち上がろうとしていた隙を狙って斬り掛かって来たのだが、舞衣はそれを読んでいたのか、可奈美の御刀を受け太刀し、鍔迫り合いに持ち込んでいた。

しかし、可奈美の攻撃はそれで止まらず、舞衣の足を引っ掛けようとするが、舞衣も負けじと可奈美の足を引っ掛けようとするために他者が見ると足技が中心の戦いに移行しているのではないのかと思えてしまうほどの足を中心とした熱い戦いが起こっていた。だが、舞衣が下へ意識を集中している隙に可奈美は距離を空けるべく、舞衣の御刀を横へ払うと同時に体当たりで舞衣にぶつかり、距離を空けると舞衣の面を狙った上段からの振り下ろしで舞衣の写シを斬ろうとしたため、舞衣は斬られるのを阻止するため、可奈美の上段からの振り下ろしを払おうとした。

……だが、これこそが可奈美の罠であった。

可奈美は舞衣の払いの力を利用し、鞍馬流の巻き揚げを使って、舞衣の胴をガラ空きにすると、舞衣の腹に目掛けて突きを入れ、御刀千鳥を引っこ抜くためと追撃されないよう距離を開けるべく、舞衣を蹴飛ばすと舞衣の写シを一度剥がすことに成功する。

だが、舞衣は気絶することなく、再度写シをすぐに張り直して立ち上がると、御刀を正眼に構え直していた。
「……一応聞くけど、卑怯だとか言わないよね？」
可奈美は舞衣に、無刀取りと足払い、そして体当たりと足蹴りを入れたことを卑怯だと思っていないか尋ねていた。
理由は、可奈美は自分が１４年間もの時間を費やし、研鑽した剣術と持てる技術の全てで舞衣の攻撃を全て完封し、揺るぎない結果と勝利を得ることにより、舞衣が刀使を辞める結果となったとしても、舞衣に悔いが残らないようにするべく全力でこの試合に立ち向かっていた。
「全然。それが卑怯なら、剣術だけで戦うことと言わなかったことと、体当たりもした私が悪いだけだから。」
だが、舞衣はどちらか一人が『参った。』と言うか、気絶した方が負けというルール（可奈美にとってみれば、舞衣の技のバリエーションの多さを活かすルールなのだろうと勝手に推察した結果でもあり、可奈美なりの舞衣への意趣返しでもあった。）ということを逆手に取り、可奈美が無刀取りや足を引っ掛けてくるという奇策を行ったことに対して、これは純粋な剣術の試合ではないのだから、ルールの適用内と返答していた。
それを聞いた可奈美は、なら、このまま勝負に勝っても、舞衣は文句を言わないだろうと判断し、勝負に集中し始める。
互いに互い、相手が次にどう出るかを考え、隙が何処か無いかを探り、純粋な剣術の試合には無い足の引っ掛け、体当たりも考慮しながら、どのようにして攻めるかを孝則やフリードマンからしてみれば一瞬だが、その一瞬の内に何十、何百もの戦術を舞衣と可奈美は組み立てていた。
……そのため、舞衣と可奈美の両者は正眼で構え、お互い間合いを取りながら、時間が過ぎていった結果。可奈美と舞衣の二人には額に汗が出て、滴り落ちていたことに気を留めることも無く、この勝負に集中し、気を張り続けていた。
それは、一瞬の隙がそのまま勝負の決め手となるというほどの意気

込みと熱気がこの試合場を包んでいるかのようだと孝則とフリードマンが感じるほどに。

――――そこで、舞衣は動く。決意する。

このまま構えたまま動かずにいても、勝つこともできないし、いずれ集中も途切れると判断した舞衣は、両ひざを地に付け、居合の構えをして、後の先を得意とする可奈美を待ち構えるようにしていた。

「……。」

それを見た可奈美は想定通りに運んだと思いつつも、落胆していた。

舞衣は写シを一度剥がしたことにより可奈美より精神疲労が大きいため、こちらから何か仕掛けずとも、向こうから来させるために正眼の構えでこちらから仕掛けなかった。

だが、舞衣は御前試合のときと同じ戦法で迎え撃とうとしていたことに可奈美は落胆しつつも、正眼から八相の構えに変えると可奈美は舞衣に近づき、片手で舞衣の御刀を止め、止めを刺そうとする――――、

（……これで!!）

だが、それは叶わなかった。

何故なら、舞衣は自らを認めてくれた御刀孫六兼元を抜くことをせず、投げ捨てたからだ。

（……えっ？）

しかし、たったそれだけだったが、可奈美はこの短期間で実力が飛躍的に上昇したこと、立ち会いを想定した剣術ばかり追求していたことで刀使が自ら御刀を手放すことを考慮していなかったこと、そして剣術が強く後の先を得意とする自分を相手にするなら、舞衣は必ず居合で攻めてくるという固定観念が可奈美の中で出来上がってしまっていたこと、そのうえ御刀を捨てたということは写シを張っていない状態であり、間違っても斬れないために可奈美は直前の行動を思い止まってしまい、虚を突かれ間が出来てしまったこと、そして可奈美自

身の驚異的な目の良さが仇となり、孫六兼元を無意識に目で追ってしまった。

それだけだった。

たったそれだけで、可奈美は大きな隙を舞衣に与えてしまう。

そして――――、

気迫の声と共に舞衣は可奈美の顔面に頭突きを食らわせる。

可奈美は虚を突かれた攻撃に驚き、そのうえ突然の攻撃に可奈美は母が使っていた御刀千鳥を手許から落としてしまう。そのため可奈美と舞衣は、両者とも御刀を手許から失うこととなり、刀使であることを忘れ、拳を握り締めて、取っ組み合いの殴り合いという状態となり、

素手での第二ラウンドが始まろうとしていた。

認めさせる。2

舞衣の御刀を捨てるという行動に驚いた可奈美は舞衣に大きな隙を与えてしまうこととなり、突然の頭突きに対処できず、顔に受けた可奈美も御刀千鳥を手許から落としてしまう。

そのため、両者は御刀を手許から失うこととなり、素手で戦うという第二ラウンドへ移行していた。

「まだ……まだ半端な気持ちでやろうっていうの!?」

可奈美はそう言って、舞衣を責める。

まだ刀使を続けるのか?家族をも放り出して?と抱きながら、舞衣に掴み掛かって殴る。可奈美は、嘘ばかり吐く自分なんかに未だ憧れているという理由で、自分が理想とする暖かい家族を放り出すという半端な気持ちで刀使を続ける舞衣が可奈美は許せなかった。

いや、何時までも親が居るとは思わない可奈美にとって、舞衣の行動が許せなかった。

「私は……半端な気持ちで、やってないっ!!」

だが、舞衣は刀使を続けるのに、もう半端な気持ちでやっていないと反論しながら、刀使の象徴たる御刀を捨てた舞衣は可奈美を何度も殴る。その舞衣の拳を可奈美は全て真正面から受け止める。いや、舞衣の拳を躱してはならないと可奈美は判断していた。

理由は、他人が聞けば馬鹿馬鹿しいかもしれないが、舞衣の拳を躱すことなく受け続けたうえで勝利することによって舞衣に完全なる敗北を認めさせ、舞衣に悔いが残らないようにするためであった。

「嘘吐かないでよっ!!だったら、何でこんな危ないことまでして、あんなに心配してくれる優しい家族を見捨てて、嘘吐き女(可奈美)なんかに憧れたままで、どうして続けようとするの!?半端な気持ちでないなら、ちゃんと家族のことを見なよ、何時までも居る訳じゃないんだよ!!この馬鹿ぁっ!!!」

しかし、可奈美は信じられないと言って、舞衣に何故続けるのかと問いながら、舞衣に何度も殴り返す。

「可奈美ちゃんの重荷を背負うためだよ。そのためには、今の衛藤可奈美に勝つ必要がある!!……なら、憧れも、御刀も、必要なら刀使の立場を捨てることが勝つことに必要なら、棄てて行くっ!!」

全ては、刀使である衛藤　可奈美に勝って、親友の可奈美の重荷を共に、一緒に背負う覚悟ができたから――――。

刀使の衛藤　可奈美に対して憧れがあるから、……いや、憧れが無くなるのが嫌だから何時まで経っても衛藤　可奈美の上に昇ろうとしなかった。そして、ずっとそれに憧れている子供のままだったら、親友の可奈美の重荷になるだけだ。なら、刀使の衛藤　可奈美に対する憧れを捨てる。そんなものは要らない――――。

御刀と刀使というものが親友の可奈美を縛り、苦しめるものなら、全て脱ぎ捨てて、全て投げ捨てて、まっさらな自分で立ち向かう――――。

真正直に、嘘偽りなく、刀使の衛藤　可奈美に対する憧れを捨て、御刀も投げ捨てて、刀使の進退も賭けて、刀使の衛藤　可奈美に挑んだと答える舞衣。

『なのに、舞衣ちゃんはっ!!私に追い着きたいとか、しようもない理由でっ!!安い覚悟で刀使を続けようとしている!!』

『……だから、もう私のことを強い刀使とか、立派な刀使さんだとか言わないで?……腹立つから。』

あれだけ酷い事を言ったのに、まだ舞衣ちゃんは私のことを気にしてくれている……。

舞衣の覚悟の言葉を聞き、そう思った可奈美は一瞬呆け、勝負のことを忘れてしまう。そのため、可奈美は大きな隙を舞衣に与えてしまうこととなり、舞衣のタックルを受けると、可奈美の胸にあった舞衣の頭が上に上がり可奈美の顎に当たる。すると、可奈美は倒れ、舞衣は必死で縦四方固を可奈美相手に何とか決めることができた。

「……ぐっ!」

可奈美は舞衣が柔道の技の一つである縦四方固で決めに来た理由

は何となくだが、分かってしまった。
それは、自分を認めてくれた御刀も刀使としての立場をも棄ててでも、剣術以外のやり方で可奈美に敗北を認めさせることで、親友の可奈美ではなく、刀使である衛藤　可奈美から勝利を掴むために剣術以外のやり方で敗北を認めさせようとしていると可奈美は直感で理解していた。
（……私が、舞衣ちゃんの拳を真正面から受けたやり方と同じ方法で、私から勝ちを取ろうとしている!!）
可奈美は心の中でそう判断するが、可奈美も足を引っ掛けたり、体当たりをしていたが、舞衣にそれは卑怯ではないと言われ、可奈美もそれに異議を唱えなかった以上、舞衣が仕掛けた縦四方固を卑怯だと可奈美は言えなかったのだ。
かと言って、このまま動きを抑えられたままなのは、良くない。
このまま、動きを抑えられたら、舞衣から完全なる勝利を得ることができない。
可奈美はそう判断すると、何か逆転の目は無いかと藻掻いたり、舞衣に力の入っていない拳で攻撃したり、抑えられていない腕を手探りで何かを探していたら、
（……！）
可奈美は何かを掴むことができた。
それは、自らが愛用し、偶然にも母から受け継ぐこととなった御刀千鳥であった。
これを掴んで、可奈美は御刀を媒介として隠世の力を引き出して使うことができる八幡力を使って、無理矢理にでも縦四方固から抜け出そうとする。
『だろうね、だって私だし。……だから、そんな自慢の娘が行き詰まるのはよっぽどのことだから、辛かったら逃げて、誰かに頼ることは〝恥〟じゃないよ。』
だが、可奈美は誰の言葉かは分からなかったが、何故かこの言葉が、

誰か大切な人から教えてもらった言葉だったような気がした……。
だからなのか、可奈美は掴んだ御刀千鳥を手放して、
「参った。……負けたよ。」
と可奈美は降参を呟いていた。
「……えっ、良いの？」
舞衣は可奈美の言った言葉が信じられないのか、聞き返していた。
「……だから、私の負け。認めるよ、舞衣ちゃんのこと。私の知ってた舞衣ちゃんがあんなことをしてくるなんて思いも寄らなかった。……認めるよ舞衣ちゃんのこと。」
そのため、完全に負けたと思っていた可奈美は舞衣にそう返していた。
「素手で立ち向かって、ここまで根性も覚悟も見せてくれた舞衣ちゃん相手に御刀の力を使って勝っても私がバカみたいだし、もう舞衣ちゃんを『覚悟もない。』なんて言えない。……何時の間にか私の方が追い詰められていたんだなって思うと、初めて剣術以外で完全に負けたと思えたよ。」
可奈美は負けたのに、不思議と悔しいどころか、何処か憑き物が落ちたかのように晴れ晴れとした気分であった。
それに、自分を認めてくれた御刀も刀使としての立場もかなぐり捨てて、自身が憧れていた刀使の衛藤　可奈美に立ち向かって行った舞衣を見ていたら、そこまでしてくれる人を無下にしたくなかった。
（それに、ここまで本当の自分をさらけ出すことなんてなかったなぁ……。）
そう思うだけで、力が抜けてしまい、何か軽くなったような気がしたのだ。
「……でもさあ、あの技は……気絶していたときに覚えたのかな？」
「うん、まあそんなところかな……。」
可奈美は、何時の間に縦四方固を覚えたのかと舞衣に尋ねようとしていたところ、舞衣は可奈美が昏倒している間に何とか覚えたことを可奈美に伝えようと可奈美の方を見るが、固まってしまい。

「……何？舞衣ちゃん……。」
それを不審に思った可奈美は舞衣を見ると、舞衣と同様に可奈美も固まっていた。すると、次の瞬間、
「「……プッ、アッハハハハハ!!」」
舞衣と可奈美は笑っていた。
理由はお互いの顔を見るなり酷く傷付いた顔であることから、顔中傷だらけの変な奴に見えてしまって、つい可笑しくて、笑ってしまったのだ。そして、笑っている内に可奈美は何をそんなに怒っていたのだろうか？と思い始めてしまった。
別に、エレンの両親や舞衣といった他の人達の力を借りても何の恥でもない――――。
それに、刀使というものが無くなっても、剣術が役立たずになる訳じゃない――――。
少し考えてみれば、そう考えれば、全て解決することばかりだった。
……追い詰められていたのは、いや自らを追い詰めていたのは、私だった。それだけのことであったと可奈美は何処か晴れた気持ちで理解していた。
（それに、御刀以外での戦い方を知った私なら……ううん、違う。今の舞衣ちゃんが一緒なら、何だって出来るような気がする。そんな私のことを優ちゃんは許してくれるよ。）
そして、可奈美は強い覚悟を持つ舞衣と刀使以外の力で荒魂を救う研究をするエレン達が一緒なら、どんな困難でも乗り越えられる様な気がした。
「……舞衣。」
「お父様。」
「この前は、その、言い方が悪かったな……。」
可奈美と舞衣の戦いが終わったのを観た孝則も舞衣に近付くが、両者はどう言えば良いのか分からず、気まずそうに立っていたことに、可奈美は舞衣が刀使を辞めさせられるかも知れないと思い、孝則の前に出て、あることをお願いした。
「あっ、あの、舞衣ちゃんのお父さん!!舞衣ちゃんは私にとって掛け替

えのない親友で、え～っと、それでいつも助けられていて、それで私は舞衣ちゃんが居ないと困るというか、いや、そうじゃ、それだけじゃなくて、何と言うか、そのぉっ……。」

　可奈美はしどろもどろながら、何とか舞衣が刀使を続けられるよう、舞衣が如何に凄いかを伝えて、孝則を説得しようとするものの、どうにも上手く言うことができず可奈美は激しく動揺していた。いや、動揺しまくっていた。

（ええい、もう考えるのはナシ!!思ったことを素直にやれば良いやっ!!）

　そう考えた可奈美は、やはりどうしようもなく動揺していたのか、いきなり孝則相手に土下座をして、

「あの、あの、とにかく舞衣ちゃんが刀使を続けたいと言っているならっ、どうか続けさせて下さいっ!!危ない目に遭わせているのは分かっています。けれど、もし舞衣ちゃんが刀使を続けたいというのであれば、その意志を尊重してやって下さいっ!!それに、舞衣ちゃんの事を『覚悟が無い』とか言って、ごめんなさいっ!!私が間違っていました!!」

　舞衣を侮辱したことを謝罪しながら舞衣の意志を尊重して欲しいと可奈美は孝則に申し出ていた。そしてエレンもフォローするべく頭を下げて、

「ワタシからもお願いしマス!!どうか、二人を許してやってクダサイ。」

　舞衣が刀使を続けたいと言ってきたら、それを尊重してやって欲しいと可奈美とエレンの二人は頭を下げながら孝則にそう申し出ていた。

「……だ、そうだ。舞衣、柳瀬の家だとかは考えなくていい、だが、お前は私と母さんの大切な娘だという事に変わりはない。それを忘れないでいてくれ……だから舞衣、続けたいか?」

　それを孝則は、柔和な笑みで舞衣の意志を尊重し、舞衣は孝則と柊子の娘であると答えながら、刀使を続けたいかどうかを尋ねていた。

「……お父さん、今日は色々とありがとうございます。だけど私は、私

は刀使を続けたいです。」
　すると、舞衣は素直に〝お父さん〟と言って、そう答えた。
　孝則が、自分のために色々と骨を折ってくれたことは重々承知したうえでの舞衣なりの答えでもあった。
「……そうか。なら、良い友人を持ったな舞衣。これが、私の知らない舞衣で、子供が成長した証か。」
　舞衣の答えを聞いた孝則はフリードマンの言葉を思い出しながら、善き友人に囲まれたことに頬を緩ませ、小さく呟いていた。
「可奈美さんとエレンさんだったかな?今後も不躾な娘のことを宜しくお願いします。」
「ええっ!?……いえ、はい。こちらこそ!!」
「こちらこそ、マイマイには何時もお世話になってますヨー。」
　孝則に舞衣のことを宜しく頼むと言われたエレンは、いつもの調子で答えていた。
　だが、一方の可奈美は、いつも助けられているのは自分なので妙な気分となり、狼狽えながらも答えていた。
　孝則は、可奈美の変わりっぷりに驚きつつも、本当の可奈美はこういった娘なのだろうと妙な納得をしながら、可奈美とエレンの二人にこう返答していた。
「……ええ、宜しくお願いします。」

　一方、フリードマンは可奈美と舞衣の争いから和解という一連の行動を観て、昔のスレイドのことを思い出していた。
『――――探求心、行動力、そして好奇心。どれか一つ欠けてしまえば辿り着くことなどできないというのが私の考えである!!』
　とある場所にて行われたスレイドの自身の研究発表。それは、荒魂についての事であった。
『自己修復、思考の有無と形成、然るに荒魂は紛れもない生物であると私は確信しているっ!!』

スレイドは御刀以外による損傷は自己修復され、人間を最優先で襲うという行動と執念から、荒魂にも生物と同じく自己修復と思考が有ると論じていた。

『そして、荒魂化した人間は稀に記憶を残し、言葉を話す個体もいる言われている。なら、人体と荒魂を融合させることは必ずや荒魂の思考を読み解く鍵となる!!相互理解を素として我々人類は更なる発展の道へと向かうであろうことは明白なのだっ!!』

そして、スレイドは〝知りたい〟が故に、人間と荒魂を融合させるべきであると主張していた。

しかし、彼の禁忌の主張を受け入れる者は居なかった。

曰く、人間を実験の材料にするのは非倫理的である――――。

曰く、荒魂を生物と同等に扱うのは、異常過ぎる――――。

曰く、ノロという鉄の塊である荒魂が生物である筈がない――――。

曰く、失敗すれば、どれだけの犠牲が出るか解からない――――。

と他の研究員から言われ、スレイドの考えは否定され続けていた。

無論、フリードマンもスレイドの考えを頭ごなしに否定していた。

『何故否定する!!何故当たり前の結論で満足するのだっ!!?旧約聖書、人は幾度も神罰を受けながら今日まで追い求めてきた!!スプートニク二号、人は命を糧に知識を得て生きてきたのだ!!そして、今の我々は広大なイマジネーションの大海原に漂う小舟に過ぎんのに何故火を起こす方法を知りたいと強く願うことが禁忌なのだ!?前に進みたければ、知りたいと強く願う。たったそれだけのことではないかっ!!?当たり前の結論だけでは、何も解からないっ!!!』

彼は、ひょっとしたら知識を追い求めるということを認めて欲しかっただけだったのかも知れない。と今になって思うフリードマン。

昔はライバルでもあり、友人でもあったスレイドの言葉を頭ごなしに否定していたフリードマンだったが、舞衣と可奈美のように少しでも理解し、痛みと外聞を恐れず、道を踏み外さぬよう彼を諭すように行動すれば、スレイドはああならなかったのではないのだろうか?とフリードマンはつい思ってしまった。

『……なあ、お前は本当はどこから来て、どんな物が好きで、此処に来るまでにどんな物や世界を見て来たんだ？教えてくれ。』

そう思うだけで、フリードマンは２０年前の大災厄の元凶となったアメリカの輸送船のタンカーの中に有るノロに話しかけるというスレイドの奇行に少しだけでも気にかけてあげれば、スレイドは人体と荒魂の融合という凶行に走らなかったかもしれないと思うと、フリードマンはやりきれない気持ちとなった。

「ときに、闘争も互いに深く理解し合うために必要なことだということか。……全く、驚かされる。子供というのはいつの間にか強く大きく成長していく。親が思ってる以上に。いや、親が驚くほどに、かも知れないな。」

だが、自分でも為し得なかった事を舞衣と可奈美は成し得たのだ。その事実に、子供達は親をも超えて、強く、大きく育っていくように感じ、そんな子供達が創る次の時代は今よりもはるかに良くなっていくだろうとフリードマンは確信が持てたのであった。

その後、夜の柳瀬邸――。

孝則と柊子は舞衣の転校が取り止めになったことについて話し合っていた。

「……そう、転校は取り止めになったのね？」

「済まないな。助言をしてもらったのに舞衣に怪我をさせて、だが、舞衣を責めないでやってくれ、友人のためにやったことなのだから。それに、その友人達が頭を下げてでも、舞衣の気持ちを優先させて欲しいと言われれば、な？」

孝則は頬を緩ませながら、柊子に舞衣のことをそう伝える。

「……舞衣の学友達にああまで言われたら、断れんよ。……舞衣は良い友人を持った。学生時代の仲間の縁は切れないというらしいしな。」

「ふふ、そうですね。」

「？……随分あっさりと受け入れるんだな。良いのか？」
孝則は柊子に舞衣のことが心配ではないのかと不思議そうに尋ねていた。
孝則としては、柊子が舞衣のことを一番心配しているものであると、危惧していたからだ。
「そりゃ心配よ。でも、研究所に行く前のあなたは難しそうな顔していたけど、今は何か嬉しそうなんですもの。舞衣に何か善いことが会ったんだろうな、っていうのが解かりましたから。」
「……敵わんな。」
「ええ、でもこうなるような気がしてたの。だってあなた舞衣にはとことん甘いんだもの。」

こうして、舞衣は両親から刀使を続けることを許されたのであった――。

美濃関学院、学生寮――。
「舞衣ちゃんのお母さんから、舞衣のことをお願いします。って言われちゃった。」
「本当は、逆なのにね。」
刀使を続けることを許された舞衣は、舞衣の家族と共に朝食を食べ、可奈美と一緒に登校し、可奈美の部屋で談笑していた。
「でも、学生時代の仲間の縁は一生の斬れないものだってお父さんが言ってたから、今を大事にしないとね。」
「……そうだね。」
可奈美は微笑みながら、舞衣の話しに応えていた。
この中等部の学生時代も、あと二年ぐらいで終わりなのだ。それに、御刀との適合率が変われば、刀使を続けられる訳でもない。なら、この唯一の親友と居られる時間だけでも大事にすべきだろうと可奈美は考えていた。

「……ありがとう、舞衣ちゃん。」

可奈美は小さく舞衣に感謝の言葉を呟いていた。

そして、舞衣と一緒に大笑いした日は一生の宝物であり、本当の自分の全てをさらけ出すことができる瞬間でもあり、そんなことができる相手が居るということが嬉しかった。

だから、あの日のことは一生忘れないし、古ぼけた写真のように色褪せることはない――――。

だから、可奈美は親友だと言える舞衣と刀使以外の方法で努力する皆が一緒なら、どんな困難でも乗り越えられるような気がした――――。

認めた親友と一緒なら、認めてくれる親友と一緒なら、どんなことだって――――。

死は救済

一方、刀剣類管理局本部にて――――。

「荒魂討伐任務終了したぞド畜生！じゃない。学長!!」

「誰がド畜生だ、誰が。……あとここでは本部長と呼べ。」

荒魂討伐任務を終えた薫は、本部長の真庭　紗南に報告をしていた。

これで、休暇が取れるだろうと思いながら、紗南の次の言葉を期待しながら待っていると、

「ご苦労。では次の任務だ「待て待て！あれから4か月ほとんど休みなしで飛び回ってるんだぞ！少しは休ませろよ！」……次の任務だが。」

「くそっ！ここまで白々しい聞こえなかったフリは見たことがない……。」

薫の期待も空しく、休暇すらないまま次の任務地へと飛ばされそうになったため、薫は紗南に抗議するものの効果は無く、そのまま次の任務が決まってしまった。

「お前には隊長としてチームを率いて、群馬に行ってもらう。」

「いや、パスポート持ってないし。」

「群馬舐めんな。……まあ、現場はいわゆる秘湯ってやつでな。喜べ、早期に任務を片付けたら待望の休暇だ。」

といった具合に話が進み、薫はチームを率いて群馬へと向かうこととなった。

数日後、群馬のとある旅館内――――。

「つーわけでだ、桐生副隊長。数日は経ったものの目撃情報はあやふやで、ファインダーの反応もちっぽけすぎて正確な場所を特定できず、ねねですら反応を追い切れなかったとはいえ、宿舎として旅館を使わせてもらっている以上、荒魂を探したっていうポーズだけでも取ろうとは思う。」

「……隊長。せめてもう少し本音を隠す努力をしてください。」

荒魂討伐を担当する刀使として、問題のある発言をする薫に副隊長の葉月は呆れつつも、突き離すことはせず、そのことについてのみ注意していた。

だが、薫の言う通り、スペクトラムファインダーの反応が曖昧すぎて正確な場所を特定できず、目撃情報もあやふやであったため、目撃された荒魂の正確な場所を特定できなかった。そのため、取れる手段は肉眼頼りの人海戦術しかなかったために、荒魂を発見できずに数日が過ぎていた。

薫が率いる部隊の副隊長を務める桐生　葉月はそれを考えただけで、気が滅入る気持ちとなるが、それでこの状況が好転する訳ではないと気持ちを切り替えるべく、点呼を取ろうとする。

「それでは点呼。」

「1。」

「2。」

「3。」

「4。」

副隊長である葉月の声に応え、点呼を取る隊員達。

「5。」

「……。」

「7。」

薫と葉月を加えると、6人編成であったため、ちょうど1から5、そして7という声が聴こえ……。

「んっ？7って……めっちゃ増えてるしっ!!?」

薫は7という応答に疑問を抱き、声のした方へ顔を向けると沙耶香と姫和、そして箱根山戦時と同様の変装をしている優が居た。

「はあ!?何でいるの？」
「それはだな。……ここは俺らが討伐することになったということさ。」
　薫は声のする方へ顔を向けると、トーマスと他数名、いや正確にはトーマスが何処からか調達した傭兵達であった。
　突然トーマスを含む見ず知らずの外人達の登場に薫の部下である刀使達は、
「えっ？隊長の知り合い？」
「どうしよう、私英語の成績あまり良くないんだけど……。」
「でも、日本語喋れるみたいだよ？」
「刀使じゃなくて、おっさんばっかだなあ……。」
　奇異の目で見る者。外国語が喋れなくて不安な者。日本語を喋れることに不思議がる者。刀使じゃなく戦力になるかどうか怪しい人が混じっていることに残念がる者と様々であった。
「うわあ……、ジジイかよ。」
「悪かったな。だが、これも仕事でね。嘘だと思うなら、紗南に確認を取ってみろ。メンバーは俺と5名、沙耶香、薫、コイツ（優）、それと姫和だ。」
「となると、我々は？」
　そんな中、姫和から色々と聞いているトーマスが居ることに露骨に嫌そうな顔をする薫。
　そして、葉月もトーマスの発言に自分と薫の部下である刀使達はどうすれば良いのかと尋ねていた。
「本日を以って薫の部隊は再編制され、俺達が組み込まれることとなった。桐生　葉月副隊長は残り四名の隊員を率いて本部へ戻れとのことだ。その後、桐生　葉月隊員等五名は別命が有るまで待機。これが、その辞令だ。」
　トーマスが持ってきた辞令書を目を皿のようにして見る葉月は、それが正式な物であるということは理解したが、薫がトーマスのことを嫌そうな顔をして見ていたこともあって（そもそも、何の前触れも無く急に辞令書を持って来て高圧的な態度で、こちらを解任させるよう

なことを言うため、あまり好印象を抱けなかったのも理由の一つではあるが……。)、トーマスの事を信用出来なかったため、葉月は隊長である薫に是非を問うていた。

「隊長、管理局の正式な書類であることに間違いありませんが……どうしますか?」

「……少し学長に訊いてみる。」

葉月にそう言われ、薫は渋々紗南にスペクトラムファインダーの携帯通話機能を使って確認の連絡を取っていた。

「もしもし、学……ババア?」

『……おい、今の言い直す必要なかったよな?まあ、良い。そっちに来た沙耶香達の事を訊きたいのだろう?』

「ああ。俺の部隊を再編成するとかどうとか……本当か?」

『……本当だ。それと、薫。』

「なっ、何だよ急に改まって……。」

『休暇を申請してたな。喜べ、お前にはこの任務を断る権利が有る。此処へ戻ってきたら沙耶香と共に特別休暇は受理されるよう手配はしている。』

「……はっ?」

薫は時が止まったかのように固まってしまった。

あの鬼のように扱き使う紗南が休暇を寄こす?どういうことだろうか?

何か裏が有ると勘繰った薫は、戻るべきではないと判断した。

「はあ?いやいや、オレが此処離れたら目撃された荒魂の対処はどうすんだよ?」

『……その場合は、姫和が〝男の刀使〟とトーマスを指揮して荒魂討伐するということになる。……休暇が欲しかったんだろう?』

つまり、姫和に指揮権を渡せば、薫と沙耶香は本部に戻って休暇を得ることができるが、トーマスと〝男の刀使〟という事になっている優だけは此処に残るということなのだろう。

「……わりぃけど、あのジジイと〝男の刀使〟だけ残していくのは気掛かりだ。だから、此処に残るわ。」

『……良いのか？できれば薫には、休暇を取って貰った後、しばらくは沙耶香と共に荒魂討伐に当たって貰いたいのだが？』
「……いや、此処に残るわ。」
薫は休暇が貰えるという誘惑をどうにか撥ね除け、優とトーマスだけ残すのは忍びないと言って、此処に残ることを決めるのであった。
『……そうか。』
その薫の決意に紗南は、何処か悲しそうな声で応えていた。
まるで、この任務を受けて欲しくなかったかのように……。
『なら、最近沙耶香は元気がなくてな、ねねと一緒に相談に乗ってやってくれ。あと、可能であれば、ねねと薫の仲を見せて、〝男の刀使〟の考えを改めさせてくれ。』
「ああ、沙耶香と〝男の刀使〟はオレに任せろ。」
『ああ、頼んだぞ。……それと、何が遭っても挫けるなよ。』
「……ああ。」
紗南の反応に薫は訝しみながらも、沙耶香と優の面倒を見ると返事をすると、紗南との通話を切り、葉月に命令を下していた。
「という訳だ、桐生副隊長。ワリィけど、オレの部下達のこと頼むわ。」
「……はぁ、まあ鎌倉での騒動を解決した三名が編成しなければならない事態になったと見るべきでしょうか？」
「まあ、そういうことだろうな。済まねえ。」
「いいえ、隊長の方もお気をつけて下さい。」
薫の命令に葉月は二つ返事で了承していたが、急に来たトーマス達のことは信用していないことを述べると、他の刀使達に新たな命令を下していた。
「それでは、今から私を含む四名は本部に戻り、別命があるまで待機。本部までだが、指揮は薫隊長に代わり私が執ることになったので、以後は私の指示に従うように。」
「「「はいっ!!」」」
薫の元部下の刀使四名は素直にその指示に従った。
「……えらく、言う事を素直に聞くんだな？」
姫和はえらく素直に聞く刀使四名のことが気になって、このような

発言をしてしまった。
　そのため、薫の元部下である刀使四名の内の一人がつい口が滑ってしまった。
「いや、だって薫隊長は露店風呂に入ってサボって……あっ。」
「……薫……お前。」
「……いや、あれは英気を養っていただけだからっ!!」
　姫和は薫の元部下である刀使達の証言と反応から、薫がサボってばかりいたことを知り、姫和は落胆していた。
「……あと、隊長がサボっていましたら、本部長にご報告下さい。そちらの方が効き目ありますので。」
「そうか、良い事を聞いた。ありがとう。」
「葉月副隊長っ!?お前もかっ!!」
　葉月は去り際に、姫和に薫がサボっていたら本部長である紗南に報告するのが良いと言ったことに裏切られた気持ちとなった薫であった。

　荒魂の目撃情報が有った群馬県の山中――――。
「ああ、折角の温泉が……、かんぴょう巻きが……。」
　薫は愚図っていた。
　優を万全の態勢で護衛しなければならないので、拠点を秘湯でのんびり過ごせていた旅館から陸上自衛隊の相馬原駐屯地相馬原飛行場に変えて活動しなければならなかった。そのため、朝っぱらから秘湯に入りながら好物であるかんぴょう巻きを食べることができないからである。
　こんなことになるくらいなら、断って休暇を得るべきだったかもと薫は一瞬だけ思い悩んでしまった。だが、ねねを荒魂扱いしないうえ、比較的仲が良い方の姫和を見捨てることなどできないし、トーマ

スと優の組み合わせも気になるうえ、請けてしまった以上は最後までやらないといけないだろうと考え直すと、薫は指揮を執ることにした。
「でもなあ、ジジイ。指揮権はオレに有るから、オレの指示には従って貰うぞ？」
「ああ、別に構わねえよ。……荒魂退治ならお前の方が経験豊富だしな。」
　そのため、まず薫はトーマスに指揮権はこっちに有ることを言って、トーマスが優に何かしないようにしていた。
「で？先ずは何をするんだ？」
「……取り敢えずは、来たばっかで此処の事よく分からんだろ。目撃情報を再度確認しようか。姫和と沙耶香が聞き取りに行ってくれ。」
「分かった。」
　とそんな理由もあって、荒魂の目撃者である老人宅へ向かうのであった。
「おお、ありゃ身の丈５ｍはあった。何十頭もの熊を手に掛け、その鋭い爪と牙から真っ赤な血を滴らせてなぁ――――。」
　そのため、姫和と沙耶香は目撃者である老人の話を聞きながら、今の現状を知ることができた。その後、聞き終えた姫和と沙耶香は薫の元に戻り、目撃者である老人の話しを報告していた。
「目撃者からの聞き取り完了。」
「……仔細は聞いたが、熊の死骸なんか一つも無かったぞ？」
　沙耶香と姫和は目撃者が話を盛っているのではないか？と薫に一言加えての報告であるが。
「そうなんだよ、毎回目撃証言を盛ってるんだ。一応言っておくけど、こっちも熊の死体なんて一匹も見てねぇよ。」
「ねねでも手こずるような弱い反応なら、肉眼頼りの人海戦術になるのも分かるな。」
　このような状況であれば苦戦し、そのような人海戦術に頼らざる負えなくなるのも頷けると姫和は納得していた。
「……ジジイ、虎の子のドローンでも見つかんねえのか？」

「探してはいるが、スペクトラムファインダーでもちっぽけな反応しかしねえんだったら、これもお手上げだな。……優なら、見つけられるだろう。」
「そのためだけに、アイツ呼んだのか？関東を中心に荒魂騒ぎが多いのに、随分と豪勢じゃねえか？」
「……まあな。」
　薫はドローンで見つからなかったのかとドローンを操縦しているトーマスに尋ねながら、優を此処に連れて来た真意を探るものの、トーマスは引っかかることなく多くを喋らなかった。
「薫、目撃地点に法則性が感じられない以上は私の捜索範囲を広げる。範囲の二倍くらいは問題ない。」
「もう少し肩の力を抜いてもいいんだぞ？この一件、荒魂による直接的な被害は一切報告されてないんだ。」
「荒魂の脅威が在る以上、速やかに……〝対処〟しなければならない。」
　沙耶香は痺れを切らしたのか、捜索範囲を二倍に広げてでも荒魂の脅威を排除しようと躍起になっているようであった。だが、いつもの沙耶香であれば〝排除〟ではなく、〝対処〟と言い直したことに薫は気付きながらも、特に問い詰めることはしなかった。
　沙耶香は特に反対されなかったため、自分の意見に賛成と捉えたのか、自身の高い身体能力を活かして木々の中を飛び回って行った。それは、第三者から見ればニンジャのように見えたことであろう。
「……確かに、あの身体能力なら二倍行けるだろうけどな。」
　薫は小さく呟くと、トーマス達と優、そしてねねを先行させ、姫和と二人で話せる状況を作っていた。
「……なあ、ヒヨヨン？何で、こっちの増援として来たんだ？」
　仕方ないので、薫は小さな声で優のことをアイツと言って、姫和から何かを知っていないか探ろうとしていた。
「優のことか？優が一緒なら手早く見つけられるということで、その救援としか聞いていないが？何故そんなことを聞くんだ？」
　薫の意図を理解した姫和も小さな声で、薫に優が此処に来た理由を

話していた。
「いや、何となくなんだが、アイツって陸自が駐屯地を用意するほどのＶＩＰみたいなものだろ？なのに、こうも簡単にこっちに来れることに妙だと思ってな。」
「……つまり、どういうことだ？」
「あのジジイ、トーマスは何か企んでいるんじゃねえのか？って思ってよ。」
「だろうな。」
　薫は姫和にトーマスを警戒するように伝え、姫和もそれに同意していた。
「だが、あの男も一応は雇われの身である以上、国外で派手な行動は出来ない筈だ。幾ら超大国とはいえ、同盟国との間に国際問題になるような事は望んでいないだろう。」
「……まあ、そうだろうけど、あの人数で強引な手は使わないだろうしな。」
　トーマス含め、６名のみで優と姫和達を相手に優を拉致するといった強行手段には取れないだろうと姫和と薫は結論付けていた。
「……気を付けるべきは、米軍基地へ向かうと言うことだろうな。」
「米軍基地だと、この国の政府はノーチラス号のように易々と手出しは出来ないだろうしな。拠点が自衛隊駐屯地で良かったと見るべきか……。」
　姫和にそう言われると、薫は拠点が自衛隊の駐屯地であることが幸いであったと見ていた。
（……同じ人間同士で疑い合ったりして、これじゃ荒魂の方が分かり易いな……。）
　そして、薫は人知れず、心の中で呟いていた。

　一方の沙耶香達は、獣の声に反応したトーマスの部下達が獣の声が

する方に顔を向けると興奮しているイノシシが唸り声を上げて、此方に迫って来ていた。だが、沙耶香がイノシシを峰打ちで気絶させていた。

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ。」

「Ｓｏｒｒｙ。」

トーマスの部下達は沙耶香に助けてもらったことに感謝していた。

だが、沙耶香は薫達が気になったので、トーマスの部下達に「気にしないで。」と言うと、薫達が気になり向かおうとしたが、何かが足元にブチッと音がしたので見ると、小さな虫が緑色の体液をぶちまけながらピクピクと動いていた。

「あっ……。」

沙耶香は気まずそうな顔をしていた。

（……私、酷い事した。どうしよう？……。）

沙耶香達の元に着いた薫は、小さな命を奪ったことに罪悪感を感じ戸惑う沙耶香の姿を見かけ、沙耶香に助言を与えるべく近付こうとするのだが、

「……可哀想？」

「……うん。」

沙耶香の様子を心配したのか、優が近寄って沙耶香に虫を誤って踏んでしまったことを悔いているのか尋ねていた。

「……あんな顔もするのか。」

その光景を見て、薫は沙耶香と優の二人が仲の良い姉と弟に見えてしまい、和んでいた。……だが、

「何で悲しいの？生きてる人は皆、遅かれ早かれ死んじゃうのに。」

優は急に寒気がするような気配を発しながら上記の言葉を口走ると、沙耶香が誤って踏んでしまった虫を思いっきり踏んづけて、グリグリと磨り潰していた。

「それに、まだ生きていて苦しんでるよ？苦しんでるなら、楽にしてあげなきゃダメだよ。」

優はそう言うと、虫を跡形も無くなるほど、足で磨り潰していた。

……嗤いながら。

「命を奪った人は奪った責任を取らないと……それに、あの虫さんも今はこうなることを望んでいるはず。死は痛いことが無くなる救済みたいなもの、死は救済なんだよ?だから、あの虫さんも救済を与えてくれたことに喜んでいるはずだよ。」

優は全く悪びれる様子もなく、死は救済と沙耶香に笑顔で宣うのであった。

そして、優は気絶しているイノシシに近付くと腰に差していた短刀の御刀で止めを刺し、イノシシの内臓を取り出し、沙耶香達の目の前でイノシシを解体していた。そのため、ハッとなった沙耶香は優に何をしているのかと尋ねていた。

「……何を、してるの?」

「何って?」

「その……イノシシ。」

「……ああ、お腹空いたからイノシシの肉を食べようと思って息の根を止めたの。それに、肉を斬る前に御刀の切れ味を試したかったから……あっ、もうそろそろお昼時だし、沙耶香おねーちゃんも食べる?」

優はさも自然に、イノシシに止めを刺した理由を述べていた。

ただ単純に御刀の切れ味を試したかったのと、お腹が空いたからイノシシの肉を食べたかっただけだったと述べていた。

「でも……その、可哀想。……だと、思わない?」

沙耶香は優をどうにか説得しようと試みる。

「う~ん、じゃあ沙耶香お姉ちゃんは魚の血を見て悲しくなるときある?いつもご飯を食べるときに今日は牛さん何頭殺したとか、飲んでる紅茶に使ってる茶葉には命が有ったことを考えて食べたこと有る?幾ら殺したからって、何もないよ。」

「……。」

「ね?変な事じゃないでしょ?」

優はそう宣うと、イノシシの足を持って、引きずりながら帰途へつく。

それを遠巻きに見て、薫は難儀な事を背負い込んでしまったことを理解していた。

ふしぎの国

とある昔のこと、幼い頃の薫とねねが山の中で散策していた――――。

『ふんふんふふ～～ん。』

ねねの心配する声を無視して、薫は棒きれを振り回しながら、鼻唄を歌っていた。

『ついてくるな荒魂！ふふん！刀使は荒魂をやっつけるんだ！』

特撮ヒーロー物のヒーローに憧れていた薫は、人を襲う怪物のような荒魂を倒す刀使になろうとしていた。それ故に、荒魂であるねねと一緒なのが嫌だったらしく、ねねの声を無視し、小石を投げて近付けさせないようにしていた。

『ねね……。』

そんな感じである薫をねねは物哀しげな表情で見ていた。赤子の頃から、見知っている薫が今や反抗的なのが哀しいのだろう。

だが、その直後に何かが素早く通り抜けたことをねねは気付いた。

――――荒魂だ。

『むっ！荒魂はっけーーーんっ!!』

『ねねぇっ!?!!』

ねねは危険を薫に告げるも、薫はそれすらも無視して、荒魂を追う。

『きえーっ』と薬丸自顕流の猿叫（えんきょう）を叫びながら、棒きれで荒魂に立ち向かおうとするが、無謀な勇敢さの代償か、崖に足を取られて滑り落ちてしまう。薫は為す術もなく下へ、ただ下へ滑り落ちてしまう。

声を、悲鳴を上げながら、何処へ向かうのか、何処に落ちるのか誰も知らぬまま滑り落ちていく。

結果、薫は帰り道が分からなくなり、何処へ向かえば良いのか分からぬまま時間が過ぎてしまい、夜の森を彷徨うこととなる。

『じーちゃん！かーちゃん！ばーちゃん!!……とーちゃん……うぅ。』

夜の山森の中は化け物が現れそうなほどの別世界のようであり、不気味であった。

そんな別世界の中で、まだ幼かった薫は一人で彷徨っていたために今にも泣き出しそうであった。

何故、自分は一人で先走ったのか？何故、自分はねねの注意を聞かなかったのか？

幼い薫は自分の行動に後悔しながらも、何時かは家に帰れると信じて歩みを止めなかった……。だが、今の薫はふしぎの国に迷い込んだアリスの様であった。

どれだけ歩いても、出口が見えない迷いの森の中に入ったかのようであったが、その森には助言を与えてくれる芋虫も居なければ、次の頁（ページ）へと進ませてくれるキノコも無いのである。帰る方法も分からず、どこへ向かえば良いのか迷い、遂には同じ道を何度も歩いているのではないかと疑念を抱き、もう二度と家に帰ることも、家族に会えることもないのだろうかという考えが過るほど、絶望しかけていたそのとき、

『ひゃっ！』

草むらの中から何かが突然現れたため、じーちゃんから聞いた天狗か何かの妖怪が自分を神隠しに来たのだろうか、それとも追っていた荒魂が襲い掛かってきたのだろうかと驚き、自分はもう二度と家に帰ることはできないだろうと諦めかけていた。

『……ねね？』

『ねね！』

だが、よく見ると荒魂と言って蔑んでいたねねが助けに来てくれようであった。その証拠に、薫の擦り？いた膝を犬のように舐めて治そうとしていたのだ。薫はその事実に……、

『ねー？』

『うぅ……ぐす。うう……うあぁっ!!』

――――号泣していた。

その後、薫はねねの先導のお陰で迷いの森から脱し、無事家族の元へ帰ることができたのだった……。

その数年後、薫は晴れて長船女学園に入学でき、刀使となったが……、

『だって、益子さんって荒魂かばうんでしょ?おとうさんが言ってたよ!益子の家はそういう家だって……。』

『これから荒魂と戦うのに、そんな人と協力なんてできないよ!こっちが怪我するかもしれないもん!!』

『ほら、変な荒魂だって連れてるじゃない。これだって、何時私達に危害を加えるか分からないし……。』

他の刀使から、ねねへの批判が薫の耳に良く聞こえるようになっていた。

『……ねねはオレ達に危害を加えたりなんか絶対しない!!お前みたいな自分の頭で考えない刀使、こっちから願い下げだ!』

班を決める際、それを言われることが多く、その度に反論し、よく教室を飛び出していた。だが、後悔はしていない。

彼女等はねねのことを何も分かっていないだけだ。それどころか、大人の言いなりに、大人の言うことを素直に聞いてるだけなんだっていうことは分かっていた。だけど、許せないことは許せない。ただ、それだけのことだった。

何を言われようが貫くだけ、それが益子の……いや、益子　薫の生き方。考えて斬る、ということ。

薫は自身にそう納得させ、理解していた。

だが、薫は気付かない。

果たして、迷いの森を抜け出せた者は正気になったのか?狂気の世界の住人のままではないのか?

『荒魂をあんな風に扱うからだ……。』

ねねを荒魂扱いした刀使達が大人に従うだけの狂気の世界に居る存在なのなら、薫もまた益子の家の教えに従うだけの存在でしかな

く、この幼い少女のみを認める狂気の世界の住人の一人であることに薫は気付いているのだろうか……。

「ここじゃ、みんな狂っているんだ。俺も狂っている。あんたも狂っている。」

不思議の国のアリス、チェシャ猫より――――。

「……じゃあ今日はここまで。暗くなると山は危険なんで早めに切り上げた隊長様に感謝しつつ、駐屯地の宿舎で疲れをとるように。」

薫は暗くなった山は危険であることを過去の経験上知っているため、早めに切り上げ、陸自の相馬原駐屯地相馬原飛行場に戻っていた。

「薫。私と優は先に部屋に戻っているぞ。」

「……おう、また明日。」

姫和は薫にそう言うと、優と共に宿舎にある割り振られた部屋へと先に戻って行った。それを見届けた薫も本部長の紗南と相馬原駐屯地の駐屯地司令に荒魂捜索の進捗状況の報告をしに行こうと思っていたところで、廊下で沙耶香とばったり会ってしまう。

「んっ？」

「あっ？」

薫と沙耶香の二人は予期せず出会ってしまったことに互いに驚き、少しの間だけ静寂が訪れたが、薫は冷静に沙耶香の様子を見ると、沙耶香がこちらを伺っているように薫は見えた。そのため、沙耶香が何か元気がないことを紗南が言っていたことを思い出し、何か話したいことがあるのかも知れないと思い、沙耶香に近付いて話しかけた。

「どしたー沙耶香。何か用か？」

「……あの、その……薫、笑わない？」

「ああ、笑わん。笑わん。」

沙耶香は薫の顔を伺うように見つめると、決心したのか、息を吸って吐くと、自身の悩みを打ち明けることにした。
「……あの、その、最近ね？」
「うんうん。」
「……荒魂を斬るのが、辛くなってきた。」
「おお、それで悩んでてっ、うえぇ!?」
流石の薫も任務第一の真面目ちゃんである沙耶香が荒魂を斬るのが辛いと言うと思わなかったので声を上げて驚いてしまう。
「やっぱり、おかしい？」
驚いた声を上げた薫を見て、沙耶香はやはり不味いことを言っただろうか？という気持ちになり、薫でもそれは可笑しいということなのだろうかと沙耶香は思い始める。
「……いや、そういう訳じゃねえんだけどさ、なんつーか沙耶香は任務第一の真面目ちゃんかと思ってたから、その、驚いたっていうのが本音だから……その、気ぃ悪くしたんなら、謝る。」
薫は沙耶香に思っていたことと、思ったことを正直に話す。それに沙耶香は頭を左右に振るという動作で〝気にしていない〟という意思表示をしていた。
「ううん、それより薫、私のことそう思ってたんだ。」
「まあな。寝る時も、訓練の時も何時でも任務に出れるように常に制服とは聞いていたから、そういう奴なんだろうなとは思っていたけど流石に入浴時も制服のまま入ろうとしたのは驚いたぜ。」
「！…そ、それは無かったことに!!」
薫にそう思われていたことに意外そうな顔をする沙耶香だったが、薫に嘗ての沙耶香が入浴するときに何時でも任務に出れるように格好でいなければと思って制服のまま入浴して来たことを茶化して言われたことに沙耶香は顔を真っ赤にし、大きな声で無かったことにしようとしていた。
「ワリィワリィ、ちょっとからかっただけだって。」
「……むぅ。」
薫は沙耶香に少しからかったことを謝るが、それでも沙耶香は少し

むくれていた。
「……そんな顔もするんだな。」
　薫は沙耶香のコロコロと変わる表情を見て、微笑ましかったのか笑みを浮かべながら小さく呟いていた。
「……まあ、沙耶香は荒魂を斬るのが辛いんだっけか？」
「うん。」
「何時からだ？」
「……箱根山でやった荒魂の掃討作戦のときに、荒魂が可哀想だとか思っちゃって、それからノロは人が無理矢理段々と……かな。だけど、刀使は荒魂を討つことが仕事。なのに、荒魂は荒魂だから、放置すればいずれは人に危害を加えるかもしれないのに……こんなんじゃダメ、なのは分かっている……けど、どうしたら良いのか分からなくて。」
「そうか……。沙耶香は刀使は荒魂を討つのが当然のことなのに、それを忌避している自分に悩んでいるってことなんだな？」
「……うん。やっぱり、おかしいよね。」
　だが、沙耶香本人はそのことで真剣に悩んでいるのだ。ならば、真面目に答えなければと思い薫は気を引き締めると同時に、沙耶香に話し始める。
「……ああ、そうだな。沙耶香の言うように荒魂を斬れない刀使は〝普通〟は可笑しいし、在り様としても正しくないかもな。」
　薫は沙耶香の言う通り、荒魂を斬ることができない刀使は正しいとは思えないと言われ、しょげる沙耶香。しかし――、
「だが、それは正しいけど、俺はそれが気に食わん。」
　薫は〝刀使は荒魂を斬る者〟という大前提が気に食わないといって、バッサリと切り伏せるかのように否定していた。
「……それが正しいなら沙耶香。お前、ねねを斬れるか？」
「えっ!?」
「もし、何時かは人に危害を加えるから斬るべきで、だから刀使は荒魂を討つのが当たり前だと皆がそう言うから、大人がそう言っているから正しいなら益子が絶賛放置プレイ中のねねを斬らなきゃならない

よな？」
「……えっ？」
　薫に突然真正面からそう言われ、戸惑う沙耶香。
「斬れるか？沙耶香。」
「……ダメ、ねねを斬れない。」
　薫に再度詰問されると、沙耶香は首を横に振って、斬れないと主張していた。
「……だとしたら、やっぱり私は間違っているの？」
「俺は間違っているとは思わねぇよ。それが今の普通の刀使の考え方ってだけだ。……けどま、刀使だからって何も考えずに斬るのは嫌だろ？」
「うん。」
　沙耶香は自分のことを刀使としては間違っている存在なのだろうかと薫に尋ねるが、薫は間違っていないと答え、それが今の刀使達の考え方であり、沙耶香は無理にそれに合わせる必要が無いこと。それと、沙耶香に何も考えずに斬ると自身にとって碌なことにならないと伝えていた。
　その薫の答え方に、沙耶香は頭を縦に振って同意していた。沙耶香自身、何も考えなくなる感覚は〝無念無想〟等で体験しているため、何も考えずに斬るのは忌避していた。
「だから、これからは任務だからって斬るんじゃなく、こいつみたいな荒魂も他にいるかもしれねぇとよく考えてから斬れば良いと思うぜ。それに、俺からして見れば沙耶香のその温かい気持ちをずっと大事にして欲しいと俺だけとなっても思い続けるからさ。」
「よく考えて……斬る…。」
　沙耶香は薫の〝よく考えてから斬る〟という考えに感銘を受けているかのようであった。
「少なくとも益子の一族は昔からそうやって来たぞ。……最も、俺にしたって気付いたのは最近だから、偉そうなことは言えないんだけどな。」
「まだよくわからない…けど、だからこそ、よく考えて行きたい。……

そう思う。」
「おう、とりあえず今はそれで十分だ。」
沙耶香は薫の考え方を聞いて、今後は薫と同じく〝よく考えてから斬る。〟ことを信条に進もうと決意していた。
「……あの、薫？」
「ん、何だ？」
「薫の話しを優にも聞かせたら良いかな？って思うんだけど。」
「……そうだな、そうすりゃ優も少しはマシになるかもな。」
沙耶香は優に薫の話しを聞かせてやれば、優の残虐性は収まると思い、薫に提案していた。それに、薫は同意し沙耶香にやらせようとしていた。全てはやる気になった沙耶香を成長させるためにやらせようとしていたのだが、どのような結果を生むのかそれはまだ誰にも分からぬことであった……。

その後、報告を終えた薫と沙耶香は宿舎にある部屋に戻り、顔を隠していない優と姫和の二人と再会していた。
「なあ、優。話があるんだが。」
薫は優に話しがあると言ってきたので、優は何事かと思い、薫に近寄ってきていた。
「何？」
「実はな、沙耶香がお前に用事があるらしい。」
薫は優にそう言って、沙耶香と話させようとしていた。
「おい、何を話そうとしているんだ？」
姫和はむくれながら、それを遮るかのように優と沙耶香の間に割り入るかのように話しに入ってきた。
「大丈夫だよ。少し前に優がイノシシを殺しただろ？あの時は埋めたりしなきゃいけなかったから、大変だったけど、ずっとあのままの調

子じゃ、あいつは生き辛くなるだけだろ？」
「……そうだな。」
「それの説得さ、ヒヨヨンも協力してくれ。」
優に聞かれないように小さな声で薫に言われ、頷くしかなかったヒヨヨンこと姫和。
優を普通の人間にすると約束した以上、薫の言い分にも耳を傾けなくてはならないと判断したからだが……。
「どうしたの？」
優は姫和と薫の二人が何かコソコソと話しているように見えたのか、何をしているのか尋ねていた。
「あ～、いや、この後も荒魂の捜索だから、今後のルートをだな？」
「ああ、うん、そうだ。その話しをしていて沙耶香達の話しを邪魔する訳にはいかなくてな。」
優に尋ねられた姫和と薫の二人は、その後の荒魂捜索のルートのことについて話し合っていたと述べていた。
「……ごめん、優、ちょっと良い？やっぱり、私は命は大事にすべきだと思う。だって、ねねは荒魂だけど、私が刀使だからってねねを斬ったら嫌だよね？」
「？……うん、そうだね。」
話を遮られた沙耶香は、もう一度自分が伝えたいことを優に伝え、それに優は意味は分かっていないがとりあえず頷いていた。
（……沙耶香おねーちゃんはそういう考えなんだ。）
しかし、つい先程イノシシを殺したことなど、とうに忘れている優は他人事のように理解して、
（……聞いてくれてる！このまま薫が言っていたことを知ったら、暴力的な思考を抑えられるかも？）
一方の沙耶香はそうなると淡い期待を寄せていた。
「だから、優もこれからは命を大事にして、考えて斬ってくれるって約束してくれる。」
「……うん、分かった。」
「……良かった、分かってくれて。」

とりあえず優は理解した振りをして、沙耶香に頷いていた。
それを見た姫和は喜んでいた。これで、優の暴力的な部分は抑えられ、真っ当な人間へと成長してくれると……だから、
「……薫、ありがとう。」
「……良いってことよ。」
様子を伺っていた姫和は薫に礼を言うと、優に近付いて抱きついた。
「？……姫和おねーちゃん？」
「優、いつまでもその気持ちを忘れないでいて、ずっと優しいままでいてくれ。」
姫和は、〝姫和おねーちゃん〟と幼気（いたいけ）に呼ぶ優が愛おしく思い、自らの元へ誘い抱きしめていた。
自分と同じように、チョコミントアイスが好きで、母親を失っているうえ、自分のことを悪く言わない優が、自分の言うことを従ってくれる優が自分にとって何よりも大事で、特別視していて、余計に愛おしかった。
この幼い子供を自分だけの物にしたい――――。
母と違って私だけを見続けて欲しい――――。
自分だけを見て相手にして欲しい――――。
様々な欲望を姫和は優に対して抱き始め、求め欲した。

『うん、とっても大事な友達だよ！』

しかし、姫和は、優がタギツヒメに対して今まで見せたことがない笑顔で話していたことを思い出したため、姫和の心の中はドス黒い感情で満たされていく。
だからなのか、
「人は……人は人と交わり子を成す。そして素質や宿命を連綿と受け継いでいく。私や可奈美がそうであるように……だが荒魂は違う。ノロは繋がる輪から外れた孤独な存在だ。だから……。」
優は人間で、タギツヒメは所詮荒魂でしかないと答え、タギツヒメ

相手にマウントを取ろうとする姫和。何故なら、
優が自分に振り向いていないこと、タギツヒメの方が好きなことは分かってしまったから。
それに、タギツヒメは私の両親も、あまつさえ大切な者(優)まで何もかも奪い尽くそうとする。
だから、自分の身体を使ってでも優を自分の物にして、タギツヒメから奪い取って苦しめる権利は有る。
姫和の心の中に芽生えたドス黒い感情はタギツヒメ相手に更に肥大化し、9歳の児童を相手に愛を真剣に語り、その見返りを求めるという狂気染みた思考へと変化した。
思えば、幼少の頃から姫和は、STT隊員であった父が荒魂に殺された後も病で苦しむ母を一人で献身的に看病していた。それ故なのか、姫和は献身的で人一倍責任感が強い娘となってしまった。そんな彼女が自分が世話しなければならないと思ってしまう優と出会ってしまったことにより、その献身性は更に肥大化させてしまうこととなってしまった。
そのため、何時しか姫和は誰かを献身的に尽くす自分に価値を置いてしまった。
だからなのだろうか、姫和は周囲の目を全く気にせず、優を自分の物にするために誰もが驚愕するような暴挙に出る。
「ちゅ……」
姫和は舌を入れながら、優の唇を強引に奪っていた……。
その光景にポカンと見ていた薫と沙耶香だったが、時間と共に我を取り戻した薫に姫和は優から引き剥がそうになる。
「……なっ、おい何する薫!?」
「やかましいゴラァッ!!お前とりあえず距離取れっ!距離っ!!」
「何でだ!?可笑しな事はしてないぞっ!?!!まさか、妬いているのか?」
「おーっし、自覚無しなのは余計にマズイわ、お前!!」
薫は第五段階の八幡力の力を使って何とか優と姫和を引き剥がす。
決して、薫は嫉妬から引き剥がしているのではなく、9歳の子供にやっていいことではないから、必死で引き剥がしていただけである。

「……姫和おねーちゃん、薫おねーちゃん、おトイレ行っていい？」
優は何事も無かったかのように、無表情で姫和と薫にトイレに行きたいと言うと、薫は「おお、良いぞ。」と言って返答したため、優はトイレへと向かって行った。
「何でだ、薫!?」
薫に何故止めたのか抗議する姫和。
「うっせぇ!!お前ガキ相手に何してんだ、管理局が大変な時期に現役の刀使が9歳児に淫行働くとかアウトだからな!!」
「……何が問題有るんだ？海外じゃキスは挨拶みたいなものだろ、妬いているのか？」
「そうか、なら可奈美にこのことについてじっくりと聞くことにするわ。」
薫は姫和の暴挙に抗議するが、聞く耳持たずの姫和にイラッとしてしまい、可奈美に連絡すると言って通話しようとすると、
「すまない薫。今のはやりすぎだった、今後はしないと誓う。」
姫和は薫が可奈美に先程の暴挙を伝えられると、それはそれでマズイので素直に頭を下げて謝罪する姫和。
「……本当だな？なら、右端のベッドはお前が使うとして、左端のベッドは優が使うことにするわ。」
「何っ!?優は一人で寝れないぞ？どうするんだ？」
「……大丈夫だ。ねねが居る。」
「くそ、その手が有ったか!!」
「……文句有るか？」
「いや、何も問題無いぞ。」
だが、姫和が素直に謝罪したからといって、薫は警戒を緩めず姫和と優の距離を空けるようにし、次いでにねねと添い寝させることで色々なことから守ろうとしていた。しかし、姫和はその決定に不満そうに口ずさんでしまったため、薫はスペクトラムファインダーのメール機能を使って可奈美に送る文章を見せながら、姫和を脅して黙らせていた。
その光景を見た沙耶香は漫才みたいだと思い、微笑みながら見てい

た。

トイレの中で、優は便器を顔に近付けて、〝もどしていた〟。……心因性のストレスによる嘔吐である。

「……ハァ……ハァ……」

理由は、姫和も可奈美も薫達も知らないことだが、優の中にはタギツヒメ以外の元人間の荒魂が居るのである。

一人は路地裏の角で貧困であったために〝花〟を売っていたミカという少女だった荒魂の記憶――――。

その記憶には、大人が子供に〝欲望〟をぶつけ、そのうえ〝玩具〟にされていた記憶。そのため、優は多感な時期からそういった記憶を見て、体験させられていた。

身体に這いずり回るミミズのような舌――――。人間の言葉を喋り、人間の姿をして、欲望をぶつけてくる悪魔――――。他の子供達も同様な目に遭わされているという現実――――。

それらが鮮明に見せられ、体験もさせられたのだ……。

だからこそ、9歳である優は口づけや接吻、胸や性器を触らせるといった〝性的なことに関する行為〟を〝耐え難い暴力的な行為〟であると認識し、トラウマとなっていた。それ故に、優は姫和による口づけが原因で、姫和の姿がミカの記憶にある人間の言葉を喋りながら欲望をぶつけてくる悪魔に重なって見えたため、心因性のストレスで優は嘔吐をしていた。

心が落ち着いて来た優は便器の中を水で流し、トイレにある鏡を見ながら呟いていた。

その表情は目を見開いて、誰かを睨んでいるかのような今まで見せたことがない顔であり、誰かを殺しかねないようなぐらいの狂気が孕んだ顔であった。そんな自分の顔を優は幾度も呟きながら、見つめていた。

「……どんな顔だったけ？……」

優はいつもの笑顔はどんな物であったかを思い出しながら表情を造っていた。

違う、これは可奈美や姫和に向ける顔はこんな感じじゃなかったと思いながら、いつもの顔を造ろうとしていた。

「……うん、これで行こう……」

姫和おねーちゃんはボク等をすくってくれる存在だから、ヒヨリおねーちゃんは僕等ヲ救ってくれるソンザイだから、と何度も心の中で呟きながら薫達の居る部屋へと戻って行った。

しかし、姫和は気付かない。

優は繋がる輪から外れる存在（ソンザイ）になってしまっていることに……。

平和な国

それは、銃声が萎んだ音からという静かな、だが激しい戦いの始まりの合図でもあった――――。

より、正確に言えば、優が隠世からサプレッサー付きのＨＫ４１６Ｃを引き出し、何処かに向けて発砲したからである。

そのため、優が放った銃弾が何処へ飛んで行くか分からないので薫は叱ろうとしたら、

「伏せろっ!!Ｃｏｎｔａｃｔ(接敵)!!」

トーマスが薫達に分かり易いように日本語で伏せろと大声で言い、日本語を喋れないトーマスの部下達には状況を速く理解してもらうため、敵が来たことを英語で知らせていた。

つまり、外からのお客様が来たということである。そのことを素早く理解したトーマスの部下達は薫達を銃撃から守るために地面に伏せさせていた。

次の瞬間、銃声という騒音がそこかしこに鳴り響いていた。

「……何処に居る？」

「まだ、伏せた方が良いよ。まだ慌てて撃ち返してくると思うから。」

トーマスは優に敵がどの方面に居るか尋ねていた。だが、優は周りの反応を他所に樹で身体を隠して、敵の居る方へ撃ち続けていた。

何故、トーマスと薫達が銃撃されるという状況に陥っているのかというと――――、

時を遡ること、

北京、中華人民共和国国務院。

日本の内閣に相当する場所であることが起こっていた。それは、前総書記の江が後ろ盾となり、石油閥のエースとして期待され、石油企

業の董事長となれた汪(おう)が中華人民共和国公安部に連行され、尋問を受けていたからである。

何故、彼が尋問を受けているかというと、前総書記の江とは対立していた派閥出身の習が総書記となり、政権を握ったことで汪の状況が一転。江が後ろ盾となっていた経歴が彼を窮地に立たせてしまっていた。それは、習総書記が掲げる腐敗防止運動という名目による反主流派の粛清に前総書記の江派でもある汪もその粛清リストに入ってしまったからである。そのため彼は、公安部に拘束され、公安部部長直々の尋問を受けていた。

「不正蓄財、業務上横領の罪による剥奪というところでしょう。知っての通り、権力闘争の中で反主流派が罪に問われるのは伝統のような物です。……故に、貴方はこのままでは党籍剥奪という社会的抹殺を受けることとなるのは必定です。」

「……君らなら、私の罪状は思いのままではないのかね?何故、それをしない?」

だが、汪は今は党籍を剥奪されずにいるということは何らかの理由があって此処に呼ばれた筈と踏んで、彼等の意図を読み取ろうとしていた。

「そうです。ですが、とある条件を呑めば非主流派の貴方を迎え入れる準備があると仰っている人が居まして……。」

固唾を飲んで、その条件を聞こうとする汪。

これから自分と家族が生き残るためには、その条件を呑まなければならないからだが……。

「実はある人物が群馬にて活動中であるとの確かな情報を得たため、その人物は我が国に招待すべきであると判断し、貴方にはその手伝いをして貰いたいとのことです。」

……他国の重要人物の拉致。或いは護送なのか?と汪は勘繰る。

「……その重要人物とはどのような御方で?」

「そんなに畏まる程の人物ではないです。この前、男性の刀使が現れたとかいうニュースは覚えていますね?」

そういえば、そんな話があったようなと思い出しながら、汪はこの

後の展開を考えていた。
「……これは？」
そんなことを考えていたら、公安部長は二枚の写真を汪の目の前にある机の上に広げていた。当然、汪はこの二枚の写真は何なのか公安部長に尋ねていた。
「その重要人物の顔写真です。」
その二枚の写真は、まだ優が半ば荒魂の姿になる前の時の姿。それと、箱根山戦時と同様の変装している優の姿が写された物であった。
つまり、この子供を拉致する手伝いをされるということだろう。
「……この幼い子が他国の重要人物でもあり、我が国に招待すべきと判断したということですか。……ですが、我が国がそうまでする必要がありますか？」
汪は公安部長の真意を探るべく、質問をする。
仮に汪が優を拉致や獲得したとしても優を保護、もしくは管理する施設等々が必要不可欠である。そのうえ、我が国に招待すると美辞麗句で飾ったとしても他国の人間を勝手に拉致することには変わりないのだから、それ相応の建前は必要である。そうしなければ、他国の介入を許してしまう事態となってしまううえ、汪も児童誘拐者として党籍剥奪以上の社会的抹殺を被ることとなってしまう。
故に、汪は情報を公安部長から引き出そうとする。何故我が国はそんな危険を犯してまで写真に写る少年を得ようとするのか、何か理由があるはずである。
汪は、後々のことを考え、それらの情報を得たかった。
「それほど気になりますか？」
「私とて子を持つ身だ。理由（ワケ）もなく、突然児童を拉致しろと言われれば忌避します。それに、我が国に招待できたとして保護、管理できる児童福祉施設の様な場所が有るのですか？無ければ我が国は非人道国家として、そして私もそれに加担したとして歴史に残ることは間違いない。貴君の説明だけでは、誰がどう見ても権力をチラつかせて私を無理矢理にでも児童誘拐の手先として捕まえるようにしているとしか思えないのですが？」

汪は公安部長に優を拉致・獲得する際のリスクを説明し、そのうえで子供を持つ親としてはそれに賛同できないと言っていた。但し、これは公安部長から少しでも情報を引き出すための芝居であり、且つこのような振る舞いが露見すれば、現政権の習総書記は非主流派から突き上げられ、主流派の立場も危うくなるだろうと脅していた。

「……無論、そこは考えております。何も貴方を児童誘拐者として仕立てるために提案した訳ではありません。この写真に写っている少年はもしかしたら隠世技術の恩恵、いや隠世にある莫大なエネルギーを我が国も得られる鍵となる人物かも知れないのです。」

汪は、公安部長の発言に思わず立ち上がりそうなほど驚愕していた。

莫大な隠世技術の恩恵、いや隠世にある莫大なエネルギーを得られれば、どれ程の経済的恩恵を得られることになるか計り知れないのだ。だが、疑問はある。彼等はどうしてこの児童が莫大な隠世技術を握っていると判断したのだろうか？

「……１４億以上も居る人民のエネルギー需要を解消したいとはいえ、我が国はそんな与太話を信じるのですか？」

「与太話？……子を持つ貴方にとってはそれが良かったかも知れませんが、残念なことに我が国の企業が造った配信アプリを使う刀剣類管理局局員と知事、議員が居たことが幸いしまして、それらから得た情報と内部からのリークを照らし合わせた結果、その可能性が非常に高いことが判明しました。」

なるほど、我が国の企業が造った配信アプリに情報を抜き取る細工がされており、そこから情報を得たという訳か、……国防動員法と国家情報法が無ければ出来なかったことだろうと情報の出所に納得する汪。

しかし、ノロの持つ神性によって、隠世に干渉する力を増幅させられることができ、その力を軍事、技術分野等に応用するということは伏せられてはいたが……。

「それに、保護する施設についてですが……もし、日米両政府が我々の行動を非難すれば、彼のサインがある亡命書と政府の意向により半ば

荒魂の姿となりながらも刀を持って戦わされていたという彼の証言を表明した後に、『刀剣類管理局とそれを監督する日本政府が、この児童に対し悪辣な環境下に置かれていることは、この姿と御刀を持っていることを見れば明らかであり、国連が主導する施設にて各国が協力して彼を保護する。』というふうに宣伝するということとなっております。この計画に我が国と同様に隠世技術を欲するロシア側も賛成していますし、人道主義とポリコレに毒されている欧州等は反対できないでしょう。…それに、どうやら彼は日米両政府とっては秘匿にしたい存在の様なので。」

子を持つ汪は公安部長の話を眉を潜めながら、聞いていた。

つまり、ロシアと中国が中心となって造った国連の施設で軟禁、いや表面上は保護すると同時に日米両政府がこの拉致を非難した場合は、優の今の半ば荒魂となっている姿と男の刀使として変装している優と同様の御刀を持って戦わされていたことを証明し、亡命書に書かれている優のサインを物的証拠として、日米両政府には児童の権利を蔑ろにしていたとして非難するということをなのだろう。それによって、国内にある人権問題で非難されている我が国の各国からの視線を何とか逸らそうとしているのだろう。

それに、優を変装させている写真から、日米も優が荒魂の力を使って戦っていることを秘匿したいのだろうと汪は推測していたが、実際は日米両政府は密約によって隠蔽した二十年前の大災厄の真実を知る大荒魂の一部を優が宿していることを秘匿したかったというのが、真相だが。

「私は、貴方がこのまま埋もれてしまうことを危惧し、この話を持って来ました。……貴方の輝かしい経歴を使えば、兵隊も直ぐ集められるでしょう。相手は刀を持っただけの素人集団のような物です。必ず上手く行きますよ。」

全て、根回しは既に終えているということか……。公安部長の〝妙に下手に出ている〟言葉遣いと過去の輝かしい経歴という声に後押しされてか、汪は自分も家族を守るために出来ることならと考えてしまう。そして、

「……委細招致しました。必ず、ご期待にお応えしますと習総書記にお伝えください。」

汪は納得した面持ちで公安部長に告げる。これで、取るべき選択は決まったと腹を据える。自らの保身、家族を守るためと思いながら、児童誘拐に手を借すと……。

だが、汪は気付かない。

何故、非主流派である彼がこの作戦要員に選ばれたのか？

何故、優が御刀を持って刀使として活動しているのか？

公安部長が下手に出ていたことで自分はまだ主流派に戻れるチャンスがあり、帰れるのだと錯覚してしまったため、これらの矛盾点に汪は気付かなかった。

その後、汪は中東の軍関係者に電話を繋いでいた。

「――――ＡＩＩＢに参加して頂き、貴国には大変感謝しております。……ええ、そうです。友人としてお願いしたいことがあるのですが。」

汪は元人民解放軍出身の経歴を生かして、人民解放軍の兵を優の元へ送るということはできるが、それだと直ぐに足が付くうえ、国際問題となりかねないので、石油の売買で知り合った中東の国の軍関係者から革命防衛隊の民兵組織バスィージを通じて支援しているテロ組織を幾つか紹介してもらおうとしていた。

「はい、そこで写真に写っている子供を〝保護〟してもらいたいのですが。…ええ、はい。隠世からの莫大なエネルギーを得ることができれば我が国と貴国の国益にとって重要なことはお分かりでしょう？…はい、貴国も原油安ですので、ええ苦しい状況なのは分かっております。当然、成功した暁には石油プラントの建設費用をＡＩＩＢで全額御融資致しましょう……。」

相手の国も原油安で相当苦しんでいるらしく、こちらの話しに直ぐ乗ってきたようである。

「……ですが、くれぐれも我が客人を〝そちら〟に寄り道させないようにお願いします。いえいえ、友人としての御忠告ですよ。我が国も他国の国民を拉致するような国家との今後のお付き合いを考えなくてはならなくなりますからね？…〝国連の施設で人道的〟に保護することに意味が有るのですから。」

汪はそう言って、中東の国の軍関係者にそちらの国に莫大なエネルギーが眠る隠世への鍵を持つ優を独占しないように釘を打っておく。こうすれば、途中で裏切ることは無いだろうとほくそ笑みつつ、例え今回の拉致が失敗したとしても我が国ではなく、自国とは関係が無い過激派のテロリストが勝手に行ったということとなる。

こうして、汪は自らの保身を守りつつ、表面上は自国が手を汚さずに優の拉致を実行する部隊を送ることができた。

成功することばかり考えながら……。

薫達に一悶着が有った夜の次の日――。

薫とトーマス達は再び目撃された山の中に居る荒魂を捜索していた。

無論、昨晩の事があって、トーマス達を先頭に姫和、沙耶香、薫、優の順列で捜索していたのだが、

「ゼェー…ハァー……ゼェー…ハァー……。」

「……驚くほど体力が無いんだな。」

「平気？」

薫の体力の無さに呆れる姫和と、心配する沙耶香。

「全然…平気……まだまだいけるぜ！ごめん嘘……。」

だが、流石に疲れたのか崩れ落ちる薫。それに近寄る姫和達。

「ねーねー。」

ねねにやれやれということを言われたような気がした薫は、「ずっと優の肩に乗って楽していたお前が言うなっ！」と言いたかったが、

優の護衛（主に姫和からの）として付けているため、非難することができなかった。
「薫、無理せず休んだらどうだ？トーマス達と一緒に駐屯地に帰るのも手だぞ？」
姫和がものすごい良い笑顔でそう言ってきたが、薫は姫和の意図に素早く気付く。
（うわあ、すっげえ良い笑顔……。）
恐らく、優と二人っきりになれる算段でも付けたからこそ、自分を遠ざけようとしているのだろう。そう理解した薫は取るべき行動に出る。
「いやー!!ダイジョブダイジョブ。だから行くぞ、さやか!!」
それは、空元気だった。
「……本当？」
「ホントホント。」
「そう？無理だったら言って、一緒に駐屯地まで付いて行くから。」
薫の様子を見た沙耶香は、薫のことを心配しながら大丈夫かどうか尋ねる。
（……沙耶香、お前の気遣いはホント助かる。けど、今はお前に甘えると優が危険だからそういう訳にはいかねぇんだ。）
その厚意に、薫は涙がホロリと流れそうだったのと、優と姫和を二人っきりにする訳にはいかなかったので、首を横に振って「大丈夫だ。」と言い、沙耶香の申し出を断っていた。
「いやいや、沙耶香もこう言っていることだし、辛かったら帰るべきだろう？」
「……全然…平気!!」
その一方、姫和も薫のことを心配してというより、優と二人っきりになるために駐屯地へ帰るように促していた。
（……お前が昨日あんなことしてなけりゃ残んねーよ!!）
薫は、姫和が昨日行ったことを思い出しながら心の中で突っ込んでいた。
「……大丈夫？」

「お、おう。ヘイキヘイキ。」
膝をガクガクさせながらも薫は優に心配掛けまいと答えていた。
（……しかし、昨日あんな目に遭ったのに平気なのか？）
だが、薫は昨日あんな目に遭った優の方が大変なのではないかと様子を伺うが、普段通りであったことに違和感を感じつつも精神が強いのか、それとも物凄く図太いのだろうと勝手に判断し、薫は優のことを将来大物になりそうだなと変な感想を抱いてしまった。
「ねねっ!!」
だが、ねねの悲痛な叫びが、この場の雰囲気を一変させる。
ねねの叫んだ方向に草むらが蠢いたことから、件の荒魂だろうかと皆が皆、何が出てきても良いように警戒する。
そして、現れたのは――――、

小さなリスの姿をした荒魂だった……。
「はぁ…もしかしてこいつかよ。ここいらを騒がせてた荒魂ってのは……。」
「薫、どうする？」
「ああ、そうだな。学長にどう報告するか……。」
薫と沙耶香の二人はこの荒魂をどうすべきか、考えあぐねていたら――――、

優が突然サプレッサー付きのＨＫ４１６Ｃを隠世から取り出して、何も無い所に向けて発砲していた。そのため、薫は優が放った銃弾が何処へ飛んで行くか分からないので注意しようとしたら、
「伏せろっ!!Ｃｏｎｔａｃｔ(接敵)!!」
こうして時は戻り、トーマスが薫達に分かり易いように日本語で伏せろと大声で言い、英語しか知らないトーマスの部下達には状況を速く理解してもらうため、敵が来たことを英語で知らせていた。
つまり、外からのお客様が来たということである。そのことを素早く理解したトーマスの部下達は薫達を銃撃から守るために地面に伏せさせていた。

「……何処に居る？」
「まだ、出来たら伏せた方が良いよ。でも、慌てて撃ち返してくると思う。」
トーマスは優に敵がどの方面に居るか尋ねていた。だが、優は周りの反応を他所に樹で身体を隠して、銃を敵が居る方へ撃ち続けていた。
そして、汪の思惑通り、薫とトーマス達は、古くから伝わる神の教えのためなら死をも厭わないジハードの戦士達と恐れられている過激派のテロリストと交戦することになったのである。尚、薫達は知らないことだが、過激派の数は２０名前後であり、過激派の連中も刀を持った素人連中が相手なら、この数で充分に倒せるだろうと判断し、優の元へ送っていたのだ。
……だが、彼らは本来なら、待ち伏せで先ずトーマス達を始末してから、薫達も静かにし、標的である優を拉致する予定だったのだが、標的であり只の子供だと侮っていた優の先制攻撃で一人死亡したことにより、過激派の連中は出鼻を大きく挫かれ、大いに動揺していた。
「〈あいつら、何で気付いたんだ!!?相手はアメリカ人以外素人の筈だろう!!?〉」
「〈そんなこと俺が知るかよ、先ずは撃ち返せ!!撃ち返せ!!〉」
その証拠に、過激派の彼等は薫達にとって英語なのか、アラビア語なのか判別が付かない言葉で大声で喋り、所構わず撃っていた。
その声の位置と銃声を頼りにし、トーマス達は敵の練度はさほど高くないと理解、判断しつつＡＣＯＧ付きのＭ４で反撃していた。
だが、これで、外の国もノロの量が多い大荒魂のタギツヒメと融合している優には利用価値があることを理解したことにより、幾ら外敵を排除し表面上平和な国に居たとしても、外国に亡命しようとしても実験動物扱いされるということに変わりはなく、それと同時に優は平穏を得ることはできず、安息といえる場所を徐々に失いつつあったということに誰も気付かない。
……こうして、優と刀使達は政争に巻き込まれ、銃火が飛び交う戦

場へ向かわされることとなってしまった。

狼が支配する国

『我々はイスラムの戦士。偉大なるアッラーの御言葉を護る真の戦士達である。そして、アッラーの御言葉に耳を傾けないお前達が言うところのテロリストである。しかし、我々はイスラム教徒が安らげる国家を望み、それを実現するために活動している。……そして、我等を追い立て、偉大なるアッラーの言葉にも耳を傾けない畜生共は我々の行いを〝許されざるテロ行為〟であると言う。』

走る車内にて、彼等はｉｐａｄに映る偉大な総指導者様とか呼ばれている男の演説を見ていた。

『それ故に、我らのような真の戦士達との共存を望まぬ者がいる。テロリストの討伐を名目に大いなる暴力を手にし、その暴力に溺れ、耳を傾けるにも恥ずべき言葉で我々を辱め、貶めた者達。……そんな彼らは対話を求めた我々の声を一方的に無視し、言葉を、いや奴等の言う自由と人権を解さぬ者として撃ち滅ぼそうとしているのだ。その証拠に、我々の行いを〝許されざるテロ行為〟と叫ぶ国の軍隊は何をしているのか？我等イスラムの土地を不法に奪っているのは誰なのか？その者共が率いる軍隊が罪のない町の市民、いや罪のない女子供を〝誤射〟と言い殺しているのは皆は解っているのだろうかっ!?そのうえ、その蛮行に見て見ぬふりをする政府の聖職者たちは何の見解をも示さないのは何故か!?…然るに当たって、その者達に問う。誰がその畜生共から、か弱き町の市民達を守るのか？』

総指導者の男は興奮しているのか、声を上げて、自らの行いを批判する者達を非難する。

『故に、事態ははっきりしている！そのため、我々の信ずる理念と神を護るために我々は武器を持って立ち上がる。過去、広島と長崎に毒入りの爆弾を落とし続け、そうして女子供を無差別に虐殺した者達は今も平然と我々の活動を〝許されざるテロ行為〟と叫びながら、我等の

土地に住む女子供を虐殺しているのだ!!……それを続けた結果、彼等は心を持たぬまま堕落したのだ!!それが、この世界に覆う対テロ戦争の真実だ!!』

車内にはマリファナを吸いながら、気分を落ち着かせようとしていた者が居た。今から、自爆ベストを着けながら、私は神の元へ召されると……。

『……これは、そのような蛮行を行う西洋が信ずる自由や人権という出鱈目なことを宣うために行う戦いではない。我々の心から信ずる者のために戦う聖戦である。断じて、畜生共が叫ぶテロではない!!』

総指導者の言葉を聴きながら、少女は覚悟を決める。

「……時が来た。」

アラビア語を喋る男は起爆スイッチを少女に渡す。

渡されながら、少女は思う。この国では、刀使と呼ばれる未成年の少女達が人々を守るため、化け物相手に奮闘し、化け物を討ち祓う少女達が居るということ。

……そんなジハードの戦士達のような刀使達になるようにと教えられたことを思い出す少女。

「……はい。」

少女は短くそう答えると、空爆にやられた家族のことを思い浮かべるが、復讐のためだけに行うのではないと、総指導者様が言われていた化け物のような畜生共を一人残らず追い出すための聖戦。その一歩の行動であり、人々を守り、化け物を討ち祓うことを教義とする刀使達も同様のことをすると強く自分に言い聞かせていた。

……全て、起爆スイッチを渡した男の受け売りなのだが。

『怒りを忘れろ、悲しみを捨てろ、ただ畜生共には情けを掛けることなく、我等の信ずる聖戦のために死を乗り越えろ。そうして皆が皆、ジハードの戦士となるための道標となるのだ。』

総指導者の最後の言葉を少女は聴きながら、『私はこのお言葉を聴いたから復讐の念に囚われることなく救われた。』と思いつつ、車から降りると、少女はマリファナを道に捨て、赤いパーカーのフードを被って顔を隠し、起爆スイッチを握り締めながら相馬原駐屯地へと向

かう。

これは、復讐などではない。人を多く殺しているにも関わらず、美辞麗句を誇らしげに語る畜生共を追い出すために行うことなのだと、自らに語りながら、起爆スイッチを強く握り締めていた。

こうして、刀使の名声を利用して造った少女は総指導者の言葉通りに自爆ベストで〝ジハードの戦士〟となり、その後は総指導者の言葉通りなら、神の元へ召されたのであった……。

――――こうして、赤いパーカーの少女は、テロリストに心まで食い殺された。

荒魂を捜索するという仕事から一転、銃火は飛び交い、生死が隣り合わせの戦場へと変わってしまった群馬山中。

ここら一帯は特別災害予想区域に指定されており、それを伝える規制線も貼られているから登山者が間違って此処に来ないだろうし、銃弾が飛び交っているとしてもＳＴＴ隊員等の銃撃だと思うだろうと考えつつ、薫は現状を整理し、この状況を打破する打開策を考えるものの、思いつくことなく銃火に晒されないよう身体を低く沈めていた。

だが、薫はふと自分が刀使であることを思い出し、敵のところまで突っ込み敵を峰打ちか何かで気絶させようと立ち上がる。

だが、薫の頬に何かが掠めた瞬間、嘗て新人の刀使が戦いの空気に呑まれたのか、ＳＴＴ隊員等が荒魂に対して銃を撃っている最中にも関わらず突っ込んでしまい、銃弾を浴びるが写シのお陰で死ぬことはなかったものの、荒魂の目の前で写シを使い切ってしまった状態とな

り、一苦労したという話しを思い出してしまった。（そのうえ、息の合わないＳＴＴ隊員と刀使が同じ任務で一緒になり、そのＳＴＴ隊員の放ったライフルの弾が刀使の御刀に当たってしまい、弾き飛ばされてしまうことで荒魂討伐が大変だった話も思い出してしまった。）

一年前にも、サブマシンガンと捕獲用ネットで捕まった刀使が居たことから、その話しは事実なのだろうと思い出し、身を屈めてしまう。

……そのため、自分は何をしようとしていたのだろうか？と薫は思う。

自分が敵のところまで突っ込んだとして、刀使の力だけで勝てるのだろうか？それに、敵が何処に居るのか分からないうえ、正確な数も分からない。仮に虱潰しに適当に突っ込んだとしよう。運悪く敵の包囲のど真ん中だったりしたら、最悪味方の誤射と敵の銃火に晒され、一瞬で写シの力を使い切り、銃弾を浴びて死ぬかも知れない。それに、優が先制攻撃してくれたお陰でこうなっているが、敵はこちらを待ち伏せていたように感じる。ともすれば、刀使を相手にすることも想定されている筈なのである。

……ならば、刀使相手にも効果が有る捕獲用ネットのような物か罠といった手段を用意し、待ち構えていたというふうに考えるのが自然だろう。ともすれば、果敢に敵の前に躍り出てくれれば格好の標的となるのは目に見えている。それに、銃弾をどれだけ浴びれば写シを使い切るかなんて薫には銃火に晒された経験が無いし、分からないのだ。

……それに、峰打ちという技は峰で相手を叩いて行動不能にする技なのだが、刃の部分だけでも２ｍは超える祢々切丸で、それを行えば、打撲骨折どころか死に至らしめることになるだろうということは容易に想像が付く。（というよりも、刀の峰で打とうが結局のところ鉄の棒でぶっ叩いていることには変わりないので、打ち所が悪ければ人を死に至らしめる威力は充分にある。）

それに、もし、もしもだ。写シを張っているお陰で銃に撃たれた痛みが半減され、撃たれたことに気付かぬまま突っ込み、運悪く敵の眼前で写シを使い切った状態となれば、そのまま銃を持った敵を相手にしなければならなくなる恐れもあったし、罠を受ける可能性もあっ

た。
　以上の事から、薫は写シの力を過信して、敵の所まで突っ込むのは辞めることにした。
「……爺さん!!任せて良いか!?!!」
「任せろっ!!」
　となれば、プロに任せるのが一番と薫は判断し、トーマスにこの事態の終息を一任していた。
　それに、こちらが無理に反撃しなくても相馬原駐屯地の陸上自衛隊が銃声を聞きつけ、援護に向かって来れるだろうと判断し、トーマスにそう呼びかける。
「爺さん、陸自の人間が来るまで頑張れ!!」
「悪いが、駐屯地で自爆騒ぎがあって陸自の部隊はそれの対処に追われているらしい。増援が来るのは少し時間は掛かる!!」
　だが、陸上自衛隊の援護は相馬原駐屯地で起きた自爆騒ぎの対処（ダーティーボムの可能性も有るため。）のため、しばらくは来れないらしい。
「陽動も仕掛けてんのか、何者だあいつらっ！沙耶香、姫和を抑えてろっ!!」
　そう理解した薫は優のことを気にかけている姫和を抑えるように指示する。優をこれ以上人殺しをさせる訳にはいかないとか、言いだして敵のど真ん中へ突っ込みそうな気がしたからだ。
　……だが、薫としても優にこれ以上殺人に手を染めて欲しくはない。そのため、
「……ジジイ、優に攻撃させんの止めろっ！」
　と、トーマスに何とか近付いて指示する。
「断るっ。あいつはああいった相手なら、此処に居る誰よりも強いと確信を持って言える。俺が教えたからな！」
　トーマスは薫にそう言って、どこか優のことを自慢げに言っていた。
「お前、こんなときまで何言ってやがる……！」
「なら、姫和に舞草の隠れ里が襲撃されたとき、潜水艦に入ろうとして

いたＳＴＴ隊員を殺したことはどうなると聞いてこい！」
　トーマスの行いに薫は憤るものの、舞草の隠れ里が襲撃されたとき、潜水艦の近くに居たＳＴＴ隊員を殺したときに、姫和と薫は何故非難しなかったのか、それを咎めなかったのかと問い詰めていた。
「……だとしてもだ。あいつにもこれからの人生があるだろっ！お前にも息子の一人や二人がそんなこと続けていたら嫌だろっ！」
　薫にそう言われたトーマスは、少し考え込んだのか撃つ手を一瞬だが止めてしまう。だが、
「……今この状況を切り抜けるには、あいつの力は必要だ！」
「おい、待て！」
　そう短く答えて、トーマスは前へ進んで行った。
　薫はまだ話しは終わっていないと言わんばかりに、トーマスの後を追うかのように手を伸ばすが、届くことはなかった。
「……くそ!!」
　薫にどうしようもない無力感が襲ってくる。
　写シがどれぐらい銃弾に耐えられるかは分からないし、何発受けたか考えながら戦うことなんてしたことがない。正直、パブロフの犬のように反応し、銃声の音だけで驚く自信はある。
　だが、それで諦める薫ではなかった。
「どうするんだ薫？このままじゃ優がっ！」
　優を助けようともがく姫和。姫和をどうにか抑えている沙耶香を見て薫は一つの決断をする。
「……沙耶香、姫和頼むぞ。」
「薫？」
「なあ、姫和に沙耶香。この部隊の指揮官は俺だよな？」
「……薫？」
　妙なことを口走る薫に姫和と沙耶香は違和感を感じ、薫を見つめる。
「だったら、姫和も沙耶香も優も俺の部下だ。……お前らはそこで伏せてろ。お前らだけに手を汚させる訳に行かねえからな。」
　薫はそう微笑むと、敵の所へ飛び込んで行った。

「薫!!」
誰が叫んだのか、薫は分からなかったが、今度は銃声に臆することなく突き進んでいく。
（……少し、チビったかも……情けね。）
そう愚痴りながら、恐怖を抑えるため、猿叫をとにかく叫びつつ敵が居るであろう方向へ突き進む。このとき、集中放火を受けなかったのは幸運だった。
（……情けねぇけど、あいつばかりに背負わせるのはもっと情けねぇっ!!）
手が汚れるのは、指揮する隊長の自分だけで良い。そう納得しながら、誰かを斬ろうと覚悟を決めていた。部下だけにこんな汚れ役ばかりさせるのは、納得がいかない。
なら、一緒に背負ってやろう。一緒に地獄でも何でも付いて行こうと敵を倒そうとする。斬ろうとする。故に、たまたまマズルフラッシュが見え、それを頼りに近付くと敵らしき者を見かけ、斬り倒そうとするが、薫は躊躇ってしまう。
「――――????!!」
目の前に居たのが、どう見ても自分よりも幼く、それに不釣り合いな大きな銃を持つ子供だったからだ。
（……おい、何の冗談だよ!?……）
――――何の冗談だ？
――――何なんだこれは？
――――こんな現実が有って良いのか？
テロリストというのは、よくテレビに出てくるような若い男か髭面の強面のおっさんみたいな者達ばかりだと思っていた薫は、これには驚愕する他なかったうえ、動きを止めてしまった。刀使という存在も身も蓋も無いことを言えば、この幼い少年と似たような者なのかもしれないという一抹の不安を過らせるには、〝考えて斬る〟ことを信条とした薫にとって、充分過ぎる存在だったからだ。……まるで、刀使（少年兵）である自分を相手にしているかのような、優を相手にしているかのような錯覚にも陥ってしまい、ウサギの穴に落ちるかの如く、薫は吐き

気が催すような狂った感覚に囚われてしまった。
それを知らずに、動きを止めた薫を見た幼い子供は、それをチャンスだと見て取り、薫にフルオートの銃弾を浴びせる。だが、薫の運が良かったのか、はたまた幼い子供の運が無かったのか、薫は写シを張っていたうえ、途中で写シが切れることもなかったために致命傷にはならなかったものの、今ので写シを使い果たしてしまい、写シを再度張ることができなかった。
（……くそっ……。）
――――殺られる。
写シを使い切り、眼前の幼い子供は不釣り合いと思える程に、慣れた手付きで素早くリロードを終え、銃口を薫の目の前に突きつけようとする。そのため、薫は身動きが出来ない状態のため、死を覚悟する。
だが薫に、死が訪れることも、与えられることもなかった。
薫に銃口を向けようとする幼い子供は優に足、肩、頭部を撃たれ、止めに短刀の御刀で頚椎を刺し、一言も発することもなく、力を失ったかのように膝を崩し、倒れたからだ。
「……うっ……。」
そのため薫は、幼い少年という〝者〟が、ただの肉の塊という〝物〟に変わる瞬間を見せられるハメに遭うのであった。
「大丈夫？」
薫は、声がした方へと顔を向けると、先程自らと同じくらいであろう幼い子供を殺した子供とは思えないくらいに、銃を持ちながらいつも通りに尋ねてくる優が居た。
だが、薫には理解ができなかった。優は自分と同じくらいの年齢である幼い子供を撃ったというのに、何の疑問も抱かないのだろうか？
薫はそのことに苦悩し、自分の在り方に疑問を抱き、動きを止めてしまったというのに……。
「……お前こそ、大丈夫なのか？」
「何が？」
「だって、同じ齢の奴を撃って、何も思わねえのかよ。」
だから、薫は尋ねてしまった。

自分と同じ齢の人間を撃って、何も思わないのかと。そのため、優は薫の疑問に答える。

「だって、躊躇したら撃たれるし。」

殺される前に殺す。至ってシンプルな答えであった。そのシンプル過ぎる答えに薫は納得できなかった。

「……何だよ……それ、……相手は同じ人間だろ?」

そんな簡単に割り切れるのだろうか?

と、薫は口に出してしまう。

「そういえば、薫おねーちゃん。」

薫は優に呼ばれ、何事かと顔をそちらに向ける。

すると、次の瞬間、幼い子供だった〝物〟の足を御刀と八幡力で捥ぎ取ると、その腕を茂みの方に叩き付けていた。

「……は?……」

薫は気の抜けた声を出しながら、優が何をしているのか分からなかった。だが、次の瞬間、地面から歯のような刃が現れ、優が叩き付けた足に噛みついていた。

トラバサミが仕掛けられていたのだ。

「そこの茂みにも罠があるから気を付けて。」

「……おい、何で分かるんだ?」

薫は何事もなく千切った敵の足でトラバサミに噛みつかせる優に恐れを抱いたのか、声が上擦っていた。

「ヒメちゃんのお陰だよ。でも、全ては視えないけど、直前ならある程度は分かるから。」

罠が有る場所は、未来視としての能力(ちから)がある龍眼によって、罠が有る場所はある程度分かると言い、

「それと、あいつらが頭の中身出してるのに倒れないから気付いたんだけど、多分クスリで痛覚を鈍らせていると思うから、御刀で叩いても中々気絶しないのと、さっきみたいな奴もそうだけど自爆ベスト着けてる奴も居るから気を付けて。……それと罠のことも忘れずに姫和おねーちゃん達に伝えておいて。」

といったことを優は薫に言うと、さっさと次の標的を仕留めるべく

迅移で移動していた。
狂ってる――――。
薫はそう思う他なかった。つまり、姫和や沙耶香が峰打ちで殺さないよう気絶させようにも、敵は覚醒剤か何かの薬で痛覚を鈍らせているからあまり効果が望めないうえ、さっきの幼い少年は何処かで自爆しようとしていたということなのだろうか？それだけで、薫は身の毛がよだつような感覚がした。
「……はは……ハハハハ……」
乾いた笑いしか出なかった――――。
紗南や朱音、今は亡きロークや他の学長達なら、自分達が戦場（此処）に居ることに難色を示すのだろうが、優は反対もせず、居ることが当然かのように振舞う。そして、優はしれっと脳みそが出ている兵士を見たというのに、全く動じない心。それと、
（……そういや、腰に短刀の御刀を差しているんだったな。……そりゃ、迅移も使えるわ。）
八幡力や迅移といった刀使の力が使え、女子供だろうが一切の容赦もなく殺す事ができるうえ、〝使える部分〟を平気な顔をして使い、罠も龍眼によって見破れる。いや、それだけでなく龍眼によってあらゆる可能性を見通し、そこから最良の一手を選択出来るのだから、敵の動きも先読みでき、敵が移動したことも視えている筈、そこを狙って撃てば百発百中になるということだろう。そのうえ、半ば荒魂となっている優に近代兵器といった通常の武器に効果が有るのかどうか……。
『断るっ。あいつはああいった相手なら、此処に居る誰よりも強いと確信を持って言える。』
だから、トーマスは優を戦線から遠ざけることをしなかったのだろう。
「……くそっ、……何だよ！何なんだよ!!」
特撮ヒーロー物に憧れ、刀使となった薫は、何も出来ない無力感に苛まれ、地面に向けて拳を振るう。
（……何だよそれ……もう、どうすりゃ良いんだよ？……俺は、無

力だ……。）

薫は仰向けとなって力が抜けたように空を見ていた。

此処の空はよく見知った青く澄んだ色で美しいというメルヘンチックな感想を抱ける程の綺麗な空。

……今日はそんな綺麗な空なのに、周りの音は銃声ばかり聴こえ、火薬の匂いしかしないという世界、赤ずきんも狼に喰われるだけの結末しか迎えない狼が支配する国に居るような気さえした。

『お前には隊長として、チームを率い、群馬に行ってもらう。』

『いや、俺パスポート持ってないし。』

そんな冗談を言ったせいで、此処は外国となったのだろうか？

此処は確か、自分の生まれ育った国であり、食べ物が上手くて、荒魂被害とか無ければ銃乱射事件も無く平和な国だった……。なのに、今此処に居る者達は、過去の伝承を信じて戦う子供も混じって殺し合いをし、クスリで写シのように痛覚を鈍らせて痛みを軽減させながら、頭を壊して狂った獣のように戦う。

何時の間にか此処は、何もかも食いつぶす狼しか生き残れないような国になったような気さえする。

こんな場所になることを想定して、優を連れてきたのか。

やはり、トーマスというジジイは質（たち）が悪いと理解し、それと同時にある疑問が浮かぶ。

――ならば何故、自分達が同行することを許したのだろうか？

あのトーマスの性格なら、この戦場には刀使は邪魔であることは気付くはず。なのに、それを許した。

何か理由があるハズだ……。

優は、確かに刀使の力と龍眼を使え、人を殺すことに躊躇も無いうえ、半ば荒魂と化しているから、敵とトーマス達が持つ武器も効果が無い。正に無敵の存在とも言えるだろう。……だが、御刀なら斬れるという事実に思い至ったことから、薫はあることに気付く。

「……もしかして……俺達は!?……」

優を始末しなければならなくなった事態を想定して、俺や沙耶香、姫和を連れて来た。ということだろうか？

薫は、そう推論すると、トーマスに対し、沸々と怒りが混み上がって来たのであった。

非戦の国

江仁屋離島――――。

かつて、自衛隊離島奪還訓練の中でも日本国内で初の離島を使った大規模上陸訓練を行った場所にて、陸海空の三自衛隊による統合運用能力の強化と島嶼部の奪還の強化を主目的とした訓練が行われようとしていた。

そんな中でも、慌ただしい護衛艦の中で周辺諸国の海軍力の増強に対応するべく創設された陸上自衛隊水陸機動団所属の彼は、島嶼奪回任務に対する試験運用をするべく持ち出された高機動パワードスーツの感触を確かめながら、ある実験の開始まで、上の意向により外部との接触を断たされたうえで、護衛艦のある小部屋の中で待機していた。

だが、何故かは分からないが何一つ落ち着かないのだ。……いつも通り、訓練通りにやればこなせる内容なのだが、どうにもザワつくのだ。

「……。」

そんなザワつく精神を落ち着かせたいがためなのか、窓から見える碧い海を眺めることにした。そうすることで、楽しかった頃の記憶などを思い出し、心を落ち着かせようとした。

親と一緒に行った時と修学旅行で学友と共に海に泳いだ日々、長く辛かった訓練を信頼できる仲間と共に乗り越えた時間、そして父となった自分が家族と共に向かった海。

……それらを思い出しながら、精神を落ち着かせようとした。そう、実験に志願したのは高機動パワードスーツの性能試験によって得たデータを新型Ｓ装備に転用して性能向上を果たし、刀使となった娘に強化された新型Ｓ装備が渡るようになれば、娘の危害を減らすことができると思い志願したのだ。

――そうだ、何も悩む必要はない、彼はそう思い改めると、誰かがこの部屋に来ることに気付き、９名の同僚と共に一列で整列していた。

「……。」

彼の研ぎ澄まされた感は当たり、上官が部屋の扉を開けようとしていたために、上官の顔を見てから敬礼する。それを見た上官は答礼し、この部屋に居る水陸機動団の隊員達全員に指示をする。

「……実験は、１８：００時（ヒトハチマルマル）に開始の予定。」

「命令を受領、確認。」

……大丈夫、上手く行く。

信頼でき、強く頼もしい同僚達を横目で見つつ、この実験が成功したら、娘の仕事は楽になり、その成功した証を持って、人の親として家族の待つ家へ帰れることを夢見ていた……。

……だが、彼は知らない。高機動パワードスーツが箱根山戦時に使用された新型Ｓ装備の運用データを使って強化されていることを、この先に待ち構えているものを――。

過激派のテロリスト達は苦戦していた――。

その証拠に顔を少しだけ出して様子を伺おうとしていたテロリストの一人が、頭部を撃たれ、地面に倒れた時はピクリとも動かなくなってしまった。

いくら麻薬で興奮状態になって痛覚が鈍くなろうとも、脳幹を撃ち抜かれたら一撃で死亡するということを知らない過激派のテロリス

ト達は、仲間が一発の銃弾で死んだということに驚いたこともそうなのだが、銃弾が飛び交う戦場の中で顔を少し出しただけに過ぎないのに狙い済ましたかのように一発の銃弾で正確に頭部を当てたという事実の方に恐怖していた。……まるで未来予知か、それとも敵の実力がこちらの想定以上なのかと抱かせるほどであったがため、優と相対するハメに遭ってしまった過激派のテロリスト達はこんな考えが過ってしまった。

――――一体、敵はどんな奴なんだ?あんなふうに、自分達の行動を先読みしたかのように、当てにくい頭部を、いやそれだけでなく顔を少し出しただけの部分を狙い撃つ。本当に敵は人間なのか?

余りにも人間離れした銃の腕前に、過激派のテロリストの誰もがそんな考えを過らせてしまった。

敵に身体を少しでも晒してしまえば、その部分を撃たれるような気がしたこともあって、過激派のテロリストの男は息を荒げながら顔も出せず、身を低くし、身を縮こませていた状態から抜け出せなかった。

「〈悪魔……シャイターンめ!!死ねぇーーーーーーー!!〉」

その一方的な状況に頭に血が上ったのか、男の仲間は敵をイスラム教の悪魔か何かだと思ったのか、半狂乱になりながら、狙いもつけずに樹に体を隠しながら、銃だけ出してばら蒔くように撃つ。……だが、別の方向から、銃のグリップを握る手を撃たれたことにより、銃を落としてしまったうえ、指が突然無くなったことに男の仲間は更にパニックに陥る。

そうして、男の仲間は半狂乱となり、正常な判断を失ってしまったため、敵から姿を隠すことを忘れてしまい、痛みでもがき苦しみながら嘆く姿を優に晒してしまう。その敵の姿を見た優はクスリで痛覚を鈍らせていることを考慮し、一撃で仕留めるべく龍眼で敵の動きを予測しながら、放った銃弾で脳幹を撃ち抜く。脳幹を撃ち抜かれた男の仲間は倒れると、次の瞬間にはピクリとも動かなくなり、嘆き叫ぶこともなくなった。

「……。」

男はゴクリと唾を飲み込みながら、仲間が殺られる瞬間を二度も見

ることになってしまったが、敵が別の方向から撃ってきたという事実から、男は急いで今まで居た射撃位置を放棄し、傾斜面の中に入って行った。

だが、今まで撃ってきた方角から、全く別の方向から撃ってきたということは、想定以上の人数が居るか自衛隊の増援が来たのではと判断し、更に動揺する男は、ある確信を抱いてしまった。

敵は、未来予知をしているかの如く、こちらの行動を先読みして狙撃するうえ、想定以上の人数が居るかもしれないということから導かれる答えは、このままだと、全員殺られるだけという結果しか見えないという確信。

但し、過激派のテロリストの男は、優が未来予知できた理由がタギツヒメが持つ龍眼による異能の力のお陰であり、今まで撃ってきた方角から、全く別の方向から撃てたのは迅移による高速移動のお陰でしかなかったことに全く気付けなかった。そのため、この過激派のテロリストの男は想定以上の人数か自衛隊の援軍が来たと誤った判断をしてしまう。

「〈降伏するっ!!だから、いの――――〉」

自衛隊の増援が来たのなら降伏するのも手だと誤った判断をした男は銃を置き、両手を上げて降伏しようとするが、先にそのことに気付いた別の男の仲間が降伏の意思を伝えるべく両手を上げ、隠れるのを止めて姿を晒す。

……だが、降伏も許されないかのように、その男の仲間は両手を上げながら優に撃ち殺されてしまう。

……自衛隊に降伏してもああなるということは、どっちにしろ皆殺しにされる。

謝った判断を持ち、正常な判断が出来なくなりつつあった男は傾斜面の中から這い出て、残った仲間全員に声を掛け、やぶれかぶれの突撃をする合図を送り、優という悪魔を打ち倒そうとした。

しかし――――、

「〈えっ？〉」

何かがこちらに飛んで来たのだ。

何事かと思い、止まってしまう男とその仲間達だったが、次の瞬間、その何かが大きな音を出しながら爆発する。こちらに飛んで来た物は、自爆ベストを装着していた者だった胴体で、それを爆発物のように利用し、こちらに投げたということなのだろう。

だが、これで男は重傷を負い、仰向けになって苦痛に喘ぐしかなかった。それを見た男の仲間が救援のために近寄ろうとする途上で、右肩、足、頭を優に撃たれ、抵抗力を奪われると、飛び出て来た優に短刀の御刀で頸椎を刺されてしまい、男は救援に来てくれた仲間が殺されるところを見ることになってしまう。

その光景を見た別の男の仲間は雄叫びを上げて優に向けて銃を乱射するが、優が瞬間移動のように動いたことに驚いてしまい、優はその隙を突くように男の仲間に難なく近付くと足の大腿動脈、腹部を深く、そして流れるように斬り裂いたために男の仲間は膝をつくと、優との背丈の差が無くなったことにより止めに頸動脈を掻っ切られ、鮮血をまき散らしながら、血だまりを作ると男の仲間は失血死してしまう。

それだけでなく、残った仲間全員が先程の自爆ベストの爆発で重傷を負い、仰向けとなって苦痛に喘ぐ者、気絶したのか死んでしまったのかは不明だが、ピクリとも動かなくなった者ばかりとなっていたため、優は虫の息であろうと脅威であることは間違いないので、その脅威を排除すべく止めを刺そうとして近付く。

しかし、その中で気絶したふりをしていた過激派の男が優をナイフで刺し殺そうと襲い掛かるが、既に優は〝龍眼〟で気付いていたため、男が振り回すナイフを容易く躱しつつ、冷静にナイフを持つ方の腕の腱を斬り、敵のナイフを落とさせると同時に攻撃手段と防御手段の一つを失わせ、その次に足の大腿動脈を斬り、動きを鈍くさせると同時に足の力を弱らせると優は過激派の男を体当たりで倒し、その隙にＨＫ４１６Ｃを持つと、過激派の男の頭部をライフル弾で吹き飛ばして撃ち殺していた。

そうして、抵抗できる者を全て排除した優は、淡々と敵の銃を蹴飛ばし、反撃されることがないようにしてから、脇腹を蹴って反応をし

た者を次々と撃ち殺し、その光景を見ることしかできなかった男以外は全員皆殺しにしていた。

まるで地獄絵図だとしか思えない光景に男はこう思う。

――――この子供が、単独で俺達を容易く追い詰めたのだろうか？

――――この子供が、俺の仲間をあの凄腕の銃の腕で撃ち殺したのだろうか？

――――この子供が、俺の仲間を難なく胴体だけにして、爆弾代わりにしたのだろうか？

そう思いながら、この世界とただ淡々と作業のように過激派のテロリストの男の仲間達を撃ち殺している優に恐怖を抱くも、男は脇腹を蹴られたために声を上げて反応してしまい、その反応を見逃さなかった優に男は撃ち殺されてしまった。

こうして、優は自らを拉致して来た過激派のテロリストを始末し、群馬山中に居た過激派のテロリスト達は優とトーマス達によって殲滅されてしまう。

数分の後、敵を全て排除できたことを確認すると、トーマスは傭兵達を集めていた。

「……優、今回はよくやってくれた。お前のお陰で俺達に犠牲は出なかった。」

「……ヒメちゃんのお陰だからね……。」

トーマスは、優の働きによって犠牲が出なかったことを素直に称賛していた。

しかし、優はそれにタギツヒメのお陰であると返答していた。

「〈おいおい、トーマス。あいつらは？〉」

「〈あいつらは数に入れていない。海兵隊魂を持つお前らと違ってな。

あいつらが居なければ少し楽だったんだがな。〉」
　トーマスに雇われた傭兵は英語で姫和達を称えなくて良いのか？と尋ねるも、トーマスはどうでもいいと言わんばかりに英語で返答していた。
　海兵隊魂を持つ、つまり、彼等も本当は傭兵なのではなく、本来は休暇中となっている米国海兵隊のＭＡＲＳＯＣのメンバーである。
「〈しかし、よく育てたな？俺達より、数段当てるのが上手くないか？〉」
「〈ああ、一流のスナイパーになれる自慢の息子さ。しかし、今日は大漁だったな。〉」
　優のことを誉めるＭＡＲＳＯＣのメンバー達。それに気を良くしたのかトーマスはやや饒舌気味に語りながら、次はスナイパーライフルを与えるべきだろうかと考えつつ、ＭＡＲＳＯＣのメンバー達に自慢の息子であると答えていた。
「〈だけど、その自慢の息子にあんな罠の解除の仕方教えるのはダメだろ？後始末をしてくれる自衛隊に見せられないぞ！〉」
　しかし、ＭＡＲＳＯＣのメンバーの一人が、優の敵が仕掛けた罠の解除の仕方が敵の手足や頭を使って無理矢理解除していたのには難色を示していたのだ。理由としては、山道の茂みに手足や頭が生えている絵面は後から掃除に来る自衛官達に恐怖を与え、米軍に悪いイメージを与えてしまうからだが……。
「〈気にすんな。慣れさせろ。あいつの才能だ。〉」
「〈俺が言いたいのは！……もういい。〉」
　だが、尚もトーマスは自慢げに語ることに、ＭＡＲＳＯＣのメンバーの一人は辟易し、諦めた。
　……しかし、事件が起こる。
「……ねえ、薫おねーちゃんは？」
「薫と一緒じゃなかったのか？」
　薫が見当たらないという優の発言を聴いた姫和は敵陣に突撃した薫と一緒に居たと思っていたため、薫と一緒ではなかったのかと姫和は優に聞いていた。

「もしかしたら、まだ森の奥に居るのかも？薫を探さないと。」
「おまえら……一緒じゃなかったのか？」
薫が見当たらないという優の発言を聴いた沙耶香は、薫を探すべきだとトーマスに嘆願していた。
「〈……トーマス、探すべきだろ？〉」
「〈俺もそうするべきだと思う。〉」
「〈……くそ、一名行方不明だ。身長はこの刀使の中では一番のチビ一名、探しに行くぞ。〉」
そのため、沙耶香にイノシシから助けてもらったＭＡＲＳＯＣのメンバー達の嘆願もあって、トーマスは面倒くさそうにしつつも、今後の士気のために薫を探すべく山林の中へ入ることにする。
そのため、トーマスは敵が遺した罠を警戒してＭＡＲＳＯＣのメンバー達全員にのみ薫の捜索を指示する。だが、捜索する前に薫がひょっこり現れる。
「〈……いや、一名戻ってきた。〉」
薫が戻ってきたことに安堵し、ＭＡＲＳＯＣのメンバー達にそのことを知らせるトーマス。しかし、薫は突然、トーマスの顔を殴り倒していた。
唐突なことに驚く姫和達、そして、それにポカンとするＭＡＲＳＯＣのメンバー達。
「……お前、ふざんけんなよっ!!」
トーマスが自分達刀使をこの作戦に参加することに異議を唱えなかったのは、もしも優が制御不能になったときの保険として連れてきたのだと推測した薫は、自分達を都合良く利用しようとするトーマスに激怒し、掴み掛かったのだ。
「……いきなり何だ？」
「とぼけんな!!お前、俺達をここに留めた理由はそういう事だろっ!!」
怒りの感情に任せて、首元を掴む薫。
それを止めようとＭＡＲＳＯＣのメンバー達は抑えようとするが、八幡力の力で突き飛ばされ、抑えられなかった。
「止めなよ……。」

だが、薫はトーマスを殴ろうと振り上げた片手を優に掴まれる。
「……っ！……。」
薫は、こんなふうに利用されるだけ利用されて何も思わないのか？と、問い詰めたかったが、優にそれを教えることで苦しめたくなかったためか、薫は口を噤むことしかできなかった。
「……悪いが、薫。お前等は優をどうにかしたいから、そのために呼ばれたと思っているだろうが……ハズレだハズレ。」
そして、薫の言動で、優が暴走したときの保険のために刀使達が呼ばれたと、薫が推測したことに気付いたトーマスは、その推測は外れだと薫に伝える。
「……本当かよ。」
「ああ、直ぐにでも分かるさ。」
トーマスがそう言うと、相馬原駐屯地所属であろう陸自の隊員がこちらに近寄って来ていた。
それを見たトーマスは災いの元が来たと心の中で呟いていたが……。
「……ここの特別災害予想区域を担当する薫隊員でありますでしょうか!?」
「……ああ……。」
「刀剣類管理局及び防衛省からの通達です。至急、江仁屋離島に出現した荒魂を討伐されたしとのことです!!」
陸自の隊員に刀剣類管理局と防衛省からの新たな指令を言われた薫は、トーマスから手を離し、陸自の隊員に近付き説明を求めた。
江仁屋離島といえば、鹿児島県大島郡瀬戸内町に属する奄美群島にある無人島の筈と薫は長船女学園在籍時に覚えていた地理を思い出していた。
それなら遠い群馬に居る自分達より、最寄に居る長船女学園の刀使達に任せれば良いのではと思い、陸自の隊員にそのことについて尋ねてみた。
「ここから、江仁屋離島に行くのは車だと数日は掛かるぞ。どうするんだ？」

「既に相馬原飛行場にてＣＨ―４７Ｊヘリコプターが待機しており、入間基地へ移動後、Ｃ―１輸送機で奄美空港まで送り、奄美大島分屯基地にて詳細を伝えるとのことです。」
「そんな手間暇かけなくっても、近くに居る刀使達で対処できないのか？」
「この出現した荒魂は、薫隊員等でなければ対処は難しいと判断されまして、今から相馬原飛行場へ移動してもらいたいとのことです。群馬山中の特別災害予想区域は我々と最寄りの刀使が担当するということとなりました。」
全く、西へ東へ東奔西走させられる。とにかく休暇が欲しい……。
薫はそう思いながら、相馬原駐屯地所属の陸自の隊員等に後から来る刀使達のために群馬山中の現場の状況を伝え、その後は陸自の隊員が運転する７３式中型トラックに乗車、相馬原飛行場に到着後はＣＨ―４７Ｊヘリコプターで入間基地へ着くとＣ―１輸送機で奄美空港への移動中に薫はＣ―１輸送機の中でトーマスにこの作戦の意図を尋ねていた。
「……なあ、ジジイ。」
「うるせーなぁ、何だよ？」
「……ハズレだってんなら、話せんだろ？いい加減、この作戦の意図を説明しろ！」
薫はこの作戦にきな臭い何かを感じたこともあって、何か隠しているであろうトーマスに詰問するが、当のトーマスは涼しい顔をしてはぐらかすように答えていた。
「……作戦の意図？勧善懲悪ものの話のように、刀使が荒魂を討伐する作戦なだけだぜ？」
「んな訳あるかっ！今回の荒魂討伐に陸自のヘリやら空自の輸送機が直ぐさま動けるってどういうこっ!?」
通常、自衛隊の機体を動かすには手続きやら何やらで時間と手間が掛かるものなのだが、それもなく、まるで用意されていたかのように直ぐに動けたことに疑問を抱いた薫は、そのことについてトーマスに

詰問していた。
「……頭は冴えてるな。」
「ふざけてんのか？」
薫はトーマスの態度に苛ついた口調で言う。
「ケンカしてるの？」
その二人の様子を見ていた優は、薫とトーマスにそう尋ねる。
トーマスは先程、あの凶悪なテロリスト達を惨殺した子供とは思えない言葉に思わず吹き出しそうになるものの、それを堪えて優にケンカではないと返答する。
「……いや、違う。そんなもんじゃない。ただ、薫が珍しく熱心になって任務に励んでいるからそう見えるんだろうな。……なぁ？」
「おっ、おぉ。」
薫は返答に困りながら、そうだと答えていた。
「じゃあ、話を変える。ハズレってどういう意味だよ？俺は単純に真実が知りたいだけだ。」
「……直に分かる。この作戦がどんなものか、そして刀使の力が必要な理由もな。……そして、それを知った瞬間、お前はどうしようもなくなる。」
トーマスは含みの有る言い方をして、薫に作戦の全容を説明しないまま、奄美空港に到着後、高機動車で奄美大島分屯基地まで移動という乗り継ぎによる乗り継ぎ、更に作戦の全容を一つも教えようとしないトーマスに疑念を抱きながらも薫達は奄美大島分屯基地に移動していった。

「……全く……至れり尽くせりだな……。」

薫は、此処に来るまでにトラックやら輸送機やらの乗り継ぎによる乗り継ぎのことを愚痴りながらも、奄美大島分屯基地所属の航空自衛隊の隊員の案内のもと、とある一室に入室するよう促される。そのため、室内に入ると西田含む、勝田、古河、鏑木の四名が既に室内に居た。

「……あれ、沙耶香ちゃん。元気だった?」

「うん……。」

古河の気さくな声に反応し、沙耶香は返答すると、薫はこの四人組のことを知らないので、彼等は何者かと沙耶香に尋ねていた。

「沙耶香、知り合いか?」

「箱根山の荒魂掃討作戦で協力してくれた自衛官の人達。」

「……正確に言えば、お互いが持っている技術の交換を以って防衛省と刀剣類管理局の交流を深めるということで長期出向に来た自衛官達だな。」

沙耶香の説明を姫和は補足するかのように西田達の出自を薫にも解るように話していた。

そんななか、一人の男が入室して来た。

「統合幕僚監部運用部運用第二課長の三木一等陸佐であります。早速で申し訳ありませんが、江仁屋離島にて現れた荒魂について説明させて頂きます。」

如何にもエリート然とした自衛隊幹部という出で立ちで、仏頂面という表情の固さから、薫は心の中で姫和を更に堅物にして、面白みがなくなったような人物という印象を抱いた。

なお、統合幕僚監部運用部運用第二課長という役職は、陸海空自衛隊を一元化し、一括して指揮する部隊運用をすることを目的とした防衛省の特別の機関である統合幕僚監部内に存在する運用部（陸海空自衛隊の運用、統合訓練等を担当する。）の中でも部隊運用・災害派遣を担当する部署の一つである運用第二課は謂わば、統合幕僚監部の要とも言うべき機能を発揮する部署であり、当然のことながらその課長ポストは要職といえる。（まあ、そもそも幕僚監部に行ける者は防衛省内でもエリートの様なものだが。）

「尚、今回の討伐メンバーはトーマス氏が雇った傭兵と優少年のみの編成で江仁屋離島に現れた荒魂を討伐するということになっております。薫、姫和、沙耶香の三名の特祭隊隊員と西田二佐等は今回の討伐において奄美大島分屯基地にて後方支援をお願いします。」

三木は、優とＭＡＲＳＯＣのメンバー達のみの編制で、江仁屋離島に現れた荒魂を討伐すると説明していたが、三木の説明に納得がいかないのか、姫和が異議を唱えていた。

「正気ですか？今回の討伐対象は強力な荒魂だと私は聞いています。そんな相手に刀使としての経験が少ない優と荒魂相手に有効な装備を持てない傭兵達では殺されに行くようなものです。……なら、今回の件は私達刀使が主体となって行うべきであると進言します。」

姫和はそう言って、優から離れないようにしていた。……いや、離れたくなかった。

「……却下だ。この作戦に刀使の参加は認められていない。それに、荒魂化した水陸機動団の隊員等は銃といった武器を所持しており、極めて危険であること、戻って来た他の隊員も荒魂化する恐れもあることから、今回は刀使の作戦の参加を認められていない。」

三木は荒魂化した水陸機動団の隊員等が銃を持っていること、水陸機動団の他の隊員等も荒魂化するかもしれないという懸念から、今回の江仁屋離島にて現れた荒魂、いや荒魂化した水陸機動団の隊員を討伐する作戦に刀使の参加は認められていないと話す三木。

「ですが、先程の編制では荒魂討伐の経験の有る刀使が居ません。あらゆる事態を想定し、荒魂討伐の経験の有る刀使は参加させるべきで

す。」

「もういい、三木一佐殿。……江仁屋離島に現れた荒魂の詳細を少しは話すべきではないか?そうすりゃ、どういう状況かは少しぐらい解るだろう。」

姫和と三木の言い争いに割って入る形で、今回の荒魂がどんなのかを教えるべきだと言うトーマス。

その一方で、勝田はトーマスが日本語を流暢に話すことに驚いていたうえ、今回の作戦に指名されることがなかったので、どういった人物なのか知る由もなかった。

「……分かりました。今回、江仁屋離島にて現れた荒魂は陸上自衛隊水陸機動団所属の隊員１０名が荒魂化したものであるため、我々では対処できないと判断。刀剣類管理局に正式に依頼しました。ですが、水陸機動団所属の隊員の中に特祭隊隊員となった娘が居ることも考慮し、刀使の参加を見送りたいというのも、我々防衛省の考えの一つです。」

三木は、水陸機動団の隊員の中に特祭隊隊員になっている娘が居るということを伝え、荒魂化した水陸機動団の隊員を刀使が殺めることによって、その特祭隊隊員との間に不和が生じるのを避けたかったからという理由で今回の江仁屋離島の荒魂討伐作戦に刀使を参加させたくなかったと話す三木。しかし――――、

「……おい、何だ?つまり俺の部下だったら、その自衛隊員を殺して、その娘と個人的な問題が発生しても何も問題無いってことか?」

優であれば、特祭隊隊員になっている娘が居る自衛隊員を殺して、その特祭隊隊員との間に不和が生じても、何も問題無いかのように宣う三木の発言に薫は眉間にしわを寄せながら返答を詰め寄る。

「……ええ、それで貴女方が殺しをしなくて済みます。」

「それも言われなくて済むってことか……。」

荒魂化した自衛隊員とはいえ、元が自衛隊員であることには変わりないので自衛官殺しの汚名を自衛隊員と自衛官、それと刀使達に被ることなく済ませるための措置として、半ば荒魂と化した優が荒魂化した自衛隊員達を始末するのが適任であると三木は返答していた。

事実、三木よりも上位の権限を持つ者達が、今後優が国防上及び政治的に邪魔になった際、優とタギツヒメ討伐部隊を編制する時に志願者に困らないようにするための措置でもあった。

「……S装備のコンテナでなくても、ＬＣＡＣやヘリといった輸送手段が有ると思うのですが。それは使用できないのでしょうか?」

薫と三木の口論が熾烈を増す前に、西田は空挺降下やS装備のコンテナ以外の侵入方法で多数の自衛隊員や刀使達を江仁屋離島へ送り、討伐することで誰が討伐したのかを有耶無耶にすることができるのではないかと思い、ＬＣＡＣ（ＬＣＡＣ―1級エア・クッション型揚陸艇のこと。）やヘリといった輸送手段を三木に提案していた。

「……荒魂化した水陸機動団の隊員等は対空、対戦車装備を所持しており、荒魂化した人間が記憶を残し、言葉を話す個体が希にいることを考慮すれば、不用意に近付いたＬＣＡＣは海の藻屑となり、ヘリも撃墜される可能性が高い。それ故に、今作戦においてはヘリやＬＣＡＣの使用が制限され、S装備のコンテナと輸送機による空挺降下で目標の居る江仁屋離島に入るのが最適であると判断した。」

「……どのような装備を持っているのでしょうか?」

「……各隊員によって違うが、８９式小銃と5．５６ｍｍ機関銃、対人狙撃銃に８４ｍｍ無反動砲等を所持し、そのうえ隊員全員の身体能力は荒魂の力と高機動型パワードスーツのお陰で向上。並みの人間や刀使にとっては極めて危険な存在であると言え、被害を最小に抑えるべく優少年が適任であると判断された。」

西田は、何かを察したのか三木に更なる質問を続ける。

「では、もう少しお尋ねしてもよろしいでしょうか?本当に偶発的な要因によって荒魂化したのですか?」

「……西田二佐、何が訊きたいのかね?」

「では、江仁屋離島で陸海空の三自衛隊による統合運用力の強化と島嶼部の奪還の強化を主目的とした訓練が行われる前に隊員等の体調管理等を調べられていて、近年は人が荒魂化する事例が減っているというのに、その訓練中にたまたま水陸機動団の隊員１０名が一斉に荒魂化したということなのでしょうか?それと、薫隊員等を此処へ呼び

寄せる際、ヘリや輸送機を使ったそうですが……偶発的な事故が起こっているにも関わらず、よく用意できましたね？事前に用意していたようにしか思えないのですが。本当に偶発的に起こったのですか？」

「……報告によれば、偶発的に１０名の優秀な隊員が荒魂化したと聞き及んでいる。荒魂化した原因は不明だが、今も調査中だ。それとも、人為的に起こったことだと疑っているのか？」

三木の返答と歯切れの悪さ、それと目線を外したことに西田は気付いたが、こう答えるしかなかった。

「……選択肢は無い。ということですか……。」

「ええ、それ故に私よりも上の権限が彼を群馬に送ることに賛成したのです。」

なお、奄美大島分屯基地にあるＳ装備のコンテナはＵＡＶと衛星、各種兵器とのデータリンクを可能にし、情報共有によってＧＰＳと画像情報といった各種情報が得られるという状況であれば、Ｓ装備のコンテナは命中精度と射程の延伸がどれほど上昇するのかを実験するための物でもあるうえ、離島にて荒魂が出現した際の輸送手段としての改良点を探るための物でもある。その実験成果によっては、Ｓ装備コンテナの性能と搭乗員の安全性の向上、及び自衛隊のスタンド・オフ・ミサイルの早期の導入による敵基地攻撃能力の獲得の糧となるため、コンテナの推進力等が強化されてはいるが、流石に折神家が管理しているＳ装備は入手できなかったうえ、その掛かるＧと着弾の衝撃は常人と刀使が耐えられるものではなかった。

故に、半ば荒魂と化している優であれば耐えられるという前提で有人飛行の実験としても載せようとしていた。

つまり、優は何処へ向かおうと、莫大な力を持つ大荒魂を身に宿した利用できる〝物〟として扱われるのであった……。

それが、全ての答えだった――――。

夕闇の中、奄美大島分屯基地はS装備のコンテナを射出するべく慌ただしく動いていた。

奄美大島分屯基地に有るS装備のコンテナは優が入り江仁屋離島へ向かい、着弾の音で目標の水陸機動団の自衛隊員達を誘導したあと、MARSOCのメンバー達は空挺降下し、江仁屋離島に侵入。

ということとなったため、優はS装備のコンテナの前でHK416CとP938といった武器のメンテナンスをしながら待っていた……。

そんなふうに、優はS装備のコンテナの前で待っていたら、薫達が近付いて来た。

「おい、……もし嫌なら、今からでも遅くはねえ。拒否しても良いんだぜ？そんときゃ、真庭本部長と取り合ってでも辞めさせてもらうことからよ。」

薫は、優が江仁屋離島へ向かうという決定に納得はしていないのか、嫌なら拒否しても良いと言って、優と代わろうとしていた。

これで、無理と言ってくれたら、命令拒否でもなく、精神的な理由で作戦から外せると思って薫は聞いたのだ。だが、

「……別に良いよ。やらなきゃいけないことなんでしょ？」

優はそう言って、薫の申し出を断っていた。

理由は、姫和に接吻されてから、妙に気が立って頭痛がするのだ。

……そして、このイライラする感情から抜け出す方法を優は知っていた。

それは、他人が苦痛でもがいている姿を見れば、何故か頭痛の痛みと辛さが和らぐということ。つまり、優は荒魂化した人間を過激派のテロリスト達と同様に傷付けて苦しませることで自身の頭痛を和らげようとしたため、今回の荒魂討伐作戦にどうしても参加したかっ

た。
「……そんなことねえ、そんなことねえよ！嫌なら、嫌なら俺が代わりに行ってやる!!」
薫は、優の本心を知らずにそう言って、代わろうとしていた。
何もできないかもしれない。けど、立ち止まるのももっと嫌だったから……。
「……いいよ。だって、薫おねーちゃんが斬っちゃったら、ねねちゃん悲しむんじゃない？」
だが、薫のその言葉に何も感じなかった優は、若干面倒くさいなと思いながら、ねねを使って返答することで煙に巻こうとしていた。
「それは……お前も一緒だろ、それにお前はまだ未来がある。だから……。」
だが、薫は自身でも陳腐な言葉だと思っていた。……思っていたが、通じると信じて、必死に説得しようとする。
「……本当に薫おねーちゃんの言う〝未来〟があるの？」
しかし、優にそう返されると、言葉を詰まらせる薫。そして、
「それに、辛くないよ。ヒメちゃんや、みんなが居るから……。」
タギツヒメが、優の中に居る者達がいつも傍に居てくれると答えていた。その返答に、薫はタギツヒメと自分達が居るから戦えると言っているように聞こえ、何も言えなかった……。
実際は、優の中に居るタギツヒメや結芽といった優の中に居る者達のことなのだが、薫はそれに気付くことはなかった……。
「じゃあ、行って来るね。」
そう言って、優はS装備のコンテナへ向かって行き、それを見送る薫。
薫はそれを見届けると、踵を返し、奄美大島分屯基地へ戻って行った。
「薫、もういい。」
それを見た姫和は薫を止めようとする。
しかし、薫は止まらなかった。
「……よくねえよ。俺は見届けなきゃならねえ、……優は俺の部下だ

からな。」
　優一人だけ置いていくことなど、できなかったから。
「薫。……どう考えても私達は最初から利用されただけ、それだけじゃなく、優を便利な殺し屋ぐらいにしか思ってない。……こんな、こんな酷い作戦なんか私達で潰してやろうっ!!」
「私も協力する!!」
　それを聞いた沙耶香と姫和は、薫にこんな作戦なんかおじゃんにしようと持ち掛ける。
　任務に忠実な沙耶香ですらも、こんな非道なことなど認めることができなかったからだ。
「……俺は、俺は益子　薫で、刀使で、この隊を率いる隊長だ。考えて斬るのが信条だ。……なら、決まってるじゃねえか。」
　だが、薫は小声で呟くと、自身の決意を沙耶香に語る。
「沙耶香、俺はお前に考えて斬れと言ったが続きがあってな。……それはな、考えて、信じて、それが駄目だった時は誰よりも先にそいつの牙を受け、剣を向ける。それが益子なりのケジメだ。だから俺はこの任務を続けなきゃならねえ。俺は自分の部下がやったことを見届ける。誰よりもその責を受け止める必要がある。……だからこっからは……俺が行く。」
　薫は断固として、優がやることを見届け、そして最後は隊長として責を受けると言っていた。
　その薫の行動に、沙耶香と姫和は何一つ止める術を持っていなかった……。

「S装備コンテナ、到達目標地点江仁屋離島のポイントBに設定。」
「最新気象情報を入力、角度調整合わせ。」

「最終ブリーフィング。Ｓ装備のコンテナを射出し、着弾した音で目標を誘導後、先行している部隊はＣ―1にて空挺降下、西田二佐の情報支援を受けられる。また、Ｓ1は薫隊員等から情報支援を受けられることを留意せよ。」

奄美大島分屯基地の管制室から、三木一佐はＳ装備コンテナ射出前に優と話していた薫達を見ながら、三木はぼそりと呟いてしまった。

「……あの荒魂を子供扱いか……。それはそれで、辛い事だろうに。」

三木は、薫達を物憂げな目で見つめていた。ロバが旅に出て、馬になるということはないのと同様に、兵器として強化された優を子供扱いしたからといって子供になる訳ではないのだ。……むしろ、人を殺すことに特化した兵器をただの男の子として扱うのは彼にとってその扱いをされることは酷なことに変わりはないのだ。ならいっそのこと、彼を兵器として扱う方が幸福ではなかろうかと考えてしまう三木。

しかし、そんな彼も、水陸機動団の隊員等にノロのアンプルを注入することに対して否定的であったのだが、上層部の意向によって直前までその実験内容を知ることができず、力及ばず水陸機動団の優秀な隊員１０名を失うこととなってしまったことと、それらの一部だけの事実を刀使達に説明しなければならないということに苦悩すると共に、怒りが込み上げてきたのか、自然と拳を強く握ってしまう。

「エンジン点火、衝撃に備えて下さい。」

管制官が優に対して、発射の衝撃に備えるよう指示したところで、ハッとなると三木は優が入っているＳ装備のコンテナを見つめる。

そして、Ｓ装備のコンテナは発射され、狼煙を上げるかのように飛び立って行った。三木は、この光景を局長代理となった朱音は『私達の希望』と言えるだろうか?と不謹慎なことを考えてしまう。

むしろ、優が江仁屋離島へ降り立ったら、あの江仁屋離島と奄美大島分屯基地には、正規の軍人扱いされないまま何十年という月日が流れた自衛隊員と休暇中であり今は正規の軍人とは言えないＭＡＲＳＯＣのメンバー達、子供なのか大人なのか判別が付かないまま公務員

としての立場を与えられた刀使達、そして子供とも荒魂とも言えず、そのうえ刀使ではないのに刀使のように扱われ荒魂討伐をされる優が居る。

その奇妙な状況に三木は何とも言えない気持ちとなる。

（……何とも不思議な光景だ。江仁屋離島は今や、立場が曖昧な境界線上に立っている者達が集う戦場となってしまったな。いや、これからの戦争はこういった立場が曖昧な者達が活躍することとなるのだろうか。……だとすれば、軍隊とは言えない我々も……そういうことか？）

三木はそこまで考えると、思考の渦にはまり、深い思考の中へと入って行った。

（……所詮、俺達も島に向かって行った者達とあまり変わらないのだろう。……それと、江仁屋離島で起こる戦いは未来の戦争ということになるかもしれんが、決して彼らの活躍が表に出ることはないだろう。そして、俺達の立場も変わることになるだろうか？）

軍人と民間人の境界線が曖昧化し、その曖昧な境界線上に居る者が活躍する戦場が主流となってしまえば軍隊とも言えない自衛隊では、いずれ国内外から非合法な戦闘を主とする武装集団として認識されるのではと予想し、そうなれば軍隊として今も扱われずにいる自衛官と自衛隊員等は今後どうなるのか……。こういった戦場で活躍する非合法な集団として見られるだけではないだろうか？

……いや、もはや既存の〝平和〟と〝戦争〟の概念は崩れ去り、これからは有事であるか平時であるかの境界線が曖昧と化した新しい〝平和〟と〝戦争〟の在り方と新たな境界線を模索するであろうことは容易に想像が付く。そんな概念が一般化した世界で、そのような曖昧な境界線上に立つ武装集団を持つ国を他国が信用するであろうか？少なくとも私は信用しないだろうと三木は結論付けると、我々は今も戦後７０年以上も続く、既存の曖昧な境界線上に居る部隊として存続するべきなのだろうか？いや、このまま７０年も続く〝戦争〟と〝平和〟の考え方で良いのだろうか？

……最早、国同士の戦争は無くなり、静かに、そして静かな侵略と

サイバー戦争といった誰の目にも映らないような〝戦争〟が始まりつつあるというのにこのままで果たして良いのだろうか。

……いや、もう我々は武器や戦争を遠ざけることが平和になるという思想は放棄しなければならないのではないのだろうか？

江仁屋離島で戦っている戦士達と我々自衛隊が同様に見られる前に、決めなければならないことではないだろうか？と三木は思うのであった……。

軍隊の居ない戦場

中国、北京――――。

「公安部長。何故、あの男に重要人物を我が国に招待させることを手伝わせたのです？」

公安部長の部下は、汪に何故、重要人物（優のこと。）の拉致を手伝わせたのか尋ねていた。

我が国の国家安全部や人民解放軍の特殊部隊を使わずに、汪という民間企業の社長が、優を拉致し獲得する作戦に従事させるのは不可能に近いとしか思えなかったからである。

「……まあ、この場合は軍を送るのが、普通だと思うだろうな……。」

公安部長の意味深な言葉に部下はどういうことかと訝しむ。

「……もし、だ。もし、君が汪と同じ立場に立ったらどうする？」

公安部長にそう問われ、部下はどう答えるべきかと答えを探していた。

……確か、汪は元人民解放軍の兵士であった筈。その経歴を活かせば元人民解放軍兵士を集めることが出来ると推測すると、彼は答えを導かせたことができたと思ったのか、少し声を大きめにして答えた。

「私でしたら、旧知の者から元人民解放軍の兵士を集めてもらい、我が国とは関係の無い私設の武装集団を創設し、可能であれば重要人物の確保に努める。というところでしょうか？」

「……惜しいな。」

元人民解放軍の兵士である汪に、旧知の有る者から元人民解放軍の兵士を集めてもらい、その兵士達で重要人物の確保に努めるということだろうと部下は答えるものの、違ったようである。

「嘗ての汪は石油閥のエースとして活躍したことで中東の軍関係者と繋がりを持っている。その人脈を駆使し、我が国とは無縁の兵隊を集めて工作活動をしてもらう。という部分は君の推測と同じだ。」

だが、公安部長は部下の推測の当たっている処は当たっていると答え、

「……だが、君の言うとおりに我が国の軍人か元軍人を使って、我が国に招待してしまえば、他国から見れば只の拉致でしかない。そうなれば、我が国は人権問題で騒がれるのは目に見えているし、それを騒がれるのは喜ばしくない。……だからこそ、中東の軍関係者の人脈を持つ非主流派の汪を使ったのさ、彼の人脈で得た中東のテロリストを使って重要人物の確保に動いてもらうために。そうすることで、仮にこの重要人物の確保する作戦が失敗しても、テロリストの犯行だとして処理されることになる。そうなれば、あいつの過去を賛美したのは意味があるということだな。」

汪を北京の国務院に拘束していた際、汪の過去を賛美して下手に出ていたのは汪が中東の軍関係者を頼り、イスラム過激派に優の拉致をさせるように仕向けたと公安部長は語り、

「それにだ、例え汪の犯行だとバレたとしても、非主流派の汪に全ての責任を負わせて処分した後、テロ根絶を名目にした法整備、それと同時に反対勢力と異民族の〝矯正〟を堂々と行うということだ。……つまり、失敗したとしても、我々と国が責を問われることもなく、仮に成功したとしても、我が国が莫大なエネルギーを確保することができることには変わりない。」

そして、公安部長は成功しても失敗しても、現政権に何の実害を受けることがないということを答えていた。

「そのうえ、軍事オプションも無く、資源も無いうえ、中東の油に頼っている状況で、しかも日和見主義である日本が中東の国との間に国際問題にするとは思えんがな……。まあ、揉めてくれるなら、それはそれでありがたい。中東の対テロ戦争に巻き込まれ、国力を落とすことになれば、日本の重要人物の警護も弱くなるだろう。」

それにもし、日本が中東のテロリストと争うこととなれば、こちらの国力を落とすことなく、対テロ戦争で資金と人員を使い、国力を疲弊させることができると公安部長は言い、

「それに妙だと思わんか?彼は我が国にとっても重要だが、それは日

米も同じことのはず。……なのに、荒魂殲滅だけのために群馬に送るのは不可解なうえ、警備の人間が少ないところから、何かある筈だ。だから、失敗したときのことも考え、非主流派の汪を上は選んだ。」

つまり、公安部長は、過激派の者達が汪にとっての捨て駒であるなら、汪もまた公安部長等政府側の人間にとっての捨て駒でしかなかったと部下に教えていた。

「……それに、〝奴〟に対する意趣返しもできるしな。」

「奴、とは？」

公安部長は、部下の問いかけにそういえば彼は知らないことだったな。と思い出し、公安部長の言う〝奴〟のことについて話し始める。

「……そうだな、南アフリカで我が国の人民が数名海賊に拉致された事件があっただろう？我が国がアフリカの大地に中国人街を作り、そこから間接的にアフリカを侵略していくということを〝奴〟がどこで掴んだのかは今となっては分からんが、その海賊に拉致された人民数人がその工作活動を知らずに手伝ってくれていたのだが、武器と人を揃えていた海賊に拉致されてな。その後の事は君も知っているだろうが、我々は海賊に拉致された数名の人民を見つけることができず、我が国は海賊風情に身代金を払うことで解放してもらうことになり、我が国の名誉は穢されてしまったのだ。」

確か、南アフリカにある中国人街が海賊に襲撃され、警備兵の奮戦も空しく中国人街の住人は何名か海賊に殺害、拉致されてしまった。そのため、中国海軍は拉致された人民を捜索したが発見することができず、結局は、その海賊達に身代金を払うことで開放してもらった――。

という事件を覚えていた公安部長の部下は何を言いたいのかと思いつつ、次の言葉を待っていた。

「もし、もしもだ。……その海賊が資金と中国製の武器に弾薬、そして中国人街の内部の状況を提供している者が自衛隊か米軍内に居たとしたら、どう思うかね？」

「……！それは、つまり!?」

「そう、スパイ活動拠点として使う予定であった中国人街の拡大を阻

止することで我々の領土拡大を挫き、尚且つ自らの手を汚すこともないというやり方だ。……もし、この事件が国内に漏れていたらどうなると思う？」

公安部長の話しを聴いていた部下は寒気を感じた。

我が国の方針は、１４億以上も国内に居る人民をどうにか国外に住まわせることで国内に居る人民を減らすと同時に国内問題であるエネルギー需要と食糧問題を他国を使って解決しようとしていたうえ、国防動員法と国家情報法で我が国に協力してもらうというものである。

……それなのに、中国製の武器と弾薬が中国人民に向けられたにも関わらず、中国の軍と現政権は何もできなかったというだけでも、我が国の人民は国外に出てアフリカや中東にある中国人街の拡大を協力してくれるだろうか？いや、下手すれば国外に移住した人民が国内に帰りたいという声が大きくなり、戻ってくることになってしまえば我が国が恐れていたエネルギー需要とその人数分を賄う食糧をどうやって確保するのか？という問題が再燃する危険性がある。

そのうえ、中国製の武器と弾薬が海賊に使われていたこととそれらの武器が人民に向けられたということが国内外に問題視されれば、アフリカや中東といった国々に中国製の武器を売るのが難しくなるうえ、売ることが難しくなればアフリカや中東の国々に対して政治的影響力を損なう恐れがあり、無理にでも売ろうとすれば海賊に襲われた人民の遺族や被害者が敵国や反主流派に利用されるかもしれない。それに、ロシアのＡＫ―４７といったライセンス料に対する問題も再燃する恐れもあった。

つまり、中国製の武器弾薬が中国人民に対して使われたことが問題視されるだけで国内外に対して、これ程のダメージを受けるのだ。寒気の一つや二つは感じるのも当然だ。

「……中国海軍が拉致された人民を見つけ出すことができれば良かったのだが、それも叶わなかった以上、大事にする訳にもいかなかった。……結果、自衛隊や米軍がやったということを立証できぬまま、中国海軍の増強をするということが決まったということさ。」

「中国海軍が強ければ、こうはならなかったでしょうに……。」
公安部長とその部下は、昔のことを嘆いていた。
しかし、拉致された人民を見つけ出したとしても、中国海軍の探査能力といった実力を他国に知られること、中国軍がアフリカの民族との間に血みどろの抗争の幕が上がり、それが元で戦線に苛烈さが増し、アフリカで大虐殺やアウシュヴィッツの二の舞が起これば国内外から非難される可能性が有るということを考慮すれば、それが正しかったかどうかは不明ではあるが……。
「つまりだ、もし、これからの戦争が『超限戦』のように制約も制限もなく戦うことになれば、テロリストも国家戦略の重要な柱の一つとなる可能性が有ることを重々承知しておいてくれ。」
「……承知致しました。」
公安部長の言葉に、部下は重くのしかかる物を感じながら、我々大人と子供は次の時代、次の世代に何を遺すのだろうか?と危惧していた……。

奄美大島分屯基地――。
「……。」
薫は黙ったまま、一人で奄美大島分屯基地の管制室へ入室していた。それを見た三木は、何故一人だけなのかと尋ねていた。
「……姫和隊員と沙耶香隊員はどうしましたか?」
「俺一人だけで良い。優一人のためだけに、アドバイスのためにそんなに要らねえ。却って通信が混線する可能性が有る。」
薫は自分一人で良いと言うが、本音は姫和と沙耶香の二名に優が〝人殺し〟を行うところを見せないようにするために、薫は隊長として

一人で背負おうとしていた。
今から、優がやることの全てを……。
それを察した三木は、それ以上は何も言わず、その判断を認めることにした。
「……分かりました。それでお願いします。ＵＡＶからの映像を見つつ援護して上げて下さい。」
薫は三木にそう言われると、江仁屋離島上空の映像が映っている機器の前にある椅子に座り、優とＭＡＲＳＯＣのメンバー達が荒魂化した自衛隊員達と戦うこととなる江仁屋離島での戦いの状況を見ながら、優に無線機越しにアドバイスしようとしていた……。

奄美大島分屯基地に保有されている推進力等を強化されたＳ装備のコンテナは砂埃と爆音を上げながら着弾し、優を江仁屋離島に無事に届けていた。
しかし、優は４カ月前の石廊崎での戦いで既に重傷を負っており、その重傷箇所は荒魂化して無理矢理治すということをしていた。そのため、自身の内臓をある程度は荒魂化して身体を強化しているので急激な加速によるＧ（加速度）に耐えられていた。
なお、そのときの優はミサイルのＧは凄いなぁ、と思っていたとか。
――――しかし、身体の一部を荒魂化してしまえば、場合によっては他の身体の部分を荒魂化する必要性が生ずることとなるので、いずれは身体の荒魂化を止めることが出来なくなることとなるリスクは常に孕んでいる――――。
『薫おねーちゃん、到着したよ。』

Ｓ装備のコンテナの中に入って江仁屋離島に到着した優は、Ｓ装備のコンテナから這い出ると薫達が居る奄美大島分屯基地への通信が確保できているかの確認も兼ねて通信連絡していた。

「おう、よく聞こえてる。」

奄美大島分屯基地からの通信状況は良好なようであり、通信機越しの優の声はよく聴こえていた。そのうえ、先行していたＵＡＶのお陰で江仁屋離島に着き、荒魂化した自衛隊員達への準備をしていた優を鮮明に映していた。

「……こっちも、上空からお前を見てるから、何か分からないことがあれば聞いてくれ。」

薫はそう言って、ＵＡＶに搭載されているカメラが捉えた優の姿を見つつ、上空から援護すると優に伝えていた。

……そう、この後数分ぐらいに江仁屋離島で優は１０名もの荒魂化した自衛隊員を相手取るのだ。なのに、荒魂討伐を生業としている自分は江仁屋離島から約５７Ｋｍほど離れた奄美大島分屯基地のクーラーの効いた快適な部屋である管制室内でＵＡＶから送られてくる映像を見ながら指示を下すだけ……、それだけなのだ。

……それだけなのに、虚しさを感じる。……自分は戦闘狂ではないのに。

かつては一線級の刀使であった紗南学長もこんな思いをして刀使達を、いやどんな気持ちで自分の生徒達を送って見ていたのだろうか？

薫は、紗南学長のことを思い出しながら、江仁屋離島に居る優の姿を見つめつつ、そういった感情を抱かずにはいれなかった。

『……分かった。』

しかし、思い悩む薫とは対称的に優は通信機越しから短くそう答えていた。

薫は江仁屋離島上空から映る優の様相を見て、優は何故こんな扱いを強いられているのに文句の一つも出ないのだろうか？モルモット

のねずみより悪い待遇なのに彼は辛くないのだろうか？彼は何故立ち向かえるのだろうか？

江仁屋離島上空から映る優の姿を薫は胸が締め付けられる思いで見ていた。いや、この江仁屋離島という戦場から遠く離れた奄美大島分屯基地のクーラーの効いた快適な部屋という安全圏の中で見ていたというのが正確であろうか？と薫は自嘲し始める。

「……。」

しかし、不気味な警報の音に反応し、現実に戻った薫は何事かと思い、確認すると高機動パワードスーツのＧＰＳ反応がＳ装備のコンテナ方面へと向かっているということから、荒魂化した自衛隊員達は優の体内に有る膨大なノロに引き寄せられて来ているということなのだろうか。

だとすれば、優はこの後の人生も荒魂に追われ続けるということになるという不憫な人生を歩まされるのだろうか……。

「気を付けろ。ＧＰＳ反応がお前のところに近付いて来ているから多分……江仁屋離島に現れた荒魂がそろそろ来る。」

優を不憫に思ったせいか、薫は荒魂化した自衛隊員を江仁屋離島に現れたただの荒魂と言って、無意識に人を荒魂扱いしていた。

……その事実に、優に人殺しという罪を犯しているという意識を持たせないためか？それとも、自身が人殺しに加担しているという事実から逃れようとする愚かな偽善者だからか？と薫は思い悩む。

『うん、分かった。』

そんな痛ましい優と自衛隊員達を見ると、胸が締め付けられる思いを抱いてしまう。

彼は、例え荒魂化した自衛隊員を討伐したとしても、化け物扱いは変わらない。そして、自衛隊員達は救われない。

だが、何時までもそのことについて考えていても仕方がないので、薫は気持ちを切り替えて、ＵＡＶから送られてくる江仁屋離島上空の映像を見て、優を援護しようとしていたが、優は隠れるところが多く、小銃等を持っている荒魂化した自衛隊員達のことを考え接敵距離が短くなる森林の中へ入って、銃や対戦車兵器を出来る限り、その攻撃

を受けないようにしているようであった。
そうすることで、銃を持っている荒魂相手に容易く接近し、懐に入り荒魂相手に最も効果の有る御刀で一気に討伐しようとしていたのだろう。
それ故に、優が今装備している武器はライフル銃のＨＫ４１６Ｃでもなく、群馬で使っていた短刀の御刀でもない。……ニッカリ青江を持っていた。
だが、荒魂化した自衛隊員達は銃を持っている。そのため、優は半ば荒魂化したとはいえ、生身の部分は有るので、その部分を撃たれないようにすべく、接近戦に持ち込む必要があった。
そのため、優は森林の中にあった窪地の上面を隠世から引き出した偽装ネットで窪んだ部分を覆い隠して、その覆い隠した中に入って隠れているようであった。そうすることによって、優の中に居るタギツヒメの気配に釣られ、不用意に近付いてしまった標的の自衛隊員達の視界を発煙手榴弾の煙で隠し、その煙で隠した自衛隊員達を討伐。その後、残った自衛隊員達はＭＡＲＳＯＣのメンバー達による銃撃と護衛艦による砲撃で陽動し、その隙に優が標的の自衛隊員達の側面や背後を襲って、荒魂化した自衛隊員達を殲滅するということであったことを薫は思い出していた。
そうすることで、敵の視界を奪いつつ、荒魂を討伐しようとしていた。
尚、優が先に見つかってしまった場合は護衛艦の砲撃の音で誘導している隙に優が荒魂化した自衛隊員達を討伐することとなっていた。
そのため、優は偽装ネットで隠した窪地の中に隠れ、潜んでいた。
徐々に、敵の足音、そして苦痛を訴えているかのような呻き声から、荒魂化した自衛隊員達がこちらに近付いていることがわかった。
「……優、こっちに近付いている荒魂化した自衛隊員達が見えたが、辺りを見回しているところからこっちの正確な位置は分からないんだろう。」
江仁屋離島上空に居るＵＡＶが荒魂化した自衛隊員達を捉えると、送られてくる映像から標的の自衛隊員達は優の中に居るタギツヒメ

の気配は感じているものの、優の居る正確な場所が分からないだろう。銃を上に向けたり下に向けたりしながら索敵していた。

そのため、奇襲による殲滅は可能であるだろうと判断した薫は、荒魂化した自衛隊員達が近付くまで待っていた。

「……今だ。」

薫は優に荒魂化した自衛隊員達が近くに居て、発煙手榴弾を使うタイミングであると小さな声で告げていた。

その言葉に優は疑うことなく発煙手榴弾のピンを外し、偽装ネットを少しだけ開けて、その部分に挿し込んで、自身が隠れている窪地の外に煙を巻くようにしていた。

突然、視界が煙で覆われ始めた自衛隊員達は、大いに動揺したのか優の通信機越しから聴こえる自衛隊員等の呻き声は大きくなった。このことから、幾ら身体能力をノロで強化されても、精神面を強化することはできず、それどころか荒魂に対する拒否反応で思考能力は弱くなったのだろう……。

優はそう判断したのか、隠れていた窪地から躍り出ると、ニッカリ青江で標的の自衛隊員に近付き、斬り裂くと先ずは一人を討伐できたと優は思っていた。

だが、次の瞬間、優も薫も驚愕の表情を浮かべる。

何故なら、優が先ほど標的の自衛隊員を斬り裂き、その刀傷から〝蝶型の荒魂〟が這い出るかのように出て来たからだ――――。

制限の無い戦い

江仁屋離島、数時間前――――。

「これより、高機動型パワードスーツの連続野外試験を開始する。」

護衛艦の作戦指揮所から、高機動型パワードスーツの試験の開始を宣言し、水陸機動団の自衛隊員１０名はＣＲＲＣ（戦闘強襲偵察用舟艇。最近の上陸訓練に使われるラバー製のボート。）を使って、江仁屋離島へと向かって行った。

表向きは、江仁屋離島の海岸上にて行う、統合運用力の強化と島嶼部の奪還の強化を目的とした訓練内に予定されていた試験項目、高機動型パワードスーツの野外での評価試験となっているが、実際には真希や寿々花のように半ば荒魂化した自衛隊員達を中心に行う人体実験が主であった。

その証拠に、高機動型パワードスーツを身に纏い、試験に参加した自衛隊員達は皆、鎌府の研究データから得たノロのアンプルもどきを強化薬と言われ、服用していた。

……つまり、作戦会議前の西田の懸念通り、防衛省の上層部は鎌府の研究所から得た資料を元にノロのアンプルもどきを使って、水陸機動団の隊員１０名を強化し、島嶼部奪還の能力を底上げしようとしていた。

強化した理由は、刀使の力を得るのではなく、皐月　夜見が有していた自身の体内から小型の荒魂を出すという能力を得るために、強化されたのである。

もし、自衛隊員に皐月　夜見と同様の能力を付与させることができたとすれば、放った小型の荒魂を偵察と観測に利用できるうえ、放った荒魂を敵部隊に付け、その荒魂の反応を元に砲撃支援を行うことができれば、こちらの姿を晒すこともなく一方的に敵部隊を殲滅することが可能となるため、自衛隊の防衛力は飛躍的に向上することとな

る。

　そのうえ、それらの能力は逆上陸作戦の遂行、並びに島嶼部の奪還にも応用が効き、グレーゾーン事態といった新たな脅威に対応が可能となるかもしれないため、今回の江仁屋離島にて行う訓練に参加している水陸機動団の隊員１０名に投与されることとなった。

　それに、このまま荒魂事件が増加すれば、荒魂化した人間がいずれは現れるであろうことを考慮し、それらへの対処法の構築。及び、ノロをどれほどの量で投与すれば身体能力が強化されるのか？どれほどの量を投与すれば人は荒魂化するのか？といった人体への影響を探るための実験でもあった……。

　この人体実験が行えた理由は、体内にあるノロを除去する研究が進んでいること、大荒魂の一部であるタギツヒメを９歳の子供が身に宿すことができたという例があるからであり、もし、失敗して、隊員達の制御が不能となった場合は、市ヶ谷に居る『姫』が人型の荒魂であることを考慮して、人体への暗殺の勘を鈍らせることが無いよう経験を積ませるために荒魂化した自衛隊員達は優に始末してもらう必要があったのだ。

　故に、彼は群馬に居ても、ヘリや輸送機やらが用意されており、直ぐにでも江仁屋離島へ向かえたのである。

「各隊員の状況を報せ。」

「総員、問題無し。」

　一方、護衛艦の作戦指揮所から、後の参事をまだ知ることができない評価技官はノロのアンプルもどきで強化した隊員達の様子に異常が無いかモニター越しに確認していた部下達に訊き、今のところ問題が無いことに、少しだが安堵していた。

「各隊員に、ノロのアンプルの濃度を変えたことは？」

「……伝えていません。そういうご指示でしたので。」

　しかし、手術衣を着ている技術研究主任は何事もないかのように、評価技官にノロのアンプルの濃度を変えたことを水陸機動団の隊員１０名に喋っていないかを尋ねていた。その物言いに評価技官は少し憤りを感じていたのか、若干苛立ちながら、そういう指示が技術研

究主任から有ったから伝えていないと吐き捨てるように述べていた。
「……結構です。じゃあ、とっとと始めて下さい。」
「はっ。……高機動型パワードスーツ評価試験部隊、状況を開始せよ。」
だが、技術研究主任は興味がないのか、はたまた気にしていないのかは不明だが、始めろと言うだけ言って、モニターに映るノロのアンプルを投与された自衛隊員達を視ていた。そのことに、評価技官は訝しむものの仕事に取り掛かるべきだと気持ちを切り替えて、モニターに注目していた。
こうして、実験は開始される。
「さあて、ここから３６時間。」
そう、技術研究主任の言うとおり、今から３６時間も続く地獄のような耐久試験が始まるのだ。
そうして、一時間ほどで水陸機動団の隊員の内一名に異変は起こった。急に、地面に倒れ込んだのだ。
「一名、転倒。意識は失っている模様。」
「救護班を出せ。」
「…救護班、転倒した一名の回収に向かえ。」
モニターで水陸機動団の隊員の様子を伺っていた評価技官の部下は、水陸機動団の隊員が突然倒れ、立ち上がろうとしないところから気を失っていると判断。次の指示を仰いでいた。そのため、評価技官は、その倒れた隊員に救護班を送るよう部下に指示していた。
「……はぁー、まだ１００分ぐらいだぞ。」
「やはり、あのアンプルはまだ使うべきではなかったんです。人間にはまだ早すぎるんです。」
ノロのアンプルで強化しても、一時間ぐらいしか持たなかったことに、ため息を吐き、愚痴りながら言う技術研究主任。しかし、その一方で評価技官はノロのアンプルもどきを入れた自衛隊員達に何か異変が起こる前に、現在行われている実験を中止すべきだと技術研究主任に進言していた。
「たった一人の落伍者のために、全てを放棄してしまえば我々は今も

類人猿のままですよ?それに、この実験の有用性を忘れないで頂きたいですな?」

だが、この技術研究主任はどうやらマッドサイエンティストな部分が有るらしく、評価技官の実験の中止の呼びかけを無視して、続けるように命令していた。。

この実験は、我が国が軍事的な優位を今も保つために行っているのだと含みを持たせながら……。

「……転倒した隊員をそのまま救護し、残りの隊員等で実験を継続する。」

「「りょ、了解。」」

技術研究主任と評価技官の言い争いに戸惑いながらも、評価技官の部下達はその指示に従い、残りの隊員達に指示を飛ばしていた。

しかし、その数分後に転倒した自衛隊員の救護に向かった救護班から、緊急通信が送られる。

『緊急報告。緊急報告!我、荒魂化した隊員と遭遇。装備からして、恐らくは実験に志願した隊員であると推察。他の隊員も同様の兆候に有ると見られる。繰り返す。装備からして、恐らくは実験に志願した隊員であると推察。他の隊員も同様の兆候に有ると見られる。』

先ほど、転倒した水陸機動団の隊員が荒魂化した姿を見たとの報告であった。

「救護班は直ぐに離脱するよう指示しろ。それと、演習に問題発生したため、訓練の中止と参加している全隊員の離脱許可を三木一等陸佐に求めろ。」

「ウーム。……できれば荒魂化した隊員を一人ぐらい連れて帰りたいのですが?評価技官殿?」

そのため、評価技官は直ぐに救護班の離脱と江仁屋離島での訓練の中止を三木一等陸佐に求めるよう部下に指示する。

だが、この技術研究主任は、サンプルとして荒魂化した自衛隊員を一人ぐらいは連れて帰って実験したいと宣っていた。

「……気にするな。続けろ!」

しかし、流石の評価技官も技術研究主任の態度に怒ったのか、部下

に離脱許可と訓練の中止を求めるよう強く指示していた。
「し、試験評価部隊から本部へ。救護班が実験に志願した自衛隊員が荒魂化したところを目撃した模様。訓練に参加している全隊員の離脱許可と訓練の継続を考慮されたし。至急、至急願います。」
評価技官の部下もそれに応え、本部に訓練の中止と訓練に参加した全隊員の離脱許可を具申していた。
「どうするつもりです?この事態の責任を?」
「……そうは言われましても、私はただの技術研究主任ですので、そう命令されればせざる負えないでしょう?それに、〝保険〟は掛けられていますよ。」
「……その〝保険〟とは何です?」
「まあ、証拠隠滅には適任の人材です。」
つまり、この実験が企画された段階で、既に優が荒魂化した自衛隊員達を始末することは決まっていた――。

目標の自衛隊員達の身体の中から、いや正確に言えば生み出したというべきであろうかと迷う薫。
何故なら、彼女は荒魂を生み出す刀使との対戦経験が有り、今の現象は夜見が行っていたこととそっくりだからである。
「おい、どういうこった?」
「どうとは?」
薫は、三木に何故、自衛隊員が蝶型の荒魂を作ったのか。いや、生み出せたのかを詰問していた。
「似たような奴と戦ったことがあってな。そいつと同じ力だとしか思えねぇんだよ。」
「……それはどのような方でしょうか?」

尚も、はぐらかそうとする三木に薫は苛つきながら答える。
「……そいつと同じで自衛隊員達が荒魂を生み出しているように見えたんだが？どういうこった？」
争い合ったとはいえ、刀剣類管理局所属の刀使である自身の口から、夜見のことを話すべきではないだろうと判断した薫は、夜見の名を伏せながら三木に再度詰問していた。
「……さて、私には何の話か理解できませんね。」
そのため、三木は優が江仁屋離島へと来させた真の理由を薫に何も教えずに済んだ。
しかし、映像を見る限り、流石の優も蝶型の荒魂を出した自衛隊員達から距離を取ろうとしていた。だが、優は銃声の音を聞くやいなや、撃たれるならばと優は蝶型の荒魂の群れの中に入って行った。蝶型の荒魂の群れが銃弾に対しての盾として利用できると判断したからだ。
「優！大丈夫か!?……くそ、俺だったら。」
優が蝶型の荒魂の群れの中に呑まれたと思った薫は、優の無事を祈りながら通信機に叫んでいた。
しかし、優は冷静に、隠世から柄を長くして長巻のように改造された鬼丸国綱を引き出して、それを振り回して蝶型の荒魂を薙ぎ払うと同時にノロに戻し、そのノロを吸収していった。
「〈Ｍ１からＭ５へ、Ｓ１が攻撃を受けている。支援攻撃を開始。〉」
『〈了解。〉』
西田は、薫の優を呼ぶ叫びで、優が危機に陥ったと判断。ＭＡＲＩＮＥ（海兵）の頭文字Ｍから取ってＭ１からＭ５と呼ばれているＭＡＲＳＯＣのメンバー達に優を支援するべく荒魂化した自衛隊員達に攻撃をするよう指示していた。
「西田二佐！今、彼等を動かすのは危険だ。」
荒魂に対して無力に等しいＭＡＲＳＯＣのメンバー達を今動かすことは、荒魂化した自衛隊員達に対して姿を晒すことと同じであるとして、三木は西田に指示を却下するように述べる。
「……三木一佐。自分は今回の実験の是非については問いません。た

だ、今回のことで危険に晒された事実については御考慮頂きたい。最前線で戦う者は皆、後方に居る者達が〝駒〟としてではなく、〝人間〟として扱ってくれている。そう信じられる時、初めて全力を懸けて戦うことができると部下に教えてまいりました。……それに、今動かすことが危険だと承知であるならば、彼等を江仁屋離島に送るべきではなかったはずだ。」

『〈三木一佐、我々は構わない。……この通信は残して、米軍に送っておいてくれ。〉』

しかし、ＭＡＲＳＯＣのメンバーの一人が無線機越しに英語で三木にそう言うと、ダネルＭＧＬの発煙弾で優の周りに煙幕を発生させていた。

なお、この事件の後にＭＡＲＳＯＣのメンバー達に訊いて分かったことだが、ここで動かなければ、何のために海兵隊の誓いを宣誓したのか、あの地獄のような訓練とハートマン軍曹のような教官からのシゴキを乗り越えて、海兵隊の特殊部隊ＭＡＲＳＯＣの一員となったのか、分からなくなってしまうからだ……。故に、彼等は西田の指示に従い。外交上の問題が遺らないよう三木には、この通信を証拠として、日本は米軍を捨て駒にはしていないと伝えてほしいと述べていた。

急に煙幕が発生したことにパニックしたのか、銃を乱射し、弾切れを起こしてもリロードをせず、トリガーを引き続ける荒魂化した自衛隊員達。

それを見て、チャンスと見て取った優は嗤いながら、荒魂化した自衛隊員達に近付く。

これで、理由が無い頭痛から解放される――――。これで、理由の無い苦痛から解放される――――。

と思いながら……。

しかし、このとき優の顔は荒魂のパーカーのフードを被って、そのうえでスポーツマスクとグレー系のゴーグルで隠していることもあり、優の表情が歪に歪んで、嗤っていることに誰も気付かなかったことは幸いであったかもしれない。

薫と西田等自衛官達に更なる苦痛を与える結果にならなかったのだから……。

煙幕の中に居て、視界が効かない優は荒魂の気配を頼りに目標の自衛隊員一名に近付くことに成功すると、自衛隊員の胴体を両断していた。

銀製品を自然落下の惰力だけでサックリ斬り落とすという逸話を持つほどの異常な切れ味を持つ鬼丸国綱だから為せることなのだが、そんなこと知りもしない優は、鬼丸国綱を長巻のように改造してくれたことに今日感謝していた。

何故なら、薫の発言から、

『似たような奴と戦ったことがあってな。そいつと同じ力だとしか思えねぇんだよ。』

と言っていたので、推測ではあるが薫は少なくとも荒魂化した自衛隊員達とよく似た存在と戦闘しているにも関わらず、今も生存していることから少なくとも勝利していること。

『優!大丈夫か!?……くそ、俺だったら。』

それと、薫自身が荒魂化した自衛隊員達を相手にしていれば勝てたかのような発言から、少なくとも勝てるという自身があるということ。

それらの薫の発言から、薫は他の刀使とは違う〝何か〟で蝶型の荒魂の群れを対処できるということである。ならば、薫と他の刀使、薫は姫和と沙耶香のどこが違うのか?と優は間違い探しのように考えてみたのだ。すると、姫和と沙耶香は祢々切丸という自身の身長よりも長い刀身の大太刀を使わないうえ、第五段階の八幡力を習得していないという違いが有るということに気付き、そこから蝶型の荒魂の群れを造る能力を持つ自衛隊員達、大太刀と第五段階の八幡力を連想し、ならば蝶型の荒魂の群れを大太刀か長い刀で振り回したらどうなるか?

……優はそこまで連想すれば、この蝶型の荒魂の群れは長い刀で、第五段階の八幡力の力もしくは大きな力で叩き潰したり、振り回せば数だけ多いことが脅威の蝶型の荒魂の群れを薙ぎ払えることに気付

いた。だから、鬼丸国綱を長巻のように改造してくれたことに感謝していたのだった。

それなら、蝶型の荒魂が幾ら居ても物の数ではないし、ノロに戻して吸収すれば良いだけの話しだ。

ならば、蝶型の荒魂以外に考えられうる脅威は、元は水陸機動団所属の自衛隊員達であったことから、自衛隊格闘術や高い射撃能力なのだが、先程胴体を両断しようとしたときに相対していた標的の自衛隊員は攻撃する前に防御態勢に入っていたことと、弾切れになっているにも関わらず銃のトリガーを何度も引いていたところから、身体能力を強化し、特別な能力が付与され、荒魂化する前の記憶を残しているとはいえ、今も呻き声を上げているところから、耐え難い苦痛と荒魂を身体の中に入れるのは強い拒否反応が出てしまうということであり、思考能力は数段落ちるということ。

……そんな心身の状態であれば、倒すのは容易い。むしろ、荒魂を身体に入れなかった方が手強かったかもしれない。

と判断した優は、標的の自衛隊員の中から特に〝攻撃する前に防御態勢に入った〟者を次のターゲットに定め、容易くその防御態勢の裏を突くように討伐する。

何せ、その防御態勢が側頭部を腕で覆うものであったのだ。確かに、その防御方法はナイフに対する防御の一つとして言われているが、振り下ろしに対して有効であるため、背丈の差がある優では振り下ろし攻撃ができないうえ、何よりも決定的なのは攻撃する前に防御したことである。

ある格闘技経験者が言うには『格闘技などを習いたての者は、攻撃を見切る前に習った防御方法を先にしてしまう。』という傾向があるため、その格闘技経験者にしてみれば、相手がどのように防御するか判るため、対処し易い以外の何物でもないということらしい。

……とはいえ、標的の自衛隊員達は場合によっては、準特殊部隊として扱われることもある水陸機動団出身であるので、そういった格闘戦も訓練という経験を通して理解している者が多い筈である。だが、弾切れをしているにも関わらず、引き金を引き続けるところから見る

に、やはり体内にノロを入れた影響は高いということが窺える。
幾ら体内にノロを注入したところで、ノロに対する拒否反応から精神の均衡が取れなくなり、思考や判断力が無くなれば攻撃も防御もままならないのだろう。
そのため、優は〝攻撃する前に防御態勢に入った〟標的の自衛隊員の胴体を両断して、二人目を討伐していた。
しかし、討伐した自衛隊員の死体から、蝶型の荒魂の群れが這い出て来ていたが、それに意に介することなく、次の自衛隊員を目標（ターゲット）にし、迅移を使って懐に飛び込み、自衛隊員を鬼丸国綱で刺し貫くと、そのまま刺し貫いた自衛隊員ごと鬼丸国綱を土煙が上がるほど振り下ろして、目標（ターゲット）にした自衛隊員諸共、縦に潰していた。
残り、７匹――――。
優は心の中でそう呟きながら、土煙に紛れ、銃撃されないようにし、荒魂の気配を頼りにもう一人の目標の自衛隊員の上に八幡力で跳躍して、死角となる上から一刀両断して討伐する。
そして、近くに居た目標の自衛隊員もこちらに気付く前に首を刎ねると、戦闘不能にする。
だが、流石に残り5名の自衛隊員達に気付かれ、一斉に銃口がこちらに向こうとしていた。その事態に驚くこともなく、優は手にした鬼丸国綱で首を刎ねた自衛隊員の身体に刺すと、その胴体を持ち上げて、銃弾の盾にしていた。
そして、銃弾の盾にしつつ、自衛隊員達の弾切れを待つ。そうして、弾切れになったところで残りの自衛隊員達のところへ突っ込み、数珠つなぎのようにもう一人の自衛隊員を突き刺していた。そうやって、残りの自衛隊員達に接近すると鬼丸国綱から手を離して、ニッカリ青江で残り４名の自衛隊員を一気に斬り殺していた。
……後は、蝶型の荒魂の群れを討伐するだけだが、優は長巻のように改造した鬼丸国綱を手にして、薙ぎ払うかのように振り回して討伐していた。
こうして、荒魂化した自衛隊員達と蝶型の荒魂の群れは優に一方的に殲滅させられることとなったのだが、その一連の光景を薫はＵＡＶ

を介して観ていた。
――――自分は何を観させられているのだろう？
――――平和は良い事である。そうある筈である。
だが、今有る平和、そのためにここまでの犠牲は必要なのだろうか？荒魂化した自衛隊員達や優はそれで良いのだろうか？
――――彼等は何のために戦うのだろうか？
――――平和とは？自由とは？個人とは？人生とは？
そんな哲学的な思いを抱かざるおえないほどの醜悪で残虐な今の状況に、薫は目を覆いたかった。救いが欲しかった。
そして、目を背けたかったが、薫は目を覆い、耳を塞げば、それは只の〝逃げ〟でしかない。
それを理解していたからこそ薫は、目を背けずにＵＡＶを介して観れる荒魂化した自衛隊員達の亡骸の鮮明な姿を観ていた。そうして、薫は吐き気を催しながら、必死に抗っていた。

濁されてゆく言葉（英語表記：ｗｏｒｄ、中国語表記：字）

荒魂化した自衛隊員達を全て討伐し、静けさを取り戻していた江仁屋離島。

しかし、静けさと嘗て荒魂の居ない風景を取り戻した方法は穏やかなものではなかった。

それは、優に荒魂化した自衛隊員を取り込ませることで一切の証拠を無くすというものであった。

だが、優の中には、路上で成人男性相手に花を売っていた過去を持つ少女ミカが居るため、荒魂化した自衛隊員を入れるべきではないとタギツヒメ達に言われていた優は、どうすべきか考えるが、嘗てタギツヒメの記憶で知ることができたことを思い出す。

それは、御刀で知性が保てない程に斬り刻まれてしまえば、再び融合したとしてもそれは最早記憶も性質も異なる別の荒魂となるというもの。……荒魂にとってみれば、死にも等しい現象であり、最も恐れていることである。

だとすれば、荒魂化した自衛隊員達を知性が保てないほど、何度も何度も切り刻めば、それは荒魂化した自衛隊員ではなく、只のノロとなるということ。

だから優は、荒魂化した自衛隊員の亡骸を戸惑うことなく、何度も何度も切り刻んで、ミンチのようにしていた。

――――少女達が望むことならと、誰にも苦痛を与えないで済む。

――――タギツヒメ達が望むことなら、罪ではない。許されると。

『おいっ！何してるんだ!!』

だが、優が荒魂化した自衛隊員達の亡骸を何度も切り刻んでいる光景を見て、薫は亡骸を弄んでいるように見えたため、咎めていた。

「？……何？」

優は鬱陶しそうに答えたことに、薫に少し悪い印象を与えたかもしれないと思いながら返していた。

『何じゃねえ、そんなこと辞めろ!!』

はて、そんなこととは何のことだろうか？と優は考えた。

……もしかして、荒魂化した自衛隊員達をノロに戻している作業のことであろうか？と優は思った。思ったが不思議であった。壊れて動かなくなった物に何度も何度も斬ることは可笑しいことであろうか？それに、これは荒魂化した自衛隊員達。つまり元人間だった荒魂でしかない。なら、御刀で何度も切り刻むことに何か問題が有るのだろうか？

「……薫おねーちゃん？荒魂化した人は荒魂でしかないんでしょ？」

だからこそ優は訊いてみた。姫和が言っていた言葉を使って。

――――これが人であるならば、僕は荒魂じゃないのか？

――――これが人であるならば、昔からそれを行っていた刀使は何なのか？

「それに、コレが〝荒魂〟じゃなくて〝人〟だったら、御刀と銃。どう違うの？」

そして、タギツヒメ達と出会って荒魂と人間の違いが分からない優にとっての最大の疑問。御刀と銃はどう違うのか？ということ。優にとってみれば、この二つは〝命を奪う道具（モノ）〟でしかないということ。

――――これが人であるならば、刀使と人斬りはどう違うのか？

――――これが人であるならば、荒魂化した人を斬って祓う御刀と人を的にして撃ち殺す銃はどう違うのか？

そういった含みを持たせて、薫に訊いていた。

『……っ！』

優にそう言われ、言葉を詰まらせる薫。

このまま荒魂化した人を荒魂ではないと言えたら、どれだけ楽だろう？……だが、荒魂化した人間を討伐した刀使は昔、いや、母の時代からあったことであり、姫和もそれについて躊躇っていたり、悩んで

いたことも有ったのだ。そのため、荒魂化した人を荒魂ではないと言ってしまえば、どれほどの刀使の戦いを無下にすることになり、人殺し扱いすることとなるのだろう?可奈美の母や姫和の母を人殺しと非難するような物ではなかろうか?と考え込んでしまう。

それに、荒魂化した自衛隊員達を人間として扱ったとしよう。なら、今荒魂化した自衛隊員達を殺した優を殺人鬼だと言うべきなのだろうか?仮に殺人鬼扱いしたら可奈美はどう思う?

母と弟の親族二名を人殺し扱いするようなことなど言えない。

「……それに、荒魂になっちゃった人は荒魂だから、それを斬ることは刀使が昔からやっていた大事なお仕事なんでしょ?だから、ねねちゃんと仲が良い薫おねーちゃんが荒魂を討伐するところを見て、姫和おねーちゃんも〝斬って祓うしか、救う手段はない。〟って言っていたから思ったんだけど、薫おねーちゃん達は荒魂に死という救済を与えているんだよね?だから、〝死は救済〟なんだって理解したの。」

荒魂化した自衛隊員達を御刀で殺すことは、荒魂化した人が居た時代のことと姫和や可奈美達、そしてねねという荒魂を連れている薫が行っていたことを例に挙げて〝死は救済〟ということを理解したと優は薫に答えていた。

それ故に、優は〝死は救済〟という考えを持って斬ることにしたと言っていた。

薫は今、全く釣り合わない巨大な天秤が目の前にあるような気がした。

どちらを選んでも、納得の行かない結末を迎えることしかできない全くの不釣り合いな天秤を前に選ばされているような気がした……。

軍人と非軍人。戦場か安全地帯か。子供と大人。荒魂と人。刀使と人斬り。銃と御刀――――。

そして、救済か殺しか――――。

曖昧な境界線だらけの戦闘を見て次の戦いは、いや世界の全てが言葉遊びで曖昧化するのだろうか?と薫は思っていた。

しかし、そんな薫の思いなど知らない優は別のことを考えていた。

(……あっ、結芽おねーちゃんの剣術だけ使ってやれば、結芽おねー

ちゃんの剣術が有名になれたかも。……結芽おねーちゃんに悪い事したなあ。）

と思いながら、結芽にとっても、薫にとってもピントが外れたことを優は考えていたことに薫は気付かないままだった。

結芽の剣術を使って、荒魂化した自衛隊員達を全員斬り捨てれば、結芽の剣術は有名になれただろうと、考えていることに……。

そして、優が沙耶香が誤って踏んでしまった虫と荒魂化した自衛隊員達に対して、同じことを言っていることに誰も気付かなかった。

だが、それと同様に、被害者以上に丁重に扱われる犯罪者の人権。経済的理由か戦争理由なのか不明の難民。女性を何割か雇うことを義務付ける男女平等。希少な動物を保護する傍らで貧困に喘ぐ人達。貧困の募金で救われた子供が悪徳警官になるのに、心が有ると言われる国。

……そして、高価な兵器で人道的に殺傷する。

世の中は差し障りの無い言葉で表現を濁し、己自身をも欺いて行き、更にはその言い換えに辟易しても、この世の中はそれが当然のことだとして気付かないフリをし続けていることに、誰も気付かないままであった。

中東某国――――。

汪は本来の石油商社として、中東の政府関係者と商談を行っていた帰りの車に乗っていた。

帰りの車とはいえ、前後に護衛の車付きである。

「……例の部隊は？」

帰りの車の中、汪は部下に優の拉致に向かったイスラム過激派の部隊のことを聞いていた。

「中東の方から、成功したということは聞いておりませんので、恐らくは……。」

「……ふむ。」

中東の国の軍関係者とバスィージが紹介してくれたイスラム過激派の連中なら確保できるだろうと思っていたが、……全ては自分の思惑通りにはいかないということだろうと納得していた。

護衛のアメリカ人が精強なのか？それとも、刀使がこちらの想定以上に強いのか？確たる情報が無いため、断定はできないが、これで一筋縄ではいかないと理解した汪は次の手段を考えるが――――。

次の瞬間、目の前には地面が揺れる程の爆発が起こっていた。

「なっ、何だ!!」

何事かと思い、声を上げ、部下に状況の説明を求めていた。

しかし、その部下は既に物言わぬ骸となっていた。恐らく、最初の爆発に紛れて車のエンジンか、運転手である部下を狙って撃ったのだろう。そうすることで、運転手を失ったうえエンジンが壊れてしまった汪が乗る乗用車は爆発炎上している車に突っ込み、横転してしまう。

だが、汪は横転している車から、辛うじて生きているが、足と腹が負傷しており、車外に出れなかった。

そのため、護衛の者が汪を車の外へ出し、安全な場所まで逃げようとしていたため、汪はそれに従い、護衛の者の手を掴んで、車外に出

ようとしていた。
今、車外に出るのは危険ではなかろうか？
と汪は考えるが、車内に居ても変わらないということに気付き、それを言うのはやめることにした。
しかし、汪を横転した車から救出した護衛の男は、銃で撃たれたのか、どうと倒れると、血を大量に出しながら死んでいた。
そのため、汪は護衛の者が来るまで、頭を抱えながらうつ伏せの状態となり、身を銃弾から守ろうとした。

「???? ????!!」 「???? ????!!」 「???? ????!!」 「???? ????!!」 「???? ????!!」 「???? ????!!」 「???? ????!!」 「???? ????!!」

恐らく神を称える声を上げているのだろう。その声を上げながら、こちらに近付いているのが分かる。
だが、何故イスラム過激派がこちらを狙うのか、汪は皆目見当がつかなかった。しかし、足音からこちらに近付いているのは分かっていたため、這いずり回るように逃げようとするが、両足を撃たれたことにより、もう立ち上がることは出来なくなってしまう。
それを見たイスラム過激派らしき男達は汪に近付くと、乾いた銃声と共に汪を殺害していた……。

汪が死んでからの数日後、中華人民共和国国務院――――。
「何?汪がっ!?!?誰に殺された?」
汪を差し向けた公安部長は汪が死亡したという部下からの報告を聞き、驚いていた。
何故なら、汪を殺す理由があるところと言えば、日米くらいなものであったため、もしそうであるならば、こちらの企みは全て把握されており、対外工作の証拠も揃えているのではないのかと肝を冷やしていたからであった。
もしそうであれば、本国は潔白を証明するために公安部長を処罰し、何事も無かったかのように振舞うだろうと公安部長は直ぐに思い至ったからだが。
「いえ、部長。汪はイスラム過激派のグループに殺されたそうです……。」
「何っ?……」
公安部長は汪がイスラム過激派グループに殺されたということに不可解な気持ちとなる。
汪は中東の軍関係者を介してバスィージに、テロ組織であるイスラム過激派グループの一派を紹介してもらい、優を拉致しに行った協力者にも関わらず、汪を殺しに行ったことに公安部長は違和感しか感じなかった。故に、公安部長は部下に事件を詳細に訊くことにした。
「……汪がイスラム過激派に殺されたのは確かなのか?」
「確認中ですが、アラビア語を叫んでおりましたので恐らくは、……ただ。」
「ただ?何か有るのかね?構わないから、続けたまえ。」
公安部長の部下が話の途中で言い淀んでいたために、公安部長は怪訝な顔をしながらも、部下に何か気になることが有るのなら、遠慮なく報告して欲しいと言っていた。
「……はっ、そのイスラム過激派はＡＫ―１０３といったロシア製の銃を武装していた様です。」

「銃弾は？」
「アフガニスタンからの物である可能性が高いとのことです。」
ふむ、と公安部長は部下の話しを訊きながら、思案していた。
現在のロシアは欧米から制裁を受け、孤立させられている状況である以上、我が国との関係を傷付けるメリットが無い。そのうえ、汪に協力した中東の国も原油安で苦しいからこそ、無限に近い隠世の力を得るために協力したのだから、こちらも裏切るメリットが無い。
ならば、現状は中東とロシアが裏切ることがないハズなのである。ともすれば、それ以外の国が介入したと考えるべきなのだが、そうであれば、汪を殺したイスラム過激派がロシア製のＡＫ―１０３を所持できるハズがない。……それに、アフガニスタンの銃弾――。
「アフガニスタンの銃弾？」
だが、使用された銃弾がアフガニスタンの銃弾であることに疑問を抱いた公安部長はある推察に行き着いていた。
「……ＡＫ―１０３は確か、サウジアラビアにも輸入していたな？」
「……確か、そうであったと思いますが、何か？」
「あくまでも、確たる証拠が無いため私の推測だが、銃弾がアフガニスタン製ということはアフガニスタン駐留軍がそれらの弾薬を所持していた。……そして、ロシア製のＡＫ―１０３は親米国家でもあるサウジアラビアから、ていうところか……。」
「となると、裏で糸を引いて、この絵図を描いたのは！」
「いや、それは分からん。米国の同盟国が絵図を描いた可能性が有る。」
公安部長の部下は、米国が全て仕組んだのであろうかと勘繰るものの、公安部長に遮られ、それ以上は考えなかった。
公安部長としては、部下がそれを聞いて米国を批判するようなことを言わないようにして欲しかったために、遮ったのだが……。
「それよりもだ、これをどうするかだな。……いかに非主流派で我が国にとって要らざる者とはいえ、中華人民であることに変わりない。直ぐに報復したいところではあるが、今回は彼等を刺激したところで要らざる物が山積することだろう……。」

「しかし、それで我が国の人民は納得するでしょうか？」
　汪を見捨てようとする公安部長に、部下はそれで人民が納得するのかと言っていた。
「納得するも何も、何処の国でもそうであるように、全てを知らなければ何も問題は無い。だろう？」
　南アフリカでの海賊襲撃。中華民国の過去。天安門事件。それに、くまのプーさん。
　……それらを検索しても、一般の者には見せないようにするのと同様に、揉み消せば良いのだと言い、
「それと、今回の件は我が国に居る回教の手が有ったということにしよう。それで国内に居るテロリストを殲滅するという名目で多民族の監視を強化する名目を得られるという訳だ。」
　汪に殺されたテロリストグループは国内に居る回教のせいにし、弾圧することによって、国内の統一と監視能力を上げると同時に中国警察への予算を増額するように仕向けようとしていた。
「その名目を以って、公安部の権勢を上げるということですか……。」
「そうだ。あとは、汪が死んだ中東の国と協力するということにしよう。そうすれば、その国をＡＩＩＢ等に誘うことも、軍事援助することもでき、我が国の影響力は増大するだろう。」
　そして、汪が死んでしまった中東の国でテロリストグループを根絶するために強固な協力体制を取るという名目で、件の汪が死んだ地である中東の国に中国の経済と軍事的影響力を増大させ、依存させるようにし、中東での影響力を増そうとしていた。
「……だが、そう考えると非主流派の汪をどう処分するか困っていたが、今となってはフランスの聖女とナポレオンの関係のように、散骨になっても我が国に尽くそうとしてくれることには感謝しないとな。」
「はい。」
　例え、汪が殺され、灰になっても利用し尽くそうとする公安部長の行いに、部下は何とも言えない肌寒さを感じていた……。

刀剣類管理局伍箇伝所属、綾小路武芸学舎内――――。

「……やはり、失敗したか。」

ソフィアは、優が国際機関に保護されたという話しが聞こえて来ないところから、拉致工作は失敗したのだろうと理解していた。

そう、北京に居る公安部長が言っていた刀剣類管理局内部のリーク元はソフィアであった。

「やはり、とは？」

穂積はソフィアが既に失敗を予期していたかのような発言に、どういう意味なのかを尋ねていた。

「あのマッドから、彼の少年が大荒魂であるタギツヒメを入れたという話しを聞いてから、もしやと思い外部に情報を漏らし、その外部に襲って貰ったら私の懸念通りに獲得工作は失敗。……彼の少年は大荒魂の力を得ていると見て良いということが分かっただけでも、収穫は有った。それに、奴等に国外へと逃亡するという選択肢を失わせ、国内に留められることも大きいだろう。」

４カ月前の鎌倉特別危険廃棄物漏出問題を解決したのは、可奈美達であると云われていることと、その後に〝男の刀使〟が現れたという

ニュース。それら一連の騒動に疑問を抱いたソフィアはどういうことか調べていた。

つまり、ソフィアはわざと外部に漏らし、今の優にどれほどの戦闘能力が有るか、他者を嗾けて探りつつ、優を国外逃亡させるという選択肢を姫和や可奈美達に取らせないようにしたのである。

ソフィアはそれだけでも、優を国内に留まらせることができたことにとても喜んでいた。

「……ご執心、していますね。」

穂積は、スレイドの証言と和樹に使ったノロのアンプルを物的証拠として使えば、信用を失った刀剣類管理局と折神家、更には日米両政府に深刻なダメージを与えることができ、その政治的な混乱が起こった隙にソフィアが実権を握ることをすれば良いだけなのに、その告発に慌てた日米両政府が身の潔白と保身のために優を始末するという行動を取る危険性が有るという理由だけで、それを実行しないままでいるソフィアを見て、執心していると皮肉げに言っていた。

「当然だ。」

それをソフィアは涼しい顔をして、当然であると答えていた。

「……だが、残念だ。彼がどのように戦ったのか、この眼(まなこ)に焼き付けたかった。」

そう、ソフィアは強く主張していた。

ソフィアは優がどのように人を殺したのか？それが気になってしょうがなかった。

出来れば、残忍な殺し方の方が良い。でなければ、私の全てを奪って殺してくれる人に出逢えないのは、心苦しい……そればかりを考えて、嗤(わら)いつつ、ソフィアは次の策を考えていた。

静かなる侵略　者

江仁屋離島で起きた〝荒魂騒動〟の数日後、防衛省――――。

「――――優少年の報告は以上で、その報告によりますと、ノロのアンプルによって強化された自衛隊員達はノロに対する拒否反応によって思考が阻害され、低下することにより荒魂化する前の能力が著しく低下するとのことであり、その低下した能力は群馬山中にて発生したイスラム過激派の戦闘員よりも劣るとのことです。」

奄美大島分屯基地に居る三木は、ノロのアンプルもどきによって強化された自衛隊員はノロに対する拒否反応から鑑みると、却って弱体化する旨を市ヶ谷に居る甲斐に報告していた。

『……なるほど、それは私にとっては良い事尽くめだと言った方が良いな。』

だが、パソコンの画面越しに映る甲斐は動じることなく、喜ばしい結果となったと言ってほくそ笑んでいた。

「……と言いますと？」

『元々、鎌府の研究データから作ったノロのアンプルもどきで自衛隊員を強化する計画は特別任務部隊と新型S装備を挫くために舞草の一部の重鎮が防衛省の人間を動かしたようだ。』

「一部の舞草の重鎮ですか。」

『まあ、恐らくは折神　紫が推進したS装備と子飼いである元親衛隊の二名が活躍しているというのが気に食わないのだろう。』

甲斐は三木に今回のノロのアンプルもどきを使って自衛隊員達を強化する計画が始まった理由を話していた。

その理由を聞いた三木は、そんな理由で危険な実験を行い、水陸機動団所属の優秀な隊員１０名を失うという事態となってしまったことに静かに怒りを感じていた。

だが、ノロのアンプルもどきを使って自衛隊員達を強化した理由は他にも有るのだが、甲斐は敢えてそれを言わなかった。

「……そんな理由で、ですか。」
『だからこそ、私は彼の少年が群馬に居ても江仁屋離島へ直ぐに行けるよう手配した。』
甲斐の優を江仁屋離島へ直ぐに行けるよう手配したという言葉で、三木は彼も同じ貉の穴であったことを思い出していた。
そのため、三木は次の議題へと持って行こうとしていた。
「とはいえです。彼の少年は米国の工作員部隊等と共に群馬山中に現れたイスラム過激派を殲滅。その後には、荒魂化した自衛隊員等を討伐したということから見ても、実年齢9歳という点から観て、その人格は極めて異質という他ありません。」
『だが、同盟国の友邦と共にテロリスト集団を殲滅後、荒魂化した人間を単独で多数討伐。……その経歴だけでも、極めて優秀な刀使であると同時に理想的な兵士ではあるな。』
「……加えて、今回の事件によって判明したことでありますが、現職の自衛隊員達はノロのアンプルですら制御できないにも関わらず、彼の少年はノロの総量が自衛隊員達に使ったノロのアンプルとは桁違いの力を持つタギツヒメをその身に宿し、その力を行使していることから、そのタギツヒメの力を行使できるのは彼の少年以外には居ないというのが現状であります。それらの観点から鑑みますと、潜在的に危惧せざるを得ない存在であるかと。」
三木は、優が9歳である子供であるにも関わらず、米国の軍人でもある米国工作員部隊と連携を取ってイスラム過激派を殲滅し、その後も荒魂化した人間を討伐。その際に躊躇いも無く人を撃ち殺したり、斬り殺すことができる異質な人格を持つ9歳の子供がタギツヒメの力を行使できる現状を危惧（主に裏切ったり、暴走する危険性のことを言っている。）すべきであると言って、優を保護という名目の元、監禁すべきであると甲斐に暗に進言していた。
『……三木一等陸佐。駐屯地司令だった君が統合幕僚監部運用部運用第二課長という要職に就けたのも、君が優れた手腕とその幅広い見識を持っているからであると、私の耳にも聞こえている。』
「……過分な評価、ありがとうございます。」

『そんな君の意見を私としても可能な限り尊重したいが、彼の少年の処遇は既に決まっている。それを良く留意するように。』

しかし、甲斐は三木の進言を却下し、政府の決定であると言って、優を使い潰そうとしていた。

「……〝市ヶ谷の姫〟への対抗手段としてですか？」

『ああ、その〝市ヶ谷の姫〟は政治家や政府官僚を味方に引き込み、一つの派閥を形成しつつある危険な状態だ。……今回の件によって、彼の少年の有用性を証明することができた。彼の少年の中に居るタギツヒメを〝市ヶ谷の姫〟の元へ引き渡すことは抑え込むことができるだろう。』

甲斐と防衛大臣の中谷としては優を〝市ヶ谷の姫〟ことタキリヒメとその一派への対抗手段として置いておきたいのが本音であり、今回の江仁屋離島で起きた荒魂騒動を鎮めた優の活躍を官房長官等に報告し、タキリヒメを支持する派閥が政治活動によって、優の中に居るタギツヒメをタキリヒメに引き渡されるような事態は防ぐことはできた。

「それが彼の少年を江仁屋離島に送った理由の一つでもある。ということですか……。」

『ああ、〝市ヶ谷の姫〟は彼の少年の中に居る者は不要だと言っているが、どこまで真実かは分からん。そのうえ、あの〝市ヶ谷の姫〟は政治能力に長けているらしく、二十年前の大災厄のことを知らない政治家と政府官僚の多くを手なずけた。……やり辛い敵だ。』

つまり、〝市ヶ谷の姫〟こと、政治能力に長けるタキリヒメを支持する政治団体に対抗する手駒の一つとして優は生かされており、その有用性を証明するために江仁屋離島へ送れるようにしたと甲斐は三木に答えていた。

――――甲斐と中谷は、化け物には化け物をぶつける。という考え方なのだろう。

こうして、江仁屋離島での荒魂騒動。もとい、平和で非戦を誓い、軍隊を持たないと公言するが、どこかふしぎな国で起こった軍隊の居ない戦場は、制限の無い戦いであったが、不気味なほど大きな歯車の音

を立てることもなく、誰にも注目されることなく静かに終わった。
しかし、大きな歯車が音を立てずに終わったからといって、全てが無くなる訳ではない。
また、誰かが油を注し、無理にでも動かせば、その歯車は錆びていても動き始めるのだということに誰も気付いていなかった。それは、差し障りの無い表現に変えらえていき、濁されてゆく言葉に誰も気付かないようでもあった。
そして、その歯車が正常に動き続ける保証は誰も取らないうえ、壊れていることに誰も気付かないままであった……。

長船女学園――。
江仁屋離島での戦いの後、薫達は静養のため一日の休暇を貰い。長船女学園に戻り、薫とねねは学生寮の空いている部屋の中から宛がわれた自室にて、洗面所で雑念を振り払うかのように顔を洗っていた。
それは、辛い部分を取り除く外科手術のように、江仁屋離島に起こったことを振り払う儀式のようでもあった。
しかし、それを振り払おうと考えれば、考えるほどに深みに嵌っていき、奄美大島分屯基地での戦いの後に、管制室から外に出てきたところを思い出してしまった。

全てが終り、管制室から出たとき、いつも見ていた風景が何か違う、ような気がした。どこか遠い処に居るような、それでいて、いつもとは何処かズレていて、何かが違う感覚。

ＵＡＶを介して長時間観ていたせいだろうか?と薫は悩み、その見てきた物を思い出してしまう。

離れ島で鮮明に映る自衛隊員達の亡骸。

９歳の子供が主演のノンフィクションスナッフ・ムービー。

刀使だったのに、エアコン付きの部屋から、それを眺めているだけの〝卑怯者〟の自分。

いつからだろう?

何時から、こんなに変わってしまったんだろう?

任務に不真面目で、その度に学長から怒られ、任務を増やされてはブラックだの何だの愚痴りながら、休暇を望んでいた自分が、何処か遠い昔の、違う星に居る自分のように感じられる。

……その証拠に、念願の休暇を貰えたのに、どうしてこんなに心苦しいのだろうか?

「……ねね行くぞ。」

今日はやけに嫌なことばかり考えるな、と思った薫は長船女学園の制服を洗濯しに行こうと思い、こちらの様子を伺うねねと共に洗濯場まで移動しようとした。

――――そうだ。暗い山の中、コイツは助けてくれた。

そんなことを思い出しながらの移動の最中、こちらの姿を見かけた長船女学園の刀使は尊敬するような目でこちらを見ていた。

……そのため、昨日のことを教えてやったら、手のひらを返すのだろうな。と薫は自嘲していた。

だが、〝公式の発表〟以外は機密事項と言われた以上、それを簡単に外部に喋ることは出来ないが……。

そうして洗濯場へ着き、薫は洗剤と長船女学園の制服を洗濯機の中へ入れようとする。……入れようとするとき、薫は長船女学園の制服をじっと見つめていた。

そう言えば、この制服、えらい体の一部分を強調するかのような制

服を採用しているとか言われていたなと思い出していた。
だが、何故そうする必要が有ったのか？自分はあの時、奄美大島分屯基地の空調が効いている管制室の中に居ただけなのに、こんな服を着る意味など有ったのか？
……そうだ。あのときは荒魂討伐していないのに、こんな派手な制服を着る必要など有ったのだろうか？
そう考えながらも、薫はねねと一緒に自室へと戻り、室内に入る。すると――――、
「余り、隙を見せる物じゃないぞ。」
室内には既に、トーマスが居た。
そのことに薫は驚き、ねねも身構えるが薫は次第に冷静となった。
「おい、ジジイ。勝手に人の部屋に入るんじゃねえよ。警察に突き出すぞ。」
そのため、薫はトーマスが勝手に室内に入ったことを非難する。
「俺も一生入りたくなかったが、お前さんが何やら動き回っていると聞いてな。……告発などしても意味が無い。止めろ。」
しかし、トーマスは顔色を一つも変えることもなく、薫が江仁屋離島で起きた荒魂討伐任務を単独で行った刀使として事件の真相の告発をしようとし、防衛省が行った実験の証拠集めと告発を記事にしてくれる記者を探していると聞いたトーマスは、薫のやろうとしていることを止めに来たと告げていた。
「……何でだ？俺のやっていることが間違っているっていうのかよ？」
「ああ、そうさ。……何の意味も無いことだから、わざわざ止めに来てやったんだ。……後は、その告発を聞こうとした記者が事故を起こしたことを伝えに来たことと、お前が集めた物を回収して処分したことを伝えに来た。」
そして、薫のやろうとしたことは既にトーマス達が抑えており、告発の実行は不可能だと述べていた。
「それと、刀使であり、この作戦の指揮官でもあったお前には、この書類にサインしてもらいたい。」

そして、薫の元へ向かった真の理由は〝ある書類〟にサインを一筆してもらうために来たと答えていた。
「……何の書類だ?俺、小難しいの分か「大丈夫だ。単純に江仁屋離島で起きた荒魂討伐は〝法規〟に準じて行われたという証明をする書類だから、お前の一筆さえもらえば何の問題もない。」……。」
トーマスは薫の言葉を遮って、江仁屋離島で起きた荒魂討伐は〝防衛省からの正式な依頼であり、法に準じて行われたものである。〟ということを立証するための書類に刀使であり、指揮官でもあった薫のサインが必要だと言って、ボールペンを投げ、書くようにと薫に強く迫っていた。
「……俺は、俺はそんなもんにサインできねぇ。」
だが、薫はサインを書くことを拒否していた。
何故なら、この書類にサインするということは、江仁屋離島で荒魂化した自衛隊員達は〝人為的〟ではなく〝偶発〟によって荒魂化したことだと、刀使である自分が吹聴するような物でしかない。それに、江仁屋離島で荒魂化した自衛隊員達はこの国の政府に荒魂にされたような物なのだ。それを見て見ぬフリなど、薫には出来なかった。
「いや、お前にはやってもらう。」
「ふざけんな。……悪いのは、ノロをあんな風に使って、人を荒魂化して実験した奴等じゃねえか!!……何で、何でそいつらは何のお咎めも無しなんだよ!!お前らも、テロリストみたいなもんじゃねえかっ!!?!」
だから、薫は叫んだ。
悪いのは、人を荒魂化する危険性の有る実験を行った者達であると。
そして、少年兵を使うトーマス達もテロリストだと。
「……そうかもな。だが、お前のやり方だとどうなるか、説明しようか?」
しかし、トーマスはそれに動じることなく、薫に言う。
「まず、お前が行ったとして、お前が見てきたことを公表したとしてだ。そうなりゃ、第三者による査察を受けなきゃならなくなる。政府の公式発表と違う訳だからな?だとすれば、半ば荒魂化した優の存在

は公にされることとなる可能性が生ずる訳だ。だが、そうなる前に優を抹消さえすれば、〝何時から荒魂化したか分からなくなる。〟そうすりゃ、その後は江仁屋離島に現れた荒魂の影響で荒魂化したことにしてしまえば、刀剣類管理局と政府はノロを軍事利用したことと、自衛隊の非合法な実験も覆い隠すことができる。……結果、優は始末され、国の暗部は覆い隠すことが出来る訳だ。」

そして、薫が行おうとした結果は、優を殺すことで、ノロの軍事利用、自衛隊の非合法な実験といった国の暗部を消すことができると、トーマスは述べていた。

つまりは、優を殺すようなものでしかないと薫に告げていた。

「……それにだ。もし、サインしないなら、こうする。」

トーマスはそう言うと、２２ＬＲ弾を使うサプレッサー内蔵のスタームルガーＭＫⅡを薫に向けていた。

サプレッサーを付いているところから暗殺用途であることが分かる銃を手に持っているトーマスを見た薫は、驚いていた。彼がこんな直接的な手段に出るとは思わなかったからだ。

しかし、今の薫は御刀を持っておらず、トーマスは銃を持っていて、こちらに銃口を向けているため、絶体絶命という状況である。

「……お前に俺は殺せねぇ。」

「何でだ？」

「理由は、……俺のサインが必要だから此所へ来た。なら、サインさせるまで殺せねぇ筈だ。」

薫はトーマスに銃口を向けられても、自分の考えを押し通そうとした。

自分で考えて、信じて、裏切られたら、最初に自分がその刃を受ける。

それが、自分なりのケジメだったから……。

「……俺が嫌いな物は何か知っているか？」

薫の考えをぶつけられたトーマスは語る。

「偽善だ。どんなに耳障りの良い言葉で構成されていても、中身が伴わなければ第三帝国のドイツや北朝鮮の独裁者に対する美辞麗句の

表現と何ら変わらない。」
　トーマスは薫達と相容れないと宣言。
「それと、何で俺達が江仁屋離島へすんなり行けたか教えてやろうか？……それはな、俺達は会社（CIA）の仕事の依頼で動いて舞草に協力したことは覚えているな？」
　そして、何故薫達が江仁屋離島へ向かえたかトーマスは語る。
「俺の雇っている会社、つまりカンパニー（CIA）が日本国の情報が他国に流れていることに気付いてな、何処から情報が漏れているのかを炙り出すために優を群馬に送ったのさ。そうして、その国がどうやって優が群馬へ向かったという情報を何処で得たのか分かった。……お陰で、この国が中国製のアプリを規制させる法整備の理由の一つになったという訳さ。そうすることで、日本が中国への依存度を減らすと同時に米国への依存度を増大させること。それが今回の依頼だ。」
　情報が何処から漏れているか探るために優を囮にしたと答え、そのうえで中国製のアプリの危険性を政府に報告すると同時に、それに対抗しうる日米間の同盟が最重要であると認識させるためにトーマス達は優の護衛に来たと告げていた。
「まあ、優を群馬に送れた理由は敵国のスパイ活動の流れを掴むこと、それと江仁屋離島へ向かえたのは優がどれほど有益であるかを示す必要が有ったのさ。」
「……どういう意味だ？」
　更に、トーマスの含みの有る言い方に薫はどういう意味なのか尋ねていた。
「ああ、そういえばお前さんは知らなかったな。〝市ヶ谷の姫〟と呼ばれているタキリヒメはな、４カ月前の鎌倉で可奈美達が戦った大荒魂の片割れだ。そいつは政府の意向によって防衛省に匿われていると言ったらビックリするよな？……お前らが汗水垂らして荒魂討伐をしている横で、お前らの親玉は２０年前大勢の人を殺した大荒魂を扱いこなせると思って保護していたら、そのタキリヒメは政治家や官僚をすっかり誑し込んで政治派閥を作っていたという訳さ、それに焦った奴等は対抗馬として優が有益であると証明したいから、江仁屋

離島へと送ったんだ。クソ笑えるよな。クソ笑えるぜ全く！」

トーマスは、政府が大荒魂の力を利用できると思ってタキリヒメを保護したら、タキリヒメの味方をする政治家と政府官僚の数が増え、派閥が作られたことに焦った上層部が慌てて優を対抗馬にしたと皮肉混じりに、そして何かに取り憑かれたかのように声を張り上げていた。

「だが、俺はあいつ(優)を買っている。俺が大事に育てたからな。」

トーマスはそう言うと、顔を薫に向け、睨むように見ていた。

「俺がお前を撃ち殺したらどうなると思う？ねねが仇討ちをしてくれるかもな？……だが、ねねは知恵は有っても、人の言葉は喋れない。ねねが俺を殺したということが解れば、他の荒魂同様、討伐されるだろうなぁ？それに、お前の代役は沙耶香と姫和が居る。……俺は、銃口を向けるという優しい手段を取るが、俺以外の他の奴はどんなことをするかは知らんし、死体の様になってでもサインさせるかも知れんが、その責任は取れん。」

自分の命を的にねねを人質に取り、そして自分が死んだとしても、トーマス以外の人間が沙耶香か姫和に銃口を向ける以上のことをして、サインをさせると答え、

「それと頑なにサインしなければ、優は先程見せた荒魂化した人間を討伐できるという価値よりも、刀使といった人を追い込む可能性が高いとして危険視され、処分されることになるかもな。……そうなったら、可奈美は友人が数名と最愛の家族を失うということになるな。いや、タギツヒメに有効なダメージを与えられる千鳥と小烏丸に認められたのは可奈美と姫和の二人だから、そいつらが殺すことになるかもしれん。」

それを言われた薫は、沙耶香と姫和、優と可奈美達、そしてねねを巻き込む訳にはいかないとし、トーマスが持ってきた書類、自衛隊の非合法な実験を覆い隠すことができる書類に、サインをした。

「……賢明だ。それと、言っておく。」

これ以上、何が有るのだろうか？と感情を失った表情をする薫はトーマスの方に顔を向ける。

「あの自衛隊員達はな、ただの人間でもノロのアンプルもどきで荒魂を使役できるかどうかの実験でもあったのさ。……仮にそれが可能だとしたら、どうなると思う。」

薫はこれ以上は聞きたくはないと思うものの、耳を塞げなかった。いや、自分達は何をしたのか知らなければならないと思い、耳を塞ごうとしなかった。

「もし、それが可能になったら、荒魂が発生したら刀使を呼ぶのが自然な行動であるとすれば、外国の街に使役できる荒魂をばら撒き、その外国の街の荒魂討伐要請に応じて刀使と一緒に〝刀使の保護〟を名目に米軍や自衛隊を派遣。その三者は荒魂討伐の成果を以って、その外国の街に居座り、住民の支持を集めるってことさ。そうすりゃ、その外国の街を拠点に、その国をオレンジの皮を一つずつめくるように切り崩すことができる。」

つまり、ノロのアンプルもどきで強化された自衛隊員達はただの人間が荒魂を使役する能力を得られるかどうかの実験でもあり、その能力を使って他国の勢力下に有る街を戦争をすることもなく、〝荒魂討伐とそれに従事する刀使の保護〟を名目に米軍や自衛隊を外国の街に駐留させ、その外国の街を米国やその同盟国の味方に変える工作活動のためであると薫に伝えていた。

「最後には自分で考えて、信じて、裏切られたら最初に自分がその刃を受けるということができて良かったな。……だが、俺の邪魔はするな。でなければ、テロリストに殺させる。」

トーマスは言うだけ言うと、薫のサインがされた書類を持って、サッサと薫の自室から出て行った。

その後ろ姿を見ながら、薫は頭を抱えるようにうなだれていた。

「……悪党になっちまったな。」

薫は自嘲気味に、力なく答えていた。

だが、ねねが薫の腕にしっぽを絡ませて、引っ張っていた。

「……仕方ねぇな?ねね。」

薫の声に、ねねは「ねー。」と返答し、一緒に外出していた。

外に出れば、気が変わるだろうと、一抹の希望を抱きながら、外を

歩いていた。

懐かしかった――――。

学び舎の周辺のことを思い出しながら、歩いていると、心が少しずつだが安らいでいくようであった。

それに、ここのところ、西へ東へ東奔西走していたのだが、久しぶりの休暇である。紗南学長もコンプライアンスを守る人種なのだと再認識し、ブラック学長とは言わないようにしてやろうと薫は思いながら、ねねが外へ出て、はしゃぐ姿と周りの風景を思い出しながら見て、風景が変わったところを間違い探しのように探していた。

このまま、これからもずっとこんな穏やかな日が続くといいな……。

薫はそんなことを願いながら、ねねを見守るように歩き続けた。

そうして、歩き続けた薫はそこの角を曲がれば、行きつけの駄菓子屋が有ることを思い出して、そこへ向かおうと駆け出していく。

だが、薫にある者の姿が目に入り、固まったかのように止まってしまった。

何故なら、目当ての駄菓子屋は既に無く。労働力の確保ために来てもらった外国人労働者なのかイスラム風の人間が数人居て、町おこしのためなのか、それとも住みよい街にするためなのかは分からないが、新築の中東の様な街並みが其処に有ったからだ。

――――そして、場所、手段、目標を問わず、攻撃を仕掛ける能力さえあれば、そこは即座に戦場となる。致命傷を与える戦争を引き起こすことができる時代になれば、いったい何処に非戦闘地域が存在するというのだろうか？――――

薫には、その風景がそう告げているように見え、無意識だが身構えてしまったのだった……。

噛み合わない者達

愛知県、某所――――。

ムカデ型の荒魂が出現したため、防衛省は１５５ｍｍりゅう弾砲ＦＨ７０と迫撃砲等による砲撃支援、ドアガン装備型のＵＨ―１Ｊと軽装甲機動車による５．５６ｍｍ機関銃と１２．７ｍｍ機銃の掃射を行い応援の刀使が来るまでの遅滞戦闘と都市部への侵攻の阻止を試みていたためか、砲弾によるクレーター状の塹壕のような穴がそこかしこに有り、そのうえ薬莢が落ちているため、戦場跡のように見えなくもなかった。

だが、これら遅滞戦闘といった刀使への援護は自衛隊員等の慣熟訓練と期限切れの弾薬消費も兼ねていた。

そんな事情が有ることを知らず、戦場のようになった場所で刀使達はムカデ型の荒魂と対峙していた。

「佐久間！」

しかし、自衛隊の援護があったとはいえ、刀使の離職者の増大といったことによる人員不足と連日に続く膨大な任務量に彼女達の心身は疲労によって着実に蝕まれていた。

その証拠に、佐久間という名の実力の有る刀使は、ムカデ型の荒魂の頭突きに御刀で辛うじて防ぐものの、その勢いを止めることは叶わず、悲鳴を上げながら後ろにどうっと倒れていた。

「くぅっ……」

だが、佐久間は御刀をムカデ型の荒魂に向けて、どうにか抵抗の意志を示すものの此処でやられるだろうと覚悟していた。

しかし、佐久間は咄嗟に自衛隊の砲撃によってできた塹壕のような穴の中に隠れることで難を逃れることができた。その佐久間の身を案じた長船の刀使は佐久間が塹壕のような穴の中へ隠れたところを見て、安堵すると気持ちを切り替えて、目の前に居るムカデ型の荒魂に集中していた。

とはいえ、佐久間が所属する部隊を率いている部隊長は残った隊員達の残りの体力は既に多くはなく、これ以上の継戦は不可能であろうことは理解していた。

「佐久間はそこで退避！残りの者で討伐するぞっ!!」

そう確信はするものの、このムカデ型の荒魂の都市部への侵入を許してしまう訳にはいかないと判断した部隊長の刀使は、撤退を指示することができなかった。

となれば、自分がこの部隊を任せられている部隊長である以上、一番背中を見せる訳にはいかないだろうと判断し、負傷も覚悟のうえで囮となって部下の刀使達にこのムカデ型の荒魂を討ち取って貰い、自身の負傷を代償としてでも、部隊の損耗を減らそうと覚悟するが――――。

『何っ!?……分かった、展開中の特祭隊に告ぐ。本部からの即応部隊がヘリで急行中。後は彼等に任せて、直ちに後退せよ。繰り返す、直ちに後退せよ。』

突然の通信に驚きながらも、本部から増援が来たという一報に部隊長は、特別祭祀機動隊所属のＡＷ１３９のヘリを二機視認すると安堵していた。

愛知県内に出現したムカデ型の荒魂を討伐完了後、ノロの回収と警護は現地の部隊に任せ、真希は次の特別災害予想区域に移動中のヘリに揺られながら思案していた。

確かに自分は、荒魂被害が関東に集中していることから、現地の刀使が足止めをしている間にＳ装備刀使部隊を航空機による集中的な機動運用により、頻発する荒魂事件に迅速に対処すると言い、甲斐から必要な物が有れば書類で提出して欲しいと言われ、真希的には何としても新型Ｓ装備の導入数を増やす必要が有った。そのため、

輸送防護車

オスプレイ

パックボット　スカウト
スキャンイーグル
スカイレンジャー
新型Ｓ装備　４０着以上
指揮車両（７３式中型トラックを改造。）
等を要求した。
どう考えても甲斐は無理だと答えるだろうと思い、新型Ｓ装備以外の多くのヘリとＵＧＶやＵＡＶといった必要以上の装備が必要と書いて提出したのである。そうして、甲斐に一言無理と言わせてから、ならば新型Ｓ装備とオスプレイとスカイレンジャーだけでもと言って導入してもらおうと思っていた。（要は、真希なりにＳＴＴの装備が８９式と軽装甲機動車を導入した経緯を少し真似たのであり、輸送防護車や７３式中型トラックを改造した指揮車両は当て馬でしかなかった。）
そうすることで、新型Ｓ装備とオスプレイやＵＡＶといった航空機だけでも入手し、特別任務部隊を即応近代化させ、緊急事態と荒魂事件への対応の迅速化を狙ったのである。
……なのに、甲斐はその全てを用意してくれたのだ。
有り難いことではあるのだが、輸送防護車や専用の指揮車両は今まで特別祭祀機動隊に配備されていた車輛とはワケが違うので、部品と構造の違いからくる慣れない整備の手間とそれを扱う者の再教育の必要性、更に輸送防護車と指揮車両専用の部品の管理等から、整備班の負担は増大することが目に見えていた。それに、新型Ｓ装備と航空ヘリの移動に合わせられないといった問題があるため、緊急事態と荒魂事件への対応の迅速化を目的とし、即応近代化を求めていた真希にとってはそれほど必要はなかった。（だが、その真意とは裏腹に、後にこの輸送防護車と指揮車両は活躍することとなるのだが、そんな予想は誰もできなかった。）この輸送防護車と専用の指揮車両を使う場面があるとしたら、思いつく限りでは箱根山戦のような大規模荒魂掃討作戦に使うぐらいしか思い浮かばないうえ、その大規模荒魂掃討作戦も自衛隊の支援を受けられることが確定しており、それを考慮すれば

必要かどうか……。

だが、真希が欲しがっているオスプレイも導入したことのない装備であるため、整備班の負担は上がることが懸念されている。だが、オスプレイはその人員輸送能力の高さからくる幅広いスペースを利用して、暫定防御兵器システム（ＩＤＷＳ）等を搭載できることからガンシップ化と早期警戒機のＥＶ―２２を検討される程の拡張性の高さ、そして元からそのように設計されていた人員輸送能力を活かし、非戦闘員の避難にも使えるという幅広い運用が可能なのであり、将来性も有り、即応近代化を求める真希としては必須の装備品であると考えていた。

……そのため、真希としては新型Ｓ装備を着用した刀使達を航空ヘリ等で送り、迅速に展開するのが理想であるのであって、新型Ｓ装備とオスプレイといった新型輸送ヘリが特に重要で、その次にスキャンイーグルやパックボット　スカウトといったＵＡＶやＵＧＶが欲しいのであった。そのため、輸送防護車や７３式中型トラックを改造して新造した指揮車両は当て馬でしかなかったのである。

そんなことを思い出しながら、真希は甲斐に呼ばれ、その際に言われたことを思い出していた。

「かなり手間取ったが、どうにか用意できた。」

これだけの装備品をかなり手間取ったとだけ言って、涼しげに、且つ遅れて済まないと言う甲斐に、どうやって用意できたのか聞きたかったが、真希は止めておくことにした。

「それとだが、新たに来る新型Ｓ装備は折神家支給の携帯端末と有線で繋げばスペクトラムファインダーの機能がバイザーに表示されるようになったことで、スペクトラムファインダーの画面を見ながら荒魂を捜索すると片手が塞がれる問題を改善した物だ。先行配備したＳ装備もこちらに送ってくれれば、直ぐにでも改良できるだろう。……他に必要な物は有るかね？」

（更に複雑な機能が追加されている!!？）

要求通りの装備品が贈られ、そのうえ新型Ｓ装備の機能も追加されたことに真希は萎縮しながら答えるしかなかった。

「い……いえ、とんでもありません。手厚い支援に感謝の言葉しかありません。」
「そうか、それで私もお願いしたいことが有るのだが。」
（……つまり、この手厚い支援はそれを言うための布石？）
　このとき、真希は甲斐のお願いという言葉にそう思いつつ、嫌な予感しかしなかった。
「特別任務部隊は今後、君が総指揮することになった。」
「……はっ？つまり、どういうことで？」
「何、そこまで気を張る必要は無い。君の武勲を考慮すれば妥当な人事だ。…それと、私としてもあまり編制のことは口に出したくはないのだが、鎌倉での騒動を解決した五名と此花　寿々花隊員。それに長船女学園の刀使を数名は抜擢するように。伍箇伝の精鋭中の精鋭の刀使が集まって編制され、新型Ｓ装備と無人機といった新型装備を使い、鎌倉で飛び散ったノロの回収と荒魂事件の早期の解決を目指すと公表して方が国民受けは良いだろう。」
　つまり、鎌倉での騒動で大活躍し、一躍時の人となった可奈美達の名声を利用して、注目を集めようということかと理解した真希。政治的な理由が多分に含まれることは分かった。だが――、
（……長船と鎌府も交えての共同作戦か。……指揮するのが一苦労しそうなことを。）
　現在長船と鎌府は、横須賀湾にて朱音が鎌府の刀使に撃たれ、それに激昂した舞草の刀使達が乱闘騒ぎを起こし、刀剣類管理局の社会的地位が失墜した事件以降、鎌府の一部の者達は激昂した舞草の刀使達が長船の刀使であったことから長船を嫌悪しており、それに対し長船の一部の者達も朱音を撃った実行犯が鎌府の刀使であったことから嫌悪しており、その者達は互いに反目し合っていた。
　そんな状況下の中で伍箇伝に所属する優柔な刀使を一つに集約した部隊を創設すると言われ、その部隊の指揮を任せられるのである。
　上記の長船と鎌府の関係性から、他の部隊との連携によって真価を発揮する新型Ｓ装備を使う部隊なのに、現状いがみ合っており、真希や寿々花が執り成そうにも、長船側は真希と寿々花のことを元親衛隊

ということで紫の部下としてしか見ておらず、鎌府側も長船との協調を断固として拒否しているという状態であった。

そんな状況下にあり、実力が有るとはいえ、実際は他校から寄せ集めただけで信頼関係の構築とは無縁のおよそ成功するとは思えない部隊。

「し……しかし、ぼ…私(わたし)が指揮しても良(よ)いのでしょうか？恥ずかしいことですが、私は元親衛隊ということもあって管理局内には反発がありますし、甲斐陸将補が人事に介入したことがバレれば問題となります。それに私は一介の刀使です。そのような大部隊を指揮するには適切ではないと思われますが？それに、朱音局長代理と話を通しておかないとこの場で直ぐの返答はできかねません。」

僕と言いかけたところを私と言い直して、真希はやんわりと断ろうとしていた。

事実、寿々花もそうだが、舞草の重鎮からは反発されている。

「そこは心配要らん。邪魔な旧折神派と舞草の連中はこちらで黙らせておいた。それに、朱音局長代理も喜んでこの話を推してくれたから問題は無い。この数日後には、箱根山戦の荒魂掃討作戦の成功と新たな即応部隊の創設に尽力してくれたという功績で、多少無理矢理ではあるが局長直属の特別任務部隊の指揮官となる辞令が下るはずだ。」

だが、逃げ場は全て塞がれてしまっていたようであった。

最早、その部隊を指揮し、成功する以外無いかのようであったと、いや、そういうことであると真希は改めて思った。

（……もしかして、失敗させて防衛省の意向に従わせようとしているのか？）

甲斐は真希が率いることとなった特別任務部隊を失敗させると同時に真希や朱音達を失脚させ、特別任務部隊の失敗によって権威と権力を失った刀剣類管理局を防衛省の意のままに動かそうとしているのではないか？と疑っていた。しかし、

（いやぁ、苦労したな。……真希君は喜んでくれただろうか。）

当の甲斐はそれだけしか思っていなかった。

何故、彼が今回このような行動を取ったかというと、単純に真希が

喜んでくれるだろうと思ったからであった。
御前試合の大会二連覇という名声、その後も親衛隊として数多くの荒魂討伐任務をこなし、今回の箱根山における荒魂掃討作戦も他の部隊を指揮しつつ成功させたこと。そして、真希よりも年上のＳＴＴの隊員達が何の疑問も抱かずに真希の指示に従っているところから異性同性を問わず慕われているのが伺え、荒魂掃討作戦以降は他の自衛官からも評価が高い真希が提言することならと甲斐は信頼し、要求通りの装備品を苦労しながらも、なんとか調達したのである。
つまり、真希達を職責から遠ざけ、内部工作する意志は甲斐には無かった。
どうしてこうなったかと言えば、甲斐は二十年前は江ノ島にて陸自の部隊を率いていたときに荒魂に襲われた際、刀使の部隊に助けられたこともあって刀使に対して悪感情を抱いていなかったことと、真希が提言するＳ装備刀使による即応性の高い部隊が成功すれば、防衛省が構想する多次元統合防衛力の実証性が証明され、それらを推し進める防衛省も評価されるということとなる。そういった理由も有って甲斐は真希のことを高く評価していたし、必要な装備をどうにか集めていた。
そのため、甲斐は真希のことを御前試合の大会二連覇と親衛隊として数多くの荒魂討伐任務をこなし、年上のＳＴＴ隊員等から年下の真希に指示されることに不満を抱いていないことからも、高い実績とカリスマ性が有るということ。
加えて、他の部隊との合同作戦でもある箱根山における荒魂掃討作戦を無事成功させたといった点を鑑みると、真希のことをＵＡＶといった無人機を必要とする先見性を持ち、意見が有れば上役でも堂々と述べる潔さ、そして何よりも他の部隊を難なく指揮することから指揮官としては申し分無いほどの人材であり、このまま一刀使のまま埋もれさせるのは勿体無いとして、甲斐は真希のことをやたらと高く評価していた。
しかし、真希自身のそれらのカリスマ性の自己評価は『自分の指示に従っているのは、自分が指揮官であるから。』という低い評価であ

る。そのうえ、彼は朴念仁なため、寿々花始め他の刀使達から好意を得ており、そのような感情を向けられていることに全く気付いていない。

つまり、真希に好感を抱いている甲斐のことを気付かなかった朴念仁の真希が引き起こした一幕であったのだ。

そうとは露知らずに真希は甲斐を疑っていたが、

（……いや、そんなことをする理由も無いし、味方を疑うのは良くないだろう。全く僕らしくもない。甲斐陸将補、申し訳ありません。）

……それに、冷静に考えれば甲斐も特別任務部隊の即応部隊構想の話しに乗っているのだから、失敗すれば甲斐にも責任を問われることになると理解しつつ、心の中で改めて謝罪する真希。

とはいえ、優が今現在どのように扱われているかが判明したら、その謝罪を取り消す程に嫌悪の目を甲斐に向けることとなるだろうが……。

「…ま、まさに我が世の春ですね。……分かりました。謹んでお引き受け致します。」

だが、多くの支援をして貰い、ここまでお膳立てをしてくれた相手の願いを無下にすることなど出来ない真希は、若干引きつった笑いをしながら特別任務部隊の指揮官の任を引き受ける旨を甲斐に伝えていた。

（……どうして？どうしてこうなったぁ!?）

しかし、真希の胸中は、先程の発言とは真逆で狼狽していた。

何故なら、新型Ｓ装備と各種無人兵器を多く配備してもらい即応部隊を創設するはずが、出身校がバラバラで連携も難しく、協調性も無いに等しいであろう部隊を指揮することが決まり、それをこなすのは困難であろうことが予測できるからである。

もしも自分が任された特別任務部隊に何か不手際が有ろうものなら、朱音と甲斐の責任は問われることとなり、新型Ｓ装備と無人機の配備等で掛かった費用が無駄金になったと批判され、ただでさえ刀剣類管理局への低い国民の信用は更に低下してしまうことになる。

そのうえ、昨今の情勢を鑑みると、通常兵器で刀使の支援を行うＳ

ＴＴ隊員等に対テロ訓練と救命止血法やＳＡＢＡＣＡ（分かり易く言うと、自分（この場合はＳＴＴ隊員）で手当て、仲間同士で手当て、民間人で助けようという三つの決まりを守ろうということ。）といった戦傷医療に対する訓練を施していることから、社会の安寧化を目指していた。何故ならば、昨今問題視されているグレーゾーン事態やハイブリッド戦争は常に現地の武装勢力、所謂テロリストや民兵、犯罪集団を巻き込んでから行動を起こしているのであり、政府や刀剣類管理局といった公的機関が国民の支持を無くしてしまえば、それら現地の武装勢力と化した暴徒や犯罪集団といったものに手を貸す輩が増え、更に社会が混乱し、荒魂討伐どころではなくなる可能性も有るのだ。となれば、公的機関である刀剣類管理局としても国民からの支持は必要なのである。

……そのため、このような状況下で特別任務部隊を指揮するということは新たに配備された装備への深い理解と運用法と整備体制の確立、所属する刀使の出身校の比率を均一するといった配慮が必要となる。そうしなければ、特定の伍箇伝への優遇反対といったことが騒がれたり、ストレスが原因で昨今話題となった小学校の教諭が騒がせた職場イジメとかが発生する（悲しいことに職場の雰囲気が悪くなれば、イジメといった問題が発生するのである。）可能性が有るうえ、各出身校の刀使達が様々な思惑を抱きながら、戦線に赴くことが必然的に多くなる部隊に配属され、度重なる戦闘のストレスで非行に走ってしまえば、これまた世間を騒がす社会問題となってしまうため、職場改善といったことは必須項目であり、当面の問題になるだろうということが予想されていた。

……後は、長船の刀使がこちらの指示に従ってくれるかどうかである。

「真希くん。古波蔵　エレンと益子　薫の両隊員と長船の刀使を加えるため、伍箇伝の刀使を集めた複雑な編制で大変だろうが頑張ってくれ。何か要りようがあれば、私も協力しよう。」

甲斐は期待している真希が居るせいなのか、少し顔を綻ばせながらそう答えていたが、他人の好意に超鈍感な真希は全く気付いていな

かった。
　先程の甲斐の発言『……古波蔵　エレンと益子　薫の両隊員と長船の刀使を加えるため、複雑な編制で大変だろうが頑張ってくれ。』と言われたことに何か気付いたことがあり、反応したからである。
「……分かりました。ご厚意感謝致します。それでは、私はこれにて。」
　真希は、これ以上何かを言われる前にサッサと退室することにした。
　そして、甲斐の発言に気付いた真希は、長船の刀使はエレンか薫に一任させれば良いかと考えて、コキ使おうとしていた。つまり、……ブラック上司と薫に言われそうなことを行おうとしていたのであった。
「武運を祈る。」
　そんな真希を見て、甲斐は一言そう添えて、後ろ姿を見守るように見送っていた。

　こうして、現在真希は新型Ｓ装備を装着した刀使をヘリやＵＡＶといった各種支援装備（とは言っても、オスプレイといった新型装備は慣熟訓練中であり、現在は戦力化されるまでは荒魂討伐任務等で使用できないが。）を利用した特別任務部隊の実証性を確立すべく、そして一日でも早く国民が安心して暮らせるように今日もヘリに揺られながら、次の脅威度が高い荒魂観測地域へと向かい、明日も明後日も戦場で、月月火水木金金の精神で真希達は働いていた。
　そのため、真希は出世するものの、自分の蒔いた種が原因で、それに苦慮することになるのであった。

帰ってきた大荒魂

刀剣類管理局、局長執務室――――。

本部長の紗南と局長代理である朱音は、あることについて話し合っていた。

「特別希少金属利用研究所に居た柳瀬、エレン、衛藤といった3名の隊員は、このフードを被った不審者に襲撃され、特別希少金属利用研究所に保管されていたノロを強奪されました。その後も回収班を襲撃してノロを強奪しているようですが、……その際に、妙な力を使っておりまして。」

「その妙な力というのは、親衛隊第三席と同様の物でしょうか？」

「……ご存知でしたか。しかし、何者でしょうか？……やはり、旧折神派の……」

特別希少金属利用研究所で可奈美達を襲撃し、その後も荒魂討伐を終えた回収班のノロを奪っている和樹のことについてであった。

彼について話している理由は蝶型の荒魂を伴って特別希少金属利用研究所を襲撃した件もそうだが、親衛隊第三席の皐月　夜見と同様に蝶型の荒魂を使役していたことを特に問題視していた。だが、和樹と刀剣類管理局との接点は妹が刀使であったぐらいでしかなかったため、紗南と朱音は襲撃者が何者なのかは未だに分からずじまいであった。

「私にも分かりませんが、何らかの関連性を持っていると見て良いでしょう。」

「ええ、蝶型の荒魂がスペクトラムファインダーに反応しない理由が判明する前に彼を捕らえて情報を得ることができれば良いのですが……元親衛隊の獅童と此花は多忙により、まだ完全に抜けていない状態ですし、その両名と〝あの子供〟を失うことで更に状況が悪化することは未然に防ぎたいので。」

朱音と紗南が和樹を問題視する理由。それは和樹が出す蝶型の荒

魂が夜見と同じくスペクトラムファインダーに反応しないことに疑問を抱く者が増え、優の中に居るタギツヒメ、刀使の充足率の低下によって多忙となった真希と寿ヶ花の体内に有る荒魂が暴かれ、二十年前の相模湾岸大災厄の真実が暴露されれば、今まで以上に刀剣類管理局と刀使、そして日米両政府に対する世論の悪化を招きかねないと紗南は朱音に述べていた。

「つきましては、この男に関する情報を制限したいのですが。宜しいでしょうか？」

「一部の者にだけ、知らせるということでしょうか？」

「ええ、皐月隊員と同様であるならば、情報は制限しておく必要が有りますので。」

薫がこの場に居れば、「勿体つけることか？」と言うであろうが、情報を制限したい理由があった。

一つは、親衛隊第三席と同様の力であるなら、どうやってその力を得たのか内密に探りたかったこと。

二つは、この襲撃犯が刀剣類管理局の人物と何らかの関わりがあった場合、あまり事を荒立てればその人物が、この襲撃犯を証拠隠滅のため、抹消する可能性があったからである。

上記の二つの理由もあって、内密に和樹を捕らえようとし、旧折神派である綾小路武芸学舎の結月学長には、和樹に関する情報を与えなかった。

それ故に、和樹は刀使を救いたいという意志で動いたことを朱音や可奈美達に知られることもなく、荒魂化した人間として、それらを何事もなく討伐した優とトーマスが追うこととなった。

そして、優に追わせることによって、タキリヒメ派の政治家からも優をタキリヒメに取り込ませることを延期させることができた。理由は、タキリヒメが何者か分からない和樹に襲われることがないようにということであった。

「……分かりました。そのように手配します。それと、紗南本部長。衛藤さんと十条さんに依頼があります。……護衛任務です。」

「……どのような方のでしょうか？」

「『市ヶ谷の姫』が衛藤さんと十条さんに面会したいそうです。……そのため、市ヶ谷へ向かう私の護衛任務としても同行をお願いしたいのですが……」

紗南は、朱音からの突然の話に驚くものの、至って冷静に、短くそう返答していた。

「……分かりました。当人達にはそのように伝えておきます。」

そんなこともあり、可奈美と舞衣は沙耶香の誕生日を祝えなかったことを残念に思っていたが、それはそれで良かったのかも知れない。

何故なら、沙耶香と姫和、そして薫は群馬山中と江仁屋離島で起きた荒魂騒動でそれどころではなかったのだから……。

その数日後、防衛省市ヶ谷へ向かう車内。

朱音は、可奈美と姫和に状況を説明していた。

「これからとある重要な相手と面会します。」

「その重要な相手って、誰のことなんです?」

急に紗南から、朱音局長代理の直々の指令で連れてこられた可奈美は、重要な相手とは誰のことなのか尋ねていた。

(……早く終わらないだろうか?早く優に会いたい元気な姿が見たい抱き締めたい見てもらいたい。)

だが、一方の姫和は今回の任務に対して、余りやる気がなかったことに可奈美以外には気付かれていなかった。

「とても重要な相手です。……正直なところ、何が起こっても不思議ではありません。だからこそ、その相手も貴女方との面会を望んでいるのでしょう。そして私からも同行をお願いしたいのです。」

「……私達でお役に立てるんですか?」

朱音の話を聞いた可奈美は自分なんかで役に立つことがあるのか?とつい尋ねてしまう。

「貴女達でなければならないのです……。」
「私達でなければ？……っ！」
「……もしかして。」
だが、朱音に可奈美と姫和でなければならないと強く言われ、困惑しながらも可奈美は自身の御刀を見て、あることに気付く。
それは、タギツヒメと何か関連の有ることでは無いのかと。
そうしている内に朱音と可奈美達は市ヶ谷の防衛省に到着し、防衛省の事務官らしき人達に出迎えられていた。
恐らく、その重要な相手への案内係の様な者なのだろうと可奈美達は理解しつつ、市ヶ谷の様子を横目で伺っていた。防衛省市ヶ谷の警備をしている自衛隊員は武装し、少しピリピリしている様子であった。後は、警護の刀使が居るが、長船の刀使ばかりだったことに可奈美達が気付いたのは、市ヶ谷の警護に付いていた孝子と聡美が居たからであり、その様子から可奈美と姫和は舞草の中でも信頼できる者のみで警護しなければならないほどの重要な相手であると勘繰っていた。
そして、その聡美から「気を付けてね。」と言われたことに可奈美と姫和は気にならなかった……。

市ヶ谷の防衛省内でも、特に厳重に警備された通路を通りながら、幾層もある自動ドアが開かれる。それだけでも、その重要な相手は厳重に警護しなければならないことが充分に伺えた。
だが、その自動ドアが全て開かれた先には、監禁部屋というには不釣り合いな内装がされていた。
目の前には階段がある祭壇のような物が建てられていて、何とも言えない荘厳さがあったからである。
そして、その階段のある祭壇のような物のその一番上には肌も白く、眼元を手の様な物で覆っている〝人〟らしき者とどこか元気の無い綾小路武芸学舎の刀使が鎮座して居た。

「「！」」

だが、可奈美と姫和はその〝人〟らしき者に御刀が反応し、音を響かせたことから、その〝人〟らしき者は〝荒魂〟であると判断し、身構えていた。

「構えを解いてください、拝顔を賜り光栄です。……タギツヒメ。」

しかし、朱音に制止され、可奈美達は構えを解くが、それよりも朱音の〝人〟らしき者を「タギツヒメ」と呼んだことに驚いていた。

「……その名を指す者は既に居る。」

「では、何と？」

「……タキリヒメと呼ぶが良い。」

だが、「タギツヒメ」と呼ばれた〝荒魂〟はその名で呼ばれることを拒否し、別の名で呼ぶようにと朱音達に言っていた。

「承知致しました。私は――――」

「衛藤　可奈美、十条　姫和、折神　朱音だな。存じておる。」

「分かりました。……では、タキリヒメ。率直にお伺い致します。あなたは我々に仇名す者でしょうか？」

朱音はタキリヒメと名乗る〝荒魂〟に人間と敵対するのかと率直に尋ねていた。しかし――――、

「……。」

言葉を返すことなく、沈黙をしていた。

「？」

何か不遜なことをしたであろうかと身構える朱音。その沈黙が長く続けば続くほど、この荘厳な場所と相まって、朱音の心はぐらぐらと揺れながら不安になるが、それと反対に可奈美と姫和は突然の話しに入ってこれなかったが、タキリヒメの長い沈黙のお陰で段々と冷静になれることができた。

だが、それがタキリヒメの狙いであった。

今、可奈美と姫和は大荒魂の一部であるタキリヒメを見て、不安を感じており、話を聞く態勢ではないのだ。だが、それは無理も無いことである。

今の可奈美と姫和は紫に取り憑いていた大荒魂と優に取り憑いて

いるタギツヒメと比べているのだろう。なら、その不安が息詰まる沈黙へと変化し、〝自分の声〟を聴く最良のタイミングを待つべきだとタキリヒメは判断した。

そして、朱音は何もせず、長すぎる沈黙に冷や汗が出ていた。それを見逃さなかったタキリヒメは、局長としてはよくやっている方かも知れないが、政治家や女優としては素人であると理解した。

時に『沈黙』は、心を直接訴えかけ、御刀にも勝る武器となりうるのだとタキリヒメは理解していたが故に、それを最大限利用していただけであった。

その証拠に、タキリヒメが使う『沈黙』という武器を前にした朱音の心は、親から離れ迷子になった子供の様に狼狽えるばかりであり、可奈美と姫和は場の空気を悪くしないよう静寂を守っていくと心掛けると同時に冷静になっていった。そして、話しかけるタイミングは出鼻を挫くために、朱音が何か話しかける時であると確信し、その時こそが沈黙を破るべき時であると判断していた。

「……もう一度お「そんなことなどどうでも良い。その前に我に国籍と人権という権利は何時与えられるのだ?」っ……。」

急に喋りかけられた朱音は言葉に詰まり、タキリヒメの思い描いた通りに出鼻を挫かれ、動揺してしまう。

「我はこの国の政治家となるべく、随分前にそれを求めたが未だ良い返事を聞かない。これは、どういうことだ?」

タキリヒメは自身がこの国の政治家となるべく、国籍と人権を自身に付与するようにと大分前に求めていたが、その返事が未だに返ってこないことに不満を抱いているようであった。

「し、しかし、相模湾岸大災厄の被災者もおりますので、反感を買うのは必定であります。その場合は、先ずは我々に協力をお願いしたく……。」

しかし、朱音は江ノ島でタギツヒメやタキリヒメが起こした相模湾岸大災厄で人を大勢殺しているため、それは直ぐにはできないことであると述べていた。

「なればこそだ。状況は絶望的だ。それ故に、我は政治家となるべく

国籍と人権を求めた。何故か分かるか？理由は、社会に要らぬ混乱を起こさぬようにするためだ。」

「……どういうことですか？」

しかし、朱音はタキリヒメのことを警戒しつつ、どういうことか尋ねていた。

「先ず、仮に荒魂の我がこのまま社会から信用されていない刀剣類管理局と協力すれば、どうなると思う？荒魂討伐を生業とする刀剣類管理局は荒魂と手を組んだと見るだろうな。となれば、刀剣類管理局の信用は更に失墜することとなり、社会は混迷を極め、最悪国家機能は麻痺するかもしれん。そうなれば、荒魂討伐は勿論、お前の言う人と荒魂の共存共栄は達成することが難しくなるだろう。……であるならば、我が国政に打って出て善政をし、人々の荒魂に対する認識を変えてから刀剣類管理局に協力した後、荒魂と人間の共存共栄を邁進するのが最良であると考えたからだ。」

「……つまり、人々の信用を得るために政治家となり、そのためには人権と国籍が必要だったということですか？」

タキリヒメは人々からの信頼を勝ち取るために政治家になるということを決意したと朱音に答えていた。そして、これは刀剣類管理局のためになるとも……。

「そうだ。我はお前達に手を携えて、協力しようと提案するために此処へ呼んだのだ。共に多くの病根に犯された国を救うべくなっ！」

そしてこの国を救うべく、可奈美と姫和、そして朱音の三人の協力を得るべく此処へ呼んだのだと答えるタキリヒメ。

「……どうやって救う気なんですか？」

そのタキリヒメの答えに、朱音はどのようにしてこの国を救う積もりなのか尋ねていた。

「そうだな。では、可奈美。お前は御刀を今は何処で手入れして貰っている？」

「……信頼している砥師です。」

「そうだな。姫和は？」

可奈美の答えに満足したのか、タキリヒメは姫和に可奈美と同じ質

問をしていた。
「……私もだ。」
「そうだ。皆、壊れた物が有れば、信頼している者や店に送り、直してもらっているのだ。それは可笑しなことではない。この者が責任を持って直してくれていると信頼しているからこそ、彼女達以外の者もそういった理由で信頼している砥師や青砥館といった信用している店に送り、責任を持って直してもらっていると理解しているのだ。……ところがこの国は何だ?皆が信用し、声高らかに耳障りの良いことを騒ぐ連中。そやつらが吐く言葉は決まってこうだ『差別を無くそう。』『経済の対策をすべきだ。』とな。しかし、そんな脆弱な彼らに最も重い責務を伴う政治を任せた瞬間、この国はどうなった?彼らは税金を上げ、若者を貧しくさせ、低賃金で働かせる労働者を余所から騙して連れて行き、その者達の雀の涙ほどの利益を貪るうえ、少々の利権にしがみつく傲慢な金権主義者そのものだっただけではないか。そして、彼ら金権主義者共はこの国を絶望的な状況にまで瀕しさせた責任すら取っていない!それ故に、国民は「今、選挙に行っても何も変わらない。」「社会主義国家のようだ。」と言われるほど今の政治を信用していない。彼等は信用されている砥師や青砥館以下のカスだっ!!……その証拠に、彼ら金権主義者の言う言葉とは裏腹に、この国は今では失業者は溢れ、次世代を担う若者は高い税金によって更に貧しくなるという２０年前より絶望的な状況を創り上げただけではないか!?」
　そうして、タキリヒメは今の政治を批判し、
「こんな絶望的な状況に在る国の出生率は地を這う状態であるが無理も無い!こんな絶望的な状況に在る国に誰が子供を産み、育てたいと思う!!そうだ、この絶望的な状況を打破するためにこの国は生まれ変わらねばならない。誰もが時代の夜明けを感じる変革が必要なのだ。国民に信用され、確固たる信念を持つ力強い指導者がこの国には必要なのだ!!国民と国家が一体となるほど、国家は国民に信用されねばならない。何故なら、選挙に行っても何も変わらないというあやふやな心情が蔓延る絶望的な世界なのではなく、国民が国政に参加している

という強い意志を持つ力強い国の元で、素質や命を連綿と受け継ぐ子供達に明るい未来を提供するため、今直ぐにでも腐敗した政治を打破するほどの変革をする力強い指導者が必要なのだ!!」

刀使の殆どが腕が良いことで信頼して、御刀の柄巻き等を新調して貰っている青砥館を例に出して、この絶望的な状況に在る国を力強く信用されている指導者の下で絶望的な状況を打破することができる変革を促すことで、国民の支持を得ると同時に信用を得ようとし、そのための指導者になろうとしていたとタキリヒメは説明していた。

しかし、タキリヒメに「こんな絶望的な状況に在る国に誰が子供を産み、育てたいと思う!!」という言葉に反応した姫和は、相馬原駐屯地の宿舎で優に言った〝人は人と交わり子を成す〟等のことを言ったことを思い出し、タキリヒメの言っていることがどこか事実であると感じ、心苦しく思っていた。

……だが、姫和は気付いていない。荒魂の話しに聞き入ってしまっている自分が居ることに。

「しかし、その指導者は力強さだけではなく、国民から強い支持を得なければならない!!それには、不法移民等の問題を解決し、支持を得ると同時に、この地に古くから住まう民からも支持を得なければならないのだ。だからこそ、荒魂である我が起たねばならないと確信したのだ。全ては荒魂と人間の境界線を取っ払った理想郷を体現させ、どんな時代よりも、どんな国よりも強固な国家を創らねばならないためだ!!そのために、我はこの現世に荒魂として生まれたのであり、その宿命に従い力強い指導者となることを決意したっ!!!」

タキリヒメは熱弁する。

若者は貧しく、高い税金に苦しみ、失業者に溢れるという絶望的な状況下では、出生率が地を這うように低いのは仕方がないことであると。だが、自身が大荒魂から分かれ、この世に現れたのは宿命であり、その宿命に従い力強い指導者となって、荒魂と人間が共存共栄することで、この国を強固な物へと変貌させ、この国を絶望的な状況から脱すると熱く語っていた。

「……その指導者になれるのですか?」

タキリヒメが言う〝指導者〟とは、己自身のことを言っているのかと尋ねる朱音。

「そうだ。……嘗て、悪魔と呼ばれたヒトラーやスターリン、ポル・ポトという〝人間〟は我以上に非道な者であるが指導者になれたと聞いておるぞ？」

タキリヒメはそう言って、過去の人間の指導者の悪い部分を挙げて、朱音に反論していた。

「それに、我がこの国の指導者となり、今よりも豊かな国になれば国民の意識も変わる。そうなれば、世論は荒魂をとにかく恐れるという考えから、融和政策を支持するようになるかも知れんぞ？そうなれば、優という少年の待遇は少しでも良くなるのではないか？」

タキリヒメは此方につけば優の待遇が良くなると言って、優の姉である可奈美と優のことを気にしているであろう姫和を攻略しようとしていた。

だが、タキリヒメは事前に姫和のことを調べており、父親がＳＴＴ（特別機動隊）の隊員で荒魂によって殉職し、母親もタギツヒメを封印する際に命を落としているというのに、タギツヒメと融合している優を姫和が斬ろうとしないところから、何かしら負い目を感じていて斬ることができない状態なのだろうと推察しており、先ずは姫和から説得しようと決めていた。

「それにだ。誰がこの国にＳ装備といった技術をもたらしたと思っている？誰が隠世技術の恩恵をこの国に授けたと思う？我がこの国の指導者となれば隠世技術は独占することができ、その技術力でこの国をもう一度、経済大国として再び蘇らせることができるのだ。それに、我は四ヶ月前はノロを支配下に置き大人しくさせ、殉職する刀使の数と荒魂による被害は激減させていたのだぞ？我がこの国の指導者となれば荒魂を中心とした防衛組織を創設し、この世界の兵器が効かない無敵の部隊を指揮することもできる。そうなれば、離島防衛等も荒魂に任せることができ、年々増加している自衛隊と刀使の負担も減り、防衛費といった政府の歳出を減らせられる。……これによって、国の歳出を減らすと同時に隠世技術による利益で国民は税金とい

う負担から逃れられることができ、その蓄えた力で不況という暗い世界を打破するのだ。……こんなことができるのは、荒魂である我だけだ。そう考えれば、我につくだけでこの国に多大な貢献をし、国民の生活を守っているのと同じことだ。」

タキリヒメはS装備といった隠世技術をこの国の発展に使うううえ、この国の防衛力に荒魂を使えば銃弾といった近代兵器が効かない無敵の武装勢力を創設することができ、これによって年々増加の一途を辿る刀使と自衛隊の負担を減らし、防衛費等の政府の歳出を削減すると共に税金を減らすことによって、再び経済大国として復活させると述べつつ、朱音達に近付いて行った。

それを見た可奈美は御刀を構えて、タキリヒメを警戒していた。

「待て待て、我は話しをするだけだ。」

「!……信用できるか!!」

可奈美の様子を見たタキリヒメは手を上げて、朱音には危害を加えないと身体で表現していた。しかし、可奈美を見て慌てて構えた姫和はタキリヒメの話しをもう少し聴きたいと思う心を抑え込むように、激昂しながらタキリヒメのことを信用できないと答えていた。

「二人とも!……構えを解いて下さい。」

朱音に構えを解くようにと命令された可奈美と姫和は渋々といった感じで構えを解いていた。

「……タキリヒメ、申し訳ございません。」

「構わん。我も図々し過ぎたかもしれん。」

タキリヒメはそう言うと、三日月宗近と大典太光世を隠世から取り出すと、綾小路の刀使に向けて投げていた。

「お前が持っていろ。」

「うわわっ!?」

その綾小路の刀使はタキリヒメの突然の行動に驚きながらも何とかキャッチしていた。

「ねぇぇぇ!タキリヒメ危ないじゃん!!」

「煩いぞ、我の従者なら、それぐらいどうにかしろ。」

「御刀投げる奴が偉そうなこと言うなっ!バカァッ!!」

綾小路の刀使は恐れ知らずなのか、タキリヒメに抗議していた。
「……失礼ですが、あの方は？」
しかし、朱音はタキリヒメに話しかける綾小路の刀使は何者なのかと尋ねていた。
「ああ、アレは田辺　美弥とかいう一介の我の従者だ。」
「違いますっ！私は綾小路武芸学舎中等部一年の刀使田辺　美弥と言います。朱音様っ!!」
「「……。」」
涙目になりながら朱音に訴えかける美弥。それを見た朱音達は何とも言えない気分であった。
「私、あの人というか、タキリヒメのことを本部に連絡したら、国の偉い人達からタキリヒメと一緒に此処に居ろと言われて途方に暮れていたんです……。」
この美弥という刀使はタキリヒメと偶然に出会い、本部に連絡したのが運の尽きであった。
本部に連絡し、タキリヒメを送ったら、突然タキリヒメから「あいつは我の従者だ。」と言われたことと、秘匿されている部分の多い二十年前の大災厄を引き起こした大荒魂と接触したということで図らずも機密に触れたことで美弥はタキリヒメと共に此処に監禁されていた。
「……ああ、歩ゴメン。一緒に頑張ろうって約束したのに。」
なんでこんなことにと嘆きながら、俯く美弥。それを見た朱音はタキリヒメに彼女のことを再度尋ねていた。
「……あの、彼女とはどういった関係で？」
「あの女は我の従者として使っている者だ。……まあ、どのようにして出逢うことになったか、説明しよう。」
タキリヒメはそう言って、綾小路武芸学舎中等部一年の刀使田辺美弥との出会いから、どのように従者の様に扱うこととなったか話そうとしていた。

国中を巡って

タキリヒメは美弥との出会いから此処に居る推移を可奈美達に話していた。

――――四ヶ月前の我等は、あの幼子、優という者に敗れたうえ、荒魂を喰うという行為を行ったことに我等の本体は大いに恐怖を覚えて、追われないようにするために関東一円にノロをばら撒いて逃げていったのだが、その本体は我を見捨てて隠世へと逃れ、本体を含め三体に分かれてしまった。

……何故、我等大荒魂があのような子供に負けたのか？ノロの総量からして我等の方が上であるのに……。

そんなことを考えながら、彷徨っていると珍妙な恰好をした者達が居ることに我は気付き、近付いてみたのだ。

もしかして、我以外にも人の姿となっている荒魂が居るのだろうか？と思い近付いてみたのだ。すると――――、

「それ、何というキャラクターですか？」

「誰のコスプレですか？」

人の姿になっている荒魂ではなく、コスプレイヤーという者だった。

だが、一方のコスプレイヤーの周りに居たカメラ小僧共も我のことを何かのアニメかマンガのキャラのコスプレだと思ったのだろう。全く忌避感を抱かずに何のコスプレなのかと馴れ馴れしくこの我に尋ねてくるわ写真を勝手に撮ろうとするわ大変だったわ。だが、今になって思えば、これは無理も無い話だと我は思う。荒魂が人の姿となり現れ、人と同じく話せる知能を持つということを情報規制したのだから、一般人が知る由も無い。荒魂だと思えという方が酷な話というものだ。

「あっ、いやすまぬ。我……私もこのキャラという物が良く分からん。それと、見知った者と見間違えて失礼した。」

我は荒魂である自分に臆することなく近付き、話しかけ写真を撮る人達を見ていると、奇妙な感覚を抱いてしまい、そのときの我は逃げるようにその場から急いで離れるしかなかった。

あのときの我は、あの珍妙な恰好は何なのだろうか?と悩んだものだ。無理も無い話だとは思わんか?人からかけ離れた格好を人が自らしているのに、人ならざる物と揶揄される荒魂を畏れるのは矛盾している話だと思ったのだからな……。

とはいえ、我はそこから学びを得たのも事実だ。人は我を畏れておらぬと、周りの者と変わらぬように接してくれると……。

そんなこんなで我は今後どうすべきか辺りを歩いていたのだ。そうしていると、我は山中の中に居てな。仕方なかろう、本当にどうすべきか悩んでおったのだから、そんなときにまた人が寄って来て此方が困惑するのは嫌だったのだから、人が居ない静かな所へ向かった。それだけのことだ。

そんな山中の中に居たら、我のノロに惹かれてやって来た荒魂と出会ってな。それで、三日月宗近で斬り捨て、吸収したのだが、そんなときに田辺　美弥という一人の三流刀使と出会ったのだ。

……美弥よ。そんなふくれっ面を晒すでない。

むしろ、そこらへんのへっぽこ刀使から我の従者に格上げさせてやったのだから、此方が感謝してもらいたい程だ。だが、剣の実力は我の従者として相応しいくらいには上げて欲しいものだがな。毎日折神　紫から学んだ剣術等を教えてやっているのに上達せんのは感心せん。……だから、隅でいじけるな。

話が脱線したな。

何故、田辺　美弥だけと出会えたのかというとな、初めての実戦で緊張していたうえ、自分の所属する隊とはぐれるという大ポカをやらかしたのだ。だが、そんな荒魂の我を見て人だと勝手に勘違いしおって、「ここは危ないから、避難して下さい。」と言って我を安全な場所まで送ろうとしたのだ。自分の所属する部隊の隊長に携帯端末で連

絡しようにも山中であったからか圏外で連絡できない状況であったということ、それに荒魂の脅威に晒されないようにするため、我の避難を優先したのだ。だが、こやつは道を間違えるので遭難するわ、イノシシやヘビに驚くわ、何の当てにもならんから、殆ど自力でどうにか刀剣類管理局の本部に連絡して、こやつの窮地を脱することができたのだ。

……だから我はこやつを三流刀使だと思ったのだ。だがな、後で調べて分かったことだが、そのときのこやつは特別任務部隊に配属されたばかりで知らぬ土地ということもあって右も左も分からぬ状態であり、しかも自分の所属する隊長が隊長経験の無い者であることに気付かなかったのだ。

そうして、意思疎通も上手く行かず、この者は自分の所属する隊とはぐれたということだ。……刀剣類管理局の刀使の離職率の増加による人材不足はここまで深刻ということだ。ここは、改善すべき点であるな？朱音よ？

まあ、そういう訳で我はこの国の政府に保護してもらうのが一番だと思うて、四ヶ月前の鎌倉で分離した大荒魂だと刀剣類管理局の本部に話したのだが、それが原因で政府の方にも話が広がってな。

それで、我はここへ移送され、軟禁されるということが決まったという訳だ。それと、美弥も我と出会った経緯について市ヶ谷で事情を聴取することと、我のことを外部に、特に綾小路に漏らしたくないということで美弥も我の監視を兼ねて一緒に居るということが決まり、我と共に車で市ヶ谷に向かうことが決まったのだ。

「……荒魂だったんだ。」

美弥は我のことを睨んでいた。

我が荒魂だったことを隠していたのが気に食わんらしい。

「仕方あるまい。山中に居る前は街中に居たのだが、誰も我のことを荒魂だと思わなかったらしく、我も一緒に写真とか撮られたんだぞ？」

「……嘘でしょ、それ。」

「嘘ではない。「ここは危ないから、避難して下さい。」とか我に言った

お主に信じてもらえないと思ったのだ。」
　我は、美弥の物真似をしながら話さなかった理由を話したら、美弥は「うっ！」と言って言葉を詰まらせおった。事実、街中に居た人間達は我のことを荒魂だと一切思わず、一緒に記念写真を撮りたいとか言う奴も居った
「……じゃ、名前。」
「ん？」
「名前！……そんぐらい聞いても問題ないでしょ!!荒魂、荒魂って言うのは何かおかしいからっ!!」
　名前……美弥にそう尋ねられたが、我の固有の名は無いのでどう答えるか悩んだ。
　そのときの我はできれば、強そうで偉大そうで力強い指導者みたいな名前が良いなと思ったから、ついこう答えてしまった。
「……ハイル・ヒトラー。」
「嘘つけっ！子供かアンタはっ!!」
　ダメか……。なら、どう答えようかと考えていると、ふとタギツヒメという名前自体、宗像三女神の一柱の名前であることを思い出したのだ。ともすれば、我としてはタギツヒメ以上の存在であると伝わるうえ、霧に迷う者を導いて行けるような名前が良い。そう思った我は手始めに美弥を平伏させるため、こう答えた。
「……我はタキリヒメ。霧に迷う者を導く神なり。」
「ハイハイ。そーゆーのはいいから、タキリヒメって呼ぶね。」
　我が考えて考え抜き、誰もが我のことを平伏するであろう言葉を美弥が一蹴したことに少し、ほんの少――――し傷付いたうえ、誰の心にも響かないということは理解したので、もうそうゆうことを言うのは辞めようと我は心の中で決めた……。
　そんなことばかり話している内に市ヶ谷に到着し、此処に軟禁された。
　だが、その軟禁されていた時間は我に思考の時間を与えてくれた。
――――何故、我等大荒魂があのような子供に負けたのか？
――――何故、あれほどの力を見せたのに、我等大荒魂に人は平伏

しなかったのか?
その疑問が尽きなかったのだが、美弥がテレビというものを観ておったのだ。
「……何をしている?」
「あっ、タキリヒメが難しい顔をしていたから、娯楽が必要かな?って思ったの。」
ならば、我に一言ぐらい言ってもらいたかったのだが、仕方あるまい。
我もこの国のことを知る必要があるだろうと思い、観賞してみたのだが……、
「あ~~、この時間帯ならこんな物か。」
美弥は残念そうに答えていた。
しかし、何故、娯楽の一つであるテレビをつまらなそうに言うのだろうかと最初は疑問に思ったものだ。だが、その理由は分かった。
「何だ?この素人以下の受け答えしかできない司会者は!?それだけでなく他のアナウンサーや番組メンバーの意見を潰す等もっての外だっ!!」
後に分かったことだが、このお昼の司会者はパワハラで有名らしい。だからこそ、他の番組の司会者から「オマエ、ヘタクソやなぁ。」と言われたのだろう。……納得だ。これでは周りが萎縮して、誰も発言しなくなるうえ、昼の時間にこんな罵倒ばかりする物を観たいと誰も思わん。
「何だこのニュース番組は?借金を返すために増税するとはどういうことだ?それに、政府と日銀は別だろう?なぜ一般家計と比較する?……あと、現アメリカ大統領のことをF―35を売っているからビジネスマン感覚でやっているというが、そもそもF―35は前の大統領がF―22が高価だという理由で造ると言ったところから始まったのだぞ?それに、そのビジネスマンに買わされた物という一覧の中には、そもそも5年間の中期防衛計画で既に決まった物ばかりだぞ。コイツは何故、嘘でデタラメな解説ばかりしている?」
後に分かったことだが、このニュースバラエティとかいうハイパー

メディアクリエイター並に意味が分からん謎のようなジャンルの番組の司会は、過去に自らが担当するスペシャル番組で小中学生約７０人の内、少なくとも約２０人ぐらいが子役タレントであったようだ。……やらせでしか実力を発揮できない三流以下ということか。

なるほど、それなら先程の嘘の解説しかできないのも納得だ。

「クズだ！テレビに映る物はクズばかりだっ!!」

「……まあ、それだけは言えてる。」

このときの美弥は、我の考えに賛同していた。

無理も無い。最近のテレビは刀剣類管理局を糾弾したい者達から裏で金銭を貰い、刀使を批判することが多いらしい。

しかし、こんな陳腐なことしか言わない番組を観せられているこの国の国民はどう思っているのか？

我はそんな考えが過るが、別の娯楽性の有る番組なら違うだろうと思い、違う番組を観ることにしたのだ。

……だが、娯楽を主としている番組はどれも似たようなクイズだったり、ひな壇芸人なる者共が騒ぐだけであったり、いじめのような芸人いじりをするバラエティーに長時間のマラソンを見せて感動を強要するエセチャリティー番組……。そして、不可思議だったのは毎年、何万もの人が絶望故に自ら命を絶っているということを誰も語ろうとしないことだ。この情報媒体の一角であり、文明の先駆者の一員であるテレビですらもだ。

国民にも一時の娯楽と幸せが必要であるから、テレビといった娯楽を提供する物が有るというのに、こんな愚にも付かないクズ番組を観ているこの国の国民はどう思っているのか、どう過ごしているのかと気になった我は外に繰り出すことにした。無論、テレビが映そうとしない国民の生の声を聴きたかったため、我の従者である美弥には御刀を持たせず私服姿でのことだが、そのときの美弥はノリノリで外に出たわ。よっぽど外に出たかったのだろうな……。

だが、この耳とこの目で聴衆の姿と声を聴くことができたことは幸福であった。

それら本当の国民の声を聴き、我がそれを応えることによって、全

国民が義務を全うすることができるよう期待し、必要ならば国民自身が如何なる犠牲をも払うことを期待していた。

Ｃａｓｅ１

「国中を回って、意見を聞いておる。」

「……そう。で、その恰好は何なの？」

このパートという雇用形態で働いているご婦人は我の姿を見るなり、その恰好は何なのかと尋ねていた。

無理もない。人型で人の言葉を話せる荒魂が現れたということを知らぬのだから、妙な恰好をした人か何かだろうと思ってしまったのだろう。

「この格好は、荒魂が人の姿となったらこんな姿ではなかろうか？というものだ。」

美弥は我の言葉にギョッとするが、このご婦人の反応は美弥の予想を裏切るものであった。

「アハッ、そうなの？世の中に不満が有るとかそんなところ？」

「まあ、そんなところだ。……それでだ。我は荒魂として選挙に出ようと思うのだが、何か困ったことは無いか？」

荒魂パーカーなる物が有るからもしやと思ったのだが、我の予想通り、このご婦人は笑いながら我のことを本物の荒魂だと思わず、荒魂の格好をして選挙に出るという変わった者か冗談好きの者だと思ったのだろう。

だが、これが我の狙いであった。……荒魂の恰好をした変わり者と思い込ませれば、他人にもマスコミにもこの国の役人共にも話せないことをペラペラと話すからだ。

「頭にくる事はやはり、やっぱり賃金の問題よ。旦那の稼ぎが悪いからパートで頑張っているけど、やっぱり子供のことを考えるとね……。」

「だが、女性の労働人口が上がっているから、女性の社会進出は進んでおり、その結果、喜ばしいことであると女性が言っていると聞いておるぞ？」

「ハァッ?それ誰が言ったの?何度も言うけど、旦那の稼ぎが悪いからパートに出なきゃならなくなっただけで、そんな面倒臭いこと一つも考えてないわよ?……でも、女の私が言うのもマズイかもしれないけど、それで女性の社会進出がなったと言うなら、余計に世の中悪くなりそうよね。」

「む?どうしてだ。」

「そりゃ、私以外にも旦那の稼ぎが悪いとか、結婚して働きたくない人が多いからさぁ、……結局は働く気も無い人が働いてるから今の地位にしがみつきたいのか何なのか、職場イジメとか酷くてね。前に働いていた所はそんなお局ばっかで辞めちゃった。だから今は働かないで、子供の世話をちゃんとしたいのが本音。」

「ならば、女性の社会進出は喜ばしいことだと嘯いていた奴にはそれを伝えておこう。」

「ええ、宜しく。」

予想通り、このご婦人はテレビでは言わない、この世の中に対する不満を隠すことなく述べていた。

我のことを荒魂の格好をする変わり者として、喋り易かったのだ。

「あとは隣近所に住む近所の子供もどうにかして欲しいわね。」

「むっ?それが困ったことか?」

「あら、ごめんなさい。アナタ荒魂だったわね?それじゃ、分からないわよね?いや、その隣近所に住むガキが外国人なのよ。んで、『騒ぎ過ぎだっ!!』って注意すると、〝外国人差別〟だ何だって親がヒステリーに怒るのよ。それが怖くて仕方ない。」

「注意できないのか?」

「そんなことしたら、その親に刺されるかも知れないもの。」

「分かった。善処するよう、働きかけよう。」

「ありがとう。貴女が荒魂だから話すのよ?マスコミだったら、絶対話せないわこんなこと。」

「……我が本物の荒魂だと思わんのか?」

「あら、ヤダ。それは冗談にしては笑えないわよ?それと、江ノ島付近でそれやると殴られるかもしれないからやっちゃダメよ。」

我が荒魂の格好をした変わった者だからこそ、外国人差別に繋がるようなことをご婦人は喋れたのだろう。
その証拠にご婦人は笑いながら、江ノ島付近で荒魂の恰好をしていると言わないようにと釘を刺された。

Ｃａｓｅ２

「……そうだな、只でさえここ最近は荒魂とかが増えているのに、チャイナパンダとか売ってる奴とか、髭とか生やしていてアッラーとか叫んでいそうな奴とか、とにかく胡散臭い奴らが増えている。」
「奴らはこの国から追い出すべきだ。」
「それ以外にも、半島出身の奴は半島に帰れってんだ。そんで、そんなにその国の愛国心が有るなら兵役に行けってんだ。」
「なるほど、生まれ育った本来の国に戻るべきであるということだな？」
「そうだ、好きな国に帰れ。日本生まれの奴もだ。」
その証拠に、この男達も流入し、増加の一途を辿る外国人に不満があるようだ。
それを隠すことなく、荒魂の格好をする変わった女に、隠し立てすることなく話してくれた。

Ｃａｓｅ３

「……貴女は実感があるのか？政治に参加しているという意識が。」
「無い。全く無い。……正直に言うと、ここ最近は選挙にすら行っていない。」
「どうしてだ？」
「そりゃあ……上京する前は香川に住んでいたんだけど、そこで不正な選挙が有ってね。白票を水増ししたりとか。」
「となると、香川出身のみが選挙に行っていないということか？」
「そんな訳ないじゃない。今はみーんな、不正してるんじゃないかって疑っているから、あんだけ評価されてた刀剣類管理局だって鎌倉で何しているのか分からないんだから信用なんてできる？だから、私の

周りは『選挙結果は大きな権力によって操作されている。』『投票用紙が書き換えられている。』『1人で何枚も用紙を偽造して、票数を水増ししている。』とか思い始めている人が何人か居るし、……もちろん、私は違うけどね。私は誰を選んでも一緒っていう感じがして行く気がないっていうのだけど。」

「つまり、政治に期待はしていないと。」

「そりゃそうよ。税金は上がるのに、鎌倉で何が起こったのか何も説明してくれない。私達は荒魂相手に何も出来ないし、ただ住む場所や働く場所が壊されていくのを黙って見ることしかできないのよ？そんなんじゃ不安しか抱かないし、国は私達なんかどうでもいいと思っているのよ、きっと。」

そのうえ荒魂のコスプレをした変わった女だと思っているからこそ、政府の役人や刀使には喋れない内容の話しをしてくれた。

Ｃａｓｅ４

「動物は良いわよね。荒魂さんもそう思う？」

「ああ、それは同意見だ。……ところで、今この国では何が問題だと思う？」

「……増えすぎる外国からの流入者。低賃金で働かされて、あまり良いことだとは思わない。……けど、小さな個人の力じゃどうしようもない。長野リレーとかのことを思い出すとね。」

「だが、それは裏を返せば小さな個人であっても、毛利の三本の矢のように協力し合い、大きくて強い者を国の代表として選んだときは社会を変えることができる。」

「……そうよね。」

「それに、荒魂と人が争っているのに、人同士が混ざり合うのは至難だ。例えば、あれが純血種のジャーマンシェパードとして考えてみよう。ダックスフンドと掛け合わせてみるとどうなる？」

「……シェパードダックス。」

「どんな姿になると思う？」

「プッ……笑うかも。」

「そして、二匹のシェパードダックスを掛け合わせればどうなる？もう、シェパードダックスは存在しなくなる。」
「……確かに。」
「難民を受け入れ続けているドイツにそのようなことが起こっている。」
「ホント？」
「ああ、だがそれを言えんのだ。民衆扇動罪などを調べてみると分かる。」
「……ありがとう、後で調べてみるわ。」
少しキーワードを与えれば、答えてくれた。
つまり、今の国民は言えないことへの不満が溜まっていたのだ。

Ｃａｓｅ５
「例えば、口蹄疫ウイルス。突然発生した理由は大勢の人がビザ免除によって流入してしまったからこそ、我が国の財産である多くの畜産物を失ってしまったのだ。」
「そう、そのとおりだ。……なのに、俺達はどうだ？俺達日本人や政治家どころか、テレビでさえ一言も言えない。昔の十字架を今も背負わされているんだ。……過激って訳じゃないけど、それは違うと言える。」
政治不信というものがこの国を覆い始めているのだと我は理解した。

Ｃａｓｅ６
「今の政治家は懐に金を偲ばせることばかりだ。不思議なのだが、今の君達は何故、国会を前にして訴え出ない？君達の税金をただ貪り食っているだけだ。」
しかし、この国の国民は場の空気を読むとかいう、奥ゆかしさを備えているということを思い出すのに、少しばかり時間を要した。
「……我について来るか？実は、我は物凄く強い荒魂なのだぞ？」
「あ～～、それより仕事しなきゃ。」
そして、我のことをこの国の国民は〝本物の大荒魂〟だと思ってい

ないことを思い出すのに、少しばかりの時間を要した……。

独裁者の忘れもの

我はそんなこんなで多くの人と語り合い、多くの人と記念撮影をしていた。

意外と言えば、意外だったのだが、こんなにも多くの者が我のことを忌避感も抱かずに近寄って来て、記念写真を願われたりしたことに驚いた。

しかし、良きことばかりでもなかった……。

「何のつもりだ?……江ノ島で起きたことから20年も経って、やっと落ち着きが見え始めたってのに、荒魂の真似事とはね?悪ふざけのつもりか?」

難癖を付ける者も居たのだ。

「みんなもみんなだ。……こんなふうに俺達を小馬鹿にしたことを許すなんて、はっきり言って、この国のためにならない。」

そうして、何も反論してこない我を見て、無視されていると思ったのか、その恰幅の良い男はヒートアップしていた。

「俺に〝荒魂討伐〟できる権限があれば、叩き直してやれるのに……!だから刀使の中には荒魂に似せたパーカーを着ていたり、荒魂の角とか付けてるふざけた奴が出てくるんだ。管理局が無能だから、こんな奴がのさばって!俺の家族は死んだんだ!」

ヒートアップした恰幅の良い男は、刀使と刀剣類管理局を批判し始めていた。

理由は、荒魂災害が発生した当時、付近に住んでいた弟の家族が荒魂に襲われて死んでしまったとかなんとかで、荒魂の恰好をしている我のことを〝不謹慎〟であると非難していたのだ。

……とはいえ、刀使と刀剣類管理局を非難したのは不味いことだと、その恰幅の良い男は気付いていなかったようだ。何故なら、周りの人が恰幅の良い男を蔑むかのような目で見ていたのだ。

しかし、こんな男と関わりたくないので、刀使と刀剣類管理局を非難した男に何か言おうとした美弥を抑えながら、そこを離れて行っ

た。

しかし、美弥の怒りを収めるため、最近流行りのタピオカなる物を飲むことにした。憎悪というものは嫌悪よりも長続きするものだから、こうして落ち着ける場所に移動したのだ。

「あーーーーっ！もう、腹立つ!!」

「そう怒るな。腹を立てながら物を食べると美味しく無くなるぞ？」

「でもっ！……イラつかないの？タキリヒメ。」

「我はお前ほど単純にできておらん。」

「そーですか。」

美弥は膨れっ面をしながら、そっぽを向いていた。

これは時間が掛かるなと思いながら、我はタピオカを啜るが、

「……んぶっ？ヴゲェッホ、ゲッホゲホォ。何だこの飲み物？中に何か入っておるぞ？」

「えっ？……ああ、スターチボールを喉に詰まらせたのか、大丈夫？」

「何？……そんな異物混入がされておるのか？」

「異物混入って……プッ。」

タピオカに咽た我を見て、笑っておった……。

まあ、これで美弥が落ち着いたと喜ぶべきだろうとは思うが、折檻しようと我は心に決めた。

故に、我と美弥二人で街を一望できる場所へ移動していた。

「ウム、絶景だな。」

「家に帰りたい綾小路に帰りたい市ヶ谷に戻りたい。」

レインボーブリッジの主塔の上で眺めていた。とはいえ、こんな高い場所でも我は海の向こう側が見えなかったことに、改めて我はこの現世の広さに感服していたのだ。だが、その風情が分からぬ美弥は風の勢いの強さごときに怯え、何かと騒いでおった。

「おい、煩いぞ美弥。我の従者なら品性をだな。」

「できるかぁっ！早く降ろせバカァッ!!」

「……正しく、絶景だな。」

「無視するな〝あ〟ぁ〝ぁ〝あ〟ぁ〝あ!!!〟」

美弥の絶叫が邪魔でこの風景を独り占めできなかったのが心残りだが、コーヒーカップを横に置き、このうるさい美弥と共にこの場から降りることにした。

「ゴミを捨てていくなぁぁぁぁ――――!!」

だが、美弥に我がコーヒーカップを処分せずに降りようとしたことを咎めてきおったのだ。

こやつめ、根性が有るのか無いのか分からん奴だと思いながらも、我はコーヒーカップとへっぴり腰で立ち上がれない美弥を持ちながら、降りて行った。

だが、その後もゲームセンターのＵＦＯキャッチャーやカートで遊んでいたりしても、渋谷で美弥の服を選んでいたりしても、色んな場所で外国人も日本人も関係無く我を見るなり、笑顔で一緒に記念撮影することをせがんできたり、大変であった。……そのうえ、

『自分で荒魂って名乗る人が居た!!』

『荒魂が歩いてる!ヤバイ!!♪（（ｏ（＾▽＾）ｏ））♪』

『自称荒魂のタキリヒメと自撮り!!ゞ（（▽（　）ゞ』

『すごいメイクで感激!!!』

『映画でも撮っているのかな?（。Д。ノ）ノ』

『声からして、若い人かしら?』

といった感想をＳＮＳで我のことを拡散したり、Ｙｏｕｔｕｂｅｒなる者から何をしているのか質問攻めされたりして大変だったが、それによって政府は我等が何処に居るか判明されてな。

政府の役人が我等を連れ戻しに来て、そのまま連行されてしまった。

そんなことがあって、この部屋の扉と此処に繋がる通路は厳重になったのだ。

とはいえ、これで外のことを調べてくださいと言われ、インテルネッツが使える環境になったのは喜ばしいことであった。

……あっ、インテルネッツはインターネットのことだ。すまんな、そう言ってしまう癖が有るのだ。許せ。

「おい美弥。この箱と平べったい物は何だ?」

「……パソコン本体とモニターね。それで調べたいことが分かるようになるんだけど。」
「何!?なら、直ぐに使えるようにしてくれ!」
「分かった、分かった。繋げて立ち上げられるようにするから少し待って。」
そうして美弥がパソコンなる物を立ち上げてくれたことで、その薄い画面に文字が浮かび上がり、動き始めたことは感動を覚えた。
「?……どうやって動かすのだ?」
「このマウスを使って動かすと、この矢印を動かすことができる。それでこのインターネットをダブルクリック。」
「だ……ダブルクリック?」
「ダブルクリックはマウスのボタンを2回押すって意味。」
何故か、今日に至っては美弥が頼りになると思えてしまった。
え?それはいつも頼りないうえ、シャキッとしてくれんかなぁ、とは思っておるが?……だから、そういじけるな。
「……で、ここで検索サイトで調べたいことをキーボード……もとい、この文字盤のボタンを押して書いて、検索するというボタンを押せば、調べたいことの情報がいっぱい出てくるってこと。何調べたい?」
「無論、これだ。」
「……せかいせいはって、ひとらーって、変換できないんだ?」
「はっ?そんなこと言ってなかったではないか?」
「ブフッ……いや、知らないなら、知らないって言いなよ?」
「悪いか?」
「ああ、もう不機嫌にならないでよ。」
そうして漢字変換の仕方を覚えた我は、知りたい情報をインテルネッツで調べられることができた。
我がインテルネッツという物に触れられたのは非常に喜ばしいことだと思えた。ヒトラー、ポル・ポト、スターリンといったこの世界の忌むべき歴史とチトー、エルネスト・ゲバラ、サッチャー、キング牧師という輝かしい歴史を調べられたこと、それに我の活動が意味有

る物だと実感できたからな。
　その証拠に、我の恰好をした異色ギャルが増えているという記事を目にしたのだから、我々荒魂に対する忌避感が薄まっている証拠であると分かって来たのだ。ともすれば、我が人権と国籍を得ることで国政に打って出るという選択肢は有ると確信したのだ。
　その後、我はＥメールアドレス等々を作り、アカウント名をも作っていた。
「アカウント名の名前は何にするの？あ～～、でも本名はナシね。」
「それは何故だ？」
「いや、何ていうかな。本名でやったらタキリヒメのことがバレるから辞めといた方が良いって話しなんだけど。」
「ふうむ。ならば、我以外にもアカウント名を使っている者は本名以外でしているのか？」
「まあ、そういう人も居るけど。」
　……摩訶不思議な話しだ。親から連綿と受け継ぐことができる人間が自らその受け継いで貰った名を捨て、偽名を名乗るなど、命のバトンを渡せない我等にとっては不思議でしかなかった。我等はタギツヒメなどというこの国の神の名を勝手に名乗って、勝手にアイデンティティを確立していたのだからな。
「……では、ヒトラーで。」
「それ好きだね。……でもよくヒトラーとか知っているね。」
「紫に取り憑いていたとき、書物を読む時間が有ったからな、有名な人物であることは覚えていた。」
「何かとんでもないことをサラッと聞いたような。……あ、でももう違う人が登録しているみたい。」
「……人気なのだな、ヒトラー。」
「そうだね。私、映画の嘘字幕動画とか観たことあるから、そうなのかな？」
　何とも言えない不思議な気持ちとなったが、我のアカウント名の名前はＴＡＫＩＲＩで決まった。
　……美弥には、メールアドレスやアカウント名で助けられたが、

我のことを小馬鹿にすることが多かったので、当然、後でお返ししようと決意をしていた。
「ところで美弥よ、お前はどれぐらい強いのだ?」
そのため、我は今の美弥の実力を聞いてみた。
「うっ!……それを聞く?」
「もしや、ヘッポコなのか?」
「……あーーーそうですよ!衛藤さんとか、親衛隊の人達と比べればヘッポコですよ!?……私は。」
「何をそんなに拗ねる?自分と他人を比較しても、己の自尊心を傷付けるだけだ?」
美弥が急に拗ねだしたので、我は宥めようとした。
「だって、私は御刀に選ばれて、少し浮かれて綾小路に入学したんだけど、私なんかより凄い人達がいっぱい居て、特別任務部隊に配属されてもダメダメだったし、何で刀使になったんだろ?って思うようになってきて……。」
「……。」
「そんで、私なんかが刀使になってよかったのかな?って思うようになって「うるさいっ!!」てっ、え?」
だが、急に弱気なことばかり言い始めたことにイラついてしまい、仕返し等どうでもよいと思えるほどに、ある決意をする。
「黙れっ!!そんな弱気なことを言いおって、今から鍛え直してやる!!」
「いや、えっ?ちょっ……」
「命は弱いことを許してくれん!それに、平和は剣によってのみ守られ、自己をあらゆる武器で守ろうとしない行いは、事実上自己を放棄しているのと同様だ!!それを胸に刻み付ける訓練を施してやる。」
こうして我は美弥を一人前にしてやると決めた。我の従者がこんな気弱なことを吐くことなど、ゆるせんからな!
そうして、我は始めた。映画で観た訓練法を実践した。
「このクズどもっ!トロトロ走るな!!全くなんたるザマだっ!! 貴様らは最低の蛆虫だっ! ダニだっ! この宇宙でもっとも劣った生き物だっ!!」

「ゼェ……クズどもって……ハァ……私一人……ゼェ…ハァ……。」
「いいか、クソ虫どもっ！　俺の楽しみは貴様らが苦しむ顔を見ることだ！ジジイの【検閲より削除しました】みたいにヒイヒイ言いおって、みっともないと思わんのか？この【検閲より削除しました】め!?【検閲より削除しました】たいなら、この場で【検閲より削除しました】ってみろ！　【検閲より削除しました】持ちの【検閲より削除しました】どもっ！」
　先ずは何週も走らせ、心身を鍛えさせた。
　無論、無理なことはさせていないという証明のため、我も一緒に走るが。
「俺は貴様らを憎み、軽蔑している。俺の仕事は貴様らの中からフ【自主規制】野郎を見つけ出し切り捨てる事だ!!勝利の足を引っ張る【自主規制】野郎は容赦せんから覚悟しておけっ!!!」
「ゼェハァ……ゼェハァ……。（し……死ぬ。というか、私、野郎じゃないんだけど。）」
「わざと負けて目立ちたいかっ！痛い振りをして同情を引きたいかっ！この負け犬根性のゴミ溜め野郎共がっ!!パパの【自主規制】シーツの染みになって、ママの【自主規制】に残ったのがお前らだっ!!」
「あぁあぁあ!!もう二度と言わないからっ!!もう終わりにしよう!?ねぇっ!!」
「トロトロ走るな、このオ【自主規制】がっ！泣き言言うなら、この場で首切って【自主規制】を流し込むぞっ!!」
　流石に18時間近くも走らせると、泣きながらそういうことを言ってきおった。しかし、それで性根が直るとは到底思えんので、素振りをすることにした。
　無論、無理なことはさせていないという証明のため、我も一緒だ。
「て”がぢびれ”る”！う”お”ぇえ”え!!う”え”……け”ほ”ぉ!!!」
「笑うことも泣くこともゆるさんっ!!貴様らは人間ではない。殺戮のためのマシーンだ!!殺せなければ存在する価値は無い！隠れて【放送禁止用語】かいているのがお似合いの【放送禁止用語】野郎に過ぎん

!!」
「ア” ァ” ア” ア” ァ” ア” ア” ア” ア” ァ” ア” ァ” ア”!!!!(訳:お前!絶対意味分からないで言ってるだろぉっ!!!!)」
「それで殺せるか!気合を入れろっ!!!」
「ウ” ォ” エ” ェ” エ” ッ!!」
「迫力なし、練習しとけ!!」
たかだか、30000回素振りしただけだが、意味は有った。あのときの美弥の顔は良かった。顔真っ青なのが気に食わんが、久方ぶりに本当の必死の顔が見れて良かったうえ、弱音を吐かなくなった。
……無論、もどした美弥にはちゃんと清掃するよう命じており、綺麗にさせておるぞ。
何?……可奈美よ、美弥は鞍馬流を遣うのだぞ?猿叫を使う薬丸自顕流の稽古などするか。ほれ見ろ、美弥も引いて顔を青くしつつ、震えておるぞ。
何?それは我のせいだと言うのか?……妙なことを言うな?お前達。
この訓練のお陰で写シは一回のところ二回は張れるようになったのだぞ?それに、刀使は平和は剣によってのみ守られ、自己をあらゆる武器で守ろうとすることを御刀で証明しているではないか?何が可笑しいのだ?
とはいえ、美弥はあのとき、
「この日をもって、貴様らはウジ虫を卒業する。本日から貴様らは海兵隊員だ!!」
「そういうのはちゃんと意味を理解してからやれ―――!!」
と言って、我を殴ったのだ。何が良くなかったのだろうか……?
その後は通販サイトで世界地図を買った。
「……タキリヒメ、何でそんなの買ったの?」
「それは、無論。我が居る所はどれほど大きいのか気になるであろう?」
そう、レインボーブリッジから眺めた風景を観たあと、我はこの国がどれほど広いのか気になったのだ。だが、

「……美弥よ。我が居る場所は何処だ？」
「ああはいはい。ココ、日本っていう場所に私達は居るの。」
「ほう……小さい島国と聞いておったが、これほどまでに小さいのか。」
　我は落胆した。
　どれほどこの小さな島国で神などと息巻いていようが、この世界からしてみればちっぽけな声の一つに過ぎないのだと今更ながら……やっと、初めて気付いたのだからな。
「この広い世界にとってみれば、獣も虫も、人間も、荒魂でさえちっぽけな存在であるということか……。」
　そう思うと、俄然我はこの広い世界のことを知りたいと強く願い、この広い世界を支配するのに見合うような者になりたいと強く思うようになった。
　羽虫や獣、それと人間と同様にちっぽけな存在である荒魂がこの広大な世界を支配するのは、なんとも言えない痛快さと自分がただ畏れる存在ではないとこの世界に対して証明していると思えば、張り合いが有るからな。そう考えるだけで、何よりも胸が躍り、高揚し、愉しくなってくるのだ。我はタギツヒメよりも上位の存在タキリヒメ。古事記に習い、三女神の長女の名を勝手に使っているのだからな!!
　そんな大望を抱きながら、我はこの部屋で過ごしていた。

「まあ、そういう訳でお主らを臣下にするために呼んだ訳だ。」
　ここまでの経緯を語り終えたタキリヒメは満足そうであった。
「……タキリヒメさん、支配者になりたいってどういうことですか？」
　だが、可奈美はタキリヒメを睨みつつ、どういう意味か尋ねていた。
「……そうさな、その前に喉が渇いたな。何か飲み物を取り寄せるとしよう。」

タキリヒメはそう言うと、手をパンパンと叩いていた。すると、可奈美達が通った自動ドアが開き、先程可奈美達を案内していた防衛省の事務官の一人が入って来たのだ。
「お呼びでしょうか？」
「何か我とご客人にも飲み物を。」
「かしこまりました。」
防衛省の事務官はタキリヒメを相手に敬うかのように丁重に受け答えし、飲み物を持ってくるためか、タキリヒメの居る部屋から退室していった。
「て……手懐けてる。」
「うわぁ……。」
それを見た姫和と可奈美は信じられない物を見たかのような反応をしていた。
そうして、数秒もしない内に防衛省の事務官は飲み物を持って戻ってきて、タキリヒメと可奈美達に飲み物をテキパキと配っていた。
「あっ……すいません。」
「いえいえ、タキリヒメ様のご客人ですので。」
可奈美は飲み物を持って来てもらったことに感謝の意を述べると防衛省の事務官はそれが当然の接客マナーだと疑うことなく答えているようだった。
「助かった。もういいぞ。」
「はい。また何か御用が有ればお呼び下さい。」
タキリヒメに用は無いと言われるものの、事務官は嫌な顔を一つもせず、何か用が有れば呼んで欲しいと一言添えてから、退室していった。
「「……。」」
その光景を一言も発せず眺めていた可奈美達は呆然とする他なかった。
「ところで可奈美よ、我に何か聞きたいことが有るのではないか？」
飲み物を飲みながら、可奈美に尋ねるタキリヒメの声にハッとした可奈美は疑問をぶつけていた。

「あっ、そうでした。支配者になりたいってどういうことですか？」
　先程、言っていたタキリヒメの『人間と同様にちっぽけな存在である荒魂が広大な世界を支配する』というのはどういう意味か尋ねていた。
「……そうさな。我はこの世界では穢れが有る荒魂と定義され、滅ぼされる。しかし、それが絶対に正しいことだと誰が決めたっ!?だからこそ、我はその定義に抗うと決めた。……穢れと言われ続けてきた荒魂自身がこの世の不条理に抗い、荒魂と穢れと扱われる我が支配者となることで、荒魂にも政権と人権を与えるのだ。これほど痛快で愉快なことがあるか？世の中が変わったと思えるほどであろう？我がこの世界の、いや星々の果てまで支配すればどれほどの熱気と活気がこの国を支配すると思う？それだけで胸が躍る！高鳴る!!焦がれる!!……我が支配者となるだけで、世の中は大きく変わり、我を信じた者達と共に大きく物事が動くのだ。それだけを夢見るだけで、成し得るだけで我のタキリヒメという名は不動の物になり、唯一無二の物となる！我々荒魂は確かに命の輪から外れた者達だ。親から子へＤＮＡ情報といった物は受け継がれない。だが、それ以外にも、後の世代に託す方法はある。ただ我が国を大きく揺り動かす。ただ我が国を繁栄させる。それだけでこのタキリヒメの名は永遠に遺るのだ。」
「……。」
　タキリヒメは可奈美に『人間と同様にちっぽけな存在である荒魂が広大な世界を支配する』というのはどういう意味か答えていた。
　ただ、荒魂を穢れある者ではなく、この国に住まう者等と同様に扱わせると返答して……。
「だからこそ、我は臣下を求めている。我の下に降らぬか？」
　タキリヒメはそう言って、可奈美を勧誘していた。
　だが、可奈美はタキリヒメのことをどこか信用できないと思ったのか、タキリヒメにある提案をした。
「あの、タキリヒメさん、私と立ち会いをしませんか？」
　相手の心を知るために、しかし、
「断る。」

「えっ？」

可奈美の誘いをタキリヒメは迷わずに断るのであった。

我が教え子、タキリヒメ

「断る。」
「えっ？」
　可奈美の誘いをタキリヒメは迷わずに断るのであった。
「当たり前であろう？臣下でもない者と稽古してどうする？ついでに言うておくと美弥に稽古を付けたのは我が御刀を抜かずにすめば良いと考えてのことだぞ。大将の剣というのはな、敵の攻撃をかわせれば良い、軽々しく敵と斬り合う物ではないと我は考えておるからな。」
　政治家や支配者になることを望む今のタキリヒメは、大将の剣というものは自分の身を守れる程度の技量があれば充分であり、剣術というものは雑兵が一番上手く扱えれば良いという認識でしかない。そのため、美弥を鍛えていたのは自分の従者であるからであり、自らが剣を振るって戦わなくても良い様に稽古をしているのであって、剣術に対しても特に思い入れが有る訳ではない。
「故に、お前が我が幕閣に加わるというのであれば、好きなだけ立ち合いはしてやろう。」
　そう言ってタキリヒメは、可奈美に臣下となるようにと言って勧誘していた。
「何で？私なんか……。」
「何故？そのように卑下することは無い。我が認める程の優れた力量を有する刀使を我が幕閣に加えたいだけだ。……それに、我が龍眼を以ってしても、我は可奈美には勝てないという結果が出ておる。」
　タキリヒメに今の可奈美は自分よりも遥かに強いと言われ、可奈美は反論する。
「そんなの戦って見なければ分からないじゃないですかっ!!?」
　珍しく取り乱す可奈美。
　自分がもう既に大荒魂以上の実力を有しているということを認めたくなかった。認めてしまえば、もう先が無いような気がしたからだ。

「いいや、分かる。だから言える。我が陣営に加わり、共に見果てぬ夢を見ようと！我とお主と十条　姫和。我ら三人が手を携えれば、どのような敵が目の前に現れても打ち負けることは無いと確信しておる。故に我が臣下にならぬかと尋ねている。……悪い話しではなかろう？」

「……。」

可奈美は押し黙ってしまう。

確かに、ここは剣術好きな少女であれば、〝皆が想像する可奈美〟であれば、頷くべきなのであろう。

だが、可奈美はこのタキリヒメが信じられなかった……。

どこか、本心を隠しているような感じがして、違和感しか感じられないうえ、信じられなかったのだ。

「それに、折神　朱音。我が臣下となれば荒魂を中心とした防衛部隊が創設され、刀使の負担を減らすことができるぞ？」

朱音には、刀使の負担を減らせると迫っていた。

……確かに、刀使の負担は年々増加しており、それは朱音も気に病んでいた。舞草を創設し、大荒魂の企みを封じたと言えば聞こえは良いが、結果は関東中にノロをバラ撒き、世の中を混乱させただけである。そのうえ、元親衛隊であるという理由で真希と寿々花の両名を刀使として復帰させることを舞草の保守派が抗議してきたのである。……最早、刀使の充足率は低下しており、経歴がどうこうという状況ではないのに、と朱音は心の中で愚痴っていたことを思い出し、タキリヒメの話しを聞き入ってしまっていた。

「そして、十条　姫和。荒魂たる我が世間に認めてもらえれば喜ぶ者が居るのではないか？」

姫和には、暗に優が迫害されずにすむと迫っていた。

自分を認めて、相手にしてくれる優を化け物のように言う周りの者達。私を愛してくれていて、愛している優を化け物のように言って、裏切った岩倉　早苗。

それらを思い出した姫和は、呆けた顔をしながら、タキリヒメの話しを黙って聞き入ってしまっていた。

「最早、この国には猶予は無いのではないか？なら、どちらを選ぶべきかはわかるはずだ。」

そのうえ、先程のタキリヒメから聞いたこの国の現状を思い出していた朱音と姫和に臣下となるようにと言って、タキリヒメは迫っていた。……しかし、

「あの、タキリヒメ!!……すいませんが、今すぐには決められません。なので、もう少し時間を下さい。」

可奈美の一声でハッとなった朱音と姫和はタキリヒメの話に乗るところであったと後悔していた。

「……ふむ、まあ構わん。我は何時までも待っておる。お主らにはそれだけの価値が有ると踏んでおるからな。」

だが、タキリヒメは可奈美の話しに乗り、時を待つことにした。

このまま、押して迫っても、引くだけであるとタキリヒメが判断したからである。それに、朱音と姫和の反応を見れば、この両名だけでも勝算は有ると理解しただけでも会って話したという行為は無駄ではなかったとタキリヒメは思い、可奈美の意見を受け入れていた。

タキリヒメとの会談が終わり、タキリヒメが居る部屋から退室した朱音と可奈美達。

「朱音様！」

「大丈夫です。」

だが、朱音が倒れそうになり、驚いた可奈美が支えるが、朱音は大丈夫と言って、どうにか立とうとしていた。

（……姉様は一人でこんなものを抑え込んでいたのですね。）

危うく、迫ってくるタキリヒメの話しを聞き入ってしまい、臣下になると答えるところだったと朱音は畏れ、身震いしていた。

あのタキリヒメの相手の心の中に侵食するかの様に入り込んでくる話術。

ならば、二十年も身体を大荒魂に侵食され続けた状態で、あの話術を繰り広げるタキリヒメを相手に姉の紫は今まで二十年も一人で耐えてきたのだろうかと思うと、ゾッとする思いを抱くしかなかった。

（……とすれば、衛藤さんも気掛かりでならないのかもしれません。）

そして、朱音は可奈美の方をチラッと横目で伺いながら、タキリヒメと同等、いや最早それ以上の力を有するであろうタギツヒメを身に宿す優のことを気にしているかもしれないと気に掛け、ついタギツヒメのことを思い出していた。

そう最初の出会いは先ず、優の身体を借りてのことであるが、

『ふん、発言を許すぞ。それなりの対価はあるだろうな？……えーっと、その、紫の妹。』

……という趣旨を胸を張って答えるタギツヒメ。

『ふっ、ふん、誰に向かって言っている？我は神ぞ、聞く内容もよく吟味して話せ。つまらん話は許さんぞ。』

とか言いながら、何も言わなかったら急にソワソワしだし、朱音をチラチラ見ては、話し掛けて欲しそうにするタギツヒメ。

『お前が言うな！エターナル胸ペッタン!!』

『エターナルゥウッ……！そういうお前はヒメヒメ・ザ・ナイペッタンじゃないかっ!!』

そんなこんなで姫和と〝胸の大きさ〟で口喧嘩をするタギツヒメ。

『なあなあなあなあ、カッコイイ告白ってどうすれば良いのじゃ!?……あっ！いや参考にする訳ではないぞ？友人に相談されてな!!』

その数か月後のことだが、姫和と可奈美は知らないが、タギツヒメの恋の相談を受け持った朱音。……そして最近になって分かったことだが、タギツヒメは信用している相手以外はこんな口調になることが分かって来たのである。

『……そ、そそそそそそんなこと言えるかっ!!ボケェ!!』

朱音の考えた答えに、顔を真っ赤にしてキレるタギツヒメ。

だが、朱音は優に照れ隠しだから怒らないであげてと言われていたことを思い出していた。……ならば、子供が言っていると思えば朱音

はタギツヒメにどれだけ悪態を吐かれようとも逆に微笑ましく思えてきたのである。

『うわあぁぁぁぁぁん!!失敗したぁっ!!どうぢよう、どうぢよう……。』

『はいはい、落ち着きましょうね。タギツヒメ……。』

タギツヒメは友人に相談されたという設定を忘れ、告白に失敗したと言って朱音に慰めてもらっていた。

『ずずーーーー。ウッ、ゲホゲホ!!』

『慌てて食べると喉を詰まらせますよ。貴女の身体ではないのですから、自分を大事にしてくださいタギツヒメ。』

『……ありがとう。』

その後、紫の影響か、カップ焼きそばが好物だと聞いた朱音はタギツヒメに振舞うものの、慌てて食べたせいか咽るタギツヒメに慌てることなく水を差し出して助ける朱音。それを見て、ありがとうと言うタギツヒメを見て、癒される朱音。

『のうのうのうのう、可奈美お義姉さまとどうやったら仲良くできるかのう!?紫の妹!』

『私は朱音と言いますよ。タギツヒメ。』

その次の日も、また優の身体を借りたタギツヒメは可奈美をどうやったら攻略できるかという話しを未だに名前を覚えず〝紫の妹〟と呼んで朱音に尋ねるタギツヒメ。

それらタギツヒメの行動を思い出した朱音は、相手の心に侵食してくるタキリヒメとまるで子供のように右往左往するタギツヒメを無意識に比べ、タギツヒメの方が微笑ましいなと思ってしまう。

「……ええ、大丈夫です。」

「あっ、はい。」

朱音は、タギツヒメとの思い出のお陰で癒された気持ちとなり、朗らかな笑みと共に可奈美にそう答えていた。

その朱音の朗らかな笑みを見ると、可奈美は何とも言えない気持ちとなって見るしかなかった。

タキリヒメは、朱音と可奈美達との会談を思い出しながら、一人ほくそ笑んでいた。

何故なら、人を管理し、導く存在になるにはどうすれば良いのか、この世界と人類から学んだからである。

スターリン、ヒトラーから人心の掌握の仕方。サッチャーとキング牧師からは言語が喋れれば、性別や人種はこの世には関係が無いこと。チェ・ゲバラからは同盟国アメリカが日本に原爆を落としたにも関わらず、そのアメリカに今も守られ、牙を失いかけているということ。そして、ポル・ポトからは自分達よりも大勢の人間を殺したにも関わらず、指導者の地位に居続け、同じ人から〝アジア的優しさ〟に満ち溢れていると言われていたということ。

それらを総合的に考えたタキリヒメは穢れの存在と言われる自分がこの世界の支配者となっても何も問題が無いことであると理解したのだ。

（……今日は朱音と姫和だけでもと思っておったが、結局はこの二名を得ることができんかった。）

〝沈黙〟という武器を使って話しを聞かせるよう仕向けると同時に、今の政治を批判。そのうえ、ヒトラーやスターリン、ポル・ポトといった虐殺を行った指導者を例に出したのも、認知度が高く、人間側にも二十年前の大災厄以上の犠牲を出した者が居ると思わせることで自身が政治家や国のトップになる正当性を確保するためにヒトラーといった過去の人間を利用したに過ぎなかった。なお、このヒトラー等を利用する手法を思い付いたのは、テレビやメディアでよく見

かける『〇〇はヒトラーのようだ！』という手法から学び得たものである。

そんなロジックとその者が不安に抱いている事柄、例えば、刀使の充足率の問題と優に関する問題等を使って、朱音と姫和を不安にさせ、その不安材料を払拭するような提案をすることで、精神的に無防備にさせ、注意力が散漫となったところでこの両名を説得。そうして、こちら側につかせれば、可奈美もこちらにつくだろうと思い、先に朱音か姫和を攻略しようとしていたが、結局は一人も得られなかったことにタキリヒメは残念に思っていた。

（誰かに多くのストレスや心配を与えられ、次の瞬間にそれらをふいに取り除いてやる言葉を掛け、精神的に不安定にさせると同時に注意力を散漫にさせ、無防備になった相手を説得する。……不安・安堵法は素晴らしい方法だ。ファシストといった者達が使うのも理解できる。）

しかし、タキリヒメは可奈美達を臣下にすることを諦めていなかった。

（……今回はあの千鳥によって防がれたが、まだ猶予は有る。）

可奈美の立ち合いを断った理由は、臣下以外の者としたくないのと、自分の心の中を悟らせぬようにしたかったからである。

事前に、姫和と朱音の二人と同じく、可奈美のことを調べていて正解だったとタキリヒメは思っていた。

（それに時間は我の味方だ。）

事実、この国は多くの病根を抱えている。

それらを解決するにはタキリヒメしか居ないと思っている政治家達を既に数人仲間に引き入れているため、政治工作も容易である。彼等を使って支持者を集め、自身が人権と国籍を得るのは時間の問題でもあるとタキリヒメは考えていた。

（初めこそは、一人でどうすべきか迷ったが……。）

本体に置いて行かれ、現世でもあるこの世界で一人彷徨っていて、どうすべきか迷っていたが、この国の政府に保護してもらったことで状況は変わった。

そして、この世界の人類全体を支配しようと決めたのは、愚にも付かないクズみたいな物しか流さないテレビを見て、このまま愚にも付かない世界を支配しても意味が無いと理解したためである。そのためには、先ず自らの理想郷を創るため、起つことを決めた。

――――俺に〝荒魂討伐〟できる権限があれば、叩き直してやれるのに……！だから刀使の中には荒魂に似せたパーカーを着ていたり、荒魂の角とか付けてるふざけた奴が出てくるんだ。管理局が無能だから、こんな奴がのさばって！俺の家族は死んだんだ！

そして、多くの人と話したことで政治不信と様々な対立を理解したからこそ、タキリヒメは理想郷を創る第一歩のための指針を定められた。

それら政治不信と対立を払拭するべく、国民と国家が一体となった強固な国を創り、タキリヒメ自身がその国の全てを支配する指導者になると。

（全てに意味が有るのだ！我が、いや私が本体に見捨てられ、この現世に残らされ、人を支配したいと思うのも！全てに意味が有る！……状況は私に微笑んでいるのだ。だからこそ、人を支配することを原動力とする私を神は、この世界という名の庭園を私に赴かせたのだ。……この国では、それを国造りと言うらしいな？）

インターネットで知ることができたのは、この世界の歴史だけではない。

移民お断りの横断幕を広げる欧州の現地住民。難民用施設の前で暴動が発生するＥＵ各国。ＥＵの旗を燃やす者達といった同じ人が〝人種〟という根深い対立を起こすことになる事件も知ることができた。

『スウェーデンに来たのなら、スウェーデンの生活様式に合わせるべきだ。』

『外国人の渡航が制限される見込みです。』

『欧州が、人口比率によってイスラム国家に変わるかもしれないので

す。』

この国だけでなく、独裁者が生まれたドイツで、デモや暴動が起きている欧州で、そして世界中で〝人間同士〟がいがみ合うことに集中し、荒魂に対する忌避感を忘れていくことになるであろうこの状況は、世界を支配し、全てを己の手のひらの上で管理したいタキリヒメにとっては非常に好都合であった。

それら移民と難民問題を提起するだけで、人同士が争い合い、それを眺めながら時を待つだけで、人とは違う荒魂にとって非常に好都合となる状況に推移するこの状況は、タキリヒメにとって、

（神という存在が居たとして、この好機が訪れたのは、それは私がこの国を、この世界を支配せよと御告げになられていることに他ならない！）

好ましいことでしかなかった……。

人類平等、博愛主義、平和主義。

今世紀になっても人が人に縛り、打ち破れない主義。

ならば、それらを逆手に取って、自分に人権と国籍を付与することができれば、それだけで人や刀使は簡単に自分を傷付けることは容易にできないということと同じであるとタキリヒメは考えていた。

故に、タキリヒメは人権と国籍を得ようとしていた。

（それに、優という少年も私のために役に立ってくれている。……その者が居るだけで、私は身の潔白を証明することができるのだ。）

唯一、慌てたことといえばタキリヒメを支持する政治家が、優の中に居るタギツヒメをタキリヒメに取り込ませるという提案をしたことである。

そんな話をすれば、タキリヒメを敵視する人間達はタキリヒメが世界を支配しようと目論んでいると嫌疑を掛けてくるからである。むしろ、優のこれまでの行いを考慮すれば、彼に忌避感を抱く者が日に日に増えていくのは目に見えている。

だから、優はそのままにして、優を己に対する切り札としてタキリヒメを不安視する者達に持たせた方がこちらに対する心のガードが緩くなり、不安視する者は減るのである。故に優を生かす必要がタキ

リヒメには有ったのである。
そうして、不安視する者が減れば、敵視する者は異常者として扱われるだろうと推測していた。

――――我々が国民だ!!我々が真の国民だ!!

そして、タキリヒメはインターネット上で視聴したことのある移民という人間と対立する〝真の国民〟の声が、自分に対する声援の様に聴こえていき、その声援のお陰で、政界からは与野党問わず入党依頼が舞い込むか自分で政党を創ることでそれを足がかりとして、やがては世界の全てが自分の手のひらの上で踊ることになることを夢見ながら、軟禁されている場所で大人しく待ち、自身が出馬することになるであろう選挙運動のことを考えていた。
(……正に、『政策実現の道具とするため、私は大衆を熱狂させるのだ。』であり、『私は「説得」によって、全てを作り出した。』だな。)
……不法移民の排斥とグローバリズムの否定を訴え、リベラル派と保守派の対立を煽ると同時に人類を分断し、今の政治を金権主義者として批判。この絶望的な状況に在る国を力強く信用されている指導者の下で絶望的な状況を打破することができる変革を促し、国民の支持を得ると同時に国家と国民を一体にし、そのための指導者になるという全体主義的な主張を訴えることでタキリヒメの言う全体主義的な思想へと国民を誘導し、自由主義者を排斥する。

――――頭にくる事はやはり、やっぱり賃金の問題よ。旦那の稼ぎが悪いからパートで頑張っているけど、やっぱり子供のことを考えるとね……。
――――そうだ、好きな国に帰れ。日本生まれの奴もだ。
――――無い。全く無い。……正直に言うと、ここ最近は選挙にすら行っていない。
――――ああ、だがそれを言えんのだ。民衆扇動罪などを調べてみると分かる。――――ありがとう、後で調べてみるわ。

――――昔の十字架を今も背負わされているんだ。……過激って訳じゃないけど、それは違うと言える。

街頭インタビューで知ることができたこの国の国民の本音。

賃金、人種問題、不正選挙、国の法整備、過去の問題に対する不満、そんな暗い時代の中で起因する出生率の低下。

それらを聞き、そして他の影響を受けやすいタキリヒメだからこそ理解し、自分の一方的な支配と管理によって人間を導くことこそが真の共存という考え方を放棄し、選挙に勝って民意と自身の理想郷を叶えるべく全体主義的な主張と考え方になったのである。

そうすることで、国と国民を管理する国のトップの地位をタキリヒメが就任した後、隠世技術の恩恵でこの国を再び経済大国へと復活させ、国民の支持と信頼を得ることで自身が築き上げた理想郷の支配を盤石のものにし、いずれは支配下に有る荒魂の部隊と隠世技術によって得た経済力によって、世界を手にするという算段であった。

（……上手く行く。この国は平和主義なのだからな。自分の手を汚すことなく荒魂が自分達の代わりに戦ってくれていると思わせれば、人は戦う意志も削がれ、戦い方もすぐに忘れる。）

そうして、タキリヒメは朱音に言った刀使の負担を減らすという名目の下でタキリヒメの支配下にある荒魂を中心とした防衛組織を創設し、人間達の牙を抜き、戦う意志を削ぐことで、最終的には人類と荒魂の全てを飼い慣らすように管理・支配するというタキリヒメにとって、最も理想とする世界を創ろうとしていた。

熱狂する大衆は操縦可能であり、思考しないことは政府にとって幸いであるという〝自分の考え〟は真実であるなといったことを考えながら、タキリヒメは一人胸の内でほくそ笑んでいた。

……ヒトラーと同じことを考えていたことに気付かぬまま。

ネバーランド

今日、和樹はベッドの上で縛り付けられて横たわっていた。

「……おはよう、おはよう。君は何故、あそこで横たわっていたんだい？」

スレイドにそう問われた和樹は思い出していた。

横たわっていた理由。あれは確か、今の体制の刀剣類管理局の権威を失墜させるべく、ノロの回収班を襲撃しようとしたが、警備が厳重になったことで諦め、他の回収班を襲撃しようと下水道を使って移動をしていたら、何者かに襲撃されたということを朧気ながら思い出していた。

……そうだった。下水道を歩いていたときに刀使に襲われたのだ。

だが、御刀を持っていたから刀使であると判断したが、荒魂パーカーを羽織り、親衛隊の制服を着用しているという一風変わった格好をした”刀使”であった。

だが、その刀使の剣戟は少し剣術をやったことがある和樹でも分かる程の鋭さが有り、斬ると同時に流れるかのような突きと連続攻撃。その恐ろしい技量から繰り広げられる御刀による攻撃を和樹は防ぐのに手一杯であったと同時に、理解していた。

……御刀による打ち合いでは勝てないため、逃げることを優先すべきであると。

しかし、拳銃を使ってこちらを攻撃したことで、不意を突かれた和樹は生身の部分に被弾。動きが悪くなり、その隙に懐に飛び込まれ、脇の下を斬られてしまう。

大量の血が流れてしまったことに、和樹は慌ててしまうが、その大量の血を媒介にして蝶型の荒魂を大量に出現させ、たまたま近くにあった水流の激しい川の流れに乗って逃げることに成功した。

……考えるだけで恐ろしい。

あの刀使は、間違いなく自分を殺そうとしていた。通常、人を殺す

のに、躊躇ったり、動揺したりするものだが、その刀使は一切それが無かった。今、生きていられたのは幸運だったからとしか言いようがなかった。

いや、あの奇妙な刀使の剣戟に何処か見覚えがあることを思い出した和樹は、必死にそれが誰なのか思い出していた。恐らくだが、あの子供は荒魂パーカーを羽織っているとはいえ、親衛隊の制服を着用しているということは、

「……多分……管理局の……人間だ……そいつに……襲われ……た……。」

その刺客に襲われたということだろうと和樹は理解した。

恐らくだが、御刀を持っているということは刀使だろう。それに、見覚えのあるニッカリ青江を持っているということ、和樹が結月学長に憧れて天然理心流の道場に通っていた経験から、襲撃してきた刀使の太刀筋が天然理心流に見えたことから推測されることは、

（……燕……結芽か……。）

自分を襲ってきた刀使の正体が燕　結芽であり、燕　結芽は刀剣類管理局側ということであると和樹は判断していた。

（……あれだけ……結月学長に……助けて……モラッタノニ!!）

和樹は、結月さんがよく結芽の見舞いに行っていることは知っていた。

あれだけ甲斐甲斐しく見舞いに来てもらったのに、結月さんを裏切って管理局側についた。しかも、結月さんから天然理心流を教えてもらった癖に拳銃を使っていた……。それだけで怒りが沸いてくる。なのに、こっちは結月さんからそんな顔を向けられたことなど、一度も無いというのに……。

和樹は心の中でそう毒づきながら、結芽のことを嫉妬していた時のことを思い出していた。

幼い頃から、御刀に認められた神童であると同時に、刀使として活躍する年上の少女達に勝利し、将来を渇望され続けた少女は綾小路武芸学舎に入学し、刀使となり、華々しい活躍をするだろうと誰もが思っていた。和樹もその当時の結芽のことを結月を通して知ってい

た。

刀使にもなれず、剣術の才能も何もかも開花しない自分。

妹が刀使になったことを誇りに思うネグレストの親に無視されていた自分。

才能に溢れ、家族にも愛され、何もかも自分とは正反対に優れていた結芽を和樹は妬み、僻んでいた。……そして、羨ましかった。

だが、結芽が病に倒れたと聞いたときは結月の悲しい表情と共に悲しかったが、同時に何処か結芽が倒れたことに喜ぶ自分が居たことに辟易していた。

そんなことも遭って、和樹は結芽のことを覚えていた。

（だけど……結月学長の恩義を……忘れたクソガキだっ!!）

しかし、今の和樹は半ば荒魂と化しており、その襲撃した刀使からも……いや、燕　結芽から自身と同様に荒魂の気配がするということは彼女も半ば荒魂と化していることである。

とすれば、彼女が半ば荒魂と化しているという話しは本当のことなのだろう。そして、今の結芽は結月から教えてもらった天然理心流を捨てて、拳銃を所持しているうえ、人殺しを難なく行う非道さも兼ね備えてしまったと……。

だからこそ、和樹は決意する。

「……じいさん……俺を……オレをもっと……強くしてくれぇ……!!」

結月に結芽が半ば荒魂と化していて、銃を所持し、人殺しも行える非道な子供となってしまったことを悟られる前に、結芽を倒そうとしていた。

だが、今のままなら確実に勝てない。

――僕は男だから、異能の力を使え、荒魂という化け物と対等に戦える刀使にはなれない。

――だから僕はどう足掻いても、化け物と対等に戦える刀使には勝てない。それが悲しくて、悔しくて剣術を辞めた。

――だけどこの世の神様は、いや、御刀はあの恩知らずの結芽

を選んで、僕を選ばなかった。
――――御刀は僕の何が気に食わないのだろう？何でクソガキの結芽を選んだんだろう？
――――僕にだけ、最近よく読むようになった異世界転生物のように刀使と同等かそれ以上の能力を特典として少しぐらいプレゼントしてくれたって良いじゃないか。と刀使として活躍する妹を見て、いつも思っていた。いつも心の中で愚痴っていた。
――――そうなれば、刀使と同等かそれ以上の力を持てれば、結月学長も僕に振り向いてくれたのに……。

……そんな思いを抱きながら、和樹はスレイドに頼んで、ノロの量を増やし、自身を更に強化しようとしていた。
恩知らずの”結芽”を殺すために、全ては結月学長の笑顔のために。
荒魂の力に呑まれたせいか、それとも元々の人格故か、和樹は結月に対する一方的な思いを抱きながら、自身の身体の強化のために体内にあるノロの量を更に増やすことを決意する。しかし、その決定の代償かノロの毒性によって和樹は気を失いそうになるほどの激痛に耐えなければならなかった。
和樹が嘆き苦しむ様をスレイドは嬉しそうに、それとは対照的に遠くから見ているソフィアは結月はこの光景を見てどう思うであろうかと思いながら、嗤いながら見ていた……。

一方の結芽は――――。
「うおぉーーーーん!!また負けたーーーー!!」
優の中に居て、タギツヒメに剣術を教えていた。
理由は、

『あんにゃろっ!!あのペチャパイ女!!あんなことしやがって!!』
『……どったのー、ヒメ?』
またなんか騒いでるなと思いながら、結芽はタギツヒメに話しかけていた。
『なあなあなあなあ、聞いてくれるか?つばくろー?』
『……ハイハイ、聞いてあげるから。』
何時の間にか〝つばくろー〟という渾名を付けられていたことに何とも言えない気持ちに結芽はなるが、まあ良いかという気持ちにもなった。
……そして、今までそんなふうに言われたことがなかったのだから、むず痒い気持ちにもなっていた。
『剣術教えてくれ!あの大和平野に勝ちたいのじゃ!!』
『……へえ。』
そのタギツヒメの言葉に結芽は少し顔を綻ばせる。しかし、
『あのペタリヒメ、優に……優にキスしよったんやぞっ!!少しばかり剣術使えるからって調子乗りおって!!我の方が剣術の才能とかあとは、む……胸とかすごいんだぞ。』
『ああ、うんそういうことね。(……露骨にトーンダウンしてる。)』
とりあえず、そのペチャパイ女だとか、大和平野だとか、ペタリヒメだとか言っている処から、恐らく優はその胸囲が豊かでない者に接吻でもされ、それを知ったタギツヒメが荒れているというところだろう。そして、その胸囲が豊かでない者は剣術が得意であり、その者よりも剣術が上手になって見返したいとかそんなところであろうか。
『た〝の〟む〝ぅ〟っ!!』
『……。』
燕　結芽は刀使である。そして、目の前に居るのは紛れもなく今まで討伐してきた荒魂でもあり、二十年前に大災厄を引き起こした大荒魂の一部である。
だが、どう考えても20年近くも生きている訳であるから、間違いなく自分よりも年上であろうタギツヒメのこの必死さと刀使が荒魂に剣術を教えるという事態に何とも言えない気分となるが、久しぶり

に剣術をやれるのは楽しいことでもあるだろうと思って天然理心流を教えようとした。
『おぉーーーー、上達早いじゃん。』
『フフン、我は頭が良いからな。直ぐにつばくろーに追い付いてやるわ!!』
『本当(マジ)?なら、一回試合しよーよ。』
『良いぞ、良いぞ。』
しかし、タギツヒメは少しばかり上達したことで得意げに話してしまい、それが切欠となって調子に乗ったタギツヒメは結芽と試合をすることになってしまう。
「うおぉーーーーん!!また負けたーーーー!!」
「……。」
だが、結果はタギツヒメの惨敗。
それで、タギツヒメは自信を失ったのか隅でいじけていた。それを見かねた結芽はタギツヒメを励ますために元気付けるために、声援を送っていた。
「いや、でもさヒメ。最初は誰も上手にできないよ?」
「……。」
だが、結芽は諦めずにタギツヒメを何とか励まそうとしていた。結芽のことを見知っている者達からすれば、珍しいと思うであろう。だが、結芽がそうする理由があった。
……もう剣を振るうことは叶わないかもしれない。なら、自身が磨き上げた天然理心流を誰かが受け継いでくれるのは、そんなに悪いことではないと感じたからである。
「それに、私が教えるのが下手だったから、上手く行かなかったのかも、ゴメンねヒメちゃん?」
「いや、そんなことはないぞ!見ておれ、教えてもらった以上は先生であるつばくろーに恥はかけさせるワケにはいかんからな。」
それに、今のタギツヒメは動機が少し褒められたものではないが、真剣に学ぼうとする意欲は感じられたので、悪い気はしなかった。
こんな自分を誰かが必要としてくれていて、こんなふうに期待され

たことは同年代の子からされたことはなかった……。
剣術を真剣に取り組んでいる者が居なくなるのは、悲しいことであることだと思わされたのは初めてであるから……。
だから、結芽はタギツヒメを励ましていた。
「おーっ、何やってんだ？」
「結芽おねーちゃん何してんの？」
そして、ニキータやジョニー等が寄って来て、話しを聞いたジョニーが「オレもやる！」と言って天然理心流をタギツヒメと共に一緒に学んでいた。そうすると、優やミカも何事かと思い、集まって来ていた。すると、段々とこの二人もタギツヒメ達と一緒にやることとなっていくようになり、何時しか皆で結芽の剣術を学ぶことになってしまっていた。
「……。」
その光景を見た結芽は、嘗て剣術に励んでいた頃の自分を思い出し、懐かしんでいた。……きっと、結月学長もこんな気持ちで剣術を教えてくれたのだろう。
そして、皆が皆、自分の剣術に、結月学長が教えてくれた剣術に興味を持ってくれて、真剣に学んでいこうとする姿に感動を覚えていた。
（……ああ、そっか。）
今まで結芽が一つも見ておらず、一つも気付けなかったこと、『選ぶがいい。このまま朽ち果て誰の記憶からも消え失せるか、刹那でも光輝きその煌きをお前を見捨てた者達に焼き付けるか。』
ただ、最初は〝すごい私をみんなの記憶に焼き付けたい〟と思って親衛隊入りした。それだけだった。
そうして、強くなって、誰よりも強くなれば皆が私を認めてくれると思っていた。……けど、どこかでそんなことをしたところで何も達成できないと、何も成し得る物が無いと思う自分が居たことも事実だった。
「よ～し、次は我が勝つぞ、つばくろー先生!!」
だが、真剣に取り組んでくれたタギツヒメがそれを教えてくれたか

ら、自分を見つめ直すことができた。
「おー、ボコボコにやられるの見とくはナイペッタンヒメ。」
「誰がナイペッタンヒメじゃ!クソガキジョニー!!次お前を叩いてやるからなっ!!」
「ていうか、ジョニーは結芽おねーちゃんのこと好きだもんね?」
「てっ、ちげーし!そんなことはまだねぇから!!そこは間違えるなよニキータ?」
「……好きなら好きって早く言わないと誰かに取られちゃうわよ?何か気になってる子がいるとか言っていたし。」
「えっ?ウソだろ?それはウソだよなミカ?」
「いや、それはウソに決まってるでしょ?」
「やっぱりかーーー!!お前、しょうもねえ嘘吐くんじゃねえよ!!あ、アドバイスありがとな優。」
そして、何かと騒がしいが、一緒に居て飽きない人達。その人達を見た結芽は、親衛隊の日々を思い出してしまっていた。
(……そうだった。私が。本当に欲しかったのは……。)
だからこそ、自分が本当に欲しかったのはこういう光景で、こういう場所だったんだと認識していた。
自分よりも弱い奴を倒して、粋がることじゃない。そう思うだけで、目の前がぼやけ、胸が苦しくなっていた。
「アレ?結芽おねーちゃん泣いているの?」
そうして、結芽の変化に気付いたニキータが何故、涙を流しているのかと聞いていた。
「……ちが、違う。……違うのぉ……私、……わたしがのぞんてたのは……」
涙を流しながら、結芽は慟哭する。
「……みんなに会えて、……ほんとうに、ほんどうによがった……。」
嗚咽混じりに、此処に居るタギツヒメ達に会えて本当に良かったと述べていた。
「……けど、……あたし、あたしは……しんえいたいさいきょう、……なのに、何にもやくに立てなくて……。」

そして、自分の力が及ばないせいで、今の現状がちっとも良くなっていないことを謝罪していた。

親衛隊最強という物を自負して、優にその力を授けたが、結果はさっきの様に荒魂と化した人間を殺したりする手伝いをさせられたりしただけであった。

結芽は、自分は強いと思っていた。けど、

「……そんなごど……ながっだっ!!」

そんなことはなかったと嗚咽混じりに結芽は答えていた。

何も変えることができない。何も助けることができない。それがもどかしくなって、そして無力感へと変わっていき、最終的には自分を卑下し始めるのであった。

「……えっ？だとしたら、我って迷惑な奴じゃった？」

タギツヒメも結芽の話しを聞き、その話しの通りであれば、自分はただの傍迷惑な奴なのか？と結芽に尋ねていた。

「……えっ、あう。……ぞ、ぞういうことじゃ……。」

結芽は反論する。

「……わだし……かんしゃじでる……だって、だっで……みんなに会えたから……いっぱい、いっぱいがんじゃしでる！」

そういうつもりで言った訳ではないと、皆に会えたことにとても感謝していると答えていた。

「だげど、……わだしが、……もうすこし……もっどづよがっだなら、みんなに……みんなにめいわくかげながっだ！」

そして、急激に溢れ出すように思い出すのは、真希、寿々花、夜見といった親衛隊の面々と結月学長や紫といったお世話になった人達のこと。結月学長に剣術を教えてもらって、親衛隊入りした後はこうやってバカ騒ぎしたりしていたときは、一緒に笑って、一緒にその記憶を残して、一緒に居て寂しさが無くなって行った。

そんな親衛隊という居場所と同じくらい大事な場所となった此処も、自分が辿った末路、燕　結芽と皐月　夜見は〝荒魂の力に頼った刀使〟と言われ、そのせいで真希達に迷惑を掛けてしまったことと同じく、自分の非力さでこの場所も壊されてしまうのではないのか？と

焦燥に駆られたのである。
「……大丈夫だよ。」
結芽の慟哭に、優は答える。
「可奈ねーちゃんがぼくらを助けてくれるって約束したから。」
可奈美が約束してくれたから、何も問題ないと結芽に伝えていた。
「……そうなんだ。」
衛藤　可奈美。
優の姉で、美濃関の刀使。嘗て、救ってみせるという〝約束〟をしてくれて、その約束を守るために奮闘していると聞いた。
「……もう、私は一人じゃないもんね。」
その優の返答を聞いた結芽は、その話しを聞いて安心したかのように振る舞うため、泣くのを止め、握り拳をぐっと握りながら、涙をぐっと堪えていた。
何故なら、可奈美と同じく刀使である結芽は気付いたからである。優の言う救う方法など、有りはしないことであると。ただ単なる姉が弟に気を使った言葉であると。……だからこそ、結芽は自分の考えていることを誰かが気付くことがないよう、優の言っていることが真実であるかのように振る舞うため、優の話しを聞いて安心して泣き止んだかのような演技をして、涙をぐっと堪えていた。
……もう、涙を流さないために拳をぐっと強く握り締めながら。
「それに、ヒメちゃんは僕にとってはティンカーベルだし、此処はネバーランドみたいだから気にしなくていいよ。」
そして、優はタギツヒメに自分の素直な気持ちを伝えていた。
「……おっ、おお。……なあなあなあ、つばくろーつばくろー?ティンカーベルとネバーランドって何じゃ何じゃ?」
優の言葉に感動したかのように見えたタギツヒメであったが、ティンカーベルやネバーランドのことを知らないので、結芽にどういう意味なのか尋ねていた。
「ネバーランドっていうのは、子供が子供のままで居られる理想郷のことだよ。……あと、ティンカーベルはそんな場所に連れて行ってくれる素敵な妖精のことだよ。」

「なら、我のこと好意的に見ているということで間違いないな？」
「……間違っていないと思うよ。」
「……そうか！つばくろーありがとう！」
結芽は、タギツヒメのことを考え、優に聞こえることがないように、小声で結芽なりの解釈でティンカーベルとネバーランドのことを教えていた。
……だが、ネバーランドには『永遠の子供』や『不老不死』、あるいは『現実逃避』といったイメージが含まれていることに気付かないまま。

揺れるヘリの中で、休んでいた優はトーマスに揺らされて起こされていた。
「……起きろ、もうそろそろだ。」
「……今、何処？」
もう少しタギツヒメ達と話したかった優は、不機嫌そうにトーマスに今居る場所を尋ねていた。
「もうすぐで市ヶ谷だ。」
「何でそこに行かなきゃなんないの？アイツ追っかけた方が良いじゃん。」
「……お前と話したい奴が居るんだとよ。」
優とトーマスは、和樹を捕らえるために追跡し、捕らえようとしていたが逃げられてしまい、その追跡の途上で急に市ヶ谷に向かうよう言われたため、和樹の追跡を辞めて市ヶ谷へと向かっていた。

「もう少しだったのに。」
「逃げられたんじゃ仕方ねぇさ。」
「……やっぱり、生かして捕まえなきゃいけないの？殺さないようにするの難しいんだけど。」
　優は和樹が下水道の川の流れを利用して、逃げるとは思わなかったので、和樹を捕らえることができなかったことを悔やんでいた。そのため、優はトーマスに和樹を捕らえるのではなく、始末することを提案していた。
「だから言っているだろう。殺しちまえば、喋らなくなるし、こいつの黒幕が暴けなくなる。」
　トーマスは優に和樹を捕らえる理由、上の命令で和樹を半ば荒魂化させた張本人を調べるために捕らようとしていることを話していた。
「めんどくさいなぁ……。そっちの方が楽なのに。」
　タギツヒメ達と長く遊びたいため、和樹を殺して早く片付けることを提案する優。
「確かに面倒で、暴れる可能性を考慮すれば、奴を早めに消しておいた方が被害は少ないだろうが、こいつの背後関係は洗っておいた方が良い。」
「そんなものかなぁ……。」
「そんなもんだ。」
　優は納得できるようなできないような気持ちでいた。
　だが、優の知らないことであるが、今まで市ヶ谷に向かえなかった理由。それは、タキリヒメの安全を優先したタキリヒメ派の政治家連中がタキリヒメと接触させないようにしていたからであるが、朱音等がタキリヒメの居る区画に入らないことを条件に説得したことによって、どうにか市ヶ谷へ向かえたのである。
　こうして、ようやく許可が下りた優も市ヶ谷へ向かうこととなった。
　理由は、ある人物との接触であるが……。

不要な物など存在しない

――――あるところに由緒正しい家系を持つ家から生まれた少女が居ました。

とはいえ、ごくごくありふれた一般家庭と大差の無い家庭に見えましたが、何処か複雑な家庭でした。

何処が複雑かと言えば、少女を完璧に〝教育〟し、仕上げるために少女の両親は〝躾〟と称して、タバコを肌に押し付けたり、壁に何度も突き飛ばしたり、腹や顔を何度も殴る蹴るをし、気絶した後に暗くて狭い部屋に押し込めたりしていました。

心も身体も悲痛に感じるほどの拷問をこの少女は何度も、いや何日も受け続けるという日々を過ごしていました。

そんな日々を過ごしていた少女はシンデレラという絵本の主人公を自身に重ねて過ごしていました。

「わたしにもきっと、はくばのおうじさまとであって、すてきなこいにおちて、ここからすくってくれる。」

少女はそれを夢見るだけで、少女の両親が行う〝躾〟と称する暴力の数々に怯えることなく、笑いながら耐えることができました。

しかし、少女の両親は暴力を受けても少女が笑っていることでまだ耐えられると思ったのでしょう。そのためなのか、少女の両親が行っていた〝躾〟は更に過激になりました。

ウォーターボーディングといった水責め。

充分な食事を与えないことによる、同年代の子達よりも低い身長。

そうして、過激になった〝罰〟に少女の精神（こころ）と肉体（からだ）は遂に限界を迎え、シンデレラと　はくばのおうじさま　の事も忘れ、自傷行為で己を保つことしかできない状態でした。

そんな中、その少女のことを不憫に思ったのかは分かりませんが御刀がその少女を選んだことで、刀使になれました。

しかし、ある事件が起こりました。それは、飼い猫に腕を引っ掻かれたのです。

……そのため、少女はその飼い猫を悪い子だと思い、両親と同じ〝躾〟を行いました。

不幸なことに、外の世界と他の家庭を知らない少女は、過ちを犯した飼い猫に〝躾〟をするのが当然だと思っていたのです。

しかし、暴力の加減を知らない年齢の少女が行ったため、その飼い猫は二度と動くことはなかったのです。

少女はその事にとてつもない罪悪感を感じますが、少女が認めた御刀はその罪科を知ってか知らずか、尚もこの少女を認め、迅移や写シといった術を使えるようにしてくれました。その事実に少女は、飼い猫を殺してしまったことは罪ではないと霊験あらたかなる神剣と言われる御刀が言っている様な気がしたため、少女はあの飼い猫を殺した事は罪ではないと解釈しました。

そして、両親が行っていたことは全て正しいことであったと理解してしまいました。

「おかあさんやおとうさんがくれたものは、すべてただしいことだったんだ。」

そのとき、少女は初めて両親から〝愛情〟を貰って育ててくれたのだと思いました。そうすることで、少女は心に在った殺意といった悪感情は取り除かれ、初めて幸福という物を知ることができたのです。

そうして、少女は両親から離れて伍箇伝の学校に通い、寮生活を送っていましたが、少女の両親が道に背いた行為をしているところを見てしまったので、少女は両親を立派に〝更生〟するべく、行動するのでした。

……御刀を握り締めながら、両親がまともになることを夢見て。

静の実家にある地下室にて、イチキシマヒメは静の手伝いをしてい

た。

とは言っても、手伝いというのは静が何処からか拉致した外国人らしきホームレスの男性が檻の中に入れられていて、その檻の中の秩序の維持と矯正予定のホームレスの人間の世話だったのだが、その世話というのが面倒なことばかりであった。

例えば、彼の食事を作ったり、ホームレスの人間が檻の中の清掃をこなしているかどうかといった各種の点検であった。

そして、その檻の中に入れられているホームレスは人名ではなく、管理番号で呼ぶようにすることを静との間で取り決められていたため、イチキシマヒメもこのホームレスを人の名前ではなく、管理番号で呼んでいた。

そうして、イチキシマヒメは下手なりに食事を作って差し出したり、檻の中の清掃をホームレスに命じていた。

……だが、不味い食事と、厳しい生活習慣を強いられていたこと、そして何よりも管理番号で呼ばれたことが原因で次第にホームレスはイチキシマヒメに対して反抗的になっていった。

「へこんなところに連れ込ませて、マズイ飯しか食わせないってどういうこった!!?〉」

ホームレスに外国語で怒声を浴びせられると同時に、イチキシマヒメが一生懸命作ったご飯をゴミのように投げ捨てていた。その行為を最初の内は相手にするのも面倒だと思い、それも言葉が通じない外国人であるため、見逃していたが、やがて何度もやられているとこのホームレスに怒りを感じると共にイチキシマヒメはある事を一つ思い出していた。

それは静がイチキシマヒメにこの手伝いをさせる前に伝えていたこと、その内容は相手が反抗的になった場合は矯正させるために体罰を含めた罰を許可されていたことである。

そのため、イチキシマヒメは早速このホームレスを大人しくさせるために罰を与えた。しかし、流石のイチキシマヒメも過度な罰を与えるのは良くないだろうと思い、このホームレスの言葉が分かる静から腕立て伏せを数回させる程度の内容の言葉を教えてもらい、それをイ

チキシマヒメはホームレスに強制的に行わせていた。
それで、このホームレスも少しは大人しくなるだろうと思っていた。
「〈ふざけんなっ!!〉」
しかし、そのイチキシマヒメの思惑は外れ、ホームレスは更に反抗的になっていった。
それを見たイチキシマヒメは更なる過激な制裁が必要であると判断し、静に過激な罰を与える命令の言葉を教えてもらうと、早速それをホームレスに命令するも、その命令を聞かなかったため、イチキシマヒメはホームレスの自尊心を折り、命令を聞かせる目的で力技で服従させると、ホームレスの服を脱がして奪い、女物の服を着るように命じていた。そして、ホームレスが使うベッドも押収し、手足が伸ばせないほど狭く真っ暗なロッカーの中という別の場所へと監禁し、ホームレスが騒いでいるのも無視して放置していた。
そうして、一日が過ぎ、ホームレスが騒がなくなったので、ロッカーの外へ出すことにした。すると、そのホームレスは一目で分かるほど従順になり、過激な罰と管理番号で呼ばれた影響なのか本物の囚人であるかのように思い始め、また女物の服を着ていた影響のせいか、所々の所作が女性らしくなっていた。しかし、罰を与えたら、このホームレスは檻の中の清掃を励むようになったので、運の悪いことに静の言うやり方が正しかったとイチキシマヒメは認識してしまう。
この事がきっかけで、イチキシマヒメは人間を〝力〟で言う事を聞かせ、人として矯正させる方法を覚えたと思ってしまった。
そんなことがあって、イチキシマヒメは段々とこのホームレスの〝看守〟として振る舞うようになっていき、少しでも清掃が行き届いていなかったら、更なる制裁を加えて行った。
深夜に無理矢理起こして、足踏みさせる。
食事の回数を三回から一回に減らす。
素手で檻の中にあるトイレの掃除をさせる。
このホームレスの罪状記録(静が作った贋作で本当は無実。)を読み上げ、罵倒し、腕立てをさせる。

なお、イチキシマヒメは気付いていないが、この行為を強要させる事によってホームレスの人格性と自尊心を徹底的に傷付けることができたことにより、無抵抗でイチキシマヒメの命令に従うようになる。すると、これに味を占めたイチキシマヒメは更に罰の内容を過激にする。しかし、遂にそのホームレスの体力が限界を迎え、段々とイチキシマヒメの命令通りに動けなくなった。

理由は、食事の回数を三回から一回にしたうえ、深夜に無理矢理起こして足踏みと腕立てを長時間させたりしたことで、疲労が蓄積し、体力を失ったことが原因で命令通りに動けなくなったからである。

だが、ホームレスと言葉で通じ合えないうえ、疲れといったことが理解できないイチキシマヒメはもう少し過激な罰を与えて、指示通りにこのホームレスを動かそうと思い、静に相談していた。

「それなら任せてよ、イチ子ちゃん!!」

すると、イチキシマヒメのことをイチ子ちゃんと呼ぶ静は笑顔で即答し、ホームレスを椅子に縛り上げると同時に身体にクリップを付けていくと、ある物をイチキシマヒメに渡していた。

それは何かのスイッチであった。

「……これは?」

「押してみたら分かるよ。」

静にそう言われたイチキシマヒメは、スイッチを押すのであった。

……すると、椅子に縛り上げられていたホームレスは激痛を訴え、拘束を解いて欲しいと叫んでいるように見えた。恐らく、電気ショックであろう。

「……何の意味があるのだ?」

「まあまあ、右のダイヤルを回せば電圧を強くできるよ?それに、〝電圧〟は１００ボルトまで上げても死なないから軽い気持ちでやってごらん。これで、質問をして従順かどうかチェックして、従順なら解放するの。そうすれば、イチキシマヒメの悩みはスルッと解決っていうのが狙いなの。」

「……しかし、良いのか?」

「大丈夫。私を信じて。」

イチキシマヒメは静に促されるまま、従順かどうかの質問をし、従順ではないと判断したら電圧を上げていった。しかし、ホームレスが助けてくれと叫んでいるように見えたため、イチキシマヒメは静に中止するべきではないかと問う。

「……大丈夫なのか？」

「大丈夫。イチ子ちゃんに責任は負わせないから。」

そうして、電圧を上げていくイチキシマヒメ。しかし、それと同時に電流も上がり感電死する恐れがある仕様になっていることにイチキシマヒメは気付いていなかった。

そのため、ホームレスは苦痛を訴える。

「……静？」

「いけるいける。人間、そんな弱くないから、まだまだ耐えられるよ。」

電流を流され続けていたホームレスは遂に意識を失ってしまい、その姿を見たイチキシマヒメは辞めるべきではないかと静に尋ねるが、静に続行するべきだと強く言われたため、イチキシマヒメは続行してしまう。

「……なあ、死んでしまうのではないか？」

イチキシマヒメの懸念通り、既に感電死する程の電流がホームレスに流れ、そのホームレスは息絶えていた。

「……静よ。これに何の意味があるのだ？」

イチキシマヒメが静の手伝いをしたのは、自身の目的を見失い、何か見つけれるかも知れないという提案に乗って手伝っていたのだが、これではただ単に人間をいたぶっただけでしかなく、何も見つけることができないと言って落胆していた。

「うーん、分かんない？じゃあ、イチ子ちゃんは何で途中で止めなかったの？」

「……それは、お前が命じたからであろう？」

「それ、違うよね？いつものイチ子ちゃんだったらスイッチ押す前に『無意味なことだ。』とか言って辞めちゃうよね？私に命じられたぐらいでやらないのが普通だよね？だけど、イチ子ちゃんは無意味なことだと気付かないままスイッチを押した。……どういう事か分かる？」

「……。」

静にスイッチを押すことを途中で止めなかったことを指摘されたイチキシマヒメは、怪訝な表情で静を見ていた。

「ああ、一つ言っておくけど、それが異常なことだって指摘したい訳じゃないよ？それは普通の行動。変哲の無い一般的な行動なんだよ？」

しかし、静はそのイチキシマヒメの視線に動じることなく、いつもの朗らかな笑顔と共に返答していた。

「……どういう意味だ？」

「それはね、さっきイチ子ちゃんがやったスイッチを押す行動はね、ミルグラムの実験とかアイヒマンテストとか言われている社会心理学実験を元にしているの。その実験でイチ子ちゃんと同じ行動を取った人は４０人中２６人、つまり６５％ほどの人が居るの。つまり、イチ子ちゃんみたいな人はこの地球上に半分以上居るってことじゃない？」

「……何が言いたい？」

「つまり、イチ子ちゃんはこの世界にとって何の変哲もない６５％の人間と変わらないってことになるよね？もし、イチ子ちゃんが言うようにイチ子ちゃん自身が不要な存在だというのが事実なら、イチ子ちゃんと同じ行動をした６５％もの人間が不要な生き物ということになるから、イチ子ちゃんが不要な存在なのは可笑しな話しだよね？」

詭弁だ。とイチキシマヒメは思うものの、反論できなかった。

自身の存在を肯定的に捉えてくる静に対して好意を抱き始めているからなのかは不明であるが、イチキシマヒメはただ黙って静かに聞いていた。

「しかし、周りが我を許さぬのだ。」

「それ、誰が言っているの？よく知らない人達のことを不要か必要であるかイチ子ちゃんは分かるの？」

「……わからない。お前は何故、我のことを畏れぬのだ？一体何を考えておる？我は荒魂なのだぞ？」

そして、イチキシマヒメは不思議であった。荒魂である自分に畏れることもなく、存在を肯定してくれる静が何を考えているのか分からなかったのだ。

「……私もね、最初の頃はお父さんとお母さんに愛されていたけど、その期待に応えることができなかったからタバコを身体に押し付けられたり、壁に何度も突き飛ばされたりしたの。ホント、親不孝者だよね？」

「……。」

イチキシマヒメに尋ねられた静は、何故イチキシマヒメを畏れずに接するのか答え始めていた。

静も最初の頃は、両親から受けた期待に応えることができない不出来な子供であったとイチキシマヒメに述べていた。

「そんな愚図な子供だから、いつもお母さんとお父さんに怒られてた。……それで、私はもう限界だと、不出来な子供だと思っていた。そんなとき、お母さんとお父さんが私を殴ったり蹴ったりするのは、私を愛しているからって、厳しく躾てくれてるんだって思ったら、痛みを感じなくなったの。不思議だよね。」

静は、いつも実の両親から虐待を受けていて、その虐待も〝躾〟であって〝暴力〟ではないと言い聞かされていたこともあり、外の世界を知らない静はそれが常識であると疑わずに信じてしまったのである。

だが、信じているとは言っても、それだけで耐えられるものではなかった。だからこそ、静は両親から与えられる〝虐待〟は〝愛情〟であり、愛されていると思い込むことによって、自身の心を無意識的に守っていた。

「そうして耐え続けていたら、この御刀が私を認めてくれたの。そのとき、お母さんとお父さんは私が刀使になれたことに喜んでくれた。『流石、私達の娘。』『私達の教育の賜物ね。』と言って私を祝福してくれたの。」

静は痛みに耐えて耐え続けてきたからこそ、刀使になれたと語っていた。

「……でもね。そんなときに飼い猫に腕を引っ掻かれたの、だから悪い子には〝躾〟が必要だと思ったから、お母さんとお父さんが教えてくれたことを悪い子に教えようとしたの、でも未熟な私は失敗しちゃって悪い子は動かなくなったの。こんな失敗をする私は刀使にふさわしくないんだろうなって思ったの。……でも、私が持っている御刀はそんな私を刀使として認めてくれた。なら、これは罪ではないって、ようやく理解したの。」

そうして、刀使になった静は飼い猫に引っ掻かれたことで、飼い猫のことを悪い子と認識し、人を引っ掻くことが無い良い猫にするために両親が教えてくれた〝躾〟という名の虐待を飼い猫に行ったのである。……その結果、その飼い猫は息絶えてしまい、静は更生に失敗したと、無意味に生命を奪ってしまったと悔やんでいた。

しかし、飼い猫を殺したという赦されざる罪を犯したにも関わらず、御刀が今も自分を刀使として認めてくれたことは、静にとってみればそれは罪ではないということに他ならなかった。

「だから、お母さんとお父さんが私にしてくれたことは正しいことだったんだって、何一つ間違ったことは言っていないって理解できたの!!」

だから、両親がしてくれた〝虐待〟は〝躾〟であり、一点の曇りもない正しいことであると熱を込めて話す静。

「……ならば、我もそれをしろと言うのか？お前は。」

静の話しを聞いたイチキシマヒメはその考えに同意しろということなのかと圧をかけながら尋ねていた。

「え？違うよ。イチ子ちゃんにとって、この世は切り捨てられて頼る処が無い現世にただ生きるだけの辛い世界だと思っているけど、私みたいな愚図な子でも辛いことに耐えて行って、探して探しまくったら、こんなに美しいと思えることを知れる世界なんだって気付くようになると思うよ？荒魂と人を融合させるなんてこと誰も思いつかないと思うよ？」

しかし、イチキシマヒメの圧にかけられているにも関わらず、静は冷静に受け答えていた。

イチキシマヒメ自体が考えて、その行動に移したことが尊いことであると。
「……だが、だが、我の高すぎる理想は誰も欲さぬ。」
「間違っていると思うなら変えれば良いだけじゃない？未熟な私だって、失敗ばかりしていたけど、今じゃそう思うだけで気持ちが晴れやかになったよ？」
「……周りが我を許さぬ。」
「どういった理由で？そこがよく分かんないんだよねぇ～。」
「お前は、荒魂討伐を使命とする刀使であろうが？何故それが分からんのだ？我は穢れた荒魂なのだぞ？」
だが、イチキシマヒメは静が理解できなかった。
何故、この者は刀使なのに不要な我に話しかけるのか？
何故、この者は刀使なのに不要な我を気に掛けるのか？
不思議でならなかった。だから、イチキシマヒメは静に尋ねる。どんな意図が有るのかと？
「だって、イチ子ちゃん……。」
静はそう言うと、おもむろに服の袖を捲り上げていた。
服の袖を捲り上げた静の腕は、イチキシマヒメでも身の毛がよだつ程の痣と傷だらけでとても見れるような肌ではなかった。その肌に、静は躊躇うこともなく自信の御刀で腕を斬る自傷行為を行っていた。
その傷だらけの肌に新たな傷が付けられ、血を流している事にイチキシマヒメは驚いてしまい、静を制止していた。
「なっ、何をしている!?」
「何って、御刀は人を斬ることができるんだよ？だけどみんな、みぃーんな、御刀は荒魂を斬って祓う物であると言ってるの。それってさ、可笑しくない？御刀が荒魂を斬って祓う物であるなら、私の腕が斬れることなんて無い筈だよね？悪い子になったお母さんとお父さんが斬れて動かなくなることも可笑しい筈なんだよ。」
慌てるイチキシマヒメとは対照的に静は、冷静に自分の持論を展開していた。
御刀が荒魂を斬って祓う神聖な代物であるなら、人間である自分の

腕が斬れる筈がないと。二人とも不貞行為を働いたとはいえ、人間であるお父さんとお母さんを神聖な御刀で斬れて、そのまま死に至らしめる筈がないと。

「だからずっと、ずぅーっと不思議だったよ。何で御刀は荒魂と同様に人を斬れるんだろうって、何でそのことについてみんな気にしないんだろうって、ずぅーっと不思議だったの。……でも、こう思ったの、人も荒魂もそんなに変わらないんじゃないかって、そう思うようになったの。だって、荒魂化した人間が居るってことは人と荒魂が一つになれるんだよ？同じ者同士じゃなければ、一つになれないよね。その証拠に違う動物同士は遺伝子とかの理由でつがいになれないし、一つになれないでしょう？」

「……。」

静の荒魂も人間も似たような物であるという持論に、イチキシマヒメはただ黙って聞いていた。

「それに……。」

更に静は物言わぬ死体になったホームレスの腹を御刀で掻っ捌き、腸の中を開いて〝中身〟を出したのである。

「！」

静のその躊躇いの無い行動にイチキシマヒメは動揺し、唖然とする他なかった。

「お母さんとお父さんがこんなふうになったとき、身体の中を調べてみたら、こんなに穢れた物が溢れていた。だから、荒魂が〝穢れている〟って言うなら、人間も中はこんなふうに糞袋が付いているから〝穢れている〟よね？だとしたら荒魂と人間の違いって何だと思う？」

そして静は、死体となったホームレスの腸の中を引きずり出して、イチキシマヒメに尋ねていた。

荒魂の特徴が〝穢れ〟ているなら、人間もまた腹の中には〝穢れ〟が詰まっているのだから、どう違うのかと？

「だからさ、イチ子ちゃんが穢れた荒魂だっていう理由だけで不要になるなら、地球上に何十億も居る人間が不要な存在だっていう可笑しな論調になるよね？イチ子ちゃんが不要だという事にはならないよ

ね？何よりも、イチ子ちゃんが理論を完成させた物がイチ子ちゃんを必要だって証明しているんだから。人間の様な考え方と行動をするイチ子ちゃんが不要だということにはならないよ。」

「静……。」

静の持論を聞いていたイチキシマヒメは、静の言っている通りに、この世界は自分が不要な存在ではないと言っているような気がし、自分の描いた理論は間違いではなかったと言っているように思えて仕方なかった。

それは、自身の存在意義を求めていたイチキシマヒメにとっては静が存在意義をもたらしてくれた様な気がしたのだ。

「……そうか、物事は一つだけでなく、違う角度から見るだけでこんなにも違うものなのか。心服したぞ静。」

そのため、自分の存在が不要な者ではないと証明したかったイチキシマヒメは、静が自分の存在が不要ではないと証明してくれたことに深く感謝し、お前ではなく下の名前で呼んでいた。

「しかし、その論理では我を含め、全人類が不要な存在であると思わぬのか？」

しかし、イチキシマヒメは静に感謝はすれど、新たに疑問に思った事を尋ねてしまう。

静の荒魂も人間も何も違わないという持論が正解だとすれば、世の中全ての人間と荒魂は不要な存在ではないのかと。

「それも考えたことがあるんだけど、なら何故この世に人間も荒魂も斬れる御刀が存在することを許したんだろう、何故この世は人間同士でも荒魂同士でも争い合えるんだろう、御刀の力を人間も荒魂も使えるようにしたんだろうって考えたの。そしたら、この世を創った神様は生き物が手に取り合って仲良しになるのも好きだけど、それと同じくらいに生き物同士が争い合って、血と汗を流してそれがドロドロに混ざり合う光景も大好きなんだよ。その証拠に、北欧神話やサタンの話しでは天国でも神様同士でも戦争をしている。だから、神様は愛も友情も讃歌も同じように、戦争も悲鳴も血飛沫も大好きなの。だから、神様は自分の好きな物を他の人に知ってもらいたいから、人間と

荒魂を創ったの。だから本当はこの世に不要なものなんて一つも無いんだよ！」

だが、静は神という存在が荒魂が他の荒魂を吸収したり、人間も荒魂も斬れる御刀と人間が殺せる兵器の存在を許したのは、皆が手を取り合って築く平和な世界と同じくらい、人間と荒魂の双方と同族同士が斬り合って、血を流し、屍を重ねることによって成り立つ世界をも見るのが好きだから、それを彩るために人間も荒魂も必要なのだという持論を展開し、イチキシマヒメに答えていた。

静がそう考えられたのは親の〝暴力〟を〝愛情の一種〟であると思い込んだことにより、この思考へと至ったからである。

「……成程、静にとっては愛情も暴力も全て等しいものであると定義するのか。ならば、不要な物など存在しないだろうな。」

「うん、そうだよ。だから、探そうよ。この神様の愛に満ちた世界で私と一緒に。」

そして、静は人間の暴力（エゴ）によって生み出された犠牲者である。ならば、荒魂を人が御刀を手にするために無理矢理生み出された犠牲者と定義するならば、静も人の形をした荒魂とは言わないのだろうか？

……こんなに矛盾だらけの世界で、誰もが皆狂っている世界。異常な人間だらけなのに、誰も気にしないし、荒魂だけは怪物扱いし、静は無神経な人間の暴力を受け続ける。なら、自分がやるべきことは、と思いつつ自分の新しい目標を見つけるイチキシマヒメ。

「……分かった。静、一緒に探そう。」

「良いの？イチ子ちゃん？」

「構わぬ。静の言う愛の世界の方が見たい。」

この不憫な静に、生きる目標を提示してくれた静に幸福を与えるべく、静に協力することを誓うイチキシマヒメ。

そして、死んでしまったホームレスは地下室の壁の中に埋められてしまう。……静の両親が骨となって眠っている場所へ。

過去の残り香

現在特別任務部隊に所属している歩は、道場にて一人で黙々と剣の鍛錬を行っていた。

憧れている可奈美に少しでも追い付くために鍛錬に鍛錬を重ねていた。しかし、歩が所属することになった特別任務部隊の剣術の訓練指導に可奈美が就いたにも関わらず、一向に剣術の技量が上達したとは思えないことから焦りを感じ始めていたのも事実であった。

何が足りないのだろう？何が間違っているのだろう？

歩はそんなふうに思い悩んでいたら、どうにか時間が空き道場で身体を動かそうとしていた真希が入室し、歩は真希と目が合ってしまった。

「んっ？」

「あっ。」

真希と目が合った歩は、突然雲の上の存在に出くわしてしまったことにより、固まってしまっていた。そのため、

「おっ、おはようございます!!」

「……ああ、おはよう。」

つい上擦った声で挨拶してしまう歩。それを見た真希は歩のことを思い出していた。

（……内里　歩。綾小路武芸学舎中等部一年の刀使で、流派も寿々花と同じく鞍馬流だったな……。しかし、衛藤の弟の居る区画に近付いたため、綾小路側から送られたスパイの可能性を考慮し、監視と情報の制限も含めて特別任務部隊に配属。……という経緯の有る娘だったな。）

歩が特別任務部隊に来るまでの経緯と経歴についてである。

とはいえ、先程の受け答えからして、真希的には綾小路から送られたスパイとはどうしても思えないのだが、警戒するにこしたことはないと判断していた。

「……あ、あの、何か御用でしょうか？」

「ん?……ああ、済まない。こんな朝早くから鍛錬をしているのか?」
しかし、歩が蛇に睨まれた蛙のように萎縮している姿を見た真希は歩がスパイであるかどうかを考えて見ていたせいか、睨む様に見ていたことに気付き、咄嗟に場の空気を変えようと鍛錬をしているのかどうか歩に尋ねる真希。
「え、あ、はい。」
「いや、こんなに朝早くから鍛錬を行っているのは感心だなっと思ってな。……いつもこの時間に鍛錬を?」
「はっ、はい!!」
そして、真希はそんなことを言ってはぐらかしながら、歩の真意を探っていた。
「そうか、僕も此処で素振りしても良いかい?誰かと待ち合わせているなら、遠慮なく言ってくれ。」
「あっ、はい。大丈夫です!」
真希は歩に誰かと待ち合わせていないかと尋ねつつ、歩の現在の交友関係を調べようとしていた。
なお、交友関係を調べようとする理由は歩がもし綾小路から送られてきたスパイであるなら、交友関係の中に協力者か綾小路への連絡のつなぎをする者が居る筈であり、もしさの中に居た場合はその者を庇うために一緒に鍛錬する者が居ないと嘘を吐くからだ。だからこそ、真希は歩が白か黒かの判断材料の一つを得るべく、それとなく探り、此処で素振りすることを言って道場に居続け、歩を尋ねる者が居ないかどうか見るために居続ける積もりであった。
「良いのか?……となると、この時間はいつも一人で素振りを行っていると。」
真希はそう言いつつ、もし拒否し真希を追い出そうとする場合は歩は誰かと此処で待ち合わせをしており、此処で綾小路との連絡をしようとしているということであると歩の次の言葉を待っていた。
「あっ、はい……そうです。」
「あっ、いや済まない。僕の立場上、同じ隊の仲間が孤立していないかを知る必要が有るから聞いているだけのことなんだ。」

そのうえ真希は、部隊内に孤立している人間がいないかどうかの確認であると言って、歩を疑っているということを悟らせないようにしていた。

「……という訳だから、何か悩み事が有れば相談に乗るが？」

そのため、真希は相談に乗る態で歩に話し掛けていた。

「……あの、実は相談したい事があって。」

「うん。」

「……どうしたら、衛藤さんみたいに強くなれるでしょうか？」

「……は？」

だが、意外過ぎる答えに真希は動揺してしまった。

「いや、あの、私……此処の部隊に配属されて、部隊の人達の練度の高さを見て、自分の非力さに痛感しました。……だからもっと強くなりたい。もっと強くなって、みんなの役に立ちたいし、刀使として社会に貢献したいと思ったからです。」

「……。」

歩の話を黙って聞く真希は、その話しを聞き、嘗て結芽のことを目指す背中として見ていた自分のことを思い出していた。

「それに、初めて鎌倉で衛藤さんと会ったとき約束したんです。いつか一緒に戦おうって。……だから、私も早くあんな風に人の役に立つ刀使になれたらって、だからもっと強くなりたい。せめて部隊の人達の足手まといにならないくらいに強くなって、衛藤さんとも一緒に戦えるようになって約束を守りたい。今は、それだけなんです。」

「……なるほど、そういうことか。」

歩の何処か自分に自信を持てない話しの内容から、精鋭を集めて再編成した特別任務部隊に配属され、周りとのレベルの差と知己の者も居らず、同じ中等部の一年が居ないため、部隊に馴染めず気の休まらない環境に苦しんでいたのだろう。それに、共に成長する相手が居なければ、自身がどれくらい成長したか分からないため、自分に自信が持てないのかもしれないと真希は推察していた。

（なら、何時かは強さを求めて暴走するかもしれないな。）

中等部の一年が歩一人しか居ないことに、そして追い詰めてしまっ

たことに歩から相談されるまで気付かなかった真希は自身の落ち度であると猛省していた。こんな環境下に放り込まれれば、誰しも思い悩むものであり、こういった危惧も考えられると。

「……これは、僕の落ち度だな。済まない、辛い目に遭わせてしまったな。」

「えっ、いや、あの、そんな意味で言ったんじゃないんです。……すいません。」

急に真希が謝罪を申し入れたことに驚く歩。

歩自身、優を化け物の様に見てしまったせいで可奈美に酷いことをしたと思っているため、せめて約束だけでも守ろうと思い、これ以上どうやったら強くなれるか、大会二連覇を成し遂げた真希なら何か知っているかも知れないと思い、尋ねただけなのだが、何故か謝罪したので上手く伝わらなかったのかもしれないと思い戸惑ってしまっていた。

「……いつもこの時間で鍛錬をしているんだな?なら、僕も手を貸そう。」

「えっ!?」

突然の真希の申し出に歩は驚いてしまった。

まさか、自分なんかのために時間を割いてくれるとは、思わなかったからである。

「不服かい?まあ、憧れの衛藤さんほど強くないからね、僕は。」

「い、いえ、そんなことありません!……ただ、何というか、真希さんは多忙ですので、私なんかに時間を割いて良いのかな?って思っちゃって……。」

「何を言うんだ。君は僕と共に戦ってくれる大事な仲間だ。迷っている戦友を助けることほど有意義な時間は無いとは思わないか?」

歩はその言葉を聞き、真希に戦友と認められていることに内心喜んでいた。

なお、真希は気付いていないが、こういった行動の一つ一つが他の刀使から好意を抱かれる原因である。

「あっ、ありがとうございます!では、宜しくお願いします。」

「こちらこそ、宜しく頼む。」
　歩と真希は、互いにそう言ってから写シを張り、御刀を構えていた。
（私みたいな初陣がダメダメだった人でもこんなに気に掛けてくれなんて。……私も、衛藤さんのように強くなりたいのもそうだけど。この人のように強くならなきゃ!!）
　そして、歩は真希のことを尊敬しながら、御刀を構え。
（こうすれば、暴走を防ぐと同時に特別任務部隊の名を汚すこともなく、朱音様達まで汚名が及ばないだろう。）
　一方の真希は部下の暴走を抑えることができただろうと思いながら、御刀を構えていた。
　そうして、お互い御刀を構えていると、歩は真希の御刀に何かのストラップが付いていることに気が付き、それは何かとつい尋ねてしまった。
「真希さん、それって……。」
　真希の鞘に付けているイチゴ大福ネコのストラップのことを。
「ん?ああ、これは僕の戦友の一人が付けていた物を真似てね。今ではこれを付けていたら、その仲間がどんなときでも僕達を見守っていてくれていて、どんな苦境でも必ず生きて帰れるようにしてくれる御守りの様な物だ。……似合わないか?」
「い、いえ、その人は今?」
「……彼女は、まだ刀使を続けたかったそうだが、もう刀使を辞めたよ。」
　歩はその話しを聞き、だから特別任務部隊の皆がそのストラップを付けて真似ているのかと思ってしまった。そして、歩も早く部隊の空気に馴染むため、明日からそのストラップを付けようと決めていた。
　しかし、真希の言うストラップを付けた仲間が荒魂の力に頼った刀使として有名になった燕　結芽であり、真希以外はそのことに気付かぬまま、イチゴ大福ネコのストラップを付けようとしていた。
「すいません。辛い事を思い出させるようなことを聞いてしまって。」
「いや、構わないよ。君のことは衛藤からそういう人間ではないと聞いている。それに、衛藤は私と同じで剣術が好きな娘だともな。」

「ほっ、本当ですかっ!!?」

歩は、自身に対する可奈美の印象が悪いものではないと真希から聞いて、安心していた。

何故なら、優のことを化け物扱いするかの様な視線を意図せず送ってしまったため、嫌われているのではなかろうかと不安だったからだ。

なお、真希の言う可奈美の評価は聞いたことのない全くのデタラメである。真希がそう言った理由は、歩が憧れている可奈美がこう言ったと言って、歩に自信を持たせるために言ったのである。

「ああ、それに君は寿々花と同じ鞍馬流を使うと聞いているから、自分が学んだことを僕に全てぶつけてくると良い。先ずは僕の一撃をいなせるようになって、僕に一撃を加えれることを目標としようか。」

「はい!お願いしますっ!!」

歩との会話で、寿々花のことを思い出した真希は、今頃朱音様の命令で市ヶ谷に着いている頃だろうと思っていた。

タキリヒメとの対談を終えた朱音と可奈美達は市ヶ谷の防衛省内の甲斐も居る客室にて、可奈美は朱音に何が起こって、政府がタキリヒメを保護したのか尋ねていた。

「…朱音様!あの……何が一体どうなってるんですか!?教えてくださ

い！」

「……わかりました。」

　可奈美にそう言われた朱音は口を重く開け、事の経緯について話していた。

「姉の中にいた大荒魂があなた達に倒された後……三つに分かれました。先程会ったタキリヒメ、行方の知れないイチキシマヒメ、そしてもう一つは本体ですが隠世の中に逃げました。」

　あの四ヶ月前の戦いの後、紫に取り憑いていた大荒魂は三つに分かれ、タキリヒメ、イチキシマヒメ、そして隠世に隠れた本体の三つに分かれたと答えていた。

「……朱音様、それは確かなのですか？」

　朱音の話を聞き、間違いの無いことなのかと握り拳を強く握り締めながら、姫和は訊いていた。

「ええ、タキリヒメから得た情報です。彼女はこの国の政治家となるには隠世に居る本体が邪魔だったのでしょう。だからこそ、刀剣類管理局に排除してもらうために話したものと思われます。……タキリヒメの狙いが甘言を用いて人と荒魂をタキリヒメの下へ隷属させることだったことを先程は失念していました。……そして、今は三体とも、それぞれの目的を果たすために己の意思で自由に動いているということでもあるため、非常に危険な状態となっているというのに私はまだ未熟です。危うくタキリヒメの甘言に乗るところでした」

　朱音は姫和の何処から得た情報なのか？という問いにタキリヒメから得た物であると答えていた。そして、大人の自分が最も警戒しなければならないのに、気を許してしまったことを悔やみ、反省していた。

「そして、私は大きな考え違いをしていました。姉はただ大荒魂に身体を支配されていたのではない。その身を賭けてずっと抑え込んでいたのです。」

「それに、政府の一部はタキリヒメを支持し、人権と一部の国政を一任させるべきだと言っておりますが、それは危険な事でしょう。タキリヒメは我々の様な者がどうこうできるものではない。」

加えて、タキリヒメは着々と勢力を伸ばしており、一層厳しい情勢となっていることを説明する朱音と甲斐。
「「……。」」
そして、可奈美と姫和はそれを聞き、困惑し、戸惑うばかりであった。
そのうえ、４ヶ月前自分達が余計な事をしたせいで、今の混沌とした状況になったのではないのかと思い悩んでしまう。
「……ということは、朱音様は私達をタキリヒメに会わせるためだけに此処へ呼んだということなんでしょうか？」
だが、可奈美はそれにいつまでも思い悩むことなく自分達が市ヶ谷へ向かわせた理由を朱音に問い質していた。
「……はい。彼女、タキリヒメがそれを望み、自身を指示する議員等を使って刀剣類管理局に圧力を掛け、今に至るというのが事の真相です。しかし、それだけで此処へ貴女達を連れて来た訳ではありません。明日、もう一人重要な人物と会ってもらいたいのです。」
朱音は可奈美の推測通りだと答えながらも、タキリヒメ以外のもう一人の重要な人物と会ってもらうために此処へ連れて来たと答えていた。
「それは誰なんです？」
「……刀剣類管理局局長折神紫。我が姉です。」
「まさかこんなことになるなんてね……大丈夫？」

朱音と甲斐の話しを終えた可奈美と姫和は、自衛隊から宛がわれた市ヶ谷の宿舎の一部屋にて休んでいた。

「正直なところ、まだ気持ちの整理がつかない、……折神紫から大荒魂を引き剥がしたことで終わったと思っていたからな……。」

「姫和ちゃん。タキリヒメは斬らなきゃと思ってる？」

可奈美にタキリヒメは荒魂だから斬らねばならないのかと尋ねていた。

「そうだな……だが、お前はどうなんだ？」

しかし、姫和ははぐらかす様に返す刀で可奈美はどう思っているのかと尋ねていた。

姫和自身、タキリヒメにつけば優が救われる様な気がして、どうすれば良いのか迷っていたところも有り、可奈美ならどうするのだろうと思い尋ねてみたのだ。

「私、私は昨日感じた事を思い出してみたんだけど、……うまく言えないけど、あのタキリヒメは前に戦った大荒魂とは違う感じがしたなって……けど。」

「けど？」

「違う……あの感じは違う。タキリヒメは人間を見ていない。何となくだけど、それだけは言える。あの人は信用して良いとは思えない。」

そのため、可奈美は確信を持って答えた。

タキリヒメは人間を見ていないと、信用すべきでは無いと答えていた。

「……そうか。……そうだな。」

姫和は可奈美の答えに寂しく感じながらも、同意の声を上げていた。

「あと、もう一つ聞いて良い？」

「……何だ？」

しかし、可奈美は明日、紫と会う前にもう一つ聞きたいことがあった。

「……今、紫様と会うのは複雑な気持ち？」

「……そうだな。私は大荒魂を、折神紫を討つことだけをずっと考えてきたからな。」
　可奈美の問いに、姫和は言葉少なく答えていた。それと同時に、母を捨てた今の自分に仇とか言う資格など無いだろうとも思っていた。
　いや、本音を言えば母の仇というのは、もうどうでもよかった。
　自分には、優が居るからという理由で。
「紫様……今はもう大荒魂じゃない。元の紫様だって朱音様が言ってたよ？」
「分かってる。……でも、何と言うか。」
「納得はできないんだね。」
　姫和はもう紫が大荒魂に取り憑かれていないことは承知しているが、納得できないでいる自分が居ることを可奈美に指摘されていた。
「……ああ、何と言うか、復讐なんてやるべきなのかどうかと思う自分が居て、今まで命を狙っていた相手にどう接すれば良いのか分からないというのが、正直な気持ちだ。」
「……そう、なんだ。」
　姫和が復讐を辞めたことを喜ぶべきか、それとも目的を失った姫和を励ますべきか迷い、何とも言えない気持ちとなる可奈美。
「まあ、明日会えば良いよ。為せば成る！っていう言葉があるし。」
「それ、誰の言葉だ？」
「私の友達の言葉。良い言葉でしょ？」
　可奈美は満面の笑顔で姫和にそう言っていた。
　明日のことは、明日分かると言って。
「……分かり易くて良いな、お前は。」
　可奈美にそう言われて、少し笑顔になる姫和。
「姫和ちゃんもわかりやすいと思うけど？」
「分かり易くない。お前もブレないなという話だ。お前はお前。私は私。」
「そうだね。私にとってチョコミントは歯磨きの味だし。」
「フッ、可奈美。チョコミント好きは私だけではないぞ。優も好きだと言ってくれるようになっているんだぞ。」

「……うわぁ、他人の弟に何しているの？」
　可奈美は姫和のチョコミント好きを茶化すものの、姫和の迂闊な発言によって、ドン引きしていた。
「何故だ!?可笑しな事やっていないだろう？嫌いな物を無くすことは良い事じゃないか!?」
「言っている事は真っ当だけど、やっている事を考えたら、タギツヒメと同じ距離を保ってもらいたいくらい何だけど？」
「そんなぁっ！」
　こうして、姫和は可奈美をドン引きさせることに成功していた。

　防衛省、市ヶ谷――――。
「……まさか、病院で療養中と言われている局長が此処に居るとはな。」
「医療設備が有りますので、全くの嘘というわけでもないんですよ……。」
　市ヶ谷の防衛省に匿われている紫の居る場所には、ソファに座る朱音、そして可奈美と姫和、朱音に呼ばれ既に居た優が朱音と同じくソファに座っていて、その対面には、優と同じく朱音に呼ばれて既に居た寿々花とソファに座る紫が居た。
　そんな中、姫和は開口一番に紫に対して皮肉染みた事を言っていた。
「それよりも、あの二本はもう荒魂じゃないってこと？」
「……二本とは誰のことですか？」
　優にそう尋ねられた朱音は、誰のことなのかと尋ねてしまった。
「目の前に居るおばさんのこと。」

そのため、優は紫のことを目の前に居るおばさんと言って紫のことだと答えていた。

それと同時にピシリと冷たい空気がこの室内を支配していた。

過去の遺り香

この日、市ヶ谷へ向かう朱音の護衛任務として来た可奈美と姫和、朱音と紫の希望によって呼ばれた優と、この市ヶ谷に匿われている紫、そして今回の会談内容を真希へ報告するために朱音に呼ばれた寿々花等が集まった防衛省の市ヶ谷にある一室には、冷たい空気と重い雰囲気が支配していた。

何故なら、優が紫のことを〝目の前に居るおばさん〟と言ったからである。

二十年前の大災厄、通称相模湾岸大災厄時には大荒魂を討伐する特務隊の隊長を務めており、これを鎮圧し平定した最強の刀使として今日に至るまで有名であり、そのうえ刀剣類管理局局長として管理局開発現場の技術レベルを急激に向上させ、刀使の戦力を増強させた最大の功労者として、今も刀使達から畏敬の念を送られている折神　紫を優は〝おばさん〟と憚(はばか)りなく呼ぶという、姫和ですら行わないであろう剛速球ばりの火の玉ストレートを投げていたのである。

その結果、ピシリと冷たい空気と重苦しい静寂がこの場を支配し、視線を感じた可奈美と姫和は視線を感じた方へと視線を向けると、寿々花が居た。

（……衛藤さん、十条さん？もう少し言葉をどうにかできませんこと？）

そして寿々花は笑顔で、可奈美と姫和に視線でこう訴えていた。

保護者が暴走を止めろと。

（（本当にすいません！代わりに謝りますので許して下さい!!））

寿々花の視線をそう感じた可奈美と姫和は胃がキリキリする思いをしながら、優には見えない位置で必死に頭を下げて謝罪の意志を紫と寿々花に対して表していた。

「……何度も検査し、姉の身体からは荒魂は検知されませんでしたので荒魂ではありませんよ。それに、肉体年齢は１７歳で止まったま

ますので、そう言ってはいけませんよ？」
「そうなんだ……。」
優は反省しているかの様に見え、可奈美と姫和はもうこれで紫のことを〝おばさん〟呼ばわりしないだろうと内心ホッとすると同時に胃痛が和らいでいった。
「でも、おばさんをおばさんてどうして言ってはいけないの？」
しかし、優は直ぐに疑問に思ったことを口にして尋ねていた。
何故、優は紫のことを名前で呼ばず〝おばさん〟と呼んでいるかと言うと、紫に会う少し前に、
『優よ！気を付けろ!!そいつは我より胸がデカイっていうだけで身勝手で頭の栄養が胸に行ってるからアホでエラソーで我より胸が大きいからド変態で……えーっとえっと、とにかく性格が捻じくれている嫌な女じゃぞぅ?!おばさんと呼んどけ!!』
タギツヒメが紫のことをデタラメに教え、〝おばさん〟呼びで充分だと言っていたからである。
しかし、優はタギツヒメの言っていることが理解できなかったのだが、タギツヒメが紫のことを敵視していることは分かったため、姫和とタギツヒメの敵である紫の名前を覚えずに〝二本〟か〝おばさん〟呼びで言うことを決めていた。
なお、タギツヒメが紫のことをデタラメに優に教えた理由は、紫の身体のある部分が自分より大きいことに嫉妬し、優がそれにゆーわく(タギツヒメ談)されないようにするため、優が紫のことを嫌うように誘導しただけという実にどうでもいい様な理由である。
「えっ、えっとぉ！紫様はどうやって克服したんですかっ!?」
そのため、可奈美は必死で優の言ったことを誤魔化すため、大声で話の進行を進めるというかなり強引なやり方で有耶無耶にしようとしていた。
「……克服したのではない。捨てられたのだ。荒魂に。」
「捨てられた……？」
紫の意外な答えに驚く可奈美。
捨てられたとはどういうことであろうかと意味を問うていた。

「タギツヒメが自らの意思で局長を排斥したのではないかと。」
「あの夜……ですか。」
朱音の補足に可奈美は四ヶ月前の折神家で起きた大荒魂との争いにて起きた三本の紅い奔流のことを思い出していた。
それと同時に、可奈美が視たあの現象は大荒魂が紫を排斥したということなのだろうと理解していた。
「……やっぱり、おばさん捨てられただけじゃん。」
紫と朱音の話しを聞いた優は、再び剛速球張りの火の玉ストレートを投げていた。しかも、言った内容が内容なだけに色々とセンシティブな内容と捉えられかねないことを言ってしまったために可奈美と姫和は再び胃がキリキリする思いをすることになる。
(……十条さん?衛藤さん?『言葉』ですわ?)
(ホントのホンットーにすみませんっ!!)
可奈美と姫和は土下座をするかの如く、先程よりも必死で深く頭を下げて謝罪していた。
その姿を見た寿々花は流石に不憫だと思ったのか、紫に慈悲を乞うことにした。
「紫様。」
「構わん。」
寿々花の申し出に紫は手を挙げて制して、怒っていないことを示していた。……むしろ、
(……このハッキリと物申すところが美奈都そっくりだな。)
紫は何故か美奈都のことを思い出し、懐かしんでいた。
「むしろ、衛藤の母……私の旧友であった美奈都そっくりの物言いだと思って懐かしんでいた。そういったところは美奈都そっくりだな。」
「はっ、はい。……紫様、ありがとうございます。」
それを聞き、内心ホッとする寿々花。そして、
(……衛藤さん、貴女のお母様はどんな方だったんですの!?)
寿々花は優をベースに美奈都を想像したため、新たな疑問を抱くのであった。

何故なら、紫の優みたいにハッキリと物を言うところが美奈都に似ているという意味でかなり端折りながら言ったことを、寿々花は美奈都が優みたいな性格の持ち主であると受け取ってしまったからである。

そのため、寿々花の頭の中では美奈都のことを二十年前当時の紫相手に１０４勝３２敗という勝敗数を得る程の凄腕の刀使であるが、優みたいな性格であることから少々難のある人物像が出来上がってしまったのである。

……こうして、知らない所で美奈都は名誉を傷付けられていたのであった。

「あの夜、大荒魂と同化していた私はお前達に討たれた。諸共滅びる寸前だったが、奴はこの肉体を捨て、隠世へと必死で逃れて行った。荒魂を巻き散らしたのは追跡されないようにするためだ。……まあ、その子の言う通り、私は捨てられた存在だ。」

紫は自身に取り憑いていた大荒魂が優に怯えていたという部分を抜いて、形振り構わず逃げて行ったと答え、優の言う通り大荒魂に捨てられた存在であると自嘲気味に答えていた。

「だが、そうも言っていられない事態となった。」

「例の三女神のことでしょうか？」

「かつてタギツヒメだったものが３つに分裂した。朱音から聞いているとは思うが、三体とも自身の考えを持って自由に行動しているという極めて危険な状況だ。」

しかし、紫はそうも言ってられない事態となったと説明していた。

「……というかおば「そういえば私も聞きたいことがあるんですが貴女は此処で何を!?というか、何故此処に居るんです!?」」

また優が紫のことをおばさんと呼びそうになったのを察した姫和は、優の声を遮るように大きな声で紫は何故此処に匿われているのかと理由を尋ねていた。

そして、姫和も肝を冷やし、テンパっているのか紫のことをお前ではなく、貴女と呼んでいた。

「そうだな、……私は二十年前の真実を隠匿するためにノーチラス号

に匿われる予定だったが、同盟国の米国、いやカンパニーといった一部の勢力が私の命を狙っているというかなり確度の高い情報が有り、此処に匿われることになった。」

紫が此処に居る理由の一つ。それは、米国のＣＩＡから命を狙われているということであった。

「それは……間違い無いんですか？」

余りにもスケールが大きい話しを聞かされ、可奈美は思わず紫にそれは真実なのかと訊いてしまった。

「間違い無いだろう。……朱音、ＣＩＡの長官から舞草の協力を打診されたんだろう？」

「ええ、それで潜水艦ノーチラス号とトーマスさん達といった傭兵が派遣されました。」

「そのトーマスはな、私を暗殺する任も帯びていた。……そもそも二十年前の相模湾岸大災厄が起きた原因がノロをアメリカ本国に送ろうと輸送用のタンカーに満載した結果起きてしまった人災であったことは聞いているな？」

紫にそう言われ、可奈美と姫和は頷いていた。

「私はそういった事実を知っているため、米国にとってみれば厄介な事実を知っている者ということになる。それ故に、私の排除と刀剣類管理局を米国寄りの組織にするため、舞草を援助していたのだ。」

今の紫は、二十年前の相模湾岸大災厄の真実という米国の暗い歴史の一部分を知っている重要人物でもある。

それ故に、紫の排除と刀剣類管理局を米国寄りの組織とするためにＣＩＡは舞草を援助していたと答えていた。

「だからこそ、今も米国籍の潜水艦に居ることは危険だと判断され、市ヶ谷に匿われている。……それと、米国に対するカードを政府が保持しておきたいのと同時にタキリヒメの警護と監視も兼ねて此処に匿われている。」

「……つまり、紫様は今現在は最も安全な場所に匿われている。ということですよね？」

紫は今も米国籍である潜水艦内に居ると何時何時にどういった危

害が加えられるか分からないのと、日本政府が米国政府に対する政治上のカードを保持する必要が有ること、それにタキリヒメを監視し警護する者が必要だったことから自衛隊の市ヶ谷に匿われていて、此処なら安全であることを可奈美達に説明していた。

しかし、可奈美は暗に此処に居ても安全なのかと紫に訊いていた。

「恐らくは……米国に対するカードとして有効な間は生かしてはくれるだろう。」

可奈美にそう訊かれた紫は、顔を伏せながら答えていた。

「……だとしましたら、彼の少年を此処に呼んで大丈夫だったのでしょうか?紫様。」

優はＣＩＡから雇われているトーマスと共に行動していることが多いため、此処に呼んで大丈夫だったのか?と尋ねる寿々花。

「大丈夫だ。……衛藤はこの話しを聞いて、私が此処に居ることを内緒にしてくれるか?」

「あっ……はい。」

「そうか、内緒にしてくれるか。なら、君も内緒にしてくれるな?」

寿々花にそう聞かれた紫は、可奈美に紫が市ヶ谷に居ることを内密にすると言わせてから、優に可奈美と一緒に内緒にしてくれるかどうか尋ねていた。

「……分かった。」

「これで、問題ない。」

そうすることによって、優の口を噤ませることができたと言う紫。

「それに、防衛省の市ヶ谷に何か仕掛けることは先ず無いだろう。下手をすれば同盟国との間に国際問題が生ずることとなる。それは米国政府としても避けたいはずだ。……それと、私としてもこの子と君達にどうしても話さなければならないことがあったからな。」

そして、紫としても優と可奈美達に会って話しておかねばならないことがあると言っていた。

「……紫様、それは分かれた所謂三女神に関することですか?」

「そうだ。当面の危険度で高いのはタキリヒメではあるが、隠世へと逃れた本体とは別にもう一柱のイチキシマヒメの所在が不明なのが

気掛かりだ。」
　寿々花は自分達が此処へ呼ばれた理由がタキリヒメやイチキシマヒメ等を総称した三女神のことに関する話しなのかと尋ねられ、その通りだと答える紫。
「確かにイチキシマヒメも大荒魂から分かれた一柱ですが、それほどまでに危惧せねばならないのですか？」
「ああ、そうだ。……荒魂で人体を強化する技術はイチキシマヒメがもたらせたものだ。故にイチキシマヒメが何処に囚われているか、何処に協力するかによって状況が一変する。」
　紫はノロのアンプルの情報が外部に漏れることによって、荒魂で強化された人間が増えてしまうことを危惧していた。
　もし、外部に漏れ第三勢力（例を挙げれば、国際的なテロ組織やテロ支援国家といったところである。）にノロのアンプルの情報が知れ渡れば、どのような扱われ方をするかは分からないのだ。
　最悪、優のように攫われ行く当ての無い少年兵達が投与され、兵士として有用であると判断されれば、そういった子供達が活躍する世の中となる可能性が有るのだ。故にイチキシマヒメの確保は重要な事であった。
「当面の危険度で言えばタキリヒメが一番危険ではあるが、本質的な危険度で高いのはイチキシマヒメである以上、ノロのアンプルの情報を握っている奴を放置したままにはしておけん。……此花は引き続き皐月夜見とイチキシマヒメの捜索も頼む。あと、この会談内容を獅童にも伝えておいてくれ。」
「承知致しました。それを聞けば紫様が今もご無事であることをお喜びになると思います。」
　そのため、紫は寿々花に夜見とイチキシマヒメの捜索を命じていた。
　理由は寿々花が京都の名家の令嬢であり、その名家は代々折神家に仕えていたという経緯があるために信用ができ、そのうえ登校用のハリアーを用意できたり、高級車を何度も替えたりするぐらいに経済的余裕の有る裕福な家でもあるので縁故の有る私立探偵等を数名ほど

スパイ活動に従事させるだけで、表向き刀剣類管理局本部とは関係の無い人間が綾小路武芸学舎といった危険な所へ密かに内偵することが可能であったからこそ、紫は寿々花に命じていた。
「……頼む。それと十条と衛藤、少し良いか？」
「あ……はいっ!!」
「！……。」
紫に呼ばれた可奈美と姫和はビクっと反応しながら、可奈美は返事をし、姫和は無言で頷くだけであった。
「あと、優は後で私と話すことがあるから少し待っていてくれ。」
「……。」
そして紫は、可奈美と姫和との会話が終わったら、次は優と話すから待ってほしいと優に伝えると、優は姫和と同じく無言で頷いていた。

紫が姫和と可奈美、そして自身を含む三人だけで話したいことがあると言って朱音と優、そして寿々花を退室させていた。
「……座れ。」
そして紫は、可奈美と姫和に座って話そうと言っていた。
「……今も「あの、紫様っ!!」……何だ？」
紫は、姫和と可奈美に母親のことについて自身が行ったことを許せないかどうか聞こうとしたが、その前に可奈美の大きな声によって遮られてしまったため、紫は可奈美から発言させることにした。すると、
「あ、あの、その、先程の優ちゃんの言っていたことは何と言いますか、

その、まだ9歳の子供ですのでまだ物の分別が付いていないというか何というかそうですね……え～～っと。」

「その、何と……言いますか子供の言う事ですから余り気にしないで……良いと思います。」

　可奈美はしどろもどろになりながら、姫和も言いにくそうに何とか間を空けつつも敬語を使って、両者共に優の”おばさん”呼びに対する弁明を必死で行っていた。

「……その、すいませんでしたぁ!!後でちゃんと言っておきますんで許してくださいっ!!!」

　しかし、可奈美と姫和の二人は、結局優の紫に対する暴言を許して欲しいと頭を必死に下げて願い出ていた。

「……ああ、うん、まあ何だ、それは構わない。……子供の言うことだ。」

　紫は、先ずは自分がこの二人の母について謝罪を行なおうとしていた矢先に、その謝罪しようとしていた両名が先に謝罪してきたという事態に可笑しな事が起きている様に見え、何とも言えない気持ちにさせられていた。

「本当ですかっ!?」

　可奈美は顔を破顔させながら、聞き返していた。

「ありがとう……ありがとう。」

　そして、姫和は頭を下げつつ、何度も感謝の言葉を述べていた。

「さて、私も本題に入らせてもらうが……今も私が許せないか?」

　紫はどうにかいつもの調子に戻ると、可奈美と姫和に母の事で許せないかと尋ねていた。

「えっ……いや、その、紫様は私とこうして話すのはこれが初めてですよね?」

「……急に何の話しだ?」

　可奈美と姫和は、優の紫に対する暴言をどうやって許してもらおうかということで頭が一杯だったのと、そんな両者の状態に気付かぬまま紫は母のことで許せないかどうかと付けずに聞かなかったことにより、姫和と可奈美の両名は何の話しか分からなかった。

「いや……うん、まあ、そうだな、私も本題を抜いて話し、伝わり辛い言い方で話したのが悪かったな。……篝や美奈都のことだ。」
「あっ……。」
紫に、亡き母篝のことで今も許せないかどうか聞かれた姫和は動揺していた。
理由は、一度優のために復讐を捨てた自分が今更どうこう言う資格は無いだろうという考えが過ったからである。そのため、
「……今は、そんなことを言っている状況ではないので。」
と姫和は言って、答えをはぐらかしていた。
「……そうか、だが十条、衛藤、済まなかった。」
「紫様……。」
「……。」
紫の謝意に可奈美は目を見開いて反応していた。
そして、何も言えない姫和は黙って俯き、その紫の行動に心がひび割れたかの様に痛むばかりであった。
「二十年前、大災厄のあの日特務隊の隊長を務めた私はお前達の母親と共に最後の戦いに臨んだ。私の役目は現世にしがみつく大荒魂を隠世へ押し込み、穴を塞ぐことだった。そうすれば大荒魂は篝と共に幽世の底へ落ち散り散りになって消えていた。だが、大荒魂は消滅を免れる術を模索した。二人を助ける代わりに私と同化することを提案してきたのだ。そのとき友人達を失いたくなかった私は何千人もの犠牲者を出した荒魂を受け入れ……そして後は、お前達の知っている通りだ。美奈都も篝も救えず、一人だけおめおめと死に損なったままだ。」
そうして、紫は語る。
二十年前のことを、自分が何をして、何をしでかしたか、そして何を遺していったかを……。
心を許した友人を失うことを恐れた紫は、何千人もの犠牲者を出した荒魂を受け入れたのだと手を強く握り締めながら答えていた。
「でも……うちのお母さんは死ぬまで幸せそうでしたよ。死ぬまでってなんか変な言い方ですけど、剣術だっていっぱい教えてくれました

し、刀使の仕事を誇りに思うって。」
「可奈美の……お母さんが……？」
しかし、可奈美は美奈都を救えなかったと言う紫に美奈都は死ぬまで幸せそうだったと返答していた。
「……そうか。」
危険な状況から生き残ったことにより生ずるＰＴＳＤの一種サバイバーズ・ギルトに陥っていたことに紫は気付いていなかったが、可奈美の〝美奈都が死ぬまで幸せそうだった〟という何の意図も無いただ自分が感じたことを言葉にして伝え、その言葉が伝わった紫は幾許か救われたような気がした。
「……ありがとう。」
そのため、紫は小さき声で可奈美に感謝の言葉を述べていた。
その後は、篝と美奈都は刀使の力を半ば失い内側から大荒魂を封じたものの、本来篝が背負うはずだった半分を美奈都が受け持った影響で篝と美奈都の二人は現世と隠世という二つの世界に、同時に存在する稀な存在となり、その際に持っていた御刀千鳥と小烏丸にも同じことが起こったと紫は話していた。
紫の話しを聞いた可奈美と姫和の二人は、時々ある共鳴はそれが理由だったのかと驚くと同時に妙に納得してしまった。
……しかし、
（……やはり、私は臆病だ。）
紫は最後まで言えなかったことを思い出し、自身のことを臆病者だと評していた。
先程、朱音が言っていた通り、紫の肉体年齢は大荒魂の影響により１７歳で止まったままである。だとすれば、大荒魂であるタギツヒメに取り憑かれている優も例外ではなく取り憑かれた歳で止まったままである。つまり、タギツヒメを取り除かない限り優はずっとその歳のままであり、子を成せないのだと。素質や宿命を連綿と受け継くことが許されない存在であることを伝えられなかった。
そのことに気付かぬままの方が良いのか、伝えるべきなのかを迷った紫は、結局は最後まで可奈美に言えなかったのであった。

……ピーター・パンは大人になれない。
ネバーランドに移り住んだ者は年を取らなくなり、移り住んだ時の姿のままで過ごすことになるのだから。

夜明け

「……それで、どうなのだ？」
「どうなのだとは、どうゆうことなのだ？」
　可奈美と姫和の両名との会話を終えた紫は、タギツヒメ（正確には、身体は優で、意識がタギツヒメだが。）と最近の近況について話していた。
「……どうしてそんなに不機嫌なんだ？」
「ふきげんじゃないですー。」
　紫は何が不満なのか尋ねるが、当のタギツヒメは明らかに不機嫌そうにしているのに、不機嫌ではないと小学生の様な受け答えをしていた。
　その理由は……、
（あ〟あ〟あ〟ぁ〟ぁ〟あ〟あ〟ぁ〟っ!!デカイッ!!ＳＵＧＯＩＤＥＫＡＩ!!!ああ神様ぁっ、何故我だけ絶壁なのじゃあ。）
　ある身体の一部が自分よりも大きいことを羨み、妬み、嫉み、悔やんでいたからである。
　そうして、タギツヒメはそんなことで自分を創った、いや生んだ神を恨んでいたのであった。
（チクショーメ!!我より胸のデカイ奴は献血ポスターのキャラみたいに居なくなればいいのにぃっ!!）
　そんな不穏なことを考えつつ、紫をとにかく敵視するタギツヒメ。
「……まあ、あれだ。彼はそんなことは興味無いと思うぞ。」
　そして、タギツヒメとの会話で、タギツヒメは自分自身に自信が無いことに紫は気付いたので、アドバイスすることにした。
「ハァー……。お主という奴はアレか？天然という奴なのか？持つ者がそんなこと言ったところで何にも思わんどころか見下しておる様に感じるぞ我は。それに優は我が生涯の伴侶だということを皆分かっておるのか？なあなあ分かっておるのか？お主は分かるよな？何故我が胸の大きい奴を嫌うのは生涯の伴侶たる優

はまだ子供であるからそんな目に毒の様な物を見せる訳にはいかんではないか？青少年の健全な育成のために努力しておるのに紫は局長なのだからその無駄にデカイ脂肪の固まりは搾って小さくする努力をすべきだと我は思うがなっ!!それと金持ちが『お金が無くても幸せ』と言うのと、貧乏人が『お金が無くても幸せ』と言うのでは全く違うのと同様に……我より、いや我と比べると少し、ほんのすこーーーし大きいお主に言われても嬉しくないし煽られている気がするのだがっ!?コンチクショーーーーッ!!」

「あ、ああ……。」

タギツヒメの身体の一部に対する早口による熱弁に紫は圧されたため、曖昧な返事をするしかなかった。

（……とはいえ、彼女がこうも変わるとは……彼のお陰だろうか。）

しかし、紫は自身に取り憑いた大荒魂の一柱であるタギツヒメがこんな子になるとは思わなかったので、感慨深かった。

何故なら、二十年前の大荒魂に取り憑かれていた紫は大荒魂と対話出来ていたが、人間への憎悪が強かった。しかし、紫が篝と美奈都のことが気になり、遠くから様子を眺めて安否を確認しに行ったのだが、結果的に優と大荒魂を引き合わせることとなってしまう。……そのときの大荒魂は初めて人間を愛してしまったことに衝撃を受けたのだろう。

――人々を脅かす怪異である自分達が、神である自分達がただの子供を愛してしまったという解決し難い自己矛盾。

――人は命のバトンを次の世代に引き継げるが、自分達荒魂にはそれが出来ないという事実に打ちひしがれる悲しさ。

――自分達荒魂は時間を恐れないが、自分が愛してしまった者は寿命という時間の束縛が有るということ。

それらの情報が一気に大荒魂へと、そして紫の中へと一斉に流れたのだ。

そのときの倫理矛盾は凄まじく、二十年前に大災厄を引き起こした強力な大荒魂が自己を保てない程であったと紫は記憶し、強烈な印象を抱かせる程であった。その倫理矛盾を解決するために紫の中には

イチキシマヒメとタキリヒメ、そして本体が残り、倫理矛盾を起こす部分はタギツヒメとして分離したのだろうと推測していた。
「……そんなに不安なら、自分の思いの丈をぶつけたら良いではないか。」
そのため、紫はタギツヒメに素直に自分の気持ちを打ち明ければ良いだけではないかと言われる。
そう言われたタギツヒメは、紫の方へ顔を向けると、思いの丈をぶつけるのであった。
「フフ……フフフフフ、お前はそう言うのかっ！なら、話すが我が初めて生まれたというよりも、この現世に現れたときは人間に対する恨みつらみはあったが、此処が何処なのか分からなかったから、どうしたらええんか分からんかったんやぞぅっ!?!!というよりも生まれて直ぐ、何か鬼の形相で刀持ってこっちに寄って来る奴等が集団で来たんやから最初『何やこいつらニンゲンコワッ。』とか思ってしまうわっ!!そんなこんなで二十年前の我等は『ニンゲンコワッ。』という印象しか抱かんかった訳やから対話とか無理やんとか思ってしまったのじゃぞっ!!そんな状況になったら、上手くお喋りできる訳なかろうがっ!!」
「……ああ、うん。そうなのか。」
タギツヒメの話を聞き、圧に押されながらも紫はタギツヒメはタギツヒメなりに苦悩していたことがあったのだということを理解していた。
……随所で、スラングと大阪弁が混じっているのは気になったが。
「そんな、そんな人とのお喋りが苦手な我に、それをやれと？……お主は我が玉砕する姿をそんなに見たいのかっ!?!!今まで一つも人とまともに喋ったことがない我は『下等な人間風情。』とか、『我は神だぞ。』とか言って頑張って虚勢張ってた陰キャの我がっ、簡単に出来る訳なかろうがぁっ!!!ゆぅかあぁりいぃぃぃっ!!!!……うっ、ゲエッホ！ゲホッ!!」
タギツヒメはテーブルを叩くという台パン行為をしながら、紫の名前を大声で叫んでいた。しかし、大きな声で叫んだことによって咽て

しまう。
　今日も自身の威厳やら何やらを自分の手で吹き飛ばしてしまうタギツヒメであった。
「リア充で、胸が大きくて、人と上手に喋れて、胸が大きくて、最強の刀使とか言われて持て囃されているリア充のお主には、どうせ、どーーうせ、分からんことやろっ!!」
　タギツヒメは紫に対して、劣等感と嫉妬心丸出しの感情が有ると答え。
「どうせ、どーーせその無駄にデカイ脂肪の固まりで優をゆーわく(誘惑)したり、たぶらかす(誑)気じゃろうっ!?!?どうなんじゃっ!?!?」
「いや、私はそういった気持ちを抱いていないぞ。」
「はあっ!?　お前、優に魅力が無いとでも言うのかぁっ!?!?」
　そのうえ、タギツヒメは紫がその無駄に大きい身体の一部を使って、優を誑かそうとしているのではないのか?とあらぬ疑いを掛けて、問い詰めて来たので、紫は正直にその気持ちを抱いていないと答えるのだが、何故かタギツヒメは好意を抱いている人を貶された様に感じ、紫を責めていた。
「……ああ、うん。私も言い方が悪かった。……確かに、彼は幼げさと可愛らしさがあり、充分魅力的ではあるが私の好みの男性には含まれないから安心してくれ。」
「はぁ?……何故じゃ、お前ホモか?ホモなんか?オイッ!?!?」
　肯定しても否定しても、タギツヒメがキレ散らかすという行動に、流石の紫も頭を抱えて疲れそうになるが、あることに気付く。
　タギツヒメが紫に対して劣等感を抱いており、タギツヒメが優に対して好意を抱いている。
　そして、紫と優が対話できる状況と、このタギツヒメの言動から予測できることから、気付いたのだ。
「……なるほどな。自分に自信が持てないから、優に私のことを毛嫌いさせる様なことを言わせたのか。」
「ファッ!?!?い、いや我、何の話か分っからんのぅ～～?」
　タギツヒメは紫に対して〝おばさん〟呼びする様にと優を唆し、自

分と優が仲良くならない様に仕組んでいたのだろうと紫は理解していた。それを指摘すると、タギツヒメは絵に描いた様な声を出して驚き、誰がどう見ても動揺しているのは明らかであったため、自白している様な物であったのだが、タギツヒメはそれに気が付いていなかった。

「……お前は直ぐ顔に出るから、分かり易いな。」

「うあああああん!!バレたあぁぁぁぁ!!」

紫が既に自白しているような物であると指摘すると、タギツヒメは台パン行為をしながら、泣いて悔しがっていた。

「グスン、ヒック……だって、だって紫は陰キャの我よりも胸大きいし、人と一杯お喋りして魅力有るし、そんなんだからリア充だし、ならそうすることでしか勝てないから、おばさん呼びさせて優に近付く女は排除したかっただけなのに、それすら看過されたら我に残ってる魅力的な物ってなんじゃっ!?」

タギツヒメが優に紫の事を〝おばさん〟呼びにしろと唆した理由は、早い話が自分よりも魅力的に見える紫と優の仲が良くなると紫に取られる様な気がしたからであり、仲良くならない様に〝おばさん〟呼びをさせていたとタギツヒメは自供していた。

「ああ、うん。……そうか。」

……まるで、子供みたいな行動をする大荒魂の一部であるタギツヒメになんとも言えない気持ちになる紫。

「……いや、まあ。だが、君はフリードマン博士から知能が高いと言われたことがあるだろう?なら、それを駆使して、今からでも学べば良いではないか?」

だが紫は、そんなタギツヒメを段々と見ていられなかったのか、タギツヒメに助言をしていた。

「ハッ!!……そういえば、そう言われておったな。確か、荒魂はノロと結合すればするほど〝知性〟を獲得し、高度な知能を有するとか人類を超えた知能を持つとか言っておったのう。」

そして、このタギツヒメは〝神〟だとか、〝~を超える〟とかいう厨二的なフレーズが大好きな精神年齢、もとい二十年間も生きている

が心はそんなお年頃であり、表情をコロコロと変えるぐらい素直に喜んでいたのであった。

……紫は、そんなタギツヒメを見て、コイツが一番安全そうだと理解した。

「お主、良い奴じゃのう。そう言えば我は人より遥かに超える知能が備わっていたんじゃっ!!それさえ駆使すれば、優をメロメロにさせることはできるのう。」

だが、このタギツヒメが高い知能を有していると自分で言っているところを見ると、遥かにアホッぽく見えたのだが、それは心の内に秘めておくことにしようと紫はこのときに思った。

「そんじゃ、我は忙しいから、優と交代するからよろしくな。またな～。」

「……ああ、またな。」

紫はどっと疲れたと思いながら、優の意識がタギツヒメから優に代わるところを見守っていた。……しかし、

「……で、ヒメちゃんと何話してたの?」

紫は、優に今も敵視されていたままであったことに変わりないのとを忘れていた。

(ゆぅかぁりぃぃぃぃっ!!今思い出したが、コミュニケーション能力は知能ではなく、対話した経験によって磨かれるものではないかっ!!?騙しおったなぁぁぁぁぁっ!!!)

そして、その数日後、タギツヒメはコミュニケーション能力は対話した経験に基づく物であることに気付き、嘆いていたことは紫は知る由もないことであった。

同時刻、総理官邸内――――。

三木一等陸佐から内密の話しがあると言われた総理は、三木を内密に首相官邸に呼んだのだが、もたらされた情報に途惑うばかりであった。

「……それは、確かなことなのかね？」

野党の支援を受けた者が市長となっている市にて、銃器類の密輸が行われており、その密輸に市長と刀剣類管理局の綾小路が深く関わっている（正確に言えば、ソフィア達が中心となって学長達には知らせず、勝手に行っているのだが、そこまで三木は知らされていなかった。）ということ。

そして、それら銃器は活動家等の手に既に渡っており、暴動といったことに使われることは容易に想像ができ、国が分裂しているという状況を演出し、国内外からの非難の声を大きくさせ、内閣の支持率を下げさせるという工作を行おうとしていること。

そのうえ、それら不法入国者等を扇動しているのは、軍籍を隠し、表向きは学生として登録され、大学や共同研究所に潜伏している中国といった敵対勢力の工作員である可能性が高いということ。

どれか、一つでも公になれば、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題以降現政府への信頼が無い国内状況においては大騒動が起きる話であり、国内の混乱は熾烈を極める物ばかりであった。そのうえ、その混乱によって在留外国人と本土の人間の対立は更に深まることとなるかもしれないと思った総理は頭を悩まし、ただただ迷い子の様に困惑するしかなかった。

「……はっ。これらの情報は陸幕が調べ上げた物であり、ＤＩＡ（アメリカ国防情報局）からも同様の懸念が有るとして有益な情報をもたら

されたことにより、かなり確度の高い情報であると見ております。」
三木は、表情を崩すことなくただ淡々と事実のみを述べるかのように語っていた。
そのため、三木の話しに説得力が増したのか、こういった事態の対処に弱い総理は現実に暴動が起きるのではと思い、危機感と焦燥感を募らせていくだけであった。
「総理、事実であれ虚偽であれ、我々は国民の安全と繁栄を約束している以上、これを見過ごすことはできません。」
「……しかし、なあ。」
それと同時に、これ以上刀剣類管理局と防衛省の権限を拡大させるべきなのか、そして自分が初の自衛隊の治安出動を命じ、流血沙汰を起こした総理として、歴史にその名を遺すことになるかもしれないということに恐れを感じており、これらの迷いが総理自身の決断を鈍らせていた。
事実、三木の話しを聞いても、未だに決断出来ないままであった。
「……自衛隊の治安出動ではなく、警察のみで事態の収拾は出来ないのかね？」
総理は警察力だけで、どうにか事態を平和的に解決できないか、三木に相談していた。
「総理、それは難しいでしょう。対戦車ミサイルや銃火器等によって武装された集団を逮捕を前提とした我が国の警察力だけで抑え込むのは非常に困難。万一、機動隊員等が重傷を負えば、国民に恐怖を与える結果となり、その恐怖が呼び水となって新たな未曾有の大混乱がこの国を襲うこととなります。そのうえ、そのような事態に発展した場合の予測される人的損害は推定１０万人以上となり、被害総額は三千億円。そんな最中で昨今増加している荒魂事件も同時に発生すれば、刀剣類管理局の活動が制限されている今の状態では予測される以上の被害を我が国が被る事となるのは必定です。そうなれば国内の経済事情は悪化、この惨憺たる結果を招いた政府に国内からはその無為無策ぶりを非難する声が上がり、諸外国からも激しい叱責を受けることとなるでしょう。」

総理に尋ねられた三木は、この暴動によって起こる予測した推定被害と人的被害を淡々と答えていた。

「総理、このまま手をこまねいていては私が先程申し上げた話は現実に取って代わり、無辜の民がその危害を受けることとなってしまいます。どうか、自衛隊の治安出動と刀剣類管理局に課せられた条例を緩和させる特措法をご決断下さい。今、現在起こりつつあるこの未曾有の国難から国民を守ることができるのは総理の英断だけです!!」

そして三木は声を大きくし、感情を込めて総理を説得していた。この未曾有の国難に対処すべく、自衛隊の治安出動と刀剣類管理局に課せられた条例を緩和させることができるのは、総理だけであり、無辜の民を守ることができるのは総理の署名だけであると。

三木にそう説得された総理は、国民が未曾有の国難にさらされて、被害が出るならと思い、自衛隊の治安出動の命令書と刀剣類管理局に課せられた条例を緩和させる特措法にサインをしていた。

市ヶ谷、防衛省――――。

「三木一等陸佐が総理の説得に成功したそうだ。」

「……そうか。」

甲斐と中谷は自衛隊の治安出動の命令書と特措法の制定が確実となったことに喜んでいた。

この決定により、今まで刀剣類管理局の協力には特別災害予想区域に入るため、〝自主派遣〟や〝災害派遣〟の名目で出動していた自衛隊が、この暴動を利用した〝治安出動〟の命令を足掛かりとして、防衛省の任務の内容と権限は飛躍的に広がるからである。

「……刀剣類管理局には苦労を掛けるだろうな。」

中谷は、甲斐と共にここまで仕組んでいたにも関わらず、素知らぬ振りをしながら甲斐に尋ねていた。

「まあな、刀剣類管理局と自衛隊の共同作戦。新型S装備のデータリンクシステムの戦闘データの提供。群馬山中と江仁屋離島における

非合法活動。そして今回の自衛隊の治安出動。……どれも、迷惑を掛けてしまったしな。」

甲斐もそれに同調していた。

そして、銃器の密輸は警察等に情報を提示し、動かせば事前に差し止めることは可能であったのだが、自衛隊の治安出動を総理に決定させるべく、放置していたことは三木に隠していた。

「しかし、総理の説得に三木を送ったのは正解だったな。」

「ああ、我々だと警戒するだけに終わりそうだからな。」

そして、総理を説得するのに三木を送った理由は若く、鉄面皮ではあるが熱意の有る者を送ったというのが真相であり、それが功を奏したことにほくそ笑んでいた。

甲斐と中谷が、三木と同じことを言っても、疑念を抱かれるからである。

「全てはお前さんの想定通りという訳か。……しかし、これが日本の夜明けとなれば良いのだがな。」

「まだ気は抜けんよ。」

中谷は、甲斐の想定通りに事態が動いていることに喜ぶものの、甲斐は一抹の不安を感じながら事態を視ていた。

『速報です。今日未明、刀剣類管理局に課せられた荒魂関連ではない事件に特祭隊を介入させてはならないという条約を緩和させる特措法等が強行採決される模様です。』

そして、これを機に事態は大きく動き、予想外の方向へと向かって行くのであった。

綺麗な言葉に刺さる心

『各地で起こっているアメリカでの国人差別に対する抗議活動は世界各地と日本にも広がっており、その抗議活動とそれに反対するデモ隊とがぶつかり、最悪の事態へと発展する恐れがあるとして、本日未明、政府は抗議活動が起こっている現地にて荒魂事件が発生する恐れが充分に有るとして、強行採決した特措法に基づき特祭隊の限定配備をすることが決定致しました。なお、この政府の決定に連立を組んだ一部政党と野党、国民の反発は激しいものとなることは予想され――』

一方、テレビに映るニュース発表に対して刀使達が物議を醸していた。

「ねえ、これってさ、私達紛争地帯に行かされるみたいなものなのかな？」

「怖いよね。そんなん嫌だよね～。」

「私、純粋に剣術が好きで此処に入ったのに……。」

といった感想の述べ、人と戦うようなことをするために刀使になったのではないと話していた。

一般的に想像される使命に燃えるうら若き刀使達の会話であった。

彼女達は、剣術道場の娘で親の経営する道場の名声を得るために在籍していたり、親や祖父母が刀使であったので刀使に憧れる者だったり、刀使に助けてもらったからという理由で試験を受けて突破した者が多い傾向にあり、概して彼女等は誇り高く、使命といった物を大事にするのだが、その誇り高さ故に融通が効かないという部分もあるため、彼女達のように、政府の決定に異議を唱えたりする程、賛否両論であった。

しかし、そういった者達は両親が存命といった比較的恵まれた環境下にあるため、子供の事を心の底から心配した親から刀使を辞めるように説得され、そのまま退校するということが多く、今はこういった

刀使の使命に燃え、且つ実力が高い子は希少になりつつある。
「何か最近噂になってない？あたし達が戦争に行かされるとか、協力させられるみたいな話。」
「あ～、そういやそうだね。……でもさ、別にどうでもよくね？上がそう決めたんなら、従うしかないんだし。」
「だよね。」
しかし、その一方で金銭的に恵まれていない環境下に産まれ、賃金を得るために刀使となったこの娘達は、仕方がないと言って諦めていた。
彼女等は、運良く御刀に選ばれ、試験にも刀使として社会に貢献したい等と偽って刀使となっているが、大元の理由は金銭的な理由で入隊している。
そのうえ、その娘達の中には、酷い場合は親がギャンブル中毒者であった者も居り、経済的に余裕の無い家庭に産まれたので、その境遇から脱するために大学まで勉学をし、一般の会社や他の公務員に就職するため、刀使として働いている子も居たりするので、退校する者は親からの強い要望が無い限り、退校はしないので最初の娘達よりも在籍数が多い。
……しかし、彼女等は刀使の役目をただの仕事であると考える傾向が強いため、命令には従うが命令以上の活躍をすることは少ない傾向にある。
「……何か騒いでるよね。」
「何か、さっきのニュース観て、どうなるか気になるんだって。良いよね、あいつらは迎えに来る親とか居るんだし。」
「……どうでも良いよ。いつも通り荒魂が出てきたらぶっ潰すだけなんだし、そんなに変わらないでしょ。……それに私達には、他に行く当てなんて無いんだし。」
そして、他の二組とは違う雰囲気で、先程のニュースをどうでも良いかのように答える刀使達が居た。
彼女等は、親による暴力か何らかの理由で親と引き離されたり、もしくは捨てられたり、荒魂事件に巻き込まれたために親と死別したり

といった様々な理由で孤児となった経緯の有る子達である。
そして、そんな彼女等の様な孤児が刀使になれる経緯は少し複雑な事情があった。
それは、二十年前から遡るが、その当時は今よりも荒魂事件が多かったことと、相模湾岸大災厄で荒魂による被害が特に多かったことから、大量の孤児が現れ、児童養護施設だけでは対応できなかったことから（元々、経済的な理由で、社の数を減らそうとしていたぐらいに困窮していた政府の事情も相まって、養護施設の数を増やすことも出来なかったというのもあった。）、寮と教育機関が備わっている伍箇伝に児童養護施設としての機能を付与したことが事の始まりであった。
当初は〝自立した心を養う〟や〝子供の機会を均等化〟と〝教育格差の是正〟という一環で、医療や通信といった後方要員として活躍していた。
だが、現場で活躍する刀使達から、そういった後方要員を下に見る者が居たので、対抗心から後方要員としてだけではなく刀使としても活躍させてほしいという者が孤児の中から現れ、その現状を見た上層部が『差別に当たるのでは？』という鶴の一声から始まり、志願者の中から御刀との適正が高かった者を刀使として活躍させたことから、彼女等の様な孤児も刀使になれる様にしたのである。
荒魂との戦いの日々を過ごし、ただ生き残るために剣を振るうという環境下にある彼女達の結束は〝孤児〟であるということを唯一の繋がりとして、彼女達の絆や結束力は高いものではあるのだが、その反面、自分達とは違う者に対しては距離を取るという極めて排外的な傾向にあり、自分達が仲間と認めた者を傷付けたりした者やそれと同様な事をした荒魂は執拗に追い詰め、過剰に報復するという危険な性質も持ち合わせている。
しかし、刀使の使命を命令として、御刀も剣術も仕事道具として割り切って考える者が多いうえ、他に行く当ての無いことから退校する者は居らず、死をも恐れず良く戦うことから戦闘能力は高く、戦闘員として見れば理想的な存在でもあるのだが、精神面は非常に厄介で

あった。

刀剣類管理局内部でも、三者三様にこの法案に対して異議を唱える者が居れば、全く何も思わない者、ただ唯々諾々と従う者とで別れていた。

しかし、孤児といった恵まれない子供達を刀使として利用するのは流石に児童福祉法といった法に違反するのでは?といった内容の抗議が来たりしたが、

重要施設が荒魂に襲撃されれば、誰が対応するのか?

荒魂討伐が可能なのは、今の現状では刀使のみである。

孤児といった恵まれない子供達が刀使になるのは強制ではなく、自由意志に基づくものである。

といった反論が各所から出たため、やがてその抗議は下火になっていった。

そういった事もあり、彼女達の中には様々な経緯で刀使となった者が在籍していた。そして、彼女達の様な純粋に刀使になりたかった者や貧困に喘ぐ子供、親と別れることになった孤児でも刀使として活躍しているのだが、そんな彼女達を刀使として活躍していることに、世界各国が黙認しているのにも理由があった。

幾度も起きる荒魂事件に悩まされ、刀剣類管理局を公的機関として定めている政府としては、刀剣類管理局が児童をただ過酷な環境に追いやっている組織ではないと証明する手段として、刀剣類管理局に保護されている孤児や入局した貧困に喘ぐ子供達が寮生活や教育の権利と機会を無料で受けられていること、そして刀剣類管理局局員や他の公務員職へと就職できたり、特祭隊隊員時に得た収入を使って一般企業にも就職活動したりできる様にしているため、広範で自由意志による就業機会を得ているとアピールする事ができ、刀剣類管理局が児童搾取をする組織ではなく、人道的な組織であるとして宣伝している側面もあった。

また、米国も日本に在日米軍基地が有り、荒魂から身を守るために必要だと認識していること。そして、世界各国も日本に大使館や投資をしている所が有るうえ、荒魂事件によって円や為替といった市場が

突然暴落することを防ぐことにより（例えば、荒魂が日本取引所グループといった市場経済の中心を担う様な場所を襲撃し、機能不全を起こす程の被害が出されてしまう事態となれば、世界は大荒魂が出現する大災厄よりも狂ったように大騒ぎである。）、世界経済の秩序を守ることが可能であることを考慮すれば、荒魂に対する対抗手段は必要であると世界各国が理解している以上、刀使はどうしても一定数は必要であるため、誰もが黙認していた。

しかし、総じて裏の理由は、大人も子供も神の見えざる手に導かれていたという事である。

人々が食事をできるのは、肉屋や酒屋やパン屋の主人が博愛心からではなく、自分の利益を追求するからであるのと同様に……。

そして、テレビに映っていたニュース発表は終わっていて、気付けばコマーシャルに変わっていた。

『運動が出来ない私は、子供の頃にヒーローに憧れていた。』

『だけど、運動ができなくても、思いが強ければヒーローになれるんだ。』

『子供の頃に憧れた、強いヒーローに!!』

『子供達の笑顔とこの街の平和を守る、強いヒーローに!!』

よくテレビで見かける子役が扮する刀使が任務に活躍するイメージ映像と何度も聴いたことがあるような耳障りの良い美辞麗句な言葉。それらが終わった後、この長いテレビコマーシャルは”夢を叶える力”といった幻想を抱かせる抽象的な言葉と”福利厚生が充実”といった彼らの損得感情を揺さぶる文章、更には”子供の主体性”といった搾取としての免罪符によって構成された交響曲は、宣伝広告として奏でられ、映像を映す箱から流されていくのであった。

そして、その文章や言葉が流れ終えたとき、新たな材料を投下するかの如く、子供の笑顔に応えて、手を振る子役の刀使。

『私はヒーローになるっ!!』

そんな青臭い言葉で締め括られると思われた次の瞬間。刀剣類管理局局員募集中との見出しがテレビの画面に映っていた。

そして、最後は……

〈　刀剣類管理局は児童福祉法等を遵守し、児童・青少年女子の健全育成活動にも従事しています。　〉

というテロップと共に、刀剣類管理局のテレビコマーシャルは締め括られていた。

――――特措法が強行採決される数日前、防衛省市ヶ谷。

タキリヒメ派が、刀剣類管理局に課せられた荒魂関連ではない事件に特祭隊を介入させてはならないという条約を緩和させる特措法について話し合っていた。

「タキリヒメ様、例の特措法が通るようです。いかが致しましょう。」

タキリヒメ派に属す議員。分かり易く言うと、タキリヒメに味方する国会議員の一人で、タキリヒメに味方した理由は増税に次ぐ増税で疲弊した国を隠世技術でもう一度技術立国として甦らせると同時に経済大国として復活させたかったがためにタキリヒメの側に付いていた。

そんな彼は、親が有名な国会議員で、その地盤を受け継いだ二世議員である。彼は、その親から受け継いだ地盤を利用して、今回の特措法が強行採決されるという確かな情報を得ていた。

その情報を得た彼は、タキリヒメに知らせるべきだと判断したために市ヶ谷へ向かい、タキリヒメに知らせていた。

「……ふむ。妨害工作をする必要も無かろう。むしろ、援助しよう。」

タキリヒメは気にすることなくそう言って、一蹴していた。

「しかし、荒魂討伐を生業とする刀剣類管理局にこれ以上の権限を与えますと、こちらを攻撃してくる可能性があります。」
　そう言って彼は、刀剣類管理局に対する敵意を隠すことなくタキリヒメに上申していた。
「いや、幾ら権限が上がったとはいえ、突然気が変わったかの様に我を攻撃することはあるまい。……我を討伐すれば、優とイチキシマヒメ、それに我という力の三つのバランスが崩れということの危うさぐらい彼奴等にも分かっておるはずだからな。」
　タキリヒメは刀剣類管理局側が自分を殺せば、この複雑に絡んだ三つの力が崩壊し、後戻り出来ない状況へと推移することは刀剣類管理局側も望んでいないと彼に説明していた。
「もし、もしもだ。……我を討伐して何も講じなければ、我はただのノロの塊になるだけなのだ。もし、そのノロの塊から新たな荒魂が生まれたとしても、それは最早タキリヒメではない別の荒魂だ。その新たな荒魂と刀剣類管理局が新たな関係を直ぐ築けるのであれば別だが、それが可能かどうか不確かである以上は薮をつついて蛇を出すことはすまい。」
　そして、タキリヒメはその理由も含めて彼に教えていた。
「……まあ、彼奴等がそういった理性的な考え方があれば、何もしてこないでしょうが。しかし、もう少し御身の身体を大事になさって下さい。」
　しかし、彼は何時かタキリヒメがこの日本から居なくなってしまうことを恐れたがために、タキリヒメが居る市ヶ谷周辺の警備をもう少し厳重にすべきだと上申していた。
「ふっ、私……いや、我がそんな理性を失った刀使共の剣に討たれたときは我がこの国を治めるのに相応しくなかっただけのことだ。何一つ案ずる必要は無い。」
「しかしっ!!」
「我とて疑問に思うことはある。本当に我はこの国を治めるに相応しい器かどうか。……試せる絶好の機会ではないか?」
　タキリヒメが自身の警備を厳重にしない理由。それは、自身が本当

にこの世の支配者として相応しいかどうかを試すためであると答えていた。

そして、その剣が相手になったときは受けて立つとも答えていた。

「それにだ。我々が掲げるのはこの国を再び経済大国、いやそれ以上の黄金期をこの国に齎すことが我々の使命であったはずだ。……ならば、その使命を果たすには刀剣類管理局の権限を上昇させ、国民を荒魂と暴徒達の魔の手から守らねばならん。なら、我が身可愛さ故に法案潰しに躍起になっている無様な姿を他の者に見せる訳にはいかん。」

そのうえで、タキリヒメは自身に火の粉が降りかかる事になろうとも、国民を守るために特措法の制定の阻害をすべきでは無いと彼を説得していた。

しかし、タキリヒメとしては、己が絶対の君主となる世界の構築のためには、多くの国民という人種、もとい土台が必要であるということは理解していたため、訳の分からない暴徒やそれらを襲う荒魂がその土台を崩しに来たのが不愉快なうえ、その不遜なる者達を自らの手で汚すことなく、自分の臣下や土台となった者達の手で始末させ、その様子を眺めて悦に入りたかっただけである。

そのうえ、今回の刀剣類管理局に課せられた荒魂関連ではない事件に特祭隊を介入させてはならないという条約を緩和させる特措法が制定されれば、刀使が危険な場所へと向かわされることが増えることは間違いないので、更に負担が増え、やがては理想と現実のギャップに心が折れ、刀使の離職率は増えることになるのは必定である。

そこまで計算して、タキリヒメはこの特措法を通そうとしていたのである。

「……分かりました。タキリヒメ様の意志を尊重致します。」

「済まぬな。私の我侭に付き合ってもらう。」

タキリヒメに自分の我侭に付き合ってもらうと言われ、タキリヒメの心の中にある謀略に気付いていない若い議員は感動し、ただ静かに黙って頭を下げるのであった。

……その結果、

（……タキリヒメ様は素晴らしい御方だ！自らの身の危険よりも、国の安寧を優先なさるとは……！なのに、管理局はその様な方まで、荒魂扱いするというのかっ!?）

若き彼は、タキリヒメのことを更に敬愛し、同じタキリヒメ派の仲間にこのことを伝え、より一層タキリヒメを支え、この国を繁栄させようと心に決めるが、

（私が支配する予定の国を……訳の分からん奴が土足で踏み込んで来て、荒らされてたまるかっ!!）

一方、その敬愛するタキリヒメは、自分も侵略者であることを棚に上げ、暴徒と支配下にない荒魂を侵略者として定義付け、どのように処罰すべきかを考えていた。

それは、あたかも他人が築いた城を自分が壊したとしてもどうとも思わないが、自分が築き上げた砂の城は後生大事にし、他人にもそれを強要するというものでしかなかったため、単なる我侭でもあった……。

そのことに、誰も気付かぬままであったために、両者の間にはほんの小さな、誰にも気付かれていない奇妙な擦れ違いが発生していた。

刀剣類管理局に課せられた荒魂関連ではない事件に特祭隊を介入させてはならないという条約を緩和させる特措法が強行採決された日の刀剣類管理局本部にて、朱音局長代理や紗南本部長といった幹部が集まり、後日行われる予定である衆院予算委員会でこの特措法について集中審議されることは目に見えていたので、その対策も含め、特措法制定後の刀剣類管理局の方針と体制についての討議が行われていた。

「今回、集まって頂きましたのは例の特措法が制定されることが確実視されましたので、今後の刀剣類管理局の方針、及び活動について討

議するために集まってもらいました。……従って、討議の内容とは逸脱した発言等はご配慮の程をお願い致します。」

先ずは、定型通りの会議が始まる文言から始まった。

舞草の隠れ里で行われていた神楽舞の様に儀式めいてはいるが、この文言から始めないと、この会議が始まらないという摩訶不思議な力があったことも事実である。

「先ずは、野党側は政権奪取をするために刀使と荒魂の軍事利用をするのかという質疑を受けると思われますが。」

「その質疑を受けたときは警察組織の一員であった頃の体制のままでは、暴動が発生した地点にて荒魂が出現したときに事態に柔軟に対応できないと説明しただけで良いのでは?」

「それだと刀剣類管理局に対して懐疑的である国民の反発は必至だ。国民の大半は刀使の軍事利用に繋がる事は嫌っているというのも事実ではあるので、果たしてそれで納得しうるものか……。」

「……そうは仰られるが、現に暴動付近に荒魂事件が発生した際、悠長に暴動が治まってから出動していては国民の不安が増しかねないのも事実だろう。我が刀剣類管理局は国民への信頼が失墜しているということを理解しているのか?」

「私としましては、素手の暴徒に御刀の加護を得た刀使が一方的に打ち倒すことになったり、暴動の最中を経験すればその刀使が心的外傷を患い暴力的になったり、無気力になることを恐れております。」

「……確かに、そうなった刀使等の今後の生活は荒んだ物となるのは確実でありますので、先ずは戦闘のストレスを抑圧し、特祭隊の秩序を維持する部隊が必要であると私は思いますな。」

「何を言う、そんな軟弱な精神で刀使が務まるか!!」

「それは、現場で精神的葛藤を抱える特祭隊への侮辱と見てよいか!!?」

「今は国民への信頼の回復が最優先であるのに、悠長な意見ばかり言っている場合かっ!?」

「そうだっ!そのように甘やかすから、今の特祭隊は弱兵ばかりとなり、このような事態を招いたのだ!!」

そうして、議場は些細な事が切っ掛けで大激論と大論争が起こった

ため、
「静粛に。……静粛にっ!!」
朱音が大声で事態の収集をすることとなるのであった。
「確かに、今は事態の収束へ向かわなければなりません。……ですが、刀剣類管理局特別祭祀機動隊に所属する刀使は立場上は国家公務員でもありますが、それ以前に学生の身分でもあります。それを考慮すれば、厳しい環境下に置くことは成長期である彼女達のその後の生活を困難にさせるものであり、且つ、国連労働機関（ＩＬＯ）といった国際機関から何かしらの勧告が通達され、他国の介入を許してしまう事態に発展する可能性が有ることも考慮して頂きたい。」
朱音は、何処ぞの施設張りに訓練を過激にすれば、刀使の希望者が減るどころか国際組織から通達が来て、指導を受けることになり、その事実を以って他国の介入を許してしまう恐れがあるため、学生の身分である刀使等を過酷な訓練を施したことで、やがては特祭隊を軍隊の様にすることとなってしまう恐れのある発言と行動は控えるようにと念を押していた。
だが、刀使等を軍隊の様に鍛えることが出来ない理由はそういった事が理由（とはいえ、敵前逃亡したり、余りに弱すぎると同僚から嘲られたりするが……。）であったため、それ以上の訓練カリキュラムが組めないということも事実であった。
「……そして、これが重要なのですが警察庁にも、防衛省にも、荒魂討伐の指揮権と主導権が握られることが無いように気を付けて下さい。」
朱音はそう言うが、これは決して自分達の地位のために発言したことではなく、警察官や自衛隊員が刀使を命令する立場になると、それはそれで大人が子供を都合の良いように利用していると見られかねないので、子供の刀使がＳＴＴ隊員や自衛隊員達といった大人達と対等な立場にあるという方が何かと角が立たないと言いつつ、刀剣類管理局の幹部達に朱音は局長代理という立場上そう言って厳命していた。
子供達がこれ以上苦労しないようにという本心を隠して……。

国家狂騒曲

特措法が強行採決されたその数日後、国会議事堂は大騒ぎであった――。

与野党の国対委員長は国会内で会談し、衆院予算委員会にて首相といった関係閣僚等が出席し、集中審議を行うことを合意。参院予算委でも、同日に集中審議を行うことも決定され、この決定に野党側は、刀剣類管理局に課せられた荒魂関連ではない事件に特祭隊を介入させてはならないという条約を緩和させる特措法の強行採決などに対して、首相の見解を問い質そうとしていた。

「今回の刀剣類管理局の権限を強める特措法の制定について、今国会においてご説明願いたい。」

野党側の質疑に総理大臣は、壇上に立ち説明していた。

「今回の特措法を制定したことについて、先ずは、ご説明させて頂きます。……そもそも、刀剣類管理局とそれに所属する特別祭祀機動隊は元を辿れば警察庁に所属する組織でありましたので、国内の騒動が多い現状を鑑みますと、その状況下に合っていないというのが実状であります。故に、我が国の国民の財産と生命を守ることを義務とする総理大臣をその国民から任命された身としましては、刀剣類管理局をより荒魂討伐を専門とする組織へと再編し、事に当たらせるようにしなければなりませんので、この特措法を是が非でも通さなければならないという断腸の思いで強行採決という形で通させていただきました。したがって、国民の皆様には、より一層のご理解を頂けるように、私自身が努めて説明させていただく所存であります。」

「ですが総理、これ以上鎌倉での事件を詳細に公表せず、未だに折神紫氏への説明責任を果たそうともしない刀剣類管理局の権限を増大させる特措法の制定に国民が納得するとは思えません。」

総理が特措法の制定の理由を述べるが、野党に属する議員は、なおも質疑を続けていた。

というより、野党に属する彼が熱心に特措法に対する質疑を続けるのには理由があった。

それは、娘が刀剣類管理局の刀使として所属しているからであり、自分の娘が過酷な現場へと派遣されないように動いていたからというのが理由であった。

「確かに、我が国の国民の間には刀剣類管理局に対して懐疑的に思う者が多いというのは事実であります。……ですが、現段階の法整備のままであれば、刀剣類管理局に所属する特別祭祀機動隊が充分に活動するのが難しいというのも事実でありまして、だとすれば、国民の安全を守る立場上、法整備をしていかなければならないのも事実であります。ですので、件の特措法を今国会に通して制定させて頂いたというのが事実でありますので、国民にはそれを深く理解して頂けるよう説明していく所存であります。」

「しかし、この特措法は条約を緩和させる物でありますよね？だとすれば、この暴動が起きた場所に〝誰が〟この暴動を鎮圧し、〝どの組織〟が荒魂討伐するのかお答え願いたい。」

野党議員の〝誰が〟と〝どの組織〟といった部分のみ声を大きくして強調させた質疑に、総理は喉を詰まらせたかのような反応をし、どう返答するか悩んだ。

悩んだ理由は、例えば自衛隊が事態を収拾すると言えば、自衛隊が戦後初となる治安出動をし、一時的にせよ刀剣類管理局を防衛省の指揮下に置き、いずれは刀使を軍事利用する気なのかと問われ、国民に疑念を抱かせることとなり、問題発言と捉えられかねないからである。逆に特祭隊が指揮をすると言えば、如何にして刀使といった子供達の安全を確保するのかという質疑をされ、これまた問題視される事となるからである。

そのため、予想される暴動が自衛隊と特祭隊の共同運用である予定であることを話してしまえば、超法規的な措置で事前配備していた自衛隊の事が露見するうえ、誰が指揮権を有しているかで突っ込まれるのは目に見えているからである。

「え～、先程の質疑についてですが、どの様な警備体制で行うかについ

ては特定秘密保護法に基づきまして、そのような質疑についてはこの場でお答えできないというのが、私共の答弁でありまして――――。」

そのため、総理は問題視されかねない答弁を避け、自身の支持率が下がらないような、当たり障りのないもので答えることにした。

「そんな答弁があるかっ!!」

「それよりも鎌倉と横須賀港で起きた事件の詳細を言ったらどうなんだ!!」

「そんな罵倒を浴びせる暇があるのなら、そちらは対案を考えた方が良いのでは!?」

「何を言うかっ!そちらが折神　紫氏に説明させないからこの事態を招いたのだろうがっ!!」

「そちらこそ、何も考慮せず批判しかせぬではないかっ!?」

「何だとっ!?税金泥棒がっ!!」

「そちらこそ、無責任なだけだろうがっ!!」

しかし、答弁が悪かったのか、別の野党の議員が折神　紫の証人喚問に与党が協力しなかったからだとヤジを飛ばすと、与党議員がそれに反論するかの様にヤジを飛ばし返したがために、国会という政策を議論する場所であることを与野党の両議員達が忘れ、お互いが激しいヤジを飛ばし合うという醜態を晒していた。

「静粛にっ……静粛にっ!!!」

しかし、議長が大声でヤジの飛ばし合いを制すると、先程までヤジを飛ばし合っていた議員達はピタッと止まり、静まっていた。だが、それは平静さを保つためなのか、それとも柔順な羊を装っているのかは分からぬことであるが……。

「……総理、お答え頂きありがとうございます。それでは、朱音局長代理は総理が行った特措法の強行採決についてどの様にお考えでしょうか?」

このまま、総理を攻めても、何の成果も得られないだろうと判断した野党議員は朱音を攻めることにした。

「私は、刀剣類管理局局長代理としての責務を果たすまでです。……ですが。」

野党議員からの質疑を受けた朱音は刀剣類管理局の局長代理としての務めを果たすと前置きを言ってから、彼女は自身の考えを話そうとしていた。

「知らない世界に一人だけ取り残され、何処へ向かおうとも周りに敵視され、石を投げて返されていれば、どんな理性的な者であれ自己防衛のために動くものではないでしょうか？」

相手してほしいが故に騒がしくするタギツヒメと自分の国を築こうとしているタキリヒメを見た朱音は、二人のことを〝人〟であるかの様に述べていた。

「……朱音局長代理、何の話をしているのですか？」

野党議員の指摘に、自身が荒魂のことを知らず知らずの内に〝一人〟や〝理性的な者〟と発言して、人間扱いしているという事実に気付くと、ハッとなって発言を撤回する意味も込めて謝罪していた。

「……済みません。ですが、即応性の高い特別任務部隊を編成し、関東を中心に頻発する荒魂事件に対処しておりますが、刀剣類管理局に所属する特別祭祀機動隊の隊員と局員等は貴重な文化遺産と多くの生命を失ってもなお奮起し続けております。……そう考えれば、私達は既に多くの人命の上に成り立っていると言えるのではないでしょうか。そのため、私は――――」

朱音はそう言って、暗に人間と荒魂の共存を模索すべきではないかと訴えていた。

「議長。発言宜しいでしょうか？」

「許可します。」

しかし、防衛大臣である中谷が朱音の発言を遮るかのように議長に対して発言の許可を申し出ると、議長もそれを許可したのであった。

突然の中谷の行動にどよめきを隠さない国会議員等と動揺を隠せない朱音。

「失礼。」

だが、中谷は何食わぬ顔をして壇上に近付いて来たので、朱音は動揺しながらも壇上から離れると、図らずも中谷に壇上を譲る形となってしまったのであった。

「えー、先ずは私の突飛な行動を許可して下さった議長に感謝しております。我々防衛省としましても、今後は刀剣類管理局と警察庁との連携を密にし、事態の対処に当たらせて参る所存であります。」
「それは、今後は刀使等を軍事利用しようという意味ではないのかね!!?」
　中谷の特祭隊と警察、そして自衛隊といった三つの組織が事態の収拾に当たると答弁すると、朱音を質疑していた別の野党議員が子供を軍事利用しようという魂胆ではないのか?と問い詰めていた。
「いえ、私としましては、発生場所に決まりが無く、刀使が持つ御刀のみでしか有効打にならない荒魂との戦いである以上、刀使は怪物である荒魂を討伐し続けるものであると考えております。ですので、現在の防衛省にはその様な防衛計画はございません。……しかし、現在に至るまでの荒魂と我々人類の戦いは相模湾岸大災厄といった例を一つ一つ挙げますと、多くの荒魂事件に我が国は常に苛まれ、これにより多くの人命を失ったというのもまた事実であります。そういった事情を鑑みますと、国民の生命と安全、並びに国家の秩序を守ると決めた我々が今更その怪物との戦いを辞める訳にはいかないというのも、また事実であり、その考えは刀剣類管理局と共有しているものと考えております。」
　野党議員の追求に中谷は、これ迄の荒魂との戦いによって生じた多くの人命が失われたために後戻りなど出来ないことと、荒魂の性質を例に挙げ、刀使が必要であることを述べていた。
　そうすることで、朱音が先程述べていた荒魂との融和策を有耶無耶にしていた。
「つまり、我々の無為無策のせいでこのような事態を招いたとでも言いたいのかね!!?」
「発言を撤回しろっ!!」
　しかし、中谷の壇上での話の後、野党議員等は激しいヤジを飛ばして、中谷の発言を非難していたが、中谷は何食わぬ顔で壇上から退場し、自分の席である朱音の隣の席へと座るのであった。
「……全く、君も無茶をする。今この状況でノロの分祀体制への移行

等を発言すれば袋叩きに遭うのは目に見えているであろうに、お陰で私の政治生命は短くなったよ。」

「私はそういった意味で……いえ、何でもありません。庇い立てありがとうございます。」

中谷の発言に、朱音は荒魂を一つの生命として見るべきだと発言しようとしたが、それを言うのを辞めていた。

彼は荒魂との戦闘に介入し、その対策費を得ると同時に数多くの試験装備を荒魂との戦いに使い、運用・実戦データを得ることで正式装備の性能向上を行なおうとしていたので、そんな彼に言ったところで一蹴されるだけである。

「……ふむ、君の言いたいことは概ね理解できたが。荒魂に人権を与えるとしてだ、今の刀使達はどうなると思う?それと、君等の世代の刀使達は荒魂化した人間を討伐したことがあるそうだが、過去を遡ると言われた際、その場合はどうなるであろうか分かるだろう?」

「ええ、ですので発言を撤回しました。」

「……市ケ谷に居る姫の影響だろうな。聞かなかったことにする。」

そして、中谷との会話で、大半の人間は未だ、荒魂のことを自分達を脅かす怪異としか見ておらず、人間扱いしないことを思い出していた。

相模湾岸大災厄時、自衛隊は災害派遣の名目で全面協力し、荒魂に対する銃器等の使用による支援も害獣、害虫の捕獲・殺処分またはその支援の名目で使用されたこと――。

荒魂事件や相模湾岸大災厄時に、被害を受けたり被災した特祭隊隊員や一般市民の遺族が集まって出来た遺族会の荒魂に対する憎悪と怨嗟の感情――。

荒魂と化した人間を人間扱いしなかったことで、心を抑え込んで銃口を向けることができた特祭隊隊員と人間だった荒魂を討伐出来た刀使達――。

荒魂を有害な鳥獣と同様の扱いをしたからこそ、自衛隊や警察の全面協力を得られたことと、荒魂が人間ではないから刀使達が戦争目的

や殺人という批判を逸らすことができたこと――――。

朱音は、嘗ての出来事をつぶさに思い出しながら、もし仮に荒魂を人間扱いしたら、荒魂化した人間を討伐した嘗ての刀使やそれらを銃撃したＳＴＴ隊員と自衛隊員は殺人罪として、厳罰に処されるのだろうか？それとも、もう殺人といった時効が廃止されたにも関わらず、昔のことは時効だとして処罰されないのだろうか？

そしてこの世は、荒魂を有害な鳥獣として扱う方が都合が良いとしてこれからも進むのだろうか？

……そんなことを考えつつ朱音は、この負の歴史を荒魂と共に歩んできたこの国と人という子供達が、今更荒魂を生物と認め、人間扱いし、共に歩むという選択をするということが出来るであろうか？と思い悩むのであった。

その後、刀剣類管理局鎌府女学院食堂――――。

『え～、先程の質疑についてですが、どの様な警備体制で行うかについては特定秘密保護法に基づきまして、そのような質疑についてはこの場でお答えできないというのが、私共の答弁でありまして――――。』

『そんな答弁があるかっ!!』

『それよりも鎌倉と横須賀港で起きた事件の詳細を言ったらどうなんだ!!』

『そんな罵倒を浴びせる暇があるのなら、そちらは対案を考えた方が良いのでは!?』

『何を言うかっ！そちらが折神　紫氏に説明させないからこの事態を招いたのだろうがっ!!』

『そちらこそ、何も考慮せず批判しかせぬではないかっ!?』

『何だとっ!?税金泥棒がっ!!』

『そちらこそ、無責任なだけだろうがっ!!』

鎌府女学院の食堂にあるテレビに映るお昼のワイドショーは予算委員会のことを報道していたが、与野党の両議員等がお互いをヤジで飛ばしている惨状だけを切り取って映すだけであり、それを見たテレビコメンテーターや司会者までもが、

まるでヤジの飛ばし合いだ。

刀剣類管理局も政府も酷い物だ。

と言って皮肉気に語っていた。

だが、刀剣類管理局を糾弾したい者から金銭を受け取っていること、そのうえ、そういった方向性で番組制作をすれば数字が取れるからといった理由で番組制作者からそういった指示を受けているテレビコメンテーターは刀剣類管理局と政府を糾弾する様な内容を言っているに過ぎず、司会者もその方向性で番組を動かしているに過ぎなかった。

そんな内容を垂れ流しているテレビをエレンと薫、そして姫和が観ていた。

「おバカちゃんが多いと苦労するのデース。」

「……エレン、そりゃ言い過ぎだ。アイツラからして見れば、俺等は勝手に情報規制して、何してるか分からん宗教団体のように見えるからな。……それに、俺等がこの国の国民をバカ扱いしているかの様な発言は慎んだ方が良いぞ。」

「おっと、それは失礼しまシタ。」

薫が珍しく、神妙な顔をしてテレビを眺めていたことに驚きながらも、エレンは確かに失言だったと言って謝罪をし、発言を撤回していた。

「珍しいですネェ、薫がこういった番組を観るナンテ。」

「まぁな、……俺等がどうなるかっていう話なんだし、観といても損は無いだろう。」

その薫の姿を見たエレンは、薫に優しい口調で何か遭ったのかと尋ねることにした。

「薫、群馬から帰ってきてから、元気がないようデスガ。何か遭ったんデスカ？」
「……ワリィなエレン。群馬のことに関しては作戦参加者意外には喋れねぇのさ。」
薫はエレンの質疑にテレビに映る総理と同じ様に答弁していた。
だがもし、エレンに群馬山中での優の扱いを知れば、大騒ぎとなる可能性が有り、そうなればトーマスが言っていた通りに政府は優を始末する方向へと向かう恐れが有るため、薫は言えなかったのだ。
そして、薫が番組を観ていたのは、政府が答える内容次第では優の扱いが更に悪くなるかもしれないからであり、それに気付くべきであると考えたからである。
「……薫、この国の人間が私達を敵視しているという話は本当だと思うか？」
薫の意図を察した姫和は、群馬のことに関する話題を変えるためにこの国の国民は刀剣類管理局のことを敵視しているのかどうか尋ねていた。
「というよりもコレは、番組の制作者が都合の良いように編集していますカラ。その証拠に、刀剣類管理局を擁護する意見がない、ですよネェ。」
とエレンは都合の良いように編集することができると言って、テレビに映るお昼のワイドショーを批判していた。
事実、他人の悪口ばかりを言うワイドショーに対して、否定的な声が挙がってきているうえ、放送局に対する広告費が下がってきているのであった。結果、放送局は刀剣類管理局を糾弾したい者達や世論操作したい者達から金銭を受け取ることで、どうにか放送局を維持していけているというのが現状になりつつあった。
そういった事情もあり、エレンの言う通り、各局の放送局は刀剣類管理局を糾弾したい者達から金銭を得て、刀剣類管理局を糾弾したい者達の意向通りの番組になり果ててしまい、視聴者の意向を無視する番組へとなってしまい、結果として視聴者はその傾向にある番組を嫌悪するという悪循環へと向かいつつあることに放送局は気付かない

ままであった。
　しかし、エレンの言葉と、タキリヒメの「こんな絶望的な状況に在る国に誰が子供を産み、育てたいと思う!!」という言葉から始まった、タキリヒメからの視点から見て聴いた、この国の惨状とこの国の国民の声を思い出していた。
『というよりもコレは、番組の制作者が都合の良いように編集されていますカラ。その証拠に、刀剣類管理局を擁護する意見がない、ですよネェ。』
『俺に〝荒魂討伐〟できる権限があれば、叩き直してやれるのに……!だから刀使の中には荒魂に似せたパーカーを着ていたり、荒魂の角とか付けてるふざけた奴が出てくるんだ。管理局が無能だから、こんな奴がのさばって!俺の家族は死んだんだ!』
『そりゃそうよ。税金は上がるのに、鎌倉で何が起こったのか何も説明してくれない。私達は荒魂相手に何も出来ないし、ただ住む場所や働く場所が壊されていくのを黙って見ることしかできないのよ?そんなんじゃ不安しか抱かないし、国は私達なんかどうでもいいと思っているのよ、きっと。』
　エレンが語るテレビは、スポンサー次第で変わるプロパガンダ放送であるという言葉。
　タキリヒメが、見て聞いたこの国の人間の刀剣類管理局を信用していないという言葉。
　果たしてどちらが正しい事を言っているのか?
　誰が正しい事を喋っているのか?
　何が正しいのか?
　姫和はそのことを何度も何度も考えても、答えを出せないままであった。
「そうだと……良いが。」
　そう呟きつつ、姫和は一人で悩むしかなかった。
　果たして、刀使は必要とされているのか、されていないのか……。
「まあまあヒヨヨン、とりあえず何か食べて気持ちを切り替えませんか?」

姫和が何か思い詰めていることに気付いたエレンは、何か美味しい物を食べて気分を変えないかと提案され、姫和は差し出された食べ物を見て、思うのであった。

（そういえば……タギツヒメやタキリヒメは何か食べて、美味いとか思うんだろうか？）

そんな疑問をふと抱くのであった。

組み合わせられた社交ダンス

北京、中華人民共和国国務院――――。

荒魂関連ではない事件に特祭隊を介入させてはならないという条約を緩和させる特措法が制定されるという情報を得た公安部長は、早速その妨害工作に入ろうとしていた。

「この特措法は破棄させるように動かさないとな。」

「部長、それは汪への復讐でしょうか？」

公安部長の方針に、部下は真意を尋ねていた。

「……それは違う。もし、刀剣類管理局と警察や自衛隊やらが手を組んで取り組むことが可能になれば、彼の少年の反応を元に特別災害予想区域を好きな場所に指定することが可能となる。……そうなれば、我が国の工作員の潜伏先を特別災害予想区域に指定して、人を遠ざけることができ、彼の少年等を送って暗殺が可能となる。それに、荒魂によって殺されたとも言えるしな。」

「……つまり、特別災害予想区域は特殊工作には良い環境であるということですか。」

「ああ、そういうことだ。恐らくだが、彼の少年がスペクトラムファインダーに反応したという話しを聞かないところから、そういうことなのだろう。……それに、彼の少年の戦闘能力は群馬山中にて実証済みなのだから、暗殺メンバーに加入させられるのは間違いない。そうなれば、我が国の工作員が何人束になって立ち向かおうとも人材の損失を被るだけだ。」

公安部長は、優の中に居る荒魂をスペクトラムファインダーに反応させ、特別災害予想区域を好きな場所に指定することが可能であれば、その場所を工作員や抵抗勢力といった隠れ家に指定し、優を含む暗殺チームを送ることができるからである。

そうなってしまえば、荒魂に対して有効となる武器を持たない工作員達に勝機は無く、ただ蹂躙されるだけであり、それを阻止するためにこの特措法を廃案へと持っていこうとしていた。

「だからこそ、以前から工作員として育てていた彼に武器を黒人運動の活動家に流してもらう。」
「……最近、何かと米国で騒がしている黒人運動のことでしょうか？」
「ああ、潜伏している我が国の工作員も扇動して、だ。」
つまり、野党の支援を受けた者が市長となっている市にて、銃器類の密輸が行われていたのだが、その内部工作の黒幕が公安部長であったということである。
そして、公安部長はスパイにした市長と黒人運動を利用して、日本国内を乱れされると同時に、国が分裂しているという状況を演出し、日本の現政権に対する国内外の支持を失わせることで、日本の世界に対する影響力を下げる内部工作活動を行っていた。
「それと、我が国の共産党員の動向にも気を付けておけ。」
「はっ？……！裸官のことでありましょうか？」
「そうだ。」
だが、公安部長にも危惧することがあった。
それは、共産党幹部の中には配偶者や子女等の家族を留学等の名目で外国に居住させる。もしくは出生地主義の国で行われている出産旅行によって儲けた子供をアンカーベイビーにさせると同時に国籍や市民権を親等が取得すると、国内で汚職等によって不正蓄財した財産を国籍や市民権を取得した外国に送金し、本人は政府官僚として単身で中国国内に留まっている者をことを裸官と呼ばれており、腐敗官僚の一種として中国国内においては問題視されていた。
単身赴任の逆の様な状態であり、本人の不祥事が発覚した際は、不正蓄財した財産も中国国外に在るため、差し押さえられないので、そのまま富を取られることなく家族が待っている外国へとすばやく国外逃亡することが出来るのである。そのため、少ない被害額でも一億元、最も多い被害額は数百億元にも達すると言われ、２０１１年に中国社会科学院が行った調査によると、１９９０年代中期以降に海外逃亡した政権幹部の人数は１万８０００人、持ち出した金額は８０００億元に上ると言われているため、それほどの巨額の富が国外に流出してしまう事が問題視されている理由の一つである。（とはいえ、近年

は巧妙化されており、そのうえ中国の政治体制を鑑みれば、これは氷山の一角でしかないであろうが……。）

「国外に富を隠し持っている党員。いえ、特に日本の資産を買っていたり米国へ資金を流している党員を派閥に関係無く調べよということでしょうか？」

「そうだ。彼等がスパイに早変わりしてしまう可能性も有る以上、放置することはできん。」

「最近は北海道の水資源を購入する者が多かったですからね。その資源がノロと荒魂の影響で値下がりするのを快く思う者は居ないでしょうから、横槍を入れてくる奴が居るということですね。」

そして、裸官を問題視するもう一つの理由は、家族が国外に移住していることには変わらないため、その家族の動向が外国勢力によって握られてしまえば、党員の幹部でもある裸官が外国勢力に弱みを握られてしまうことになってしまうので、政策決定の場にて外国勢力の影響を受けてしまうため、中国の国家方針が誤った方向へ向かうことになる恐れがあることが問題視されているもう一つの理由であった。

実際、２０１４年中国共産党の調査により、全国で県級以上の３２００人余りが特定され、内約１０００人が降格処分されている。（無論、氷山の一角でしかないかも知れないが……。）

だが、公安部長と部下が懸念していたのは、共産党員の中に北海道といった日本の水資源等を購入している者が居り、荒魂の影響によって購入した日本の水資源等の価値が暴落することを恐れ、荒魂を唯一討伐できる刀使の活動の制限を緩和させる特措法を支持する側に回ることを懸念していた。

「そうだ、彼等が敵になると厄介だ。彼等を〝説得〟できる材料を収拾しておいてくれ。」

「了解です。」

公安部長の指示に、部下は快い返事と共に行動を開始していた。

……とはいえ、出産旅行で産まれたアンカーベイビーは、身体の大きい者達のエゴイズムによって形作られた役目を背負わされ、それを

遂行させられているということに、誰も気付こうとさえしなかった。

――――何時から新たな命は、神から〝授かる〟や〝恵まれる〟ものではなく、人が〝産む〟か〝作る〟ものへと変わってしまったのだろうか？

『――――先日の特措法制定による反発は大きく、一部抗議活動を見せるデモ集団の中には、「我々を犯罪者扱いにした行為と不法行為を許さない。」という声明を出したこともあり、不穏な動きを見せ始める者が現れました。事態を重く見た警察当局は機動隊を派遣し、事態の収拾を図りましたが、なおも緊張した状態は続いています。なお、画面下のテロップに表示されている該当付近には近寄らず、外に出ないよう政府は呼びかけておりますので、誤ってまたは何らかの理由で外に出てしまった方は機動隊の指示に従い、暴動に加わらないよう慎重に行動してください。』

国会にて行われた予算委員会での特措法に関する集中審議の後、黒人に対する差別是正を訴える抗議活動をする者達を中心に特措法に反発する集団が「与党が行っている専横を許すな。」という名目の元、抗議活動という名の大騒ぎを起こしていた。

『――――速報です。今朝方から続いていた民衆と警察の睨み合いは暴動へと発展した模様です。…えー、詳しい事は分かっておりませんが、暴動に巻き込まれないよう、細心の注意を払って、慎重に行動することを忘れないでください。』

しかし、北京に居る公安部長が送り込んだ工作員による扇動もあって、大騒ぎで治まるはずがなく、機動隊の放水車がＲＰＧ―７の直撃を受け、大破したことから熱くなった暴徒達の行動は、暴動へと大き

く発展していったのである。
「それで、暴動は？何処で、今はどれぐらいの規模で起きているのかね？」
　そのため、首相官邸は騒然とし、総理大臣は関係閣僚を集めていた。
「多くの地域は既に沈静化へと向かっておりますが、関東の８区と１２区だけが……何と申しますか。」
「収拾の目途も立っていないという事だな？」
「何分、暴徒の中には対戦車ミサイルといった本格的な武装をしておりますので、警察では中々……。」
　総理の質問に官房長官は沈静化できていない地区を答え、現在の状況を伝えていた。
「……最早、警察では対応できない事態へと発展しているのだな？」
　そして、総理のこの一言に対して関係閣僚は沈黙してしまい、総理が言った警察では対応できない状況となったことが事実であることを如実に表していた。
　米国にて、黒人が不当な逮捕をされたことが発端となって起きた黒人差別撤廃運動の火は、最大の同盟国である日本にも波及。低賃金に喘ぐ非正規労働者と荒魂被害によって業務を停止した会社に勤め、その収入源を頼りにしていた労働者。そして、それらを当てにして、どうにか食い繋いでいた外国人労働者。更には、国民には知らせていないが中国人留学生と偽った工作員が扇動し、騒ぎを大きくさせていたのであった。
　そういった者達が集まり暴動へと発展してしまったため、その対応を思索するために関係閣僚が首相官邸に集まっていた。
「三木一等陸佐が言っていた通りになったか……。」
　総理は、三木が言っていた暴動が現に起こった事により、何の罪も無い国民と最前線に送られることでその防波堤となる自衛官と警察官等の血が流れることに、心苦しさを感じながらも、関係閣僚等を前にして大きな決断をする。
「分かった。警察では収拾できない事態へと発展した以上、方法は一つしかあるまい……。」

総理の突然の大きな一声に、どのようなことを述べるのか、関係閣僚は固唾を飲んで見守っていた。
「自衛隊による治安出動を発令する。」
自衛隊による治安出動を発令すると言い出したことに、関係閣僚は仰天していた。
今、そのような事をしたとして、関係書類の作成から部隊配置まで行い完了したときには、既に暴動は大きくなっており、自衛隊でも沈静化可能かどうか?というところまで来ているので、とても間に合うとは思えなかったからである。
「し……しかし、今からでは書類の作成から部隊の展開を考えると、とても間に合いません。」
「もう既に、自衛隊の部隊の展開は整えている。」
「既に?!既にとはどういう事ですか?!!」
総理の自衛隊を既に展開しているという発言に、目を白黒させながら驚く法務大臣。
何故なら、現職の総理大臣が自らの権限を超えた超法規的な手段を行使していると発言しているようなものであり、最早法務省の領分を超えていたからである。
「……群馬山中での件もあったからな。私が予防配備しておいたのだ。だが、自衛隊では荒魂の対処が難しい。それ故に、嘗て二十年前の大災厄を解決した英雄であり、当時局長であった紫の草案を元にした特措法を強行採決したのだ。」
紫が通そうとしていた特措法を総理は通そうとしていると言うが、彼は決して紫の味方ではなかった。
彼が、紫のことを二十年前の大災厄を解決した英雄と言って、当時局長であった紫が通そうとしていた特措法を強行採決で自分が通そうとしていると強調して話した理由は関係閣僚を説得するためでもあるが、仮に幼い少女でもある刀使に被害が出た際は、それを通そうとしていた紫に全責任を押し付けるために強調しただけである。
とどのつまり、彼は説得材料として、そして保身のために紫の名を利用していただけであったのだ。

……その決断が、自身にどのような結末を迎えるか分からぬまま。

その日、暴徒と機動隊が争う関東の８区は騒然としていた。

銃声――――、怒号――――、破砕音――――。

それらの音と風、人々の声が関東の８区に奏でられていて、此処が危険であると訴えているかのようであった。

事実、暴動の熱で興奮している暴徒は空き缶や瓶、そこらに落ちている石といった物を投げたり、手に持っている棒や金属バット、果ては箒などを振り回して防弾盾を持つ機動隊の行動を阻んでいた。そのうえ、催涙弾を放つ催涙ガス筒で抑えようとしても、興奮している暴徒には効かないのか、それとも数が多すぎるせいか、あまり効果が無いようにしか見えなかった。

そんな混沌とした関東の８区に派遣された機動隊の小隊長は、部下からの危急の報告を受けていた。

「第三小隊が暴徒に包囲され、身動きが取れないとのことです!!」

「救援に向かった射撃隊はどうした?」

「暴徒の中に機関銃を装備した者が居り、身動きが取れないようです!!」

焦った口調の部下からの報告に、小隊長は救出に向かった射撃隊はどうなったのかと尋ねると、暴徒の一部に突撃銃といった本格的な武器で武装している者達が居り、その者達による制圧射撃に身動きが取れない状況であった。

「くそ、増援はまだなのか!?」

小隊長は焦りが出始めたのか、部下の前で機動隊の増援が来ないことに苛立っていた。

何故、第三小隊が包囲され、小隊長が焦り初めているのかと言うと、

先ず暴徒達の数に任せた強襲にやられてしまった第三小隊は撤退するものの、撤退中に第三小隊の隊員一名が足を撃たれ、取り残されしまったため、暴徒達による集団リンチを受けてしまっていた。

リンチを受ける第三小隊の隊員の姿を見た刀使の一人が義憤に駆られ、単独でその隊員を御刀の力を信じて救出しようとするも、激情で興奮しているうえ、運の悪いことに最初に殴ったのがガタイの良い暴徒であったため、少女の腕力による鉄の棒の峰打ちで倒せる訳がなく、その刀使は人の雪崩に飲まれるかのように、やがては棒や金属バットの暴力の数の多さに負け、その隊員と同様に殴られ、蹴られ、袋叩きにされていた。

しかし、第三小隊と特祭隊も取り残される状況になってしまった第三小隊の隊員と刀使を救出することもできず、今まで手をこまねいていた訳ではなかった。第三小隊とその刀使が所属していた特祭隊（刀使とＳＴＴ隊員が配属されている部隊）の隊員等がその暴徒達を奇襲。その結果、暴行を受け続け、取り残されることになってしまった刀使と第三小隊の隊員を救出することに成功するが、元々数で負けていたので、次第に第三小隊は押され始める形となり、近くにあった廃ビルの中に隠れ、機動隊員は防弾盾で刀使は御刀で暴徒のこれ以上の廃ビルへの侵入を防ぎつつ、ＳＴＴ隊員等は手に持つ銃で制圧射撃し、銃やＲＰＧ―７を持つ暴徒の動きを封じて、どうにか防備を固めて救出を待っていた。

しかし、ＲＰＧ―７や銃を撃つ暴徒の数が多かったせいか、全て対処しきれなかったらしく、第三小隊等が隠れていた廃ビルにはＲＰＧ―７や銃によって出来た穴が増えつつあった。そのような危機的な状況下にある第三小隊と特祭隊を救出すべく、機動隊の指揮官は狙撃銃や催涙ガス筒を装備した射撃隊を増援として送るものの、その射撃隊は暴徒が持つ機関銃の制圧射撃による妨害を受け、動きを封じられていた。

そういったこともあって、機動隊の小隊長は更なる増援を要請していたが、来ないことに焦っていた。

「陸自の部隊！増援だっ!!」

機動隊の隊員は、総理の指令を受け増援に来た陸自の１０式戦車と９６式装輪装甲車を見るやいなや喜んでいた。

しかし、増援に来た陸自の部隊を見た機動隊の小隊長は自分等で解決できなかったことと、これから起こることに渋い顔をしながらそれを見るしかできなかったことに歯痒さを感じていた。

だが、この場に薫が居れば、忌々し気にこう答えていただろう。

江仁屋離島で試験運用されていた高機動型パワードスーツにＳ装備のバイザーらしき物を着けた装備を増援の自衛隊員達が纏っていたと……。

『作戦計画通り、Ｂ小隊はＡからＤブロックの制圧、Ｃ小隊は航空部隊と共に第三小隊等の救援に向かえ。』

『了解、Ｂ小隊はＡからＤブロックを制圧する。』

『了解、Ｃ小隊もこのまま廃ビルに向かう。』

各小隊の指揮通信を担当するＡ小隊が作戦計画通りに行動するよう指示すると、Ｂ小隊はＡからＤブロックの暴徒の掃討に向け１０式戦車と９６式装輪装甲車と共に作戦行動を開始し、Ｃ小隊も１０式戦車と９６式装輪装甲車とＵＨ―６０ＪＡ２機とＣＨ―４７Ｊ１機という編成の航空部隊と共に孤立した第三小隊と特祭隊の救出に向かっていた。

また、ＵＨ―６０ＪＡ２機とＣＨ―４７Ｊ１機、さらにＯＨ―１改といった編成の航空部隊は、孤立し銃撃を受けながら救援を待つ第三小隊等に対して対人狙撃銃と６４式７．６２ｍｍ狙撃銃による航空支援をするために、一足先に向かっていた。だが、何故１２．７ｍｍ重機関銃Ｍ２や５．５６ｍｍ機関銃ＭＩＮＩＭＩをキャビンドアとガナーズドアに搭載しておらず、対人狙撃銃と６４式７．６２ｍｍ狙撃銃を使っていた理由は過剰防衛という批判を避けるためでもある。

（だが、本当の理由は、自衛隊に納入する１２．７ｍｍ重機関銃Ｍ２や５．５６ｍｍ機関銃ＭＩＮＩＭＩの製造を担当する会社が起こしたデータ改竄等の問題により、精度が低く、余り信頼できない銃を持ちたくないというのが本音である。）

それと、１０式戦車が今回の治安出動に選ばれた理由は、高機動パ

ワードスーツとＵＡＶとの情報共有はどれ程の戦略・戦術的効果が有るのか、ゲリコマ対策として造られた１０式戦車はどれ程の能力を有しているのかという知見を得るためである。

『Ｂ小隊、スキャンイーグルがそちらの担当するブロックにてＲＰＧ―７を持っている者を捉えた。Ｂ―２がこの第一優先目標を排除せよ。』

「了解。」

スキャンイーグルによって捉えたＲＰＧ―７を持つ暴徒のことを第一優先目標と呼び、その第一優先目標が居る位置の情報をＢ小隊の自衛隊員が纏っている高機動型パワードスーツに送り、第一優先目標が何処に居るのか分かるようにバイザーに表示されていた。そのため、Ｂ小隊のＢ―２と呼ばれた自衛隊員は随伴する９６式装輪装甲車を破壊される前に第一優先目標の排除をしなければならないので、バイザーに表示される第一優先目標の位置にＡＣＯＧ付きの８９式を向けて、待ち構えることにした。

「ここを戦場にするナ！出てケ!!」

すると、その第一優先目標は、そんな片言な叫び声を上げながら、戦車を持ち出したことを非難しながら、ＲＰＧ―７でビルの上からＢ小隊に狙いを定めようとするが、引き金を引く前に銃口を向け待ち構えていたＢ―２によって腹に１発、胴体に２発も当てられたことにより、身体の力を失った第一優先目標はビルの上から運悪く頭から落ちてしまったため、首の骨も折れてしまい、絶命してしまう。

それと、これはＢ小隊もＲＰＧ―７を撃とうとした者にも分からないことではあるが、この暴徒達が使っているＲＰＧ―７は密輸で入手した物であるため、不発弾も混じっている粗悪品であり、そのうえ弾頭後部のフィン（尾翼）が風の影響を受けやすいので離れた場所に当てるのは難しいものである。そのため、仮に撃てたとしても当たりもしない定めが待っていた。

『Ａ小隊、第三小隊等が居る廃ビルの場所へ到着した。これより、近接航空支援を行う。』

『了解、こちらも敵勢力の行動パターンを解析した。ＲＰＧ―７は二

つ、ＡＫ―４７は４つだ。』

ＵＨ―６０ＪＡ２機とＣＨ―４７Ｊ１機といったヘリだけの航空部隊は、Ｃ小隊よりも先んじて第三小隊等が居る廃ビル上空へと到達。ＲＰＧ―７と各種銃器を持つ暴徒を優先して排除し、地面に落ちた銃器も一応は可能な限り（群衆の足元に落ちて、視認できない場合は撃てないため。）、狙撃で破壊し、拾って使えない様にしていた。

このような事が出来た理由は、ＵＨ―６０ＪＡとＣＨ―４７Ｊに乗る自衛隊員達も高機動型パワードスーツを着用し、ＯＨ―１改とスキャンイーグルといった偵察機からの情報支援があったからであり、決して対人狙撃銃と６４式７．６２ｍｍ狙撃銃、そして航空部隊のヘリに乗っている自衛隊員達だけの力ではなかった。

もしも、この高機動型パワードスーツが無く、群衆の中から銃撃でもされれば、容易に銃器を持った暴徒を無力化出来ず、航空部隊は第三小隊等の居る場所へと救援に向かうことはできなかっただろう。とはいえ、廃ビルに取り残された状況にある第三小隊等は最も厄介であったＲＰＧ―７による爆撃と銃撃の頻度が少なくなったことで流れはこちらに傾きつつあると理解し、これ以上暴徒共が廃ビル内に入らないように奮闘していた。そして、その苦労が報われたかのようにＣ小隊も第三小隊等が居る廃ビルに到着していた。

高機動型パワードスーツと航空ヘリ、更には１０式戦車とＵＡＶがＣ４ＩＳＲによって緊密に連携された部隊。その一方で最大の武器とそれを取り扱う兵を失いつつある暴徒達。

こうなってしまえば、唯一の対抗手段である銃とＲＰＧ―７が失われつつある暴徒達は、手に残っている金属バットや棒で戦車と真っ向勝負する気は無いらしく、武器を捨てて逃げるか、降伏するしかなかった。

最早、暴徒達に集団としての機能は失いつつあった。

「……あの群衆を潰走させている。」

あの凶悪な暴徒達をいとも簡単に潰走まで追いやっている――――。

目の前に広がるその事実に、ただただ驚愕するしかなかった機動隊

の小隊長であった。

売国奴達のワルツ

第三小隊と特祭隊を追い込んだ暴徒達をいとも簡単に追い込んだ陸上自衛隊の戦力に機動隊の小隊長は驚いていた。

しかし、それと同時に、暴動に加わった者を一つも逮捕できなかったことと、不法に武器を所持していたとはいえ犠牲が出たことを悔やんでいた。

彼自身、犯罪者は逮捕して、出来れば更生させてやりたいという気持ちの方が強かったために警察官となっているので、例え犯罪者であっても殺すということに戸惑う気持ちが強かった。

そのうえ、自衛隊員等の銃撃によって暴徒、いや人が撃ち殺されたことには変わりないので、その暴徒の遺族や親類縁者が報復を企てて、更に過激な行動に打って出ないかが心配であり、もしそうなれば、これまで以上にこの国の安全を守るべく行動しなければならなくなり、今の装備では部下の犠牲が増えることになるかもしれないと戦々恐々でもあった。

「小隊長!陸自の方から申し伝えたいことがあるそうですっ!!」

あの凶悪な暴徒達が潰走されていることに、やや興奮している状態の機動隊の隊員は小隊長に陸自の方からの通信であると伝えながら、通信機を手渡していた。

陸自の方から何であろうか?と疑問を抱きつつも、通信機を手に取り、陸自と通話することにした。

「あー、失礼。何か御用でしょうか?」

『済まない。暴動を先導していた者と加わった者を何人か捕まえたいがこちらだけでは人員が足りない。協力してもらえないだろうか?』

「……しかし、その場合は彼等の処遇についてはどうなるのですか?」

機動隊の小隊長は、その暴動を扇動した者や加わった者を捕らえた場合の身柄は何処に移されるのか尋ねていた。

こっちが苦労して捕らえた者をそちらに引き渡さなければならないのか?という意味も込めての質問だが。

『いや、警視庁公安部に任せると聞いている。逮捕できる者の中には公安が狙っている者も居るらしいから、感謝されるだろう。』

つまり、こちらでどう扱っても構わないということであった。

破格の好条件に驚きつつも、機動隊の小隊長は何処か暗い気持ちを抱くしかなかった。

どのみち、彼等は公安に引き渡されて、尋問を受けることとなるのだろうと……。

こうして、関東の8区で起きた暴動は自衛隊と警察庁、そして特別祭祀機動隊が共同で治安維持に当たったことで鎮静化されたと報じられ、終息したかに見えた。

「総理、今回の関東8区で起きた暴動に対処すべく、自衛隊を治安出動させ、武器の使用を許可したことについての是非を問わせて頂きたい。」

だが、これで終わるはずがなく、またも総理は国会で集中審議を受けていた。

「今回の暴動に対して、自衛隊の治安出動と武器の使用を許可しましたが、総理はそれが適切であるとお考えですか?」

野党議員はそう言って、総理を追求していた。

事実、今回の暴動で自衛隊が暴徒を射殺した意外にも、

自衛隊の武器の使用が適切であったかどうか。

混乱し、逃げ惑う群衆に踏まれ、命を失った人達。
今も傷つき、苦しむ警察の機動隊員達と特祭隊隊員達。
市街戦の様相を晒し、血や死体、破壊の跡が残る陰惨な街。
そして、治安出動を発令したことによって、経済が停滞したことの対策をどのようにするのか。
そういった事が重なって、今国会の議題となったのである。
「……先程の質疑に対して、答弁させて頂きます。先ず、現場の自衛官等の行動についてでありますが、今回の武器の使用につきましては自衛隊法第九十条の二項と三項に基づきまして、使用したに過ぎませんので、適切であったと考えております。」

自衛隊法第九十条
二　多衆集合して暴行若しくは脅迫をし、又は暴行若しくは脅迫をしようとする明白な危険があり、武器を使用するほか、他にこれを鎮圧し、又は防止する適当な手段がない場合
三　前号に掲げる場合のほか、小銃、機関銃（機関けん銃を含む。）、砲、化学兵器、生物兵器その他その殺傷力がこれらに類する武器を所持し、又は所持していると疑うに足りる相当の理由のある者が暴行又は脅迫をし又はする高い蓋がい然性があり、武器を使用するほか、他にこれを鎮圧し、又は防止する適当な手段がない場合。

総理は今回の武器の使用については、上記に書かれている自衛隊法第九十条の二項と三項が当てはまるとして、法的にも適切であったと答えていた。
「……なるほど、では今回の件については自衛隊の活動に問題が無かったと仰る訳ですね？」
続けて野党の議員は、総理をそう問いただすように質疑をしていた。
それを聞いた総理は、自衛隊を批判して与党を糾弾する腹積もりなのかと思い込みながら、答弁していた。
「え～、先程も申しましたが、件の暴動におきましては暴徒の中には、

対戦車ミサイルとして中東の不安定地域によく使われているＲＰＧ―7と呼ばれる物と各種銃器を装備した者が居りましたので、自衛隊法第九十条が適用されると解釈しております。事実、これを鎮圧し、防止するには適当な手段が他に無かったため、武器の使用をしたものと理解しております。」

「そうは言うが、銃器の使用は過剰防衛ではないのか!!?」

野党議員とは別の議員が勝手に発言していた。

この議員は、野党議員が所属する政党とは別の政党であり、かねてから自衛隊や警察といった組織に批判的であった。そして、今回の暴動によって多くの死傷者が出たのも事実であり、それを忌避し、ここまでやる必要があったのかと疑問視した人達が今回の自衛隊の武器の使用は自衛隊法第八十九条及び、警察官職務執行法といった法に基づいても適切であったかどうかという議論が巻き起こっているのも事実であった。そのため、この野党議員は強気になって、質問時間でもないのに勝手に発言していた。

「そうだ!・憲法は守るべきだ!!」

「総理大臣が憲法を破るなっ!!」

一つの勝手な発言がヤジとなり、その一つのヤジが連鎖して囃し立てるように口を揃えてヤジを飛ばしまくっていた。

「うるさいぞっ!!」

「静かにしろっ!!」

与党議員はその惨状を鎮めようとしたのだろうが、その返し方は火に油を注ぐようなものであり、お互いがお互いにヤジを飛ばし合うという醜態を又も晒してしまうのであった。

他に言いようがあったのだろうが、与党議員達も総理大臣が警察では対処不可能なほど日本国内の治安が崩壊したと公的に発言したと取られる治安出動を発令したことによって、貿易や通信が制限され、それが原因で国家経済に甚大なダメージを被るであろうこと、暴動を鎮静化させるためとはいえ多くの死傷者を出したことで、人道的見地から国の内外を問わず総理は激しい批判に晒され、国家の威信は大きく傷付けられるであろうこと。

そういったことを考慮した与党議員達は今度の選挙のことを考え、総理の味方は余りしたくなかったため、強く主張することを差し控え、ヤジだけにしていたというのが本音である。

「……静粛に、静粛に!!」

又も騒然とする国会に、議長は内心呆れと怒りをこみ上げるが、出来る限り平静を装いながら、皆が鎮まるようにと指示を出していたが、治まる気配がなかった。

「失礼ですが、今は私が総理に対して質疑を行っている最中です！我が党の質問時間も限られておりますので、皆様方にはお静かにお願いしますっ!!」

総理を問い詰めていた野党議員が所属する政党は弱小政党であるため、質問時間は多くなかった。

それは、ヤジを飛ばした与野党議員達が議席数の多い政党に属していたことが幸いとなり、偶然にも押し黙らせることができた。

「……失礼しました。質問を続けさせてもらいます。では、総理は今回の暴動において刀使等を派遣したことについても適切であったとお考えであると？」

野党議員の質疑が、自衛隊の運用が適切であったかどうかということから、刀使を派遣したことについても同じく適切であったかどうかに変わっていったように思えた総理は、

「……適切であったと考えております。」

自衛隊に対する質疑の時と同じ答弁をしていた。

「しかし、今回の暴動において刀使一名が負傷したと聞いておりますが？」

しかし、この野党議員はこれが狙いだったのだろう。

自衛隊の運用に何も問題はなかったと答えさせ、更に刀使を派遣させたことも同様に問題無かったと発言させた後に暴動を鎮める最中に刀使が負傷したことについて尋ねることで、総理に答弁をさせにくくさせたのだろう。

「え～、……先程の質問でありますが、今回の暴動で起きた刀使が一名が重傷の他、機動隊員と自衛隊員等にもどれほどの被害が及んでいる

のかについては、全体を把握しておりませんので、お答えは差し控えさせて頂きます。」

そのため、総理は質疑の内容を無視した苦しい答弁をして、質問時間切れを狙うしかなかった。

「……総理、先程は自衛隊と刀使の運用については問題が無かったとお答え頂きました。私はそれについては問題視していません。ですが、私がお尋ねしたのは今回の暴動で総理は強行採決した特措法を用いて刀使の派遣を決定致しましたが、私はそれについて問題が無かったかどうか、この場でお答え頂きたい。」

この野党議員が狙っているのは、強行採決した荒魂関連ではない事件に特祭隊を介入させてはならないという条約を緩和させる特措法についてであった。

それについて、総理は、

「……え～、お尋ねした特措法についてですが、この法案は折神　紫局長が考案した物でありまして、既にこの法案は通す予定でありました。よって――――」

という、紫に責任があるかの様な発言を繰り出したことで、国会は野党議員達の怒号の声で一色となっていた。

「そんな答弁があるかっ!!」

「ふざけるなぁ!!」

「総理辞めろーーーっ!!」

これは流石に不味いと総理は思ったのか、更なる言い訳じみた答弁を続けていた。

「よって、私は昨今の情勢下を鑑みて、この法案を通すしかないと痛感し、強行採決の形で通させていただきました!!更に申しますと、今回の暴動で負傷した刀使は単独行動によってのものでありますので、特措法の不備とは関係がありません。」

しかし、総理の更なる答弁は火に油を注ぐ形となって、国会はただただ紛糾するだけであった。

「総理、今回の暴動によって明らかになった問題点は、見切り発車で行った特措法に基づいた総理の命令によって派遣された刀使や機動

隊員が負傷したことです。ですので、私は総理にこの事について責任を持ってこれらの運用を改善すべきであると提言します!!」

しかし、総理を糾弾していたこの野党議員の娘が特別祭祀機動隊所属の刀使になっていて、娘も刀使を辞める気がなく、妻も娘の意向を応援していたため、父である野党議員は特措法によって荒魂関連意外の事件に出動された娘が大怪我を負わないように特措法を廃案にし、荒魂関連ではない事件に特別祭祀機動隊を介入させてはならないという条例を復活か強化する新たな法案を通すことで娘の危害をどうにか減らそうとしていた。

つまり、この野党議員は、自身の所属する野党が悲願とする政権奪取を二の次とし、刀使となっている娘が危険な目に遭わないようにするために動いているだけであった。

「何だそれはっ!!?」

「対案ぐらい出したらどうなんだっ!!」

だが、与党の議員達も野党のヤジの言葉も相まって、総理を糾弾する野党議員のことをヤジを飛ばす野党の人間と同質の人間であると決めつけ、同じ様にヤジを飛ばして応戦していた。

「静粛に。……静粛に!!本国会にて、議題と関係無い発言は差し控えますよう……静粛に!!!」

しかし、議長の叫びも空しく、紛糾した国会を鎮めることができないままであった。

それは、野党議員の訴えは紛糾したヤジの声にかき消されてしまったということと同意義であった。

審議が終わった後、中谷は官房長官室にて、官房長官と内密の話しをしていた。

「……それは、確かかね?」

「ええ、調査している会社と別班が調べたことなので間違い無いかと。」

中谷は、甲斐とＣＩＡ（別命：カンパニー（会社））を通じてある情報を入手し、それを官房長官に伝えていた。

「……北京ダックが来たのは確かなのか？」

「北京ダックは日本の水が好きだそうですから、汚れるような事が嫌なのでしょう。」

北京ダックとは、北京から送り込まれた工作員のことを指しており、日本の水は水資源で、汚れるとは荒魂の影響で水資源が値下がりすることを恐れているということの隠語であった。なお、このような回りくどい言い方をしている理由は、国会の中では何処に”耳”があるか分からないからであり、有り体に言えば盗聴されていることを念頭に置いて会話していたのである。

つまり、官房長官は中谷に、日本の水資源といった物を買っている共産党員が北京に居る公安部長が送り込んだ工作員が居る場所を日本政府に密告してきた情報は確かなのかと尋ね、中谷は官房長官に、その共産党員の背後を甲斐とＣＩＡが調べ上げ、確度の高い情報であると答えていた。

「……なるほど、我々は荒魂という禍神に踊らされているが、我々だけでなく皆が皆見えざる手に踊らされているという訳か。」

官房長官はそう呟きながら、苦悶の表情を浮かべていた。

日本の水資源が値下がりすることを恐れ、愛国心を胸に戦っているであろう北京の工作員を売る共産党員の話しを聞き、我が日本にもそういった輩が多いことを思い出したからである。

「……それで、どうするのだ。」

「こちらとしましては民間の会社と手を組んで、事態に当たろうと思います。」

中谷は民間の会社、つまりトーマスの部隊を使って工作員を捕らえると答えていた。

ということは、優という非正規の人員として見れば、最高の人材である少年を使うのだろうと妙に納得した面持ちで官房長官は頷いて

いた。
「なるほど、それなら何も問題無いか。……ところでだ。」
官房長官はそれだけ聞くと、本題に入ろうとしていた。
「朱音局長代理の身辺を警護する特務隊が必要だと思わんかね？……出来れば、高度な情報を扱うような物が。」
中谷は官房長官の言う高度な情報を扱い、局長といった高い地位に居る人間の身辺を警護する特務隊が必要と聞かされた瞬間、刀剣類管理局局長直属の組織で、諸問題に対応すべく現場指揮のみならず諜報活動をも行う部隊を創設すべきであるということを述べていると理解し、その特務隊に別班といった諜報機関の人間を出向させることで特祭隊の人間であるとして、諜報活動させるのが目的だと気付いた。
そして今回の暴動は、自衛隊の治安出動の前例を作るためだけでなく、刀剣類管理局の活動範囲を広げると共に諜報機関を増やすことで諜報活動の幅を広げようとしたのでは？と中谷は推測していた。
そのため、中谷は官房長官に自信を持ってこう答えるのであった。
「それなら、打って付けの人材がいます。」
中谷はそう言って、獅童　真希と此花　寿々花を推していたのであった。
獅童　真希はその異性同性問わずに人気がある部分を利用し、刀使等の支持を集め、刀使を諜報活動として扱っているという批判の目を逸らすためのお飾りとして。此花　寿々花は実家が雇っている探偵を使って綾小路等に諜報活動を行っている実績を買って、推薦していた。
こうして、特務警備隊と呼ばれる物は形作られていくのであった……。

ここはどこだろうか――――？

何かベッドの上で寝かされているせいなのだろうか。

少女の目の前に広がる光景が白い天井と、少女の視力が弱いせいなのかは不明だが、蛍光灯らしき物がぼんやりと見えるるだけであった。そして、全身が痛みで思うように動かなかったことから、自身が重傷を負っていることに気づくのは、ほんの少しばかりの時間が必要であった。

「……。」

少女は仕方なく、首だけを動かして辺りを見回すと、近くには見知った存在が居たことに驚く。

何故なら、少女が知っているその人はぐうたらで、いつも本部長に文句を言っているうえ、いつも荒魂と一緒にいる変わった人であったから、忘れるはずがなかった。

「……か……おる……隊……長……？」

――――例え、いつも付けている眼鏡が無かったとしても。

「……！おい、起きたのか!?」

ベッドの上で眠っているはずの彼女の声が聞こえた瞬間、薫はガバっと起き上がり、彼女に急いで近付くのであった。

「はい……済みません。……今…！」

「良いんだ。無理に起きなくても良い！」

薫はそう言って、暴徒に囲まれ四方八方から袋叩きにされた少女を気遣い、寝たままで良いと答えていた。

「……今は……今は休めっ!!……隊長命令だ。」

薫の悲痛な訴えを聞き、少女は精一杯笑いながら、薫に返答していた。

隊長命令を聞くために……。

「……はい。薫隊副隊長桐生葉月、待機命令を受諾致しました。薫隊長、サボらないで下さいよ。じゃないと、また本部長に報告しますから。」

薫は、副隊長からのいつもの小言をこう返していた。

「ああ、任せとけ。……お前の分も一応は働いとく。」
薫はそう言いながら踵を返し、手をヒラヒラさせ、背中を見せながら退室しようとした。
だが、薫は部屋を退室する前に葉月に報告すべきことがあったのを思い出し、それを伝えようとした。
「……後、桐生副隊長が助けようとした機動隊の隊員は無事に助かったそうだ。そのことに警察も、自衛隊も、管理局も感謝している。……だから、俺はお前のやったことは無駄じゃないと思う、俺は、……だからその分働いてやるから、今日はゆっくり休め。」
それだけを伝えると、薫は顔を見せないようにして足早に葉月の居る病室から退室していった。それを見た葉月はいつもの見知っている薫とは〝別人みたい〟に感じる程であった。
「……薫隊長、また明日。」
だからなのか、葉月は薫にそう声をかけるのであった。
「おう、次に会う日を楽しみに。」
そんな葉月の声に反応した薫はそう返すのであった。
そして、薫は葉月の居る病院の外に出ると、特祭隊に支給されている携帯端末を取り出し、とある人物へと電話をしていた。
「おい、俺に用事無いか?」
この世に生まれてただ一度、二度と帰らぬ美しい思い出を代償に、薫はトーマスと連絡していた……。

残響のテロル

とある在日米軍基地にて、作戦の解説をするトーマス、作戦参加者である優と隊員達。薫と姫和、そして二人が気になって来た沙耶香が居た。

「今回の作戦は、とある情報提供者からもらった東京８区で起きた暴動の容疑者の確保だ。」

トーマスは、関東８区にて起こった暴動の容疑者の確保という誘拐作戦を作戦参加者達に伝えていた。

しかし、トーマスの言うとある情報提供者とは日本の水資源を購入し、それが荒魂の影響によって値下がりすることを恐れた中国の一部共産党員であることは作戦参加者には伏せていた。

だが、自分の懐を暖めるために自国の工作員を売る売国奴であるのが情報提供者であることに、トーマスは対岸の火事とは思えない何とも言えない複雑な気分を抱くのであった。

「こいつがその容疑者だ。それに、こいつは群馬で起きた自衛隊の相馬原駐屯地で少女を使った自爆テロにも関与していることを頭に叩き込んでおけ。こいつを捕らえれば、東京８区で起きた暴動の背後関係を洗い出すことができ、第二の自爆テロと暴動を防ぐことができる。」

トーマスの説明と同時に暴動の容疑者の姿が収められている写真がスクリーンに映されていた。その顔写真から、イスラム系の中年ぐらいの年齢の男性であると伺えられる。

加えて、トーマスはこのイスラム系の男は群馬で起きた赤ずきんの少女による自爆テロに関与していることを述べ、この男を捕えることができれば、更なる自爆テロを防止することができ、暴動の協力者、潜入ルートといった情報をこの男から得ることができれば暴動を根絶でき、二度とこの国で暴動と自爆テロを起こせなくすることができると説明していた。

「そして、奴等のアジトは此処だ。」

その次の写真がスクリーンに映されていたが、それは何処にでもある二階建ての安アパートであった。

テロリストのアジトが何処にでもあるような民間の安アパートであることに驚きを隠せない薫であったが、直ぐに考えを改め、作戦上の問題点に気付きすぐに質問することにした。

「おい、爺さん。民間の安アパートにそのまま突っ込むのか?近隣住民が不安がるし、誤射する恐れが有る以上銃は使えないぞ?それに、此処が戦場になると言えばそいつらが逃げちまうし、優一人だけでやるとその男が逃げられてしまうんじゃないか?どうすんだ?」

薫はトーマスに民間の安アパートから、銃を使わずに、騒ぎを起こすこともなくどのようにして暴動の容疑者を捕えるのか尋ねていた。

「……ああ、だからこそ、刀剣類管理局が必要なんだよ。」

薫の質問にトーマスはそう答えていた……。

「この区域は、特別災害予想区域に指定されました!市民の皆様には我々の指示に従い、速やかなる行動をお願い致します!」

夜の街中にて、特別祭祀機動隊仕様の軽装甲機動車の上部ハッチ上からメガホンで避難を勧告するＳＴＴ（特別機動隊）隊員が動き回っていた。

それを聞いた暴動の容疑者は、特別祭祀機動隊の勧告を聞かずに身を潜めることを決めていた。

理由は、次の暴動の扇動場所、人員、使用する武器、刀使を更に数名負傷させて政治的混乱を誘引させる等が記されている計画書や、密輸でどうにかして得た（北京に居る公安部長が裏で糸を引いていることは知らないが。）武器をこの安アパートに隠しているため、盗られないようにするためであった。

近くに荒魂らしきものが見えたから隠れることにしたと言えば、厳

罰に処されることもないだろうと高を括って、仲間達に電気を消すように指示をしていた。

その一方で、特別災害予想区域に指定された区域にて、一軒の古びた賃貸集合住宅、いや二階建ての安アパートの前に民間車が静かに停まっていた。

『アルファから各員へ、建物の周辺をＵＡＶで確認したが、物見は居ない。そのまま、ブラボーとチャーリーは作戦通りに進めろ。』

「了解アルファ、ブラボーとチャーリーは全員降車する。」

その車内には、闇夜の中で蠢いている者達が居た。

その者達が目指す場所は、暴動を計画し、決行したは良いものの自衛隊の治安出動によって頓挫してしまった暴徒達の隠れアジト。いや、正確には外国人労働者とその家族であると偽って、大量に入り込んだ古びた二階建ての安アパートなのだが、彼らとのトラブルを恐れた元住民は既に退去しており、最早、この古びた安アパートは彼らの様な者達に占拠されたようなものであった。そんな経緯があり、彼らの様な暴徒、いやテロリストにとっては隠れアジトとして最高であった。

そんな古びた賃貸集合住宅の近くに車を停め、トーマスの号令と共に動いたブラボーとチャーリーの分隊は車のドアを開け、外に出た。彼等の装備は私服の黒ずくめの上にタクティカルベストとバラクラバというテロリストの様な出で立ちであり、まるで闇夜に紛れるかのように這い出て来ていた。そのうえ、その中には一際背丈が小さい、子供の様な者も黒ずくめのフードにタクティカルベスト、それに色付きのゴーグルにフードを被って顔を隠しながら、車の中から這い出て来ていて、それは顔を隠しているため分からないが優であった。

黒ずくめの者達もトーマス、ＭＡＲＳＯＣのメンバーと特戦群の隊員といった自衛隊員と米軍関係者によって構成されているため、古びた賃貸集合住宅でなく米国か自衛隊の訓練場であり、まともな制服を

着用していたら、日米合同演習に見えるであろうが、残念ながら今回の任務は、仲間割れによる同士討ちに見せかけた残敵掃討と彼等の情報収集であり、血生臭さが漂うことになるのは間違いなかった。

しかし、所属も人種もバラバラである優と自衛隊員、トーマスとＭＡＲＳＯＣのメンバー達（アフリカ系のアメリカ人も居る。）に共通していることと言えば、夜戦を想定してナイトビジョンゴーグルを装備しているということぐらいである。

『ブラボー２―１、チャーリーは建物の周辺を確保する。』

「了解、ブラボーは壁を越えて内部に入る。」

チャーリー分隊は建物周辺を警戒するため、安アパートのブロック塀の外側に待機。ブラボー分隊は正面からだと気付かれる可能性が高いため、ブラボーはブロック塀の壁を越えて侵入しようとしていた。

ちなみに、トーマスは優とＭＡＲＳＯＣのメンバーで構成されたブラボー分隊を率いることとなり、コールサインもブラボー２―１である。

そして、チャーリー分隊は特戦群の人間が指揮をすることとなり、コールサインもチャーリー２―１であった。

『ブラボーチームは建物内を制圧し、目標の確保。チャーリーチームは建物の周辺を警戒、目標の逃亡を阻止せよ。』

アルファ分隊から、指示を受けたブラボー分隊は敵の掃討を、チャーリー分隊は建物の周辺を警戒し、標的の逃亡を阻止すべく動き出していた。

「了解。俺とブラボー２―３から２―５は一階の掃討、ブラボー２―２は２―６から２―８を率いて二階の掃討を頼む。」

ブラボー分隊を指揮するトーマスは事前の作戦計画通りに分隊を４名に分けていた。

トーマスと他三名が一階の掃討を行い、ブラボー２―２と呼ばれたＭＡＲＳＯＣのメンバーの中でも軍歴の長い者をリーダーとし、ブラボー２―８と呼ばれている優で構成されたチームで二階の掃討を行うことが決められていた。

そのため、二階を担当するブラボー２―２が率いるチームは身体の小さい優が先頭に立って動いていた。
理由は、優意外の者が先頭に立つと身体が大きすぎて援護できないと他ならぬ優が答えたからである。
そして、ブラボー２―２のチームは２０１号室の前に着くと、先ずは突入前に部屋の中に何名敵が居るのかを探るため、スネークカメラで部屋の内部を覗いていた。すると、関東８区の暴動が失敗に終わったことで、敵は口論しているようであった。
「くそ、作戦は失敗に終わった。」
「いや、まだだ、まだ失敗じゃないっ！」
「そうだ。私達より先に天国へ向かった兄弟達はまだ失敗していないと言うはず!!」
アラビア語を理解し話せるブラボー２―６は恐らく会話から、黒人運動の中に中東のテロリストも紛れ込んでおり、群馬山中での報復を計画している者が今から突入する２０１号室に居ることを知り、その計画を止めなくてはと思い、俄然やる気を出していた。
ブラボー２―２はブラボー２―６に命じてスネークカメラから、男二人、女一人が居ることを確認すると、ブラボー２―２が率いるブラボーチームの隊員達はＡＫ―４７を握り締め、優はストックを廃したＡＫＳ―７４Ｕを持ちながら、突入の合図を待っていた。
なお、今回の任務でＡＫ―４７やＡＫＳ―７４Ｕといった突撃銃を持つ理由は、テロリスト同士の仲間割れを偽装するために持って来たのである。
「……イスラームを――――」
男の「信じよ。」という言葉が終わる前にブラボー２―２のチームは優を先頭に突入し、発砲音が爆ぜる音と共に男二人を即座に射殺していた。
「クソッ!!」
一人だけ残った女は仲間が二人失ったにも関わらず、闘志を萎えさせることなくテーブルの上に置いてあったマカロフという拳銃を手に持つとこちらに向ける前にブラボー２―６はその女を銃で無力化

にしていた。
　しかし、敵が三名だけとは限らないので２０１号室のバスルームや和室といった各部屋、ベッドの下や押入れの中といった隠れられるような場所に敵が残っていないかどうか調べていた。そして、
『おい、銃声がしたぞ!!』
『敵だっ！銃を早く持て!!』
『お前はショットガンを持ってバスルームに居ろ!!』
　この安アパートは防音がしっかりしていないのだろう。
　その証拠に隣の部屋の会話が丸聞こえであり、どういうふうに攻撃するか丸分かりであった。
『ルームクリア。』
『クリア。』
『ブラボー２―１、１０１号室を確保。１０２号室へと向かう。』
「ブラボー２―１、こっちも一つの部屋を確保した。ブラボー２―２も２０２号室へ向かいます。」
『了解した。ブラボー分隊は次の部屋へ向かえ。』
　小さい声で話すブラボー分隊の各隊員から、通信機越しにブラボー分隊が最初の１０１号室と２０１号室を確保したということの報告を受けたアルファ分隊に述べながら、トーマスは１０２号室へ、優が居るチームは２０２号室へ向かおうとしていた。
　しかし――――、
『ブラボー２―２待て、２０４号室がドアを開けて共用廊下で２０１号室に居る君達を待ち伏せているぞ。』
　銃声に気付いた２０４号室のテロリストがドアを開け、２０１号室に標準を定め、待ち伏せていることをＵＡＶで建物周辺を監視しているアルファ分隊に言われたブラボー２―２は外に出るのを待つことをハンドサインで自分の指揮下にある隊員達に伝えていた。
　このマンションは手前の２０１号室、２０２号室と共用廊下の奥へと進む度に部屋のナンバーの数が増える構図となっており、最奥の部屋である２０４号室のドアの前で待ち構える敵を速やかに排除する

ことは難しかった。
『チャーリー、頼む。』
『了解。』
　そのため、２０１号室で足止めされているブラボー２―２のチームのためにアルファ分隊は、ブロック塀の外側に待機していたチャーリー分隊に、２０４号室のドアを開けてブラボー２―２のチームを待ち構えているテロリストを射殺するよう命じていた。
『こちらチャーリー、外の脅威を排除した。そのまま２０２号室に向かっても問題無い。』
『ブラボー２―２、チャーリーが外も見張ってくれている。そのまま、２０２号室へ向かえ。』
　アルファ分隊からの指示を受けたブラボー２―２は、チャーリー分隊の支援を受けつつ、２０２号室前へ集結。優はブラボー２―２に先に行くことをハンドサインで伝えると、ブラボー２―２はフーリガンツールを取り出し、映画のように爆破することもなくドアをこじ開ける音だけを出して、優を先に２０２号室に突入させていた。
「うあああああ!!」
　２０２号室の玄関先には、拳銃を持つ男が待ち構えていたが、優は一つも戸惑うことなく射殺。ブラボー２―２からブラボー２―７の三名の隊員が後から入って来ると、優は２０２号室の奥へと突入していった。
『ブラボー２―６と２―７は、バスルームに向かえ。残りは室内の掃討。』
　ブラボー２―２にそう命じられたブラボー２―６と２―７は、バスルームに隠れているであろう敵を掃討すべく向かい、ブラボー２―７がドアノブに手を掛けると、
「バスルームに敵!バスルームに敵だっ!!」
　バスルームに隠れていた敵がヒステリー気味に叫びながら、バスルームのドアに向けてショットガンを何度も撃つが、既にそれを察知していたブラボー２―６とブラボー２―７がドアから離れていたため、銃弾をもらうことなくバスルーム内に隠れていた敵をブラボー２

―7が敵のショットガンの弾切れが起きたときを狙ってバスルーム内に入り、隠れていた敵を射殺。バスルームを確保していた。

『バスルームクリア。』

通信機越しに聞こえるブラボー2―7のバスルーム内に居る敵を制圧したとの声が全チームに伝わったそのとき、隣の203号室からの銃弾が、バスルームの壁を貫通してブラボー2―7に襲い掛かってきた。

恐らく、バスルームに隠れていた敵が「バスルームに敵!!」と大きな声で叫んだのはそれが理由だったのだろう。最初、202号室内に居る味方に叫んでいたのだろうと思っていたが、本当の狙いは隣の203号室にも聞こえるように大きな声で言って、壁越しに射撃してもらうためだったのだろう。

『こちらブラボー2―6、ブラボー2―7が負傷した。』

壁越しに襲い掛かってきた銃弾によってブラボー2―7は負傷したため、ブラボー2―6が安全圏まで引きずりながら、全チームに報告していた。

『うう、クソ!弾が防弾ベストの隙間に入り込みやがった!ああ、クソ!!』

『新人相手のポーカー勝負でイカサマ使ったバチが当たったんだな。だが、傷口は浅いから、それぐらいの痛みで泣き喚くな兄弟。』

被弾したブラボー2―7をブラボー2―6が茶化しつつ、傷口は浅いと言って励ましていた。

「分かった、ブラボー2―6はブラボー2―7と共にそのまま撤退。ブラボー2―2はブラボー2―8の二名のみで残りの203号室と204号室へと向かいます。」

ブラボー2―2は、優と共に作戦を続行すると言って、ブラボー2―2は203号室の前へと向かい、先程と同じくフーリガンツールを使ってドアをこじ開けると、優が先に突入して行った。

「死ねっ!侵略者共!!」

203号室の玄関前で待ち構えていたのは、学生ぐらいの歳の少女であった。

そして、中東のテロリストグループの一員である少女はそう叫びながら、神の言葉を聴かない背信者であり、冒涜者でもある侵略者を撃とうとしていた。――――しかし、

（子供っ!?）

背格好からして、子供ではないかと思うような者が現れたことに、言いようのない不快感と戸惑いがテロリストの少女に襲いかかり、少女は撃つのを躊躇ってしまう。

しかし、それが彼女の死を決定付けていた。

テロリストの少女は9歳児の優を銃で殺すことに躊躇うが、優は一切気にすることなく引き金を引き、躊躇いもなくその少女を少女だった物へと変えていた。

「うあああああっ!!」

少女と一緒の部屋に居た男は、半狂乱になりながら手に持っている拳銃を乱射しながら優に近付こうとするが、ブラボー2―2に頭と胴体を正確に撃ち抜かれて、物言わぬ肉塊へと変えられてしまう。

そうして、ブラボー2―2は優と共に室内に敵が残っていないかを調べるが、その際に優が何か音の鳴る物を蹴飛ばしたことに気付き、ふと何を蹴飛ばしたのか気になって見てみると赤子をあやすガラガラだったことに気付いた。

ブラボー2―2は、そのガラガラを見ると、ふと冷静となり、203号室を見回すことができた。

今まで、戦闘の熱気と仲間がやられたことで頭に血が上っていたブラボー2―2は全く気が付かなかったが、部屋には赤ちゃん用ベッドとおもちゃ、それとベビーカーがあったことに、今更だが気付いてしまった。

そういえば、この部屋は男女一組のペアだったな。と妙なことを思い出し、使われる予定だったのか、それとも何時かは使うことになるだろうと購入したのかは不明だが、２０３号室に有ったベビーカーをじっとブラボー2―2は見つめていた。

――――それは、何を象徴しているのだろうか？

――――それは、何を表しているのだろうか？

そんなことを考えていると、妙な胸騒ぎがしたブラボー２―２は此処は、戦場なのか、それとも次の命の誕生を夢見る一般家庭の家なのだろうかと思い、ぐるぐると頭の中が回るかのような感覚を抱きながら、悩み始めていた。

――――新しい命の誕生を望むような場所がテロリストの隠れ家なのか？

――――自分達は、間違って民間人の家宅に入り込んで虐殺を行ったのではないか？

――――此処は何処なのか？これは本当に現実なのか？御伽噺のような話の中に紛れ込んだのか？

テロリスト達が潜り込むために見せる夢幻なのか？それともそんな状況下でも温かな家庭を築くのを理想としていただけなのか？

ブラボー２―２はそんなことを何度も何度も反復するように、同じ問答を心の中で繰り返していた。

『ブラボー２―２、部屋を確保できたのか？』

だが、通信機越しのトーマスの声にハッとなり、作戦任務中であることを思い出したブラボー２―２は、すぐさま返答していた。

「こちらブラボー２―２、２０３号室は確保した。あとは２０４号室のみだ。」

『了解、こちらも１０４号室のみだ。』

――――そうだ。

――――立ち止まるべきではなかった。

ブラボー２―２は暴動で被害に遭った人達のことと、新たなテロ計画によって犠牲者を増やさないようにすべきであることを思い出すと、必ず首謀者の一味であるイスラム系の中年男性を確保すると共に事件を解決することを心に決め、２０４号室へと突入する。

（……誰もいない？）

しかし、２０４号室には誰も居ないことにブラボー２―２は不信感を抱いたが、一階の１０４号室では銃声が聞こえているところから、この部屋には先程の２０１号室で待ち伏せていた者だけしか居なかったのかもしれない。だが、それにブラボー２―２は何とも言えない違和感を感じていたのだが、優が急に押入れの襖を開けて、押入れ内に入り、天井を開けると、天井の中へと入って行った。

ブラボー２―２は優の唐突な行動に驚きつつも、こんなところに隠し部屋の入口のような物が有るとは思わなかったため、素直に驚いていた。

嘗ての仲間が言っていたことだが、子供の索敵能力は侮れないものがあると聞いていたが、どうやら、それを優が証明してくれたらしい。

「一人で行く。」

優は短く、そうブラボー２―２に言うと、一人で入って行った。

すると、天井から大きな物音と銃声がした後、少し静かになったため、不安になり、優に通信を行うブラボー２―２。

「ブラボー２―８、無事か!?」

通信が返ってこなかったところから、ブラボー２―２はこのときばかりは優が半ば荒魂化していることも忘れて、やられてしまったのではないかと不安になっていた。だが、入って行った押入れの中から、優が確保対象であったイスラム系の中年男性をひきずり出しながら現れたことで、ブラボー２―２は作戦が成功したと各隊員に報告していた。

「……こちらブラボー２―２、ブラボー２―８が対象を確保した。繰り返す対象を確保した。」

『了解ブラボー２―２、ブラボー２―１もそちらに合流する。』

『了解。ブラボー、チャーリー各員へ、車輌に乗ったデルタを迎えに寄こす。確保対象は必ず連れて帰れ。』

日本国内で人を拉致していることに気付かれないようにするため、確保対象であるイスラム系の男の口を塞ぎ、手足を縛るとカーペットに包めて車の中に押し込めていた。そうすることで家具を運んでいるかのように見せかけていた。

こうして、トーマス達は暴動の首謀者を捕らえることができ、撤退支援担当のデルタチームと共に、闇夜の中に溶け込むように撤収するのであった。

……そうして、安アパート内にて起きた銃撃は、中東のテロリスト同士の内部抗争が原因であると報道されるのであった。

この小説はうら若き公務員たちの提供でお送りいたします。　1

――――潜水艦ノーチラス号内。

トーマス達は薫達も同席させて、東京8区にて起きた暴動の容疑者であるイスラム系の中年男性、もといイスラム系の男に対する尋問を行っていた。

『海底二万里』や『神秘の島』から名付けたであろう潜水艦ノーチラス号内にて、尋問を行っている理由は、今もアメリカ海軍所属であるこの潜水艦なら、警察組織等の介入を受けることもなく、尋問とは名ばかりの拷問を行えるからである。

そのうえ、この潜水艦ノーチラス号は何時でも国籍不明の潜水艦として切り捨てられるため、このような非合法な活動を行う場としては最適だからという理由もあった。

但し、日本政府側にとっても重要な人物である優と紫は、日本政府と米国政府との間に交わされた内密の取り決めによって、今もアメリカ海軍所属のノーチラス号に乗せないことになっている。そのため、トーマス達がイスラム系の中年男性に対して、拷問を行っていた。

「……うぐ、ゲェホゲェホ!!」

しかし、このイスラム系の男は案外タフなのか、裸にさせられ、椅子に縛り付けられているうえ、ウォーターボーディングといった水責めを受けてもなお、他の仲間や協力者に関することは一切喋ることはなかった。

「意外に強情な野郎だ。このクソ野郎。」

「ハハハ、お前のような背信者の攻撃に根を上げるような軟じゃないのさ。」

イスラム系の男はトーマスのように流暢に日本語を喋りながら、ぐるりと辺りを見回し、トーマスと薫達を煽るようなことを言い始め

た。
「しかし、刀使さんだったか？コイツらを止めないところから、この潜水艦には政府御用達の殺し屋しか居ないのか？それとも、この国の刀使さんは拷問好きか？」
「安心しろ、その場合は身体的損傷が見られない限りは拷問として見なされないと、俺達の正義の国は言うのさ。」
イスラム系の男の煽りに、アメリカ合衆国連邦政府は、身体を損傷しない限りは拷問ではなく強度の尋問であり、拷問を禁止するジュネーヴ条約等に違反しないと主張しているとブラボー2―6は返していた。
「ああ、そうかい。おい！お前らのお仲間は暴動で大怪我したらしいな？そいつはどんなふうに泣いたんだ？それともクソガキには似合いの無様な姿でママに助けてって叫んだのか？それとも女らしく助けて欲しいって媚びて助けてもらったか？」
イスラム系の男は薫達の方を見ながら、そう煽っていた。
「……スマートに終わらせたかったんだがな、済まんが薫と姫和は隣の部屋に〝特別製の自白剤〟が有るから、それを取って来てくれ。」
埒が明かないと判断したトーマスは、意味深に〝特別製の自白剤〟を取って来て欲しいと薫と姫和に頼んでいた。
それを薫は自分達を除け者にしようとしているのでは？と勘繰り、このイスラム系の男が起こした暴動によって負傷した葉月のために、この事件が解決したことを見届けるために抗議しようとするが、
「おい、トーマス!!」
その前に、ブラボー2―2が大きな声でトーマスのことを非難してきたことに、薫と姫和は驚いていた。
「……どうする？辞めても良いぞ？」
しかし、トーマスの煽るかのような言い草に薫と姫和は、
「やる。」
「……私もだ。」
と短く返答し、意固地になって隣の部屋にある〝特別製の自白剤〟を取って来ようとする。しかし、

「薫、姫和待って!!」
沙耶香が薫と姫和の二人を声を上げて引き止めようとするが、当の薫と姫和は止まることなく隣の部屋へと向かおうとする。
だが、その隣の部屋の前にブラボー2―7と呼ばれていた男が待ち構えていたために、薫と姫和は止まるしかなかった。
「本当に行く気か。」
先程の作戦で治療中のブラボー2―7は、薫と姫和を説得しようとした。しかし、
「当たり前だ。」
「私は……やれることをやるだけだ。」
薫と姫和の二人は最後までやり遂げようとしていた。
「薫、姫和、聞いて。あのときと一緒、私達は刀使だから、荒魂事件に刀使が居ないと不自然だから呼ばれただけ、だからそれ以上する必要がない！」
「今回は沙耶香の言う通りだ。トーマスはお前らが刀使だから、特別災害予想区域に指定された場所に数名の刀使が居なければ不自然に見えるから江仁屋離島でも、さっきの安アパート襲撃にも名前だけでも参加させたんだ。……薫、姫和。友達のためなのかは分からんが、復讐のために行っても、何も得られないぞ。今が……今が引き返せるときだ。この先は俺達がやるから引き返せ。」
だが、沙耶香とブラボー2―7は尚も薫と姫和の二人をどうにか説得しようとしていた。
「こっちは一度やられてるんだ。借りは返さんとな。……それに、」
しかし、東京8区で起きた暴動の首謀者達がどうなったかを見届け、それを葉月に伝えるために、葉月の行動が無駄でなかったことを知るために最後までやろうとする薫。
「……私も薫と同意見だ。」
そして、姫和も薫と同意見であると言うが、実は違う理由で”特別製の自白剤”を持って、遂行しようとしていた。
その理由は、姫和は何となくだが、優は自分よりもタギツヒメの方が好きなのではないかと疑っていた。だからこそ自身の手を汚して

でもやり遂げようとする優と同じことをして、優をどうにか自分の方に向け、自分の方がタギツヒメより何倍も魅力的で献身的であるとアピールして気を引こうとしていた。

……ただそれだけのことで、姫和は危険な道へと進もうとしていた。

「薫！姫和!!」

「待ってくれ沙耶香！……薫、姫和もう一度聞く。一度手を汚せば、どんなことが遭ってもそれを最後までやり遂げねばならないんだぞ。……後悔はしないな？」

薫と姫和の行動を見た沙耶香は、大きな声を上げて二人を制止しようとしていたが、ブラボー2―7は沙耶香を黙らせると、薫と姫和の二人に念を押すように詰問していた。

――本当に覚悟はできたのか？

――本当に何一つ後悔しないのか？

――本当に最後までやり遂げられるのか？

まるで、そう言っているかのようにブラボー2―7は薫と姫和の二人をじっと睨み、静かに返答を待っていた。

「……やる。それは変わらねえ。」

「……私もだ!!」

ブラボー2―7は薫と姫和の二人の決断を聞き、これ以上は何を言っても変わらないだろうと思い、考えを改めるのであった。

「……そうか、だがこれだけは言わせてくれ、これ以上は無理だと思ったら俺が変わる。いつでも言え。……沙耶香、お前は向こうへ行った方が良い。」

ブラボー2―7はそれだけ言うと、薫と姫和の二人が〝特別製の自白剤〟がある隣の部屋へ行けるように沙耶香と共に、道を開けるように移動していった。

そうして、薫と姫和は隣の部屋の扉を開けると――、

「〈ヒッ、だ、誰なの!?〉」

「〈……ママ？〉」

アイマスクで目隠しをされ、両手を後手に縛って捕らえられている

妙齢の女性と幼い少女が居た。
「……は？」
薫は呆然とする他なかった……。
これは一体、何なのだろうか？
「ああ、トーマスの使いか、これが〝特別製の自白剤〟さ。」
年齢から母親とその娘らしき妙齢の女性と幼い少女が居る部屋の中にて、逃亡防止と監視のためか一緒に居る男が居た。その男はトーマスとは違うチームの人間なのかまでは分からないが、この両手を後手に縛られている妙齢の女性と幼い少女のことを何食わぬ顔をして〝特別製の自白剤〟と言って、薫と姫和の二人にも分かるように説明していた。
「……おい、〟特別製の自白剤〟って……。」
「あの男の家族、〟コレ〟のことさ。」
目隠しされ、両手を後ろに縛られて拘束されている妙齢の女性と幼い少女はトーマス達の尋問を受けているイスラム系の男の家族であると何事もなく説明し、そのうえで〟特別製の自白剤〟と言ってどう扱うかも分かり易く説明していたこの男も只者ではないらしいと、薫と姫和は思った。
そして、この妙齢の女性と幼い少女の二人、イスラム系の男の家族を脅しの材料として使って、イスラム系の男から欲しい情報を聞き出すという非人道的な事をするのだろう。
あまりの非人道さに言葉を失う薫であったが、
「……おっ、おい。」
姫和は短く、そして抑揚の無い声で、
「立て。」
と言ってイスラム系の男の家族二人を立たせていた。
「〈うう、怖いよママ。……ママ？〉」
「〈……大丈夫よ。大丈夫。お母さんが付いているから、今はこの人達の言うことを聞いて……。〉」
妙齢の女性と幼い少女はアラビア語で話していたうえ、姫和はアラビア語を学んでいないので何を話しているかは分からないが、恐らく

こう言っているのだろうということは想像できた。
だが、姫和は無関心なロボットのように振る舞いながら、妙齢の女性と幼い少女を無理矢理立たせて、隣のイスラム系の男が居る部屋へと運ぼうとしていた。……自身の心を壊して。
「〈こんなこと、許されるはずがない。あなたは悪魔よ！〉」
妙齢の女性が、子供の幼い少女を庇うかのような動きを見せたところから、恐らくはこう言っているのだろうと、嫌でも推測してしまう姫和。
だが、姫和にとってその光景は、母親の篝と嘗ての自分を思い出させるものとしては充分であったため、姫和の心は、

――――優に年上の頼れる人として、一人の女性として認められたい承認欲求と今も求め、得ようとしている他者の愛。
――――自分の全てを奪ったタギツヒメの目の前で、優を自分の物にすることで満たされるどす黒い嗜虐心と支配欲。
――――妙齢の女性と幼い少女を見て、篝のことを思い出し、その罪悪感と心苦しさに苛まれる姫和。

――――荒魂のようになってしまった優を大事にする姿を見た篝は何と言うだろうかという心の奥底に在る自責の念。それと同時に、唐突に湧き上がる母篝との過ごした日々を思い浮かんでは、それを夢幻だと思い込んで振り払おうとしていた自分。

という複数の感情と心の奥底に仕舞い込んで封印していた自責の念が綯い交ぜとなって、思考がぐるぐるぐるぐると回り回って巡り巡って彷徨うように何回も同じことを考えては消え考えては消えて考えては消えを幾度も繰り返していると一つに絞られない心が、……一つに定められない心が姫和を苦しめ、追い詰めていた。
「〈……ママ。〉」
「〈この子は何も悪いことしていないでしょう!?だからお願い!!この子だけでも――――!!!〉」

この幼い少女の母親である妙齢の女性が、そう叫んでいるように聞こえた姫和。

その証拠になるかどうかは分からないものの、妙齢の女性の行動が幼い少女にどうにか近付いて、子供を不安がらせることなく、安心させようとしているように見えた。だが、今の姫和にしてみれば、父と母を失いながらも、その仇を討ち、人々を守るという刀使の使命を守るべく奔走するという逆境の中に居た自分とは違い、幼い子供でも自爆させるテロリストの親を持ち、その両親からの愛を当然の如く享受していた幼い少女という不平等な構図に姫和は、何とも言えない不条理さに対して憤りを抱くのであった。

「…うるさい!!早く進めっ!!」

そのやるせなさと不条理さに込み上げてくる怒りを幼い少女と妙齢の女性にぶつけてしまう。

……結果、妙齢の女性と幼い少女を引き離すことができたのだが、姫和の心の中は目に見えない心のキズに苛まれるのであった。

「〈ママッ!ママッ!!〉」

幼い少女は妙齢の女性から離されたことに悲痛な声を上げているところから、そう訴えているかのように聞こえる姫和。

……だから必死に心の中で耳を塞いだ。覆った。閉じた。そうすれば心が痛まない。傷付かない。何も抱かない。そうすれば、心が傷付かないし、目に見えない痛みと辛さに苛まれることはないことを姫和は知っていた。

「おっ、おい!!」

だが、その代償か、その代わりなのか、薫の非難の声を聞き逃してしまう。……いや、仮に聞こえていたとしても聞き流していただろう。

その証拠に姫和は、

(……優の期待に応えなければ、優の期待に応えなければ……きっと捨てられる!!)

最初は母の仇であるタギツヒメと紫を討つことばかりを考え、孤独で居た姫和。

しかし、可奈美と優がそんな孤独から解放してくれたことに感謝していた姫和。

だが、そんな母の仇と一緒に居て、笑顔でその仇のことを親友だと答える優を助けると約束した姫和。

それ故に、母の仇を討つ資格を自ら放棄した自分を母の簪が許す訳がないと思い込む姫和。

そうして刀使の使命を捨てた自分には、優を救うことが唯一のアイデンティティであると信じ込んでしまう姫和。

そのため、優に認めて貰いたい。必要だと思われたい。関係を失いたくないということだけを望む姫和。

そんな恐怖と焦燥感を抱きながら進む姫和は、親の仇や幼い子供のためという言葉を錦の御旗のように使うことで、自己正当化や自己弁護、自らの存在意義の立証のために使うようになっていた。

……そんな状況下にあり、親の仇という目的を捨て、幼い子供の世話を献身的なまでに甲斐甲斐しくすることで存在価値を感じ、『介護が必要な状況下にある幼い子供を甲斐甲斐しく世話をする』という状況下に酔っている姫和はこれからどのような先へと進み、どのような切っ先を向けるのだろうか？

「……連れて来たぞ。」

そうして、姫和は幼い少女だけを連れて来ていた。

「遅かったな。もう一人は？」

だが、トーマスはそんな姫和を慰めることもなく、どこか突き離すような感じで答えていた。

理由は、姫和が優に対して献身的に尽くしていることに対してだが……。

「……暴れて大変だったから、一人ずつ連れて来ただけだ。」

姫和の方も、そんなトーマスの態度には意に介することもなく淡々と一人ずつ連れて来た理由を述べていた。

そんなことを言い合っている姫和とトーマスのことを気にしたのか、イスラム系の男はそちらの方へ視線を伸ばしてしまった。……そして、

「おい、何で俺の大事な娘が居るんだ?…説明しろ、このクソガキッ!!」

イスラム系の男は、姫和に向かって幼い少女、もといイスラム系の男の娘が居る理由の説明を強く迫りながら、求めていた。椅子に縛り上げられているというのに、獣のようにこちらを噛み殺さんとするほどの気迫に圧された姫和は、その迫力から縛られていても本物のテロリスト一味の親玉なのだろうと妙な納得をしてしまった。

「姫和!こいつは俺が見とくからもう一人も連れて来い!!」

怖気付いた姫和を奮い立たせるためか、トーマスは大きな声で妙齢の女性の方も此処に連れて来るように言っていた。そのため、姫和は少し慌てつつも、どうにか妙齢の女性も連れて来ることができた。

「〈私の妻まで……ああ、何ということを、……何ということを!!〉」

「ハッ!…奥さんが大事だとさ。」

イスラム系の男は、自分の妻と娘が敵の手に落ちているということに嘆いていた。その理由は、この尋問に使われるのは容易に想像できるからである。

しかし、トーマスは自爆テロに少女を使っておきながら、自分の家族は大事にするというその態度に苛ついて、日本語で姫和や他の仲間にも自分の考えを伝えていた。そう、この男は赤ずきんを羽織った少女に自爆ベストと起爆スイッチを渡し、群馬の相馬原駐屯地にて少女による自爆テロを起こした一人の狼でもある。

「〈ヴアアアアアア!……クソ!!クソォ――――ッ!!!〉」

イスラム系の男は自分の妻と娘をどうにか助け出したいのか、椅子にガッチリ縛られていることも忘れ、拘束を解こうとアラビア語で叫びながら、暴れ始めていた。

「……トーマス、俺は少し外させてもらうぞ。」

「ああ、構わん。」

すると、ブラボー2―2は見ていられないのか、席を外すと言って退室して行った。

そうして、この部屋に残っているのは姫和、トーマス、ブラボー2―6、そして尋問を受けているイスラム系の男と脅迫の材料として連

れて来られたイスラム系の男の妻である妙齢の女性とその娘である幼い少女だけになっていた。

「姫和。」

そんなイスラム系の男の様子を見て動揺する姫和に対して、トーマスは冷静な声色で姫和の名前を呼ぶと、ＬＣＲという小型のリボルバーを取り出して机の上に叩きつけて置いていた。

……それは、姫和がこのリボルバーを使って妙齢の女性と幼い少女を撃てということなのだろう。そのため、姫和はこの連続で起こる非人道的な事態に動揺ばかりであった。

「あいつなら、顔色一つ変えずにこなせるぞ。」

そのため、トーマスは姫和を奮い立たせるために、優を引き合いに出して引き金を引かせようとする。それを聞いた姫和は、優のことを思い出す。

『……約束しただろう？私は、私はお前を助ける。……だから、可奈美も助けたい。それまで、ずっと一緒にいる。だから、優も何処かへ行かないでくれ。ずっと側に居て、またチョコミントアイスでも食べに行こう。可奈美と一緒に三人で。』

――――優を助ける。救う。

母の望みをゴミのように、自身の手で捨てたと思い込んでいる姫和には、

――――それだけが子供を助けようとする高尚な考えを持つ人間になれる方法だった。

――――それだけが自分の存在を肯定してくれる唯一の理由だった。

――――優だけが唯一つの心の拠り所だった。

だからこそ、姫和は小型のリボルバーであるＬＣＲを引っ掴むように手に取るのであった。そうすることで、優がタギツヒメよりもこちらに振り向いてくれると信じ、優が自分のことを捨てることがなく、ただただ自分を肯定してくれるという実に甘い夢を見ながら、リボルバーの銃口を妙齢の女性の方へと向けるが、その妙齢の女性を箒と重ねて見てしまった。

「おい!ヤメロヤメロヤメロっ!!それなら、オレを撃てばイイだろ!?オレがこの国をメチャクチャにしてやったんだ!!オマエラの仲間、オレが殴ったようなものだろ!!その子とワタシの妻に何の罪があるんだ!?」

イスラム系の男の妻と子供だけは助けて欲しいと懇願する悲痛な叫びに、片言混じりの訴えに、一人の父親としての姿を曝け出したイスラム系の男に姫和は一瞬躊躇ってしまうが、その迷いを振り払うかの如く、手を震えさせながらも、力を振り絞り、目を瞑りながら引き金を引くのであった。

姫和は、このときばかりは手に持っている小型のリボルバーはどう見ても小烏丸よりも軽いはずであるのに、その銃は小烏丸よりズシリと重く感じ、そして引き金を引く力は今までも、一番力を使ったような気がした――――。

――――ＬＣＲという小型のリボルバー銃が、いつも使っている御刀小烏丸よりも重く感じ、手を震わせながらも、銃口を妙齢の女性の方に向け、覚悟を決めて、目を瞑ると引き金を引いていた。

「……？」

しかし、姫和は引き金を引いたにも関わらず、弾が一発も出ることがなかったことに驚き、何度も何度も引き金を引くが何も起こらなかった。

「……引き金を引いたな。」

トーマスは、姫和の行動に賞賛も、慰めることもせず、ただ冷たく突き放すかのように言うだけであった。

「……ハハハ……ハハハハハ!!」

それを見たイスラム系の男は安堵したのか、狂ったようにどこか力なく笑っていた。

「〈安心しろ、銃を取り扱ったことの無い奴に弾が入っている銃を渡すような、間抜けな事はしない。〉」

「〈ああ、そうだよな!!公職の人間は法律を守らなきゃいかないよな!!?〉」

トーマスはわざわざアラビア語でそう言って、イスラム系の男を安心させるようなことを言っていた。……対して、イスラム系の男はそれに安堵していたのか煽るようなことを言って、自分を殺させようとしていた。……自分の仲間を、同志を守るため。

そのため、トーマスが腰に手を伸ばしていたことに気付かなかったため、次の展開に姫和とイスラム系の男は追いつくことができなかった。

二つの銃声と共に、妙齢の女性が腹部を赤く染め、痛みにもがき、苦しむという状況にイスラム系の男も、姫和も刻が止まったかのように

止まっていた。
「〈おい、お前っ!!私の妻を殺したら、何も喋らんぞっ!!〉」
イスラム系の男は、先程のトーマスの行いを鬼気迫る表情で非難し、自身の妻である妙齢の女性の命を助けるように迫っていた。
「〈……オレを甘く見るなよ?今のオレは、公職の人間じゃなく、カンパニーに雇われただけの人間だ。お前が、勝手に、そこをはき違えただけだろうが。〉」
しかし、トーマスはそれだけを言うと、ノートパソコン一台を持って来て、イスラム系の男にとある映像を見せていた。
「〈それに、この女とガキの代わりは幾らでも居る。〉」
その映像は、イスラム系の女性が映っていた。
「……それは?」
その映像は、何なのかと尋ねる姫和。
「……コイツのもう一人の奥さんさ、コイツは真面目なんだか、欲望に正直になのかは知らんが、コーランの教えに忠実に従って奥さんが四人も居るのさ。だから俺達はこういった〝尋問〟を後3回はできるということだ。だから、この女を生かすも殺すもコイツ次第、ということさ。」
姫和の疑問にトーマスは、イスラム系の男がコーランの教えに従い妻を四人も持っていると話し、その四人もイスラム系の男の態度次第では同じようにすると答えていた。
それを聞いた姫和は、大人の男性は一人の女性だけを最後の女性として愛さないのだろうか?と思うのであった。そう思うだけで、優も何時かは自分ではなく、違う女の方へと、齢が近い女性の方へと向かうのではないかと人知れず焦燥感を抱いていた。そして、姫和が会った大人の男性はトーマスの様に自分を否定しかしこない人間とイスラム系の男の様に愛人の様な女性を複数持つ者しかいないと思い込みはじめ、小さい子供は純粋で穢れのない者であると一方的に且つ、そう勝手に決めつけていた。
「〈それと、コーランの教えでは妻にした女を平等に愛し、平等に大切にしないとな?どうする?今ならパソコンの画面に映っているお前

の嫁さんと身体に穴が開いた嫁さんの二人を助けることができるぞ？〉」

トーマスは、コーランを使って、イスラムの世界を信じるイスラム系の男を脅迫していた。

「〈おい、頼む。それ以上はやめてくれっ!!傷付いた妻を助けてくれっ!!〉」

「〈アラビア語じゃなく、英語で喋れ。分からん。それと、お前が協力的なら助けてやる。〉」

イスラム系の男は、尚も妻の命と家族に害が及ばないように訴えていたが、トーマスはアラビア語では何を言っているのか分からないと言って、英語で喋るようにとすっとぼけ、他の仲間の所在や武器の入手ルートを吐けと脅していた。

なお、トーマスが妙齢の女性を撃ったのは、イスラム系の男の精神を激しく揺さぶることによって、妙齢の女性の命をどうにか助けてもらおうという思考の一極化へと誘導させることが主な理由である。そうすることで、イスラム系の男の選択肢を狭ませると同時にトーマスが得たい情報を手に入れようとしていた。

それに、腹を撃たれた妙齢の女性が死んだとしても、脅しのネタがノートパソコンに映るイスラム系の女性に変わるだけだと言われれば、イスラム系の男は黙秘しても、妙齢の女性の出血は止まることはないので事態は悪くなる一方だと強く思わせることができ、イスラム系の男を更に追い詰めることで自白させようとしていた。

「〈……本当に、私の妻は。〉」

「〈ああ、助けてやる。但し、一つでも嘘を吐いていたら……。〉」

そうして、イスラム系の男はトーマスの脅迫に屈したのか、トーマスの指示通りに英語で話していた。これも、指示通りに動いているかどうかの確認であるのだろう。しかし、トーマスはそれに気にするといったこともなく、イスラム系の男の証言にどれか一つでも嘘が混じっていたら、この幼い少女を処分すると言わんばかりに強く迫っていた。

「〈分かってる!!場所は――――。〉」

そうして、イスラム系の男は他の仲間の居所を知っていることの全てを喋ってしまう。

その一方で、アラビア語が分からない姫和は別なことを考えていた。

それは、トーマスが言っていた奥さんを複数持つことはイスラム世界において古くから守られているコーランの教え通りに従った結果であると聞いた姫和は、それが間違っているとしたら、古き慣わしに従うことは正しいのか?そうだとしたら、刀使の使命、所謂荒魂討伐といった連綿と受け継いだ物は、親から受け継いだ物は果たして一点の曇りも無いほどに正しいことであるのか?本当に荒魂は斬って祓うのが正しいことなのだろうか?という疑問を抱いてしまうのであった。

……その疑問を抱くだけで、姫和は不思議な物だと、ふと思ってしまった。

最初は、母の仇を自身の大義名分として、局長であった紫諸共大荒魂のタギツヒメを討つことを第一に考え、誰も巻き飲むことがないよう唯一気にかけてくれた早苗を冷たくあしらい、一人で、孤独で居た。

そうして、一人で、孤独で居たが、御前試合で可奈美と優に出会い、孤独で居ることができなくなった。孤独だったことを忘れることができた。

そんな中で、姫和は可奈美から、優が荒魂に取り憑かれた、半ば荒魂の様な存在であると言われ、荒魂は討伐するのが当然と言った罪悪感からか、優から目が離せなくなった。

しかし、優に取り憑いている荒魂がタギツヒメであることを知り、お互いに好意を抱いているということに嫉妬する様になった。いや、孤独感を無くしたタギツヒメが羨ましかったことも要因の一つだ。

そして、コーランの教えに書かれている妻を複数持てるという古来からの考えを穢れているとして否定しているにも関わらず、刀使は荒魂を祓い鎮める者であるという古来からの考えを今まで否定しなかった刀使の姫和。その矛盾の辻褄合わせか、それとも優を斬らなくても済む口実かは分からないが、荒魂を斬るのは正しいことなのかと

いう疑問を持ち始める姫和。
……こうして考えていると、母の仇であり、刀使でもある自分が荒魂を討つこと、それが唯一の正しいことだと信じて旅に出た復讐鬼が、自分の抱いた決意が揺らぎ始めたために、辻褄合わせの様なことをして、荒魂と一緒にいる子供を助けようとしている矛盾だらけの自分が居ることに奇妙な、そして頑なに信じていた古来からの考えということに対して、複雑な思いを抱き始めたことに、姫和は妙な話しだとつい思ってしまった。
「〈お前、この期に及んでまだ嘘を吐く気かっ!?舐めんじゃねえぞっ!!〉」
「〈本当だ!知っているのはこれだけだ!嘘じゃない!!〉」
「〈いいや、お前はまだ嘘を吐いている!正直に話せっ!!話さないなら。〉」
「〈本当だっ!俺が知っているのはそれだけなんだ。だから、だから妻と娘だけは助けてやってくれぇっ!!〉」
トーマスの大きな声でハッとなる姫和。イスラム系の男の話を聞き逃してしまった様だ。
そんな中で、トーマスはイスラム系の男が虚偽を話している可能性も考慮して、嘘を話していると一方的に決めつけて、イスラム系の男の娘である幼い少女を使って脅し、真偽を確かめていた。そのため、イスラム系の男は大粒の涙を流し、嗚咽混じりの声を出しながら、トーマスに懇願していた。
そのため、イスラム系の男が必死で涙を流しながら懇願する姿を見たトーマスは、確実な情報であると確信したが、イスラム系の男を操る指導的立場に居る人間や協力関係にある人物と銃器の入手ルートといったトーマス達が欲しかった情報を一つも持ち合わせていなかったことに落胆していた。
つまり、この苦労して捕らえたイスラム系の男は重要な情報を何一つ持っておらず、外れであったことになる。
当てになる情報を北京に居る金目当ての売国奴から得たと思ったのにな、と心の中でトーマスは愚痴っていた。

「〈なあ、もう全部喋ったろ！早く妻をっ!!〉」
　トーマスは目の前に居るイスラム系の男は最早何の利用価値も無いことに気付き、ならばこの男が吐いた他の仲間の居所を虱潰しに襲撃し、芋づる式で欲しい情報を持っている者を捕らえるまでやるしかないと判断すると、言われたとおりに妙齢の女性を助けようとしていた。
「〈ああ、分かった。助けてやる。〉」
　――――銃の発砲音と共に、痛みの苦しみから助けるという方法で。
「!!?」
　姫和は驚愕した。
　まさか、トーマスが拳銃（姫和は知らないが、コルトガバメントという４５口径の自動拳銃。）で妙齢の女性を、しかもただの民間人を躊躇いも無く射殺したことに驚愕していた。元とはいえトーマスはアメリカ海軍の軍人であったため、殺人罪に問われるようなことは避けるはずだと思い、この尋問が終われば妙齢の女性に適切な治療を施すと思っていたからだ。
　そのうえ、トーマスはイスラム系の男に非難される前に、幼い少女も素早く、妙齢の女性を始末するのに使った自動拳銃で物言わぬ骸へと一瞬に変えていった。
　それを見たイスラム系の男は、
「あ、アアアアアアア!!」
　と心の奥底から吐き出したかのような呻き声を上げ、姫和はその光景に呆然とするしかなかった。
「????ヒトゴロシ!!Ｋｉｌｌｅｒ!!」
　その呻き声から一転、イスラム系の男は狂ったようにアラビア語で悪魔と、日本語で人殺しと、英語で殺人鬼と、此処に居る者達全てを非難していた。
　姫和はそれを聞いただけで、イスラム系の男がこの惨事を招いたことに対して自分も人殺しと責めているということに気付き、とてつもない罪悪感を抱き、眩暈を起こしてしまう。そのうえ、紫を殺そうと

した嘗ての自分のことを思い出してしまったがために、イスラム系の男の非難に何も言い返すことができなかった……。

「……これが俺の治療法だ。それに、この潜水艦と優のことを知っているお前達をタダで返す訳ないだろ。これは、暴動の被害を受けた民間人やその者達の礼だ。」

トーマスはそれだけ言うと、イスラム系の男を撃ち殺すのであった。そして、そのために暴動を計画したイスラム系の男とその家族ではあるが、民間人でしかない妙齢の女性と幼い少女の三名全員を殺したと言うトーマス。

それを見た姫和は、トーマスを大きな声で非難していた。

「何をやっているんだお前は!そんなことをする必要ないだろっ!!」

「……それ、お前が言うことか?むしろ、俺としては感謝してもらいたいんだがな。」

「何!?」

姫和は、トーマスを睨みつけながらどういう意味か尋ねていた。

「……内里　歩っていう娘が刀剣類管理局の特別任務部隊に配属されたことと同じさ。俺はお前と同じやり方で優のことを知っているから、優の身に危険を及ぼす前に排除したまでのことだ。」

姫和は、トーマスの話にビクッと反応し、青ざめた表情をするのであった。

「……何で、そのことを?」

「少し調べりゃ分かることだ。……本部長を騙したくらいで調子乗るなクソガキ。それと、また優に無理矢理な事をしたら、容赦なくそれを可奈美や本部長にバラすからよく覚えとけ。」

更には、優を守るため、紗南を利用して歩にスパイ容疑を掛け、監視を含めた特別任務部隊への出向期間を延ばしてもらっている内に〝荒魂討伐作戦中による戦死〟を実行しようとしていたが、頓挫してしまったこと。

群馬の相馬原駐屯地内の宿舎にて、姫和が優相手にキスしたことの二つを可奈美と紗南に報告すると強く言って、黙らせていた。

しかし、トーマスが珍しく姫和に対して激怒しているという一点に

当の姫和も、他の構成員達も気づくことはなかった。
「……だったら、だったらこの惨事はどうするつもりだ!!」
しかし姫和は、自分の行いをはぐらかすためか、イスラム系の男とその家族の死体はどうするのかと尋ねていた。死体が残っていれば真相を突き止めようとする者やそれを脅迫のネタに使おうという魂胆を抱く者などを引き寄せるからである。
「……コイツラをミンチにして、魚のエサにするっていうのを日本の暴力団が使っていたよな?今はどうかは知らんが。」
つまり、そうやって遺体を処分すると答えていた。だからこそ、この潜水艦ノーチラス号内にイスラム系の男とその家族を運んだのだろう。だが、それは『海底二万里』や『神秘の島』から名付けたであろう潜水艦ノーチラス号は、彼等にとっては苛烈な尋問と非合法活動を行う拠点としての秘密軍事施設のような一面があるということを言っているようなものであった。
「聞きたいことはそれだけか?」
トーマスは低い声で、姫和をそう問い詰めていた。
トーマスは幼い子供が性的虐待を受ければ、その幼い子供は生涯に渡って後遺症に悩むことになり、最悪そういった加害者側になることも有るのを知っているため、姫和を止めようとしていた。だが、それを説得ではなく、脅迫や交換条件のような取引めいたやり方で止めようとする自分にも、トーマスは嫌悪していたのだが……。
「……いや、その。だからといって、無関係な人まで殺す必要は無いだろう?そんなことが正しくないことぐらい分かるだろう!?」
しかし、姫和は先程の行いはただの犯罪行為であると、モラルが必要だと尚も食い下がっていた。
「……そうだな。だかな、オレらみたいなのが居るからこそ、この男から有益な情報を幾つか手に入れることができ、それを元に暴動を起こす者を殲滅することによって、この世の中は表面上とはいえ、この世は平和です、素晴らしいことですと取り繕えるのさ、そうだろ?タギツヒメという荒魂に対話が可能なほど知恵が有るという事実をこの国とオレの母国は隠蔽して、この世は平穏無事ですと宣っているのと

どう違うんだ?」
トーマスにそう返される姫和。
子供を使った拷問、子供を利用した自国への利益誘導といった汚れ仕事をする者が居るからこそ、この世は天下泰平でいられると答えていた。そして、刀剣類管理局と自分のやっている事はどう違うのかと問いていた。
「……これからはこうやって戦争に勝つのさ。それの何が良くない?少年兵を使って反米国家を地図上から消すことの何が悪い?舞草が刀使を使って反政府組織ごっこをして組織を変えることの何が悪い?」
刀使の本来在るべき姿を取り戻すと宣い、その刀使である子供達を反政府活動に使う舞草と親衛隊といった人体へのノロの投与等の数多くの研究を隠蔽していた旧折神　紫派が争った結果、潜水艦ノーチラス号とタギツヒメやタキリヒメについて不都合な事実を隠蔽し、世の中のために戦っていると宣う刀剣類管理局と日米両政府。
世の中の平穏のために少年兵を使って、反米国家を地図上から消したり、尋問相手の子供や妻といった大切な者を脅迫の材料に使って情報を引き出すトーマスといった表向きは国家とは関わりが無いとされている工作員達。
トーマスは問うていた。悪人の自分は刀剣類管理局や日米両政府はどう違うのかと……。
その問いに、誰も答えることはなかった。
「そうさ、これが新しい戦場さ。ガキを使った戦争ごっこさ。ハハハハ、愉快なことだな!……それが嫌なら復讐ごっこを辞めて、何もかも忘れて静かに暮らせ。お前も〝狼〟にはなれない。なれっこない」
どこか狂った笑い超えを上げながら、トーマスは姫和に対して、お前は〝狼〟になれないと釘を刺すのであった。

「チッ!!」

その後、トーマスは不機嫌であった。

理由は、姫和に今回の作戦のことと優に対して妙なことをしたら、可奈美や紗南に歩に対して行った悪事を告発するという取引を持ちかけたことに苛立っていた。

姫和相手に、取引を持ちかけたことがトーマスにとって不本意であり、そんなやり方はトーマスにとっては不名誉な事だったからだ。

（……イライラするんだよ。ああいうの見ると。）

姫和が優に対して、献身的に尽くしていることは知っていたが、そのやり方にも苛ついていた。

（……だから嫌いなんだ。子供は。）

確かに、今の姫和は優を救って、助けるためなら、どんなこともやり遂げようと強い覚悟を持っているのかも知れない。

だが、馬鹿なことを言うなとトーマスは思った。

人を助けるというのは倫理的思考と経験に基づいた説得、更には現実的な行動、見たくもない現実を真正面から見る覚悟と考えたくもないリスクへの想像力。……つまり、もっと建設的で真面目なアプローチの積み重ねによって、初めて人を助けるというものがやっと成立するのである。

決して、『母の仇や幼い子供のため』という”目的”の言葉は、自身の自己正当化や自己弁護、自らの存在意義の立証のために使い、将来起こるであろうリスクや見たくない現実の回避のために使うものではないとトーマスは思っていた。

それに、どんな手段を使ってでも助けたいのなら、『泣いた赤鬼』のような末路も、自らも悪党として墜ちる覚悟がなければならない。

自分がベトナム戦争から『世界平和のために。』とかいつもバカみたいなことを言っていたその親友は、ベトナムで靴磨きをしてくれた少年に爆殺され、その戦友の遺骨と共に母国に帰った後、ヒッピーのような奇抜な格好をした反戦主義者達に『赤ん坊殺し』と戦友と共に蔑まれ、心が病み除隊するも、帰還兵ということで社会に拒絶され、行

くあてもなく半ばホームレスのような状態まで落ちぶれたときＣＩＡから傭兵として雇われ、非人道的なやり方で反米国家を地図上から消したり、アメリカの利益誘導の工作活動といった汚れ仕事に従事していた。

その時に気付いたことだが、ベトナム戦争に従事していた頃は『世界平和のために。』とか言っていた反戦主義者達に『赤ん坊殺し』と蔑まれていたが、ＣＩＡの汚れ仕事をしていたときに見た反米国家やテロリスト等の非人道的行為に反戦主義者達は何も言わなかったし、何か具体的行動を取ろうとすらしなかった。

どうやら、『愛』と『みんな仲良くしよう』と騒ぐ反戦主義者達にとって、それはどうでもいいことなのだろう。いや、彼等の望んでいる平和というものはこういうものかもしれないと思ったことがあった。……そして、反吐が出るとも思ったのである。

そこからトーマスは、陰謀や策謀、内部工作といった後ろ暗いことを上品に言った国家の努力による繁栄の下に国民が枕を高くして眠れているように、努力といった言葉や自分が育った環境は常に穢れの無い綺麗事ばかりで成り立っている訳ではない。だとすれば、人助けもアメリカンヒーローのような綺麗事ばかりではないのだ。

（子供のそういうところを見るのが嫌なんだ。負けて、搾取されて当然な姿を見せられんのが……。）

そうして姫和は、優を失ったらどうするのだろうか？

次の依存先を探すのだろうか？次の金科玉条の言葉を思い付くのだろうか？そうして破滅的なまでに自分を蔑ろにして他人に尽くしていくのだろうか？

いや、それよりも優に捨てられたらどうするのだろうか？

あの子はまだ９歳ではあるが、頭の良い子供だ。

トーマスが課した訓練を乗り越えたところからも、それが分かる。

自分がされたことが性暴力であると理解すれば、どうなることか……。

その答えは、優が一人で抱え込んでいるということに誰も知らないままであった。

……そして、その数日後には、民間の安アパートに襲撃時と思われる写真が出回り、そのことについて、国会で審議されることとなる。

生け贄達のマーチ

――――国会議事堂。

安アパートにて起きた暴動グループの集団殺人事件について予算委員会の審議が行われていた。

理由は、件の暴動グループの集団殺人事件の現場である民間の安アパートの襲撃時と思われる写真が出回っていることについてであった。

「総理、この前に起きた暴動グループの集団殺害事件に関連すると思われる写真が出回っているようですが、それについてはどう思うのでしょうか？」

そのため、野党議員がこの写真は何かと尋ね、総理にそう質問していた。

野党議員がそんな質問をした理由は、噂で言われている政府機関の人間が行ったことであるとも取れるような発言を総理自身の口から言わせ、あわよくば総理の支持率の低下、及び自衛隊や米軍の批判を強めようとしていた。

「……今現在、警察が捜査中とのことでありますので、お答えは差し控えさせて頂きます。」

そのため、総理は野党議員の思惑に乗らないように、そう返答するしかなかった。

「しかしながら、国民は特措法から続くこの事態に対し、激しく憂慮しております。……そのことを鑑みれば、何らかの対策を講じるべきではないでしょうか？」

だが、野党議員は引き下がることなくそう言って、暗に国会で特措法を強行採決した総理を批判していた。

「繰り返し申しますが、現職の総理大臣が捜査に関わるようなことを述べるのは、要らぬ誤解を生じさせることになりますので、お答えは現段階では差し控えさせて頂きます。」

だが、野党議員の追及に総理はそう答えることしかできなかったが、総理は内心、この受け答えでは国民は納得しないだろうと思っていた。

むしろ、テレビといった情報媒体は、喜んで自分と刀剣類管理局批判を繰り広げるであろうことは容易に想像ができた。そのうえ、治安出動を発令したことで経済が停滞してしまったこと、特に説明のないまま自衛隊が戦車等を使って暴動を鎮圧したことによる国内情勢の不安定化を招いたことで総理の支持率は下落を続けており、どうにか挽回したいという思いと焦りがあった。

加えて、政府に対する憎悪が国内で更に高まれば、また暴動みたいな流血沙汰が起きてしまう恐れがあり、もし、そうなってしまえば国民に大きな被害が及ぶかもしれないという恐怖もあった。

「……ですが、あの大惨事に国民は不安に駆られております。ともすれば、総理が何か行動を起こすべきではないでしょうか？」

「何度も言いますが、現職総理が捜査に関わる発言は差し控えさせて頂きます。」

そのため、総理は定形通りの答えをするしかなかった。しかし――

――、

「ただ、言わせてもらいますと、この出回っている写真に写っている人物は顔を隠しており、誰なのかが判別できないため、暴動グループの集団殺害事件に関連する写真であると言われましても本当にその場所なのかは分からないので、本当にこの写真は暴動グループの集団殺害事件当夜なのかどうかは疑わしい物であると断じざるおえない代物であると述べさせて頂きます。」

自身の支持率が下がり続けていることに焦りと危機感、更なる暴動によって国民が流血を流すことに恐怖感を抱いていた総理は、私見を述べることにより、写真による騒動を治め、それを自分の手柄であると吹聴し、自身の支持率を上げることで騒動を沈静化させようとするものの、

「その発言は捜査に関わるような事ではないのか!?」

「何を以って違うと言えるんだ!?」

「これは、総理の私見でしかないだろう!?」

といったふうに、与野党の議員から批判されることとなったのである。

だが、総理が言っているように、暴動グループの集団殺人事件の現場である民間の安アパートの襲撃時と思われる写真に写っている人物は顔を隠しているため、誰であるのか判別できないうえ、アパートの一部分が写っているだけなので、この写真が暴動グループの集団殺害事件を写している物なのかは判別できない物であるのは、事実ではある。

「静粛に。……静粛に!!」

これにより、議場は又も騒然となり、議長が議員達にこれ以上騒がずに、静かにするよう命じていた。

とはいえ、総理は自分の失態を恥じていた。……先程の私見を述べたに過ぎない発言は、どう見ても政府に批判的なマスメディアにいいように利用されるだろうということは予想できるからである。

そして、総理が感じた懸念は的中するのであった。

新聞の発行部数が減少傾向にあり、危機感を募らせていた新聞各社が過激さを求めて切り取り報道を行い。それと同じく、広告収入の減少に危機感を抱いていたテレビ局と報道番組もそれに便乗し、現政権を批判する内容をテレビで放映するのであった。……その内容は、子役を使って、子供も現政権に拙いながらも不安を抱いているというふうに放映したのであった。

それだけに留まらず、動画共有サービス上にて広告収益による配当を得て活動している動画配信者達の中でも性質(たち)の悪い者（その中には、父親に勧められ、小学生でありながら活動している者も含まれていた。）が再生回数を稼ぐため、テレビと同じように批判し始め、それに同調した者達によって社会は更に混迷へと向かい、突き進むこととなるのであった……。

――――首相官邸、総理執務室。

「……それで、この私に何か用かね？」

先程の予算委員会にて、暴動グループの集団殺害事件の捜査に関わるようなことを述べるという失態を演じ、その対応に苦慮していた総理は官房長官と防衛大臣の中谷に内密の話しがあると言われ、総理はこの二人を総理執務室に招いていた。

「……総理、実はこのような物が送られました。」

そんな心中にある総理に中谷はある物を提出していた。

「これは？」

中谷が出した紙切れ一つに、これは何かと尋ねる総理。

「貴方への殺害予告であります。」

それに対し、官房長官が中谷の代わりに答えていた。……総理の殺害予告であると。

「……私のか、ならば、そろそろ私も潮時というものだな。このタイミングで総理を辞職するのは、次の総理に申し訳が立たないが、これ以上の混乱をきたす前に最後の大仕事をしよう。」

「……総理。」

総理は官房長官からそれを聞くと、恐らく自分が強行採決した特措法等による混乱と自身の無能さのせいで、このような殺害予告が送られることになったのだと理解した。ならば、その責を取る形で総理大臣を辞職することでこの事態を沈静化させようとしていた。

だが、総理の心中は、自身がこの波瀾な状況下にしたにも関わらず、何の責任も果たさないまま次の臨時閣議において、辞任する意向であることを表明しようとしていることに、総理は自分だけ困難から逃げているような気持ちを抱いてしまったがために、己を恥じていた。

中谷は、その総理の哀愁が漂う後ろ姿に少し同情をしてしまうものの、それが表情に出て、総理の重荷にならないよう歯を食いしばっていた。

「……総理、今お辞めになられたとしましても、国民の不安は解消されません。それどころか、陰謀が有った等という要らぬ噂が蔓延ること

でしょう。」
　しかし、官房長官は総理の辞任への意向を止めようとしていた。
「何?では、これ以上にどうすべきだと言うのかね?自らの失態の責を取るために辞任を意向することを発表し、国民の不安を払拭させる他に何があると?」
「確かに、それがベターな方法ではあるのでしょうが、最善の方法ではないと思われます。殺害予告が有ったその日に総理自らがお辞めになったというのは、我が国の沽券に関わることでありますし、未だ残っている暴徒達が更に勢いづくかもしれません。とすれば、殺害予告が有ったことを公表し、不穏分子を一掃なさってから次の総理に引き継がれた方が我が国の体面は保つでしょうし、総理ご自身が懸念されている次の総理への引き継ぎも滞りなく行われることでしょう。」
「……ふむ。」
　官房長官の提案に耳を傾ける総理。
「なら、もう少し続けるべきであるということか……。」
「はい。それが宜しいかと。……ですので、これからは市ヶ谷のように警備をもう少し厳重にすべきであると思われます。」
「警備か、……しかし、余り厳重にし過ぎるとそれはそれで反発を買いかねんな。」
　そうして、官房長官の話しを聞いた総理は、支持率の低い自分が警備を厳重にし過ぎれば、それはそれで国民の反発を買いそうであると言って、それよりも何か良い方法が無いかと考えていた。
「警備……警備か。」
　だが、総理はそこまで考えると、あることを思い付くのであった。
それは、
「……そういえば、市ヶ谷周辺と朱音局長代理は刀使を警備や自身の警護として使っていたな。」
「そのように記憶しておりますが、何か?」
「……いや、私の警護に彼女等を使うのはどうだろうか?そうすれば、手出しできないだろうし、国民は私のことを見直すかもしれん。」
　総理は警備に刀使を使うことで、未だ一部の国民から慕われている

刀使等が自分を支持しているかのように錯覚させることで、自身の支持率の回復と共に国民の反発を和らげようとしていた。

その提案に官房長官は、

「……朱音局長代理が自身の警護と市ヶ谷周辺の警備にも刀使を使われていますので、何の問題もないかと思われますが……。」

「そうか！では、早速そのようにしよう！……今日は私の話も聞いてくれてありがとう。」

「いえ、総理の御心が幾許か休まったのであれば、私共も喜ばしい限りです。……それでは、職務に戻らせてもらいます。」

「ああ、頼む。」

中谷は総理に退室する旨を述べると、官房長官と共に総理執務室から退室するのであった。

そして――――、

「……これで良いかね？」

「ええ、全ては甲斐が手筈を整えておりますので、心配は御無用です。副総理からのご理解も得ましたので。」

官房長官と中谷は小声で何かの話しをしていた……。

そうして、この世の中は優と刀使といった子供達だけでなく、公共性を謳うテレビやインターネット上でも何も知らない子供達をダシにして、はした金や名声を得ようとする者が漸増の一途を辿るのであろうか。

……その先は、未だ見えないままであった。

一方、綾小路武芸学舎。

ソフィアは、ある人物と連絡を取っていた。

「……つまり、そちらは手駒が失いつつあるから、こちらの手引きが欲

しいという訳ですか?」

『そうだ。これ以上、彼等に気付かれないよう援助している暴徒集団や扇動員が殺られると中東諸国との関係が拗れてしまう。そうなる前にこちらの人員を送りたい。』

ソフィアが連絡を取っているとある人物とは、北京に居る公安部長の命を受けた部下であった。

北京に居る公安部長がソフィアと連絡を取ろうとした理由は、中東の過激派のテロリスト達がトーマス達等によって、一つ一つ潰されているため、過激派のテロリストを送っている中東諸国は中国に対して懐疑的になり、中国に人材の補填を名目に多くの物質的援助を求め始めていた。

そんな中東諸国と中国の関係が拗れてつつある状況下において、日本の水資源や土地等を購入している裸官等によって糾弾されていた公安部長の立場は次第に追い詰められるようになっていったのである。

そういった理由もあり、刀剣類管理局の内部情報をこちらに流してくれるソフィアに連絡を取っていた。

『これ以上、こちらの損失を大きくさせたくない。……それに、そちらにもメリットはあるだろう?』

「……まあ確かに、私の方も準備が万端という訳でもありませんので。」

お互いに利となる話しであろうと公安部長の部下に言われたソフィアは自身の苦しい内情を隠すこともできないのだろうと判断すると、北京に居る公安部長の工作に協力することを決めた。

「それで、どうするお積りで?」

『部長は総理に殺害予告を送り、警備を厳重にさせる名目を与え、刀使を警護に付かせる。……あの男がやりたくなくとも、他の者がそうするだろうとのことだ。』

先ずは、総理に殺害予告を送り、総理と議員達に恐怖を植え付け、刀使をその者達の警護に付かせようとしていた。

『それと同時に、黒人運動を扇動して国会の周りを包囲させ、国会周辺

で暴れさせるのが目的のようだ。上手く行けば刀使にも被害が出て、今後の政権運用にも支障が出るうえ、今回の特措法について否定的な考えを持つ者が増えることだろう。……そうなれば、現政権の行いに反対的な者を総理に据えることで特措法を破棄させることが目的だ。それに、現政権の行いに反対的な者は我が国に良い顔をする者達でもあるからな。』

その理由は、刀使達を警護に付かせることで暴徒達による被害を被らせると共に、現政権の批判を高め、現政権が強行採決にて行わせた特措法の法案の破棄を公約に掲げることになる野党を支援することで特措法を無くそうとしていた。

そのうえ、現政権の行いに反対的な者は中国に融和的な考えを持つ者であることを言っていたが、ソフィアはそれが目的であることを容易に想像できた。

なお、これはソフィアには話していないことだが、扇動する方法も五毛党などを使って、インターネット上のコメント欄や電子掲示板といった場所で行われる『やらせ書き込み』や学生と身分を偽り黒人運動のデモに参加するといった方法であった。

「ハハ、現役の刀使相手に話すような内容の話しとは思えませんね？」

『部長は君のことを信用できるから、話せられると仰っていたんだ。君も部長の様にこの関係は壊したくないだろう？』

その企みを聞いたソフィアは、暗に刀剣類管理局に告発するぞと脅し、更なる利益と情報を得ようとしていたが、公安部長の部下は相手にすることなくこう返していた。

「……癪な言い方をしますがそれは事実ですし、今は貴方方に協力することにしましょう。」

『ああ、こちらこそ宜しく頼むよ。』

公安部長の部下はそれだけ言うと、通話を切るのであった。

そうして、ソフィアは室内に居る穂積に今後のことについて話すことにした。

「という訳だ。工作員共の協力をすることになった。」

「……それについては手筈を整えております。ロシアも日本と中国が

争ってくれた方が何かと都合が良いそうで。」
「ふむ、あそこはまだ火種を解消していないということか。」
「ええ、クリミアとかで欧州の活動が活発になっているとか何とか。」
「ふむ、何処も火種を抱えているということだな。……まあ、良い事ではあるが。」
そうして、ソフィアはロシア側の援助を使って、中国の工作員を引き入れようとしていた。
「……しかし穂積、常々疑問に思うのだが。」
「何でしょうか?」
そして、ソフィアは疑問だった。
「どんな人間かも分からない見ず知らずの人のために、どうして無料(タダ)で必死になって働くんだ?彼らはそこまで暇なのか?」
世界中に広まる黒人運動のデモ集団の中には、学生と身分を偽って国内に潜入した中国のスパイが運動に参加しているが、それは工作活動の一環であるということにソフィアは理解できていた。
だが、黒人運動の中には、中国のスパイや中東の過激派グループ以外の者も参加しており、しかも無料で、工作員以上に熱心に活動している者が居るということに、善意といったものを無用の長物としているソフィアは彼等のような者は不自然であり、不思議な存在として映っていた。
……何故、何の利益も損得勘定も無く、熱心に活動するのかと。
「多分、自分のことを優しい人だから、とか思っているんじゃないですか?知りませんけど。」
「なるほどな。……優しい人か、暴れてる彼等は面白いことをするな。」
多分、自分のことを優しい人だと思っているんでしょうね。と何処か他人事の様に言う穂積の話しを聞いたソフィアは、散々好き勝手に暴れているのに自身のことを優しい人だと思い込んでいるのかと嗤いそうになるのをどうにか堪えていた。
そして、ソフィアは自分では到底理解できないものであるとも理解していた。

名前を得た怪物達が奏でる間奏

中谷と官房長官に内密の話しがあると呼ばれた総理は、総理執務室内でその二名と会談した数日後、総理は殺害予告を受けたことを口実に刀剣類管理局に自身の警護を依頼。そのため、総理の警護には刀使が付くことになったのだが、国民の反応は冷ややかなものであり、支持率の回復には繋がらなかったどころか、更に下がってしまうのであった。

理由は、何故警視庁警備部のＳＰに警護を付けなかったのかといった意見が飛び交ったこともそうだが、荒魂対策の増額からくる予算確保のための度重なる増税と治安出動による物流などの停止が原因の経済への混乱と打撃、更には鎌倉での騒動をひた隠し続ける行動とそれに続く荒魂事件の増発といった現状により、現政権の支持率は下がり続けていることからも分かるように、国民は現職の総理への支持離れが多くなっていることもそうだが、決定的となったのは、

「治安出動による経済の混乱から更なる暴動に発展する可能性が有るため、国民の皆様には外出を控えてもらうよう外出禁止令の理解と協力をお願いします！私自身もそうですが、政権与党の総理大臣として指揮する刀剣類管理局、防衛省、自衛隊も同様にお願いしたいと思っております！」

という上記の発言を総理がしてしまい、それを問題視されてしまったのである。

刀使と自衛隊員が国民に武器を向けるという状況にしないようにするために、怒りを自制してほしいという趣旨の発言であり、総理はそのことを国民に呼びかけたの積もりなのだが、刀使と自衛隊を私物化しているかの様にも捉えることのできる発言であったために、国民は更に反発することとなったのである。

そのうえ、広告収入の減少に危機感を抱き、過激さを求めていたテレビ局がこれ幸いとばかりに上記の総理の発言の

『私自身もそうですが、政権与党の総理大臣として指揮する刀剣類管理局、防衛省、自衛隊も同様にお願いしたいと思っております！』

という部分だけを意図的に切り取って、煽る様に報道したのである。それだけに留まらず、新聞の発行部数が減少傾向にある新聞各社と何でも良いから再生回数を稼ぎたい性質（たち）の悪い動画配信者達もそれに便乗し、それらの情報が勢いよく流れる水の如く、一気に拡散していったのである。

そういった理由により、刀剣類管理局の局長代理を務める朱音にもテレビ局の取材が来たので、

「先日の総理の発言は国民の自制を促すものであったと認識しており、刀剣類管理局が特定の政党に協力するといったことはございません。」

という風に朱音は答えるしかなかった。

しかし、過激さを求めるテレビ局と新聞各社は

『刀剣類管理局が特定の政党に協力するといったことはございません。』

という部分だけ切り取って、報道させる事態に発展し、それだけに留まらず、再生数を稼ぎたい動画配信者の中にはそれを盲目的に信じ、過熱に配信する有り様であった。

そのうえ、米軍所属艦艇の奪取、都市部への不明機射出と横須賀湾での停電騒ぎ、並びに綾小路武芸学舎へのスパイ行為と折神家親衛隊の燕　結芽と皐月　夜見の二名がノロの投与していたことが発覚し、それをひた隠そうとする刀剣類管理局と政府のことを国民は全くと言っていいほどに信用しておらず、それればかりか政権与党とつるんでいると見ている者が居たのである。

そういったこともあり、テレビや動画配信サービスに映っている総理の警護をする刀使を見た国民の一人が、

「所詮、刀使も国家公務員でしかないんだな……。」

と呟き漏らしたことが切欠となったのかは不明だが、国民の刀使に対する見方が、人々に災いをもたらす異形の存在である荒魂の討伐を使命とし、霊験あらたかなる御刀の所持を任された『神薙の巫女』か

ら、政府の指示に何も考えず、唯々諾々と従う『国家権力の犬』へと認識が変わりつつあった――――。

一方、市ヶ谷に居るタキリヒメ側――――。

「――――以上が、現総理の状況であります。」

タキリヒメ派の議員は、失言を繰り返し、窮地に立たされている総理の近況をタキリヒメに報告していた。

「……ふむ。自身の警護に刀使を使うか。」

「タキリヒメ様、いかが致しましょう?」

タキリヒメ派の議員はそう言って、タキリヒメにどうすべきか尋ねていたが、彼の本心は総理の警護に刀使が付けば反発が強まることは予想できるので、この決定を差し止めるように指示して欲しいと思っていた。

だが、議員は敢えてそう言わず、もしかしたら自分よりも最善な答えをタキリヒメが出してくれるのではと期待し、そして試すかのように尋ねていたのである。

「……そうだな。私、いや我としてはまだ動くべきではないと見ているが、お前はそれだけでは納得すまい。」

「……。」

タキリヒメの答えに議員は無言で答えていた。

それは、タキリヒメの問い掛けに対して肯定であると答えているのと同様であった。

「そうだな、あの男一人でこんなことを思い付くとは到底思えないのでな。……恐らくは誰かに促されるか、そう仕向けられて動いていたに違いないというのが、我の考えだ。」

タキリヒメは、総理のことを〝あの男〟と言って、議員に自身の考えを話し始めていた。

「あの男をそう仕向けたのは、何らかの大きな行動をするためであろ

う。そうでなければ、誰も止めないのは不自然だ。……恐らくは排除するための大義名分が必要といったところであろう。」

タキリヒメは、〝あの男〟と呼ぶ総理の警護に刀使を付かせたことに他の者が異議を唱えたり、差し止めようとしなかったのにはそうするべき理由があり、それは恐らくだが、刀使を政治利用したという理由か何かで総理を排除することでこの騒動を収めようという魂胆で動いていると推測していた。

「……なるほど、その男に全てを負い被せようということですか。」

「そうだとすれば、無暗やたらに妨害したところで敵を創るだけ、ならば、むしろその計略に一口噛ませてもらい、早期にこの騒動を終わらせることが肝要であろう?」

「そうして、我々が今後の交渉等でイニシアチブが取れるということですね?」

「ああ、そういうことだ。そうすることで我等が推し進めようとする政策の一つでも通すことができれば、我々が政界へと進出する際には大いに助かることだろう。」

自身の警護に刀使を付かせた総理に全ての責任を被せることで、この特措法から続く騒動を収めようとしているというタキリヒメの推測を聞いた議員は、それならば此方もそのクーデターに一枚噛むことによって、こちらが提案する政策等に協力してもらうといった特需と総理の身命よりもこの特措法から続く騒動を早期に収めることで経済の混乱を回復させる方がメリットとして大きいと判断した議員は、タキリヒメの考えに賛同したかのように頷いていた。

なお、推し進める政策というのは、荒魂と珠鋼と隠世に対する更なる研究の推進。国内の銃規制を緩める。ポリコレの〝協力〟といったところであった。

荒魂と珠鋼と隠世に対する更なる研究の推進を行う理由は、隠世の莫大なエネルギーを安定供給することで得られる利益もそうだが、荒魂と珠鋼と隠世に対して自身でも知らない知識や見解があるかもしれないと見ているからである。

それに、隠世に逃げ隠れ、人間が住むこの世界への憎悪を募らせて

いるであろう本体は、いずれ世界を我が物にしようとする自身の最大の障害となることは目に見えているので、本体を排除するべく隠世の全貌を解明しようとしていた。

次にタキリヒメが国内の銃規制を緩めるのを推し進める理由は、防衛産業を民間市場に流すことによって、防衛装備の製造単価を下げると同時に近年問題視されている長引く不況と減少する受注から、防衛産業はコマツの自衛隊向け車両の新規開発事業からの撤退を例に挙げれば中小から順に確実に減少しており、欧州などに比べれば、未だ高い開発能力を維持してはいるのだが、何時まで高性能な国産装備を開発できるかは不明な状況下にあるため、防衛省は国際共同開発等を含めた新たな産業体制の有り方についての検討を行っている。

……のだが、アドーアの悲劇、海外製のアプリに情報を抜き取られる可能性が有った事件を経験している自衛隊は海外メーカー製に対する拭いがたい不信感を持つ者が一定数以上は居り、掛かる危急の際に信用できない物を持って行くのは危険であるといった声も多いため難航していた。そのうえ、タキリヒメは今や領海侵犯等を続ける中国やロシア等といった大国が近くに在る以上、国民に誰が敵国で、有事になりつつあるという意識を植え付けることによって勝利した北条時宗の例を挙げての説明（北条時宗が全ての神社・仏閣に敵国降伏の祈りをさせることで、民衆に異国からの攻撃を覚悟させたことである。）を議員等に話していた。

……実際の目的は、銃規制を緩めることで銃社会とし、人間同士の撃ち合いと争いを助長させ、荒魂に対する憎悪を人間にシフトさせると同時に人間の数を減らし、荒魂を危険という認識を緩めることにあるのだが、タキリヒメは流石にそのことを議員達には話さなかった。

最後にタキリヒメがポリコレの〝協力〟と言って推し進めようとする理由は、差別是正活動であるポリコレを利用し、荒魂も人間社会で活躍させるべきという論へと誘導させることが目的である。そうすることで自分を批判する者は差別主義者（外人にはレイシストと批判する。）と言って批判し、言論を封殺すると同時に社会的に抹殺させることで、最終的には自らの地盤を固め、盤石にすることが狙いであ

る。

そして、ポリコレの〝推進〟ではなく、〝協力〟としている理由は、ポリコレの活動をする者の中には物を破壊したりといった過激な行動を行う者が居り（この点についてタキリヒメは、荒魂より凶暴だと思ったそうである。）、その者達を勢いづかせることによって暴れさせ、国内の治安を乱れさせると同時に現政権の支持を失わせ、人間同士の争いを演出し、この国のトップに人間を据えることで争い事が生ずるならと思わせることで荒魂であるタキリヒメがこの国のトップになると宣言すれば、自分のことを支持する者達が増え、この国を支配しようと考えていた。

無論、タキリヒメが国の実権を握った後は、ポリコレの活動をする者達の中に居る過激な行動を取る者達と人を襲う荒魂は犯罪者として、紅衛兵やドイツ国会議事堂放火事件時のコミュニスト（共産主義者）達の末路の如く処分することにはなっている。

そういったこともあって、ポリコレの〝推進〟ではなく、（一時的な）〝協力〟として、使い潰そうとしていたのである。

だが、「人間への支配欲」を原動力とするタキリヒメは、ポリコレといった差別是正の活動について妙な気分で見ていた。

例えば差別是正のために女性やＬＧＢＴの議員を一定数増やすとか議論していると聞くが、それならば人類に仇なすと言われ続けていた荒魂も「差別是正」と何処かの街頭で訴えていたら、能力に関係無くなれるのだろうか？もし、そうだとしたら……。

（空しいなぁ……。）

とタキリヒメは零すのであった。

『人間への支配欲』を原動力とするタキリヒメにとって、国政選挙は特定の個人がどれだけの大衆を巻き込めるかの一大イベントでしかなく、自分の一挙手一投足で社会がどれほど大きく動く様を見て、己自身の欲望である『人間への支配欲』というものを充足させることができる物としてでしか見ていなかったのである。

そのうえ、タキリヒメは自身の欲望である『人間への支配欲』を充たすために自身の手で敵を倒すのは好きではなく、他人を扇動して邪

魔な相手を排除するのが好きなのであるため、美弥を鍛えていたし、自身は人間にも寛容であるとアピールするために傍に置いていた。

そのような考えを持つためか、自身がこの国の支配するために行った工作が原因で起きた騒動で相模湾岸大災厄以上の被害が出る事になったとしても、タキリヒメはそれを苦に思うどころか、自慢気にこう思うのである。

――――私の方がヒトラーやスターリンよりも多くの人間を殺せた。人一人殺すのに人一人以上は動かす必要があるのだから、多くの人間を殺すことは多くの人間を動員することと同じことである。となれば、多くの人間を動かしたということは社会を動かしたことと同意義である。よって、支配者としても私の方が相応しい。そのうえ、タギツヒメと名乗る大荒魂よりも多くの人間を殺せたのだから、やはり私は隠世に隠れ潜む臆病者の本体よりも、上位の存在なのであると――――。

多くの人間と社会を自分の思う通りに動き回る事に喜びを感じるというこのタキリヒメが持つ冷酷な残忍性は、一緒に居る美弥もタキリヒメを支持する議員にも気付かれていないのである。

ただし、タキリヒメは、国政選挙は特定の個人がどれだけの大衆を巻き込めるかの一大イベントという考えを持つため、選挙は公平でないと気が済まない性質でもある。何故なら、自らの地盤を固めるために国民と国家が一体となった強固な国を創るという望みを叶えることもそうだが、自身の一挙手一投足で社会が大きく動く様が見ることで『人間への支配欲』が充たされるからである。故に、昨今の”女性”だからとか”荒魂”だからという動機の小さい理由で国の議員に選ばれるのは何の張り合いもない物でしかないとタキリヒメは考えていた。

そのうえ、ＳＮＳ等で国民の声が発信されやすくなった現代において、それらの声を利用しようという考え方が広まりつつある現代戦で争うこととなる昨今、民意が反映されにくくなり、国内に不満が溜まり、国内に不安要素が在る国家は、モンゴル襲来時に内憂外患の状態であったホラズム・シャー朝、武士の不満によって滅びた鎌倉幕府、ロ

シア革命時のロシア帝国といった例を挙げるとキリがないが、彼らは総じて滅ぶ運命にあったのは紛れようもない事実であるともタキリヒメは理解していた。

故に、昨今の〝女性〟だからとか〝荒魂〟だからという理由で要職や国の議員に選ばれるのは内部に不満を溜める物でしかなく、タキリヒメの好みではなかったのである。

故に、タキリヒメは本心では昨今のポリコレの事が大嫌いであり、社会にとって有害でしかなく要らざる物であると考えていて、自分にとって都合の良い利用できる捨て駒のような物としか認識していなかった。

とはいえ、自身が人から恐れられている荒魂である以上、そのポリコレという物を利用して、自身は人道に配慮した荒魂であると、荒魂にもそういう者が存在するのだとパラダイムシフトを起こさなければならないとタキリヒメは考えているので、それらを配慮した発言もしなければならないのは、自身が嫌うポリコレに支配されているような気がしたので、腸が煮えくり返る思いであった。

……そのため、自分が支配者になった暁には、ポリコレといった面倒な連中は散々利用した挙句、徹底的に弾圧する腹積もりであった。

「委細承知しました。それでは、その様に。」

「うむ、頼んだぞ。」

タキリヒメはそんなことを考えていることを議員に悟られぬよう、議員の声に応えるタキリヒメ。そして、タキリヒメは総理への対応を全てタキリヒメ派の議員達に一任することにした。

こうして、タキリヒメは議員との会合を終えるのであった。

「……えーっと、何の話か分からなかったんだけど。」

そして、同席していた美弥はタキリヒメにこう漏らし、説明を求めたのであった。

「……そうだな。我が国政選挙に打って出る前の準備の様なものだと思えば分かり易かろう？」

「……全然。」

一応、国家公務員である刀使の美弥がそう言ってあっけらかんと答

える様を見たタキリヒメは、この政治に無関心だが、一応は国家公務員である娘の行く末を心配し、こう詰問するのであった。
「……いや、自分の国に関することだろう?何故分からんのだ!?」
「えっ、いや、私まだ選挙とか考える歳じゃないし。」
「年齢など関係あるかっ!!我がどれだけ人権やら、国籍やら求めても、未だ手に入れておらぬというのに……。」
「えっ、な、何かゴメン……。」
頭を抱えるタキリヒメを見た美弥は、申し訳なさそうに謝るのであった。
「……ヨシ、決めたぞ。」
「え?な、何が!?」
タキリヒメの一言に美弥は嫌な予感がしたものの、何を決めたのか聞いてしまった。
「お前に私が手ずから勉学を教えよう。」
「!…あ~、私剣術で大変だから、勉強とかは良いかな!」
タキリヒメに自らが勉学を教えようと提案するが、美弥は剣術を言い訳にして、逃げようとしていた。
「何を言うか!!勉学というのは剣術にも、遊びにも活用できるのだぞ!!……それに、学業だけが勉学ではない。学業以外の勉学をすればするほど見える世界も広がるぞ?国政選挙の在り方や国はどうやって成り立っているかとかな?多分、そんな些細なことすらも学ばなかったら、今も『我はタキリヒメ。霧に迷う者を導く神なり。』とか、壊れたラジオか販売員の定型文(さしすせそ)みたいなことをずっと言っていると思うぞ、我は。」
しかし、タキリヒメは逃がす気はなく、美弥を引き止めていた。
「というよりもだ。今も『霧に迷う者を導く神なり。』とか言っている自称神が居たら聞いてみたいわ。お前の頭の中の辞書には有償契約と市場原理というものは存在しないのかと!他人に話しを聞いてもらうには工夫とそれに見合った苦労が必要であると!というか冷静に考えてみろ、自称神と名乗る奴が目の前に突然現れたら普通は困惑するだろ?仮に自称神と名乗るよく分からない奴にも『ハハ―ッ!』

と水戸黄門みたいに即座に平伏したら、コントだとしか思えんぞっ!?我はっ!!?もう少しビジネスモデルというか、神を名乗るのなら思慮深い判断をするという考えには至らんのか!!?」

熱く叫ぶように語るタキリヒメを見た美弥は、

（コイツ、自分のライフを払って口撃しているだと……？）

タキリヒメ自身にブーメランが戻って来ていると思っていた。

しかし、そんな美弥の心中を知ってか知らずか、尚もタキリヒメは熱く語っていた。

「だが考えてみろ！お前の言う剣術にだって指南書があるのだから読み書きは必要だし、ゲームといった遊びも取り扱い説明書もあるのだから読み書きは必須であろうがっ!!……それに、創意工夫をする知恵を持てば、遊び方も剣術の戦術も増えるのだから、今やゲームや剣術といった娯楽のために、自分の人生を楽しむためにも勉学は必須であろう!!それに見える世界も増える!!悪いことばかりではない!!なのに、お前ときたら剣術には勉学が不必要であると説く。……今の世の中、インテルネッツやら、スマホやらでも、青空の下でも勉学ができるというのにそれを活用せんでどうする？どうせお前のことだ、勉学にも使え、インテルネッツも繋げられる素晴らしい文明の利器でもある携帯端末のスマホに使うことは、精々訳分からんゲームに、キャバクラに貢ぐおっさんみたいに課金することぐらいであろう？違うか？」

「そ、そそそそんなことないし！ちゃんと成績は悪くないし!!」

タキリヒメの指摘に美弥は図星であったのか、顔を赤らめながら否定していた。

「いいや、お前は分かっておらん。勉学というのは学校教育のことだけではない。事実、我は街へ繰り出して人々の意見を聞かなかったら今も『人という未熟な種は所詮虫や獣と同じ。』とか言ってそうな気がするのだ。……今思うと寒気がする。我が取引とか交渉とか理解していないどころか、コミュニケーションが苦手なんだろうなという印象を与える奴になっているのは容易に想像できるぞ。というよりも自称神は海を割ったり、何かのご利益を信者達に与えたりすることと

かできないのか?と我は訊いてみたいがな。」
「……あっ、うん。」
タキリヒメの話を聞いていた美弥は、タキリヒメの言う通り、もしタキリヒメが人のことについて勉学をしなかったら『人という未熟な種は所詮虫や獣と同じ。』と宣うであろうことは美弥も容易に想像できた。
何故なら、タキリヒメと最初に出会ったとき、タキリヒメは『……我はタキリヒメ。霧に迷う者を導く神なり。』と言ったことを覚えていたため、簡単に想像できたからである。
「まあ、これも全て、美弥が『我はタキリヒメ。霧に迷う者を導く神なり。』と言った我を真剣に受け取らず、小馬鹿にするように言ってくれたお陰で我は人を従わせるには恫喝だけではダメだと気付かせてくれたことには感謝しておる。勉学は本以外でも享受することが出来るのだと。だからこそ、我が手ずからお前に勉学を教えようと言うのだ。感謝するのだぞ?」
タキリヒメにそう言われた美弥は、冷える思いをした。
(コ、コイツ……、あの事をまだ根に持っているのか?)
何故なら美弥は、タキリヒメが『我はタキリヒメ。霧に迷う者を導く神なり。』と言ったとき、ハイハイと言って相手にしなかったことを根に持っており、その仕返しをしようとしているのでは?と勘繰っていた。
そのため、危険を察知した美弥は全力で、
「……いやいやいやいやいや、そんなこと気にしなくて良いよ!……本当にっ!!」
回避しようとした。しかし、
「何を言うか!我の従者がアホとか我の沽券に関わることだぞ。だからこそ、我が手ずから勉学を教えようと言うのだ!!それの何が不満なのだ。」
「っていうか、私はアンタの従者になった覚えないから!!というより、いい加減小間使いから昇格させてよ!」
そんなこんなでタキリヒメと美弥は、今日も騒がしく過ごすので

あった。

誰かのために、踊ると誓う人達。

総理の失言から数日後。

『――――今朝頃から国会周辺に集まっている群衆は、総理自身の警護に刀使を付かせたことに対する詳細な理由と鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の全貌を公表すること。更には特措法の廃止を訴え、大規模な抗議デモを行っております。』

鎌倉からの出来事から続く政治的な混乱に不満が爆発した国民は国会周辺に集まり、報道は大規模というものの、実際は規模の小さいデモ活動であった。

「刀使の軍事利用に繋がる特措法に反対ーーーーー!!」

「総理は鎌倉での出来事を隠すなーーーーー!!」

「これ以上の政府の横暴を許すなーーーーー!!」

国会周辺に集まる今は規模の小さいデモ活動はそう言って、現政権を批判するような内容が書かれている横断幕や看板を掲げ、昔日の安保闘争を思い起こさせるような抗議活動をしていた。

……ただ、その昔日の安保闘争と違う点は、横断幕や看板に中国語やロシア語が混じっているという何故か多言語であること。そして、明らかに日本国籍以外の者も混じっていたこと。彼らは刀使の軍事利用の反対、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題の全ての公表といったことを今も国会周辺で叫んでいた。

……しかし、本気でこのデモ活動をすれば、刀使が政治利用されることがないと本気で信じている者も居たのは事実ではあるのだが、実際のデモ参加者の大半は、総理が決定した自衛隊の治安出動によって、自衛隊と暴徒達との間で銃撃戦となり、市街戦へと発展したことにより、街が破壊され、物流が停止したことが原因で経済の混乱が生じ、失業をした者が現れ始めていた。

その失業した者達は今も再就職先が無いことと、与党を声高に批判する野党や報道各局といったマスメディアも自分達の窮状になど興

味が無いのか、己の利権拡大のために野党の支持者やスポンサーの意向通りに刀剣類管理局と政府のどうでもいい批判ばかりしていたこと、そのうえ現政権は社会保障費やら子育て支援、荒魂対策の予算確保の名目で重税を今も強いていることから、窮屈で嫌な世の中になったと感じ、自分の意見が反映されない与党にも野党にも支持することができなくなり、遂にはこの社会は自分のことになんか興味が無いのだろうと思い込み始め、社会に疎外されているように感じ、この世には味方など居ないうえ、全てが敵に見え始めていた。

そんな状況下に在った人達は内に溜め込んだ不満を訴えられる場所を求め、ただただ〝怒り〟の感情に流されるまま、暴走するかのように暴力という目に見える形で訴えようとしていた。……実際は、そんな本音を抱えている者達が大半であり、国会周辺のデモに参加しているのであった。

その光景が映されていて、国民は不満を抱えている状況であるかのように報じるテレビという電子製品を眺めていた和樹は、

まともな職を得られず、親から刀使だった妹と比べられる日々。

親への仕送りのために日本へと外国人実習生として働いたミンの末路。

といったことをつぶさに思い出しながら、和樹はぼそりと呟いた。

「……テレビに〝自分〟が……〝僕達〟が映っている。」

自身の身体に荒魂を注入し、それが定着するまでの間に〝痛み〟と〝渇き〟に呑まれることが無いように縛られていた和樹は、死んだ目でテレビを眺めながら、そんなことを呟いていた……。

一方、刀剣類管理局本部にある部屋で西田は国会周辺のデモ騒ぎが報じられているテレビを意味深な表情で眺めていた。

彼が此処に居る理由は、防衛省の指令により、刀剣類管理局本部に戦術データリンクを導入するべくＲｅｃｓ（基幹連隊指揮統制システ

ム）等の運用実績が有る第二師団所属の西田達に白羽の矢が当たった訳であり、その導入を進めるため、荒魂対策の研修のために長期出向していた。

しかし、江仁屋離島で行われた陸海空の三自衛隊による統合運用力の強化と島嶼部の奪還の強化を主目的とした訓練と同時に行われた高機動パワードスーツの運用試験。現政権が強行採決で通した特措法。……そして、江仁屋離島での運用試験で使われた高機動パワードスーツと同型の物を使って鎮圧した関東８区での暴動騒ぎからの国会周辺でのデモ騒ぎ。

これらを通して見た西田は、何らかの思惑が有って国会周辺のデモ騒ぎまで持って行こうとした者が居るのだと推測していた。そして、推測通りであれば、それを仕組んだ者は大事（おおごと）にしたい筈であり、となれば国会周辺で起きているデモ活動の数は日に日に増えることは予想できる。もし、国会周辺で起きているデモ騒ぎが大群衆ともなれば、警備に当たる刀使に被害が出るかもしれない。

（それ以前に、これは犯罪だ……。）

それに、刀使に被害が及ぶような事態は避けたかった。

……とはいえ、西田も何処から仕組まれていたものなのかは分からないが、理由はどうあれ国民を犠牲にする行為は到底許される事ではないとも考えていた。彼はそこまで考えると、悲惨な結果を防ぐために本部に居る寿々花にあることを嘆願するため、彼女の居る部屋へと向かって行った。

そんな寿々花は西田が探しているとは露知らず、誰かと通話していた。

――――それも、折神家支給の携帯端末ではなく、民間市場に出回っている携帯端末で。

「……報告を。」

そうして寿々花は、綾小路武芸学舎に送ったスパイの仲介人の報告を聞いていた。

なお、そのスパイも表向きは刀剣類管理局と繋がりの有る者ではないとするために、此花家と縁故の有る私立探偵等（その私立探偵の出自も元警官が多いが、中には前科の有る者も居る。）であるのだが、それを悟らせないようにするために数回の仲介人を通じて指令と資金を送っている。そのため、綾小路武芸学舎学長である結月は今もそのことには気付いてはいないと思うが……と、寿々花は内心呟いていたが、不安もあった。

何故なら、綾小路武芸学舎学長である結月は、紫が率いていた特務隊の副隊長として活躍していた猛者であるため、脅威であると捉えていたからである。

故に、寿々花は細心の注意を払ってはいるものの、安心はできなかったのである。

『――――はい。お嬢様のご指示通り、綾小路武芸学舎に所属する研究所と病院等を調べてみたのですが、医薬品といった物の注文数がここ最近増えたといったことはありませんでした。』

「……となると、研究所に怪しい動きは無かったと？」

紫から、綾小路武芸学舎学長の結月も大荒魂に操られていた紫の指示の下でノロの力を使った様々な実験を行っていたということを知った寿々花は、もしかしたら夜見を匿っているか捕らえているのが結月ではないかと思い、綾小路武芸学舎を内偵していたのであった。それに、寿々花の推測通りなら、夜見を匿うか監禁するためには紫のように医療設備といった物が有る場所が必要である。とすれば、綾小路武芸学舎預かりの研究所が怪しいと睨んで、医療品の注文と研究所が使う電力が増えていないかを調べていたが、結果は何も変わっておらず、其処に夜見が居るという可能性が低いという返答が返ってきたことに落胆していた。

『ええ、ですが彼等はここ最近妙に警備が厳重になったとのことで、深くまでは調べられなかったそうです。もう少し深く当たってみれば何か出てくるかも知れないと仰っておりましたが、……続けさせます

か？』

「……分かりましたわ。続けるように伝えて下さい。」

仲介人からそう言われた寿々花は、警備が厳重になったということに引っ掛かり、綾小路武芸学舎を密かに内偵しているスパイに続けるようにと伝えるように言うのであった。

『分かりました。お嬢様、吉報をお待ち下さい。』

「ええ、彼らにもよろしくとお伝え下さい。」

寿々花はそう言うと、通話を切り、落胆の表情を浮かべていた。

理由は、数カ月もの時間を費やして綾小路武芸学舎を内偵していたが、新たなノロの実験をしていたということと、夜見やイチキシマヒメ等を匿っているという証拠を掴めずにいたことである。

鎌府女学院学長の雪那と同じくノロの実験を行う結月が綾小路武芸学舎学長であり、その綾小路の刀使である歩が大した理由もなく優の居る区画に足を運ぶという不可解な行動をしているといったことが報告されている以上、本部の留守を任されている寿々花としては綾小路武芸学舎は旧折神　紫派の総本山ではないかと疑っていたのである。

（……ですけど、刀剣類管理局に対する風当たりが強い昨今の情勢下を考えれば、下手に強行手段に出て政府野党の話のネタ作りに協力する事態になることは避けたいですし、……そう考えますと夜見さんの能力（ちから）は大変助けられましたわね。）

夜見のことを考えていたせいか、今まで夜見の小型の荒魂達を出す事で探索といったことが出来る能力のお陰で、多くの情報を入手することができ、それによって刀剣類管理局の親衛隊は大きく助けられたことを思い出していた。

……そう考えると、やはり刀剣類管理局と特別祭祀機動隊には、諜報活動といった分野では他の組織と比べると貧弱であると言わざるを得なかったと寿々花は心の中で呟いていた。

そもそもからして刀剣類管理局に所属する特別祭祀機動隊自体が年若い少女を中心とした荒魂退治を専門とした組織であり、自由や博愛を大切にするというモットーを掲げた平和国家である日本にはそ

ぐわないという理由で破防法といったスパイを防止する法案が通りにくい国内状況も合わさって、諜報といった分野に弱いのは致し方が無い部分が強かったのは事実だったが、寿々花が実家の力を借りて私立探偵といった者をスパイにしたり、夜見の能力と雪那の人脈のお陰でそういった分野にもそれなりには強かった時期もあった。

……しかし、夜見と雪那が行方不明となった現在、諜報手段がスパイぐらいしかない限られた状況においては綾小路武芸学舎に対する内偵が余り進まなかったのである。

そのうえ、真希には伝えていないが、自衛隊といった防衛省の最近の動きも気になっていたため、綾小路武芸学舎を内偵する人員も多くは割けなかった。

なお、真希に防衛省が怪しいということを伝えなかった理由は、刀使とＳＴＴ隊員といった特祭隊の隊員等の離職率の増加によって戦力が低下した現在の刀剣類管理局の状態で昨今増加した荒魂事件に対処するのは至難であり、自衛隊といった他組織の協力は必要不可欠であった。そんな理由もあって腹芸ができない真希に自衛隊が怪しい行動をしているといったことは伝えてなかったのである。

そして寿々花は、獅童　真希という人物には前回・前々回の御前試合で優勝という実績があり、その実績を以て折神家親衛隊の第一席として就任。その後も異性同性問わずに人気があるカリスマ性と年上のＳＴＴ隊員等に指示を出しても不満が出ないことから、親衛隊のリーダーは真希がふさわしいと考えていた。そのため、自身は裏方、つまりは情報収集や政治交渉で活躍しようと考えたのである。

そういった寿々花の考えもあり、寿々花は紫の政治活動にも同行していたのであった。

そのうえ、寿々花が真希に好意を抱いていたこともそうなのだが、そういった輝かしい経歴によってカリスマ性を得た者がリーダーになった場合は、そのリーダーが合法非合法を問わない手段を使えば嫌われてしまうこと（例えば、善良さで好感と支持を得ていた委員長がタバコのポイ捨てをしているといった悪い事に繋がるような行動を見かけられたら、その善良さで好感と支持を得た委員長はその次の日

には支持されなくなることと一緒である。）になるのは理解していたため（しかし、寿々花としても親衛隊第一席である真希が、荒魂を自身の身体に入れたのはマイナスであったが、それは折神家の指令によってであり、且つ後の刀使達の負担を減らすためでもあったと釈明させ、それを宣伝すれば真希のカリスマ性が陰ることはないだろうと判断していた。）、寿々花は真希が、自身が行っているスパイを使って情報を収集させるようなことはやらせたくなかったのである。

そんなこともあって、真希が荒魂討伐のため関東中を飛び回っている間、寿々花は紫の政治活動への同行時やパーティー等で得た人脈、スパイといった合法非合法を問わない方法で多くの情報を集めていた。

（……敵が後ろにも前にも居るというのは、中々に厄介ですわね。）

寿々花が母校である綾小路もそうだが、防衛省の動きにも注意を払わなければならない状況に毒づき。今度真希が甲斐と会談する際の話す内容を考え、話す内容を記載した書類を作成しようとしていたとき、扉を叩くノック音が寿々花の居る部屋に響いたため、「入ってください。」と言って部屋をノックしていた者に入室を許可した。すると、入室してきたのが件の防衛省から長期出向で刀剣類管理局に来た西田が入室してきたので、寿々花は防衛省のことを警戒すべきだと考えていたときにタイミング良く防衛省の人間が現れたことに少し驚いていた。

「突然申し訳ありません。少しお話したいことがありまして……。」

「……要件は何でしょうか？」

神妙な顔をした西田に話したいことがあると言われた寿々花は態度を一変させ、何か大事な要件だろうと思い、息を整え、集中して聞くことにした。

「……先程、総理の意向によって取り決められた総理の警護に刀使を使うことが決まりましたね。」

「ええ、それが何か？」

「昨今の情勢下を考えますと、刀使のみではなくＳＴＴ隊員といった他の特祭隊の隊員を警護に加えるべきであると愚考しておるのです

が、寿々花さんはいかがお考えでしょうか。」
「……ええ、群馬山中での件と国内に武装勢力がどれほど隠れ潜んでいるのか判明しない以上、それが良いのですが。……西田さん達はそれでよろしくて？」
　寿々花は他の特祭隊の隊員を警護に加えるべきだということは、刀剣類管理局に出向し、特祭隊の隊員として扱われている西田達も含まれる可能性もあることを暗に示唆していた。
「無論、そのつもりで来ました。皆、私の考えに賛同しております。刀使ばかりに矢面に立たせるのはどうか、と言っておりますので、我々も使ってください。……それに、刀剣類管理局が使う独自の戦術データリンクが形になってきましたので、実用テストも兼ねて新型Ｓ装備の配備も可能です。そうすれば、刀使が受ける損害も減らせるはずです。私達は陸自の第二師団第２５普通科連隊に所属しており、その際には普通科の隊員間で情報のやり取りができる戦術データリンクの運用試験にて学んでおり、一般の隊員にも劣らない能力を保有していると自負しております。ですので、その点についてもご考慮頂ければ幸いです。」
　つまり、西田は総理の警護に戦術データリンクの実用テストを名目として、総理の警護を担当する者達に新型Ｓ装備を配備させ、損耗率を可能な限り減らそうとし、そのうえでＲｅｃｓ等で戦術データリンクを使ったことがあるため、自分達も刀使のバックアップか肉壁ぐらいはさせて欲しいと懇願していたのである。
「……分かりました。朱音様に報告してからで宜しいでしょうか？」
　西田の決意を聞いた寿々花は、自分一人の裁量で決められることではないため、局長代理である朱音に話してそれが決定されてからにしてほしいと返答していた。
「……分かりました。宜しくお願いします。」
「ええ、少しお待ちになってください。多分、その話しは通ると思いますので。……それと、命を懸けてくださって、ありがとうございます。」

寿々花が長期出向で来た身である西田にそう言って、礼をすると、西田も頭を下げてから、退室するのであった……。

これで、大人達の都合によって踊らされる彼女達に犠牲が出ることもなく、少しでも負担が減ることを望みながら。

市ヶ谷防衛大臣執務室――――。

長期出向で送り出した自衛官等と寿々花がそんなことを考えていることも露知らず、防衛大臣である中谷と官房長官、タキリヒメ派に属する議員の三人は密談を行っていた。

「総理の殺害予告を理由に、総理の警護を刀使のみとしているのは、昨今の情勢下を鑑みるに私としては些か弱いと思うのです。そちらで総理を説得し、刀使だけでなく他の特祭隊隊員にも警備を加えるべきだと思われるのですが、お二人はいかがお考えでしょうか?」

その内容は、総理の殺害予告を契機とした総理自身の警護に刀使が付くだけでは、不十分として近代兵器で刀使を支援するＳＴＴ（特別機動隊）隊員等も総理の警備に加えるべきであるとタキリヒメ派の議員は提案していた。

「……そう『市ヶ谷の姫』がお考えであるのなら、そちらが総理を説得すれば良いだけではないのかね?」

だが、官房長官は表情を変えずに、タキリヒメ派の議員に自分達でやれば良いのでは?と返していた。

そう返答されたタキリヒメ派の議員は表情を変えることなく淡々と理由を述べていた。

「……確かに、我々が総理に一言伝えるだけで良い話かもしれませんが、現総理は２０年前の相模湾岸大災厄のことを未だに覚えていらっしゃるので、タキリヒメ様を支持している我々では説得に応じて下さ

るかどうかといったところですので、となれば私共よりも信頼の厚い官房長官殿であれば……。」

「なるほど。我々だと、説得に応じやすいという算段か。」

タキリヒメ派の議員は、総理が２０年前の相模湾岸大災厄の悲惨さを知る者であり、その元凶ともいえる大荒魂の分身であるタキリヒメを支持する派閥に居る議員が説得するよりも、総理が最も信頼している官房長官が説得した方が話が通しやすいということを官房長官と中谷に説明していた。

「ええ、荒魂が現れることもなく、年若い少女でもある刀使を前面に出して、大人はその子供達の後ろに隠れるというのは、今の総理と政権与党にとってもマイナスにしかならないでしょう。……次の選挙で大敗を喫してしまうのは避けたい筈ですしね。」

それを聞いた官房長官は、確かにタキリヒメ派の議員が説得するよりも自身が説得した方が良さそうであり、官房長官が属する政権与党にも悪い話ではないと思っていた。

しかし、あることに気付いた官房長官はタキリヒメ派の議員にあることを問うのであった。

「……そうだな。私からそう話せば総理も納得するだろう。……しかし、荒魂が現れることもなくと言うが、荒魂が何処に現れるか分からん以上、そうした措置は別段可笑しな話ではなかろう？それに、そう都合良く現れるかね？荒魂を操ることなどできないのだから。」

そのため、官房長官はタキリヒメ派の議員の腹の中を探るかのように尋ねていた。

「ええ、そうでしょうね。……しかし、何事も無く終わるのは、それはそれで、印象が悪い。だからこそ、貴方方は関東一円に集まるようにしたのでは？それに、荒魂を操れることができるのなら、誰が操ったのか、立証できないのでは？」

官房長官の問い掛けにタキリヒメ派の議員は、半ば荒魂と化している優とタキリヒメの反応を利用して、荒魂を引き寄せていること、タキリヒメは支配下にある荒魂を操ることができると暗に話していた。

「……何の話かは分からないが、君の言う通り、荒魂が人を殺害した場

合はその荒魂を討伐するのが一般的な見解だ。もし、君の飛躍した妄想が現実となったら、誰かが荒魂を操って人を殺した場合、どのように立証すれば良いのだろうな?荒魂は人語を喋れないし人権も無いのだから、裁判も受けれんだろうしな。君も弁護士だったから、そう思うだろう?」

タキリヒメ派の議員の話から、タキリヒメは支配下にある荒魂を操ることができるのだと理解した官房長官は、タキリヒメが支配下にある荒魂を使って総理を襲撃したとしても、タキリヒメが行ったということを立証できないため、咎めることは不可能だと暗に話し、彼等を促すように話していた。

「……なるほど、それは確かに難しそうですね。私としましてはそうならないことを祈るばかりですが……。それで、どう致します?総理に進言して頂けますか?」

タキリヒメ派の議員は意味深にそう言うだけであり、協力するかどうかという意味も兼ねて、総理に特祭隊の隊員も加えるよう進言するか尋ねていた。

「ええ、お引き受けましょう。と言いたいところですが、私が言わなくても刀剣類管理局側からもそのような嘆願が来ているので、問題無くそのようになるでしょう。」

「……それはそれは、管理局も大変人道的で素晴らしいことですね。」

このように、タキリヒメ派と政権与党側は腹の探り合いをしつつ、官房長官とタキリヒメ派の議員の両名は誰にも気付かれることなく協力していた。その証拠にタキリヒメ派は総理の警備状況という情報を官房長官から得ることができたのだから……。

――――こうして、荒魂と人間は総理の暗殺という奇妙な関係で、協力し合うのであった。

自由と平等を謳うが、最も暴力的な少年聖歌隊

マタイによる福音書第７章　人を裁くな　より。

１　人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。

２　あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤（はかり）で量り与えられる。

３　あなたは、兄弟の目にあるおが屑（くず）は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。

４　兄弟に向かって『あなたの目からおが屑（くず）を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。

５　偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。

６　神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるであろう。

新約聖書　新共同訳より。

『――――国会周辺に集まっていた群衆は、日に日に数を増し、参加者は数十万にも上ると言われています。それを受けて政府は国会周辺の警護を現場の刀使のみでは対応しきれないとして、警察にも応援を要請し警備の増強を決定しました。』

西田の懸念通り、国会周辺にて行われていたデモ活動の数は東京８区の報復を望む黒人運動の参加者と現状に不満を抱いている者達が参加し、デモ隊の数は日に日に増え、規模が小さかったデモ活動の参加者は数十万にも上り、政府はそれを受け、警備の増強を決定し、警

察にも増員を派遣するよう要請したと、テレビでは報道されていた。
……しかし、実際のデモの参加者数は三万人ぐらいであり、事実とは違う報道が為されていた。
では何故、事実とは違う報道が為されていたのかと言うと、広告収入の減少に危機感を抱いていたテレビ局と報道番組が衆目を集める報道にしたかったがために数十万と主催者発表のみを報道し、このデモ活動が過熱化するよう誘導していたのである。
要するに、数の多いデモが国会周辺で行われていると報道すれば、過激な報道となり、その過激さによって衆目が集まり、視聴率が上がるという古い考えで行った結果なのである。
しかし、テレビ局と報道番組は理解していなかった。
国会周辺のデモに参加している大半は、報道関係も給料が高く、自分達を見下している存在であると認識し、憎悪を燻ぶらせている者。国もテレビに映るものも自分が育んでくれた社会すらも信じきれなくなった者ということに気付かないままであり、どのような行動を取るのかを……。

世に現れ、人々に牙を向け、災いをもたらし脅かす怪異であるとも言われる荒魂。
しかし、戦争、金融、疫病、政治、経済。……人々に牙を向け、災いをもたらし脅かすのは果たして荒魂だけであろうか？……それとも人間だけであろうか？

西田達は寿々花のお陰で国会周辺の警備の増員として送られることが決まり、甲斐との交渉によって得た（ということになっている。）７３式中型トラックを改造した指揮車両と輸送防護車で国会に来ると、こちらを出迎えるように待っていた国会の警備を担当する若い機動隊員が居たので、西田と沼田は最新情勢と警備の増員として既に着

任している警察との協力関係を得るため、指揮車両から出るのであった。

「お疲れさまでした！早速ではありますが、正面の警備に付いてはもらえないでしょうか!?」

「……了解した。だが、その前に最新情勢を沼田一等陸尉と確認したい。指揮所に案内してくれないか？」

「了解しました！こちらへ。」

そうして、西田と沼田は状況を確認するため、若い機動隊員の案内のお陰で指揮所へ向かうことができた。

その一方、輸送防護車内では、荒魂パーカーにスポーツマスクとグレー系のゴーグルに旧折神家親衛隊の制服を着用し刀使であるかのように変装している優。それと、西田達の長期出向期間が満了し、元の部署へと戻った後も刀剣類管理局が独自で扱えるようデータリンクシステムを学ぶために配置されることになった長船の小川　聡美とそれを監督する西田と沼田は後方に配置される指揮車両で指揮して欲しいと嘆願し、前線へと志願した古河　蛍と勝田　亨、その他五名のＳＴＴ隊員が防弾バイザーと防弾衣という装備を纏いながら輸送防護車内で待機していた。

そして、彼等が使う武器も事前にスキャンイーグルでデモ隊を偵察しており、そこからレーザーの反応と危険な熱源反応が無いこと、銃器類を装備していないことから警棒と〝非致死性兵器〟として、暴動鎮圧用に使われることで有名なゴム弾（スタン弾）が装填されたレミントンＭ８７０に限定されていた。……但し、デモ隊によって壊走した場合は、新型Ｓ装備を纏い、報復されないようにバラクラバで素顔や白いテープで御刀を隠している姫和や沙耶香、そして薫といった一線級の刀使とＳＴＴ隊員達、鏑木一等陸尉が指揮管制を行う後詰の部隊が救援に向かうことになっている。それにもし、デモ隊が隠し持っていた銃で銃撃してきた場合は自衛隊の即応部隊が救援に向かうことにはなっている。

……しかし、彼女等の出番は恐らくは無いだろうと西田は思っていた。

何故なら、新型S装備の試験運用と刀使以外の仕様による各種データの入手という名目で新型S装備を持って来れたため、古河と勝田、それに五名のSTT隊員達も着用することができた。その他にも、機動隊員等もガス筒発射器と盾（ライオットシールド）を装備し、不測の事態に対応しようとしているので、簡単に壊走し、刀使の救援が必要になるぐらい切迫した状況にはならないだろうと、西田はこのとき思っていた。

そんなこともあって、国会周辺はデモ隊の激しい抗議活動もあって非常に物々しい状況下にあった。しかし、勝田はそんな状況下にも関わらず、いやそんな状況下であったなのか、優が緊張していないか気になり、優に話しかけるのであった。

「……な、なあ。緊張するよなあ？」

「？……別に、大丈夫だよ？」

勝田は優を気遣って緊張していないかどうかを尋ねるものの、至ってマイペースで淀みの無い声で答える優の姿に少し奇妙な感じを受けていたが、結局は塩対応で返されたことには変わりないため、どういう話しをすれば良いか迷っていた。

「というより、勝田くんの方が大丈夫なの？声が上擦っているよ？」

「いやいや、武者震いですから！何勘違いしてんの!?」

古河が茶化してきたことに勝田はありがたく思いながら乗っかかり、ノリツッコミの態で返すのであった。

「……？」

しかし、そんなことをしても無反応であったため、勝田はどうすべきか迷うが、それに代わって古河が優にこう言って、不安を取り除こうとしていた。

「まあ何て言うか、……私達がピンチになったら姫和ちゃんや沙耶香ちゃんが新型S装備を纏って助けに来てくれるから、その、怖いと思ったら私の後ろに隠れて待つか、勝田を捨て駒にしても生き残りなさい。それぐらいは良いでしょ？勝田。」

「え？捨て駒前提なの？ヤダなあ、俺も後ろに隠れて安心させるぐらいには活躍しますよ？」

「……まあ、期待して良いの？」
「勿論っすよ！俺だって、栄えある第二師団所属なんですから、守って見せますよ!!」
　そんなやり取りを見た優は、クスッと笑っていたが、
『現在輸送防護車内にて待機中の全隊員に通達。首相が二分後に移動のため、第二警戒態勢に移行。繰り返す、第二警戒態勢に移行。』
　沼田の第二警戒態勢へと移行したという指令に全隊員が集中したせいもあって、誰にも気付かれることは無かった。

　一方、タキリヒメは――――。
「……ね、ねえ。もう終わり？」
「ああ、我は少し用事があるから休んでて良いぞ。」
　タキリヒメの教育に振り回されて息も絶え絶えの美弥は、もう休めるかどうかタキリヒメに尋ねると、休んで良いという返答に驚きながら、
（あっ……、コイツ何かするな。）
　そう感づいていた。そのため美弥は、
「……うん。まあ、遅くならないでよ？私が大変な目に遭うんだから。ポテチとか買って来てよ。」
「ああ、〝美弥〟には迷惑掛けんさ。ポテチも買って来てやる。」
　と言って、国家公務員としてはどうかと思うが、ここ最近の動向を見てタキリヒメが人に迷惑を掛ける人とは思えなかったらしく、外出するのを黙る代わりにポテチを要求するのであった。……それに、
「……そんなことより、歩は居ないかな？」

国会周辺の警備に歩が駆り出されていないことを祈りながら、国会周辺のデモ騒ぎのことについて報じているニュース番組を視聴するのであった。

そして、北京の国務院でも、日本の国会中継を公安部長は固唾を飲んで視ていた。

理由は、国会周辺に集まるデモ隊をソフィアを通じて援助しているため、デモ隊が警察の機動隊と衝突し、流血沙汰となるかどうか、どのような結果となるかを見るために国会中継を視聴していた。

「……さて、どうなることやら。」

一応、デモ隊の中には大使館を通して指示させた留学生をデモ隊に参加させたり、銃を隠し持った工作員をデモ隊に潜入させていた。つまり、デモ隊の参加者数の水増しと潜入させていた工作員による銃声によってデモ隊と機動隊を煽り、国会周辺で流血沙汰の大惨事を引き起こそうとしていた。

（工作員には、総理ではなく機動隊員か刀使を撃てと厳命している。……あの総理にはもうしばらく生きてもらって恥を晒し、国内をグダグダにしてもらわねばならないからな。）

北京に居る公安部長は、そう心の中で呟いていた。

そんな状況下に置かれていることに気付いていない総理は待ち構えていた報道陣を躱し、どうにか内閣総理大臣専用車が待機している所まで来ると、官房長官と中谷に出迎えてくれていたようだった。

「かなり群衆は減りましたが、お気を付けください。」

「申し訳ありません。もう少し警備の増員を増やしたかったのですが、……何分、『市ケ谷の姫』のこともありますので。」

群衆が減ったとはいえ、危険であることに変わりないことを忠告す

る官房長官と警備の増員が上手くいかなかったことを謝罪する中谷。
「何、構わんよ。全ては私が蒔いた種。……それだけだ。」
しかし総理は、中谷と官房長官を責めることなく、非は全て自分にあると言うと、総理は総理大臣専用車へと乗るのであった。
「しかし、この国で暴動とはね……。」
「ご安心ください。総理の身辺は我々が必ずお守りしますので。」
そして、この平和国家と言われていた我が国で暴動が起きるとはと口に出している勧募長官を見た米村　孝子は、総理の身は必ず守ると官房長官に述べていた。そして、孝子は自身の部下と共に総理の警護のために総理が乗る総理大臣専用車へと乗車するのであった。
「ああ、頼むよ……。」
孝子の言葉を聞いた官房長官は、そう返答するだけであった。

そして、官房長官は中谷に命じるのであった。
「……防衛大臣、黒人運動に参加していた者このデモ騒ぎに参加していた者、それにこのデモ騒ぎの背後に居る者を調査しろ。この後の”後始末”が大変だぞ?」
「ご安心をそれについては甲斐と三木が動いております。必ず満足できる結果を残してくれることでしょう。」
「そうだな。総理が我々の仕事が捗りやすいように遺してくれると良いがな。」
粛清する人間のリストを創れと命じながら、総理大臣専用車の後ろ姿を眺める官房長官、公安部長、美弥といった三者はこの国会周辺での出来事を固唾を飲んで視ていたのであった……。
他者の死を望む切望、野に災厄を撒き散らそうとする野望、友人の無事を願う願望……いや、その三つの視線だけでなく、国会の外に蔓延する周囲の羨望と憎悪が入り混じった混沌の場所へ総理は専用車に乗り、正面の門から出て向かうのであった。
「おい!何か出て来たぞ!!」
「首相のヤローが出て来たのか!?」
「そんなこと分かんねーよ!!」

「こんな厳重な警備を敷くなんて、一体何様かしら!?」
「とにかく誰でも良いから、俺達の言い分をぶつけねーと!!」
「ちょっと!押さないでよ!!」
国会周辺に集まっていたデモ隊はそう叫びながら、野次馬や通行人、それと機動隊を押しのけて総理専用車に近付こうとしていたが、機動隊によって阻まれていた。
そんな状況下にデモ隊の一人は苛立ったのか、足元に有った石つぶてを拾うと、総理専用車へと力強く投げるのであった。
「バカヤローーー!この国を潰す気か!!」
それが呼び水となったのか、他のデモ隊の人間も「逃げるなっ!」とか、「ふざけんなっ!」といった罵声を浴びせると共に総理専用車へと石つぶてを憎悪を籠めて投げるのであった。
そのため、総理専用車は何かがぶつかる音が響いたため、総理は恐れ慄くしかなかった。
「なっ、何だ?何が起きているんだ?」
「総理、石が投げられているだけです。ご安心を。」
「そうは言うが……攻撃されているのだろう!?」
総理は慌てているのか、孝子の宥める言葉にも声を荒げながら反論していた。
そんな不安を煽るかの様な発言をしたためかは不明だが、総理が恐れていた事態は現実の物となってしまう。
群衆の数の多さによる圧に負け、機動隊の阻止線を突破し首相が乗る専用車へ一直線に向かうデモ隊の人間が現れ始めたのだ。
「首相が群衆に取り囲まれようとしている。作戦開始。」
スキャンイーグルで状況を見ていた西田は、首相が乗る専用車がデモ隊の人間に襲われている場面を見たため、首相を救援するべく古河と勝田、優を乗せた輸送防護車を向かわせるよう指示していた。
しかし、どうにかして総理を襲おうとするデモ隊の者は火炎瓶を総理専用車の進行方向に投げて、動きを遮ろうとしていた。それを見た機動隊は催涙ガス弾を装填したガス筒発射器の引き金を引き、デモ隊に催涙ガスをお見舞いして抑え込もうとしていたが、それだけで抑え

られるはずもなく、総理専用車に集まるデモ隊の人間の数は増えつつあった。

「首相の乗る群衆の数は増しつつある。……Ｓ３以外の隊員は降車後、首相の救援に向かえ。群衆に怪我を与えないようゴム弾で威嚇を試みよ。」

沼田はＳ３というコールサインを持つ優以外の隊員。つまりは古河と勝田、他五名のＳＴＴ隊員にゴム弾が装填されたレミントンＭ８７０を使って、群衆を威嚇して襲撃を受けている総理の救援に向かえと指示を出していた。

「Ｓ３は上部ハッチから催涙ガス弾で総理専用車に近付く者を阻め。」

そして、優は沼田の命令通り、上部ハッチからガス筒発射器の催涙弾で総理専用車に集まりつつある群衆に向けて龍眼による（どのような弾道を描くかぐらいにしか、使っていない。）狙い撃ちで、増援を阻んだり、総理専用車周辺に催涙ガスを撒いて容易に近付けないようにしていた。

そのため、デモ隊は催涙ガスによりたじろいでしまい、それを好機と捉えた機動隊の反撃を許してしまう。

「今だ！総理の周辺を確保し、救出するぞ!!」

結果、デモ隊は古河と勝田が所属する部隊と機動隊の攻勢に押されてしまう。

「クソ！……そんな奴なんかを守ろうとするなぁっ!!」

それに、反発したデモ隊は機動隊に対して、火炎瓶を投げつけるのであった。そのため、機動隊員の一人が火炎瓶を受け、火だるまとなって悶え苦しんでいた。

それを見た他の機動隊員は、素早く消火器で火を消し、火だるまになった機動隊員を他の隊員が担いで退がるのであった。それを見た勝田は、

（コノヤロォ……!!）

これ以上、犠牲を出さないように奮闘すべきだと自分に言い聞かせると、レミントンＭ８７０の銃口をデモ隊に向けてゴム弾で沈静化させようと引き金を引き、発砲する。

すると、ゴム弾を受けたデモ隊の人間は強烈な痛みに驚き、もがき苦しんでいたため、他のデモ隊の人間に担がれながら、逃げるように後ろへと下がって行く。だが、勝田は自分達を見るデモ隊の人間の目は怯え、恐怖、憎悪といった感情が向けられていたということに印象に残ってしまい、忘れられなかった。そのため勝田は、まるで自分達を化け物のように、荒魂のように見ていたように受け取り、怒りを感じたため、それを振り払うかのように続けざまにデモ隊に向けて発砲していくのであった。

タン、という発砲音の後、フォアエンドを前後させて弾を装填。次の鉄パイプや石つぶてやらを手に持つ標的に向け、タンという音と共に発砲し、フォアエンドを前後させて弾を装填。

といった具合に勝田は同じ行動を三回、いや四回であったかすら判別できないほど、何度も何度も発砲していた。

何故なら、どれだけ撃っても、幾らでもデモ隊の人間が何処からか湧いて出て来るため、危機的な状況であることには変わらないこと、そのうえ鬼気迫る表情で何度でも迫って来るデモ隊の人間に勝田は火炎瓶によって火だるまとなった機動隊員のことを思い出してしまう。

（く、来るなぁっ……!!）

その結果、勝田は怯え、徐々に混乱し始めるのであった。

「S1、S2、S4、S6の四名のノルアドレナリン値が上昇。」

「……動揺しているのか。」

しかし、指揮所に居る西田達は、S1というコールサインの古河とS2がコールサインの勝田、それに他二名のSTT隊員が新型S装備に搭載されている体温といった身体機能を計測する各部位のセンサーを通じて、彼等の情緒に不安が生じ始めていることに気付いてしまう。

「S1、S2、S4、S6、機動隊に応援を要請した。それまで持ち堪えてくれ。」

そのため、西田は努めて冷静な声で聞き取りやすいように、古河達に増援が来るまで持ち堪えて欲しいと指示を出すのであった。

「!……いえ、こちらでどうにかします!!」

しかし、勝田は西田の指示で火だるまになった機動隊員のことを思い出してしまったため、若干声を上擦らせながらも増援の機動隊員に被害が及ばないよう、自分の力だけでどうにかしようと躍起になってしまう。

それに、西田達を後方の指揮車両にて指揮してもらい、若い古河と共に前線へと志願したのは自分自身である以上、それに自分が引いてしまえば更なる犠牲が出るという考えに陥ってしまっていた。

――――そのため、よく見ずにデモ隊に向けて発砲してしまい、火炎瓶を持った者を撃ち、その者が火炎瓶を落としてしまったことにより、その火炎瓶を持った者の付近に居た女性を火だるまにしてしまう。

蠅たたきによる打楽器狂奏曲

悲劇やら闘牛やら磔（はりつけ）の刑やらを見て、人間はこれまで地上で最大の快感を味わってきた。人間が地獄を考えだしたとき、どうだろう、それは地上における人間の天国ではなかったか？

偉大な人間が苦痛の叫びをあげると、――――小さな人間がたちまちよりあつまってくる。そして快感にうずうずして、舌なめずりする。しかも、それをみずから「同情」と称する。

のがれなさい、あなたの孤独のなかへ！　あなたは、このちっぽけな、みじめな者どもに、あまりに近づいて生きてきた。目に見えぬ彼らの復讐からのがれなさい！　あなたに対して、かれらが加えるものは復讐以外の何物でもない。かれらにむかって、もはや腕を上げることをやめなさい！かれらは無数なのだ。蠅たたきになるのは、あなたの運命ではない。

――――ニーチェの著書『ツァラトゥストラはこう言った』から抜粋。

他の機動隊員が犠牲にならないようにするため焦った勝田は、火炎瓶を持った者を撃ち、その者が火炎瓶を落としてしまったことにより、その火炎瓶を持った者の付近に居た女性は火だるまとなってしまう。

「あっ！」

勝田は女性が苦痛の叫び声を上げながら火だるまとなっている様を見て、つい声を上げてしまい、寒気を感じるほどの罪悪感を抱くのであった。

自分が直接撃ったのではない。だが、彼にとっては人を殺めたとい

う感覚を抱かせるには充分な出来事でもあった。
「S2、心拍数が220に上昇。パニック障害の進行が止まりません。……あっ、S1とS6、いえ、S4も同様に?」
聡美は、勝田以外にもパニック障害が出始めた者が急に続出したことに動揺するしかなかった。
では何故、コールサインがS1の古河、それとSTT隊員のS6とS4もパニック障害が生じているかと言うと、この三名も勝田と同様に増援の機動隊員と刀使達に被害が及ばないよう自分の力だけでどうにかしようと躍起になっていたことと自分が後ろに引いてしまえば更なる犠牲が出るという考えに陥っていたため、視界が狭まり、よく見ずに勝田と同様に古河もデモ隊に向けてゴム弾を発砲。結果、デモの参加者らしき少女に向けて撃ってしまい、その少女はゴム弾を頭部に受け、事切れたかのように地面に倒れたまま動かなくなり、デモの参加者らしき男性に担がれながら、後ろに下がって行ったため、その少女の安否が不明だった。そのため、誤って少女を殺してしまったのではないのかという罪悪感から、
(……あの子は、無事なのか?私は誤って人を殺したんじゃあ!?)
古河は激しく動揺してしまったのである。
(……あの人はデモ参加者だったのか?今のは一般の人じゃないのか?……分からない。分からない!?)(俺は……オレは何てことを……怒りの感情に流されて、人を殺したんじゃないのか!?)
そのうえ、コールサインがS6とS4のSTT隊員二名もデモの参加者らしき女性や老人を誤って急所に当ててしまったため、勝田と古河と同様に罪悪感に苛まれ、パニック障害を引き起こしていた。
しかも聡美は、この総理の護衛任務に使うレミントンM870という武器には、殺傷力の無い〝非致死性兵器〟として暴動鎮圧等で使われている有名なゴム弾が装填されているので、殺人といったことから生ずる忌避感から来るストレスは無いと説明されていた。
しかし、実際はゴム弾は当たり所によっては後遺症が残ったり、死亡した事例が幾つも有ったりするので、最近は〝非致死性〟ではなく〝低致死性〟という言葉に置き換えられるようになっているのだが、

そういったことを聡美は知らなかったのである。（それだけでなく、先程上部ハッチ上から優が古河と勝田の援護に使っているガス筒発射器に装填されている催涙ガス弾にも、弾を頭部といった急所に当ててしまい死亡させてしまった事例がある。）

何故、そのようなことになっているかというと、ゴム弾であっても当たり所が悪ければ死傷すると述べてしまえば、デモ隊に死傷者が出ることによって国内世論が敵に回る事態を避けたかった上層部がゴム弾すら装備することを禁じるかもしれなかったためであり、そうなってしまえばデモ隊との衝突は熾烈極まるものとなる可能性が高かったからである。

そんな理由もあって、古河と勝田とＳＴＴ隊員達はテロ対策の訓練を受けており、そういったストレスは受けないと伝えられていたこと、そのうえデモに参加していた女性が仲間の火炎瓶を受け火だるまとなったり、ゴム弾が撃たれ倒れたままになっている人が居る状況下であるにも関わらず、古河達と同じく前線に居るＳ３こと優の心拍数の数値が一つも変動しなかったことで、古河と勝田とＳＴＴ隊員達のみが何故パニック障害を起こしているのか理解できなかった。

そのため、聡美はパニック障害を起こした理由が分からず、動揺するしかなかったのである。しかし、状況は一刻一刻と移り変わっていくのであった。

「本部より通達。警護対象者に接近する車両在りとのことです。」

「……分かった。沼田、指揮車を頼む。」

西田は、沼田に指揮車のことを任せると言って、対人狙撃銃を持って外へ出ようとしていた。それを見た聡美は、西田が警護対象者に接近する車を銃弾で排除しようとする。

「西田さん、待ってください!!」

「止めるな。……私の部下が好奇の目に晒されるよりはマシだ！」

しかし西田は、聡美の制止も聞かず、警備対象者である総理に接近する車を銃弾で排除しようとする。

無論、西田は不審車を銃弾で排除したことに関することで上層部に糾弾された場合、刀使も同席して警護している警護対象者が乗る車に

近付き、自爆行為で総理を殺害する恐れのある不審車両を止めるために行ったことであると反論し、加えてそのような場所へ子供である刀使を送り、矢面に立たせたことに対する猛抗議を行おうという腹積もりであった。しかし、一人の人間を銃殺したこと、警備で流血沙汰を起こしたことは事実として変わりないので、自らがその処分を受ける積もりであり、部下にやらせようとは思わなかった。

『要らないよ。』

しかし、優の通信の声が聞こえ、もしやと思い西田は指揮車両内に戻って、マイクを取ると、優の行動を止めようとしていた。

「S3、直ちに戻れ！繰り返す、上部ハッチに直ちに戻れ！」

西田の懸念通り、優は上部ハッチから飛び降りて、総理と孝子達が乗る専用車に突進しようとする不審車の元へと向かって行くところを西田は遠目で見かけたため、優に危険が及ぶ前に不審車の排除を試みようとするが、射線上に優が重なってしまうため、引き金を引くことができなかった。

そして、西田は優の後ろ姿を遠巻きに見ながら、自分の不甲斐なさと至らなさに憤っていた。

彼は、古河と勝田、増援として来ているＳＴＴ隊員の実力があれば、デモ隊をどうにかできるだろうと踏んでいたため、上からこの警護に参加させるよう圧力を掛けられていた優を古河達の援護と称して、デモ隊との衝突を可能な限り避けようと配置していたのだが、結果はどうだ。

（……無念だっ!!）

その後の結果は、西田でも容易に想像ができる。

優は未来視としての能力を有する龍眼で不審車の移動先を予測し、腰に差してある短刀の御刀で隠世の力を引き出して使える迅移で移動、八幡力とノロの力で強化した身体能力で車の横っ腹を長巻の様に改造した鬼丸国綱で殴り飛ばすことによって、車を横転させて力ずくで停止させていた。

……そうなれば、正体を隠すために顔をスポーツマスクとグレー系のゴーグルで顔を隠し、折神家親衛隊の制服を着用して変装している

優が刀使が持つ御刀で車を引き止めたことになり、第三者の目で見れば刀使が車両を御刀で引き止めたということになるのである。
そのため、車を力技で止めた優の姿を見たデモ隊は、
「…ば、化け物だぁっ!!」
「助けてぇっ!殺される!!」
と口々に優は怪物で自分達はその被害者であるかのように振舞い、騒ぐのであった。
だが、一部のデモ活動に熱心な者と刀使という存在を理解していない外国籍のデモ参加者はそれにたじろぐことはなく、鉄パイプやら石やらを手に持って襲いかかって来るが、優は冷静に、動じることすらなくゴム弾が装填されたレミントンＭ８７０で自分に襲いかかって来るデモ参加者を容易く打ち倒すが、中には怒りで興奮しているせいか、ゴム弾に撃たれても尚も立ち向かおうとする者が居た。だが、優はそんな者が相手でも、レミントンＭ８７０のストックで顎や腹を殴り、倒れて蹲ったときは後頭部を何度も何度も殴打して気絶させていた。
そうして優は、何事もなく警護対象者が乗る総理専用車を移動させて逃がすために、横転された車で構築されたバリケードを破壊しに向かうのであった。
「うっ、うわあああ!!」
デモ参加者達は、優がゴム弾を撃った後も銃のストックで何度も気絶するまで殴ったことにより、頭部に血を流しながら倒れ伏すデモ参加者の姿を見て、優が人を殺したように見えたため、人殺しが近付いて来たと思い、我先にと逃げ出す者が続出するのであった。
それを見た優は、丁度良いと思いノロと八幡力の力を加えた鬼丸国綱で思いっきり振り下ろすと大きな破砕音と共に車を跳ね飛ばし、バリケードを力ずくで撤去すると、総理専用車が通れるほどの道を作るのであった。
「今の内に!!」
孝子は総理専用車の運転手にそう命じると、運転主は優がバリケードを力ずくで撤去して作った道に向かい、この戦場のような場所から

早く逃れようとしていた。
――――しかし、何かが炸裂する音が辺りに響いた瞬間、総理専用車の窓に穴とヒビがデコレーションされると、総理の身体にも風穴を開けるのであった。
それに気付いた総理は銃撃されたのだと理解し、命の危機を感じたのか息を呑み、大量の汗と朱い血が流れると自身の無事をひたすら小声で祈り続けるのみであった。
「火点反応！総理が狙撃された模様!!ＵＡＶが捉えた火点反応の位置情報を送る!!」
ＵＡＶことスキャンイーグルが捉えた火点反応の位置情報を新型Ｓ装備に伝送したという沼田の通達に反応した西田は、古河と勝田に指示を飛ばすのであった。
「古河、勝田。お前達の近くに居る狙撃手の排除を急げ！」
西田の指示にハッとなった古河と勝田は、沼田が送った火点反応の位置情報が新型Ｓ装備のバイザーに表示されていることに気付き、それを頼りに標準を合わせると、レミントンＭ８７０の引き金を引くのであった。
タンッという発砲音を響かせると共に、総理専用車を狙撃した男の腹に当て、痛みにもだえさせることでどうにか銃撃することができないようにしていた。

一方、官房長官と中谷はデモ隊と機動隊の衝突を国会にあるテレビで観ていた。
「……どうだ？」
「いえ、確認を取れていませんので、しばらく。」
総理の安否を気にしているかのように取れる発言ではあるが、内心は総理の死を望んでいた。
何故なら、総理がデモ隊の手に掛かり殺害されたとなれば、デモ隊を反社会的勢力として糾弾し、それを名目とした新たなスパイ防止法案とそれに付随して自衛隊と警察、刀剣類管理局の強化を図っていたからである。

そんな理由もあって、官房長官と中谷は総理の死を望んでいたので、三木と甲斐に指示していたのである。

その一方で、国会周辺の生中継を通じて、北京に居る公安部長は総理が乗る総理専用車に銃撃が加えられたことに仰天していた。

「おいっ！銃撃をするなと伝えろ、今直ぐっ!!」

何故なら、彼としては失言をしてくれる今の総理が生きていてくれた方が何かと自国にとって都合が良いので、殺害してしまえば公安部長が支援しているデモ隊が総理殺害を行った組織として糾弾され、日本の公安に捜査されることとなり、その過程でもし自分と国会周辺で騒いでいるデモ隊との繋がりが見つかってしまえば、本国は自分一人の暴走による産物として処分し、最悪党籍剥奪され中国社会から排除されるかもしれないからである。

そういった理由もあり、公安部長は冷静さを欠き、感情的となって銃撃を止めるようにと部下に激を飛ばすのであった。

総理を生かそうとする公安部長。

総理を殺そうとする官房長官。

国内情勢を乱そうとする者が一人の命を慮り、国内情勢を安定させようとする者が一人の命を捨てようとしていたという奇妙な事が起きていた。

（歩は？……此処じゃよく見えないなぁ。……でも、皆ケガしませんように、何て思うのはちょっと、都合よすぎるかな？私、一番安全なところに居るし……。）

その一方で、友人の安否を気にし、皆の無事を祈るが一番安全なところに居ることに後ろめたさを感じる美弥も居た。

しかし、総理を生かそうとする公安部長を嘲笑い、美弥を仰天させるかのような事態が起きる。

総理専用車に近付くラジコン車に誰も気付くことがなかったため、そのラジコン車は総理専用車のタイヤにぶつかることで内蔵されていた爆薬を起爆させ、総理専用車のタイヤを潰すことができた。そのため、総理専用車は操縦が急に困難となり、電柱に追突し、その衝撃

で窓ガラスが全て割れてしまうほどの事故を引き起こしてしまう。
「孝子!!孝子っ!!?」
孝子も警護として同乗する総理専用車が電柱に追突してしまったのを国会周辺の監視をしていたＵＡＶのスキャンイーグルが捉え、その一部始終の映像を指揮車にあるモニターに送られ、映されていたため、それを観ていた聡美は思わず通信機のマイクに自らの大声をぶつけるかのように孝子の無事を祈りながら叫ぶのであった。
その祈りが通じたのか、孝子が総理専用車から這い出てくるのであった。しかし、それは御伽噺に出てくるまるで創られたかのような幸福な結末が体現するものではなく、次の災厄を告げるものであった。
「誰か救急車!救急車を呼んでくれぇっ!!総理が、総理と私の部下がーーっ!!!」
何故なら、頭から血を流している孝子が、孝子の部下である刀使一名が割れたガラスで負傷。護衛対象である総理も銃と割れたガラスで大きく負傷し、危篤状態であるという悲惨な状況を告げるものであったからだ。
孝子の声を通信機越しから聴いた聡美は大慌てで、西田に救急車を呼ぶように叫んでしまった。
「西田さんっ!総理が!!」「総理専用車に近付く者が居る!荒魂パーカーを羽織っている者だ!!」
「分かった。指揮車も前に出るぞ!全隊員は総理の救援に向かえ!!」
聡美が西田に総理と孝子達を救援するべく救急車を呼んでほしいと訴えると同時に、沼田は荒魂パーカーを羽織り、総理専用車に近付く不審者を排除しろと勝田と古河達に指示していた。
それを同時に聞いた西田は、負傷している総理を医療設備の有る場所へと運ぶため、西田が持つ対人狙撃銃の射撃可能範囲を広げ、輸送防護車の援護をするため、指揮車を前に出そうとしていた。そして、総理の救援のため、勝田と古河やＳＴＴ隊員等に総理と孝子達の元へ向かわせようとしていた。
「俺は、荒魂ダァーーーー!!!」

その荒魂パーカーを羽織る不審者はそのようなことを口走りながら、自爆ベストを身に纏いながら総理専用車へと突貫しようとするが、その不審者は総理専用車の元まで到達し自爆することもできず、西田達も驚くことになる。

何故なら、何者かがその不審者に突っ込んで上手く抑え込んだ後に自爆させたため、周囲に被害が及ぶことはなかった。そして、その不審者を周囲の被害も無く上手く抑え込んだのがタキリヒメであったため、西田達は驚くのであった。

「双方、矛を収めーーーーい!!我はタキリヒメ!巷では大荒魂と言われている者なり!!!」

そして、両手を広げ、一際大きな声で宣言するタキリヒメ。

それを見た北京に居る公安部長、官房長官、美弥の三人は知らないが、揃って大きな声で叫んでいた。

「「なっ、何しとんじゃアイツはーーーーっ!!!!?」」

総理を生かそうとする公安部長。

総理を殺そうとする官房長官。

被害が大きくならないことを祈る美弥。

バラバラだった三人は、このときばかりは気持ちが一つとなるのであった。

そんなことが起きていることに気付いていないタキリヒメは、尚も口上を述べていた。

「今回の騒ぎ、一部始終を見させてもらった!!今回、我は秩序を乱す不届き者は敵と見なし、成敗する!!」

タキリヒメの口上に唖然とする古河と勝田。そのため、優は通信機で西田達に次の指示を仰ぐのであった。

「ねえ、アレどうしたら良いの?」

『……とりあえず、タキリヒメが騒いで注目を集めているのはチャンスだ。タキリヒメには手を出さず、全隊員は今の内に総理の救援に向かえ。救援に来た輸送防護車は総理を医療設備の有る施設まで護送する手段として使え。』

西田の指示でハッとなった勝田と古河は指示通りに輸送防護車を総理専用車の前まで誘導し、その車内へと総理を運ぶのであった。

「我が剣の錆となりたい者は来るが良い!!幾らでも相手になってやろう!!」

そして、輸送防護車の前には、先程の自爆攻撃を受けても物理的な損傷が見受けられないタキリヒメを見て、石ころや棒きれ、火炎瓶では敵わないと判断したのか、逃げ出す者が続々と出始め、デモ隊は総崩れとなったのである。

こうして西田達はタキリヒメの突然の登場と救援のお陰で総理を医療設備の有る病院へと、どうにか移送することができたものの、総理は銃撃と割れた窓ガラスによって重傷を負っていたため、程なくして息を引き取ることとなる。

これにより、中谷と官房長官の狙い通り、今回の国会周辺の騒ぎはデモ隊に責があるとし、そのデモ隊等を総理狙撃事件の主犯として糾弾。それを契機として副総理が緊急事態宣言を発令し、自衛隊と警察の強化、並びに刀剣類管理局内に臨時の特務警備隊と特別遊撃隊の設立が決定され、特務警備隊には獅童　真希と此花　寿々花の二名が配属されることとなる。それに伴い、優が親衛隊の制服を身に纏いながらデモ隊の人間に危害を加えたことにより、真希と寿々花の二人は親衛隊の制服から特務警備隊の制服へと変わることになり、特別遊撃隊には可奈美達が配属されることとなり、それに伴い特別任務部隊は解隊される。

そのうえ、緊急事態宣言を活用し、特務警備隊も綾小路武芸学舎とデモに参加した者達への監視の強化及び、イチキシマヒメと皐月　夜見の捜索範囲の拡大をすることが可能となったのである。

結果として、自衛隊と警察は権限を拡大することができ、刀剣類管理局も防諜といった能力を得ることができたのであった。

そのため、北京に居る公安部長の工作活動は、敵国の防諜関係と警備力が強化されるという結果になってしまったこと、他国の代表を殺害するような組織と交流を持っていたということに関する責を裸官や公安部長を引きずり降ろそうと画策する者達等に問われてしまい、その責を取るべく公安部長の席を部下に譲ることとなってしまった。

「……お疲れさまです。」

「私のような人間を出迎えるものではないぞ?」

「いえ、私は今まで公安部長にお世話になりましたから。」

「……そうか。私は良い部下に恵まれたな。」

公安部長は少しはにかんだ表情をしながら、そう答えていた。良い部下を持ったと……。

「君が後任で良かった。……売国奴共に制裁を加えられなかったことは残念だ。君も気を付けたまえ。」

「ハッ!……了解しました。」

「……そろそろ飛行機の便が出発しそうだ。済まないが、この国のことを頼む。」

公安部長は、部下に海外に居る妻の元へと高飛びするための飛行機に乗るということを言うと、部下に見送られながら退室するのであった。

……それを見届けた後、公安部長の部下は、

「……はい、私です。この度は公安部長の役職を私に推挙してくださったことを感謝します。……ええ、公安部長は外に出ました。警備の者は付けておりません。ええ、今後とも私を宜しくお願い致します。……それと、公安部長の奥方様は?……ああ、逃亡先の海外で議員の男とデキていると、……ハハッ、それは良い話ですね。それをネタに使えば男の方もこちらの意向を無視することはできないでしょうし。……はい、今後も我が国の発展のために、ですな。」

携帯電話でそう話していた。

――――その後、公安部長は自殺することになるのであった。

こうして、公安部長の部下は、公安部長の末路が汪のようだったな

とほくそ笑みながら、公安部長という役職と新たなスパイ候補を得るのであった。

――――そして、タキリヒメは、

「それではご紹介しましょう。今、話題沸騰中の人、と言って良いのかは分かりませんが、それだけで充分に分かりますね？それでは皆さん、拍手でお迎え致しましょう。タキリヒメさんのご登場です！」

国会周辺にて口上を述べ、総理の救援を行っていたところを映した動画を動画共有サービスにてタキリヒメ派の人間が配信したところ、暴力で国を変えようとするデモ隊から民主主義を守った立役者であり、暴力的なデモ隊や黒人運動とは違って良識の有る荒魂として有名人になるのであった。その後はバラエティやトークといったあらゆる番組に呼ばれ、自らの持論を語ったことで更に支持を集め、一躍人気者となることになる。

荒魂達のカーニバル

――そこかしこのテレビに、動画共有サービス上にもタキリヒメが映る理由。

それは、国会周辺の騒ぎ以降、総理を襲撃したデモ隊とそれに協力的であった黒人運動と一部の与野党の人間を国内外の大多数の者は非難していた。

理由は、一国の代表である総理を銃や爆発物等を使って襲撃し、流血沙汰を起こしたことで、最早差別是正や刀使の待遇改善を訴える組織として見る者は居らず、ただの反社会的勢力、所謂テロリストとして見る者しかいなかったのである。

そんな世論が浸透していく中、国会周辺の騒ぎにおいてタキリヒメは負傷した総理を救援するべく、派手な口上と共に一人で立ちはだかり、国会周辺で暴動を起こすデモ隊を抑え込もうとしたことでタキリヒメのことを民衆は〝正義の味方〟か〝民主主義の守護者〟という評価をしたのである。

そのタキリヒメの人気に目を付けたテレビ各局は、その人気をあやかって失いかけている視聴率を取り戻そうとしていたのである。

――そのうえ、

「それではご紹介しましょう。今、話題沸騰中の人、と言って良いのかは分かりませんが、それだけで充分に分かりますね？それでは皆さん、拍手でお迎え致しましょう。タキリヒメさんのご登場です！」

最初に出た視聴者参加型のトーク番組にて大きな反響を呼んだため、一躍人気者となるのである。

無論、この番組のオファーを受けた理由は放送時間が夜の生放送であり、視聴者は日中の労働で疲れて視聴することが予想されるため、それによって、夕暮れ時に疲れていて思考力や判断力が鈍るという『黄昏効果』（今の政治家やビジネスマンにも使われている手法であ

る。）を利用して、大衆を〝説得〟しようとしたからというのも理由の一つである。

そんな中、司会の進行に合わせて登場し、観客席に居てざわつく視聴者を尻目に、自己紹介のために壇上に立つタキリヒメは静かに沈黙し、ただ棒のように直立不動で立っていた。

「……。」

そして、この番組のオファーを受けたもう一つの理由は、荒魂であるタキリヒメがテレビの番組に本当に出て来たことに興奮している視聴者が番組カメラの先にも居ることも考慮し、この視聴者参加型の形式を採っている番組のオファーを受けたのである。そうすれば、この番組を観ている視聴者の仕草や表情が番組の観客席という近くの場所で見ることができるうえ、小声で「あの目隠しを装備してて前が見えるのか？」「本当に人間のようだ。」といった会話や考えに夢中となっている様を近くで見ることができ、その小声で話したり、別のことで考えていることを止め、黙ってこちらに集中し始めたところを見計らうことが容易となり、こちらの話を集中して聞いてもらえるタイミングが見計らえると考えていたのである。

……要は、市ヶ谷で可奈美達にやったことと同じようなことをするのである。

そうして、長く沈黙していたせいか、緊張して喋れないのであろうと判断した番組のスタッフがタキリヒメに話して欲しい内容のテロップを見せ始めていた。

（……そろそろか、全てが揃った。）

しかし、小声で話している声がポツポツと無くなり始めたことと話題にする物が揃ったと判断したタキリヒメは、そろそろ良いタイミングであろうと判断し、自身と観客席に居る視聴者の沈黙によって静寂と化した番組に、低く、それでいて響き渡るかのような声で聴衆に語り始めた。

「……今、そこに、手に紙の板を掲げ、その紙の板には私が話すべき内容が書かれている。……どうやら、その内容は政府と外国人を揶揄する内容ばかりのようだ。しかし、もし政府や外国人を糾弾したいの

であれば、荒魂に尋ねるのか?むしろ、荒魂が出て来たら刀使を呼ぶのが一般的だと思うが?」

タキリヒメのジョークに、観客席に居る視聴者は笑うのであった。

「この国の政治家や企業の役員は、霧の中で迷うようになると、……荒魂か余所の国の人間に頼るのか?」

そうして、軽い笑いが終わった後、タキリヒメは番組の外に居る視聴者にも、観客席に居る視聴者にも問うていた。

この国は何時から方針が定まらなくなったとき、他所の国の人間や荒魂に頼るほど弱くなったのかと……。

急に荒魂のタキリヒメから、誰も予想できなかったことを尋ねられ、次は何を言い出すのか気になってしまい、誰もがタキリヒメに集中して、話を聞き始めるのであった。

「我が見たテレビは、……これほど薄い。我が知っていたブラウン管のテレビよりも遥かに薄いのだ……!」

そして、タキリヒメは次に今のテレビは自分が知っているブラウン管のテレビよりも遥かに薄くなっていると言いながら、親指と人差し指の間を狭くして、手の動作で分かり易く、且つ語気を強めてどれほど薄いテレビが出たかを力説していた。

「人類の発明の発展には驚くべきものだ。その証拠に、折神家はストームアーマーというSF小説でしか聞いたことがないパワードスーツを造っておる。……我がこの世に現れてからは、人類の発展には驚かされてばかりだ。だが、驚くべき発展を遂げたテレビに映るものの中身は何だ?……ハッキリ言おう、クズだ!しかし、国民にもささやかな愉しみが必要であることは事実であるから、コメディーや異世界や過去に行くことで活躍する小噺が、テレビだけでなく街の本屋の棚に有る。だが、今はそれに頼らざるを得ないほどに酷い状態なのか?それほどまでにこの世の中は過酷な時代なのか!?」

タキリヒメは更に問うていた。それほどになるまで今の国は酷い状態なのかと。

「此処はどんな国だ!?……子供は貧しく、老人も貧しく、失業者に溢れている!出生率は地を這うかのようだ!!だが、無理も無い話だ!!一体

誰が、コメディーや本に書かれている異世界よりも酷いこの国で、子供を授かり、産み育てたいと思う!!」

タキリヒメは力説する。巷に溢れるコメディーや過去にタイムスリップして活躍する小噺、異世界に転生や転移する物よりも遥かに酷いこの国で誰が子供を産み、育てたいのかと、語気を更に強めて話していた。

……一体誰がこの国で子供を産み、育てたいのかと。

「この国は今、奈落にまっしぐらだが、皆その事に気付いていない！それは国民にささやかな愉しみを与えるコメディーや異世界転生物、そして驚くべき発展を遂げたテレビでは、……奈落の底が見えないからだ!!」

タキリヒメは力説する。この国は今も奈落へと堕ち続けており、その事実は人々を愉しませるコメディーにも、異世界に行く小噺にも、超極薄となるぐらいに驚くべき発展を遂げたテレビですら、タキリヒメが言う〝奈落の底〟は見えないほど深いのだと話していた。

「精々テレビで見えてくるのは、……他人の不倫話か韓流ドラマ！」

タキリヒメのちょっとしたジョークにまたも聴衆は笑うのであった。……確かに、ここ最近はそんなものばかりであると思いながら、タキリヒメという荒魂は小粋なジョークを何度も飛ばせるぐらいにお茶目な部分が有るのだろうと聴衆は思ってしまい、タキリヒメに対して親近感を抱くのであった。

……しかし、タキリヒメは韓流といった物を毛嫌いしている者が多いことは既にリサーチ済みであり、人種対立を煽ることで、荒魂に対する忌避感を薄めると同時に古波蔵　エレンといったハーフの人間が現地の者との間に諍いを生じさせることで、刀剣類管理局といった政府機関を弱体化、または人同士による争いを更に激化させようと画策していたことには誰も気付くことはなかった。

「故に、我はこの他者に縋り続ける弱体化したテレビに、いやこの社会全体に対して挑み続ける！それ故に、我は相模湾岸大災厄で大暴れしかせず、人を理解することをせず、ただ暴れるだけで何も産み出さなかった愚かな大荒魂とは違う、霧に迷う者を導く者として〟タキリヒ

メ〟と名乗ったのだ!!」
　タキリヒメは熱を籠めて語る――――。
「ただ、〟奈落〟という霧を知り、迷わせるためではない!容赦なく襲い掛かって来る〟奈落〟という名の霧に立ち向かい、その霧を切り払う力を得るためだ!!」
　その瞬間に、聴衆は真剣な眼差しでタキリヒメを見ていた。
　何故自分のことをタキリヒメと名乗るのか、何故霧に迷う者を導く者と言うのかを話すタキリヒメに集中して、ただ静かに聴いていた。
「故に、我は挑み続ける!!何処の誰かに穢れの有る荒魂と蔑まれようとも、我は自らの手で権利を勝ち取り、この社会の一員となった暁には、この社会を良くするまで挑み続けるっ!!抗い続ける!!何故なら我は、霧に迷う者を導く〝タキリヒメ〟であり、その霧を切り払い!!荒魂と人間が共存し、その両者が活躍できる強固な社会を築き上げるからである!!」
　タキリヒメの演説を聞いていた聴衆は、心の中で大きな熱を感じ始め、惹かれ始めていた。
「それ故に、我は先ずテレビに反撃を開始する!!現在、２０時４５分、これより我は反撃を開始する!!」
　タキリヒメの熱の籠った演説を聴き終えた聴衆は、大歓声で応えるのであった。
　この荒魂、いやタキリヒメなら、子供と老人の貧困化、そして失業者に溢れているという希望の無い霧に包まれた社会を切り払ってくれるだろうと期待したのである。
　そして、タキリヒメの演説の一部始終を観ていた番組プロデューサーは、タキリヒメに感動し、熱くなりながらこう話すのであった。
「ありがとう!タキリヒメさんのお陰で我が局は救われる!!ついては朝から晩まで我が局の番組に出てはくれないだろうか!?」
　それだけでなく、タキリヒメの話しを聞いた番組プロデューサーは、
（……上の意向で政府を批判する番組ばかりを作り、何も感じることなくただ惰性で放映していたが今は違う!……この人なら、この人な

ら本当の意味で世の中を変えてくれる!この見えない霧に覆われている国を救ってくれる!!……若い頃、報道記者として燃えていた自分を思い出すほどの熱い演説であった!!)

若い頃の熱意のみで突っ走っていた自分を思い出させてくれたタキリヒメに感謝し、そして全面的に協力することを決意していた。

……タキリヒメがこの番組プロデューサーとスタッフの過去、経歴、思想から趣味嗜好といったことを部下に調べ上げてさせていることに気付くこともなく。

その後も、全面的に協力してくれる番組プロデューサーの口添えのお陰で他のトーク番組やバラエティ番組に朝から晩まで呼ばれることとなる。

その大歓声の声と番組プロデューサーとスタッフの熱い視線を感じながら、タキリヒメがほくそ笑んでいたことに誰一人として気付くこともなかった。

「貴女以外にも荒魂が存在して、それらが刀使に討伐されているという現状についてはどう思われますか?」

そして、別のバラエティ番組で司会者にこう尋ねられたタキリヒメは、

「では聞くが、人間が秋葉原や池袋で無差別殺人を行った場合は警察を呼んで逮捕してもらい、裁判所で公平に、且つ厳罰に処されることで秩序が保たれることを望んでいるであろう?刀使が荒魂を討伐するのは、秩序を保つために無秩序に暴れる者を討伐しているに過ぎないのだから、我が荒魂討伐ご苦労さんと言うのは当然のことであり、我が荒魂討伐を辞めろというのは筋違いと思うのだが、……違うのか?」

人が白昼堂々と無差別殺人を行った場合は、警察官が取り押さえて逮捕し、裁判所で公平且つ、厳罰に処することで秩序有る社会を形成していることと同じく、無秩序に暴れる荒魂を討伐して秩序有る社会を形成していると説明し、刀使が市中を暴れる荒魂を討伐することは

当然のことであり、何も可笑しなことではないとタキリヒメは話していた。

無論、荒魂であるタキリヒメは、荒魂である自分自身が荒魂討伐を否定してしまえば、強固な支持を得られないということを理解しているからこのような発言をしただけである。

「しかしだ。昨今の刀剣類管理局はノロを地元の社で分祀するということにしておるそうだが、今のデフレで苦しんでおる経済状況と社を維持するために税金が使われていることを照らし合わせて鑑みて見れば分かることだが、いずれは過去に起きた経済的な理由から社の数を減らそうという状況へと戻るのは明白であろう。……ノロを扱っている以上、その社にも警備は必要となるだろうから、これからは増税に次ぐ増税が予想される。それならば、いっそのこと我としてはノロが結合し疑似生物となった荒魂を人の居ない離島に配備して、古代朝廷が行った防人のように活躍させることが適当であると思っておる。」

タキリヒメは刀剣類管理局が行っている社の分祀をこの国の財政状況を理由に批判し、疑似生物化した荒魂を人の居ない離島に配備（タキリヒメがこう表現した理由は、荒魂を戦力化することができれば他国の軍隊は容易にこの国に攻め込めないと暗に示し、荒魂は必要不可欠な存在だという認識を植え付けようとしていたのである。）するのが適当であると答えていた。

「……それにだ。荒魂はノロが結合し、疑似生命体となったものであり、この国のノロの総量も限られておる。その証拠に関東を中心に頻発する荒魂事件は、鎌倉で起きた特別危険廃棄物の大量漏洩、漏出が原因であると聞く。……それらを突き詰めれば、荒魂を離島に配備するだけで頻発する荒魂事件をある程度は抑え込むことはできる筈だ。更に言うと、２０年前の大災厄で現れた大荒魂は広域に及ぶ荒魂への支配力を有すると聞く。それが可能であれば、荒魂を離島に配備するだけで我が国唯一の防衛組織である自衛隊の負担は減り、荒魂対策の政府予算と併せて防衛費の削減を行うことでこの国の税金を下げ、経済悪化の原因の一つとされておるデフレ脱却が可能となるはずだ。」

加えて、タキリヒメは離島に荒魂を配備すれば、荒魂対策の政府予算と併せて防衛費の削減を行うことでこの国の税金を下げ、デフレ脱却が可能になると述べていた。

……無論、これには理由があり、荒魂対策の政府予算を下げることで刀剣類管理局の弱体化を狙っているのもそうだが、２０年前の大災厄で現れた大荒魂を例に挙げて、自身を強化する正当な理由を仄めかしていたのである。

そして、別のバラエティ番組では、

「――――ということを仰っていましたが、タキリヒメさんは刀剣類管理局のやり方には批判的であると？」

「フフ、存在自体は否定せぬ。刀使が秩序を破壊する荒魂を討伐することに関しては何も言わん。我は荒魂と人間が共存し、活躍する強固な社会を築くのが目的だからな。」

番組のコメンテーターのタキリヒメの返答次第では刀剣類管理局批判へと繋がるような質問をタキリヒメは躱しつつ、刀剣類管理局は必要であると述べていた。

「……だが、割に合わんことはやめるべきだと我は言わせてもらう。それに、荒魂対策等の政府予算を削減し、それで浮いた政府予算は公共事業に注力。それを元に新たな雇用の創出と今現在関東を中心に頻発している荒魂事件による被害の復興も早めるべきだと我は考えている。」

それと同時に、デフレ対策としての公共事業を行うことで新たな雇用の創出と関東を中心に頻発している荒魂事件によって損害を受けた建築物等を早期に復旧させることができると説明していた。

しかし、タキリヒメは公共事業が成功し、次に狙うのは銃規制を緩和をすることであり、それが真の狙いでもあった。

但し、銃規制を緩和させると言うだけでは民意は得られないことをタキリヒメは理解していたため、タキリヒメが推し進める公共事業が成功した暁には、その成功例を挙げて推進する積もりであった。

要は、

「デフレを脱却のするためには、お金を回す必要がある。だから○○をするぞ!!」

よりも、

「デフレ脱却のために行い、成功した公共事業を拡大させるため、お金を回すために○○をするぞ!!」

と言った方が、人は成功した前例から安心感を抱き、従ったりするのである。

（……だが、作者的には、余り急激に進め過ぎると、急激なインフレとなって円が紙くずになってしまう恐れがあるため、やりすぎは良くないと思っている。何事も引き際が肝心であるのだが、仮にタキリヒメの言う公共事業が成功し、その成功例を以って銃規制を緩和して銃弾の製造を行う関連会社を創って更なる雇用と経済の流動を行ったとしたとすれば、その〝成功例〟に縛られ、引き際を見誤ってしまう可能性が高い。その点を考慮すれば、このやり方は余り良いやり方だとは思えないだろう。）

とはいえ、前提の公共事業の拡大が確実に成功する保証は無いので、必ず成功するとは限らないというリスクも孕んでいるのだが、荒魂と人間の人口比率が荒魂の方が高いという状況に持って行くために必要な事であると判断していた。

そんな思惑を持つタキリヒメは、その後も何食わぬ顔をして別のトーク番組に出演し、

「――――と述べておりましたが、貴女は一体何を狙っているのですか？」

トーク番組の司会者に、タキリヒメは何を狙っているのかを問い質される。そのため、

「我がこの国の代表となり、この国を今一度、高度経済成長期のように発展させ、今再び経済大国へと復活させることだ。故にこの国を覆う霧であるデフレ対策として、減税と公共事業の拡大を先ず第一に成し

遂げようと考えておる。」
「それを成したとして貴女にどのようなメリットが有るのですか？」
「確かに、我には何のメリットも無いように見え、不自然に思うことだろう。」
荒魂である自身がこの国の総理大臣となり、この国を発展させ、経済大国にするとタキリヒメは答えるが、それだけの説明では信用できないだろうと言って、スッと立ち上がると、タキリヒメはこの国を発展し、経済大国にする理由を述べていた。
……そう、ただ立ち上がったというだけで、この番組の視聴者だけでなく、司会者と番組の制作スタッフ全員が息を呑んでタキリヒメに集中したのであった。
世にも珍しい人型で人語を理解できる荒魂だから、何を言うのか気になっただけではない。
高い背丈と局長代理の朱音が怯むほどの圧倒的な威圧感。そして、人間離れした白い肌も合わさって、何処か言いようのない威容な神々しさを感じたのである。
「だが、それを荒魂が成し得れば、それだけで我々に対する見方が変わるものであろう？二十年前に現れた大荒魂と市中を今も騒がせる荒魂は知性の欠片も無く、国会周辺の連中と同様にただ暴れ回るだけであった。だが、彼等を見れば分かるだろう？……暴力のみで変えようとするテロリズムが良い方向となるか？答えはＮＯだ！歴史の逆行にしかならない。」
そして、この場に居る皆が自身に集中し始めたということは、この番組を視聴している者も集中しているだろうと確信したタキリヒメは、それに合わせて自身の考えを話し始めるのであった。
その内容は、国会周辺で暴れ、総理を殺害した嫌疑が掛けられているデモ隊を批判するものであった。
「我等のような荒魂でも破壊活動以外に活躍できるのだと証明すれば、荒魂と人間が共存する社会を築くというのは夢幻の話しではないと証明することができる!!」
加えて、タキリヒメは声をより一層大きくして、国会周辺で暴れる

だけに飽き足らず、総理を殺害するデモ隊。市中にて理性無く暴れ、物を破壊する荒魂。そんな両者とは違うのだということを証明するために、荒魂と人間が共存する社会を国民とタキリヒメが一体となって築き上げようとしていることを説明していた。

「荒魂と人間が共存する社会を築くやり方は単純だ。一人一人が活躍するだけで我等が築く荒魂と人間が共存する社会はどの国家よりも繁栄しているのだと言える。」

更に、荒魂と人間が共存する社会を築くことは簡単で、その社会の一人が活躍し荒魂と人間が共存する社会を繁栄させるだけで良いという誘い文句。

「……そして、それを築き上げることが出来れば、その社会に住む国民は違う種族の生き物を受け入れることができる気高い生き物であると言うことができ、どの国よりも強く逞しく、清らかな精神を持って生きていけると我はそう確信しておる!!そうするだけで我等が正しいのだと胸を張って言えるのだ!!」

そして、荒魂と人間を分け隔てなく接することで気高さを証明することができるという何かに酔いたい人に刺さる文言を入れるというテコ入れをタキリヒメは欠かさなかった。

そうすることでタキリヒメは、国会周辺で暴れ、総理を殺害したデモ隊とその暴力行為に加担し、協力した黒人運動と野党の一部の議員等を二十年前の大災厄にて暴れた大荒魂と今も市中を騒がせている知性無き荒魂達と同じであると批判し、それを反面教師にし、荒魂が破壊活動以外の方法で活躍することを証明することができれば、荒魂と人類が共存する社会を築くことができ、それを礎にした力強い国家になれると演説したのである。

……これにより、

何かと隠蔽する刀剣類管理局に不満を持つ者。

国会周辺で暴れ、総理殺害という事態を引き起こしたデモ隊に批判的な者。

流血沙汰の結果を出した政府に疑念を抱く者。

といった者達からも支持を集めることに成功したのであった。

……そのうえ、

国会周辺で暴れたことによって総理を殺害するという事態にまで発展させたデモ隊。

流血沙汰で以って事態を解決させた治安維持組織と政府官僚及び、政府閣僚。

そして、人類との共存を謳うタキリヒメ。

これらを鑑みた国民は、”人間”がこの国を任せればこうなるのだから、”荒魂”にこの国を一回任せてみても良いのではないかという意見が出始めるのであった。

しかし、タキリヒメはただ単純に人を支配・管理・導くことを望んでいるがために、荒魂と人間が共存する社会の必要性を訴えているということに、誰一人として気付くことはなかった……。

次の狂ったお茶会が始まるまでの終曲

『だが、それを荒魂が成し得れば、それだけで我々に対する見方が変わるものであろう？二十年前に現れた大荒魂と市中を今も騒がせる荒魂は知性の欠片も無く、国会周辺の連中と同様にただ暴れ回るだけであった。だが、彼等を見れば分かるだろう？……暴力のみで変えようとするテロリズムが良い方向となるか？答えはＮＯだ。歴史の逆行にしかならない。……我等のような荒魂でも破壊活動以外に活躍できるのだと証明すれば、荒魂と人間が共存する社会を築くというのは夢幻の話しではないと証明することができる!!その社会に住む国民はどの国よりも気高く、どの国よりも強く生きていけると我はそう確信しておる!!』

しかし、タキリヒメの〝人類と荒魂が共存する社会〟は意外な処へも波及することとなる。それは、このトーク番組を視聴していた一部の野党議員と国会周辺に参加していたデモ隊、それにデモ隊に協力していた黒人運動の生き残りはタキリヒメを、

『穢らわしい荒魂。無能刀使と刀剣類管理局は早く討伐しろ。』

等と、半ば脊髄反射的にＳＮＳ上にて批判し、それだけでなく卑猥だったり差別的な表現も混じえて書き込んでいたため、

『差別是正を訴えている集団が差別を助長する様なことをするな。』

『タキリヒメは国会周辺の騒動を治めようとしたが、貴方方は助長し、総理を殺しただけではないか。』

『おまえらは何でもかんでも殺したがる集団か。』

といった多くの反論の声によって封殺され、それに逆上した一部の野党議員が、

『タキリヒメは世界征服しようとしている!!』

と根拠も論拠すらも示さずに言ってしまったため（実際、そうなのだが。）、「また野党が根拠無く述べているのか。」と呆れながら反応さ

れてしまう。

……そんなこともあり、タキリヒメが世界征服しようとしているといった内容の話は誰も信じなくなり、タキリヒメを批判していた一部の野党議員が所属する野党の支持率は更に下がることとなり、遂には支持率が一桁になってしまうのであった。

そのうえ、デモ隊の生き残りが再起を図り、上記の一部の野党議員の台詞をそのまま言ってしまったために数少ない支持までをも失い、更にはデモ隊と黒人運動の一部過激派が組織の実権を握り、総理を殺害したことに気勢を上げてしまったために、黒人運動とデモ隊の参加者達の多くが総理を殺害したことに気勢を上げる連中と居ることに意気阻喪して、黒人運動とデモ隊から離れる者が続出。黒人運動とデモ隊の勢力は大きく縮小し、存続不可となるぐらいに追い詰められていた。

そういったこともあって、国会周辺にて暴れていたデモ隊と黒人運動、そのうえ一部の野党議員は図らずもタキリヒメの支持を上げることに貢献する形となってしまったうえ、支持する者も勢力も失ってしまったのである。

こうして、自身の手を直接汚すことなく、この国で騒ぐ、市中にて暴れる荒魂のような人間達を利用したタキリヒメの思惑通りに進んで行くこととなる……。

そのため、差別主義者と言われることを恐れ、不法行為が散見されていた黒人運動やデモ隊のことを今日に至るまで批判しなかった政府やテレビとは違って批判するタキリヒメのことを好意的に見る者が爆発的に増え、数々の番組に出演。一躍人気者となったタキリヒメの人気をあやかろうとした動画配信者達は再生数を稼ぐためにタキリヒメが出演した番組のレビューを行うことがトレンドになりつつあった。

そうして、タキリヒメがテレビに出演していたときの視聴者の最初

の反応は、
「とにかく、あの〝荒魂〟は大躍進中ってこと。」
ある者は渋い顔をしながら、疑問を抱いていたり、
「でもアイツ。〟大荒魂〟らしいぜ、それでとにかく何かに反逆してるんだってさ！何かに反逆してるって、何かカッコよくね!?でも、あの〟大荒魂〟の目を覆うバイザーを真似して付けてみたけど、やっぱり良く見えねえわ。何で付けたんだ？」
もう一方の者はいかにもビックリした表情をしながら、興味を抱いていたり、
「それでね！あの〟人〟こう言ったの！……『テレビはクズだ！』って、それを見て、私コレ見たいって思ったの!!」
この両者とは違う者は〟笑顔〟で言いながら、好感を抱いていたことを告白していた。
そのため、ある者は〟荒魂〟、もう一方の者は〟大荒魂〟、この両者とは違う者は〟人〟と言って、タキリヒメのことを〟荒魂〟扱いしたり、〟大荒魂〟と解説したり、同じ〟人〟のように見ている者が居ることを動画配信者達が証明していた。
そして、この三者に共通することはタキリヒメに関連することを述べたら、再生数と評価数が急激に上がったということであった。

その次は、タキリヒメがデモ隊のことを批判したことについてであった。
「皆ビックリしたよな!?荒魂らしいけど、流暢に日本語喋っていたし、真剣に取って良いのか？それとも笑えば良いのか、ちょっと判断し辛いよな？だって、言っていることが超シリアスで、超その通りなんだ！正に正論!!犯罪者は刀使が討伐する荒魂と同じ扱いにすりゃ良いんだ!!」
「タキリヒメにとって大きな問題は今、日本中とポリコレ被れの連中がこの手の問題を受け入れるかどうかってこと。」
特措法の廃止を訴えていたデモ隊は取り締まるべきか否か？
「今、問題視すべきなのは国外から来る移民が多いってこと、そういっ

た奴等が国会で騒ぎを起こしているんだから取り締まるのは当然だ。テレビも政府も、何処も差別的だ何だって言われるのが怖くて、まともに取り締まることも反論することもできやしない!!」

「ミスターニュースはダメだね!問題は移民二世の方が犯罪率が高いとかじゃない。移民を入れた後のことについてなんだ!!移民推進派は平等とか人権とか耳障りの良いことばかり言って、入れるだけ入れたら待遇が悪いまま放置してるじゃないか!!」

タキリヒメの言う荒魂と人間が共存する社会は築けるのか?

「……甘く見て良いのかな?って思う。だって、彼女は、その、何て言うか〝大荒魂〟な訳だし、最終的に何するか分からない。……それに、昔は色々耳障りの良い事ばかり言って失敗したから、……どうなのかな?って思う。何処まで、信じて良いんだろ?って、だから私、どうかと思ってる。良いのか悪いのか?」

そして、タキリヒメが言うことは全て信じるだけで良いのか?

といった動画を配信し、動画共有サービスを利用する者の皆がタキリヒメに注目し、タキリヒメに関する話題ばかりであった。

「相応しいのは、動画配信者か?テレビスターか?……それとも首相か?どれもその資質が有るのでしょう。これは、刀剣類管理局が発表した『荒魂が人を襲う根本的な原因は珠鋼を奪った人間に対する怒り』という研究成果を覆すこととなるかもしれません。何故なら、今の彼女は激情に任せて人を殺めるという部分が見られませんので、その可能性は非常に大きいと思われます。」

しかし、とある動画配信も行っている大学教授が、刀剣類管理局が発表していた〝荒魂が人を襲う根本的な原因〟に対して、タキリヒメが人間を〝今は襲っていない〟ことを根拠に疑問をぶつけるのであった。

この疑問を切欠に多くの動画共有サービスの利用者が、刀剣類管理局の言うことが本当に正しいのか?と疑問を抱き始めることとなり、

「――――って、別の動画で大学教授がそう言ってたけど、ちょっと待てよ。……国会周辺で騒いでた奴等は人間なんだろ?人間も荒魂みたいに暴れまくるなら、タキリヒメだけが危険だということにはならない

ないんじゃねーの？」

荒魂であるタキリヒメの言うことの方が正しいのではないのかと思い始めるのであった。

……そのため、

「こうすれば、特徴的な目のバイザーなのかなアレ？……まあ、これで完成。後はそれと併せて、髪の毛を白く染めれば〝タキリヒメ〟コスプレが完成！ちょっとアニメっぽくて、少しカッコイイと思わない!?」

「荒魂パーカーをこうして……こうすれば、な？〝タキリヒメ〟に見えなくはないだろ？」

タキリヒメのコスプレ紹介や荒魂パーカーをタキリヒメ風にアレンジしたといったタキリヒメに関連する動画がＳＮＳ上で急激に増え始めたのである。無論、そうするだけで『いいね！』や『Ｇｏｏｄ』を多く貰えたりするため、皆がこぞってタキリヒメに関連する動画を創っているという部分もあった。

『あの教授が『荒魂が人を襲う根本的な原因は珠鋼を奪った人間に対する怒り』が覆るかもしれないと言ってたけどそうだよな。あのタキリヒメ、人間が作った異世界転生物のこと言ってたし、そういった物に興味有るのかな？』

『それな、もし刀剣類管理局が言っている通りなら人間が作ったサブカルチャーなんて興味持つ訳ないよな。』

『そう考えると、あのタキリヒメが異世界モノを熟読してるところ想像したら、何かカワイイな。』

『でもさ、タキリヒメの境遇考えると、異世界転生というより追放系に近くね？』

『――　私、政府に荒魂と蔑まれて追放された私が人望を集めて大逆転!!今更、助けを請うてももう遅い。今の私は気にせず爆進中。　――が始まります。』

『だｗｗｗれｗｗうまｗｗｗｗｗ。』

『おいｗｗｗ悪ふざけが過ぎんぞｗｗｗｗｗでも、あながち間違っ

ていないような気がするから何も言えねぇｗｗｗｗｗ』
『おまえら、草生やし過ぎｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ』

そのうえ、タキリヒメの演説で異世界転生のことについて少しだけ言及したことに食いついてきた者達が囃し立てたことで、ＳＮＳ上でもタキリヒメの話題がホットワードとなるのであった。

ただ、一人の対象に対して議論を重ねる。それだけで、タキリヒメの認知度と支持率は飛躍的に上がっていったのである。
そうして、タキリヒメの評価は――――、

「ちょっと悲しいけど、〃タキリヒメ〃の言っていることは正論だ。それほど間違っていない。」
疑問を呈していたある者は、〃苦笑い〃しつつも、タキリヒメは正論を述べていると語り、
「子供も貧しく、老人も貧しく、失業者に溢れている！誰もそれを問題視してなかった。だけど、〃タキリヒメ〃だけが言ってるんだ！すげぇよ!!だから、オレは〃タキリヒメ〃のことを応援しようと思う!!あと、チャンネル登録もよろしく!!」
興味を抱いていたもう一方の者は、興奮気味だが、〃笑顔〃でタキリヒメの言うことに共感していると語り、
「この国で子供を産みたいかって?正直この世界で?産め産めと機械のようにしか言わないこの国の政治家何か目じゃないくらい〃タキリヒメ〃って本当に凄いって思う!!言っていることホントその通りなんだから！みんなも要チェックしてね!!」
最初から好感を抱いていたこの両者とは違う者は、タキリヒメは素晴らしい人物であると〃笑顔〃で語り、三者ともそれぞれの感想を発信していた。
こうして、タキリヒメに対して親近感を抱き、好意的に見る者が漸増の一途を辿るのであった。

そして、この三者は共通して、タキリヒメのことを〝荒魂〟、〝大荒魂〟、〝人〟とは呼ばずに〝タキリヒメ〟という名前で呼んでいたことに気付かなかった……。

タキリヒメはこの社会が自分を受け入れつつあり、そしてそれを利用して徐々に支配していき、国民と指導者が一体となった強い国を自らの手で築き上げることを夢見つつ、それを支持する〝国民〟が漸増の一途を辿っていることに人を支配・管理・導くことを望むタキリヒメは内心ほくそ笑みつつ、ある者達に感謝していた。

（……デモ隊の諸君。国会周辺で暴れてくれてありがとう。）

自分の思惑通りに暴れ、図らずもタキリヒメの支持率の増加に貢献したデモ隊に、心の中で笑いながら感謝の言葉を送り、タキリヒメもそれを支持する者達も同じように笑いながら、気付かぬ内にタキリヒメだけが座れる王座を築き上げていくのであった……。

――その数日後、今日も動画配信サービス上には、タキリヒメに関連することばかりが並び、新聞もテレビもタキリヒメに関する話題で持ち切りとなっていた。

「……また、タキリヒメのことばかりですね。」

その結果なのか、今も病院のテレビに映るタキリヒメを観ていた桐生　葉月は複雑な気持ちであった。何故なら――、

『やっぱ許せないっすよね。理由はどうあれ、刀使さんにまで暴力を振るうなんてサイテーです！』

『タキリヒメさんの言っていることを考えたら、刀使さんって大変ですよね。暴動で暴れてた連中よりも凶暴なのを日々相手にしてるんですから……。』

人が白昼堂々と無差別殺人を行った場合は、警察官が取り押さえて逮捕し、厳罰に処することで秩序有る社会を形成していることと同様に、無秩序に暴れる荒魂を討伐して秩序有る社会を形成していると説明し、刀使が荒魂を討伐することは当然のことであり、何も可笑しな

ことではないとバラエティ番組で論じるタキリヒメを観た聴衆はその通りであると発言していた。

『刀剣類管理局は許せないですよ。一刻も早く事態を収拾すべきです。』

『刀剣類管理局は、この荒魂の被害に遭った人間全員に、慰謝料を払うのが当然じゃねえ？』

しかし、先程まで刀使に対する風当たりが強く、刀剣類管理局と同様にバッシングの対象にしていたにも関わらず、舌の根も乾かない内に刀使を労わるべきであるという論調となりつつあったことに、葉月は何とも言えない感情を抱くのであった。

無論、これは視聴率を回復させ、広告収入が激増したことでテレビ局が復活したことに大恩を感じている番組プロデューサーが前の刀剣類管理局を批判する番組作りと同じ手法で、タキリヒメのことを支持している者のみをインタビューしているというテコ入れも有ったのだが、タキリヒメを支持する者達はそのことに気付くことはなかったうえ、刀剣類管理局も自衛隊（中谷や甲斐といった防衛省の重鎮が、総理暗殺に加担していたことが発覚することを恐れてだが……。）も数を増しつつあるタキリヒメを支持する者達の批判を恐れて、追及することが出来なかった。

そのため、つい先程までテレビが刀剣類管理局を批判していたことを思い出した葉月は、刀使に対するバッシングを荒魂が解決するということに何とも言えない複雑な思いを抱くと同時に、今まで刀使と刀剣類管理局が悩ませていた事を刀使の討伐対象であった〝荒魂〟のタキリヒメに解決してもらった事実を受け容れることには時間が掛かりそうであるとも思っていた。

「……結局。私達がやってきたことって、何なんでしょうか？隊長。」

その結果なのか、政府（官房長官や副総理といった内閣の重鎮が、総理暗殺に加担していたことが発覚することを恐れてだが……。）は、数を増しつつあるタキリヒメを支持する者達からの批判を恐れて、表立って批判することが出来なくなりつつあった。

そのうえ、視聴率の回復に貢献してくれたタキリヒメに対して足を

向けることができなくなり応援し続けるテレビ。更にはＳＮＳや動画サイト上でもタキリヒメを支持することが多くなり、批判することが無くなりつつあるという、誰もがタキリヒメに逆らえなくなりつつある状況下の中で、『タキリヒメ、テレビも動画配信サービスも〝支配!!?!!〟』という見出しが書かれている新聞を病床の上で見ることになった葉月は、これは性質の悪いジョークなのかと戸惑う程であった。

……そんな心の奥底で引っ掛かりを感じる結果となったことについて薫に尋ねる葉月。

しかし、その一方で薫は、葉月と同じ物を読みながら物思いに耽っていた。

……奇妙な話だ。

誰もが誰も、人が人のためにと思い、理想に酔いながら戦っていたが、結局は独り善がりのテロ行為でしかなく、結果は〝人〟が損をし、〝荒魂〟が得するだけだったという結果となったことは、折神　紫に対抗する組織舞草に所属していた薫にとっては、何とも言えない複雑な思いを抱かせるには充分であった。

舞草も『御刀や刀使のあるべき姿を取り戻す。』や『大荒魂に憑依された紫の打倒。』という目的を掲げ、行動をしたが結果は鎌倉危険廃棄物漏出問題である。

それ以降の刀剣類管理局は、社会的信用を失い、ノロを大量に漏出し、土地を汚した杜撰な組織と批判されることとなり、その刀剣類管理局と同じく更に重税を強いる政府も信用することができないという事態となり、社会不安と生活不安によって人が人を信用することができなくなりつつある社会情勢となってしまった。

その結果、薫は互いに互いを攻撃し合う社会へと変貌したかのように感じていた。その証拠に、群馬山中での争い、関東８区での暴動、安アパートでの銃撃戦といった人同士の争いが増えているのである。

……そう考えるだけで、自分達と暴動を起こした人達は本質的に似ているのかもしれないと、妙なセンチメンタリズムに酔っている自分が居ることに気付いた薫は、その考えを改めるように手に持っている新聞に改めて集中することにした。

「……隊長？」
葉月は、急に薫が返事もせず静かに、新聞に集中して読んでいることに珍しく感じたのか、どうかしたのかと尋ねるのであった。
「ん？……ああ、ワリィ。少し４コマ漫画が面白くてな。」
薫がそんな返事をしたためか、「……全く、少しは他のニュースとかにも興味を持って下さい!!私達の部隊長でもあったんですから。」と注意を受ける。
「ハハ、そうだな……。」
何故だろう……。この会話が、懐かしく感じるのは？
今やもう、真庭　紗南本部長に「働けこのバカ薫がぁ！」と言って、叱責されたときが何時だったか、もう思い出せないのだ。そのうえ、紗南からちゃんと休暇は貰えるのだが、何故か嬉しく感じなかった。
……あの頃に戻りたい。
子供も女を唆し自爆させようとする狂った奴しか出てこない侵食された世界から、任務をサボってエレンや葉月に小言を言われ、最終的に紗南本部長にバレて大目玉を食らったりするといった、いつもの何事も無い日常を送れる日々へと戻りたい。
不思議と何故か、そう思う自分が居ることに薫は奇妙な感覚を抱きながらも、そう心の奥底では願っていた。
「……だけど。俺は俺達がやってきたことは間違いじゃねぇよ。」
「でも……。」
「間違いじゃねえさ。……それに、お前の頑張ったから、それが繋がったから、タキリヒメが〝荒魂と人間が共存する社会〟を目指したんだろうな。……だから、ねねも俺もお前に感謝してる。……お前に助けられた機動隊の隊員と同じように、俺も感謝してる。」
だから、薫はそう思わせることにした。
真面目な性格である葉月が、これ以上無茶をしないように。
「……昔さ、ねねが〝荒魂〟とかいう理由で除け者にされたことがあったんだ。……ねねに〝穢れ〟が無いにも関わらずだぜ？穢れ〟が有るから荒魂じゃねえのかよ。って本気で思ったな、そのときは。……だから、それを考えると、タキリヒメの言う世界っていうのも存

外悪くねぇかもな。」
いや、薫はそう思うことにした。
葉月の努力が無駄でなかったと証明するために、葉月の努力の結果が良かったと言えるようにするため、トーマスと一時的に組んだが結果は国会周辺以外の次の暴動計画を阻止したものの……。葉月にはとても言えないこととなってしまっていた。
あの後、アメリカ海軍所属である潜水艦ノーチラス号で起こったことは、〝アメリカ海軍内で起こったこと〟として、誰も追及しないことになっていた。
そう、あの娘と母親、そしてテロリストである父親も〝存在しない〟ことになっていたのである。
……そして、葉月も薫の真意に気付いたのか、静かに聞いていた。
「だから、この話は……これで終わり。もうこれで終わりなんだ。」
そう言って、薫はこの後、上層部の命令で可奈美達と共にタキリヒメと会談することになっているのだが、それを伏せるため、潜水艦ノーチラス号にて起きたことを葉月に気付かれることがないよう、終わったことなのだと話すしかなかったのであった。

――――一方、三木はタキリヒメ派の議員と会談をしていた。

「……なるほど。彼女等をタキリヒメ様への謁見を申し出た訳ですか。……ですが、ご存じかと思われますがタキリヒメ様はご多忙中の身でありまして、それが通るかどうかは臣下の一人でしかない私だけの判断では……。」

タキリヒメ派の議員は、思わせぶりな態度で、遠回しに可奈美達をタキリヒメの側に付かせろと、三木に暗に要求していたのである。

「ええ、ご多忙の身なのは理解できます。……しかし、我が防衛省としましても、タキリヒメが刀剣類管理局と〝共闘〟することを望んでおります。それが叶えば、それこそタキリヒメが言う〝荒魂と人間が共存する社会〟が築き上げられる一歩となるのは間違いないことでしょう。」

だが、三木は可奈美達をタキリヒメ側に付かせるかどうかの回答を躱しつつ、タキリヒメが述べた〝荒魂と人間が共存する社会〟が叶うと言って、タキリヒメ派と刀剣類管理局をあくまで対等な〝共闘〟関係として、同盟を組ませようとしていた。

「ええ、それは間違いないでしょう。……ですが、刀剣類管理局は今も過去に問題視され、白紙となったノロの分祀体制への移行のために社の再建を推進しているそうですが、それはタキリヒメ様が考える離島に荒魂を配備し、社の数を低減することで浮いた政府予算を復興財源として使うという考え方に、反していると思うのですが？」

しかし、タキリヒメ派の議員は、引くこともなく今の刀剣類管理局とタキリヒメ派が組むこととなる際に発生するであろう問題点を指摘していた。

「……その点を考慮すれば、協力どころか足の引っ張り合いになるのは必定です。ですが、タキリヒメ様は寛容な御心をお持ちなので、そちらがノロの分祀体制を辞め、荒魂を離島に配備することに協力して

下されば、話に応じるとのことです。……無論、協力した際は我々も刀剣類管理局の方針について口を挟ませてもらいますが、いかがでしょうか？」

そうして、タキリヒメ派の議員は刀剣類管理局とタキリヒメ派の協力体制は賛成するが、その条件として朱音の掲げるノロの分祀体制を放棄し、タキリヒメの掲げる荒魂を離島に配備することに協力すること。今後の刀剣類管理局の方針についてタキリヒメ派にも口出しする権利をよこせと要求してきたのである。

「……それぱかりは、私の一存では決めることができません。」

そのため、三木は自分一人では決められないと言って、躱そうとするが、

「これは正当な要求であると私共は考えております。……これからタキリヒメ様と刀剣類管理局は三木一等陸佐殿の言うように協力し合うことになるのですから、我々の意向にも添ってもらわないと足並みが揃わないでしょう？」

タキリヒメ派の議員は三木を逃す気はないらしく、要求を呑むように強く迫っていた。

「……そうですね。ですが、まさかタキリヒメが市ヶ谷に居る防衛省幹部と事務官の大多数を味方にしており、既に自由に外へと出られる状態だとは思いもよりませんでしたよ。何時の間に寝返らせたんですか？」

後に三木と甲斐が調べて分かったことだが、市ヶ谷の事務官と防衛省幹部は既にタキリヒメ側に付いていたと知り、それ故に国会周辺の暴動に突然現れることができたのだと理解することができた。

「彼等も国を想ってのことでしょう。彼等を責めるのは筋違いというものです。それに、甲斐陸将補はかなり強引なやり方をする御方と聞き及んでおります。それ故に敵も多いということはご存知でしょう？」

「……そうは言いますが、貴方方も国会周辺の暴動を扇動したということをお忘れですか？」

三木は、どうにかこちらが優位になるよう中谷と官房長官との間で

密談を行っていた内容を公開するぞとタキリヒメ派の議員を脅すが、
「……自衛隊と政府側からそのような話があったと私は伺っておりますが、タキリヒメ様はその話を聞く前に人命を尊重すべきであると命じられました。ですが、大将の剣は敵に振るうことではないとお考えであらせられるタキリヒメ様御自らが前線へと向かわねばならなかったのは、至らぬ臣下である私の落ち度であり、心苦しいことではありました。……ですが、私はタキリヒメ様のご裁量に一つも落ち度は無いと理解しております。」
タキリヒメ派の議員は、タキリヒメが国会周辺の暴動の扇動を知らないまま総理の救援に向かったと説明していた。
無論、タキリヒメは中谷と官房長官が国会周辺の暴動の扇動を行っている事は知っていたのだが、タキリヒメ派の議員は何食わぬ顔でその事実を隠すのであった。
「なら、タキリヒメは二十年前の大荒魂の片割れということについては貴方はどう思うのですか？」
三木は、それならばとタキリヒメが二十年前の大荒魂の片割れであるという事実はどう思うのかと尋ね、少しでもこちらが優位に立とうとするものの、
「……すみませんが私は神奈川出身ではありませんし、その当時の私は年齢が一桁ぐらいだったので、余りそれについての記憶が曖昧なのですよ。……ですので、私が二十年前のことで何かを言うことはできません。……それに、」
タキリヒメ派の議員は、親の地盤を受け継いだ二世議員であり、二十年前の大災厄については何も知らないと言って一蹴したうえ、一呼吸置くと、
「私は何があろうとタキリヒメ様の御意向に添う積もりです。父から政治の地盤を受け継ぎ、この国の議員になったときから、私は経済が鈍化したこの国をもう一度復興させると誓いましたが、末端の議員でしかなかった私は何時までも芽が出ないことに腐っていました。……そんなときにタキリヒメ様が現れ、私にその胸襟を開いて下さいました。……減税、公共事業の拡大に止まらず、荒魂を離島に配備す

るという開闢的な発想をするこの方なら、更なる増税やノロの分祀体制を敷こうという古い考え方しかしない国の重鎮達よりも確実に、この国を復興させて下さると、この行き詰った国を再生して下さると強く抱かせてくれました。」

タキリヒメ派の議員は、自らの考えを打ち明けたタキリヒメに共感し、心服していると告白し、

「そのうえ、知名度も無く、与党に所属しても組織の末端で腐っていただけの私に、当初は与党側のスパイとして接触したにも関わらず、私をタキリヒメ様の側近の一人として受け入れて下さった懐の深さに感銘を受けました。故に、私の願いは唯一つ、タキリヒメ様が創る未来を私も望んでいるということです。」

タキリヒメに心酔していると答えていた。

元々彼は与党最大勢力の政党に所属しており、知名度の無い末端の議員として在籍するのみであった。

そんな一大組織の末端の一人として、活躍することもなく日陰者としての日々を過ごしていた彼は、父の地盤を引き継いだときから抱いていたこの国をもう一度、経済大国として復活させるという夢を叶えることを殆ど諦めかけていた。

そんな中で彼は与党幹部の命令で、当初は与党側のスパイとしてタキリヒメに接触していたのだが、その際にタキリヒメが語る政策（荒魂を離島に配備することで、減税と公共事業の拡大を行うといったもの。）を聞いている内に彼は自らの夢を叶えるため、何時しかタキリヒメの側に寝返り、タキリヒメの懐の深さに心酔することとなったのである。

「故に私は、タキリヒメ様をこの国のトップにするためなら、如何なることも行う所存です。……貴方がタキリヒメ様に害を為すのであれば、私がその害を受けましょう。それだけで、この国をもう一度経済大国へと復活させるという私の夢をタキリヒメ様が私の代わりに必ず叶えて下さることでしょう。」

タキリヒメ派の議員は、続けてタキリヒメに対する全幅の信頼と忠誠を述べていた。……タキリヒメこそが、この国を治めるべき指導者

の器を持つ者であると。

「……貴方も思っているはずだ。この国は確実に斜陽へと向かっていると。だからこそ貴方方は行動を起こした。違いますか？」

そして、タキリヒメ派の議員は三木に、甲斐と中谷、それに官房長官は、自衛隊と警察の権限拡大とそれに伴う刀剣類管理局を隠れ蓑とした新たな諜報機関を創設するために国会周辺の暴動を扇動し、利用したのではないかと問い詰められるのであった。

「……私はそのようなことは初耳でありますが、それを画策した者はこう答えるでしょう。……仕方のないことであると、理想のみでは為し得ないこともある。それはタキリヒメのために身を削る思いで働く貴方であれば理解できる話であると思いますが？」

しかし、三木は何食わぬ顔で、理想のためには手を穢す必要が有ると答えていた。

三木は甲斐と中谷、官房長官と同様に、この非軍事と軍事が曖昧となった世界情勢において、自衛隊と警察の治安維持組織の強化と新たな諜報機関といった安全保障の充実は必要不可欠であると考えており、そのためならば暴動を起こした人間が幾ら犠牲になっても構わないと考えていた。

そのため三木は、トーマスと優が関東８区の暴動の主犯格を殺害し、その報復としての国会周辺で暴動を起こさせることを誘発させると、無用な諍いを起こすだけの総理を暴徒と化したデモ隊に始末してもらい、それを理由にデモ隊の排除と国家に仇なす獅子身中の虫を排除するべく、非軍事と軍事が曖昧となった戦争に対応した新たな安全保障政策の確立を目論んでいたのである。

「……ええ、ですが私の理想と全てを捧げるに足る。忠節を尽くすに相応しい人に出会えました。それが全てです。……ですが、たかが銃弾の一発でも大災厄以上に社会を激変させる力を持つ。それなのに、貴方方は国防を預かる身でありながら、その一発を誘った。」

だが、タキリヒメ派の議員は返す刀で三木や甲斐、中谷と官房長官を非難していた。

……どういった理由があるにせよ、自衛隊幹部と内閣閣僚が手を組

んで、総理を殺害するように仕向けたのはどう言おうが完全なクーデターであり、甲斐や中谷、それに官房長官と三木も白色テロを行うテロリストであるとタキリヒメ派の議員は問い詰めていた。

「……もう一度言いますが、仕方のないことであると私は考えております。民間人なのか、それともテロリストなのか曖昧な戦場に対応する国家へと変貌を遂げなければ、スペンサーの適者生存の理論の通りであるなら淘汰されるのは我が国であるのは必定です。」

しかし、三木は引き下がることはなく、『強い者が生き延びたのではない。変化に適応したものが生き延びたのだ。』ということを述べたとされるスペンサーの適者生存論を語りつつ、軍事と非軍事が曖昧となった超限戦とハイブリッド戦略が主な戦争となりつつある現代において、それに対応した安全保障政策や戦略の研究は必要なことであり、そのためなら、国防意識を高め、それに対応した国家を創ることは急務であると三木は述べると、

「そのうえ、沖縄でのS装備のデータを得ようとしたDARPAの事件と舞草での米国の動き、更には群馬山中の例を挙げれば、公的機関である刀剣類管理局も彼等のような闇に潜む勢力と相対しなければならなくなるのは必然です。……しかし、それを暴くには爆発させねばならない。」

三木は、これからの刀剣類管理局は、舞草の援助をしていた米国や大国の意思によって踊らされたイスラム教の過激派といった闇に潜む存在を認識してもらわなければならないと語っていた。

「軍事力……いや、防衛力を使ってですか？ですが、私は思うのですよ。」

タキリヒメ派の議員は、わざと軍事力と言って、それを防衛力と言い直していた。

理由は、陸自の一等陸佐である三木に、今の国は軍事力という言い方を防衛力と変えられている事情を想起させる狙いがあったからである。

「私はタキリヒメ様と出会った瞬間思ったのです。この国は防衛組織を国軍ではなく自衛隊という名称でラッピングすることによって、こ

の国は軍隊が存在しないということで平和を遵守しているとし、その言葉遊びのつじつま合わせのために何時までも国軍扱いしない。……それと同様に、不思議な力が使えるだけの石ころを神性を帯びた金属であるとし、それを主成分とした御刀も穢れを持つ荒魂という化け物を払うために創られた神剣であるとラッピングすることで、荒魂を斬ることは当然の事だとしたのではないかと。」

そして、タキリヒメ派の議員は、荒魂を穢れを持つ怪異、あるいは妖怪、物の怪、悪霊等として扱うことで、討伐すべき存在であると認識させると同時に、刀使が神剣である御刀で穢れを持つ荒魂を斬って祓うのは当然のことであるということを植え付けることで年端の行かない少女達が荒魂を斬り殺すことに正当性を与えたのではないかと。

「そう思った私は、刀使の養成学校の総称である伍箇伝というのは、年若い子供に神聖な御刀を付け加えることで刀使にさせ、荒魂を〝殺す〟、いや、〝祓い鎮める〟と言い換えることで生き物を殺しているという自覚を子供達が抱かないようにし、そうすることで伍箇伝が敷くカリキュラムという物に従うことで荒魂と戦うことに忌避感を持たない刀使が製造され、それを社会に出荷する製造工場でしかないと思えなくなったんですよ。それに、刀使達が着る制服があのように目立つ色彩の異様な物となっている理由は、ヒロイックな気分に酔いしれさせるためにあのようなデザインになっているのでは?と勘繰っております。」

それ故に、タキリヒメと出会ったことで刀使が御刀を使って荒魂を討伐し、祓い清めるという考え方に疑問を抱いたタキリヒメ派の議員は、伍箇伝のことを年若い少女を荒魂を討伐する大事な役目を背負った者としてラッピングし、荒魂を討伐する武器として出荷する製造工場ではないかと三木に問うのであった。

「……そこまでの考えに至った私は、最早形骸化しつつあり、古くカビの生えたこの国の憲法と共に発展が遅れたこの国をその古臭い考えから脱却し、穢れを持つ荒魂でも精進すれば、この国を導く者になれるという開闢的な国へと変貌すれば、群馬山中と関東８区の暴動と

いった如何なる侵略をも跳ね返せる強固な国に変えることが出来ると私は考えております。」

そうして、タキリヒメ派の議員は、三木と官房長官等が望む戦争放棄等を謳っているが、非軍事と軍事の境目が曖昧となった新たな世界において、カビが生えるぐらいに時代遅れとなっている平和憲法の改憲をすべきであるという発言をしつつ、それと同時に荒魂も国の発展に貢献することができる新たな国家体制へと移行することで、如何なる国のどの様な形の侵略でも跳ね返せる発展を遂げる強固な国を創り上げるべきだと説いていた。

そうすることで、新たな国家態勢によって新たな脅威に対応するという三木と官房長官等の目的は達成できると、暗にタキリヒメ派の議員は三木を説得しようとしていた。

「……そこまで考えているのなら、何故荒魂の下ではなく、自分の力でやろうとしなかったのですか?」

タキリヒメ派の議員の話を聞いた三木は、疑問に思ったことをぶつけるのであった。

何故、自分の力でやろうとしないのか?荒魂に支配されたままで良いのかと。

「残念ながら、私には指導者としての〝器〟が無いことに気付いたのです。そのうえ、その才にも恵まれない凡才であることに。……だからこそ、私は求めたのです。理想を具現化する存在。私が仕えるべき理想の王。私の心血と命を捧げるに相応しい英雄に出逢えることを……。」

三木に荒魂に支配されているだけではないのかと問い詰められたタキリヒメ派の議員は、返す刀で自らの思いを語っていた。

――――自分には、指導者としての才覚も、この国を統べるだけの器量も無い。

そのことに気付いたタキリヒメ派の議員は、自身が仕えるべき〝理想の王〟を求めたのである。

「……そんなとき、タキリヒメ様に出逢ったとき、御伽噺を読む歳でもないのにアヴァロンからアーサー王が何時かは帰還する話を思い出

したり、無神論者の私がキリストの再臨というものを信じてしまうほどの感動を覚えました！……私の理想が具現化したと。彼女こそが私が仕える〝理想の王〟であると。彼女こそがこの国を私以上の真の変革の道を、いや、経済だけでなく、真の経世済民をもたらしてくれると確信しております!!」

タキリヒメ派の議員は、尚もタキリヒメの素晴らしさを熱く語り、味方になるよう説得するのであった。

「……確かに、それはそれで素晴らしいかもしれませんが、私は自衛隊に入るときに国の内外に迫る脅威から祖国を防衛すると誓った身です。刀剣類管理局と共に荒魂討伐をすることもある自衛隊の一員である一等陸尉の私にとってみれば、〝荒魂〟であるタキリヒメは我が祖国を捻じ曲げようと活動する侵略者としてしか認識できません。」

しかし、三木は、自身が国の内外に有る脅威から祖国を防衛する任を任されている自衛隊に所属する自衛官の一人であり、その自衛隊は現在に至るまで、刀剣類管理局と共に荒魂討伐をしてきた関係にあることを理由にタキリヒメ側に付くことを拒否するのであった。

「ですが、我が国は欲望に駆られた移民の盲流を安価な労働力として利用しようとし、それを支持した者達は〝寛容〟の仮面を被り、彼等を人柱とした茫漠たる発展の幻想を見せることで、我々は多国籍の人々が集まって起こる暴動を危惧することすらできず、それと共に本来備わっていた危機を捉える感覚を失ってしまいました。……無論、それだけでなく人々は欲望に駆られた移民と同じ幻を見て、此処が安住の地だと思い込みましたが、その荒んだ教理を受け入れた結果どうなったでしょうか？外国人労働者と偽り、入国してきた過激派が起こした群馬山中。多国籍の者も混じって参加していた関東８区と国会周辺による暴動。同じ欲望に赴くまま動いたがためにこうなってしまったのではないかと。」

そのうえで、移民を使い勝手の良い安価な労働力として無責任に受け入れ続けたがために、その移民は馴染めない土地と人間関係に孤独を感じ、賃金が低く過酷な労働環境によって不満が蓄積された結果、荒魂のように暴れ、暴動が起きたにも関わらず、誰もその責任を取ら

ないという自身の考えを三木は述べると、

「であるなら、荒魂を受け入れるという思想へと進めば、今は国会周辺で暴れたこともあって消極的ではありますが、やがては外国人労働者を拡充しなくてはならなくなるという思想へと行き着くのは明白。荒魂と人間の融和を訴える貴方達にとってはその声を無視することができない。……貴方はお気付きの筈だ。寛容さを訴える者達は、移民を安価な労働力としか見ていない他者に寛容さだけを求める者達でしかないということに。」

寛容さを求める者達の大多数の本質は、他者に寛容さを求める者達でしかないと三木は語っていた。

「……とすれば、彼らがその醜く荒んだ主体性無き迎合と無責任でしかない教理を信じれば信じるほど、その飽くなき欲望に身を任せ、そして資本に踊らされ、遂には保身が処世の術として残る社会になるだけであり、そうした我が祖国の国民は醜く歪んだ己の姿に気付くことすらなく、いや恥じることもなく目を閉じるのみとなり、その劣った姿のまま緩慢な壊死を迎えさせることは私は願っておりません。」

そうして三木は、他者に寛容さを求める者ばかりとなった社会は、他人に厄介事を押し付け、自らは甘い汁だけを啜るだけの醜く劣った者となり果てても、その者達は自身の醜く劣った姿に気付くこともなく壊死するのみであり、三木はそうなることを望んでいないと述べると、

「……我が国は、刀剣を持つ武士階級の人間が自らの意思を通す幕府を開いたり、新しい国を創る維新を主導したりしてきました。それは常に刀と共に新たな時代を築き上げてきたということでもあります。現に銃を国旗のシンボルとして使う国も確かに存在するのですから、我が国だけではありません。……それを照らし合わせれば、夢幻でしかない平和国家から卒業し、自主独立と主体性を持つ強靭な国家へと変貌したという意志を言葉だけでなく、自衛隊が新たな時代の象徴の犠牲として堅強な国軍に変わると同時に、国民自身もまた同じように堅強になるという意識へと誘導することで、心技体の全てを自身の強力な武器へと変えられるほどに強靭な意志を持つ強く逞しい国と国

民に変化すべきであると考えております。……ですので、私はタキリヒメではなく、人の意志によって国は形作られるべきであると考えているのです。」

三木は続けて、刀剣を持つ武士階級の人間が幕府を開いたり、維新を起こしたりして新たな時代を創ったように、平和憲法を破棄し、自衛隊を国軍へと変えることで新たな時代の象徴として変化を促した後、強い主体性と自主独立を国民自身が求めるように誘導し、その強い国民と共に新たな国家へと変化すべきであると三木は返答し、タキリヒメ派の議員に変化を荒魂であるタキリヒメが主導するべきではないと返していた。

「そうですか、どうあってもタキリヒメ様が統治することは望まないと。……ですが、今まで米国に守ってもらっているだけのぬるま湯に浸かるだけだった愚民自身がそれを望むと本気で思っているのですか?自ら何かを為そうともしない愚民を監督すべく、私はタキリヒメ様の強い御力で愚民も国民も纏めてこの国を支配すべきであると私は考えています。今更恥じることですか?他者に助けてもらうことは?」

しかし、タキリヒメ派の議員は尚も食い下がり、三木を説こうとしていた。

「私のことを荒魂に平伏す人間とお思いでしょうが、誰が私のことを批判できるのでしょうか?在日米軍といった他国の人間が血を流し、外国人労働者といった他国の人間を使い捨てるように利用するが、その対価だけは掠め取るという状況に何も言わないこの国の人達が?……そして、その者達に頼り切っているこの国の現実から目を逸らし続け、人権や寛容さ、平等は尊い物であると吹聴することで自分は善人であると思い込もうとする偽善者に、余所の国の人間の代価という生き血を啜って生きる人間達にタキリヒメ様の臣下である私を糾弾する権利があると思いますか?」

怪異の荒魂であるタキリヒメに頼るのが悪いことであるというなら、在日米軍や外国人労働者といった他国の人間が犠牲となり、その犠牲の対価を掠め取ることで経済的発展を遂げているうえ、この国の

他者に頼り切っている現実から目を背けるために、人権や寛容さ、平等を吹聴することでそういった者達とは違うと思い込み続けている偽善者達は、その自らが他者に甘えている現状を打破してから初めてタキリヒメに頼る自分を糾弾しろと強く述べていた。

「他国の人間が得た代価を掠め取っている同じムジナの穴でしかないこの国の人間に糾弾されたぐらい何だと言うのです?私は、タキリヒメ様に付き従うことに私は何の恥も感じておりません!!……三木さんと私は、この国を何らかの形で揺さぶらなければならないことと自らの思想に純粋でなければならないという点では共通しています。その点だけでも互いに協力し合い、この国に真の経世済民と変革の風を起こそうではありませんか?!」

そして、タキリヒメ派の議員は、尚も三木を説得しようとしていた。

だが――――、

「……私を評価してくださるのはありがたいですが、私の気持ちは変わりません。」

三木は短くそう答えるのみであった。

「……そうですか、私は残念でしかありませんが、タキリヒメ様は彼女等との謁見を望まれております。」

三木の短い返答に落胆しながらも、タキリヒメ派の議員は可奈美達との謁見をタキリヒメ自身も望まれていると答えるのであった。

こうして、可奈美達刀剣類管理局には、再び面会が可能となったのであった。

そして、この地球という船は荒魂や国内と国外の勢力が創る荒波によって何処へ向かうのだろうか?

――――そうして、この地球という船が荒波に転覆することなく着いた先にはどんな世界が待っているのだろうか?

タキリヒメの部屋

朱音率いる刀剣類管理局は、所在の分からないイチキシマヒメと隠世に隠れ潜む大荒魂の本体に対抗する手段、それに国民への支持を多く集めたタキリヒメ派の助力を得ることによって刀剣類管理局の社会への信頼の復権を狙ったため、タキリヒメ派との”共闘”関係を結ぶべくタキリヒメとの会談を求めるのであった。

一方のタキリヒメ派も刀使といった特祭隊内部の支持を得るべく、その会談の求めに応じるのであった。

こうして、市ヶ谷に居るタキリヒメとの謁見を許可された刀剣類管理局こと、可奈美達一行は――――、

「今一度お願いに上がりました。御力をお貸し願えませんか？我らの共闘が叶えば、それすなわち人と荒魂の共存というあなたの願いに近付くための第一歩となりましょう！」

先ず、朱音とその護衛として付き従っている姫和と可奈美の三名がタキリヒメとの謁見を許されていた。

そして、タキリヒメには美弥とタキリヒメ派の議員が傍に控えていた。

「そうは言うが、我は国民にノロの分祀体制を辞めさせ、荒魂を離島に配備する方向へと転換すると約束しておる以上、我としては朱音の言うやり方には異を唱えなければならん。それに、共闘を願い出るのであれば歩調を合わせねばなるまい。とすれば、刀剣類管理局の方針について協議する際は我々も一枚噛ませて欲しいというこちらの申し出は不可思議なことではあるまい？」

朱音はタキリヒメに共闘を願い出ているのだが、タキリヒメ側としては共闘をするのであれば、タキリヒメが要求するノロの分祀体制から荒魂を離島に配備する方針へと変更するようにという要求と、歩調を合わせるために一定数のタキリヒメ派の人間を刀剣類管理局の方針について協議する場にも参加させるという条件を呑めば、共闘する

と朱音にタキリヒメに話していた。
　無論、これには理由が二つあり、その理由の一つは、タキリヒメの交渉によって刀剣類管理局の方針を変えたという実績を得ることで今後の刀剣類管理局以外の組織と各部署へのパイプ作りの話題としても利用することで、今後の刀剣類管理局との協議の場で発言力を高めるというものであった。
　そして、もう一つは、刀剣類管理局の方針について協議する場に参加することで堂々と刀剣類管理局内部に入り込み、それを足掛かりに着々と刀剣類管理局内部にも味方を作るといった内部工作をし易いようにするためでもあった。
　そういった理由もあり、タキリヒメは刀剣類管理局と共闘するには”ノロの分祀体制から荒魂を離島に配備する方針へと変更”と”一定数のタキリヒメ派の人間も刀剣類管理局の方針について協議する場に参加させる”ことが必須であると述べていたのである。
「……い、いえ。私共としましても人と荒魂の共存は願ってもないことであります。ただ、タキリヒメの御力を得るべく、こうして共闘を願い出たまでの所存。何卒、平にご考慮頂ければと。」
　朱音は、頭を下げてでも、タキリヒメとの刀剣類管理局が望む共闘を願い出ていた。しかし、タキリヒメの要求を受け入れられない理由が朱音側にも有ったのだ。
　それは、舞草の保守派が荒魂であるタキリヒメとの共闘に否定的であるという内部の事情があり、もしタキリヒメの要求を一つでも受け入れれば、その保守派達が元折神家親衛隊の二人を復職させた件で関係に亀裂が走っていたこともあり、朱音に反目する可能性が高かったのである。
　そのため、刀剣類管理局が割れることを望まない朱音はタキリヒメの要求を一つも呑むことができなかったのである。
「ふぅむ。我としては譲歩したいが、……どう思う?」
　タキリヒメはそう言って、タキリヒメ派の議員に目配せをすると、
「ありえませんね。こちらの要求を一つも受け入れず、一方的にそちら側の要求のみを受け入れろというのは、流石に共闘をする気がある

のか疑わしいとしか思えません。それで共闘と仰るのには無理があります。隷属しろと言っているようなものです。タキリヒメ様、この話は受けるべきではないと私は具申致します。」

タキリヒメ派の議員は、朱音の言い分をバッサリと切り捨てるだけでなく、痛烈に批判し、拒否すべきであるとタキリヒメに朱音の目の前で上申するのであった。それを聞いたタキリヒメは、

「……ということだ。此奴は口が悪いが、我の要求を一つも呑めないのであれば、共闘は難しいとしか言いようがない。」

タキリヒメ派の議員のことを此奴と言って指を指しながら、朱音の要求を、刀剣類管理局との共闘を拒否するのであった。

無論、タキリヒメはこちらの要求を受け入れない朱音の要求を聞く気は無く、拒否する気であったが、人間であるタキリヒメ派の議員がそれを言った方が良いと判断し、目配せをして朱音の要求を拒否するように仕向け、タキリヒメとはまだ話し合う余地があるかのように見せかけていた。そうすることで、朱音側から会談するように仕向けていたのである。

それを理解していたからこそタキリヒメ派の議員は、朱音の目の前でわざと批判していたのである。

（……ここまでです朱音様。今確信しました。こいつも所詮はタギツヒメと同じ荒魂。共に在るなど叶わないのです。）

朱音とタキリヒメの話を聞いていた姫和は心の中でそう呟くものの、それを口に出すことはなかった……。

いや、出せなかった。

何故なら、それを言ってしまったら、優と一緒に居る理由が無くなってしまうからである。

そして、思い出すのは潜水艦ノーチラス号での出来事の後、薫に呼び止められたことを思い出していた。

『――――ヒヨヨン、ちょっと話がある。……何であんな事したんだ。』

薫は、姫和が拳銃の引き金を引いたことについて咎めようとしていた。

『……必要だったから、必要だったから私は引き金を引いたんだ。……弾は出なかったけどな。』

薫の追及に姫和は自嘲気味にそう答えるだけであった。

『……そうじゃねえよ。引き金を引いたらどうなるかぐらい分からない訳ないだろ!?』

だが、薫は姫和の答え方に納得がいかないのか、弾が出たらどうなるかと言って追及していた。

『……それの何が悪い？弾が出たら人を殺めることぐらい分かっている。』

『なら、何で引き金を引いたんだ!?』

『必要だからだっ!!』

尚も続く薫の追及に、姫和は必要なことだと大きな声で言って、掴み掛かることで薫の追及を遮っていた。

『……薫、最近思うんだ。あの子は、優は私のことを必要としてないんじゃないかって。もし、そうだとしたら私は、私は何のために刀使であらねばならない？何のために戦えば良いんだ!?』

そして、激流のように流れ込んでくる感情と共に紡がれた次の姫和の言葉は〝自分はどうあるべきなのか?〟という問いであった。

『私は、私は最初使命を果たすためにここまで来たのに、何もできなくて、何もやれなくて、死んだ母親の願いすらゴミのように捨てた！……だから、母さんは私のことを軽蔑している。』

姫和は母親である篝が自分のことを軽蔑しているとそう思いこんだと告げていた。

いや、そう思い込むことで、自身が納得できる半ば荒魂と化した優を救うことの正当性を得ようとしていた。

『けど、それで良いんだ。……母が私のことを必要としてくれなくて

も、あの子が私を必要としてくれる！どんなことがあっても私の全てを肯定してくれる!!』

しかし、姫和は母の本懐と優を救うという二つのどちらを優先すべきかで考えていたときに気付いてしまった。

優を救えば、自分を肯定してくれる存在が近くに居て、孤独に苛まれることもなく、充たされる日々を送れるだろう。

だが、反対に母の本懐であるタギツヒメを討伐することを優先したらどうなるだろうか？

そう、タギツヒメを倒しても、何も還って来ないということに姫和は気付いてしまったのだ。

『だけど、だけど気付いたんだ。どれほど思っても、私の事なんかこれっぽっちも思ってくれていないことに気付いたんだ。タギツヒメの方が好意を抱いてることぐらい……。』

それ故に、姫和はタギツヒメのことをどれほど妬ましくても斬れなかったのだ。

優に嫌われたくなかったから。また、あの孤独の中に戻りたくなかったから。

『でも、それで良い。……いつかは振り向いてくれるはずだから。私の方が必要だって解ってくれるはずだから……。だから、どんな形でも良いから私を必要としてくれるだけで良いんだ。』

まるで呪詛の様に何度も呟く姫和。

どんなことをしても、優はこちらに振り向いてくれることはないかもしれない。だが、姫和は自身のことをどう思ってくれても良いとも言っていた。

都合良い女として利用してくれても良い、それでも変わらない思いを注ぎ続けるから、

それで使い捨てのボロ雑巾のように捨てられても恨まない、貴方のことを愛し続けているから、

『だから！私は銃の引き金ぐらい引ける!!必要なら私の全てを捧げる

!!』

必要なら人殺しをすることも、自分の全てを捧げ、使わせることも厭わない。

そう宣言する姫和に薫は、

『……おっ、お前……。』

恐怖を抱くのであった。

その一件以降、姫和は一人で簡単に優の居る所へと向かうことができなくなったのであった。

何故そうなったのかは、その数日後に通信機越しで出来た優との会話で分かった。

『……え、えと、その、僕も姫和おねーちゃんに会いたかったよ。……けど、薫おねーちゃんとかにも言われて……。』

不意に口に出たであろう優の言葉で、薫が簡単に会えないように告げ口したのであろうことが姫和には充分に伝わったのである。

『あんまり、姫和おねーちゃんの邪魔しない方が良いって言われたから、……だから、もう会わない方が良いのかなって……。』

優にそう言われた姫和は、怒りで血が滲み出てくるのではないかと思うほど、手を強く握り締めて、心の中でこう叫んでいた。

(……私が、私が誰に会うかは自分で決める！決めるのは薫じゃない!!母さんでもない!!!)

そう思うだけで、姫和は薫に言いようのない怒りを感じるのであった。そのうえ、”薫おねーちゃんとかにも”ということは薫以外にも告げ口をした者が居たということであり、あの場には薫と沙耶香、それにトーマスしか知らないのだから、薫と沙耶香、もしくはトーマスが告げ口したのだろうということが容易に推測でき、彼女等とトーマスが敵であるかのように姫和は感じた。

『……ああ、私は構わない。だから、また一緒に居れるようにしよう。』

薫と沙耶香、もしくはトーマスがあらぬことを告げ口をし、邪魔をしてきたのだろうと思うだけで、姫和は怒りが込み上げてくるが努めて冷静に、優には怒りをぶつけないように通信機越しではあるが、返答をしていた。

『本当!?……ありがとう。姫和おねーちゃんにまた会えるのは嬉しいから、待ってるね。』

姫和の強い言葉に感動したのか、目を潤ませながら弱弱しい笑顔でそう答える優を見て、いつかそこから救い出せるようにしようと姫和は心に決めるのであった。

しかし、姫和は沙耶香と薫を敵視するようになったことで、関係がギクシャクしてしまったことを悔い、更に孤立を深め、強い孤独感に苛まれ遂には優にも疎まれてしまったらと考えるだけでそれを酷く恐れるようになったのであった……。

潜水艦ノーチラス号での一件の後、刀剣類管理局本部にある優の軟禁部屋へと訪れた薫は、優に説明していた。

「――――まあ、そういう訳だ。姫和は少し任務が多くなるから少し会えなくなるけど、少し辛抱してくれ。」

薫はそう言って、話す相手が9歳児であることを考慮し、〝少し我慢〟ではなく、〝少し辛抱〟してほしいと分かりやすく、且つ柔らかい言い方で姫和はしばらくの間は優には会えなくなるという事を伝えていた。

これ以上、精神が危うい姫和が優に近付くことがないようにするた

めであった。
　小烏丸の帯刀権を剥奪し、刀使であることを辞めさせるのも一つの手として提案したのだが、タギツヒメといった大荒魂に有効打となる力を持つ小烏丸の適合者である姫和を手許に置きたかった政府上層部の意向。それと、帯刀権を剥奪された姫和がどのような行動を取るか分からないので、そのような措置を取りたくなかったというのが最大の理由でもあった。
　……そういった理由もあり、姫和は優との接触に対して制限が課されることとなった。
「……うん。大丈夫だよ。それくらいなら寂しくないよ。」
　だが、優はそれにめげることはなく、弱弱しい笑顔で答えていた。
　その健気な姿を見た薫は、姫和が忙しいから余り会えないという嘘を吐いたことも相まって、いたたまれない気持ちを抱き、優にこれ以上の不安を抱かせないために、ある物を渡すのであった。
「……これ、内緒だぜ？姫和と通話できるようになっているから、寂しくなったら俺でも、沙耶香でも、……誰でも連絡ができるようになっているから、何時でもかければ良いからよ。」
　そのある物とは通信機であった。
　内緒というところから、薫は上層部に黙って持って来たのであろうことが伺える。
「うん！ありがとう!!」
　それを聞いた優は笑顔で応えるのであった。
「……んじゃ、俺は戻るわ。何かあったら連絡くれ。」
　……江仁屋離島で半ば荒魂と化した自衛隊員を全員討伐したり、先程まで民間の安アパートに隠れ潜んでいたテロリストを全て殺した幼子とは思えないほどの笑顔を見せてくれたところから、何かしら多少の無理はしているのかもしれないと薫は思ってしまった。
　これほど聞き分けが良く、言う事を聞いてくれる優を見ていると、可奈美が可愛がるのも納得できると思うと薫は安心したのか、後は優に任せても良いだろうと判断し、何かあれば渡した通信機で連絡してほしいと言って持ち場へと戻るのであった。

「うん、分かった。お仕事頑張ってね～～～。」
薫は優の声援を背に受けながら、手をひらひらとさせて、
「……おう。」
と短く応えるのであった。そうして、薫は優の居る部屋から退室した。
「……。」
薫を見送った後、優は物思いに耽っていた。
……唇に触れ、姫和とのキスを思い出して、
気分が悪くなった。

姫和とのキスで感じることは、路地裏で花を売っていた少女ミカの記憶の中にある花を金で買う汚い大人に黒い欲望をぶつけられる場面を思い出し、その汚い大人は優の意志に関係無く荒魂となったミカの記憶を通して見ることができ、黒ずんでいて姿形がハッキリとしない化け物のように見えていた。そのとき、ミカが味わった苦痛と恐怖といった感情が優の精神を侵略し、支配していき、その”汚い大人”という化け物と姫和が重なって見えたのである。
そう思うだけで、ミカの苦痛の記憶と姫和とのことを思い出すだけで、トイレへと駆け込み、便器に向かって腹の中にあった朝食だったか昼食だったかの残骸と優は向き合うこととなった。
ストレスによって戻したのだが、優にはそれが分からなかった。……そもそもからして、9歳の児童でしかない優に男女間の関係など理解しろというのが無理な話なのである。
優が結芽の天然理心流を受け継いだのと同じような要領で、路地裏にて花を売っていた少女ミカの記憶の中にある黒い欲望をぶつける大人の暴力と、性病に罹ってしまった同じ仲間の少女が殺処分されたことの悲しみと恐怖、生ごみと一緒に捨てられていても見て見ぬふりをしかできず、それに耐え続けるしかなかく、水と共に赤子が流れてしまったが、生きるためにそれが必要であるという現実を知ったミカの苦痛と絶望といった感情を追体験し、ミカの痛みを知ってしまった

がために、あのような黒い欲望をぶつける事ができるのは〝汚い大人〟しか居ないと思うようになった。

それ故に、優は姫和のことをミカの記憶にある恐怖と苦しみを与え続ける〝汚い大人〟という化け物と同じように見え、そう感じたのである。

（……でもまだ、耐えられる。）

だが、優はそれが理由で穢れていると思わないようにした。

理由は、それを理由に穢れているとしてしまえば優の中に居るミカが、路地裏で僅かな金銭で生きるために花を売り続けた少女が、汚い大人達ばかり相手にさせられ、玩具にされ、嬲られ続けていた少女ミカのことを穢れた女扱いしているようで何となく嫌だったから、穢れていると思わないようにした。

（……だって、いつ見てもミカさんもジョニーくんもヒメちゃんも結芽おねーちゃんもニキータちゃんも……みんなみんな穢れてない。綺麗だと思う。）

優にとっては、タギツヒメは子供達が暮らせる楽園ネバーランドへと連れて行ってくれるティンカーベルであり、ミカもジョニーもニキータも結芽もネバーランドを彩る大切な存在であり、タギツヒメと同じくらい必要な存在であった。

だから、彼等にどんな過去やどんな事があろうとも否定はしないし、穢れているとも思わなかった。

――――いや、彼等とは代えようのない唯一の〝絆〟があるため、彼等を否定しなかった。

「……さあ、帰ろう。……みんなお家に帰ろう。」

優は呪文のように呟くと、心が安らいでいった。

……そうだ、みんな還って行くのだ。それと同じように皆やっている事なのだ。

可奈美ですら持っていないネバーランドを守れるのなら、

（騙したり犯したり奪ったり殺したりするのは許されることなんだ。罪じゃない。赦されない事じゃない。生きるために必要なことなんだ。）

優はそう思うだけで、心が軽くなっていくように感じた。
姫和が自分のことを欲望のはけ口にしたとして、それぐらいで自分のために戦ってくれるのならそれで良い。
黒い欲望をぶつける〝汚い大人〟は、ネバーランドに必要無いのだ。
もしも、この感情と自分の聖域を穢すものや汚い大人が現れれば、
（……計画的に排除しないと。じゃないとミカさんが此処に来ても苦しいだけだもんね。）
だから之は、これは悪い事ではない。
ネバーランドを、自分の聖域を濁らせないためなのだ。
子供達だけのネバーランド。この聖域は美しいから、汚い大人になることなく、ずっと子供のままで居られるから、侵略してくる汚い大人は排除しなければならない。汚い大人は暴力ばかり振るうからキライ。汚い大人は黒い欲望ばかりだからキライ。
「でも、あの人には感謝しないとな。」
優は姫和のことを〝あの人〟と他人のように呼んで、感謝しなければならないと思った。
あの人は色んなことを教えてくれた。
「刀使さんの中には、〝汚い大人〟のような人も居るんだね。」
あの人はよく分からないけど、僕のために何でもしてくれるようだ。
「……だったら、どんなことをしても良いか。」
そう理解した優は嗤いながら、そう答えていた。
何故なら、ピーターパンは大人になるのを嫌がり、大人を毛嫌いし、場合によっては命すら奪おうとする者なのだから。

タキリヒメの問答

姫和はタキリヒメの目的が聞きたかったためか、それとも別の思惑があってなのか、タキリヒメに話しかけてしまった。

「その前に答えろタキリヒメ、お前に尋ねたいことがある。お前の目的は何だ?」

そのため、姫和の口から代わりに出た言葉は、タキリヒメに問い質すだけというものであった。

……しかし、何処か弱々しい声で、である。タキリヒメは以前よりも覇気を無くしている姫和の姿を見て、あることに気付いてしまった。

「ふむ?ふむふむ。……そうだな。最初に言った通り、”荒魂と人間の共存”を望んではいるのは変わりはない。それと姫和よ。我の方からも幾つか質問しても良いか?」

「……。」

タキリヒメの言葉を黙って聞いていた姫和は、内心安堵した感情と、タキリヒメを信用してはならないという相反する感情が綯い交ぜとなって、知らず知らずの内に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるのであった。

それを見たタキリヒメは、更に幾つか質問することにした。

「……お主はミント味が好きだと聞いたのだが、真か?」

「だから何だ?何の話をしているんだ!?」

姫和は質問の内容に怪訝な表情を浮かべながら、警戒していた。

「いや何。可奈美はよく知ることを信条としておるのだろう?ならば、それに倣って、お主の好物の話をしてお主のことを知ってから本題に入ろうとしたが……そんな回りくどいことは好みではないのだな。宜しい。なら、我も姫和が話しやすいよう、それに合わせるとしよう。」

そのため、タキリヒメは姫和の好物の話を姫和自身が遮ったところ

から回りくどいやり方は嫌うのだろうと言うと、姫和が話しやすいよう、それに合わせるように本題から入ると言っていた。
無論、タキリヒメがそのように誘導したのには理由がある。
「その方、タギツヒメについてどう思う?」
姫和に、タギツヒメのことについて聞き続けるためである。
そうすることで、別の話題を振るといった選択肢を奪うことができ、タキリヒメの言う本題のタギツヒメに関する話以外のことは喋れなくなり、その話題から逃れられなくなるからである。
何故、姫和がタギツヒメの話をすることを恐れているのかと言うと、タギツヒメの話をすれば、母親の篝のことについても話をすることになるからである。そうなれば、姫和は嫌でも篝を、自分が決めた使命を自分の我欲を優先して一度捨ててしまったという恥を穿り返されるかもしれないという恐怖を抱き、それを暴かれることを恐れたからである。
そのため、突然そう尋ねられた姫和は、まるでナイフで刺されたかのように怪訝な表情から苦悶の表情へと変わり、困惑するしかなかったのである。
そして姫和は、タキリヒメを疑うことなく大人しく自分の好きなミント味の話でもすればよかったと後悔していた。
「……なっ、何で?.そんなことを……。」
そのため、困惑することしかできなかった姫和は、一瞬だけタギツヒメと優、そして篝のことが脳裏に過った。
幼子に対して憐情から始まった恋情。優とタギツヒメの関係の中に自分が入れないことに対する嫉妬心と閉塞感。刀使の使命を果たそうとすらしない出来の悪い自分。その務めを立派に果たしたであろう母の篝に対する劣等感。優と可奈美達に出逢ったことから知ってしまった温かさと見捨てられた時の孤独という名の恐怖。……そして、誰かに認められたい、愛されたいという強い承認欲求。
それらの感情が、堰を切ったかのように一気に溢れ出してしまった姫和は平常心を失い、心が掻き乱され、戸惑うことしかできなかった。
「何故?.それは〟荒魂と人間の共存〟を求める我としては、二十年前

の大災厄が元で失った母の仇を討つことを目的として生きて来た娘が目の前に居れば、どう思っておるかを尋ねればなるまい？」

そして、”二十年前の大災厄で失った母の仇”がやけに鮮明に聞こえたため、姫和は口を強く噛みしめていた。

――――母は不出来な私を罵っているかもしれない。

――――だけど、仇であるタギツヒメを殺したら、あの子は二度と手に入らない。

――――ただ、傍に居るだけで良い。そうすることで何も進まない。変化も生じない。起こらない。

――――だから、母の思いを、仇を討つことを捨てようとした。だけど、常に脳裏に浮かぶのは病床で苦しんでいた母。

……それらを思い出し、その罪に対する言い訳の言葉を考えていた姫和は、どれだけ考えていても罪悪感しか込み上げて来なかった。どれだけ、優のためと言って、振り払おうとしても、消えることの無い罪悪感。癒えることの無い罪悪感。圧し掛かってくる罪悪感。その全てが今の姫和に襲い掛かってきたのである。

「それは……。」

タキリヒメにタギツヒメのことを聞かれた姫和は、病床に伏していた母親の簪のことを思い出し、タキリヒメを斬るべきだと答えようとした。

……しかし、仮にタキリヒメを斬った後、勝手に諍いを起こしたとして帯刀権を奪われ、刀使じゃなくなってしまう恐れがあった。そのため、優と離れ離れになり、その間にタギツヒメに盗られるかもしれないと考えてしまっただけで御刀を握ろうとする意志が削がれてしまう。

その姫和の姿を見たタキリヒメは気付いてしまった。

姫和は、優とタギツヒメと出逢ったことにより、母との関係に折り合いがついていないのだろうということに。それに苦しんでいることに。そこまで思い至ったタキリヒメは上手くそこを突けば、荒魂を排除する考えを持つこの刀使をこちら側へと引き込めるだろうと判断した。

恐らく、姫和はＳＴＴ隊員だった父が小学生の頃に殉職し、母親である篝も２０年前の大災厄が遠因となって命を落としたことで、両親の死別が主な要因の機能不全家族の下で育ち、そんな閉鎖的な環境下に育った彼女が２０年前の大災厄とタギツヒメのことを知ってしまえば、『自分が母の代わりに大荒魂を討伐する』という考えに至るのは無理からぬ話ではある。

そのうえ、病床で横になっていた母の面倒を見なければならないほど追い込まれ、子供らしい時間を過ごすことが少なくなり、姫和は責任感が人一倍強くなってしまっていたがために、『自分が母の代わりに大荒魂を討伐する』という考えに更に固執するようになってしまったのであるとタキリヒメは推測していた。

子供が親の代わりに家族の面倒を見たり、仕事や家事を行う事が多かった家庭で育った子供は、子供らしい時間を過ごす事が少なかった場合が多く、責任感が強すぎる性格になったり、子供らしい感受性が正常に育たないことがあり、それ故に、誰かに頼られることが自分の存在意義だと思い、共依存的な行動をとる傾向にあるということをタキリヒメは聞いたことがある。

それを姫和に照らし合わせてみると、思いの外に共通点あるように思えたのである。

例えば、子供が親の代わりに家族の面倒を見たり、仕事や家事を行う事が多かった家庭で育った子供という部分はそのまま姫和の家庭環境に当てはまり、母の本懐を遂げるために行動しているとやや恒常的に述べているところも考えてみると、結局は他者からの願いで動いているにしか過ぎず、それを裏返してしまえば、彼女自身の願望といった物が無いということでもある。事実、母の仇という存在が曖昧になってしまえば、軽く崩れて去り、迷いが生じてしまう。……そう考えてしまえば、母の本懐を遂げるという行為は誰かに頼られることが自分の存在意義だと思っている行動の一つに過ぎないようにしかタキリヒメは見えないのである。

それ故に、両親の死別によって培われ、誰かに頼られることを自分の存在意義であると思い込んでいる姫和が年下の９歳の児童である

優と出逢ってしまったことにより、その児童は庇護すべきであると考え、その児童に取り憑いているのが母の仇であるタギツヒメだと解ってしまっても斬ることができず、次第に母の本懐を遂げることが目的であると恒常的に述べていた姫和は目的を見失い、その苦しみを緩和するべく、その代わりとして優を救うことを本題にしたのであろう。……それ故に、母の本懐を遂げるという目的を捨てた姫和は、母に対して罪悪感を抱き続けることになる。

それ故に、姫和は優を救うことが存在意義であると思い込み、そうして年下の優に頼られることを自分から求めているうえ、承認欲求も肥大化してしまったのだろうとタキリヒメは推測していた。

そうであれば、優を篝の代用品のように大切にしていることになる。ともすれば、恐らくだが、姫和は優のことを篝の幻影を重ねて見てしまったことが一度ぐらいはあるだろうということもタキリヒメは推理していた。

そのため、半ば荒魂と化した幼子(優)を救うか、それとも志半ばで命を失った篝を優先するかで板挟みに遭い、今も悩んでいることからその推測と推理通りであるとタキリヒメは感じたのである。

……以上が、タキリヒメが姫和の過去の経歴を調べ、今の姫和の状態を基に推測した十条　姫和の人物像である。

そこを突けば、姫和の心を更に苦しめ、弱らせることができ、そうすれば心が弱った人間は誰かに頼りたくなり、説得しやすくなれば、自らの幕閣に加わるように誘導することも可能であろうとタキリヒメは図っていた。

「お主は今まで、その病床の母の世話をしていたそうだな。それを見て、母の仇を討つことを目的にし、今日まで剣術の腕を磨いたのであろう?ともすれば、タギツヒメの片割れである我を許すことなどできまい。……そうであれば、お主はこの会談自体に反対であろう?」

そのため、タキリヒメは姫和相手には、母親である篝に関することを重点的に聞くことにした。

上記のように、刀剣類管理局と二十年前の大災厄にて暴れた大荒魂の片割れであるタキリヒメを目の前にして、私情を捨てられるかどう

かと聞きながら、である。
「だが、お主は病床に伏していた母に代わって料理や掃除といった家事をしたり、家を守ったりしながら今まで尽くして来たではないか？……ならば、幼子のために頑張ろうとする自分に誇りを持って、自らの意思を少しぐらい通しても良いのではないか？」
そのうえ、タキリヒメは姫和の心を弱らせ、説得をし易いようにするべく母親の篝のことについても話し始めていた。
心を弱らせ、判断を鈍らせた後は、心が喪失しかけている相手の長所を褒めるといった甘言を用いて、『母を捨てて、タキリヒメが言う荒魂との共存共栄に協力する。』という方向へと判断するように仕向けつつ、説得しようとしていた。
そのうえ、上記の様にタキリヒメが姫和に対して、貴女はこうするべきといった趣旨で言うのではなく、素晴らしい貴女ならこうするといった趣旨で話したのは、自らの判断によって選んだと思わせることで、更にその考えに固執させるという算段があったからである。
『私は誓った。母さんの命を奪って、なお人の世に堂々と居続けている奴を私は討つと！……母さんの無念は私が必ず果たすと決めた。』
そうして、タキリヒメの篝と優に関する話題ばかりをしていたせいか、姫和は嘗ての自分の言葉を一つ一つ思い出してしまった。
『可奈美。お前は実際に人を斬ったことはあるか？』
嘗ての姫和が言う。
意味深に人を斬ったことがあるかと。
（……だから何だ。お前だって人を斬ったことないだろ？何様のつもりだ。自分に酔っているだけだろ!!?）
それを今の姫和が反論していた。
……お前だって、人を斬ったことが無いくせに何様だと。
『荒魂化した人は最早人じゃない。稀に記憶を残し、言葉を話す個体もいるが荒魂は荒魂だ。御刀で斬って祓う。それしか救う手段はない。』
数ヶ月前の姫和は言う。荒魂化した人間は御刀で斬って祓うしかないのだと。

（……それがどうした?お前も優のことをバケモノ呼ばわりするのか?……醜いお前の知ったふうな言い方が気に障る。癇に障る!!）

それを今の姫和は反論する。

なら、そういうお前は幼子でも、愛した者でも斬り捨てられるんだな!?そう言うことなんだろ!?……と。

『私達刀使は、人々の代わりに祖先の業を背負い鎮め続ける巫女なんだ。』

少し前の姫和が述べる。

刀使というものは、人々の代わりに祖先の業を背負い鎮め続ける巫女であると。

（……うるさい黙れだまれダマレ、お前に、おまえに!……オマエナンカニナニガッ!!）

それを今の姫和は必死に否定し、無かったことにしようとした。

まるで駄々っ子の子供の如く、騒ぎ立てるように必死に否定し、過去の自分の言動と在り方を認めようとはしなかった。けれど、どれだけ騒ごうとしても過去の自分が言ったことは消えることは無いのだということは心の奥底で理解していた。

姫和は、一つ一つ自らの言葉を思い出す度に自問自答し、自らの過去の言葉を責めた。そして今の自分を恥じた。

様々な感情が混ざっては消えを繰り返し、繰り返す。いや、繰り返してきた。

だが、そのような行為をする今の私を過去の自分が責め立てるように荒魂を、タキリヒメもタギツヒメも優も斬るようにと囃し立てていた。

……之は母の本懐が全てだと決めつけた復讐を遂げようとしたお前が望んだことだと。だから、荒魂となった人は斬り祓うべきだ。

私は言う。違う、私の本当の望みは誰かを愛し愛され続けて、命を育むことなんだ。誰かを愛し愛され続けることはとても良いことなんだ。そうして、あの子に私との間の子供が居れば、考え方を改めるはずだ。

売女が何を言うと、違う私が言う。手に入らないのなら、いっそ殺

して一生自分だけの物にすれば良いだろう。そうすれば、もう誰にも盗られない。歩にも、タギツヒメにも、そう誰にも。

血に溺れた殺人鬼め！とまた違う私が否定する。彼はタギツヒメと一緒になった者だ。だから、両親を殺された私に一生尽くす義務がある。私の黒い欲望を充たす物にすれば、タギツヒメへの当て付けができ、溜飲が下がる。

過去の姫和と今の変わった姫和と血に溺れた姫和と昏く淀んだ欲望を持つ姫和が、姫和の一つしかない頭の中で勝手に暴れていた。

悪いのはお前だと、いいや悪いのはお前だと、違う皆の総意だったと皆が皆、狂ったように叫んでいた。

彼女等を見た姫和は、皆一様に罪悪感と呵責によって狂っているのだろうと理解していた。……そして、私もそれと同様に狂っていると。

そんな彼女達は、ドス黒い魂となった彼女達は、姫和のことなどお構いなしに一斉に叫ぶ。

優の死体を愛で優の血を浴びて一つになれたと下卑た笑みを浮かべる妄想をしたのはお前だ私は赤子でも何でも良いから繋ぎ止める手段があれば良いだけなのだ私はタギツヒメを殺せば溜飲が下がるのは事実だからワタシが優をころせばワタシだけのものになるのは間違いないから悪いのは邪魔をするお前達だ血に飢えたお前が悪い売女のオマエダ私にもタギツヒメから奪い返す権利はある私は今まで一人で頑張ったのだから良い目を少しくらい見ても良いじゃないかそれの何が悪いいやお前が悪いお前だ私だ貴様だお前だおまえだオマエダオマエダオマエダ!!

昔の姫和が言う悪いのはお前だと。

今の姫和が言う悪いのは狂ったお前達だと。

血に溺れた姫和が言う悪いのは邪魔をするお前だと。

昏く淀んだ欲望を持つ姫和が言う良い目を見るのが何が悪いのかと。

頭の中に居る複数の姫和がぐるぐると同じことを考えては消え、繰り返し考えては消え、考えては消えを狂ったように繰り返している様

を見た姫和はこう思った。

心が折れそうだと。

そのうえ、そう思う度に、姫和は自分自身が酷く歪んでいるように感じた。醜い女のように感じた。下衆な人間だとも思えた……。

……姫和はそればかり考えていたせいか、自分に自信が持てなくなっていた。

心を弱らせて、そこに付け込んで〝説得〟しようと下卑た笑みを浮かべる者が居ることに気付くこともなく。

タキリヒメとの対話

「あの！……タキリヒメさん！私と剣の立ち会いしませんか!?」

自問自答していた姫和は、可奈美の大きな声でハッとなり、可奈美の方へ意識を集中させるのであった。

それは、剣術好きな少女である可奈美が言うには何の問題も無い発言のように朱音達は思えたため、誰も咎めなかった。実際、本来の時間軸では何も問題視されていなかったし、前回の会談も特に何も言われなかった。

――――しかし、

「……貴女は確か、衛藤　可奈美隊員でしたね？それは、貴女が所持している〝千鳥〟を使ってのことでしょうか？」

今回は、可奈美のそんな性格と性質を理解していないタキリヒメ派の議員が居たのである。

「……えっ？あ、はい。……そうですが？」

しかし、可奈美はどういう意味で聞いているのか気付かなかったため、そのまま思ったことを返答するのであった。

「なるほど、可奈美隊員はこれから共闘すべき相手に真剣でもある御刀を向けるということですか。……しかも、タキリヒメ様に対して最も致命傷を与えるであろう〝千鳥〟で、ですか？……朱音様。これは一体どういうことなのでしょうか？もしやとは思いますが、立ち合いと称してタキリヒメ様を亡き者にしようという心算ではないでしょうな？」

これから共闘しようというタキリヒメ相手に、最も効果の有る御刀〝千鳥〟という刃を向けて立ち合いを所望したという可奈美の返答を、タキリヒメ派の議員は可奈美から引き出してから朱音に抗議していた。

タキリヒメを立ち合い中の事故と称して殺害する気ではないかと。

「そ、そのようなことは断じてありません!!……ただ、彼女は刀を合わ

せた者を感覚的に捉えられると言いますか、そのような特質を持つ娘でありまして、それ故にタキリヒメのことをよく知ろうとし、そのために行動に起こしただけであります。彼女はそのようなことまで考えておりません。」

　タキリヒメ派の議員の追及に、朱音は可奈美の〝剣を通してまっすぐ対峙して、感覚的に相手を理解する習慣〟が有る娘であると説明するが、

「この期に及んで嘘を並べるお積りですか!?いえ、共闘に関する協議の場において刀を抜こうとするなど言語道断です。……このことについては、正式に刀剣類管理局へと抗議文を送らせてもらいます!」

　タキリヒメ派の議員は、朱音の言葉を聞く意味がないと言わんばかりに怒りながら語気を強め、刀剣類管理局本部に可奈美隊員が共闘相手であるタキリヒメに御刀を向けようとしたという内容の抗議文を送ると非難していた。

「まあ待て、まだ１４かそこらの娘御の言うことだ。そう辛く当たるな、我は気にしておらん。」

　しかし、タキリヒメが刀剣類管理局に正式な抗議文を送ると激怒している議員に、怒ることなく平静となるようにと命じていた。

「……しかしながらタキリヒメ様。可奈美隊員は歳が幾つであるとしても、彼女は刀使であり、この国が承認する立派な国家公務員の一員です。彼女の発言がどのようなことになるのかというのを理解してもらう必要があります。」

「私がこうしてもか?」

　タキリヒメがそう言うと、タキリヒメ派の議員に向けて頭を下げるのであった。

「!……タキリヒメ様、頭を上げて下さい。」

「そうは言うが、貴君が彼女等を咎めるのであれば、前回の彼女等の会談にてその点ついて我も窘めるべきであったであろう?」

「……分かりました。貴女様のご指示通りに致します。」

　そのため、タキリヒメが代わりに頭を下げることでどうにか治めたかのように見せたのであった。

そうすることで、可奈美や姫和に懐が広いところを示すと同時に、「という訳だ。我の提示した〝ノロの分祀体制から荒魂を離島に配備する方針への変更〟と〝一定数のタキリヒメ派の人間を刀剣類管理局の方針について協議にする場にも参加させる〟ことをよくよく検討するようにお願い申し上げる。朱音局長代理？」

刀剣類管理局に正式な抗議文を送ると激怒している議員をタキリヒメが抑えた見返りに、タキリヒメが提示した二つの条件をよく検討するようにと釘を刺すことができた。

そのうえタキリヒメは、朱音が舞草の保守派との間に亀裂が生じ始めていることを知っているうえで、二つの条件を呑むようにと迫っていたのである。

こうすれば、仮に条件を呑んだとしても、舞草の保守派は朱音に反目し、分裂してしまえばこちらを攻撃するどころではなくなるうえ、例え二つの条件を拒否したとしても可奈美の件で抗議文を送り、刀剣類管理局の社会への信頼を失墜させることができるため、そうなれば刀剣類管理局の社会への信頼を取り戻そうとする朱音側から再度話し合うことを求められる可能性が高いのである。その際に、こちらは今回の会談よりも強く迫ることができるのであり、タキリヒメはそれが狙いであった。

タキリヒメにとってはどっちに転んだとしても、得しかないのである。

「……さて、それと衛藤　可奈美よ。お前は刀を合わせた者を感覚的に捉えられるからこそ我と手合わせ、もとい立ち合いを所望していると前回もそう申しておったな？」

「あっ、はい！」

タキリヒメにそう言われ、可奈美は二つ返事で答えるのであった。

「だが、それが本当の願いか？」

「えっ……？」

しかし、タキリヒメに突然そう問われた可奈美は戸惑った。

……何故、そんなことを聞くのかと。そんなこと聞かないで欲しいと。

「重ねて尋ねる。……本当にそれが今のお前の本心であり、お前の願いか？」

「！……ええ、そうです！……そうなんです。だから、私はそうすれば、お互いよく見れば人間の事も荒魂の事もよく知り合えるんじゃないかなって……。そうすればお互い、お互い歩み寄ることができるんじゃないかな、……とそう思っただけです。」

可奈美は、タキリヒメに必要なことなのかと再度問われるものの、強く、ハッキリと必要であると返答することができなかった。

「……ふむ、よく知る。よく見る。というやつか？ならば、その前に其方に尋ねたき事がある。……無理をしておらんか？」

弱弱しい声で返答をした可奈美を見て、タキリヒメは尋ねてはいけないと思いつつも、何故か尋ねてしまった。

可奈美自身に自信が無いというか、何処か迷いが有るかのように見えたからであろうかとタキリヒメはふと考えてしまっていた。

「！……そんなことは……ありません!!」

その結果、可奈美はまるで聞き分けの無い子供が意固地になったかのような返答をし、反抗的な目でこちらの様子を伺うというタキリヒメが危惧していた説得が困難となる状態へと向かってしまった自分の愚行を後悔していた。

……相手の領域に必要以上に踏み込むのは、却って相手に警戒されるということはタキリヒメは理解していた。だからこそ、タキリヒメは尋ねてはいけないと思っていたのだが、何故かは分からないが聞かねばならないと思ってしまったのである。

「可奈美よ。そういうお主は、見えているのか？……いや、この我に対して本当に望んでいるのは、聞きたいことはそれだけか？」

そうして、相手に警戒感を与えるだけの悪手であると理解していても、タキリヒメは優しい口調で再度尋ねるのであった。

本当に望んでいるのは、立ち合いだけなのかと……。

そう優しい口調でタキリヒメ尋ねられた可奈美は、どう答えるべきか悩んでいた。

「……。」

何故かは分からないが、可奈美はタキリヒメのことを大きくて、広くて、何もかも受け入れてくれて、それこそ人間も荒魂も?み込む、というよりも優しく包み込んでくれるような、さざ波しかないような穏やかな海みたいに感じられ、何故か母の美奈都の顔を思い出してしまった。

『何でまだ出動できないんですか!?もう総理は襲われているんでしょう!?』

『まだ出動命令は出ていないので、持ち場から離れないで下さい。』

そして、母の美奈都の顔を思い出してしまったせいか、国会周辺での警備の際、デモ隊との衝突を避けさせるためなのか、国会周辺で警備に就いていた警察官と自衛官に遮られ、前線に居る優の元へ行けなかったことで、何も出来なかった自分を思い出し、自責の念に駆られていた。

そのうえ、その後も可奈美は勇気を持って優との面会へと向かったのだが、それができなかった。

理由は、優が半ば荒魂と化していることから、荒魂扱いされていることが発端となっているが、やはり決め手となったのは、自衛隊員をノロのアンプルで強化することで人体にどのような影響があるか、蝶型の荒魂を使役することが可能となればどのような作戦行動が可能になるのかという人体実験の後始末を行った江仁屋離島。民間人に偽装した反政府主義者の隠れ家となっていた安アパートへの襲撃作戦といった非合法な作戦を遂行したことで優のことを高く評価した政府上層部の強い意向と昨今の諸外国による非合法な工作活動による侵略に対抗するため、陸自の特戦群と米国のＣＩＡやＤＩＡといった諜報機関の指揮下に在る部隊と共に非合法な活動と作戦に従事させられていた。

そんな事情もあり、タギツヒメやタキリヒメといった大荒魂に対して有効打となる〝千鳥〟を所有する可奈美隊員の造反を防ぐこともそうだが、可奈美と優が接触すればするほど、優が非合法な活動と作戦に従事させられていることに気付かれる可能性が姫和よりも高かった（それに、タキリヒメやタギツヒメといった大荒魂に対して有

効打となる〟小烏丸〟の所持者であり、他者に依存する傾向が強い姫和には、優に対して依存するように仕向けることで刀使としての役割を果たそうと躍起にさせるようにし、タキリヒメやタギツヒメといった大荒魂に対する対抗策と有用な戦力を保持したかったという日米両政府の思惑があった。)。そのため、可奈美には治療中や討伐任務中といった理由を付けて優との接触を可能な限り妨げていた。

(……また何もできなかった。)

優の居る所へと向かえなかったこと、優との会えないことを一つ一つ思い出していた可奈美は、優が何時かは自分を残して何処か遠い所へ行ってしまい、自分は一人ぼっちになるのではないのかという恐れを抱き、タキリヒメに心を委ねたくなる気持ちを抱いてしまう……。

そして、タキリヒメの要求を受け入れてでも、共闘すれば良いのではないのかと考えてしまう。

「……すみませんが、面会時間は過ぎました。本日のところはお帰りください。」

だが、これ以上話を進めてタキリヒメと可奈美が立ち合いするのを何とか防ぎたかったタキリヒメ派の議員の横やりのお陰で、可奈美は冷静になるのであった。そして――――、

『気を付けてね。』

『それに、政府の一部はタキリヒメを支持し、人権と一部の国政を一任させるべきだと言っておりますが、それは危険な事でしょう。タキリヒメは我々の様な者がどうこうできるものではない。』

聡美と朱音がタキリヒメは充分に警戒すべきであるという趣旨の発言を思い出し、可奈美はタキリヒメに心を委ねることを踏み止まることができたのであった。

「……分かりました。それでは、また後ほど。」

こうして、可奈美達とタキリヒメの会談は何の進展もなく終わり、次の予定の薫とエレンといった他の刀使達との会談の準備をするのであった……。

姫和と可奈美との会談を終えたタキリヒメは、次の予定であった薫とエレンとの会談を行っていた。
無論、彼女等を味方に引き入れればと思い、タキリヒメは応じたのだが……。
「……お前、何が目的だ？」
開口一番、薫はタキリヒメにそう問い質したことにより、エレンを驚愕させていた。
「……ふむ。目的とな？」
だが、タキリヒメは薫にどういう意味か尋ねるのみであった。
「どうせ、お前の目的は『愚かなる人間共よ！我に従え～～～。』……てな感じなんだろ？」
「……薫？益子の刀使がそんな短絡的なことを言っても良いんデスか!?」
「良いんだよ。先方が全然対話に応じないんじゃ、俺はそう言いたくなる。」
薫のエレンの会話を聞いたタキリヒメ派の議員は、不遜な態度を慎むよう窘めようとするが、タキリヒメはそれを手で制すと、スッと立ち上がるのであった。
……すると、
「フハハハハ!!愚かなる人間共よ！我に従え～～～。」
と突然言い始めたのであった。
そうして、薫とエレン、それに美弥とタキリヒメ派の議員等はポカンとするのであった。
「……よし！これで我に従う気になったであろう？」
「いやいや待て待て！どうやったら、そんなふうに受け取るんだよ!!?」
タキリヒメの返答に困惑しながらツッコミを入れる薫。
「うん？我にこういうのやって欲しかったから、そんなことを述べたであろう？」
「ちげぇーよっ!!んな訳あるかーーー!!」
薫のツッコミにタキリヒメが薫の求める姿に合わせてやっただけだと答えてきたので、薫はそんなつもりは無いと大きな声で否定する

のであった。
　こうして、薫の追及をタキリヒメは躱すことが出来たのであった。

　その次は、歩がタキリヒメに面会していた。
　理由は、歩のことを心配していた美弥が、それを望んでいたこともあり、タキリヒメが要請したのである。
　当初は、折神　紫派と目されている綾小路武芸学舎出身の歩とタキリヒメを接触させることによって、綾小路側にタキリヒメのことが漏れることを警戒して接触させないようにされていたのだが、国会周辺の騒動にタキリヒメが自分から姿を晒したこともあって、隠す必要性が無くなったので面会が許されたという経緯があるのだが、そのことを歩と美弥は知らない。
「あ～ゆ～む～～。」
　とはいえ、美弥は歩が来てくれたことには素直に喜んでいた。
　タキリヒメの監視役として、この部屋にずっと軟禁されていた美弥は、歩が荒魂事件が頻発している関東を中心に活動する特別任務部隊から特別遊撃隊に転属された(監視は今も続いているため。)という話を聞き、上手くやっていけてるのかどうか心配であった。そのため、元気そうにしている歩の姿を見て、一安心したと同時にタキリヒメに勉学漬けと地獄の訓練の日々に辟易していたため、安堵したのである。
「ど、どうしたの美弥!?というか何でこんなところに!!?」
「いや、だってアイツ私のことを自分の従者だとかホラ吹いて此処に拘束させたんだよ!!酷い目に遭わされたんだよぉっ!!」
　美弥は歩に涙と鼻水を流しながら近付くと、タキリヒメのことをアイツと呼んで、指を差しながら必死に自分の窮状を訴えていた。
「え?……そ、そうなの?」
　美弥の行動に驚いていたこともあって、状況が読み込めなかった歩はタキリヒメのことを横目で伺うことしかできなかった。
「何を言う?我は此奴に紫直伝の剣術を教えてやっているだけだぞ

?」

「え?……それだったら、別に酷い目に遭っていないのかな?」

しかし、美弥の訴えに対して、タキリヒメは剣術を教えているだけだと返答していた。

強い刀使になることで社会に貢献したいと日々奮闘し、日夜訓練に励む歩はそれを聞き、それは酷い目に遭っているということになるのかとつい思ってしまい。口に出してしまった。

「だっ、騙されないで歩!アイツはあんなこと言っているけどパワハラ、労基違反上等でこれぐらいできて当然、できなきゃ折檻するっていうヤベー奴だから!!」

「何を言うか。我のお陰で写シが一回から二回ぐらいは張れるようになったではないか。それを考えれば、礼を言われるのは解るが、批難される謂われは無いぞ?」

「だったら、あの卑猥な言葉の羅列のようなこと言うなよ!!聞いてるコッチはすげぇ恥ずかしいんだよ!!どうせお前、意味分かんないで喋ってるんだろ!!」

「いやー、そんなことはないぞ?ちゃんと理解して、心を鬼にして言うておるだけだぞ?」

「じゃあ、どういう意味で言ってんだよ?理解してるんだったら言えることだよな?」

「……いやぁ、今それを言うのは少し憚れるからのう。」

「誤魔化すなあぁぁぁぁぁ!!!」

美弥とタキリヒメの言い争いを遠巻きに見ながら、歩は仲が良いなと思いつつも、美弥のことを羨んでいた。

何故なら、特別任務部隊から本部直属の特別遊撃隊に栄転したとはいえ、周りのレベルの高さに驚愕するとともに真希や可奈美から教授を受けているにも関わらず自分が強くなっているように感じなかったため、周りとの差が埋まっているように感じなかった。そのため、自分が何故選ばれたのか、自分は部隊のお荷物になっていないか毎日が不安であった。

「……いいなあ、美弥は色々と教えてもらって。」

そんな理由もあり、歩はタキリヒメから剣術等を教えてもらっている美弥を羨んでいた。そして、ついボソリとそんなことを口走ってしまった。

「え？……どうしたの歩？」

歩がボソリと口走った言葉をたまたま聞いてしまった美弥は、どうしたのかと尋ねたのであった。

美弥にそう尋ねられた歩は、友人相手に愚痴のようなことを吐いてしまったことを後悔するが、このまま黙ったり、隠しても美弥に悪い印象を与えるだけだと思い、正直に話すことにした。

「……いや、私、本部直属の特別遊撃隊の一員に選ばれたんだけど、何て言うか……私が選ばれた理由が分かんなくて、部隊のお荷物にならないように鍛錬を続けていて、上達しているかどうか分からないで悩んでいたときに獅童さんや衛藤さん、同じ隊に居る先輩や友達から色々教えてもらってはいるんだけど……それでも、自分が思っているほど上達しているように感じてなくて、それで私もタキリヒメさんに剣術を教えてもらえれば上達するんじゃないかなー、とかつい思っちゃって……。」

特別遊撃隊に配属された歩は、真希や可奈美の指導の下で鍛錬を励んだことと、同じ部隊に所属する先輩方と仲間の応援もあって、初めての実戦時に相対した巨大な荒魂を部隊の仲間と共に討伐できたのだが、歩としては可奈美や真希、同じ部隊に所属する人達といった世話になった方々への恩返しとその人達のお陰で上達したという証明も兼ねて、単独で倒したかった。

そのうえ、同じ部隊の仲間、つまりは特別遊撃隊に配されるほどの実力者と共に討伐したことで、実際は先輩や仲間達の実力のお陰なのでは？という疑問を抱き、自分個人の実力は大して上がっていないのでは？と思い悩むようになり、遂には同じ部隊の優秀な仲間の足を引っ張っているだけなのでは？と、仲間にそう思われてはいないだろうかと不安に思っていたのである。

「……私、このままじゃ良くないっていうのは分かっているんだけど、でもこれ以上どうすれば良いのか分からなくて、それでちょっと行き

詰ってて……。」
　とはいえ、真希と寿々花は歩の部隊指揮能力においては可奈美以上のものがあると評価しており、可奈美と同じ部隊の先輩や仲間達もひたむきに鍛錬に励む姿を見て、好感を持たれており、歩が危惧する事態にはなっていないのだが、歩はそのことに気付いていなかった。
「そっか、歩も苦労してんだね……。」
　歩の悩みを聞いた美弥は、歩は出世したけど、それに見合う苦労と研鑽を積んで、色んな人の世話になったからこそ、それに見合った結果を残そうと日々奮闘しているのだろうと思ったのである。
「……だったらさ、一人で思い悩まず先ずは周りの環境を最大限活かすようにするってのはどう？」
　そのため美弥は、日々奮闘している歩の努力にアドバイスしようと思った。
「……周りの環境を最大限活かす？」
「そうそう。歩の話を聞いてて思ったんだけど、今の歩は特別遊撃隊っていう周りのレベルが自分よりも高い部隊に配属されて、思い悩んでいるんだよね？それで同年代の子は何人か居るの？」
「……まあ、何人かは居るけど。」
「その人達は、どういう人達なの？」
「実家が道場の娘さんとか、小さい頃から剣術をやっていた娘とかが多いから、向上心は強くて、日頃の鍛錬は欠かさない人達ばかりだよ。」
　先ず美弥は、歩の今現在の状況を聞き、そこからタキリヒメから教わった中で最も最適であろうと思える方法を歩に伝えようとしていた。
「……それなら、歩達の練習風景を動画にして公開するってのはどう？」
「え？」
　そして歩は、美弥の『動画配信者になって、仲間と共に練習風景を配信すれば剣術が上達する。』という答えに驚くしかなかった。

タキリヒメとの邂逅

歩のことを心配していた美弥の要望に応えるべくタキリヒメは歩との面会を要請し、歩はタキリヒメと美弥の居る場所へと来れたのだが、歩は剣術の腕が上達せず、行き詰っていたことに思い悩んでいたことをタキリヒメと美弥に打ち明けていた。

そんな友人の悩みを聞いた美弥は、

「……それなら、歩達の練習風景を動画にして公開するってのはどう？」

と歩に動画配信者となることを提案していた。

「え？」

美弥の提案を聞いていた歩は、驚くしかなかった。

何故、動画を配信したら剣術が上達するのか理解ができなかったからである。

「……まあ、いきなりそんなこと言われても困惑するしかないよね。動画配信を推すのには理由があるんだけどね。」

美弥はそう話してから、本題に入っていた。

「その理由ってのが、私がタキリヒメに勉学を教えてもらっている風景を動画共有サービスに動画投稿させられているんだけど、その内容がこの問題を解いてみろだとかこの文章を英文に直してそれを説明しろとかばっかりやらされていて……。最初は批判や酷い中傷のコメントが多かったんだけど、それにめげずに、ていうか、辞めようとしたらタキリヒメに脅されて辞めることができなかったんだけど、それでも続けていくうちに自分の知識を元に発信しているから間違いやできないこと、それに自分の足りなかった部分に気付けるようになって、それを直してやっているうちに段々と応援のコメントとか良い評価とか貰えるようになったんだ。それで、私は評価されているんだ。こうすれば間違っていなかったんだ。って思えるようになって、それで自分に自信が持てるようになったんだよ。」

「……脅されているんだ。」
　タキリヒメが創った問題を解く美弥の姿と美弥の英語力を動画共有サービス上に動画として投稿させられていたことをタキリヒメに脅されているにも関わらず、笑顔で話す美弥の姿を見て、タキリヒメに洗脳されているか信奉しているのではないかと思ってしまい、歩は美弥に対して何とも言えない気持ちとなるのであった。
「あっ……で、でもまあ、それで自分の成績が上がったのは間違いないよ。動画投稿をやり続けた後に綾小路から送られてきた課題がスラスラと解けれるようになったからタキリヒメの言っていることって一応は効果が有るんだなって思ってるだけで、別にタキリヒメが凄いとか言いたい訳じゃないからな！」
「あ、うん。」
　歩の反応を見た美弥は、歩が自分のことをタキリヒメを信奉する信者か何かのように思われたのではないかと思い、それを否定するべく必死で違うと言っていた。
　しかし、歩は美弥の剣幕に圧され、空返事しかできなかった。
「ま、まあ、今の世の中ってインターネットが普及して様々なサービスが出始めたじゃない？例えばＳＮＳとかブログとかで近況や自分の考えを広めたり、もしくは動画投稿できる動画共有サービスでも自分自身を発信できるようになったりして、個人が出来ることが一気に増えたじゃない？そんな時代だからこそ、昔の様な一人で籠ってする詰め込み式より、他者のことを認めて、高め合いながら上を目指した方が教養に対する興味が何倍も高まって、結果覚えが良くなるから、その環境も利用しろってタキリ……というのを聞いたことがあるんだ!!」
「あっ……そうなんだ。」
　美弥の説明にタキリヒメと言いかけたところから、恐らくタキリヒメからその勉強法を強いられていたのだろうということは理解したが、先程と今の美弥の反応を考えて、歩は敢えて何も言わなかった。
「あっ、でも歩の場合はちゃんと周りの人の協力を得てから行うようにね？勝手にそんなことしたら、朱音様に責任が及ぶかもしれない

し、最悪、私が言った方法ができなくなる可能性が高いから、そこは注意しときなよ？」

「……そうだね、美弥の言う通りだよ。私一人だけでやることじゃないしね。」

「そうそう、勉強っていうのも、それを教える教師とそれを教わる生徒がいないと成り立たないしね。それを考えると剣術も相手が居ないと成り立たないでしょ？」

美弥に自分が行っている勉学も歩が日々励んでいる剣術も相手が居るからこそ成り立つものであると言われた歩は納得していた。

「……そうだよね。私が衛藤さんを憧れた理由も元を正せば、あの人のように強くなれば人の役に立てる刀使になれるかもしれなかったからだったよ。それを思い出させてくれてありがとう美弥！」

そして歩は、美弥の学問も剣術も一人ではできないという考えを聞き、可奈美に憧れた理由を思い出せたと言って美弥に感謝していた。

（……そうだった。そうだったよ。私はその姿を見て憧れたんだ。衛藤さんに憧れたんなら、仲間と共に大荒魂討伐した衛藤さんみたいに私も皆と一緒に強くなるべきだったんだ！）

美弥の話を聞いた歩は、仲間と共に強くなることを決意すると共に、

「それなのに、私はどんなことしてでもって、思っちゃった。……色々と教えて貰ったのに、私、間違ってました。衛藤さん。」

歩はただ強さだけを求めていた己を恥じ、小さい呟く声量で可奈美に謝罪していた。

「ん？間違ってたって？」

しかし、美弥は聞き逃すことなく、先程呟いた内容を美弥に尋ねられた歩はハッとした顔をして、観念したのか、それとも此処に居ない可奈美への謝罪の意味も込めてなのか、素直に答えていた。

「……私、特別遊撃隊に任命されて浮かれてバカになっていたのから、少し思ったんだ。……どんなことをしてでも強くなろうって。」

「……。」

それ故に、歩の懺悔をただ静かに黙って聞く美弥。

「少し考えれば解ることだよね。……どんなことをしてでも強くなった衛藤さんを私は憧れるかどうか？って考えれば、そんな非道なことをする衛藤さんを憧れることなんてないのに、……なのに私、どんなことをしてでも強くなろうとか頭の中で……頭の中でたくさん考えちゃった。」

歩は少し悲し気な声で、美弥にそんな自分が情けなかったと告げていた。

「……仕方ないよ。歩は色んな人に助けられて、そんな人達の恩返しを少しでもしたいという気持ちが強くなって、それで焦って少し道を見失いかけたんだよ。……だから、その前に私とかに話してくれてありがとう。歩。」

「……美弥。私、美弥の言っていたことを実践して、もう少し頑張ってみるよ。」

歩は特別遊撃隊でもう少し頑張ってみると言うと、美弥に少しはにかんだ笑顔で答えるのあった。

「というか歩、何時の間に衛藤さんと会ったの？」

「あ～、その、初任務の際に応援に来てもらったときに出逢ったくらいかな。……それで凄かったんだよ!!車よりも大きいムカデみたいな荒魂を倒したんだから!!」

「へ、へえ、そうなんだ……。」

だが、美弥が可奈美の話題を振ると、目の色が変わったという表現が的確であると感じられるほどに、歩は元気になり、グイグイと美弥に寄ってきたのである。

その圧の強さに美弥は、先程の歩の元気の無い姿は何処へ行ったのかと思ってしまった。

「それで私、衛藤さんに近付くために柳生新陰流とか学んだり、一眼レフカメラで衛藤さんの姿を撮ってたんだけど……。」

「効果が無かったと。」

そして、歩のストーカー行為に美弥は効果が無かったのだろうとスッパリと言うのであった。

「ハイ。その通りです……。何で分かったの美弥？」

「そりゃそうだよ。今までアンタ鞍馬流でやってきたじゃん。流派を真似したって衛藤さんのように強くなれないと思うけど。」
「ううん、そうだね……。」
流派と行動を真似しても強くなれないと言って、美弥は歩を諭していた。
無論、歩のストーカー行為を辞めさせるためでもあるが。
「それに、私、さっき衛藤さんと会ったから分かったんだけどね。」
「当たり前だよね。衛藤さんは公務で来てるんだから。美弥に会いに来てる訳じゃないよね。」
「そこで張り合うな、そこで……。ていうか、アンタ衛藤さんのこと好き過ぎ。」
「うん！」
「即答かよ！……まあ、私の私見なんだけど、きっと衛藤さんそんなこと望んでないと思うよ。」
美弥の可奈美は歩が同じ流派を学んだり、行動を真似したりすることを望んでいないという発言に「えっ？」となる歩。
「……どうして？」
「いや、私もあの人とそんなに直接話してないから分からないけど……でも、あの人確か、剣術が好きなんだよね？」
美弥は歩に、可奈美が噂通りに剣術好きな人物であるかどうか訊いていた。
「そう聞いてるよ？それが理由でそう思ったの？」
「いや、朱音様が言っていたんだけど、衛藤さんって刀を合わせた者を感覚的に捉えられるらしいからさ、自分の模倣よりその人が創意工夫した熱意を感じられる技とかを見る方が好きなんじゃないかな？だから、自分のことを神だとか自称する中身中二病でしかないタキリヒメにも立ち合いを望んで、その人のことを知ろうとしたんだと思う。」
そして美弥は、自身が思う可奈美の人物像を歩に述べていた。
可奈美という人は、自分の猿真似なんかよりも、その人が創意工夫し、その人が籠めた思いを感じる剣技を魅せた方が喜ぶだろうということ。

「……。」

それを聞いた歩は、タキリヒメのことを中二病呼ばわりする美弥の姿に度肝を抜かれたこともあって、ただ静かに黙って聞いていた。

……そして、タキリヒメも場の雰囲気を読んで、美弥に中二病呼ばわりされたことについては、今は責めることなく、後で折檻することを心に決めていた。

「それに、衛藤さんの真似したって完璧に真似ることなんかできないと思うんだよね？……例えば、歩が衛藤さんのことを完璧に真似たければ、先ずは歩の持つ御刀を千鳥しなきゃいけないけどできる？」

「……無理です。」

「そうだよね。……だけど、衛藤さんは歩に剣術を教えてくれているということは、衛藤さんは歩に自分のコピーを求めているんじゃなくて、歩の隠されたポテンシャルを引き出そうとしていて、それに期待しているんじゃないかなって私は思っているんだけど。……違うと思う？」

美弥の話を静かに聞いていた歩は、可奈美の真似をするより、自分が鍛えた技を見せた方が可奈美は喜ぶのではないのだろうかと思い。美弥の話に納得していた。

そのため歩は、今後は可奈美と同じ流派にしようとしたり、可奈美の行動を真似するべく一眼レフカメラで可奈美を勝手に撮る行為は辞めようと心に誓うのであった。……しかし、

「違わないと思う。……けど美弥？衛藤さんを語るなら、先ずは私を通して欲しいな!!」

「メンドくさいな……。でも、〝努力〟っていうのはさ、一歩一歩進むように刀を振って鍛えるだけが〝努力〟じゃないんだよ。誰かと一緒に歩いて、相手の強さと弱さも理解して一緒に歩いて行くことだって等しく〝努力〟の形の一つだっていうことが動画投稿やＳＮＳを利用した勉強法を通じて分かったんだ。」

歩は可奈美のことを憧れていることは辞めないという宣言を美弥にしていた。

美弥はそれを聞きながら、〝努力〟という物は様々な形をしてお

り、その人次第では輝いたりすることだってできると説いていた。
（……そうだよね。衛藤さんに喜んで欲しかったら、流派を衛藤さんと一緒にしたり、行動を一緒にした猿真似なんかで得た技なんかより、皆と一緒に鍛えた技の方が見てて気持ち良いだろうし、素直に嬉しいに決まっているよね。）
そのため歩は、中身の無い猿真似より、皆と共に鍛え、高めた技の方が中身が有り、忘れることは無いだろうし、人に感動を与えるであろうと理解していた。
そして、それこそが歩が望んでいた人の役に立てる刀使の姿ではないかとも思い始めていた。
「……でも、そうだよね。美弥の言う通りだよ。私だけじゃなく皆が居てくれるから人の役に立てる刀使になれるんだよね。ありがとう美弥！今度、実践してみるね！」
美弥の教えてもらったやり方を実践してみるという歩の姿に、美弥は感動すると共に特別遊撃隊という恵まれた環境に居て、自分なんか置いて行くぐらいに精進しようとする歩のことが羨ましいとも、妬ましいとも思えた。
何故なら、美弥はタキリヒメを監視するという役目を負っているのに、市ヶ谷の外へと出すことを許してしまった無能な自分とは違い、歩は特別任務部隊を経て特別遊撃隊に栄転し、優秀な仲間が付いていたとはいえ、強い荒魂を討伐するといった明らかな差を感じ、そのうえタキリヒメから教わった美弥の話を聞いて、それを直ぐに理解し、糧とする今の歩の姿は更に、自分なんか置いて行って自分なんかが届かない遠い場所へと向かうのではないかと危惧し、美弥は焦りを感じてしまったのである。
「それと、皆と一緒に大きくて強い荒魂を倒したときは真っ先に美弥に報告するね！」
しかし、歩のその真っ直ぐな言葉に射貫かれた美弥は、羨む気持ちと妬みの感情が消え去ってしまったのである。
「あっ、……そうなんだ。……というか、何で私が先なの？歩の憧れの人は衛藤さんなんだし、それに上役さんである獅童さんに言った方が

良いって。」
　そうして美弥は、最初は小声で頷きつつ、どこか心が痛いという気持ちを抱えながら、笑顔という仮面を必死に被って、自分なんかよりも歩の憧れの人である可奈美か歩の上役となるであろう真希か寿々花に報告する方が断然良いだろうと返答していた。
「良いの。周りの人を大事にしろって美弥が言ってたんだし、最初に教えてくれた美弥にそれを実践する意味と色々教えてくれた感謝の意味も込めて、それを私がしたいだけだよ。」
　しかし、歩にそう真っ直ぐそう返答された美弥は、先程妬みと羨んでいた感情を向けていたことに気付いていない歩に対して罪悪感を抱くのであった。
（……何だよ、そんなこと言うなよ。……そんな歩のことを少しでも嫉妬したり、妬んだ私がバカみたいじゃん。）
　そして、泣かないように奥歯の歯を食いしばって、
「そうなんだ！……それはよかった!!」
　歩に心配掛けないように、涙を流すのを堪えるべく、大声を上げた後、くるりと歩に対して背中を見せるのであった。
　……そして、
「……歩。〝努力〟っていうのはさ、一つだけじゃないんだよ。一歩一歩歩んだり、誰かと一緒に歩いたりするんだっていうのも等しく〝努力〟何だってことを、それを学んだということを忘れないでよ！私が伝えたかったことはそれだけ。私が伝えたかったことが歩に届いて良かった！……ハイ！終了!!」
「えっ、……美弥？」
「良いから早く行けって！……皆、待ってるんだからさ。」
　美弥は笑顔の仮面を被って、それを言うのであった。それを見た歩はタキリヒメに、
「……あの、タキリヒメさん！……美弥のこと、お願いしますね。」
　と言うのであった。
　それを聞いたタキリヒメは、
「うむ、相分かった。お主の友人は我が預かっておく。友が伝えた言

葉を努々忘れず、胸に抱きながら精進するが良いぞ。……それと、何時でも此処へ来るが良い。」
そう歩に返答するのであった。
何時でも来いと言われた歩は、ただ静かに黙って深く礼をするのであった――――。

歩との会談を終えたその次は、タキリヒメはソフィアとの会談に応じていた。
そして、ソフィアは穂積を付き人として連れていたため、タキリヒメの横に座していたタキリヒメ派の議員とタキリヒメの後ろに隠れていた美弥を合わせて、2対3で対面する形での会談を始めていた。
「……この度は私めとの会談を応じて下さり、真に感謝しております。」
「見え透いた世辞は良い。……何が目的で我との謁見を望んだ?」
先ずは、お互いに軽いジャブの応酬から始まっていた。
「いえ、変革派の我等としましてもタキリヒメ様との謁見は願ってもいないことでありまして。」
「ふむ、しかし変革派は荒魂の掃討を掲げていると聞き及んでおるぞ?」
「ええ。ですが貴女はそのことについては既にご承知であると思われたのですが?」
ソフィアはそう言って変革派、つまりは刀剣類管理局本部長の紗南等が言う旧折神　紫派が今まで行っていた人体とノロの融合実験によって創られたノロのアンプルと冥加刀使という計画といった内情を知っているタキリヒメなら、……いや、より正確に言えば、大荒魂に取り憑かれ、それらを主導していた当時の紫と共に居たタキリヒメなら分かるだろうと暗に話していた。

尚、これらの情報は静と共に居るイチキシマヒメからもたらされたものである。

そうして、ソフィアはこれらの情報をタキリヒメに話すことによって、タキリヒメもノロと人体の融合実験に一枚噛んでいたという事実を公表すれば、タキリヒメの高い支持を一瞬で失わせることができるぞと暗に話していたのである。

「ふむ。……そう言うのであれば、我もお主に言えることはあるぞ？」

「……ほう。それは何でしょう？」

「お前が進もうとしている道は地獄しかない。得る物など、何も無いぞ？」

そのため、タキリヒメも反論するかのように龍眼を通して視たソフィアの未来を語っていた。

隠世の門を開けても、何も得る物などないと答えて――――。

タキリヒメの言葉を聞いたソフィアは、眉をピクリと動かすものの、表情は口元を緩めた不敵な表情を崩すことはなかった。

そして、地獄しかないことは理解していると心の中で独白していた。

「……続けて伝えよう。お主は狡猾な蛇であるかのように振る舞っておるが、蛇は龍になれぬぞ？龍になりたくば、蛇としてではなく我が幕閣に加わる気はないか？」

そのうえ、タキリヒメはソフィアのことを狡猾な蛇と評しつつ、蛇は神として崇め奉られる龍にはなれないと語り、加えてタキリヒメは、ソフィアに自分の臣下とならないかと説得していた。

……だが、タキリヒメはソフィアがこちらに心服し、こちら側に加わることは無いことは龍眼を通して分かっていた。……分かっていたが、自分の臣下として加えることで、隠世の門を開けようとするソフィアを止めようとし、加えて実力の有る刀使を何名か味方にしたいとも考えていたのである。

「そこまで思っておられるのに、私を野放しにして宜しいのですか？」

「我は霧に迷う者を導くことを信条とするタキリヒメであるぞ？刀使が御刀という武力を以って成り立つ者であるならば、武力ではなく言

葉で心服させるのが、霧に迷う者を導くと宣言したタキリヒメが行うべきことであると理解している。」

「……なるほど。」

ただ闇雲に争うのではなく、言葉によって心服させ、臣従させることを自身の信条にしていると言うタキリヒメの話を聞いたソフィアは、狼の時代の到来を望む自分とは別であると確信していた。

そして、支配を求めるタキリヒメと争いを求める自分とでは相容れぬことも……。

「……ですが、タキリヒメ様。蛇の中には世界を巻き込むほど大きくなり、自信が持つ猛毒で神をも殺せる蛇が居るそうですよ?そして、その蛇は世界を意味する紋章の一つなったとか、……蛇には充分に気を付けた方が宜しいかと。」

そのため、ソフィアはタキリヒメとの対決姿勢を宣言するのであった。

世界蛇と呼ばれた蛇を例に出して……。

「そして、蛇の毒はゆっくりと効くものであるそうです。」

ソフィアはそれだけ言うと、タキリヒメの居る部屋から退室していくのであった。

タキリヒメと刀使と荒魂達と感情と

その日に予定されていた全ての会談を終えた後、美弥とタキリヒメだけが残っていた部屋の中で、美弥はタキリヒメにあることを訊こうとしていた。

「……アンタ、色んな人に声を掛けてんだ。」

「そうだが、いきなりどうした？」

美弥が隅でいじけながら、タキリヒメにそう詰問してきたことに、タキリヒメはいきなりどうしたのであろうかと尋ねるのであった。

「……だって、アンタは私のこと、盾代わりにしようとしてるんでしょ？」

「……うむ、まあ、悪く言えばそうなるな。」

「それに、私に黙って勝手に何処か出かけるし。」

「いや、一応あの時は外に出るとき一声は掛けておいたぞ？」

「そうだけど！……そうじゃなくてさ。何ていうか私はさ、……その、何ていうか、私はアンタに色々と教えてもらって色々と良くしてもらったから信頼してくれているのかなって、少しはそう思っていたから一声ぐらいは掛けられるかなとか思ってた私が少しバカみたいじゃん。」

それを言うということは、どういう意味なのか分かっているのだろうか、とタキリヒメは思いながら、美弥を連れて行かなかった理由を述べるのであった。

「……そうは言うが、お主は我の正式な臣下ではないしな。……それに、お主ではまだあの場所へ向かうのは早すぎると思うてな。」

ただ単純に、美弥があの国会周辺の騒動へ向かうにはまだ早すぎるうえ、精神が狂う恐れがあったからタキリヒメは連れて行かなかった。

……人が傷付き、血に酔いしれ狂った戦場の真っ只中に送り込むには、まだ早すぎると思ったのだ。

「良いんだよ、別に！……私は刀使なんだから、写シとか八幡力とか使えるんだから少しぐらいは活躍するし！何も問題ないよ！」

しかし、タキリヒメの忠告を他所に、美弥は御刀を媒介にして隠世から超常的な力を引き出す刀使なら、活躍すると答えて、聞く耳を持たなかった。

「……そうは言うが、お主。あの場所に居たら多分、いや確実に死んでたぞ。」

「良いんだよ、別に！私は人を守るのも使命なんだから、それぐらいは覚悟してるよ!!」

命を懸けることぐらいは既に覚悟していると叫ぶ美弥。

それを聞いたタキリヒメは、叱責することはなく、諭すかのような口調で話すのであった。

「そうは言うが、自らの意志で剣を振るうのではなく、誰が言ったか分からぬ使命の下で剣を振るうのであろう？……自らの命を懸けるのに値する戦場（いくさば）へと向かった経験が有る者の言葉であれば、それを真剣に受け取るが、そのような経験はあるまい？」

「そうだけど……でも、だからって何なんだよ!!」

美弥はタキリヒメに『命を懸ける戦場へ向かった経験が無い。』と言われ、それに今までの話とどう関係有るのかと返すのであった。

「それはだな。我としても、命を懸けて戦うことに関しては否定はせぬが、如何せん戦う理由が友人に差を開かされて、それに慌てて何かしがの手柄を立てるためだとかいう理由ではのう。……それでは、誰も浮かばれんであろう。」

「勝手に決めないでよ！っていうか、歩は関係無いし!!」

タキリヒメに戦う理由が歩や他の人に負けないようにという名声のみに拘っていると指摘された美弥は、顔を赤らめながら必死で否定していた。

だが実際は、美弥は歩が特別任務部隊から特別遊撃隊に栄転し、その後は活躍するであろうことが伺えたり、他の刀使も国会周辺の警備で奮闘している姿を見て、自分はタキリヒメの監視を任せられているにも関わらず、タキリヒメが国会周辺へと向かうことを許してしま

い、自分のみが失敗しているように感じてしまったため、自分一人だけが能なしの様に感じてしまい、親友の歩にすら取り残されそうな気がしたがために何か功績を残そうと躍起になっていたのである。

「そうは言うが、我は歩のことを話しておらぬぞ？」

「！……ああ、はい。そうですよ！私は衛藤さんやら十条さんやら……最近物凄く頑張ってる歩とか見てると、自分が凄くちっぽけに感じて、それで刀使に選ばれたんだから、それに見合うように何か残したいと思っただけ!!」

タキリヒメは美弥の本心を聞くと、

「……美弥よ。何故、我がお主に戦う動機を聞くのかというとな。何かを斬るというのは思いの外、重く感じ、またその重圧に潰される者が多い。未来があり、年若いお主にそれを強いるのはタキリヒメと名乗った我の流儀に反するからだ。」

中学一年という年若い美弥にはまだ未来があり、霧に迷う者を導く者としてその者を道に迷わせるようなことはしたくなかったと答えるのであった。

「つまり、私じゃ役立たずだと思っているってことじゃん。……バカにして。」

「どうしてお主はそう卑屈なるかのう。……というよりもだ。我はお主のような人の子らが人を斬り殺すのに何の理由も無く、眉一つすら動かすことなく、感情も揺り動くことなく行える者が居たとしたら、その性根を叩き直してやるわ。」

しかし、タキリヒメの美弥をあのデモ騒ぎが起きた国会周辺へと向かわせるのはまだ早いという返答に、美弥は自分が実力不足だから呼ばなかったということなのだろうと受け取っていた。

だが、タキリヒメとしては、人が同じ人に対して残虐な行為を眉一つ動かすことなく平然と行うような者が居たら、その者の性根を叩き直すと言って、美弥の実力不足やそういった力量を求めていないと答えていた。

「……だけど、アンタは私のことをヘッポコだと思っているんでしょ。そりゃ、衛藤さんとか、十条さんとかと比べると私なんて全然だもん

ね。」
「……。」
美弥は、静かに聞くタキリヒメとは対照的に元気よくそう言って、タキリヒメの前ではそう振る舞うものの、誰がどう見ても気落ちしているのは明らかであった。
「だから……だからどうせアンタも、私みたいなこんなヘッポコよりも他の強い刀使の方へ目移りしたんでしょ？……解ってるって。だから、そっちを新しい従者でも、臣下にでも何にでもすれば良いじゃん。」
美弥はそう言うものの、タキリヒメに色々教わっているにも関わらず、何一つ成し遂げられなかった自分を強く恥じているうえ、タキリヒメにもおいてけぼりにされたかの様に感じたことに、何処か悔しいと思ってしまっている自分が居ることに気付いてしまった。そのため、美弥はその感情を否定するべく、自分よりも優秀な刀使が傍に居た方が良いだろうと言って、タキリヒメから離れようとした。
――――刀使、それは御刀によって荒魂を祓う神薙ぎの巫女。
美弥は、上記の固定観念に囚われていたため、荒魂であるタキリヒメに対して独占欲を向けているかのような行動を恥じて、強い刀使を家臣にするということを勧めることで、タキリヒメから離れようとしたのである。
……特訓に付き合ってもらったり、色々教わっている身なのに、不要な存在と言われるのは癪ではあるが、美弥は、それはそれでタキリヒメに対して踏ん切りが付くだろうと思い、何を言われても受け入れようとしていた。
しかし、
「……そうさなぁ。我は荒魂は穢れが有る故に滅ぼされるということにされているこの世の中に対して抗うと決めたことを言うたのを覚えておるな？」
「……まあ、覚えてるよ。」
「この世という大きな、いや、大荒魂よりも大きな敵であるこの世の中に対して挑んでおるというのに、どうして誰が強いとか弱いとか小さ

なことで悩む必要がある。我はどんな人間でも、どんな奴でも我の臣下になりたいと思う者は全員、我の臣下だ!!なのに、剣術が尊ぶとか頭が良いとかそんなことはどうでも良い。意気地の無い奴でも他で活躍できなかった者でも構わぬ!!我が見違えるような優れた者へと変えてやるという気構えを組んでおる。さあ、若人達よ我の下に集え、我の臣下となった者は全員大活躍させるぞ!!とな。」

タキリヒメはそう言って、誰であろうと望むのであれば、自分の臣下にすると答えていた。

「……つまり、誰でも良いってことじゃん。私もそう思っているってことでしょう?」

「どうして、お前はそう卑屈になる。」

「でも私のこと、三流刀使だとか好き放題言ってたじゃん。」

「それがどうした?我とて勝手に神の名を騙るという、分不相応な事をしておるのだぞ?」

タキリヒメはそう言いながら、見出しに〝小学生でも解る〟と書かれている世界地図の本を出して、世界地図が載っている頁を開け、それを美弥に見せるのであった。

「この世界と我を比べたら、どちらが大きい?羽虫や人と同じく小さい我より、世界が大きいのは必然的であろう?そんな大きい世界にちっぽけな我とお主を書いて、この現世たる世界と比べて見ろ。どちらが大きいと思う?」

「……。」

タキリヒメの話を何故か静かに、黙って聞いてしまう美弥。

「そんな我が乗り越えねばならぬ世界と比べたら、我も個人の才能もちっぽけなものだ。……錆びれて何も無い街にな、創った鉄道を儲けさせるために活気ある街を創った才能とやらが溢れている者も、家を買えない者に家を買えさせるようにするため、月賦で払うことで住宅を建てさせる契約を創り、それで収入が少ない者でも住居を持てるようにし、その住居を多く建てることで街を造り、その街に活気と他の街の人も来るようにするために演劇や映画といった娯楽施設を建てて、そのうえ利便性も追及して住みやすくするために駅ビルや百貨店

を創って、ようやく活気のある街を創れたのだぞ?……才能ある者も結局は自身の大望を支持する人を集めることができなければ、同じ夢を抱く者が居なければ何の役にも立たんのだ。それに、その者は地下鉄には無理解であったうえ、失敗を幾度も経験しておる。だから、我は個人の才能如きに目を曇らせん。」

そしてタキリヒメは、自身が知り得た過去の偉人である小林　一三を例に出して、才能ある者も協力してくれる人と同じ夢を抱く者が居なければ何の役にも立たないし、どんなに才能があろうが失敗もするのだと話し、それと同時にタキリヒメは自身のしたいことも美弥に述べていた。

「それにのう。お主が我と出逢わなかったり、お主が我にパソコンなる物の使い方を教えてくれなかったら、自分の世界の広げ方を知らなかったままであったぞ。そう考えると、今も神様ごっこに終始していたであろう。」

「……それって、最初に言っていた『霧に迷う者を導く神』とか言ってたアレ?」

「そうだ。お主に無視されたのは堪えたが、今はそんな神様ごっこをやっていた昔より、今の世の中に挑み、何事にも愉しむ方が充実した日々を過ごせておると胸を張って言えるぞ。昔の神様ごっこに終始し、未熟な種は所詮は虫や獣と同じとかカッコつけた昔の我に『人の姿になってる。羽虫ザマァッ。』とか草生やしながら言えるぐらいには変わったぞ。」

そしてタキリヒメは、過去の自分の弱さを曝け出しながら、美弥を励ますように話していた。

（ああ、そっか。……コイツ、こういう奴だったな。）

美弥はそんなタキリヒメを見て、元々はこういう奴だったんだろうなと思いながら、あることを思い出していた。

それは、国会周辺でのデモ騒ぎの数日後のこと。

国会周辺にてタキリヒメが現れ、その後の行動について問い詰めて

いたときのことを思い出していた――――。
『……何時の間に手なずけてたの？』
『何の話だ？』
『此処から出られたのは、……この市ヶ谷の基地から出られたのは、私以外の人の協力を得たからなんでしょ？』
美弥は、タキリヒメに対してむくれながらそう問い詰めていた。
『うむ、そうだ。だが、我としてはあの番組のように角鹿型の荒魂に跨って登場したかったのだが、流石にできなかったがな。』
タキリヒメがそう言うと、美弥は嫌な予感がしたため、どういう番組か一応尋ねるのであった。
『……一応聞くけど、何ていう番組？』
『うむ、コレだ!!』
美弥にそう訊かれ、元気良く答えたタキリヒメは、パソコンのネットワーク機能を使って動画共有サービスへと繋げると、その番組のオープニングを流すのであった。
それは、
徳川吉宗が貧乏旗本の三男坊と偽って、悪を成敗する時代劇であった。
『……。』
その時代劇のＢＧＭが盛大に流れている中で絶句する美弥。
『この様に、我が馬みたいな物に跨って颯爽と現れれば、カッコよく映ったことであろう？そうすれば、我の人気は鰻登りであったろうになぁ～～。我の傘下に入った議員等は反対しておったが、美弥はそう思わんであろう？』
『いや、まあ確かに人目に付いて、それで脳にこびり付いて離れないくらい記憶に残るだろうけどさ、それだと芝居臭すぎて、胡散臭く見られると思うんだけど？』
タキリヒメの愚痴に美弥は冷静に、暴動の最中にタイミング良くそんな格好で現れれば、タキリヒメのことを胡散臭がる人が現れると言い、
『……例えば、角鹿型の荒魂を周到に用意していることとかを突っ込

まれて、この暴動はアンタが仕組んだんじゃないかとか言われて、疑われると思うし、今のタキリヒメは国民から周知されている訳じゃないから、余計に胡散臭く見られてタキリヒメを敵視する奴が多くなると思うんだよね。それ考えたら、どう登場するかを考えるより、普通に現れた方が良いと思うし、自分がどういった人間であるかを示す方が先だと思うんだけど……。』

『ウ～ム、やはり知名度が無いのは辛いか。』

それをする前に、先ずは知名度が必要であると説く美弥に納得するタキリヒメ。

そのタキリヒメの姿を見た美弥は、自身の夢を叶えるために奮闘し、邁進しているように見え、その姿を見るだけで何処か眩しいと思えたことを覚えていた。

――美弥はそんなことを思い出しながら、タキリヒメはこういう奴だったということを改めて認識してしまっていた。

「それにな、この現世に何も持つ物が無く、神様ごっこしか出来ないうえ、彷徨うだけだった我のことを人と間違えたうえ、その後も我のことを荒魂どころか神として敬うことを一切しなかったお主とこうして一緒に居て、世界を見て回ったのは、久方ぶりに心が躍ったわ。」

そうして、タキリヒメの言葉に、何か気付いた美弥はこう思った。

（……もしかして、タキリヒメとか荒魂って怪物扱いされるのもそうだけど、神様扱いされることを望んでいないのかも。）

タキリヒメが自身の夢を語るとき、歩という友人が刀使として頑張る理由を述べるときに嬉しそうにしていたものと同じものを感じたからなのか、美弥はタキリヒメのことを何処か人間らしいと感じていた。そのせいなのかは美弥は分からなかったが、美弥はタキリヒメといった大荒魂は自分のことを神と名乗ったりする割りには化け物扱いされるのと同じくらい神様扱いされて、ただ敬うだけというのも望んでいないのかもしれないと思ってしまった。

「だが、自身のことを才能が無いと評しながらも、足掻こうとするその姿勢は我とて同じだ。そんな我のことをバカだと蔑む者は居るであろうが、好きなだけ言わせておけ。我が挑む〝この世〟にとっては、我のことなど現世に根を下ろした一つの荒魂であり、極小の点にも劣るかもしれんが、そう考えると、そんな我がこの大きな世界に挑むのは心が滾る!!我の中に在る荒々しい魂が躍るのだ!!それしか考えられなくなるほどにな!!何も無いというのは、裏返せば開拓する余地が充分にあるということなのだ!!」

それと同時に、そんなタキリヒメの行動と姿勢に、惹かれている自分が居るということに美弥は自覚していた。

田辺　美弥は、今まで憧憬を抱いた相手がいなかった。御刀に籠める思いもなかった。

それ故に、大きな大望を抱き、叶えようと足掻き続けるタキリヒメに惹かれていったのであろうか?と美弥自身思うほどであった。

しかし、その次の日には美弥の感動を吹き飛ばす出来事が起きるのであった。

それは、タキリヒメは優こと、タギツヒメと会談することができた時の事である。

「お主、何の用じゃゴラァ!何か文句あんのかゴルァ!」

「……タギツヒメよ、お前そんな奴だったか?」

しかし、優の身体を乗っ取っていたタギツヒメは、タキリヒメを見るなり、必死に威嚇していた。その様はまるで絵に描いた頭の悪いチンピラのようであったと美弥は述懐している。

……だが、現在のタギツヒメの姿を見たタキリヒメは、自身の記憶の中に在るタギツヒメは人間に対する怒りや怨嗟といった原初の感情を一つも隠さなかったため、今もタギツヒメは人への報復を望んでいるものだとばかりタキリヒメは思っていたのだが違ったのだろうか?と疑問を抱くほどであり、人への報復ばかりを口にしていたタギツヒメが、今や頭の悪いチンピラのように威嚇しているという変わり様にタキリヒメは動揺していた。

……とすれば、今現在身体を乗っ取っている優という少年の影響であろうかと推測していた。何故なら、今その優という少年の身体を乗っ取っているということは何時でもそれが可能であり、それを常にしないということはやはりタギツヒメは優という幼子に何かしら遠慮しているということだろうと推測していた。

だが、タキリヒメの推測を他所にタギツヒメは、タキリヒメに言いたいことがあり、それを伝えようとしていた。

それは――――、

「我が表に出た理由はお主が卑猥な姿で居るからじゃゴラァ!!」

「……は?え?どこがだ?」

「何を言うんじゃい!!その大きい胸が性的欲求を掻き立てたりして、いかがわしいんじゃボケェ!!そんな下劣な物を優に見せるなボケェ!!」

身体の一部が物凄く大きいからという、正直に言えば物凄くどうでもいいことを言ってきたと、タキリヒメのみならず、この会談に同席していた美弥とタキリヒメ派の議員も心の中で物凄く思っていたそうである。

「……それだけか?それほど気にすることなのか?」

「当たり前やろがい!というよりそんなに大きくする意味有ったんか!?意味有ったんかお主!?」

しかし、タギツヒメはそんな周りの雰囲気に流されることなく(読む気もないが。)、タキリヒメに続けて主張するのであった。

「貴様にまで負けたら……イキリ散らかせるのが姫和とかいう奴しかおらんやんけっ!!」

姫和ぐらいしか勝てる奴が居ないと……。

それを聞き、タキリヒメは顔に手を当てながらも必死で先程会った姫和の容姿ついて思い出していた。今までは顔だけを覚えるようにしていたので、身体の何処が大きいかとかは気にしていなかったため、何一つ覚えていなかった。

……そのため、タキリヒメは思い出すのに四苦八苦しながらも、姫和の容姿について何とか思い出し、タギツヒメに返答するのであった。

「あー、えっと、……つまり、胸を大きくしたいということだな？」

タキリヒメはタギツヒメに豊胸になりたいのか？と聞きながら、安堵していた。

何故なら、タキリヒメが見知っているタギツヒメは人に対する怒りや怨嗟の声をよく上げていたので、この現世を滅ぼす計画を練り、その行動を取るのではないかと危惧していたが、今のタギツヒメの騒がし過ぎる姿を見れば杞憂であったことが伺えたため、安堵したのである。

――――これで、この現世の全てを我が物にするという望みを邪魔する者は居ないと内心ほくそ笑んでいた。

唯一の障害となるのが、ソフィアとかいう一介の刀使が邪魔となるであろうが、彼女も戦力が無い状況であり、行動を起こすことはないだろうと判断していた。だが……、

「そうじゃ！とりあえずは我よりも胸の大きい奴は敵じゃ！滅びちまえ!!」

上記のタギツヒメの言葉を聞いたタキリヒメは前言撤回するのであった。

……それは、人類全てが敵だと公言しているようにも聞こえたため、タキリヒメは一応は〝ある事〟を聞くのであった。

「……そ、そうか、ではタギツヒメよ。本体が隠世にあることについてはどう思う？」

それは、タギツヒメ達の三女神の本体であった通称ヒルコミタマのことについてはどう思っているのか？と尋ねるのであった。

その質問に、タギツヒメは、
「えっ？アレ隠世に行ってたのか？……知らんかった。」
本体のことアレ呼ばわりし、全く興味が無いと返すのであった。
そのタギツヒメの姿を見たタキリヒメは、本体のヒルコミタマのことをどうでもいいと思っていることは理解したのであった。
「……いや、確かにアレはどうでもいいとは思うがな……フフフ。」
そして、タギツヒメのヒルコミタマなんかどうでもよくね？という感じの返しにタキリヒメはフフフと軽く笑いながら、共感していた。
現世の世界の支配を企むタキリヒメとしても、未だに人への怨嗟を引きずっているヒルコミタマは邪魔な存在でしかなく、消したかったのである。そう考えると、ヒルコミタマのことを興味無さげにどうでもいいと答えるタギツヒメの返答に共感しか抱かなかった。
そんな話をしている最中に、ねねが出て来たのであった。
「ねー。」
そのまま、ねねはタキリヒメの胸元の襟の中へと入るのであった。
「……我の胸元に何用か？」
「……チッ。ああ、そやつは胸の大きい奴が好みというエロ魂でな。……そのうえ、将来胸の大きくなる可能性がある人間を見分けられるらしいぞ。……チッ。」
突然の行為に流石のタキリヒメも怪訝な表情でねねを見ていた。
それを見たタギツヒメは、舌打ち混じりにねねは将来胸の大きくなる可能性がある人間を見分けられるほどに胸の大きな女性が好みというエロ魂（アニメ第7話にて、舞衣の胸元へ飛び込もうとしたねねに対する薫の造語であると思われる。）であると補足していた。
「……ほう。胸の大きさか。」
「ついでに言うと、この可愛らしい我よりも可奈美お義姉さまはこのエロ魂の方が大層気に入っておるらしくてな。……やっぱり納得いかんぞぉ!!」
そして、タギツヒメはねねに対する妬みと嫉みを言うのであった。
それを聞いたタキリヒメはニヤリと笑みを浮かべると、タギツヒメに対してこう言うのであった。

「……なるほどな。寄って来ないということはまな板ということなのか。」
「い、いや!!今の我は優の身体を借りているからのう〜。仕方なかろう?」
「誰もタギツヒメのこととは言っていないが?美弥のことを言っていただけだが?」
「ウ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”!!!!」
タギツヒメはタキリヒメに胸部が豊かではないということを指摘され、否定するが、直ぐにそれが嘘だとバレたことにタギツヒメは奇声を上げるのであった。
「ねぇへへへへ。」
タキリヒメの胸元に埋もれてご満悦のねね。
「というか、お主は三女(タギツヒメ)を名乗ってしまったから貧相な身体となったのではないか?」
「そこからかあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”っ!!!」
関係性があるかどうか不明であるが、三女であるタギツヒメの名を騙っているから胸が小さいのではというタキリヒメの指摘に騒ぐタギツヒメ。
「後、我は衛藤　可奈美から気に入られとるぞ。」
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”も”う”や”だ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!聞きたくない!!!聞きたくない!!!」
タキリヒメにマウントを取られ、エビのようにビチビチ動くタギツヒメ。
その両者の姿を見た美弥は、何とも言えない複雑な気持ちを抱くのであった。
しかし、ねねとタギツヒメ、それにタキリヒメという三者三様の荒魂を見て、微笑ましいとも思え、この三名はそれぞれ誰かに好かれたい、世の中を変えたい、巨乳が好きという人間にもある欲望に忠実な姿を見て、美弥は荒魂と人間の思考の差はそれほど離れていないのかもしれないと思うのであった。

――――しかし、その後に綾小路の刀使が三名、国会周辺のデモ隊の残党によって殺害されるという事件が勃発したことで、事態は急変する。

それが切欠となり、タキリヒメは現世から消滅することとなる。

特別捜査班刀使殺害事件調書
司法解剖担当医（５８歳）の証言。
……あれは、二日前の５時半でした。
何故、時間を正確に覚えているのかですって？それは、帰宅の準備を進めていたところへ本庁の方から司法解剖の依頼がありましたので、時刻は正確に覚えられることができたというのも理由の一つですが、やはり刀使さんに対する司法解剖を行うのは、何分この齢になっても初めてのことでして、それで記憶に強く残ったというのも理由の一つかもしれません。
それに、刀使さんのご遺体を見ていると、子供にノロを注入させ、ノロと人体の融合実験を繰り返していたという大きな事件を思い出してしまいまして、……その男の実験場には数多くの子供の死骸が有ったとか無かったとか、……それを考えると、その場所へ踏み込んだ捜査員達は病んだことだろうとも思ってしまいまして……本当に、この事件もそうですが、あの事件も悲惨だったなとしか思えなくて。
……ああ、すいません。話が逸れましたな。
嫌なことを思い出してしまったが故に、愚痴として現れた独り言と思って頂ければ有り難いです。
本題に戻りますが、５分後に搬送されてきたご遺体を司法解剖に付し、執刀医は私本人、他に臨床検査技師１名、監察医補佐２名の計４名であたりました。
ええ、それは通常の措置です。……ああ、それ以外に主要所見を写真に残す必要がありましたので写真技師が１名控えておりました。…そうです。通常の処置で、死体検視報告書に添付することが義務づけられておりますので。

通常と違った点ですか?

……そうですね、事件発生から司法解剖の決定が異様に早かったことぐらいでしょうか。その早かった理由ですか?さあ、私には何とも……。

それ以外は、控え室に担当警察官と検察官が待機しておりましたので、それが何か妙だなと。……いえ、特に指示とかはありませんでした。

二名のご遺体は共に脚部に銃創跡と手首に切創が残っていましたが、死因は頸動脈を刃物で切られたり、心臓といった臓器を複数箇所突かれた事が原因による失血死だと一目で分かりました。……一目で失血死だと分かりましたが、規定通りに胸腹部の切開から始めて、臓器の検査、組織標本の作成、血液、胃の内容物、尿の化学検査、毒物検査等を行い、頭蓋骨切開による脳の検索をも行いました。……ええ、やはり一番の死因は頸動脈を切られた事と臓器を複数箇所突かれた事による失血死が原因でした。

脚部に銃創跡があったことからもそうですが、殺害現場に犯人の指紋が残っている被害者の血の付いたナイフを鑑識班が発見したこと、被害者の御刀と被害者の傷口からノロの残留物が無かったという点から荒魂事件ではなく、人為的な殺人事件の可能性が高いと死体検視報告書に記載しました。

ええ、被害者の傷口にノロの残留物が残るのかと疑問に思ったことでしょうが、ＳＴＴ隊員の……いえ、嘗ての特祭隊隊員の報告書によりますと『御刀以外（例えば銃弾など）でも一時的な損傷を与えることができますが、時間経過と共に修復してしまいます。』というものがありまして、それで写シを張らずに荒魂と戦った刀使が足を荒魂に噛まれたらどうなるかと言いますと、その荒魂の歯が刀使の固い骨の部分に当たってしまうと、刀使の体内に荒魂の歯の一部分らしきノロの残留物が残ってしまうことがあり、気付いた時には既に足を切断せねばならない事態となっている事が在ったらしく、それ以降は荒魂と対峙する際は写シを張るという戦術と教育が徹底されたそうです。

それで、もし被害者が荒魂に殺されたのであれば、爪や牙、もしく

は角といった部分で殺された場合、死体の体内にノロの残留物が残る可能性が高いということです。

死亡推定時刻は、遺体の腐敗具合いと胃の中に残っていたトウモロコシが採取され、そのトウモロコシが昼時に被害者が食べていた物と一致しまして、それが決め手となりました。

……私の心証ですか？

検視報告書には記載しませんでしたが、御刀の力によって超人的な能力を得ることができる刀使が、二名もただの人に殺されるというのは俄かには信じられないという思いが駆け巡ったことと、不意を突かれると刀使も人の子であると実感したのが私の心証です。

静岡県警捜査一課　巡査部長（４２歳）の証言。

現場付近を大学の山岳部の行事にて現場付近を通りかかった学生らの通報を受け、自分が同僚らと現場に駆け付けられたのは約５分後のことだったと思います。

偶然現場に居合わせた学生達への簡単な事情を聴取。現場は鑑識班に任せ、自分と同僚は被害者である刀使二名の身元を確認すべく、所持していたスペクトラムファインダー搭載の携帯端末を解析し、携帯端末に残っていた身元と現場付近に残っていた御刀を伍箇伝内に在る所持者のリストから照合し、本人であることが判明致しました。

その後は、争った形跡と銃創跡が有ったことから人為的による事件性が高いとして、本件は荒魂事件から殺人事件へと切り替わり、被害者の交友関係等に何かトラブルが無かったかを綾小路武芸学舎にて調べましたところ、交友関係等に目立ったトラブルは無く、勉学にも真面目な生徒であったそうです。

親類は……その、荒魂事件に巻き込まれたとかで既に故人であり、引き取り手も居なかったことで生活のために伍箇伝の入学試験を受けたそうです。

ええ、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題以降、刀使科に残っている者で

特に多い事情です。
そのため、親戚等にも当たりましたが、アリバイが有ったことと、最近は会っていないそうなので、特に目立ったトラブルは無かったそうです。
その数日後、鑑識班が現場に残されていた９㎜の薬莢が組織犯罪対策部の情報提供により、第三国経由の物であること、血の付いたナイフに公安がマークしていたデモ隊の残党の指紋が残されていたことが決め手となり、最近過激化したデモ隊が報復として無関係の刀使を二名惨殺したものと断定。
捜査は公安に引き継がれました。
……死体の監察院への搬送ですか？
被害者が刀使であることに影響があるかどうかは自分は聞かされておりませんし、検事局の方針に疑義を差し挟む立場にありません。
ただ、一言だけ言わせて頂けるのであれば、幾ら孤児の救済目的だとは言え、誰も迎えに来ない遺体というのは心に刺さるものがあります。
……最後に、自分の心証でありますか？
それを語る必要性は無いと思います。……自分は、上司から刀剣類管理局特務警備隊の調査に協力するように指示されて此処へ参りましたが、今まで荒魂事件を本分としていた刀剣類管理局の一部門でしかない特務警備隊が調査と称して、本件に関わることに対しては遺憾を感じております。
たとえ、被害者が特祭隊の隊員であったとしても、本件は紛れも無い殺人事件であり、場合によっては本庁の公安部が取り扱うべき事件であると考えています。

第一通報者山岳部所属の大学生（２２）の証言。
ええ、この前の山岳部の行事で山登りをしに行ったんです。
そのときに通りかかって、異様な匂いがするから何事かと思った

ら、何か二つほど木に吊るされているのがチラッと見えたから何事かと思って近づいてみると刀使さんが木に吊るされているじゃあないですか?……それで腰を抜かしちゃって通報が少し遅れたんですけど、でも山の中でも携帯が繋がってて良かったなと思ったのはこの日が初めてですけど、二度も同じ思いはしたくありませんね。

ええ、まあオレもびっくりしましたよ。

刀使さんって、いつも持ってる刀ですんげぇ力を発揮できるから、特撮物やアメコミのヒーローみたいにバカみてぇに強えって聞かされてましたから、普通の人では先ず倒せないっすよね?それで、もしかしたら荒魂が近くに居るかも、って思って大慌てで携帯とか使って警察とか通報したんですけど、その後になってそういえば管理局は警察から独立したものになったこと思い出して、更に慌てて管理局にも通報しました。……でも、荒魂は近くに居なかったそうらしいじゃないっすか。それでちょっと不謹慎ですけど、それを聞いて少しホッとしたんですけどね。

え?犯人はあの国会周辺で騒いでいたデモ隊の?……生き残り?はあ、まあ、最近何かと物騒になりましたよね。テロリスト……って言って良いんですかね?のような一部が暴れるわ。関東一帯は荒魂の出現率が高くなるわで山岳部も山に登るのに、許可とかが一々必要になりましたし、ホント、刀剣類管理局は何やってるんですかね。ホント、給料泥棒もいい加減に……え?アンタら刀剣類管理局の!?いや、待って下さいよ!確かに最近の管理局のやり方はなっちゃいないとは思っていますけど、オレ、国会で暴れてたバカみたいなデモ隊とは何の関わりも持っていないスよ!!

……え?その辺は調べがついている?ああ、そうですか……それなら良いんですけど……ああビックリした。でも、何でこの事件に刀剣類管理局が?この事件の話を担当の刑事とか検察とかが何度も聴きに来たんですけど、それだけじゃダメなんスか?お仲間が殺されたからですか?

……まあ、そんなことを聞くのは流石に悪いでしたね。スンマセン。

まあ、何て言うか、木に吊るされた刀使さんが気の毒だとは思いましたね。……何て言うか、見せしめって言うんですかね？木に吊るされるとかえげつないことするなあとは思いました。

……でも、何のためにそんなことまでしたんだろうなぁ。幼い子供相手にそんなことできるもんなのかなあ。

綾小路武芸学舎教師（２８歳）の証言のみ抜粋。

彼女達のことですか？

養成校時代の両者の座学の成績は平凡でしたが、共に荒魂討伐には精力的であり、出動回数は多く、技量はベテランと言っても差し控えないほどに成長致しました。

……ただ、何と言いますか、その、彼女等の戦い方は勇猛と言えば聞こえは良いですが、自分達の負傷を顧みない所が多く散見され、一部では蛮勇と呼ばれるほどに苛烈極まるものであったという報告は度々受けてはいたんですが、鎌倉での出来事以降、刀使の離職率が高まってしまい、人員に余裕が無い状態であれば必然的に彼女等への出動は多くなりますので……。

それに、刀剣類管理局特務警備隊所属の調査員であれば、既に彼女等の経歴を調べており、ご存知とは思いますが彼女達両名の両親は既に荒魂事件に巻き込まれて他界しております。

それ故かは分かりませんが……その、荒魂に対して必要以上に攻撃を加える傾向が強いので、何時かは深入りし過ぎて命を失うことになるのではないかと危惧していたのですが、まさか人に殺された可能性が高いとは思いもしませんでした。

刀使は、荒魂の被害から人々を守るために今まで活動していました。

……なのに、このような結果となるとは、それ程までに刀使に対する風当たりが強いということでしょうか？それとも、移民が流入し過ぎて、刀使という制度を理解しない者がそういった恐慌に及んだので

しょうか？

……失礼。今の発言は訂正します。

伍箇伝の中でも最も伝統ある我が校、綾小路武芸学舎においてもハーフの子が多数在籍しているという近況である以上、人種差別に繋がるような発言は慎むようにという厳命がありますので、ここで謝罪をさせて頂きます。

無論、伍箇伝に所属する他校にもハーフの子が在籍しているのは承知しておりますが、彼等を侮辱するといった意図は無いことを弁明させて頂きます。ただ、関東８区の暴徒と国会周辺のデモ隊の連中の中には黒人差別撤廃を掲げる肌の色も髪の色も違う外国籍の者が暴れ、特祭隊の隊員等に暴行を加えていたその事実に忌避感を抱いた隊員が居るのも事実であり、片親が外国人の子は肩身が狭い思いを抱いているのも事実です。

しかし、彼等は黒人差別といった外国人への差別の撤廃を訴えておりますが、彼等のやっていることは自らのイメージダウンを促進しているに過ぎず、当事者を無視した自己満足でしかないとしか思えません。……彼等は自分達が騒げば騒ぐほど、本来の目的から遠ざかることに気付かないのでしょうか。いや、彼らの行動を見ていると、それ以上の目的が有って、それに気付いていない振りをしているだけなのかもしれないと考えることがあります。

……失礼、少しばかり愚痴が多くなりました。

そうですね。教員の私が望むことはここ最近、刀使として残った子達は家庭内に問題が有るか、帰る場所の無い子達ばかりであるということを何卒ご留意下さるよう朱音様達上層部に進言し、取り計らって下さるようにしてくれることでしょうか。

彼等には〝孤児〟であるという〝絆〟が紡がれる〝刀使〟という職で得られる〝戦場という居場所〟が唯一の拠り所でありますので、それを失うことを殊更恐れているのです。……それを考えると、彼女等がその〝戦場という居場所〟を失えば、既に居場所が無いと思い込んでいる子達が、自棄を起こしたらどのような行動を取るのかと危惧しております。

ここ最近の暴動によって辛い思いをしているハーフの子供達もですが、彼女等刀使の心的ケアは今以上に必要であるため、彼女等を導きつつ、部活動の顧問といった残業で苦悩している教職員等の負担軽減を目的とした増員は必要不可欠であると、朱音局長代理に選抜された調査員殿もご一考下さい。

今や刀使として残っているのは、家庭環境か両親との離別によって、特殊な事情を抱えた子達ばかりなんですから……。

……彼女等に変わった行動ですか？

先程も申し上げた通りに私は教員であると同時に、部活動の顧問といった教職活動以外の事も勤めねばなりませんので、既に手一杯となっている私に生徒を全て把握することは……。ですので、彼女等の身辺を探りたいのであれば、彼女等と交友関係を持つ生徒に話しを聞くべきであると思いますので、彼女等の交友関係についてお話しさせて頂きます。

綾小路武芸学舎刀使科の生徒（１６歳）の証言。

……あの二人のことですか？

ええ、よく知っています。彼女達二人とは友人で、荒魂事件でもよく組んでいましたから……。

彼女達の実力は決して低いものではありませんでしたし、暴動の報復、つまりはただの人に殺されるほど弱くなかったんです。

……でも、死んでしまっただろ？っていう顔ですね？

でも、それは本当のことなんです!!

……失礼しました。何が聞きたいのでしょうか？

彼女達に変わったこととか、何か不審な者が近くに居なかったかですか？

……そうですね。特に不審な人とか見かけなかったですし、それに、誰かに付き纏われているなんて話しは聞かなかったです。

でも、変わったところと言えば、何だったかな？武蔵だったかな？

……あっ！思い出した。『別班』ていうのを何か私に聞くぐらい何

か熱心に調べていたような気がしますけど、……でも、多分関係無いですよね。……すいません。変なこと喋って。

え?あの子達が刀剣類管理局に不満を持っていたんじゃないかって?

……そうだと思いますよ?だって、長船と美濃関、それに平城が大規模テロの疑いで帯刀権の剥奪が行われるくらいの大騒動が起きたのに、紫様は病気療養中という理由で、今の局長代理が就任したらしたで、容疑の掛かっていた長船の学長が本部長に出世して、それで長船の容疑は無罪放免ていうことになったんですから、不満を持っている人は居ると思いますよ?

……それに、私達の間で噂になっているんですよ?

テレビで言ってた折神家関係者の女って、朱音様……今の局長代理のことじゃないかっていう話ですよ。それで、本当はあの時クーデターが起きて紫様から朱音局長代理中心の組織に変わったんじゃないか?っていう噂がね。

え?そんな噂を信じているのかって?

そりゃ、私達が所属している管理局の朱音局長代理が人とノロが寄り添っていた古来のやり方というのをやりたいらしいですけど。……正直に言うと、私の両親は荒魂事件に巻き込まれて……それで、刀使になったらなったで、荒魂との戦闘でパニックになって自殺した私の後輩、足を失ったことで刀使として続けることが困難になった先輩が居て、荒魂によって犠牲になっている人達がごまんと居るのに何言ってるんだコイツって素直に思いました。

……だって、紫様とは真逆の方針を採ったんですよ?それだけで荒魂との戦いに今まで身を捧げていた私達に対する裏切り行為じゃないですか!?

荒魂討伐で最前線で戦わされることを知らない貴方にとってはどうでもいいかもしれませんけど……私達にとってみれば大切なことなんです。

刀使殺害事件特別捜査班調書 ―極秘― ２Ｐａｇｅ

警視庁公安部　刀使殺害事件担当指揮官（４８）の証言。

本件は捜査線上に危険なテロリスト一味が浮かび上がったことから、我が公安に引き継がれたことはご承知でしょうか？

……ええ、刀剣類管理局特務警備隊が行う調査には協力するようにとは上に言われていますが、我々公安の捜査方法と情報入手源の詳細につきましては秘匿させて頂きますので、全ての情報を開示することについてはご遠慮願います。

鑑識班と司法解剖の報告書、我々公安の地道な捜査、同盟国の情報部と組織犯罪対策部からの情報提供により、犯人は米軍基地を襲う危険な中東のテロリストの残党であると断定しました。

このテロリスト一味は先の国会周辺の暴動にもデモ隊に混じって参加しており、最近過激化してきているデモ隊の残党といった手合いの者達とも交流があったようです。それ故に、〝仲間の仇〟と称して警察や自衛隊員といった政府関係者を標的にする危険な者達です。

武器の調達は恐らく、犯行現場に残されていた薬莢と被害者の体内から摘出できた弾の施条痕から、組織犯罪対策部が追っている密売組織が取り扱っている銃器と同様の物である可能性が高いという鑑定結果からも同密売組織の関与が考えられます。

恐らく、ナイフ、９㎜を使用する拳銃といった武器を調達する費用は電子マネーが使われていると思われるため、資金から辿るという方法は断念しました。

ええ、電子マネーです。

ご存知かとは思われますが、昨今の電子上でのやり取りに使う電子マネーは資金洗浄、テロ資金供与にも使われている側面があり、捜査範囲が国外にまで及べば現在の警察組織の能力では詳細に追えない

というのが実状であります。
　そのため、資金面から辿るという方法は断念する他なかった……という事です。
　そういった事情もあり、彼等が武器を入手したことまでは事件が発生するまで把握できませんでした。……とはいえ、武器を提供してくれた密売組織からか、それとも彼等自身が所属している組織力によって情報を入手したのかは不明ですが、このテロリスト一味は国会周辺のデモ隊に対する報復として綾小路武芸学舎の刀使科に所属する二名の刀使を待ち伏せ、不意を突いて殺害したというのが我々の見解です。
　その殺害方法なのですが、刀使の利き腕の手首を的確に斬って攻撃と防御手段を失わせた後、頸動脈や心臓といった臓器を何度も突くという手際の良すぎる殺しを行った点、相対する相手の情報を調べ、それを基に作戦を立てられる程の手練の集団であり、加えてナイフの刺し傷の角度から考えて、小学生くらいの児童が行った可能性が高いという報告を聞いた時は戦慄致しました。
　……そう考えると、我が国は子供を使うテロ行為にも対処し、対策法も考慮しなくてはならないことになるでしょう。
　そのため、ある種特徴的なこのナイフによる殺害方法は捜査の進展のため、剣術流派に詳しい刀使の衛藤　可奈美隊員等の協力を得ました。ですが、完全に該当する剣術流派が無かったため、刀使が犯人である可能性は少ないと判断致しました。
　しかし、軍隊もナイフを使っていることからもしやと思い、捜査の角度を変え、自衛隊や米軍に該当するナイフ格闘術は無いかと尋ねた結果、該当するナイフ格闘術が有るとの返答がありました。
　とはいえ、少年兵でも不意を突けば戦闘訓練を受けた刀使を二名をも殺害せしめる事が可能であるという事実を公表することは率直に言って、更なる脅威を助長させるというのが我々の見解でもありますので、今後は刀剣類管理局にとって更に厳しい情勢下になるであろうことは容易に想像できます。それらを鑑みた場合は通常の荒魂討伐においても刀使の警護をする人員が必要不可欠であるという事は事

実であり、改善すべき点であると思われます。
その点を鑑みますと、この刀使殺害事件においては各同盟国との情報組織及び、警察組織の協力は必要不可欠であると痛感しております。
何とも恐ろしい時代になったものです。子供も戦力化される時代としか言いようのない時代は寒気しか感じませんよ。……本当に目に見える”もの”が全て兵器や戦力として扱われる恐ろしい時代へと進むんじゃないかと。
……失礼、話が逸れましたな。ですが、それほどまでに我が国に入り込んだテロ組織と少年兵が紛れ込み、その少年兵でも戦闘訓練を受けた刀使を殺害せしめる程の戦闘力が発揮できるという事実には、我が国の治安を預かる警察組織の一員としましては、自衛隊並びに刀剣類管理局とも協力し、それを基に刷新、更に強固な警備体制に臨むべきであると痛感しております。
……『別班』ですか？
今回の被害者である綾小路の刀使がよく口に出していたと？……はあ、それは週刊誌とかを読んで騒いでいただけでは？
一時期、どっかの記者が自衛隊の非公然組織である闇の組織を暴いたっていう記事があったんですよ。まあ、記事内容は別班は武蔵機関とも小金井機関とも呼ばれていたとかいう内容でして、そのうえ何処かで聞いたことがある与太話程度の代物なうえ、匿名ばかりで妄想のかたまりという外部の評価を受けたり、もしくはネットに転がっている与太話を拾ったようなものばかりでしたから、流石に私の部下がこう言っていましたよ。
まるで、中学生が思い付いた空想上の話しみたいだと。

陸上自衛隊陸上幕僚監部指揮通信システム情報部部長　甲斐　志

郎陸将補の証言。
　何の用かね？こう見えて私は国家の治安を預かる身である以上、多忙であるのでね。手短に頼みたい。
　……別班。そうか、綾小路の生徒がそう漏らしたと？君はその存在を信じているのか？ならば、そのうえで尋ねたい。君は何が聴きたい？
　朱音局長代理が今回の事件。
　いや、何なら国会で騒ぐ野党や警視庁のように我々等の不祥事と呼んでも良いが、現役の刀使二名が荒魂でもないただの人間に殺害された事態をひどく憂慮なされていることは私も承知している。
　総理の要請に応じた朱音局長代理が特別調査委員会を設置し、徹底した真相究明を命じた事も……だ。
　だが、そのうえで君に問いたい。
　仮に、綾小路の生徒が危惧した通りに『別班』なるものが存在したとして、そういった部署が彼女等の殺害に関与したとしよう。その場合、私がそれらを率いていた場合。私なら対抗勢力を潰すために動かすだろう。
　……例えば、旧折神　紫派の残党を潰すことで刀剣類管理局を一纏めにし、タキリヒメ派に対抗するためといったふうにね。
　私にとってみれば、旧折神　紫派はもはや反体制派であり、防衛省と刀剣類管理局の協力体制は２０年前以上の大災厄を防ぐという観点からもそうだが、エネルギー問題解決のために隠世関連技術を狙う各国と今度起きうるであろう刀使等を狙ったテロ対策や工作活動のことを鑑みれば、刀剣類管理局内部にカウンターテロ……まあ、解り易く言えば、やられたらやりかえすのがアンチテロであり、やられる前にやるのがカウンターテロであるという解釈で頼みたい。
　我が国の政治屋連中は未だにアンチテロとカウンターテロの区別をすることなく纏めて対テロと述べるほど疎い以上、国家の治安を預かる警察、自衛隊、……そして刀剣類管理局が三位一体となって国内外の問題に対処せねばならないというのが防衛大臣と私、そして君の上司に当たる人物も了承済みの事であると君には理解してもらいた

い。

……君の想像通り、仮に秘密諜報部隊なる『別班』と呼ばれるものが存在し、その部隊がカンパニーの連中と半ば荒魂と化した者と一緒に非合法活動を行っていたとしたら、私は本部直属の特別遊撃隊付きになっていない綾小路の生徒を標的に選ぶだろう。

その理由は、旧折神　紫派の人間が綾小路に集結しつつある状況下においては、綾小路武芸学舎が反体制派の総本山となりつつあるのは明白であり、綾小路の生徒がただの人間に殺されるという不祥事を起こしてしまえば、綾小路武芸学舎の学長である相楽　結月氏の責任の追及と発言力を削ぐことで反体制派の勢力を弱らせることができ、荒魂討伐の現場に自衛隊といった実力組織を加えることで今後起こるであろう過激派によるジハードと称するテロ活動と各国による工作活動等に対する対抗策の構築が主な理由として行うだろう。

綾小路学長の結月氏は君も知っているとは思うが、２０年前の相模湾岸大災厄時においては特務隊の副隊長を務めていたこともあって彼女の発言力は伍箇伝内では一際大きかった。その発言力を削ぐことで、今後起こりうるであろうタキリヒメとの対決を考えれば、何かと暗躍し、刀剣類管理局の活動を阻害しようとするソフィア嬢を始末することは重要課題であると私は受け止めている。

……まあ、君の言う通り、その者のお陰で防衛省と刀剣類管理局は協力体制を築くことができた。

その結果は君も知っての通り、我々自衛隊にも荒魂討伐に協力するということで荒魂対策の予算が計上され、荒魂討伐の現場を戦車、航空機、特科部隊の慣熟訓練とドローンといった無人機の運用法を構築する〝演習場〟として使うことができた。

……そう考えれば、この絵図を描いた我々自衛隊のことを悪辣非道な何かに君は見えることだろう。

重ねて尋ねるが、君はそんな我々を〝悪〟と簡単に断ずることができるかね？

君も知っているとは思うが、我が国を取り巻く情勢は決して良いとは言えないのが実状だ。

それは、我が国の公的機関である刀剣類管理局、それに所属し国家公務員として扱われる刀使も、君がよく知っているあの子供達も場合によってはテロといったものの危険に巻き込まれる可能性があるのだ。

君は群馬山中におけるイスラム過激派によるテロ行為を知っているだろう?それだけでなく、安アパートに移民と偽り、我が国に入り込み潜伏するテロリスト。デモ活動に紛れ込む敵国工作員と反体制派。それに、同盟国ですら我が国の反体制派であった舞草に潜水艦だけでなく工作員を送り込むといった対外工作支援。……考えれば考えるほどキリがない。

そして、これからは我が国内に難民と偽り入国したり、日本社会という環境に馴染めずジハードというものに参加する外国人労働者や留学生といったイスラム過激派のテロ行為は激しさを増す一方であるのは明白であり、それらを今も援助している工作機関はこぞって過激派を支援することだろう。そうなれば、その対策を講じる必然性が出てくるのは君でも理解できることだろう?

それらを我々が仕組んだかのように君は感じるだろうが、私は国防のため、テロ対策のために、ただこの状況を利用しているに過ぎない。

私が陸将補になる前から、刀剣類管理局に対する諸外国の対外工作は酷かったと聞いている。

例えば、警察や自衛隊、政府の内部情報を得るために年端の行かない子供達でもある刀使といった伍箇伝入学者に対してハニートラップやらを仕掛けて内部情報提供者に変えるといった工作とその国にとって都合の悪い内閣の支持率を下げるべく、特祭隊隊員等を自殺させようとしたりといった事はまだ可愛い方だ。

私が見知った中で最悪だと思ったのは、北の国といった第三国による者達が刀使と御刀を拉致し、それらを獲得するというものだ。

……もし、第三国による拉致が成功していたら君はその子をどうやって救出する?君が特撮物の安っぽいヒーロー物の恰好をするか、漫画本に出てくる超能力でも得て救出するかね?

まあ、君がそんな現実的視野から遠く離れた狂った思考の持ち主で

はないことは解っている積もりだ。
それ故に、国家の防衛を預かる身の私としては、刀剣類管理局に諜報組織とＳＴＴ隊員に対テロ能力を付加させることは必要不可欠なことであり、急務な事であったのだ。
……しかし、警察の一部組織でしかなかった刀剣類管理局に軍用車輌であり、１２．７ｍｍ重機関銃Ｍ２を搭載可能な軽装甲機動車を配備するだけでも様々な部署から非難が来たものだ。……例えば、『警察を軍事組織に変える積もりか？』といったものだな。
無論、『子供達が通う伍箇伝を監督する刀剣類管理局に軍事能力を保有させることは戦争行為である。』といった声が上がったことはあった。……だが、それは朱音局長代理が指揮していた舞草にも言えることではないかね？
舞草は米国から潜水艦や工作員といった戦力を供与され、刀使を組織の戦闘員にしたり、とある少女の名前を変えて諜報員に仕立て上げたりしたのではないのかね？
君はそれに対して一つぐらいは義憤や狂気を感じなかったかね？
それとも、君の世界の中ではそれが常識なのか？
それとも、御刀という物を通して超人的な力を発揮する刀使を見て現実ではないアニメという娯楽作品か何かだと、現実に生きている者には関係無いと思い込むことで何も感じなかったのかね？
それか君は、刀使として在籍する娘の中に好きな娘が居て、その娘が自分好みの服に着替えてくれた様を見ることで、それで現実から目を背けることで何も感じなかった……いや、この残酷で不条理な物しか無い世界から逃れることができたかね？
もしも、それが事実だとしてだ。そんな現実から目を背ける君に一つだけ許可を与えよう。
国家の安寧のために刀使を政治利用でも何でもする私のことを非難したければすれば良い。それで、この世界に在る子供が親を殺したり、親が子供を処分したり、子供同士でも殺し合う地獄のような狂った世の中が変わるのなら、それで良いと私は常々考えている。
それに、この綾小路の刀使……いや、高価値目標と推測される織田

ソフィアのグループに所属する綾小路の刀使の殺害事件の事については、君の所属する特務警備隊の上司も承認している工作活動だ。

……後で聞いてみると良い。

しかし、獅童　真希君は良い部下を持っておるな。

それ故に、後ろ暗いことばかりをし、人望も若さも失った老人は必要であるならば、真希君を局長に据えたいと思っているのだ。

最初は、私も柳生新陰流を嗜んでいたこともあって、自らの社会的地位を盤石にし、立場の向上のために衛藤　可奈美隊員を局長へと推そうとしたのを放棄するぐらいにな。

……その衛藤隊員の弟君についてはどう思うか？か。

君は妙なことを聞くな？既にＳＴＴ隊員を何名も死傷させた彼の処遇については決まっていると思うが？

まあ、心証については幾らかは話せるとも。

そうだな。半ば荒魂化した事から、御刀以外の物理的な攻撃は有効打とならず、狙撃銃を渡して狙撃のテストを行うと、特殊な訓練を受けている訳でもないのに、９００ヤードでの狙撃命中率は１００％、１０００ヤードでも９０％以上の狙撃命中率をはじき出した。その事からも非常に優秀な兵士になれるかもしれんが、所詮は大荒魂が持つ龍眼の力のお陰でしかない。

だが、荒魂を注入すれば子供でも容易く特殊部隊の隊員レベルの狙撃能力を発揮するという事実と御刀以外の物理的な攻撃は有効打にならないのは御刀を装備できない我々にとっては厄介だ。これが刀使殺害事件の容疑者となっている抵抗勢力等に漏れれば、どうなるか君でも分かるだろう？

半ば荒魂と化した子供達が世界中で増えることになるかもしれんのだ。

それだけは、何としてでも阻止せねばならん。

故に彼の生死は問わないし、非合法活動で充分にこちらの役に立ってもらってから、敵対勢力が彼の少年を殺してくれればありがたい。

……荒魂化した人間が暴れて、野垂れ死んだだけだと公式発表するだ

けだからな。
　ん？彼の少年を失うのは、損失が大き過ぎるのではないのかと君は思ったのだろうか？
　その懸念は安心してくれたまえ、敵対勢力が彼の少年を殺した事実をタギツヒメが知れば、我々に対して協力的になるだろう？……仇討ちはしたいだろうしな。
　それに、君は彼の少年をどう思う？
　思想も背景も無いまま、所かまわずに暴力を振り回すだけしか脳が無い狂犬は、結局は誰にも理解される事も無く、何処かで野垂れ死ぬのが道理なのだ。
　良いかね？獲物を追い詰めることしか芸の無い狼は、狩りが終われば不要となるのだ。
　童話で常に悪役にされる狼と同様に、その役目が終われば、最後は猟師に銃で撃ち殺されたり、腹を切開され石を詰め込まれ溺死させられたり、釜茹でにされ豚の三兄弟のエサにされる。
　童話の悪役は、そんな末路しかない。
『憲法違反の組織』だの、『給料ドロボウ』だの、『反戦平和』と騒がれていた一時期に我々が映画や漫画といった創作物に悪役として扱われていたものと同じようなものだ。
　軍事アレルギーと言えば、君なら分かる話しだろう？我々とこの国はそれに何時までも苛まれることだろう……。
　それにだ、荒魂というのは、
　繋がる輪から外れた孤独な存在であり、
　自らの一部を奪った人間への復讐に駆り立てられ、
　その孤独と復讐心を元にした怒りを唯一の武器にして、
　世に現れ、人々を脅かす怪異と呼ばれる。
　人間も斬れる真剣……いや、神剣たる御刀によって討伐される異形の存在。
　そういった存在らしい。ならば君にも分かることだろう？
　今まで、復讐に駆り立てられ、御刀を握ったまま突き進んだ者。誰にも理解されることはないと解りながらも大騒ぎする者。国会周辺

にて荒魂パーカーを羽織り、自爆した者達を見て来た君ならば答えられるだろう。

……手足が二本付いていようが関係無く、我々の尺度では測れない異形の存在は居るということに。

そして、荒魂はどのような〝姿〟と〝形〟をしているかを。

そう考えれば、君達が考える境界線なぞ、直ぐに壊れるということも分かるだろう。

君達は正義ヅラをしていようがしていまいが、常に薄氷の上に立っているということを忘れないことだ。

特務警備隊所属第二席此花　寿々花

……ええ、甲斐陸将補からその工作作戦は聞いております。

それに、あなたの顔を見ていると、嘗ての母校の人間を殺したことに加担したこと、嘗てお世話になったであろう学長に対して迷惑を掛けたことに罪悪感を一つも感じないのか?と訴えたそうにしているのは解りますわ。

それに対する答えはハッキリ言いますと、一つも罪悪感を感じませんわ。

この身を荒魂に宿すという禁忌を犯した私に、今更道徳とか人間性とかいうご高説を垂れ流してどうなるというのも本音ですし。……それに、何処までもお手伝いすると約束したあの人を一人にしておく訳にはいきませんもの。

京都にある此花家は代々折神家に仕えており、私はその此花家の一員でありました。

そういった事情もありまして、私のためにハリアーや高級車で送迎する手配を整えてくれたり、今も刀使として御刀を振るい続ける私を理解してくれた家族には今も大変感謝しております。

……今も御刀を振るい続ける私を理解してくれたというのは、一定の富裕層の中には、御刀に選ばれた孤児を養子にして援助することで、自分の愛娘の代わりに送るといったことをしているそうですが、自分の実力でどうにかしたいと思った私はそのようなことを致したくなかったので、両親を何とか説得し、綾小路武芸学舎へ入学、その後も私は刀使として御刀を振るい続けることができたという意味ですわ。

そんな中、私はノロを受け入れ、折神家親衛隊に配属されることが

決まったときは、今まで育ててくれた家族に恩返しができると思い、無垢な子供の様に素直に喜んだものですわ……。

そのため、忠誠を誓うのは折神家であり、紫様と朱音様でありましたわ。

ですが、そんな私にも地べたを這わせるかの様な屈辱的な思いを抱かせる出来事がありましたの。

それは、折神家御前試合という晴れの舞台で、私は真希さんという御人に二度も敗れるということがあり、それが屈辱だったというだけですわ。

……その後の私は、大会に二度も敗れたこと、私が遣う鞍馬流に縁ある薄緑に真希さんが選ばれたこともあって、真希さんを一方的にライバル視しておりました。

そのような理由もありまして、私は事ある毎に真希さんに勝負を挑みましたわ。……縁日での催しでどれほど多く勝てたかといった下らないことばかりしておりましたけれど、一つも真希さんには勝てませんでした。

ですが、それらの思い出は、今となっては私と真希さんとの良い思い出であったと私は記憶しております。

そして、あなたもご存知かと思われますが、真希さんはこの後も荒魂討伐の作戦に数多く参加し、ご活躍なされました。

その結果として、ご自身よりも年齢が上のＳＴＴ隊員達を何の不満も抱かせることなく、ご指示通りに動かせる人気とそれを基としたカリスマ性を持つに至りましたわ。

折神家御前試合を二連覇し、数多くの作戦に参加したという確かな実績。

その後は、親衛隊第一席として数多くの作戦指揮を成功へと導いた確かな手腕。

そして、大の大人であるＳＴＴ隊員を指揮することができる高いカリスマ性。

……真希さんのそういった部分、私が一生を賭けても得られない部分に惹かれたというのもありますが、やはり真希さんがあのとき、Ｓ

ＴＴ隊員の隊長格の人達に述べた事が最大の要因でしょうね。

『――――そして、この身体の中にノロを投与し、自身の力へと変える投薬を受けたが、その技術はまだ確実な安全性を確保できていない。そのため、全ての刀使に投与することはできないが、僕がこの技術の”礎”となり、やがて安全性が確保されれば、僕等の後に続く全ての特祭隊隊員達の負担が減ることになるのは確実だ。……僕は後の刀使達のために、自分が信ずる”誇りある勝利”に殉ずるために、このノロのアンプルによる強化を受けた。……この話を聞いた君達が僕のこの行為を悪と断じ、僕の元から離れ、告発することは一向に構わない。ここで白黒を付けておきたい。』

今でも一字一句間違える事無く覚えております。

私は、そのとき顔を青ざめる気持ちでしたが、ＳＴＴ隊員の隊長格の人達は、その侠気という部分に惚れたらしく、否定することもなく皆賛同し、真希さんに変わらぬ忠誠を誓っていましたわ。……確か、そのときのＳＴＴ隊員の隊長格の人達は、刀使の娘達はただでさえ危険な荒魂達と戦うという過酷な任務を背負わされているというのに、真希さんは後の特祭隊隊員達のために、危険な行為であると承知の上でノロを体内に入れるという選択を行って、必死に努力しているのに大の大人達がそれを補佐しなくてどうする?といったことを述べていたと思いますわ。……私には理解できませんが。

申し訳ありません。真希さん以外の人が話した内容は、余り記憶していませんので。

ですが、その一連を見て聞いた私は、真希さんは難なくＳＴＴ隊員達を掌握したと理解し、真希さんに対して「貴女の作戦勝ちですわね。」といったことを述べると、

『……寿々花、何の話をしているんだ?』

と大真面目に返してきたのですわ。

『ああっ!……済まない寿々花。君達にも迷惑を掛けるところだった。』

……そして、真希さんが私にこう謝罪したとき、全てを理解しました。

真希さんはＳＴＴという部隊を掌握するために、ＳＴＴ隊員の隊長格である彼等に御自身の秘密を話すことで説得したのではなく、ただ単純にこれから共に戦ってくれる仲間である彼等に隠し事をすべきではないと思ったからだという、それだけのことだったらしいです。

私は、その事実が公になるだけで子犬のように怯えていたというのに……。あの人はそんなことで怯える人ではなかった。

……あの行動は全て、御自身の信ずる〝誇りある勝利〟のために行動しているに過ぎなかったということですわ。

そして、私は理解しました。

……そんなこと、御前試合にて２年連続準優勝でしかなく、鞍馬流に縁のある薄緑の所有者になれなかったうえ、多大なるカリスマ性を持ち合わせていない私には出来ないということを。

ですが私は運の悪いことに、名家の生まれという部分からか、生来の性格の悪さなのかは私でも定かではありませんが、プライドだけは高かったので、それを受け入れるのに私は大変苦労致しました。

ですが、相反しておりますが不思議なことに親衛隊を率い、第一席と名乗るのに相応しいのは真希さんであるべきだと強く思いましたわ。……とすれば、落第した親衛隊の第二席を預かる私はどのように振る舞うべきか考えましたわ。

すると、真希さんが苦手とすること、それを考えた際、真希さんのある言葉を思い出しました。

『政治向けのイベントには、僕は気乗りしない。』

……この言葉にピンと来ましたわ。それと同時にある有名な独裁者が述べた言葉を思い出すほどに。

――――正直者の外交官など、乾いた水や木でできた鉄のようなものだ。

という言葉を。

そうして、私は真希さんを有名にすることで組織を纏めようと考えました。

先ずは、刀使全員の名前を憶えさせたり、人を育てるという楽しさと素晴らしさを教えたことで、真希さんは親衛隊の人気ナンバー１と

呼ばれるようになりました。
そんな訳でして、今の真希さんは私好みであると言えますわね。
それに、あなたは政治や外交というものがどういうものであると思いますか？
私は、政事（まつりごと）という物は裏切りや工作、政争といった汚濁という穢れの中に真実を見出す物であると考えております。……それ故に、私はそういった方面で活躍すべきでない真希さんを補佐することを誓いました。
それに、特別祭祀機動隊に所属する刀使は、年若い娘が荒魂との戦闘を前提とする職種であり、その性質上、武闘派的な考えが多いというのが特徴ですわ。
そんな武闘派の多い組織で裏切りを得意とする人。例えば、松永久秀や本多正純の様な人物がリーダーになってしまうと、誰からも信用されることはなく、その組織から除け者に扱われるのがオチですわ。
……ですので、私の様な汚濁な振る舞いをする人はリーダーに相応しくないというのが、私の考えであります。
その後は、真希さんが如何に素晴らしいかを鎌府と防衛省内に広めるといった内部工作と宣伝を私が主導したりしました。
……それだけでなく、今回の一件、私の母校である綾小路の刀使が殺害されたことについては私も一枚噛んでおります。
？……あなたは母校の人間が犠牲となったことについて心が痛まないのか？と仰りたそうですが、私は真希さんが前線に居ることで味方の士気を大いに上げ、結芽は敵部隊の突破及び、我が親衛隊の切り札的存在。そして、真希さんから任せられた後方を私と夜見さんが担当し、夜見さんがあらゆる方法で情報を得ると同時に私は宣伝工作や敵対している部署に内部協力者を作ったり、こちら側のスパイにしたりといったところですわ。
そんなことをして、心が痛まないのかと言いたげですが、あなたはご存知でしょう？刀剣類管理局の現状を……。
４ヶ月前の刀剣類管理局は折神紫体制に対抗する舞草という組織と内輪揉めをしておりました。そして、今現在も朱音様を排除しよう

と試みているのは、旧主流派であった折神　紫派……所謂、変革派と呼ばれていた人達が結月学長を次期局長へと推しており、反体制派と対立しているという状況は、４ヵ月前の状況と何ら変わりありません。

そのうえ、安価な労働力を求め、移民の流入を推進していった結果、中東の過激派も移民として紛れ込み、女子教育を施す刀使の存在を目の敵にすることは必然。

国内でジハードが起きる可能性が高くなるでしょう。

それと、ジハードに協力する可能性の高い中東の国の諜報部といった勢力と隠世技術の独占を企む他国の干渉及び政治工作。……それだけでなく、舞草の保守派が私と真希さんのことを排斥しようと試みようとした結果、敵性勢力に情報を流した形跡があり、刀剣類管理局は様々な勢力に内部工作や外敵の脅威に晒されているという常に内憂外患を抱えている状況ですわ。

政治工作が得意な高津　雪那学長が居ないうえ、刀剣類管理局が内部分裂寸前という状況下で政治的な能力が高いタキリヒメと相争うのは好ましくありません。

だからこそ、今や刀剣類管理局の体制に反する活動を行っている変革派を排除することで刀剣類管理局は一つに纏まるべきですし、テロ組織や他国の介入から刀剣類管理局を守るためには無人機の配備とＳＴＴ隊員の非正規戦といったことに対処する能力の向上は必要不可欠であると考えております。

……そのためには、先ず変革派に属する綾小路所属の刀使をテロリストらしき者達等によって殺害されたことで、変革派に持ち上げられている結月学長を局長へと推そうとする声を減少させるか、或いは学長の地位を追いやるかで変革派の勢いを失わせる必要がありました。

それに、そうすれば防衛省と協力体制を敷いて、戦力が整っている刀剣類管理局。未だに刀使といった正面戦力を確保していないがために刀剣類管理局との対話に応じるタキリヒメ派。……もしもあなたが変革派の人間なら、どちらを攻撃しますか？

それ故に、変革派に属する綾小路の刀使をテロリストらしき者達に

よって始末し、戦力を失わせるといったやり方で追い詰めるだけ追い詰めて暴発させることで変革派を消滅させる必要がありました。

それだけでなく、ノロのアンプルを知っているイチキシマヒメの所在が不明なのは憂慮すべきことであり、何としてもイチキシマヒメを始末しなければならなかったがために、綾小路武芸学舎内を調べる必要がありました。

ですが、簡単に内部に潜入できなかったため、綾小路武芸学舎に属する刀使が犠牲になった事件が起こし、その捜査の事情聴取として堂々とスペクトラムファインダー等を所持した刀剣類管理局の調査員及び警察官を綾小路武芸学舎内部に送り込むことができました。

それで、イチキシマヒメの反応が出ればそれはそれで良かったのですが、反応はゼロ。ですが、これではっきりとした事が分かりました。

綾小路武芸学舎内に居ないとすれば、変革派に所属する一部の者がイチキシマヒメを結月学長に知らせず独断で匿っているであろうことが分かりました。

これで、イチキシマヒメを匿っている場所さえ分かれば、後は結月学長に変革派の一部の者が暴走していると教えることができ、綾小路武芸学舎と変革派の分断が生じ、更に戦力を失った変革派の掃除ができますわ。

そういった訳ですので私は、真希さんの副官でもある第二席として、代々折神家に仕えていた名家の生まれであることを利用し、パーティや会合等で人脈を築き、政治的な立場を確立。縁故の有る人達に恩を売ってスパイとして起用したり、弱みを握ってスパイにさせたりといったことで、真希さん達の居る刀剣類管理局を親衛隊と共にあらゆる手段で御守り致しました。

そう、”あらゆる手段”で……。

もし仮に、今まで誇りある勝利を信条とする真希さんが政治工作といった汚濁の振る舞いをすれば、支持を失い、味方の士気は大いに損なうことになるのは目に見えております。ですので、真希さんが政治に興味が無いのは私にとって最良の思考であったと私は常々思っておりますの。

……ですが、今後の防衛省との付き合い方を考えれば、そういったものに真希さんは出向かねばならなくなります。ならば、私がその筋書きを書き、私が真希さんの支持を集める内部工作の一手を担うべきであるとも考えましたわ。

そうして、私の助言によって人を育てる等といった事を憶え、私の筋書きと内部工作のお陰でご活躍なされる真希さんを見ていると……私の中で何かが激しく燃え上がる。いえ、心地の良い高揚感が、いえ、私の中でナニかが満たされていくのを感じました。

私の演出と脚本力で真希さんが活躍される。……あなたならお分かりでしょう?これが何かを創作するという喜びであるということに。

此処まで来て、私達のお話を聞いたあなたなら分かるお話だと思いますが、違いますか?

私が創り上げた第一席の真希さんと私が陰ながら守り続けてきた刀剣類管理局が存在し続けられるのなら、私はどんな手段でも行使しますわ。

そのためなら、結月学長を追い落とすぐらいで刀剣類管理局が一つに纏まり、事件を詳細に調べるという名目で綾小路の内部を警察や特別警備隊の調査員が堂々と調べることができる状況に持って行けるのなら、母校である綾小路の刀使を犠牲にすることは仕方の無い事だと思いますわ。

……無論、私が真希さんの副官で居るために、代々折神家にお仕えしてきた名家のご令嬢であり続ける必要性が有るのなら、それを演じ続けようとも思います。

この世界は、親の辿った道に沿って生きるのが自然という考えが浸透しているようなので、殊の外簡単に家を大事にする世間知らずなご令嬢と、そう思わせることができました。

ハハハ、貴女は地獄に落ちた方が良さそうですね。とあなたは言いたそうですが。

私は元からこの世は〝地獄〟だったと思っておりましたし、その〝地獄〟の管理は悪魔が行うべきであると考えておりますので、我々の

頭上に居るだけの神様は何かしらの御神託でも述べて頂ければ良いというのが私の考えでありますわ。

……そういう訳ですので、あなたには厳正且つ、誠実であり読み応えの有る調査報告書を期待しておりますわ。

……でなければ、分かりますわよね？あなたにも、年老いた母か、連れ添う伴侶、もしくは愛すべき娘か息子が居る家族が居るでしょう？

心を持たない者

綾小路武芸学舎内――――。

「……スレイド博士、どうです？」

ソフィアは変革派の人間が次々と不審死やデモ隊の報復という形で殺害されていることに危機感を抱き、私用の携帯でスレイド博士にあることを聞いていた。

『ああ、ああ、完成できたよ!!私が考える新しいノロと人体の融合……いや、新たなる関係性だ!!きっと神も喜ばれるに違いない!!違いない!!どんな顔をしてくれるか楽しみだよ!!』

それは、ソフィアにとって新たな駒を手に入れたということを告げる福音でもあった。

このまま、打てる手段が無ければ、こちらがイチキシマヒメを隠匿していることがバラされてしまい、荒魂の討伐を主張する変革派との関係がこじれてしまう恐れがあったからである。

「そうですか。では、動かしてもらいますか？」

『ああ！そうとも！この神の理想を具現化した使徒たる彼女がこの世に体現すれば、皆はその御姿と福音に頭を垂れることであろう。』

「ええ、愉しみにしております。スレイド博士。」

『こちらこそ、ありがとう。神の御加護を！』

とりあえずは、動かすのに問題なさそうだと理解したソフィアはそれだけ告げると携帯を切り、穂積にあることを宣言するのであった。

……綾小路武芸学舎内にスペクトラムファインダーを所持していた刀剣類管理局の調査員と警察官が入り込んだということは綾小路武芸学舎内にイチキシマヒメが居ないことに気付かれた可能性が高く、そうなればイチキシマヒメの居る場所を嗅ぎ付けられるのも時間の問題である。

「……聞いての通りだ。我々は行動を開始する。」

「ついに、ですね？」

それ故に、ソフィア達は行動を起こすしかなかった。
穂積はその宣言を聞き、覚悟を決めたかのように表情を引き締め、次の指示を待っていた。
「ああ、彼女が我々の進む道を拓いてくれる。」
「分かりました。各地に潜伏している同志に招集を掛けます。」
「それでいい。ここから後へは戻れない。進むのみだ。分かっているな？」
ソフィアの念入りに、穂積はただ黙って敬礼をするのみであった。

ソフィア達が内密に行動を起こしているとき、優はテレビ電話の通話越しではあるが姫和と会話していた。
「――――へえ、そうなんだ。」
『ああ、この頃荒魂討伐が多くてな。だが、沢山倒せたぞ！』
その内容は、姫和が荒魂討伐で活躍したことを話すことで、次の優の返答を待っている様だった。
それを確認した優は、今の姫和が欲しがっている言葉を述べる。
「そうなんだ。偉いね。さっすが、僕の〝おねーちゃん〟は凄腕の刀使だもんね！」
『そ、そうだろ。……私は凄いだろ。なんせ、私は優よりも〝おねーちゃん〟だからな。だから私を頼って良いぞ！』
ただ褒める。
単調なさしすせそである褒め言葉の定型文を思わせる流石姫和おねーさんであったのだが、姫和はたったそれだけの事でも満足気な表情を浮かべ、優は名前の通り優しい子で自分が欲しい言葉を言ってくれる。優にもっと褒めて貰える様にしたいというある種の病的な思いを抱きながら、もっと頼って欲しいと姫和は優に言うのであった。
ただ優に褒めてもらうというだけで、姫和は自分の中に在る承認欲求が充たされていくのを感じていた。
……当初の目的であった母の仇を討つ。刀使の使命を果たすといった当初の目的は、何時しかそれらでは得られないであろう他者か

ら感謝されるという快楽を認識するだけで姫和は当初の目的を放棄し、優に必要だと思われることで承認欲求が充たされるのを目的とするようになっていた。

……姫和には弟や妹と呼べる存在が居なかった。そのためなのかは不明だが、姫和は優みたいな名前の通りに優しい弟が欲しいと思っているうえ、可奈美に了解を得ずに勝手に姫和と優が姉弟の関係である事や愛し合う関係であればどうなっていたのかを妄想したことすらあった。

だが、その優しい子がＳＴＴ隊員と荒魂化したとはいえ自衛隊員の命を何人も奪っている事に気に掛けることもなく……いや、不都合なことに目を逸らしながら、優は優しい子であると改変して思うという歪な関係を築いていることに気付こうとすらしなかった。

「うんうん。可奈ねーちゃんもお友達になれて嬉しいって言っていたよ。……あっ、これは〝おねーちゃん〟と僕の二人だけのナイショにしてね？じゃないと、僕が怒られるから……。」

『もっ、もちろんだ！ナイショにする！』

そのため、姫和は自身の呼び方が〝姫和おねーちゃん〟からただの〝おねーちゃん〟呼びに変わっていることにも気付かないほど視野狭窄に陥っていた。そのため、優の言う『可奈ねーちゃんもお友達になれて嬉しいって言っていたよ。』というのが虚偽であり、可奈美に話さないかどうかで自分の言う通りに動くかどうかをチェックすると同時に、二人だけの話であると強調することで、優は姫和に自分との間に特別な関係が築けたと思わせ、更に依存させようと目論んでいたことに今の姫和は気付く事もなかった。

「うんうん。ナイショにしてくれてありがとう。やっぱり、おねーちゃんは最高のおねーちゃんだよ！」

優はそう言いながら、可奈美の代わりになってくれるだろうか？と心の内で考えていた。

……最近の可奈美が自分を恐れて会わないようにしていることに気付いていた優は、可奈美の代わりになれそうな人物を探していた。

その代わりになれそうなのが、何かと自分を気に掛けてくれる姫

和。それと、人が良さそうであり、可奈美を憧れの対象にしているところから近寄り易い内里　歩が可奈美の代わりとして使えそうだなとは思っていた。

しかし、そんなことを考えている優の奥深くに潜む、歪んだ精神に姫和と歩の両者は今も気付かないままであった。

姫和は、そんなことを優に思われているとは気付くこともなく、ただ欲しい言葉を言ってくれる優に、その関係に溺れていく最中、不意に折神家支給の携帯端末が鳴り響いていることに気付いた。

『あっ、済まない。ちょっと待ってくれ。』

姫和はそう言って、優から「いいよー。」という返事を待ってから携帯端末を見ると、緊急出動の命令を記した内容が記載されているメールが届いていた。

その内容を確認した姫和は、

『……済まない優。緊急の出動命令が出た。また、話せるか?』

優の機嫌が損なわないようにと思いながら、申し訳なさそうに言っていた。

……しかし、姫和のその内心は、この緊急と言われている出動命令はどうせチンケな荒魂が暴れた程度のどうでもいい事件なんだろうと勝手に決めつけているうえ、そんなチンケな荒魂程度に怯え惑う奴等の事なんかどうでもいいと思っていた。

そんな荒魂を何かと化け物扱いしながら、自分達刀使に対しても罵詈雑言を浴びせる自分勝手な奴等何かよりも、優と会うことで、自分が最も欲している言葉を貰える時間の方が何倍も価値ある物であると考えていた。そして、この時間は誰にも穢されたくなかったとも考えていた。

「うん、大丈夫だよ。お仕事頑張って、荒魂いっぱい倒してきてね~。……僕はおねーちゃんが頑張っている姿が大好きだよ!」

朗らかな笑顔で優にそう言われた姫和は胸を張りながら答えていた。

『あっ……ああ、任せろ!!』

そして姫和は、優が自分のことを認めてくれるといった欲しい言葉

を述べてくれたことに感謝しつつ、姫和は脳が蕩けて無くなりそうなぐらいの”快楽”と自分が必要な存在であると自信が抱けるような”安心感”を感じていた。

自己責任と言われればそれまでだが、姫和は今まで一人で背負って戦おうとしていたので、誰にも理解されることなく、誰にも感謝されることもなかった。それ故に、誰かが共感してくれるという行為だけでそれに酔いしれてしまっていた。

一人で辛かった。

誰かに認められたかった。

誰かに愛されたかった。

そんな感情が一気に濁流のように入り乱れながら、姫和は自分が欲したものが其処に在ったと強く実感していた。

――――しかし、

「……でも、歩おねーちゃんやヒメちゃんとケンカしてる人。僕は大嫌いだし、怒っているんだけど?」

優は姫和に釘を刺すことを忘れなかった。

如何にも人が良さそうで、こちらの思惑通りに動かすことができ、尚且つ姫和が使えなくなった時のために、次に利用できそうな歩。

そして、自らの存在を肯定するのに必要なタギツヒメ達。

優はタギツヒメと歩が必要であると認識しているため、再び孤独になるのを極度に恐れている姫和に対して最も効果的な脅迫を行うのであった。

『いや、……あっ、その……』

「どうしたの?何か僕、間違った事を言ってるかな?それなら謝るけど?……どう思うの、おねーちゃんは。」

目が一つも笑っていない笑顔で、姫和に圧を加えながら尋ねていた。

お前がそうするなら、気に入らない誰かを後ろ暗い方法で排除しても良いよな?と。

『そ……それは……。』

優にそう言われた姫和は戸惑う。

どう言って優を説得すべきか悩んだからである。
人に危害を加えてはいけないと言うべきなのだろうか？人を脅してはいけないと言うべきなのだろうか？人殺しは良くないと言うべきなのだろうか？他者を慈しむべきだと言うべきなのだろうか？人を陥れようとしてはいけないと言うべきなのだろうか？人は愛さなければいけないと言うべきなのだろうか？……いや、人に危害を加えてはいけないと言うべきだろうか？
始めは母の仇を討とうとした少女は、人に危害を加えようとしたり、人を脅したり、人殺しの業を背負おうとしたり、他者を慈しむことすらせず、他者を陥れようとし、人を愛するどころか使命のためと称して他者との関わりを拒絶していた少女はどう言えば良いか迷い、悩んでいた。
このままでは、タギツヒメに全てを奪われると。
それだけは、何としてでも阻止したかった。
愛していた両親も愛している幼子も自らを偽る理由も自身の存在意義も刀使としての存在理由も御刀を握る意味も荒魂を斬る意味も荒魂を殺す意味も命を奪う意味も全て全て全て全て全て全て全て全て全て……無くなるのだ。失うのだ。空っぽになるのだと同じ意味の言葉を何度も浮かんでは消え、浮かんでは消えるという壊れた機械かのように狂ったような思考。他者から見れば同じ行為を何度も反復するという意味の無い狂った行為に見えるが、本人からすれば何度も同じ行為を繰り返すことで問題に真剣に取り組んでいると思う行為であり、しかし結局は二律背反とした行為であったのだが、今の姫和にそんな余裕など無かった。
『ご、ごめんなさ……き、嫌いにならないでく…な、なんでも言うこと聞くから……』
……しかし、どれほど考えても糸口すら見出だせず、何を言っても説得力に欠け、優という名の彼を振り向かせる程の力がある言葉を紡ぐことすらできないと理解できた少女は、幼い鳥と称された姫和という少女は未だ飛び立つ事なく『幸福』という偽り名を冠する籠の中で囀ることしかできなかった。

あれほど母のためにと行動したにも関わらず、何一つ出来なかったうえ、優を救うと約束したのに、それが出来るかどうか分からない状況に途轍もない劣等感を感じていた姫和は自分自身に自信を持てなくなっていた。

そんなときに、優だけは変わらず優しく接してくれたことに、その安らぎに依存してしまったことで、それが無ければ生きていけない心の状態下になってしまった姫和は、優に拒絶されるという恐怖を植え付けることで姫和の心の中にある逃げられる恐怖から捨てられる恐怖へと変えることで、自身のコントロール下に置くという手法を優は自身の中に居るミカから教わっていたため、それを姫和で実践していた。

「……そう、そうなんだ。」

そうして、姫和が自身のコントロール下に在るということを確認した優は、姫和に笑顔で応じ、こう述べるのであった。

「だったら、お仕事頑張ってね。」

早くノロを持って来いと思いながら優は、姫和に有無を言わせることもなく、まるで命じる様に言うのであった。

こうして、優は姫和とのテレビ電話が終わった後、自身の中に居るタギツヒメ達と話していた。

『やったねヒメちゃん!これで、強くなれるね!!』

躍る心のままに優は、姫和を利用することでタギツヒメを強化することができたと健やかな笑顔でタギツヒメに話していた。

『いや……えー、そうじゃな。しかしのう……。』

『?』

しかし、タギツヒメは歯切れが悪そうにしていたことに優は不思議でしかなかった。

『……我は姫和のことを確かに好かないとは言ったが、それはちょっとやり過ぎではないかのう?もう少し、こう、何と言うか……のう?』

優が先程姫和に対して行った脅迫とある種の洗脳染みた行動に対

してタギツヒメは、姫和と同じ少年に好意を抱いているためか、その心情には一定の理解できる処もあり、その心情を踏み躙る行為は見ていられない気持ちとなったため、やんわりと先程の脅迫と洗脳染みた行動をした優を咎めようしていた。

『何で?』

しかし、当の優は不思議そうにタギツヒメに尋ねるのみであった。

何か悪い事したのだろうか?という感じで答えながら。

『いや、少し可哀想だとか思わんか?そう思わん?な?』

しかし、それでもタギツヒメは優をどうにか説得しようとするが、

『ねえ、ヒメちゃん?だったら、僕は利用しちゃえば良いと思ったんだよ。』

『うん?……うん!?』

優の姫和を利用すれば良いという発言に、流石のタギツヒメも動揺を隠せなかった。

他の者がこの一連のやりとりを見ることができれば、9歳の児童が人を利用することを提案し、その提案に人々を脅かす怪異と言われる荒魂よりも大きな力を持つ大荒魂タギツヒメが困惑するという異様な光景を観ることができたであろう。

『だって、あの人の目的に沿っているならそうするべきだと思うよ。それにあの人もそのつもりで此処まで来たんでしょ?』

『いや……う~ん。そ、そうなのかのう?』

だが、優の言い分にタギツヒメは反論することができなかった。理由は、

『やっぱり、信用できない?だったら、利用しちゃえば良いと思うよ。』

『え?』

『姫和ちゃんの目的に必要ならそうすべきだと思う。そもそも私もそのつもりで連れて来てくれたんでしょ?』

優が上記の可奈美と姫和の会話を真似したかの様に話したがために、可奈美と姫和を傷付けたくなかったタギツヒメは何も言えなかったのである。(尚、タギツヒメがそのことを知っている理由は、姫和が優に喋ったからである。)

それに、
『別に良いじゃん。何か最近のアイツ気持ち悪いし。』
『そーよ！何か妙に行動が私が知ってる気味の悪い大人と同じものを感じたし。』
『ニキータもちょっと、怖いなって思う……。』
優の中に居るジョニー、ミカに、ニキータも姫和のことを非難し、
『アー、ワタシモ同ジ意見ダナー。』
今まで剣術以外に興味を抱かなかった結芽もどう言えば良いか分からなかったうえ、ジョニー達に嫌われたくなかったので同調するしかなかった。それだけでなく、親衛隊の許へ帰れないと気付いている結芽は、このネバーランドを失いたくなかったというのが一番の理由でもあるが……。
『ね？何も間違っていないでしょう？』
『う、うーん。そうなのか？』
タギツヒメは優達の姫和を非難する声の多さに、それが当然なのだろうかと思い始めるのであった。
ジョニーという元少年兵と、路地裏で花を売っていたミカ、物乞いビジネスに従事させられていたニキータしか居ない世界であるためか、他者を使い潰すという非道な行為も正当化されていた。
……果たして彼等は、世に現れ人々を脅かす怪異なのか、それとも親を失ったロストボーイという名の孤児なのか、大人から学んだ芸を使うことでどうにか生き残れている者達なのか。
そして此処は、子供達の楽園であるネバーランドなのか？
それとも狂った帽子屋しか居ないお茶会なのか？

緊急の出動命令を受けた姫和は、可奈美と薫、エレンと今回の荒魂事件に同行することとなった折神　紫、それと他の特別遊撃隊隊員達と共に新型Ｓ装備を身に纏い、鎌府女学院所属を示す青と白のツートンカラーとなっているＡＷ１３９の機内にて折神家支給の携帯端末

にあるテレビ通話機能から、別のヘリに居る紫が今回の荒魂討伐作戦の説明をしていた。

『今回の荒魂事件は緊急性を要するため手短に、且つ機内にて説明する。本日午後、警視庁に丹沢山周辺にて、登山客が荒魂の群れに襲われているという通報があり、刀剣類管理局に出動要請が下った。今回、緊急性を要したのは荒魂による被害が登山客の中から既に出ており、そのうえ〝人型〟で〝S装備〟を装着し、大量の荒魂を引き連れて市街へと向かっているからである。これ以上の荒魂による被害を抑えるため、件の荒魂の予測進路上のルートにて既に展開している部隊と合流し、件の荒魂を討伐せよとの事だ。』

……スペクトラムファインダーの機能を付けたドローンといった探知方法が現在の刀剣類管理局には有るのに、その荒魂の群れ相手に後手に回ったということだろうか?と姫和は訝しんだものの、既に民間人に犠牲者が出ているのであれば、緊急性を要する物かもしれないと頭を切り替えると、それらの疑問を自らの手で払拭していた。

しかし、姫和達は知らないことであるが、件の荒魂の進路を予測できたのは、刀剣類管理局本部に優が居るからである。

『件の荒魂は強い反応を出しているせいか、付近に居た荒魂も支配下に置き、荒魂の数は今も増加中とのことだ。そのため、既に展開している部隊だけではとても対応できる数ではないため、特別遊撃隊も出動することになった。……尚、獅童　真希、柳瀬　舞衣、糸見　沙耶香隊員等も別の荒魂討伐に出動していたが、それを終え、こちらへ急行中である。……以上だ。』

折神　紫が同行していることから、人型の荒魂はイチキシマヒメであり、そのイチキシマヒメが荒魂の群れを引き連れて、暴れているのだろうか?と姫和は推測するものの、気がかりな事があった。

それは、もしイチキシマヒメだった場合、何故S装備を身に纏っているのかという疑問であった。

S装備の装備者は身体能力及び防御力が飛躍的に向上するものだが、荒魂にも効果が有るのだろうか?それとも荒魂が装着することで何かしらの能力が向上するのだろうか?といったことを何度も考え

てみたが分からなかったため、今回の討伐任務に集中するべく、これらの思考を放棄するのであった。

いつも通り、いつも通り荒魂を討伐すれば良いだけ。私が持っている小烏丸はタギツヒメといった大荒魂に致命傷を与えることができるのだ。

姫和は呪詛の様にそう心の中で唱えながら、骨の髄まで、いや精神の奥深く、魂まで浸透させていた。

……得る物など何も無い、先の見えない荒魂との戦いを何時まで続けなければならないのだろうか?という心の奥底で叫び続ける悲鳴を隠すように、姫和はそのような呪詛を唱え続けていた。

生命を模しただけの荒魂

――――可奈美達が荒魂の予測進路上のルートへと向かう中、和樹も其処へ向かっていた。

理由はソフィアに、

『貴方を襲った例の刀使が、誤って半ば荒魂と化してしまい、必死に逃げている刀使を惨殺しようと向かいました。』

と言われ、刀使を救うと決めた和樹は、刀使が人殺しを行うのを止めたいと思った事もそうだが、敬愛する結月学長が特に目をかけていた燕　結芽（ニッカリ青江を持つ優のことを結芽だと勘違いしている。）が人を殺害することで、結月学長が苦しみ、涙を流すことが無い様にするため、和樹は身体中に走る激痛とこみ上げて来る嘔吐感に苛まれながらも、身体を引きづるように歩いていた。

和樹がその状態になった理由は、結芽を止めるため、自身の身体を荒魂によって強化する必要が有ったため、和樹はノロのアンプルを注入した。

しかし、そのノロのアンプルは、ノロと人を融合させ、強化・進化させることを主な研究としていたスレイドが造った物であり、そのうえスレイドは、成人前の刀使を安全に注入するために子供を使って実験していたという経歴の持ち主である。

そのため、成人男性の身体にノロを注入するのは初めてであり、和樹の身体にノロが上手く定着することができなかったため、和樹の身体は拒否反応を起こし、彼の身体は常に起こる激痛で常時危篤、内臓の殆どが機能不全を起こしているうえ、飲料ぐらいしか栄養補給と睡眠ができないという心身がボロボロの身体の状態であった。

そんな状態にも関わらず、彼はニッカリ青江を持つ優のことを結芽だと思い込み、刀使の中でも上位に入る程の実力者である結芽と戦えるぐらいになるために、和樹は更に自身の体内のノロの量を増やして、自身を強化していた。

そして、銃を所持し、綾小路武芸学舎学長の結月を裏切り刀剣類管理局側へと付いたうえ、人殺しも難なく行える非道な子供となってしまった結芽を結月学長が気付く前に和樹自身が結芽を倒すことで、結月学長を悲しませないようにするという歪んだ思いから始まっていた。そのためなのか、彼の体内にあるノロの量を増やす毎に更に身体の状態は悪くなる一方であった。

そして和樹は、結芽のことを思い出したためか、刀使であった妹のことを思い出していた。

御刀に選ばれ、刀使として成功する妹。

それに反して、就職難に苦労する自分。

そのため、いつも両親に、それを比べられていた日々を思い出していた。

母にも父にも見捨てられた孤独。

就職難で良い職場が見つからないことへの苛立ち。

刀使としての栄光を掴み、怪我をして引退したにも関わらず、充実した福利厚生のお陰で再就職にも困らなかった妹への嫉妬。

自身の待遇と比較され、何かと見下され続けた元刀使の妹に対する怒り。

その福利厚生の素となる税金を払い続けてきた自分に対する不当な評価。

それら不遇な環境によることで形成された根暗な性格がもたらす、子供から大人になっても続く陰湿なイジメを受ける日々。

……自分の最大の理解者であった初恋の刀使のお姉さんと外国人労働者だったミンとの死別。

そうして、今も荒魂パーカーを羽織って殺人を繰り返す結芽に自身のいけ好かない刀使だった妹と重ねていた。

それを思い出すだけで、怒りと復讐心で和樹の心は満たされ、それらを原動力にして全身を駆け巡る痛みも忘れることができ、和樹は歩くことができた。

せめて、その半ば荒魂と化した刀使を救えば、敬愛する結月学長は喜んでくれるだろう。

あんな心が拗くれた妹と同程度の結芽なんか見向きもしなくなるだろう。

これで、結月さんはボクをミテクレルダロウ。アイシテクレル。

そうして和樹は、結月が自分のことを愛してくれるという妄想を抱くだけで和樹の脳は、幸福という快楽物質……いや、麻薬によって支配され、和樹は嗤うことができ、身体を駆け巡っていた痛みが無くなるのであった。

――――予測進路上にて待ち構えることで、大量の荒魂を討伐するという命令を受けた可奈美達は新型S装備を身に纏い、現地に到着するものの苦戦していた。

理由は、人間の赤子のような姿形をしているうえ、産声のような声で叫ぶため、女性にしか務まらない刀使にとってみれば、それは精神を摩耗させるのに充分な能力を備わっていると言えたからである。

事実、可奈美は自らの剣先が鈍る感触と息が荒くなるのを感じながら、御刀を必死に振り回してた。

必死に振り回す理由は、荒魂の数が事前に聞いていた数よりも遥かに多い数であったこともそうだが、その荒魂の姿形が人間の赤子に酷似しており、声も赤子の産声にそっくりであったからというのもある。

そのため今回の荒魂討伐の任務に参加している可奈美は、人間の赤子の様な荒魂に御刀の切っ先を入れるだけで、人間の赤子の悲鳴の声を上げていた。

可奈美は赤子の荒魂の悲鳴を聞いただけで、否応無く連想し、可奈美の記憶の中からある言葉が蘇ってきていた。

『ここ最近は人が荒魂化する事例はほとんど無い。だが、私の母の時代にはそう珍しいことじゃなかった。』

……嘗ての石廊崎へと向かおうとしていた姫和の言葉。母の時代、つまりは美奈都が刀使として活躍していた時代は人が荒魂化するということは珍しい事ではなかった。ならば、老若男女問わず、荒魂が取り憑き荒魂化する事例は幾つも有ったはずである。

となれば目の前に居る赤子のような荒魂が本当に存在していたことも考えられるのだ。

つまりは、人間の赤子が荒魂化する可能性はゼロとは言えないのだ。

それ故に、何時かは〝本物〟の赤子に取り憑いた荒魂も相手にする事態が有るという事なのだ。

そう考えるだけで可奈美達は喉の奥からこみ上げてくるものを感じるが、自分の後ろには、今も避難できていない人が居るため、逃げるということができなかった。

自分の心を保つのに精一杯だった。

人々が居る市街地に向かわせる訳には行かなかった。

後ろに居る人達は自分達が守らなければならかった。

そうした理由で、バラバラになりそうな心を可奈美は必死で繋ぎ止めていた。

『ねえ知ってる優ちゃん。お母さんが刀使は人を守って、感謝されて、剣術も学べる、最高だって言ってた。けど、私はこうも思うの、刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟なんだって。』

だから可奈美は昔の言葉を思い出して自分自身を肯定しようと試みた。だから、

コレは荒魂ダッ!!

『うん。ちっちゃい頃から毎日しごかれてた。』

お母さんは私に剣術を教えてくれた。あの厳しくも優しかった母がこんな非道な事させるためだけに剣術を教えてくれた訳がない。

……だから、

之は荒魂だ!!コレは荒魂なんだっ!!

『でも……うちのお母さんは死ぬまで幸せそうでしたよ。死ぬまでってなんか変な言い方ですけど、剣術だっていっぱい教えてくれました

し、刀使の仕事を誇りに思うって。』

過去にこのような事象が有ったかもしれない。けれど、お母さんは幸せそうだったということを思い出せた。だから、

これは荒魂だ!!これはあらだまだ!!コレハアラダマダ!!

……母と同じ千鳥という御刀に認められ、母を想う剣術好きな少女は呪詛の様に之は荒魂であると唱えることによって、本物の人間の赤子ではないと自分自身を騙すかの様に説得し、気が狂いそうになるのをどうにか抑えようとしていた。

その一方で、母の想いを捨てたと思い込んでいる少女も同じ様に、母も握っていた小烏丸という御刀を握って、赤子のような荒魂を討伐していた。

『人は……人は人と交わり子を成す。そして素質や宿命を連綿と受け継いでいく。私や可奈美がそうであるように……だが荒魂は違う。ノロは繋がる輪から外れた孤独な存在だ。だから……。』

子を成すことを神秘的であると話した少女が、赤子の姿をした荒魂を躊躇うことなく討伐するという二律背反した行動に途轍もない違和感を感じながらも姫和は御刀を振り回し続けていた。

これ以上、市街地へと向かわせ、人的被害を出す訳には行かなかった。

『だったら、お仕事頑張ってね。』

そして、優が言った言葉を思い出すと、後ろへ下がるという選択肢を選ぶこともできなかった。

何故なら、荒魂を斬ることを辞めてしまえば、刀使で無くなってしまう。そうなれば、優は私のことを無価値だと判断して、簡単に捨てるだろうということが理解できたからである。

……もう誰からも必要とされない娘になりたくない。そんな一念から必死に剣を振り続けていた。

その姿はまるで、心の奥底に深い孤独を抱え、その孤独を癒す術を持たぬ故に暴れるというある意味で”荒魂”に近しい者とも言える存在となってしまった。

そうして、赤子の姿をした荒魂は御刀に斬られ、体を裂かれた痛み

によってか、姫和が斬った赤子の荒魂は赤子の産声が混じったかのような呻き声を上げ、新たな生命として認められることなくノロへと還って行き、土の上にノロが血の海の様に遺るだけだった――――。

それだけでなく、この赤子の荒魂は全く強くないというのも問題であった。

何故なら、赤子に近い姿をしている荒魂をほぼ一方的に殺せるという状況には可奈美と姫和、それに薫とエレンといった刀使達の心にある共通の疑念を抱かせるのには充分であった。

歩くこともままならず、這い寄ってくるしか無い赤子に対して、無慈悲にも御刀を振り下ろすことしか出来ない自分達。

死にかけだったのか、自分達の足元に縋りつき、赤子特有の母を求めているかの様な行動と共に、ただのノロへと変わって行く様を見るしかなかった自分達。

そんな状況下に居ながら、当の自分達は人を守るためと言って、赤子の荒魂を屠り続ける。

可奈美達はそんな自分達のことをこう思った。

――――命令とはいえ、人間の赤子の姿をする荒魂を何の疑問も、抗うことをせず、一方的に殺している自分達は荒魂よりも本物の怪物に近い存在ではないのかと。

そんな考えが過りつつ、いつもよりも重く感じる御刀を必死で可奈美と姫和とエレンと薫は、世の中のため、守るべき人のためと心の中で叫び続けながら御刀を赤子の荒魂に向けて振り続けていた。

しかし――――、

「ぐっ!?」

薫が赤子型の荒魂の接近を許してしまい、薫は足を噛みつかれるのであった。

しかし、薫には写シが張られていたため、負傷はしなかった。だが、今の噛みつく攻撃で可奈美達は理解してしまった。この赤子の荒魂を人に近付けてはならないと。

「こなくそ!」

「薫ちゃん!!」

そのため薫は、赤子の荒魂を蹴り上げて引き離すと、祢々切丸で赤子の荒魂を討伐するのであった。

……しかし、人間の赤子の産声を発する赤子の荒魂の死に際の断末魔は、薫に不安を掻き立てるには充分であった。その証拠に、赤子の荒魂の声を聴く度に薫は群馬山中での少年兵が殺される場面、江仁屋離島での秘密工作といったことを思い出し、新型S装備を通して薫の心拍数と血圧は規定値以上にまで上昇するという、そういった状態であるという報告を紫は聞くことになるのであった。

「衛藤、十条、古波蔵、益子の4人は先行しろ。……この生命を模しただけのただの荒魂は、私達に任せておけ！残りの上級生は私と共にこの荒魂を討伐するぞ！」

そのため紫は、人型の荒魂という報告を聞き、イチキシマヒメの可能性が高いと推測しており、タギツヒメといった大荒魂に特に有効打となる千鳥と小烏丸を持つ可奈美と姫和を優先的に、連携の訓練を受け、組むことが多いエレンと薫の4人で当たらせようとしていた。

「ですが、大丈夫なんデスか!?」

エレンは、紫と他の特別遊撃隊隊員達のみで大丈夫かと尋ねていた。

「……私はこういった荒魂との戦いは経験済みだから大丈夫だ。それに、獅童の援軍ももうすぐ来る。……それに、〝人型の荒魂〟が私の予想通りなら、衛藤と十条、それに連携の訓練を共に受けている古波蔵と益子の方が良いうえ、この先にはこの荒魂は居ない。」

先行したドローンがこの先に、〝人型の荒魂〟が居るということ、そして、特殊廃棄物甲類らしき荒魂しか確認できなかったという報告を聞いた紫は、この赤子の姿と声を模した荒魂を討伐するのに精神的なダメージが多い可奈美達を先行させることで、赤子の荒魂と戦わずに済む様にし、できるだけ精神的な負荷の少ない状態でイチキシマヒメと戦わせることにしたのであった。

とはいえ、紫も紫で気が立っているのだろう。

〝人型の荒魂〟が紫の推測通り、イチキシマヒメではない可能性を考慮できなかった点もそうだが、無意識とはいえ、こういった荒魂と

の戦いは経験済みと返答したことによって、此処に居る刀使達の心の中にある疑念が確信へと変わっていくのであった。

……つまり、嘗てはこの赤子に似た、もしくは赤子に取り憑いた荒魂を討伐したことがあるということであり、いずれは自分達にもそのお鉢が回る可能性があると。

「分かりました。ご裁断に従います。」

しかし、他の特別遊撃隊隊員達は、自分達よりも下級生の四人にこれ以上の負担を掛けたくなかったため、紫の指示に従うと明言していた。

――――その一方で、優も、

「例の蝶の荒魂を出す男が現れた。荒魂の習性故なのかそれとも別の思惑があるのかは判然としないが、そいつは〝人型の荒魂〟へと向かっているようだからその前にお前が叩け、とのことだ。」

和樹を始末するべくヘリで向かっていた。

そして、ヘリの機内で同乗しているトーマスの話を聞きながら、ＡＣＯＧサイトの上にホロサイトが載っている物へと換装させられたＨＫ４１６Ｃのサイトを覗いていたり、上下二連式のソードオフにされた散弾銃の装填と排莢の仕方を確認していた。

ＨＫ４１６Ｃは有効射程距離の強化、上下二連式のソードオフショットガンは対刀使用の武器として所持が許されていた。

「そいつに変わっている点とかある？」

「ああ、別の荒魂を取り込んだからかもしれんが少し反応が強くなっている。そうすると、前よりかは強くなってるだろうから、気を付けた方が良い。」

「そうなんだ。……でもさぁ、もう面倒くさいから、そいつ殺せば良くない？」

「そうしたいが、捕らえてそいつの背後関係等を暴きたいらしい。」

優の和樹を殺害して、全てを終わらせるという提案をするが、トー

マスは上層部が和樹を捕らえて、背後関係を洗うことで一気に変革派と呼ばれていた旧折神　紫派を一気に追い詰めたいという思惑があることを優に話し、提案を却下していた。

「しかし、荒魂化した人間の証言なんて裁判所が取り合ってくれる訳もない。理由は、荒魂化した人間は正常な判断ができないため、信頼に足る証言ができないという見解らしい。……という事は、降伏勧告をしたが、正常な判断を失っているこの男をやむを得ず殺害したと言えば、だれも文句は言えまい。」

だが、トーマスも和樹を追うことに嫌気が差しているのか、暗に殺害を容認していた。

事実、荒魂の影響によって、妄言や人を襲撃することに躊躇いが無くなるといった異常な行動が見られるところから、荒魂化した人間の証言を裁判で採用されない事例が多くある。

トーマスはそのことを言っているのだが、優は気にすることなくこう述べるであった。

「やっと面倒くさいことから開放されるんだ。」

「面倒くさいって、……まあな。」

捉えようによっては優が人間扱いされることが無いという内容の発言だったのに、優は普段通りに答えるのであった。

その姿に、流石のトーマスは何か言おうとするものの、今まで優を戦闘兵器として散々利用しておいて何か言えることがあるだろうか？と思い、何も言えなかったのであった。

事実、今も特定の人物を始末し、都合が悪くなれば、優の中に居る荒魂の負の影響によって暴走したとして処分される都合の良い暗殺道具として使っているにしか過ぎない行動を取っているとトーマスは思うだけで、何も言えなかったのであった――――。

鵺子鳥

丹沢山周辺にて、荒魂の群れが出現する数週間前――――。

「博士。この赤子の荒魂は？」

「ああ、そうだよ!!聞いてくれるかい!!？」

新しいノロと人体の融合実験の成果の一つを見せると言われたソフィアは、檻の中に入っている赤子の姿と声に酷似した荒魂を見て、何故このようにしたのか単純に知的好奇心からスレイドに尋ねていた。

「……実はね。私の研究に協力してくれた御方がね、人が新たな命を産み育てるということをして、人と同じ様に生きれないことにどうしようもない孤独感を感じておられたのだ。それで、私は荒魂でも新たな命を産み出せることを証明したかった!!私はその子を対して責任が有るからね!!」

「……つまり、あの姿形と声は女性にしか務まらない刀使に対する精神的な攻撃を目的とした物ではないと？」

「？……君は何を言うのかね？赤子は全ての命、私達の次の世代を担う宝だよ？いや、神からの授かり物だよ？私がそんな鬼畜な所業をすると思うかね？私のことをあずかり知らぬ者が狂人か何かと好きに言うから知らないかもしれんが、流石の私でもそんな常識は弁えているよ!!」

ソフィアはスレイドに、この赤子に酷似した荒魂は刀使が女性にしか務まらない特殊な兵科であると看過し、それに対抗できるようにこの荒魂を創造したのかと尋ねるものの、どうやら違った様であり、そんな鬼畜な所業はしないと断言していた。

……しかし、子供の人体にノロを注入させるという非人道的な研究を続けてきた研究者がそれを言うのかとも思ったが、ソフィアはそのことについて特に糾弾する事もなかった。

「それにだ。……この赤子の荒魂は赤子の声によく似ているだろう。その福音を以って人々の荒ぶる魂を鎮め、この赤子に対して慈しみを

感じることで人間と荒魂は共存できると、荒魂でも新しい命を産み出せるということを立証し、それをあの御方に見せてあげる事ができるよ!!!」

つまり、この狂人と呼ばれたスレイドが人間の赤子の姿と声に酷似した荒魂を創った理由は、その赤子の声で人々の心を鎮めさせ、荒魂と人間は共存できるという意識を抱かせると同時に、荒魂も子供を創ることが出来るという事を証明し、人間と共に共存できないことに深い孤独を感じてしまった荒魂の心を癒すという目的を達成するためにこの赤子の荒魂を創ったのだとスレイドは述べていた。

「檻の中へ入れている理由は?」

「此処に入れて置かないと、勝手に動き回って人を襲うからねぇ。……だから、これはベビーベッド代わりさ。」

だが、ソフィアは赤子の姿形と声に酷似した荒魂が檻の中に入っている理由をスレイドに尋ねると、赤子の荒魂が勝手に人を襲うからという理由でベビーベッド代わりに檻の中へ入れていると説明していた。

ある程度は想像通りだった返答に納得したソフィアは、スレイドにこう返答するのであった。

「……なるほど、戦闘力はそれなりにあるのか。」

「この赤子は戦闘を考慮していないよ!?!!……だけど、刀使でない人相手なら勝てて、殺した人にも取り憑くことができるけど、人に取り憑いたとしてもどんな刀使にも負ける。だから、戦闘には極力巻き込ませないようにしなくてはダメだよ?この神秘な姿をした赤子はあの方のために創っていたんだから。」

ソフィアはスレイドの説明を聞いて、この赤子の荒魂は、ただの人相手には強く、その人間を殺して取り憑くことが出来れば荒魂化した人間とする事ができるという性質を持つ故に、女性にしか務まらない刀使達は人々を守るため、この赤子の姿と声が似ている荒魂を討伐しなければならないという事に悩み苦しむだろうとほくそ笑んでいた。

「フフ……そうですね。確かにこれは〝宣伝目的〟として考えれば、これ以上は無いくらい有効ですね。」

ソフィアは皮肉気に”宣伝目的”と言っていた。
その意味は、この赤子の荒魂の相手をさせられる事になる刀剣類管理局の特別祭祀機動隊はこぞってこう思うことであろうことが簡単に予想できたからである。
赤子の姿形と声に酷似した荒魂は、討伐せずに放置した場合は人を襲い、負傷・死傷させた人間の身体に取り憑き、その人間を荒魂化させるという能力を保有しているため、成人前の少女にしか務まらない刀使達には、この”赤子に酷似した荒魂”か”罪の無い一般市民”のどちらを救うのかという二者択一を強要させる極めて悪質な考えの元で造られた”荒魂”であると。
しかし、この赤子の荒魂を創った当の張本人であるスレイドがこの荒魂を創った本当の理由は、ただ単純に人と共に生きることが出来ないということに深い絶望感を感じた荒魂の傷付いた心を癒すために創ったものだというものなのだから、何とも皮肉な物だとしか思えなかったため、ソフィアは皮肉気に両方の考え方を合わせる様に”宣伝目的”と述べたのである。
そして、ソフィアは理解した。
このスレイドとかいうマッドサイエンティストは自分がこういう行動を取れば、他人がどう思うか?という他人と共感する能力が著しく低いのだろう。それに付随するかのように、スレイドは他者とのコミュニケーション能力も低く、それ故に、他者との会話も成立せず、スレイド自身もそれを危惧し、奇想天外な研究に手を出すことで周囲の理解を得ようとするが、却って他者に理解されることもなく奇人変人扱いされ、遂にはマッドサイエンティストの烙印を押されたのだろうと推測していた。
「しかし、夜見は血を媒介にして蝶型の荒魂を出していますが、この赤子の荒魂は何を媒介にしているのですか?」
そして、ソフィアは疑問に思ったことを尋ねたのであった。この赤子の荒魂は何を媒介にして生み出せたのかと。……そのソフィアの疑問に、何処か病的な目をし、満面の笑みを浮かべて、スレイドは返答するのであった。

「ああ、簡単だよ?血と人間の卵細胞を媒介にすればこの赤子の荒魂が出て来るよ?……だから、鎌府の実験台となり、尋常ではない量の荒魂を摂取し、御神体扱いされるノロに近い彼女が一番適任だと思ったんだ。」

この返答に、ソフィアはこの赤子の荒魂を斬ってしまった刀使は、この事実にどう向き合うのだろうかと想像し、苦悶の表情を浮かべるか、それとも涙を流しながら呆然自失となるかを見てみたいと心の底から思うのであった……。

苦痛や涙を流すのは生きている人間の内の表情の一つであり、その者が生きている人間であるという証拠となり、その人間が生きた人間であるというふうに見ることができ、実感ができるとソフィアは考えていたからこそ見てみたかったのである。

鵺子鳥

トラツグミの別名。そして、トラツグミは夜に笛の音のような声でヒョー、ヒョーとさえずり鳴くとされている。しかし、森の中で夜中に細い声で鳴くトラツグミの声を平安時代の貴族と天皇は不吉な物として捉え、トラツグミのことを鵺（ぬえ）または鵺鳥（ぬえどり）と呼ぶようになり、凶鳥とされ、気味悪がられ、大事が起きないよう鳴き声が聞こえると祈祷したという。

そして可奈美達は、今現在紫の命令で赤子の荒魂の産声がその鵺子鳥の様に鳴り響く山林の中へと入り、新型S装備のバイザーに表示されている人型の荒魂が居る場所へと向かっていた。

……何が待ち構えているかも分からぬまま、赤子の荒魂の声が鳴り響く暗い山の森の中へ入り、その奥深くへと進み続けていた。

「みんな待って〝人〟が居る!!」

その山中の中、刀使の中でも特に目が良い可奈美は、仄暗い山林の中でも〝人〟が居ることに一早く気付くことができた。

逃げ遅れた人が居るのだろうと思い、可奈美は姫和達と共に近付くのであった。……しかし、可奈美はこの時、自分の目の良さを呪うことになる。

「特別祭祀機動隊です!安全な場所へ――――」

何故なら、その〝人〟に近付くと、可奈美は気付いてしまったのだ。

その〝人〟は既に人では無くなっているということに、その〝人〟は荒魂化し人間だった〝物〟に変わっていることに。

「ああ、ア〟ア〟、来ないデ!来ないでよぉっ!!これは私の赤ん坊よ〟ぉっ!!」

そのうえ荒魂化し、元は人であったであろうその女性は赤子の荒魂を自分の産んだ子であると誤認しているのか、赤子の荒魂を大事そうに抱き抱えながら可奈美達を非難していた。

……荒魂を取り込んだ者や荒魂化した人間は負の影響により、妄言を口走ったり人を襲撃することに躊躇いが無くなるといった異常な行動が見られるという部分が散見される。

つまりは、この荒魂化した女性が抱えている赤子の荒魂は、この女性の赤子ではない可能性がある。いや、そうである筈だと可奈美は強く思った!

「……っ!」

そのため、可奈美は覚悟を決めて斬ろうとするが、ある疑念が思い浮かんだことにより、斬るのを躊躇ってしまった。

……それは確証できることではないと、もしかしたら、本当にお腹の中に居た子が荒魂化したのではないかと、いや、この女性が抱えている赤子の荒魂は生命を模しただけの荒魂である可能性は捨てきれないのだと思い込もうとする。

……だが、可奈美の中にある疑念が生じる。私は、自分と母を重ねて見てしまったこの〝親子〟を斬れるだろうか?

そのような様々な感情と思考が可奈美の中で入り乱れたことによ

り、動きが止まってしまう。しかし、
『でも……うちのお母さんは死ぬまで幸せそうでしたよ。死ぬまでってなんか変な言い方ですけど、剣術だっていっぱい教えてくれましたし、刀使の仕事を誇りに思うって。』
剣術を教えてくれた母親が、刀使の仕事を誇りに思うと言ってくれた母の姿を思い出した可奈美は、このときだけでも目を閉じて、口を噤み、耳を塞ぐことで外界との全ての情報をシャットアウトしながら、御刀をその荒魂化した女性に向けて振るうのであった。
目を閉じ、口を噤み、耳を塞ぐことで手に感じる御刀の感触が大きく感じられ、その御刀の感触は確かに何かを斬ったという感触を得るのであった。しかし、〝赤子の荒魂〟を斬った感触と似ている感触がしたので、驚いて目を開けてしまうのであった。何故なら、〝赤子の荒魂〟を斬ってしまったのなら、〝荒魂化した女性〟は未だ健在であり、それに対して素早く対応をしなければ、こちらが危険な状況に晒され、エレンや薫、そして姫和といった他の仲間も危機に陥れるかもしれなかったからである。
……だが、赤くドロッとした水状の何かを流しながら、倒れていたのは〝荒魂化した女性〟であった。
そして、可奈美はそのまま目を開け、自らの行いの結果を確認するかの様にその光景を眺めてしまっていた。
生き残ってしまった〝赤子の荒魂〟は、可奈美に斬られピクリとも動かなくなってしまった〝荒魂化した女性〟の顔を叩いて、眠っているであろう母を起こそうとしていると見える光景を。
これは何なんだ。何なんだこれは。何でこんなに気持ちの悪い気分になるんだ……。
(それに私がさっき御刀に感じた感触は……!)
それに〝荒魂化した女性〟を斬ったのに、斬った感触は〝赤子の荒魂〟と変わらなかった事に気付いてしまった。
……そのため、可奈美は人間と荒魂の違いが分からなくなっているのではないかと激しく動揺し、本当はこの赤子の荒魂はこの女性の赤子が荒魂化したものではないかと危惧し始めていた。

……いや、もしそうだとしたら今まで倒してきた赤子の荒魂は本当に生命を模しただけの荒魂ばかりだったのだろうか？

……今まで会ってきた赤子の荒魂は、本当は赤子が荒魂化したものではないのか？

もしそうだとしたら、私はとんでもない事をしでかした。

もしそうだとしたら、私は鬼畜外道の所業をしてしまった。

もしそうだとしたら、私は母の剣術を穢してしまった。

もしそうだとしたら……ワタシハ、

『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』

……何ノ為ニ……、

『ねえ知ってる優ちゃん。お母さんが刀使は人を守って、感謝されて、剣術も学べる、最高だって言ってた。けど、私はこうも思うの、刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟なんだって。』

ケンジュツしか……取り柄ガ無いワタシが……、

『だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても救ってみせるよ。』

……ガンバッテ、嘘　マデツイテ……、

『……そうなんだ。だったら僕もそんな大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。』

ワタシハ　刀使　ニナッタンダロウ。

可奈美は、血のようにへばりついた負の神性、珠鋼を生成する際に取り除かれる不純物と言われているノロで穢れた千鳥を見つめながら、悩み、もがき苦しむのであった。

……一方の姫和も、〝荒魂化した男女〟と〝赤子の荒魂〟の計三つの荒魂を討伐し終えていた。そのうえ、仲の良い家族を思わせるこの計三つの荒魂を討伐後にあることを思い出していた。

それは、姫和が刀使として残ることを決め、特別任務部隊に在籍し、鎌府女学院に居たときのこと。

ある刀使が、親の意向により転校することが決まり、両親が車で迎えに来てくれたところを姫和は、遠くから眺めるように見ることしかできなかった姫和は、そのときこう思ったのである。

――――ああ、そうか、今の自分には迎えに来てくれる両親すら居ないのだ。

そう思った姫和の心の中に、両親が健在な者と死別して両親の居ない自分とを比較し、温かく迎えに来てくれる両親も、ああやって心配してくれる両親も居ないのだと再確認し、両親が迎えに来てくれる子のことを羨み、妬み、辛み、嫉み、僻むという感情を向けながら、その光景を遠巻きに見ていた。

――――今の私は、あの子の様にすら、生きることも許されないのだろうか?と。

姫和はその感情を思い出した瞬間に、この計三つの荒魂を〝討伐〟していた。

ああ、そうだ。こうやって否定すれば良いのだと理解すると、心の中に在った痛みが引いてくる様な気が今の姫和には実感できた。

敵対する相手が、嫌悪感という感情を抱かせるには充分な相手の酷い任務でも、こうやって嫌悪の感情を憎悪へと変えてしまえば戸惑うことなく、躊躇いなく、動きを止めることなく斬れるのだということが分かったのだ。それだけでも充分だと姫和は理解し始めていた。

そうして、小烏丸を持つ腕が軽くなったような気さえした姫和は、次の討伐すべき赤子の荒魂の元へと向かおうとするが、

『薫隊員等に通達。特に反応の強い荒魂が一体、そちらに急速に向かっています。会敵予想時間は約３０……いや、早くなった。約５秒！』

姫和は、後方の作戦本部の通信士がこのような状況下でも冷静な声で話す事にすら苛立ちを感じながらも、特に反応の強い荒魂が姫和達に向かっているとの通信は聴こえていたため、新型Ｓ装備のバイザーに表示されている方向を見ると、同じくＳ装備を纏い、御刀を所持していた〝人型の荒魂〟が其処に居た。

……そして、〝人型の荒魂〟と邂逅した際に赤子の荒魂の鳴き声が

山林の中で響き渡っていたため、姫和はその鳴き声がまるで本物の鵺が此処に居るかのように聴こえ、この”人型の荒魂”との出会いが不吉を表し、その始まりであるかのように感じてしまった。

――――一方、和樹もある人物と対面していた。

旧親衛隊服の上に荒魂パーカーを羽織り、熊の鍔とイチゴ大福ネコのシールとストラップの付いたニッカリ青江を携え、スポーツマスクとグレー系のゴーグルを装着し、パーカーのフードを被って顔を隠している優と対面していた。

……しかし、

（……燕……結芽っ!!）

当の和樹は、優であると気付くこともなく、敬愛する結月を裏切った結芽として見ており、憎悪を燻ぶらせるのであった。そのため、

「……燕　結芽！どうして結月さんを裏切った!!」

と優に向けて述べてしまう。

（……何コイツ？結芽おねーちゃん、誰か知ってる？）

『えー？私知らないよ？そんなおにーさん。』

そのため優は、結芽の知り合いだろうか？と思い、一応結芽に尋ねてみるものの、結芽は和樹と直接会ったことは無いため（というよりも、内気な性格の和樹には、人と向き合って話すのにも勇気が必要であり、結芽に話しかけるという勇気が無かった。）、結芽は知りようがなかった。

「お前は、結月学長から天然理心流を学んでいるのに、何故銃なんか持っているんだ!!?」

『……えっ？そこ一番気にするところっ!?』

和樹の天然理心流ではなく、銃を使うことに対する問い掛けに対して、優の中に居る結芽は子供が銃を持っている事について非難しな

かったことに驚いていた。……真っ先に聞くべきことは其処なのだろうかと。

「……。」

「お前は……お前は！結月学長から……結月学長から天然理心流の剣を教えてもらったり、色々と手を尽くしてくれたというのに何も感じなかったのか？何で教えてくれたと思っているんだ!!」

そして和樹は結月学長から剣術を教わっているうえ、あれだけ甲斐甲斐しく見舞いに来てもらったのに、刀剣類管理局側に付いた結芽を裏切り者として見ており、そのことに対して糾弾していた。

「僕は許さない！……お前みたいな奴がっ、どうして刀使になれるんだ。……ふざけるな!!お前みたいな裏切り者が僕は許せないんだ!!」

（何か勝手な事言っているなぁ……。）

和樹は、結芽だと思っている優に向けて、怒りをぶつけていたが、優が黙って聞いていたために和樹は一人で勝手にヒートアップし、更に糾弾するのであった。……自分こそが正しいと思いながら。

「お前はただの恥知らずで!!恩知らずの!!顔を隠してコソコソするのがお似合いのただのクソ――――」

「あのさぁ……。」

ただのクソガキだと罵ろうとした和樹だったが、急に優が喋りかけてきた事に驚き、喋るのを中断してしまう。そのうえ、

「妬ましいなら妬ましいって言いなよ、面倒くさいなぁ……。」

優に、そう核心を突いた反論をされたため、対面している優のことを結芽だと思っている和樹は顔を歪ませて、大声で叫ぶのであった。

「こんの、調子に乗るなぁーーーー!!!!!」

結月さんから天然理心流を教えてもらう結芽。

結芽のお見舞いに何度も向かう結月さん。

それらを遠巻きにして見ることしかできず、結局は結芽のように結月さんに目を掛けてもらったことなど無かったことを思い出した和樹は、その際に感じた結芽に対する妬み、嫉み、僻みを覆い隠すかの様に大声で叫びながら、結芽だと思っている優に向かって行くのであった。

『平家物語』にある怪物は「鵺の声で鳴く得体の知れないもの」で名前はついていなかった。しかし、現在ではこの怪物の名前が鵺だと思われ、有名となっている。

この意が転じて、掴みどころがなく得体の知れない人物・集団の事を喩える際に”鵺”と表現されるのはここから来ているとされている。

そして、和樹は刀剣類管理局と政府から謎の人物として追われ、優もまた不正規活動と二十年前の事件の真実を隠匿するために正体を隠され、テロリスト側から正体不明の悪魔として恐れられていた。

この両者もまた捉えようによっては鵺の如く、得体の知れない者達であり、そして仄暗い山林の中でさえずる様に言い争っていた。

災厄の産声

和樹は蝶型の荒魂を出すべく、取り出したナイフで自身の左腕を傷付けようとするが、優が迅移で一瞬の内に自身の懐に飛び込んで来たことに驚き、ナイフで自身の腕を傷付けるのが一拍遅れてしまう。

驚いてしまった理由は、刀使の妹を持つ和樹は、刀使は御刀を媒介にして迅移といった様々な特殊能力を発揮するということを知っており、手に御刀を持っていないにも関わらず迅移を発動したことに驚いてしまったからである。

無論、優が御刀を手に持たずに迅移を使うことができた理由は、腰に短刀の御刀を差してあるからであり、その御刀を腰に差しているまま手に持っていれば迅移や八幡力といった刀使の力を使うことはでき、〝刀使は御刀を媒介にして超人的な能力が発揮できるものであるから、手に持たなければならない。〟という先入観を持っている者には非常に有効な手であった。

「ぐおっ!?」

そして優は、和樹の金的を右腕で殴り、悶絶してるところを更に追撃しようとするが、和樹はナイフを必死に振り回して、優を近づけない様にしていた。だが、優は龍眼でナイフの軌道を読み取ると、荒魂化している左腕を和樹が振り回すナイフの刃の部分に当てると、難なく弾き飛ばすのであった。

「なっ!?」

負傷することも省みず、左腕でナイフを弾き飛ばすというやり方に仰天する和樹を尻目に、優はナイフを振り回すことで伸びきった和樹の右腕を掴むと、容赦なく右腕の肘をあらぬ方向へ曲げ、折るのであった。

「――――っ!!?」

和樹は余りの激痛に悶絶してしまう。そして、優はその和樹の右腕を掴んだまま、八幡力による筋力増加と一本背負いの要領で遠くへ投

げ飛ばすのであった。
　そのため和樹は空中を舞い、浮遊感を感じるが、それが終わると背中から地面に叩き付けられるような感触を受け、肺の中にあった酸素を全て吐き出してしまったことでようやく和樹は投げ飛ばされたのだと気付いた。
　……これが、八幡力や迅移を使える者と使えない者の差なのかと絶望感を感じながら。
　しかし、和樹はめげる事無く自身の腕を切ろうとするものの、唯一自身の腕を傷付けることができる手段であったナイフが弾き飛ばされたこと、投げ飛ばされたことでナイフを落とした場所から遠くへ移動させられたため、和樹はナイフで自身の腕に傷を付けて、血を媒介にした蝶型の荒魂を召喚することが不可能に近い状況に陥ってしまった事を今悟るのであった。
　そのうえ、利き腕である右腕があらぬ方向に曲がっていることで右手でナイフを掴める状態ではなく、残った左手を使うしかなかった。
　それだけでなく、優は和樹の最大にして唯一の攻撃手段が自身の腕に傷を付けて、その傷口から蝶型の荒魂を召喚することであることは前の戦闘で分かっていたため、御刀で斬ったり、銃で風穴を開けるよりも八幡力等を使って手足を骨折させ（とはいえ、骨が飛び出る程の複雑骨折は避けなければならないため、加減はしないといけないが……。）、抵抗力を奪っていってから、始末しようとしていた。
　蝶型の荒魂が出せない和樹は、近くに武器になる物は無いかと必死に探し、たまたま近くにあった木の棒を左手で藁にもすがる思いで拾うと、そのまま優に殴りかかる。
　しかし、龍眼で容易く軌道を見切られたうえ、頼みの綱である木の棒が優の左腕に掴まると、八幡力の力で容易に優の元へと引き寄せられてしまう。
　引き寄せると同時に優は、右足をダンッと爆発音がしたかのように感じる程の力強い足踏みをすると、それと同時に荒魂化によって強化された左腕の渾身の正拳突きを和樹に向けて放つのであった。
　八幡力によって常人以上の力で引き寄せられたことで、向かって来

る相手の体幹に対するカウンターとして作用し、優の渾身の正拳突きの力を後ろや別の方向へ逃すこともできないまま、その八幡力や荒魂化によって強化された腕の力を十二分に受けることになる。その結果、和樹の左胸の肋骨が何本か折れる感触を味わい、その激痛から木の棒を手許から離してしまう。

そうして、またも地面に叩き伏せられる感覚を背中から伝わったあと、和樹は再び空を仰ぎ見ることとなる。

「ぐうっ、……がはっ!ごほっ!!」

和樹は背中が地面に叩き付けられたため、咳き込んでしまい、肺に強烈な痛みを感じながらも、その痛みを堪えながら、どうにか立ち上がろうとしていた。

優は和樹が立ち上がろうとしていたところを狙って、渾身の正拳突きを当てた部分、右胸を狙った飛び蹴りを放つのであった。

しかし、和樹はイジメを受けていた経験から、とっさに上体を丸めたことが功を奏し、どうにか和樹は更に負傷せずに済んだのである。

幸運な事に、とっさに身体を丸めたことで相手の力を上手く分散させることができてしまったのだ。……だが、優は隙が多く、大技でもある飛び蹴りが防御されることは龍眼で分かっていたことなのだが、次の攻撃を成功させるために敢えて飛び蹴りを選んでいたということを和樹は気付かなかった。

そのうえ優が、先程の飛び蹴りと同じ挙動をしたことから、和樹は結芽が”自分の力を誇示したがる娘”だったという記憶が残っていたこと、諸事情により正体を隠すために変装をしている優のことをニッカリ青江を持っているところから結芽だと思い込んでいることもあって、結芽がムキになって同じ攻撃をしようとしていると和樹は勝手に思い込んでしまったのである。

(……そういう所がガキなんだよ。)

そのため、和樹は現世にはもう居ない結芽のことをガキだと心の中で蔑むと、優が飛び上がると同時に和樹は同じ防御方法で飛び蹴りを防ごうとした。

しかし、今回の攻撃は右胸を狙った飛び蹴りではなかった。

（低いっ!?!?）

確かに、先程と同じ飛ぶ動作はした。

だが、先程よりも低い跳躍であり、和樹の右胸ではなく左膝関節を狙った飛び蹴りであったのだ。

先程の右胸を狙った飛び蹴りは上手く防御できたことによる慢心から生ずる先入観を持たせるためのブラフであり、次に放つ左膝関節への飛び蹴りを成功させ、和樹の脚力を失わせるのが目的であった。

「うあっ!?!?!」

飛び蹴りがブラフであることを見抜けなかった和樹は、荒魂の力と八幡力によって強化された優の左膝関節を狙った飛び蹴りをまともに食らうことになり、和樹の左膝もあらぬ方向に曲がり、左足は動きにくくなり、歩行が困難となってしまう。

そのため和樹は、右腕と左足があらぬ方向に曲がり、右胸の肋骨も折れるという歩くのにも呼吸をするのにも一苦労という状態となってしまったうえ、唯一の攻撃手段であったナイフも失ってしまったため、頼りにしていた蝶の荒魂を召喚することも封じられているに等しい状況にまで陥ってしまった。

優は短刀の御刀を腰に隠すように所持していたことによって、御刀を媒介して隠世から超常的な力を引き出すことで使用できる八幡力と迅移といった刀使の技が使用でき、それだけでなく大荒魂のタギツヒメと融合したことで得た龍眼という未来視のような特殊能力が使えるうえ、身体能力は荒魂の力によって強化され、その強化された身体能力も八幡力によって更に強化可能であり、半ば荒魂と化しているため、荒魂化している部分は御刀以外の攻撃は有効打とならなかった。

だが、一方の和樹は、御刀を所持していないために八幡力や迅移といった刀使の技が使えず、身体がノロに上手く定着できなかったために常に起こる激痛で常時危篤、内臓の殆どが機能不全を起こしているため飲料か点滴でしか栄養補給ができない身体になってしまっていた。

その結果、荒魂を受け入れる以前よりも?せ衰えていった肉体と、

生身の部分が多く御刀以外の物理攻撃も通じるため、和樹が不利であるのは明白であり、勝負はその差によって決まった様なものであったように和樹は感じたのである。

（……くそっ。……くそクソクソォーーーー!!!!）

だが、和樹はそれが悔しかった。

御刀のお陰で、八幡力や迅移といった恩恵を得る刀使。……一方の自分は、御刀の恩恵すら、実の両親からの愛情すらも得られない日々。

国家公務員という安定した地位と職場を得ている刀使。……一方の自分は、ブラックな職場で疲弊し、そして使い潰され、捨てられて行く日々。

政府の意向により、福利厚生等がばっちりである刀使。……一方の自分は、政府の意向により重税を課せられ、再就職先すら、満足な金すら得られない充実した日々を得ることも、送ることもできない日々。

和樹は、日々感じる自らの現状と刀使との圧倒的な差が悔しかった。人生の勝ち組とも呼べる存在との差が激しいことに鬱屈とした日々を過ごしていた。

歪んでいるとしか思えない人間達が勝ち組の様に振る舞い、そして自分達を蔑む言動と行動をするそんな人達と比べられる日々が辛く、苦しく、惨めに感じていた。……そして何よりも悔しかったのだ。

「うっ、うおあああぁーーーーっ!!!」

だからこそ和樹は、折れた左足の痛みを気にすることなく立ち上がった。そして、唯一残った左の拳を頼りにして、優に襲い掛かろうとしていた。

……勝ちたかった。

うだつの上がらない日々を送る自分を見て、兄である自分を見下す刀使の妹。

俺が収めている税金で創られたであろう煌びやかな、そして嫌に白く清潔な制服に身を包む刀使。

昔から結月学長に恋心を抱いていたのに、結月学長からその才覚を愛され、そして親からも期待されるという恵まれた環境に居る燕　結

芽。
　しかし、最終的には恵まれた環境に居る結芽に打ち勝つという和樹の願いは叶うことなく、結芽ではない優の体術によって左腕も決められ、左肩も脱臼させられるのであった。
　そのため、和樹は右腕の肘と左膝関節、それに右胸の肋骨が折れ、左肩も脱臼させられるという、行動不能に近い状態にさせられた和樹は、優に結束バンドで手足を拘束させられるのであった。
　……勝ちたかった。……勝ち組に勝ちたかった！
　刀使に勝ったことで自分の価値を証明したかった。
　この世は出生や才能が全てではないと証明したかった。
　自分の方が、刀使よりも、天才とか才能とか選ばれた人間とかよりも価値があると証明したかった。
　才能の無い自分が、天才とか言われて有頂天になっている子供の鼻っ柱をへし折りたかった。
「くそ……クソ、くそくそくそぉっ!!」
　そんなことばかり考えていたせいなのか、和樹はスマホのＳＮＳである言葉が流行っていることを思い出してしまっていた。
　親ガチャ、環境ガチャ、職場ガチャ、子供ガチャ、国ガチャ……人生ガチャ。
　親ガチャ環境ガチャ職場ガチャ子供ガチャ国ガチャ友達ガチャ上司ガチャ時代ガチャ遺伝子ガチャ才能ガチャ就職ガチャ教師ガチャ体質ガチャ人生ガチャ親ガチャ環境ガチャ職場ガチャ国ガチャ友達ガチャ上司ガチャ時代ガチャ遺伝子ガチャ才能ガチャ就職ガチャ教師ガチャ体質ガチャ人生ガチャ
　それを見かける度に和樹の頭の中は一気に騒がしくなっていた。
　………ガチャガチャと。
ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ
ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ
ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ
ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ
ガチャガチャ

○○ガチャを見かけたり聴こえただけで四方八方から、ガチャガチャと騒いでいるように感じた。

そして、今の環境やネグレストの親と自分のことを蔑む刀使の妹といった家族との関係、就職した先がブラック企業だったがために履歴にケチが付き、再就職に悩み苦しんでいる和樹はそれが特に煩わしかった。

まるで、自分が全てのガチャ引きに失敗した人生の落伍者という烙印を皆が皆、嗤いながら、そして他人事の様に決めつけているかのように感じられ、その言葉が目に入る度に息が詰まるかの様な思いを抱き続けていた。

そして、和樹は今の世の中をこう評したのである。

……この世は息苦しいだけだと。

だから和樹は、この現世の今を生きている和樹は、心の奥底ではこの閉塞的で息苦しい世の中を壊してでも変えて、自分が生き辛くない社会へと変貌して欲しかった。

自分は無価値ではないと証明することで、生き辛い社会を変えたかった。

だからこそ、天才と持て囃されている結芽を倒したかった。

こうして、刀使を救いたいと思っていた青年は、荒魂の影響か、それとも他の要因による物なのかは不明であるが、不思議な事に刀使に対して、憎悪の念を強くしていったのであった……。

――――優が和樹を拘束している同時刻。

可奈美達は件の〝人型の荒魂〟と対峙していたが、姫和はその〝人型の荒魂〟がイチキシマヒメでないことに何となくではあるものの違うと気付いてしまった。

「……カナミン、ヒヨヒヨ。私達が隙を作りマス!!」

「つーわけだ、頼んだぞ。」
しかし、先程まで赤子の荒魂と荒魂化した人間を相手にし、討伐したせいかそのストレスによって心と思考が乱れてしまった事により、この〝人型の荒魂〟がイチキシマヒメではないことに気付かない薫とエレンの両名は、大荒魂に対して特に有効打となる御刀の千鳥と小烏丸を持つ可奈美と姫和のために隙を作るべく斬り込んで行った。
猿叫を叫びながら〝人型の荒魂〟に第五段階の八幡力の力を乗せて、刃長だけでも２１６．７ｃｍもの巨大な御刀祢々切丸で斬り掛かるが、人型の荒魂は手にした御刀で易々と受け止めるのであった。
「んなっ!?」
「薫！後はワタシに任せてくだサイ!!」
受け止めたことに薫は驚くものの、薫の第五段階の八幡力を乗せた斬撃を止めたということは同等の力、敵も第五段階の八幡力を使っているということであるうえ、八幡力と金剛身は同時に扱えないのだ。ならば、薫の攻撃を受け止めている状態であり、金剛身といった防御の技も使えない隙だらけの状態であるとエレンは判断すると、〝人型の荒魂〟に斬り掛かるのであった。
「カクゴっ!!」
エレンは覚悟と言って、薫の剣を受け止め、隙だらけとなっている〝人型の荒魂〟に斬り掛かると、エレンの胸中はこれで決まると思っていた。
だが、〝人型の荒魂〟は薫と斬り結ぶのを辞めると、第五段階の金剛身を使ってエレンの剣を弾くのであった。
「Ｗｈｙ!?!!」
これには、エレンも驚く他無かった。
通常、八幡力と金剛身は段階を上げることで強力となり、第三段階の金剛身なら銃弾を受けても無傷でいられるほどの耐久力を発揮し、八幡力は自動車並みのパワーを使える。しかし、それを超える第四段階の八幡力と金剛身を使える刀使は数えるぐらいしか居ない。そのため、金剛身と八幡力の両方を第五段階まで引き上げることの出来る刀使は、唯一可能性が有りそうな紫を除けば、刀剣類管理局に在籍す

る刀使の中には居ない筈である。
だが、この〝人型の荒魂〟は、そんな第五段階の八幡力と金剛身の両方を難なく使ってきたのである。
エレンと薫はそこまで考えると、ある可能性が思い浮かんだ。……それは、ある一年前のこと、沖縄にて試験していたS装備。珠鋼を搭載したことによって、第五段階の八幡力と金剛身を両方使え、稼働時間も無制限という珠鋼搭載型のS装備。
その珠鋼搭載型のS装備をこの〝人型の荒魂〟が身に纏っているのではないかと感づいたのだ。
「くそ、あん時のかよ。……エレン！ねね！行くぞ!!」
しかし、珠鋼搭載型のS装備は確かに、装着者に八幡力と金剛身の力を第五段階まで引き上げてくれるが、八幡力と金剛身は同時に扱えないのは知っていたうえ、一年前以上前の沖縄での出来事で珠鋼搭載型のS装備を着用した者との戦闘経験が有る薫とエレンはそれを活かして、経験の無い可奈美と姫和の二人のために隙を作ろうとする。
そのため、薫は祢々切丸を投げ、それをねねがキャッチし、薫に投げ返すと同時にエレンが薫を自身の御刀である越前康継の上に乗せると、砲弾の様に投げ飛ばし、投げ飛ばされた薫はねねが投げ返した祢々切丸を再度掴むと、縦方向に回りながらその遠心力を活かして斬るという複雑なやり方ではあるが、エレンとねねの三人掛で倒そうとしていた。
しかし、〝人型の荒魂〟は迅移も使わずに一気にエレンと薫との距離を詰めるのであった。
「!!?」
その余りにも速い動きに、実際は迅移を使ったのではないのかと疑ったものの、迅移を使ったようには見えなかったため、恐らくはこの〝人型の荒魂〟の動きが純粋に速いだけなのかもしれない。
しかし、本当に純粋に動きが速いからなのか?という疑問は残るが……。
だが、現実に〝人型の荒魂〟は迅移と見間違える程の速度でこちらに接近してきているのである。

そんな動きが出来るとは思わなかったエレンは、薫と人型の荒魂の間に割って入り、どうにか人型の荒魂の攻撃を金剛身で防ぐものの、人型の荒魂は八幡力の力を使っているらしく、簡単にエレンを弾き飛ばして、薫との一対一の状況へ持って行こうとするが、可奈美と姫和の両名が援護に向かったため、人型の荒魂は後ろに飛び下がって体勢を立て直すのであった。そのため、可奈美達は薫の危機を脱したかに見えた。

しかし――――、

「……衛藤　可奈美、十条　姫和の両名を確認。……捕獲を試みます。」

〝人型の荒魂〟が不意打ち気味に喋り始めたため、可奈美達は驚くものの、その声に聞き覚えがあったため、可奈美はついその名を呼んでしまった。

「……皐月……さん？」

そうして、可奈美達はようやく気付くのであった。

そうして、目の前に居る〝人型の荒魂〟は〝皐月　夜見〟であることに気付き、それと同時に、目の前に居る〝荒魂〟は〝人〟であることに気付くのであった。

そして、夜見は突然、自身が持つ御刀で腹を突き刺すと同時に、自傷によって出来た腹の傷の穴を広げるかのように横に動かすのであった。

可奈美達は夜見のその突然の行動に、ウッと声を上げるが、次の瞬間にはそれよりもおぞましいものが目の前で行われ、可奈美達にとって災厄が現れるのであった。

その災厄とは、夜見が開けた腹の穴の中から〝赤子の荒魂〟が産声を上げて、這い出て来た事であった。

古来、人に仇なす異形の存在『荒魂』の討伐を使命とする彼女たちを人々は『刀使』と呼ぶ。

そのため、避難が遅れている人を守るために、赤子の姿と声に酷似

した生命を模しただけの異形な存在『荒魂』と人の姿をしていても腹から荒魂を産み出す異形な存在となった『荒魂』を討伐しなければならなかった。

荒魂共が囁く日

時は戻り、丹沢山周辺にて荒魂の群れが出現する数週間前のこと――。

赤子の荒魂を使役し、腹の中から這いずり出る様に改造した夜見のことを聞いたソフィアはスレイドに改造した箇所はそれだけかと尋ねていた。

「……しかし、スレイド博士。新しいノロと人体の融合実験とはそれだけなのですか？」

「フフフフフ、無論、それだけではない。……私は悩んだよ。悩んだ。私は知っての通り刀使の強化に使えるノロのアンプルを完成させるために、子供にノロを注入させたんだ。だから、この世界の中では子供に荒魂を注入させる技術においてはボクは一番の腕を持つと自負しているよ。……けどね。」

自分は、子供に荒魂を注入させて強化させるという技術の腕は一番であると自負していると述べるスレイドは、何か苦々しい事を思い出したのか、珍しく渋い顔をしていた。

「……けどね。けどね。流石の私でも荒魂を注入して体の改造を行うには、なるべく若い方が良いんだ。若くて柔軟性の有る脳がある程度はノロに適応してくれるからね。でも、それでもやはりというか何というか、子供でもやはり、荒魂が持つ負の影響で身体がダメになったり、もしくはノロを注入する量が多すぎると荒魂化する傾向が見られてね。そういった側面をどうにかできないものかと考えていたものだよ。ホントホント、これぱかりは悩んだよ。」

スレイドは自身が行っていたノロと人を融合させ、強化・進化する研究で難儀していたことがあったと告白していた。

それは、若くて柔軟性の有る脳の適応力から、それに適している子供を使って実験をしていたのだが、それでも荒魂化や負の影響によって苦痛に耐えられず死去する者や暴走する者が後を絶たず、精神面と肉体面において安定化させることが非常に難しかったと答えていた。

「……だけど、だけど『暴力も愛情表現の一種』と考えている静くんの話を聞いてピンッ！と閃いたんだ!!正に、これが神の天啓であり、恩寵であったんだと思ったよ。苦痛が心地よいと思うようにすれば、ノロの負の影響による暴走、抗いがたい飢えと渇き、ノロが身体に侵食される際に生ずる痛みといった負の影響を克服できると！」

しかし、スレイドは静の発言を聴いて、行動を見て荒魂による負の影響を克服する方法が閃いたと答えていた。

「それで夜見くんに入れるノロのアンプルにコレを混ぜてみたんだ!!!」

あるものをノロのアンプルに混入し、夜見の身体の中に注入したと答えていた。

……それは、

「ヘロイン、マリファナ、アンフェタミン、……まあ、所謂麻薬という物を混ぜてみたんだ。」

麻薬といった薬だった。

脳に作用し、多幸感や幻覚などをもたらし、最終的には身体を壊す薬である。

「このノロのアンプルは荒魂の元となっているノロが使われていることは分かるね？そして、その荒魂が何て呼ばれているか知っているかい？……荒ぶる神だよ！荒ぶる神!!それで、ヘロインの元となり、昔は神の薬と呼ばれたアヘン……つまりは麻薬と混ぜれば人体と荒魂のが融合する際に生ずる負の影響、苦痛を緩和させることができるんじゃないかと思った訳だっ!!!」

古来、いや、６０００年以上前の地球で最古の文明と呼ばれるシュメール人の時代、その時代からある植物が発見されたのである。

それはケシ（芥子）と呼ばれる植物の一種で、この植物から得られる乳液には、身体の痛みを消し去る力があった。それが分かった古代の人々はこの乳液を乾燥させたものを強力な鎮痛剤、薬として使われていた。

そのため古代の人々はケシのことを「喜びをもたらす植物」という意味のフル・ギルと名付けていた。何故、「喜びをもたらす植物」と呼

ばれたかと言われれば、それはこの薬を使用した者が眠気に誘われ、幻想が見え、痛みが消えただけに止まらず、気分が上向きになり、多幸感になれたため、ケシの事を「喜びをもたらす植物」と名付けられたのである。……そして、この「喜びをもたらす植物」は、現在ではアヘンとも呼ばれ、危険な薬である麻薬と言われる代物となるのであった。

「それに昔の人はお酒や菓子に麻薬を混ぜて飲んだり食べたりしたこともあるそうだよ?……トロイのヘレネ戦争に疲れたギリシャの戦士達もネペンテというワインに溶かしたものを振る舞ったという話から、ノロのアンプルに麻薬を混合させるという発想を得たんだ。……あっ!言い忘れたけどネペンテの主な原料は、アヘンだから、何も間違っていないよ!!アハ、アハハハハハ!!」

しかし、やがて危険な薬であるアヘンと呼ばれるようになる代物を古代の人々は『神から与えられた薬』であると認識し、紀元前数世紀頃まで使われていた。

……だが、使用していく内にアヘンを大量に摂取し続けていると使用するのが辞められなくなるうえ、一度に摂取し過ぎると死んでしまうことが分かったのである。しかし、数々の病気を治すため、眠るときの睡眠剤、又はお菓子に練り込んで食べることで気分を落ち着けたりもしていたため、アヘンを使うことを中止することを古代の人々はしなかったのである。

そのため、その後もアヘンは全世界へと広まっていき、娯楽の一種として使われていった。そんな世界だからこそ、16世紀にはアヘンとブランデーを混ぜて調合した薬「ローダナム」が流行ったりもしたのである。

しかし、時は1840年、イギリスと中国との間に起きた『神から与えられた薬』であるアヘンから名前を取ったアヘン戦争にて、中国は敗北。その結果は、アヘン輸入のための港を多く解放させられ、アヘンの輸入量は増加。中国国内のアヘン中毒者は増加する一方であった。

だが、それだけに留まらず、1848年のアメリカのカリフォルニ

ア州にて金が大量に発掘されることが分かったことで金を採掘しようとする人々が大量に押し寄せて来たのである。……そして、その中には7万人もの中国人がアメリカへと渡り、その中国人の中にアヘン中毒者が多く居たのである。これにより、アメリカでも多くの人がアヘンを吸引するようになり、アメリカのほぼ全ての主要都市でアヘン中毒者が続出してしまった。

……そのため、世界でアヘンが流行したことによって、アヘンは社会に破滅をもたらすと考えられるようになったのである。

こうして、『神から与えられた薬』と言われたアヘンは『社会に破滅をもたらす』というふうに認識が変わって行くのであった。

しかし、アヘンには強い鎮痛効果があり、優秀な薬としても使えるのは事実であった。

そこで科学者達は鎮痛効果を残しながらもアヘンの中毒性は無くせないものかと考えたのである。

その結果、アヘンに存在する鎮痛効果のある物質だけを取り出すことで中毒性を消すことが出来ると考え、それを取り出すことに成功したのである。

こうして、その物質をモルヒネと名付けたのである。

……しかし、モルヒネもアヘンの6倍も効果が強く、短時間で高い高揚感を得たものの、副作用は一切消えず、モルヒネ中毒という言葉が出来るほどにアヘンよりも高い依存性を示したのである。結局のところ、アヘン中毒を防ぐために作られたモルヒネは、ただアヘンの効果を強めただけという形で終わったのであった。

だが、科学者達は諦めることをせず、どうすれば依存性の無い鎮痛剤を作れるかを考えた。

そうして次に科学者達が考えたのは、モルヒネを基に他の化学物質を合成し、その成分を化学反応によって少し別の物質に変えれば良いだけなのでは?というものだった。

こうして、完成した新たな鎮痛剤は、モルヒネの5倍は効果があるものとなったが、この薬を犬に投与すると、犬は激しく興奮し飛び回り、その後酷く具合いを悪くし、死にそうな状態になったことが確認

され、薬は処分されることになったが、ある製薬会社がこの薬に目を付けることで話は変わってしまう。

モルヒネの5倍も効果があるのであれば、使用量は少量で済むはず。

使う量もほんの少しであれば、中毒になる可能性も低くなるという考えのもと、ヘロインという名前の新薬として販売されることとなる。

……4週間と少人数の試験だけで、問題は無いとしていたが。

そうして結果は、ヘロインはすぐに十数件の中毒例と数件の乳幼児の死亡例が出た後も、ニューヨークの20万人もの人がヘロイン中毒者となり、ヘロインは現在ではキングオブドラッグと呼ばれる程の危険な麻薬となってしまったのである。

……そのため、モルヒネ中毒者を更に凶悪なヘロイン中毒者に変えてしまっただけという結果はモルヒネのときと変わらない結果となってしまったのである。

しかし、その後も研究者は諦めず、ヘロインに代わる新薬を作ったものの、新しい依存症が生まれ、薬物治療施設が多く開設されるのであった。

人というものは、悪い事をしながらつい良い事もし、良い事をしながらそれと気付かず悪い事もするものなのであろうか?

……こうやって、神の薬と呼ばれたアヘンは多大な悪影響を及ぼしたのであった。

「それに面白いよねぇ。時代が時代なら、ノロのアンプルもアヘンと一緒で”神の薬”と呼ばれたかも知れないのにねえ?もしくは、モルヒネと同じように呼ばれている神性な珠鋼と同等の扱いをされたかもしれないのにねえ?」

そして、スレイドはこうも述べる。

神性を帯びた稀少金属と呼ばれる珠鋼。それを精製すれば産まれるノロとそれが結合すれば産まれる荒魂という関係は、神薬と呼ばれたアヘンと人間の歴史、そして使用量が増えれば、人扱いされなくなることと似ているのでは無いかと?

「でもこれ、面白いと思わない？アヘンとノロを混ぜれば神の細胞と神の薬のハイブリットって事になるしね。イヒッ、ヒヒヒヒヒヒヒッ、ヒヒヒヒヒヒヒ!!」

　このスレイドの発言は、嘗て、古代エジプトの女神であるイシスは、太陽神ラーの頭痛を治すためにアヘンを用いていたと云われ、ケシもギリシャ神話に登場する農業と豊穣の女神デメテルのそのものを表し、彼女の絵には豊穣を象徴する麦の穂と共にケシの花が描かれ、古代ギリシアではしばしばアヘンは眠りの神Ｈｙｐｎｏｓ、夢の神Ｍｏｒｐｈｅｕｓ、夜の神Ｎｙｘ、死の神Ｔｈａｎａｔｏｓに例えられていたことと、アヘンからモルヒネを分離するのに成功した科学者が「夢のように痛みを取り除いてくれる」ことから、ギリシア神話に登場する夢の神モルペウス神にちなみモルフィウムと名付けられたことをもじっての発言であった。

「それにだ。この国の刀使さんは巫女であって、その神道には大麻が使われていたそうじゃないか。それに、大正五年に神宮奉斎会本部が発行した『神宮大麻と国民性』によると「大麻は之を仰ぎ崇敬の念を致すべき御神徳の標章」であるとされているらしいじゃないか？それに、家庭においても大麻を奉安し、朝夕家族で拝むことは子供たちの教育上も多大な効果があるとしてたそうじゃないか？……だったら、巫女さんに神の薬を飲ませるのは悪い事じゃあない筈だよねえ？古来の刀使の在り方を復活させるから社を再建させまくっているそうだから、僕も古来のやり方を復活させようと奮闘している人間の一人だと言えるね!!今度、朱音とかいう人に聞いてみたいねえ!!」

　そうして、古来からの方法が正しいのであれば、自分も正しいはずだとスレイドは興奮気味に主張していた。

「それに、夜見くんの様な人体と荒魂を融合させ、身体能力や特殊能力を大幅に向上させた刀使のことを『冥加刀使』と呼ぶそうじゃないか？冥加というのは神仏から受ける恩恵の意味らしいから、『神の薬』と『神の力を持つ珠鋼』を組み合わせてあげた方が最も神仏からの恩恵を受けた真の冥加刀使、神の御使いとして相応しい姿になったと言えるんじゃないかねぇ？……このジョーク、面白いと思わない？」

神の薬である麻薬。神性なる珠鋼を搭載したS装備。各地の杜に奉られるノロ、荒魂を自身の力にすることで神仏から受ける恩恵という意味を持つ冥加から採られた冥加刀使という存在。

それら全てを組み合わせた夜見は、最も神仏の恩恵を受けた存在だと言えるのではないかと。スレイドはそう述べるのであった。

「フフフ、つまりは夜見にそれを処方したということですね。」

「ああ、そうだよ。神の薬の恩恵のお陰で彼女は覚醒作用を受けるから集中力が高まると同時に、疲れを感じさせない持久力、反応速度の向上によって瞬発力と敵の攻撃を躱すことは容易となり、そして多大なる多幸感によって痛覚を感じにくくなったから生半可な攻撃では倒れないし、それに最大の問題であった荒魂に対する苦痛も感じにくくなっているよ。」

それを聞いたソフィアは、麻薬によって無理矢理覚醒させられているため、集中力が増したことで敵の挙動をよく見ることができ、その集中力と反応速度の向上により、敵の攻撃を容易に躱すことができるうえ、疲れ知らずの持久力により、戦闘継続時間がS装備以上に飛躍的に延びただけに止まらず、精神は多大な多幸感に支配されているため、痛覚や疲労は感じにくくなっているため、どれだけ負傷しても戦闘を継続することが可能であるということを理解すると、凄まじい強化を施したものだとソフィアはスレイドに感心していた。

これらに加えて、卵細胞と血を代償にして、赤子の荒魂も召喚してくると解れば刀使達はどのように思うだろうかと、どのような顔をして、どのように自身の〝獣性〟を曝け出すのだろうかとソフィアは愉しみであった。

「……ですが神の薬と荒魂との融合だけではなさそうですが？」

「ああ、それももちろん今から話すよ。」

しかし、夜見の強化はこれだけではないだろうと思い、スレイドから更に聞き出そうとしていた……。

時は戻り、夜見が自身の腹を切って、その腹の中から〝赤子の荒魂〟を這い出して来たとき、可奈美達は刻が止まったかのようにピクリとも身動きができなかった。

夜見の腹の中から赤子の荒魂が出てきた。

つまりは、今まで相手にしていたのは夜見が産み出したものであることが今になって分かったのだ。……その事実だけで、親に愛されたという記憶を持つ可奈美達の精神を大いに揺らがせ、彼女達の精神の均衡を崩すには充分な効果であった。

そのうえ、

『全部隊に通達。全部隊に通達。赤子の荒魂は死体であっても積極的に人に取り憑き、強制的に人を荒魂化させている模様。注意されたし。』

今頃になって、赤子の荒魂のもう一つの特性である生者や死体であれども人に取り憑くことさえできれば、その者を荒魂化した人間として動かせることができるということが判明したのである。

つまりは、荒魂に対して対抗手段を持たない力の無い一般市民に近付けばどれほど危険な事であるか、そして市街地に入ってしまえばどうなることか……。

とすれば、何としてでもこの赤子の荒魂は討伐しなければならないということであり、夜見を止めなければならなかった。

「紫様！紫様!!人型の荒魂は目標の荒魂ではないです!!皐月さんです!!!」

そのため、可奈美は錯乱気味ではあったが紫に援護を求めていた。

紫の言葉なら、夜見も制止するだろうと踏んで。……しかし、

「……紫様。…ゆ、ゆか、ユカリサマ、ゆかり様、……紫様。」

紫の名前に反応したのか、夜見は壊れたラジオのように『紫様』と何度も名前を呼びながら、レコードプレーヤーのように首を何度も何度も回していた。

夜見のその異様な姿と人外な行動に誰もが恐れ慄き、可奈美達ですら夜見はもう人ではないのではないだろうかという疑念を抱かせる

には充分な程の行動であった。
……そして、
「……そうでした。そうでした高津学長誠に申し訳ありません。私は刀剣類管理局に囚われの身となっている紫様をお救いするという重要な任務がありました。」
可奈美と姫和を捕獲するという命令を忘れたのか、それともその命令に矛盾を感じ、直ぐに自分の都合の良い様に改変した命令である刀剣類管理局に囚われている紫を救出するという妄言を吐露していた。
「そのためにはあぁア、邪魔な管理局の犬である刀使を排除せねば！せねば!!」
突如、真っ直ぐに可奈美達の方へと向かって行くのであった。
その突然すぎる行動に可奈美達は驚くものの、直ぐにその体勢を立て直すと、先ずは薫が刀身の長い祢々切丸の第五段階の八幡力による振り下ろしで牽制しようとするが、覚醒作用のある麻薬によって反応速度が恐ろしく上昇している夜見は、それを難なく躱し、一気に薫に詰め寄る。
しかし、薫と夜見の間に入ったエレンが夜見の行動を抑えようとするものの、夜見の腕が伸び、エレンの御刀を掴むとそのままエレンごと放り投げるのであった。
投げ飛ばされたエレンは咄嗟に金剛身を張ったことにより、樹木にぶつかっても無事であったが、薫との間に距離ができてしまったうえ、姫和と可奈美は新たに現れた赤子の荒魂の相手をしている最中であった。
そのため薫は、この強化された夜見と一対一で戦うことになる。
「んなろっ!!」
そのため、薫は祢々切丸を振り回して、夜見をどうにか近付けないようにするが、薬によって反応速度と身体能力が上昇している夜見は薫の攻撃をいとも簡単に躱しながら、御刀を手に持つ右手を紫に取り憑いていた大荒魂と同じく、触手の様に伸ばすことで更にその突きの速度を上げ、その速すぎる速度に対応できなかった薫は写シを突かれ、残り一回となってしまった。

「ぐっ?!!」

しかし、残り一回の写シを再度張り直すものの、第五段階の八幡力の力が上乗せされた夜見の突きによって、吹き飛ばされている最中に樹木にぶつかってしまったことにより、写シの上とはいえ背骨が折れる感触を受けたため、残り一回の写シも使い切ってしまう。

「ねねっ!!」

薫が倒れたことで、声を上げながら近寄るねね。

「薫っ!!」

写シを使い切ってしまったことにより、気絶してしまった薫を救援するため薫の元へ迅移を使って急いで向かうのであった。

だが、その薫の元へと救援に向かった行動によって、エレンは夜見に対して攻撃のチャンスを与えてしまった。

夜見はエレンが薫の元へと向かったその隙を突いて、エレンに接近するのであった。

エレンは、荒魂化し触手の様に伸びる両手足とノロで覆われているがために表情も顔も見えないという人外染みた容姿に加え、自身の腹を掻っ切って、対峙した者に対してトラウマを植え付けるかのように創られた赤子の荒魂を召喚するだけでなく、首が車輪の様に回るという行動をする夜見の変わり果てた姿を間近で見ることとなったエレンは、自分もノロが体内に入り込んでしまえば、こうなるのだろうかと考えるだけで身震いしそうになった。

しかし、近くで気絶している薫を見捨てることができなかったエレンは必死で目を覚まして欲しいと念じながら、薫に呼び掛けるのであった。

「薫っ!薫っ!!生きてまマスか、薫っ!!?」

しかし、どんなにエレンが必死で呼び掛けても薫は返答が無かったため、長年連れ添ってきた相方は気絶していると判断し、この人外の様に変わり果てた夜見を一人で倒さねばならないのかと不安に駆られてしまった。

そして、エレンは不安に駆られると次の不安に駆られるのである。

それは、自身が敗北した時は赤子の荒魂に襲われ、赤子の荒魂の能力

である人の死体であっても人に取り憑き、荒魂化した人間として操られ、今の夜見の様に変わり果てた姿となるのではないかという新たな不安に駆り立てられたのである。

……腹の中から赤子の荒魂を産み出す化け物に変えられるのではないと。

こうして、新たな命を育めないと知り、孤独となった荒魂が一人ではないと証明するために赤子の姿と声に酷似した荒魂を創り、人と荒魂が一つになり易くなったことを見せることで、その荒魂の孤独感を癒せればという思いから始まった研究。

その成果は、割腹による自傷で腹に穴を空けると赤子の荒魂が這い出て来るうえ、異形としか言いようがない程に変わり果てた姿に恐怖と畏怖を感じさせ、赤子の荒魂も人間の赤子の声と姿に酷似しているうえ、人の死体であっても取り憑いて荒魂化した人間へと変えてしまうため、荒魂の脅威から人々を守ることを使命とされ、年若い娘しかなれない刀使にとってみれば、人々を守るためにこの赤子に酷似した荒魂を討伐しなければならないという刀使にとって最も天敵となる荒魂を産み出したとしか見れない程に醜悪な結果を齎したのであった。

アサシンクリード

――――可奈美達が夜見に出逢う前のこと。

獅童　真希が率いる特別遊撃隊の中でも、最新のアップデートが４０着しか為されていない新型Ｓ装備の着用が許されている人員（とはいえ、その内の２０着は予備部隊に回されているため、真希が率いている部隊の刀使の数は、真希を除いて２０名のみなので、現在は２０着分しかない。）は直近の荒魂討伐任務を終えたところ、刀剣類管理局本部からの突然の要請により、丹沢山周辺に突如として大量に現れた荒魂に現場の刀使だけでは対応しきれないため、その応援として鎌府女学院所属を示す青と白のツートンカラーで配色されたＡＷ１３９ヘリコプターの二機編成で移動していた。

尚、ＡＷ１３９ヘリコプターが二機編成なのは、ＡＷヘリコプターの定員が１５名だからであり、テロ対策と支援のドローン等の操縦を担当するＳＴＴ隊員が同乗していたからである。

「皆も聞いての通り、大量の荒魂が丹沢山周辺にて出現した。現場の刀使だけでは対処しきれない数であったため、本部に居た特別遊撃隊が急行したが、それでも足りない状況である。そのため、荒魂討伐を終えた我々にも救援の要請が入った。」

そのため、真希はＡＷ１３９ヘリコプターの機内にて作戦の概要を説明し、それを舞衣と沙耶香、そして歩といった他の特別遊撃隊も聞き漏らさぬように静かして聞いていた。

「尚、我々だけでなく陸自の機甲部隊と航空部隊。それと、空自と在日米軍も航空支援のみという限定的ではあるものの、彼等も救援として来ることになっている。」

尚、真希は詳細を省いているが、陸自の足の速い１６式機動戦闘車と９６式装輪装甲車といった装甲車が先に到着し、刀使達と共に防衛線を築くことで、赤子の荒魂の群れを市街地への侵入を阻み、その間に１０式戦車といった主力の部隊が到着するという予定である。

……そのため、１６式機動戦闘車と９６式装輪装甲車の火力が足りず、主力である１０式戦車が来る前に防衛線が瓦解すれば、赤子の荒魂の群れが市街地へと雪崩れ込み、未だ市街に残り救助を待つ民間人等に多大な被害を被らせることになるため、かなり綱渡りでもあった。

そして、防空任務が主任務である空自が航空支援しか出来ないのは納得できるものではあるが、歩兵戦力が配備されている在日米軍も航空支援のみの援護というのも理由があった。

それは、現在の在日米陸軍と在日米海兵隊には戦車といった機甲戦力が配備されておらず（良くてＡＡＶ―７といった水陸両用車ぐらい。）、ＴＰＹ―２レーダーやＰＡＣ―３といった地対空ミサイルか歩兵戦力しかないうえ、その歩兵戦力も日本語が話せない者が多いという現状であれば、英語を話せる者が多くない刀使達と意思疎通するのは難しく、共同歩調して任務に当たるのは困難であるという判断の元、Ｆ―３５Ｂといった戦闘機の荒魂に対する機銃掃射による航空支援という時間稼ぎ、ＲＱ―４Ｂといった無人機による情報支援、ＵＨ―６０やＣ―１７といった嘗ての『トモダチ作戦』にて使用された航空機が市街地に残る民間人の救援活動に向かうことになるのは当然のことであった。

無論、米国は日本に貸しを作ることで隠世技術といった技術の提供を優先的に得るという確約を締結させることも目的の一つではあったのだが、第二席である寿々花とフリードマン博士のチャット仲間である『アドミラル』という人物が大統領と合衆国議会の面々を説得したこと、Ｆ―３５Ｂのガンポッド掃射の威力とＲＱ―４Ｂの性能を見せつけることで日本に多く購入してもらうことで日米同盟をより強固な物にすることと日米の仮想敵国に対する牽制という目的があったがために在日米軍の航空支援を取り付けることができたのである。

「山の中に居た登山客は我々の初動の遅れで被害が出ている。……これ以上の被害を防ぐためにも、我々は一層の奮起をせねばならない。例え、今回討伐する荒魂が赤子の姿形だけでなく、声が酷似していてもだ。」

真希の赤子の荒魂を討伐することになろうとも、避難が遅れている人々を守るためにも遂行せねばならないと話していた。

そして、これは真希も与り知らぬことではあるが、今回の丹沢山周辺に突如大量に現れた荒魂に対して初動が遅れた理由は、今回現れた赤子の荒魂は夜見が産み出したものであるうえ、スペクトラムファインダーは今も旧親衛隊のメンバーとタギツヒメといった三女神に反応しないように設定されているがために発見が遅れたというのが事の真相である。

「恐らく、君達は今作戦において大きな葛藤を抱くことだろう。……しかし、これは朱音様から指揮権を戴いた僕の命令である!!もう一度言う、丹沢山周辺に突如大量に現れた赤子の荒魂を殲滅せよという命令は、今作戦の指揮権を賜った獅童　真希の命令である!!」

そして、真希は力強く宣言した。

部隊内での行為の責任は、全て部隊の指揮官に在ると。

今後、赤子の姿と声に酷似した荒魂を討伐したことに関して、『人の心が無い。』『赤ん坊殺し』と何も知らない一般人から非難されるそのときは、自分に付き従った部下達だけは、今作戦の指揮官である真希の命令により執行しただけであると述べさせることで自分に付き従った部下達だけでも、そういった非難に晒されないように、且つ責任が及ばないように真希は自分のみがその責を負おうとしていた。

その意図を理解した長年付き添って来た真希の部下達であるＳＴＴ隊員は、

「真希隊長！我々は義務と献身の意味を理解しております。ただ、国民の盾となれと、ただ荒魂討伐せよと御命令下さい。」

命を捧げると宣言していた。

義務と献身を放棄し、そのうえ女子供に背を向けてでも生き永らえようとする恥を晒す気はないと。

「私達も、義務と献身の意味は理解しております!!」

そして、真希の居るヘリに同乗していた刀使も先程のＳＴＴ隊員と同意見であると述べていた。

無論、それは何処ぞの養子先の子女の身代わりとして、そうしなけ

れば〝まとも〟に生きていけないこと、もしくは実家の剣術道場の名を広めるため、教育が無償で受けられるといった世俗的な理由以外にも、彼女達は真希にそう忠誠を誓う理由があるのだが、そのことに真希は気付くことは無かった。

そして、

『……真希隊長。ご相談があります。』

「何だ？」

突然真希が装着しているインカムから、真希とは別のヘリに乗る岩倉　早苗からの無線通信が入った。

『……こちらは先程の荒魂との戦いで下級生が使うＳ装備の稼働時間に余裕がありません。ですが、私達が使っているＳ装備はまだ稼働時間に余裕があります。』

真希はそれだけで彼女が何を言いたいのか理解してしまった。

自分達が装備している稼働時間に余裕の有るＳ装備のバッテリーを下級生達が装備している稼働時間に余裕の無いＳ装備のバッテリーと交換することで、下級生達が使うＳ装備の稼働時間を増やし、下級生達に良い装備を少しでも与えて、下級生達の生存率を少しでも上げようとしていた。

「……分かった。好きにしろ。」

『はい。ありがとうございます。』

早苗は真希の短い応答だけで、どういう意味でそれを述べたのかを理解し、行動を開始していた。

――――そして時は戻り、強化された夜見と一対一の状況に追い込まれてしまったエレンは、第五段階の金剛身と後ろに下がりながら、薫とねねとの距離を空けることで夜見のターゲットが薫とねねに向かわないようにすることと、攻撃を捌くことでどうにか持ち堪えていた。

「ぐっ、手が痺れマスね!!」

どうにか持ち堪えていたというのは、珠鋼搭載型のS装備の力を受けた夜見の第五段階の八幡力による筋力増加の斬撃を捌いてはいるものの、エレンの手は捌ききれなかったのか、痺れてきたからである。

その理由は、２０１７年に普天間基地で行われたS装備の運用試験に同席した研究員の女性が言うには、第五段階の八幡力は、攻撃の入角度と状況にもよるが、第五段階の金剛身でも体が軋むような感覚に襲われたという膂力（りょりょく）があったということ。

そのうえ、第五段階の八幡力を使えないが、第五段階の金剛身を使うことができるエレンはその技を駆使して、どうにか受け流している状態であった。

故に、夜見の第五段階の八幡力による攻撃を受け続けていたエレンの手が痺れるのは無理も無い話であった。

しかし、このままジリ貧の状態のままでは何れはやられてしまう。

そのときとなった場合は、一体自分はどうなるのだろうか?夜見の様な異形な存在となるのだろうか?

もし、あのような異形な存在となったら、私も荒魂を産み出す存在になるのだろうか?

そう考えてしまうだけで、エレンの心は次第に平常心を失いつつあった。

いや、エレンでなくても、この荒魂に敗れて、死んでしまった場合は荒魂を産み出す存在に成り果てる可能性が有ると言われれば、誰もが狂いそうになるものである。

それだけでなく、エレンが敬愛するパパとママは自分が荒魂を産み出す存在に成り果ててしまったと知ってしまったとき、悲しませてしまうと思うだけで、パパとママを悲しませたくないという思いが先行してしまうのであった。

だが、エレンの瞳に可奈美と姫和がこちらへ向かって来るのが見えたことに、エレンは一筋の光明が見えた様な気がしたのだ。

それなら、3対1でまだこちらに勝機は有ると感じ、希望が見えたかのようにエレンは思えたのである。

――――しかし、

伸ばした左腕をしならせ、後ろに迫ってくる可奈美と姫和の方へと振り回すことで近付けにくくすると同時に腕を天高く上げ、そのまま地面にぶち当てると強烈な破砕音と共に土煙を上げるのであった。

それを見たエレンは、土煙に紛れてこちらを攻撃しようとしているのだろうと眼前を警戒するが、

ドスッという音が背後からしたのではないかと思える程の衝撃とエレンの身体から切っ先、御刀の刃が生えているのを見てしまったことにより、エレンは思わず背後を見てしまう。すると、エレンの背後に何時の間にか夜見が居て、その左腕の先には御刀が握られており、その切っ先はエレンの写シを突いているということにエレンは気が付いた。

とはいえ、写シを張っていたお陰で、実体は損傷を受けずに済むが、これでエレンも写シを使える回数が後一回となってしまうのであった。

だが何故、先程までエレンの前に居た夜見が瞬間移動したかのように背後に回れたかと言うと。

先程の伸ばした左腕で土煙を上げたのは、目眩ましではなく、荒魂化によって強化された腕と第五段階の八幡力が加わった力を地面にぶつけることでその反発力を利用し、飛び上がると同時にエレンの背後へと着地。そのままエレンの背後を取ると御刀でエレンを突き刺したというのが真相であった。

そのうえ、土煙を上げることで背後に居た可奈美と姫和の視界を封じ、土煙を壁とすることに成功したため、両名はエレンの援護に向かうことができなかったのである。

そうしてエレンは夜見に足を蹴られると、バランスが崩れてしまい、体勢が整わないという隙を突かれ、夜見が御刀を振りかぶっているところが見えたために、金剛身を張って攻撃を防ぐことには成功するが、エレンは地面に倒れてしまう。

しかし、気は失っていなかったため、直ぐに立ち上がろうとするが鳩尾に衝撃を受けると、何が当たったのか理解した。

それは、夜見の不規則に伸びた拳であった。
それをエレンは認識した瞬間に吹き飛ばされてしまい。山林の木にぶつかると気を失うのであった。
「！姫和ちゃん!!」
エレンと薫が倒れたことに気付いた可奈美は姫和にアイコンタクトで薫を担ぐこと指示し、そして可奈美自身はエレンを担いで紫が居る元へと向かおうとした。
……確かに、可奈美は広い視野と鋭い観察眼を持つが、誰をどう配置し、相手の集団がどう行動するかといった部隊指揮をした経験が無かったことと、赤子の声で不安に駆られ、平常心を保てなかった事が仇となり、担ごうとする際に夜見に襲われるということは考えられなかった。
「！」
そのため、眼前まで迫って来た夜見に驚くものの、剣術の技量が一際高い可奈美は、第五段階の八幡力の力で振るって来る夜見の攻撃を上手く捌いて躱すことに成功した。
「可奈美っ!!」
第五段階の八幡力の力が加わった夜見の御刀による攻撃を全て上手く躱せたのは、新型S装備の恩恵だけでなく、母である美奈都のため、弟である優のために〝剣術好きな少女〟と〝正義の味方〟を演じ、それに見合うべく血の滲む様な努力をしたことで磨かれた剣術の技量の高さの賜物であった。
しかし、その努力は全て剣術のみに注いだものである。
故に可奈美は鞭のようにしなり、紫に取り憑いた大荒魂の腕のように腕を伸ばし、常軌を逸した変幻自在の剣の軌道を描ける夜見の手足と胴への攻撃をブリッジをして躱し、続く足への攻撃もブリッジの姿勢のまま、御刀で可奈美の攻撃を防ぐといった奇妙な動きに翻弄され、徐々にではあるが夜見の蹴りと拳が可奈美に当たり始めていったのである。
それを見た姫和は、可奈美の名前を叫びながら可奈美の元へと向かい、援護しようとするが猫が後ろ足で砂を蹴る要領で地面が抉れる程

の土煙と砂埃、それと極小の石礫を一身に受けた姫和は目を瞑ってしまう。

その目を瞑った一瞬の隙の間に、姫和は夜見の突きを受けてしまう。

「ぐっ!?」

そして、夜見は姫和を突き刺したまま可奈美の方へと投げ飛ばすことで可奈美の追撃も防ぐのであった。

そのため可奈美は、夜見の攻撃で気を失っている姫和を退かして立ち上がるが、夜見はその瞬間を狙っていたのか夜見の腕がこちらへと凄まじい速さで迫って来ていることに直ぐに気付き、御刀の峰の部分を使って夜見の腕を斬ることなく巻き上げる様に弾こうとするものの、第五段階の金剛身によって可奈美の攻撃は簡単に弾かれてしまう。

夜見の腕を弾くことに失敗した可奈美は、夜見の拳を鳩尾に受けてしまう。

「げほっ!?!!」

夜見の拳を受けた可奈美は、後ろへと吹き飛ばされるものの、気を失うことなく両の足と自らの気合いでふんじばり、地面に倒れることをどうにか防ぐことで、どうにか立ち上がった状態を維持するのであった。

「まだ……まだぁ!!」

エレンと薫、それに姫和が倒れている以上、自分が倒れる訳にはいかなかった。

そのため、可奈美は夜見の注意を自分に向けさせることで姫和達に危害が加わらない様にするため、果敢に自分から攻め込んで行く。

「ぜっやあああああっ!!!!」

しかし、夜見は突然御刀を横に投げ捨てたことで、可奈美は自然に御刀を目で追ってしまう。それにより、可奈美は夜見に大きな隙を与えることとなってしまう。

「……ぶっ?!!」

突然、夜見の頭が眼前に急接近したと思った瞬間、可奈美は夜見の

頭突きを顔で受けることとなり、御刀を手許から落としてしまう。
理屈は単純で、夜見は足を伸ばして可奈美の顔面に頭突きを食らわせたのである。……単純ではあるが、虚を突くことが出来る頭突きは敵との距離が近ければ近いほど、近接戦に置いては絶大な効果を発揮することができる攻撃でもあり、それをまともに受け、虚を突かれてしまった可奈美は御刀を手許から離してしまった。
その結果、手許に御刀が無い状態で可奈美は、荒魂の力で強化された夜見を相手にして立ち向かわなければならなくなってしまったのである。
……しかし、可奈美の悪い状況はそれだけで無く、夜見が手を触手の様に長く伸ばして、先程投げ捨てた御刀水神切兼光を移動することなく手に取る光景を見てしまったのである。
――――私は今日殺られる。
そう覚悟する可奈美であった。
「可奈美ちゃん!!」
しかし、舞衣の声が聴こえた可奈美は、その声がした方向へ顔を向けると、舞衣だけでなく、沙耶香と真希、それだけでなく紫の姿が見えたのであった。
可奈美は、これで紫が夜見を説得すれば、夜見を傷付けることなくこの戦闘を終わらせることができると思い、安堵する。
「戻って来い夜見っ！紫様はこの通り健在だ!!」
「折神　紫が命じる。……衛藤　可奈美と十条　姫和の追撃命令を破棄、本部へと帰投せよ。」
紫が夜見に対して、そう命じているところを見た可奈美は夜見の暴走はこれで収まるだろうと、そう思っていた。
……しかし、可奈美の考えていた事は、その通りとはならなかった。何故なら、
「ゆ、ゆゆゆ紫様？」
「そうだ。此処に居られる!!」
「紫様、紫様、紫様紫様？……何処に居るのですか？」
夜見は、紫の姿を見たのだが、彼女は認識出来ていないのか、此処

には居ないと言うのであった。
「そんな……夜見!忘れたのか!?此処に居られるだろう!!?」
「いいえ、いいえいいえいいえ、紫様はその様な事を御命令為さる訳がありませせん。それに、ソレに獅童　真希ははは第一席では無いはず!……オカシイ。オカシイオカシイオカシイ。」
　真希は、紫を認識しない夜見の事を尚も説得しようとするが、当の夜見は首をレコードプレーヤーの様にグルグルと回すと狂ったテープレコーダーの様に何度も同じことを口に出すのであった。
　その姿を見た真希達一同は、固唾を飲んで見てしまった。
　夜見の変わり果てた姿とその行動に恐怖を感じながら。
「ゆか紫ユカリ紫様は、紫様は泣きぼくろがあって、血の色の様に赤い服を着用着ていて三つ編みをして髪はまとめて短くしていて黒いストッキングと黒いハイヒールをしているのが紫ゆかり様です。だとしたら……その女は誰です?!!」
　そして夜見は、現実に居る紫とは掛け離れている服装と全く違う人物像を語りながら、紫を指差しながらこの女は誰かと真希に詰め寄ったのである。そして真希達は、その夜見の言動に驚くしかなかった。
　……そう、夜見の記憶は既に薬によって混濁しており、自身の記憶に整合性を持たせることで精神の安定を無意識に行うことで、紫のことを雪那の様な姿であると思い込んでいたのだ。
　そして反応が無く、真希達が動いていない内に夜見は自身の腹を切っていた。そして、その腹の自傷跡から赤子の荒魂が産声を上げて這い出て来たのである。
　それを見た紫は、今まで相手にしてきた赤子の荒魂が何処から現れたのか理解してしまったうえ、舞衣と沙耶香、真希は衝撃を受けたのか、時が止まったかのように止まり、夜見の腹の中から赤子の荒魂が這い出て来る様を黙って見ることしかできなかった。

神様も泣いたり笑ったりする

「くっ！……真希と舞衣達はあの〝人型の荒魂〟を相手にしろ。私はあの生命を模した荒魂を討伐する!!」

紫の声で我に返った舞衣と沙耶香、そして真希は紫の指示通りに動く。

そして、真希は八幡力の力で石礫を投擲して注意を向けさせると、沙耶香は夜見の真横へと移動し斬り掛かるが、夜見は先程出した赤子の荒魂を盾にして沙耶香の攻撃を防ぐと共に赤子は沙耶香に斬られたことで悲痛な産声で沙耶香を動揺させると、沙耶香の攻撃の勢いは削がれてしまう。

「……うっ!?」

それだけでなく、人の感情と温かさを理解し始めていた沙耶香にとって、赤子の荒魂の産声は心を揺らがせ、そして不安を抱かせるにへ充分であり、心を乱れさせると、沙耶香を動揺させるのには充分な声であった。

そのため、沙耶香の精神は不安定となり、早くこの地獄から抜け出したいと気が逸ってしまい、その結果、沙耶香の御刀の軌道が単調となり、攻撃一辺倒と成り果ててしまったことに沙耶香は気付かぬままであった。

そのため、薬によって反応速度が強化された夜見にとって、そんな単調過ぎる攻撃は容易く躱せるものであった。

「沙耶香ちゃん！一旦、後ろに下がって!!」

それだけでなく、沙耶香は舞衣と事前に決めていた連携、沙耶香が囮となり何合か打ち合った後に後ろに下がると沙耶香の後ろに隠れていた舞衣の居合で片を付けるという連携を沙耶香は精神が不安定になったことで忘れてしまい、ただただ気が逸る思いのままに御刀を振るっていた。

赤子が泣いている声は、人を不安にさせる効果があり、こういった

精神を揺さぶる攻撃に使われれば、人は正常な判断をすることが難しくなっていくものである。そして、焦燥感と不安に駆られる感情に心が満たされ、それに心が支配されてしまえば、他者の声も聞こえにくくなるうえ、思考と視野の幅が狭まってしまう。

……そうなってしまえば、

「うぐっ！」

単独で突出した形となってしまう。

そんなふうに単独で突出してしまった沙耶香は、この赤子の荒魂を産み出す夜見との戦闘を早く終わらせたいという気持ちが先走ってしまったことにより、夜見に対して猛攻を続けるが、その猛攻に夜見は後ろに下がり始めたため、沙耶香は自身の猛攻に気圧されたのだろうと単調に判断すると、そのまま力押しで押し切ろうとしていた。

しかし、これは夜見が後ろに下がることで、より沙耶香を奥深くへと誘い込むことで更に沙耶香のみを突出させ、沙耶香を舞衣や真希といった他の仲間から孤立させることで各個撃破を狙った夜見の作戦であるということに沙耶香は気付かなかった。

そして、そのまま誘われていることに気付くことなく、沙耶香は更に押し切ろうと猛攻を続けると、止めを刺すべく沙耶香は大きく御刀を振り上げて、夜見に向けて力強く振り下ろそうとする。

――しかし、沙耶香が夜見に向けて振り下ろした御刀妙法村正は何か固い物に当たったかのような音を発すると、妙法村正は夜見の身体に届くことなく、斬ることなく弾かれるのであった。

夜見は第五段階の金剛身を使って、沙耶香の渾身の一撃を防いだのだ。

沙耶香は渾身の一撃を防がれたことで、大きな間と言うべき隙が出来てしまう。その隙を突く形で夜見は、沙耶香の写シを突いたまま、沙耶香を御刀ごと片手で持ち上げると紫の方へと投げ付ける。

写シを斬られ、投げ飛ばされたことで気を失った沙耶香に紫をぶつけることで、紫の行動を阻害。こうして、残った舞衣と真希を各個撃破すべく夜見は舞衣から近付くのであった。

そのため、舞衣は夜見と真正面から対決することとなり、急に夜見

の左腕が触手の様に伸び、真っ直ぐにこちらへと向かって来たことに虚を突かれた舞衣は、慌てながらも夜見の腕を弾くか、斬ることで左腕だけでも斬ろうとしていた。

「たぁっ!!」

裂帛の気迫の声と共に、舞衣の剣の軌跡は美しい弧の一閃を描くが、舞衣の放った渾身の刃は夜見に届くことは無かった。

何故なら、第五段階の金剛身によって刃は阻まれたからである。

そして、舞衣の第二撃が来る前に、振り抜いてしまったことで伸びきっていた舞衣の腕を先程触手の様に伸ばしていた腕で抑えることで舞衣の第二撃を防いでいた。そのうえ夜見の右腕、御刀を持つ右腕はフリーであったために容易く舞衣の写シを何度も突いて剥がそうとする。

「うっ……ぐぅっ!!」

舞衣は夜見の攻撃を何度も受けたが、気を失うことなく写シが剥がれるのを堪えていた。

そうこうしている内に真希が舞衣の援護へと向かうが、夜見の触手の様に伸びた右腕は、御刀を変幻自在な動きをしながら迫るため、真希は容易に夜見に近付くことができなかった。

それに、夜見は第五段階の八幡力を使っているのか、真希の鋭く重い一撃も難なく受け止め、第五段階の八幡力を使える真希に対しても力負けしなかった。

真希と夜見が打ち合っているのを見た舞衣は、その隙に夜見に一撃だけでも加えるか、金剛身と八幡力を同時に使えないことを知っていたがために、金剛身を使わせることで斬り結んでいる真希の援護をしようとし、夜見に突きを放つのであった。……しかし、夜見は舞衣の突きを金剛身を使うことなく身体で受け止めていた。

「!……抜けないっ!」

舞衣は、夜見の肉を裂く感触を御刀孫六兼元を通じて感じていたが、今の夜見を市街へと向かわせないようにするのが先決であると判断し、罪悪感を堪えながら、どうにか意識を強く持って、必死に夜見を止めることを優先して行動していた。

……八幡力と金剛身を同時に使えないことを知っていたが故に、舞衣は夜見に金剛身を使わせるために斬り掛かったのだが、まさか金剛身も写シも使わずに身体で受け止めるとは思わなかったため、舞衣は驚愕していた。

そして、舞衣は知らないことだが、夜見は荒魂だけでなく薬によって痛覚を遮断されているために金剛身も写シも使わずに身体で舞衣の突きを受け止めることができたのだ。

「切っているのか！」

真希は、夜見が第五段階の八幡力と金剛身を使っていること、S装備を装着していることから一年以上前の事件にて騒がしたあの珠鋼搭載型のS装備を装着しているのだろうと判断し、舞衣の攻撃は珠鋼搭載型のS装備に搭載されている機能、自動制御で第五段階の金剛身が発動され、弾かれると思っていた。そして、発動さえしてしまえば、八幡力と金剛身を同時に使用することはできないという隙を突くように真希は第五段階の八幡力の力を加えた力強く、そして鋭い一撃を夜見に与えて、制圧しようとしていた。

しかし、金剛身は発動することなく、夜見は己の身体で舞衣の一撃を止めていた。

つまり、夜見が着用するS装備は着用している者をサポートする機能、第五段階の八幡力と金剛身を自動制御で発動する機能が切られているのだろうことが分かった。

そして、舞衣と真希の連携を凌いだ夜見は、舞衣に頭突きを食らわせ、御刀から手を離させると同時に昏倒させ、そのまま八幡力で跳躍で真希から離れると、紫の許へと向かおうとした。

「ユカリサマの……名を名前を騙るニセ偽偽物めえええぇぇぇ!!」

「紫様っ!!」

そうして、夜見は孫六兼元を引き抜いて真希に投げると、雄叫びを上げながら紫に迫って行くのであった。

夜見が雄叫びを上げながら紫に迫って行く姿を見た真希は援護に向かおうとするが、今の舞衣の置かれている状況が見えてしまったため、中断する。

舞衣は今、頭突きを食らったことで御刀孫六兼元を手許から失っており、そのうえ夜見は何時出したのか赤子の荒魂を出しており、その赤子の荒魂が御刀を手に持たず、気を失っている舞衣に少しずつ近付いているのである。

（……紫様。すみません!!）

舞衣の危機を見てしまった真希は、舞衣を見捨てることは出来ず、紫を後回しにして、舞衣の救援を優先して向かうのであった。

そのため、紫は夜見と一対一で、且つ起き上がったものの写シが張れないほどまで衰弱した沙耶香を守りながら戦わねばならないので身動きがあまり取れない状況で戦わなければならなかった。

そうして紫は、二度ぐらい夜見と打ち合うと、一瞬の隙を捉え、夜見の顔面に覆われているノロに御刀の斬撃を加えることに成功する。しかし、夜見の額を狙った一撃であったが、夜見はすんでのところで躱し、代わりに顔を覆うノロが剥がれ、夜見の顔を拝むことができた。

「あ……ア、ああ……アアア……。」

涙と鼻水を滝のように流し、接点の無い瞳をさせながら喋うという夜見の表情を紫は見ることになる。

そして、紫に見せた夜見の表情は重度の、そして命の灯がもう長くはない末期の薬物中毒者特有の表情であったことを紫は知る由はなかった。

何も知らぬことは最も幸福である。

西洋の諺にて『知らぬが仏』と同様の諺である。……しかし、本当に幸福なのだろうか？あるいは仏のように澄んだ心に昇華するのだろうか？

その証拠に、夜見の表情を見た紫はたじろいでしまう。

ノロのアンプルによって、夜見はこのような姿になったのだと。

そのノロのアンプルを完成させたのも投与させたのも、紫であるのだと。

それだけでなく、そのノロのアンプルを親衛隊に投与することにしたのは自分であると。

そして、それらを思い出すと紫は、夜見に対して罪悪感を起こし、迷

いを生じさせると、紫の平常心は崩されていった。
紫の平常心が崩されれば、紫の心技体は乱れ、紫が持つ御刀の太刀筋は鋭さを失い、二天一流が描く切っ先にも迷いが生じてしまう。
太刀筋に鋭さが失えば失う程、切っ先にも迷いや躊躇いが生じれば生じる程、薬で反応速度が上昇している夜見には通じにくくなるのである。
そのため、紫の二天一流による二つの刀の攻撃を夜見は躱すことができたのであった。
そして、紫の躊躇いがちな攻撃は、強化された夜見に対して、隙を提供するだけのものになったのである。
(……動きが読み辛いっ!!)
珠鋼搭載型のS装備の恩恵により、第五段階の八幡力と金剛身が使用することも厄介だが、それだけでなく、夜見は手足が自由自在に伸びることで身長の縮尺が自由に伸び縮みもできるのである。
とすればどうなるか?夜見の手足が伸びれば伸びるほど間合いが変わり、攻撃可能範囲を自由に変えることができるだけでなく、移動中に都市伝説のスレンダーマンの様に手足を長くしたり、元の手足の長さに戻るという急に身長が伸び縮みすることで紫の遠近感を狂わせると同時に、上下に揺れながら動くとしか言いようのない奇妙な動きに流石の紫も捉えることができなかった。
「くっ!」
そのうえ、急に左足だけを長い触手のように急に伸ばした反動だけで、迅移を使ったのではないかと錯覚するほどの速度を得ると同時に突き技を紫に対して放っていた。
……これが、先程エレンと薫に接近する際に、迅移と見間違える程の速度でこちらに接近することができたマジックの種であった。
単に後ろ足となる部分だけを伸ばし、そのバネの力を八幡力も加えて利用することで速度を上げていたに過ぎないという単純な物であったが、相手が対面していれば夜見の伸びた後ろ足が有る背後まで見えないがために、迅移と見間違える程の速度で急速に接近することができると思わせる詐術的な技でもあった。

そして、薫に対して行っていた時は、まだ荒魂と薬で強化され、伸び縮み可能な手足となった身体に馴れていなかったため、薫への攻撃をエレンが金剛身で遮ることができたが、可奈美達との戦闘によって徐々にその強化された身体に慣れ始めることができた。

その結果、移動と同時に手足を伸ばしたり、縮ませたりするという相手の遠近感を狂わせ、奇妙な動きで翻弄するということが可能となり、タイミングを合わせて手足を伸ばすことで更に速い突きを放てる様になったのである――――。

そのため夜見の突きを見た紫は、御前試合で見せた姫和の『ひとつの太刀』を想起させる程の凄まじいものであった。

大荒魂と分離したことで龍眼を失った紫は、姫和の『ひとつの太刀』と同等の速さである夜見の突きをまともに受け、写シの上とはいえ、肋骨が折れる感触と御刀に突かれた感覚を受け、紫は写シを一回分失う。

それだけでなく、夜見の突きを受けてしまったことで吹き飛ばされてしまった紫は、何とか写シを再度張り直すものの、樹木にぶつかってしまったことで、背骨が折れる感触を受けると再度張り直した写シも使い切ってしまい、起き上がることもままならない程に体力を消耗してしまっていた。

「寿々花！増援を寄こしてくれ!!」

『……既に予備部隊を含めた米村　孝子の部隊もそちらへ向かうよう指示しております。』

「よくやってくれた!!」

力を失い、片膝を付く紫の姿、気を失い倒れたままの薫とエレン、それに舞衣と姫和という状況を見た真希は、赤子の荒魂といった事を考慮すれば形勢はこちらが圧倒的に不利であることは明白であるため、大声で寿々花に増援を送るようにと叫ぶと、既に寿々花は即応部隊を整えていたようであり、救援に向かわせている最中であると返答していた。

とはいえ、作戦指揮権を預かる真希に無断で寿々花が勝手に予備の部隊と米村　孝子の部隊を動かしたというのは、寿々花の性格を考え

たら確認はするものであるだろうと真希は考え、疑問に思った。
それに、米村　孝子の部隊はタキリヒメの警護を担当している部隊の筈である。
この時期に市ヶ谷の警護をする部隊を薄くするのは、タキリヒメの身が危うくなるということでもあるため、市ヶ谷周辺の警護を任されている米村　孝子の部隊を動かすべきではないということは寿々花は重々理解している筈なのに……と真希はそこまで考えるが、直情径行気味である自分よりも冷静な判断が下せる寿々花が、何故このような事をしたのかは不明ではあるものの、増援を要請した自分がその増援を却下する訳にもいかなかったし、それに危機的状況であり、救援を欲していたことは間違い無いため、特に咎めることもせず、今は仲間を疑うべきではないだろうと思考を切り替えると、急な要請に応えてくれた寿々花を称賛していた。
とはいえ、疑問に思うことはあれど迅移を使って、急いで紫の許へと向かうのであった。
（……可哀想だが、斬り伏せる!!）
そう思いながら真希は、そのまま夜見の背後を斬ろうとするが赤子の荒魂が真希の行動を遮るように夜見の前に躍り出て来た。
「…邪魔だ!!」
しかし真希は、そう短く切り捨てると何事もなかったかのように赤子の荒魂を難なく斬り伏せる。
……だが、罪悪感を感じることなく斬ることはできなかったのだろう。その証拠に真希は罪悪感を打ち消そうとしたのか大声で叫び、赤子の荒魂がノロへと還る瞬間を横目で見てしまっていたのだ。
（……済まない。）
荒魂は生命を模しただけの存在である。
……だが、例えそうだとしても、赤子の荒魂に対して真希は謝罪をしていた。いや、謝罪しなければならないと思った。
もしかしたら、この赤子の荒魂は夜見が産み出したものではなく逃げ遅れた登山客の女性が荒魂化させられ、そこから産み出されたものである可能性も考えられる以上、助けられなかった命に対して謝罪す

べきだろうと真希は考えた。この作戦の指揮権を預かる立場上、赤子の荒魂に対して謝罪したり、涙を流したりして部隊の士気を下げる様な発言をする訳にはいかないので、心の中で謝罪するに留めた。

……しかし、まだ夜見の間合いの外であるからと、夜見から目を離したことが勝負の分かれ道であった。

何故なら、既に夜見の御刀が真希に迫っていたからである。

真希は、夜見が手足を伸ばせることを忘れていたため、真希は写シの上ではあるが、左腕の手首から先を失ってしまう。しかし、写シのお陰で実体にダメージは無かったが、両手が使える夜見の力に負け、圧され始める。

（ぐっ！……圧される!!）

真希も第五段階の八幡力を使用できるが、夜見が荒魂の力と薬によって疲れが生じないために普段以上の力が出たこと、そのうえ、真希の左腕の手首から先が失っていることで両手で御刀を持つことができなかったことも起因していた。

そのため、真希は再度写シを張り直すことで御刀を両手で持つことでどうにか押し返すと鍔迫り合いに持ち込むのであった。しかし、写シを再度張り直したことで真希が使用可能な写シの回数は、一回のみとなってしまったのである。

そして、夜見は急に飛び上がると、真希の頭上で振り下ろす形で迫って来るのであった。

それを見た真希は、空中では自由に動けないと思い、チャンスだと思ったために空中に居る夜見に一撃を与えようとする。

――しかし、夜見はそれを見越していたのか、足を触手の様に伸ばして、地面にぶつけて軌道を変えることで真希の一撃を躱すのであった。

そうして真希の一撃は空振りに終わったことで隙だらけとなり、その隙を突く形で夜見は真希の写シを斬るのであった。

「ぐはっ!!」

そうして、真希は転げ回りながらも、写シを張れない程に体力を消耗していても尚、どうにか立ち上がろうとしていた。

「こっちだよ！私の捕獲任務は!?」
真希達が倒れたことに可奈美は、どうにか真希達に危害が襲われないようにするため、囮となるべく斬り掛かるのであった。
だが、写シを斬られたことと、赤子の荒魂を相手にしたことで心身の消耗が激しかった可奈美は、最短で蹴りを付けるべく夜見に対して大きく振り被りながら斬り掛かる。
可奈美の大きく振り被る所作を見た夜見は、気持ちが逸り、渾身の一撃で早期に片を付けようとしたのだろうと分析したのか、袈裟斬りで応じようとしていた。……しかし、可奈美の狙いは力押しでは無かった。御刀同士がぶつかる音を鳴らせると、そのまま、寿々花が得意とする御刀を巻き上げる技を使って、夜見の右腕を斬るのであった。
これで、夜見は右腕を失うことで御刀という攻撃手段を失い、殺すことなく夜見を捕らえることができると思っていた。
――しかし、
「なっ!?」
夜見は臆することなく可奈美に接近すると、残った左腕で御刀千鳥を掴むとノロの力で無理矢理御刀の力を引き出したのである。
そうして、夜見は斬られたままの右腕で可奈美の右胸を殴りつけた。
「ぐっ!?」
写シの上とはいえ、右胸を殴りつけられ、右の肋骨が折れる感触がするのは不快であり、可奈美の心身を更に摩耗させるには充分な効果を発揮していた。その証拠に、可奈美は吹き飛ばされると同時に写シは解けてしまう。
「！」
それだけでなく、夜見は写シを張っていない可奈美に止めを刺すべく、夜見は斬られた右腕を伸ばして御刀に巻きつけて持つと、可奈美に対して御刀を振り下ろそうとしていた。
夜見が自分に向けて御刀を振り下ろそうとしているのを見た可奈美は写シを張り直し、鍔迫り合いに持ち込もうとするものの、第五段

階の八幡力の力に敵う訳もなく後ろへと吹き飛ばされると、写シが解けてしまう。……そのため、可奈美は写シを張る力も無い程に消耗しているのか再度写シを張ることはなかった。

舞衣も姫和も倒れ、沙耶香と紫、それに真希と可奈美はどうにか立ち上がろうとするものの、写シを二回も斬られたことで体力の消耗が激しく、立ち上がるのも困難だという状況となったことにねねは呆然としていた。

……このままだと、倒れている薫とエレンも何れは！

「ね……ねね…」

そして、ねねは気絶をしている薫を見て決意する。

「ねね…ね！」

嘗ての姿へと戻ることに。

「――――!!!」

大きな雄叫びと共に、嘗ての姿、巨大な鵺のような姿となることに。

そして、雄叫びに反応してか、薫は目を覚ましてしまう。

「…ね……ねね……。」

薫はねねが嘗ての姿に戻ったことを咎めようと、立ち上がろうとするが力が入らず、立ち上がることすらままならなかった。

そして、可奈美を救うためか、夜見へ突っ込んで行く。

……しかし、嘗ての強力な荒魂の姿に戻ったとはいえ、珠鋼搭載型のS装備を身に纏った夜見に敵う訳が無く一方的に斬られるだけであった。

「…ねね……ねね！……もういい……もう逃げろ!!」

薫の叫びは、願いは届くことはなく、嘗ての強大な荒魂の姿へと戻ったねねであったが、珠鋼搭載型のS装備と荒魂の力で強化された夜見に敵う訳も無く、一方的に打ちのめされた後、薫と夜見の間を遮るように倒れていた。そして、息も絶え絶えなのか、ねねの息遣いが薫の耳にも届いていた。

「くそ……ねね!!」

ねねを助けようと必死で立ち上がろうとするが、足に力が入らない。

「あああ荒魂をオヲ殲滅……します。」

夜見はねねのことを荒魂と言って、討伐しようと御刀を左手に持ち替えると振り被っていた。

――――そして、夜見は振り下ろすものの、夜見の御刀はねねに届くことは無かった。

ニッカリ青江がそれを遮ったからである。

そして、優の姿を見た夜見は警戒したのか、後ろへ飛び下がるのであった。

――――真希達が夜見と対峙していた時。

和樹の手足を結束バンドで拘束した優は、和樹の顔面を何度も殴って気絶させると、トーマスに無線連絡していた。

「……そうなんだ。苦戦してるんだ。」

『ああ、一人でも腕の立つ人員が必要だそうだ。』

トーマスから、赤子の荒魂を産み出す夜見に可奈美と真希達が苦戦しているとの報告を受けた優は、冷静に受け答えしていた。

「……。」

そして、優は姉の可奈美達を助けるべきかどうか考え、沈黙していた。そして、

（……あっ、そういえばねねちゃんが居たんだっけ？）

薫がペットと呼ぶねねのことを思い出し、可奈美達がピンチであるならば、そのねねはどういう行動をするかは容易に想像が付いた。

ねねは必死で可奈美達をあの親衛隊のおまけの内の一匹から守るだろう。そうなると、ねねは危ないかも知れない。

優はそう思うだけでペットのねねを救うべく、行動を開始する。

「……分かった。トーマスおじいちゃん、僕は行くよ。」

『ああ、お前が行くのが一番だろう。そいつは任せとけ。』

トーマスにそう言われた優は、和樹のことをトーマスに任せることにした。

しかし、優はふと気になったことがあったので、ある事を尋ねることにした。

「……ああでも、コイツから背後関係を洗うために色々と話を聞くんでしょ？」

『まあ、そうだがどうした？』

そのある事とは、和樹の処遇と尋問についてであった。

「まあ、コイツの尋問は〝タクシー〟でやるべきだと思ってさ。」

『そいつはどうして?』

優の言う〝タクシー〟というのは、今も米軍所属の潜水艦『ノーチラス号』の事であり、その潜水艦内にて尋問を行うべきであると主張していた。

「コイツは自分の血で蝶みたいな荒魂を出すんでしょ?なら、潜水艦内に居ると言えば暴れられないだろうし、尋問するならこの国の法律に則らなくて済む潜水艦の中の方が良いんじゃない?」

『……お前、そんなことまで理解して……いや、何でもない。』

トーマスは優の話を聞いて、この子は潜水艦ノーチラス号が今も米軍所属であることを良い事に政府とCIAの連中がブラック・サイト、所謂米軍と日本にとっての反社会的勢力をアメリカ合衆国や日本国外に在る場所へと連行し、そこで本来なら日本と米国の法律で尋問と拷問を行えないということになっているところを法律の適用範囲外であるということを理由に堂々と法律違反の水責め(ウォーターボーディング)などといった過酷な尋問や拷問をする場所にノーチラス号は変わっているということを優は事も無げに説明したのである。

……確か、優は9歳児で法律関係に明るくないはずである。

そのため、トーマスは意を決して、あることを尋ねるのであった。

『なあ、何でお前は人を殺してはいけないか分かるか?』

「……えっ?そんなの当然でしょ?」

そして、トーマスはそんなことを聞いた自分を強く後悔した。

「だって、この国は殺人罪なんて物があるからでしょ?」

何故なら、優は自信満々に人殺しが良くない理由は、殺人罪が有ってそれを破るのが良くないからだと事もなげに、そして抑揚の無い声で、さも当然であるかのようにそう返答したからである。……決して、人殺しが良くないことだからという倫理的な問題だからと言うのではなく、あくまで法律上そうなっていると無機質に答えたことにトーマスは何とも言えない気分となっていた。

――しかし、優が夜見の居るところへと向かったことで窮地に有るねねを救うことになるのであった。

ウールヴヘジン……北欧神話に登場する異能の戦士達ベルセルクと同一視されることもある勇猛な戦士達。名前の由来は「〝狼（▪ｌｆｒ）〟の〝上着（ｈｅ▪ｉｎｎ）〟を着た者」を意味しており、ベルセルクと同様に軍神オーディンの祝福を受けた存在で、文字通り狼のように勇猛に戦ったとされている。

ウールヴヘジンは鎧などを一切身に着けずに、狼の毛皮のみを羽織って、狼その物になり切り、相手に噛み付いて戦ったとも言われている。

また、北欧神話に登場する英雄達も狼に変身して戦ったという逸話が在り、これらの伝承や神話が中世のヨーロッパ社会に伝わり、その過程で所謂〝狼男伝説〟が生まれていった……と言う解釈もある。

そして、ある一説によると、ウールヴヘジンの元になった〝狼男伝説〟は赤ずきんといった童話に登場するオオカミのモデルになったとも云われ、そのベルセルク達が勇猛に戦うことができたのは、幻覚作用の有るキノコを食べて、一種のトランス状態にあったからこそ戦えたのだとも云われている。

……しかし、トランス状態にあったため、敵味方問わず攻撃するため、王達もその強大過ぎる力に期待はしていたが、決して自分達の護衛としてだけでなく、自分達の傍には近付けなかった。

そのため、優は北欧神話の逸話通りに荒魂のパーカーを被り、他者から見れば異常な戦い振りを見せるその姿から、政府の上層部に全く信頼されていないため、軍神オーディンの祝福を受けたウールヴヘジンと呼ぶに相応しい姿となっていた。

それだけでなく、夜見もまたノロのアンプルを投与することで、人体と荒魂を融合させ、身体能力や特殊能力を大幅に向上させた刀使である〝冥加刀使〟となっている。そして、〝冥加〟とは神仏から受ける恩恵を意味する言葉である。

そのため両者は、見方を変えれば神や仏といった超常的な存在の加

護を受けた者達が相争う形となったのである。
……本当に、両者が神仏の加護を受けているのかどうかも分からぬまま。
（おい、優分かってるな？あいつを止めるには、ヒメが言っていた通り、あいつごとノロとして吸収するしかねぇ。）
優の中に居るジョニーは、タギツヒメの言う夜見を殺さずに留めておく方法は、夜見をノロとして吸収するのが良いと優に事前に説明していたことを話していた。
（……分かってる。結芽おねーちゃんのためだもんね？）
（ああ、だけどオレ個人のお願いなんだけどさ。）
（……何？）
ジョニーの夜見を殺さずに行う方法の説明を聞いた優は、結芽のためだと返答すると、ジョニーの方からお願いがあると言ってきたのである。
（……いや、今回はさ、ニッカリ青江をあいつに使わないで欲しいんだ。）
（……何で？）
ジョニーは結芽が悲しまないように、ニッカリ青江を夜見に対して使わないで欲しいと願い出たのである。
そのことに優は、何故夜見に対してニッカリ青江を使ってはならないのか不思議でならかったため、訳を聞くのであった。
（い、いや、それは（あーもうっ!!コイツはホの字だから良い所見せたいだけなんだから、叶えさせてやんなさいな!!）ワアアアアア!?お前何言ってんだよっ!!）
訳を聞かれたジョニーは口ごもるが、同じく優の中に居るミカにジョニーは結芽に良い所を見せたいからだと答え、ジョニーはその答え合わせを示しているかのように慌てふためいていた。ジョニーとミカのやりとりを聞き、優は人知れず、クスッと笑うのであった。
（……そうなんだ。だったら、そうしないとね。）
そうして優は、ジョニーとミカの願いを聞くためにニッカリ青江を隠世に隠し、ＨＫ４１６Ｃを取り出した瞬間に夜見に向けて発砲する

のであった。
　そのため夜見は、時計回りに回りながら御刀を左手に持ち替えると同時に、両手足が伸び縮みさせながら不規則な動きをすることで銃の狙いを付け辛くさせると同時に、気絶していたり、片膝を付いてどうにか立ち上がろうとする可奈美達を射線上に入れることで撃ち辛くさせていた。
　夜見の動きによってか、優は続けて発砲することはなかったため、夜見の接近を許してしまう。
　……しかし、優は夜見の狙いがこちらへ近づくためのものであることは承知していたが、敢えて次の攻撃のために夜見を接近させていたに過ぎなかった。
　事実、荒魂化が進んでいる夜見に対して御刀以外の物理的な攻撃は効かないであろうことは承知済みであり、夜見に向けて投げ捨てることで夜見の注意をＨＫ４１６Ｃに向けさせることに成功し、その隙に切り札の一つを使用するのであった。
　そして、その切り札が奏でる音は、金属同士がぶつかる剣戟の音でもなければ、拳の殴打の音でもなかった。
　――――二発の銃声であった。
　上下二連式のソードオフショットガンを発砲したのである。
　この上下二連式のソードオフショットガンは、変革派の動きが慌ただしくなったことで対刀使を想定した武器として優が所持することを許されている武器の一つであり、トーマスと優は、この武器が対刀使用の切り札の一つであると認識もしていた。
　そして、優が持つ上下二連式のソードオフショットガンに装填されている弾はバードショットという遠い空の上を飛んでいる鳥を狙うことを想定して小粒の弾を数十～数百個ほど発射する物が装填されており、それを装填している理由は、御刀が発砲された銃弾に当たり、刀使の手許から弾き飛ばすことで刀使の能力を失わせるのが目的の一つではあるが、それだけでなく上下二連式の散弾銃の装弾数は二発であり、それと同様に平均的な刀使の写シを張れる回数は一回か二回ほどである。

つまり、至近距離から小粒の弾をシャワーの様に二度も浴びさせることで相手の刀使の写シを使い切らせるか、御刀を狙って撃つことで刀使の手から弾き飛ばすことで戦闘能力を失わせるかという刀使にとって致命傷となる二通りの戦術が採れる代物であるのだが、欠点もある。

それは、バレルを切り詰めたことで散弾の拡散範囲は上昇したが、銃弾の飛距離が犠牲となっているので有効射程距離が短く、御刀を持つ刀使に近付かねばならないこと、それと装弾数が二発しかないため、一発でも外せば御刀を持った刀使の目の前で再装填しなければならないという弱点があり、再装填している隙に反撃でもされれば対処のしようもないことから、一発も外すことが許されないここぞという時に使うべき武器であるが、御刀以外の武器に詳しくない刀使達に対して不意を突ける強力な武器でもあった。

そんな性質を持つ武器であるからこそ、トーマスと優は切り札の一つとして見ていたのである。

実際、この上下二連式のソードオフショットガンで優は既に何名かの刀使に対して発砲しており、相対した刀使は、御刀を手許から失わせるか写シを使い切らせるかという結果に終わらせている。

そのため、絶対の自信を持って発砲したのだが、今回は相手が悪かった。

確かに、写シが二回しか使えない平均的な刀使であれば、絶大な効果を発揮したであろうが、今回優が相手にしているのは刀使にノロの力を加えることで強化された冥加刀使である。

御刀は弾き飛ばされる処か、夜見の左手にしっかりと持っていた。

夜見が第五段階の八幡力で自身の筋力を増強してしまえば、銃弾程度の衝撃では夜見の左手から御刀水神切兼光を離すことは不可能であったのだ。

それに、優が一早く気付くと上下二連式のソードオフショットガンを夜見に向けて投げ付けると同時に距離を空けるのであった。

「……ちっ。」

夜見に対して、自信を持って放った切り札の一つが効かなかったこ

とに舌打ちをするが、それに動揺することなく優は次の算段を考えていた。

残る武器は、腰のヒップホルスターに収納されている９ｍｍパラベラム弾仕様のＰ９３８という自動拳銃、それに隠世の中に隠してあるが、長巻状に改造された鬼丸国綱と舞草に対して使われた対刀使用の矢を数本。それにスタングレネードといった各種武器を所持といった按排であったことを思い出すが、優が動き出す前に夜見が先に動き始めるのであった。

目から涙を流し、口からも涙と同様に涎を濁流の様に流しながら、譫言を呟く夜見の姿を見ながら、優は夜見が何を考えているのかは分からなかったが、龍眼を通して夜見の先の行動を見通していた。

優は夜見の動きに合わせて、懐に飛び込むと、腰に差してある短刀の御刀を抜くと同時に夜見の左手の手首を正確に斬り付けることに成功したのである。

銃ばかりを使うことで、相手に銃撃戦が得意であり、接近すれば勝機は有ると思い込ませることで、相手の方から接近戦へと持ち込む様に誘導。その後、接近戦に持ち込まれた際は、この一連の動作で仕留めるという幾度の敵を屠ってきた必殺の刃に優は絶対の自信を持っていたため、これなら効果が有るだろうと思っていた。夜見が手首を斬り付けられた痛みで御刀を手放すことを想像しながら……。

しかし、優の想像通りにはならず、夜見は御刀を手に持つ左手の手首を斬られながらも、御刀を握り締めたままであった。

「!?」

流石の優もこれには驚くしかなかった。

優のもう一つの切り札である短刀の御刀を抜いた瞬間に、敵の利き腕の腱か大動脈を切断することで敵の攻撃手段と防御手段の一つを喪失させると、そのままガラ空きとなった頸動脈や静脈を数回切り付ける、或いは臓器といった急所を何度も突くことで止めを刺すという一連の動作。それすらも夜見には通じなかったのである。

そして、夜見は御刀を地面に刺すと、左手で優の胸ぐらを掴み、そのまま片手で持ち上げられると地面に思いっきり叩き付けられる。

「ぐっ!!」

優は肋骨と背骨が折れた感触とその痛みに呻くが、夜見の伸縮自在の伸びる腕に抑え込まれ、優は動きを封じ込まれてしまっていた。

優の利点の一つである体重の軽さと薫に負けるほどの身長の低さにより相手の懐に易々と飛び込めるが、体重を乗せた重い攻撃ができないこと、それと、体重が軽いことで夜見が先程行ったように簡単に持ち上げられること、そして身長が薫に負けるほど低いため、長い腕に抑えられると手足が短いため、抜け出せなくなる恐れがあった。

とはいえ、優は痛みを堪えながら夜見の左腕を短刀の御刀で切り付ける。手首を斬るのではなく、皮膚を剥ぐように切ることで皮膚を剥がされた激痛で腕の力が弱まった瞬間を狙って逃れようとしたが、夜見は皮膚を剥がされた痛みを感じないのか、それとも荒魂化した腕は痛覚を感じないのか再び優を地面に叩き付けるのであった。

「げほっ……!」

優は痛みを感じながらも気を失うことなく耐え、朧気ながら刃がこちらに向かって来るのが見えたため、優はとっさに左腕で頭部を守るように前に出すことで頭部を守るが、優の荒魂化した左腕に夜見の御刀が深々と刺さるのであった。

「荒魂化した腕でも、やっぱり痛いんだな……。」

荒魂化した腕でも御刀が刺されば痛みを感じるということを優は再認識すると、夜見の目と口から滝のように涙と涎を流す表情、意識が混濁しているにも関わらず人以上の力を発揮。それらを観察し、夜見は痛覚を感じないのではなく、薬で痛覚を遮断しているのだと優は理解した。

そして、その一つ一つの判断材料から、優はあることを思い出していた。

それは、群馬山中での麻薬で痛覚を鈍くした過激派のテロリスト。もしくは国会周辺にて現れ麻薬の力を使って暴れた暴徒。それらと対峙した経験だけでなく、優の中に居る子供達の経験も合わさって、夜見は薬で強化されていると優は確信を抱くのであった。

……そして、優も覚悟した。

夜見を吸収するには、自分もそれ相応の覚悟が必要だろうと。

（……ねえ、ヒメちゃん？）

（い、いや。ダメだぞ!?それ以上ノロを侵食させると可奈美お義姉さまに怒られるし、何よりも悲しませ「ねえ？」そんなふうに甘えても「はやく。」ダメダメダメ、ダメったらダ「いいから、……やれ!!」……はい。）

しかし、夜見は優とタギツヒメが心の中でそんな会話をしていることなど露知らずに、尚も左手に御刀を持って攻撃を続けるが、御刀を掴みながら左手で優を持ち上げた際に夜見は顎を蹴られたことで優への拘束を緩めてしまう。

そして優は、その一瞬の隙を見逃すことなく夜見の拘束を解くのであった。そして、夜見は追撃を行おうとするが、何時の間にか優は短刀の御刀を戻して、長巻状に改造された鬼丸国綱を構えていたため、本能的に短刀の御刀とはリーチが違うことを察して警戒し、追撃を辞めるが、それによって優に大きなチャンスを与えてしまうことになってしまったことに気付いてしまった。

夜見がそのことに気付いた理由は、拘束を逃れた優が嗤っている声を上げたからである。

そして、優が嗤っている理由は、自身の脳を荒魂化させることで自身の脳を操作。それによって、脳内麻薬を無理矢理多く分泌させることで痛覚遮断、多大な高揚感と瞬発力の増大、更には反応速度の向上という夜見と同様の事を行っていた。

……しかし、

「ああ、心地良い。……ココチイイヨォッ!!」

高揚感が高まってしまったことにより、過大な多幸感に包まれた優の言動は怪しくなり、怪しく嗤うのであった。

そして、近くに居た夜見も気付いてしまった。優が笑っていることに。自身と同じ顔をしていることに。

そして、遠巻きに見ていた可奈美も気付いてしまった。優が嗤っていることに。夜見と同じ姿となっていくことに。

そして、不思議な事に、夜見と可奈美の両者は何かが崩れ去るであ

ろうことは予知し、優は何かが目覚めるであろうと予知。その高揚感のまま、スポーツマスクと色付きのゴーグルを外すと、鬼のような角を生やし、右目の瞳の色と右半分の白い髪の色に変わっている半ば荒魂と化した素顔を晒すと、その何かが目覚めるであろう感覚のままに夜見に向かって、狼の様な雄叫びを上げながら鬼丸国綱を持ちながら、突撃するのであった。

アサシン……11世紀から14世紀、シリアにおいて十字軍やザンギー朝など諸勢力間で暗殺をも手段として勢力を築いたイスラム教シーア派イスマーイール派の分派ニザール派に存在したという暗殺教団を指す者達であり、その教団の刺客達は、語源がハシーシュ（大麻）、差別的に大麻中毒者だと述べられている通り、ハシシを吸い、夢見心地で暗殺やといった手段で十字軍といった敵の要人を始末していた。

そして、それを見た十字軍は彼等をアサシンと呼んで、非常に恐れられたとも云われている。

そして、その逸話通りであるなら、麻薬の力によって強化された優と夜見は、教団の守護者としても考えられたアサシンと同様の者になれたであろうか？

果たして崇高なる教えを守る〝教団〟の刺客へとなれたであろうか？

ウールヴヘジンと冥加刀使の様に神の力は宿ったであろうか？それとも、別の何かに変わっただけであろうか？

それと同様に、麻薬は過去に〝神の薬〟と呼ばれ、その力を行使した人を破滅へと向かわせた物である。

そして、御刀の原料となる珠鋼も古来から〝神性な希少金属〟と云われ、少女を戦いへと赴かせる御刀を鍛造する物である。

果たして、この麻薬と珠鋼はどう違うのだろうか？……人が、ただ必要か否かの判断の違いしかないのではないだろうか？

神性なる珠鋼を主成分とする御刀の力を行使する刀使の起源は社に務める巫女であり、そしてアサシンもまた麻薬という”神の薬”を使用する暗殺教団というイスラムの教えを信ずる刺客達であり、彼女達と彼等はどう違うと言うのだろうか？

獣という神が居る世界

優は長巻状に鬼丸国綱を持ちながら、スポーツマスクと色付きのゴーグルを外して鬼のような角を生やし、右目の瞳の色と右半分の髪の色が変わった素顔を晒すと、夜見に向かって獣の様な、狼の様な雄叫びを上げて突っ込んで行くのであった。

優が真っ直ぐに突っ込んでくるのを見た夜見は、自傷跡から赤子の荒魂を這い出し、優を動揺させようとするが、優は赤子の声と姿に酷似した荒魂を何の途惑いも無く鬼丸国綱で纏めて斬り殺すと、赤子の荒魂を全てノロへと還すことに成功し、還した全てのノロを吸収するのであった。

赤子の荒魂を難なく斬り殺し、赤子の荒魂をノロへと還すとそのノロを吸収する優を見た夜見は、赤子の荒魂を優に襲わせても何の効果も無いうえ、ノロに還されると吸収され、自分の力へと変えるだけであり、結果は優を強化するだけのことであると判断。

故に、夜見はこれ以上、赤子の荒魂を産み出すことをすることを辞めるのであった。

……しかし、夜見は気付かなかった。

国会周辺暴動時に人を殺傷する恐れの有る銃を人に向けて躊躇うことなく撃ち、心拍数等の数値が一つも変動しなかった優にとってみれば、人を殺すことも、赤子を殺すことも何の罪悪感も抱くことはなかった。

……いや、殺してはならないという理由が分からないといった方が正確であろう。

それ故に優は常軌を逸した行動を取ることに抵抗も無く、人を殺すことに違和感を感じることも無かったため、夜見の赤子の荒魂に対して何の効果も発揮しないうえ、躊躇い無くノロへ還すとそのまま吸収し、自分の力に変えるという赤子の荒魂にとってみれば天敵の様な存在ということが夜見は気付いたのだが、人を殺すことに抵抗感の無い

者が常軌を逸したらどのような行動を取るかまでは気付かなかった。
そして夜見は、真っ直ぐに突っ込んで来る優に対して迎え討つべく待ち構えるのであった。
そして、遮二無二突っ込んで来る優を夜見は左腕を伸ばして、優の心臓を刺し貫くのであった。
「?!!?!」
しかし、優の心臓を刺し貫いたにも関わらず、死ぬことも無く止まらずに、御刀に刺されたまま夜見の元へと向かおうとすることに流石の夜見も戦慄を覚えたのであった。
何故心臓を刺し貫かれても向かって来れたのは、脳内麻薬を増加させたことによって痛覚を遮断し、強烈な高揚感によって心臓を刺し貫かれたことに気付かなかったがためにそのような行動を取れたのか、それとも半ば荒魂化することで強化された身体のお陰で死ぬことが無かったのかは不明瞭であった。
夜見は心臓を刺し貫かれても、尚立ち向かってくる優に対して次はどうするべきかと手をこまねいていると、優は夜見に力負けしているために夜見に近付けないと素早く判断。夜見の左腕を掴んで拘束すると、攻撃範囲の広い鬼丸国綱で御刀を持つ夜見の左腕を斬るために振り上げて、そのまま振り下ろそうとしていた。
それを見た夜見は、御刀を持つ左腕を失うことで御刀をも失うことを阻止すべく、優を引き寄せると優を足で蹴り飛ばすことで無理矢理優に刺さった御刀を引き抜くのであった。
優の弱点の一つであった体重の軽さによって、少しの力で簡単に引き抜くことができたことが夜見にとって幸いであった。そのうえ、優との距離を簡単に空けることができたことは追撃されないという点においても助けられた。
優との距離を空け、その隙に体勢を立て直した夜見は腕を伸ばして追撃しようと本能的に行動しようとするが、リーチが長く、攻撃範囲が長い長巻を装備していること、長巻状に改造された鬼丸国綱の振りは大振りになり易いことを考慮して、腕を伸ばすことで斬られることを恐れ、近付くことで鬼丸国綱の懐に入り込むことが一番であると判

断を替えると迅移と見間違えるほどの機動で一気に優との距離を詰めたのであった。

優は夜見が右肩を刺し貫こうとしていたことは龍眼で気付いていたが、間に合わないと判断したのか荒魂化していない方の右腕で夜見の御刀を無理矢理払うと右肩は刺し貫かれることがなかったのだが、夜見の第五段階の力に負けたのか、優の右腕はあらぬ方向に曲がり、骨が飛び出る程の負傷をしてしまう。

夜見は優の右腕の状態を見て、片腕では鬼丸国綱を振り回すことは困難であり、右腕で右肩を庇ったところから夜見の迅移と見間違える程の足運びには対処できないのだろうと判断。更に接近するが、それが優の罠であったことには気付かなかった。

優は鬼丸国綱を投げ捨て、夜見の注意を投げ捨てた鬼丸国綱に向けさせると、その隙に夜見の懐に入り、夜見の腹に何かを突き刺すのであった。

「?……!」

優が夜見に突き刺したのは自身の飛び出た骨を荒魂化して強化し、刺突武器として扱えるようにしたものであった。

そして、その刺突武器で夜見の腹を刺し貫くと同時に夜見の体内に有るノロを吸い取り始めるのであった。

夜見は麻薬と珠鋼搭載型のS装備だけでなく、体内にノロを注入することで強化された冥加刀使でもある。体内のノロを吸い取られでもされたら、吸い取られた分だけ弱体化してしまい、最悪刀使の力を失う可能性すら有った。

夜見は、優にノロを吸収されることを阻止すべく優の右肩に噛みつき、右肩を壊すことで右腕の力を失わせ、優の右腕を引き抜こうとしていた。

それに対して優は、夜見の右耳に噛みつくと、そのまま夜見の右耳を引きちぎるのであった。

ウールヴヘジンの逸話に、狼の毛皮のみを羽織って、狼その物になりきり、相手に噛み付いて戦っていたというものがある。

……しかし、ウールヴヘジンは北欧神話に登場するベルセルクと同

様であるとする説も存在し、その説が正しければ、ベルセルクを使った王達はその戦力を大いに期待してはいたのだが、敵味方の区別さえ付けず、鬼神の如く戦う彼等を決して、自分達の護衛としてだけでなく、自らの傍には近付けさせなかったのである。

異質な姿となって、優の右肩に噛みつく夜見。

荒魂パーカーを羽織り、夜見の左耳を噛みちぎる優。

仮に、神性な御刀の加護を得ることで巫の巫女である刀使になれるというのであれば、この両者は、北欧神話の軍神オーディンの加護を受けたとされるベルセルクと同様の存在だと見られていたウールヴヘジンへと、神の加護を受けた聖戦士になったと言えるのだろう。

そして、過去に存在していたとされるベルセルクやアサシンは、幻覚作用の有るキノコや麻薬によって人間以上の力を持って戦う存在だとすれば……。

「――――！」

スレイドの言う麻薬という神の薬によって、写シの様に痛覚を遮断させられている夜見ではあるが、流石に右耳を噛みつかれ、そのまま引きちぎられたのは激痛を感じたのか、優を無理矢理足で引き離すのであった。

そして響き渡る優の雄叫びと夜見の悲鳴、その声によりエレンや姫和、舞衣といった気を失っていた者達が目を覚ますが、それは不幸であったと言わざるを得ない。

何故なら、彼女等と可奈美は、優が夜見の左耳に噛みつき、そのまま引きちぎる光景を目の当たりにすることになったのだから。不幸としか言いようがないだろう。

可奈美達にそんな視線を受けていることを知ってか知らずか、優と夜見の両名は死闘を演じていた。

優は夜見を動揺させるべく、咥えていた夜見の右耳を夜見の目に当たるように吐き出すと、夜見の目に当てることには成功するが、夜見は動揺することなく優の右肩を御刀で刺し貫き、そのまま左腕を伸ばすと杭を打ち込むかのように優の右肩ごと石壁に刺すことで優を拘束するのであった。

そのため、優は夜見の御刀が右肩ごと石壁に突き刺されたことで右腕が上がらず、見動きが取れなかった。

優は何とか夜見の拘束から抜け出そうとするが、伸びた腕を容易く両断することができる鬼丸国綱を投げ捨てているうえ、夜見に対してニッカリ青江は使わないこととなっていたため、夜見の腕を斬って拘束から逃れる術を持たない状況であった。

ならば、右肩に刺さった御刀をどうにか抜くことができれば良いが、夜見は第五段階の八幡力を使えるが優は使うことができないため、力で抜くことは不可能であった。

しかし、この拘束から逃れないと迫り来る夜見から対処出来ないまま、一方的に殴られるのみである。

「……なんかコレ、邪魔だなぁ……。」

それ故に、優は迫り来る夜見を対処すべく、ニッカリ青江を隠世から取り出すと、自身の右脇の下に切っ先を入れ、荒魂化していない生身の部分である右腕をコレと言って右肩ごと切除しようとしていた。

今の優は、脳内麻薬が多く分泌している状態であるため、右腕を切除している時は痛みを感じないのか、笑みを浮かべながら無理矢理ちぎる様に切除していったのである。

しかし、優は親から貰った身体の部分を『要らなくなった。』という軽い理由で不要と断ずると切除し、荒魂化されていない生身の部分を捨てることに途惑うことすら無かったのである。そうして、顔も知らない母親が残してくれた身体を捨てて行くことに躊躇が無かったために、優の荒魂化は加速度的に進むが、タギツヒメ達との約束は守りつつ、夜見の拘束から脱することができたのであった。

むしろ、優は右腕が無くなったお陰で、その分だけ身体が軽くなったとしか認識しなかった。

そうして身体が軽くなった優は、Ｐ９３８という自動拳銃を隠世から取り出すと後ろに下がりながら、夜見に向けて薬室内に有る弾と弾倉内に有る弾８発全てを夜見に撃つと、夜見に向けて投げ捨てていた。……しかし、この行為には優も荒魂化が進んでいる夜見に対して確実な有効打とならないことは分かっているが、あることを調べるた

めには必要なことでもあった。
「荒魂!……荒魂!!排除します!!」
　撃たれたことに怒りを感じたのか、それとも夜見に向けて弾を撃ち尽くした後に銃を投げ捨てたことから、ただ単にヤケクソになって攻撃しただけでしかなく、後ろに下がったのも夜見から逃れるために取った行動なのだろうと夜見が判断し、その判断を元に石壁に刺さった御刀を引き抜き、優に接近したのかは不明瞭であった。
　何故なら今の夜見は、自身の瞳から涙と自身の口から涎が滝のように流し出している表情しかせず、不明瞭な言葉を吐きながら優の元へと近づこうとするため、傍目から見ると何を考えているのかは優ですら読み取れなかった。
　だが、仮にチャンスだと思い、優に接近したのは間違いだったかもしれない。しかし、優は第五段階の八幡力が使えないことは何度も拘束に近い状態に持ってこれたことから、間違い無いことは判明していたことであるため、打つ手を失い後ろに下がったと判断したのは当然のことであり、夜見が優に接近したのは正しい判断であるとも言えよう。
　だが、優が後ろに下がったのは、夜見が接近戦に持ち込ませるように思わせることで、自ら接近させるための罠であったことに気付いていれば勝負は違ったのかもしれない。
　そして優は、夜見が接近してきたと見るやいなや、優も夜見に返す形で接近し、夜見の生身の部分を対刀使用の矢2本ほど投げ、夜見の生身の身体を刺し貫くのであった。
「……!?」
　先程、優が夜見に向けて拳銃を撃ったのは、ヤケクソになって攻撃したのではなく、夜見の生身の部分がどれほど有るかを探るための攻撃であったのだ。そして、夜見の赤い血が出た部分は荒魂化されてない生身の部分であると判断し、対刀使用の矢を投げて生身の部分を攻撃し、写シを使い辛くさせたのである。
「……その程度!!その程度!!雪那学長がくれた力を得た私には!!」
　しかし、夜見は雪那の名を叫ぶとハッとなり、雪那がどんな姿かを

考えてしまった。
確か雪那学長の姿は血の色の様に赤い服を着ていて、いや、それは違う。それは局長の紫様の御姿であったはず。
確か雪那学長の姿は三つ編みをして髪はまとめていた、いや、それは違う。それは局長の紫様の御姿であったはず。
確かいつも黒いハイヒールをしているのが紫様で……いや、それは違う。それは局長の紫様の御姿であったはず。
片方の目を隠すような髪型でそれは違う私は紫様が履いていたとする白いブーツを頂戴しならば血の色の様に赤い服を着て白いブーツを履いていた記憶が無いけれど血の色の様に赤い服を着用着ていて三つ編みをして髪はまとめて短くしていて黒いストッキングと黒いハイヒールをしているのが紫様だと私の記憶は証言しているならば敬愛していた高津学長はどんな御姿をしておられたのかを思い出せないのは何故だ？
……何故だ何故ナゼＷｈａｔどうして理由は根拠は私は局長は紫様は高津学長は誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰誰？

夜見は戦いの最中に雑念を生じさせ、動きを止めてしまったことにより、優にその隙を突かれ、夜見の目は優が隠し持っていた対刀使用の矢に刺し貫かれる。
「――――!!!!」
その瞬間、夜見は獣のような、そして少女の悲痛な叫びも混じった声で、そして急に視界が黒一色になったことに驚くと大声で叫ぶのであった。痛覚は遮断していようが、視覚は死んでいないのだ。
荒魂は現世に実体が、隠世に霊体が存在し、霊体は実体の設計図のようなもので現世にて実体が破損しても、隠世にある霊体を元に修復が可能であるため、御刀以外での物理的な攻撃は効果が薄いとされているが、同じ珠鋼から生まれた御刀は同じように隠世にも存在しているため、実体と霊体ごと荒魂を断つことができる。
そのため、荒魂に対して有効打となるのである。そういった理由もあり、御刀は荒魂に対して唯一対抗できる武器であった。

しかし、優は夜見の右耳を噛みちぎり、その後も御刀で斬った訳でも無いのに荒魂の様に再生されないことからもしやと思い、銃で生身の部分が何処か探り、探った生身の部分は荒魂と珠鋼搭載型のS装備によって強化されていることも考慮し、対刀使用の矢を刺したらどうなるかを確かめてみたところ、優の推測通りに再生されなかったうえ、対刀使用の矢も身体に刺さったままであった。

夜見の右耳と銃で撃った箇所が再生されなかったこと、生身の部分に刺さったままにすることが可能であることが分かったからこそ、夜見の両目に対刀使用の矢を突き刺すことが可能であると判断することができた。そのため、夜見の両眼が塞がっている隙に優は薫の元へ近づくと、祢々切丸を片手で掴み、持ち上げるのであった。

「ちょっと使うねー。」

「お…おい!待て!!」

「ちょっと使うねー。」と脳内麻薬の影響か言動の怪しい優に祢々切丸を分捕られた薫は、非難の声を上げるが、写シを使い切ったせいか立ち上がることもままならなかった。それ故に、薫は優に易々と祢々切丸を分捕られてしまう。

そして、優は分捕った祢々切丸で夜見の元へ向かうと、目に刺さった矢を引っこ抜いていた夜見の姿が目に映った。

そんな夜見の姿を見た優は、矢尻が眼窩の奥にある脳まで達していなかったのか、それとも強化された身体のお陰で死ななかったのかは不明だが、今も活動していることから攻撃を加えるべきだと判断し、優は夜見の活動を止めるために祢々切丸を持って、夜見と薫の間に居るねねを飛び越えて夜見に接近する。

夜見に接近した優はそのまま祢々切丸を片手で持ち上げると、祢々切丸の２２．５ｋｇという刀自体の重さを利用して、その重さだけで垂直に振り下ろすと、夜見が御刀を手に持っている左腕を両断することができ、夜見の手許から御刀を離し、失わせることに成功するのであった。

夜見の左腕を切断することで御刀を手許から離すことに成功した優は祢々切丸を放すと、夜見の背後に回り、珠鋼搭載型のS装備の

バッテリーの部分を荒魂化した左腕で無理矢理殴って損壊させ、そして強引に引きちぎるのであった。

夜見が着用していたS装備は、厳密に言えば一年前の珠鋼搭載型のS装備ではなく、ただ単純に通常のS装備のバッテリーに珠鋼を入れただけという細工を施しただけの代物であり、飛行能力を使わなかったのも八幡力と金剛身を自動制御しなかったのもそれが本当の理由であった。

しかし、優はS装備のバッテリー部分を無理矢理引きちぎることでS装備の力を失わせ、夜見の第五段階の八幡力と金剛身を使えないようにしていた。

こうして夜見は、第五段階の八幡力と金剛身、それに御刀を手許から失ったうえ、新しく得た能力である赤子の荒魂も殺人に躊躇の無い優に対して効果的ではないという不利な状況下に陥ってしまった。

しかし、こうなればもう勝負は付いたも同然であった。

優はタギツヒメ達との約束を守るために、夜見を吸収するべく獣の如く襲いかかると仰向けにし、マウントポジションを取って何度も何度も短刀の御刀で刺していくのであった。

そうして優は、夜見の活動を停止させるだけに留めると、夜見に対して手をかざし、夜見ごとノロを吸収することで夜見を自分の身体の中へと取り込むのであった。

「なっ……何という。」

優と夜見の戦いを見ることしかできなかった真希は、驚嘆と畏怖が入り混じったかの様な声を上げるしかなかった。

――――時は少し戻り、丹沢山周辺に突如として現れた荒魂のノロの反応に釣られて来た別の荒魂の群れを岩倉　早苗とその配下の刀使達と共に対処していた内里　歩は、隊長である岩倉　早苗の制止を振り切って、山中に響き渡った荒魂の声の方角へと向かっていた。

そして、歩は知らないことだが、その山中に響き渡った荒魂の声は、嘗ての姿に戻ったねねの声であった。

それに気付かず、声のした方角と新型S装備のバイザーに表示されている可奈美達が居る方角が一致していたため、可奈美達に危機が迫っているのではと思い、早苗の制止を振り切って可奈美達の元へと向かっていたのである。

しかし、歩はその先へ進むべきではなかった。

何故なら、優と夜見が死闘を繰り広げている部分を見なくて済んだのだから……。

そうして、可奈美達だけでなく、不幸な事に歩もその光景を見てしまい、こう感想を漏らしていた。

「……すごい。」

歩はそう呟くが、その言葉とは裏腹に、まるで野獣の様に戦う優と夜見の姿を観て、畏怖という感情しか湧かなかった。

優の右肩に噛みつき、右腕の力を失わせると同時に優を引き剥がすことで逃れようとする夜見。

それに対して、優は夜見の右耳に噛みつくと、そのまま引きちぎったことで夜見に激痛と血を噴き出させ、優の口の周りが血で紅くなるのであった。

……あれが一番強い者の姿だと言われれば、そうかも知れないと歩は答えるしかないだろう。

――――だが、歩は強くなろうとした。

若さ故にただ突っ走り、そして単純に強くなりたかっただけだった。

だが、自分が目指していた強さとはそのような物なのかと自問自答し、何かが違うと考えを改めさせられる程の相手の喉笛をも噛み千切らんとする野獣達による死闘が其処にあった。

「ハァッ……ハァッ……。」

ただただ野獣達が共演するコロシアムの様に思えて仕方が無く、歩は身震いすると後退りし、特別任務部隊での初めての荒魂討伐任務での恐怖以上の恐怖に直面した事によって、あの時の恐怖を思い出し、

下半身の感覚が無くなると、歩の股の部分が、自分が出したしめやかに生暖かい〝何か〟によって濡れるのであった――――。

荒魂の力を頼った刀使

――――優が夜見をノロごと自身の体内へと吸収したとき、麻薬とノロによって侵された肉体という枷を失った夜見は魂だけの状態とも言うべき者になったため、荒魂を体内に受け入れる前の髪の色である黒髪となり、麻薬で精神が侵される前の姿でタギツヒメ達の居る場所へと向かうことができた。

そして、優の中へ向かったことで夜見はタギツヒメだけでなく、結芽と再会することができた。

『……夜見おねーさん。』

『……見ないでください。』

しかし、夜見は目の前に居る結芽から逃れるように膝を抱え込んで蹲っていた。

『……私は……私は裏切り者ですから。』

夜見はソフィア達の甘言に乗って、真希と寿々花を虚偽の罪状で捕まえる工作の手助けをしたこともそうだが、丹沢山周辺でノロの力を暴走させ暴れたこと、何よりもソフィア達を手助けした結果として結芽を放置し、心身を摩耗させ、最終的には結芽を〝荒魂の力を頼った刀使〟として悪名を広めてしまったことに罪悪感を強く感じ、目の前に居る結芽から逃れるように膝を抱え込んで蹲っていた。

『燕さん、私は獅童さん此花さんを裏切っただけでなく、貴女にまで〝荒魂の力を頼った刀使〟という汚名を被せてしまったんです。』

夜見は告げる。真希と寿々花を裏切っただけでなく、結芽の名を汚すことをしてしまったと。

『……それに、私は本来なら刀使にすらなれない落ちこぼれだったんです。本来なら親衛隊に入ることすら許されないんです。いや、刀使と名乗ることすら許されない。……ですから、本当は貴女達に会う度に何度も騙していた酷い女なんです。』

『……それは！……その。』

結芽はどうすべきか悩んだ。やっと会えた夜見に何を言えば良いのか分からなかったからである。

しかし、そんな悩む結芽の手を温かい手が包んでくれた。

『あ、あのさ。……手が震えてたからさ。』

結芽に気のあるジョニーが結芽の手を掴んでくれたのだ。

そしてジョニーは、緊張しているのかしどろもどろになりながら「手が震えていたから」と手を握ってくれた理由を語ってくれたのであった。

そして結芽は、後ろを振り返ると気付いた。……私を認めてくれたミカやニキータ、それにタギツヒメが居たことを思い出すことができた。

（……そうだよ。探してたものは、すぐ近くに在ったんだよ。かっこつける必要なんてなかったよ。）

結芽はそう思うことで、自分が夜見に向けて何を言えば良いのか自然と分かったような気さえした。

……だから、夜見にこの言葉を贈らなければならなかった。

『夜見おねーさん。』

後ろを支えてくれるタギツヒメ達といった人と荒魂とか生まれに関係なく友人と呼べる者が居たからこそ言える言葉。……それを紡ぐ。それを謡う。

『何言ってるの！……私はそんなもの気にしていないよ！』

『……でも、私は貴女を……。』

あなたが私にくれたもの、あなたが私にもたらしてくれたもの、その全てを吐き出すように謡う。

『夜見おねーさん間違っているよ。いつも思っていた私が欲しかった物は…夜見おねーさんが思っている物じゃないよ……。』

結芽は答える。

本当に自分が求め欲したものを、自分の意志で、己の想いのままに、ノロを受け入れたあのときから何一つ変わらない答えを自らの声に乗せて出した。

『……夜見おねーさんが……ううん、みんなが私のために〟荒魂の力

を頼った刀使〟にして私を……もっともっと私をすごくしてくれたから、誰も真似できないことをさせてくれたから……みんなの記憶に私のことを〝荒魂の力を頼った刀使〟として焼き付けることができたんだ!!』

涙を堪えるため、拳を強く握り締めながら結芽は答えた。

『もうみんな私のことを〝荒魂の力を頼った刀使〟として憶えていてくれているんだよ!!』

今まで傍に夜見や親衛隊の皆が居てくれたから、私の剣術を使って勝ってくれた優が居てくれたから、手を握ってくれるジョニーが居てくれたから、私の剣術が強かったと認めてくれたミカが居てくれたから、紫に取り憑いていた大荒魂が怖がっていることに気付いたニキータが居てくれたから、仲間だと認めてくれたタギツヒメが居てくれたから、私の中に居る荒魂が今まで命を紡いでくれたから少しの間だけ生きることができてタギツヒメといった友人達に恵まれ、それだけでなく夜見や相楽学長といった支えてくれた人が居たから……もうパパやママに会えない一人ぼっちの子供じゃなくなったから強く言える。

今の結芽にとってみれば、今までの夜見の行動は、掛け替えの無い友人と、自らが欲した人の記憶に焼き付けたいという願いも、何もかも全てを与えてくれる結果となって終わったのだと力強く答えた。

『それを私は何一つ悪い事だって思わない!今の私は言えるよ!!』

昔の私なら「私、戦いに荒魂なんて1ミリも使ってないもん!これはぜーんぶ私の実力なの!」と荒魂の力を使ったことを否定しただろう。自分一人の力であると吹聴したであろう。

だけど、そんな些末なことなど、今はどうでもいいようにすら感じる。いや、むしろ過去の私は何て浅慮だったのだろうと恥ずかしさと後悔すら感じるようになり、結芽は夜見だけでなく、タギツヒメ達にも向けてこう答えるのであった。

もう〝荒魂の力に頼った刀使〟であることを否定したくないと。

否定してしまえば、こんな私でも友人となってくれたタギツヒメ達を否定してしまうことになるから、否定したくなかった。

『みんなが居てくれたから、私は〝荒魂の力を頼った刀使〟として、みんなが私のことを憶えてくれたんだよ!!だから、私はそれでいいんだよ!!私がいつも…本当に望んでいたことは憶えていてくれていれば、それで……それで良いんだよ!!』

結芽は強く吼えた。

「憶えていてくれさえいればそれで良いんだよ。」という言葉を出すだけで、心から力が溢れていき、結芽は力強く吼えることができた。

今の結芽にとってみれば〝荒魂の力を頼った刀使〟という渾名は、自分が望んでいた、みんなが憶えていてくれることを叶えてくれるものだと。

……だからこそ結芽は答える。結芽にとって〝荒魂の力を頼った刀使〟というのは不名誉なことではなく、自分自身が最も望んだことをみんながくれるようにしてくれたものだと。

だからこそ結芽は、夜見だけでなく、後ろに居るタギツヒメ達にも自分が望んだものは手に入り、救われたのだと力強く答えたのであった。

『……燕さん。』

『だって私は、折神家親衛隊第四席の燕　結芽で、親衛隊の中でも一番強いんだもん!!だったら、私も〝荒魂の力を頼った刀使〟の中でも、今一番強い夜見おねーさんよりも強い刀使にならなきゃダメだよね!!』

自分は親衛隊最強と名乗っている以上、〝荒魂の力を頼った刀使〟の中でも最も強い夜見よりも強くならなくてはならないと、結芽は無垢な子供の様に歯を剥き出しにした笑顔で、夜見に向かってピースサインをするのであった。

結芽の〝荒魂の力を頼った刀使〟も等しく刀使であるという言葉を聞いた夜見は、瞳から雫が頬を伝い、零れ落ちていったことに気付かなかった。それだけ夢中になるほど結芽の言葉を聞いてしまっていたから。

……何故なら、私を刀使にしてくれたのは高津学長であり、もう一度刀使にしてくれたのは目の前に居る結芽だけなのだから、それだけ

に心が惹かれ、感動したのだ。

――――ノロを体内に入れること。

それは醜く歪んでいて、茨だらけで、人の節理として外れた道であることは理解していた。……だが、夜見はそれでも辞めなかった。

落ちこぼれの私に力を与えてくれた高津学長に少しでも恩を返したかった。この冥加刀使の研究で壊れてしまった高津学長を無視することはできなかった。

だからこそ、私はこの冥加刀使の力を使って証明したかったのだ。……どのように証明したかったのかは分からないし、形すら見えなかったが、それに向かって進んでいた。

だが、高津学長が行っていたことは間違いではないと、今ならハッキリと言える。

今まで孤独だった結芽が、同年代の友人と荒魂すらも替えようが無い友人と呼ぶだけに留まらず、荒魂の力を頼ることは不名誉なことではないとハッキリと言うその姿は、本当に幸せそうに答えていたのだ。だから私もハッキリと言えるのだ。

(相楽学長。高津学長。……燕さんはきっと幸福でした。無念はあったでしょう。それでも彼女は舞台に立つことができました。そして彼女と私はかけがえのないものを手に入れましたよ。……高津学長。学長が行ったことは確かに今……目の前の人を救いましたよ。)

高津学長が行ったノロと人体の融合の研究は、〝荒魂の力を頼った刀使〟である結芽と、今の私を救ってくれたと本心から言えるのだから――――。

――――夜見との戦闘が終わり、夜見ごとノロとして吸収した優は、夜見と結芽の会話を聴き、笑みを浮かべながら立っているだけだった。

……そして、歩と可奈美達が見ていた優と夜見の死闘の終着点は、

夜見は優に倒され、そして夜見は優に吸収されることで、後に残ったのは右腕が無く、口の周りと身体が紅い鮮血で染まった姿で静かに笑みを浮かべ、ただ嗤う顔をしていた優の姿。

その優の威容な姿に誰もが口を噤み、誰もが人外であるかの様な視線を向け、恐怖を抱くのであった。

そんな中で、紫は冷静に優にあることを問うのであった。

「自我を保てるか?それを抑え込めればこれで終わりだ。」

「だいじょうぶー。」

脳内麻薬を多く分泌させたことで酩酊状態となっている優は、紫の問いに対して妙に間延びした返答をしていた。

「……もし、できそうにないなら私に言え。私と共に隠世の果てに行こう。それで全てを終わらせることができる。」

「うーん、じゃあさ、今それやろうー。」

紫の隠世の果てへ行こうという誘いを二つ返事で今、この場でやろうと返答していた。

その威容な行動に違和感を感じた紫は、

「……いや、まだ耐えられるなら今すぐ行う必要はない。隠世に行けばもう可奈美達にも会えないし、隠世に居る荒魂に怖い思いをしたくはないだろう?」

隠世の果てに行けば、可奈美達にもう会えないこと、怖い荒魂が沢山居ると諭すことで踏み止まらせようとする。

「ユウ!」

「…帰ろう。優。」

紫だけでなく、エレンと沙耶香もどうにか引き留めようと自分なりの言い方で優を止めようとする。

「おい、ねねと俺はまだお前に借りを返せてない。だから無茶を承知で言う。……帰るぞ。」

それだけでなく薫も、ねねを理由にしてでも、何が何でも優を引き留めようとしていた。

「えー、でもー、」

しかし、優はそんなこと気にしていないのか、紫達にこう返答する

のであった。
「今、すっごくすっごく気分が良いんだー。何て言うかー、今テレビで出てるヒーローにも魔法少女にもなれる様な気がするんだー。だから、この気分のままで居られたらどんなことでも出来る気がするー！」
　右腕を失い、怪しげな笑みを浮かべる優は、脳内麻薬を多く分泌したことで多大な多幸感に包まれており、言動が怪しいうえ、不気味な笑みを浮かべつつ述べていた。
　どんな相手であろうとも命を燃やすことも失うことも賭すことも奪うことも懸けることも捨てることも弄ぶことも断つことも何もかも……全てを行うことが出来ると強い確信を持ちながら、そして嗤いながら優は薫と沙耶香に対して返答したのである。
　そして優は、この何もかも出来ると思える心地良さのままでいれば、テレビに〝写る〟（〝映る〟が伝わりやすいが、優は何故かこっちの方が語呂が良いと思ってしまった。）魔法少女にも特撮物に出てくるヒーローになれる様な気さえしたのだ。
　……そのうえ、この気分のままで隠世の果てまで行けば、ずっと隠していた昔から悩んでいた欠けた心が埋まり、満たされる様な気さえしたのだ。
　だからこそ、優は簡単に、何の戸惑いもなく、隠世の果てへ行こうと答えるのであった。
「ねぇ。」
　しかし、今まで聞いたことの無い可奈美の声を聞いた紫と舞衣達は一斉に可奈美の方へと振り向く。
「今の優ちゃん、強い？」
「可奈美ちゃん……？」
　そして、可奈美は尋ねる。今の優は強いかと。
　そして、その内容に驚く舞衣。しかし、それだけで何をしようとしているのか、舞衣はある程度分かってしまった。
「強いよね？だってあれほど強かった夜見さんを倒しちゃう程だもん。……ねぇ、手合わせお願いできないかな？」

そして、可奈美は提案する。右腕を失い、満身創痍に近い状態の実の弟と手合わせをしたいと。

「馬鹿かお前!?」

「カナミン！いくらなんでも……。」

その可奈美の提案に非難の言葉を投げつけるエレンと薫。

右腕を失う程の満身創痍な状態である優と手合わせする前に、先に治療が必要だろうと考えたからである。

「空気…読めなさすぎかな。でも、こんな強い優ちゃんと試合できるのは今しかないと思って。……だって、もう居なくなっちゃうんでしょ？」

「カナミン!!」

可奈美の優の居なくなる発言に、流石のエレンも非難の声を上げるのであった。

だが、可奈美は優が居なくなることを述べたとき、口元を歪ませながら述べていたため、本心ではなく、かなり無理をして言っていることに舞衣以外の誰も気付かなかった。

可奈美は、違う自分を装うことについてはかなり得意であったから、出来た芸当であった。

「……本当の事言うね。私あれからかなり強くなっちゃって、もう誰に勝っても〝強い刀使〟になれる気がしないんだよ。……だから、今の優ちゃんは誰よりも〝強い〟よね？探していた物は近くに有ったから……だから、手伝ってよ。」

「カナミン、もういいデス！本気で怒りますよ!!」

口元を歪ませ、無理をする可奈美は更に述べる。優が興味を引くであろう語句（フレーズ）を、嘗て約束した時に使った言葉である〝強い刀使〟を使って、引き留めようとした。

しかし、可奈美の過去と本心を知らないエレンは、本気で怒って、可奈美と優の姉弟同士での斬り合いを止めようとしていた。

「いいよー。そういう約束してくれたもんねー。」

だが、そんなエレンの気持ちを知ってか知らずか、優は二つ返事で可奈美の誘いを満面の笑顔で承諾していた。

「それで〝強い刀使〟になれて、僕達を救ってくれるなら別にいいよー。」
「うん、それで高いところを登れるような気がするから……全力で、思いっきり来て。」
　可奈美の言葉と共に、優はニッカリ青江を構えると、可奈美も千鳥を構え始める。
「ちょ、ちょっと待ってください！二人ともおかしいデス!!」
「止めないでよー。……これは可奈ねーちゃんが決めたことなんだから。」
　可奈美と優が本気で手合わせしようとしていることに動揺が隠せないエレン。
　無論、可奈美は本気で優を斬り殺そうとしている訳ではなく、負けた場合は、〝強い刀使〟になれなかったから、今も手伝ってほしいと言って引き留めようとしていたし、もしも可奈美が勝ったとしても、優も強くなって〝強い刀使〟になる様に手伝って欲しいと言って、引き留めようとしていた。
　つまり、可奈美は勝っても負けても、優を引き留めるために手合わせを行おうとしていた。
　熱くなる可奈美とエレン達とは対照的に、冷静に優と可奈美の二人を客観視していた姫和はふと二人の共通点を考えてしまった。
（……ああ、そうか、この二人は。）
　姫和や舞衣といった友人には、共に逃亡劇を繰り広げるのも躊躇しない程の行動力を見せるが、その反面「じゃあ利用すれば良い。」と宣うほどの冷たさを併せ持つ可奈美。
　タギツヒメといった信用している人間には優しく接するが、その反面、敵と認識した者にはいかなる手段を持ってしても排除するというほどの冷たさを併せ持つ優。
　故に、両者は優しくて友達思いなのだが、その反面冷たくて自分本位。

可奈美と優は、そういう二人だったのだ。そういった部分は姉弟であるから似たのだろうか?そして、そういう二人だったからなのだろうか?私が二人に此処まで振り回されるのは……。と思い始める姫和。

「今まで一人で戦っていないから、ヒメちゃんと結芽おねーちゃんの力を使っても問題無いよね?それに、写シはまだ張れるの?」

「問題ないよ。……それは優ちゃんが築いた物だもの。私とはやり方が違うだけ。」

そうして、優は龍眼を使って、可奈美に打ちかかろうとするが、

(……アレ?どう打ち込んでも、打ち返される?)

どのように打ち掛かっても、打ち返されて負けることに優は動揺していた。

その理由は、右腕を失っていることで攻撃手段が狭まっていることも起因していたが、可奈美は優に〝強い刀使〟を理由にして立ち会いを所望したことで、純粋な剣術のみの戦いに誘導したこと、脳内麻薬を多く分泌したことで酩酊状態となったことで思考の幅が狭くなったこと、そして結芽から受け継いだ天然理心流の戦い方が非常に攻撃性が高いという特性を考え、優を〝先に仕掛ける〟という意識へと誘導させ、龍眼を以てしても突破口が見えないことから余計に〝先に仕掛けて突破口を開かなければならない。〟という意識へと固定化させることに成功した。

優に〝先に仕掛ける〟という意識へと誘導すると同時にその意識を固定化させ、純粋な剣術勝負へと持ち込んだうえ、剣術においては14年間も研鑽を積んで来た可奈美の方が一枚上手であり、そのうえ、可奈美の得意な戦法が後の先を取ることであり、可奈美と優の勝負は今のところは可奈美が優勢であった。

例えば、優が純粋な剣術に拘らず、近代兵器や対刀使用の矢を使うことが出来れば話が変わるが、可奈美の〝手合わせ〟という申し出を受けた優は剣術のみで戦わなければならなかったため、使うことが出来なかった。

それにもし、剣以外の攻撃で仕留めてしまえば、周りの人間に非難

されそうだと優は思っていたため、使うべきではないと判断していたために使えなかった。

（……打ち込んでたら、分かるかなー？）

とはいえ、時間だけが過ぎ去るのは得策ではないと優は判断すると、優は突破口を探るために斬り掛かり、可奈美の千鳥と優が持つニッカリ青江がぶつかり、剣戟の音を響かせる。

（……あれ？）

しかし、優は可奈美に続けて斬り掛かることが出来なかった。

何故なら、優の視界が突然グニャリとなると、意識が混濁し、力が抜けると同時に倒れたからである。

「――――優ちゃん!?――――」

意識が混濁しているせいか、優は上手く聞き取れなかったが、可奈美が自分の名前を呼ぶ声だけはハッキリと聞こえていた。

どうやら、自分は意識を失い倒れてしまったのだと優は気付くが、何故か立ち上がることも、意識を保つことも難しかった。

そうして、優は可奈美以外の声も、よく聞こえなかったし、誰が言ったか判然としないまま、それに返事をする力も、声も出せなかった。

「――――。――――!?」

それだけでなく、通信機越しのトーマスの声が聞こえていたが、何を言っているのか判然としなかった。

そして、後に聞いて分かったことだが、拘束されていた和樹は、折れた腕が内出血していたらしく、その内出血していた腕の中に蝶の荒魂を召喚することで腕関節の中を破裂させて左膝を無理矢理引きちぎると、次は足関節の中を破裂させて右腕を無理矢理引きちぎることで結束バンドで拘束されていた両手両足を解放させると同時に、蝶の荒魂を使って逃げられてしまったということを伝える通信であったが、力を失い、気を失いかけていた優には何を言っているのか聞こえなかった。

『真希さん！』

「寿々花！……救護ヘリをくれ!!」

そのうえ、悪いことは続けて起こる物なのか、通信機越しから聴こ

えてくる次の寿々花の言葉に真希は強く反応してしまう。
『市ヶ谷が……綾小路の刀使達に襲撃されました。』
タキリヒメの居る市ヶ谷に、ソフィアが率いる綾小路の刀使達が襲撃をしたからである。
そして優も感じていた。自分達のネバーランドは、シンデレラの12時の鐘が鳴り響くと同時に魔法が解けるように、崩れかかっていることを強く感じることができた。

ピーターパンは、親からはぐれた〝子供〟をネバーランドへと連れて行くものである。
そして刀使は、成人前の学生ばかりなのだから、〝子供〟でもある。
――ならば、優はもうネバーランドに住むピーターパンではなくなるのだ。

霧を祓おうとする者達

――――時は戻り、ソフィアの部隊が市ヶ谷を襲撃する前の市ヶ谷基地。

タキリヒメ派の議員は、今は国会にて他派閥を味方に加える工作を行っている最中であり、市ヶ谷に居なかった。

そのうえ、丹沢山周辺にて荒魂の群れが突如として発生したため、タキリヒメは荒魂に対する恐怖が国民の間に広まることがないよう早期に解決させる必要が有ると判断し、自身と市ヶ谷周辺を警護する刀使等を丹沢山周辺へと自衛隊のヘリで向かわせたのであった。

そういった理由もあり、今市ヶ谷周辺に居る警備の刀使の実力は平均より高くないうえ、数も少なく、市ヶ谷に有ったヘリも今は無いという非常に手薄な状態となっていた。

「美弥よ。」

「えっ、何?」

急にタキリヒメに呼び止められたことに驚く美弥。何か変な命令をするのかと億劫となっていたが。

「……そういえば、お主は私の従者になるのが嫌だったな。丁度良い、これからは好きにするといい。」

「……。」

それは、美弥を従者から解雇するというものであり、市ヶ谷から離れろという意味であった。

「どうした?我がどういった者かはお主が一番気付いておるだろう?」

そしてタキリヒメは語る。

恐らく、語れる時間も限られているだろうと。

「……お主は気付いておるだろう?美弥よ。我が国会前で起きた暴動を燃え広がるように防衛省と共に工作したことも、ＬＧＢＴやらポリコレやらフェミやら何やら、とにかく〝弱者救済〟等を叫ぶ無能共を

利用したことを知っているお主なら、我がどういった者かを……。」

タキリヒメは更に語る。

自身がどのような者であるかを。

「だが、差別是正といった〝弱者救済〟を叫ぶ者達は本当に差別是正を思っているのか？格差を無くしたいと思っておるのか？他には環境を大事にしようと本気で思っておるのか？……真剣にそんなことを考えていると思うか？本音はただ単に、自分が望み通りに行かない世の中に対する言えない憂さを晴らしたいだけなのではないか？彼等にとって〝弱者救済〟という行為は誰かを吊るし上げて、他者とは違う自分に成り切っているだけなのだ。そして我は、その国民が欲した物を与えただけに過ぎない。願いを叶えたに過ぎないのだ。」

タキリヒメは述べる。

彼等は本当に〝弱者救済〟を望んでいたのかと。

「確かに我は彼等を暴れさせるように仕組んだ。しかし、最終的に我が付け火を手伝ったことなど誰も気が付かぬまま、その炎を勝手に燃え広がせたのはこの国の国民だ。国会を叩いていた暴動の人間も、暴動の人間を叩いた者も、我をこの国のトップにするように協力してくれた様なものだ。……そうして、皆が我のことを穢れた荒魂だということを忘れ、そのうえ自分達を荒魂から今まで守っていた刀剣類管理局の予算を減らすことと荒魂の軍隊を創設する事にこぞって賛同しておるのだ。」

タキリヒメは指摘する。

この国の国民は、自分達を守る術を自ら放棄していると。

「そう考えていく内に我はな、気付いたのだ。世の中が何故荒魂と人を分けるのかを。……本質は国会で起きた暴動と暴動の人間を叩いた者の心理と変わらんのだ。主体性も無く、何かに酔いたいだけなのだと、誰かを攻撃したくてしたくてたまらんだけだとな。この現世の昨今を見れば、一目瞭然であろう？」

タキリヒメは突く。

この国の人は、自分から〝正義〟という名の付いた武器を持ち、振り回すことで得られる快感を感じたいだけなのだと、麻薬を吸ったと

きに感じる高揚感のままに武器を振り回したいだけなのだと。
「ＳＮＳや最近の異世界へ行く小説の中身を見れば分かるであろう？ＳＮＳは他人の不祥事の方がはるかに盛り上がり、異世界へ行く小説は神様から力をもらったという導入から始まり七つの欲望を叶える麻薬の様な代物が流行っておると……そしてこの両者は本質的に主体性が無く、他者の力によって気に食わないものを排除し、自らの欲求を全て叶えたいだけだなのだと。」
タキリヒメは非難する。
彼等は本質的に主体性も無く、他者から与えられた力によって、欲求を満たしたいだけなのだと。
「……だが、そんな彼等にも〝智慧〟は有る。他者を引きずり降ろしたり、世の中のルールを変えて自己の利益を追求するのに肌の色、髪の色、民族を理由にした武器は役に立たないことに気付き、性差や差別是正、ＬＧＢＴやらジェンダーといった外から来た思想に〝正義〟を与えるとどうなるか疑問を抱かず、自分に返ってくることも想定せずにそれを武器にしただけのことだ。そう考えれば、国会前に集まった彼等は特撮物のヒーローの様に〝正義〟を執行しただけとも言えるな？御刀を正なる神性を持つ物であると同じ考えであると思わんか？」
「でも、世の中の人はそれだけじゃないってことは気付いてるんでしょ？」
タキリヒメは〝正義〟を説く。
所詮それらは他者を追い落とすために追求された武器でしかないのだと。それは、御刀を正なる神性を持つ代物であり、荒魂は負の神性があり、穢れた物であるから斬るべきであるという考え方と酷似しているのだと。
だが、美弥はタキリヒメに臆することなく反論した。
世の中の人が全員そんなのじゃないと。
「……そうだ。世の中には、心に歪んでおらず、知能にも問題の無い人間は居る事には居る。しかし、そんなものは少数なのだ。それは、ほとんどが知能を有さない荒魂も変わりない。」

美弥の反論に肯定するが、しかし、美弥の言う人間は少数派であり、荒魂もそれは変わらないのだとタキリヒメは説いていた。
「だったら何でこの国を救済すると言ったの？」
「ここまで聞いて我が何故権力を志向するか不思議であろう？……我はな、そんなバカな国民と荒魂達を統べ、二十年前以上の大災厄を帳消しにするほどの最高の統治者にもなりたいが、人と荒魂も気分次第で二十年前以上の大災厄以上に殺した圧制者にもなりたいと思っただけの事なのだ。そうするだけで、この世の歴史に２０年前以上の大災厄を越える事を行った存在として永遠に遺れるのだ。」
そしてタキリヒメは自身の本意を語る。
この国を救済することができれば、そのまま救国の立役者として、この国の歴史の中で燦燦と輝くように遺ることができるが、もしもこの国を救済することができなければ、圧制を敷き、この国の大量虐殺者としても記録に遺るだけだと語った。
「故に、我は権力を志向する。経世済民が成功すれば、この世の”正義”をコケにすることができ、我を切り離した御刀を侮辱することができる。我を穢れていると批判するこの国の”正義”に鉄槌を下すことができるのだ！……もし経世済民が失敗したとしても、馬鹿な国民共にこう言える。お前達が穢れた我を支持したのだぞと、お前達が”正義”を行使した結果、多くの命が潰えたのだと強く訴えることができる！こんなこと、我以外に誰ができる。二十年前に現れた暴れるだけしか脳の無い馬鹿な大荒魂ですら出来ぬことだ!!」
そうすることで、タキリヒメはこの国を覆う”正義”をコケにしたいと本音を語るのであった。そうして、二十年前の大災厄を越えることを行った者として永遠に遺りたいと強く訴えていた。
「……そうなんだ。それで、何で私をクビにすんの？」
「お前は荒魂である我と一緒に居るのは嫌だろう？それに、我が臣下ですらない従者と共に死んだとなれば恥知らずとなってしまう。それが嫌なだけじゃ。」
美弥は、自分から「何故クビにされたのか？」とタキリヒメに聞いたのか不思議でならなかった。何故、タキリヒメの部下でありたかっ

たかのようにも取れる発言をしてしまったのか、美弥にも分からなかった。

此処に居る理由は、タキリヒメの監視であったはずなのに……。

だが、困惑している美弥を余所にタキリヒメはいつもの調子で答えていた。ただ単純に、自分の小間使いも死なせてしまうのは、恥だから逃がそうとしていたと。

気位の高いタキリヒメは、自分の臣下と共に死ねるのならば本望なのだが、臣下ですらない者と共に死ぬのは恥であるとタキリヒメは考えていたからこそ、美弥を逃がそうとしていた。

「そういう訳だ。お主はさっさと此処から立ち去るが良い。これからは一介の刀使として義務を行うのだな。」

タキリヒメは美弥から視線を外してそう述べると、片手で追い払う仕草をして何処かへ行けと自らの意思を伝えるのであった。

「……ふざけんなよ。」

だが、美弥はタキリヒメの命令に反抗する。

「私のこと、散々訓練だとかでコキ使っておいてもう要らないからお役御免って虫良すぎない!?それに、一度も正社員にしなかったダメ社長から、明確な解雇理由も明示しないで解雇したら罰則受けるし、再就職の支援も無く一方的に解雇するとダメなことぐらいインターネットもまともに使えなかったアンタなら分かるだろ!」

美弥は、タキリヒメのことをダメ社長と罵ると、明確な解雇理由も再就職への支援も無く一方的に解雇することは不法だと述べると、タキリヒメの命令を拒むのであった。

「……分からんな。荒魂である我の下に付くのは嫌だと拒んでいたではないか。どうして我と共に居ようとする?」

タキリヒメは不思議であった。

美弥は当初、自分に付くのは嫌だと答えていたにも関わらず、今や此処から離れることを拒むのである。

どうして、そんな心変わりが起きたのか皆目検討が付かなかった。

「そんなもん、決まってるでしょうが!!」

田辺　美弥は、今まで自ら何かを思って行動することはなかった。

「この世の支配者になりたいアンタが最後に一人だけじゃ、刀使を一人も味方に付けていないままじゃ様にならないし、それにアンタ、外に出たときから思ってたけど何するか分からないから私も付いて行ってあげるって言っているんだよ!!」

そうして、美弥は語る。

回りくどいが、共に目標に向かって努力したいとタキリヒメに自分の思いを伝える。

「ホラホラ私をアンタの臣下として再就職させなさい!じゃないとアンタは一人寂しく死んだだけという末路しか遺らないわよ!部下の扱いが粗略だった人とか、死んだ後にそれを一生物笑いの種にされたりすんのよ。それが嫌なら私をアンタの臣下として再就職させろ!」

「……我の本当の真意は〝弱者救済〟でもなければ、〝経世済民〟でもないぞ?それでも良いのか?」

そうして、美弥は更に語る。

回りくどいが、タキリヒメが自分を臣下として再就職させなければ汚点が残ると言って、美弥はタキリヒメの居る場所に留まろうとしていた。

そのことに、タキリヒメは良いのかと尋ねるのであった。

「別に良いよ。タキリヒメ一人に潰される社会なんて、元から誰かに押されただけで潰れる社会なだけだったんだよ。タキリヒメだけが悪いんじゃない。そんなもん、今まで何もしてこなかった人達も同罪だ。」

そうして、美弥は述べる。

本当に何の問題も無い社会なら、タキリヒメという一人の独裁者によって潰れる訳が無いと。

「……私、タキリヒメと一緒にこの国の貧困とか就職、出生率で喘いでる人達を見て思ったんだ。この社会って〝平等〟や〝権利〟だとか自分達にとって都合の良いルールや建前ばかり創り過ぎて、それに雁字搦めになって、遂には何も言えない不満が貯まっていって、それだけじゃなくて、皆は建前とかを失うのを恐れて何も言えなくなったから、改善する余地も機会も失って、今みたいな崖っぷちで潰れかけの

社会が産まれたんだと思ってる。」
　そうして、美弥は指摘する。
　この閉塞的で無生産的な社会を打破するにはどうすべきなのかということを。
「……だから、そんな潰れかけの社会が一方的に見せてくる〝平和〟や〝平等〟とかいう押し付けなんかよりも、霧に迷う者を導いて、その霧を切り払う努力をする人が見せようとしてくれる物の方が価値が有るような気がする。……理由なら、それだけでも充分じゃない？」
　そうして、美弥は突く。
　タキリヒメに付く理由を話して……。
「私もさ、抗ってみたいんだ。アンタの言う主体性が無かったり、他者の力によって気に食わないものを排除したり、自らの欲求を全て叶えたいだけの人達が必死に見せて来るものに対して……全てに。」
　そうして、美弥は非難する。
　タキリヒメの言う主体性が無く、他者の力によって気に食わないものを排除し、自らの欲求を全て叶えたいだけの存在に。
「でもタキリヒメの言うそれはさ、思ったよりも大きくて、そんな欲望が人だけじゃなくて〝平和〟やこの国の〝法律〟とかにも侵食していったんだと私は思うんだ。……いや違うかな？ただ単純に、耳障りが良くて心地よさしか感じない物や言葉に置き換わって行ったと言った方が適切かな？それとも、二十年前の大災厄で本当に起こったことを隠し続けたから今みたいな政治的混乱が起きた。といった方が分かり易いかな？」
「……言いたいことは分かった。だが、もう一度言うが、我は行った政策が失敗し、人々が苦しむことも望んでおるのだぞ。それで良いのかお主は、お主は人々を守るのが使命ではないのか？」
　そうして、美弥は〝自分が今住んでいる国〟がどういうものかを説く。
　誰も傷付かず、見たくないものを見ずに済めば良いというのを今まで変えることなく進んで来た国なのだと。

だが、タキリヒメは美弥に臆することなく反論した。
自分は救済と殺戮を行おうとしていると。
「うん。……そうだね。本当なら、私はここでアンタを止めなきゃいけないし、斬らなきゃならない。けれど、今のガラパゴスとか言われているこの社会のままで良いとは私はこれっぽっちも思わない。……何か一つでも変わらなきゃならないんだよ。この国も、この平和の在り方も、社会不安の改善方法も、刀使も、荒魂も、そして私も含めて、痛みを負いながらでも全て変わらなきゃいけない時期に来てるんだよ。そうしなきゃ、何時まで経ってもこの国は独り立ちすることすら出来ないままなんだ。それはきっと、何時までも刀使であり続けることが出来ない私と一緒で、この社会全体も……ううん、それだけじゃない。何が悪い事なのか、何が善いことなのかといった私達全員の考え方も変わらなきゃいけない時期に私達は来てるんだよ。そうしなければ、この国は、私達は新しい時代に取り残されていくだけなんだよ。」
タキリヒメの反論に肯定するが、しかし、それ以上にタキリヒメ抑えることが正解だと思えないと説くのであった。
この社会と共に沈むのが正解だとは思わないと説くのであった。
「もう私は、誰も傷付かず、見たくないものを見ずに済めば良いなんて考えはしないよ。この社会が根本から崩れて来ているのなら、深い傷を負ってでも、見たくないものは真正面から見て問題から逃げないように向き合わなきゃいけない。……そのためには、私はこの問題から解決するためには時間が限られているから、もっと強く賢くなければいけないから、もっと学ばないといけないんだ。」
そして美弥は自身の本意を語る。
この潰れかかっている社会を根本から変えないといけないと、そうしなければ、この国は何時までもガラパゴスのままであり、この国は沈んでいくだけであると。
そのためには、この国全体を覆う〝霧〟の様な空気から脱却しなければならないと。
「だからタキリヒメ、私も一緒にこの社会全体を覆う霧を祓う戦いに

戦わせてよ。……二十年前の大災厄を越えることを行おうとする荒魂とこの世界を守る刀使が共に戦うなんてこと、本当はダメなことなんだろうけどさ、……けど、それぐらい外れたことや変わったことをやらないと何も変わらないし、私は私自身のチャンスとアンタを捨てて逃げて、後悔したくない！」

そうすることで、美弥はこの国を覆う〝霧〟をタキリヒメと共に斬り祓いたいと強く語るのであった。

「……全く、我は厄介な奴を引き取ってしまったようだな。」

「そうだよ。厄介でしょ？それに、私はアンタを見て〝努力〟っていうのは一つだけじゃないんだと教えてもらった。一歩一歩歩んだり、誰かと一緒に歩いたりすることもそうだけど、外れた道を行くことで深手を負う覚悟で進むことだって、どれも等しく〝努力〟何だってこと。……だから、アンタは歩に私のことを任せておけって大口叩いたんだから、最後まで一緒に居てよ。居させてよ。そうでないと、タキリヒメは嘘吐きになるよ。」

「……そうだな。我はそんな大口を叩いたのだから、それを全うせねばならんな。」

タキリヒメは、何故へっぽこでしか思っていなかった美弥を排斥しないのか不思議でならなかった。

「それでは美弥よ。私の臣下となるか？」

「もちろん。……貴女の傍に、最後まで居させて下さい。」

そんなことを思いながらタキリヒメは、「我の臣下となるか？」という問いに対して、美弥は頭を下げて申し出るのであった。

しかし、美弥の能力は今もへっぽこであることに変わりないし、自分の臣下として傍に置いておくのに相応しく無いとしか思っていなかった美弥を今更自分の臣下にしようとしているのか、タキリヒメにも分からなかった。

「しかし困ったな。そうすると、我の臣下として働かねばならないのだから、責任重大だぞ、美弥？」

「分かってるよ。どんなものが待ち構えていようと、背を向けないよ。」

こうして二人は、誰かの後ろを歩くこともなければ、前を歩くこともなく、ただ荒魂と刀使という古来の言い伝え通りであれば、互いに敵対しなければならない関係であるのだが、一つの目標に向かって共に一緒に歩いて行くのであった。

（……歩。私さ、歩のように刀使になった強い理由が無かったんだ。だけど、今できたよ。私にも剣を振るう理由が、アンタにも負けないくらいの強い理由ができた!!歩がそれを知ったら、笑うかもしれないし、止めたかもしれない。それで私は歩の言っている通りに動いて、それで終わりだったかもしれない。けど、アンタのことを助けてくれたタキリヒメのことも見捨てたくないし、それ以上にタキリヒメが創る社会がどんなものか見てみたいんだ。……私、おかしいのかもね。荒魂と刀使が一緒に戦うなんておかしいのかもね。でも、私は何一つ間違っていないと思う!!）

歩はそう思いながら、タキリヒメと共に歩き出して行くのであった。

――――そして、時は動き出す。

「お逃げください、タキリヒメ様！綾小路が市ヶ谷を攻撃しております！」

タキリヒメの居る市ヶ谷に冥加刀使とイチキシマヒメを連れたソフィアが襲撃してきたのである。

小さな可能性

――――タキリヒメの陣営はソフィアの部隊に対して、劣勢を強いられていた。

理由は、市ヶ谷を警備していた部隊の中で一線級の米村　孝子と小川　聡美の部隊が、丹沢山周辺に突如現れた荒魂の群れに対処する特別遊撃隊の支援に出払っていたため、警備の人員に手練れが居ないという非常に手薄な状態であったこと、ソフィアが率いる刀使の部隊の隊員は全員ノロを体内に入れることで荒魂の力を自分のものにして強化された冥加刀使となっていたうえ、変革派の者や折神　朱音体制に不満を持つ者もヘリや近代兵器で支援していたことで市ヶ谷を警備していた部隊よりも多いうえ、人員の数と兵の質の差の点で負けていたので、劣勢を強いられていたのである。

「タキリヒメ様、お逃げ下さい。我等は劣勢でございます!!」

「……うむ。援軍は？」

「自衛隊が即応部隊とヘリを用意しているとのことです！しかし、間に合うかどうか分かりかねますので……。」

「急げ。…敵は待ってくれんぞ。」

「しかし！」

「急げ!!」

「……はい!!」

タキリヒメは大典太を携えながら、市ヶ谷に居る部下にそう命じると、その部下はバタバタとヘリポートへと向かうのであった。

タキリヒメが市ヶ谷から離れなかった理由は、荒魂であるタキリヒメが人間を盾に逃げれば、荒魂は人間を見捨てるものだと言われ、国民への支持を失いかねないがために〝逃げる〟という選択肢が採れなかった。

「……そういう訳だ。行くぞ、美弥。」

「うん。目の前にある霧を打ち払いに行こう！」

部下の報告を聞いたタキリヒメは、美弥に覚悟を促すべく「良いか。」と尋ねるが、美弥は既に覚悟を決めていたのか二つ返事でタキリヒメに協力することを述べていた。

しかし、タキリヒメは内心、自衛隊の援護は期待できないだろうと内心思っていた。

恐らく、丹沢山周辺で起きた荒魂騒動はソフィア達が市ヶ谷の警護を手薄にするべく、その荒魂を陽動として利用したのだろうと看過していた。……していたが、市ヶ谷の警護の刀使を丹沢山周辺で起きた荒魂騒動に対処する刀使達の増援として送らなければ、荒魂に対する警戒心とタキリヒメに対する疑念が再燃される可能性が有るため、市ヶ谷に居る刀使を丹沢山へと送らなければならなかった……。

故に、タキリヒメはこの市ヶ谷の襲撃の主演は自分とソフィアであり、脚本を書いたのは真希や朱音ではなく、その補佐をする寿々花か、もしくは防衛省の陸将補である甲斐であると踏んでいた。

……となると、自衛隊の援軍が来ない可能性が高かった。

そうであるなら、市ヶ谷を放棄して逃げるのが先決であろうが、自らの本城を放棄し、敵に明け渡した大将の声に耳を傾ける者は少なくなる可能性があるうえ、荒魂であるタキリヒメが人間である市ヶ谷の者を見捨てて逃げたということが広まれば、今の国民の高い支持を失い、二度と高い支持を得ることができなくなる公算が高かった。

そういった考えもあって、市ヶ谷から逃げるという選択肢を捨てたタキリヒメであるが、本当の理由は世界の全てを支配し、目の前に在る霧を斬り祓うことを行うと決めたタキリヒメのプライドが、敵を目前にして逃げるという選択肢を取るのが許せなかった。というのが本音である。

そのためタキリヒメは、ソフィア達に背中を向け、市ヶ谷から逃れることを放棄した。

「……これが最後の戦いになるやもしれん、気を引き締めよ。」

そこまで考えたタキリヒメは、美弥にこの戦いが自分にとって最後になるかもしれないから、気を引き締めろと言うのであった。

「……何だよそれ、私と一緒に居てくれるって約束したじゃん。戦う

前からそんな弱気じゃ、目の前に居る敵にも、アンタが挑もうとしてる世界にも勝てないだろ！私のことを忘れないでよ!!」

「！……そうだな。その通りだ。」

しかし、気を引き締めろと言ったタキリヒメは逆に美弥から叱咤激励をされる形となり、その美弥の一言からタキリヒメはハッとなると、美弥の言う通り、挑む前から負けを認めるのはこれから霧を祓いに行く者としては相応しくないと気持ちを入れ替えるのであった。

そしてタキリヒメは美弥の一言が切欠となって、今日死ぬかもしれないという気持ちから、この戦いに勝利するという気持ちとなり、奮起したのである。

（……あのヘッポコ三流刀使だと思っていた者が、我に叱咤激励を贈るほどにまで成長するとは。）

内心タキリヒメは、当初美弥のことを道を間違えて遭難したり、イノシシやヘビぐらいで驚く程の小心者という全く当てにもならないヘッポコ三流刀使だと思っていた。だが、今や私を叱咤激励し、奮起を起こさせるほどまで成長したのだから全くもって驚かせるものだと、つい思ってしまったのであった。

『ハイハイ。そーゆーのはいいから、タキリヒメって呼ぶね。』

『ブフッ……いや、知らないなら、知らないって言いなよ？』

……思ってしまったせいか、タキリヒメは美弥との思い出を思い出すと、そういえばコイツは荒魂である我に物怖じしなかったこと。

『この世の支配者になりたいアンタが最後に一人だけじゃ、刀使を一人も味方に付けていないままじゃ様にならないし、それにアンタ、外に出たときから思ってたけど何するか分からないから私も付いて行ってあげるって言っているんだよ!!』

それだけでなく、コイツは現世に在る全てを支配しようとする我と張り合おうとしていたこと。

それらを思い出したタキリヒメは、そういえばコイツ……美弥は我を他の者のように特別視したり、特段へりくだったりする訳でもなく、対等に接したり、張り合おうとしていたということを思い出すのであった。

そうしてタキリヒメは、美弥の言葉と行動が切欠となって、〝人の可能性〟というものを信じてみたくなったのか、今まで目を覆っていた物を自ら外すのであった。

「臣下となったお主の期待には応えねば、この現世を支配するタキリヒメである我らしくない。では美弥よ、此処に来た不届き者を軽くひねり倒しに行くとするか！」

「うん。なら見せてみてよ、私の目の前で!!」

そして、覆う物が無くなったタキリヒメの目に初めて映ったものは、瞳を輝かせ、何が遭ってもタキリヒメと共に歩み、共に夢を叶えようと奮闘してくれる臣下……いや、美弥の姿が映ったのである。その美弥の姿を見たタキリヒメは、この者が共に、傍に居ればどんなことでも成し遂げられるような気が不思議と思えたのである。

そして、自らの瞳で初めて見た美弥の姿は、どれ程の時が過ぎようとも自らの記憶から消えることはないだろうとタキリヒメは強く思うのであった。

だからこそ、タキリヒメは理解した。……人間と荒魂の間に新たな可能性が生じ始めていることを。その新たな可能性の力を以ってすれば、どんなことでも成し遂げられると信じて見たくなった。

故に、タキリヒメは自らが最初に述べたこの世界の支配者となるべく使った方便である〝人類と荒魂が共存する社会〟は、今では本気でそれが叶うのではないかと思えてしまう程に、美弥が魅せてくれた新たな可能性の力を信じて見たくなったのである。

（……全く、人の可能性を失うには惜しいと判断してしまう。）

思い通りに行かないかもしれない。人も荒魂も酷な道へと向かわせてしまうかもしれない。けれど、後悔はしたくないから、タキリヒメと美弥は強烈に残酷な世界に、たった二人の荒魂と刀使は立ち向かうべく戦場へと向かうのであった――――。

一方のソフィア達は、夜見を丹沢山にて囮にしたことで防備が手薄となったこと、手薄となった市ヶ谷基地の警備の増援として来たことを告げることで易々と基地内に入り込むことに成功し、その後は部隊を複数に分けて、ヘリポート等を確保することで敵の増援とヘリでの逃走を阻んでいたため、強襲作戦はほぼ成功したかのように思えた。

それだけでなく、ノロを体内に入れることで強化された冥加刀使にS装備を着用させることで強大となった兵の質が、市ヶ谷基地の警備として残っている二線級の刀使と自衛隊員達を圧倒していることもあって、ソフィア達は市ヶ谷に居るタキリヒメ達との戦いを優位に進めていた。……だが、彼女達にも懸念すべきことがあった。

それは、時間を掛け過ぎることで、自衛隊と刀剣類管理局の増援が来ることである。

そうなれば、タキリヒメとの戦闘で疲弊したところを敵の増援部隊に突かれる形となり、容易く形成を逆転される可能性が高かったため、時間はソフィア達の味方ではなかったのである。

「静、タキリヒメは外に出たか？」

そのため、今回の市ヶ谷基地にヘリで強襲し、タキリヒメを確保するという作戦にイチキシマヒメと融合することができた静を参加させる必要があり、上空に旋回するヘリの上から監視させていた。

「た、隊長！今の所見当たりませんっ!!」

ソフィアの通信に、タキリヒメが外に居ないか見ていた静が上擦った声で応答していた。

そして、荒魂と融合する力を持たない静がイチキシマヒメと融合できたのには理由があり、それは、市ヶ谷の襲撃に参加する前のことであった――――。

――――時を遡ること、市ヶ谷の襲撃に参加する前に静は、イチキシマヒメと話していた。

「……イチ子ちゃんどう?見つけられた?」

「ダメだ。此奴等は〝愛〟に耐えられず死んだ。」

静とイチキシマヒメは、その後も人知れず他者に電流や水を使った暴行を加え続けるという凶行を繰り返していた。

その凶行に及ぶ相手は決まって、不法入国したホームレスや就労先から逃げ、行方知らずとなった外国人不法就労者をターゲットにし、最終的に荒魂に襲われたという形で処理しているため、足が中々付かなかった。

それだけでなく、外国人労働者がこの5年間で延べ2万6千人程失踪しているということと、関東を中心に荒魂事件が増加したという現状も合わさって、失踪している最中か失踪した先に荒魂に襲われて死亡したものと見られたり、それだけでなく下手に捜査すれば外国人差別だの何だのと騒がれるために警察といった捜査機関は及び腰となり、静とイチキシマヒメの凶行は、結果として警察にも気付かれなかったのである。

そうして、今日も静が捕らえた外国人をイチキシマヒメが〝躾〟と称した暴力で更生させようとしたが、子供がおもちゃの人形を力加減が分からずに壊してしまうのと同様に、暴力の加減が分からない静とイチキシマヒメによって皆死んでしまっていた。

「うーん。やっぱり、私は不出来な娘だなぁ……。まともにお母さんやお父さんが出来た１００%成功する〝躾〟もできないなんてね。」

静の言葉を聞いたイチキシマヒメは、チクリと胸に痛みが広がったが、それでも自身の存在を肯定してくれた静に、今までの〝躾〟のやり方は間違っていなかったと証明したいがために、静の〝躾〟を望む形で成功させたかったが、更生することもなく死んでしまったことで静をガッカリさせたことを悔やんでいた。

「……済まない。私が下手だったのだろう。」

「ああゴメン。イチ子ちゃんは悪くないよ。……悪いのは私、お母さ

んやお父さんみたいに上手く出来ない私が悪いんだから。」
そのため、イチキシマヒメは自分が不出来だったからこそ失敗したのだと話すのだが、静は暗い表情を浮かべながらイチキシマヒメに謝罪するのであった。
人を躾けることすらも満足に出来ない自分を恥じて……。
「……静。」
悲しそうにする静を見たイチキシマヒメは、どうすれば良いのか悩んでいた。
ここ最近は、拷問の様な〝躾〟に耐えられる者が居なかったため、自身の存在を肯定してくれた静を喜ばせたかったイチキシマヒメはどうすべきか悩んでいたが、イチキシマヒメはあることに気付き、静に提案するのであった。
「一人一人手間を掛けてやっているからこそ上手くいかんのだ！ならば、隠世の門を開けることで隠世に居る荒魂を大量に出現させ、人と荒魂の争いを激化させることで、静の言う痛みという〝躾〟を乗り越える者を見つけ、手っ取り早く静の考えは正しかったと証明しよう！」
それは、隠世の門を開くことで、隠世の中に居る荒魂を解放させることによって現世に荒魂を大量に出現させ、人と荒魂との争いを激化させることであった。そうすることで、厳しい環境下に居ても生きて更生する人間が一人でも現れることで、静の〝躾〟という考えを肯定させ、静を喜ばせることができるかもしれないと考え、イチキシマヒメは静に隠世の門を開けることを提案したのであった。
……成功する可能性は限りなく低いが、その僅かな可能性に賭けるしかなかった。
「えっ!?そんなことできるの!!?」
「うむ。大荒魂である我は、広域に及ぶ荒魂への支配力、隠世への高い干渉力を有する故、隠世の門を開けることもできる。そうすれば、人と荒魂は互いに傷付くかもしれんが、それを体感することで静の考えに理解する者が増えるかもしれん。」
「な～るほど。他人を傷付けたり、痛みを感じさせることで更生させ

るってことだね。イチ子ちゃん賢いね！」
「フフフ、褒めるな褒めるな。」
　イチキシマヒメの隠世の扉を開ける提案に、静は喜色満面の表情を浮かべ、イチキシマヒメを褒めるのであった。それにイチキシマヒメは、静が喜んだこと、そして自身の存在を肯定してくれた静に褒められたことに、つい破顔してしまうイチキシマヒメ。
「……だがな。隠世の門を開けるには我の力だけでは無理だ。それには、我が多くのノロを取り込んで、２０年前の大災厄当時の力まで引き出せるようにしなくてはならん。故に、我はタキリヒメを取り込まなくてはならないのだが、我のみの力では勝てるかどうか……。」
「う～ん、そうか。そればかりは勝手に出来ないしねぇ。」
「……そこで提案なのだが、静よ、お前の力を貸して欲しい。……いや、我の力をお前に託したい。」
「？……私もそんな強い刀使じゃないけど、それで勝てるの？」
　隠世の門を開けるためには、タキリヒメを取り込む必要があり、そのためには刀使である静と融合すべきである理由をイチキシマヒメは述べ始めた。
「確かに、荒魂同士の結合など足し算に過ぎん。……だが、刀使と荒魂の融合はある種の化学反応を引き起こし、力は乗算となるのだ。その乗算の力でタキリヒメを倒そうということなのだ。……しかし、」
　しかし、破顔していたイチキシマヒメは次の言葉を紡がねばならないことを思い出すと、辛そうな表情をするのであった。
「しかしな、我は大荒魂ゆえ、静はその力を常に制御せねばならん。その際、激しい苦痛とノロを求める飢えと渇き、龍眼によって人を殺める光景を眺め続けねばならん。……そんな苦痛を紫は、２０年間も耐え続けていたが、結局は難しそうであった。それを常人が耐えられるかどうか。」
　静がイチキシマヒメと融合すれば、激しい苦痛とノロを求める飢えと渇き、それだけでなく未来視の能力を持つ龍眼によって人を殺害する光景を常に目にすることで精神の疲弊が著しくなるため、イチキシマヒメと融合すれば心身の疲弊は大きいと話すのであった。

「うーん、イチ子ちゃんも苦痛を感じるの？」
「……我は何の苦痛も感じることはない。」
静にイチキシマヒメも同様の苦痛を味わうのか？と尋ねられたイチキシマヒメは、自身は苦痛を感じることはないと申し訳なさそうに答えるのであった。理由は、苦痛を感じるのは静だけであるということを提案したことで、責められるのではと危惧したからだが……。
「……それの何が問題なの？」
当の静は、イチキシマヒメを責めるどころか、何が問題なのかと尋ねるのであった。
「い、いや、お主のみが苦痛に耐え凌がなければならんのだぞ？……それで良いのか？」
「いやだなぁ、イチ子ちゃん。私はいつもこう思っているよ。」
それに対してイチキシマヒメは、苦痛に耐え忍ばなければならないと忠告するが、静は至って普通にこう返答するのであった。
「〝痛み〟は神様がもたらしてくれた最高の贈り物だよ？」
静にとって、ノロを求める渇きや飢え、人殺しを体感することによる精神の疲弊といった苦痛など、神が与えた最高の贈り物でしかないと。
「……お母さんとお父さんが私を殴ったり蹴った後に、ゴハン抜きをされたとき、飢えて苦しくて辛くて辛くて生きてるのか死んでるのかよく分からないときがあったんだ。…そのとき、私の身体に〝痛み〟が這いずり回ったの。……そのときに、私は生きてる！生きてるんだって分かったの！だから私は神様に生きていて欲しいと言われたような気がしたんだ!!だから、私は神様にも愛されているんだ!!って思えたんだ。……だから、痛みは神様がくれた最高のギフトなんだよ!!」
故に、痛みや飢えを与えられても辛くはないと興奮気味に答えていた。
そのため、静はスレイド博士の協力により、イチキシマヒメと融合することができたのであった――――。

――――時は戻り、イチキシマヒメと融合した静は、タキリヒメの気配を感じることができるので、市ヶ谷基地周辺を旋回する上空のヘリから見ることで、タキリヒメが何処に居るかを監視することで、逃走しても追えるようにしていた。

「……隊長!!今、最っ高に気分と心地が良いですよぉーーー!!」

今回の市ヶ谷基地の強襲に参加したヘリの操縦士は、突然奇声を上げた静に驚くのであった。

このヘリの操縦士は、綾小路の管轄内に起きた荒魂災害事件によく参加していた機動隊員であり、どちらかと言うと朱音よりも紫を支持していた。

理由は、紫は荒魂による被害を最小限に抑え、世論の評価を上げた実績だけでなく、他国との協力の元に次々と新技術を開発させたという成果から、今のゴタゴタしている朱音局長代理よりも強く支持していたことと、二十年前の大災厄の元となった大荒魂の片割れであるタキリヒメを今の政府と刀剣類管理局が隠匿と保護をしていたことに義憤を感じ、今回の決起に参加したという経歴の持ち主であった。

……そのため、静にタキリヒメと同じ大荒魂であるイチキシマヒメが融合しており、その融合した際に生ずる苦痛に喜び、興奮して異様な行動を起こしているということを知らないヘリの操縦士は、静のことを訝しむものの、決起に参加した理由を思い出すと、考えを改めて特段気にしないようにするのであった。

それに、今回の決起は大荒魂であるタキリヒメに反発する血気に逸る刀使達だけでなく、二十年前の大災厄にて家族を失った者を持つ元ＳＴＴ隊員や旧折神　紫派の人間も参加していた。

二十年前の大災厄に出現した大荒魂の片割れであるタキリヒメを隠匿していたこともそうだが、そのタキリヒメに迎合しつつある今の社会に対しても強い義憤を感じており、彼等はヘリの操縦や銃といった近代兵器による支援を行っていた。

そんな彼等を今更見捨てることは出来ないし、何よりもタキリヒメが荒魂であることを忘れ、そのタキリヒメに迎合しつつある今の社会

に二十年前の大災厄を含めた今まで荒魂災害の犠牲となった刀使と隊員達……被災した無辜の国民に報いるために、この狂った社会に一発だけでも打ち込もうとしていた。

……ヘリの操縦士は、それを思い出すと今更もう戻れないのだと実感していた。

この歪んだ社会に一発でも打ち込まない限りは……。

「たいちょー！タキリヒメを見つけましたーーー!!」

……その願いが叶ったのか、イチキシマヒメを取り込んだ静がタキリヒメが居る所を見つけ、ソフィア達に報告するのであった。

――――だが、ブレイクスルーとなる事態が産まれたこの社会に住む者の誰もが気付くことはない。……いや、技術が発達し、豊かさが当然の享受であり、その恩恵に預かれないのは努力不足であり、自己責任と囁けば、それで解決される社会に居れば気付かないものなのだろう。

ノロは融合することで脳のようなものを形成し高度な知能を有しするようになり、その過程で感情が芽生えて荒魂となる。そして、全ての荒魂が最初に抱く感情は喪失感である。この餓えにも似た喪失感を埋めるためにノロは本能的に結合を求め、結合を繰り返すことで知能が発達すると喪失感は怒りに変化するのである。

この国は、この社会は、その喪失感から生じた怒りから暴れる怪物を荒魂であると説いている。

……ならば、この社会から爪弾きにされたという喪失感から生じた怒りで国会周辺で暴れた者達も、自分達を見捨てたこの社会に喪失感を感じて決起に参加した者達も、嘗て小学校に乱入し殺傷事件を起こした者も、東京都千代田区外神田区で起きた通り魔事件を起こした者

も、見方を変えれば、

人の容をした〝荒魂〟である。

そして、この世は社会的、心理的に孤立された者の怒り。破滅的な喪失や外部のきっかけによる義憤。そういった魂や怨嗟の声が集まり、やがて〝荒魂〟が増え続けることで起こる〝大災厄〟に対して、社会はどう在るべきであろうか?そして、そういった〝荒魂〟達を討伐し、排除するだけの社会は終わりを迎え、どう向き合うべきか、どう立ち向かうべきかを模索するべき時ではなかろうか?

――――そのことに、今は誰も見向きもしないのだから。

ソフィアの写シ

――――とある遠い北の国にて、浮浪児達が居た。

その浮浪児達の仲間の一人である少女は、帰る家という物も家族と思える者も居なかった。

その少女が家族と思えない者が居る家に帰ったとしても、アルコール依存症から抜け出せない親と名乗る存在から殴られるか、外に放り出されるかだけだった。

それ故に、少女は自分と同じ境遇に居る仲間、ストリートチルドレンとも呼ばれている浮浪児達の元へと向かうしかなかった。少女にとって、其処しか暖かいと思える場所が無かったからである。

……しかし、その少女と仲間達は街の人間からは同じ人間としてではなく、穢れた汚物のように見られるのが関の山だった。それどころか、街から消えて欲しいとすら思われていた。

理由は少女でも分かっている。

少女が行う児童売春や仲間達がマフィアから受ける麻薬売買が原因だと分かっていた。

……しかし、少女の仲間達である浮浪児達は親が死別したか、親から逃げ出した子供達の集まりでしかなかったため、直ぐに生活苦から犯罪行為といったものに手を染めるしか生きることができなかくなったのである。

そんな冷たい視線と寒空の中に居た少女ではあったが、地下構内の一画を勝手に占拠した場所で仲間達と共に過ごす日々は、少女にとって親と名乗る怪物と共に過ごすよりも尊い幸福と呼べるものであった。

「「おねーちゃん達、お仕事おつかれさまー。」」

「みんなー。元気にしてたー。」

無論、少女が児童買春を行う理由は共に地下構内の一画の中で送る年少の者達に物を恵むためであり、自分の欲しい物のために身体を安

く売っている訳ではなかった。
　少女は、年少の者達から〝おねーちゃん〟と呼ばれているが直接的な血縁関係は無い。無いが、この地下構内の中で共に過ごすことで育まれた固い絆で結ばれたものから生じた関係なのだ。
　……そして、年少の者達が〝おねーちゃん〟と呼ぶ存在は一人だけではなかった。その年少の子供達に声を掛けている〝おねーちゃん〟と呼ばれている存在は、少女よりも年上で、マフィアに面倒を見てもらっているギャングに所属する彼氏が居た。
「おねーちゃん。僕達も稼いで来たよ！」
　動いているのは少女達だけでなく、年少の者達もゴミを拾ってジャンクショップに換金する等を行って僅かばかりの資金を得ていた。
「ただいまー。みんな元気かー？」
「「おにーちゃん!!」」
　そして、この地下構内に住む子供達は年少の子供と少女と〝おねーちゃん〟と呼ばれる者達以外に〝おにーちゃん〟と呼ばれている少女よりも年上の者が何名か居た。この〝おにーちゃん〟と呼ばれている彼等もまた、この地下構内で少女達と共に生活する浮浪児達であり、この辺り一帯を牛耳るマフィアに援助してもらっているギャングでもあった。
　そんな〝おにーちゃん〟と呼ばれている少年達の稼ぎは、麻薬利権で勢力を増しているマフィアの仕事を手伝って得たものである。
　そんな子供達が寄り添って生きる理由は、この国は下から数える方が早いくらいの発展途上国であり、ヨーロッパで2番目に貧しい国なため、大人のホームレスもそれなりに居た。
　そのため、子供一人では大人に太刀打ちできないので徒党を組んで対処しようということで集まったのだが、いつしか子供達の間に強固な絆が生まれていったのである。そんな状況下であれば、
「おかえり、待ってたわ。」
「ただいま、ソフィア。」
　少女と年少の子供達が〝おねーちゃん〟と呼ぶ者に、彼氏と呼べる存在が一人居てもおかしなことではなかった。

そして、少女と年下の子供達が〝おねーちゃん〟と慕う者の名前は〝ソフィア〟であった――――。

少女にとって、この地下構内での日々は野草だけのスープ、拾ったパンくずを千切って細々と食べる。……それでも飢えている少女やソフィアとおにーちゃん達はシンナーや拾ったタバコで飢えを誤魔化して、年少の子供達に少しでもご飯を分け与えていたのである。

そんな理由もあって、年少の子供達はソフィアとおにーちゃん達を慕っていたし、この地下構内から離れなかった。

『……ずっと、此処に居たい。』

誰が言ったのかは分からなかったが、ソフィアも、年少の子供達も、おにーちゃん達も、少女も、いや地下構内の一画を勝手に占拠する子供達は皆そう思っていた。

家に帰ったとしても家族と名乗る存在にぶたれるし、そもそも家族が居なかったり、母親が貧困から逃れるべく別の男の元へと逃げ出していて孤児となっていたり、もしくは親戚から厄介者扱いされるのであれば、家に帰りたくないと思うものである。

確かに、ある者は家に帰れば暖かい寝床に食事を得られるかもしれない。

この地下構内には野草だけのスープにパンくず、もしくは残飯を細々と食べて飢えを凌ぐしかなかったが、其処にしかない幸せというものが確かにあった。

「ソフィアおねーちゃん、……それ。」

「ああ、うん。貰ったんだ。」

指輪を付けているソフィアを見た少女が、それは誰から貰った物なのかを尋ねていた。

すると、ソフィアは嬉しそうに彼氏から貰った物であると語るのであった。

この地下構内は良い物を食べられないし、安全な寝床とも言えない

酷い場所かもしれない。……だが、そんな場所でも愛を育むこともできるし、僅かばかりだが幸福を掴むことはできるのだ。

――――幼い童心を持つ者達は、この地下構内の一画を勝手に占拠していた浮浪児達は皆本気でそれを信じていたのだ。

――――本気で信じていたのだ。

その数日後、地下構内に居た浮浪児達は面倒を見てもらっているマフィアとは別のマフィアとそれに雇われた別の浮浪児のグループに襲撃され、追い詰められていた。

マフィアがソフィア達の居るグループを追い詰めていた理由は、当の別のマフィアとの麻薬売買の際に発生したトラブルの報復としてソフィア達を抹殺しようとしていたのだ。

……いや、その麻薬売買の仕事を与え、今まで面倒を見てもらったマフィアもそれが望みだったのかもしれない。彼等も面倒を見ている浮浪児達を殺されたという口実を以って、麻薬売買の取引相手であった別のマフィアを潰そうと画策していた節があったのだ。そうすることで別のマフィアの支配している区域を乗っ取ろうとしていたのか、それともソフィア達の居る地下構内を奪うために行ったのかは、最早過去の話である以上知る由もない。

とはいえ、ソフィア達が居るグループは、マフィアと別のグループの子供達よりも数自体が少なかったがために、おにーちゃん達は前に出て全滅しており、簡単に劣勢となっていたのだ。

「みんな、此処に隠れているんだよ!!」

ソフィアに言われ、隠し部屋に隠れることにした少女と年少の子供達。

……だが、１０名程居た年少の子供達は今は3人しか居ないこと、ソフィアの彼氏だった少年が居ないこと、そして銃の音が近付いてくるため、少女と年少の子供達は震え始めるのであった。

「……大丈夫、大丈夫だから。」

少女と年少の子供達が震えていることに気付いたソフィアが、優しく抱きしめ、頭をなでることで少女と年少の子供達は震えが治まって行った。

「お願いね。」

少女と年少の子供達の震えが完全に治まると、ソフィアは抱きしめることを辞め、一言「お願いね。」と隠し部屋の中に居る子供達の中では年上の少女に頼むと、少女と年少の子供達を隠し部屋の中へ隠すのであった。そうすることで、少女と年少の子供達は隠れることができたが、ソフィアは外に出たままであり、その外ではドタドタと騒がしく動く音が隠し部屋に居た少女には聴こえたため、少女は不安になり、どうにか外の様子を伺おうと周りを見たら、小さな穴が有った。

そのため少女はソフィア気になったため、外の様子をその小さな穴から伺おうとするのであった。すると、ソフィアと少年二名がお互いに拳銃を向け合っていた。その次の瞬間、何かがパンパンと炸裂する音がしたと共にソフィアと少年二人の身体と服は朱く染まり、立つ力を失ったのかドサリと地に倒れ伏していた。

少年二人は即死だったのか、倒れたまま動くことは無かった。しかし、ソフィアは、

「――――!!」

獣の様な呻き声を上げながら、手を使ってでも必死に立ち上がろうとしていた。このときのソフィアは何を言っていたのか、少女と年少の子供達には分からなかったが、恐らくソフィア自身も何を言っているのか分からなかっただろう。

その人とは思えぬ声に反応したのか、スーツ姿の大人達。マフィアの人間らしき人が入って来たことを少女は目に入り、瀕死のソフィアもそのことに気付くのであった。

「――――!!――――!!」

人とは思えぬ声を上げ、それだけでなく人とは思えぬ形相をしながら、隠し部屋に隠した少女と年少の子供達を守るためなのか、拳銃を乱射しながら大人達に向かって走るソフィア。

……しかし、マフィアの大人達は非情にも成人前の少女であるソ

フィアに向けて機関銃を乱射していた。
大人達の機関銃の乱射を一身に受けたソフィアは、服を血という朱い水で染め上げ、口から血を多く吹き出し、そして頭に銃弾を受けたのか目玉が吹き飛ぶと、立ち上がることすら出来ぬまま、呻き声を上げるだけであった。それを見た大人達は、トドメと言わんばかりに呻き声を上げるソフィアの頭目掛けて何度も撃っていた。
そうして、頭が半分吹き飛ばされ、血で朱く染め上がったソフィアを、少女は震えながら、大人達に見つかって殺されないように息を殺しながら見ていた。
だが、少女は撃たれて血を噴き出しながらも戦うソフィアを見て、自分達を守るために獣のような声を上げて戦うソフィアを見て、そして朱い血で染め上げられた物言わぬ骸となったソフィアを見て……何故だか、そのソフィアの姿が美しいとすら思えてしまった。
しかし、大人達はソフィアが指輪をしていることに気付いて、それをソフィアの指から抜くと、自らの懐に入れるのであった。
それを見た少女は、それはソフィアの彼氏がソフィアに渡した物だから盗るなと言って、飛び出しそうになる衝動に駆られるが、少女と年少の子供達は殺される恐怖に震え、足が竦むと飛び出すことすらできなかった。
そして、それを見ていた子供達は、力が有る者は人を殺しても、尊厳すらも何もかも奪っても、何をしても許されるのだと理解し、覚えてしまった。

こうして、少女と年少の子供三人は、姉のように慕っていたソフィアと仲間達さえも。自分達の居場所すらも失ってしまうのであった――――。

住む場所を失った少女は、マフィアから逃れるために生き残りの年少の子供達である三名と別れることになった。

それだけでなく、少女は酷く匂ううえ、衛生環境も悪いが、思い出が詰まった場所である地下講内から離れなければならなかった。

しかし少女は、いつかあの地下構内に帰るために生きようと思った。だからこそ、この残酷な世界が放つ日々を生きるためには金を得る必要があった。

……そのため少女は、今まで自分の身体を売ることで路銀を得るしか知らなかった。いや、その方法しか知らなかったのだ。

だが、地下構内という居場所を失った少女にとって、相手をした男性からの感謝の言葉をもらっただけで、ソフィアを見捨てた自分を肯定してくれたと、良い事をしたと思うようになり、承認欲求が満たされていくのが分かった。……そんな思いを抱いたせいか、自分の価値を見つけるのは案外簡単なことではないかと錯覚するほどに心地良かった。

それだけでなく、顔が良かったお陰で少女は少女趣味を持つ金持ちの男に見受けされるのであった。

そうして金持ちの男に面倒を見てもらっている内に、悪阻を起こしたことでお腹の中に赤ちゃんができたことが分かると、少女は嗤っていた。

これで一人では無くなると、孤独では無くなると、こんな自分にも大切に思える者ができたと思った。

お腹の中に赤子ができた少女は、

「女の子だったら良いな。」

と思い、女の子だったら『ソフィア』と名付けようと無邪気に思っていた。

……だが、栄養不足だったせいか、その少女にとって大切なものは赤い血と共に流されていき、永遠に失ってしまうのであった。

しかし、その事実を知った金持ちの男が、少女の健康状態を診るために来た闇医者の居る病院の中で呟いた一言を少女は聞き逃さなかった。

「高い毒を買った意味はあった。」

金持ちの男の言葉で少女は全てを悟った。

お腹の中の赤ちゃんは、目の前の男に殺されたも同然であった。それどころか、この金持ちの男は高い毒を少女の命すら気にせず使ったところから少女が死んだとしても気にも留めなかったのだろう。

いや、むしろこの少女趣味を持つ金持ちの男は、少女を殺すことで別の少女を見受けしようと考えていたのかもしれない。

しかし、少女の不幸はそれだけでなかった。

高い毒で無理矢理に堕胎させられたことで、少女は子供が産めない身体とされてしまった。

少女が子供を産めない身体となったことを知った金持ちの男は大いに喜んでいた。……これで、遊んだとしても子供が産まれることはないと喜んでいた。

……これが『生きてさえいれば幸せだ。』と言うことなのだろうかと少女は絶望していた。

――その後、お腹に宿した赤子の命を平然と奪った金持ちの男とは一緒に居られなかった少女は、夜に金目の物を盗むだけ盗んでから逃げ出した。

何処へ逃げれば良いのか分からなかったが、とにかく走った。走って走って足が動ける内に走れるだけ走った。

そのときばかりは出口の無い迷宮に迷い込んだかのような気持ちを少女は抱いてしまう。

――もう子供も産めない未来の無い身体に何が残っているのだろうか。

そう考えただけで、少女は死を選ぼうと考えた。……だが、死ぬなら、仲間達と過ごしたあの地下構内の中で死にたいと考え、少女の足は自然と地下構内のあった処へと向かっていた。

そうして少女は、生き残った仲間達や死んだ仲間達との再開を夢見て、その仲間達と一緒に、ささやかな幸せの中で生きていたかった。

少女はそんな夢を幻影を見ながら、少女は地下構内が在った所の近くにどうにか行けたのであった。

だが、其処に見知った地下構内は無く、既に地下構内は改装工事を

受け、形を変えられており、その上に地下構内のために造られた鉄の塔、建造物が建っていたうえ、その建造物のために作られた店が多く並んでいた。

後に知ったことだが、地下構内の形を変えたのは自分達の世話をしてくれたマフィア達であり、そのマフィア達が金持ち達から資金を得るために、地下構内の改築、その上に遊技場やら住宅やらを建てたのだ。……恐らく、マフィア達がソフィア達を殺したのも、それが目的だったのだろう。

この国は腐敗官僚が多く居て、金持ち達から金を貰ったマフィアや警官といった者が清掃部隊となり、その清掃部隊が金持ち達の要望通りに浮浪児達を処分しているということがまかり通るほどに腐った国なのである。

自分達は親族にすら要らない子扱いされたり、親から逃げ出した子供達であり、浮浪児なのだ。マフィア達にとって、庇護する者が居ない浮浪児達を処分するのは、実に簡単なことだったのだろう。

こうして、少女は暖かい過去をくれた地下構内と暖かい未来を約束してくれる赤ちゃんを産めない身体にされてしまった。

……つまり、少女は過去も未来も失ってしまった。

その事実だけで充分だった。少女の心を壊すには充分だった。身も心もボロボロになるには充分であった。

そんなときに街を彷徨い、物陰に隠れて暖を取っていたとき、少女達の笑い声が聴こえた。

その笑い声と共に話す内容はあの店が上手いだの、あの店は愉しいだのといった他愛の無い話しであったが、3人の少女達が言う店は自分達を退かして出来た店であることに楽しそうに話す姿を見て、少女は憤りを感じていた。

……それだけでなく、ある一人の少女の名前が癇に障ったのだ。

「ねーソフィア？どこ行く？」

3人の少女達の一人の名前がソフィアだったことである。

自分が姉と慕っていたソフィアは、地下構内の利権を得るために其処に居る浮浪児を排除したかったマフィア達に殺害されたのだ。に

も関わらず、その居場所を奪った店のことを語りながら、幸せそうに同年代の子供達と話す同じ名前の綺麗な服を着るソフィアが居るということが恨めしかった。

同じ星の上で生きている同じ名前の同じ人間であるのに、何故それだけの差ができてしまったのか少女には分からなかった。少女は、その事実だけで生まれ育ちが違うだけでこうも差が出るものなのかと嘆いた。理不尽だ。不公平だ……そんなのおかしいじゃないかと強く心の中で訴えていた。

……だから少女は、その理不尽に抗いたかった。親と境遇だけで全てが決まる世界を呪った。

そうして少女は心の中にある憤りと衝動のままに身体が動いたと思った瞬間、綺麗な服を着ていたソフィアを含めた3人の少女は頭から血を流して息絶えていた。

その後、三人の少女達が持っていた僅かばかりの金品を奪って、金に換えた後は直ぐに街を出た。

そうして少女は学んだ。……人から物を奪えると。全てを奪う権利が発生すると。

しかし、僅かばかりの金で生きていられるほど甘くはなかった。

遠い街の汚い自分には不釣り合いの綺麗な道の上で飢え死にそうになったとき、

「君？大丈夫かね？」

織田防衛事務次官に出会ったのである。

その際の彼は少女に優しく接してくれたのだ。……理由は、刀使という存在に彼の国は守られているため、年若い少女は出来る限り助けているとか、大災厄で死んだ人達への贖罪とかそんな話をしてくれたと少女は記憶に残っていた。そうして、食べ物や水を恵んでくれた織田防衛事務次官に少女はこう述べるのであった。

「……だったら私、その刀使になりたいな。」

少女は刀使という存在に惹かれた。その超常とも言える力が欲しかったから、その力を持っていたら地下構内で共に暮らしていたソフィアがマフィアに殺されることはなかった筈だから。

気に食わない者から全てを奪うことができると考えたから。
故に少女がそう述べると、織田防衛事務次官は驚いた顔をして何故?と尋ねるのであった。
「……だって私、両親が居なくて、大人達に子供を産めない身体にされて、未来が無いからせめて誰かのために役に立ちたいな。」
少女は、この男がこういった話に弱いことを理解し、両親が居ないと嘘を吐いて、自分達がマフィアの手伝いをしたことや強盗殺人に手を染めていたことを伏せて、悪い大人達の欲望のせいで子供を産めない身体にされたと話すのであった。
それを聞いた織田防衛事務次官は「そうか。」と応えると、
「だが、危ない目に遭うぞ?」
「良いよ、それで一人でも助けることができたら。」
「それに、日本語とか日本という国だけでなくたくさん学ばなければならないぞ?」
「良いよ、辛い事はたくさんあったけど、それぐらいなら頑張れるような気がするから。」
少女の決意を聞いた織田防衛事務次官は、これ以上は少女の意志を変えることは無理だろうと判断すると、少女に名前を尋ねた。
「そんなに刀使になりたいなら、先ずは君の名前を教えてくれないか?」
織田防衛事務次官に名前を尋ねられた少女は、思わず本名を名乗りそうになったが、ふとあることを思い至るとある名前を名乗るのであった。
「私の名前は……ソフィアって言います。」
地下構内で共に生きていて、姉のように慕い、私のために死んで逝ったソフィア。
自身のお腹の中に居たが、大人の黒い欲望のせいで、殺されてしまったソフィア。
そして、妬みから始まって殺し、殺した人間は全てを奪う権利があると教えてくれたソフィア。
少女は過去も未来も無い空っぽの人間は、自分の身代わりとなって

死んだソフィアや産まれてくる筈であった赤子のソフィア、自分が殺したソフィアの身代わりとして生きて行こうとした。

そうすれば、何もない自分が生きるより、彼女達の代わりとして生きていけるような気がした。殺人も、奪うことも、奪われることも何でもできるような気がした。

例え私が殺されたとしても、殺した人間が私を、ソフィアを奪って生きて行くのだから、死すらも恐れなくなるような気がした。

これからは、この強烈に残酷な世界と共に強く生きて行かなければならないのだ。

これからは、弱い少女の名も存在自体も捨てて、私を守るために獣のように戦ったソフィア、大人に殺されてこの世を恨んでいるであろう私のお腹の中に居たソフィア、私に殺されてこの世の理不尽さを嘆いているであろうソフィアになろうとした。

それだけでなく、この残酷で理不尽な世界に対して、復讐を行うに相応しい名でなくてはならない。

――こうして、名を明かさなかった少女は〝ソフィア〟の写し身のように、いや刀使となる少女は少女達の写シとして生きることを決意するのであった。

ソフィアの二次創作

――――私は弱かった頃の少女の名を捨て、獣の様に雄々しく戦うが指輪を奪った人達に憎悪を抱くソフィア、私のお腹に宿った赤ちゃんの未来を奪った世界に怨念を抱くソフィア、理不尽にも命を奪われ少女に怨みを抱くであろうソフィアの名を名乗った。

私の過去と未来を奪った社会に復讐すべくソフィアと名乗り、刀使になると決めたはいいが、最早子供も産めない身体となり、綺麗な女ではない私が御刀という代物に認められるかどうかが問題であった。認められなかったら、児童保護施設へと送られるだろうから、そうなれば自分の犯罪歴がバレて、刑務所行きだろうと覚悟を決めていた。

そのとき幼かった私の心の中は、どうせ刑務所行きで死刑になればそれでいい。私は弱かった頃の自分ではなく〝ソフィア〟として死ねるのだからと思い馳せるばかりであった。

……だが、御刀は私を見捨てなかったのか、御刀は私を認めてくれたのだ。

そのときの私は安堵と共に御刀に対して怒りが湧いてきたのだ。

理由は、神様という奴は姉と慕っていたソフィアとお腹の中に居たソフィアを救うことをせず、このときだけ私を救ったのかという怒りが湧いたからだ。

――――その怒りを抱きながら、私は理不尽なことに対して抗うべく〝強くなる〟と決意した。

御刀に認められた私の〝刀使になりたい〟という願いを養父上（ちちうえ）は私を養女にすることでどうにか叶えて下さった。

理由は恐らく、あまりにも不憫過ぎる私の願いを一つでも叶えたかったとか……そんなところだろうと推測していた。

実は織田防衛事務次官殿は、二十年前に相模湾岸大災厄にて多くの

人間と刀使が死んだことが今もトラウマとなっているらしく、救えなかった少女、それに犠牲となった人達への贖罪を何らかの形でしたかったがために、たまたま見かけた私を手助けしたかったというのが本音だろう。

「……ソフィア、鎌府女学院でなくて良いのか？綾小路武芸学舎は共学だから大変だと思うが？」

事実、私の希望を叶えるべく養父となった織田防衛事務次官は、悪い大人達によって子供が産めなくなった私が男に対して何らかのトラウマを持っているのではないかということを懸念し、共学ではない女子学校の鎌府女学院に入学することを薦められたが、私はそんなことを気にするタマではないし、私は私の目的があった。

「養父上、折角の御恩情を有り難く思いますが、私が鎌府と綾小路の橋渡しをすることで冥加刀使に関する計画が早められるでしょう。」

私が綾小路に入ることで鎌府と綾小路の間を自由に行動できると踏んだからだ。私の心一つで分断も可能なのだと思えば、心が躍る思いしか抱かなかった。

その後、刀使となった私は剣術を学ぶことになったが、どんな敵をも打ち破り、蹂躙する剣術を欲した。

……何故それを欲したかといえば、所詮御刀が神性なものだとか言っても刀は刀。どんな銘があっても斬れなければ刀とは言えない。それに私が刀使になりたかった理由は金剛身や迅移といった超常の力を求めたのが最大の理由であり、神性なる御刀を扱える刀使がとか、親の使命だからとかはどうでもいい話しであった。

――――ただ単純に力が欲しかった。目の前の敵を好き勝手に蹂躙する力が欲しかった。

私にとってみれば、御刀という存在は目の前に居る障害や敵を蹂躙するための道具。言ってみれば、ソフィア達の復讐を達成するのに必要な道具だった。

……いや、弱かった頃の自分を捨て、力強いソフィアとさせてくれる物。もっと端的に言えば初めて手にした一番強い力だった。

だから私の印象に一番強く残ったのだ。
故に私は強いソフィアを創るためには、どんな敵をも打ち破る強い剣術を得なければならなかった。
……しかし、探していた物は見つからず、途方に暮れていたが、とある剣術に心惹かれた。
――――無住心剣術。
師を打ち破り、自らの力を誇示したことが気に入ったからこそ、この流派を選んだ最大の理由であるが、無住心剣術を遣い、千度にも及ぶ他流試合にて一度も不覚を取られなかった真里谷円四郎の言葉、
『生まれついたままの純粋な赤子の心でもって種々の分別を離れ、外面に捉われることなく、ただ刀を引き上げて自然の感ずるところ、落ちるべきところへ刀を落とすだけ』
という言葉に感銘を受けたからだ。
生まれついたままの純粋な赤子の心……それだけで、私のお腹の中に宿ったソフィアの心が私に宿るような気がしたのだ。
そして自然の感ずるところ、落ちるべきところへ刀を落とすだけという言葉に大人に殺され、この世に産まれ出る筈だったソフィアの怒りがこの神性なるというもので着飾った御刀に宿るような気がしたのだ。
……そう感じるだけで私は荒魂も人も等しく斬ることができた。
そう思えただけで私の身体にソフィア達が宿るような気がしたのだ。
そう信じただけで私はソフィア達が力を与えてくれて、何も無い私を容（かたち）を付けてくれるような気がしたのだ。
そうしてソフィアの怒りが乗った御刀で敵を打ち負かすのは、ソフィアの怨念が安らぐような思いさえ抱けた。そうすることで私の剣の技量は飛躍的に向上した。
――――そうして荒魂討伐任務等を数回こなした私は一部では有名となり、綾小路という伝統校に外人の見た目でありながら、織田防衛事務次官の養女ということで色々と噂を立てられたり、やっかみを受けたりしたが、全て力で捻じ伏せることで己の立場と立ち位置を皆

に周知させた。そうすることで私は綾小路においても頭角を現していったのだ。

……そんなこともあって、私は綾小路の中でそれなりのポジションに居り、刀使という福利厚生が充実している国家公務員であることから、私のことを知らぬ者からすれば順風満帆な人生を送っているように見えたことだろう。

しかし私は、この国に在る物、どうしても許せない物があった。

移り住んだこの国は何もかもが恵まれていたということだ。それを目の当たりにした私は、私の故郷が今も貧しいうえに腐敗した官僚が蔓延る国であったことを思い出し、つい最近では不正選挙で政権を追放したと思ったら追放した政権を戻したりするという奇妙奇天烈な行動を起こす国なのである。

貧すれば鈍する。

それが私の故郷であり、そこに住んでいた私は飢えや別のギャングとの争い、大人達とのイザコザでいつも苦境に立たされていた。

地下構内に住む仲間達のために行った売春と強盗、麻薬売買といった非合法な活動。

野草だけのスープとパンくずだけといった残飯と見間違えるほどの食事をご馳走と思う程だった日々。

……だが、一人ではなかったし、幸せだった。

そしてこの国の平和の中身。『他人を傷付けるのは辞めよう。』『力による現状変更は良くない。』といった価値観をテレビで書物で新聞で私に押し付けてくる。

『他人を傷付けるのは辞めよう。』

相手と競い合う競争社会にしておいてよく言う。

『力による現状変更は良くない。』

自分達の権益を保護したいだけだろう。

形ばかりの平和国家が述べる〝平和〟とは、自身の思い描く『幸福』と他者が思い描く『幸福』は違うということと同様に、他者が思い描く『平和』と自身が思い描く『平和』は違うということに配慮するこ

となく押し付けてくるものなのだということが分かった。
形ばかりの平和国家が述べる〝平和〟とは、金と体力のある者が他者の僅かばかりの養分を吸い取って、その養分を肥えた豚同然の腹を充たすためだけに使う大義名分だということを理解した。

……それらを思い返すだけで、私の故郷に居るであろう私と同じ境遇の浮浪児達は、今も苦境に立たされているのだと思い返してしまう。

ただ運良くこの国に住めたというだけで、ただただ其処に在るだけの平和を受け入れさせられるだけで、その無遠慮で横暴な平和が私に対して過去を捨てろと勝手なことを述べながら侵食して行こうと企んでいるように思えた。そして何をせずとも綺麗な水や食事が得られることに私は虚しさしか感じれなかった。

だが、そんな空虚な平和をこの国が得ることができたのは、私の故郷や他の国を食い物にすることで成り立っているものであると分かってしまえば、気味が悪くなる思いしか抱けなかった。

……私だけ、地下構内と共に過ごした嘗ての仲間達を見捨てて、良い思いをしているような気さえした。

それ故に、地下構内でソフィアが見せた獣のような戦いをした者こそが本当の生きている人間であり、それ以外は屍にしか見えなかった。

故に、この国に蔓延するただただ在るだけの平和が、虚無のように感じれたのだ。いや、何も無い灰色にしか見えなくなった。

ただ生きているだけの屍。そう表現するのが適切と思えるほどに虚無で止まっている人間が多いように感じ取れた。

それ故に、生きているだけの屍が死んだとしても何の感情も湧かなかったのだ。

それだけでなく、この国に建つ幾つもの鉄の塔。所謂ビルや高僧マンションといった建物が嘗て私の仲間達と共に住んでいた地下構内

の上に建てられた鉄の塔を思い起こさせる物に見え、それら全て壊す力が欲しかった。

だからこそ私は服装から変えることを考え、黒色のベレー帽を被り、灰色のトレンチコートを羽織ると、黒のジャングルブーツを履くことで強くなろうとした。

それは、コロンバインの高校で銃乱射事件を起こした二人が黒いトレンチコートを強さのシンボルとして着込んだのと同じ心理であったと私は、私の心境を推測していた。

故に私は望んだ。力をもっと望んだ。私の瞳に映る嘗ての自分達を踏み躙ったあの数多くのビルを自らの手で壊せたらどれだけ爽快だろうかと。廃墟と瓦礫の山となって恵まれた大人や子供がその惨状に泣き叫んでいる姿を見たら、どれだけソフィア達の心が穏やかになるだろうかと。この国の人間が私達と同じ苦痛や絶望を味わわせることができたら、どれほど私の中に在る恨みつらみが消えるだろうかと何度も……何度も何度も何度も何度も何度も考えたことがある。

世の中は、刀使を母に持つかどうかといった生まれやこの国に産まれたかどうかといった境遇だけじゃないと、一撃を与えたかった。

全ては、生まれや境遇だけで決まるものではないという一撃を与えたかった。

……そんなときに私は静に出逢った。そのときの静は、私にこう尋ねたのだ。

「……ねえ、貴女って私と同じ匂いがするね？」

それは「どんな匂いだ。」と私は続けて尋ねた。

「私と同じで、周りの人が理解してくれないことがあるんじゃない？」

それを言われた私はこう答えるしかなかった。

「……確かに私はそんな子供みたいな感覚に囚われたことがあります。あの生きるのに精一杯の世界から、こんなに平和な世界に生きていることで不思議に思うことがある。本当にこの国は私が生きている世界と同じ世界に居るのかと。」

私は静にこう言うと、更に続けて述べるのであった。

「だって、おかしいでしょう？私が生きていた国は、明日を生きるため

に武装をして自分の居場所を、自分自身をどうにか確立させて生きていた。だが、この国は平和主義と言って自らを守るのに必要な武器を放棄していても何もかもが簡単に得られる。何の達成感も無い。そんな違和感を私はずっと感じてきた。」

そうだ。この国は私からすれば異常に見えるのだ。

「自らをあらゆる武器で守ろうとしないのは、事実上自己を放棄しているのと同じだというのに、そのような扱いを受けているというのに誰も何も疑問に思わない。話し合いや愛といったもので人は救われるというのなら、刀で武装している私達は救われない存在だということになり、そう言われていることに何の疑問も抱かない世の中に思うことは、精々が誰もが誰も、自己を放棄しているとしか思えない。そんなものはただの家畜だ。羊だ。動いているだけの屍だ。……というぐらいですね。」

この平和主義の国に住む者は、刀使という刀を振るう者が居り、軍事兵器を扱う自衛隊や警察が存在しており、在日米軍という他国の軍を頼りにしていることに何の疑問を抱かないのだろうか?……どうやって自分を確立させ、生きていると思えるのだろうか?

「そうなんだ。……でも、愛はあると思うよ?」

「どうしてお前はそう言える?」

「だって、私はこんなに愛されていたんだもん。」

静はそう言うと、素肌を見せた。

その肌は痣と傷だらけで、とても見れるような肌ではなかった。

……私は、静がそれを愛と捉えたことに疑問に思い、何故そう思ったのかを尋ねるのであった。

「……おかしなことを言うね?神様も血を見るのが好きだから、天国でも神様同士でも戦争をしているんじゃないの?だから神様は刀使と荒魂を創ったんでしょ?」

そうか、神様も戦争が好きなのか、……そうなら、戦争というのは御刀を扱う刀使と同じで神性な物なのだろう。

静の考えを聞いた私は、力よりも戦争を望むようになった。

戦争!戦争!!……私達刀使が存在する理由は神性なる戦争のためだ。

ソフィアといった狼が活きれる世界。獰猛な捕食者達のためだ。
奪い奪われ、例えソフィアが強者に奪われたとしても、ソフィアはその強者共の糧となり、その強者は強くなる。そうして、その者は私と同じように暴力を糧とする者になるのは目に見えている。……ならば、私が呪う鉄の塔も壊すことだろう。
「……分かった静。私と共に行かないか？私もお前と似た物を求めている。」
「そう言ってくれると思いました。」
そう考えただけで私は、力だけでなく戦争というものはこの世の理不尽を浄化させる炎のように思えてきたのだ。
こうして私は、静という同志を得た。仲間ではなく、同志だ。私の仲間はあの地下構内と共に死んだ。だから友人や仲間はもう作らない。
わたしは、このせかいにじょうかのほのおをともすのだから。
だからこそ私は、
「……大荒魂になりたいな。」
と子供のように呟くのであった。生まれや境遇で全てが決まるこの世界を壊したかった。何故私が〝大荒魂〟を知っているのかというと、養父である織田防衛事務次官から聞いた何千人もの犠牲者を出した大災厄、それを引き起こした大荒魂になれたらどれほど心地良いだろうかと思い始めたのであった。
……だが、御刀に選ばれるかどうかのときは力を貸してくれた神は、流石に大荒魂になりたいと思う私の思いに力を貸してはくれなかった。
何故なら、その時の私は中学生ぐらいの齢で大荒魂になりたいという願いを叶えるにはノロが足りなかったうえ、養父が私を気遣って冥加刀使の選抜から外させたのだ。……そのことに私は憤慨したものだが、そのときの私は防衛事務次官という公職に就く養父の力が必要であったため、癇癪を起こして排除するべきではないと判断すると、抑えたのであった。
その後も私は、全てを浄化の炎に包み、私の全てを奪って糧とする

強者を育ててくれる戦争を求めた。求め続けた。
目的のない生活は味気なく、目的のある生活はわずらいだ。とヘルマン・ヘッセが述べていたが、私は全く以ってその通りだと思った。目的が私にこれだけの力と戦争という生きる理由を与えてくれたのだから……。

……そんなことを考えながら、毎年5月に鎌倉の折神家にて開催される御前試合に出場する代表選抜選の選手に選ばれることになったのだが、私はソフィアが魅せてくれた獣のように叫び、自身のか弱き命を絞り出すかのように、使い果たすかのように雄々しく戦う姿こそが人の在るべき姿だと思っている。
故に私は、鎌倉の折神家にて催される御前試合とかいう棒振り大会、もしくはチャンバラごっこと形容するのが的確な物に付き合う気にはなれなかったのだ。
戦いとは、ワインと例えられるほどの美しい血を流し、それに歓喜を感じ、怨嗟を撒き散らすことで真価が問われるのだ。それこそが最も美しい戦いであり、戦いが生んだ血と鉄と怨嗟と歓喜の声が、この世を憎悪しているであろうソフィア達に対する鎮魂歌となるのだ。

そうして17歳になり、私をソフィアにしてくれた刀使としての力が徐々に弱まり、大荒魂になって街を破壊することもできない味気無い己の人生に虚しさを感じながら、親衛隊が南伊豆にて山狩りを行うために人手が必要とのことで援軍として来た際に、あの子に出逢った。
後に名前を知ることになる鎌府の制服姿で戦う衛藤　優。
身体に銃弾を受けながら付き進むその姿、嗤いながら人を殺せるあの精神、その”孤高”とも言えるその強さに私は心惹かれていった。虜となった。彼が大荒魂になったらと思うと歓喜した。
その理由は、私が思い描く戦争と暴力の体現者が其処に居たからだ。彼こそが最も大荒魂になるのが相応しいと思った。捕えたいと

も思ったが、捕えてしまえば紫の手に渡ることに思い至ると捕らえることを辞め、少し斬られたからという理由で彼等を逃すことにするのであった。

……その後、その時は名前も知らない衛藤　優について調べていたときに燕　結芽と出会った。

私にとって、その者は鼻持ちならなかった。

裕福な家庭の下で何不自由なく育ったうえに、それに気付くことなく自分が不幸だと思い込んでいるだけの餓鬼。端的に言えば私が嫌う生まれと境遇に恵まれた者。それが彼女に対する第一印象だった。

「いや、結芽さんも中々手強かった。それでなのか、結芽さんとの手合わせが楽しく、つい夢中で時間が忘れるほど戦いました。」

それで私は、こう言えばこの目立ちたがり屋の子供は喜ぶだろうと考えた。そして血を吐いてでも戦い続け、もだえ苦しみながら戦うように仕向けた。

そうすれば利用できる駒が一つ増え、親衛隊と折神家を引っ掻き回すのに使えるうえ、生まれと境遇に恵まれた者がもだえ苦しむ様を眺められると思ったのだ。

そして、そんなことが過ぎた後、衛藤　優のことをスパイを使って調べてみると、２０年前の大荒魂を身に宿していることが分かった。

……本当に素晴らしかった。

私がなれなかった大荒魂に彼はなってくれるだろうという確信を得たのだ。この子が私の代わりに私の障害を全て排除してくれるだろうと確信をしたのだ。この子なら私の全てを奪い、私の中にあるソフィアの力を糧にして、私ができなかった戦争と暴力の体現者となるだろうという確信を持ったのだ。

――だからこそ、衛藤　優くんが私の全てを奪って、私を糧として鉄の塔を壊して行ってくれたらどれだけ快感なことだろうと思ったのだ。

だが、彼はもっと大荒魂として相応しい存在。暴力と争いの体現者としての偶像として相応しい姿とするべく結芽を苦しめて弱らせて優くんに殺させ、御刀も彼女の体内にある荒魂も何もかもを奪って力

を高めて欲しかった。
　そして、殺しの技を更に洗練とするべく、再び衛藤　優くんの姿を見たとき、彼が結芽の御刀を持っていたことに内心歓喜していた。やはり私の想定通りに暴力で全てを奪っていったのだ。そうして力を高めてくれた。やはり彼は私の想像通りの私が求めていたイデアか救世主だったのだ。
　そのため私は、優くんの殺し方が更に鋭くなるように国会議事堂前での暴動も扇動し、夜見を改造して強化し送ったのも彼女の中にある荒魂を全て奪って欲しかったからだ。
　そうすることで私は……自らの手でこの世に混乱をもたらす大荒魂を創作しようと思ったのだ。そして大荒魂となった優くんに私の全てを奪ってもらい、私を糧にして、鉄の塔が並ぶ街を２０年前に起きた大災厄のように破壊してもらいたかった!!!!
「……昨今の刀剣類管理局、並びに政府の行動に対して我々は行動を起こす時が来た!!」
　だからこそ、私は綾小路の刀使達と変革派をも焚きつけた。戦争を起こすために。
「この数カ月、朱音局長代理の刀剣類管理局は警察から独立し、省庁と一つとなったがどうなった？関東一円にノロを飛び散らせた『鎌倉特別危険廃棄物漏出問題』を引き起こし、関東中に荒魂事件が頻発。事態を収束させるため我々を酷使した。だがそれは良い。国民を守るのが我々の使命であるからだ!!」
　本心にも無い、『国民を守るのが我々の使命』という言葉を使って変革派の面々を焚きつけたのだ。
　彼等は紫を信奉しているが、荒魂事件に対して後手に回ってばかりの朱音局長代理に対して憎悪を滾らせていたから扇動は容易かった。
「しかし、今の刀剣類管理局は政府と結託し、２０年前の大荒魂の一部であるタキリヒメを匿っていたのだ！……これは我等刀使と我々と共に戦ってくれた同志だけでなく、今も大災厄の災禍に悩む者や荒魂事件で被害を被っている者に対する裏切り行為である!!」
　私が、相模湾岸大災厄と今も続く荒魂事件の被害を受けている者に

対する裏切り行為であると述べると、変革派に属する刀使達やＳＴＴ隊員といった人達は頷いている者や涙を流しながら聞いていた者も居た。

　無理も無い。刀使の中には大災厄の後遺症によって両親と死別したか、今も病床に伏している者が居るのだ。それだけでなく、戦友か先輩が荒魂によって重傷を負い、刀使を続けられなくなった者も居り、そういった者達は荒魂に対する憎悪が強いのだ。

「今の朱音局長代理の言う〝かつて人とノロが寄り添っていた古来のやり方〟はどうなった？荒魂事件を増やしただけではないか!?故に、我々は一刻も早く嘗ての折神　紫体制の様ように戻し、荒魂事件を減らすべきではないのか？神性なる御刀を持ち、荒魂を討伐するという使命を理解している真の刀使、いや、誠の勇士である我々こそが、その誤った考えを正さなければならないのではないか!?!」

　そうして、私は荒魂に対する憎悪が強いこの者達にとどめとばかりに荒魂を討伐するという〝正義〟を与えた。

　すると、仕込んでいたサクラが「そうだ。」「私達が変えるべきだ。」と口々に口走って行くのであった。そうすることで、周りの人間達はこれが正しいことであると、正義の行いであると錯覚していくのである。

　私はそんな正義の行いに酔いしれ始めている者達を見て、嗤いをどうにか堪えながら演説を続けていた。

「故に私は立ち上がる!!……全ての戦友のために、荒魂事件で散って行った者達のために、全ての同胞のために立ち上がる!!先ずは、手薄となっている市ヶ谷基地へと向かい、タキリヒメを討ち取るぞっ!!!」

　私のタキリヒメを討ち取るという言葉が終わった瞬間に、皆が喚声の声を上げるのであった。

　こうして私は、変革派の者達と荒魂に対して憎悪を抱いている刀使達と共に、タキリヒメをイチキシマヒメに吸収させるべく市ヶ谷基地へと向かうのであった。

　私の戦争と暴力の体現者を創造するという野望の礎となってくれた燕　結芽。

鎌府の研究成果を知るためにノロのアンプルを使って聞き出した高津　雪那。
それと、生け贄の望月　和樹。
そして、新たな荒魂の実験材料となってくれた皐月　夜見。
彼女等の”協力”の下、新型のノロのアンプルが完成し、それを投与することで冥加刀使となったソフィアである私と共に。

……タキリヒメを吸収したイチキシマヒメと冥加刀使のノロを全て私の理想である優くんに献上すべく。

『たいちょー！タキリヒメを見つけましたーーー!!』
スレイドの処置のお陰で、静はイチキシマヒメと融合することができたため、タキリヒメの居場所を感知することが可能となったため、タキリヒメを感知した静はソフィアに通信機越しにタキリヒメの居場所を報告するのであった。
「ついに、私が思い描く序章が始まるのだな。」
その静の報告を聞いたソフィアは、もう後戻りすることはできないのだと再認識する。
「……だが、もう戻れないな。」
もう戻れない。弱かった少女の頃にも、刀使としてももう戻れないだろうと、ソフィアはそう再認識するしかなかった。

――――一方、タキリヒメと美弥は。

「ゼェー、ハァー、どんだけ居るんだよコイツラ!!地味に強いし!!」

「……恐らく、ノロを取り込んで強くなっておるのだろう。」

美弥は、タキリヒメが特訓を施してくれたお陰か、肩で息をしながらもどうにか冥加刀使を三人ほどではあるが倒していた。

しかし、それとは対称的にタキリヒメは美弥よりも倍の数の冥加刀使を倒しているにも関わらず、疲れを見せることもなく平然と立っていたのだから、やはりタキリヒメは大荒魂の片割れであり、それ相応に強いのだろうと、美弥は改めて思っていたのであった。

(やっぱ、強いな。……私はこの人と並び立てるほどにならなきゃいけないよな。)

私はこの人の臣下となった。ならば、それに相応しいだけの実力を持たなければならないと美弥は思うのであった。

そして、タキリヒメと共に歩むこの時間が永遠に終わらなければ良いのにとも思っていた。

……だが、その時間も終わりが見えてきていた。

何故なら、美弥の目の前には、イチキシマヒメから借りたのか数珠丸恒次を持つソフィアとその部下である冥加刀使が数名居たからである。

「……タキリヒメ、あれ。」

「ああ、総大将自らお出ましとは……我も人のことは言えんがバカなのか、そうでないのか。最後の最後までよく分からん奴だ。」

タキリヒメは、ソフィアのことを最後までよく分からない人間だったと評しながらも、強敵に出逢えたことに対する喜びなのか、笑みを浮かべていた。

「美弥よ、怖いか?」

「ううん、タキリヒメが命じるなら、どんな霧も斬り祓ってやる気分だ

よ。」
　美弥の言葉を聞いたタキリヒメは、この者は恐らく自分を守るためなら、命すら投げ出すだろうと悟った。
『……あの、タキリヒメさん！……美弥のこと、お願いしますね。』
　タキリヒメはそこまで考えたせいか、ふいに美弥の友人である内里歩の言っていた言葉を思い出してしまっていた。
　友達のことを頼むと言われたことを……。
「おう、ソフィアという者よ！少し我の臣下と話すことがある!!暫し待てい!!」
　それ故に、タキリヒメはソフィアに少し待てと言うのであった。
「隊長、そんな話に乗る必要ありません。今すぐ攻撃の命令を。」
「待て。」
　その声に冥加刀使は、タキリヒメを討ち取れと命じて欲しいとソフィアに催促する。しかし、ソフィアは不思議なことに「待て。」と命じるのであった。
　……ソフィアが「待て。」と命じた理由は、傍らに居る刀使を臣下と呼ぶタキリヒメの言葉に引っ掛かり、あの傍らに居て臣下と呼ばれることに不服そうな顔をしない綾小路の制服を着た刀使と大荒魂であるタキリヒメとの関係がどのような物なのか興味を抱いたからであった。そのため、
「分かった！手向けの言葉を掛ける時間はくれてやろう!!」
　ソフィアは、タキリヒメと美弥に話す時間を与えると述べるのであった。
「……そういえばな、美弥よ。」
　そうしてタキリヒメは美弥の名を呼ぶと、美弥をこちらに振り向かせていた。
「お主は我の臣下となった訳だが、その際に何も与えることしていなかったな。」
　するとタキリヒメは三日月宗近を隠世から取り出すと、美弥に改めて問うのであった。
「唯一の、……いや、初めて臣下となったお主にその証明として、これ

を渡そう。…三日月宗近だ。」

タキリヒメはそう言うと、美弥に初めて臣下の証として、三日月宗近を美弥に下賜したのであった。

「三日月宗近は天下五剣の中で最も美しいとされる太刀と云われる代物である。なればこそ、この現世を統べることになる我と並び立つと宣言したお主に与える。……美弥、この美しい太刀を前に霞むことなく励み、常に精進せよ。」

それだけでなく、この美しい太刀に劣らぬように精進し続けろと激励を送っていた。

そして、タキリヒメが手にしてから、刀使と荒魂の血を吸ったことのない三日月宗近を美弥に渡せて良かったと。

「先ずは臣下となったお主に命を下す。……生きろ、美弥。そちの友人にお主のことを頼むと請われた以上、荒魂と人間が共存する社会を形成し、この世の全てを統べる我がその願いを無下にする訳にはいかん。……そして、我の後に続くであろう人の姿をした荒魂達に語り聞かせてくれ。我の生き様を。この現世に彷徨うことがないようにな。」

それを聞いた美弥は、涙を必死に堪えながら静かに聞くと、その思いに応えんと返すのであった。

「ありがとうタキリヒメ。……なら、刀が一本だけでは様になんないから、私の剣を使って、……この現世で荒魂と人間が共存する社会を形成するタキリヒメが片手しか御刀を持っていないのは、恰好がつかないでしょう?」

そして美弥は、タキリヒメに対して自身が愛用していた無銘の御刀を差し出すのであった。

「これで……必ず勝て!!」

それだけでなく、美弥はタキリヒメに勝利を得て、自分の元に帰って来て欲しいと飾り気も無く、愚直なままに述べるのであった。

「……そうか、我にこの刀を授けるか。荒魂である我は唯一御刀のみを恐れていたが、こうして扱うと刀というのは何かを斬り刻んだり、何かを断つだけの物ではないのだな。……こうして、我とお主を紡い

でおるのだからな。」

タキリヒメのこの一言を切欠に、タキリヒメが持つ御刀は荒魂や人を斬るだけの物ではなくなり、また荒魂であるタキリヒメが恐れる物でもなくなったのである。

それと同時に、タキリヒメと美弥の関係は、人々に災いをもたらす荒魂とその荒魂を祓う刀使という関係以上のものを荒魂を斬る唯一の武器と言われた御刀で紡いで行ったのである。

「……最後に、お主に渡した三日月宗近が刀使を一人も斬っておらんで良かった。」

美弥にも聞こえない声量でタキリヒメは己の気持ちを漏らすのであった。聞こえなかった美弥は「えっ？」と聞き直すためにタキリヒメの顔を見るが、タキリヒメのその顔は、歯を剥き出しにしてニカッと子供の様な無邪気な笑顔をしていた。……その笑顔を見た美弥は、もう何も心配することはないとでも言っている様に思えた。そのため、

「……タキリヒメ、必ず勝って人と荒魂が共存する社会を創ろう!!」

美弥は、ソフィアの方へと向かって行くタキリヒメを激励することしかできなかった。

それを聞いたタキリヒメは、

（……お前は、尚も我を信じてくれるのか。）

自身がこの国を支配したい理由が、弱者救済や経世済民を建前にして支配者となり、この国を玩具の様に好き勝手にしたかっただけと本音を述べたにも関わらず、その弱者救済や経世済民という建前をタキリヒメが行おうとしていると美弥は本気で信じていたのだ。

（……まあ、あの場で言えば、違うように捉えられるだろうな。）

そういえば、自身がこの国を支配したい本当の理由を述べたときはソフィアが攻めて来るかもしれないときであったから、美弥はタキリヒメが自分だけを逃そうとしていたと感じてしまったのかもしれない。

（全く、こうなると、本当に建前を本当のことにしなくてはならんではないか……馬鹿者。）

何時の間にやら、ヘッポコ三流刀使だと思っていた美弥が、自分の本心をこうも変えさせてしまう程に成長するとは思わなかった。

それ故にタキリヒメは、臣下となった美弥の願いを叶えるべく、この戦いに勝とうと意気込むのであった。

それ故にタキリヒメは、刀使や荒魂を斬ったことがある御刀を渡すのは美弥に相応しくない。だからこそ、最期になる前に相応しい刀を渡せたことが良かったと思うのであった。

そして、自分に目的を与えてくれた市井の人達、自分を支えてくれた議員達、最期まで共に居てくれた美弥といった人達に逢えて良かったと。

「待たせたのう。……供の者と共に斬り掛かるか？」

「いいえ、私と貴女の一騎打ちです。」

「総大将同士の決闘など好まんと思うていたが。……案外、そういった部分も有ったのだな。」

「ええ、自分でも驚くほどに。……そして、荒魂である貴女に相応しい相手足らんと、私も冥加刀使となっております。」

美弥との話しを終わらせたタキリヒメはソフィアに近付くと、ソフィアに己の部下と共に一斉に斬り掛かるのかと尋ねると、ソフィアは自身もノロを身体に入れることで身体能力を強化した冥加刀使となっていると答えていた。

「これで私は貴女と同じ土俵に立てたと言えます。」

ソフィアが冥加刀使になったのは、自身の信条に添っただけにしか過ぎないのだが、どんなに人間を従えようとも、結局はお前は荒魂でしかないのだとタキリヒメを煽るために同じ土俵に立てたと述べたのであった。

「ふふん、我に合わせたというのか。妙なことにこだわるが、そんなお前が気付かなかったのか？お前が我を斬ればどうなるか。……荒魂を倒すためとはいえ、お前達は防衛省の市ヶ谷基地を攻撃したのだ。政府がお前達を逃すことはなく、直ぐに報復するだろう。それにだ、この国の国民から強い支持を得ている我を斬れば、お前達を支持する者は居なくなるぞ？」

しかし、タキリヒメはソフィアが起こした決起の問題点を指摘していた。

それは、ソフィアが国民から強い支持を受けているタキリヒメを斬れば、ソフィア側には国民から支持を得られないため、その隙を突く形で、この国の政府はソフィア達の行動を批判し、糾弾することは間違いないうえ、その国民と政府の支持が無い状態で兵の質と戦力差が大きく開いている刀剣類管理局と自衛隊の合同部隊を相手にせねばならなくなる。そうなれば、勝ち目は無いため、このままソフィアがタキリヒメを斬ってイチキシマヒメに取り込ませても、次の戦う相手となる刀剣類管理局と自衛隊の合同部隊を相手に勝ち目は無いと話すのであった。

「……それでこの私が踏み留まると?自分が〝ソフィア〟になったときから、この生き方を私は辞めることはありません。今からでも、その者に渡した三日月宗近を取りに行けば宜しいのでは?それなら、臆病風に吹かれたあなたでも戦う気が少しは起きるでしょう?」

だが、ソフィアはタキリヒメの問い掛けを命乞いと捉え、表情は笑みを浮かべたまま、タキリヒメに対して憎悪の炎を燃やすのであった。

臆病風に吹かれたのかと。羊に成り果てたのかと……。

「お前に命乞いが通じるとは思わんよ。……それにだ、今の我は三日月宗近よりも価値の有る物を手にしておるぞ。本体である荒魂から受け継いだ有名な大典太光世と今は無名ではあるが人の子である美弥から一振りの無銘の御刀を譲り受けておる。……この二振りの御刀を持ち扱うことができるのは、人も荒魂も生まれも関係無く等しく統べる我が持つに最も相応しいであろう!?」

ソフィアに臆病風に吹かれたのなら、美弥に渡した三日月宗近を取りに戻って、万全な状態で戦えるようにすれば、臆病風に吹かれたお前でも戦えるだろうと挑発されたタキリヒメは、自身の本体であるヒルコミタマから取った大典太光世と今は無名だが何時かは大成を成す人の子である美弥から渡された無銘の御刀を持つことで、人も荒魂も統べる者として相応しい姿になったとソフィアに返答することで、

敵に背を向ける意志は無いと力強く答えるのであった。それと同時に、

「それにだ。タキリヒメとして言いたいことは全て言ったつもりだ！後は霧を斬り祓う者として、困難から逃げることなく立ち向かうことで”タキリヒメ”という名は永遠に語り継がれることで遺り続け、我の名が悠久の時を経ても古ぼけた写真のように色褪せることは無いのだ!!……そうすることで、我は人も荒魂も支配するだけでなく、全ての荒魂が唯一恐れる死を恐れることなくなり、ただ一心に自らの大望に突き進むことができるのだ!それだけで我は死の概念すらも超越し、自らの死を支配することができ、我は万全な状態でお前に挑むことができるということだ!!」

　上記の理由を述べると、タキリヒメは自らの死を恐れることなく自らの死を支配下に置くことで、万全な状態で以ってソフィアに戦いを挑むことができると豪語するのであった。

「……なるほど。何も考えずに行動した訳ではないそうですね。」

「そうであろう?……であればだ。我が軍門に降るのであれば、今までのことはチャラにしてやるぞ。どうだ?我に付く気はないか?我はお前とその部下達を全てを迎え入れようと思っておる。」

　タキリヒメは自らの生命を脅かしているソフィアを前にして、市ヶ谷を攻撃したことを不問にし、しかも部隊長のままにするという好待遇を以って、自分の部下にならないか?とスカウトとされたため、ソフィアはタキリヒメの余りの破天荒ぶりに、予想外の行動に思わず高笑いしてしまった。

「アハハハハ!……私は貴女を此処まで追い詰めた張本人なんですよ?怒ったり、罵ったりしてくると思いましたが、まさか私を部下にしたいと言ってくるとは思いも寄りませんでした。」

「当たり前であろう?我はこの国を統べる者だぞ。我はお前と初めて会ったときに武力ではなく言葉で心服させるのが、霧に迷う者を導くと宣言したタキリヒメが行うべきことであると述べたであろう?だからこそ、そのためならば臣下になりたい者は誰でも臣下として我が幕閣に加えようといつも思っておるのだ!!」

高笑いをするソフィアに、決起に参加した冥加刀使は困惑の表情を浮かべるのであった。

もしかしたら、ソフィアは投降を決意するのではないかと。

「……ですが、その申し出を断らせて頂きます。私が求める物は栄誉でも地位でもありませんので。それに、私は同士と呼べる者は居りますが、友と呼べる者はもうこの世には居ませんし、彼等以外に作る気もありません。」

しかし、冥加刀使の杞憂はソフィアがタキリヒメの申し出を断ることで終わり、そのことに安堵するのであった。

「……ですが、私が〝ソフィア〟と名乗る前に出逢っていれば、その申し出を受け入れたかもしれませんが。」

ただ、ソフィアはタキリヒメにもしも自分が〝ソフィア〟と名乗る前であれば、タキリヒメの部下として働いていたと賛辞を送るのであった。

「そうか。己を貫くか……それだけで充分だ。」

タキリヒメはソフィアにそう述べると背中を見せ、ソフィアと一騎打ちをするために距離を空けるのであった。

だが、ソフィアの部下である冥加刀使達は背中を見せたタキリヒメに斬り掛かろうとするが、

「手を出すな！」

とソフィアに止められたため、冥加刀使達はタキリヒメに攻撃することを止めるのであった。

「……彼女は一騎打ちの申し出を受け入れてくれた。だからこそ、アレは私の手で直接倒さねばならないのだ！」

ソフィアにそう強く釘を打たれた冥加刀使等は構えを解くと、事の趨勢を見守ることにしたのであった。

だが、この社会を力によって変革したいと強く願っているソフィアとって、この国を支配することで絶対の秩序を創ろうとしているタキリヒメは越えねばならない存在でもあった。

「……では、刀使と共に歩むタキリヒメ様を相手にするのは、荒魂の力を求めたこの私がお相手致します。」

ソフィアはそう言った瞬間に、迅移を使ってタキリヒメに斬り掛かって来たため、タキリヒメはソフィアの刃を両手に持つ二つの刀で受け止めると、刃同士の金属の音を鳴らすのであった――――。

支配のタキリヒメ

「……では、刀使と共に歩むタキリヒメ様を相手にするのは、荒魂の力を求めたこの私がお相手致します。」

ソフィアはそう言った瞬間に、迅移を使ってタキリヒメに斬り掛かって来たため、タキリヒメはソフィアの刃を両手に持つ二つの刀で受け止めると、刃同士の金属の音を鳴らすのであった――――。

「写シも張らずに来るとは、気が狂っておるのか、我を相手に舐めて掛かっておるのか!?」

「いいえ!これは私のポリシーです。……闘争は己の血をも流すことで、深い傷を負って挑むことで美しくなるのですから!」

タキリヒメに写シも張らずに挑むのは、舐めて掛かっているのかと尋ねられたソフィアは、これは私の信条であり、自分なりの相手に対する賛辞でもあると答えるのであった。

……闘争の果てに在るであろう〝救い〟を求めたソフィアであるからこそ、そう答えることができた。

「そうか!ならば我も、この国を覆う霧に挑むことで、２０年前の大荒魂すら超えた者として現世(げんせ)であろうが、現世(うつしよ)であろうが我の名を刻み、タキリヒメという名を永遠に自分の物にしたいからな!!」

その返答を聞いたタキリヒメは、同じ何かに挑む者としてソフィアに賛辞を送るのであった。

……人も荒魂も生まれも関係無く等しく統べる者になると決めたからこそ、受け止めて賛辞を送った。

そして両者の戦いは、互いに数度の剣同士がぶつかることによって生ずる火花が舞い、剣戟の音によって奏でられ、その激しさを増していったのである。

タキリヒメはヒルコミタマから取った大典太光世と美弥から譲り受けた無銘の御刀、それぞれ荒魂と人から譲り受けた二本の御刀で紫から学んだ二天一流を繰り出していた。

一方のソフィアも数珠丸恒次を持ち、無住心剣術の教えにある刀の長さなどにはあまり拘らず、生まれついた純真な赤子の心を持ち、自然と感じたところ、落ちるべきところへ刀を落とすだけという教え通りに、ただ自らの信条と自らが感じた心のままに剣を振るうのであった。

（……我は霧に迷いし者を導く者と、２０年前の大荒魂を超える者として、この世を統べる者としてタキリヒメと名乗った。故に、臣下との約束は守らんとな！）

臣下との約束を守るために戦うタキリヒメ。

（人は戦いを前にすれば、その者の真価が見える!!故に、私は戦うことを辞めない!!）

そして、自らの信条を曲げる訳にはいかないソフィアとの両者の戦いは激しさを増すばかりであった。……しかし、ソフィアは事前にイチキシマヒメと木刀で打ち合うことで龍眼の弱点である集団戦に弱いことと、それともう一つの弱点でもある〝意識を向けさせる〟ことに気付くのであった。

このもう一つの弱点である〝意識を向けさせる〟ことと云うのは、可奈美と優の戦闘を例に挙げると、可奈美は優に〝手合わせ〟という申し出を受けさせることで純粋な剣術勝負へと持ち込ませることにより、近代兵器や対刀使用の矢を使うことができない状況へと持ち込ませるだけでなく、結芽の遣う天然理心流が連撃が多いといった非常に攻撃性が高いという特性をも利用し、優に〝先に仕掛けるという意識〟へと誘導させることで〝無理矢理にでも先に仕掛けることで状況を突破する。〟という意識へと固定化させることで、思考の幅を狭め、先に攻撃させることで、その単純な攻撃となった優の刀を柳生新陰流の「後の先」で勝利しようとしていたのと同じ様なものである。

……仮に戦闘が実現していれば、刀に乗って捌く柳生新陰流の「合撃（がっし）」が決まり、可奈美は優に勝っていた。

（※さらに分かり易く、アニメ刀使ノ巫女を参考にすると、アニメ２１話の可奈美が雷神の力を得た姫和を斬ったのと同じやり口である。可奈美は、諸々の事情で余裕の無い姫和に対して「今でやっと自分と

互角」と煽ることで〝先を取ることに意識を向けさせる仕掛け〟となり、その挑発に乗るしかなく、余裕も無かったがために可奈美は姫和の意識を〝先に仕掛けさせる〟ということを優先させるように仕向けることに成功し、この状況下において目が良く、後の先を取ることを得意とする可奈美は、姫和の攻撃の兆しを逸早く察し、僅かに早く動く事で姫和の雷速の打ちを捌いた。というのと似た様な物である。）

（実際、アニメの可奈美と姫和の対決のシーンの際は、姫和は縦横無尽に且つ真っ向に切り下ろすといった力技が多く見られるのに対して、可奈美は最初の位置から全く動かず、縦横無尽に攻めてくる姫和に対し、向きを変えるという最小の動きだけで応じているという違いがある。尚、神無月久音先生は、この時の可奈美の戦い方を「相手を動かし、これに乗って勝つ」新陰流の「活人剣（かつにんけん）」と捉えており、相手の動きに随って転変し、仕掛ける「転（まろばし）」の理の通りとも述べている。……それでも分からない人は、アニメ刀使ノ巫女２１話の可奈美と雷神の力を得た姫和の対決シーンで見せた動きと神無月久音先生のツイートを見てみよう!!）

そういった龍眼の弱点をイチキシマヒメとの打ち合いで知ることができたためか、それとも刀使と荒魂の融合は乗算である故か、次第にタキリヒメは圧され始め、左腕が飛ぶのであった。

「タキリヒメ!!」

タキリヒメの左腕が宙を舞ったことに、美弥が悲痛な叫び声を上げる。

だが、ソフィアは、

（……何故だ？）

龍眼という未来視で躱せる筈なのに、タキリヒメが躱さなかったことに疑問を抱いた。

そして、それが罠であることに気付くのが遅かった。

「もらった!!」

左腕を斬らせたのは、タキリヒメの罠であった。

刀を振り抜いたことで隙だらけとなったソフィアは、タキリヒメの

斬撃を左腕に深く受けてしまう。そのため、ソフィアは左手に力が入りくくなってしまったのか、それとも左腕の傷の痛みで集中が途切れることを恐れてか右手だけで御刀を握るのだが、タキリヒメの続く二度目の真っ向からの切り下ろしによる斬撃をソフィアは数珠丸恒次で払い除けようとするが、これもタキリヒメの罠であった。

タキリヒメは美弥から聞いた鞍馬流の技の一つである『巻き揚げ』という技を使って、ソフィアが右手に持つ数珠丸恒次を右手が曲がり辛いところへと持って行くことで、ソフィアの右手から数珠丸恒次を放すことに成功したのである。

「……左腕をわざと！」

「美弥から借りた刀を返す時に、血で穢す訳にはいかんからな!!」

タキリヒメがわざと左腕を斬らせた理由はソフィアの隙を作ることもそうだが、美弥から借りた御刀を左腕に持っていたため、戦いの後で返すときにソフィアの血が付いている物として返したくなかったがためにわざと左腕を斬らせることで、タキリヒメの手許から離すことにしたと同時にソフィアの隙を作ることに成功したのである。

美弥から借りた御刀を血で穢す訳にはいかないという理由だけのために左腕を難なく犠牲にしたと公言するタキリヒメにソフィアは仰天しただけでなく、今や御刀を手に持たないことに臆したのかバランスを崩し、後ろに下がりながら身を屈めることになってしまったソフィアを見たタキリヒメは勝利を確信し、大きく振りかぶってソフィアの額を狙って振り下ろす――――。

……ただ勝利のみを信じ、我を忘れ、龍眼を使わず、勝利を求めた末の行動であったことにタキリヒメは気付くことなく。

「……ぐっ！」

しかし、左腕を斬られたことで左手の力が入りにくくなっただけであり、動かせない訳ではない。

ソフィアは防刃グローブを着用していたため、振り下ろしてきたタキリヒメの御刀を立ち上がると同時に左手の掌でどうにか押さえる

と(この際、写シを張っていなかったからこそ両断されずに済んだが、代わりに左手の骨は折れていた。だが、ソフィアは歯を食いしばることでどうにか痛みを堪えていた。)、手に触れた大典太光世の力をソフィアの身体の中にある荒魂の力、冥加刀使の力を使って得ることができたため、そのまま続いて右半身をタキリヒメの懐に滑り込むように入り込むと同時に左手を下に下ろすことで、タキリヒメの懐に入り込むと、そのままタキリヒメが持つ大典太光世の柄の部分を右手で掴むのであった。そして、その右手を時計回りに回すと同時に下に下ろしていた左手を掬い上げるように上げる。そうすることで、ソフィアはタキリヒメが持つ大典太光世を奪い盗ることができたのである。

そして、そのままソフィアは右足を後ろに回して、左半身を前にすると奪い盗った大典太光世で身体ごと前進し、タキリヒメの鳩尾を深く突いたのであった。

「……これで勝負ありです。」

ソフィアが身を屈めた理由は、タキリヒメよりも背を低くすることで振り下ろす攻撃にするよう誘ったのである。

そうして、防刃グローブでタキリヒメの攻撃を左手の掌で押さえ、右手でタキリヒメが持つ柄を掴んで時計回りで回すことで奪い盗ると、そのままタキリヒメの鳩尾を深く突くのであった。

「……全く、次から次へと珍妙なことを。」

「私は、自らを確立するために〝ソフィア〟であらねばなりませんので、故にこんな手も使います。それに、防刃グローブが無くとも切っ先三寸でなければ掌底は斬れません。……卑怯だとお思いですか?」

「いいや。……我の敗北には変わりない。それを見切れなかった訳だからな。……我もアイツのことを馬鹿にできん……まだまだ……だな。」

タキリヒメはソフィアが防刃グローブを使っていたことに珍妙な手を使うと言ってきたことに、ソフィアは卑怯かと聞き返すが、タキリヒメは自身の力不足であると答え、敗北であると素直に認めるのであった。

「……何か言い残すことはありますか?」

「いいや、何も。……我が言いたいことは全て言った。我は背中を見せることなく挑み続けた以上、全てを統べるタキリヒメの名は永遠にこの現世に残り、悠久の時を経ても我の名は後に続く荒魂の中へと入ることとなるであろう。……悔いなぞ無い。」

タキリヒメは、ソフィアに対して何も言い残すことは無いと返答するのであった。

「そうですか。……私が〝ソフィア〟と名乗る前であれば、貴女の臣下となっていたという言葉は、今まで嘘を並べて生きていた私にとって、初めて包み隠すことなく本音を言いました。……それだけは、嘘偽りではないことを理解してください。」

「……そうか……それは、残念だったな。」

ソフィアの自分の名を騙る前であれば、タキリヒメ側に付いていたと嘘偽りなく、穏やかな声で答えていた。それに対して、タキリヒメは残念そうに答えるのであった。

もしも、〝ソフィア〟に出逢うことが無ければ違ったであろう――。

もしも、〝ソフィア〟の復讐という目的が無ければ違ったであろう――。

そんなことをつぶさに思いながら、悔やみつつソフィアはタキリヒメを更に深く、刺し貫くのであった。

「……いずれまた会えます。〝ソフィア〟で無くなった時には。」

「ああ、臣下にさせてやる。」

「……ありがとう。」

タキリヒメの「臣下にさせてやる。」という言葉を聞いたソフィアは、柔和な声で、優し気な笑顔でタキリヒメに「ありがとう。」と返すと、後ろに下がると同時に大典太光世を引き抜くのであった。

それと共に、血が流れたかのように純度の高いノロが流れるのであった。そして、斬られたタキリヒメは美弥の方に少し顔を向けると微笑みながら、純度の高いノロの塊へと還って逝った。

「!!……うっ。」

それを見た美弥は、拳を強く握り締めることで涙を堪えていた。泣

いてしまえば、タキリヒメを後悔させてしまうから、泣く訳にはいかなかった。

故に、嘘でも渡された〝三日月宗近〟の様に強く在らねばならなかった。

「来い！静!!」

「はいはーい。」

そうして、元はタキリヒメであった純度の高いノロの塊から、視線を外すように背を向けたソフィアに大声で呼ばれた静は、パタパタと純度の高いノロの塊に近付くと、手をかざしてタキリヒメであった純度の高いノロの塊を吸収するのであった。

そんなときソフィアは、綾小路の制服を身に纏い、タキリヒメが持っていた三日月宗近を大事そうに抱える美弥が居ることに気付き、何をしているのかと尋ねるのであった。

「……そこのお前、何をしている？」

「お前じゃない。タキリヒメの一番の臣下だよ。」

ソフィアにお前と呼ばれた美弥は、睨みつけるようにソフィアを見ていた。

「そうか。なら、臣下であるお前は私を斬るべきではないのか？」

「……それはできない。タキリヒメより弱い私がお前に立ち向かえば、ただ殺されるだけだ。」

「当たり前だ。」

「だからできない。……タキリヒメは最期に私の親友の歩の願いを聞き届けるために、それだけでなく、タキリヒメがこの荒魂に対して冷たかった世界に挑んだということを皆に聞かせるために、私はタキリヒメに『生きろ。』と私に初めて……臣下として命じてくれた。それを無駄にして、あの人の願いを無下にすることなんてできないから、私はお前を斬らない……！」

親友である歩との約束を守りたいというタキリヒメの願いを守るために、初めて臣下として命令してくれた『生きろ。』という命令を守るためにソフィアに斬り掛からないと答えるのであった。

……しかし、美弥に写シを斬られた冥加刀使が目を覚まし、意識が

ハッキリとすると美弥に斬り掛かろうとしていた。
「お前ッ!!よくも私を「止めろっ!!」」
だが、ソフィアが制止することで、その冥加刀使は矛を収めるのであった。
「……分かった。ならば、その命を果たせ。……皆、作戦は成功した！増援が来る前に帰投するぞ!!」
静がタキリヒメのノロを全て吸収したことを確認したソフィアは撤収の命を発し、その命を受けた冥加刀使とヘリ部隊は撤収するのであった。
……そして、
「良い主君を持ったな。その主君に恥を与えぬよう、精進することだ。……それを忘れるな。」
部隊が撤収したことを確認したソフィアは、先程までタキリヒメが居た場所に後ろ髪を引かれる思いを抱きながらも、どうにか振り切って自身も撤収するのであった。
（……初めてだ。初めて人を斬った気分しかしない。）
そしてソフィアの内心は、自身が望んでいた生まれや出自に関わりなく活きられる世界と似たことを本気で述べていたタキリヒメを斬ったことに後悔し、タキリヒメの影響によって、その心は〝ソフィア〟という顔が剥がれかかり、ただの〝少女〟になりかけていた。
そうして、ソフィア達が撤収した後は、美弥だけが残っていた。そんな中で、美弥は、
「……うっ……ぐす……。」
ただ一人、頬を濡らし続けると共に、覚悟するのであった。
これからは一人で、このタキリヒメが渡してくれた三日月宗近のように美しく、強く在らねばならないと。

――――その一方、丹沢山に現れた荒魂の討伐の数日後。

可奈美達は、夜見との死闘の後に気絶した優の意識が戻ったということを聞き、今は眠っている優の病室にて可奈美達は、目が覚めるまで待っていた。

「――――ん。」

そのとき、優の目が開いたことに気付いた姫和と可奈美は感極まったのか、目に涙を浮かべ、無事であることを喜ぶと抱きつくのであった。

「優ちゃん！」

「……痛いよ。おねーちゃん。」

優が可奈ねーちゃんと呼ばず、おねーちゃんと呼んだことに気を留めることなく可奈美は咽び泣いていた。

「……よかった。意識が戻って。」

「無事だったんデスね。ユウユウ。」

舞衣とエレンも見舞いに来ており、優の意識が戻ったことに二人は素直に喜んでいた。

「何時までもグースカ寝やがって、あんま可奈ねーちゃんとねねを心配させんじゃねーぞ。」

「でも薫が一番心配して……痛い痛い。」

「ねねー！」

そして薫は、可奈美とねねが泣くから無茶はするなと言うが、沙耶香に薫が一番心配してたことを指摘されると薫に頭をグリグリされるのであった。

「……ええと、初めまして。」

……しかし、優から思いも寄らない返答が返ってきたことに可奈美達は動揺するのであった。

「お、おいおいお前。別にそんなかしこまらなくて良いんだぜ!?別にお前は悪くねーからよ。」

「そうデース。薫はユウユウを責めてはいませんカラ。薫、ダメデスよー。」

薫とエレンは、恐らく薫の言い方が悪かったのだろうと思い、気に

することは無いと述べるのだが、
「ええと……誰ですか？」
薫とエレンのことを誰なのか分からないと答えるのであった。
冗談やふざけて言っているようには見えないうえ、ある種の恐怖を感じ、薫とエレンは息を呑む。
「優。……分かる人居る？実は私達は可奈美の昔からの友達で小さい頃から優のことを知っていたから、それで私達は大怪我をしたってことで見舞いに来たんだけど。……知っている人居る？」
沙耶香はもしやと思い、あることを尋ねるのであった。この部屋内に知っている者は居るかと。
「ああ、そーなんだー。……ゴメン、可奈美おねーちゃんと姫和おねーちゃんしか知らないや。」
そうして、優は申し訳なさそうに答える。
可奈美と姫和以外の人は知らないと。それ故に、舞衣と沙耶香、それだけでなく薫とエレンのことが誰のことなのか分からないと答えるのであった。
……それだけでなく、優はベッドから立ち上がろうとするが、転げ落ちてしまう。
「…痛っ……つう。」
「優ちゃん!!?」
「おっ、おいおいおいおい、あんま無理すんなよ。まだ病み上がりだろーが、何か欲しい物が有ったら俺が代わりに行ってやるから、な？」
まだ完治していないのに立ち上がろうとする優を宥めようとする可奈美と薫。だが、優の次の言葉に驚愕することになる。
「……足が、動かないや。」
「!!」
優はもう己の足で立ち上がれることすら、出来なくなっていた――。

人の境目

――――時は戻り、丹沢山での荒魂騒動が終結した後の刀剣類管理局仮野営所にある野戦病棟。

真希と寿々花は、丹沢山での荒魂騒動で受けた負傷により、野戦病棟に移送された治療中の部下達に労いの言葉を掛けるべく訪れていた。

「……あっ！真希隊長!!」

野戦病棟にあるベッドで寝ていた刀使が、真希の姿を見るや立ち上がろうとする。

「皆、起きなくて良い。寝たままで。」

しかし、真希は隊員達を不安にさせないよう笑顔を向けると同時に、寝たままで良いと手でサインを送ることで、療養中の刀使達をベッドの上に寝たままにさせていた。

「ケガは大丈夫か？」

頭に包帯を巻き、腕にギプスを装着している刀使は、何度も包帯を取り替えられているのか、彼女のトレイには血の付いた包帯が幾つもあった。

「ハイ！」

「危険な任務をよくこなしてくれた。腕のケガを治し、次も鞍馬流の華麗な『変化』の技を”仲間”達に見せてくれ。」

「……ハイ！真希隊長等が居られる原隊に戻るのが待ち遠しいです!!」

しかし、腕にギプスを装着している彼女は身体の至る所に包帯を巻くほど負傷しているにも関わらず、大きな声で元気良く真希に返答していた。

理由は、大会二連覇を成し遂げ、今も第一席で活躍中の真希に、自分が鞍馬流の遣い手であることを憶えてもらっているということに感激し、負傷しているにも関わらず直ぐに原隊に戻りたいと本気で

思っていたからである。
「困難に恐れず、今も立ち向かおうとするその姿勢は物語に出てくる英雄そのものだ。君という英雄を部下に持てて誇りに思う。……今は英気を養い、怪我を治すことに専念しろ。」
「ハイ!!」
　真希は頭に包帯を巻いている彼女に「君という英雄を部下に持てて誇りに思う。」といった声援を送ると、寿々花と共に他に負傷している刀使の元へと向かう。
「具合いはどうかな?」
「自分は足をやられましたが、一刻も早い原隊復帰を望みます。」
「……君は小野派一刀流の真っ向から切り伏せる力強い技に僕の”仲間”も頼りにしていると聞いているが、それには足腰の力が重要だ。だからこそ、今は英気を養い、怪我をした足を治せ。」
　この刀使が療養中なのは、写シを剥がされたところを犬型の荒魂に足を噛まれたからである。一時は、荒魂が動物を食べるという習性から、野生動物にある寄生虫やら菌が犬型の荒魂の歯に付いていることもあるため、その菌の毒によって足を切断しなければならない事態になるかもしれないと思われたが、治療が上手く行き、足を切断せずに済んだのであった。
　そのことを踏まえながら、先ずは治療に専念するようにと真希はベッドに横たわる刀使に言っていた。
「ありがとうございます!必ずや復帰して、仲間達のために一層の奮闘をします!!」
「ああ、素晴らしい闘争心だ。……私としても早い復帰を期待するが、無理はするな。無理をして、また病院のお世話になるのは嫌だろう?」
「……分かりました!!」
　真希の「無理をして、また病院のお世話になるのは嫌だろう?」というジョークに野戦病棟のお世話になっている刀使達等はドッと笑いを漏らしてしまう。その光景に、真希も刀使達等も緊張が解れていくのであった。……しかし、

「嫌だ！もうイヤ!!……寝ても覚めても赤子の声が聴こえる。……助けて、助けてよ、ママ、パパ!!」
　何処にも負傷していない刀使が居た。
「……彼女は何ですの？ケガをしておりませんけど？」
「彼女はストレスによる戦闘神経症です。ずっとこの調子で、食事にも手を付けません。」
　寿々花がケガをしていないにも関わらず、野戦病棟のベッドを一つ使っていることに訝しんでいるように見せていた。そうして、衛生科の医務官からの戦闘神経症の説明を聞き終えるや否や、
「この臆病者がっ、精神病を装っていれば任務から逃れられとでも思っていたか!!」
　一歩足を踏み出し、戦闘神経症の彼女に対して、鉄拳を一つお見舞いしていた。
「仲間は貴女の代わりに傷付いているんですのよ!!今直ぐ部隊に戻りなさいっ！戻らない場合は機動車に括りつけて弾除けとして使い切って差し上げましょうかッ!!どうなんですのッ!!?」
　尚も彼女を殴打しようとしている寿々花を止めようと、衛生科の人間が抑えていた。
「寿々花隊長！お止めください!!」
「戦えないのでしたらっ!!せめて戦える者の肉壁になるか弾除けになってお役に立ちなさいッ!!!」
　そうして、パニックが起こるが、
「止めろッ！寿々花っ!!」
　真希が大声で怒鳴ると野戦病棟はシンと静かになるのであった。
「……医務官。彼女は殴打された。別の病棟へ移すべきだ。」
「ハッ？……ハイ!!」
「それと寿々花、外で頭を冷やしてこい。僕も後で外に出る。……皆は治療を専念するように。」
　それだけ言うと、真希と寿々花は外に出ると、医務官等は真希の指示通りに神経症の彼女を別の病棟に移すのであった。

――野戦病棟の外で真希と寿々花は言い争っていた。
「全く、他に手はあるだろうに。」
「ですが、それが最善の方法であると思いますわ。」
「……君だけ悪役じゃないか？」
そう、野戦病棟にて起きた一騒動は、赤子の荒魂との戦闘の影響によって戦闘精神病となった彼女達を隔離すると同時に恐怖が周りの者に伝染しないようにすることで、戦闘精神病の人間が増えないようにしていたのである。
「私だけ悪役ではないと？」
「……そうだな。僕も『英雄』だとか、『期待している。』とか言って、彼女達を死地に追いやろうとしている死神だな。」
「それに、『仲間のため』という絆も利用しましたものね。」
それだけでなく、真希が〝仲間〟という言葉を強調して話すことで『女の友情』を利用して戦場から逃げないようにしたり、負傷を怪我と言い換えることで大したことではないと彼女達に思い込ませることで早期の原隊復帰を真希と寿々花は狙っていたのである。
「……だったら僕の指示を聞いてもらおう。それでも刀使を辞めたいと希望する者は叶えてやれ。部隊から離れた刀使が所有していた御刀はその次に適合率が高く、中等部の者を優先的に譲渡。」
「……何故、中等部の者に優先的に譲渡するんですの？」
「年若い方が適合率が高いというのもあるが、新型Ｓ装備は若い脳の方が直ぐ習熟するそうだ。」
つまり、真希は戦力の減衰を理由に新型Ｓ装備の追加とそれに直ぐ習熟した兵の確保を優先的にするということであった。
「ああ、なるほど。つまりは、新型Ｓ装備を当てにすると。」
「……こうなれば、致し方あるまい。」
「分かりました。そのように報告しておきます。」
「頼んだ。」
こうして、真希と寿々花は新型Ｓ装備の追加発注を申請する。
そして、真希の報告書を見た刀剣類管理局本部は戦力の減衰による荒魂事件の対応力の低下が露見することによって、国民からの支持を

失うことを恐れたのか、それとも真希達に戦力が集中していくのを恐れ、曲解したのか、追加発注された新型S装備は中等部の戦力の早期拡大を目的とする理由で伍箇伝全体に配備されることが決定された。

……つまりは、綾小路側も新型S装備を得ることができ、変革派とソフィア達の手に渡ることになってしまったのだった。

それだけでなく、寿々花が精神病患者に暴行を加えたことが問題視され、一定期間の停職処分を受けることとなった。

「……だが、処分を受けたら、解っているな？」

「ええ、第二席としての職務は果たします。」

……しかし、停職処分を受けることは寿々花の計算の内であったことは誰も気付くことは無かった。

――――時は戻り、タキリヒメがイチキシマヒメを取り込んだ静にノロの塊として吸収されたその一週間後、薫達は。

「……というわけで、都筑区に現れた荒魂の討伐を完了。ノロも回収しまシタ。」

エレンと薫は刀剣類管理局本部にて、都筑区に現れた荒魂討伐任務の報告を紗南と朱音に行っていた。

「怪我人無し、装備の損傷も軽傷デス。…以上、報告終わりマス。」

「そうか。……ご苦労だった。」

エレンからの報告を聞き終えた本部長の紗南は、ご苦労だったと労いの言葉を掛ける。

紗南から労いの言葉を掛けられたエレンは、紗南に対して一礼して退室しようとすると、入室してから紗南と対面することなく不満を表しているのかそっぽを向いたままの薫に気付いた。

「……薫？」

エレンの言葉の後に、薫は無言で紗南に目線を合わせるのであった。

「……。」
「……何だ?もう下がって良いぞ?」
「他に言うことは無いのか?」
「労いの言葉なら、さっき掛けただろう?……特別手当や休暇なら「違うっ!!」」
薫の「他に言うことは無いのか?」という言葉に、紗南は特別手当や休暇の申請なら受けないと言ってはぐらかそうとするが、薫は机を『バンッ!』と音が鳴る程に力強く叩いて否定するのであった。
「違う!市ヶ谷が襲撃されて、もう1週間だぞ!その間、俺達の任務といえば通常の荒魂討伐ばかりってのはどういうことだ?もう当たりぐらいは付けてるんだろ?!」
「どうした?いつになく仕事熱心じゃないか?」
夜見を改造し、丹沢山周辺に一騒動を起こし、その鎮圧のために大部隊を向かわせた隙に市ヶ谷を襲撃した連中の目途は付いているのだろうと紗南に直談判する薫。その薫に紗南は珍しく仕事熱心だと言って、はぐらかそうとする。
「……こっちは優があんな状態。それだけでなく、ねねもエレンもやられたんだ。……借りは返さんと、俺の気が済まん。」
「ねー!!」
「連中の居場所、当たりぐらいはついてんだろ?」
仕事熱心だと言われた薫は、その理由を述べるのであった。
優は病室から出られないほどに衰弱。それだけでなく、夜見もねねもエレンも、そして可奈美達が傷付いた落とし前を付けなければ、納得が行かないと話し、薫は紗南にソフィア達の居所を詰問していた。
「……情報なら入り次第伝える。」
紗南は、薫から視線を外しながらそう答える。
紗南がこう述べた理由は、現在の刀剣類管理局の状態は、先程薫が言っていた通りに一大戦力である優が戦闘を行える状態ではないうえ、丹沢山周辺で現れた荒魂討伐に参加した刀使の中には赤子の姿と声に似ていることで赤子を殺すという疑似体験をさせるかのように造られたとしか思えない赤子の荒魂、逃げ遅れた登山客が赤子の荒魂

に取り憑かれたことにより荒魂化した人間と対峙したため、心的外傷が深刻な者が少なからず現れ始めたことにより、部隊の再編と作戦に参加した者達の心的ケアといっただけでなく、丹沢山周辺にもう赤子の荒魂とそれに釣られた荒魂が居ないかを真希と寿々花の両名が休みなしに観察及び、部隊の再編制の事務もしていたため、綾小路にとても向かえる状況ではなかった。

「……そうか、じゃあ優にあんな症状出たのは知っててやったのか？」

「……それはこちらも想定外だったと伝えておこう。」

しかし、それを聞いた薫は、紗南に優のことを尋ねると優のことについては想定外であったと紗南は薫を視線に入れながら答えるのであった。……そのため、薫は紗南を問い詰めるように紗南のことをジッと睨むのであった。すると、一刻ほどの静寂が辺りを包む。

「……チッ。」

しかし、薫は舌打ちをすると無言のまま紗南から離れると、エレンも紗南に向かって一礼をしてから、薫の後に続く形で、紗南と朱音が居る作戦室から退室して行くのであった。

「焦りを感じてるのでしょうね。彼女達も、私達と同じように……。」

「お恥ずかしい限りです。……タキリヒメを取り込んだということは残りのイチキシマヒメも奴等の手の内にあり、綾小路も市ヶ谷の基地を襲撃された政府も不気味なほどに何の動きも見せないのは、やはり……。」

「……不気味、ですね。」

紗南としては、綾小路の刀使達が市ヶ谷基地を襲撃したという報告を美弥から聞いており、その報告を以って綾小路を政府も糾弾すると思われていたが、官房長官も現総理も待機命令のみしか下さなかったこと、綾小路側も何の行動も起こさなかったことに朱音と同じくある種の不気味さを感じていた。

「……とはいえ、こちらの現状も芳しくないというのが事実ではあります。」

「衛藤さんと十条さん、それに優くんと丹沢山に出動した隊員達のことでしょうか？」

「ええ……。」
朱音の言葉に、紗南は可奈美達と優のことについて思い出していた
――――。

――――病室にて、舞衣達のことを憶えていない優がどのような状態かを可奈美達は、フリードマンから直接話しを訊いていた。
「フリードマンさん！何で優ちゃんは舞衣ちゃん達のことを……！」
「……それには、先ず優くんはスレイドが行った研究……タギツヒメが言うには、タギツヒメとの融合だけでなく、投薬や暗示によって戦闘能力を上げていたというタギツヒメの話は憶えているかい？」
今現在の優の状態について、可奈美に詰問されたフリードマンは優がタギツヒメと融合できたのはスレイドの研究の成果であり、それだけでなく、投薬や暗示によって殺人に対する抵抗力を無くすことで戦闘能力の向上を図っていたとタギツヒメが話していたことをフリードマンは先ず説明していた。
「しかし、しかしだ。……もしも、この暗示と投薬の目的が戦闘能力の向上だけでなく大荒魂でもあり、純度の高いノロの塊でもあるタギツヒメを入れるために必要な措置であったとするならば、どう思う？」
だが、今回起きた優の症例から発覚したこと、スレイドが行った投薬と暗示は殺人に対する抵抗力を無くすためだけではなく、実はタギツヒメという大荒魂を入れるために必要な措置であったのではないかと話していた。
「つまり、どういうことなんですか!!」
それを聞いた可奈美は、どういうことかとフリードマンに詰め寄るのであった。
「……それを説明するには先ず、人体にノロを入れると負の影響が大きいことは知っているね？」
フリードマンの話を聞いていた可奈美は、丹沢山にて強化された夜

見の姿を思い出すと、力強く頷くのであった。
「無論、それだけでなく荒魂の力や龍眼といった超常の能力の制御。異物が入ったことによる身体への拒否反応といった人体への悪影響もある。それらの問題点を改善するために投薬や暗示によって抑える必要があったんだろうね。……つまりは、タギツヒメを入れることによって生ずる人体への悪影響を抑えるための投薬量しか優くんには投与してなかったんだ。」
「……それって、つまり。」
「……今回も丹沢山で現れた荒魂を討伐し、優くんはそれらを吸収した。それで薬や暗示でどうにか抑えていたバランスが一気に崩れてしまったんだろうね。」
フリードマンの説明を聞いた可奈美は、４ケ月前の鎌倉での出来事にて紫に取り憑いていた大荒魂のノロの大部分を吸い取っただけでなく、夜見の体内に有るノロも取り込んだことで、投薬や暗示によって抑えていた許容量を越えてしまい、荒魂の制御ができなくなったのだろうということを理解した。
「……それと、丹沢山で現れた荒魂を吸収する前の優くんに異常は無かったかい？例えば、いつも飲んでいる飲料に加える砂糖の量が急に増えたとか。」
姫和はそれを聞いて、思い出していた。
『……うん、何だか。お砂糖の量を増やさないと味が、……ううん、何でもない。やっぱり、良くないことかな？』
……最近、いや、鎌倉での出来事の後の優は、自分が飲む紅茶に入れる砂糖の量が確かに増えていた。
既にあの時から、身体が壊れ始めていたのだ。
「……。」
それに気付いた姫和は、呆然としていた。
……結局、自分は何一つ気付いてやれなかったことに。
「フリードマンさん！治せないんですか!?」
悲しんでいる可奈美の様子を見た舞衣は、どうにか一筋の希望を見出したく、優を治す手段は無いかと尋ねるのであった。

「……残念だが、今の我々にはスレイド以上に人体と荒魂の融合に関して精通した人は居ないんだ。だから荒魂に対する苦痛を抑える投薬の量を少しでも間違えれば、優くんの寿命は大きく削られ、生きていられる時間が減り、味覚障害、記憶障害も進行するかもしれない。だから、下手に手を加えることができないんだ。」

つまり、今のフリードマンや刀剣類管理局では、荒魂と人体の融合に関する研究がスレイドよりも劣るため、下手に投薬で抑えることができなかった。……それ故に、打つ手が無かった。

「だが記憶を失った理由は恐らく、丹沢山でも自身の身体のノロの侵食率を上げたことが大きな要因だろう。……調べてみたら、脳の部分までノロが侵食していたんだ。」

先程の夜見との戦闘で、優は脳内麻薬を多く分泌させるために体内にあるノロを脳まで侵食させたことが原因であるのだが、フリードマンは優のそういった心理まで読み解けなかった。だが、フリードマンの言う通り、優は自身の脳までノロを侵食させたことで脳の記憶領域に障害が発生し、可奈美と姫和以外の人間のことを忘れてしまったのである。

「それと、自身の身体の中に有るノロを更に侵食させたせいか、更に荒魂化が進んだことでねねと同じように胃袋が隠世に繋がってしまったんだ。……今の優くんは点滴で直接注入するしか栄養補給が出来ない。」

更に優は、足が動かなくなり、記憶障害が出ただけでなく胃袋が隠世と繋がってしまったことによって点滴でしか栄養補給が出来ないようになってしまったのである。

……点滴による栄養補給は微々たるものである。そうなれば、優はやつれていく一方なのだ。

「何とか……なんとかならないんですか!?」

姫和は俯きながら、叫ぶようにフリードマンに詰問する。

もうチョコミントアイスを美味しいと言ってくれないかもしれない。そうなれば、優との繋がりが無くなり、自分は孤独になるかのような気がしたから、姫和はフリードマンに詰問した。

「……先程も言った通り、適切な投薬量を入れれば症状を抑えられるかもしれないけど、それでも薬を入れていることには変わりないから、寿命を減らすことになる。僕としては勧めることはできない。……可能な限り心身のストレスを与えないこと、ぐらいしか無いだろうね。」

フリードマンの無慈悲な宣告に、可奈美達は閉口し、刻が止まったのではないかと思える程に静かとなるのであった――――。

――――対策も取れぬまま、その数日後。目の下にクマができていた姫和は、監視カメラが映すテレビ画面から眠っている優のことを見つめていた。

見つめていた理由は、姫和が優に好物のチョコミントアイスを贈ったときのことを思い出していたからであるからか、そのことばかり考え込んでいた。

……それと、今の優の状態を鑑みてか、今は可奈美と姫和だけでなく、現場に居合わせた歩も面会が可能となるほどに監視が緩くなっていた。

このことに、姫和はコロコロと変わるものだと、この行為自体が刀剣類管理局が混乱している証拠だな。と刀剣類管理局に対して憤慨はしていたが、管理局や政府の本当の狙いはソフィアとの戦いを想定して、戦力を確保せねばならない時期であったからこそ、可奈美と姫和に優との面会が可能な様に取り計らったのだが、そのことに可奈美と姫和はまだ気付いてさえいなかった。

とはいえ、姫和はどんな形であれども、優の近くに行けることに喜び、チョコミントアイスを持って向かって行った時のことを思い出していた――――。

姫和がチョコミントアイスを持って行ったのは、フリードマンの説明から優が苦しんでいることを聞き、優に好物を与えることでその辛さを緩和させたかったのだが、本音は優が自分と同じ物を美味しいと言ってくれたことに〝繋がり〟を感じ、その〝繋がり〟を失いたくないがために持って行っただけであった。

『優ー！持って来たぞー！チョコミントアイスだ!!』

息を切らしながら、姫和は優にチョコミントアイスを持って来たと述べるのであった。

『ホント？ありがとー！』

そうして、優にチョコミントアイスが入った箱を渡し、優はそれを開けると、姫和が用意したチョコミントアイスを頬張るのであった。

その様を見て、高めの物を買って良かったと心から思うのであった。

姫和は、優が味覚障害気味であることに気付いて、少しでも美味しいと思わせたいがために高めの物を購入したのである。そうして、優が美味しいと言ってくれれば、優は人間であると強く証明することができ、私との〝繋がり〟はタギツヒメよりも強固だと、妄執地味た行動を執るのであった。

『ぐっ……ゴフ!!』

……しかし、その思いは優が吐いてしまったことで虚しく、そして儚く散っていってしまうのであった。

『ゆ……優！大丈夫か!?』

それを見た姫和は、優に何があったのか尋ねる。

『……ねえ、おねーちゃん。僕はおかしくなったのかな？……大好きだったチョコミントアイスが鉄の味しかしないんだ……。』

優のチョコミントアイスが鉄の味しかしないという発言に、優の味覚障害はチョコミントアイスの味でも鉄の味しかしない程に進行していることに、今更気付くのであった。

そのため、姫和は優が食べたチョコミントアイスを一口食べると、味の感想を述べるのであった。

『……ウッ、ゲホゲホ!!……これは確かにマズイな！店にクレームを付けないと!!』

姫和は一口食べるだけで、この高かったチョコミントアイスの味を味わえた。

……今まで食べた物よりも美味しかった。

美味しかったが言えなかった。……優が傷付くから、優はおかしくないと言いたかったから美味しかったチョコミントアイスをゴミ箱に捨てた。

多分、そのまま食べても胸が痛み、喉が詰まる思いをするだけなのだから、もう食べる気にもならなかった。

……好物のチョコミントアイスであったにも関わらず。今まで食べたチョコミントアイスよりも美味しかったにも関わらずにである。

『……うっ、ゲェホゲホ！……確かに、これは開発者に、製造者にクレームだな!!優はおかしくないぞ!!』

そのため、姫和は優を傷付けまいと、このチョコミントアイスが不味いだけだと言って、優はおかしくないと述べるのであった。

（……そうだ。そうだそうだ！チョコミントアイスはマズかったんだ！無駄にス～ッとしてて、歯磨き粉みたいな味で……そんな美味しい物じゃなかった。それが普通だ。可奈美も言っていたから間違いじゃない！）

姫和は自らの好物を偽っていた。それが普通なのだと。歯磨き粉みたいな味が上手いという奴がおかしいのだと。

姫和は自身の好物の存在を否定してでも、認めたくはなかった。

優がまともな人間ではなくなったことを……。

人の姿をした荒魂　前編

姫和は優にチョコミントアイスを渡し、それを食べた時に味覚障害によってえずいてしまい、優の身体がおかしくなっていることを否定したいがために、姫和は好物であるチョコミントアイスを歯磨き粉のような味だからマズイ物であり、えづいてしまったのは仕方のないことだと自身の好物を否定していた。

……優がおかしくなっていることを認めてしまえば、優が人間でなくなり、自分の元から離れて行くような気がしたからこそ姫和は必死に否定していた。

そんな一時のことを思い出しながら姫和は、内臓が弱ったことで栄養補給が困難となってしまったため、すっかりやつれてしまった優が目覚めるのを、優が居る病室を映しているモニターで優の寝顔を見ながら、優が目覚めるまで待っていた。

目が覚めて、優にも人間らしい部分があるということを証明させることで、姫和は優とずっと一緒に居られると、自分は孤独ではなくなると何か確信が有る訳でもないのだが、それを行うことで、そうなると信じていた。

歪んでいるのかもしれない。だが、信じる者は救われるという格言通りに、そう信じることで救われるような気が姫和はした。

歪んでいるのかもしれない。だが、信じる者は救われるという格言通りに、そう信じることで救われるような気が姫和はした。

歪んでいるのかもしれない。だが、信じる者は救われるという格言通りに、そう信じることで救われるような気が姫和はした。

歪んでいるのかもしれない。だが、信じる者は救われるという格言通りに、そう信じることで救われるような気が姫和はした。

……したのだから、何度もそう思ったのだから、それに疑うことなく従うのが当然なのだと、私は既に差出人不明の母宛の手紙を疑うことなく信じたのだから、何も不自然なことをしていない。だから私は

狂っていないのだから優はおかしくないと、姫和は自分勝手な理屈を並べて結論付けていた。

そうして、優が目覚めたのを確認した姫和は、優が居る病室へと向かう、そして起きた優に提案する。

「……優。外へ、屋上へ行こう！」

屋上へ行こうと。

「……何で？」

それに、優は何故屋上へ向かうのかと尋ねるのであった。

「それは、……良い夜だから花火をしようと思ってな。」

姫和は優との思い出を一つずつ思い出していく内に、４ヶ月前の逃走劇の最中に公園の遊具の穴で雨宿りしていた際に線香花火を見た優は『綺麗』と年相応に無邪気な声で言っていたことを思い出し、それをすれば、優が無邪気な子供の一部分を出すことでき、それを以って優は無害な少年だと姫和は証明できるような気がしたのだ。

「……そうなんだ。行こっか。」

しかし姫和は、優が了承したことに内心安堵していた――――。

――――そうして、姫和は歩けない優を車椅子に乗せると、冬の夜空の中でもある病院の屋上へと向かうのであった。

「……優、寒くないか？」

「大丈夫。早く花火やろうよ。」

優に冬着を着せているとはいえ、寒空の中であるため、寒くはないかと尋ねる姫和。それに対して優は、姫和に早く花火をやろうとせがむのであった。

「ああ、少し待っていてくれ。」

姫和はそう言いながら、優が花火を早くやりたいとせがむ様を見て、年相応の子供らしさを感じて安堵するのであった。しかし、

「でも、花火なんて初めてだから、どんなものか楽しみだね。」

優のその一言で、姫和は衝撃を受ける。

……紫を襲撃したことで、刀剣類管理局の追手からの逃亡中に公園の遊具の穴で雨宿りしていたときに線香花火を行ったことを忘れたことに、衝撃を受けたのだ。

つまり、優は舞衣達だけでなく、姫和と可奈美との思い出も忘れてしまったということである。……それは、いずれは姫和のことも可奈美のことも忘れてしまうことになることを姫和は恐れたのである。それは、姫和にとって孤独になることと同意義だったからこそ、極度に恐れた。

「……うん、そうだな。……昔、線香花火したことあるから、それで……な。」

しかし、姫和は優にその動揺を悟られることで、記憶障害がそこまで進んでいることに気付かれないように、姫和は幼かった頃、線香花火をしたことがあるからと言って、誤魔化していた。

「へー、そうなんだ。」

それを聞いた優は、何も疑問を抱くことなく二つ返事で姫和に返答するのであった。

そうして、姫和は屋上にあるバケツに水を満たすと、持って来た花火にライターで火を点ける。すると、線香花火はパチパチと火花を散らし、夜空の中で輝きを増していくのであった。

夜の冬空の中に、蛍の光のように照らす線香花火。

「綺麗。」

線香花火を「綺麗。」と言う優を見て、優にも人間性が有ることを証明できたと思うと同時に、まるで刀剣類管理局との追手から逃れていた時まで戻ったかのようにさえ感じる姫和。

……思えばあの時が、刀剣類管理局から逃れようとした時が一番幸福な時だったように感じる。

姫和はそんな思いを抱きながら、線香花火の輝きを見ていた。

しかし、その輝きとパチパチと放つ音も段々と弱まり、燃え尽きたかのように線香花火は少し静まるが、最後の力を振り絞るかのように一際大きな火花を散らすと、線香花火の輝きはそれを最後に消えるで

あった……。

「……。」

それを見た姫和は、その線香花火が描く、一時の輝きを放った後にその輝きは失われるという顛末に、何とも言い難い儚さと虚しさを感じるのであった。

それは、命の儚さや脆さだけでなく、虚しさをも表してるかのように。

それは、思い出も、命もやがては砂の様に消え去っていくというのを暗示しているかのように姫和は感じた。

それらを表しているかのように感じてしまった姫和は線香花火が、優の命と優との思い出が、いずれは儚く砂のように消えて無くなるというのを表しているかのように見えてしまった。

……否定したかった。

「優ー……次の線香花火を点けよう。」

だからこそだろうか？

姫和は線香花火が入った袋ごと引っ掴むように線香花火を一本取ると、急いでライターをカチッ、カチッと何度も鳴らしながら、急いで線香花火に火を点けるのであった。

……まるで、寒さや飢えに耐えられず、急いでマッチに火を点けるマッチ売りの少女の如く、急いで火を点けるのであった。そして、パチパチと火花を散らす線香花火を優の手に持たせて、一緒に線香花火を掴みながら、姫和は線香花火を優と共に楽しもうとしていた。

そうすることで姫和は、優に自分との新しい思い出を一つでも創ることで、自分のことを忘れないようにしていた。

そのために、線香花火が一つ消える度に水の入ったバケツに入れ、新しい線香花火に替えて行った。

……しかし、マッチ売りの少女のように、身体を暖かくしてくれるストーブ、テーブルの上に並べられたガチョウの丸焼きといったごちそう、光の中に現れた大きなクリスマスツリーがマッチの火が消えたと同時に無くなってしまうのと同様に、線香花火が入った袋が空になると、楽しい思い出作りは終わりを迎えてしまう。

「……終わっちゃった。」
優のこの言葉に、姫和は儚さと悲しさを感じていた。
どんなに頑張っても、楽しい思い出は過ぎ去ってしまうことに、酷い悲しみと落胆を感じていた。どう足掻いたって、優は遠い所へ行かされるのかと。
「……優、また今度やろう。また今度。」
姫和は、車椅子に乗りやつれた優の姿を見た瞬間、何時までこの屋上で行う花火は続けられるのだろうかという思いを抱きながら、涙を呑んだ。

そうして、屋上で行う赤いマッチならぬ、線香花火大会は線香花火を使い切ってしまったことで終わり、姫和は優を元居た病室へと送るために車椅子を押していた。
「優、また明日……。」
「うん、またね。」
病室の中に入れるとはいえ、同じ部屋に夜まで一緒に居れなくなったのは変わらないままであった。
姫和は、優が病室のベットの中へと入るのを見た後に笑顔で手を振ると、優の居る病室から退室するのであった。
病室のドアを閉めた姫和は、急ぎ歩きで優の居る病室から離れた。
理由は、優がどんどん自分の元から離れて行っているような気がしたからである。……いや、火花を儚い命の様に散らす線香花火を見て、優の命が残り少ないのではないかという恐怖が肥大化すると共に、自身は愛する者をまた失ってしまうことで、孤独に苛まれるのではないかという恐怖に駆られていた。
姫和は”母の仇”という大義名分を自ら捨てた。
……となれば、大義名分を失った姫和は、優という箸の代わりになれるほどに執着できる存在を愛することで愛されるのを求め、そして

誰かに必要とされることで自らの存在価値を認識でき、姫和の心は〝安定〟することができた。

……だが姫和は、肝心の愛されたいと思う相手である優が、自身よりもタギツヒメの方が好きなような気がしたのだ。

そして、そう思う度にタギツヒメに優まで盗られたくないという思いが強くなり、姫和はあることを思い出してしまう。

――――荒魂は、自分の一部である珠鋼を奪った人間に対する怒りを元に荒魂は人を襲うのだということを。

となれば、私の大切な物である優や家族を奪っていったタギツヒメに怒りや憎悪を滾らせる私は……。

「……そうか、この感情が人を襲う気にさせてくれるんだな。……それを理解できた私は……荒魂か。」

私も〝人の姿をした荒魂〟と言えるのではないのだろうか?と思い始めた姫和は、タギツヒメを妬むことを辞めようとするが、心の中で芽生えたドス黒い炎は消えるどころか、激しさを増していった。

激しい嫉妬の炎を燃やす姫和は、ふと心の中で声が聞こえたような気がしたので、静かに聞いてみると母か自分自身の声か分からないが、誰かが姫和を責めていた。

『母と優が苦しめているお前だけが幸せになれると思ったのか?』

『嘗てのお前なら、どのような形であれ荒魂討伐を是としていたではないか?』

『子供との約束すら果たせない無能なんだな。』

『母の使命すら果たせないお前は、誰の子だ?』

『お前が勝手に想像した母の思いを遂げられなかったばかりに、優を救うと言ってこれは何だ?』

心の中から聞こえる声に、急激的に内罰的となった姫和は気分が悪くなり、トイレへと向かうと胸に込み上げてくるものを吐き出すのであった。

……日に日に人間じゃない何かに侵食されていき、人の形をしただけのモノになっている気がする。

姫和はそう思いながらも、もう一度込み上げてくるものを口から吐

き出すのであった……。

――――一方、綾小路の学長室では、ある事件が起こっていた。

「……こんなことをしても無駄だ。」

「そうは言いますが、貴女にはどうすることもできないと思いますが？」

穂積が結月の両手を後手に縛って拘束するというクーデターが起きていたのだ。

それ故に、綾小路も市ヶ谷の襲撃以降は何の行動も起こせなかったのである。

「……君もか。」

結月はソフィアのスパイとして送り込んでいた穂積が、ソフィア側に鞍替えしているとは思わなかったため、苦虫を噛み潰したかのような顔をするのであった。

「ええ、私もソフィアさんのように刀使は強くあるべきだと考えておりますので。」

穂積も当初は結月の指示通りにスパイとして潜り込んでいたのだが、狼が活きる世界というソフィアの理念に共感し、ソフィア側に寝返っていたのだ。

「……なら、お前達はこのままで良いのか!?君たちは犯罪者になるのだぞ!!?」

穂積の返答を聞いた結月は、穂積の説得は無理だろうと判断し、他の生徒を説得しようと試みた。

「構いません！」

しかし、穂積以外の綾小路の刀使の一人が罪人になっても構わないと強く反論すると、彼女達は自分達の腕を捲り上げ、注射跡を見せるのであった。

「私達は、……ノロを体内に取り込んでいます!!」

「!!」

既に覚悟の上だと、ノロのアンプルでノロを体内に入れた冥加刀使となっていると告げるのであった。

「私たちは今の管理局の体制に不満を抱いています!!」

ある者は現体制に不満を持つと述べ、

「テロの首謀者だった折神　朱音が代理とはいえ、局長の席に座るのは納得できません!!」

ある者は折神　朱音がテロ行為で局長の座を簒奪したのだと述べ、

「私達の先輩や友人を傷付けた荒魂と寄り添うだなんて……今の折神　朱音はタキリヒメに媚びへつらうだけでなく、私達も裏切ったんだ!!」

またある者は、親しい者を傷付けた荒魂と寄り添うと述べる朱音をタキリヒメに媚びへつらっているだけだと罵るだけでなく、自分達を裏切ったと述べる。

「荒魂事件に巻き込まれて孤児になった私が、……御刀に選ばれたことで支援してくれる人が現れたから、刀使になれたんです。お父さんやお母さんを死に追いやった荒魂は討伐するものです!!」

「私だって、負傷して刀使を辞めるしかなかった後輩や先輩達のために刀使を続けたいです!!強い刀使になって、荒魂を討伐し続けたい!!」

「……私達は、みんなみんなそれぞれに荒魂の犠牲になった人達のことを忘れられないんだ。いや、忘れちゃいけないんだ!!……なのに、朱音といった大人達はそんな私達の傷に見向きもしない。そんな大人達の命令にただ従わされるだけだなんて理不尽だ!!」

そして彼女達は、それぞれに自身が抱える〝理不尽〟を結月にぶつける。

「お前達……。」

結月は、自分の綾小路の生徒達の姿を見て、愕然としていた。

「だから私達は、その〝理不尽〟に抗うために冥加刀使になったんです!!」

「荒魂を討伐したい。……それだけじゃないです。私達以外にも刀使

の力を失うことになる年齢になったら、私達はどうなるんだろう？って思うことがあるんです。」

「だから刀使という居場所しか無い私達にとって、冥加刀使というのは老い、病、肉体的損傷、才能の優劣といった全ての苦悩から解放される希望の光でもあるんです！」

「……冥加刀使になることで、ずっと〝刀使（こども）〟のままで居られたならって、思うことが度々あるんです。」

「それで、居なくなった友達や共に戦ってくれた同じ仲間達が居た戦場の傍でずっと……ずっとずっと戦い続けることが出来ることが今の私達の幸福なんです!!私達の望みなんです!!」

故に、彼女達は冥加刀使になったと自らの決意を語るのであった。

（理不尽……これが理不尽に抗うための……。）

目の前に居る綾小路の生徒達の姿を見た結月は、嘗ては紫と共に特務隊等に参加し、黒い袋に包まれたＳＴＴ隊員や刀使だった者達を見て、命が簡単に失われること、結芽という才能の芽が摘まれることへの〝理不尽〟から抗おうとした。

そして、その〝理不尽〟から抗うためにノロのアンプルの研究に紫と雪那の三人と共に協力し、刀使を冥加刀使へと変えるノロのアンプルを完成させてしまったのだが、その結果が、綾小路の生徒が自主的に冥加刀使となってしまったという顛末を見た結月は、理不尽に抗うべく正道に目を背け、邪道に手を染めた者の罰は新たな〝理不尽〟なのかと嘆きそうになった。

「……理不尽か。」

……嘆きそうになったが、結月は諦めようとは思わなかった。

「だから学長!!貴女が創ってくれたノロのアンプルは、私達の夢を叶えてくれたんです！親から逃げたり、孤児だったり、帰りたい家が無かったり、刀使じゃなくなったら将来がどうなるかとかに不安だった皆は、ずっとずーっと子供、『刀使』という居場所に、『荒魂を討伐』する戦場にずっと死ぬまで居続けられる魔法のランプだったんですよ！だから、これは全部学長のお陰なんです！ですから、私達と共に決起しましょう!!」

何故なら、ノロのアンプルという非道な研究を行った私という存在を知りながら、私を必死に説得しようとする綾小路の生徒が居たからだ。

（理不尽……これが理不尽に抗うための……！）

何故なら、刀使という居場所しか見出せず彷徨う綾小路の生徒が居る以上は、この綾小路武芸学舎の学長の席を預かる相楽　結月が正しき道へと導かねばならないと新たな決意を抱いたのだから。

「……私がノロのアンプルを作ったのは些細なことが原因だ。正道に背を向け、邪道に手を染めようと叶えたい願いがあった。二十年前の大災厄の際、いつも応援して励ましてくれた人達、いつも応援していてくれていて尊敬の眼差しで見てくれていた子供達、いつも助けてくれた機動隊の人、私が現役の頃にいつも一緒に居てくれた私よりも才の有る後輩と私を指導してくれた先輩。それらが二十年前の大災厄の時に消えた。……どうして人はこんなにも簡単に消えて逝くのだろうか。類稀れなる天稟の才を持つ者が現れても、なぜ世界はこんなにも理不尽なのだと。」

そのため結月は、ノロのアンプルを作った理由を述べた。

自分が見知った人。いつも応援してくれたり、自分を尊敬の眼差しで見ていた子供達。特祭隊隊員の中に居た尊敬していた人と後輩と先輩。その全てが二十年前の大災厄で、死体袋という名の黒い袋に包まれていたり、荒魂に取り込まれたことでノロになったまま遺体が遺族の元へ返って来なかったこともあったということ。

それだけでなく、自らの天然理心流を教えた愛弟子でもある燕　結芽という天稟の才を持つ者が不治の病に患ったことで、早くも病死してしまいそうだったがために、せめて彼女だけでも救おうと思ったということ。

――――だからこそ結月は、紫と雪那の研究に協力し、ノロのアンプルを完成させたと答えていた。

「しかし尊いと信じたその願いの正体は、醜くも歪んだだけのただのエゴの極みでしかなかった。……私は、自分のエゴをあの子に押し付けた。君達にも押し付けた。」

だが、どれほど自らが尊いと信じようとも、邪道は邪道でしかないということを痛感したと綾小路の刀使達に述べるのであった。
「そんな思い出話で貴女の罪が逃れられるとでも?貴女の愛弟子であった結芽さんは荒魂を入れられ、荒魂化して死んだことをお忘れですか!?貴女は結芽さんの命を繋ぐためにノロのアンプルを創ったと述べました。ならば、そのエゴを清算すべきだと思わないのですか!!?」
穂積は、結月に結芽が荒魂化されただけでなく、優という少年に殺されたことを忘れてしまったのかと周りの綾小路の刀使達に気づかれぬよう、遠回しに問い質しながら、ドアの向こうにも聞こえるほどの大きな声で詰問していた。
……穂積が遠回しに結芽のことを問い質した理由は、周りの綾小路の刀使達が優を殺すのに躍起にならないようにするためであった。
それに気付いた結月は、周りの綾小路の刀使達には全てを話していないのだろうと勘付くと、周りの綾小路の刀使達だけでも説得しようと、彼女等の説得を続けるのであった。しかし、穂積が〝ドアの向こうにも聞こえるほどの大きな声で〟問い質したことは気付かなかった。
「……ああ、そうだな。結芽といった私の親愛なる人達が多く死んだ。……だが、だからこそ私が言うのだ。邪道に手を染めようと叶えたい願いがあったが、所詮は邪道であり、何も叶うことが出来なかった私だからこそ!」
だからこそ結月は告げる。
「このまま私と同じ様な目に遭わせる訳には、彼女達を犯罪者にする事は断じて許さん!」
だからこそ結月は覚悟する。
「君達が私を裁いてくれ。……私は罪を犯しすぎた。」
「そんな!!」
「全ては私がやったことだとして、君達は管理局の本部に投降するんだ。そうすれば君達は無罪放免だ。」
だからこそ結月は命を捧げる。

「……私は結芽に泡沫の幸福という残酷な結末を与えた。少女達の純粋な気持ちも踏みにじった。全ては私の弱さ故だ。だから私は君達に代わって、全ての罪を清算しに行く。」

「学長……。」

ここまで面倒を見てくれたという恩義の有る結月の話を聞いた綾小路の刀使達は、ソフィア達の決起に参加することを止めようと考え始める者が出始めていた。

「……ねえ、ここは学長の言う通りにすべきじゃないかな？」

「バカッ!!貴女、学長を引き渡す気!?!!」

「だけど、私達のせいで学長は辛い思いをしているんだよ!?」

そのため、それぞれ意見をぶつけ始める様を結月の前に晒してしまうのであった。

「……悪いが、我が綾小路はお前達の甘言に乗せられないぞ。」

結月は両手を後手に縛られながらも、「綾小路は甘言に乗らない。」と穂積に対して憎まれ口を叩く。

「そうですね。これは困りものですね。……ですが、お客様はどう思うでしょうか？」

しかし、穂積は涼し気な声で何も慌てることなく返答するのであった。その穂積の冷静な態度と「お客様」という言葉に訝しむ結月であったが、綾小路の生徒がそんな簡単に靡くとは思わなかったため、ただの強がりだと、杞憂だと思いたかった結月であった。

……穂積が言う外のお客様というのは、半ば荒魂と化していた和樹のことであった――――。

無理矢理荒魂と融合したことにより全身に耐え難い痛みが走ることで寝不足と常時危篤の状態であり、内臓の殆どが機能不全を起こしていることから飲料ぐらいしか栄養補給ができないため、常に飢餓との戦いであった。そんな状態で、結芽だと思い込んでいる優に骨を折

られるぐらいに殴られ、蹴られ、そして両手足の拘束から逃れるために折られた腕と足を潰すことでどうにか拘束から逃れ、自身が召喚した蝶の荒魂のお陰でどうにか結月学長の元まで向かうことができた。

――――最期ぐらいは、結月さんの手で終わりたいと。

そんな心身ともに疲れ果て、千切れた片手片足はノロが固めてくれたお陰で出血多量にはならずに済んだものの、血を多く流したことには変わりないうえ、飢餓と痛みによる睡眠不足から、体力も無いという這う這うの体で結月学長が居るであろう学長室まで来れたのである。

……和樹がここまで来れるように、穂積が警備を手薄にするよう手を回していたことに気付くことも無く。

――――そう、心身ともに疲れ果てたという、頭が回らない状態で和樹は結月の声を聞くのである。

『――――どうして人はこんなにも簡単に消えて逝くのだろうか。類稀れなる天稟の才を持つ者が現れても、なぜ世界はこんなにも理不尽なのだと。』

『しかし尊いと信じたその願いの正体は、醜くも歪んだだけのただのエゴの極みでしかなかった。……私は、自分のエゴをあの子に押し付けた。君達にも押し付けた。』

『そんな思い出話で貴女の罪が逃れられるとでも?貴女の愛弟子であった結芽さんは荒魂を入れられ、荒魂化して死んだことをお忘れですか!?貴女は結芽さんの命を繋ぐためにノロのアンプルを創ったと述べました。ならば、そのエゴを清算すべきだと思わないのですか!!?』

『……ああ、そうだな。結芽といった私の親愛なる人達が多く死んだ。……だが、だからこそ私が言うのだ。邪道に手を染めようと叶えたい願いがあったが、所詮は邪道であり、何も叶うことが出来なかった私だからこそ!』

その結月と穂積の言葉が、ノロのアンプルを頼ることで荒魂と融合し、刀使達を救おうと決めた和樹の行いを全て否定しているかのよう

に……いや、今の和樹の存在全てを否定しているようにも聞こえたのだから――――。

人の姿をした荒魂　後編

『……どうして人はこんなにも簡単に消えて逝くのだろうか。類稀なる天稟の才を持つ者が現れても、なぜ世界はこんなにも理不尽なのだと。』

『しかし尊いと信じたその願いの正体は、醜くも歪んだだけのただのエゴの極みでしかなかった。……私は、自分のエゴをあの子らに押し付けた。君達にも押し付けた。』

『……ああ、そうだな。結芽といった私の親愛なる人達が多く死んだ。……だが、だからこそ私が言うのだ。邪道に手を染めようと叶えたい願いがあったが、所詮は邪道であり、何も叶うことが出来なかった私だからこそ！』

――――和樹は信じたくなかった。

……何故なら、和樹は結月が述べたエゴの極みであるノロのアンプルを使って、半ば荒魂と化した醜い姿でも刀使を救おうと頑張ったのだ。

なのに結月は、自分に向けて銃を発砲したり、人殺しも難なくしようとするうえ、結月を裏切り、管理局本部の犬に成り下がった結芽を未だに思い続けているのだ。……目の前には結月のことを信じている綾小路の刀使達が居るというのに、刀使を救おうと頑張った僕が居るというのに、そんな彼女達よりも僕よりも、結芽なんかを大切にしている様に見えた和樹は、結月に対して憎悪の感情を向け始めるのであった。

そうして、結芽のことを思い出した和樹は、刀使という才能を知り、結月が天然理心流を教えてくれる道場から逃げた後に結芽と再び出会ったときのことを思い出していた。

『ちょっと！そこどいて!!』

ドン、と突き飛ばすかのようにぶつかっておいて、年上である自分

に一言も謝りもせずに走り去っていく結芽の後ろ姿を見ながら、強く注意することもできない自分を恥じた。謝りもしない結芽に憎悪した。

――――持たざる者と、持たざる者の埋めがたい格差を感じた。

そして結月が言っていた〝類稀れなる天稟の才を持つ者〟とは、穂積が言っていた〝貴女の愛弟子であった結芽さん〟という声と更には〝結芽といった私の親愛なる人達が多く死んだ〟と述べていたことから、結月は目の前に居る綾小路の生徒よりも結芽の方が大切であると思ってしまった。それらの事実から、結月は自分のことなんか何一つ見てくれなかったし、何も思っていなかったということに気付いた。それどころか、自分が天然理心流を学んだ理由が結月さんに近付きたかったということにすら気付いていないかもしれない。

――――そうして、和樹はやっと気付いた。……自分は既に頼れる人も居ない孤独、独りぼっちだったことに。誰も、自分を愛してくれる人は居ないということに。

和樹は、刀使の子供を持ったことで近所に自慢しまくる実の親からも、刀使になって有頂天になっている妹からもまるで最初から存在しないかのように扱われてきた。それだけでなく、色んな辛い職場で様々な辛い目に遭っても結月さんが見てくれていると、愛してくれていると思っただけで何でも耐えれた。

……でも、それが偽りで、自分自身を慰めるための嘘でしかなく、自分自身が心地良いと思えたものでしかなかったという事実は、今の和樹には耐えられなかった。

（……ヒドイネ？アノ人達ハ純粋ナ君ノ気持チヲ踏ミ躙ッタンダ。）

和樹の中から、ダレかの声が聞こえた瞬間、プツンと何かが切れたような感触がした。

職が見つからず、今もフリーターであることを蔑むような目で見る刀使の妹。福利厚生はばっちりで国家公務員である刀使の妹を自慢気に近所の人に話す両親。自分のことを年上扱いしないどころか居もしないかのように扱う結芽といった刀使。僕達のことを穢れた物のように言う元刀使の結月。どんなに天然理心流を憶えても刀使で

ある結芽に勝てないという現実。そんな刀使の中でも天稟の才を持つ結芽のことを溺愛する結月。

『……どうして人はこんなにも簡単に消えて逝くのだろうか。類稀れなる天稟の才を持つ者が現れても、なぜ世界はこんなにも理不尽なのだと。』

そうして和樹は、結月の言葉を心の中で反復させるだけで自身の怒りの矛先が変わって行くのを感じた。

『――――荒魂事件に巻き込まれて遅れただぁ!?こんなご時世にお前は何を刀使さんのせいにしてんだよっ!!』

『貴方お兄さんなんでしょ?刀使の妹さんを見習って、もっとしっかりしないと駄目だぞ!』

僕に責任転嫁をする会社。いや、この刀使というクソガキばかりを第一に考える狂った社会であり、僕が生きている世界。

その刀使という子供達は国家公務員扱いされ、待遇なんか僕の数十倍も良いということに、口に出せない苛立ちを感じていた。

『ウチより全然大きい会社だからさ、大丈夫だから。』

『刀使の妹さんが居るから、ウチみたいな会社じゃなくても良いだろ?』

僕だけでなくミンといった外国人労働者を足蹴にする社会。いや、この刀使というクソガキを、勝ち組だけを何でも有り難がるクソみたいな社会。

だから僕が死んでも誰にも気付かれないどころか、死体をネットに上げて如何にバズるかという事にしか興味を抱かない。……一方の刀使や上級国民という奴が死んだらそれだけでニュースにもなるし、お悔みの言葉も貰える。

――――それだけじゃない。

刀使という国家公務員という立場だけでなく、福利厚生も恵まれているという大人の様な扱いを受けられるが、困ったときは子供扱いも許される都合の良い存在。

何処から生まれ出たかは分からない珠鋼から創られた御刀という物は、少女にしか反応しないというまるで刀使を存在させるために創

られたかの様な都合の良い代物。
　S装備の投射もそうだが、どれだけ建物や交通機関が刀使や荒魂の戦いで壊されても、子供だからという理由だけで文句を言ってはならないという風潮を甘受する刀使。
　僕等が銃を持つのは物騒だからという理由で所持できないのに、刀という物騒な物を持って何処へでも行ける刀使。

……そして、僕等の様な納税者や労働者を何とも思わない社会。

　それだけじゃなく、綾小路武芸学舎という学校に居ることで自分が学校に居たときのことも思い出していた。
　いつも刀使である妹と親に比べられて、根暗になった僕を学校の皆はイジメていた。
　それでまともに学業に集中にできないから、先生に相談したら先生がこう言ってくれた。
「イジメは良くありません。イジメは悪い事です。」
　と言ってくれた。……いや、言うだけだった。それ以上は取り合おうとすらしなかった。
　だから、それでイジメは無くならなかった。
　むしろ、先生に有る事無い事を吹き込んだ悪い奴ということでイジメは更に酷くなった。そうして、僕が志望していた学校へ入学する試験は落ちてしまった。
　僕はこの時に悟ったけど、忘れていた。
　善と悪は曖昧な基準な上に成り立っている物だということを。そういう狂った基準で善悪を、物事を判断する狂った社会なのだと。なら、この狂った社会が出す善悪の基準は間違っているのだから、僕が荒魂になって刀使を殺すことは何も間違っていないと断ずることができる。
　そうして和樹は、刀使を救うことから、いや、刀使だけでなくこの狂った社会を壊したい、穢したい、滅茶苦茶にしたいという衝動に駆られる。

「……ハハ、ハハハハハ。」
　自分を踏み躙った妹や結芽といった刀使達とこの刀使を優先する狂った社会。子供を養育する機関なのに大人の保身が最優先される閉鎖的な世界。自身の身を案じてくれる綾小路の刀使達よりも結芽のことばかり話す結月。自分を粗略に扱う勤め先と親と……この狂った社会！
　そう考えた和樹は、狂ったように嗤い出す。
　それ故に、少し前に結月が述べた『荒魂と人体の融合はエゴの極みであり、ノロのアンプル自体も自分が最も毛嫌いする結芽のために作った』のだとする話は、和樹にとってみれば、存在そのものを否定しているようにも聞こえたため、和樹は心の中に溜めていたドス黒い『激昂』と『嫉妬』、そして『憎悪』の感情が零れ落ちそうになるほどに溢れていく。
　そうして和樹の中に溢れるほど産まれ出たドス黒い感情で結月のことを思い返すと、結月の顔が嘗て勤めていた会社に居た自分のことをとにかく罵倒する上司と同じように見えてきたのである。
　そうして和樹は、ドス黒い感情によって生じた衝動のままに、召喚した蝶の荒魂と共に結月の居る部屋へと突入するのであった。
「アンタは、勝手だよおぉぉーーーーっ!!!」
　そうして、荒魂によって強化された身体能力を使って真っ直ぐに、結月の元へと周りの刀使がこちらに気付く前に素早く駆け付けると、結月の首を掴んで、そのまま前にあるガラス窓へと投げると、和樹は二階から落ちた結月を追う。すると地面に仰向けの状態で倒れたままの結月を見つけた和樹は、衝動のままに人ならざる雄叫びの声を上げると、結月の首を力強く絞め始めるのであった。
「オマエガァァァァーーーーッ!!」
　お前がノロのアンプルを作った。僕を見ないどころか、目の前に居る子供すら見ていなかった。
「オマエガァァァァーーーーッ!!!」
　お前はノロのアンプルを使った僕をエゴの極みだと卑下した。それだけでなく、僕を見下した!!

「オマエガァァァーーーッ!!!!」

そんなお前が罪深いから裁いてくれ?……心を病んで、家族からも社会からもゴミのように扱われた孤独な人間がオマエの言葉をどのように受け取るか教えてやるよ!望み通りに報いを受けろっ!!

……和樹は、心の中で結月に向けて、心の中で何度も訴えながら、結月の首を絞め、そして結月の後頭部を地面に叩き付けた。そうして、何度も何度も叩きつけ、首を締めていく内に結月がピクリとも動かないうえ、一言も発しないことに気付いた和樹は今の結月を見た。

頭から血を流し、動かない、息もしてない、目も明後日の方向に向いている。

その結月の姿を見て、頭が冷えると。

「……。」

鼓動が早くなり、身体に震えが出てくると、喉の奥が詰まる感覚がし始め、目に水が、涙が溢れ出て来た。

……僕は結月さんのために色々と頑張った。けれど、自分の手で殺してしまった。だから、結月さんのために頑張っていた僕は、目的すら無くなり、空っぽな自由を得て、人間以下となった僕はどうしたら良いのだろうと思い始める。すると、

(……〝自由〟ニナッタンナラ、何ヲシテモ良インダヨヨ?)

和樹の心の中で何かの声が聞こえた。

真の〝自由〟とは、野に放たれる野獣のように好き勝手して良いのだと。

(ソレニ、〝不公平〟ジャナイ?アイツラバカリ恵マレテイテ。アイツラノ存在ノ方ガ害悪デショ?)

君は被害者で、彼等こそが加害者なのだと。

……そうだ。アイツラの方が害悪だ。社会の中に巣くう癌だ!!

心の中の声が聞こえた和樹は、唯一この声だけが自分を肯定してくれるため、とても心地良かった。だから和樹は、誰も必要とされなかったために暴れた子供は、この声だけを信じてしまう。

……自分の身体の中に何が宿っているのかも忘れて。

……そこまで考えた和樹は、何かが解き放たれた感覚がしたのだ。

空っぽな自由になった。人間以下となった。つまりは、人から憚れるようなことを平然とやって良いのだ。もう我慢しなくても良いのだ。何をしても良いのだ。誰にも憚ることなく、争いを避けることなく不平不満を述べても良いし、気に入らない奴は殺したって良い。

そうだ。殺せば良いんだ。壊せば良いんだ。

自分を除け者にする刀使と人間も、刀使ばかり優遇するこの社会も、僕の好き勝手にして良いんだ。子供がオモチャの手足を引っこ抜くように壊しちまえば良いんだ。

「ハハハハハハハハハハハハハ!!!!」

そう思うだけで、和樹は解放された様な心地良さに包まれながら、自由になれたと思った。

人間以下の怪物になることが、どれだけ心地良いかを知ったのだ。

「居たぞ!!学長の仇!!」

そうして和樹は、彷徨うように歩いていたため、和樹を恩義の有る結月の仇として追っていた綾小路の刀使が抜刀し、写シを貼って向かってくるのが見えた。

「ハハハハハハ!!!!」

和樹は高嗤いすると共に、失った右腕と左足から荒魂の腕と足が生えてきたのであった。

その異様な姿に、荒魂化した人間の様な姿に和樹を追ってきた綾小路の刀使達等は戦慄する。

「そこの荒魂!投降しろっ!!この綾小路内でお前が勝てると思っているのか!?!!」

和樹は穂積の投降を促す声に反応し、自分のことを荒魂扱いしたことに憤るが、この刀使の訓練校の一つである綾小路内で戦うのは流石に数の上では不利であると悟ると、今は逃げるのが先であると理解した。

「……まだだ、まだ僕は見たいんだ。」

和樹はそれだけ言うと、蝶の荒魂を召喚し、綾小路の刀使達を怯ませると八幡力でも使ったのかと思えるほどの跳躍力で和樹は逃走するのであった。

「待てっ!!」
「いや、今は学長の治療が先だ。皆、相楽学長を医務室へ!!」
「はっ?……わ、分かりました!!」
穂積は、結月学長を医務室へと送るようにと綾小路の刀使達を指示することで、和樹の後を追わせないようにした。
そうして、綾小路の刀使達がバタバタと担架を持って来ると、結月を担架に乗せ、医務室へと向かって行くのを見届けていた穂積は、
「……もしもし、隊長ですか?」
ソフィアに携帯電話で連絡していた。
「ええ、学長が荒魂化した男に襲われました。恐らく、自衛隊か管理局本部からの刺客でしょう。」
穂積は、和樹がソフィア達の謀略によってノロのアンプルで荒魂化させた男であり、最終的には結月を始末するための捨て石として使う予定の一人であったことを知っていた。
……知っていながら、穂積は”自衛隊か管理局本部からの刺客”と述べたのである。そうすることで、こちらに嫌疑を掛けられないようにしたのである。
「……あとは、綾小路の刀使達に結月学長が刺客に襲われたということを公表する体裁を整えておきます。」
……ここまでは計画通り。
穂積はそう思いながら、次に行う維新派の結成の公表と結月学長を襲撃したことに対する批判。この二つで管理局本部と防衛省を政治上においても追い詰める積りでいた――――。

――――その一方、姫和は今日も優が居る病室の前で向かおうとしていた。
だが、姫和を追い抜き、我先にと優の居る病室へと向かう者が居た。

……それは、停職処分を受けている筈の寿々花であった。
「!?」
姫和は驚いた。何故、此処に寿々花が居るのか、見当もつかなかったからである。
そのため姫和は、慌てて急ぎ足で優の居る病室へと入って行った。
「実は私もヒメちゃんとお友達になりたいので、お話しても宜しいでしょうか?」
「……うん、良いよ。」
そこで寿々花は、優にタギツヒメと友達となりたいと言って、意識をタギツヒメに代わるようにと話していた。優は、タギツヒメと友達になりたい者が増えたことに嬉しかったのか、二つ返事で了承していた。
「……お、おい「我に何用か?」」
優と寿々花の会話を聞いた姫和は、寿々花がタギツヒメを利用しようとしていることに気付き、それを止めようとするが一足遅く、優の意識はタギツヒメへと代わっていた。
「……貴女も知っていると思いますが、数週間前に市ヶ谷が襲撃され、タキリヒメはイチキシマヒメに取り込まれました。これが、その証拠映像です。」
優の身体で話すタギツヒメと謁見した寿々花は、数週間前に市ヶ谷が襲撃され、タキリヒメがイチキシマヒメに取り込まれたことを話すと、市ヶ谷にて、タキリヒメが静に取り込まれた時の映像をｉＰａｄで見せるのであった。
「……それは、確かなのか?」
「ええ、市ヶ谷基地の監視カメラはタキリヒメに反応する様にされておりますので。その結果、このタキリヒメを吸収した刀使にはタギツヒメに近い反応を示しましたので、イチキシマヒメを取り込んだ可能性が大いにあるという分析結果が出ました。」
タキリヒメの逃亡防止用のカメラが功を奏し、イチキシマヒメを取り込んだ静にタキリヒメに近い反応を計測したため、このタキリヒメを吸収している刀使がイチキシマヒメを体内に取り込んでいる可能

性が充分な程に高いと述べていた。
「……何が言いたい？」
「恐らく、敵はイチキシマヒメを手に入れているということは二十年前の真実を知っている可能性が高く、それを利用してタギツヒメと融合している優さんを非難することでしょう。……このようにね。」

寿々花はそう言うと、ｉＰａｄに映るタキリヒメを吸収する場面を映した映像から、ある映像に変えて見せるのであった。
『皆!!我々は遂に立ち上がった。変革すべき時が来たのだ!!新しい風を巻き起こし、刀剣類管理局並びに政府の中に蔓延する腐敗を一掃することで、この欺瞞に満ち溢れた世界を変える時が来たのだ!!』
その映像は、年若い刀使が何かを訴えているようであった。
『かつての特別刀剣類管理局は荒魂を討伐することによって秩序を保ち続けることを公言する組織であった。……しかし、真実は違う。それは彼等が特権を享受し、それを固持するための詭弁に過ぎなかったのだ!!!!』
そして年若い刀使は、刀剣類管理局が荒魂を討伐する真の理由は折神家が特権を享受するための物であったと訴えていた。
『二十年前の大災厄時には、タキリヒメ含む三つの大荒魂を管理局と政府が独占し、ノロのアンプルといった人を荒魂と融合させ、容易に荒魂化させるという危険な研究を我々刀使にも一般の方達にも投与させていたことをどれ程の人が知っていただろうか？……否、断じて否！舞草を中心とした管理局の秘密主義によって誰も知り得なかったのだ!!』
そうして年若い刀使は、次第に声に熱を入れ始め、刀剣類管理局と政府がノロのアンプルという人と荒魂を容易に融合させることができる危険な研究を極秘裏に舞草が行っていたかのように語るのであった。
『それだけでなく、刀使でもない子供に荒魂をノロのアンプルによって注入し、荒魂と同様になるまで強化することで数か月前に起きた安アパートにて外国人の殺害だけでなく、鎌倉でのノロの漏出事件以前

にも舞草の活動員として数多くの戦闘行為に参加させていたことが我々の極秘の内偵によって判明した!!』

年若い刀使はそれだけでなく、優のことについて話し始めるのであった。

「!!」

これには、タギツヒメの顔に動揺の色を見せ始める。

優が今まで行ったこと、潜水艦へと逃げ込む際に発生したＳＴＴ隊員等への殺人。半ば荒魂化した自衛隊員の殺害。暴動の残党によって殺されたかのように装ったソフィアの同志である刀使の暗殺。

それら全てが公表される恐れがあったのだ。

「……それだけでなく、政府や舞草の重鎮内には優さんを処分して、何もなかったことにしようとする者が漸増の一途を辿っているようですわ。」

寿々花はそれだけ言うと、更に動画を進め、年若い刀使が述べている演説の一部を聞く。

『――――そして、その少年に取り憑いているのはタギツヒメという大荒魂であり、彼女の目的は人間への復讐。それのみである!』

それは、自身のこと、タギツヒメが人間への復讐を望んでいると話す内容であった。

『それだけでなく、政府と刀剣類管理局の重鎮は今まで討伐してきた荒魂のノロをタギツヒメへの強化に使っていたのだ!!もし、彼女が力を解放したら、これまで以上の災厄がもたらされることになる!!』

そして、タギツヒメはこれまで以上の災厄を撒き散らす存在であると。

『そんな危険な存在を管理局や政府上層部はいまだに手放そうとしていないのだ!目を覚ませ、同志達よ!!そのような惨劇を防ぐには討伐して、ノロに還すしかないのだっ!!』

そのため、タギツヒメを討伐しなければならないと。

『そのためにも、我々刀剣類管理局維新派は、ここ東京を拠点に決起することを決意した!!……かつて、刀使は荒魂を討伐することで人々に畏敬の念を送られていたのだ。同志達よ!それを取り戻すべき時が

来たのだっ!!……そのうえで要求する！政府並びに刀剣類管理局は一刻も早くタギツヒメを我々に引き渡せ！これ以上国民を危険にさらすというのであれば、我々は実力を持って対処することをここに宣言する!!』

……そうして、タギツヒメは理解した。

この維新派の元へ向かうことになれば、優は殺されてしまうことに。

「そういったことがあり、あなたの協力が必要なのです。お分かりで？」

寿々花は維新派の演説を聴いていたタギツヒメに対して、自分達に協力しなければお前の大事な者は失うぞと、笑顔で詰め寄るのであった。

「……しばし、待て。」

タギツヒメはそう言って、優の中に居る者達と話しに行ったのか、優は眠ったかのようにベッドに横たわるのであった。

そして、タギツヒメと寿々花の会話を聞いていた姫和は、寿々花に詰め寄るのであった。

「お前、停職中だったろ？ここで何をしているんだ!!?」

「あら、いやですわね。私はご友人の弟さんのお見舞いに来ただけですわ。今回は公務ではありませんので、そこのところはご了承下さい？」

「嘘を吐くな!!現にこうやってタギツヒメに会っているじゃないか!!?」

優の見舞いに来たと嘯く寿々花に大きな声で、最初からタギツヒメに会うのが目的ではなかったのかと詰め寄る。

「あら？タギツヒメさんはここに居ると貴女は証明できるのですか？」

姫和の詰め寄りに対して、寿々花は事も無げに両手を広げると、姫和にタギツヒメがここに居ると言えるのかと迫るのであった。

「!!」

「できないことは言わない方が貴女のためになると思いますわよ？貴

女の大好きな優ちゃんのために。」
　寿々花は姫和にそう言って、黙らせようとしていた。
　しかし、姫和はそれで止まることなく、更に寿々花に対して詰め寄るのであった。
「……全部、全部謀っていたんだな。タキリヒメの時から、全て!!」
「ええ、タキリヒメは政治家や国民からの支持を広げつつありましたので厄介な相手でありました。……ですので、折神　紫派といった朱音様に対して反感を持つ者達を一掃するのに良い手とは思いませんこと？あとは、国会前での暴動を起こした残党も折神　紫派に協力して下されば良いのですが。」
　姫和に詰め寄られた寿々花は、何食わぬ顔をしてタキリヒメと旧変革派でもある折神　紫派だけでなく、国会前で暴動を起こした残党の処分も考慮していたと述べるのであった。
「それに、荒魂の討伐を優先する旧折神　紫派がどのような行動を取るか、想像し易いですものね。……タキリヒメの討伐だけでなく、タギツヒメが取り憑いている優くんも殺される可能性が高いですし。となれば、タギツヒメがどのような行動を取るか。」
　それだけでなく、タギツヒメにこちら側に協力するように仕向けたと何食わぬ顔をして、答えるのであった。
「……我が協力すれば、優は助かるのか？」
「ええ、〝お約束〟しますわ。」
　優が助かるのかと尋ねるタギツヒメに対して、寿々花は〝約束〟すると答えるのであった。
「……分かった。」
　寿々花の〝約束〟を聞いたタギツヒメは、優に意識を返すと、
「うっ……ぐぅ……あぁぁぁぁっ!!」
　優は苦痛を訴えながらも、優の身体の中からタギツヒメを這い出て来るのであった。
「……これで良いのだろう？」
　タギツヒメは寿々花を真っ直ぐ見据えながら、返答を迫る。しかし、それを見た寿々花は新たな疑問を抱くのであった。

「……ええ、しかし、確か優さんから抜けると命が無かったのでは？」
「ああ、確かに前まではそうだった。……だが、ノロを多く吸収し、体内にあるノロの量が増えたお陰で、大事な臓器は荒魂化したまま残すことができた。……それに、我が抜けたことで体内にあるノロの量は減ったから、症状は和らぐはず。……だから、今は大丈夫だ。」
新たな疑問とは、タギツヒメが優の体内から抜け出すと、短命化し、死に至るのではないのかと。それについて、タギツヒメは重要な臓器を形成するのに必要なノロは残しているから今は無事であると答えていた。
「……大丈夫だよ。……ヒメちゃん……おねーちゃん達をよろしくね。」
優はそれだけ言うと、荒魂化した残った左腕で手を振ると、可奈美達のことをよろしく頼むと言うのであった。
「……ああ、任せてくれ。まだノロを注入すれば、助かる筈じゃ。」
タギツヒメは優にそう言って手を振ると、寿々花と姫和と共に優の病室から退室するのであった。
そして、寿々花は優とタギツヒメを見て新たな疑問を抱くのであった。
それは、体内にあるノロの量を減らせば、症状が緩和されるのであれば、何故初めからそれを行わなかったのか？ということであった。

カミサマの嘆き

寿々花と話したタギツヒメは、優の中に居る者達と話していた。
タギツヒメが此処から抜け出すということを……。
「――――という訳でな。我を必要とする奴等のために現世に出ねばならなくなった。いやー、人気者は辛いのう!!」
それを黙って聞いていた優達は、タギツヒメに言う。
「……あんま無理すんなよ。顔に出てんぞ。」
ジョニーは、タギツヒメが無理をしていることを看過していた。
「な!何を言うか、我は神ぞ!!そんなことで寂しく思ったり、へこたれたりせんわい!!」
タギツヒメは大声で叫ぶ、寂しくないと。
「それに……それに我が出れば……出れば我のことをな……皆が歓迎して……くれるんじゃぞ!!」
タギツヒメは両手を握り締めながら、必死な思いで訴える。自分は一人ではないと。
「……そっか、なら一人でも頑張るんだよ!!」
それを聞いたミカは、笑顔で送り出そうとしていた。
「え?ヒメちゃん一人で大丈夫?」
「バッカやろう、お前こういうときは笑顔で送り出すんだよ。」
タギツヒメ一人で外に出て大丈夫かと言う優に、ジョニーは優の口を抑えながら、笑顔で送り出すものだとタギツヒメに悟られぬように小声で注意していた。
優とジョニーのやり取りを見ていたタギツヒメは二人は仲が良いなと思いながらも、この一連のやり取りがタギツヒメに気を使って、皆が後腐れが無い様に送り出そうとしていることに気付いてしまった。
……それに気付いたからこそ、タギツヒメはずっと両手を強く握り締めて、涙を流すことを堪えていた。涙を流すことで皆を心配させた

くなかったから。
「……ねえねえ、ヒメちゃんは神なんだよね？」
「ふ……ふっふーーーん！ようやく理解したか、最近何か粗略に扱われていると思っていたから……それを忘れておったと思ったぞ！そうじゃ、我がその気になれば……なれば、直ぐにノロを集めてお前達を荒魂にして、外の世界へ行けるようにしてやるぞ!!生まれ変わらせてやるぞ!!だって……だって、我は神ぞ!!」
結芽に神様扱いされたことに、表向き喜び、自身は神だと自称するタギツヒメ。
……だが、タギツヒメは今までずっと自身を神と自称することに苦しかった。喉の奥が何かに詰まって辛かった。……けれど、神と自称することで皆が喜んでくれたから、血を吐く思いをしながらも叫び続けた。自身は神であるという希望を謳い続けた。子供達に絶望を与えないようにしていた。
……何故なら、今まで皆を救えなかったから、自分は神ですら無いのではないか？ということから目を背き続けることができ、皆に偽りの希望を謳い続けることができたからだ。心がバラバラになりそうになりながらも、自分は神だと叫び続けた。
――神様を名乗ることが、こんなにも苦しいことだとは思わなかった。
タギツヒメは神を名乗ることがこんなにも苦しいことであったと知っていれば、神と自称しなかった。
……自分を”神”という凄い者だと信じている者達を裏切り続けているのではないのかという疑念が頭から離れなかったからだ。
「だったらさぁ……親衛隊の中で一番強い私の剣を上げるよ。……そうすれば、最強の剣と神様が組み合わせれば、もう敵う奴は居ないから、一人で外に出ても何も怖くはないでしょ？夜見おねーさんもそう思うよね？」
「ええ、だってヒメは私に親衛隊第三席としての力を与えてくれて、結芽さんに命と友人だけでなく、結芽さんにとって掛け替えも無い名誉を与えて下さったんですから、私達にとってみれば神様です。……で

すので、高津学長に会ったら、ノロのアンプルは確かに人を救えたとお伝えくださいい。」

結芽に”最強の剣”を上げるから、外で一人になっても何も怖くなくなると言われただけでなく、夜見に親衛隊第三席としての力を与えてくれて、結芽に友人と命と名誉をくれたと言われたタギツヒメは、涙を堪えながら返答した。

「ふ、ふはははは。……ま、まあそうであろうな！神である我とお主の最強の剣術が組み合わされば誰も敵わんのは当然のことじゃわ!!……それに、……それに我は時の呪縛を超越しているからな!!お前の凄いことを一生……一生憶えている事ができるぞっ!!」

結芽に対して、自分は何時までも生きていると言うと、結芽のことはどんなに時が流れても忘れないと答えるのであった。

「!……そうだね。私、夢叶っちゃった!!やっぱ凄いや、ヒメちゃんは。」

タギツヒメにそう言われた結芽は、『誰かの記憶に残りたい』という願いが叶ったと答えていた。

「……だから、我が外に出たら、鎌府の奴にもそう伝えてやるわ!!」

神である自分と結芽の最強の剣が組み合わせれば最強であること、雪那にノロのアンプルは人を救えたということを伝えに行くと答えるタギツヒメ。

「……ええ、お願いします。」

それを聞いた夜見は、柔和な笑顔でタギツヒメに雪那をお願いしますと返答するのであった。

……そうして、タギツヒメは後ろを振り向くことなく前へと進むのであった。いや、進むしかなかった。

そしてタギツヒメは、子供達の居る世界（ネバーランド）から卒業するしかなかった。

……何故なら、多くの刀使が成人前後には引退していくのと同じ様に、ずっと子供（刀使）のままでは居られないだけでなく、大人になる過程で純粋さと言った何かを失いながら進むというのが、この世の道理なのだから。

だから、涙を堪えながら、後ろへ振り返ることなくタギツヒメは外へ向かった。

……そして、これからは結芽は強かったと、凄かったと証明するために剣を使うときは天然理心流のみしか使わないことを決意した。

そうして、後ろに居る大切な人達のことを想い続けたせいか、本当の自分自身の過去のことについて思い出すのであった――――。

――――最初に〝私〟という存在、自我が目覚めたのは暗く冷たい貯蔵層の中だった。

そこは真っ暗で何も見えない。何も感じない場所であった。そんなときに誰かの声が聴こえた。

『……なあ、お前は本当はどこから来て、どんな物が好きで、此処に来るまでにどんな物や世界を見て来たんだ?教えてくれ。』

……そう聴こえた。ハッキリと誰の声かは分からなかったが気になった。私はどこから来て、どんな物が好きで、此処に来るまでどんな物や世界を見て来たんだろうか?だからなのか私は、この暗い貯蔵層の中から外へ飛び出したかった。

そうすれば未来視としての能力も持つ龍眼で見た本当の自由な空、綺麗な海、広い大地が見えるから、とにかく外へ出たかった。

だけど外に出る前に、自らの一部を引き裂かれて大切なものを奪われたという感覚とそれを取り戻さねばならないという衝動、そんな喪失感とも言うべき感覚から逃れるべく、飢えにも似た感情に導かれるように近くに有ったノロをどんどんと取り込んだ。

そうして私の身体は巨大になり、貯蔵層の中から外に出た瞬間、私が知っていた自由な空は現世と隠世の境界線によって見えなくなり、綺麗な海も曇った空を映す様に濁ったようなものに見え、広い大地は私が隠世から呼んでしまった荒魂によって動物の死骸と人の血に

よって穢されていた。
それ故に、私は禍神と呼ばれ、周りの人間達が敵視し、この世界でただ一人だけとなった時、私は自分を守るために必死に考えて、嘘を吐いた。
――――自分は〝タギツヒメ〟という神であると。
そうすれば皆が私を攻撃しないと思った。あの境内のように皆がみんな、私を大切にしてくれるようにしてくれると思った。
だけど、違った。
「タギツヒメ。お前は私が封じる！そのために私はここにいる！」
……皆がみんな、私を殺そうとしていた。だから、私の頭の中は復讐心が芽生えた。それで一杯だった。……だけど、頭の何処かの片隅で、この世界に災厄を撒き散らすだけ撒き散らしたんだから、それも当然かなと思い始める部分もあった。……それに、何時かは人間の手によって、駆逐される運命に在ると龍眼が教えてくれたから、もうこの世に居たくないと思った。それで良いとすら思った。
だけど私は、
『美奈都先輩！駄目です！あなたまで…』
彼女は何を止めようとしているのか、
『篝は絶対渡さない!!』
彼女は何を守ろうとしているのか、
「篝…美奈都…私は…」
そして一人残されている彼女は何を泣いているのかを私は理解しようとした……。
そうして、私は『感情』という物を理解できたのだ。それ故に私は、人間の手によって駆逐される前に出会える子供の姿を視た。私は龍眼を通して、そのいずれ出会うことになるであろう子供に恋心という物を抱いた。興味を抱いた。そして欲した。
自らの一部を引き裂かれて、大切なものを奪われたという感覚とそれを取り戻さねばならないという衝動に駆られてしまう程に常に飢えている私は、人に駆逐される前にどうしても、私が恋心を抱いた子供に一目でも会いたいと強い衝動に駆られ、その衝動に容易く屈して

しまったのだ。
「……折神紫。我は取引を提案する。」
……だから私は、賭けに出た。一世一代の賭けである。
「――――禍神と化した我は、いずれ人の手により駆逐されるということだ。我は生存の道を模索した。それを実行してるに過ぎぬ。」
「そんな……江ノ島に封じ込めたのも特務隊を送り込んだのも……」
「そうだ折神紫。全てはお前をおびき出す演出に過ぎん。」
私は、この女に全てはおびき出すためにやったことであり、やったことであると嘘を並べ立てた。
……本当は偶発的な事故で、タンカー事故が起きたのだから、そんなことを計画する暇なんて無かった。ただ、たまたま私と融合することができる素質がある女が目の前に居たから、そういう演出で全て計算尽くだと言った方がこの女を追い詰めやすいと思ったから、そうしたまでに過ぎなかった。
ただ、不安要素もあった。この女が私を封印することを優先してしまえば、私が会いたかった子供に会えないという焦燥感があったのだ。
「じゃあ…篝は……美奈都は……。」
だからこそ私は、この現世に留まるべく、必死に彼女を私と同化するように必死で説いていた。
「我と同化しろ。さすれば藤原　美奈都と柊　篝の命は救われる。」
だからこそ私は、この二人を交渉材料に使った。上手く事が運ぶようにと、内心神様の名を騙る私が神様に祈っていた。
「我はお前と同化し、隠世の浅瀬に潜み傷を癒そう。今より十数年、お前は猶予を得る。それまでに我を滅ぼすことが出来ればお前の勝ちだ。」
「そんな馬鹿げた提案を……。」
そうして私は、更に嘘を並べた。並べ立てた。
私が一人の人の子である子供に恋心を抱いたから、お前の身体をよこせと言える訳がなかった。私は本心を隠したかったのだ。自分の弱さを他人に掴まれる様な気がしたから、神様の振りをして、人智を

超えた何かの様にも振る舞った。
「お前の結論は既に出ている。」
「！」
……私の結論も既に出ていた。それを隠しながら、嘘を身に纏い、この女に同化する様に迫った。そして、私はこの女と同化できたことを本当に喜んだ。

こうして私は、折神　紫の身体を乗っ取り、刀剣類管理局局長としての顔を得ることができた。
……だが、その中で私は紫が美奈都と篝のことを常に気に掛けているせいか、精神が壊れかかっていた。精神が壊れ、刀剣類管理局局長としての顔が保てなくなってしまえば、私が執り憑いているということに他の者に気付かれることになる。だから私は、それを危惧して紫に篝と美奈都に会わせることにした。
そこで、私は龍眼で視た子供と出会った。まだ3歳だったが、それがその子供だと私は分かったのだ。
恋焦がれた。あの仲睦まじい風景が私も欲しかった。
恋焦がれて、心が燃えて無くなるぐらいの熱を抱き、優という名の子を私の物にしたかった。自由な空と綺麗な海、そしてこの広い大地をこの子供と共に眺めたかった。ずっとずっと、一緒に居たかった。
けれど、あの仲睦まじい〝家族〟という姿を見た時、私の中で大きな〝矛盾〟が生じ、それを抱えた。私が私で無くなるような感覚に苛まれた。
どんなに思っても、あの〝家族〟の様に、なれないのだと。
どんなに願っても、私は〝命の輪〟から外れているのだと。
どんなに考えても、私は〝荒魂〟で、あの子は〝人〟なのだと。
どんなに頑張っても、私は人のように子を成して家族を作ることなんて出来ないし、その子供に私が生きていたという証を連綿と受け継いでいくことができないのだ。繋がる輪から外れた孤独な存在でし

かなかった。

それだけでなく、私は自分の大切な一部を奪った人間に対する怒りという怨嗟。それと同じぐらいの愛しさを抱いたという事実。

それに、御刀で斬り刻まれれば、私という存在が終わる。それは私にとってみれば『死』という概念に近いものでしかなかった。

……お笑い草だった。私という神様は、アダムとイブみたいな命を創造することもできない。それなのに、死という概念があり、それに人一倍恐れているのだ。それに気付いた私は、荒魂という存在を創った神様を心の奥底から怒った。怨んだ。呪った。そして、呪い続けた。

――――そこで、私は自身が抱える根源的な孤独というものを知った。

――――そこで、荒魂である私が人を愛するということに対する大きな矛盾を感じた。

だから、大きな矛盾を抱えた私は、私で無くなる前に、私の中で生じた〝恋心〟を必死な思いで捨てた。自分の身体の中にある全ての涙を流し、血を吐きそうな感覚と共に必死で捨てた。……人の文化には、花嫁に刀を持たせる風習があると聞いた。だからなのか、私という〝恋心〟に鬼丸国綱を託した。いつか、私の〝恋心〟に気付いてくれる様な気がしたから。

それと同時に私は、『恋心』を捨てた本体の方には『人間への怒り』が薄くなって行くという感覚が伝わって来ていた。このときに私は、人に対する『愛』も『憎悪』も等しく同じ物だということに気付かされたのだ……。

そうして、私は人間からも捨てられ、荒魂からも捨てられた者となった。

……紫と同化した時に＋αという文字は和製英語であり、英語にも日本語にも属されず、仲間外れの造語として扱われる。それを聞いた私は、人間にもなりきれない。化け物にもなりきれない私みたいなものだとも思った。

だからこそ、自由になった私はあの男に協力した。

「いいですよ。我が神!!」
スレイド博士という老人と。
この狂ってると噂される老人なら、私の「小さな子供と一緒に居たい。」という本心を聞かせ、それが吹聴されたとしても誰も信じないだろうという腹積もりで協力を仰いだ。それに、私を神と信じているこの狂った老人は、軍からも刀剣類管理局からも追い出されたのだ。こんな狂った老人の世迷言など、誰からも相手にされない仲間外れの者の言葉など、誰が信じるだろう。
そうして私は、スレイド博士の荒魂の融合実験に協力した。人と荒魂を融合させるノロのアンプルを完成させるために。
彼が自作したノロのアンプルを打った子供達が荒魂化し、失敗した度に殺し続けた。その時の私は何も思わなかった。ただの人を殺すことに躊躇なんて無かった。私の望みのためだったなら、何でも良かった。
そうしていく過程で、私はジョニー、ミカ、ニキータと出会って、不思議と彼等の意志を残してしまった。
『ニキータは足と腕が片っ方が無かったり、両目が潰されていたわたしのことをみんな気持ち悪がっていたから、……わたし荒魂だ、やったー。』
『あっ、おいそんなズルは無しだ、無し!俺だって荒魂だろぉ!!なっ、タギツヒメ!!』
『そうよ、だったら私も荒魂でしょっ!!そうでしょタギツヒメ!!』
不思議な子供達だったから残したのだろうか?
『そりゃあ、人間とは違うなんかスゲェのなんだろ?そんなスゲェのになりたいからだよ。』
……私のことをそんなふうに考えて、信じてくれる人に出会えるとは思えなかったからなのだろう。
「我が神よ!!ようやく完成しましたぞ!!」
そうして、彼等と過ごしていたとき、ノロのアンプルは完成したと告げられた。時は来たのだと私はこの時は大いに歓喜していた!!
「……完成したのか?」

だが、表情を強張らせたまま、私はスレイドを詰問した。
「ええ、ええ、迷える子羊たる私が遂に完成させましたとも！後はその子供を此処へ持ってくれば良いのです!!どのような手段でも構いません。死体を持って来ようとも、この私めが貴女とその子供と一緒に過ごせる様にしましょうとも!!」
それを聞いて私は更に歓喜した。死体でもその子を元に戻し、一緒に過ごせるようにしてくれるなど、私にとってみれば夢のような話なのだから。
「分かった！我は直ぐに行く!!準備を怠るでないぞ!!」
そう言って私は後悔を知らぬ獣となって、あの恋焦がれていた子供、優を手に入れるべく動いた。……私が、スレイドの話をまともに聞いていれば良かったと後悔することになることも知らず――――。

カミサマになった後悔

――――こうして後悔を知らぬ獣となった私はフードを被り、あの子供、優の元へと向かった。走った。

ようやく、人と荒魂の垣根を越えられるのだと本気で信じた。……いや、今にして思えば、信じたかったのだろう。

あの時はそれを覆い隠すためか、それとも早くあの恋焦がれていた子に早く会いたかったのか、足早に動いていた。

「刀使のお姉ちゃん……だあれ？」

……きっと、この子は私のことを荒魂だと分からないのだろう。それだけで私は、この子は私を忌避しないという事に歓喜した。

騙していることに変わりは無い。けれど、それだけでも私は幸福だった。

きっと、私の姿を見たら、怖がるだろうから。白い肌に、耳を覆い隠すような鬼の様な二本の角を生やしている人間なんて、この世に居ないのだから、だから私は決意した。

――――その子に向けて、御刀を振り下ろすことを。

こうして私は、僅かに息をするこの子を抱えながら、あの狂った老人、スレイド博士の元へ向かった。

これで、私はこの少年と一緒に過ごせると。そう思うだけで、僅かな息をするこの優という子供が愛おしくすら思えた。そうして、私と一緒に生きていけると。

……けれど、それは違った。

「ありがとうございます。この子にノロのアンプルを打ちこみます。」

スレイド博士はそう言うと、優に躊躇いも無くノロのアンプルを打ちこんだ。すると、優は泡を吹き始め、一目で分かるほどに苦しみ、白目を剥いてもがいていた。

「お、おい!!大丈夫なのか!!?」

「大丈夫です！次はタギツヒメ様がこの子の中に入るのですっ!!!」

それを聞いた私は、急いで彼に取り憑いた。

すると、優は小康状態に戻った。それに、私は安堵したのだ。
「……良かった。死ぬかと思うたぞ。」
「ええ、私の声が聴こえますか、タギツヒメ様？」
「うむ。聞こえておるぞ。」
「それは良かった。タギツヒメ様、良いですか？今、貴女はこの子から出てはなりません。今の状態で貴女様が出てしまえば、優くんはノロで強化された肉体を失い、死んでしまいます!!」
「ハ？では、我が外に出たい場合はどうすれば良いのだ!!？」
しかし、そこで私は、優にとって残酷な宣告となることを聞くことになる。
「なあに、簡単な話です!!その子に他の荒魂のノロを吸収させ、その子の体内のノロの残留量を増やせば良いだけなのですっ!!そうすれば、何れはその子に必要最低限のノロを残したまま、タギツヒメ様は外へ出れますし、優くんも荒魂に近い存在になれます!!……それは荒魂化が進めば、優くんも荒魂となって、貴女様と一緒に過ごせる様になります!!!!」
優を荒魂にさせることで、私と一緒に過ごせると、とても人とは思えないようなことを平然とスレイドというこの狂った老人は言ってのけたのだ。
……だけど、バカな子供だった私は、
「……それは良い!!お主、良くやったぞっ!!!!」
これで優か私が死んでもずっと一緒に居られると、本気で信じたのだ。……だが、そんなときに鎌府の刀使達が現れ、全てが水泡に帰した。
――――このときの私は、邪魔をされたことに憤慨していた。

……そうして、優は病院に移されて行った。
あと少しで私はこの子と一緒に過ごせると、そんなことばかり思っ

ていた。
そこで私は、優の姉である可奈美に出会った。
……彼女は泣いていた。その姿を見て、私が行っていたことは私が望んでいたこととは掛け離れていたのだとようやく気付き、そして子供でバカな私はとんでもないことをしてしまったのだとようやく気付いた。
『……神様、お願い。……また優ちゃんと一緒に居たい……！だから、だから今度は理不尽に怒ったりしない。酷いことも言わない。……ずっと一緒に居たいから、せめてお母さんとの約束を守りたいから、優ちゃんだけでも全てから守りたい。ここからでも良いから!!』
可奈美が涙を流しながら、神に祈る姿を見て、私は取り返しのつかないことをしてしまったのだと理解した。瞳から涙を流した。だから私は、必死で優の中に有る身体のノロを操作して、心臓マッサージを行ったり、とにかく必死で命を繋ぎ止めようとした。
『お……おはよう……。』
そうして、私のお陰か、それとも可奈美が祈った〝神〟に祈りが通じたのかは分からないけど、優は息を吹き返してくれた。
それを見た可奈美は喜び、わんわんと泣きながら優を抱き締めていた。
一人は荒魂を討伐する刀使。もう一人は半ば荒魂と化した子供。
その二人を姿を見て、もうあの仲睦まじい風景は無いのだと、私が壊してしまったのだと、ようやく理解した。
それで私は、優と可奈美にとんでもなく悪い事をしてしまったのだと、強い罪悪感を抱いてしまった。
『……えっ、えっとな、我は、我は……。』
だから私は、優と最初に出会ったとき怖かった。嫌われてしまったのではないかと、怒らせてしまったのではないかと私の頭の中はそれで一杯だった。自身が積み上げた罪科に苦しんだ。
『じゃあさ、ヒメちゃんで良いと思う。』
けれど、優は私のことを責めることもせず、ヒメちゃんと呼んでくれた。

……不思議だった。けれど、『あなたは私が荒魂にしたのに嫌っていないのか。』と言うことが出来なかった。

自分を神だと自称し、タギツヒメという名前を騙ることで自分に虚栄を張るしか出来ない子供は、自分が愛しいと思える子に自分という者を伝える術を持っていなかった。

嫌っていると返答されるのが何よりも怖かった。

『!……う、うむ。ありがとう。』

だから私は、優のことを真正面から見ることができなくて、俯きながら答えていた。

そうして私は、優だけでなくミカやジョニー、ニキータと一緒に私達だけの楽園を創り上げた。

……私達だけの楽園を創り上げた理由は、彼等を見ていて不憫と思ったからだろう。

親の金のために黒い欲望に晒される者、親と信じて戦い裏切られた者、金のために身体を傷付けられる者、親と呼べる者が居ない者といった者が多かった。

――――私はそこで知った。

人の中には人扱いされることも無い、いや、許されない者が居るのだということ。大切な物を奪われた私はなんて不幸な存在なのだろうと思っていたけど、彼等の前だと私の不幸は自慢すらならない。

――――それだけじゃない。

『彼奴はな、我を謀ったのだ。……普通なら、〝龍眼〟によるあらゆる可能性を見せられれば、その力を抑えきれず暴走する。しかし、我が伴侶はそうならない、何故だと思う?』

『それを耐えるために、暗示や薬物によって精神を壊し、無理矢理安定させたのだ。自分の研究を人に認めさせ、見返すためにな!……その代わり、表情が豊かだった優は、感情の起伏は少なくなってしまったがな。』

――――私は嘘を吐いた。

優と一緒に居たかったから、ニキータやミカ、ジョニーといった皆を人間と荒魂の融合実験の材料にしたということ。

優と一緒に居たかったから、私は御刀を使って優を襲ったのだということ。
それらを隠すために私は嘘を吐いた。……本当のことを言って、皆に嫌われたくなかったから……。
『我は神ぞ。』
――――嘘だった。
嘘だった。嘘だった。嘘だった!!
私がミカやニキータ、ジョニーと優だけでなく、朱音や可奈美達に対して言っていた言葉。
私が『神』であると自称したこと。
……実際はどうだ。私は彼等の人生を奪っただけに過ぎなかった。ただの我侭な子供だった。嘘が暴かれるのが怖いだけの……臆病な子供だったんだ。
『そりゃあ、人間とは違うなんかスゲェのなんだろ?そんなスゲェのになりたいからだよ。』
だけど、もう嘘とは言えなかった。言える訳がなかった!
私は皆から希望という灯を奪いたくなかった。
照らす道を無くすことで、皆を失望させたくなかった。
……自分のことを『神』だと名乗ることがこんなにも苦しくて、辛くて、友達を失望させて、心が痛むものだと知っていたら私は『神』だと名乗らなかった!!
――――結局は自分を神だと名乗る者の本当の姿は、人一倍臆病で誰かと話すのも苦手で、外の世界を怖がり、一人の世界に入り込む様な子供だったのだ。
そして、悪い未来も教えてくれた。どんなに頭を振っても、それは変わらなかった。……私が持つ龍眼がそれを教えてくれた。
私が優の中に籠れば籠るほど、私の友達が悪者にされていくという未来。
だから私は、今度は私が彼等を守る番だと思った。私が外に出ることで、私の友達のことを皆が悪く言わなくなって行くんだったら、私はそれをする。

その代わり、あのように弱った優の状態で私が抜け出せば、優の『器』は壊れ、私はもう二度と優の中に入って、皆に会うことが出来なくなるのだ。それが辛かった――――。

「……大丈夫だよ。……ヒメちゃん……おねーちゃん達をよろしくね。」

優はそれだけ言うと、荒魂化した残った左腕でタギツヒメに手を振ると、可奈美達のことをよろしく頼むと言うのであった。

「……ああ、任せてくれ。まだノロを注入すれば、助かる筈じゃ。」

タギツヒメは優にそう言って手を振ると、寿々花と姫和と共に優の病室から退室するのであった。

すると、優が居る病室の扉の前には、黒いスーツに身を包んでいたガタイの良い男達が数名ほど居た。

「お初にお目にかかります。タギツヒメ様でいらっしゃいますね？甲斐陸将補と官房長官がお待ちです。」

「……そいつが何用だ？」

「貴女には、二十年前の大災厄の真実ついての〝答弁〟を行っていただきたいというのが、甲斐陸将補と官房長官のお考えだとお聞きになれば、お分かりになりますでしょう？」

……つまり、甲斐陸将補と官房長官はタギツヒメに、二十年前の大災厄について政府にとって都合の良い真実を〝答弁〟してもらうことで、東京のホテルにて演説動画を流していた維新派の発言を否定してもらうと同時に排除したい維新派の勢いを削ごうとしていた。

「そうか、そういう魂胆か。……分かった。」

タギツヒメは甲斐陸将補と官房長官等の目的を理解しつつも、それに乗るしかなかった。そうしなければ、優とミカやジョニーといった友達の身の安全が保障されないから。

「それでは、この者がタギツヒメ様のエスコートをさせて頂きます。十条さんもそれでよろしいですわね？」

寿々花に、タギツヒメと同行するようにと言われた姫和は驚くと、あることを尋ねるのであった。
「おい！優はどうなる？此処には刀使の護衛が私以外に居ないんだぞ？」
「その点はご安心ください。彼が居ますので。」
姫和の詰問に、寿々花は平然とそう答えるのであった。そして、寿々花の言う〝彼〟とは、
「俺だよ。……今日から、優のお守りは俺になった。」
トーマスであった。
「……なっ？彼は刀使じゃないぞ？優は体内にノロを多く持っているんだぞ？それに吸い寄せられた荒魂に彼が対処できる訳ないだろ？」
姫和は、トーマスが刀使ではないこと、優の体内に有るノロに引き寄せられた荒魂に対処できないことを指摘し、トーマスでは優の護衛には不適格であると述べるのであった。
「ところがな、優が居る病室にはスペクトラム計すら反応が無いように細工がされているのさ、……となれば、荒魂以外の脅威が差し迫って来るということを考えないといけない。となると、他国の工作員等が此処に来ることを考えなければならないから、俺が適任ってことになった訳だ。そんなもん、母親が持ってたスペクトラム計を持ってるお前さんなら分かるだろう……って、お前さん持ってなかったんだったな。そりゃ、分からんか。」
しかし、トーマスは冷静に優が居る病室にはスペクトラム計すら反応がないように細工がされていると返答し、受け流していた。
……姫和がスペクトラム計を所持していないことを冷やかしながらであるが。
「……分かった。もういい、じゃあ頼むぞ。」
だが姫和は、トーマスの冷やかしを意に介することなく、寿々花の命令通りにタギツヒメと共に同行しようとしていた。
「おいおい、どーでも良いのかよ？アダルトチルドレンちゃんは？」
「……。」
「……お？何だ、怒ったのか？ホラッ、またあの時のように殴って来い

よ?」
「……お前が優を守るんだろ。警備員として。」
「ハッ、良い返事だ。」
姫和に無視されたトーマスは、姫和のことをアダルトチルドレンと差別的な言葉を使って尚も食って掛かるが、トーマスに警備員として働けとだけ言うと、タギツヒメの元へと駆け寄る姫和。
「……良いのか?」
「良い、今は何も考えたくない。」
タギツヒメは姫和に優の元から離れて良いのかと尋ねると、姫和は「何も考えたくない。」と返すのであった。
それに、姫和としてもタギツヒメに維新派の演説を否定してもらわなければならなかった。……そのあとに、邪魔者であるタギツヒメを処分すれば良いのだと考えつつ、私の母の仇でもあるのだからと必死で自分を正当化するように必死で、そんなことばかりを考えていた。
(……は?)
そこまで考えた姫和は、何故そこで母の仇だと考えたのか理解に苦しんだ。何故なら、姫和はもう優のためと称して、母の仇を討つことを捨てたのだ。荒魂を討つという刀使の使命を放棄したのだ。
そして姫和は理解した。いや、姫和は自らが抱える罪科を自覚し、心の中で告白した。
自分が述べた母の仇も、自分が語った刀使の使命も、全ては自分を飾るために利用し、自身が悲劇のヒロインとなれる物の様に扱ったのではないかと。
姫和はそれを考えるだけで罪悪感に囚われそうになる。溺れそうになる。ウサギの穴へと堕ちていく。
そして、姫和はウサギの穴に堕ちる感覚に囚われたせいか、気が滅入り、目の前に見える物や光景が不思議な世界の様に認識し、気分が悪くなってしまう。
「……ところでタギツヒメ様。貴女の御友人であらせられる優くんを改造したスレイド博士が維新派に在籍しているそうです。」
「!……なるほど、あやつが!!ならば、優を治してくれるかもしれん

な。」

しかし、寿々花はタギツヒメにスレイド博士が維新派に在籍していると伝えてきていた。その二人の会話を聴いていた姫和は、優を改造したスレイドを維新派から探し出し、捕らえることで優を元に戻すことができる情報を得ることができればと考えていた。

……そうすれば、優を救えることができると。

そう考えた姫和は、新たな決意を胸に前へと歩き出せる気持ちで一杯であった――――。

「……なるほど。彼女に始末してもらうと？」

……とある防衛省内の一室にて、密談が行われていた。その密談相手はトーマスやロークといった工作員を舞草に派遣し、刀剣類管理局並びに折神家を内部から親米派へと変えることで米国が隠世技術といった最先端の技術を独占するように内部工作を主導していたＣＩＡ長官であった。

「はい。彼女がスレイド博士を始末して下されば、全てを有耶無耶にすることができます。」

そして、そのＣＩＡ長官と話していたのは甲斐陸将補であり、その隣には中谷防衛大臣が居た。

「これには首相と官房長官も認可しております。……それと、維新派の行動に米軍は動くのでしょうか？」

「ああ、そこは任せたまえ。必要な支援は既に取り揃えている。……これは日米同盟もそうだが、これからは米軍も同盟各国の助けが必要になる。その際は２０年前の大災厄は我々は関与していなかったということで宜しく頼むよ。」

中谷は首相と官房長官も許可していることだと話すと、ＣＩＡ長官に米軍も支援してくれるのかと尋ねると、ＣＩＡ長官は必要な支援は

既に用意していると返答しつつ、２０年前の大災厄において米国は関与していなかったことにしてほしいと注文を付けていた。

……つまりは、アメリカの輸送船が事故を起こしたという真実を覆い隠すために、その清算に来たのである。

なお、甲斐と中谷、そしてＣＩＡ長官等の企みに首相と官房長官といった政府側の人間が認可している理由は、近々日本に五輪が開催されるため、世界的に注目される祭典が始まる前に反政府勢力を一掃することで五輪による右肩上がりの経済効果を期待したからである。それだけでなく、タギツヒメが優のために維新派と敵対してくれる公算が高いことも説得材料として使われたが……。

「そこはお任せ下さい。姫が２０年前に起きたことを我々の脚本通りに証言して下さることでしょう。……あの姫は、彼の少年が大事なのですから。」

甲斐は、ＣＩＡ長官にタギツヒメが優のために自分達の思い描く〝２０年前の大災厄の真実〟に箔を与えてくれると答えるのであった。

それを聞いたＣＩＡ長官は、力強く頷きながらこう返答するのであった。

「よろしく頼む。……Ｓ装備やスペクトラムファインダーといった隠世技術を使った国際共同開発が進めば、我々は中露との戦いを優位に進められるだろう。」

これから日米は、中露といった敵対勢力と相争うことになることを想定し、日米の緊密な連携が必要であると。

「ええ、それに彼の少年はもう用済みですので、処分は彼女等に任せましょう。」

それを聞いた甲斐は、頷きながら優を維新派達に始末させる算段は付けていると答えるのであった。

……優を始末する理由、それは２０年前の大災厄の真実を知るタギツヒメと同化していたこともそうだが、米軍の特殊作戦に深く関与していること、今後の中露との対立を考えると日米との同盟は最重要事項であったことから、日米同盟を潰しかねない情報を持つ優を処分する必要があったため、荒魂の殲滅を掲げる維新派に殺させようとして

いたのだ。
「……なるほど、彼女等に殺させることで維新派との戦いに姫に加わらせるということか、それで維新派も始末する魂胆なのだな？」
「ええ、それだけでなくクーデターを起こした維新派を刀剣類管理局並びに自衛隊と米軍が共同となって対処致しさえすれば、自衛隊が米軍と協力することに国民は納得することでしょう。」
それだけでなく、決起した維新派等を自衛隊と米軍が協力した刀剣類管理局が事態を収拾したと広まれば、集団的自衛権といった物に好感触を抱く国民が増えることになるであろうと甲斐はＣＩＡ長官に答えていた……。
――つまり、最初から優と維新派は死ぬことを望まれていたのだが、タギツヒメはそれを知る由も無かった。

――内閣府にある一室。
東京を拠点にする維新派に対する政府による緊急声明の内容を聞きに記者が集まっていた。
タギツヒメは、その様子を簾の奥から見ていた。
「本日はお忙しいところ、集まって頂きありがとうございます。」
タギツヒメが隠れる簾の前に毅然として立つ官房長官は、先ず定型文のような挨拶から始めるとつらつらと流れるように日本政府側の答弁を代弁していた。
「先ず、刀剣類管理局維新派なる組織が出した声明についてですが、関係各所に政府が問い質したところ事実無根の荒唐無稽なる話しであ

ると、先ずは新聞各社にお伝えします。」
　その話を聞いた記者達は、カメラのシャッター音と共に光を灯していた。その瞬きをしたくなるほどのフラッシュを受けながら、ある記者が官房長官に質問をしていた。
「官房長官。証拠はあるのでしょうか？」
「ええ、本日はもう一人詳しい話をできる方をお連れしております。……２０年前の大災厄の大荒魂の一部であるタギツヒメ氏です。」
　記者の質問に官房長官がそう答えると同時にタギツヒメを隠していた簾が上がり、事前に用意された机を前にタギツヒメは立ち上がる。
　……しかし、眩いと思える程のシャッター音とフラッシュを浴びたタギツヒメは驚いてしまう。それと同時にタギツヒメは机の上に自身が喋るべき内容が書かれた用紙があることも忘れ、頭が真っ白になってしまったのだ。
（……何を喋って良いのか……分からないっ!!?）
　……元々タギツヒメは『人を見ようとしていなかった』うえ、心の奥底に在る『根源的な孤独感を埋めたい』という『対話』を求める子供なのだが、それを悟られまいと『神』と自称することでどうにか虚勢を張って生きていた。これは、荒魂が人間と共生するという考えが間違いであると思い込んでいたからこそ生まれた弊害であるのだが、それだけでなくタギツヒメは今まで優といった心を許せる者としか喋らなかったために見ず知らずの人と話すことは今日で初めてなのである。
　……つまり、タギツヒメは多くのシャッター音とフラッシュを浴びたことも、大勢の見ず知らずの人に注目されながら話すことも無かったうえ、何時ものように自身を神と自称する虚勢を張れば、目の前に居る記者等を説得するのは難しいという状況であれば、タギツヒメはどうすれば良いのか分からないという心理状況に追い込まれ、もし失敗でもすれば２０年前の大災厄のように周りの人間が自分を悪人のように扱うのではないのかとパニックを起こしたのである。
　――そうなってしまえば、優達まで石を投げられてしまう――

―――

そんな考えが過り、喋ろうとするがしどろもどろとなってしまう。

「あっ……え、えと。……その。」

タギツヒメの消え入りそうな声をマイクが拾ってしまったことで、タギツヒメ達が居る内閣府の一室はその声で一杯になったのであった。

それを聞いた記者等の反応はポカンとしており、皆が皆、シャッター音とフラッシュを焚くことを止める程であった。

（……だ、だめだぁ。……私には……できない……。）

時が止まったかのように静まった場の状況から、タギツヒメは思わず今までの口調が変わるほどに全てを諦めかけていた。

（きっと私、皆みたいに上手く出来ないんだ……。）

優、ジョニー、ミカ、ニキータ、結芽、夜見の様に人と話すことなどできないのだろうと思い込む程に追い込まれていた。

――――しかし、何処からか、此処には居ないはずの親しい者の声が聞こえてきた。

和御魂の声

『そりゃあ、人間とは違うなんかスゲェのなんだろ?そんなスゲェのになりたいからだよ。』

タギツヒメの目の前の光景は内閣府ではなく、初めてジョニー等と出会った頃の光景に変わっていた。

(これは……これは、そう、龍眼が見せてくれる物……。私の心が見せてくる光景だ。)

その光景を見ながら、タギツヒメは嫌な顔をするどころか、和やかな顔となる。そして、もう会えないかもしれない思いからか、タギツヒメの瞳から雫が落ちそうになるが、どうにかそれを堪えながらジョニーの答えに返答するのである。

……あのときは、答えられなかった答えを。

「ううん。ちがう、違うよ。……私が『神様』とか名乗ったのは、周りの人に怖がって、噛み付くことで強がっただけの言葉だったんだよ。……本当は『神様』なんかじゃ無かった。」

目の前に映るジョニーに向かって、タギツヒメは自分が『神様』と名乗った理由は、周りの人間を怖がって噛み付いていただけだと、タギツヒメが答えるのであった。

『オイオイ、まさか自分は『我は神ぞ。』とか思っちゃっていたら、違ってたから恥ずかしいのか?キャーワタシ、タギツヒメは『我は神ぞ。』とか言っちゃって恥ずかしいわって。』

タギツヒメの答えにジョニーの幻は優しげな声と表情でそう返すのであった。

そのジョニーの表情を見て、声を聞いたタギツヒメは、

「そうだね。……神様を名乗ることがこんなに辛いことだったら、言わなかったよ。本当はみんなと……みんなと同じ子供になりたかった。……だから今はこう思うんだ。」

できる限り自分の言葉で、自分が思ったことを素直な気持ちで返していた。

「皆と一緒に扱ってくれるだけで、……きっとそれだけのことでも幸せなんだって教えてくれたんだよ。……私は貴方のお陰で、みんなのお陰で一人じゃなくなったんだから。」

涙を一滴零しながらも、子供の様な満面の笑みでタギツヒメはジョニーに返答していた。

本当は神様ではなく、皆と一緒で在りたかったと。皆がそれを気付かせてくれたと。

「……あの、何の話をしているのでしょうか？」

内閣府に居る記者の声を聞いたタギツヒメは、急に現実に戻ったかのようにジョニー達が居た光景ではなく、記者が大勢居る内閣府のとある一室の光景へと戻っていた。

……龍眼が見せてくれたものから、記者の声で現実にもどったのだと理解したタギツヒメは、

「我の名は……いや、私の名前はタギツヒメ。私は荒魂と呼ばれている者です。」

慇懃な態度を辞めて、正直な気持ちで、自分自身のことを荒魂と名乗るのであった。

――――我の名はタギツヒメ。お前達人間が言う所の荒魂である。

――――

嘗ての彼女であれば、そう答えたであろう。

しかし、神を辞めようとすることで禍神では無くなりつつあるタギツヒメは、自分が思ったことを嘘偽り無く記者達に話し続けるのであった。

「私は……人との共存を目指して、それを実現するために神としてではなく、あの人達の友達の一人として此処に居ます!!」

人を見ようとしなかった彼女は、大勢の記者を前にしても臆することなく大きな声で答えた。

神と名乗ることなく、禍神としてではなく、ただ一人の彼等の友人として現れたのだと。

「だって、こんな私を見ても〝荒魂になりたい〟と言ってくれた人達が居たからっ！」

だから私は言える。
人間と荒魂の共存を目指していると、それを実現してくれたであろう友人達が居たことを。
『俺が南アフリカで少年兵になった理由は、家族を殺した政府側の人間に復讐するためで、人殺しやら略奪やらをしまくったから、俺はお前とどう違うんだ?』
不意にタギツヒメはジョニーの言葉を思い起こしてしまう。
だから私は、人を殺したことがある少年兵だったジョニーのことをこう思える。
(……違うよね。人を憎んだり、恨んだり、殺したりできるのは化け物だけじゃない。……貴方は、貴方はバカでデリカシーも無かったけど、私を気遣ってくれる優しい子だったよ。)
こんな私にも対等に接してくれたから、私は一人じゃなくなった。
……優しい子だったと。
「だってもう私は、神様でも何でも無いからっ!!そう言ってくれた人達の友達として来たからっ!!」
私は神様でも何でもないと、そう答えるだけで居ないはずのジョニーが微笑んで此処に居るような気がした。
『私、相手をさせられた大人に汚れた女とか売女とか言われたことあるから私って荒魂?』
その次は、ミカの声がタギツヒメの心の中で聞こえた。
(そんな事ないよ。……私にとってみれば、貴女は何時だって……。)
こんな私相手でも優しくしてくれたし、心が綺麗な人だと何時も思っていた。
「……荒魂になろうとした子は、何時でも私に優しくしてくれた。その子は荒魂になろうとしていても、何時でも穢れていなかったと言える子が居たからっ!!」
私は貴女のことを穢れているとは思っていない。
何時だって、私に優しくしてくれた綺麗な女の子だったよ。と私は答えていた。

『ニキータは足と腕が片っ方が無かったり、両目が潰されていたわたしのことをみんな気持ち悪がっていたから、……わたし荒魂だ、やったー。』

そして今度は、ニキータの声がタギツヒメの心の中で過ぎる。

（……違うよね。姿形で……人と違うからって化け物になんて簡単になれないよね。）

だから、私はニキータのことをどう思ったのかを答えられる。答え続ける。

「人と違うからと言って、神様になれるものでも化け物になれるものでもないと教えてくれた人が居たからっ!!」

貴女は化け物じゃないと。そして貴女は私のことを化け物と言わなかったし、扱わなかったと答えることができた。

『……私さ、小さい頃に御刀に認められて、それで後先考えずに剣術を始めて、神童だと持て囃された……。』

次はタギツヒメの心の中には結芽の姿が過った。

『でも、病気で私は神童になれなくなって、神童とか言われて有頂天になった過去の自分に頼って、それに縋って、みんなに凄いところを見せて、自分を憶えてもらおうとしたんだ。……けれど、考えれば考えるほど、私が凄いんじゃなくって、御刀の方が凄いんじゃないかって、身体に宿る荒魂のお陰なんじゃないかって思う時があったんだ。』

その結芽は、過去の自分を頼って、縋って、自分の凄いところを見て憶えてもらおうとしていたと告げていた。そして、荒魂や御刀に頼る自分が他者を凄いと思わせることができるのかと思い悩んでいたことも告白していた。

『……ねえ、タギツヒメ。過去の自分に縋って、御刀に頼って、刀使である事に拘った私でも、タギツヒメは凄いって言ってくれる?思ってくれる?……そんな私がこの先も生きていたとして、みんなに凄いと思わせることができたかな?』

そして、結芽はタギツヒメに、過去を羨むばかりのそんな自分に人を凄いと思わせることができるのかと尋ねてくるのであった。

（……凄いと思わせることは出来たよ。……それを探すことも見つけ

ることも、生きてさえいれば、生きてさえいれば誰だって出来た!!
……私も最初はみんなから不要な存在だと思われ続けた。……けど、みんなが私を必要としてくれたように、結芽だって!!)
それに応えるかのようにタギツヒメは答えた。荒魂を斬って祓う存在である刀使に生きてさえいれば幸せになれたと、生きていて欲しかったと答えていた。
けれど、タギツヒメは貴女は色んな人に「凄い」と思わせることが”出来たよ。”ではなく、”出来た。”と言えない歯痒さも感じていた。それと同時に自分はそんな友人達を救えないちっぽけな存在であるとも再認識していた。
「結芽は私のために、この御刀をくれた。みんなみんな、私を必要としてくれた人が居たっ!!だから私もそれに応えたい!!みんなが生きていたこの素晴らしい世界を守りたいと!!!」
そして、タギツヒメは心の中で聞こえた結芽の声に応えるようにニッカリ青江を見せながら答えた。
私もみんなが必要だったと。だから、そんな人達と逢えたこの世界を守りたいと。
「……だけど、そんな私を必要としてくれた人達を否定するかのように、荒魂との共存を望まない人達もいる。だからこそ私はイチキシマヒメを、いや荒魂を自らの力として利用し、力を手にしようとしている者達である維新派を……私は断じて許すことができないっ!!」
だから、タギツヒメは宣言した。
「……だから私は、維新派を討つ。」
……刀剣類管理局維新派を討つと。
――――言えたじゃないですか。
タギツヒメはその宣言をした後、何処かから自分が考えた言葉を隠すことなく、正直に言えたことに対する称賛の声が聞こえていた。
……誰かは分からないが、その声は風の様に過ぎ去ると、消えて行った。
(……ありがとう、みんな。……みんなのお陰で、もう外の世界は怖くないよ。)

こうして、自分を偽り、自分の心をひた隠しにしていた子供は自分を偽ることなく、自分の意志を言葉に乗せて自分を表現することが出来た。

そうして、その子供は知らない人が多く居る外の世界を怖れることがなくなったのである。

――――東京駅のホテルにて、維新派はテレビでタギツヒメの声明を聞いていた。

『――――タギツヒメが語ったことは全て事実であり、維新派なる集団が述べることは事実無根であるということを、私と総理が保証致します。』

そして、テレビの中に居る官房長官は政府が維新派を否定し、タギツヒメの言うことを保証すると宣言すると、

『加えて、タギツヒメ氏の証言、並びに防衛省の監視カメラからタギツヒメ氏と同じ大荒魂の一部であるイチキシマヒメを維新派も隠匿しているという事実が判明致しました。』

荒魂の殲滅を掲げる維新派もタギツヒメと出自を同じくするイチキシマヒメを保有していると述べていた。

その官房長官の話に「バカなっ!!」と叫ぶ維新派に属する刀使。

『証拠はあるのですか?』

『証拠は、維新派なる集団が市ヶ谷基地を襲撃した際に監視カメラが捉えた映像を解析した結果、タギツヒメ氏並びにタキリヒメ氏と同じ反応をする刀使が居りましたことを確認致しました。……恐らく、この刀使に取り憑いているものだと思われます。』

証拠はあるのか?という記者の質問に官房長官は、維新派が市ヶ谷基地を襲撃した際に静をタキリヒメに反応する監視カメラで捉えた

ことにより、イチキシマヒメと融合した静にタギツヒメとタキリヒメの両名と同様の反応を計測したことを説明し、それが判明したと説いていた。……静の顔写真も公開して。

それを見た維新派の刀使と変革派の人達は明らかに動揺し、ざわついていた。

そもそもからして、維新派の全員がソフィアに付き従っていた訳ではない。

タキリヒメに支配されつつある社会に直訴したいと思う者、荒魂に怨みを抱く者が多く集まっていたのが実情であり、それがこうして維新派の重鎮が大荒魂と融合していると分かれば、動揺してしまうものである。

大義を失った集団は脆い物である。

事実、荒魂の殲滅を謳い政府の施設ごとタキリヒメを襲撃した集団が実は大荒魂の力を使っていたということは信用を失い、支持する者が居なくなってしまい、反乱の成功率は著しく下がってしまううえ、反乱成功後の統治も上手く行かないものである。

それだけでなく、大半の人間は理由無く人を殴るのは躊躇するものであり、大抵の人は何かしらの理由を述べてから攻撃したりするものである。そうでなければ、ただ暴力を振り回す危険な集団としか思われないだけなのであり、最悪の場合維新派は、己の都合で政府の施設を襲撃する危険な集団であると国民に認識される恐れがあるのだ。

「うっ、うろたえるなっ！敵のデマゴーグだっ!!」

「で、でも隊長達に事の仔細を確かめるべきでは？」

「……お前！敵のスパイか!?!!」

「いや、私は確認すべきだと言っているだけで「黙れスパイ!!」」

そうして、維新派の刀使同士の言い争いが発生してしまうことになってしまった。

それだけでなく、この刀使同士の争いを見た変革派の中には、刀剣類管理局本部にどう降伏するべきかを考えていた者が現れ始めたのである……。

『そして維新派等は市ヶ谷基地を襲撃し、基地の警護をしていた刀使

と自衛官等に少なからずの死傷者を出しただけでなく、維新派に属するソフィア氏は織田防衛事務次官の殺害及び、元親衛隊である夜見氏と結芽氏だけでなく、一般人にも甘言を用いて荒魂を投与したこと、鎌倉での大規模停電、国会前の暴動の扇動にも関与したことが判明致しました。よって、我々政府は維新派なる集団の降伏を促すと共に、タギツヒメ氏を支持するものであると日米両政府は此処で宣言致します。』

この官房長官の一言で、維新派は国民からの支持を完全に失うことになってしまった。

理由は、自衛隊の基地を襲撃したことが一番の要因ではあるが、殺害、人を荒魂化したこと、鎌倉での大規模停電だけでなく、国会前の暴動にも関与していることが暴露されたことで、維新派の者達が恐れていた事態、国民が維新派なる集団を危険なテロリストみたいな物であると認識し始めることが現実の物となり始めていた。

それだけでなく、荒魂と刀使達の戦いに国民が疲弊していたこともそうだが、人との共存を目指すことで国民の支持を得ていたタキリヒメが荒魂に対する悪いイメージを払拭したことで、国民は人型の荒魂に対して嫌悪感を持つ者が減っていたのである。そのタキリヒメの行動が土壌となって、涙を浮かべそうな表情で情を訴えるタギツヒメに共感を抱いた者が続出したことも相まって、政府の施設を襲撃し荒魂の殲滅を掲げる維新派を支持する者は殆ど現れなかったのである。

――――かくして維新派は、神であることを捨てた和御霊の声によって、一気に窮地に立たされることになる。

――――一方、優が居る病室。

そこでは、４．６㎜口径の弾を使うＭＰ７をジャケットの懐に隠し持ち、腰のホルスターには使い古された４５口径のガバメントを持つトーマスが、体内のノロの影響により弱った優の護衛をしていた。

「……トーマスおじいちゃん……大丈夫なの？」
しかし、優は弱弱しい声を出しながら、トーマスの安否を気遣うような発言をしていた。それを聞いたトーマスはどうしてそのような事を聞くのか気になり、尋ねるのであった。
「……どうしてそんな事を聞く？」
「だって、僕の護衛は誰にも頼まれていないんじゃないの？」
優に自分の護衛をすることは誰にも頼まれていないのではないか？と尋ねられたトーマスはピクリと反応してしまう。
事実、トーマスはＣＩＡ長官から優を見捨てるように本国に帰る指示を受けていたのだ。……だが、トーマスは何故か勝手に優の護衛をしていた。
「……。」
――――トーマスは優の護衛をしている理由を問われた際、トーマスは優の銃を取得するときのことを思い出していた。
「やあ、トーマス。」
「ああ、お前こそ大丈夫なのか？」
「まあな、お前さんのお陰でそれなりには儲かっている。……しかし、なんだってまた、ＨＫ４１６Ｃのフルカスタムと９ｍｍ仕様のＰ９３８が必要なんだ？お前さんが使うＭ４カービン銃は比較的手に入り易かったが、ＨＫ４１６Ｃなんざ、もう販売されてないから手に入れるのに苦労したぞ。」
優が使う銃の入手先は、知り合いの武器商人からであった。
「まあ、９歳のガキに使う物が必要だったからな。世話掛けた。」
「にしては、少し過保護じゃないか？」
武器商人の問いにトーマスは、９歳の子供が使うのに適している物が必要だったと返答していた。
その答えに、武器商人はトーマスの子供を使った政権転覆といった裏工作のことを知っているのか、その９歳の子供に与える銃としては少し過保護過ぎやしないかと尋ねていた。
「……どこかだ？」

「そりゃ、お前さんが使うＭ４はＡＣＯＧサイトを取り付けただけの物なのに、その９歳の子供が使うＨＫ４１６Ｃはどうにか手に入れた物ていうだけでなく、フォアグリップとサプレッサーやらを装着しろというのは、どう考えても過保護だと思うし、お前さんだけ安上がりにしてるじゃないか。」

トーマスが使うＭ４は一般の米軍兵も使う物でもあり、そのＭ４にＡＣＯＧという光学照準器を付けただけという代物である。

その一方で優が使うＨＫ４１６Ｃは米軍の特殊部隊が使うＨＫ４１６のショートカービンモデルのためＭ４よりも高額であり、そのうえ射撃時の安定性と操作性向上のためにフォアグリップと耳の保護のためにサプレッサーを装着するという仕上がりとなっている。

武器商人はそれを指摘していたのだ。被弾を考慮しなくて良い少年兵に持たせる武器としては、少々破格過ぎないかと。

「……もしかしてお前さん、別れた女房の息子の家族の事でも思い出したのか？」

「……関係無い。」

そうして武器商人は思い出したかのように、トーマスが嘗て別れた妻との間に出来た息子の家族に孫が居ることの影響なのかと尋ねられるのであった。

武器商人にそう尋ねられたトーマスは「関係無い。」と返すと、

「俺としては、その子供はこれからボディアーマーやらを着込んだ敵と交戦する確率が高いだろうから、ライフル弾で且つ俺が持つ銃とＳＴＴ隊員や自衛隊が持つ弾薬と共有できる５．５６㎜のライフル弾を使う銃が適格であり、それと９歳の体格を考慮すればショートカービンのライフルが一番良いと思っただけのことだ。」

優にカスタムされたＨＫ４１６Ｃを渡した理由を述べるのであった。

５．５６㎜のライフル弾を使う物であれば、自分やＳＴＴ隊員と自衛隊員が持つ銃の弾薬と共有可能であることと、ボディーアーマーで武装した敵を排除し易いという理由と９歳の体格に合う様にしたと。

「……９ｍｍ仕様のＰ９３８を注文したのも、同じ理由か？」

「……ああ、手が小さいから９ｍｍパラベラム弾を使うコンパクトサイズの自動拳銃が適当であると判断しただけだ。それに、ＳＩＧ社のなら俺も使ったことあるから、信用できる。」

「それが理由だったら、何故ストライカー式以外の自動拳銃に拘ったんだ？９ｍｍパラベラム弾を使うコンパクトサイズの自動拳銃なら、ストライカー式の方が更にコンパクトにされ、弾薬数も多い物が有ることぐらい分かるだろう？」

しかし、武器商人は尚も９ｍｍパラベラム弾を使うコンパクトサイズの自動拳銃を求めるなら、ストライカー式の９㎜仕様の秘匿携行（コンシールド）用の自動拳銃の方がＰ９３８よりもコンパクトで弾薬数が多い物が有ると述べていた。

実際ストライカー式は小型化もしやすいというメリットが有るため、ストライカー式のコンパクトサイズの自動拳銃の中にはＰ９３８よりも小さく、装弾数が多いのがある。それに、９ｍｍパラベラム弾に拘らなければ、同じＳＩＧ社製のＰ２３８の方が更に小さいのだが、トーマスが９㎜パラベラム弾と．４５ＡＣＰ弾以外を信用していない事もあったがために採用しなかったこと、トーマスがストライカー式を使ったことが無いこと、ストライカー式の拳銃を使った友人が事故を起こし死亡したということがあったために、ストライカー式の拳銃を信じていなかっただけでなく、怪我をさせたくなかったから、撃鉄式のＰ９３８にしたのである。

「……何が言いたい？」

武器商人にそう言われたトーマスはどういった意図で尋ねているのか訊いていた。

「お前、この仕事降りろ。……お前さんの商売がどんなものかは大体が想像付く。公に出来ないことだってな。お前さんの様な商売をする奴は情という隙を見せたら終わりなんだ。……お前さんが最初に言った言葉だ。」

トーマスに意図を問われた武器商人は、トーマスにこの仕事から足を洗えと言われるのであった。

「……お孫さんができたそうだな。」

「今、そんな話は関係無い。」
「いいや、俺は俺が親友だと思っている者には言わせてもらう。……良かったじゃないか、お前はもう充分戦ったんだ。過去の事を忘れて、只の好好爺になれるチャンスを得たんだ。もう齢なんだ。……そういう生き方も悪くないだろ？」
武器商人はトーマスの親友として忠告していた。
孫ができたのだから、もう軍属の真似事を辞めておけと。
「……ああ、考えとく。」
だが、トーマスは武器商人の忠告を聞くと、武器商人から離れるように歩くのであった――――。

「――――ガキが、面倒なこと考えてんじゃねえよ。お前はそんなこと考えなくて良いんだよ。」
トーマスは頼りにしている武器商人との会話を思い出すと、優に難しいことを考えるなと言って、誤魔化すのであった。
多分、別れた女房との間に出来た息子に子供ができ、孫と呼べる存在が現れたことで心境が変化した訳ではない。
多分、よく分からない教えのために、そんなことでロークやシェパード達が死んだことで心境が変化した訳ではない。
多分、俺が教官時代に育てた兵士が天使となって、天国の水先案内人になったことを思い出したことで心境が変化した訳ではない。
……多分、きっと、おそらく、俺の心はそんなことで心境が変化することは無い。
『――――トーマス君。タギツヒメがこちら側に付いた以上、もう彼の少年の利用価値は無くなった。後は彼女等が始末してくれることだろう。……君は何時も通りに痕跡を消し、本国に帰投したまえ。』
ＣＩＡ長官にそんなことを言われたから、此処に居るのでは無いと、そんなものは関係無いと。
トーマスは、そんな呪詛を心の中で何度も反復して呟きながら、優

を見据えていた。
　そんなときに、誰かが扉をノックしたことに気付いたトーマスは素早く扉の横に陣取り、ＭＰ７を構えると同時に扉だけを開け、威嚇射撃をした後に入って来た者の頭に向けて、ＭＰ７を突き付けたのである。
「ぴゃあああああ!!?」
「手を上げろ!!誰だお前っ!?」
　そうしてトーマスは優の居る病室に入って来た者に対して問い詰めるように言うのであった。
「えっ?いや、な、ななな何ですかぁっ!!?」
　優の病室入って来た者、内里　歩に対して述べるのであった。
「うるせぇっ!!とりあえず御刀を捨てろ、俺を見るな!壁の方を向け!壁に手を付けろっ!!」
　トーマスに物凄い剣幕で迫られた歩は素直に御刀を捨てて、壁の方に手を付けるのであった。
「え?いや、あの、わた、私は、綾小路中等部１年、内里歩です!!」
「んなこと聞いてねえ!何しに来た!!?」
「あ、あの、……その。」
　歩は慌てながらも、どうにか此処に来た理由を思い出し、どうにかそれを言葉にするのであった。
「あっ!あの、私、優ちゃんの知り合いです!……それで、優ちゃんと話がしたくて、それで此処に来ました!」
　優の居る部屋に居るということは、この人は護衛の人なのでは?と当たりを付けて、優の知り合いだと話すのであった。
「……優、そうなのか?」
「……誰?」
　しかし、当の優はノロの侵食が脳まで達してしまったため、歩のことをすっかり忘れていた。
「何でそんなこと言うのーーーー!!!!?」
　それを聞いた歩は、優の今の状態を知らないため、泣きながら訴えるのであった。

……その歩の姿を見たトーマスは、戦意を失うのであった。

子供達の夢

その後、トーマスにＭＰ７という銃を突き付けられた内里　歩は対処すら取れずにパニックを起こし、その醜態をトーマスに晒したことにより、トーマスから歩は昨今騒がしている維新派の一味ではないと判断すると、戦意を喪失し、歩に銃を突きつけるのを辞め、射線から外すのであった。

「……あー。つまり、お前は優の知り合いなんだな？」

無論、それだけが理由ではなく、優の今の症状、記憶障害の進行が予想よりも大きく進んでいることをトーマスは知っているので、恐らく優は歩のことを忘れている可能性が高いと判断したのだが……。

「えっ、凄い！……日本語ペラペラ？」

しかし、歩の間の抜けたような返答にトーマスは更に力が抜けるような気がしたのであった。

維新派の人間であれば、工作員のトーマスが居ることは承知しており、自分が日本語を喋れるかどうかということぐらい事前に知っている筈である。

今の歩のように尊敬しているかの様な表情をする訳がない。

「ああ、お前。……何と言うか、ちょっと良いか？」

トーマスにそう言われた歩は、トーマスを警戒することなく近付くのであった。……すると、トーマスは歩の耳元に口を近付けると、

「……良いか？アイツはノロの影響で記憶の一部を失っているんだ。今のアイツはお前のことを憶えていないから、それを頭に叩き込んで話せ。」

そう歩に注意を促すのであった。

それを聞いた歩は、トーマスは丹沢山で優が死闘を演じたことを隠そうとしていると気付いたため、トーマスのことをそういう人であると理解するのであった。

「……そうなんですか。トーマスさんって良い人なんですね。」

「……はぁっ!?」

そのため、歩はトーマスのことを『良い人』だと判断し、それを隠すことなく評したことに、トーマスは唖然とする。
「だって、優ちゃんのことを気に掛けているから、そう言っているんですよね？」
「……。」
優のことを説明してくれたから、良い人だとあっけらかんと朗らかな顔で答える歩に、トーマスは遂に頭を抱えそうになった。
「……少し、気分を変えてくる。」
「え？あ、あの……大丈夫ですか!?」
「ああ、その間はお前に護衛を任せるわ。大丈夫だろ？」
「あ、はい。」
トーマスは歩にそう言うと、優の居る病室から出るのであった。
（……あの女、何考えてやがる。俺が『良い人』だと？）
そして、トーマスは頭を抱えながらそう思った。
（分かってんのかアイツ。……過去に反米国家を少年兵を使って非人道国家として〝演出〟し、地図上からその反米国家を消した男のことを『良い人』だと言って来やがった。）
歩の頭は何処かおかしいのではないかと。
……だが、考えてみれば歩は自分のことを知らないのである。ならば、致し方の無い部分はあるのかも知れない。
（……でもなぁ、銃をぶっ放した俺のことを『良い人』とかイカレてるとしか……銃をぶっ放した？）
だが、トーマスはそこで疑問を抱いた。……何故、威嚇射撃をしたのだろうか？と。
御刀が見えた時点で射殺すべきであった。もしも、歩ではなく本当に維新派の刀使であったならば、距離を詰められているのに悠長に威嚇射撃している時点で勝利は難しかった。なのに、威嚇射撃をしたのである。
嘗ての自分だったのなら、優だったなら、あの時点で有無を言わさずに射殺しているはずである。
……そこで、トーマスは思った。

歩がトーマスのことを『良い人』だと評したのは、昔の少年兵を使って反米国家を潰したトーマスでは無くなっている様に見えたのではないのか。……となれば、本当におかしいのは歩なのだろうか？優の護衛として最適解な行動を取らなかった自分自身ではないのか？と思い悩み始める。

（……俺は、俺は本当に弱くなっているのか？）

自分のことを『良い人』だと言った歩の言葉は、トーマスにとってみれば、『弱くなった』ということと同じことなのである……。

――その一方で、歩は丹沢山でのことを優と話そうしていたのだが、

「……えーっと。」

歩は来る前に当の優がノロの影響で記憶障害となっていることを知らなかったがために、歩は出鼻を挫かれた形となり、先ずは何をどう話すべきか悩んでいた。

もしも、丹沢山での死闘を記憶障害で忘れていたら、記憶の齟齬で今の目に見えて弱っている優に対して、要らないストレスを掛けるかもしれないと思うと中々切り出せなかったのである。

「……ねえ。お名前は何て言うの？」

しかし、優の方から歩に話しかけてきたことで、歩は光明の一筋が見えたかのように感じ、若干早口で自分のことを話すのであった。

「あっ…わ、私は内里　歩って言うの！いつも優ちゃんのおねーちゃんとかに剣術とか教えてもらっていたから……それで、優ちゃんのことを知って、それで様子を見に行こうかなと思ったんだけど……。」

歩は若干、無理矢理にでも笑顔を作って優にそう話すのであった。

実際、優の元へ向かう際に、可奈美の所へと向かったのだが、

『……ごめん。ちょっと行けない。』

と断られたのである。

理由は、優が記憶障害といった症状が出始めたのもそうだが、胃袋

が隠世に繋がってしまったことで、今の優は点滴で直接注入するしか栄養補給が出来ないという状態になっているために満足な栄養補給ができない状態が続いていた。

……そのため、優は段々と痩せ細っていくことになり、嘗てスレイドの所から救出された時に、移送された病院で寝たきりの姿となった頃のようになっていたことで、可奈美は今の優の姿を直視して話すことが困難な状態となり、優から逃げる様に刀使の任務に没頭していた。

「……そうなんだ。」

しかし、優は歩が可奈美のことを話したにも関わらず、興味が無いかのように素っ気なく返答するのであった。

「その、寂しくないの？……一人ぼっちで？」

優の返答に冷たさを感じた歩は、一人で寂しくないのかと、可奈美に会えなくて寂しくないかと尋ねるのであった。

「……おねーちゃんに会えないのは寂しいけど、お仕事だから仕方が無いんでしょ？」

だが、優は仕方の無いことだと答えるのであった。そのため、その姿を見た歩は、優が我慢している様に見えた。

「それに、僕は荒魂だから……しょうがないんだよね。」

そんなことを言う優を見た歩は、優が堪え忍んでいる様にも見えたのである。それ故に、歩は必死で言葉を紡いだ。

「……そんなこと！……そんなことないよ。だって、私にとってみれば優ちゃんは優ちゃんで…だから、その、私は……。」

どうすれば良いのだろうか？

どう言えば納得するのだろうか？

そんな二つだけのことでも、反復するように何度も何度も繰り返しながら、どう答えれば良いのかと歩は考え続けていた。

……だが、どれほど時間を要しても次の言葉が紡がれることはなかった。

「……ねえ、おねーちゃんは良い人だね？」

そうして、歩の様子を見た優は、歩のことを『良い人』だと評する

のであった。
「!……そうかな。……私、優ちゃんを見たとき、本当は怖かったんだ。……何て言うか、身体の半分も荒魂になっている所を見て……本当に大丈夫なのかな?って、こっちに向かって来て、殴ったりしてくるんじゃないか?っていう考えが頭の片隅でずっと考えていたんだ。」
しかし、歩は優に『良い人』だと言われたことで、それを否定した。
何故なら、歩は自分のことを半ば荒魂と化している優のことを怖がっていた小心者だと思っていたからである。
「だから私、良い人じゃないよ。……ごめんね。」
「……普通なら、僕のことを怖がらないって言ったり、気味が悪いと言って逃げたりするけど、おねーちゃんはどれも違うよ。……僕を怖いと正直に、言えるし、……僕から逃げなかったよ?」
だが、自分は優を化け物扱いしたと言って、自分は『良い人』ではないと述べる歩に対して、優は正直に怖いと話したうえで、自分から逃げなかったと理由を述べると歩は悪い人ではないと答えるのであった。
「だから、……〝僕達〟の秘密を教えてあげるよ。」
優はそう言うと意識を手放し、ベッドの上へと倒れ込むのであった。
「え?」
歩は驚き、止めることもできずに、何をするのかを黙って見ることしかできなかった。
そうして、優が目を覚ましたのだが、歩は何故か今の優が優ではないと感じた。
「うっ……身体が鉛の様に重たい……ねえ、そこのおねーさん。……ちょっと立たせてくれる?」
「え?……あっ、うん。」
その予感は当たったのか、優の口調はあからさまに変わっていた。
そのことに驚きつつも、歩はベッドから優を少し起こすのであった。
「ありがとうおねーさん。……ところで、聞きたいことがあるんで

しょ?」
「……うん。聞きたいことがあったから来たんだ。……でも、その前に貴女は誰?」
　優の中に優ではない何かに対して、歩は貴女は誰なのかと尋ねていた。
「私は、燕　結芽……っていう刀使だった子供だよ。」
「えっ……?」
　その優ではない何かが親衛隊第四席であった燕　結芽であることに驚く歩。……そして、その結芽が、優の中に何故居るのか疑問であった。
「何で?……優ちゃんの中に結芽さんが?」
「単純な理由だよ。」
　歩に、結芽が何故優の中に居るのかと尋ねられた結芽は、苦しそうにしながらも、その理由を答えようとしていた。
「……小さい頃に御刀に選ばれて、それで有頂天になった子供が居たんだ。……あの時は世界が…世界が自分を中心にして回っているんだって思ってた。けど、私は病気に罹って、全て失っちゃった。」
　嘗ての結芽は、神童と言われるほどであったと答え、その全てが一瞬で無くなったと答えるのであった。
「それで私は……すごい私のことを、強い私のことをみんなに焼き付けたいっていう願いを叶えたくなって、ノロを身体に入れて、病気の身体を無理矢理動かせるようにしたんだ。」
「……。」
　結芽がノロを受け入れた理由を語り、その話を黙って聞く歩。
「それで、私はコイツと戦うことになって、取り込まれた時にヒメちゃんっていう名前になってたタギツヒメから紫様は大荒魂に取り憑かれているということを聞いて、それで成り行きで仕方なく協力しちゃったんだ。」
　結芽は優の胸を叩きながら語る。優と戦ったことがあること、優と共に戦った理由を、タギツヒメに協力した理由を、優の中に居続ける理由を。

「……刀使である私が荒魂であるタギツヒメに協力するのは、可笑しいと思う？」

それを聞いた歩は首を縦にすることも、否定することもできずに問うことしか出来なかった。

「……どうして協力しているの？」

「私さ、病気に罹って神童じゃなくなったとき、何て不幸なんだろうって思ってた。……けど、優の中には親と信じた人のために人を殺して、その人に裏切られた子や僅かなお金のために自分の身体を売らされる子、可哀想な子にして援助のお金を得るために手足と目を潰された子達ばっかりだったんだよね。……その子達と比べたら、私の〝不幸〟なんて自慢にもならなかったよ。」

結芽は語る。親の金のために黒い欲望に晒される者、親と信じて戦い裏切られた者、金のために身体を傷付けられる者、親と呼べる者が居ない者といった者が多かったことを。

そんな中で、病気で弱り神童で無くなっただけの子供の話なぞ〝不幸〟の内に入らないし、自慢にもならないと結芽は語るのであった。

「そんな中で私は……神童でもなく親衛隊の一人でもなく私を評価してくれた……私の大切な人達が言うんだ。『優のおねーさんは刀使だから、皆を救ってくれるって。』本気で信じているんだ。」

そして結芽は語る。自分を必要としてくれたジョニーやミカ、ニキータといった子供達の……単純だが、好きな人に囲まれるというだけだったが、幸福に包んでくれた同年代の友人達の夢がどんなものかを語っていた。

可奈美に自分達を救ってもらおうということを。

「……。」

「でも……私は刀使だったから分かるんだ。きっとその可奈美って人は自分の弟が半ば荒魂になっちゃったから……不憫だと思ってそう言ったんだって。……だから、私も私の大切な人達もどうなるか分かっちゃうんだ。」

結芽は語る。その同年代の友人達が語る夢は叶うことはないと。

「……。」

それを聞いた歩は何も答えることができなかった。歩も刀使であるがために荒魂化した人間がどうなるか知っていたのだから。

荒魂化した人間は最早人として扱われないのだと、稀に記憶を残し言葉を話す個体もいるが荒魂として御刀で斬って祓うことで救うしかないのだということを伍箇伝で学んだことを。

「違う！……違うよ！」

だが、歩は伍箇伝で学んだことを否定しようとした。

「私は、私は優ちゃんのお姉さんの衛藤さんのことを知っているんだ！だって私に剣術を教えてくれて、今でも各地で起こっている荒魂を次々にやっつけているし、無刀取りとかの技とか凄くて、それだけでなく色々な活躍も聞いているから本当に凄い刀使で……。」

可奈美は凄い刀使だから、優達を救ってくれると言って希望を与えようとした。……けれど、どれだけ可奈美が凄いと述べても、何故か自分の言葉が弱っていく感覚が強くなっていく様な気がしたのである。

剣術が凄い。活躍が凄い。

……どれだけ偉大な人かと述べても、どれだけ偉大さを並べても、可奈美はきっと自分の目の前に居る優と結芽達を救うことすらできないのだろうという思いが強くなっていっただけでなく、そんな事しか言えない自分の言葉の無さが悲しかった。何も出来ない自分が悔しかった。虚しさしか込み上げて来なかった。

「……だからさ、希望を捨てないで生きていこうよ?きっと……きっと、衛藤さんは……何も考えずにそんなことを述べないから、諦めないで欲しいんだ。」

それだけでなく歩は、胸が痛かった。嘘を吐いているような気さえした。

そして、可奈美は偉大な人間であると述べれば述べるほど、語れば語るほど、可奈美のことを勝手に過大に評価し、祀り上げているちっぽけな自分が居るということを強く……強く意識せざるを得なかった。

「……おねーさん、優しい人だね。」

「！」

「でもね、おねーさん。……私はさ、この大きいけどよく見たら狭い世界の中でその世界にとって要らない荒魂になっちゃったけど、〝不幸〟じゃないよ。友達になってくれた人が居てくれたら……みんなが居てくれるなら、寂しくも無いし、辛くも無いし、怖くもないよ。……でも、後悔していることはあるんだ。」

　生きていて欲しいと願う歩に対して、結芽は今も後悔していることを語る。

「もしも、もしもさ、私達刀使が荒魂と違う形で出逢えていたら……タギツヒメみたいな……ううん、もうタギツヒメじゃないね。ヒメちゃんみたいな子と会えていたら、私とヒメちゃんはずっと友達だったのかな？戦わずに済んだのかな？もし、そうなら私のことをずっと覚えてくれる友達を傷付けていたことになるから、それが今も後悔していることなんだ。……だからさ、おねーさん。泣かないで……。私が居なくなった後の世界が私みたいな剣を振るしか能が無い子供でもヒメちゃんみたいな子と仲良くできたり、ヒメちゃんが居ても困らないぐらい広くて優しい世界にして欲しいな。」

　荒魂も人間も関係無く生きられ、そして自分達の様な外れ者を迎え入れてくれる世界にして欲しいと歩に語る結芽。

「そうすれば、私みたいなバカな子が……力を振るえば自分を認めてくれると勘違いしている子が荒魂をただ斬る以外の方法で仲良くなって、……後悔する生き方をしない様になってくれれば……みんなみんな生きていけるんだよ。」

　そして結芽は涙を堪えながら、自分みたいな力を振るえば自分を認めてくれると勘違いしている人が後悔しない生き方ができる世界にしてほしいと、自分達の様な者でも生きていても良い世界して欲しいと歩に告げるのであった。

「……そうだよね。違うよね。」

　歩は結芽の声を聴き、絞り出すように、自分に向けて言うように述べていた。

「……私、鎌倉で憧れの人に会えたんだ。その人はとっても強い刀使

で、私も早くあんな風に人の役に立つ刀使になれたらって……その人を見て思った事をすっかり忘れてた。……強くなるよりも、大切な事を忘れていたんだ。」

自分がその人に憧れた理由は〝強さ〟ではなく、その人の〝在り様〟であったと答えていた。

「だから私が衛藤さんに憧れた様に、優ちゃんや結芽さん、それにあなた達の大切な友達が憧れる様な刀使になるよ。……そうすれば……そうすれば、きっと私の声を聴いてくれる人が居てくれるようになって、それで優ちゃん達も受け容れてくれる社会をみんながみんな創る様になるよ！……だから、私を信じて!!」

だからこそ、燕の夢を聞いた歩は〝人から尊敬される刀使〟になると答えるのであった。

そして歩という少女は後戻りせぬように決意しなければならなかった。ただ単純に〝強さ〟だけを求める刀使になるのではなく、人から〝尊敬〟される人間になると。

「……うん。……ありがとうおねーさん。信じてるからね。」

それを聞いた結芽は、感極まったのか涙を流すのであった。

――――そうして、優の居る病室から退室した歩は部屋の外で待機していたトーマスと会ってしまった。

そのため、トーマスは歩に話しかけるのであった。

「……もう終わったのか？」

「はい。……私、自分を見失っていたんだと思います。」

「迷いは無くなったのか？」

「はい。……大切なものを私は貰いましたから、もう迷うことはないです。」

歩は迷うことなく、トーマスにそう返答していた。

「……ひとつ良い事を教えてやるよ。ああいうのを真正面から見れば

自分が傷付くだけだから、もう見るな。」
トーマスはそう言って、歩に優達のことを引きずるなと言うのであった。そして、優とはもう関わるなとも言っていたのであった。
「忠告ありがとうございます。……だけど、私はもう決めたんです。あの子達に背を向けることはできないって。」
しかし、歩はトーマスの言葉に臆することなくそう答えるのであった。
もう、優達や結芽の友達達を化け物扱いしない。
もう、可奈美に過度な期待を掛けて困らせない。
もう、目に見える〝強さ〟だけを追い求めないと。優といった子供達が憧れる様な〝在り方〟を追い求めると。
もう、あの子達のために一切迷わないと。
「だから私は、見捨てることはしません。」
歩はそう言うと、トーマスを通り過ぎていくように歩き出して行くのであった。子供達の夢を抱きながら、歩は歩んで行くのであった。
それをトーマスは後ろ目で見ると、歩に苛立つのであった。
「クソっ！」
ガシャン！とパイプ椅子を蹴って苛立ちを紛らわせようとするが、それでも苛立ちが治まらないことにトーマスは不快感を抱いていた。
「……。」
だが、トーマスは心の奥底で何に苛ついているのか理解していた。かつての自分は〝英雄〟だか〝ヒーロー〟だかに憧れる子供であった。それ故にアメリカ軍に入隊し、ベトナムに送られ、多くの戦友を失いながらも帰国したときにアメリカの空港で言われた事は〝赤ん坊殺し〟や〝人殺し〟といった非難の声であった。その一方で、朝鮮戦争やイラク戦争帰りのアメリカ軍人と幼い少女が刀を振り回すという刀使ばかりが脚光を浴びていたことが許せなかった。
だから、嫉妬したのだ。この世界にも、刀使にも。
（……ああ、そうだったな。……疲れた。……本当に疲れたな。）
だが、そんなことを考えていたトーマスは急にドッと疲れが出て来たのである。

自分達がベトナムから帰ってきたときに自分と亡くなった戦友達に対して罵詈雑言を浴びせる祖国。
自分が子供やら何やらを使って国の政権転覆をした時に、素知らぬ顔で綺麗事を並べ立てる祖国。
マイケルとシェパード、それにロークといった自分が育てた兵士が死んだことに何も言わないし、元から存在しなかったかの様に振る舞う祖国。
その次は、自分が育てた優をただ見捨てろという命令を下してくる祖国。
（……本当に……何もかも疲れた。）
トーマスはそれだけ思うと、何もかも投げ捨てたい思いを抱きながら、優の居る病室の中へと入って行った。

夢と現実

「可奈美ちゃんもどうぞ。」
舞衣がそう言って差し出されている多くのお菓子。
チョコミント味、星型、ドーナツ、チョコチップといった舞衣が作った菓子が並べられ、そして喉の渇きを潤すオレンジジュースも添えられていた。
それが並べられていた理由は、維新派との決戦に備えてのこともあるが、優のことで傷付いているであろう可奈美を励ますべく舞衣、薫、エレンの三人が部屋に集まって行われた……。（なお、姫和と沙耶香が欠席しているが、その理由はタギツヒメがとある病室へと向かう際の護衛として沙耶香が抜擢されたこと、そして姫和は気分が悪いと言って欠席していた。）
「う～ん……悩むなぁ。」
そんな可奈美は、顎に手を当てながら悩みつつ、どれに手に付けるべきかという素振りを見せるだけでなく、
「全部食べたいけど食べ過ぎると明日の任務に障りそうだし……。」
可奈美は明日の任務に差し障りそうだと言っていた。
「心配するな。そん時は俺が代わりに出てやるから。」
「!?」
「って、何だよ……。」
可奈美が明日の任務に差し障ると言うと、意外にも任務に不真面目な薫が『代わる』と述べたことに驚く舞衣とエレン。
「あの……薫、平気デスか?」
「おい、どういう意味だエレン?…って、ドーナツ食った手でデコを触るなよ!わざとだろっ!」
そうして始まるのは、エレンと薫の二人による漫才のようなやりとり。それを見た可奈美は〝片方だけ口角を〟僅かに上げて微笑みながら、笑顔でチョコミント味のお菓子を手に取るのであった。
「じゃあ私これにしよーっと、これチョコミント味?結構いけるかも、

歯磨き粉みたいな味とか言ってたけど、これなら姫和ちゃんがこだわる気持ちもわかるなー。これは、姫和ちゃんに誤らないとなー。」
「あっ……うん。」
「舞衣ちゃんお手製のチョコミント味のお菓子があったのに、姫和ちゃん今日は具合が悪くて来れなかったのは、運が悪かったなー。」
　可奈美はエレンと薫の漫才染みた物を見て察したのか、手に取ったチョコミント味のお菓子を使って、笑顔でチョコミント味もバカにできないとか、こだわる気持ちも分かると言って、場を和ませようとしていた。その可奈美の姿を見たエレンと舞衣はいたたまれない思いで見ていたうえ、舞衣だけが沈痛な面持ちで返事をしていた。
「……可奈美、本気で俺達が気付いてないと思ってるのか？」
「え？……ああ、こっちのお菓子？バレちゃったか～。」
　薫の追及に、可奈美は笑いながらもう一方のお菓子を手に取って、誤魔化そうとする。
　……しかし、
「もうやめよう可奈美ちゃん。」
「カナミンがいっぱい我慢してること、私達みんな知ってマス。」
　可奈美の空元気には、薫だけでなく舞衣とエレンも気が付いており、可奈美に無理に取り繕う必要は無いと言うのであった。
「えっ、……え～？やめようって何？我慢って何？やだな～皆、私がそんなにおかしく見えるかな？」
　そして、舞衣達にそう言われた可奈美は、いつもと変わらない片方だけ口角を上げた笑顔で、且つ早口で捲し立てるように言っているところから、明らかに動揺していることが伺えた。
「笑いたくないなら笑うな！」
　故に、薫は可奈美に伝える。
　無理して取り繕う様に笑うなと。……しかし、
「ハハ、そうか笑ってるんだ。……ねぇ、私笑ってる？」
　可奈美はいつもと変わらない笑顔でそう答えた。
「ねぇ、私笑えてるのかな？……もうよく分からないんだ。何て言うか、心と身体が一致していないと言うか、今自分が本当に笑っている

のか、それとも変な顔をしているのか、もしかしたら氷ったように固まった表情しているのか……よく分かんないんだ。」

そして、可奈美は薫達に捲し立てる様に言う。……自分は、笑っているのかと、

「……ねえ、最近分かったんだ～。どんなに苦しくても、どんなに辛くても、どんなことが遭っても、笑えばそんな感情が消えて無くなるんだ～。」

「だから、……無理して笑うなって……。」

更に可奈美は言う。

どんなに苦しいことが遭っても笑うだけで苦しいと思う気持ちが紛れると。

それを聞いた薫は、それを無理して笑っていると指摘するが、

「……でもね、薫ちゃん。優ちゃんがあんな状態になった後で、何でか知らないけど、部屋の中で笑ったの。何の感情も抱くことなく笑ったの。今も何であの時大きな声で笑えたのか……本気で理解できないんだ。」

可奈美は薫にあることを話した。

優が様々な障害を負って今も病院から出れない状態になっているにも関わらず、そのことで一人部屋で意味も無く大きく笑えた理由が自己防衛反応なのかどうなのか……分からなかった。

「……でもね。部屋の中で一人で笑った時は本当に苦しさとか無くなって、心地良さを感じたんだ。……殆どの人はそれは自己防衛反応だと答えるかもしれないけど、本当はさ、私は優ちゃんのことを邪魔に感じてて、それで居なくなると思うと、心の何処かでモヤモヤが晴れた気分になれる嫌な自分が居るんだよね。そんなこと考える自分が居るんだよね。……でも！それを否定する考えが過ぎるんだけど、それはほんの一瞬だけで終わるんだよね。後の言葉が続かないんだ。」

可奈美は〝いつもと変わらない笑顔で〟告げる。

優が居なくなることで、自分が苦しまずにすむと考える自分が居ること。だけど、それを必死に否定する自分も心の中に居ること。だ

が、その否定する自分は後の言葉も紡ぐことなく、一瞬で霧散してしまうこと。

それらの考えがグルグルと何度も意味も無く頭の中で延々と回ることで可奈美は疲弊し、遂には自分は本当の感情を出しているのか、それともももう感情は死んでいるのか、それか本当は自分は嫌な部分が出ているときが本性なのかと悩んでいた。

「……お、おい。可奈美？」

「だから、私は笑っているのかな？それとも、嗤っているのかな？」

――――可奈美は、本当の自分の笑顔が見れなくなりつつあった。

お菓子を食べる集まりに出席できなかった沙耶香は、とある病室に向かうタギツヒメの護衛として同行していた。

「……タギツヒメ。」

「ん？何か用、沙耶香？」

「どうして私を選んだの？」

そして、その病室に向かう途上の廊下で沙耶香は口調が変わったタギツヒメに何故私を護衛として選んだのかと問うのであった。

「……どうしてそう思ったの？」

「えっと……護衛なら私一人でなく、可奈美やエレンと薫も呼んだ方が良いと思ったから。」

「そうだね。護衛の人数は多い方が良いかもしれない。……けれど、貴女が今から向かう病室に居る人と話すことができたら良いなと思って連れて来たのが理由の一つで、もう一つの理由は他の人に見せたくなかったというのも理由かな。」

沙耶香に自分を護衛として選んだ理由は、今から向かう病室に居る人と話しをするために必要だから呼んだとタギツヒメは答えるのであった。

それを聞いた沙耶香は、自分と関わりのある人物の可能性が高いと考えていた。そうして、自分と関わりのある人間を虱潰しに思い当って行く内にある人物のことを思い浮かべるのであった。

「……沙耶香。荒魂と人間は共存できるかな？」

「私はできると思う。……私は、任務さえ達成できれば良いと考えていた。けど、薫が戦う前によく考えろって言ってた。だから、今はこうやって人と荒魂の共存を考える貴女を守ることができれば荒魂と人間は共存できるような気がした。……だから、私はタギツヒメ……いや、違うよね。ヒメちゃんって呼んでいい？」

「……良いよ。」

タギツヒメに荒魂と人間は共存できるかと問われた沙耶香は、荒魂と人間の共存を考えるタギツヒメを知り、信じることにしたと、荒魂と人間は共存できると答え、それを証明するかの如く、タギツヒメにヒメちゃんと呼んで良いかと尋ねると、タギツヒメは「良いよ。」と返すのであった。

「……魂のこもってない剣じゃ何も斬れない。戦う前によく考えろ。っていうのを教えてもらったら、空っぽだった私を満たしてくれた。だから、それを大事にしたい。」

タギツヒメはそれを聞いて、あることを思い出していた。

それは、沙耶香と可奈美が二度目に累の自宅で邂逅したときのこと、沙耶香が可奈美に御刀を奪い取られ、無力化されたときに言われた『魂のこもってない剣じゃ何も斬れない。』という言葉。

「……魂のこもってない剣か。」

それを思い起こすとタギツヒメは、不意に結芽の顔が思い浮かべるのであった。

「……できたら、貴女から話しかけてくれる？」

そして、沙耶香とタギツヒメが話している内に目的地に到着していたらしく、沙耶香はタギツヒメに病室に居る人物に話しかけてくれるかと頼まれるのであった。

「……分かった。」

タギツヒメを信じることを決めた沙耶香は、目的地の病室の扉を開

けるのであった。
そして、病室に居たのは……。
「……えっ？」
見知った顔の女がベッドに腰掛けて居た。……しかし、どこか雰囲気が違うことに違和感を感じた沙耶香は名前をつい呼んでしまう。
「……高津……学……長？」
名前を呼ばれたことに反応したのか、その女は振り向いて声を発した。
「……？貴女は誰？……高津学長って誰？」
今までの雪那とは思えない口調に沙耶香は違和感を感じ、ベッドに腰掛けている女を見つめていた。
……彼女は本当に……高津　雪那なのかと？
「！……ああ、貴女なの？私の妙法村正を代わりに持ってくれる人は。」
「……え？」
だが、沙耶香の疑問に答えるかのようにベッドに腰掛けている女は嘗て自分が使っていた妙法村正を沙耶香が携えているところを見て、貴女が使っているのかと尋ねられたため、沙耶香は目の前に居るこのベッドに腰掛けている女が高津　雪那だと確信する。
「……そうなんだ。仕方ないか。私はもう歩けないみたいだし、そもそも私の実力は高くないみたいだから、刀使としてはもう使えないと判断されて、違う人に妙法村正が渡っても仕方ないか。……もうちょっと、刀使を続けたかったなぁ。」
雪那にそう言われた沙耶香は、更に違和感を感じていた。
雪那は元刀使であるため、年齢を重ねた女性に御刀は反応しないことは知っているはずである。……なのに、彼女は今も刀使であるかのように述べているのである。
「……でも、仕方ないよね。……だから、私の分まで頑張って。」
それだけでなく、沙耶香のことを知らないのか、嘗て自分が使っていた妙法村正を渡すから私の分まで頑張って欲しいと述べながら、顔を背ける雪那。

……これはどういうことなのだろうか?と疑問に思う沙耶香。
「あ……あの、……雪那さん?」
「何かしら?」
沙耶香は薫に言われたことを思い出す。よく考えろという言葉を。
この状況はどういうことかと。
「……ごめんなさい。少し離れます。」
そのため、事情を知っているであろうタギツヒメに沙耶香は聞きに行くのであった。
「……タギツヒメ、学長は?」
「沙耶香。雪那は今の維新派達に捕らわれていたことは知っているか?」
沙耶香に雪那の状態を問われたタギツヒメは、沙耶香に雪那が維新派に捕らわれていたことを知っているかと尋ねる。そのため、雪那が維新派に捕らわれていたという事を初めて聞いた沙耶香は、驚愕の表情を浮かべると同時に突然地面に穴が空いたかのような浮遊感と現実感の無さが心の中に襲ってきたのである。
「その顔を見る限り……知らされていなかったんだね。維新派の連中は鎌府が研究していたノロのアンプルのデータが欲しかった。……だから、大荒魂の精神支配を受けやすいノロのアンプルを使って、精神を操って無理矢理情報を引き出したの。人体に毒でしかないノロを打ち込んだことと精神を無理矢理操作しようとした影響もあるだろうけど……。」
「!!」
「……無理矢理精神を操って情報を引き出そうとすればどうなるか分かる?強力な自白剤で無理矢理情報を引き出したのと変わりないし、ノロの影響もあって、その人の精神も壊れやすくなる。」
更にタギツヒメは沙耶香に話す。
維新派に捕まった雪那は、大荒魂の精神支配を受けやすいノロのアンプルを打ち、無理矢理精神支配された状態でノロのアンプルの情報を引き出したことで雪那の精神は壊れてしまったとタギツヒメは説明していた。

「……それに、より精神支配を受けやすいようにするために、そのノロのアンプルを打つ前に爪を剥がすといった拷問もされたみたい。」

それだけでなく、大荒魂による精神支配を受けやすいよう精神を弱めさせるべく拷問された跡も残っていたと沙耶香に話していた。

「……それで、学長は……学長はどういう状態なの？」

タギツヒメの話を聞いた沙耶香は、今の雪那はどのような状態なのかとタギツヒメに訊くのであった。

「……拷問とノロのアンプルで無理矢理自白された影響で記憶が混濁していて……彼女は歩けなくなっただけでなく、記憶も２０年前の大災厄後まで戻っていて、沙耶香のことも夜見のことも忘れている。」

それを聞いた沙耶香は、意気消沈していた。

……私が、私があのとき見捨てたからこうなってしまったのかと。

「……ねえ、沙耶香。夜見や結芽、優といった人達がああいう末路を遂げるノロの塊である荒魂と人間は本当に……それでも本当に共存できると思う？」

意気消沈した沙耶香を見たタギツヒメは、再度尋ねていた。

……ノロのアンプルに関わった人間は破滅していく、そんな事実があっても荒魂と人間は共存できるのかと。

「タギツヒメ……だとしたら、何で私を呼んだの？」

そう問われた沙耶香は、タギツヒメに問い返していた。

……なら、何故自分を呼んだのかと。

「……助けて欲しかったんだよね？一人じゃどうしようも無いから。だから、学長と話したことがある私を呼んで、それで学長と話をしやすくしたかったんだよね？」

そして、沙耶香に雪那と話をしやすくするために自分を呼んだのではないかとタギツヒメに尋ねるのであった。すると、タギツヒメは頭を縦に振りながら答える。

「……そうだよ。友達が……夜見が貴女の研究は無駄じゃなかったって、人を救ったって伝えたいんだけど、私はどうすれば良いのか分からないから……夜見が大切に想っていた学長は私のことを知らないから、驚かせて困らせたくないから……面識のある沙耶香が代わりに

それを伝えてくれたら……って思ったんだ。」
　雪那に夜見の『貴女の研究は確かに人を救った。』という想いを雪那にとって面識の無いタギツヒメよりも、沙耶香が代わりに伝える方が良いと考え、此処に呼んだとタギツヒメは答えていた。
「……そっか、だったら、今度は私が助ける番。私は、私はできると思う。タギツヒメの言っていること。」
　タギツヒメの返答を聞いた沙耶香は、荒魂と人間が共存できると答えると雪那の居る病室へと向かって行く。
「……ちょっと、お話……良いですか？……雪那さん。」
「？」
　すると沙耶香は、雪那に話がしたいと言って、雪那の横に座るのであった。
「私のことを知らないかもしれ……ません。けど、私は貴女が居てくれたから……貴女は私に刀使のことや剣術のこと、色々大切なことを教えてくれたから……私は刀使になれました。」
　そうして沙耶香は雪那に告げる。
　酷いことも遭ったけど、貴女のお陰で刀使になれたと。
「……そして刀使になった私は、こんな私でも友達になってくれる人が居て、その人達からとても大切なことを学べました。……だから、私は貴女が居て……刀使になれたことをとても感謝しています。」
　そして、貴女のお陰で刀使になれたから、私は友達や大切なことも学べる環境へ行かせてくれたことに感謝していると沙耶香は雪那に述べていた。
「それだけじゃない。……今は此処に来れない私の友達がみんな貴女のお陰で救われたことを伝えて欲しいと言っていました。……だから、自分のことを〝使えない〟とか、〝役立たず〟だとか卑下しないでください。私も……私だけでなく、私の友達も貴女のことを必要だと思っています！……だから、また私達の所に戻ってきて。」
　そして、私だけでなく、私の友達も貴女にとても感謝し、必要だと思っている人は沢山居るから、自分のことを〝使えない〟とか、〝役立たず〟だとか卑下しないで欲しいと沙耶香は雪那に精一杯感情を

込め、自分なりに考えて伝えるのであった。
「……そう…なんだ。何だか、嬉しいな。……私、紫姉様からも、誰からも必要とされてないんじゃないかって思ってたから、……ありがとう。ごめんね。御刀しか渡せなくて……本当なら、私達の代で貴女達が怪我しなくて済むようにしなければならなかったのに……。」
沙耶香の、タギツヒメと夜見の思いを乗せた言葉を聞いた雪那は涙を流しながら、朗らかな笑顔で沙耶香に感謝の言葉を述べるのであった。
その憑き物が落ち、ノロのアンプルによって生じた苦痛から解放された雪那の姿を見た沙耶香は涙を堪えながら返答する。
「……ううん、大丈夫です。……糸見　沙耶香、任務に戻ります。」
雪那から受け継いだ妙法村正を携え、これからも刀使として活躍していくと。それを雪那に伝えた後、沙耶香は病室から退室して行こうとするが……、
「お務めご苦労様でした。沙耶香。……私も鳶が鷹を産んだようで誇らしいから、貴女も自身を持って励みなさい。」
背中から沙耶香は、雪那から幼げな声で激励の言葉を贈られるのであった。
それを聞いた沙耶香は、拷問とノロのアンプルで精神が壊された今の雪那を救うことができないという現実とノロのアンプルによって生じた苦痛しかない記憶を失ったことで幸せそうな雪那を想うだけで、感極まって涙を流し、雪那に悟られぬよう背中だけを見せて退室して行くのであった――。

「これで良かったかな?タギツヒメ。……私、本当は学長と喧嘩別れしたことをずっと悔やんでた。……それで、私は今の学長を見て助けたいって思った。けど、あれしか方法が考えられなかった……。」
退室した沙耶香は、入口で待っていたタギツヒメに問うのであった。
自分はこれぐらいしか解決方法が思い付かなかったと。

「……ううん、充分だよ。……きっと、あの人は誰かに必要とされたかっただけだったんだよ。……それを沙耶香が叶えたんだ。私こそ、ありがとう。……夜見の想いを、私の想いも伝えてくれて。」

沙耶香の出した答えにタギツヒメは認めていた。

こうして、人と荒魂は共存できると。

――――東京のホテルにて集まる維新派の刀使。

其処で彼女達は今後のことについて穂積達は語り合っていた。

「……どうですか？政府の方は？」

「ダメですね……二十年前の大災厄の真実を伝えたましたが……恐らく此方に付く気は無いでしょう。」

「となると、決起に参加してくれた若い子達には伏せて置かないと……。」

そう言いながら、穂積の政府に対して二十年前の大災厄の真実をネタにゆすることで、政府を此方側に付かせようとしたが、タギツヒメ側に付くということに変わりないことを聞いた冥加刀使達は意気消沈していた。

タキリヒメの活躍とタギツヒメの言葉により、荒魂を受け入れつつある世論。政府の施設を攻撃し、過激な行動を取る維新派。

この二つを比べればどちらを支持するかは明白であり、加えて交渉事において維新派は雪那といった交渉や根回しが得意な大人が居なかったがために政略において刀剣類管理局及び特務警備隊に全敗であった。

……そのため、維新派に味方する者は誰も居なかった。

（このままだと、私達は刀剣類管理局だけでなく、自衛隊と政府をも対立しなければならなくなる……。）

（そうなれば、私達４０名程の新型Ｓ装備を装着した冥加刀使と８０名程の決起に同意した若い刀使だけでは……数と火力の差が違い過ぎて勝ち目が無い。）

故に、維新派に属する冥加刀使達の中には動揺が走っていた。このままでは、４０名程の冥加刀使と８０名程の決起に同意した若い刀使（維新派になびく刀使が若い者しか居なかったというのが最大の理由ではあるが。）、それに刀剣類管理局に反旗を翻した元ＳＴＴ隊員と変革派の構成員という戦力のみで、日米両政府の支援を受けた特別祭祀機動隊と全面対決することになるのである。

こちらには、元ＳＴＴ隊員による銃の援護があるとはいえ、敵は陸上戦力と航空戦力が充分にある自衛隊と米軍の支援を受けているのであり、その差は歴然である。とても敵いそうにはなかった。加えて、最大の戦力である新型Ｓ装備を装着した冥加刀使が４０名程居たところで敵はその倍の数で迫って来るうえ、衛藤　可奈美やタギツヒメといった実力の高い者が大勢居るため、どこまで勝機が有るか悩んでいたのである。

つまり、こちらは最大の戦力として新型Ｓ装備を装着した冥加刀使が４０名程居るが、向こうは近代兵器と実力の高い兵と刀使が充実しているのである。兵の練度、戦力差、兵器の質、どれを取っても敵の方が上であった。

……認めたくはないが、かなり勝ち目は薄いとしか思えなかった。

しかし――――、

「――――♪」

誰かが、刀使といった者達を称える綾小路武芸学舎の校歌を歌い始めたのである。すると、不思議なことに周りの冥加刀使達も感化され始めたのか、同じように謡い始める。

「――――♪」

「――――♪♪」

「――――♪♪♪」

そうして、彼女達は伍箇伝の校歌を謡うだけで、砂漠の上に泉が湧く様に勇気が彼女達の奥底に浮かび上がってきたのだ。不思議とど

んな敵でも勝てるような気さえした。それ故に、綾小路武芸学舎の校歌を謡い終えると、次は自分達が所属し憶えている鎌府、美濃関、平城学館、長船女学園の校歌を謡い始めていた。

そうするだけで、皆が皆笑顔になった。所属する学校が違うが、それだけで一つになれた様な気がした。死ぬかもしれない戦いへ赴くことができるような気がした。

……無謀な戦いへ向かうということを忘れて。

こうして、可奈美は笑っているかどうかも分からないままに、自分の心と肉体が分離した状態のままで。

沙耶香も自分の心を偽り、他者を励ますという、自分の精神と現実に在る物と剥離した状態で。

……そして、冥加刀使達も現実を忘れ、夢現の中で戦いに赴くという現実から最も遠退いた状態で。

精神と感情、感情と言葉、言葉と現実から剥離した少女達は、子供達はそんな狂った状態で子供達も戦う狂った戦場へと赴くのである。

東京２３区特別災害予想区域

「同志達よ。遂に我々は立ち上がる時が来た。……我々刀使は、政治の道具として利用され、今日に至るまで耐え忍んできた。」

冥加刀使等を含めた維新派達が集まる東京ホテルにて、ソフィアの演説が始まっていた。

「事実、この国が我々に対して行ったことは何か?……それは我々には荒魂と戦えと命じておきながら、彼等は荒魂と手を組もうとしていたのだ。それだけで我々を粗略に扱ったということが分かるであろう?」

それを聞いた冥加刀使達等は頷き、同調している様であった。

「そんな我々の言葉を聞き集まった勇者達。伝統を守り続ける我が母校の綾小路武芸学舎だけでなく、荒魂事件が頻発する関東を中心に活躍した鎌府、他校との技術交流を以って伍箇伝の発展を促した美濃関、優秀な刀使を輩出した平城学館、最新技術の研究を欠かさなかった長船の刀使達が集う維新派の我等の声に同調してくれたことに感謝する。」

それだけでなくソフィアは、母校の刀使だけでなく他の四校からも来た刀使達も称賛していた。

……理由は、自身等の主張の正当性の確保と維新派に集った刀使達が敵前逃亡するのを防ぐためである。

「そんな君達に伝えたいことがある。……それは、嘗てこの国でも維新が起こり、その者達は当時の為政者であった江戸幕府によって反逆者の烙印を押され露となった。だが、その者達の中には維新を成功させ、時の英雄であり国の立役者として祀り上げられることになるが、江戸幕府の下で維新の者達を朝敵として戦い続けてきた幕府軍はどうなった?その幕府軍は朝敵として葬られてたのがこの国の歴史だ。故に、我々は嘗ての維新のようにこの狂った世を是正すべく、改革を起こすべく維新派と名乗り立ち上がった。……故に、我々の行いは正

義であり、この戦いが終わった後は維新を成功させた者として、我々は英雄として祀り上げられるだろう。」

ソフィアは、幕府軍を今の刀剣類管理局になぞらえることで維新を起こそうとする自分達の活動の正当性を主張していた。

「……そして、これは明かしていなかったことだが、君達の勇気ある行動に同調する者が後に続いていることもここで明言しておこう。」

それだけでなく、ソフィアは荒魂の討伐を使命とする刀使としての領分を守る君達の行動に同調する者が大勢現れているように述べているが、実際は全てがソフィアのシンパであり、出身校がバラバラの冥加刀使４０名程と血気に逸り参加した年若い刀使８０名程しか維新派に同調する刀使が居なかった。

……そのため、ソフィアの言っていることは嘘である。彼等を敵前逃亡させないための詭弁を使ったのである。

「これより、我々は我等の拠点に向かいつつある刀剣類管理局本部所属の特別祭祀機動隊及び自衛隊と米軍の支援部隊を迎撃、これを撃退した後に国会並びに警視庁といった政府の重要施設を占拠し、我々の主張を全世界に広げる行動に移る。……各員の健闘を期待する。」

このソフィアの言葉を聞いた刀使達は慌ただしく動き始めるのであった。

「冗談じゃない。……犬死になんて御免だ。」

その中に、ソフィアの思惑から外れた者が居ることに気付くこともなく。

「……それで、どうなさいますか？」

「……冥加刀使による一点突破しかないな。そこでだ穂積、頼みたいことがあるのだが。」

政治的根回し、戦力差や策、兵士の練度など全てにおいて敗北している維新派にはそれしか賭けるものが無いうえ、ソフィアは穂積にあることを頼むのであった。

指揮官が真希、舞衣、沙耶香、エレン、早苗隊員他数名という編成がなされている第一班は真希と舞衣、そして早苗が維新派との戦いの前に少し話していた。

「柳瀬、岩倉、何故僕等が冥加刀使達ではなく、決起に逸った若い刀使達を相手にするか分かるか？」

「……いえ。」

「……わ、分かりません。」

真希にそう問われた舞衣は憮然とした表情で、早苗は困惑した表情で真希に返すのであった。

「柳瀬は自分達の実力不足であると思っているのだろう？……だが、それは違う。今後のことを踏まえてだ。」

「今後のことを踏まえて……？」

今後のことを踏まえて。と答える真希にそれはどういうことかと訝しむ舞衣。

「我々が戦う相手は今は反逆の徒ではあるが、革命の徒ではない。中には周りの雰囲気に流された者、同調しなければ自身の命が危ぶまれた者、参加した友人を死なせたくなかったといった動機で動いた者達も居る。……そういった者達は維新派の言う〝荒魂殲滅〟に心から心酔した訳ではない。むしろ、タギツヒメと内閣官房長官の宣言により判明した維新派等の悪行に反旗を翻している可能性が高い。」

真希は舞衣と早苗に説明する。

維新派に属する若い刀使等の中には維新派に心から臣従していない者や反旗を翻そうとしている者が居るということを。

「となれば、維新派に属する冥加刀使、そして維新派の重鎮等を拘束或いは始末すれば彼等はこちらの説得次第では従順な羊へと変わる可能性が高い。……この戦いの後、我々刀剣類管理局と特別祭祀機動隊は批判されることになり、刀使の志望者は漸減の一途を辿ることになるだろう。それを踏まえると、彼女等は有無を言わさずに最前線へと放り投げることができる駒として再利用できる。」

であるならば、維新派の最大戦力であり当作戦の討伐目標でもある冥加刀使、ソフィアや静といった維新派の重鎮等を拘束もしくは始末

すれば何名かはこちら側に戻る可能性が高いため、決起に逸った若い刀使達を殲滅する必要性が無いということを真希は舞衣等に理由を説明していた。（当作戦の区域が特別災害予想区域に指定できたのは荒魂を身に宿している冥加刀使が居るからであり、決起に逸った若い刀使達が冥加刀使ではないというのも理由に含まれている。……つまり、舞草の隠れ里にて行われたやり方とほぼ同じである。）

「折角の未来の戦力となる人材を消耗させるなど、馬鹿のすることだと思わないか？」

「戦いの後のことまで……。」

それだけでなく、この戦いが終われば先ず刀剣類管理局は間違いなく騒乱を巻き起こしたとして批判の対象にされるため、今後の刀使の志願者の数は漸減の一途を辿ることは目に見えているのである。……そのため、決起に逸った若い刀使達を降伏させ、今後の荒魂討伐任務の最前線に放り込めば、漸減した刀使の志願者の補填としてまだ使えると真希は舞衣と早苗に説いていた。

それを聞いた早苗は、戦いの後のことまで考えている真希に感服したかのような声を上げつつ、心の中でも称賛していた。

「今後は君等も分隊長、もしくは前線の部隊を担当してもらおうと思っている。……岩倉、自分達の部下となるかもしれない者達だ。今後のことを踏まえて丁重に扱え。柳瀬、戦いの後のことも考慮して戦闘を進めれば、戦場全体を支配することができるということを覚えておくといい。君等ならできる。」

「はっ……はい！」

「……分かりました。」

真希はそう言うと、投降した若い刀使は早苗が指揮することになる可能性があることを考慮しておけと話すのであった。理由は、真希が担当するよりも早苗が担当した方が指示に従うであろうし、何よりも謀反を考えた際に早苗に話す可能性が高く、そのような行動を取れば真希に心酔する早苗は真希の耳に必ず入れることは容易に想像が付くからである。

そして、舞衣に戦いの後のことも考慮するように教えたのは、彼女

の指揮官としての能力の高さに真希が期待していることもそうだが、彼女は柳瀬グループの令嬢でもあるため、上手く育てれば寿々花の様に元警察関係者を諜報員に仕立て上げたりする術を得て、真希のような前線指揮官か寿々花のように諜報員を使った工作ができる司令官になれる可能性があるからである。

……そうなれば、元維新派であった刀使も彼女達の指示には聞くことになるだろうと考えながら、真希は舞衣と早苗にあることを説くのであった。

「……ふたりとも、険しい顔をするな。柳瀬と岩倉は刀使達を拘束するに留めるよう糸見　沙耶香、古波蔵　エレンの両隊員に伝えてくるが良い。……きっと二人共喜ぶぞ。」

「はっ……はい！ありがとうございます！」

「……了解しました。」

真希は舞衣と早苗の二人にそう説明すると、早苗は嬉しそうに沙耶香とエレンに真希が言っていたことを伝えに行くが、舞衣は早苗とは対称的に少し暗い顔をしながら早苗と同様に伝えに行くのであった。

それを見た真希は、やはり自分は勇敢な指揮官になれないのだろうという自身が言っていた言葉を思い出す他なかった……。

「……。」

その一方、指揮官が紫、可奈美、益子隊員他数名とタギツヒメといった者達が編成されている第二班に所属することとなった姫和は、維新派との戦いの前に一人で空をぼんやりと見ながら佇んでいた。

そんな姫和を見かけた寿々花は、ある用事を持って声を掛けるのであった。

「……十条さん、少しよろしくて？」

「何の用だ？」

姫和は、優を利用して、タギツヒメをこの戦場に引っ張り込んで来

た張本人である寿々花を睨みながら返事をしていた。
「ええ、実は興味深い話を持って来まして。」
「なら消えろ。私はお前に用は無い。」
寿々花は、姫和に対して興味深い話を持って来たというものの姫和は興味がないと言って寿々花を拒絶していた。
「そうですか。……実は私達が御守りする折神家は特別荒魂と近しい者の家系であり、その力を持っていたからこそ荒魂と融合できたのです。その力は柊の家系。つまりは十条さんの母親である篝様も同様の力を持っていたそうです。……つまり、十条さんにも同じ力が流れているということになりますわよね？」
「……それは本当なのか？」
「ええ、荒魂を鎮めるのが折神、祓うのがお前達柊の家系であり、折神と柊はいわば表と裏のような関係だったそうですわ。故に、紫様は大荒魂と融合できた。」
「……。」
姫和は、寿々花の荒魂を鎮めるのが折神、祓うのが柊の家系であり、折神と柊はいわば表と裏のような関係であるがために、折神家と柊家という両者は刀使の中でも特別荒魂と近しい者の家系であるがために荒魂と融合することができるという話しを黙って聞いていた。
「その力を使えば、貴女は大荒魂の力と知識、それに記憶も手に入れられる。そうすれば、ノロのアンプルの知識を得られますし、大荒魂クラスの力を得ると広域に及ぶ荒魂への支配力で荒魂達を使役し、隠世への高い干渉力を有するそうですわ。……そういえば、優ちゃんは半ば荒魂と化していますし、それにノロのアンプルの知識を得れば治療方法も見つかるかもしれませんわね。」
そうして黙って聞く姫和を見た寿々花は、姫和が荒魂と融合する力を使ってイチキシマヒメを取り込めばノロのアンプルの知識を得て、荒魂化した人間の治療方法と広域に及ぶ荒魂への支配力を使えば優を思い通りにすることができるかもしれないという甘言を用いていた。
「ですが、イチキシマヒメも龍眼を持つ大荒魂で既に刀使と融合して

いる以上、容易く屠ることはできないでしょう。……ですが、刀使と荒魂の融合は乗算。それに、今は近くに大荒魂に対しても致命傷を与える小烏丸がありますので、近くに居る荒魂を使えば簡単にイチキシマヒメ以上の力を手に入れられるでしょう?」

甘言を用いてきた理由は、イチキシマヒメは龍眼を持つ大荒魂であると共に静という刀使と融合しているから容易く打ち破ることはできないということ、刀使と荒魂の融合は乗算であること、そして姫和の手許には大荒魂に対しても致命傷を与える小烏丸と荒魂であるタギツヒメがこちら側の陣営に居ると寿々花は姫和に話すことで、姫和にタギツヒメと融合してもらうことでイチキシマヒメと融合した静に対抗できる戦力を得るだけでなく、タギツヒメといった20年前の大災厄の真実を知る者の口を封じようともしていた。

「……つまり、私にタギツヒメを斬れと?」

「まあ、どのように受け取るかは貴女次第ですわ。……前にも言いましたがイチキシマヒメは刀使と融合していますから簡単にはいきませんわよ?」

寿々花は刀使と融合したイチキシマヒメは簡単に打ち破れないとだけ言うと、姫和から離れて行くのであった。

そして、寿々花が離れた後に姫和は一人物思いに耽っていた。

「……タギツヒメの力を手に入れられるか。」

そう思って姫和は、自身が持つ小烏丸をじっと見つめていた。……しかし、

(何故だ?……同じというなら何故折神でもなく、私でもなく優がタギツヒメにその身を捧げなければならないっ!?……私の父さんは名も無き荒魂に殺され、それだけでなくタギツヒメに母さんの命を奪われ、それだけでなく優も掠め盗られた!!そんなの不条理だ!納得できない!!)

だが、優はそんな目に遭わせているタギツヒメに何一つ愚痴もこぼさない。何一つ不平不満を述べない。

(でも、分かってしまうんだ。……きっと、アイツは私が討つべき『タギツヒメ』じゃなくなったことを!!)

それに、思い出すのはタギツヒメが内閣府で述べた『友人達』の話を思い返すだけで殺意が鈍る自分が居たことを。タギツヒメのことを禍神としても、荒魂としても見れない自分が居たことに苛立っていた。

（……わからない、わからないんだ私にも！なにもかも失った！復讐も、戦う意味も、刀使であるべき理由も、私は一人だ！一人で居た！だからアイツを憎んだ！なのに、なのにアイツは憎むべき相手じゃなくなった……！なら私は、いったいだれを憎めばいい!?だれを殺せばいい!?何をすればいいんだ!!?）

一人で佇む姫和は、心の中でタギツヒメに対する声を吐露し、慟哭していた。

――――東京都内２３区。

維新派にイチキシマヒメと体内に荒魂を入れた冥加刀使を理由にして特別災害予想区域にされた場所にて、自衛隊と米軍の支援を受けた刀剣類管理局本部所属の特別祭祀機動隊とそれと袂を分かった維新派との戦いが始まっていた。

なお、特別災害予想区域にすることで民間人の避難をできるようにするだけでなく、対刀使用のボウガンを使用し、刀使が戦闘で命を散らす光景がある戦闘を民間人が見ることで後々の厄介とならないようにしていた。

「くそっ！また待ち伏せだっ!!」

「戦況はどうなってるの!!?」

「良いわけないよっ！戦車に対抗できる奴が負傷しているんだからっ

!!」

戦闘前、維新派は新型Ｓ装備を装着した冥加刀使達による一点突破を狙ったものの、戦車に対抗できるであろう第五段階の八幡力が使える刀使が全て負傷か戦闘行動が取れない状況となっていたため、突破が困難な状況となっていた。

なお、冥加刀使達による一点突破を看破し、それを阻むために色々と仕組んだのは寿々花であった。

その仕組んだ物を説明するには、戦闘前に行われた寿々花と真希、それに甲斐陸将補等が集まる作戦会議の場でのこと、

『――――維新派の最大の戦力が冥加刀使しかない点、戦力差が圧倒的な点から、冥加刀使の力に頼った一点突破を狙ってくることは明々白々。故に、冥加刀使の中で第五段階の八幡力を持つ刀使を第一優先目標として無力化させた後に特別祭祀機動隊で阻もうと思いますが、それが難しいと判断した後は、自衛隊の航空及び地上支援で一点突破を阻んでくださると、助かりますわ。』

寿々花が、維新派の狙いが冥加刀使の力を頼りにした力押しの一点突破だと説明すると、それを阻むべく冥加刀使の中で第五段階の八幡力を使える刀使を無力化させた後に自衛隊のＡＨ―６４Ｄといった航空戦力と１０式戦車といった地上戦力で特別祭祀機動隊を支援してほしいと話すのであった。

『……それは私も考えておりましたが、どのようにして冥加刀使の位置を特定するのですか？』

しかし甲斐は、冥加刀使達の位置をどのようにして捉えるのかと尋ねるのであった。それに対し、寿々花は、

『最大の戦力である冥加刀使達による一点突破を狙っているのですから、その冥加刀使達に少しでも強化すべく新型Ｓ装備を装着させるのは当然の行動かと思われます。』

冥加刀使達による一点突破を狙うのであれば、冥加刀使達を少しでも強化させるために新型Ｓ装備を装着させる必要があると述べると、

『そして、新型Ｓ装備は心拍数といった装備者本人のバイタルや的確に指示を得られるように位置情報などの各種情報を指揮所に送るこ

とで従来のＳ装備よりも生残能力と戦闘能力を高めていますが、裏を返せば新型Ｓ装備を装着している者が何処に居るのかが丸分かりということですわね。』

新型Ｓ装備の利点であるデータリンクシステムを利用して、新型Ｓ装備を装着した冥加刀使達が何処に居るのか分かるようにしたと話していた。

『元々、Ｓ装備は折神家が管理している物ですから、そういった細工は容易でしたわ。』

『……なるほど、怖いことを考えなさる。』

『この日のために、ＡＨ―６４Ｄを飛ばすことを継続したり、荒魂討伐の支援という名目で特科といった他兵科の練度を高めたり、１０式戦車等を首都圏に配備できるよう暴動が起きたりするようにしただけでなく、官僚や閣僚達を五輪が始まる前に事を解決すべきであると進言した甲斐陸将補には負けますわ。』

甲斐の寿々花に対する『怖いことを考えなさる。』という言葉に対して、寿々花はＡＨ―６４Ｄが飛行停止措置にならない様に事故の理由を改竄したり、荒魂討伐の名目として他国に知られないよう特科の砲撃の練度とデータリンクシステムによる戦闘のノウハウをを高めたり、国会前の暴動を見過ごすことで首都圏に１０式戦車や１６式機動戦闘車といった物を配備する名目を得たりするといった裏工作をするだけでなく、政府の中に居る官僚と閣僚達を何億も掛けた五輪を成功させるために早期にこの維新派によるクーデターを潰すべきであるという趣旨を述べて説得するという政治工作をした甲斐ほどではないと返答するのであった。

『……なるほど、何処でそのような話をお聞きになったのか一度帰って調べませんとな。いやはや、寿々花殿の耳の速さには敬服の言葉しか思い浮かびませんな。』

しかし、甲斐は寿々花の警告とも取れる返答に動じることなく、寿々花の諜報能力を称賛すると同時に、防衛省内部の情報が何処から漏れたのか調べ直さなければと涼しい顔をして返すのであった。

『そういう訳ですので、編制は第一班は真希さん、柳瀬、糸見、古波蔵

隊員他数名。第二班は紫様、衛藤、十条、益子隊員他数名に分けますわ。第一班は決起に逸った若い刀使達を相手に、第二班は冥加刀使達を主に相手にすることにします。……それでよろしいでしょうか？真希さん。』

『ああ、それで構わない。』

寿々花は、甲斐の返しに意に介することなく真希に事前に決めた班分けで良いかを尋ねていた。

何故、そのような班分けにしたかと言うと、この作戦会議が始まる前に真希は寿々花に、

『……寿々花、決起に賛同した年若い刀使を扇動した主犯格達を始末しようとしているだろう？』

維新派の決起に参加した年若い刀使達のリーダー格の者に対して、維新派の決起に参加するように扇動したことについてそれなりのペナルティを負わせたいのと、今後のことを考え反旗を翻した刀使が再度何かしらの問題行動を起こす可能性が高いことも考慮し、刀剣類管理局の名誉を守るために早々に処分すべきと考え、年若い刀使達のリーダー格の者を始末しようとしているのではないか？と真希は勘繰っていたため、そのことについて寿々花に問い質していたのである。

『……いいえ、大事なお役目を司る刀使がそのような事を考えるとお思いで？』

『そうか、……なら大事なことだから伝えておくが、くれぐれも刀使が刀使を殺す事態にはするなよ？良いか？”刀使が刀使を殺すことが明るみ”になる様なことは避けろ。……これ以上、朱音様の宸襟を悩ますのは得策ではないと分かるだろう？』

しかし、寿々花は定型文を答えるように答えたため、真希は年若い刀使達のリーダー格の者を寿々花が殺すようなことにならない様に語気を強めて説いていた。それを聞いた寿々花は、

『……ええ、分かっていますとも。そのような事態は避けますとも。これ以上、刀剣類管理局の名誉を穢す所業は致しませんわ。』

『……それで良い。』

そういったことは断じてしないと真希に誓うのであった……。

過去の亡霊

――――私が冥加刀使になるのを志願したのは、単純な理由だった。

私との関係を『家族』として括る人達から逃れるためだった……。

というのも、私の経歴に書かれている両親として扱われている人達が〝血の繋がった親〟ではないからだ。

そんな『家族』が、御刀に選ばれ刀使となれる資格を有する私を養子として引き取り、その一員にしてくれたのは自分達の娘が刀使になって遺体すら残らずに帰ってこないようにするためだった。

……つまり、私はその『家族』の大事な娘の〝写シ〟でしかないのだ。私がその大事な娘の代わりとなって荒魂討伐すれば、その『家族』は自分達の〝娘〟を刀使として差し出しているという体裁を整えることができたのだ。

……本当は私は刀使になんかなりたくなかった。

刀使になった本当の理由は、使命とか荒魂が憎いとかそんな理由でなく、両親と死別した私なんかでも、刀使にでもなってれば生活には困らないから続けていただけだった。

けれど、そんな理由で刀使になった私でも転機が訪れた。

私の周りに居る刀使も、私と似たような理由でなった者が多かった。

理由があって嫌いな家族から逃げるために刀使になった者。

両親が荒魂事件で死んだから復讐のために刀使になった者。

友人の人生が荒魂事件で壊されたから、それに報いるために刀使になった者。

刀使の使命が大事だからとか、親がそうだったからだとか、剣術が好きだからとか……そんな聞きたくもない親自慢や恵まれた家庭環境に居たことが容易に想像できそうな理由ではない者が多く居たことに親近感を覚え、自然とそういった人達と友人関係が築かれていっ

た。

――――だけど、その友人の一人が荒魂討伐の任務中に黒い袋に包まれて帰ってきたのだ。

そのときの私は泣いた。泣いて泣いて泣いて泣いていた。

次は自分じゃないかと、次は親しい誰かなのかもしれないと明日の朝日が来るということすら恐れるようになっていた。

けれど、泣いていたのは最初だけで次第に諦めの感情が先に出て、その次は心が死んでいた。

……いつまで、いつまでこの戦いは続くんだろう。いつまで私達は化け物と戦わなければならないんだろう。いつまで私達は『家族』といった理由のために戦わなければならないんだろう。いつまで私達は生きていられるんだろう。いつまで私達はこの辛い世の中で生きていなければならないんだろう。

……そう、いつまで。

でも、そんな戦いに嫌気が差した私でも戦わなければならないという思いが強くなる出来事があった。

――――それは、こんな私にでも託された思いが在るから。

怪我をしたことで引退し、刀使だった先輩に贈られた言葉。

最期まで戦って、冷たい骸となった同僚の最期の言葉。

苦悩して首を吊った後輩や仲間が遺して逝った言葉。

「いやだ。」「しにたくない。」「たすけて。」

……そんな迫り来る〝死〟という絶望に呑まれ、濁った瞳で綴ってくれた言葉もあった。

「私の分まで頑張って。」「使命を果たせ。」「私のことを忘れないで。」

……だけど、最後まで抗おうとする炎を映した瞳で応えてくれた言葉もあった。

私はその言葉を背負って、今まで戦い続けた。……今まで死んだり、傷ついたりした仲間のために戦い続けた。

けれど、刀剣類管理局の頭が紫様から朱音に代わり、方針まで荒魂との融和政策に変わったことに初めて組織に対して〝怒り〟を覚え

た。まるで、私と私の友達だった人や自分の人生を豊かにしてくれた人達の全てを否定され、冒涜されたように感じたから、私はどうしようもないほどの激情という感情に囚われた。

……だから、私は変革派の、今では旧折神　紫派と呼ばれている団体の誘いに乗った。

今までの戦いが無駄でなかったことの証明のため、荒魂を討伐し続けることで皆と一緒に居るため、ここが私達の居場所であり、犯してはならない聖域なのだという声を上げるため、新体制の刀剣類管理局を粛清するという話に乗った。……全ては共に戦った仲間達のために。

これが、私たちが受け継いだ絆（思い）なのだから――――。

――――寿々花の工作もあり、新型S装備を装着していた冥加刀使達は何処へ行こうとも待ち伏せを受けたり、又は誘い込まれたかの様に敵が待ち構えていたりしていた。

「ぅあっ!!」

「矢を射たれた者は下がれっ!下がれっ!!」

それだけでなく、待ち構えていた自衛隊の部隊から舞草の隠れ里で使われた対刀使用のボウガンの矢が飛んで来たのである。荒魂を体内に入れることで強化された冥加刀使と言えど、矢を数本も受ければ戦闘行動不能となるため、戦車だけでなく自衛隊が持つボウガンも脅威となっていた。

「矢を抜くなー抜くと写シの中に矢じりが残るぞっ!!」

しかも、写シの上でも体内に矢じりが残りやすいように、対刀使用のボウガンの矢じりを抜けやすくしているという細工がされていた。

何故そのような細工がされていたのかというと、写シの上でも体内に矢じりを残すことで、写シが解けた刀使の体内に残った矢じりで損

傷させるためである。それを防ぐには、相手の刀使の写シを斬って矢じりを取り出すしかないのだが、それを行うには相手の身体に刃物を入れることと同意義であり、それを行った相手は仲間の身体を切り刻むことに精神が疲弊するために、そのような細工がされていた。

「来た！特祭隊だっ!!」

「負傷した者は下がれ！無事な者は殿を努めろっ!!」

そして、特別祭祀機動隊も自衛隊員からのボウガンの矢を一斉射された後、可奈美達が所属する第二班の刀使の部隊が声を上げて突撃してきたからである。

冥加刀使達も負けじとなのか、それとも荒魂を体内に入れたせいなのか人ならざる声を上げて第二班に向かって行った。

その両者の戦闘は御前試合等で見せる型通りの剣術ではなく、殴打、体当たりといった体術も含めた何でもありの戦いであり、正にソフィアが言っていた通りの〝獣の世界〟が其処に描かれていた。

それを何処か他人事のように見ながら姫和は向かって来る冥加刀使の応対をしていた。

決死の表情はしながら向かって来る冥加刀使の上段からの振り下ろしを御刀で受け止め、鍔迫り合いに持ち込んでいた。

「自分達が何をしてるか分かっているのか！」

そのため、姫和は冥加刀使に対して剣を置くようにと降伏を促すのだが、

「分かってますよ!!」

しかし、冥加刀使は姫和の降伏勧告を受け入れない様にするためなのか、大きな声を上げて反論していた。

……自分達がどんなことをしているのかを。

「でも、何で貴女がそんなところに居るんですっ!!貴女は荒魂が憎くて……憎いから刀使になった癖に、何で荒魂になった子供の世話なんかしているんですっ!!その子も殺せば良いでしょう!!」

そして、冥加刀使は返す刀で姫和に詰問する。何で半ば荒魂と化した優という子供の世話なんかしているのかと。

「私達は今の刀剣類管理局よりも純粋に刀使の役目、荒魂殲滅を掲げ

ている私達に付かなかったんですか!?貴女は荒魂は討伐すべきだという考え方だったハズ!!結局は母親の仇というのも嘘だったんですかっ!?!!!」

そして、冥加刀使は更に姫和を詰問する。姫和は荒魂殲滅という目的を同じとする維新派に所属すべきであったと。

「……刀使の使命はそれだけだと思っているのか?」

「そりゃそうでしょう?刀使というのは、私達の友人や大切な人の命を奪う荒魂を倒すための武器である御刀に選ばれたんだからっ!!」

「刀使の使命とか御刀とか!今はそういう台詞を聞くだけで腹が立つんだ!!御託はいいから、さっさとかかって来い!!」

姫和がそう挑発すると、冥加刀使は斬り掛かって来るのであった。

「お前みたいな奴だけには負けるかバカ!…お前には言いたいことが山ほどあるっ!!!」

姫和は斬り掛かって来た冥加刀使に対して叫ぶ。〝刀使の使命〟に縋る冥加刀使に対して言いたいことがあると。

「母さんのため?友達のため?そんな個人的な復讐のために、訳の分からない誰が頼んだのかも分からない使命に縛られて、何もかも捨てたのか!?……お前には、必要としてくれる人が他にも居ただろうがっ!!」

姫和は斬り掛かって来た冥加刀使に対しても叫ぶ。親や友人といった個人的な復讐のために、そして〝刀使の使命〟という誰が頼んだのかも分からない使命のために何もかも捨てたことを愚かだと断じていた。……冷たくあしらわれながらも常に気に掛けてくれていた早苗、いつも自分の傍に居てくれた優や可奈美達、そしてタギツヒメのことを思い出しながら。

「一人で勝手に思い込んで、周囲と距離を取って、それで〝刀使の使命〟とやらに浮かれて舞い上がっただけのガキが……それを理由にして逃げて、カッコつけたいだけのガキが偉そうな事を……大人ぶったことを言うなっ!!!」

姫和は斬り掛かって来た冥加刀使に対して叫ぶ。お前は〝刀使の使命〟とやらに浮かれただけのガキであると。

「違う！私は……刀使の使命のため「嘘だ。お前は……お前は何も分かっていないガキだったから、それくらいしか縋るものがなかったんだ!!」

姫和は斬り掛かって来た冥加刀使に対して叫ぶ。……心の奥底で母である篝のことを思い浮かべながら、誰に対して叫んでいるのかと、誰に対して詰問しているのかと強く自身に問いながら……。

その言葉の圧に押しやられたのか、冥加刀使は姫和の剣に圧し負け、御刀を受けてしまい、写シを一回失ってしまう。

「……それでも私は……私は戦って……皆の元へ還れたなら!!それが私たちの救いだ!!それが救いなんだっ!!!!」

しかし、再度立ち上がり、尚も姫和に立ち向かおうとする冥加刀使を見る姫和。

「……憐れだ……憐れなんだよ！……お前も、私も!!」

姫和は、自身を重ねてもいるのか目の前に対峙する冥加刀使のことを「憐れ」と指摘しながらも、虚しさを感じていた。

――――東京２３区。

可奈美は七人ほどの冥加刀使等と対峙していた。

本来の時間軸では、可奈美は冥加刀使に苦戦していたが、事前に冥加刀使の情報を得ていたこと、そして何よりも可奈美も冥加刀使と同様に新型Ｓ装備を纏っているため、後は体内にノロを埋め込まれたことによる強化の差が自身の実力の方が上回っているか、冥加刀使達の連携が如何ほどのものであるかであった。

先ずは一人の冥加刀使が気合いの声と共に一閃振り下ろす。

その直線的過ぎる攻撃に対して可奈美は、容易く半身となって躱すと同時に抜き胴で相手の冥加刀使の写シを斬るのであった。

「……みんな……頼むよ……！」

そして、可奈美に容易く写シを斬られた冥加刀使はその言葉を残した後、どうっと倒れてしまったことを可奈美は確認した後、周りを見ると六人の冥加刀使に囲まれていた。

……おそらく、最初に可奈美に斬り掛かった冥加刀使は先程の言葉から推測するに、残りの六人の冥加刀使達が可奈美を囲むための時間稼ぎであったのだろうことが可奈美には容易に想像できた。

一流の剣術遣い（可奈美が冥加刀使のことをこう評した理由は、死に物狂いで向かって来る者は一流の武芸者と遜色の無い動きを見せることを優の動きから知ったからであり、最初に斬り掛かって来た冥加刀使の言葉と行動から、死をも恐れず向かって来ていると判断したからである。）の囲みの中に入ってしまえば、どれほど優れた剣術の名人であろうとも、無傷で居られるのは難しいものであるということを柳生新陰流の術理から教わっていた可奈美は、定石ではあるが先ずは包囲の一角を崩すのが肝要であると考えた。

「……。」

しかし、それには脇差しや小柄といった何か投擲できる物を使って注意を逸らして、斬るのが一番であるのだが、それらを持ち合わせていない可奈美はどうするか迷っていた。闇雲に包囲陣の一角に突っ込めば崩れるであろうがその手を使えば、後ろから斬られ写シを一回分失うことになることは容易に想像ができた。まだまだ冥加刀使を率いる維新派との戦いが続くであろう状況を考えれば、写シを張れる回数は多く残しておきたいところではある。

……そんなことを可奈美が考えているときに、可奈美の真後ろに居た冥加刀使が声を上げることなく上段から振り下ろすように斬り掛かって来たが、可奈美は気付いていないのか、振り向くこともしなかった。

（……取った!!）

可奈美の背後を取った冥加刀使は、勝利を確信したのか笑みを漏らしてしまう。

しかし、その冥加刀使の確信通りにならなかった。

何故なら、可奈美は足だけでなく、力も入り易く、そして安定しや

すい腰からひねるような回転で身体の向きを変えていたことで真後ろから斬り掛かって来た冥加刀使に素早く対応できただけでなく、冥加刀使の上段から振り下ろすような斬撃を合撃（がっし）で躱しつつ冥加刀使の写シを斬っていたからである。

合撃（がっし）……新陰流の秘伝の一つで、相手の上段からの打ちに対してわずかに遅れることで太刀筋をずらしつつ、そのままやや横移動をしながら相手を押し切る技である。この場合、相手は面打ちで仕留めたと思いつつも、剣先は鍔一つ分流され、自分が面打ちを食らっているという訳である。

しかし、この技を繰り出すには条件がある。一つは、刀の左右どちらから打たれても太刀筋が乱れない芯の入った太刀先と全身の力を剣先だけに凝縮することができる太刀が必要であること。もう一つは自らの人中路（正中線）を正確無比に保った太刀振り。更にもう一つは相手の先を取ることが必要であり、それには相手の考えと太刀筋を見切る必要があるのだが、可奈美はそれを真後ろの冥加刀使にやってのけたのである。

可奈美がそれをやってのけたのには理由がある。……それは、

（……視える。）

背後に居る冥加刀使の動き、表情、考えが視えたからである。

それ故に、可奈美は背後の冥加刀使に合撃で応対することができたのである。それ故に、左右同時から来た冥加刀使がどのように斬り掛かって来ているのか直接自分の目で見ることなく分かってしまったのである。

右は可奈美の首を狙う上段攻撃、左は足を狙う下段攻撃という同時攻めで片方が切られなければ良いという作戦。表情も鬼気迫るものであることから、それを狙ったものであることが見て取れた。

（……以前よりも良く視える！）

それを可奈美は体勢を低くし、思いっきり左の方へ踏み込んでの下段受けで右からの首を狙った上段攻撃を躱しつつ、足を狙った下段攻撃を止めていた。

それを見た上段攻撃をした冥加刀使は刀を反転させて、真っ向打ち

をするが、可奈美はさらに踏み込むことで相手の間合いの内側に入り込むと同時に下段攻撃をしてきた冥加刀使の腋下に手を入れると同時に足を引っ掛けることで容易に冥加刀使のバランスを崩しつつ態を入れ替えることで、下段攻撃してきた冥加刀使を敵の真っ向打ちを防ぐ盾としていた。

そして、味方を斬ってしまったことに動揺する冥加刀使を右腕を伸ばして腹を突くことで、二人の冥加刀使の写シを斬り、呆気なく倒すのであった。

それを見て取った別の冥加刀使は可奈美に上段斬りで迫って来ていた。

１７０㎝ほど上背が高いことと相手の表情が自信に溢れているところから、相手は自分の力に自信があるのだろうと見て取った可奈美は、御刀を左手に添えて受け止める。

可奈美が左手に添えて自身の上段斬りを受け止めたところを見た冥加刀使は力技で押し切ろうと渾身の力を持って刀を押す。

しかし、可奈美は冥加刀使の力技に力で押し返すことなく、右半身を後ろへ退くと冥加刀使の身体は少し前のめりになってしまう。

可奈美は前のめりになったことで冥加刀使の御刀の柄との距離が近くなり、その冥加刀使の御刀の柄を左手で掬い上げるように上へ上げることで冥加刀使は剣先が殺されるだけでなく、胴をガラ空きにされてしまう。

可奈美は、その隙だらけとなった冥加刀使の胴を右腕に持つ御刀で何度も刺突し、写シを解除させ、失神させるのであった。

こうして、可奈美は瞬く間に五人もの冥加刀使を倒してしまったのである。

それを見た残り二人の冥加刀使は、可奈美の左右に展開し、可奈美から見て右の冥加刀使が先ず横殴りで斬り掛かってきた。

可奈美は御刀を垂直に持ち、右の冥加刀使の横殴りの斬撃を鍔で冥加刀使の刀身を当てて弾くと、即座に上段斬りをする。

しかし、相手の冥加刀使は手練なのか、何事もなく御刀を左手で添

えて受け止める。
そのため、可奈美は隙を作るために力で押すと、相手も力で押し返してきたことを可奈美は感じると不意に力を抜く。
すると、相手の冥加刀使はほんの一瞬だけ気が抜けてしまう。
相手が気が抜けてしまった隙を突くように可奈美は、冥加刀使の鍔を御刀千鳥の柄で弾くと同時に右手を柄頭に手を添え、可奈美の横で千鳥を半回転させるように冥加刀使を面打ちし、冥加刀使の写シを解除していた。
「冥加刀使になった私達を……なんて強さ……！」
そうして、一人だけになった冥加刀使は六人もの冥加刀使を倒した可奈美の強さに感嘆とし、勝てる見込みが無くなったことも理解していた。
……故に、特攻覚悟で立ち向かおうとするが、
突如、何かが通り過ぎたかと思ったら、可奈美を押し出している者が居た。
「ごくろーさま～。そのまま後退していいよ～。」
イチキシマヒメを取り込んだ静であった。
そして、静に後退するよう言われた冥加刀使は命令通りに後退すべく倒れた冥加刀使達を起こすと後退するのであった。

――――可奈美は、イチキシマヒメを取り込んだ静の力に負け、押されていた。
「くっ、この!!」
しかし、何時までも押されるだけでは不味いと判断した可奈美は、静の力を利用して巴投げで静との距離を空けるのであった。
こうして、可奈美は静との距離を空けた状態で対峙することになってしまうのであった。
（……確か、あの人がイチキシマヒメを取り込んだ人のはず。なら、龍眼を所持しているから、こちらから打ち込まずに……。）
そして、静がイチキシマヒメを取り込んでいるという情報を得てい

るため、龍眼を警戒して打ち込まずに引き下段で後の先を取ろうとする。
「……えーっと、衛藤　可奈美さんだっけ？何だったけ？剣術は相手のことを知って、それでお互いに歩み寄ることができる物だったけ？だったら、私も聞いておきたいことがあるんだけど？」
「……え？」
しかし、可奈美の予想とは違い、静が可奈美に優しげな声で尋ねるのであった。
その行動に流石の可奈美も動揺するしかなかった……。
「ねえ、可奈美さん。相手の写シを斬ったとき相手はどんな気持ちだった？」
「な……何でそんなことを？」
「だって気になるんだもん。……私、お母さんとお父さんが唯一くれたのがコレだったんだ。」
そして、可奈美に相手の写シを斬ったとき相手はどんな気持ちであったかを尋ねてきたのである。
何故、そのようなことを尋ねるのか理解できなかった可奈美は何故そのようなことを聞いてしまう。そのため、理由を問われた静はおもむろに自身の素肌を見せるのであった。……自身の傷だらけで痣も沢山残っている異形としか言いようのない肌を。
「！……それって？」
静の異形としか言い表せない肌に戦慄しながら可奈美は聞いてしまった。何故、そのような肌になったのかを。
「これは私のお母さんとお父さんが唯一くれたもので、唯一遺してくれたもので、唯一の教訓で愛してくれた証なんだっ!!」
可奈美に自身の肌のことについて問われた静は、噛いながら答えていた。
これは、両親が与えたくれたものであると、遺してくれたものであると、私に〝躾〟という教訓を齎しただけでなく、両親の愛を受けて育った証であると可奈美に答えていた。
しかし、目が良く、他人の感情や言行に聡い可奈美は、静が言う両

親から与えられたものはただ〝の虐待〟であり、ただの〝暴力〟であると看過していた。

「だからさぁ、私はお母さんとお父さんの〝愛〟を理解しなきゃならないんだ。……私、お母さんとお父さんが不正を働いていたところを見て、それでお母さんとお父さんが真面目になるようにと思って同じことをしたんだ。……でも、あのときは失敗しちゃってお母さんとお父さんは冷たくなっちゃった。」

そして可奈美は静の言行から聡った。

静は両親がまともになることを夢見て、自身が受けた虐待を実の両親に行い、殺してしまったこと。

「だからさぁ、私はあなたに聞いているの。……相手の写シを斬った感触、相手の苦しみ、痛みがどんなものだったか聞かせてくれるよねえぇぇぇぇっ!!」

静はそれだけ言うと、可奈美に斬り掛かっていた。

嗤いながら迫ってくる静に可奈美は驚くものの、どうにか静の御刀を自身が持つ御刀千鳥で受け止める。そして、刃を合わせたことで可奈美は理解した。

「私はあなたが感じた苦しみ、痛み、怒り、その全てを教えてよ!あなたの愛し方で!相手を斬ることで!ねえねえねえねえ!!だから御刀を持っているんでしょう!?!!」

彼女の……静の剣には悦楽や喜びを感じるが、その奥深くには怒り、苦しみ、憎悪が宿っていることが分かった。

「本当は……辛いんでしょ?」

故に可奈美は、静に優しく語りかける。

本当は自分が耐えてきたことも行っていることの全てが辛いんじゃないのかと。

それを聞いた静は、ピタリと止まり、何か譫言のようなものをブツブツと呟き始めた。

「う……うん?何言っているの?私が、アタシは、静は、私が切ったり斬られたりするのが痛い思いをして嬉しいのはお母さんやお父さんが教えてくれたもので……でも、痛い思いをするって何?何で嬉しい

はずなのに痛いっていう思いをするの？……おかしい。おかしいオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイオカシイ!!」

そうして静は、狂ったかのように叫び始める。何かに取り憑かれたかのように。

「お母さん、私どうすればいいの!!教えてお母さん!!」

そして、狂った静は母に助けを求める始めると、

「ホント、オマエはグズでどうしようもない子だよっ!!何度も言わなきゃワカラナイんだからっ!!」

そう叫びながら、誰かに、両親という過去の亡霊に取り憑かれたかのように静は何度も何度も自分の左腕を切り刻むのであった。

……そうして、いつもの穏やかでにこやかな顔で言うのであった。

「……お母さんも刀使だったんだ。この御刀も使っていたから、これで斬るとお母さんとお父さんのことを思い出せるんだ。……そうだったそうだった。私は〝両親からの愛〟を一身に受けて育った子だという忘れていたよ。お母さん、お父さんゴメンナサイ。」

可奈美はその姿を見て戦慄していた。

……そして、可奈美の中で新たな疑問が浮かび上がった。

親から受け継いだものは全て正しいのかと。

冥加刀使

――――東京２３区。

その区画で可奈美と静は今も打合い続けていた。

「ねえ！そろそろ聞かせてくれないかなあ!!」

「……！」

写シを張らない静に可奈美は防戦一方であった。

……いや、斬れなかったというのが正確な表現であろう。事実、可奈美は静を救いたい、助けたいと心の底から思っていた。そうすれば、彼女の心が救われ、母親も救われると思ったからである。

「……だって、お母さんは死ぬまで幸せそうだった。剣術だっていっぱい教えてくれたし刀使の仕事を誇りに思うって言っていた。」

可奈美の母である美奈都が言っていた言葉を呪詛の様に呟きながら、まるで親から受け継いだ物は澄んでいて、とても美しい物だということを証明したいかの如く。静は親から愛されていたのではなく、親から虐待されて不幸な目に遭わされただけであると、そう言いたいが如く、彼女は呟いていた。

そう真実を告げることで、彼女の心が救われ、母親の心も救われると信じたかったのである。

……〝どちら〟のということは考慮することもなく。

「私、母親から御刀で腕とかいろんなところ斬られたんだ!!だから、人に御刀を向けても良いよねっ!!人も荒魂も違いなんて無いんだからっ!!」

静は叫びながら、可奈美に向かって何度も御刀を振り下ろすが、ただ振り下ろすだけの攻撃だったため、可奈美はいとも簡単に捌く。

「あなたなら分かるよねぇっ!!剣での対話が出来るあなたなら分かるよねぇっ!!…写シの上でも肉を断つ感触とか人が痛みで耐えてる顔と心とかあなたに負けて悔しがったり憎悪したりする人の気持ちとか……分かるよねぇっ!!どんな痛みだったか、どんな苦痛だったか、どんな気持ちだったか、刀を振るのが上手なだけで学院の代表になる

まで勝ち続けたあなたなら分かるハズだよねぇぇぇっ!!!!」

しかし、尚も静は可奈美に伍箇伝の代表戦にて美濃関学院の代表に選ばれるまで勝ち続けていたとき、敗者の痛みと苦痛と憎悪を踏み台にしてきた筈だと述べると、その向けられた負の感情はどんなものだったのか、どんな気持ちにさせられたのかを尋ねるのであった。

「そんなもの……！」

そう尋ねられた可奈美は思い出そうとするが、思い出せなかった。

（……どうして!?）

〝剣術を通して、よく見て、よく知ればお互いに分かり合える。〟

可奈美の信条であり、自らが信ずる剣であった。だが、静の写シの上とはいえ、剣を通じていれば斬られた相手の苦痛を理解できるはずだという指摘をされ、それを答えられないでいる可奈美は揺らぎ始めていた。

何故、相手の苦痛を思い出せないのか？

思い出せないのではなく、見ていなかったのではないか？

いや、見ていなかったのではなく、見ようとしなかったのではないのか？

そうであるなら、自分が掲げる〝剣術を通して、よく見て、よく知ればお互いに分かり合える。〟というのは嘘だったのではないか？

ただの自分の考えの押し付けではなかったのではないのか？

……ならば、自分が行っている刀のぶつかり合いは全て、全て相手を打ち負かすだけのものだったのではないのか？

「別に打ち負かすものでも良いじゃない。周りを見てごらんよ？」

可奈美の心を見透かしたかのような静の言葉を聞いてしまった可奈美は、その言葉通りに周りを見てしまう。

斬られないようにするためか、敵の身体にしがみつく者。

我を忘れて、ただ夢中になって御刀を振り回し続ける者。

汗と血を流し続けながらも尚も戦い続けようとする者。

剣術の型も技も無く、無我夢中で剣を振り回し、獣のように叫びながら戦う者で溢れかえっていた。そのため、その場所は〝獣の世界〟とでも形容すべき場所となっていたように可奈美は見えた。

それ故に可奈美は、果たして刀使という存在は本当に素晴らしい者なのか？剣術という物は心を通わせることができるのであろうか？と強く疑念を抱くことになる。

……そして、可奈美の頭の中は、そんな疑問に支配されようとしていた。

『でも…うちのお母さんは死ぬまで幸せそうでしたよ。死ぬまでってなんか変ですけど、』

だが、可奈美は自身の言葉を思い起こす。

『剣術だっていっぱい教えてくれましたし、刀使の仕事を誇りに思うって。』

一つずつではあるが、母はそんな自分に剣術を教えてくれたこと。私がなった刀使の仕事を誇りに思うと言っていたことを思い出して行っていた。

「……違う。」

だからこそ、可奈美は静を否定できた。

「ぜっやあぁぁぁぁっ!!」

故に、可奈美は静の右肩を強く打つ。

「そんなの効か……ない？……あらら。」

だが、静の言うこととは裏腹に御刀を持つ右腕がまったく上がらなくなったのである。

「どれだけ強化された身体でも、骨までは強化できない筈だよっ！」

実は可奈美が左肩を打ったのは、静の鎖骨を砕くためであり、鎖骨を砕くことで腕を動かなくさせ、御刀を振るえなくさせようとしたのである。

御刀を振るうことができなくなれば、戦闘も行えなくなり、そうして拘束した後、ゆっくりと時間を置いて静を説得しようとした。……だが、

「……だったら、右腕を壊せば良いんだよぉっ!!」

静は御刀を右から左に持ち替えると、自身の右腕を噛いながら、何度も刺し続けるのであった。そうすることで、右腕を荒魂化させると

同時に砕けた鎖骨もついでに荒魂化させ、右腕を動かせるようにしていた。

　可奈美は静が嗤いながら、自身の右腕を躊躇いもなく刺し続けるといったことだけでなく、静が着ていた綾小路の白い制服が鮮血の色で染め上がっていったことも合わさり、その静の姿に身震いしていた。

「……違うよね。」

　しかし、可奈美は尚も静の言葉に、その異様な姿にも抗っていた。

　静の剣から通じて感じた苦しいという心、苦痛という感情を知ったからこそ可奈美は「違う」と答えられていた。

「……私のお母さんは、最後まで幸せそうだったよ！最後まで刀使の仕事を誇りにしていたっ!!」

　故に、何度も立ち上がり、何度もイチキシマヒメを体内に宿している静に立ち向かって行けたのである。

「静隊長っ！緊急メールでソフィア隊長が本拠地が攻撃を受けているため、至急戻れとのことですっ!!」

「……ちぇっ、もう少しで聞き出せるとこだったんだけどなぁ～。……まあいいや、みんな戻るよ～～!!」

　……しかし、それに水を差すかのように静の部下の一人の冥加刀使が静に自分達のホームが攻撃されているため、至急防衛の任に就けとソフィアの緊急メールが有ったという報告を受けた静は、一応隊長であるソフィアの命令を反故にすることはできないと判断し、皆に本拠地へ戻るように指示を飛ばすのであった。

「まっ……待って！」

「待て！衛藤!!」

　退却していく静を可奈美は追おうとするも、紫に止められ、何事かと思い紫の方へと顔を向けるのであった。

「……行かせてください！私は平気です!!」

「それ以上行くな……傷になる。」

「えっ？……それはどういう？」

「後に分かる。……命令だ。」

　紫に止められた可奈美は、静を追わせて欲しいと懇願するが紫に意

味深なことを言われた後に命令だと告げられたことで、可奈美は静を追うことを断念するしかなかった。

――――維新派本拠地東京ホテル前、東京駅前広場。

「……本拠地が攻撃されていたんだよね？」

「はい……そのように。」

静が部下の冥加刀使に先程言っていた本拠地の攻撃があるとの報告とは真逆に、何の攻撃の音もなく、不気味な程に静かであった。

「……そういえば、メールでそういう指示が出たんだっけ？」

「はい。こちらです。」

「……ふーん。」

静はふと緊急メールでその指示が有ったことを思い出し、どのような内容のメールだったのか気になり、報告して来た冥加刀使にそのメールの内容を見せるように言うのであった。

《現在本拠地が攻撃を受けている。至急、防衛の任に就くべく戻れ。》

何の変哲も無い、機械的にすら感じる文が記載されており、送り主もメールといった物を調べてソフィア本人であることも確認した。

……確認したのだが、静は違和感を感じていた。

「……もしかしたら、ソフィア隊長は本拠地にもう少しで侵攻して来る敵部隊を抑えておけ、という指示を出すためにこのようなことを申したのではないでしょうか？」

「う～ん。そうかな？」

そして、別の冥加刀使からソフィアはもう少しで此処に来る敵部隊の足止めをして欲しくて、そういう指示を出したのではないかと私見を述べていた。

しかし、静は尚も違和感を感じていた。兵数からしてそんな余裕は無いし、そもそも打てる手が此方の最大戦力である冥加刀使達による

力押しの一点突破しかないということは静にも分かっていたため、余計に違和感を感じていたのである。ここまで来るのにも苦労を……いや、していない。

そこまで考えた静は、そういえば何故、自分達が後退したとき、可奈美達が居る特別祭祀機動隊の部隊は追撃をしなかったのだろうか？という疑問を抱き始め、そして、件のソフィアが送ったとされるメール……それらを繋ぎ合わせると、ある事実が浮かび上がってきたのである。

「……誘い込まれた？」

そう静が思った瞬間、轟音が鳴り響き、静の耳には何も聞こえなくなっていった……。

――――刀剣類管理局所属特別祭祀機動隊仮本部。

東京駅前広場にて起きた９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲の砲撃による爆発をモニターで見ていた寿々花と甲斐が居た。

「……神仏から受ける恩恵を意味する冥加刀使も戦場の女神である砲兵の裁きから逃れられなかったか。」

甲斐の呟きに同じ冥加刀使である寿々花は、何とも言えない気分となっていた。

何故なら、市街地にりゅう弾砲による砲撃を可能にしたのは甲斐の尽力による部分が大きかったからである。彼は市街地による砲撃を可能にするため、米軍から１５５ｍｍ口径の誘導砲弾を冥加刀使相手にどれだけの効果があるのかを実験するためという理由でＣＩＡ長官から供与してもらったという経緯があるだけでなく、今まで射出してきたＳ装備のコンテナの弾道データが９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲のコンピューターに組み込まれているうえ、データリンクシステムによる戦闘のノウハウも刀剣類管理局への支援と称した荒魂討伐任務への参加によって蓄積されていた。

そのため、米軍支援のＭＱ―９リーパーという名を持つドローンによる観測の後、誘導砲弾による砲撃が支障も無く行えたという経緯が

あったことを寿々花は知っていたのである。
「最期はドローンによるミサイル……のようですわね。」
「ええ、これもＣＩＡ……アメリカからの要請でしてね。」
　９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲の誘導砲弾による砲撃の後は、ＭＱ―９リーパーによるミサイル攻撃の爆発の光景を見せられることになる寿々花と甲斐。
　ＭＱ―９リーパーによるミサイル攻撃は、９９式自走１５５ｍｍりゅう弾砲による誘導砲弾が大した効果がなかったり、新型Ｓ装備のＧＰＳ反応に反応せず命中しなかったときの保険として上空に配備されていただけでなく、荒魂によって強化された冥加刀使にどれほどの効果があるのかを日米共々実験したかったというのが本当の理由であった。
　……故に、甲斐の言葉を借りれば、今まさに神仏から受ける恩恵を意味する言葉を名にした冥加刀使は、戦場の女神である砲兵の裁きを受けるだけに留まらず、ＭＱ―９リーパーという死神の名を持つドローンのミサイルによって死をもたらされたかのように見えた。
　しかし、
「……ん？何か動きましたわね？」
　寿々花は砂埃の中から何かが動いたかのように感じた。
「そんなバカな。１５５㎜の砲撃とミサイルの直撃を受けて生きている者はいないでしょう。」
「……そうだとよろしいのですが。まあ、良いでしょう。一応、私も〝保険〟を掛けておりますので。」
　寿々花は甲斐の言う通り、杞憂であれば良いのだがと返答するのであった。

　……しかし、寿々花の杞憂は当たっていた。
「生きてる？みんな～～？」
　イチキシマヒメの力で強化されていた静は生きていた。それだけでなく、

「……私は、大丈夫です。」
「……私も。」
静に報告してくれた冥加刀使だけでなく、数人ほど重傷ではあるものの、荒魂を体内に入れたお陰で動ける者が居た。
（……やられたなぁ、舞草の里で使った同じ手かぁ。）
刀使が荒魂化したという名目で行われた対刀使用のボウガンを携えての舞草の隠れ里への襲撃。それを、荒魂を身に宿した冥加刀使を名目に行われている対刀使用のボウガンの使用を含めての維新派のクーデターの殲滅。
ソフィア達が行った親衛隊を瓦解させるために行った遠隔操作ウィルスによる虚偽の造反。それを、スペクトラムファインダーにバックドアが仕込まれていて、遠隔操作でソフィアの携帯を操り、偽のメールを送ることで敵を一か所に集める。
という形で自分達に返ってきているように静は感じていた。いや、敵側がこちらのやり方をリスペクトしたと言ってもいいだろう。
とはいえ、これで残る戦力は確認できるだけでも冥加刀使が数人ぐらいだが、殆どが満身創痍であり、とても戦える状況ではなかった。
「……静隊長。一旦、本拠地へと戻りましょう。」
「……そうだね。一旦、戻ろう。……少し、痛むや。」
「了解。……軽傷の者は仲間を運んでやれ。」
そうして、比較的軽傷の冥加刀使達は重傷、遺体になった者を問わずに土煙に紛れて、東京ホテルへと這う這うの体で向かうのであった。
「……ごめん、目が見えなくて。」
「良いよ。」
そうして、静と冥加刀使達は足や目を失った仲間、遺体となった仲間を背負いながら、暗くなっている東京ホテルの中へと入って行った。
……その次の瞬間。
ボウガンの矢と銃弾が冥加刀使達に襲いかかってきたのである。
「ぎやっ！」「ぐえぇ!!」
そして、ボウガンの矢と銃弾を受けた冥加刀使の何名かは獣を思わ

せる悲鳴を上げながら受けてしまう。
「待ち伏せだ！待ち伏せだぁっ!!」
「くそっ！暗くて見えない!!」
　既に満身創痍の冥加刀使と静しか居ないにも関わらず尚も執拗に攻撃してきたため、静と冥加刀使等はどうにか部屋の一室へと逃れる。
「くそっ！この国の連中、私達を皆殺しにする積もりだ!!」
　だが、その部屋の一室の中で、ある一人の冥加刀使は苛立たしさと切なさ、見捨てられたという感情が入り混じった声でつい叫んでしまう。
「嫌だ死にたくない、死にたくないよ。」
「腕が痛い！痛いいいいっ!!」
「助けて……助けてママ、パパ!!」
　その嘆きの叫びが他の者にも感染ったのか、恐怖の声が広がり、冥加刀使の中には居ない両親に助けを求める者まで出始める程に恐慌が広がりつつあった。
　このまま、自壊する前に冥加刀使の体内に有るノロを全部回収しようかと静は考えるが、
「ねえ、みんなお願いがあるんだけど。」
　砲撃により、目が見えなくなった一人の冥加刀使が皆に聴こえるように声を絞り出す。お願いがあると……。
「もう戦えない……私を殺して……イチキシマヒメに私の身体の中に在る荒魂を……捧げて。……そうして、この中で一番強いイチキシマヒメを強くして……あいつらに……一太刀だけでも……一矢だけでも報いようよ？」
　その願いとは、自らの体内に在る荒魂をイチキシマヒメに捧げることでイチキシマヒメを少しでも強化して、敵対する特別祭祀機動隊に一矢報いようとしていた。
「……そうだね。私も手と足が片方無いから、捧げる。」
「私は……砲弾の破片で腹が切れて……腸が出てる。……でも戦える人は……！」

その声に応えるように、満身創痍となり、戦えない者達はイチキシマヒメに自らの命を保ってくれている荒魂を捧げるべくイチキシマヒメを宿す静の元へと集まり始める。

（……静、助けることはできないか？）

彼女等を見たイチキシマヒメは、死に急ぐ彼女等を救いたかった。

……荒魂と融合させる以外の方法で。

「ダメだよ、イチキシマヒメ。……これはあなたが始めたこと……あなたが最期までやらないといけないの。……じゃないと、その人達が可哀想でしょ？」

しかし、イチキシマヒメは静に最期までやらないといけないと叱咤される。

「……私の身体を貸してあげる。……だから、数珠丸を持って……彼女等を殺して……彼女等の中に在る荒魂を吸い出して……覚悟を決めろ！」

それだけでなく、重傷を負った冥加刀使の命を繋いでいる荒魂を吸い出して、自身の強化のために使うことに対する覚悟を決めろと静に言われたイチキシマヒメは、戦闘の継続が不可能となった冥加刀使を数珠丸を使って斬った。……斬り続けた。

ある者は切り刻んで、

ある者は刺して、

ある者は首を斬って、

……自分がこの世に存在する意味を求めた者が、自身を泣いて縋る程に求める者を殺すという矛盾にイチキシマヒメの心はズタズタになりそうだった。だが、そんな言葉を紡いでも、声にしても彼女達にとっての最大の救いにはならないということを理解していたイチキシマヒメは、そんな心を奥底に押し殺して！彼女等を斬った。……斬り続けた。

そうして、彼女等の肉を裂く感触、生温かい血潮を身体に被る感触、彼女等の末期の「頑張って。」「お願い。」「ありがとう。」という言葉を聞きながら、彼女等の命の燈火を消すとイチキシマヒメは負傷した彼女等の身体に今も宿り、辛うじて命を繋いでいてくれた荒魂を吸い出

していった。
（……。）
彼女等の骸となった姿と最期に魅せてくれた姿、そして彼女等の親と環境に恵まれなかった記憶を見ながら、イチキシマヒメは胸と目頭が熱くなっている自分が居ることに気付き始めた。
「ねっ？……不要な者なんて存在しないでしょ？……イチ子ちゃん。」
不要な者なんて存在しないという静の一言によって、イチキシマヒメは立ち上がった。
求めた理由は歪ではあるが、こんな自分でも必要としてくれた彼女等が最期に望んだ心の声、この理不尽しか存在しない世界を壊すということを。
（……ああ、静よ。お主も力を、身体を貸してくれ――――。）

――――一方、特別祭祀機動隊第二班。
「紫様！アレは?!」
遠くから爆発音が響いたことに驚いた可奈美は、紫にあの爆発は何かと尋ねていた。
「……あの爆発は自衛隊の砲撃と米軍の無人機による攻撃だ。」
「どうして？……どうしてそこまで?!」
「……理由が知りたいか?理由は荒魂化した刀使に対して誘導砲弾による砲撃と無人機によるミサイル攻撃はどれほど有効かを実証するためと……若気の至りで決起に逸った若い刀使に衝撃と畏怖を与え、早期の降伏を促すためだ。」
可奈美に尋ねられた紫は、荒魂で強化された冥加刀使に対して近代兵器はどれほど有効打となるかを実証することで蜂起を二度も起こさせないようにするためなのが理由の一つであり、冥加刀使ではない決起に逸っただけの若い刀使達に砲撃の凄まじさを見せることで降伏を促すためであると答えていた。
「……でも、それだとあの人達が!!」

「衛藤、忘れたか？……刀使は人々に仇なす異形の怪物である荒魂を斬って鎮めるのが役目であることを……。」

　可奈美は紫に対して冥加刀使達を殺めることに抗議するが、紫は普段通りの声音で刀使が人々に仇なす異形の怪物である荒魂を斬って鎮めるのが刀使の役目であると説くのであった。

「……そうかもしれない。荒魂を身に宿しているから荒魂かもしれませんけど、でも冥加刀使だと言っても、人と同じように怒ったり泣いたりする普通の人と同じじゃないですか!?あの人達は……あの人達は荒魂じゃないです!!……そんなのおかしいですよ。」

　しかし、可奈美は納得できず、紫に反論するのであった。

　何故なら、それを認めてしまえば、殺人行為を是としてしまうだけでなく、弟の優を殺さなければならなくなってしまうことを認めたくなかったからである。

「……衛藤！それ以上は言うな。……それ以上は美奈都と簀、私の友を侮辱することになる。」

「あっ……。」

　だが、紫は可奈美にそれ以上否定すると人が荒魂化することが珍しくなかった時代の刀使を、自分達の母親を侮辱することになると言われ、可奈美は冥加刀使を殺めることに蟠りを感じながらも、母のためにそれ以上は押し黙るしかなかった。

『緊急報告！緊急報告!!こちらの包囲を突破し、目標がそちらへ向かって進行中！繰り返す、目標がそちらへ向かって進行中!!』

　しかし、そんな可奈美の心中を知ってか知らずか静と冥加刀使達がこちらへと向かって来ているという旨の報告が上がってきたのである。

「臨戦態勢を取れ！冥加刀使達が来るぞっ!!」

　紫は、その報告を受け、即座に敵の狙いはタギツヒメであると看破し、迎え撃とうとしていた。

「みんな、イチキシマヒメのために道を開くよ！いいね!!」

「露払いは任せて、イチキシマヒメ。」

「タギツヒメを倒して、イチキシマヒメに力を与えるんだ!!」

事実、静と冥加刀使達の狙いは、第二班に居るタギツヒメの力をイチキシマヒメに吸収させることで禍神の力を獲得させようとしていた。

そのために、冥加刀使等は自身の手から御刀を落とさないように制服のリボンのタイを御刀に強く結び付けるだけでなく、怪我を包帯でわざと見せつけることで敵の同情心を誘おうとしていた。

「敵の狙いはタギツヒメだ！タギツヒメを守れ!!」

紫もタギツヒメをイチキシマヒメに取り込まれないように、周囲の刀使達にタギツヒメを守れと指示するのであった。

こうして、東京２３区にて起きた特別災害予想区域での刀剣類管理局と維新派の争いは、荒魂のために道を作るべく死力を尽くす冥加刀使と荒魂を守ろうとする刀使、恵まれない者と恵まれた者とに分かれ、相争うという奇妙な戦闘へと変貌を遂げていった……。

死の崇拝

荒魂を守ろうとする特別祭祀機動隊第二班。荒魂のために道を作ろうとする維新派。

その両者の戦いは第二班が圧されるという熾烈を極める戦いへとなっていった。

その理由は、大坂夏の陣にて活躍した真田信繁といったの豊臣側の諸将による決死の突撃により、慌てふためいた徳川軍の如く維新派の突然の猛攻に驚いた特別祭祀機動隊第二班は対応が遅れ、苦戦を強いられていたからである。

無論、それだけでなく冥加刀使達は、頭や腕といった自分達が負傷した箇所に包帯をわざと相手に見えやすい様に大きく巻いて第二班の刀使達の同情心を煽ったことも一因していた。

「イチキシマヒメは私がやる！他の人は冥加刀使をお願い!!」

可奈美がイチキシマヒメを取り込んだ静を〝御刀による会話〟でもう一度説得するべく、周りに居る第二班の刀使達にそう言って激を飛ばすが、

「くそっ！……私達はっ！」

頭や腕といった自分達が負傷した箇所に包帯をわざと相手に見えやすい様に大きく巻いて同情心を煽る冥加刀使達の行動は、特別祭祀機動隊第二班に属する刀使達に対して効果は絶大であった。

理由は、刀使同士で戦い合っているのだということを再認識させるだけでなく、第二班の刀使達の中には刀使同士の戦いの中で荒魂であるタギツヒメを守っているという事実が受け入れ難いという考えの者もあり、それ故に自然と剣先が鈍る者が現れ、部隊全体の勢いと士気の低下に繋がったのである。

「今だっ！敵は怯んだぞっ!!」

相手の勢いが弱まったことに気付いた冥加刀使の一人が今が押し時であると皆に告げる。

その言葉を聞いた他の冥加刀使達は鬨の声を上げ、更に気迫を上げ

るのであった。その人とは思えぬ奇声を出す鬨の声と気迫に乗った勢い、鋭い剣先が特別祭祀機動隊第二班に襲い掛かってくる。

「ぐっ!……こなくそ!!」

「待って!相手は写シを張っていないから、峰打ちで応対して!!」

冥加刀使の凶刃を写シで受けた第二班の刀使は、返す刀で反撃を試みるが分隊長の言葉で止まり、直ぐに命令に従い峰打ちで対応していた。

(!……あんなボロボロの姿で。)

しかし、所々に血の跡と包帯が巻かれ、満身創痍となった冥加刀使を見た刀使は、これ以上打ったり、斬ったりすれば本当に死んでしまうのではないのか?という疑念を強く抱いてしまったが故に、峰打ちで強く打つことに躊躇してしまう。

……それだけでなく、イチキシマヒメの力を取り込んだ静の姿が一番酷かった。左目はくさったしたいのように飛び出ていて、尚且つ、右脇腹が切り裂かれているのか、その部分から腸が這い出ていた。その壮絶な姿を見ただけで第二班の刀使は戦意を喪失しそうになり、第二班の刀使達の士気は下がり、勢いは失われつつあった。

「今だ!押せ!押せぇーーーっ!!!!」

「死んだとしても、イチキシマヒメがみんなの命を拾ってくれる!命を惜しまないでっ!!!」

「もう少し。後もう少しで!!!」

反して、維新派の冥加刀使達は、自衛隊のりゅう弾砲による砲撃と東京ホテルでも襲撃されたこと。政府の維新派と冥加刀使の荒魂殲滅の思いを否定されたこと。そして、荒魂であるタギツヒメを支持したこと。……そんな刀剣類管理局にも戻れない四面楚歌のような状況下に遭っても、自分達が死に自らの体内に在る荒魂をイチキシマヒメに捧げることでイチキシマヒメの力を強め、この荒魂を認めつつある世界に一矢だけでも報いることができればという思いが強くなってしまった冥加刀使達は、自分達が生きていく現世に希望が見いだせなくなったことも起因して、自ら進んで囮となって命を散らすことも構わなくなっていくのであった。

そうして、死の崇拝を求めるようになった彼女等は進んで死をも恐れぬ無謀な突撃を狂ったように何度も繰り返すのであった。

……そのため、相対する第二班の刀使とは対照的に冥加刀使の士気は大いに上がっていた。

「「「――――!!」」」

その鬼気迫る思いと先に進むことしか活路を見い出せない状況下によって死んだ冥加刀使達が紡いだ思いを受け継ぎ、その思いから怒りと嘆きを表現するかのように、獣のような雄叫びが入り混じったおおよそ人とは思えぬ不気味な声を出し、その人とは思えぬ奇声と共に生まれた決死の、第三者からすれば、死を求めているかのように見える狂気染みた突撃は徐々にではあるが、刀剣類管理局第二班の刀使達を臆させ、冥加刀使達はタギツヒメが居るところへと圧し進めていくことができたのである。

この状況を見た紫は、タギツヒメを維新派に渡される訳にはいかないと思い周囲に激を飛ばす。

「不味い……徐々に圧され始めているぞ！盛り返――――」

しかし、それに反して紫の言葉は最後まで紡がれることはなかった。

何故なら、紫の右肩に対刀使用の矢が刺さってしまったからである。

「……あっ……ぐぅ……。」

紫は痛むのか、足に膝を付けるものの、どうにかボウガンの矢を引き抜こうとするが、あることを咄嗟に思い付き、引き抜くことを中断、矢が刺さったままの状態で立ち上がる。

紫がボウガンの矢を引き抜かなかったのは、第二班の刀使達がタギツヒメ防衛に積極的ではないという芳しくない状況を好転させるためには、矢が刺さったままの状態である方が良いからである。

「……イチキシマヒメがタギツヒメを取り込めば、２０年前以上の禍神となる!!……各員、タギツヒメの防衛に尽力せよ!!」

「りょ……了解！」

矢が刺さったままの状態で尚も立ち上がり、奮戦する自身の姿を指

揮下にある刀使に見せること。
　そうすることで、紫は指揮下にある刀使達の士気の上昇と周囲の刀使達がタギツヒメ防衛に積極的になるように仕向けたのである。
……その結果、紫の尚も奮戦する姿を見た第二班の刀使達は尊敬する紫を守るべく勢いと喪った士気を取り戻し、冥加刀使達の決死の突撃の勢いは止まりつつあった。……それだけでなく、
「ギェッ！」
「がっ！」
　銃声が鳴り響くと同時にボウガンの矢が冥加刀使達の横から襲いかかってきたのである。
　特別祭祀機動隊が押され始めたのをようやく察し、味方である第二班の刀使達に銃弾が当たらない位置にやっと移動できた自衛隊の部隊が冥加刀使達に対して８９式の銃撃と対刀使用のボウガンを織り交ぜた攻撃を冥加刀使達に加えたことで、決死の突撃で先程押していた冥加刀使達は砲兵という戦場の女神の罰を受けた呪いのせいか、一転して窮地に陥ることになるのであった……。

――――その一方で、可奈美は静と剣を交えることで説得を試みていた。
「もう戦いは決したよ！降伏してっ!!」
「イヤだよ!!……だって私はまだ動けるんだものっ!!」
　可奈美は、身体中が紅い鮮血で染まっていることで綾小路武芸学舎の制服は白から朱い色になり、砲撃の破片で斬られたせいか、腸が這い出ているうえ、左目がブランブランと揺れながら飛び出ているという一目見ただけで重傷以上の傷を負い、イチキシマヒメが取り憑いたことで強化された身体のお陰でどうにか命を繋いでいるであろうことが分かる静の姿を見た可奈美は、静の身体を先ずは集中治療室に送れるよう降伏を促していた。

しかし、静は可奈美の説得に動じることなく「動ける」という理由で未だに可奈美相手でも御刀を振るい戦おうとしていた。

「……それに、この傷……この遺してくれた物が……お母さんと……お父さんの声を聴こえるようにしてくれるんだ！聴こえるんだ!!……全てはあなたのためだって！全ては私達のためだって言って……殴ってくれるんだ!!アイシテクレルンダッ!!」

そして静は叫ぶ。

このお母さんとお父さんが付けてくれた身体に遺る傷と痣、その古傷から生じる〝痛み〟からお母さんとお父さんの声を思い起こさせてくれると。母と父の愛を感じられると。

「この傷の痛みは神様からのギフトだって、神様が生きていて良いという宣告だと思えば……辛くなくなったんだ!!ありがとう、神様！私を荒魂と愛し合わせてくれる刀使にしてくれて!!!!」

そして静は叫ぶ。

このお母さんとお父さんが唯一与えてくれた身体に遺る傷と痣、その古傷から生じる〝痛み〟は神様が生きている証拠だということを告げるものだと思えば辛くなくなったと。

「……辛くなくなった？……え？どうして？私のこの傷は辛いものじゃなくって、でもでもそれだと何で辛くなくなったとか思ってるの？……私は、私はワタシはアタシは……お母さん!!お父さん!!」

静は、お母さんお父さんと言って助けを求めるように叫んでいた。

「……あああアンタだねぇっ!!私の子をアレコレ言う子は!!私の教育方針に――――」

そして、静はまたも何かに取り憑かれたかのように表情が笑顔から憤怒に変わると、可奈美に向かって御刀を振り下ろそうとするが、可奈美に届くことはなかった。

何故なら、静は可奈美に近付く前に、可奈美の身に危険が迫っていると判断した自衛隊員の銃撃とボウガンの矢で可奈美を静から離そうとしていた。

……その結果、銃撃とボウガンの矢を一身に受けた静は、可奈美

から距離を離されるようにどうっと倒れた。
「……アンタら……私の娘に何すんのおぉぉぉおっ!!!」
「逃げて!!」
しかしイチキシマヒメを取り込んだ静は、大荒魂の力によって身体能力が大幅に強化されているせいか、左目が潰れ、右脇腹から腸が溢れ出ているだけでなく、綾小路の白い制服が朱い鮮血でほぼ全身が彩られ、８９式の銃撃と対刀使用のボウガンの矢を受けたにも関わらず生きていた。……いや、どうにか生かされている。というべきであろうか。
そのため、静は強化された身体を無理矢理にでも動かし、自衛隊員達に迫るが可奈美にそれを遮られる。
可奈美は静に近付くことで、静が自衛隊員達の銃撃に晒されることがないようにしていた。そうすることで、可奈美は静を死なせないようにしていた。
可奈美は静が死にかけの状態であることは分かっていた。だが、それでも、ほんの少しでも良いから、静を助けたかった。
静と剣を通じて分かったことがあるからである。
本当は、両親を殺したことで罪悪感を感じ、そのように振る舞っていること。
本当は、傷付けることも痛いのも辛いと感じているが、その辛さを覆い隠すためにそのように振る舞っていること。
本当は、両親を自分の手で殺したことが辛いから、そのように振る舞っていること。
（……けれど、悲しいよ。そんなの。）
今の可奈美は、それが痛いほど分かっていた。
だからこそ、彼女は静を助けたかった。救いたかった。
「もうやめて、その子のことを自由にして!」
だからこそ、可奈美は叫んだ。
「あぁ!?!!この子のこと、何も知らない癖に!親でもない癖に!アンタ何様だよォおぉォオ!!!!」
「お母さんなら……お母さんなら、少しはその子を労って上げてよ!

今まで、貴女のために頑張ったんだから!!もうやめてよぉっ!!」
しかし、静に取り憑いたのか、それとも憑依芸でそうなりきったのかは不明であるが、静は可奈美の説得を聞き入れなかった。
「うるさいうるさいうるさあぁぁいっ!!私の娘なんだから私がどうしようと――――」
静はそう言って叫ぶと、イチキシマヒメによって強化された身体を使って可奈美を弾き飛ばす。そうして、可奈美を弾き飛ばし、騒ぐ静を見た自衛隊員等は可奈美が不利であると判断し、可奈美を救出するべく、静に向けて89式小銃と対刀使用のボウガンを放つのであった。
「!……待って、待ってください!!」
それを見た可奈美は必死で声を上げて止めようとする。
だが、自衛隊員達は死んだ目で、心を壊して静に銃弾とボウガンの矢による〝痛み〟を与え続けるのであった。
「……止めて……止めてよう……。」
力無く項垂れながらも、可奈美は自衛隊員達を止めようとした。
親の呪縛に捕らわれた彼女を救いたかった。親の影響で苦しんでいる彼女を助けたかった。親の影響で刀使になった自分に通ずるものがあったから幸せになってほしかった。
それ故に、可奈美は自衛隊員達を止めたかった。しかし、突如として蝶形の荒魂が可奈美と静を銃撃していた自衛隊員達に襲いかかってきたのである。
「刀使は死ね!!みんな死んじまえ!!そしてノロだけを寄こせえエェえぇ!!!!」
その蝶形の荒魂を操っていたのは、声帯も荒魂化しつつあるせいか聞いているこちらの頭がおかしくなりそうな声を上げている和樹であり、和樹が蝶型の荒魂を使った理由は、周囲に居る刀使と自衛隊員達の視線を静から外し、静が持つ莫大な量のノロを奪うためであった。
それに気付いた可奈美は、静が殺されないようにするために和樹を八幡力の力で蹴飛ばすと、こちらに注意を向けさせることができるで

あろう言葉を和樹に放つのであった。
「特別祭祀機動隊所属の刀使です！荒魂から離れてください!!」
それを聞いた和樹は怒りの表情をしながら、可奈美に向かって叫ぶ。
「……御刀っていう生け贄を要求する悪魔の手先がっ！……偉そうに、偉そうに人を化け物扱いしやがってええエェえエぇ!!」
悪魔の手先に人を化け物かどうかの選別はされたくはないと言って、刀使から奪った物なのかは判然としない御刀を手に持ちながら、可奈美に向かって罵詈雑言を放つ。
悪魔の手先。
今の和樹にとって〝御刀〟とは、それを手にする〝刀使〟とは、年上で和樹にとって最大の理解者であり、刀使だった初恋の女性を冷たい骸に変え――――、敬愛する結月を才も家庭環境も恵まれた刀使の結芽に奪い盗られ――――、収入面から刀使となった妹に見下され続ける日々を送らされ――――、
そして馬鹿高い税金によって、それが刀使の給金となることに憤りを感じながら――――、
怒りと搾取の日々を送り、それに耐え続けていた。
『お前、刀使の妹と比べると全然ダメだなぁ!!』
学校でも自分の家でも刀使に選ばれた妹と比べられる日々を送らされ、
『お前、刀使の妹が居るのに剣術弱いじゃーん。』
学校でも職場でもそう嘲られ、それだけでなく刀使が家族に居るということで特別視され、精神的にも肉体的にも虐められる日々となり、
『お前、国家公務員の刀使の妹が居るんだから金持ってんだろ?』
学校でそう嘲られ、職場からもそう冷やかされ続けられ、相手の溜飲だけが下がる日々になっていた。

――――そうして、僕は生きてきた。いや、みんなのおもちゃとして虐げられ、罵られるためだけに生かされ続けてきていた。

親も誇りも尊厳も初恋も愛も金も体力も自身が望む環境も……いや、僕の中に在った全てを刀使と御刀という存在が社会を変え、そんなふうに変えられた社会が僕の全てを断りもなく勝手に奪っていったのだ。

和樹は、そう思うだけで、刀使と御刀が悪魔の手先に見えて仕方なかった。

それ故に和樹の中には、人と刀使に対する怒りや怨恨で満たされていき、それを原動力として、人として最早機能していない身体でも動かすことができた。……そして、力の限り叫ぶことができた。

「……僕の身体はもう荒魂化が進んでいる。この国は、この世は出自が全てなのか!!?自分達の子供に使命を、自分のエゴを嫌でも受け継がせる……いや、押し付けるのが正しいのか!!?その両方を持ち合わせていない僕は生きている資格でも無いと言いたいのかぁっ!!!!

年収５００万以下のボクは人生の落伍者なのか……？」

嘗て、婚活活動している女性の声がネット上で広がった言葉、

『年収５００万くらいの〝普通の人〟が良いです。』

その言葉は、今も不況でフリーターしかまともな働き口しかなく、とても到達できない額を提示させられた和樹にとってみれば、それは結婚すらもできないということでもあり、自分は『普通』という枠組みから外されたのと同意義であり、命の輪から外されたのと同じ様なものであった。

……だから和樹は叫ぶ。僕は人生の落伍者なのかと？僕はこの世界からも要らざる者として見られているのかと？

「……僕の全てを奪った刀使と御刀を優遇するこの世界が正しくて、生まれや環境で全て決まるっていう世界に僕が不要だというなら、子供を残せない命の輪から外れた僕が、その世界に背を向けて普通じゃない人間以外の怪物となって何が悪いって言うんだ!!税金ばっか取って来るお前達がこうなることを望んだろうがっ!!!!」

だから和樹は叫んだ。

この社会が僕に〝人生の落伍者〟という怪物の役を押し付けるように与えたのだと。この社会が僕を命の輪から外れた存在にしたのだと。

「人間の世界から排除された人は、他の人と同じように扱われなかった者は、怪物以外になるしかないだろうがぁァあぁァっ!!!」

そう言って和樹は手にした御刀を持って、可奈美に向かって走り出すのであった。

人間の世界に排斥された者は、みんなと同じように扱われなかった者は、怪物になるしかないと。

計らずも和樹は、荒魂化が進んだことで、身も心も異形と呼ぶに相応しいほどに歪み、最初に抱いた喪失感を怒りに変え、その怒りを以って人を襲う怪物となった。

そして、人はノロを体内に入れる以外にも人を襲う怪物になれることを和樹は可奈美の目の前で証明してしまうのであった……。

形勢が逆転したことを見届けた紫は、ボウガンの矢を引き抜くと、力を温存すべく写シを解除する。すると、右肩に激痛が走り、何事かと思い自分の手に持つボウガンの矢を見る。すると、そのボウガンの矢には矢尻がなかったのである。

……ということは、写シの身体の中に矢尻が残るように細工が施された対刀使用のボウガン。今回の作戦にて、刀剣類管理局が防衛省に提供し、使うことになった自衛隊員が使っていた物を東京ホテルで冥加刀使達が鹵獲し使ったというところであろう。

「紫様、如何しましたか?」

しかし、傍に控えている刀使に自身が重傷であることを明かし、やっと形勢が逆転したこの戦闘をまた崩壊させる訳にはいかないと判断すると、紫は何事も無いかのように振る舞うのであった。

「……いや、何でもない。……ただ、疲れた。……歳なのかもしれんな。」

……そう、疲れた。

紫はそう思いながら、親友を救いたかったがために大荒魂の提案を受け入れ、一騒乱を起こしてしまったこと。

ノロのアンプルを製作したせいで親友である美奈都の息子と自身のことを信頼していた親衛隊をノロ漬けにしたこと。

そのノロのアンプルの製作に協力した二人が重傷と精神が崩壊したこと。……それに、刀使に対して致命傷を齎すであろう対刀使用のボウガンを作ったこと。

……そう考えるだけで、紫は対刀使用のボウガンを受けることになってしまったのは天罰のようなものなのだろうと一人で納得していた。

故に、痛みで顔をしかめ、後ろに下がる訳にはいかないと思い、悟られぬよう両の足で立ち続けていた。

「獅童の隊はどうなっている?」

そのため、真希にこの場を引き継いでもらうため、付近にいる通信担当の刀使に尋ねていた。

「はっ!真希隊長の方は、砲撃の爆発音と衝撃に畏怖を抱いた若い刀使達が続々と投降の意思を示しているようです。その後は柳瀬、岩倉隊員といった刀使とSTT隊員数名に投降した若い刀使達のことを任せ、真希隊長は自ら隊を率いて、こちらに向かっているとのことです。」

「……そうか、……助かる。と伝えておいてくれ。」

「分かりました。」

真希が『革命』という血気に逸った若い刀使達を早期に降伏させ、冥加刀使達との戦闘が続くこちらを掩護すべく、指示も無しに来てくれていることに紫は右肩を負傷させてしまったこともあって、素直に真

希に感謝の言葉を述べるのであった。
やはり、自身の不在も考慮し、真希には剣術だけでなく、異性同性問わずに人気がある部分を将器として昇華すべく作戦指揮能力も伸ばすために寿々花を付かせて作戦指揮を主にさせたのは正解だった。
紫はそう思いながら、安堵する。……だが、
「……紫様、蝶型の荒魂が現れたとのことですっ!!」
まだゆっくりできない事態に発展したと判断し、紫は直ぐ様近くに居る刀使達に続けて指示を飛ばすのであった。

ありがとうおかあさん。……ごめんねおかあさん。

可奈美と和樹が邂逅している時、ソフィアは絶望的な戦力差から敗走になることを考慮し、隠世の扉を開けるために必要なイチキシマヒメを確保するため、静の救出を最優先とした後詰めの部隊を東京ホテルにて待機していたのだが、自衛隊の特殊部隊である特殊作戦群と対刀使用のボウガンによって敗走させられ、部隊が散り散りとなった後、和樹が出した蝶型の荒魂の騒ぎのお陰でソフィアは静を連れ出すことに成功していた。

「……隊長、すいません。」

静はソフィアにおぶってもらいながら、手を煩わせてしまったことに対して謝意の言葉を述べる。

「気にするな。……必要だったからな。」

すると、静の謝意に対して、ソフィアは振り向くこともなく、ぶっきらぼう気味にそう返していた。

「隊長がそんなこと言うと……不気味ですね。」

「……勘違いするな。私は、私の目的のために隠世の門を開けることが必要だっただけだ。」

「……ハハハ、そうですよね。でも隊長、これだけは言わせてください。……〝ソフィア〟であることを辞めないでくださいね?」

だが、静は例えソフィアにそう言われるのが不自然に思えたために忠告するのであった。

「……貴女は〝ソフィア〟だったから……世の中に不満を述べれた。……怒りを抱くことができた。……武器を持って戦うことができた。……貴女が〝ソフィア〟じゃなくなったら、冥加刀使となった者達はどうなるの?」

静の心にスッと入る声をソフィアは聴きながら、自らが〝ソフィア〟と名乗り、世界を舞台にして演じ続けた理由を思い起こしていた。

マフィアの懐を温めるだけの建物の下敷きにされたソフィア。

大人の黒い欲望によって、水と共に流れた赤子だったソフィア。
自分がこの手で殺し、自分を恨むような眼で見たソフィア。

それだけじゃない。
この刀使という物を前面に出すことでクリーンを装う刀剣類管理局という組織。世界平和を謳いながら自らが持つ消費という暴力がどのような結果をもたらすかを考慮しない国民性。そして、この資本主義という名の社会。
そうだ。全ては無遠慮に自分の目に入って来る暴力を使わない聖人気取りのこの社会が憎かった。……とにかく不気味で、気持ちが良いものではなかった。

破棄される物や食料を見ながら常に思い起こすのは、自国も含む発展途上国に対する〝消費〟という名の暴力。
それを理由にした「良い国に住めて良かったでしょ？」という同調圧力、徳川家康のえた・ひにんを想起させる抑圧委譲。
抑圧委譲に基づいた権力や権威に依存し、社会から外れた少数を排除することによって社会と同化したと勘違いする大きな子供。

しかし、それは、一方において権威への盲従と権威や権力についてどうあるべきかを考えもしない者を生産し、目に付き易い権威や権力に盲従することで比較的簡単に手に入る麻薬のような〝甘え〟の心理に気付かず、いや、気付かない振りをして、目に入れないようにしている唾棄すべき国民性と社会を壊したかった。
破棄される物や食料を見て、自国や発展途上国の貧しい人間を思い出すと同時に、無意味に大きいビルや建物を見る度に下水道で姉のように慕ったソフィアのことを思い出した。
この大きな建物の下には、目に見えない人の魂や産まれようとしていた無数の命があったのかもしれない。もしくは見えないところで他者の権利を害することで建てられたのかもしれない。……そう思い起こすだけで自然と怒りが常に湧き、そんな社会に生き、自分だけ

享受し、狂った社会に呑まれようとしている自分が嫌いだった。そして、ソフィアを助けられなかった自分を責め続けていた。

……だから私は、怒りを原動力として、自分の目に無遠慮に入って来る大きな建物やこの腐敗した社会を、負い目を見なくて済むように破壊し尽くしたかった。

それを思い出すと、ソフィアは〝ソフィア〟の仮面を被って、静に話すのであった。

「……ああ、分かっている。もう後戻りはできない。」

「もう、……違いますよ！ゲホゲホ!!」

静は血を吐きながら、違うと言うのであった。

「……だって、貴女の知ってる〝ソフィア〟だったら……私を殺して、イチ子ちゃんの贄にしてるでしょう？」

「……。」

そして、静にそう指摘されたソフィアは押し黙るしかなかった。

……確かに、私が望んだ〝ソフィア〟ならそうしていたと思いながら、返答を渋んでいた。

「ねえ、イチ子ちゃん。お願い聞いてくれる？」

（……ああ、何だ？）

「……私の身体……あげる。」

静は消え入りそうな声で、イチキシマヒメにそう告げるのであった。

「……刀使と荒魂の融合は乗算……だよね？……それで、一応はまだ……刀使の私の身体を使って……隠世の門を開けて……。」

（……だが、それだと静は……。）

「死ぬってこと？……でも、私……そろそろ目の前がさ……見えなくて。……寒いだけで……痛みも感じないんだ。」

静は自身の命の灯が消えかかっていることをイチキシマヒメに告げていた。そして、自身の身体を完全に乗っ取ることで、更に強くなった力で隠世の門を開けて欲しいと頼んでいた。

「……だからお願い。……隠世の門を開けて……少しでも……この世の中を……風通し良くしようよ？」

（……静……。）

死にかかっている静を見たイチキシマヒメは、静の背中から上半身を出すと静を抱きしめていた。

「……私を認めてくれた者はもうお前しか居ない。……だからお願いだ。まだ死なないでくれ。」

「……ちょっと、重いよ。イチ子ちゃん。」

抱きしめたことに何か意味が有る訳ではない。そう理解しながらもイチキシマヒメは大荒魂であることも忘れ、ただただ一人の人間に対して生きていて欲しいと願った、この世から飛び立たないで欲しいと心から望んだ故に、そのような行動を取ってしまった。それを理解した静は、冗談混じりに『重い』と答えるのであった。

「……あっ。」

「!……静、どうした!?」

だが、静が突然何かに気が付いたかのような声を上げたことに驚き、声を上げてしまうイチキシマヒメ。

「……イチ子ちゃんって、人の身体みたいに……あったかいんだね……。」

血が流れ過ぎたことで冷たくなった静の身体に、イチキシマヒメの体温が入り込んだことで静はその暖かさを感じていた。

静の冷たくなった身体にイチキシマヒメの熱が入り、自然と意識が覚醒し出したのか、それとも別の要因なのか、過去のことを一つ一つ思い起こしていった。

（……ああ、お母さん……お父さんゴメンナサイ。……私、お母さん達みたいになれなかったよ。）

少女は心の中で両親に懺悔する。

刀使であった母のようになれなかったこと。父の期待に応えられなかったこと。……そうして、いつも血を流すほどに怒られていたこと。

（……私、無駄にしちゃったよ……。）

私が間違ったせいで死んだ飼い猫。そして、その次の日には父と母が私に「これが死だ。」という教訓を与えるべく、その死骸を食べさせ

られたこと。

私が間違ったせいで死んでしまった父と母。父と母の〝不貞行為〟が公にされぬように、そして父と母の遺体を守るために地下室に埋めたこと。

その殺した者達のためにも母と父が行った〝躾〟の本意を知りたかった。

……いや、違う。

本当は辛かったのだ。痛いことをされることも、痛いことをすることも本当は辛かったのだ。

だからこそ、その辛かった傷を隠すために、両親の〝愛〟が否定されることで本心が暴かれることが怖くて、本心が暴かれたことで私が両親に愛された静ではなくなることを恐れて、いつも長袖の服を着ていた。

……そうして、私が両親に愛された存在だという証明のために、母と父が行ったことでも〝愛〟が存在することを証明したかった。それを以って、私は世間一般の子供と同じで両親に愛されていた子供だと証明したかった。

今はもう、指の一本ですら動かすことも困難であったが、イチキシマヒメの本当の愛が在る熱だけは感じ取れていた。

（……けど、今は本当に心地良いなあ……。）

イチキシマヒメから贈られてくる暖かさに、静は微睡を感じていた。

……何処か懐かしさを感じながら、目を瞑りそうであった。

（……ああ、そうか。……やっと、分かったよ。……ただ……相手を思って……これも……イチ子ちゃんの……無償の……愛の形……なんだね。）

イチキシマヒメから贈られてくる暖かさに、静は心地良さと無償の愛を一身に感じていた。自身の中にずっと巣食っていた母と父の思いを継げなかったという苦悩と心苦しさが消え、母と父が唯一遺してくれた傷を気味悪がり否定しかしないこの世に対する息苦しさが無くなりつつあるイチキシマヒメの暖かさに、静は自然と身を委ねてい

た。
「……イチ子ちゃん……すごいよ。……イチ子ちゃんの中には……暖かい心が……あるんだね？……。」
「……。」
そうして静は、譫言の様にイチキシマヒメに対してそう呟くのであった。
血が大量に流れ、冷たくなった身体にイチキシマヒメの心と身体から贈られてくる暖かさに身を委ねた静は、思わずイチキシマヒメに向けて、暖かさを感じると言ってしまう。だが、ずっと孤独で心に虚無を抱えていたイチキシマヒメは、静に暖かい心が在る存在として認めてくれただけで、自身の存在をより認めてくれた様な気がしたのだ。
（……そっか、私が本当に欲しかったものは……誰かを刺したり、自分をって〝痛み〟を実感するんじゃなくて、……こうやって、暖かい気持ちにさせてくれることだったんだ……。そりゃ、見つからないよね。……ただ、素直な気持ちで……ただ、頭で考えずに……相手のことを思えば分かるのに……そんな簡単なことですら、見てなかったんだなぁ。……いや、違う。……見ないことで、辛い事から逃げてたんだ。）
そうして、懐かしさを感じたせいか、昔のことを思い出していた。それは、
服の上からだと分からない場所にタバコを押し付けられたり、顔にも腹にも殴られたり蹴られたりしたときのこと、それは静の精神（こころ）と肉体（からだ）が限界を迎えそうになったとき、自傷行為で精神（こころ）を保てたことで痛みは神様がくれた贈り物だと理解した。
……そう思うことで、いや、そう思い込むことで、逃げることで辛いことも痛いことも乗り越えられた……。
それを思い起こし、イチキシマヒメがくれた〝愛〟が本当の愛だと、静はようやっと理解した。
「……ありがとう……おかあさん……ごめんね……お……かあ……さん……。」
母と父が切欠で得た『不要な物は存在しない』という教訓のお陰で、

イチキシマヒメと出逢えたことに対して静は、感謝と最後にイチキシマヒメがくれた本当の〝愛〟を実感させてくれたことに静は感謝し、母と父を殺してしまったことに対する謝罪とイチキシマヒメよりも先に逝ってしまうことに対する謝罪を述べると。その感謝と謝罪を籠めたその言葉を最期に静の瞳は瞳孔が開き、静という人物は物言わぬ肉塊へと変わって逝ってしまう。

こうして、幼い頃に読んだシンデレラのように素敵な王子様に出逢えることを望んでいた少女は、人生という長い旅路の果てにイチキシマヒメというシンデレラにとって道標を示す魔法使いのような存在に出逢い、そして12時の鐘が鳴ると美しいシンデレラは美しいシンデレラで無くなるように、静も静では無く他と変わらぬ人だった物へと変わって行ってしまった。

「……静、冥加刀使の皆。私を必要としてくれた者は皆逝ってしまった。」

イチキシマヒメは自らの存在意義、自分が存在する理由を求めた。それ故に、人と荒魂を融合させ、人を進化させることによって荒魂の存在理由が立証できると思っていた。

……だが、それらを可能にするはずであったノロのアンプルの現実は、自分を認めてくれた冥加刀使全員を天国への水先案内人として現世の先へと向かい、自分を受け入れてくれた静も此岸の向こう側へと向かわせただけであった。それ故に、イチキシマヒメは、人と荒魂を融合させることが可能となる自らが作ったノロのアンプルは不合理で不条理な物としか感じられなくなり、否定する思いを募らせていく。

「……だが、私には、私を必要としてくれたお前達が遺してくれた記憶や思い。……それが我が胸中に在る!!」

冥加刀使達の中に在った荒魂を通して分かる――――。冥加刀使等が遺して逝った思い――――。

偽の親の娘が傷付かないように、その娘の代わりとして刀使にされ

た憎悪の記憶。
大学へ行くための資金を得るために荒魂とずっと戦い続けることに対する苦痛の記憶。
刀使を辞めるために迎えに来てくれる親が居る刀使が居るということの妬みの記憶。
荒魂が英雄視され、評価されることに対する矛盾にもがき苦しみ続ける嘆きの記憶。
友人や親が犠牲になった荒魂のことを考慮しない刀剣類管理局と政府への怒りの記憶。
――――そんな社会に対して、ただ破壊を求め、作り直されることを冥加刀使達は望んだということ。
そして、静も最後の言葉の中に隠世の門を開けて欲しいと願ったことで嘗ての願いを否定したイチキシマヒメの中に新たな望みが芽吹いてきたのである。
「……だから皆、安心して逝ってくれ。……何故なら、今から私はイチキシマヒメではなく、お前達とっての禍神であるイチ子ちゃんとなる……。」
そうしてイチキシマヒメではなくなったイチ子は、隠世の門を開けることを決意する。
本体を得るためではなく、自らを必要だと言ってくれた静と冥加刀使達の願いが叶ったことを何処に居ようとも届けるために。
「……我はこの社会を壊すほどの力はない。だが、我が禍神となり、隠世の門を開け荒魂共を世に放てば、この世を破壊する音と怨嗟の声が世界中に轟き渡る！……破壊と怨嗟の声が大きければ大きいほど、あの子達が望んだ破壊の音が此岸の向こう側へも届く。それだけであの子達のこの世に対する蟠りは、怨嗟は、憤りは晴れ、あの子達の魂は彼岸と此岸の境目でも迷うことなく逝くことができる。……それで、彼女等の魂は救われる!!」
こうして、無気力であったイチキシマヒメは、自分に力を与えてくれた冥加刀使と静のために隠世の門を開ける禍神イチ子ちゃんとなるのであった。

その一方、可奈美は荒魂化した和樹と戦っていた――――。

「刀使ノ御刀ノ他人から何もかも奪う悪魔の手先はみんな滅びなきゃいけないんだぁあァぁアっ!!」

血を吐くのではないかと思えるほどの声を和樹は上げながら、可奈美に向けて御刀を癇癪を起した子供のように振り回していた。しかし、可奈美は和樹の御刀を冷静に、何処か客観的に、他人事のように観察し対処していたが、こんなときにまるで他人を物扱いするかのような行動を取る自分が嫌であった。

和樹の剣を通じて、和樹の刀使に対する恨み辛みの声は最近のテレビに出てくる刀剣類管理局を批判することで視聴率を稼ぎたいテレビの意向に添ったものではなく、本当に刀使やそれ以外の怒りや怨嗟に包まれているのだと解かっているのに、真剣に取り組めない自分が嫌だった。

……真剣に取り組めない自分。それは、剣術の試合に挑んでいた時の自分。剣術が好きだからこそ、人の剣術が見たいがために試合を長引かせているというが、実際は神棚とかが置かれている道場や剣術の試合場が優から唯一逃れられる場所であり、自分だけの〝逃げ場所〟か〝聖域〟のように感じていた自分が居り、真剣勝負をする場所に逃げる場所と選んだ自分は本気で相手をしたことがあるのか?それは相手に対して良くないのではないか?という思いが重なり、遂にはそんな本気の相手に本気でぶつかれない自分が嫌いであった。

それを思い起こしたがために、相手に全力で挑めない自分もそうだが、他人を物扱いするかのような行動を取る自分も嫌いであった。

「お前等が!おねえちゃんを……僕に唯一優しかった人を刀使に仕立て上げて、奪っただけでなく殺したんだ!!」

それだけでなく、可奈美は〝おねえちゃん〟という言葉に過敏に反応し、荒魂化した優を思い浮かべたことで、この男を殺すことは優も

化け物扱いすることだということを嫌でも抱かされていた。
……それ故に、可奈美は和樹に対して切っ先を向けることに躊躇い、そして上記の嫌いな自分を思い起こしたことで途惑いがちとなり、切っ先の鋭さが失いつつあった。そのため、和樹に対して有効打となる一撃を振るうことができなかった。
「……そんなに、そんなに憎いの？刀使が何でそんなに憎いの？」
そして、可奈美は立場上対立した相手でも、悲運な境遇に同情してしまう傾向が特に強い子であった。
故に、可奈美は少しでも和樹の心を助けたいと思い、刀使が憎い理由を尋ねていた。
「……刀使が憎い理由？……全部だよ全部！生まれや出自で決まるこの世の中と同じで全部だっ!!オレが生きることにも、死ぬことにも文句ばかり言う奴しか居ないこの世の中全体にもイライラするんだ!!!!」
だが、和樹の精神の情緒は不安定なのか、聞いていないことも答え始めるのであった。
「妹が刀使だったからという理由だけで蔑まれたよ。刀使になったから福利厚生に恵まれた妹と比べられたよ。妹が刀使だったからという理由だけで剣術やっても、刀使と比べられてそれを言われ続けたよ！みんなのおもちゃにされたよ!!……普通になりたかった。刀使と御刀に関わらずに済む世界で生きたかったよ。そうだったなら、そうだったなら刀使のおねーさんも死なずに済んだし、僕は刀使の妹が居た理由だけで比べられてイジメられることもなかったし、それで希望していた高校受験にも落ちなかった!!!!」
ただ、普通でありたかったと。ただ、刀使と御刀とは無縁の世界に生きたかったと。
「……そうだったなら、そうだったなら僕も、妹が刀使だったからという理由だけで僕を蔑んできた一般家庭のタカシくんみたいに普通に高校受験を成功させて普通に就職して普通に家庭を持てたハズなんだ！それを、それを刀使と御刀、それを甘やかす世の中が僕の全てを奪ったんだ!!」
そして和樹は、自分のことを虐めた主犯格のくせにのうのうと自分

だけは幸せな家庭を築いたタカシとそれと結婚した高収入目当てのブス女のことを思い起こしながら、自分の全てを奪った御刀と刀使、それを甘やかす社会が憎いと和樹は自分の言葉で答えるのであった。

「……。」

可奈美はそれを聞き、そして和樹の持つ御刀を通じて分かる怨嗟と憎悪の深さに気圧されるだけでなく、迷いも生じていた。

テレビに出てくる人達とは違い、ここまで刀使のことを憎悪する者が居るとは思わなかったこともあって、戸惑う気持ちが強かった。

「……違う。」

だが、可奈美は丹沢山で現れた荒魂化した女性のことを思い出すと、今度は、今度こそは荒魂化した人を助けたいと思い起こすと、瞳に光を宿す。

『ねえ知ってる優ちゃん。お母さんが刀使は人を守って、感謝されて、剣術も学べる、最高だって言ってた。けど、私はこうも思うの、刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟なんだって。』

嘗ての自分が、愛しい者へ送った誓いの言葉で自分を奮い立たせると、御刀を和樹に力強く向ける。

「……そうだよ。子供が信じている正義の味方だったら、ここで立ち止まらない。まだ、諦めない！」

可奈美はそう言葉を絞り出すと、死んだ人のために奮い立たなければならないと覚悟するのであった。

「……だって私は、優ちゃんよりお姉ちゃんだから！理由なんてそれだけで十分!!」

そうして、可奈美は叫ぶと、タギツヒメに対して有効打を与えられる千鳥を所持していることと油断を誘えることから、タギツヒメを身に宿す優を唯一倒せる刀使として認識されていることもあって、もう二度と荒魂化した人を殺さずに救おうとする。

「だから、貴方を救えば私は！」

故に最後まで抗おうとした。

荒魂化した人間を殺さずに済ませることで、優を救えることを証明しようとした。……しかし、

「……掩護します！」
「可奈美隊員は今のうちに!!」
間の悪いことに和樹と可奈美の戦いを見ていた自衛隊員達が、和樹が一方的に攻めている状況から可奈美が不利であると判断し、可奈美が逃げられる時間を稼ぐべく手に持つ９９式小銃で和樹に向けて銃弾を浴びせるのであった。
「ダメ！逃げて!!」
銃撃されたことで、和樹は怒りの感情のままに、荒魂でもない人である自衛隊員に襲い掛かって行ったのである。
「お前達もがあぁぁぁぁぁ!!」
それを見た可奈美は、優と美奈都を思い浮かべた影響か、私を助けた自衛隊員の人達が家庭を持っていたら、その家族の人達が深い悲しみに暮れることを考えてしまった。……だから、可奈美は決断する。
『だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても救ってみせるよ。』
嘗て、荒魂が入っている優に語った言葉。……自分は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたいと。
『……そうなんだ。だったら僕もそんな大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。』
それを聞いて笑顔になる優。……それを見て、自分は正しいことをしているのだと実感できた。
『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』
弱っている母の美奈都に言われた言葉。早くに死んでしまう優に母親らしいことをしてやれなかったことを悔いて、可奈美に任せたいと言われた可奈美はそれを二つ返事で任せて欲しいと答える。
タギツヒメに取り憑かれ、荒魂化して行く優。
母親らしいことをしてやれなかったことを悔いる母。
その願いを一つでも叶えようと、〝おねえちゃん〟として奮闘しようとした可奈美。

それらを思い返しながら、心臓が早鐘を打ち、何度も何度も胸に叩く鼓動を感じながら、和樹の背中に御刀を刺した……と思う。

思うと可奈美が思ったのは、そこからの記憶が曖昧で自分が刺したかどうか確証は得られなかったからである。……だが、現実は和樹の胸には、可奈美が持つ御刀千鳥の刃が出ていたことから、背中から胸に千鳥の刃が出るほどに可奈美は和樹を深く刺しただということを千鳥が物語っているように感じられた。

「……あっ?……あ、あがあァぁああァぁアあァ!!」

すると、和樹は可奈美を突き飛ばすことで、千鳥の刃を引き抜くが、荒魂に痛撃を与える御刀千鳥であったことで、あまりの痛さに和樹は悲鳴を上げながら仰向けになって悶え、叫んでしまう。

「たっ、助けて!!!痛い痛い痛いィイイイイイ!!!」

故に、和樹は子供のように泣きじゃくると、唯一の理解者であった初恋の年上であった刀使の少女を思い浮かべ、それに助けを求めた。

……しかし、

「あ、ああ、アぁあァぁああァぁアあァ!!!」

助けを求めた少女は和樹の目の前に居た。侮蔑のような目を向けて。

その眼差しを受けた和樹は思い出す。……自分が結月学長を勝手な理屈で殺そうとしたこと。刀使を殺そうとしたこと。……それらを思い出した和樹は、罪悪感に抱き、救いを求め始める。

「いやだよ……もう、ツライよ。……この場所が、だから……助けて、タスケテ、たすけて……おねえちゃん、聞こえてるんでしょ!!おねえちゃーーーん!!!」

和樹は子供に戻ったかのように泣き叫び、初恋の刀使の少女の幻影を求め、その刀使の少女に助けを求めた。……それを優という弟を持ち、母の美奈都に〝おねえちゃん〟を任せられた可奈美に向けて、訴えるのであった。

そして、それを訴えられた可奈美は、やけに〝おねえちゃん〟という言葉だけは人の言葉の様にハッキリと聞こえてしまった。

「……うっ……くっ……。」

その痛々しく、まるで子供のように〝おねえちゃん〟に救いを求める荒魂化した人を見て、可奈美は嫌でも優を連想してしまう。……もう二度と、荒魂化した人を斬らなくてもいいようにしたかった。斬らなくてもいいということを、それを証明したかった。

だが、これが〝荒魂を斬る〟という使命なのだと、可奈美は改めて実感することになる。可奈美はそれを見て、涙を流しながら、嗚咽混じりの声で呟くのであった。

「……ありがとう……おかあさん……ごめんね……お……かあ……さん……。」

おとぎ話に彷徨うアリス達

「……全て終わりました、結月さん。」

平穏な高校生活を望む一般学生の和樹は、世にも珍しい御刀の一振り名刀ムラサメに選ばれ、史上初の男の刀使として、平穏な高校生活を犠牲にしつつも、嘗て昔の記録に残っている伝説の大荒魂を親から受け継いだ古流武術を学んでいたお陰で単独で倒すことに成功する。

その大荒魂を和樹が単独で倒した事が発端となり、和樹の活躍を認めず、今も結月学長を苦しめる結芽が居る刀剣類管理局と悪の親衛隊といった者達との戦いが始まったが、結芽を倒したことで全ての因縁と戦いが終わり、現役の刀使にも負けない大活躍をすることとなってしまう。

しかし、目立つことが嫌いな和樹は約束された地位と名誉も捨たが、その行動によって一層目立つ存在となったがために、人目に付かずに敬愛する結月の居る綾小路武芸学舎に戻るのも一苦労であった。

……和樹が一苦労してまで結月の居る綾小路武芸学舎に戻ったのは、和樹の活躍によって、刀剣類管理局の新しい局長となった結月を前祝いするために戻って来ていたのである。

「……戻って来てくれたか、和樹。」

そんな和樹を結月は、顔を赤らめながら、出迎えてくれていた。

理由は、存在するかも判然としない御刀ムラサメに選ばれた史上初の男の刀使として現役の刀使にも負けない活躍するだけに止まらず、悪の親衛隊や結芽といった刀剣類管理局内部の腐敗を促進させる名ばかりの刀使達を一掃することで組織の正常化に寄与したこともそうだが、自身を肉壁にしてでも刀使を救おうとする献身さと彼女等の負担を減らすべく最新装備やらを開発する頭脳と勤勉さが評価され、彼はとあるネット界隈では『刀使の防人（ときもり）』という渾名を付けられたのである。

……そういった彼の人柄と相まって、結月はそんな和樹に好意を抱いているのだが、和樹は相手への特に恋愛方面における好意には鈍感

であるだけでなく、結月は和樹にとって天然理心流を教えてくれた剣の師匠でもあるため、結月にそういった感情を向けられていることに今まで気付かなかったのである。

「？……それでは、失礼致します。」

それだけでなく、困っている人を助ける性分、さり気ない一言や対応でしれっと異性を落とすことをすることも相まって、結月以外にも和樹のことを憎からず思う刀使や刀剣類管理局職員が多く居るのだが、その全ての好意に今の和樹は現に今も気付いていないのである。

……そういうこともあって、今の和樹のそっけない言葉ですら結月は非常にやきもきした思いを募らせていたのである。

「……待て、和樹。」

結月に呼び止められた和樹は振り向く。

すると、振り向いた先には顔を近づけてくる結月が居たことに気付き、それを避けることなく彼女の接吻を受ける。

――――だが、その接吻は不思議と無味乾燥としていて、感情も揺り動くほどの物ではなかった。……いや、何も感じなかったのだ。

「……さようなら。」

だからこそ和樹は、それだけを言うと結月からも、綾小路武芸学舎からも、刀使達に黄色い声を上げられても背を向け、そのまま外へ出ると、愛する家族の居る自宅へと戻って行った。

「……。」

そうして、自宅にある自室の天井を見ながら、自分が望んだ平穏な高校生活に戻るのだろうと思いを馳せつつも、和樹はある思いを抱き、悲しみに打ちひしがれていた。

「無意味に愛されるのって、つまらないんだな……。」

あれだけ慕っていた人からの接吻というのは心地いい物なのだろうと思っていたが、何も感じなかった。まるで、人の言葉を喋る人形を相手にしているような気持ちさえ抱いた。

望んでいた地位も、名声も、多数に女性に好かれることがあっても何一つとして、何一つ満たされることがなかった。

そんなことを和樹が考えていると、自分の自室に初恋の人、刀使

だった年上の少女が其処に居た。
何故？ここに居るのか不思議でならなかったが、自分の姿を写す鏡を見て直ぐに理解した。
何故なら、世にも珍しい御刀ムラサメに選ばれ、史上初の男の刀使として認知され、刀剣類管理局の不正を正し、平穏な高校生活目立つことを避けることと平穏な高校生活を望む〝和樹〟は存在せず、いじめられっ子で妹の刀使や結芽に足蹴にされる惨めな〝和樹〟の幼かった頃の姿が写っていたからである。
和樹はそれを見て、昔読んだ童話の《ｄｒｉｎｋ　ｍｅ》と書かれた飲み物を飲んだアリスのように身体が縮んでいったのだろうと理解し、それ以降は身体が幼かった頃の自分に戻ったことに何の疑問も抱かずに受け入れ、やっと安住の地を得たのだと安堵したのである。
もうこれで、刀使に妬みや嫉みの感情を抱かなくて済む。
もうこれで、刀使のようになりたかったと思わなくて済む。
もうこれで、他所から引っ張ってきた物で、他人の袴で戦わなくて済むのだ。
「……おねーちゃん。……来てくれてありがとう。」
こうして、幼かった頃の自分に戻った和樹は初恋の人に抱きつくと、初恋の人に身を全て委ね、瞳を閉じていく。
僕が本当に求めていたものは、沢山の女性に好かれるといった欲望を満たす行為でもなければ、在りもしない御刀を手に入れ、刀使の真似事をし、社会的な成功を収めた存在だと相手に認識させることでもなかった。……そして、平穏な学園生活を求めるか目立つことを避けるだとかいう恰好付けた話でもなかった。
……今まで、そんなことを妄想しても自分の心が晴れること等、なかったのだから。
……全ては、匂いも何の味もしないが、この微睡みの中に引き込まれる心の中が暖かくなるナニかを求めてのことだったと解釈した。
例え、初恋の人の顔が黒く塗りつぶされていても、和樹は初恋の人の顔を思い出せないのだろうと理解し、暖かい微睡の先へと向かって

行くのであった――――。

「あぁあぁあぁあぁあぁ！……がぁっ……げぇ!!……。」

和樹の身体の目と耳穴から荒魂が這い出て来るという姿を見ていた可奈美は、生命を断つために、覚悟を決めて和樹の首を千鳥で斬ろうとしていた。

これ以上、荒魂による被害を減らすために……。

だが、可奈美は和樹の次の言葉を聞いてしまったがために動揺し、斬る動作の途中で止まってしまう。

「……おね……え……ちゃ……ん……。あ……りが……と……う……。」

何故なら、〝おねえちゃん。ありがとう。〟という呟きがやけに人間の言葉の様にハッキリと聞こえたからである。

そのため、可奈美は和樹のことを否応なしに優の姿と重なって見てしまった。

それ故に、可奈美はきっと今の状態で荒魂化した和樹を御刀で斬れば、今後は荒魂化した人間を殺すことに躊躇が無くなるような気がした。

……いや、剣術好きな少女に二度と戻れなくなるのだろうという気がした。

優に重ねて見てしまった人間を斬るということは、優を斬ることに何の戸惑いも無くなってしまうのではないかと恐れも抱いた。

……今まで、人を斬らないことで、優を人間扱いしていると実感できていた。そして、今度こそはと荒魂化した人間を斬る以外の方法で救おうとした。それで荒魂化した人間は斬らなければならない。優を荒魂扱いする社会。に抗い、自分は優しいおねえちゃんになれると思った。

だが、神様は残酷なのか、それとも下卑た神様なのか、そんな可奈美の決意を嘲笑うかのように、目の前に居る荒魂化した人間は〝おね

えちゃん〟と叫んでいたために可奈美は優に近い存在が目の前に用意され、刀使として、人々を守ることができるかどうか試されている様な気さえした。

……それ故に、そんな底意地の悪い神様が呪った。

……このときばかりは、御刀を創った神すらも呪った。

『……姫和ちゃんの行動が起こした結果なんだから、姫和ちゃんの頑張りは間違いじゃなかったんだよ。……うん。』

だが、可奈美は不意に舞草の隠れ里にて、荒魂化した人間を討つことに悩んでいた姫和に対して述べた言葉を思い出していた。

（……ああ、そうか。）

あのときから、私は止めるどころか肯定していたのだ。荒魂と融合している優のことを忘れ、姫和ばかり見ていたから、そんな無責任なことを言えたのだ。優という荒魂に取り憑かれた被害者を弟に持ち、その弟のことを任された人間は本来なら、何が何でもその言葉を否定しなければならなかったのだ。

……このときから、ワタシは可笑しかったノダロウカ？このときから、マチガッテイタノダロウカ？

そして、可奈美は姫和が間違っていなかったという言葉を守るために、姫和の重荷を軽くするために荒魂化した人間を斬った。

ボトッ、と首が落ちた音と共に、可奈美の心も深く、深く沈んでいった。

それだけでなく、和樹の死体が優の死体に見えていた。御刀千鳥に付いていたノロが紅い血の様に見えていた。……それなのに、それなのに震えも出ない。顔も身体も動かない。恐らく、現実を受け入れられないから、心を閉ざすことで心を守ろうとする防御反応なのかもしれない。

だが、今の可奈美にとって、その心の在り様は、優を斬っても何も感じない、人の心が喪ってしまった非道い人間に成り下がったのではないのだろうかというふうに感じてしまったのである。

……私は、もう、正義の味方にもなれないし、剣術好きな少女にもなれないだろうという感情だけが、可奈美の心の中を侵食していっ

た。

しかし、和樹は夢現の中で苦難は晴れても、現実に居る可奈美の苦悩はそれで終わらなかった。

何故なら、和樹の身体から這い出て来た荒魂が、食欲という生存本能のままに和樹の死体を貪り食い始めたからである。

その光景を見た自衛隊員達ですら、「うっ。」と言葉を出すほどに吐き気を催す程に猟奇的で醜悪な物であった。……そんな光景を和樹のことを優と重ねて見てしまった可奈美の目の前で行われていたのである。

和樹の骨を歯でボリボリと砕く音が優の骨を噛み砕く音に聴こえ。和樹が荒魂に貪り食われる姿は、優が荒魂に貪り食われる姿に見え。和樹の血と内臓を美味しそうに食べる荒魂の姿が、優の血と内臓を美味しく食べているように感じ取れた。

全ては、よく見て、よく聞き、よく感じ取る少女故に、そう感じ取れてしまったのである……。

「――――!!!」

そのため、可奈美は叫んだ。

獣のような、人からかけ離れているような声を出しながら、和樹に向かって御刀を何度も何度も振り下ろした。

それだけでなく、和樹の遺体が荒魂によって貪り喰われた部分は隠世と繋がっているとされるねねの胃袋と同じであるならば、荒魂が貪り喰った和樹の身体の一部は、この現世から消えるということである。

……ともすれば、荒魂化が進む優も同じ末路を辿るのだろうか?と可奈美はふと疑問を抱く。

もし、それが事実なのであれば、優も母の美奈都と同じく自分の目の前から消えて無くなるような気がした。その仮説だけで可奈美は、また家族が消えてしまうことに耐えられなかった……。

故に、可奈美は叫んだ。目の前に在る光景が、人が、優が荒魂に貪り喰われ、何れ目の前から消え去るということを否定したかった。

「やめてよ。……やめてよ!!!そんなの見せないでよ!!!」

可奈美は何度も振り下ろした。

和樹を斬るためなのか、それとも和樹の身体に纏わりつく荒魂を追い払っているのか理解できぬまま、母の美奈都から教わった剣術の型も教えも何も無く、目の前に有る不快だと思ったものを可奈美は己の本能に従って、手にした御刀で何度も何度も振り下ろし続けながら、可奈美は母の言葉を嫌でも思い出していた。

『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』

優のことを任せるという母に託された思い。それを反故したくなかった。

可奈美は優が荒魂に貪り喰われ、そして自分の目の前から消えて居なくなることで家族がまた一人減り、家が大きく感じるという心細さを実感する現実に舞い戻りたくなかった。だからこそ、目の前に在る光景、荒魂化した人間の末路が荒魂に全てを貪り喰われるということを否定したかった。

可奈美は、荒魂化した人間がこうして身体に宿る荒魂に少しずつ身体の部位を奪われ、そして最終的に何もかも欲望のままに喰い散らかされ、この現世からも消えて居なくなる未来を暗示してくる姿を否定したかった。消したかった。無かったことにしたかった……。

――――『刀使たる者、御刀を使い荒魂になってしまったノロを祓い鎮める。その行いはちゃんと人を救ってきたわ。』

『私達刀使は人々の代わりに祖先の業を背負い鎮め続ける巫女なんだ。』

そうでもしないと、荒魂を祓い鎮めることを使命としてきた刀使も、荒魂化した人間を斬ったであろう母も、荒魂化した人間を斬ることを覚悟した姫和も、タギツヒメやタキリヒメといった荒魂も、この剣術の斬り合いを興じる人達の全てが不幸に陥るということに塗り替えられてしまうのだ。

可奈美は『御刀での斬り合いもみんなとの立ち合いも全部剣を通しての会話』ということを信条としているが故に、目の前の荒魂化した人間がその身に宿した荒魂に貪り喰われるという末路を否定した

かった。母や姫和の覚悟だけでなく、自身の信条までもが貪り喰われることを防ぎたかった。

人間を貪り喰う荒魂を剣を通しての会話で説く。――――無理だ。

彼等は御刀を持っていないし、剣術の心得すらない。だが、それは、剣術の心得と刀の所持が許されない者は救われないということを認めているようなものではないかと勘繰ってしまう。

故に、可奈美は自身が信ずる『御刀での斬り合いもみんなとの立ち合いも全部剣を通しての会話』を当然のこととして生きてきた可奈美にとって、その〝当然〟が目の前で崩れ去りそうになったことで、和樹の身体から何度も這い出て来る荒魂を可奈美は過呼吸になりながらも、何度も振り下ろし続け、どうにかして刀使も、荒魂も、この剣術の斬り合いを興じる全ての人達が不幸に陥るということを証明するような末路を否定しようとしていた。

『荒魂化した人は最早人じゃない。稀に記憶を残し言葉を話す個体もいるが荒魂は荒魂だ。御刀で斬って祓う。それしか救う手段はない。』

それだけじゃない。

姫和という友が語った苦悩も、覚悟も、決意の全てが救いの無いものになってしまう。それを防ぎたかった。

だからこそ、

『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』『大丈夫だよ。私、……私、おねえちゃんだし、お母さんみたいに強い刀使になって、全てを守り抜いてみせるよ。』『荒魂化した人は最早人じゃない。稀に記憶を残し言葉を話す個体もいるが荒魂は荒魂だ。御刀で斬って祓う。それしか救う手段はない。』『だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても救ってみせるよ。』『私、母親から御刀で腕とかいろんなところ斬られたんだ!!だから、人に御刀を向けても良いよねっ!!人も荒魂も違いなんて無いんだからっ!!』『……そうなんだ。だったら僕もそんな大好きでカッコイイお姉ちゃんの

助けになりたい。』『だからさぁ、私はあなたに聞いているの。……相手の写シを斬った感触、相手の苦しみ、痛みがどんなものだったか聞かせてくれるよねぇぇぇぇっ!!』『人間の世界から排除された人は、他の人と同じように扱われなかった者は、怪物以外になるしかないだろうがぁァあぁアっ!!!!』『これは私のお母さんとお父さんが唯一くれたもので、唯一遺してくれたもので、唯一の教訓で愛してくれた証なんだっ!!』『違わないでしょ?どんなに強くなっても、どんなに自分の好きな剣術を磨いても救えないかも知れないと思ったから、こうやってわざと手を抜いて剣術を楽しむためという方便を造るために剣術バカな自分を演じて逃げたんでしょ?』

可奈美は頭の中に、今まで聞いてきた声と、聴こえた声が一気に雪崩のように思い返し、一気に押し寄せて来たのである。

それにより、可奈美は自身の両肩にドスッと重荷が圧し掛かって来たかのように感じられ、頭の中がパンクするような感覚を覚えた。……今まで背負おうとしたものが急に圧し掛かってきたのだろうかと思えるほどに。

可奈美は、その重さに、その心苦しさに、胸の早鐘に心が押しつぶされそうになるものの、どうにか堪える。……だが、

『お前等が!おねえちゃんを……僕に唯一優しかった人を刀使に仕立て上げて、奪っただけでなく殺したんだ!!』

『刀使!御刀!他人から何もかも奪う悪魔の手先はみんな滅びなきゃいけないんだぁあァぁアっ!!』

堪えたことで安堵したのか、ハッキリとした和樹の声が可奈美の中にストンと入っていってしまった。

……御刀が悪魔の手先。そういう考え方が有るとは思わなかった可奈美は、刀使であった母の美奈都を支え続けた御刀千鳥を見ながら、本当に悪魔の手先なのかどうかを見つめてしまう。

その神性を帯びているとされ、神剣として称えられている御刀の一つ千鳥の刀身には……いや、それだけでなく鍔にも、柄巻きにもノロが付いており、可奈美の目の良さが仇となって、その御刀にこびり付

いたノロが返り血の様に見えた。
それ故に、
可奈美は母の美奈都から受け継いだ
御刀千鳥が人の血を吸う妖刀のように見えた。
そう考えるだけで、
千鳥も母の美奈都の命を奪ったような
ものではないかと勘繰ってしまう。
それだけでなく、朱いノロが付いた千鳥が
次は荒魂化した優を斬りたいと
訴えてるかのように聴こえてくる。
御刀が血を捧げよと、
魂を捧げよと、心も捧げよと、
全てを捧げよと。
自分の愛する者も、大切な物も捧げよと。

……そう、千鳥が訴えているかのように聴こえた。
血に濡れた御刀千鳥が人を荒魂との戦いへと誘う死神のように見えた。
母の美奈都や弟の優といった生け贄を欲しているかのように思えた。
となれば、それを握っている私は何なのだろうか?
母の美奈都を刀使にし、若くして死に追いやるだけでなく、弟すらも荒魂にするノロを産み出す御刀は、犠牲を多く出してきた。それなのに、何故今まで嬉しそうに、何をそんなに有り難そうにそんなものを手に持っていたのだろうか?
そんなことを考えていたせいか、可奈美は吐き気を覚え、口から苦しみを吐き出してしまっていた。
『心拍数上昇!規定値を大幅に超えています。衛藤隊員の近く居る者は鎮静剤の投与か治療室までの護送をお願いします。』
「了解、衛藤隊員を護送致します。近くに蝶型の荒魂を産み出す荒魂

が発生していますので、急遽刀使を派遣してください。」
そして、可奈美の援護のために近くに居た自衛隊員達は、吐いてしまい精神が不安定な可奈美をおぶると、その場を速やかに跡にするのであった。
「――――。」
可奈美は、朦朧とする意識の中で、自衛隊員達に「止まって。」と言いたかった。だが、先程吐いてしまったせいか、声を出せず。和樹の遺体を貪り喰う荒魂を遠くになっていく様子を見ながら、失神してしまった――――。

人か荒魂か判然としないグレーゾーンに居る荒魂化した人間を斬った可奈美は、童話の『不思議の国のアリス』のウサギの穴に落ち、チェシャ猫の弁により狂気の住人にされた少女アリスの様に、この"現世"にある不思議でみんな狂っている国を彷徨っていた。
『永遠の少女』・『子供』という意味が込められているアリスになれたどうかはハッキリとしないまま。何故なら、この国は……いや、この世界は『永遠の少女』や『子供』のままで居させ続けてくれないのだから……。

かくして不思議の国のお話がそだち
ゆっくり、そして一つ一つ
その風変わりなできごとがうちだされ――
そして今やお話は終わり
そしてみんなでおうちへと向かう
楽しい船乗りたちが夕日の下で
アリスよ。幼稚な御伽噺をとって
やさしい手でもって少女時代の
夢のつどう地に横たえておくれ
記憶のなぞめいた輪の中
彼方の地でつみ取られた
巡礼たちのしおれた花輪のように

母

「師匠が来ないなんて…そんなの初めて。」
鳥居と階段だけが見えるだけの霧に包まれた空間で、可奈美が一人だけ居た。
いつもなら、師匠である美奈都が居るはずなのだが、可奈美以外は誰一人として居なかった。
「お母さん……。」
そのため、一人だけの空間に居ることに孤独を感じ、お母さんと一人、霧と共に消え入りそうなほどの小さな声で呟くのであった――――。

……そうして、気を失っていた可奈美は目を覚ますと、見慣れない緑の天井を見て、何処かの医療テントの中にあるベッドの上で寝ていたと直ぐに理解した。
そして、どうして此処に居るのかを思い出していた。
……確か、東京２３区で維新派が起こしたクーデターを鎮静化するべく出動して、そして、
『これは私のお母さんとお父さんが唯一くれたもので、唯一遺してくれたもので、唯一の教訓で愛してくれた証なんだっ!!』
〝暴力〟を〝愛情〟だと誤認することで、今まで生きてこられた刀使と戦い、
『……僕の身体はもう荒魂化が進んでいる。この国は、この世は出自が全てなのか!!?自分達の子供に使命を、自分のエゴを嫌でも受け継がせる……いや、押し付けるのが正しいのか!!?その両方を持ち合わせていない僕は生きている資格でも無いと言いたいのかぁっ!!!!
年収５００万以下のボクは人生の落伍者なのか……?』

そしてこの世を儚んで、荒魂になることを望んだ者と出会ってしまったこと。

「……。」

可奈美は、荒魂になることを望んだ者である和樹のことを思い出すと、刀使は、本当に『正義の味方』であるのか？本当に人を……人を守って、感謝されて、剣術も学べるのだろうか？最高なのだろうか？

『……ねぇ可奈美。刀使って素敵だと思わない？人を守って、感謝されて、剣術も学べる。最高だよね。』

……誰の言葉か分からない。大切なことだったと思う。

でも、そうはならなかった。ならなかったんだよ……。

『……そうなんだ。だったら僕もそんな大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。』

『……そう、ならおねえちゃんに任せようかな、……お願いね、おねえちゃん。』

……小さい子との約束も、母との約束も守れなかった。

『お前等が！おねえちゃんを……僕に唯一優しかった人を刀使に仕立て上げて、奪っただけでなく殺したんだ!!』

その言葉が可奈美の心に反駁されながら、傍に置かれてあった千鳥を見て可奈美は怨みの籠もった目で睨みながら、ふと呟いてしまう。

「……何で、何で神様は御刀なんて創ったの？……何で刀みたいな姿になってんの？何で男の子でも刀使になれるようにしてくれなかったの？何で珠鋼とかいう訳分かんない石ころが有るの？何で荒魂と刀使を斬り合う関係にしたの？……ホントにさぁ、ホントに本当の……お母さんも優ちゃんも……何でそんなに私の家族の命を奪うの？……怨むよ神様？バカじゃないの神様？何考えてるの神様？」

母の美奈都を刀使にし、死に追いやった千鳥に対して、御刀の材質である珠鋼から出て来たノロが弟の優に取り憑いたことに対して、千鳥に文句を言っていた。

まるで意味が無く、何一つ意味の無いことをやっているのだと可奈美は自覚していた。……だが、言わないと気が済まなかった。

「……聞いてるの？ねえ、不純物とか言われている荒魂は喋れるのに、

あなたは母親みたいなものなのに何で喋ることすら出来ないの？
……何か喋ってよ!!」
　可奈美は千鳥に向かって叫んだ。
　不純物、負の神性を帯びていると言われているノロは結合すれば、やがては人語を解するまでに知性を獲得するというのに、正の神性を帯びた珠鋼から創られた御刀は人語を解する知能も無ければ、自分達が気に入った少女でなければ、何もしない身勝手で我侭な神様であることに怒りの感情を抱いた。
『それってまるで母親に抱かれて安心する子供のようだとは思わないかい？』
　そして、ノロの母親であるのに何もしないことに不満を述べるのであった。
　珠鋼をノロに近づけることで、ノロの穢れが距離と時間に比例して減少が計測されているため、ノロが徐々に清められているという実験の結果を理由にしたフリードマンの話しが本当なのであれば、珠鋼はノロの母親である。なのに、ノロの塊である荒魂に対して何も言わないことに、可奈美は苛立ちを覚える。
　……まるで、静の母親のように親の責務を果たしていないように見えたことも一因して、可奈美は苛立ちが募った部分もあるが、その様は人によっては言うことを聞かない物に癇癪を起し、八つ当たりする子供の様に見えることであろう。
　……だが、それでも可奈美は御刀が喋って欲しかった。母のように喋ってくれたら、この苦境にも何か助言を与えてくれるような気がするから人の言葉を出して欲しかった。
「私のお母さんを死なせておいて、そして今度は私が助けたかった人を斬ることしかできなかった。……ノロも珠鋼も、結局は人から何か奪うか、寄生するしか能が無いのに、何でこんなのが……何でこんな石ころを生んだの？神様？私達みたいな子が荒魂や私達が戦い合う姿がそんなに見たかったの？……酷い神様。酷い神様酷い神様酷い神様酷い神様酷い神様。」
　可奈美は御刀が人語を解し、喋らないことは頭で解っていても、可

奈美は御刀に話しかけていた。
……狂っているのかもしれない。と可奈美は思った。……だが、〝剣術を通じて相手を理解しようとする〟のは、まともな人間の思考なのかと考えている可奈美も居た。
本当に理解できているのであれば、写シの上とはいえ御刀で斬った相手の痛みを理解できなかったのか？……いや、理解できていないのだ。私は今まで斬ってきた人に対して何か思うことでもあったであろうか？そんなことすらも考慮せず、斬り合いをすることを押し付けたのではなかろうか？
現に、姫和が御前試合の最初に戦った綾小路の代表との戦いで姫和が勝ったが、その綾小路の代表は姫和の鋭い一撃を受けて倒れ伏し、写シを張っていたにも関わらず、痛みにもがき苦しんでいた。
その一幕を思い出した可奈美は、結局のところは自分の得意分野で好き勝手にしたかっただけではないのか？と思い詰めてしまう。
それに、相手次第では剣術を通じて理解できるとは限らないのだ。
……もしも、嘗ての優のように、相手が剣術が出来ない場合は一生通じ合えなくて良いのだろうか？自分の最も得意な分野での会話は自分のペースでしか喋らない物であり、一方通行過ぎる会話は……独り善がりの会話は果たして〝対話〟と言えるのだろうか？という考えに可奈美は至ってしまう。
『――――優しいし友達思いだけど冷たくて自分本位。』
誰の言葉だったか思い出せないが、多分、恐らくはその誰かが私に向けたメッセージなのだろうと思う……。
しかし、今の可奈美にとって、その〝誰〟が述べたか判然としない言葉は冷たいナイフとなって可奈美の心にグサリと刺さったように感じられた。
優が言っていたのだろうか？父が言っていたのだろうか？……それとも、母が言っていたのだろうか？
「……答えてよ。……ねえ、一つぐらい答えてよ！神様なんでしょう!?ノロのお母さんなんでしょ!?役立たずの神様!!!!」
優も救えない。静も救えない。荒魂化した人も救えない。……結

局は荒魂化した和樹も斬ることしかできなかった。
　可奈美は刀使になっても斬ることしかできない。
……剣術しか取り柄の無い自分に辟易していた。母の美奈都は20年前の大災厄が原因で早世し、弟の優も荒魂として死んでしまう。大切な存在も、守りたかった信条も、刀使としての誇りも全てを失うような気がしたのだ。可奈美の全てが荒魂や御刀によって奪われるような気さえしたのだ。
　故に、可奈美は自身の御刀千鳥にあらん限りの怒号で叫んでいた。
……役立たずの神様だと言って。
「可奈美ちゃん!?」
　その声を聴いた舞衣が、何事かと慌てた様子で可奈美の居るテントの中へと入って来る。それを横目で見た可奈美は、いつもの作った笑顔で応対する。
　この笑顔という名の能面を被り続けている間は母と同じで、いつも明るくて元気な剣術好きの少女を演じることができるのだから。天国に居るであろう母の美奈都がその姿を見れば安心するだろうから。
……だからこそ、可奈美は笑顔の仮面を作る。例え、本心が苦しくても。片方だけ口角を僅かに上げたとしても。
「……舞衣ちゃん。私が戦ってた人は？戦闘はどうなったの？」
　可奈美が片方だけ口角を僅かに上げたのを見た舞衣は、可奈美の弟である〝優〟がどうなったのかを気取られぬように可奈美が戦っていた荒魂化した和樹の末路と東京23区で起きた冥加刀使達との戦闘がどのように終わったのかを可奈美に話すのであった。
「……可奈美ちゃんが戦っていた人はタギツヒメが討伐してくれたよ。タギツヒメが対処してくれたお陰で蝶型の荒魂が散らばることが防がれたみたい……。」
「そう……なんだ……。」
　舞衣から荒魂化した和樹が討伐されたことを知った可奈美は、自分の無力さを感じながらも気分が悪くなってしまう。
『いやだよ……もう、ツライよ。……この場所が、だから……助けて、タスケテ、たすけて……おねえちゃん、聞こえてるんでしょ!!おねえ

ちゃーーーん!!!!』

何故なら、和樹が今わの際に泣き叫んだ〝おねえちゃん〟という言葉が可奈美の中で何度も繰り返し反響することで、否が応でも優のことを思い出し、半ば荒魂化した人でもある弟の優にも同じようなことをするのかと自問自答してしまうからであり、……そして、自分が優を斬り、優の血かノロか分からない血糊をべったりと付けた己自身の姿も想像してしまう。

どう足掻いても自分は荒魂を斬ることが使命の刀使で、心の底から救いたいと思っている優は荒魂となる未来しか思い浮かべなかった。

それ故に、今度は自分自身の手で大切なものを斬らなければならないのかと思うと、可奈美は気分が悪くなり、精神が疲弊していくが、可奈美はその心苦しさを歯を食いしばって耐えていた。

何故なら、平静を装うために、冥加刀使達がどうなったかを聞かなければならないのだから……。

「……舞衣ちゃん。……維新派の人達は？みんな死んでないよね？」

「……うん。維新派の決起に参加した若い刀使の子達は砲撃の威力を見て殆どが投降したみたいだから……その子達も刀剣類管理局に残る意志があれば復帰できるみたい。」

「そうなんだ……よかった。」

舞衣の維新派の決起に参加した若い刀使の子達は投降すれば、許されたことに安堵した表情を見せる可奈美に、舞衣はその刀使達が罪滅ぼしという理由で、常に最前線送りとされることを知っているために何とも言えない気分となる。

「……舞衣ちゃん、余り元気が無いようだけど。どうかしたの？」

「え？……あ、うん、それは……その子達はこれから、罪滅ぼしの名目で常に最前線送りとなるそうだから……それが、ちょっと気がかりで……。」

が、舞衣は可奈美が維新派の決起のことについて深く追求し、維新派の一部の者達と優がどうなったかを気取られぬ様に、維新派の決起に賛同した若い刀使達は決起に賛同したことに対する罪滅ぼしの名目で常に最前線送りにされることを正直に話していた。

「……あっ、でも私がその子達の指揮監督をすることになったから……その子達が少しでも生き残れるように鍛えてもらって良い？」

「うーん、舞衣ちゃんの頼みなら……仕方ないかな……。」

そして舞衣は、今の可奈美のままで居て欲しいが故に、彼女の好きな剣術をずっと続ける環境へ送ろうとしていた。……凄惨な戦場には、彼女に相応しくないのだから。

……そう、東京２３区での戦闘は狂気が詰まったような場所だった。

戦場の神様という砲兵に、いや、今やコンピューターによって砲撃の精度が上がった機械仕掛けの神様によって駆逐される神の恩恵を受けた名を持つ冥加刀使。

アメリカ製の無人機リーパー……いや、人造の死神によって、神の恩恵を受けた名を持ち人の手によって創られた御刀を持つ冥加刀使は殲滅されるという皮肉。

アメリカ製の誘導砲弾〝エクスカリバー〟というアーサー王が所持する聖剣によって駆逐される神性なる御刀を持つ刀使。

古来からの言い伝えを守る刀を持つ者達が近代兵器と数の暴力によって殺され、刀の時代の終末を告げて来たかのように幕府軍に思わせた鳥羽伏見の戦いを連想させるような戦場。

……もしも、土方歳三が東京２３区の維新派の末路を見たら、「もはや刀や槍の時代ではなくなった」と嘆くであろうか？と思えるほどの凄惨な戦い。

そんなことを語っていたり、考えたせいであろうか？舞衣は、可奈美には言っていない若い刀使達を扇動した指揮官達の末路のことを思い出していた――――。

――――真希が第一班の援護へと向かうために、第二班が制圧した区域の維持と決起に参加した若い刀使達の処遇といったことを任された舞衣と早苗といった指揮官と沙耶香といった隊員、それに決起に参加し投降してきた若い刀使達が数名残っているという未だに年若

い少女しか居ない甘ったるく、青い匂いがしてくるが、刀を持った少女が同じ制服を着ている少女を拘束し、引っ立てているという刀使以外の者が見れば、気味が悪いという感想しか出てこない現場にて厳つい警察護送車が何両か現れ、その警察護送車からバイザー付きのヘルメットと身体の至る所にボディアーマーを装着するという重武装をしているＳＴＴ隊員が何名か出て来たのである。

「柳瀬隊員と岩倉隊員でありますか？……私共は指令所からの勅命により、決起の参加を促した容疑者等の護送を任された者達です。彼女等の身柄をこちらに引き渡して頂きます。」

「……少々、お待ちください。」

その重武装をしているＳＴＴ隊員達が舞衣と早苗に近付くと、開口一番に維新派の決起に参加した若い刀使達の指揮官の身柄を渡して欲しいと言われた舞衣は、真偽を確かめるべく寿々花に確認を取るのであった。

「……此花さん。指令所からの勅命から来たとＳＴＴ隊員等が来ているのですが、間違いは無いでしょうか？」

『ええ、確認しましたが、それは私が出しましたので相違はございませんわ。そのＳＴＴ隊員に引き渡してくださいませ。』

「わかりました。」

そして、指令所に居る寿々花から確認を取った舞衣は部下に手で指示を出すと、部下の刀使が維新派の刀使を拘束し引っ立てているところをＳＴＴ隊員に見せることになり、その様を見たＳＴＴ隊員は怪訝な表情をするのであった。

「それでは、宜しくお願いします。」

「……了解しました。それでは、護送任務に向かいます。」

ＳＴＴ隊員の反応を見て、信用できると思った舞衣は若い刀使達の指揮官達を引き渡してしまうのであった。そして、補導される彼女等の後ろ姿を見ながら、彼女達の安否を祈るしかできなかった……。しかし、その数分後――――。

パン、パンという発砲音と共に通信が流れてきた。

『至急、至急！護送車輛が襲われ維新派の刀使が重傷のため、救急搬送

が必要！繰り返す、維新派の刀使達が重傷のため、救急搬送が必要！』
　舞衣が先程のＳＴＴ隊員等に渡した若い刀使達の指揮官達が重傷を負ったという通信を聞いた舞衣は肝を冷やしていた。
「ごめん！岩倉さん、お願いして良い!?」
「えっ、ちょっと……柳瀬さん!?」
　舞衣は早苗にそう言って……もしかして、という推測の域でしかないが、問い質す必要があると思い、寿々花の居る指令所へと向かおうとするが、
『柳瀬さん、お待ちなさい。貴女は第二班が残した現場の保持を任されているはず。……そこから離れることは許しませんわ。』
　銃撃があったにも関わらず、普段通りの声音で舞衣にその場に留まるように言う寿々花に空寒さを感じながらも、その指示に従うのであった。
「……わかりました。ですが、少しよろしいですか?」
『ええ、よろしくてよ?』
　だが、舞衣はその空寒さを感じながらも寿々花にあることを尋ねるのであった。
「……今のには、何か心当たりがあるんじゃないですか?」
『……今、報告に上がっているのは護送車輛が何者かに襲われ、維新派の刀使等が重傷を負ったということだけですが……何か思う所でも?』
「本当に何も関りが無いのですか?前までは私達の仲間だった刀使が銃で重傷を負ったんですよ?なのに、どうしてそんなに平静で居られるんですか?」
『柳瀬隊員。』
　舞衣の詰問に寿々花は「柳瀬隊員」とピシャリと言って黙らせた。
『私としましては、貴女が一部隊を率いる隊長となり、その隣には糸見隊員と衛藤隊員をと思っております。そこで、糸見隊員は中等部１年生の頃から鎌府女学院の主力として荒魂事件の対処をしていた経歴を買い戦闘の補佐を、衛藤隊員は貴女が指揮することになる新隊員の鍛錬を担当してもらおうと考えております。』

そして、舞衣は寿々花が舞衣のことだけでなく、急に沙耶香と可奈美のことを話に出してきたことに違和感を感じる。

『……それに、最近は世の中が物騒になり、物価が上がってきているというのに給料は上がらずに税だけは増えるという悪状況下においては荒魂事件と国内の凶悪犯罪はますます増える一方であり、政府与党は支持率の確保のためにそんな情勢下を払拭したという実績を得ようと、刀剣類管理局といった治安維持組織に対する政府予算は膨らみ、その政府予算を補填すべく税金を上げる。……そうなると、まともな職に就けずに自棄を起こす者が増えていく。舞衣さんには、幼い二人の妹さんが居ましたわね？自棄を起こした者は自分よりも力の弱い者を特にターゲットにするそうです。……それを考えれば、今はクーデターの鎮静化を目的とした任務に集中すべきではなくて？』

そして、寿々花の次の話しを舞衣は静かに聞き、確信する。……これは、脅しなのだと。

この不思議の国のアリスのウサギの穴に落ちていくかのように負のるつぼに嵌っていく世界においては、幼い少女や子供といった者を殺すことで怒りを鎮めようとする荒魂のような人間、所謂『無敵の人』というものが現れ続ける世界になりつつあると語る寿々花の話しを聞いた舞衣は、刀剣類管理局と特務警備隊、そして寿々花のある噂について思い出し、つい尋ねてしまうのであった。

「……ところで此花さん。刀剣類管理局内に朱音様直属の組織で、諸問題に対応すべく現場指揮のみならず諜報活動も行う部隊が在るとか。」

『ええ、そうですけど、それが何か？』

「此花さんが特務警備隊に配属されたのが、それが最大の理由だと聞き及んでいますが？」

寿々花の実家は京都の名家であり、その情報網を使えば、そんな幼い少女といった力の弱い者に怒りをぶつける理不尽な人間を見つけることは容易である。そんな人間を使って、舞衣の大事な者を奪うことは容易であると寿々花は言って脅しているのではと舞衣は遠回しに訊いていた。

『……フフフ、確か私が金に困った元警官や一般人を札束で叩いてこちらの諜報員だけでなく、鉄砲玉としても使っているとかいう醜聞ですか?もしそうだとしたら、それはそれは怖いことですわね?……ですが、昨今の刀剣類管理局に対する世間の目は厳しいですしね?貴女も、衛藤隊員と糸見隊員も夜道には気を付け、彼女等の身辺には特に注意なさってくださいね?』

だが、寿々花はそれは只の醜聞であると笑って返答すると、家の力を使って怒りに囚われた人間を見つけ、その人間を鉄砲玉にして舞衣達に送ることができると遠回しに返していた。

それを聞いた舞衣は、父と母、妹達のことを思い浮かべ、

「……分かりました。」

力無く返事するしかなかった――――。

喪失感から来る怒りの感情のままに人を襲う怪物のことを荒魂というのであれば、無敵の人、或いはルサンチマンと呼ばれる彼等もまた荒魂という怪物になるのであろうか?

そんな思いが今の舞衣に渦巻いていた。

灰色の世界

――――時は遡り、維新派達が集まる東京ホテルにて、ソフィアの演説が始まった後の話。

「冗談じゃない。……犬死になんて御免だ。」

若い刀使達の指揮官であった彼女等は維新派の思想に賛同したこともそうだが、その後の昇進と利益も含めて維新派のクーデターに参加し、その後は刀使の仕事に誇りを持つ若い刀使達を焚きつけて（というより、騙してと言う方が正確だが……。）維新派のクーデターに参加させたのだが、タキリヒメの討伐とタギツヒメの演説以降、急速に支持を失いつつある維新派を見誤ったとして見限り、彼女等は刀剣類管理局本部へと鞍替えする機会を伺っていた。

そんなとき、折神家支給の携帯端末が振動したことで、彼女は慌てながらも携帯端末を取り出すと、通話ボタンを押す。

『失礼、私は刀剣類管理局の者ですが。少しお時間よろしいでしょうか？』

「……何の用だ？私たちは維新派側の刀使だぞ？」

彼女はそう言うものの、内心ではチャンスだと思っていた。

上手く立ち回れば、今や急速に支持を失いつつある維新派から刀剣類管理局本部へと帰ることができると思ったからである。

『実は、朱音様が冥加刀使ではない貴女方まで罰するのは偲びないと申されていまして、それ故に、朱音様の宸襟を悩ますのは得策ではないという結論に至りましたので、降伏する意志がお有りでしたら、刀剣類管理局に戻れるようにするつもりですが？』

彼女はその話しを聞き、今すぐにでも飛びつきたい衝動に駆られるが、出来る限り、平然を装いながらも、相手側から好条件を絞り出すために自分達が維新派のクーデターに参加するように煽った若い刀使達を引き合いに出して渋る。

「……だがなぁ、維新派に属していた私もそうだが、特に私の部下達が本部の人間に後ろ指を突かれるような状況に陥りたくはないのだ。

……もし、手助けしてくれるというのなら、私は部下を預かる身としては私とその部下達も問題無く戻れれることが一番なのだが？」

『ええ、貴女達の部下は維新派の幹部達に騙されただけだとして、復職できるように取り計らっておきますわ。……ですがその場合ですと、貴女方は第一席の部隊と戦い、自衛隊の爆発音で意気消沈したという理由で、部下の刀使達と共に降伏していただかないといけません。……ですので、貴女方の居る場所と維新派の作戦内容を聞かせていただきますが、それでよろしいですわね？』

「……わかった。」

彼女は電話の主の話しの中にあった自衛隊の爆発音、恐らくは爆撃（実際は、誘導砲弾による砲撃とドローンによる爆撃だが、維新派に属する彼女等にそこまで教える必要性は無い。）を見れば部下達も意気消沈し、降伏することに異論は挟まないだろうと納得し、彼女は維新派の作戦と自分達が居る場所を刀剣類管理局に漏らすことを決意するのであった。

『それに、我々の指示に従えば、その忠勤振りを考慮し、元居た地位に復職することをお約束致しますわ。』

「……ああ、そうしてくれ。」

……全ては、自分達が生き残るために。

彼女達は降伏した後のことを考えながら、指示に従い冥加刀使達が自衛隊の砲撃とドローンによる爆撃された後は、直ぐに降伏したのであった。

そういったこともあり、ソフィア達が居る維新派はクーデターを起こす前に兵数だけでなく、装備の質や兵の練度に差があり、更には内部に裏切り者を出されていたという状況にあったのである。……つまりは、元々から維新派は、刀剣類管理局に勝てる状況ではなかったのである。

神の恩恵を授かった子供兵士。所謂冥加刀使や神性なる御刀の加護を受けた刀使が何人刀を振り回しても、銃や無人機といった機械仕掛けの力に踊らされた大人……いや、大きな身体を持ち、子供にも容赦なく食らう狼達には敵わなかった。そんな狂った戦場が、現実がそ

こにあった。

「それでは、宜しくお願いします。」

「……了解しました。それでは、護送任務に向かいます。」

刀剣類管理局本部と裏取引をした彼女は投降し、投降した際に御刀と携帯端末を没収され、今の自分が非力な女子中学生と変わらない状態に陥ったことに不安を感じ、己の無力感を感じていた。……そのため、少女は黙って事の成り行きを見ているしかなかった。

そうして、ＳＴＴ隊員に補導される自分達の部下と自分と同じく指揮する人とに分かれて乗車することに違和感を感じ、近くに居たＳＴＴ隊員にそれを訊くのであった。

「……おい、何で私は部下達と別れて乗車するんだ？」

「……お前達が結託して暴れられないようにするためと、維新派のことを全て答えてもらうためだ。」

ＳＴＴ隊員にそう冷たく返されるが、納得できなかった。

だが、不満を言う前にＳＴＴ隊員に車に押し込められたため、納得のいく答えを得ることができなかった。

そうして、彼女は無機質で殺風景な車の中でピリピリと張り詰めた空気と異様な雰囲気を感じる車内に連れ込まれたが、そんな彼女の心中を気にもすることなく護送車は、目的地へと動き出すのであった。

……護送車が動き出し、数分過ぎた頃に、脇に控えていたＳＴＴ隊員が彼女等に言う。

「……ここからは担当区域が変わるので、別のトラックに乗り換えてもらう。……降りろ。」

彼女等は銃を持つＳＴＴ隊員に〝降りろ〟と語気を強めて言われたため、素直に従う他なかった。

「前を向いて整列！」

車から降りた彼女達は、親の言いつけを守る素直な子供のようにＳＴＴ隊員の命令を守って、一列に整列していた。

「こんな所で乗り換えって……融通が利かないというか何というか……。」

彼女等は一列に整列させられ、そのままの状態にさせられたために横に居る同僚に気分転換か、それとも暇をつぶすためか話しかけられていた。

だが、彼女はたまたま横に居ただけの者の言葉に心の中で同意していた。……何故なら、幾らここら一帯が特別災害予想区域に指定され、車道に民間の車が通らないからとはいえ、車道の真ん中に一列で立たされることには、違和感しか感じないからである。

……しかし、彼女の違和感は確信へと変わる。

何故なら、両脇に居たＳＴＴ隊員がスッと彼女達から離れたためである。それを見た彼女は、周りの仲間に声を掛けようとするが、

――――ババババッ!!と、何か小さい炸裂音が発したと思った瞬間、自分達が刀使であるという証の綾小路武芸学舎採用の白い制服が朱く染まるのを見てしまう。

……ああ、これは撃たれたのだと維新派を裏切った彼女は理解した。

……これは本部が私達を裏切ったのだと彼女は分かってしまった。

……だとすれば元から生きて帰す気が無かったのだと、今更気付き、後悔していた。

「……あっ……ぐっ……!!」

彼女は痙攣し、呼吸が上手くできないことでもがき苦しみ、意識を朦朧とさせながらも、地面に赤い花を咲かせ、綺麗に彩られたと思える仲間の死体を見ていた。

『……殺して大丈夫なんですか?親御さん達に何て説明を?』

『テロリストに無惨に殺されたというだけで納得するはずだ。実際、コイツラ維新派が用意した銃で撃っている。……そうすることで、上は対テロ能力の向上を努めるそうだ。』

意識は朦朧としていたが、自分達を補導していたＳＴＴ隊員達の会話だけはハッキリと聞こえていた。

そして、これは死にゆく彼女等には分からないことであるが、彼女

等を撃った者は寿々花が此花家の力を使って集めた人を工作員に仕立てた私的な諜報部隊の一員であり、そしてこの彼女等への銃撃事件は、表向きは維新派内部による私的な粛清か、もしくは今回の維新派を支援した敵性国家の勢力が自分達との繋がりを消すために消されたという話しが流布され、最終的には刀剣類管理局に在るＳＴＴ隊員達の対テロ能力の拡充をする〟正当な理由〟を得ることができ、今後訪れるであろう防衛省や警察を頼りとせずとも、独自で諸外国と敵性勢力との争いに対抗する手段を得ることができるという算段である。

無論、敵性勢力といった外部の人間だけでなく、鎌倉での出来事で発覚した防衛省といった他の省庁からの横やり、所謂国内の者による政治工作にも対処すべく、刀剣類管理局内部の統制をより一層強固なものへとしなければならなかったため、若い刀使を維新派の決起に参加するように煽った彼女等を何時までも放置しておく訳にはいかなかった。……何れは獅子身中の虫となるとしか見られていなかった。

……つまり、彼女等が何らかの形で始末されることは降伏する前から決まっていたのである。

しかし、彼女は自身がそんな状況下にあったことなど知らなかったが、最期の力を振り絞って仲間の方を見た。そして、彼女は仲間の死体を見た。それが妙に美しく見えた。そして彼女は、自分の血と仲間の血が合わさったことに言いようのない高揚感と最後にこんな裏切り者の自分でも一つになり、還れたことに感謝していた。

何故なら、彼女達にはもう、荒魂と戦う戦場しか居場所が無いのだから……。そんなことに、今更気付いてしまったのだ。

（……みんな……ゴメンね……。）

あの世に会えたら、先ずはそう言おう、そうしたら私はまた、一緒にみんなと戦える日々に戻れそうな気がするのだ。

それを想いながら、彼女は息を引き取った。味方を裏切り、最後は裏切られたが、死すらも利用されたことに何も知らずに逝けたことは、彼女にとって唯一の幸福であったのかもしれない――――。

――――そして時は戻り、可奈美が横になっていた医療テントの中。

維新派の刀使が寿々花の手の者に銃撃されたことを知っていても、撃たれた刀使達にそんな一幕があったことを知らない舞衣は、

「……だからさ、これから新しく来る刀使を……可奈美ちゃんが剣術で最も大切なことを教えてあげて？そうすれば、冥加刀使の人達も少しは浮かばれると私は思うから。」

殺された維新派達や醜い政争から、目が良く敏い可奈美を遠ざけることで、何も知ることなく、ただ剣術に打ち込んでもらうことで可奈美の心を守ろうとしていた。

……身勝手な理屈だと思いながらも、舞衣はこれが最善であり、それしか方法が無いと思っていた。

何故なら、剣術好きな少女である可奈美には、醜い政争に汚れていくのは似合わないから、ただ好きな剣術でいつもの様に居てくれればそれで良いと思っていたから、そう判断したのである。

……しかし、そんな彼女の願いを嘲笑うかのように、外では、テントの中でも聞こえるぐらいの罵声と怒号が響いていた。

「何処だ!?言えっ!!!」

「ヒヨヨン落ち着いてクダサイ!!!」

その二つ怒号の主は、姫和とエレンであった。

大きな怒号を飛ばす姫和を止めるべく、可奈美はベッドから立ち上がろうとするが、

「ダメッ！可奈美ちゃん!!」

舞衣に止められる。

だが、舞衣にも明確な理由があって止めた訳ではない。……何となく、何となくだが、此処で止めないと自分が知っている可奈美はもう戻って来ないような気がしたのだ。……だからこそ、

「……可奈美ちゃん。今は倒れるほど疲れているんだから……今まで任務を人一倍頑張ったんだから……姫和ちゃんのことはエレンちゃんに任せよう?」

だからこそ、引き止めた。

この医療テントという緑の籠から、可奈美という鳥が飛び出すことを許してしまえば、もう目の前に居る可奈美は居なくなってしまうような気がしたから止める。……だが、

「お前達が……優を殺した奴は何処に居る!!!」

姫和の一際大きな声で全てが無駄骨となったと舞衣は、このとき確信した。

現に、目の前に居る可奈美の瞳には光が失いつつあった。そして、可奈美は舞衣の手を掴み、思わず叫んでしまった。

「舞衣ちゃん!優ちゃんを殺した奴ってどういう意味!?この狂った国!?管理局!?……ねえ!誰!!」

誰が優を殺したのか?この国の政府が刀剣類管理局に命じて優のことを殺したのか?それとも、不要になったから殺したのか?と舞衣に詰め寄っていた。

可奈美は、ここ最近の刀剣類管理局か政府が維新派のように優を始末しようとしていたことに気付いていた。故に、狂った国か管理局のどちらかが殺したのかと舞衣に問い詰めていた。

「私は優ちゃんを救いたかった!助けたかった!!でも、もうそれができない!!」

そうして、可奈美は涙混じりに訴える。

母に託された思いを遂げたかった。そのために剣術を頑張った。頑張り続けた。……そうすることで、優が荒魂じゃなくなり、元通りになると信じていた。だが、それが目の前で崩れてしまった。何もかも消え去った。

「私、わた……ワタシ、優ちゃ……おかあさんと……やく、約束……グスッ……うえぇぇ……。」

走馬灯のように思い浮かぶのは優との思い出。

まだ赤ん坊だった優の頬を突くと、優は小さな手で握り返してくれ

たこと。
幼かった頃の優は、小さな足でいつも可奈美の後について来てくれたこと。
私が無くした黒いリボンを優が傷だらけになってでも見つけてくれたこと。
それらの思い出が頭に浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返したあとに、次に頭に入りこんで来たものは、もう優に会えないという事実の痛み、その痛みを痛い、痛いと感じながらも、もう一度……もう一度だけ、ただ会いたいと願った。……願ったが、神様はもう一度チャンスは与えてくれないだろうということも何となくだが、理解していた。
これで、母に託された思いを守れなかったことになった。
これで、幼子との約束を守れなかったことになった。
これで、私は大切な者も想いも、何かも守れなかったことになった。
これで、私は正義の味方になれなくなった。
これで、私は刀使なのかどうかすら……。
そこまで考えた可奈美は、
「可奈美っ!!?」
医療テントの中へ慌てて入って来た姫和の声で覚醒し、姫和に迫りながら告げる。
「……ねえ、姫和ちゃん。」
可奈美の姿を見た姫和は心の中で身構えた。
……きっと、優は誰に殺されたのかを尋ねてくるだろうことは容易に想像できたからこその行動であった。
「優ちゃんは〝誰〟に殺されたの?」
故に、姫和は答える。……ある一部を隠して。
「……ソフィアとかいう冥加刀使が殺した。……可奈美、復讐なんて馬鹿なことは考えるな。」
だが、近くで見る姫和の唾を呑んだ喉の動き、額から出る汗の量、姫和が可奈美から視線を外す瞳の動き、話した瞬間瞬きが多くなるという挙動、可奈美はそれら全てを見て、姫和は何かを隠していると判断

し、更に詰問すべく可奈美は唐突にガッという音が鳴ったのではないかと思う程の勢いと力で姫和の胸倉を掴む。
「……それだけ？私、目が良くなって姫和ちゃんから出る汗の量や瞬きが多くなったとか良く見えるようになったから、嘘吐いているかどうか分かるから、正直に答えてね。」
「！……あ、ああ。」
胸倉を掴まれた姫和は、可奈美がこちらの顔をじっと見ていることに気付いたせいで、姫和は可奈美に心を見透かされているかのような錯覚を感じてしまう。
それ故に、無意識的に可奈美から視線を外しながら返答する。……しかし、
「……そうなんだ。でも、姫和ちゃん私に隠していることがあるよね？」
「！……な、何を根拠に。」
「根拠？……根拠はさっきからずっと、私から目を逸らし続けていることかな？」
「!!」
「後は、私に言われて、慌ててこっちを見るようにしたことも根拠の一つかな。」
可奈美に目を逸らしたからだと言われた姫和は、慌てて可奈美の方を見てしまう。だが、それが仇となったと心の中で後悔した。
「それで、何を隠しているの？」
「……じ、実は。」
そして、姫和は可奈美の圧に負け、隠していたことを言いかける。
「ヒヨヨン!!」
「姫和ちゃん!!」
ヒヨヨンと言って遮ろうとするエレン、姫和ちゃんと言って吐かせようとする可奈美。
その両者に迫られた姫和は、
「……ソフィアを殺さずに捕らえることを刀剣類管理局上層部が決定した。」

「……は?」
可奈美に全てを打ち明けた。
刀剣類管理局が優を殺したソフィアを殺すことなく捕らえろと命じたことに、何故そうなったのかと呆然とするが、気を取り直して姫和に問い詰める可奈美。
「何で?何がどうなって、どうしてそうなったの!?」
「上層部が言うにはソフィアは中国とロシアの両国の情報部と繋がっている可能性が高いらしい。……それに……それに、優は荒魂だからという理由で殺人に当てはまらないとも言っていた。」
姫和の言葉を聞き、目の前が真っ暗になりそうになる可奈美。
……荒魂を身に宿す冥加刀使を”荒魂”として殺し尽くし、その冥加刀使であるソフィアは優を殺しても”優が荒魂だったから”という理由だけで殺人罪にならないだけでなく、荒魂を身に宿す冥加刀使であるソフィアは殺してはならないという大きな矛盾と理不尽さに怒りの感情しか湧き出てこなかった。
「……私、本部長や朱音様に会って来る!!」
「可奈美ちゃん!?」
それ故に、可奈美は本部長の紗南と話しをして、優を殺したソフィアの捜索に加えてもらおうとする。
そのため、可奈美は千鳥のことすら見ずに、本部長等が居るであろうテントの中へと走っていた。
人か荒魂かそうでないかの境目
戦場かそうでないかの境目
平和とそうでないかの境目
御刀と銃の違いの境目
この世に神が居るかどうかの境目
そんな灰色(グレーゾーン)ばかりとなったこの世界の上で、走りながら紗南等が居るテントの中に入ると、他の重役に目もくれず紗南へと近づく。
……そして、
「真庭本部長!」
「一体何だ?騒々しい。」

「どうして……どうして優ちゃんを……優ちゃんを殺した人が無罪放免になるんです!!優ちゃんが殺した人は冥加刀使なんですよね!?さっきの戦いで冥加刀使の人達は荒魂扱いされて……みんな殺したのに、何でその人だけは……。」

可奈美が優を殺した人が、何故殺人者として裁かないのかと紗南等に問い詰めてくるのであった。

「……どうして……どうして……。」

それを横で聞いていた甲斐陸将補は、

「衛藤隊員、単純な理屈ですよ。……ソフィア某という維新派の幹部……いや、頭目は我々の内偵により中国とロシアの情報部と繋がりがあるという情報を得ましてね。そこから、防衛省としましても刀剣類管理局としても……そして、米国と我が国としても彼女から中国とロシア側の内情の情報を少しでも得たかったというのが理由の一つです。」

中国とロシアの情報部と繋がりを持つソフィアを捕らえることで中国とロシアの内情を少しでも知りたいというのが理由の一つと答え、

「そして、彼女を捕らえることで中国とロシア双方が我が国に対して、どのような工作活動をしたかという情報を得ることができ、その両国に対して外交上のイニシアチブ……まあ、外交上で我が国が優位に立てるということです。その証拠に、中国もロシアもアメリカでさえも、彼女の身柄を『重要参考人』として確保することに今や躍起ですよ。」

工作活動の痕跡を可能な限り消したいがために、ソフィアの身柄を手に入れたい中国とロシア。

そして、その両国の工作活動と国の内情が知りたいアメリカ。

……それら三国から、上手い汁だけを啜ろうとする自分が生まれ育った国。

可奈美は自分の弟を犠牲にして、上手い汁を啜りたいという考えを持つ国が、自分の両足の土台となっている国であるということに気付くと、土台が崩れたような感触が下と共に、気が狂いそうになるだけ

でなく、可奈美の弟を犠牲にする方がメリットがあると当然の様に答える甲斐の姿も……いや、このテントに集まっている真庭　紗南と刀剣類管理局と防衛省の重役達が不気味に見えた。……そして、歪んでも見えた。そして、理解した。

この国が、優を殺したのだと。

この社会が、優が殺されることを望んだのだと。

世界平和

「真庭本部長！」

姫和は可奈美の怒号が混じった叫びを聞いた瞬間、自身の怒りで可奈美が居ることすら忘れ、大きな声で優が殺されたことを叫んでしまうという己の浅慮さに後悔の念を抱いた。優が殺されるだけでなく、優を荒魂扱いし、優を殺した人間の罪は問われないと可奈美が聞けば、頭に血が上った可奈美が今みたいな行動を取るか可能性が高いからである。

結果、可奈美は本部長の紗南といった刀剣類管理局と防衛省の重役が居る処へと無断で入って行ってしまった。

そして姫和も、その場所へと可奈美に遅れて入って行く。

「どうして……どうして優ちゃんを殺した人が無罪放免になるんです!!その殺した人は冥加刀使なんですよね!?さっきの戦いで冥加刀使の人達は荒魂扱いされて……みんな殺したのに、何でその人だけは……!!」

「衛藤隊員、単純な理屈ですよ。……ソフィア某という維新派の幹部……いや、頭目は我々の内偵により中国とロシアの情報部と繋がりがあるという情報を得ましてね。そこから、防衛省としても刀剣類管理局としても……そして米国としても彼女から中国とロシア側の内情の情報を少しでも得たかったというのが理由の一つです。」

その場所では、可奈美が叫んでいた。何故、優を殺した人間は無罪放免の様な形なのかと。

悲痛な叫び声を上げる可奈美に甲斐が疑問に答える。優よりも、その優を殺したソフィアを生かした方が価値があると答えて。

「そして、彼女を捕らえることで中国とロシア双方が我が国に対してどのような工作活動をしたかという情報を得ることができ、その両国に対して外交上のイニシアチブ……まあ、外交上で我が国が優位に立てるといったところでしょうか。その証拠に、中国もロシアもアメリカでさえも、彼女の身柄を『重要参考人』として確保することに躍起

ですよ。」

悲痛な声を上げた可奈美のことなど気にしていないかのように……いや、親類縁者が死んでしまった人の心情など、本当に理解していないのだろうと思えるぐらいに甲斐は、ソフィアを生かすことでどれだけの利益が自国に齎されるかを自慢気に弟を殺された可奈美に語っていた。

……いや、実際に彼、甲斐は可奈美の心情を全く何一つとして理解できていなかったが故に、親類縁者を殺された人の前で堂々と益だけの話しをするのであった。

「それに衛藤隊員。貴女は人々に害をなす荒魂から我が国の国民を守ることを使命とする国家公務員の刀使の一員であるならお分かりでしょう?……我が国が外交上で三つの大国に対して優位に立てるということがどれだけこの国の国民を外敵という害から守れるか、聡明な貴女なら分かっている筈だ?」

故に、甲斐は優が殺されたことよりも、ソフィアを捕らえることで繋がりのある中国やロシア、アメリカといった大国からの対外工作の脅威から国民を守る事の方が害意から国民を守ることを使命とした刀使にとっても自衛官にとっても大事なことであると説くのであった。

「そんな話しなんてしてない!優ちゃんは殺されたんだ!!」

「そうですね。彼の少年はソフィアという者に殺されました。」

「違う!みんなが優ちゃんを殺したんだ!!荒魂だからという理由だけで!!」

可奈美の怒号に驚くことも、たじろぐこともなく、平然とした態度で優はソフィアという者に殺されたと答える甲斐。

その平然と答える甲斐に苛立ちを募らせ、何かが弾けた可奈美はみんなが優を殺したのだと感情を露にして叫ぶ。

「衛藤隊員。我々自衛官は我が国の国民を様々な脅威から守ることを使命としております。……貴女も刀使であるならば、どちらを優先すべきかはお分かりのはず?」

しかし、怒り狂う可奈美などに気にかけることなく、甲斐は尚も刀

使の使命を利用して、ソフィアを生かして捕らえることに同意するように説いていた。
「であるならば、国家公務員である我々が、国家に尽くすことを決めた我々が、家族が死んだこと、ましてや弟が死んだことぐらいで取り乱すべきでありますでしょうか?……我々が為すべきことは我が国の国民をあらゆる脅威から守ること、そして国家の保全を優先すべきだ?違いますか?」
それだけでなく、親族を殺された可奈美に理性的になれと話すのであった。
……今しがた家族を失った遺族に対し、機械のように、まるで遺族の気持ちなど関係無いかのようにそう述べていた。可奈美はそんな機械のように、他人事のように述べる甲斐に、自分の気持ちなど分からないくせに、家族を殺された者でもないくせにという思いとそれによって生じた怒りで心が歪み、そして荒んでいったがために叫んでしまう。
「私は感情の話をしているんだ!!」
「今は理性の話をしている。」
感情の話をしているのだと。
対して、可奈美の心情など理解していない甲斐は理性の話をしていると言って、平然と返すのであった。
「ふざけないでよ!!!!」
その平然と返す甲斐の姿に苛立ちを覚え、自らの立場も、相手の立場すらも忘れて、陸上自衛隊の陸将補である甲斐に暴言を放つ。
「あれだけ優ちゃんこき使って、要らなくなったら荒魂扱いして殺すなんて……貴方も御刀も刀使も目の前の人間を犠牲にして何が人を守るよ!何様の積もり!!?」
それだけでなく、刀使も御刀も役立たずであると罵るのであった。
しかし、
「……ですが衛藤隊員。貴女は手にした剣を、御刀を捨てることができない。」
「……っ!!」

甲斐に御刀を捨てることができるのかと問われた可奈美は、頷こうとするが躊躇してしまう、
「そう、今の貴女のように頷こうとするが、躊躇してしまう。……衛藤隊員。君は心の中でどれだけ自分を、そしてノロを産み出した珠鋼を元に作られた御刀とそれを使う刀使をどれだけ嫌悪しようとも、今の社会は刀使という子供の戦闘員が必要なほど成熟していないことは理解しているのでしょう?」
「……。」
そして甲斐に、未だこの世界は刀使が必要であることを説かれ、俯いたまま目を伏せる可奈美。
「……恐らく君は私が言った刀使が必要な理由は荒魂に対する対処だけであろうと考えているようだが、それは違う。この国の国防、ひいては世界の平和のためには刀使は未だに必要なのだよ。」
「……世界の平和?」
しかし、可奈美は荒魂を討伐するために刀使が必要であると甲斐は答えるだろうと思っていたが、世界平和という最も言葉にするのも相応しくないであろう甲斐の口から発せられたことに違和感から生じた訝しむような声を上げるのであった。
「そう、世界の秩序の維持……いや、御伽噺や昔話のように子供にも分かり易く言うと、世界平和のためにも未だ荒魂という鬼を駆除する桃太郎のような刀使といった子供の戦闘員が必要なのだよ。」
「……。」
「全く理解できないという顔をしているな。……ふむ、まあ仕方あるまい。なら、衛藤隊員の御刀に使っている柄巻きを新調する際に、青砥館といった場所で円を使いますね?」
「……それと今の話しに何の関係が?」
可奈美は、甲斐が急に可奈美が使っている御刀千鳥の柄巻きを新調する際は金銭を使用しているかと問われ、困惑していた。
それが刀使が必要な理由に繋がるとは思わないからだ。
「……では、金銭のやりとりをしているとしましょう。例えば、青砥館が荒魂の被害によって潰れたら貴女は商取引ができなくなる。たっ

たそれだけで経済活動というものが無くなってしまうのです。」
「……。」
「そして、青砥館に続き、我が国の経済の中心である証券取引所や企業に多数融資している銀行が荒魂に襲われ、融資といった取引がある日突然成り立たなくなったら、我が国の経済は混乱を極めることでしょう。……そうなれば、どうなると思います？」
　しかし、甲斐は可奈美の胸中など意に介さないのか、更に話しを続けていく。
「もし、そうなれば経済大国である我が国の経済は崩壊し、世界経済にも悪影響を及ぼすことでしょう。……その段階にまで来れば、世界中で株価の変動と物価の上昇、それを引き金にして各国で暴動が起こることになります。そうなると、自国民の保護のために来た国の軍隊が各国の軍隊と衝突し、戦闘が起き、その暴動が起きた国で戦争となるかもしれない。……それらを防ぐために、獣でしかない荒魂を討伐する刀使とそれを名目とする刀剣類管理局が必要なのです。」
　今や自国は２０１８年ＧＤＰランキングにおいて現在第３位となっている経済大国であると同時に、各国に経済や技術援助をしている自国の経済の中心が一日にして壊れれば、世界経済だけでなく、自国と繋がりのある各国の経済も連鎖的に悪影響を受けることになる。
　……そうなれば、悪化した世界経済その影響を受けた国の悪化した経済から生ずる就職率の低下、それに伴う犯罪の増加と暴動によって『自国民の保護』を名目にした他国の軍との衝突から戦争が始まることを未然に防ぐためには刀使とそれら少女達を統率し、荒魂討伐を名目とする刀剣類管理局は未だに必要なのだと答えていた。
「……じゃあ、お金のために優ちゃんを殺したってことなの？」
「我が国は国会前の暴動に対処すべく、治安出動命令を出したため、外国人等の渡航は取り止めとなり、滞在中の外国人も国外に退避することになりました。それによって、観光立国として経済復活を望んだ我が国の経済的損失はかなりのものとなり、その損失を補填すべく、近々開催されることになった東京での五輪を成功させる必要がありました。」

それだけでなく甲斐は、国会前の暴動に対処すべく治安出動を行ったことで、各国の外務主管庁が日本に対して「渡航の安全に関する情報」（渡航自粛・退避・出国勧告）のリストに入れたことを公表され、他国からの貿易や通信を大きく制限され、観光立国として経済発展を望んだ日本国内の経済は甚大なダメージを受けることとなったと話していた。

その経済的損失の補填のために、東京五輪の成功をする必要があったと答えていた。

「……そして、その東京五輪を成功させるには穢れの元であるノロの塊でしかない荒魂の存在は邪魔でしかなかった。もしも、ノロが漏れ出て東京の土地を穢すことになるようなことになるだけでなく、東京五輪のイメージダウンに繋がるような事態も避けたかった。……そのためには、タキリヒメだけでなく、イチキシマヒメとタギツヒメ、そういったものを排除し続ける刀剣類管理局と刀使という存在が必要でした。」

そして、東京五輪を成功させるには、土地を穢すことになるノロの塊である荒魂が東京に居るだけで東京五輪のイメージダウンとなり、五輪の成功が難しくなるような事態は避けるために荒魂を討伐し続ける刀使と刀剣類管理局という組織が居ることで東京は安全であるとアピールする必要もあったと甲斐は説明する。

「……そのため、五輪の成功を望む首相並びに財務省と五輪を支持する者達の協力もあって、冥加刀使の討伐を自衛隊にも協力させる旨がスムーズに行えました。それ故に、冥加刀使とタギツヒメといった穢れた荒魂共を刀使が東京の地から駆逐したという宣伝を以って、東京五輪を成功させれば、国会前で失った我が国の国際的信用と経済力は回復することでしょう。」

そして、尚も甲斐は説明する。

冥加刀使も荒魂も……そして優といった穢れた存在を全て葬り去った後、東京五輪を成功させることで国会前の暴動で失った日本の国際的信用を復活させるのが目的であると可奈美に説くのであった。

「その後、国際的信用と経済力を復活させた我が国を狙う国は現れる

こととなります。……そのためには、中国やロシアという敵性国家の中でも強大な二カ国を牽制しさえすれば、それら二カ国と協力している国も我が国への工作活動を思い止まる。それ故に、中国とロシアの工作活動に関与したソフィアを生かして捕らえる必要があったのです。……国民の命を守ることを使命としている刀使である貴女ならば、理解できると思いますが？」

そうして、甲斐はソフィアを生かすことで国際的信用と経済力を回復させた我が国を守ることこそが、国民の生命を守ることに繋がると可奈美に説いていた。

そして、甲斐の話しを聞いていた可奈美は理解した。

甲斐は、いや、刀剣類管理局は……この国は、社会は経済のみを最優先し、経済や国際的信用という見てくれのためにソフィアを人間扱いしたり、優や冥加刀使達を化け物扱いするのだと。……優はこの社会に殺されたようなものでもあると。

「……どうして？どうして、私にそんな話しをしたんですか？」

その甲斐の話を聞いた可奈美は、顔を伏せ、俯きながらも返答する。

何故そのような話しをしたのかと。

「先ず衛藤隊員。貴女は母を幼少の頃から失っており、たった一人の弟が半ば荒魂化しているにも関わらず、それも母を殺したも同然の荒魂が宿っているにも関わらず、それを殺せずに居たのは母に弟を任されたこと、母が幸福であった証のために刀使になったこと。その過去の要因が影響し、今の剣術好きな性格を構築されていった。それ故に、貴女はどれほど私達を嫌悪しようとも、母から受け継いだ剣術と御刀を捨てることなどできない。それ故に、貴女の母である美奈都と同じく過去の大災厄で犠牲となったことで脈々と築いていった今の”平和”を自身が壊すことも見捨てることもできない。」

甲斐は可奈美の過去を調べ、若くして死んだ母の美奈都は不幸でなかったという証のために刀使になったと看破し、可奈美が刀使と御刀を捨てることができないと評され、

「そして、鎌倉での大荒魂との戦闘にも、赤子の荒魂と冥加刀使との戦いにおいても初めて遭遇したにも関わらず冷静に対処した点から、衛

藤隊員は極限と化した状況に置かれても常に冷静であり、自らが行うべきことを見失わない性質を持つという点から鑑みても、貴女が我々を裏切る可能性は低いと判断したからです。」

何事においても冷静に対処するその精神性から、何が必要か不要かを即座に判断できると見られたからこそ、可奈美に冥加刀使と優といった荒魂を殲滅するもう一つの理由を教えたと述べた。

「そのうえ、剣の実力と剣術の見識も高い故に、反乱分子となった刀使の打倒及び荒魂を討伐する刀使という面を見れば貴女は刀使として最高峰であると我々は判断しています。」

それだけでなく、可奈美は刀使と荒魂を倒すことにおいて、最も優れた刀使であると評価されている。……と甲斐は、可奈美に平然と誉め言葉だと思って述べるのであった。

可奈美は甲斐の言う評価を聞き、優のことを思い浮かべてしまった。

優もまた、大荒魂であるタギツヒメをその身に宿していることからこそ、その強大過ぎる力を利用しようと群がる者が寄って来るのだと。

「衛藤隊員。故に、私が貴女にタギツヒメと冥加刀使、それに東京五輪の話しをした最大の理由は協力関係を構築することです。」

「……協力？」

甲斐に協力関係を持ち込まれた可奈美は、甲斐が何を言っているのか理解できなかった。

遺族にその殺した犯人を捕まえさせることに協力させると言ってくる甲斐は、その遺族の気持ちを少しでも考えたことはないのだろうかと思えるほどに……。

「衛藤隊員。貴女は剣術しか取り柄の無いように振る舞っていますが、貴女は非常に聡明な方である筈だ。……現に、今の貴女は激情を抑え、冷静に私の話しをよく聞いて下さっている。真に賢い人間は感情に支配されないものです。」

そして、甲斐にそう言われた可奈美は、甲斐の言う通りに急に弟を殺した連中と話していたにも関わらず、頭が冷え、冷静になっていく

自分が居るということを認識してしまう。
　たったひとりの弟で母が遺してくれたものが死んだにも関わらず、不条理で冷たい社会に殺されたにも関わらず、目の前に優を殺した首謀者が居るにも関わらず……頭が冷え、冷静になっていく自分が居たことに気付いてしまう。
　怒りというものは長く続かないようになっているのだろうか？それとも、自分の弟が家族が殺されたことに何も感じない怪物になったのだろうか？
　……そう、怪物に。荒魂化した人間のように、人の形をした化け物に。
「この世はたった一匹の大荒魂で……いや、ミサイルといった大きな物でなくても、ただ一発の銃弾で世界大戦が起こるほどに世界の平和というものは儚く、脆いものなのです。」
　更に甲斐は、可奈美に告げる。
　この世は、いや、この世界の平和は一匹の大荒魂やミサイルといった大きなものでなくても、サラエボ事件のようにたった一発の銃弾で世界大戦が引き起こされるほどに、脆くて弱いものであると語っていた。
「そう考えてしまえば、我々が行ってきたことも理解できる筈。人々の平和を守るために戦うという点においては貴女と我々と同じです。……であるならば、中国とロシアの工作活動の情報を持つソフィアを生かして捕らえることがどれほど重要なことかお分かりでしょう？人々の安寧のため、無辜の民に被害が及ばぬように全力を尽くす時であるとは思いませんか？」
　そして、サラエボ事件のようなものを引き起こさないためには、ソフィアを捕らえる必要があると甲斐は可奈美に語るのであった。
　しかし、可奈美は甲斐の述べる人々の安寧や無辜の民を犠牲にしないという言葉が、本音で語っているようには思えなかった。
「……では、改めて問いましょう。衛藤隊員、貴女は人々の安寧の為に”刀使”であり続けますか？……それとも、命令違反をして帯刀権を奪われ、刀使としての輝かしい経歴に泥を塗りますか？私としては、

聡明で極限の状況でも冷静であった貴女を何れは局長の席へ座って頂きたいと思っております。」

そして甲斐は、可奈美に問うのであった。

……人々の安寧を守るために〝刀使〟という名の組織の犬となるか。復讐という一刻の感情に流されて、刀使としての権利を棄てるかどうかを甲斐に問われた可奈美は、

「……従いません。」

甲斐の言う〝世界平和〟を否定するのであった。

「納得できません!!」

強い眼差しと共に甲斐にそう告げて……。

「……そうか。」

可奈美に否定された甲斐は、物憂げな顔をすると、

「君はもう少し利口な娘だと思っていたがな。残念だよ。……衛藤隊員、現時刻を以って帯刀権の剥奪、並びに刀使としての権限も剥奪させて頂く。」

甲斐は可奈美に対して、冷酷にそう告げるのであった。

「甲斐陸将補。貴方は防衛省の人間であるはずですが?防衛省は何時から刀剣類管理局を指揮下に置いたのですか?」

それを聞いた紗南は、甲斐にそう述べることで牽制していた。

「……紗南本部長。そう仰いますが、このままで宜しいのですか?」

しかし、三木一等陸佐が紗南に甲斐の進言を受け入れるべきであると意見した。

「……何だと?」

「私としましても、荒魂討伐において優秀な成績を残している衛藤隊員を殺人罪で立件されることになるのは防ぎたいと考えております。」

三木だけでなく、刀剣類管理局の重役も甲斐の進言を受け入れるべきであると答えるのであった。

「……何が言いたい?」

「写シを二回ほど御刀で斬ったあとも斬り付けたとなれば、裁判において殺意があったとしか見られないでしょう。……東京２３区にて

討伐したのは、荒魂化した刀使だけであり、現段階においては人を殺してはおりません。命令も無く、ただ個人的な感情による殺傷で尚且つ何度も斬りつける行為を行ったとなれば、処罰の対象になる可能性が高い。それを紗南本部長も望んでいる訳ではありますまい？」

紗南に、可奈美がソフィアを殺せば、可奈美を殺人の意思があってソフィアを殺したとして刑事告訴される恐れがあると言って刀剣類管理局の重役は紗南に警告するのであった。

「私としても、同じ流派を学んだ衛藤隊員をつまらないことで殺人を犯してもらいたくないというのが本音です。紗南本部長もそこは同じ気持ちでしょう？」

甲斐にそう言われた紗南は、可奈美にそう命じるしかなかった……。

「……衛藤、お前から帯刀権を剥奪し、謹慎を命じる。」

「……。」

「……以上だ。良いな？」

紗南にそう命ぜられた可奈美は、無言で俯きながら、紗南を睨みつけていた。

「可奈美！……行こう。」

だが、可奈美は姫和の声を振り切ると、紗南といった防衛省と刀剣類管理局の重役等が居るテントから出るのであった。

コインの表と裏

可奈美が甲斐と言い争っているのを止めることができず、遠巻きに見ているしかできなかった姫和は、可奈美を止めるべく一歩踏み出そうとするが、優を殺してしまったという負い目と、

『違うよ、姫和ちゃんは御当主様、…人に化けた荒魂を斬るそれだけだよ。それ以外は私が斬らせない、それが私の覚悟だよ。だから、姫和ちゃんの重たそうだから、半分私が持つよ。』

私のことを気遣って掛けてくれた言葉。

『……姫和ちゃんの行動が起こした結果なんだから、姫和ちゃんの頑張りは間違いじゃなかったんだよ。……うん。』

そして、可奈美が私を励ましてくれたことを思い出す。

『……刀使は続けようと思う。』

それだけでなく、優のために母の仇を討つことを棄てた。

母の思いを自ら捨ててしまったのだから、最早、彼女に残っている選択肢は優と可奈美を救うことだったことを思い出す。

『……約束しただろう?私は、私はお前を助ける。……だから、可奈美も助けたい。それまで、ずっと一緒にいる。だから、優も何処かへ行かないでくれ。ずっと側に居て、またチョコミントアイスでも食べに行こう。可奈美と一緒に三人で。』

だからこそ姫和は、優と約束していたこと、可奈美と三人と共に平和に過ごそうという約束をした。……だが、もうその約束すら果たせなくなってしまった。ならば、私の中に何が遺るのだろうか?私は可奈美に何が言えるのだろうか?と自問自答していた。

……故に、姫和は何も言えなかった。

東京２３区にて発生した維新派のクーデターを鎮圧した後、

「……どうしてだ。どうして、使命なんかで命まで賭けるんだ?」

姫和は、血を流し、地に倒れ伏し、死にゆく冥加刀使の瞳に近づくべく屈むと、ある疑問をぶつけていた。

何故、誰が言ったか分からない使命なんかで命を賭けるのか？捧げるのか？と理由を尋ねていた。

「……どうして？……分からない？」

しかし、冥加刀使は姫和にそう返すと、理由を述べる。

「……本当は……刀使の使命とか……そんなの……どうでもよかった。……けど……けど、荒魂と……戦うことしか知らないから……私達……刀使じゃ無くなったら……どうなるの？」

荒魂事件に巻き込まれ、親を失ったが、御刀に選ばれたお陰でどうにか刀使となることができたものの、荒魂との戦いしか記憶に無いがために荒魂を討伐し続ける刀使以外の生き方しか知らない子供達。その子供達が、荒魂と戦うことを取り上げられたらどう生きれば良いのか、どのように過ごせば良いのかと姫和に問うのであった。

「……そんなことで……そんなことで命を捨てるのか？……簡単なことだろう？友達を作ったり、好きな人ができたりして……私達は命を紡ぐことができるだろう？」

冥加刀使に、そう問われた姫和は答える。

――――友人を作ったり。――――好きな人ができたり。――――

―そうして、好きな人と命を育む。

そんなありきたりな言葉を並べていた。……だが、目の前に居る冥加刀使に対して強く言えなかった。

始めは母の仇を討つべく伍箇伝に入学し、刀使となった後も折神紫の暗殺のせいで下手に関係を持った他人を巻き込ませないために徹底してクラスメイトたちと距離を取っていた。……そんな女が友情だの、愛だの、命を育む等と喚くのである。滑稽としか言いようが無かった。適当な嘘を並べ立てているようにしか思えなかった。

「人は人と繋がって……そして、素質や宿命を連綿と受け継いでいく。そんな生き方だって考えられた筈だっ!!!」

それ故に、強く声を出して、大きな声で主張する。

……しかし、声の強さとは裏腹に心は弱まっていることに姫和は自

覚していた。自覚していたからこそ、声を張り上げることで心を誤魔化していた。誤魔化すことで、姫和は目の前に居る冥加刀使を……自分の影を説得しようとしていた。

「……荒魂になった私に……この社会に復讐を誓った私の……幸せはそんなのじゃない。」

しかし、目の前に居る冥加刀使は姫和の説得を拒むのであった。

「貴女なら……分かるでしょう?……復讐しか見出せなかった……貴女なら!!」

すると、冥加刀使は姫和の肩を突然掴み、顔を近づけると、そう述べるのであった。

その鬼気迫る表情を見ながら、姫和は冥加刀使の言っていることが理解できた。

……親と死別したか、親と仲違いしたか、それとも親から逃げ出したかったのかは知らないが、彼女達は自分達の居場所を此処しか、荒魂を討伐する世界にしか見出せなかったのだ。嘗ての両親が突然荒魂のせいで死に、目標も生きる理由も見いだせず、孤独に打ちひしがれていた私の元に来た一通の手紙、折神　紫が荒魂に成り代わられていること、更には母の病因がその荒魂との戦いであったことを知り、母の仇を討つことを目的に生き続けた私のように。

……だが、母を殺した荒魂に取り憑かれた幼子との奇妙な旅の果てに、母の仇よりも幼子の命を優先した結果、母の思いを棄てた。そして、私の中は優と可奈美を助けることを至上の目的として刀使を続けた。

もしも、……もしも、優と可奈美が居なかったら。私は目の前に居る冥加刀使のように理不尽な社会に怒りを向け、刀剣類管理局とこの国の統治機関に対して御刀の刃を向ける冥加刀使となっていたのかもしれない。

そんな冥加刀使の姿を見た姫和は、全てを奪われ、それに深い絶望を抱き、怒りの矛先すらもない状況に追い詰められれば、自分もそうなっていたかもしれないと強く思うのであった。自分も理不尽な社会に対して絶望し、その理不尽な社会に対して復讐するべく刀を振り

回したことがあるのだから……。

それ故に、姫和は心の奥底では冥加刀使となった人を否定できないでいた。

……私が冥加刀使にならずに済んだ理由。全てに絶望し、怒りの感情のままに暴れる無敵の人にならずに済んだ理由。

それは全てを失い、激情のままに暴力を振るうあちら側へと境界線を飛び越えずに済んだ理由。優と可奈美を救うという目的があったお陰で、人から脱することは無かったと姫和は述懐し、目の前に居る冥加刀使と私はコインの裏と表の関係のようだとも思ってしまった。

――しかし、

『本部。本部。維新派を病院付近にて発見。付近に居る刀使は――』

優の居る病院が維新派に襲われているという通信が流れたことで、姫和は青ざめ、誰も居ない空間に背を向けると、優の居る病院へと、迅移を使ってでも辿り着こうとした。

「嘘だ!……?だ嘘だ?だ?だ?だ嘘だっ!!!」

何で?優が居る場所は秘匿されていた筈だっ!?――そんなことを考えながら、姫和は必死で走り、迅移の使い過ぎで疲れが出ても、友のために走ったメロスの如く、必死で走り続けた。

必死で走り続けたせいで、肺呼吸が上手く出来ず、咽込んだにも関わらず、走ることを辞めなかった。

……だが、疲労によって足がもつれ、倒れてしまう。

「……うっ、……グスッ……。」

また失ってしまった。また踏み躙られた。また大切な者が理不尽に奪われてしまった。また失ってしまった。また大切な者が理不尽に奪われてしまった。また踏み躙られた。また大切な者が理不尽に奪われてしまった。また失ってしまった。また踏み躙られた。また大切な者が理不尽に奪われてしまった。

姫和の中で、そんな考えばかりが木霊していた。

「――!!」

その後、特別災害予想区域に指定されていたために、ただ一人、孤独な少女の泣き叫ぶ声だけが無音と化した地区に響く。

……何も守ることも、救うこともできなかったと。
「姫和ちゃん!?」
しかし、西田　保二等陸佐の部下である古河　蛍三等陸尉の声が聴こえた姫和は、その声がした方へと顔を向けるのであった。すると、そこには７３式中型トラックを新型Ｓ装備の指揮統制に特化するように改造した指揮車輛に乗る西田達が居た。
車輛に乗る西田達を見た姫和は一筋の光明を得たかのように思え、開口一番に西田達に頭を下げてお願いした。
「お願いします!!優の……優の居る病院へ急いで行ってください!!!!」
姫和が必死に頭を下げるのを見た沼田　剛一等陸尉は、本心では優の居る病院へと向かいたかったが、西田にどうするべきかを尋ねていた。
「……隊長。」
「……司令部、司令部。病院が襲撃されたという報を受けたため、特別災害予想区域から離れ、民間人の救助に向かう許可を。」
そのため、西田は勝手に動く訳にはいかないので、司令部に優が居る病院へと向かう旨を報告する。
『こちらは、そのような報告は受けていない。西田　保二等陸佐と部下数名は直ぐに現場に戻り給え。』
だが、司令部は、冷酷にも優を見捨てろと命ずるのであった。それを聞いた西田はハンドサインで勝田　亨二等陸尉と鏑木　霞一等陸尉に通信を切るように命じていた。すると、司令部との通信を耳に当てている西田の耳に、ブツンと通信が途絶える音がするのであった。
「司令部、ですが……司令部、司令部?……フム、ドローンが出す電波の影響か、それとも蝶の荒魂が原因かは不明だが、通信が途絶えてしまった。」
「隊長。とすれば、我々は?」
そうして西田は、激しく入り乱れる電波の影響か、それとも蝶の荒魂が原因かは不明とわざとらしく理由を述べて、司令部との通信が途絶えたと周りの部下と姫和に言うのであった。
「となれば、我々は司令部との連絡が取れない以上、各個で動く必要が

あるだろう。……これより我々は、襲撃されたとされる病院の救援へと向かう。」

その西田の言葉を聞いた姫和は、安堵の表情を浮かべるのであった。

西田達の協力のお陰で、優の居る病院へと辿り着いた姫和は、車から飛び降りると、優の居る病室へと一気に駆け込むのであった。

「あっ!ちょっと姫和ちゃん!!」

トラップや待ち伏せを警戒した蛍の制止も聞かず、姫和は病院内へと駆け込む。不自然なくらいに静かな病院内を気にすることなく、奥へと更に奥へと進む。

そして、姫和は優の居る病室へと辿り着き、病室内に入ると――――、

「お前っ!……何で、何で倒れているんだ!?」

トーマスが血まみれで倒れていた。

そのトーマスを見た姫和は、誰にやられたのかと肩を揺さぶりながら訊いていた。

「……へへ、……維新派のソフィアだよ。……クソ、俺としたことが……子供如きに……引き金引くのに……躊躇するなんて。……優は……そいつらに……攫われた。」

トーマスは維新派の刀使に斬られただけでなく、護衛対象の優までも維新派に属するソフィアに攫われたと姫和に告げていた。

「……何で!?此処は一般には知られていないハズだろうっ!!?」

優が維新派に攫われたというトーマスの言葉に反応した姫和は、何故優がこの場所に居ることが維新派に嗅ぎつけられたのかとトーマスに迫っていた。

「……ハハ、今まで気付かなかったのか?……俺は、舞草に協力する前から……アイツラとも繋がってた。」

姫和は、トーマスが舞草に協力する前からソフィアとも繋がっていたということを告げられ、激しく動揺していた。

トーマスはカンパニー（ＣＩＡ）の工作員であるが、舞草と協力する前にソフィアとかいう維新派の人間と繋がっていたということは、旧折神　紫派……つまりは、大荒魂に取り憑かれていた紫の味方であった変革派とも繋がっていたということになる。

「……不思議に思わなかったか？……舞草の隠れ里の場所……ソフィアが行方の知らない舞草の潜水艦と連絡が取れたこと……全部、俺が段取りした。……優の情報をソフィアに売ってな。」

「……お前!!」

姫和は、ソフィアに優の情報を売ったというトーマスの言葉に憤慨し、首元を掴む。

「……ソフィアと繋がったのは……ＣＩＡ、カンパニーの指示だ。……舞草と刀剣管理局をぶつけて、舞草を勝利させ……刀剣類管理局をアメリカ寄りの組織するためにな。」

「……つまり、舞草というのは。」

「折神　紫を暗殺……そして、刀剣類管理局をアメリカ寄りにし、……隠世技術の独占……及び、この国が……東側に……ならないようにするためだ。」

そして、トーマスから聞かされたのは、アメリカが舞草に潜水艦やトーマスのような兵を送った理由。

当時の刀剣類管理局局長であった折神　紫を排除し、刀剣類管理局をアメリカ寄りにすること。そして、この国が東側、つまりはアメリカと近い将来対立するであろうロシアや中国側にならないようにするための政治工作をしていたと述べていた。

「……それと……ソフィアって女、なんか優に執着してたみたいだ。……そこから考えると、……やっと手に入れた人間は……直ぐには殺さないハズだ。」

……それを聞いた姫和は、最初に抱いた〝母の仇〟を仮に実行し、成功したとしても、トーマスみたいな兵とそれを送り込んだ国に利用され尽くされることになるだけで何も変わらないのだということも理解してしまった。

それを実感した姫和は、あれだけ実行しようかどうか悩んでいた〟

母の仇〟に虚しさばかりが埋まっていく。そして、熱も冷めて行った。

そうして、熱の冷めた〝母の仇〟と入れ替わる形で〝優の救出〟に熱が籠り始める。

「……あと、これは個人的な願いなんだがな。」

「……何だ？」

立ち上がろうとした姫和を止めて、トーマスはあることを願い出ていた。

「……俺をアメリカでなく……ベトナムに埋めてくれないか……。」

「何で？……何で自分が生まれ育った国じゃないんだ？」

自分を生まれ育ったアメリカではなく、ベトナムに埋めて欲しいと願い出ていた。

だが、それが姫和には理解できなかった。自分の生まれ育った国よりも、地獄の戦場だったと述べていたベトナムの方を選ぶことに、何一つ理解できなかった。

「……俺がソフィアに協力したのは……個人的な復讐が理由だった。……あのソフィアが言っていた〝獣の世界〟っていうのを……見たかったんだ。……戦友が『赤ん坊殺し』とか言われて……馬鹿にされない……世界が見たかった。」

しかし、姫和の言葉をトーマスはもう聞き取れていないのか、譫言のようにソフィアに加担した理由を語っていた。

戦友の遺骨を抱きながら、ベトナムから母国であるアメリカへと帰って来たとき、ヒッピー紛いのアメリカ人に『人殺し』、『赤ん坊殺し』と罵られ、侮蔑されない世界が見たかったと答えていた。

「……だけど、どんどん俺の技術を覚える優の姿を見ていたら……別れた女房との……息子みたいに思えて……〟獣の世界〟を遺すのがバカらしくなって、……それで、ソフィアに尾けられて……このザマだ。……優を助けてやってくれ……。」

そして、トーマスは訓練を通して、優のことをまるで自分の息子の

ように思えてきたことで、ソフィアから離れたと答え。
「……でも今……俺は……俺の戦友を……コケにする国よりも……地獄のような戦場だったあそこには……戦友との……同じ戦いで血を流し兄弟が……居る。……少しでも良い……戦友の居る……あの……場所で……。」
戦友の居る場所で埋もれたい。自分達を冷たく扱う生まれ育った国よりも、あの戦友達が居た場所に同じように眠りたかったとトーマスは答えると、
――――事切れていた。
「……バカ。」
姫和はそのトーマスの姿を見て、そう返すしかなかった……。
だが、その言葉とは裏腹に姫和は、トーマスを否定できない自分が居ることを自覚していた。
ベトナムから帰って来たとき、『赤ん坊殺し』と言って非難した国民。
鎌倉での騒動以降、刀使に対して風当たりを強くする国民。
自分達アメリカ軍人を見捨てる祖国
自分達刀使を使い捨てる祖国
軍人を遠ざけることで平和だと思い込む社会
刀使を非難したことで正義だと思い込む大衆
……姫和はそう考えるだけで、ベトナム帰還兵と鎌倉での出来事以降の刀使は、本質的には似た者同士ではないかと思い始め、トーマスのことを否定できないでいた。
「……ああ、そうか。」
姫和はそこまで考えると、刀使は目の前に居る傷痍軍人と命を賭けてクーデターに参加した冥加刀使達と自分は本質的に同じなのだと。
……環境や境遇が少しでも似ていれば、汚れ仕事をするトーマスやクーデターに参加する冥加刀使のようになっていたのかもしれないと考えてしまった。
「おい、大丈夫か!!?」
そうして、姫和は呆然としていると西田が室内に入って来たので、西田にトーマスの思いを伝えるのであった。

「……西田さん。トーマスさんが言っていました。……アメリカじゃなくて、ベトナムに埋めてくれって。……アメリカは『赤ん坊殺し』だとか、『人殺し』だとか言ってくるばかりだから、帰りたくないって……。」

「……分かった。必ずそうする。……我々も、自衛隊も不要だと騒がれていた時期があったから……その気持ちは分かる。」

西田は、この国が自衛隊に対して冷たかった時期があると答えると、トーマスをベトナムの地に埋めれるようにすると答えていた。

「……仲間だったのか？」

「……ええ、鎌倉での騒動以降、私達は世間から批判されました。……だから、叶えてやってください。」

そして、西田からトーマスは仲間だったのかと尋ねられた姫和は、刀使もベトナム帰還兵や自衛隊のように世間から批判されたのだと、その一点においては同じであり、同じ血の涙を流した者だと返すのであった――――。

その後、姫和は刀剣類管理局と自衛隊の本隊が集う野営地に居る73式中型トラックを改造した指揮車輛内に待機しつつ、維新派のソフィアの行方について西田達と要請応じてくれた警察の協力を借りて、ソフィアの行方を調べていた。（……なお、姫和が指揮車輛内に待機しているのは、ソフィアの居所らしき場所が分かり次第、そこへ急行するためである。）

……時間はまだある。そう信じて姫和は、優を攫ったソフィアを捜索することとなった。

「……西田さん。警察への要請をありがとうございます。」

「構わんさ、今はソフィアという人物を追う方が良いと私も判断している。」

そのため姫和は、居所の手がかりを掴むべく、ソフィアの部屋を家探ししている捜査員が見つけたソフィアの部屋にあった書籍類やインターネットやスマートフォンの検索履歴のリストを眺めていた。

……姫和はソフィアの真理が分かれば、居所が分かるかもしれないと思い、書籍も捜査するように要請していた。……そして、意外にもかなりの書籍があったところから、彼女は割りと読書家だったのかもしれないと姫和は思うのであった。

「……。」

その中で特に姫和が注目したのが、これらの社会心理学や動物行動学に関する実験の内容を記した書物であった。

スタンフォード監獄実験

ミルグラム実験

サードウェイブ実験

ローゼンハン実験

Ｕｎｉｖｅｒｓｅ　２５実験

何故かは分からないが、これらの書籍がソフィアの行動に即しているのではないかと思ったからだ。――しかし、

『……諸君。我々は遂に成し遂げた。維新派の栄えある活動の一部を此処に公表する。』

指揮車輛内にあるテレビモニターが突然ソフィアの顔を映し、こう述べて来たのであった。活動の一部を公表すると言って。

「……通信ジャックか？発信元は？」

「今、調べています!!」

西田はそれを見て、通信ジャックであると直ぐ様に看破し、発信元を特定するように部下に指示を出すのであった。

『我々は大荒魂の一人を討伐することに成功した。それは、貴君等が見えている吊るされた者、衛藤　優というものだ。』

すると、ソフィアはそう言うと、首を吊るされ、ピクリとも動かなくなった優を映すのであった。荒魂を討伐したと言って……。

その映像を見た姫和は、

「……は？」

何が起こったのか分からなかった。
「姫和ちゃん！誰か映像止めて!!」
蛍の叫びも聞こえないぐらい、その映像を食い入るように見つめていた。
……間違いなかった。優だった。見間違えるはずがなかった。
心と呼吸と全ての時が止まってしまったかのようであった。
『この荒魂を使って政府は自らの邪魔となる者を排除していた。それは許されざる蛮行だ。故に、我々は処罰を行い。この後は我等の神、イチ子ちゃんに捧げる供物とし、神聖なる者として生まれ変わるのだ。彼もそれを喜んでいることであろう。』
「嘘だっ!!!!」
そして姫和は、ソフィアが述べる優はイチキシマヒメの供物となったことに感謝しているという言葉に憤慨していた。
勝手な言い分だと、勝手な理屈だと、勝手な主張だと心に抱きながら、この映像が現実ではないと願いながら〝嘘だ〟と騒ぐ。
姫和は怒り狂う。
可奈美と優を救うことができなくなったから、自分の為すべきことを奪われたから、自分の全てを踏み躙ったからこそ、怒り狂う。
「姫和ちゃん！落ち着いて!!」
取り押さえようとした霞を無言で振り払うと車から出て、目の前に居た維新派の刀使を見つけると暴行を加える。
「お前達の頭……ソフィアは何処だっ!!お前達が……優を殺した奴は何処に居る!!!!」
その行為を姫和は、可奈美に真意を問い質されるまで何度も続けるのであった。

無敵ノ刀使

トーマスが死んだこと、優が死んだときのことを姫和が思い出していると、紗南が可奈美にこう命じていた。

「……衛藤、お前から帯刀権を剥奪し、謹慎を命じる。」

「……。」

「……以上だ。良いな？」

紗南にそう命じられた可奈美は、無言で俯きながら、紗南を睨みつけていた。その一連の流れを見ていた姫和は、可奈美が危険な行動を取る前兆であると判断し、可奈美に声を掛ける。

「可奈美！……行こう。」

しかし、可奈美は声を掛けた姫和を振り切ると、紗南といった防衛省と刀剣類管理局の重役等が居るテントから出ていった。それを見た姫和は急いで可奈美の後を追い、肩を掴むと逆に可奈美が姫和にこう尋ねてくるのであった。

「……ねえ、姫和ちゃん。私のこと心配？」

「当たり前だろ？私も優を救いたかった。そして、三人で一緒に何処か行きたかった。だから……私も背負うと決めたんだ!!」

姫和はそう言って、可奈美の味方だと言っていた。

それを聞いた可奈美は、

「……じゃあさ、私の御刀取って来て。」

姫和に冷たい声で、御刀千鳥を取って来いと命じるのであった。そう言われた姫和は、

「……いや、ＳＴＴ隊員等が保管している御刀を私でも取れるかどうか。」

今や帯刀権を無くし、謹慎を命じられた可奈美の御刀千鳥を保管しているＳＴＴ隊員等の目を盗んで、それを取り返すのは困難であると説く。

「大丈夫だよ。姫和ちゃんが私の御刀を取りに来たとしても、だーれも警戒しないよ。……それに、姫和ちゃんは今まで優ちゃんのために

刀使を続けたんだから、それぐらいできるよ。」
　しかし、可奈美は尚も姫和に千鳥を取って来いと強めに、且つ詰め寄りながら、優のことを助けようとした姫和を話題にしつつ言うのであった。
「……優の仇は私が斬る！……だから、だから、可奈美。お前はそんなことしないでくれ。……私は、お前達を助けたいんだ!!」
　可奈美が笑顔を浮かべながら迫り、圧を掛ける姿を間近で見た姫和は、可奈美の言葉の意味に気付いた。それ故に、可奈美が〝優の仇〟を取ろうとしていることに気付き、止めようとする。
　人斬りではなく、剣術好きな少女に戻って欲しいと願う。
　そして、優と可奈美を救おうと決めた姫和にだからこそ、優が死ぬだけでなく、可奈美が人殺しとなる結末を阻止したかった。故に、自分一人だけが〝人殺し〟の罪を背負おうとしていた。……しかし、
「ねえ、姫和ちゃん?.そんなこと〟って何?.」
「え?……いや、その……。」
　突然、可奈美に胸倉を掴まれたまま、そう詰め寄られた姫和は、つい可奈美から目を逸らしてしまう。
「姫和ちゃん?.私も約束したよね?.姫和ちゃんの重荷を半分持つって?.それすら私から奪うの?……私は優ちゃんを救いたくって今まで強い刀使になろうと……おねえちゃんになろうと頑張って来たのにそれが無くなっちゃったんだよ?.お母さんの仇を討とうとした姫和ちゃんなら私が言いたいこと分かるよね?.」
「それは……それは違う。可奈美、聞いてくれ。」
　しかし、可奈美はそれで止まることなく、自分の中にあるものを奪う気なのかと非難された姫和は、逸らした目を戻し、可奈美を真正面から見るも、可奈美の姿が目に映った瞬間、弱弱しい声になるも、姫和はどうにか『違う。』と可奈美に返答することができた。
「本当?……御前試合の決勝戦。私は姫和ちゃんがどう攻めて来るかそればかり考えてた。姫和ちゃんのことで頭がいっぱいだったけど、姫和ちゃんは私の事なんか見てなかったよね?ご当主様をどうやって殺すかしか考えてなかったよね?.私、あのとき結構頭に来てたんだ

けど？姫和ちゃんに無視されたこと。……そんな隠し事ばかりする姫和ちゃんの言うことを信じられると思う？」

「あ……え……いや、……その……。」

それだけでなく、可奈美は御前試合でのことを引き合いに出して、紫が大荒魂であること、それを周囲に悟られることなく一人で心の内に隠し、紫の暗殺を実行しようするといった隠し事ばかりをしてきた姫和の言うことを信じられないと可奈美は返すのであった。

「……そ、それは。」

「それは？……まだ言い訳するの？助けたい救いたいとか言っている私にすら隠し事しているのに？目を逸らさないでよ姫和ちゃん。私に酷いと思わないの？私、半分持ってあげるって言ったでしょ？信頼して預けてもくれないの!?」

そして、可奈美は隠し事ばかりをする姫和を酷いと非難するのであった。

その言葉の刃を受けた姫和は、可奈美に見捨てられ、また自分は孤独に、一人になるのではないかと焦燥感を抱き始める。

「……それとも姫和ちゃん。私にまだ何か隠し事してるの？それとも、私と優ちゃんを助けたいというのは嘘だったの？」

無論、それだけでなく、可奈美は姫和の中にある決意。優と可奈美を救うというものを否定した。

「……ち……違う、可奈美！……私は……私は本当に!!」

優と私を救う気など無かったのだろう？

可奈美にそう言われた姫和は、その言葉を必死に否定する。その決意すらも、当人に否定されて、無くしてしまえば本当に何もかも失ってしまう。

それ故に、姫和は必死に否定し、可奈美に肯定してもらおうと口を動かそうとするが、平城学館に編入以降の姫和は、紫を討ったあとに他者に迷惑が掛からないようにするため、他者とのコミュニケーションを断っていたことが原因で、上手く口が動かせないだけでなく、頭の中に自分の言葉を上手く紡ぎ、表現することができなかった。

それ故に、姫和の頭の中は混乱し、どうすべきか、何を言うべきか

に悩んでいた。……だが、可奈美に優しく抱きしめられたことで、状況は一変する。

「……でもね、姫和ちゃん。私、姫和ちゃんが優ちゃんを助けることで私も助けたいって言ってくれたとき、本当に嬉しかったんだよ。優ちゃんだけでなく、こんな私のことも気遣ってくれる姫和ちゃんが大好きだったよ。……姫和ちゃんも私が半分背負うって言ったときは嬉しかった？私と同じ気持ちだった？」

「……う……うん。……そうだった。」

可奈美に優と自分を助けると言ってくれた姫和の言葉が嬉しかったと同時にそんな姫和が大好きだったと答える。

……それと同じ気持ちだったかと可奈美に訊かれた姫和は、まるで幼子のように同じ気持ちだったと可奈美に合わせて答えていた。

そうすることで、可奈美は精神的に疲弊した姫和の心に〝可奈美を助けたい〟という楔を打ち込むことができたのである。

「だから姫和ちゃん。私は御刀を盗られてとっても困ってるの。……それに、姫和ちゃんが罪を犯すなら、私も同じ罪を犯して、その罪の重荷の半分は持つよ？私は……姫和ちゃんが刑務所に入っても一人にしないよ？だから、優ちゃんが居なくなった私を一人にしないで？今の私はそれだけが救いなの。だから助けて、姫和ちゃん。」

そうして可奈美は、同じ罪を犯す、重荷の半分は持つ等の言葉を並べて、可奈美を助けることで自分も救われると姫和に思い込ませていく。

そうすることで、他人を使って御刀を手に入れやすくするのが可奈美の狙いであった。

「……分かった可奈美。……頑張って取って来る。」

「ありがとう姫和ちゃん。」

可奈美の御刀を取り返すと言う姫和に、可奈美は感謝の言葉を述べると共に〝いつも通り〟の笑顔で感謝の言葉を述べるのであった。

「私、姫和ちゃんが一緒に居てくれれば、どんな辛いことがあっても平気だよ。」

……姫和も同じ事をすれば怖くないという言葉も添えて。

姫和に御刀千鳥を盗って来いと言った私は、宛がわれたテント内でベッドの上に寝転んで待っていた。
ただ何もせず、時間だけが過ぎ去るのは苦痛だったけど、私はいつも通りの笑顔を貼りつけて、……心地良いから歌を口ずさんでいた。
「ラ～～ララ～～ラ～～ラ～～ラ～～♪」
狂った音程で……いや、決まった音程も、何か流行りの歌を口ずさんだ訳でもないから当然かぁ。ついさっき頭の中に浮かんだ曲をただ垂れ流すように口ずさんだだけに過ぎない訳だから、少しズレていても問題無いよね。
それに、音程だけでなく曲調も酷く、聞いてられない程に酷いけど、私一人しかいないのだから、何も問題無い。
（……ああ、姫和ちゃんを騙しちゃったなぁ。）
いや、違うよね。……この心地良く出てくる狂った……小気味よいメロディーが私を癒してくれていた。
姫和ちゃんへの謝罪も込めて謡っている。……だから、私は悪い子ではないよね？お母さん。……でも、そんなことばかり考えていたせいか、近くにあったコップを手に取ろうとしたけど、
（……あ、コップが……。）
コップが落として……落ちた……堕ちた……私は堕ちた。
……何故だろう？そんな連想をしただけで、不思議と私の心の中は後悔が蝕むどころか、高揚感に包まれる気分になった。
そう考えるだけで、私は何かが解放された気分になった。
そう考えるだけで、自由になった気さえした。
何でもやれそうな気さえした。
……やらなきゃいけないことが一つに絞れば、もう色々なことで、お母さんや優ちゃんや姫和や刀使や御刀やお母さんや優ちゃんや

姫和や刀使や御刀やお母さんや優ちゃんや姫和や刀使や御刀のことで悩む必要が無くなる。

……全てはお母さんとの約束と優ちゃんの命を奪ったソフィアへの復讐なのだと思えば、ソフィアが全て悪いのだと思えば、荒魂になったソフィアが悪いのだと思えば、ソフィアさえこの世から消せば、全ては元通りに《／ｂ》……いや、ソフィアという荒魂を倒せば、まともな世界に……私が知っていた世界に戻るのだと私は不思議と思えた。

そんなことを何度も何度も復唱するかのように、念仏のように唱えるかのように、私は心の中で呟き続けていた。

全部ソフィアが悪いのだと。
全部ソフィアが悪いのだと。
全部ソフィアが悪いのだと。

私は、そう思うだけで、そう強く念じるだけでベッドの枕の下にあった拳銃を手にすることができた。

「可奈美!!」

私がソフィアを殺す理由……いや、違った。ソフィアという荒魂を討伐する理由を考えていたら、やっと姫和ちゃんが戻って来た。

……遅くない？って言いたかったけど、そこは我慢した。それに、大声出さないでよ。私が姫和ちゃんを使って……うん？それは違う。姫和ちゃんに頼んで御刀を取って来てもらったのがバレちゃうし、それに何よりも神様の導きで手に入れた拳銃を私が持っていることがバレたら大変なんだよ？それを分かってるの、姫和ちゃん？

……でも、そんなことにすら頭が回らないくらい責めた私も悪いのかな？

「……姫和ちゃん。持って来てくれたんだ。」

「ああ。意外と簡単だった。」

まあ、いっか。……姫和ちゃんが犬のように喜んで取って来てくれたみたいだし、これでソフィアを殺せる……ああ、だから違うよね。

荒魂を討伐できる武器が手に入ったのだから、万事オッケーだね。
そうだよね？みんな？
「ありがとう姫和ちゃん。頼りになるね。」
「ああ、もちろんだ。……それと、可奈美。」
　万事オッケーと思っていたら、姫和ちゃんが急にしおらしくなって、私に何か言いたげだった。……早く言えば良いのに。面倒くさい。
「実は……ノロのアンプルも手に入れたんだ。ソフィアとかいう奴も冥加刀使らしいから、確実に倒すにはこの力が必要だ。……だから、その、私は荒魂に近い者の家系らしいから、荒魂と融合ができるらしい。……それで、私はこのノロのアンプルを使って、荒魂の力で奴を倒そうと考えている。……だが、可奈美、お前は――――」
　姫和ちゃんがノロのアンプルを見せて、冥加刀使に対抗するために荒魂の力が必要だと話して、私は姫和ちゃんがノロのアンプルを使わないで欲しいと言う前に、私は姫和ちゃんの手からノロのアンプルを一つ奪い取った。
「可奈美!?!?」
　それを見た姫和ちゃんは、私の行動に驚いていた。……何をそんなに驚くのかは分からなかったけど、私は取り返されないようにこう返すことにした。
「姫和ちゃん、ダメだよ。……重たそうだから私が半分持つよ。」
　運命共同体で、共犯者で、同じ悪い事をする子供だっていうことを理解させたうえで、ソフィアを殺したい私は表向き剣術好きな少女だった私が姫和ちゃんに言ったことを話した。……半分持つよと。
「……可奈美。」
「大丈夫だよ。……姫和ちゃんが居てくれたら、もう怖くないよ。」
　泣きそうな顔になった姫和ちゃんを見た私は、そう言って姫和ちゃんを説得していた。
　でも、それだけだと姫和ちゃんは、私の目の前にノロのアンプルを持ってきたことを後悔するだろうから、あることを提案した。
「だから姫和ちゃん。……私が姫和ちゃんにノロのアンプルを打つか

ら、姫和ちゃんも私にノロのアンプルを打って。」
私が姫和ちゃんの首筋にノロのアンプルを打つ代わりに、姫和ちゃんが私の首筋にノロのアンプルを打つということを提案した。
そうすることで、私は姫和ちゃんに対して負い目を感じ、荒魂になることの決意とソフィアという荒魂を殺すことへの意志が揺らぐことが無いようにしたかったから、私はそれを提案したのだ。
「……可奈美、分かった。」
「それじゃあ行くよ?姫和ちゃん。」
そうして、私と姫和ちゃんはお互いの首筋にノロのアンプルを近づけて……スイッチを押した。
プシッと空気が抜ける音がしたと思ったら、暖かくって中にドロッとした物が中に入って来る感触がした。
「うっ……うくっ……!!」
私の中にノロが入って来た感触がした途端、私の中に耐え難い渇きを、飢えを感じた。……だけど、その苦痛が私の身体の中に荒魂が入ってきたのだと実感することができた。
「……うっ……ぐっ!!……はぁっ……。」
姫和ちゃんも同じ痛みを感じているかどうか見ると、姫和ちゃんも苦しそうな顔をしていたのが見えた。
「……姫和ちゃん大丈夫?」
「ああ、大丈夫だ。」
だから私は、姫和ちゃんに荒魂を注入し終えた私は、姫和ちゃんに大丈夫かと尋ねた。
これから、ソフィアを殺すために一人で行くのは辛いこともそうだけど、私がソフィアを斬ることに躊躇しないようにしないと私は躊躇するだろうから、躊躇しないように、目の前に居る友達を荒魂にしたという”罪”の形が必要だった。……姫和ちゃんに酷いことをすることで私は、もう後戻りできないのだと私自身を納得させる。良い子の面を被らなくて良いのだと、いや、それを被る資格すらも無いのだということを刀使の可奈美に理解させる。……それが私の覚悟。
……自分で自分を殺す行為。

けれど、それが私の心の中で妙な心地良さが生まれ、とても気分が良くなった。きっと、みんなで壁に落書きするみたいに皆で悪いことをしたら、こんな解放感に溢れた気分になるんだろうな。とか私は考えていた。

「……姫和ちゃん。もう、後戻りできないね。」

「……ああ、そうだ。……私も半分持つぞ。」

こうして私と姫和ちゃんは、荒魂になった。

荒魂になった私たちは無敵のように思えた。

マリオとかがお星さまを取ったようなものだと考えた。

きっと危ないキノコを食べたからマリオは大きくなったんだ。

だから私達はマリオになったから、無敵だと考えた。

無敵になったから、好きに出来るとさえ考えた。

（……お母さんごめんなさい。……わたし、良い子を辞めまぁあすっ!!）

そう思えたから私達は恐れを知らず、緑の檻から外の世界へ飛び立つことができた。

――――一方、紗南と甲斐達は、

「――――衛藤隊員。並びに十条隊員は御刀を奪取するだけでなく、維新派から押収したノロのアンプルをも強奪したものと思われます。」

可奈美と姫和が御刀だけでなく、ノロのアンプルを強奪し、冥加刀使となった可能性が高いことを示唆する報告を受けていた。

「……まさか?本当に彼女等が?」

「恐らくですが、ソフィア氏を殺害しようとしているのでは?」

紗南は驚きの顔を見せるが、甲斐はそれに反して驚くことはなく、

いつも通りの口調と声音で且つ内心は喜びながら、可奈美と姫和がソフィアを殺害しようとしていることに安堵し、それを悟られぬよう表情を変えることなく紗南に可奈美と姫和がソフィアを殺害しようとしていると述べるのであった。

何故、甲斐がソフィアを可奈美と姫和が殺そうとしていることに内心喜んでいるのかと言うと、甲斐は刀剣類管理局が警察の管理下から外れ、荒魂対策の予算を防衛省にも計上してもらう工作をソフィアにも協力してもらっていたのである。

……つまり、甲斐は結芽と夜見を間接的に死に追いやった者でもあった。

そんな経緯がある甲斐は、当初は優に江仁屋離島の自衛隊員と維新派に属する刀使の始末といった汚れ仕事と政治能力に長けたタキリヒメの始末をやらせ、その後に優は暴走した荒魂として処分される予定だった。……のだが、国会前の暴動をタキリヒメが鎮圧したという話しが大いに広がり、民衆の支持を多く集めたことで、防衛省と刀剣類管理局はタキリヒメに手出しができなくなってしまったのである。（もしも、民衆のタキリヒメへの支持が高い情勢下で、刀剣類管理局や自衛隊が直接タキリヒメに手を出そうものなら、政府への批判が高まり、最悪の場合は刀剣類管理局と自衛隊の権威が下がり、タキリヒメが”物騒な行動を起こさぬように”という理由で、刀剣類管理局と自衛隊の内部に介入する口実を与える恐れがあったのである。）

それ故に、第三者によってタキリヒメに殺されたということにするために、優にソフィアの部下でもあった綾小路武芸学舎の刀使を荒魂の仕業に見せかけて殺害させ、ソフィア達を追い詰めると共に、ソフィア達にタキリヒメを斬ってイチキシマヒメに吸収させ、戦力を増強させることで決起するように追い詰めていったのである。

維新派等を決起させた後は、維新派をソフィアと共に始末し、優も荒魂の根絶を願う維新派に優の居所を漏らすことで維新派に優を殺害してもらおうとするが、こちらの思惑とは違いソフィア達は優を攫ったことに驚くのであった。

理由は、優の汚れ仕事の数々が維新派等に漏れ、それが公に晒され

ることを恐れてのことだが、結局はソフィアが優を殺害したことに甲斐は安堵するのであった。

……これで、優を殺害したソフィアを可奈美と姫和に始末してもらうことができ、自身の不法行為を完全に隠滅できると。

それ故に、甲斐は自分の指揮下にある別班を使って、可奈美と姫和が没収した御刀千鳥とノロのアンプル、そして拳銃が手に入り易いように〝用意〟したのであった。

「……紗南本部長。衛藤隊員と十条隊員の両名がソフィア氏を殺害してしまう前に、捕らえる必要があると思いますが？」

それだけでなく、衛藤隊員と十条隊員の両名を捕らえる必要があると言って、可奈美と姫和を荒魂化した刀使として処分する部隊をも動かそうとしていた。

「……ええ、分かっております。直ぐにスペクトラムファインダーを千鳥に反応するようにして、衛藤と十条隊員の行方を追います。」

甲斐に可奈美と姫和を追うべきであると言われた紗南は、スペクトラムファインダーを可奈美が所持している千鳥に反応するようにして行方を追おうとするが、

「報告!!首都上空……いえ、上空に謎の現象がっ!!!!」

それを遮るかのように、首都上空に謎の現象が現れたとの報告が来たことで状況は一変する。

「何事だ？もう少し分かるように説明してくれ。」

その報告を聞いた紗南は声を荒げながらも、首都上空がどうなったか気になった甲斐と共に作戦指揮用のテントから外に出て、上空を見上げた。

すると見上げた空は、一目で分かるほどの変貌を遂げていたのである。

「……何だ？空が裂けている？」

「これは……！」

上空を見た甲斐は、初めて驚愕の声を上げた。……何故なら、宇宙のように黒い闇の中にキラキラと輝く星々のように金色に輝く点が一本の線で無造作に繋がっている空間を中心に、灰色の雲に覆われた

空が甲斐の目に広がっていたからである。それを見た甲斐は空が裂けているかのように見え、それを口に出してしまうほどに驚愕していた。

だが、驚愕の声を出す甲斐に反して紗南は、直ぐに２０年前の相模湾岸大災厄時に起こった現象と同じ物であると理解した。

「直ぐに全部隊に警戒態勢を取れと言え!!」

「どっ……どういうことですか?」

「あの空は２０年前の大災厄の時に見た。……早くしないと、あの空から荒魂が降ってくるぞ!!」

そのため紗南は、２０年前の大災厄の時は特務隊の隊員であり、最前線に居たことであの裂けた空がどのような意味を持つかを簡潔に述べると、自身の部下に全部隊に荒魂出現の対応を取るようにと指示を飛ばしていた。紗南の命令と内容を聞いた部下は直ぐに東京に展開している自衛隊と特別祭祀機動隊に紗南からの指令を伝えようとする。

……しかし、

「……雪?」

季節外れの雪に途惑い、足を止めてしまう。それだけでなく、黒い雪という核による影響によって生じた死の灰を連想させるものであったから、紗南の指令を受けた部下は余計に呆けてしまい、足を止めてしまった。……だが、

「何をやっている!走れ!!それが荒魂だ!!!」

それが、彼の命取りであった。

「あっ……荒魂!?」

死の灰を連想させる黒い雪と思い、眺めていたそれが地に落ちたときに黒い靄が上がったときには、その靄は荒魂に変わっていた。

黒い雪から生まれた荒魂は、近くに居た紗南と甲斐を見つけると珠鋼を奪った人間への怒りを思い起こし、紗南と甲斐に襲い掛かるのであった。

そのため、荒魂から紗南と甲斐を守るべく自衛隊員とＳＴＴ隊員が手にした小銃で銃撃を加える。

「……本部長等はお早く!!」

だが、御刀でしか有効打を与えられない荒魂に効果があるはずもなく、紗南と甲斐を守ろうとした自衛隊員とＳＴＴ隊員は蹂躙されるのみであった。ＳＴＴ隊員と自衛隊員の悲痛な声を聴いた甲斐と紗南は此処に居続けても、ＳＴＴ隊員等も逃げるに逃げられないと判断し、荒魂から逃れるべく彼等を置いて逃れようとするが、

「グガアアアアア!!」

その逃げた先にも、荒魂が居た。

紗南と甲斐はそれらから逃れようとするものの、間に合うことなく、自身の血で大地を濡らすのであった。

――――その後、裂けた空から降ってきた荒魂に本部長と陸将補が襲撃され重傷を負ったこと、東京中に大量発生した荒魂の対処を最優先にしたことから可奈美と姫和の追跡は後回しにされた。……可奈美と姫和にとって幸か不幸かは定かではないが。

裂けた空

「東京に展開している自衛隊と特別祭祀機動隊に通達。東京に現れた荒魂を対処することを最優先にせよ。」
「東京杉並区に現れた荒魂の対処のため、Ｓ装備の使用の許可を求めております。」
「イチキシマヒメの捜索はどうなっている?」
「東京に展開した第一高射特科大隊が裂けた空に向けて地対空誘導弾を使用する許可が求められておりますが、許可しますか?」
　裂けた空から荒魂に強襲された刀剣類管理局と自衛隊の本隊が集う野営地は、本部長である紗南と陸将補である甲斐の負傷により機能不全に陥っていたが、寿々花と甲斐の代理として自衛隊の統率を執り行う三木一等陸佐によって、どうにか約５０％の機能を取り戻し、東京に展開していた自衛隊と特別祭祀機動隊の各部隊に指示を出すことができた。
「Ｓ装備を使用を許可を受諾。スペクトラムファインダーの反応を元にコンテナの射出を。それと、第一高射特科大隊には地対空誘導弾の使用を許可し、誘導弾の反応の報告を。それと、特別希少金属利用研究所からは何か報告はありましたか?」
　寿々花の指揮下にある管制官に杉並区に居る刀使にＳ装備の支援の許可と第一高射特科大隊から要請された地対空誘導弾の使用の許可を受諾するだけでなく、特別希少金属利用研究所に彼我の境界の内部をドローンによる観測を依頼していた。
「寿々花臨時指令。……京都に居られる総理と各大臣がソフィアとかいう子娘よりも、東京に大量発生した荒魂の討伐を最優先すべきであると閣議決定されましたので、我々自衛隊は刀剣類管理局と共にその決定に従い東京に居る荒魂の討伐を優先せよとのことです。」
　それだけでなく、三木一等陸佐の口から、寿々花は神奈川の鎌府女学院へと避難した総理と各大臣との交渉に成功し、甲斐が決めたソフィアの捕縛を後回しにし、東京に突如として現れた荒魂の討伐を最

優先することに成功していた。
「……しかし、東京五輪の成功を願う者達をよく説得できましたな。」
その成果を聞いた三木は、寿々花のことを素直に賞賛していた。それを聞いた寿々花は、
「そうですか。……では、三木一等陸佐殿。甲斐陸将補の代わりは務まりそうですか？」
「ええ。災害派遣にて大部隊を指揮したことがありますので……。」
三木に甲斐の代わりは務まりそうかと尋ねるのであった。
それを聞いた三木は、東京での荒魂大量発生下に置いても、冷静に自衛隊の部隊を指揮し、事態を対処することができるかと問われたのだろうと思い、寿々花にそう返答するのであった。
「そうでしょうね。……それと三木一等陸佐殿。この作戦が終了した後、中谷防衛大臣から辞令が下されるそうなので、今後とも我が刀剣類管理局との関係を維持するよう、慎重な行動をお願い致しますわね。」
「……。」
それを聞かされた三木は、重傷を負い病院へと搬送された甲斐のことを考えると、それがどういう意味を持つか直ぐに分かった。
それ故に、三木は皮肉気に寿々花に対してこう返すのであった。
「なるほど。……段々と貴女は甲斐陸将補に近付いてきたという訳ですか。一体、どのような手で総理と各大臣を説得なさったのです？」
三木にそう言われた寿々花は、三木の顔を見る事なくこう返した。
「ああ、簡単なことですわ。……東京五輪の価値を下げたくないなら、そのようにすれば良いだけの話しですから。５０億もの粉飾を出した一般企業は実刑を受け、１０００億もの粉飾を出した歴史ある大企業は行政処分のみ、というこの国の経済の実態を甲斐陸将補は知らなかっただけのことなのですから。」
戦争だけでなく、この国の経済も、法の下の平等というお題目も全て、基準が曖昧となったグレーゾーンという白か黒かの判別の付かない灰色の世界に染まりつつあるのだということを寿々花は三木に告げるのであった……。

――――一方、ソフィアとイチキシマヒメは、

「繋がった。ヒルコミタマに……。」

「イチ子ちゃん、お祝い申し上げます。彼等を取り込み隠世にある本体との繋がりを得られた今、現世に覇を……いや、貴女がこの世界を二次創作の世界のように好き勝手にできるようになりました。……今後は如何に致しますか？」

隠世に居る本体であるヒルコミタマにイチキシマヒメが繋がったことよりも、隠世の扉が開いたことに歓喜するソフィア。

ソフィアが歓喜した理由は、心の奥底では隠世の扉が開くことに不安であったが、タギツヒメのノロが多量に優の体内に残っていたことでタギツヒメの代わりを担えたこと、新型Ｓ装備に珠鋼を搭載させることで隠世への影響力を無理矢理増大させ、隠世の門が開くかどうかは賭けであったが、その賭けが上手くいったことで隠世の門が開いたことで大量の荒魂が降り注いだことに歓喜したからである。

……だが、隠世の門が開いたことに歓喜し、興奮が冷めやらぬ心境ではあるのだが、ソフィアはどうにか冷静を保ってイチキシマヒメに尋ねるのであった。……この後は、どうするのかを、

「……良く言う。お主は隠世の扉を開けることだけが目的だったのだろう。」

「ほう？私の考えがお分かりで？」

「知らん。……静の記憶からお前がどのようなものを望んでいたかを見ただけだ。……しかし、隠世の扉を開けることに執着する人間が居るとは思いも寄らんかったぞ。」

「ええ、この世界を〝狼の世界〟へと変貌させるのが唯一の望みでし

たから、……争いの無い世界など、不健康極まりないですから……。」
　すると、イチキシマヒメは静の記憶からソフィアの狙いが隠世の門を開けることだけが狙いであったと言うと、ソフィアはその指摘に気にすることなく平然とイチキシマヒメにこの世界を〝狼の世界〟に変貌させることが目的であると述べるのであった。
「……獣の世界か、お前の望みは叶ったのか？」
「ある程度は。」
「ある程度？」
　ソフィアが望む〝獣の世界〟は叶ったのかとイチキシマヒメに問われたソフィアは、ある程度はと返すのであった。
　ある程度と返したソフィアにそれはどういう意味かと聞き返すイチキシマヒメ。
「……ある程度とは、この隠世の門を開けることで隠世に居た荒魂と人間共を永遠に争い続けさせる。……この退屈な平和という奇病に悩まされていた世界を戦争といった闘争の血で彩り、そして、その闘争の血で彩ったこの世界を、心の底から絶景だと思える世界にし、私好みの舞台を整えることができたのですが、それに相応しい象徴が手に入らなかった。……だからこそ、ある程度はと答えました。」
　隠世に居る荒魂と人間を相争わせることによって生ずる闘争の血で彩られたこの世界を心の底から美しいと思える世界を舞台とした主演を獣の世界の象徴として、狼の時代という新たな時代の幕開けとして示す象徴という名の偶像が必要だったのだが、それが手に入らなかったがためにソフィアは「ある程度」と言って答えるのであった。
「……そう、あの孤高の強さこそが獣の世界の象徴として、狼の時代の幕開けを示す偶像として相応しい子だと思えたのだ。」
　そう言って思い浮かべるのは、ソフィアが初めて優と出逢った時のこと。
　初めは何事もなくＳＴＴ隊員を鼻歌を歌いながら防弾チョッキを避けて手足を撃って嬲り、そして自身も首に重傷を負っているにも関わらず、負傷して動けなくなったＳＴＴ隊員を盾にしながら被弾も気にすることなく戦い続けている姿に感動した。

石廊崎における優と夜見との戦いの経緯をこちらの協力者であったトーマスから聞いたソフィアは、味方を盾にし、敵も味方も雑に放り投げるという人を人とも思えぬ所業に心が感動で打ち震えた。自身の理想とした姿が目の前に現れたかのようにすら思えたのである。

そのために、外国の工作機関と繋がりを持つという危険を犯してまで優を国外に出さないようにし、優が人を殺すということに何の抵抗もなく行えるように半ば荒魂化した結芽、イスラム過激派といった物を用意したのだが、

（だが、違った……。）

だが、それは違ったとソフィアは心の中で述懐していた。

故に、ソフィアは狼の世界の象徴として相応しいと思っていた衛藤優のことを思い出していた――――。

「衛藤　優。ようやく、……ようやく貴方を此処へ迎え入れることができた。その日をどれだけ心待ちしていたことか。」

ソフィアは、冥加刀使と決起に参加した若い刀使達を囮にし、数十名程の冥加刀使を引き連れた山崎　穂積をＣＩＡと甲斐の情報提供により手に入れた優が居る病院へと向かわせ、優をイチキシマヒメ等が居るこの都内にある高層ビルの中に居た。

ソフィアと優が居る場所は、白い棚の上に”１００円を入れてね！”と赤い文字で注意書きされたものが置かれており、その棚の中にはお菓子が入っていたところから、オフィス用の置き菓子であることが読み取れた。その置き菓子と丸いテーブルが一つ、ソファが三方向に設置されているスペースにて、優をソファの上に寝かせるとソフィアは語っていた。

……やっと待ち望んでいた人を手に入れることができたことにどれほど喜んだかを。

「……ていうか……誰？」

しかし、そんなソフィアの告白なんかどこ吹く風と言わんばかりに

優は、存在すら忘れてしまっていたソフィアのことを「誰？」と言って尋ねるのであった。
「忘れてしまっても仕方がありません。貴方は脳がノロによって侵食されてしまったがために記憶を失いました。……私はソフィアと言う者です。以後、お見知りおきを。」
「……どうでもいいけど、何で……僕を此処に……連れて来たの？」
優に「誰？」と問われたソフィアは、自身の名を名乗るとその名を覚えていて欲しいと懇願するのであった。
それを聞いた優は何故、此処に連れてきたのかを続けて問うのであった。
「何故、連れて来たか？……それはですね、貴方がこの国を壊す。史上最恐の大荒魂になって欲しいからですよ？」
連れて来た理由を優に問われたソフィアは笑顔でそう答えた。
この国を破壊してくれる史上最恐の大荒魂になって欲しいからであると。
「……何で？」
「それはですね。ずっと疑問だったからですよ。……人間と荒魂がどう違うのか、本当に疑問だった。刀使となり、初めて荒魂を斬ったとき人間の肉の感触を思い出したんですよ。御刀で斬れば人も荒魂も死ぬ。……ですが、この国では荒魂は穢れの象徴として扱われてきた。人間もドス黒いものを抱えているというのに、何故あんなにも恐れるのか、本当に疑問でした。」
ソフィアは今まで誰にも打ち明けなかった心の内を語り始める。
初めて荒魂討伐した際、人を殺した感触と同じものを感じたことに疑問を持ち、そこから人と荒魂の違いについて、答えを見出せないままでいたことを。
「……その疑問を抱え続けていたら、あることにも疑問を抱きました。どうして、この世界は荒魂や他国の介入といった脅威に晒されているのに、自らを武装してその脅威に立ち向かわないのか？自らの問題に立ち向かうこともなく、他者に生殺与奪の力を持つ剣を他者に持たせることで解決した気でいるのだろうかと？……果たして、ただ生まれ

たから生きるということは本当に正しいことなのだろうかと?」
　ソフィアは語る。その疑念を抱き続けていたら、様々なことにも疑問を抱いたということを。
「戦争、病、事故……人はいつか必ず何らかの理由で命を失う。……永遠の命は存在しないというのにただ生きているだけの人間が不思議だった。命は弱い者から失っていくというのに、他人に生殺与奪の権利を握られていることに誰も何の疑問を抱かないことに疑問だった。……そこから私はただ無意味に生きている人間が……人間に見えなかった。」
　姉同然の存在だったソフィア、赤子だったソフィア、自分が殺したソフィアを思い浮かべながらソフィアは語る。
　人は必ず何らかの理由で死ぬ。死なない生物は生物ではない。それだけでなく、命は弱い者から失っていくものだと。
　……なのに、この国の人間達はそれに疑問を抱かず暖衣飽食に包まれることを当然のように生きて、一方で自分が育った下水道で共に暮らした私の仲間達は飢えを凌ぐために強盗や春を売ったというのに、誰もそのことに疑問を抱かないという理不尽を見てきた。それが、ソフィアにとって、この国に住む人間のことをとても人間には見えなかった要因であると。
　人間じゃない物が人間よりも平然とした顔で生きているのが不思議で不気味で気味の悪い物としか思えなかったと。
「私の疑問に知識が答えてくれるだろうと思い、様々な物を読んだり見たり知ったりした。……しかし、それらを漁ってもスタンフォード監獄実験、ミルグラム実験、サードウェイブ実験、ローゼンハン実験。」
　人は閉鎖的な状況における権威者の指示に従う人間の心理状況を解明したスタンフォード監獄実験やミルグラム実験を素に刀使やイチキシマヒメを説得……もとい洗脳した静。
　第二次世界大戦中にドイツ人がナチス政権の政策をどのように受け入れることができたのかを説明するために実施したサードウェイブ実験を素にして、刀使の使命といった特別感と優越感に浸れる言葉を使って彼女等を冥加刀使へと変わるように説いたことを思い出し

ながら語ると、次の話をし始めた。
「……特にマウスの楽園を何度も創ってはマウスが絶滅したという結果しか残らなかったＵｎｉｖｅｒｓｅ２５実験以上の回答が無かった。」
　マウスにとっての疫病、天敵、災害、戦争といったものが存在しないマウスの楽園のような社会を２５回築いたが、結果は乳児死亡率が出生率を越えたことでマウスが全て絶滅したという実験、Ｕｎｉｖｅｒｓｅ２５実験以上の回答が無かったと語る。
「この世界は未だに闘争という害意が必要なのだ。……その始まりの遠吠えを告げる狼が必要なのだ。人は獣へと戻るべきなのだと。」
　それらを知り、そう感じたソフィアは、この世界には未だ闘争というものが人々を健やかに保ち続け、且つそれが人にとって必要な物であると。
「だからこそ私は求めた。……力によって全てを捻じ伏せることができる真の平等と自由を有する世界を、獣を世界……狼の世界を、私がなれなかった狼の世界に相応しい象徴を私は求めた。そうすれば、私が望んだ世界が手に入り、永遠に形は崩れることが無いと。」
　そして、闘争こそが人にとって自然であり、必要なものであると実感。この退屈な平和な世界を戦争という闘争に塗り替えることで人々を虐殺し、それと同時にソフィアの復讐をも成そうとしていた。
「……どんな人間であろうとも力によって全てを捻じ伏せることができる真の平等と自由を有する世界。獣の世界……狼の世界を……私がなれなかった狼の世界に相応しい象徴を私は求めた。」
　それ故に、ソフィアは獣の世界だけでなく、その世界に添えるのに相応しい人間が必要だったことも。
「今までの貴方の戦い振りから確信しました。……貴方は獣の世界において頂点に居るべきであり、暴力の象徴として君臨する存在となるに相応しいと、そうして堕落した人々の目を怠惰な平和から目覚めさせられる存在になって欲しいのです。だからこそ、私は貴方に史上最強の大荒魂になって欲しいのです。人々が闘争へと駆り立てる存在に……。」

ソフィアはそう言って、優に史上最強の大荒魂になって欲しい理由を述べる。

「……何で自分がそうならないの？」

しかし、優はそんなことどうでも良いかのように、何故ソフィアが大荒魂にならないのかを尋ねていた。

「……私が大荒魂になるのは相応しくない。ただそれだけのことです。私でも思いつかなかった残虐な行為を思い付く貴方なら、私が理想としていた者になれる。ただ、それだけのことです。」

「……そんなことのために、今まで殺したんだ？」

「ええ。……ですがお気になさらず、そんなものとは比べ物にならない程にこれからは、いや、これからも人が人を沢山殺しますので。」

自分が大荒魂にならないのかと優に尋ねられたソフィアは、自分よりも残虐なことを思い付く優の方が大荒魂と呼ぶに相応しいと答えていた。

そして、そんなことのために今まで殺したのかと問われたソフィアは、優がそのことに対して気を揉んでいるのだろうと思い、これからも人は沢山死ぬのだと説くことで罪悪感を無くそうとしていた。

「……それに、酷いとは思いませんか？貴方を死地へと追いやるばかりか、不要になれば捨てたのですよ？……その証拠に私達が貴方の居所が分かったのはこの国の政府、寿々花といった刀使や甲斐といった自衛隊の人間、トーマスが所属していたＣＩＡ、それに貴方の姉である衛藤　可奈美が弱った貴方が何処に居るかを教えてくれたのですから。」

それだけでなく、ソフィアはこの国の政府、寿々花や甲斐、ＣＩＡ、……そして、可奈美もお前が邪魔に思ったから、私にお前の居所を教えたのだと述べていた。

……だが、ソフィアは一つ嘘を吐いていた。それは、可奈美がソフィアに優の居所を教えているということなのだが、実際は、可奈美はソフィアに優の居る場所を教えていない。

だが、優が大事な家族の一員であると思っている可奈美にも見捨てられたと思わせれば、優が絶望し、大荒魂になる気持ちが強くなると

考えたからこそ、そんな嘘を吐いたのであった。
「……。」
黙って聞く優の姿を見たソフィアは、実の家族にも捨てられたことに効果があったと思い、更に饒舌になるのであった。
「大丈夫。身体が不自由で家族にすら見捨てられた貴方は不安に思うかもしれませんが、私がイチキシマヒメが持つ多量のノロと私が持つノロを貴方に捧げます。」
タキリヒメと静、そして多数の冥加刀使を取り込んだことでイチキシマヒメが持つ多量のノロと自身が持つノロも優に捧げることでサポートすると言っていた。
「全てはこのために、このために用意しました。冥加刀使も隠世から降りてきた荒魂も私自身でさえも貴方を史上最強の大荒魂にするための舞台でした。あとは、主演である貴方が全てを、この世界を塗り替える時が来たのです!!いつも通りの貴方で、親衛隊やＳＴＴ隊員等と同じように全てを力で、気に食わない物を捻じ伏せれば良いのです!!この世界にそびえ立つ綺麗に着飾ったビルも上辺だけ綺麗な白い建物も全て廃墟にし、燃え広がる景色に変えてやりましょうっ!!!!」
そうしてソフィアは、優に全てを暴力で解決すれば良いのだと諭すように説くのであった。
あの肥えた豚同然の成金が住まうビルも、気に食わない物は全て壊せば良いのだと、この世界は原作を無視した勝手な二次創作のように己の欲望のままに好き勝手して良いのだと、ソフィアは優に感情を顕にして述べていた。そんなところからも彼女の本心と必死さが伺えた。
「……嘗て、この国も倒幕やら維新やらで体制が変わったように、この国も詰みかけている。……何もかも規制して閉鎖的となった平和社会を暴力という名の変革を促すことで全てをひっくり返らせる。……そうすることで、貴方のことを不要だと言ったこの社会に復讐しようではありませんか?」
ソフィアはこの閉鎖的な社会を吹き飛ばすことで優の存在価値を世界中に知らしめようと優に説くのであった。

……しかし、

「……フ……フフフ……へえ、そうなんだ。」

自分が生まれ育った国にも、所属していた組織にすらも、そして家族の一人である可奈美にも（これは、ソフィアが優を絶望させるための嘘ではあるが。）、優は見捨てられたというのに、ソフィアは優が絶望し、復讐に囚われて大荒魂になると述べるどころか、こちらを見て、見下したかのような笑みを浮かべたことソフィアは奇妙に思えた……。

優くんが欲しかった物

自分が生まれ育った国にも、所属していた組織にすらも、そして家族の一人である可奈美にも（これは、ソフィアが優を絶望させるための嘘ではあるが。）、優は見捨てられたというのに、ソフィアは優が絶望し、復讐に囚われて大荒魂になると述べるどころか、こちらを見て、見下したかのような笑みを浮かべたことにソフィアは奇妙に思えた……。

……何故、コイツはそんな笑みを浮かべるのか。理解できなかった。

しかし、ソフィアは次の優の言葉で何故こちらを見下した笑みを浮かべたのか理解した。

「何か初めて見た時に気持ち悪いなぁって思ったけど、やっと分かったよ。……何だかんだ理由付けてるけど、結局のところは悪ぶってるだけなんだぁ？」

復讐の意味であるソフィアを馬鹿にしているのだと。

私の指針で志であるソフィアを見下しているのだと。

私の全てで、写し身であるソフィアを愚弄しているのだと。

このガキは、私がやりたかったこと、私が成し遂げたかったこと、私が求めたもの全てを否定したのだ。

「……何がおかしい!?私の全てを否定するな!!」

優の見下した笑みがそういう意味だと理解し、気付いた瞬間にはソフィアは優の首に手を掛けてしまう。

「……う……ぐうっ！……」

「だっておかしいじゃない!!みんなあれだけ必死になって生きてたのに、何で私だけ……下水道に生きてた仲間と大好きだったソフィアお姉ちゃんも、私が産むはずだったソフィアという名前の赤ちゃんもこの世に殺されて、ただ漠然と生きてるあなた達が何不自由なくこの世に生きていけるのっ!?!!」

そしてソフィアは、優の首に手を掛けながら訴える。

嘗て下水道で共に過ごしていた仲間は都市開発を目的とした掃除部隊によって殺され、私が産むはずだった赤ちゃんも大人達に殺されたにも関わらず、この世にただ漠然と生きている人達はどうして生きていけるのかと。……それが不公平だと思った。無責任だと思った。理不尽だと思った。

「……ハ……ハハハ……僻んでる……。」

「笑うなっ!!!」

〝ソフィア〟という仮面が剥がれ落ちたソフィアは、年頃の少女のように涙を流し、感情を剥き出しにして優に「笑うなっ!!!」と叫ぶ。そして、優の腹に拳をも振り下ろしていた。

「ゲホ、ゲホッ!!……だって、笑えるよ。……傷ついてボロボロで……惨めで汚い……！僕はそんな弱い肉細工を見ていると心の底から笑いと……僕はまだ大丈夫だなって思えるんだ。」

優はそう言うと、少女の様に涙を流すソフィアの姿を見て、邪悪な笑みで笑っていた。

「黙れっ!!」

邪悪な笑みを浮かべる優の姿を見たソフィアは不気味で仕方なかった。

首に手を掛けられ、今にも殺されそうになっているのにどうして優はそんなに余裕そうに振舞えるのか？

私はこんなにも心がボロボロになっているのに、殺されかけている優は幸せそうなのか？

ソフィアは、今の優が不気味で仕方なかった。

「……私はっ……私はあ!!やり直すんだ……あの子達のために、絶対に!!……そうして、ソフィアが生きた意味を……この肥え太った成金共が創った世界を、成金共が肥え太るだけの世界に……この世に刻み付けてやるんだっ!!!」

同じ地球という星で生まれ、同じ現世という世界に生きていた。なのに、生まれや育ちが違うというだけで……。

「うっ……、ひっぐ……グス……。」

私の仲間や私のお腹に宿った赤ちゃんはこの世界に見捨てられ、目

の前に映る家族や環境に恵まれた人達は……いや、目の前に居る子供は何不自由なく生きている。
そんな理不尽なものを見て、ソフィアだった少女は涙を流し続ける。
どこで差がついたの？どうして、どうして……あの子達ばかりが不幸になるの？
この恵まれた人達の幸せそうな顔を見ると殺したくなる。その幸せをぐちゃぐちゃに壊して、私達と同じ目に遭わせてあげたくなる。同じ存在なのだと分からせてやりたくなる。
ソフィアだった少女の心の中はそのような怨嗟と憎悪で渦巻いていた。
それ故に、優の首に掛かっているソフィアの手に力が更に込められる。その力に呼応したのか、それとも死の前に見る走馬灯なのか、優は昔のことを思い出していた――――。

――――優がタギツヒメと融合する前。
優のある行動が異常だと思えた優の父はとある病院へと連れて行き、あるテストを優は敢行することになった。
「それじゃあ優くん。簡単なクイズに答えてもらって良いかな？答えを当てれれば、お菓子を上げよう。」
「ホントに!?」
医師のお菓子を上げようという言葉に反応し、喜色満面の表情を浮かべる優を見て、あどけない子供であると思いながらも、この心理テストには答えを出さないでほしいと願う医師であった。
「それじゃあ優くん。負傷した人の絵があるとして、何処に怪我をし

ていると思う?」
「頭とか心臓。」
「……うん、正解だ。」
医師はそう言うと、優にお菓子を与える。それに喜ぶ優を見ながら、内心苦悩する医師。
「……次は、そうだな。……クリスマスの夜にある男の子がサンタクロースからのプレゼントがされたんだ。それは何と、サッカーボールと自転車だったんだ。だけど、その男の子はそのプレゼントを貰っても嬉しくなかったんだ。何故だと思う?」
「……足が無かったからかな。」
「……またまた正解だ。凄いな優くんは。」
医師は「凄いな優くんは。」と言いながら、苦悩する顔を見せることなく優にお菓子を上げていた。
「ある少女は自分の父親に殴られたり蹴られたりしていたんだけど、それを見かねた学校の教師が父親に会って少女を殴ったり蹴ったりすることをやめるように説得しようとしたんだけど、父親はその教師に殴りかかってきた。少女も隙を見計らい、父親ではなく教師を包丁で刺した。父親が死んだら虐待されずにすむのにどうして少女は教師を刺したと思う?」
医師は優にかなり過激なことを述べて、優の心の中に少しでも先に、一歩先に進み触れようとした。……すると、
「……その女の子は、殴られたり蹴ったりされることで自分であろうとしたんじゃない?」
優は、少女は自分の存在意義を奪われたくなかったからだと事もなげに答えるのであった。それを聞いた医師は、
「……それも正解だ。凄いな優くんは殆ど正解を答えているね。」
正解を答えて凄いと笑顔で答えるが、内心は暗い気持ちとなっていたが、それを悟られぬよう、努めて表情を崩さないようにしながら、お菓子を渡していた。
お菓子を貰えた優は、嬉しそうに貰いに行く。それを見た医師は更に踏み込んだ質問ができると判断する。

「……それじゃあ、優くん。少し聞きたいんだが、君はお友達とどんな遊びをしていたの？」
「……ビニール袋を被せただけだよ？」
そうして、医師から核心へと迫る質問を受けた優は正直に答える。
ただ単純にぬいぐるみにビニール袋を被せただけだと。
「なら、どうして被せたのかな？」
そう告げられた医師は、優に何故ぬいぐるみにビニール袋を被せたのかを尋ねる。
「うん？顔が見えなければ自分がどう思うかを試してみたかっただけだよ？」
すると優は、医師の問いに事もなげに答えていた。
「……。」
医師はそれを聞いて一瞬険しい顔をするが、直ぐに表情を笑顔にしていた。
何故なら、目の前に居る子供でしかない優はぬいぐるみにビニール袋を被せ、そのままぬいぐるみの首を紐で締め殺そうとしていたからである。
それを踏まえて、先程の〝試したかった〟という返答に児童心理学を担当する医師はこの目の前に居る児童に果たして、この結論に至るべきかどうか迷った。
「試したかったていうのはどういうこと？」
「……顔を隠して首を締めれば、自分がどれぐらいで悲しむか分かって、それで自分の心の中にある『優しさ』というものが見つかると思ったの。」
……迷ったが、医師は優に何故ぬいぐるみの首を締めたのか聞き出そうとした。
すると、優は医師がお菓子をくれたことに気を許しているのか、医師の質問に正直に答えていた。
顔が見えなければ、本当に首を締めれば悲しくなくなるのかどうかを。
「それは……何故『優しさ』を見つけたいの？」

そう答えた優に、医師は何故『優しさ』を見つけたいのかと尋ねる。
「……あのね、僕の名前は衛藤　優っていうの。優しい子になって欲しいから『優』っていう名前にしたって可奈ねーちゃんから聞いたの。」
優は答える。
自分の名前の由来が優しい子であれという願いから、付けられたのだと。
「……でもね、優しいってどういうことなんだろ？って思ったから、顔をビニールで隠せばその人に情が湧かなくなるって聞いたから、先ずは大切なぬいぐるみの首を締めてみたの。でも分からなかったから、ぬいぐるみの顔をビニール袋で隠して首を締めてみたの。……でも、顔をビニール袋で隠しても隠さなくても大して変わらなかった。」
優は答える。
優は『優しさ』という意味が分からないから、大切な友達であるぬいぐるみの首を先ずビニール袋で顔を隠してから紐で締め、そして次は顔を隠さずに首に締めることで心の動きの違いが有るかどうか、その違いから、情という物が分かり、そこから母が名付けてくれた『優しさ』というものが理解できる気がしたということを年相応な無邪気な笑顔で、自分がいつも思っていることを隠すことなく、素直に述べていた。
素直に述べた理由は先程の医師の質問から同じ悩みを持つ人なのかもしれないと思ったからである。
……素直に答えればどうなるかも分からぬまま、医師に答えていた。
「……ふうん、そうなんだ。……おじさんに教えてくれてありがとうね。」
「ううん、良いよ。おじさん、分かってくれそうだから。」
それを聞いた医師は、この優という子供の父親に診断結果を報告しに行くのであった。

その後、優の診断を終えた医師は、優の父に診断結果を報告すべく、神妙な面持ちで優の父に話し出した。

「お父さん、落ち着いてよく聞いて下さい。児童心理学の医師として、正直に申しますと、この診断はしたくはありませんが……この子は……」

優の父は医師のその神妙な態度にゴクリと唾を呑み込みながら、静かに医師の診断結果を待っていた。

「サイコパスです。」

それを聞いた優の父親は、唖然としていた。

しかし、唖然としている父親とは違って、サイコパスの意味を知らない優は父の隣で無邪気に病院にある人形と遊んでいた。

サイコパスって、あの、殺人鬼とかに多く居るっていう……。

そう言われた医師は、頷きながらサイコパスについて話す。

「……ええ、それに、先天的な反社会性パーソナリティ障害とも言われている症状です――――。」

曰く、サイコパスとは、

良心が異常に欠如している。

他者に冷淡で共感しない。

行動に対する責任が全く取れない。

罪悪感が皆無。

自尊心が過大で自己中心的。

口が達者で表面は魅力的。

といった特徴が見られると医師は優の父に説明していた。……加えて、

「それと、サイコパスは今のところ確立した治療法は……見つかっていません。」

サイコパスは先天性の病であるために、今は確実に治す治療法が無いと優の父に告げるのであった。

しかし、当時の優はサイコパスという意味も知らなかったし、ぬいぐるみの頭に被せて首を絞めることを『異常』と見て取り、騒ぐ医師

と父親が不思議で仕方なかった。
だが、ぬいぐるみの首を絞めるだけでなく、そのぬいぐるみの頭にビニール袋を被せるという『異常』な行動をする優を見た父親が優を精神科に連れて行くと言い出したために現在に至るのだが、自分の息子が重大犯罪者になりかねないサイコパスであるという事実に非常に悲しんでいた。
だが、それと同じく父は優のことを非常に恐れていたということが優の目にも伺えていた。
何故なら、優と可奈美の父は、『サイコパス』である自分を避け、『刀使』になった自身の姉である可奈美ばかりを贔屓していたからである。
だから、優は親に認められるように、家族の一員として認められるように勉学に励んだ。
可奈美は母親から『刀使』であることと、母と同じ御刀を扱うのに使う『剣術』を受け継いでいた。
だが、一方の優は、母親から望まれた『優しさ』という思いも、母の取り柄であった『剣術』も受け継ぐことができなかった。
だからこそ、優は唯一の肉親である父親に一つでも認められて、家族の一員になれるように頑張った。放課後、皆が友達と遊んでいる時も何学年も先の教科書を使って勉強していた。
……だが、優自身も同じ人間に思えなかったことと、肉の塊だけでなく頭も悪い人もどきと仲良くしても意義を感じなかったが故に、教科書の世界に没頭していくことができたという部分もある。
――――優は昔からそうだった。
物心が付いたときから、心の何かが欠けているという自覚を持っていた。その自覚を持つが故に、同級生も両親も可奈美も可奈美の親友である舞衣とその妹達も同じ人間に見えなかったし、二本の脚で動く肉の塊という物としか思えなかった。
しかし、そんな心境であったがために、同年代の友達も居らず、何年も先の教科書を使って勉学に励んだ成果もあって、毎年学年一位の成績を取り続け、全国模試も１００位以内は抑えることができたので

ある。
だが、それでも、優と可奈美の父は、可奈美が母と同じ刀使になれたことの方が嬉しかったようである。
それを見た優は、子供心にこう思った。……何で姉が優遇されるのだろうか?自分よりも頭の出来が悪い姉の方がそんなに良いのかと、それほど『刀使』になったことの方が良いのかと思ったからこそ、優は父親に聞いてみたのである。
「良い成績を取ってるのに、何がダメなの?」
すると、優の父親は、
お前は問題を起こし過ぎている。
と言われたのである。
「……何が問題なの?」
だが、優は問題を起こした覚えが無いため、何のことなのか一切分からなかった。更に言うと、父親が言う『問題』とは、周りの人間が『問題』だと騒ぎ立て、囃し立てていたものばかりであったと優は記憶している。
だからこそ、優は父親に反論したのだ。何が問題なのかと。
「同級生と喧嘩して、相手を殴ることは悪いことなの?」
お前は相手が泣いて謝っても殴り続けたじゃないか。
「テストは必ず１００点を取っているのも悪い事なの?」
お前はそう言って、自分の勉強に必要ないからと言って、いつも宿題をしないじゃないか。
……しかし、父親に、優は相手が謝っても殴り続けるという残忍性があること。授業内容も分かっていて、何学年もの先の勉学をしていて、テストでも必ず１００点は取れているのだから、自分の勉学に必要の無い宿題をする必要が無いと言って宿題をしない無神経さを咎めていた。
「……。」
優は父親にそう言われ、黙りこくるしかなかった。……いや、より正確に言えば、何故怒られているのか理解できないからこそ、黙るしかなかったというべきであろうか。

自分は身体が弱いから、相手が殴りかかって来たら容赦せずに徹底的に打ちのめす必要があっただけなのに、身体が弱いからこそ、運動ではなく勉学に励んで家族に認めて貰おうとしたというのに、という不満を抱えながら父の言っていたことにただ黙って頷いていた……。

この他にも、宿題をしないといった性格の悪さが原因で、上靴に画びょうを入れられるというイジメを受けるが、翌日に画びょうを他の人間の靴に入れ替えるという行動取って、イジメて来た人間にその罪を擦り付けたこともしたのだが、それは父親には黙っていた。

そして、優をイジメていた人間は優に画びょうを入れ替えられた人間に靴に画びょうを入れられたことを咎められたのである。

そうして、その次の日には、優をイジメて来た人間はクラス全員からイジメの標的にされたのである。

それだけでなく、そのイジメて来た人間をクラスの皆がイジメる理由が『靴に画びょうを入れるという陰湿なイジメをした悪い奴だから。』ということになったのだが、それが優にとっては不思議であった。

しかし、いい加減画びょうの件でイジメるのは飽きたからか風化したのかは分からないが、その数日後には転んで汚物に触れたという理由だけでその人間を〝ウンコマン〟と名付け、最終的には穢れているという理由で〝荒魂〟と名付けられ、それが流行ってしまったこと。それに飽き足らず、その〝荒魂〟が触った物を病原菌扱いしてぶつけあったりする遊びだったり、雑菌扱いにして触られないようにする遊びという名のイジメが流行ったことも不思議だった。

すると、人を〝荒魂〟と名付けてイジメているということを知った優の担任は、クラス全員に「イジメは悪い事だ。」という極めて普遍的なことを言って事態を終息させようとしていた。……だが、これでイジメが消えなかった。むしろ、「イジメは悪い事だ。」と教わった生徒達は、〝荒魂〟が先程の靴に画びょうを入れていた人間をイジメていた過去があったということが発覚したために、その〝荒魂〟は更にクラス全員から苛烈にイジメられるようになっていった。そして、不思

議なことに”荒魂”をイジメている側は担任が言っていたイジメをしているという自覚がないことであった。

それは、何故かと問われれば、イジメをしていた”荒魂”は悪い奴であって、悪い奴は懲らしめないといけないといけないからと、まるで自身が特撮物のヒーローになったかのようにクラス全員が答えるのであった。……これはイジメではなく、先生が、親のように信頼している大人が言っていた「イジメは悪い事だ。」というのを忠実に守り、そして「制裁」や「批判」、「自業自得」、「因果応報」とも言って、”荒魂”に仕立て上げた人間を「荒魂討伐」と言って彼を殴ったり蹴ったりするごっこ遊びをしていたことも優は自身も一緒になって行っていたことを鮮烈に覚えていた。

優がそのイジメに加わった理由は、断ったら断ったで周りの肉細工がうるさいからさっさと終わらせたかったという理由と人を自身の手で可哀想な目に遭わせてやると自分の中にその相手に『情』が湧き、その『情』から『優しさ』が生まれ、自身が理解できなかった『優しさ』が理解できるかもしれないということに興味が湧いただけでしかなかった。そしてイジメが悪いと言っていた者も嘗てはイジメられていた者と一緒になって、その”荒魂”をイジメていたことに不思議だったというのもある。だからこそ優は、その疑問と『優しさ』を得るためにイジメに加わっていた。

そうして、この一連のイジメ騒動から、正義が使う悪という言葉は、病院の入院患者に差し出す流動食のように流動性があるものであり、相手を殴るのに都合の良い道具でしかないということを優は理解したのである。

優くんが望んだセカイ

その後は、あまり記憶の無い母の言っていた『優しさ』を知り、家族の一員となるべく可奈美が見ていた『地獄天使マーベラスちゃん』とかいうアニメでやっていた大切な物が死んで人が悲しむ展開を見た可奈美が「人のために涙を流すマーベラスちゃんは優しいね。」と言ったことから、そこから『優しさ』という物を知れるのかもしれないと考え、同級生が今まで頑張って世話した鶏を殺すことで、みんなが『優しさ』の涙を流し、その『優しさ』の姿を見て、可奈美と死んだ母が言っていた『優しさ』の意味を理解しようとしていた。

……それでも、優は理解できなかった。できなかったが故に、”姉”という関係が付いてないと他の肉細工との違いが分からない可奈美がいつも語りかけてくる母からの『優しさ』が有る子になって欲しいという願いを込めて衛藤　”優”になることで、家族の一員になるべく、その『優しさ』という物を優は求めた。

それ故に、優は『優しさ』の意味を知っていそうな可奈美の後に付いて行った。

「大丈夫？優ちゃん。」

「うん、ゴメンね。……ジャマしかしてない。」

そんな理由で優は可奈美の後に付いて行った。

しかし、母が死んだ葬儀の日、可奈美という肉細工は孤独に泣いていた。誰にも知らせず、可奈美に良く聞かされていた母と剣術の稽古をよくやっていたという庭が見える縁側で一人泣いていた……。

母の葬儀に出席し、周りの人が涙も流すことに不思議だった優は何故可奈美も泣いているのか気になり、可奈美に無表情で聞いてみた。

「ねーちゃ」

声が聴こえたのか、可奈美は返事をしてきた。……だが、無表情であることに良くなかったのかは分からなかったが、何故か怒っていたことに優は疑問であった。何故なら、優は精神科医から異常なまでに良心が理解できない存在なのだから、”自分はお姉ちゃんだから、泣

いている所を見られたくない。”という可奈美の考えが、例え可奈美の口から説明されても、理解できなかったというのが大きかった。

「……うるさい、あっち行って。」

可奈美は向こうへ行ってと言うだけだったのだが、優しさが分からない優はそれが気になって、泣いている可奈美に何故泣いているのか訊こうと思い、近付こうとする。だが、ただ近付くだけでは警戒されるだけだろうということだけはそれとなく理解できた優は、己の立場を利用することを思い付いた。

「ねーちゃ、苦しそう……。」

姉が苦しそうだと言って……。

そう言って近付き、涙の理由と意味を訊こうとした。そうして優は、可奈美の涙の意味を知ることで欠けた心を埋めようとしていた。

「うるさい……とにかく、どっか向こうへ行って!!」

しかし、踏み込み過ぎたのか可奈美を怒らせてしまったと判断した優は、何も言わずにそそくさとその場を後にするのであった。

とはいえ、優はどうしても可奈美の涙の意味と理由が知りたかった。その意味が知れば、母と可奈美が言っていた『優しさ』という意味が理解でき、自分もサイコパスでは無くなり、家族の一員になれるかもしれないという淡い期待があったからである。

そのため、優は可奈美の黒いリボンをくすねて何処かに隠し、可奈美の様子を見ながら黒いリボンを差し出す機会を伺っていた。……しかし、差し出す機会が無かったため、優は映像を映す箱というテレビが流すお涙頂戴物からヒントを得て、傷だらけの泥まみれになって遅く帰るのであった。

そうすれば、お涙頂戴物の展開のように離れ離れになった家族がやっと再会し、涙を流しながら互いに抱き締め合うというものになり、可奈美や母が言う『優しさ』の意味が解るかもしれないと思っていた。

「バカ!何してたのっ!!」

しかし、優の想定とは違い、開口一番に平手打ちをされたことに驚いた。……もしかして自分が黒いリボンをくすねたことがバレたの

だろうかと思い少し慌てながら可奈美に黒いリボンを差し出すのであった。

「……バカ……ばかぁ、そんなことなんかで……。」

すると、可奈美は涙を流しながらそう訴えていたことで、優は自分が黒いリボンをくすねたということに気付いていないことに安堵していた。姉と弟の関係すらも崩れてしまえば、家族の一員になれる可能性が著しく低くなる可能性があるからである。

「でも、……ボクは身体弱いから、こんなことしかできない。」

そう、優はこんなことでしか『優しさ』を手に入れることができなかった。理解できないものを理解しようと努めた。

しかし、思ったような心の動きは見られなかった。

それは、戸籍の関係上は姉となっている可奈美と共に外出したことがあった日のこと。理由は確か……「お外に出ないとダメだよ。」みたいなことを言われたからだったような気がするが、そこらへんは曖昧だった。だが、優はこのとき、可奈美はそれが目的で自分を伴って外出したのではないのだろうことは簡単に推測できた。それは何故かと言うと可奈美は、

《一見、優しいし弟や友達思いの様に見えるが、本質は冷たくて自分本位。》

という部分が見え隠れしているのが、幼い優にも分かっていた。

何故なら、可奈美という自分の姉を名乗ってくる肉細工はいつも自分が知らない母のことを語っていたからだ。

曰く、自分の母は優の名を名付けた理由は〝優しい子〟であって欲しいと願ったからだと……。

こちらは幼い頃に死んだ母のことなど憶えておらず、それが本当なのか事実確認もできないうえに、その〝優しい子〟に必要な要素である〝優しさ〟というものが解らず悩んでいるというのに、しきりにそればかり口うるさく言ってきたのである。

それだけでなく、今は身体が弱いが、何時の日か共に剣術に励もうと言ってきたこと。

こちらは幼い頃に母が死んだことで剣術のことなど一つも知らな

いのに、何をそんなに喜んでいるのか分からなかった。それに、それを聞かされる度に「ああ、僕は母親から何も受け継がれず、父親からも愛情を注がれない〝サイコパス〟の子なんだ。」と嫌でも自覚させられるのだ。

そして、自分の母は強い刀使であったらしく、その強い刀使になると言っていた。

こちらはそれを聞く度に惨めな気持ちになる。それどころか可奈美が自分は『刀使』であることを誇らしげに述べ、優は両親が望んだの優しさすらも受け継ぐことが出来なかった不良品という『サイコパス』なのだと言われている気さえした。

勘が良く、目が聡い可奈美がそんな自分の心の声に気付かない筈が無い。

彼女は恐らく見て見ぬフリをしているのだろう。……何故、見て見ぬフリをするか、それは可奈美が亡くなった母から受け継いだ剣術が無意味ではなかったと証明したかったがために、可奈美は『刀使』であり続けようとした。

……いや、より正確に言えば可奈美は〝お母さんみたいに強い刀使〟になることで、自分は『姉』として真っ当に責務を果たしたのだという証明を得るために、優のような可奈美にとって分かり易い〝庇護下に置かれるべき存在〟が必要だったのだろう。

可奈美が『正義のヒーロー』であるならば、刀使が討伐する荒魂は『悪』であり、僕は庇護下に置かれるべき『市民』か『大義名分』であろうことが、優には容易に推察することができた。

そうすることで、恐らくは若くして命を失った母を救いたかったのだろう。母が死んだことは不幸でなかったとしたかったのだろう。

そう感じた優は、確認するべく可奈美にあることを言うのであった。

「ねえ、可奈ねーちゃん。……僕も美濃関学院に入学して、可奈ねーちゃんの手助けができるかな？」

優にそう言われた可奈美は、確かめられていることにも気付かなかったのか、とても喜んでいた。

同じ道を歩むことを止めることもなく、ただただ喜んで同意していた。危ないから良くないとも、言わずに本当に喜んでいた。

そのために優の心の中は失望感が渦巻いていた。……ああ、この人はそういう人なのだという思いさえも抱いてしまった。

結局は可奈美も優のことを見ているのではなく、その後ろに居るであろう母の幻影を追っているだけなのだということが分かってしまった。自分は可奈美の庇護下に置かれるべき存在なのだと。姉が頑張れる要素でなくてはならないのだと、……だから、優は演じた。

「えっと、ボクは男だから……、刀使になれないから、大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。」

可奈美という強い刀使を目指す剣術好きな少女が望んでいるであろう無垢で、悪意が無さそうで、力も無さそうで刀使とかに助けてもらわないと生きていけない様なか弱くて非力な、そして純粋というよりもバカみたいな弟を演じることにした。

そう演じることで可奈美との間に〝刀使とそれを庇護する弟〟という関係性を持つことで、母からも父からも見放された『サイコパス』の子が家族の一員になれるのであれば、優はその役を喜んで引き受けた。

そうして優は、幼い頃に精神科医から聞かされた『虐待された少女が、何故虐待した親ではなく自分を助けようとした学校の先生を殺したのか?という理由が、自らの存在意義を失いたくなかったから。』ということはこういうことだったのだろうかという疑問も抱きながら――――。

だが、ある日のこと、無害な弟を演じていた優は辛かった。

「優くんって、たまに冷たいよね。」

切欠は、優のクラスメートが言った言葉だった。

優がそう言われた理由は、園芸の花の世話をしていた子が枯れてしまった花に対して責任感に潰れ、泣いていたクラスメートが「私、お花を枯らせちゃって、向いてるのかな?園芸係辞めた方が良いのかな

？」と周りの人間に言っていたので優は、
「そうだね。」
と泣いていたクラスメートに対して言ったことが切欠であった。
それを言われたクラスメートの子はいきなり怒り出し、「冷たい」と優のことを非難し始めるのであった。それを言われた優は、（またか。）と思いながら昔にも同じことを言われていたなと思い出していた。……そう、昔っからである。昔から訳も分からずクラスメートから「冷たい」、「酷い」と言われてきたのである。
向かないと思うことを辞めさせて何がいけないのだろうか？
イジメてきた人に姉が警察の一員でもある刀使だからと言って、権力をチラつかせたりするのが良くないのだろうか？
虫の触覚を取って、同じところをグルグルと回る虫の姿を見て楽しむことが悪いことなのだろうか？
とはいえ、このまま「冷たい」と言われる様なままでは、いつかボロが出て、『サイコパス』だということがバレるのではないかと恐れていた。そうなれば、もう可奈美が言っていた『優しさ』というものは手に入らないだろう。そうなれば〝刀使とそれを庇護する弟〟という関係性が崩れ、もう二度と家族の一員になれないような気がした。優しい無害な弟を演じても、いずれはボロが出る。
故に、こんな簡単に破綻するなら無害な弟を演じるのは辞めて、幼い頃に会った精神科医や本やマンガに書いてある『サイコパス』になろうかとも考えた。……だが、その先にあるのは誰も自らのことを理解してくれない孤独な世界だということは理解できていたが故に、可奈美の言っていた『優しさ』を求めたが、それが得られない可能性が高いことに優は辛かった。
どんなに頑張ってもサイコパスは優しい子になれないのだ。
そんな思いを心の中で抱き続け、公園で虫の解剖やアリの巣の中に水を入れるといった生物の死を感じることで自身の慈しみの心を育むことを目的とした遊びに夢中になっていると、すっかり夕暮れとなり帰るのが遅くなってしまった。
……優しい子になれない自分が辛い。

幼い頃に会った精神科医や父親の反応から、サイコパスは子供が見る童話に出てくる赤ずきんや子ヤギ、子豚を食べようとする〝悪役〟にしかなれないのではないのか？という心の声が、内なる自分の声が木霊していた。

このまま消えてしまいと思えるほどに。

そうした心境と夜景になりつつある道を歩き続けていたら、優はタギツヒメと出逢い、

「刀使のお姉ちゃん……だあれ？」

タギツヒメに斬られてしまう。

その後、優は暗い空間にポツンと居た。

何故此処に居るのか考えていたら、外で遊んでいたときに刀使に斬られた後のことが思い出せなかったため断念する。

そして、可奈美がいないことと知っている人が誰一人いないことに寂しかったが、優は自分を呼ぶ声が聞こえ、誰かいるかも知れないと思い、そちらを向く。

「……えっ、えっとな、我は、我は……。」

「……？」

もじもじとしきりに何か言いたげなタギツヒメがそこにいた。

そこで優は出逢った。

母親とも言える珠鋼から離され、親の愛というものを知らずに生きたタギツヒメ。

幼い頃に両親を殺され、その仇を討つべく戦い続け、親の愛を忘れたジョニー。

貧困から脱するための金銭を得るために親に花を売ることを強要され、汚い親しか知らないミカ。

赤子の時から誘拐され、同情される物乞いにするべく手足を切断され、目を抉られ失明し、暗い世界しか見れない様にされ、親という者

自体が知らないニキータ。
　自身と同じように、親から〝愛情〟を贈られず、何も受け継がれなかったために〝優しさ〟というものが解らない何かが欠けた存在と出逢ったのである。優はそれらを見て、自分は一人ではないということを理解した。自分のように何かが欠けた子がこの地球上に何人も居るのだということが分かったのだ。
「う～ん、……まあ、羨ましかったからかな？タギツヒメがさ、荒魂だから人間とは違うとか言ってたから、だったら荒魂って凄いことなのかなって思っちゃってさ、私達も荒魂になれば周りの人達にいいように扱われることも無くなるかもとか、タギツヒメと同じ荒魂になればタギツヒメも喜ぶかなと思ったから、私も荒魂になろうと思ってさ、タギツヒメに私達と荒魂はどう違うのか尋ねてみたら、……そんなに違ったとこはなかった。」
　そしてミカが、自分達が何故荒魂になりたいかを語ったとき、優も彼等の仲間に入りたい、みんなと同じように荒魂になりたいと強く思ってしまうのであった。
　何故なら、自分は『サイコパス』という怪物として今まで見られていたのだから、最早そんな躊躇など微塵も無かった。……それに、相模湾岸大災厄で何千人をも殺した結果を招いた大荒魂タギツヒメ。
　少年兵として数々の戦いで多くの人を殺したジョニー。
　娼婦としてだけでなく、同じ娼婦仲間と強盗殺人もしていたミカ。
　荒魂になることを望む子供達にそんな一面があることを知った優は、そんな仲間達と肩を並べられるような荒魂になりたいと強く思った。
　そのため、自分も人を殺さなければならないという強い強迫観念みたいなものに囚われ始めていた。
　多分……恐らく初めてだった。心の欠けた彼等に置いてかれることが、たまらなく嫌で嫌で仕方なかった。そう思うだけで優の心は初めて激しく揺れ動いた。彼等の『荒魂になる』という繋がりを欲した。輪の中に入りたかった。一緒に居たかった。……だが、

「あれっ、可奈ねーちゃん?」
　可奈美の声に導かれ、意識を取り戻すことになった。……しかし、
（……どうしよう、僕。）
　自分の中に友達のタギツヒメ達が居るという事実を知り、そして友達のタギツヒメ達を見捨てて、自分だけが生き残ってしまったということに強い後悔の念を抱いた。
（……どうしたら、助けられるんだろう?）
　どうすることもできないことに、暗い表情をする優。そんな表情をする優を見た可奈美はある誓いを立てるのであった。
「ねえ知ってる優ちゃん。お母さんが刀使は人を守って、感謝されて、剣術も学べる、最高だって言ってた。けど、私はこうも思うの、刀使は人を守って、感謝される、〝正義の味方〟なんだって。……だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても〝救って〟みせるよ。」
　その誓いを聞いた優は、昔のことを思い出していた。
『大丈夫だよ!優ちゃんのことは何でも知っているから!!』
　可奈美は既に忘れているが、身体の弱い優を気遣い〝姉〟として振舞おうとして、嘗て言った言葉を優は（おねえちゃんは何でも知っている。）と思い、誓いの言葉をこう解釈するのであった。
（……そっか、可奈ねーちゃんは分かっているんだ、僕の中に助けなきゃいけない友達が居て、僕もヒメちゃんもミカさんもニキータちゃんもジョニーくんも救ってくれるんだ。）
　という言葉であると……。
「……そうなんだ。だったら僕もそんな大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになりたい。」
　優は昔から助けてくれた可奈美の言う事を無条件で信じていた。……何故なら、大人に付き従わねば生きていけないということを知っていたからこそ、物分かりの良い子供を演じたこともそうだが、大切な友達のタギツヒメとミカとニキータとジョニー達全員を救ってくれる、〝大好きでカッコイイお姉ちゃん〟の助けになると思ったから

だ。

そして、可奈美は〝大好きでカッコイイお姉ちゃん〟という優の言葉の意味を知らない。

大切な友達であるタギツヒメとミカとニキータとジョニー達全員を救ってくれる人間であるという意味を。……そして、

（……だったら、身体が弱くて男だから刀使になれない僕にできることは、可奈ねーちゃんの邪魔をする奴は全員倒しちゃえば良いんだ。）

そう思い、胸に刻んでいた。自分にできることはこんなことしか出来ないから、……そして人を殺せば殺すほど皆が目指す〝荒魂〟に近付けると思った。タギツヒメやミカやニキータやジョニーを孤独に追いやらずに済むし、仲間外れにならないと考えながら。

（……だから、大好きな可奈ねーちゃんを護ることができれば、可奈ねーちゃんが強い刀使になれれば、みんなを救ってくれて、可奈ねーちゃんが喜んでくれる。それなら、何人も倒しても何人潰しても悪いことじゃない。）

可奈美が強い刀使になれば、みんなを救ってくれる。その目的を果たせるのなら、例え、夥しい流血と元々人という名の肉細工だった肉塊を作ったとしても、それは悪いことじゃないと、罪ではないと結論付けていた。だからこそ、

（……みんな、力を貸してくれるよね？）

優は語りかけた。そうして、優は契約する。可奈ねーちゃんが強い刀使になれれば、みんなを救ってくれると皆に言ったのである。

それ故に、タギツヒメから龍眼を引き継いだために刀使相手でも戦えた。ニキータから楽しむことを教えてもらったために笑うことができた。ミカからいつも慰めの言葉を言い続けてくれたために辛いことにも耐えられた。ジョニーから銃とナイフの使い方を教えてもらったために邪魔をする者を排除できるようになった。

そうして、ただひたすら進んで行けば、可奈美が辛い事も悲しいこともきっと笑って話す日へと導いてくれる。全ては大好きでカッコイイお姉ちゃんの助けになる、優はそう固く信じ続けていく。それだけでなく、龍眼の能力によって優が人を殺せば殺すほど、優が傷付い

たり、その傷を治すために荒魂化すればするほど可奈美と約束していた”可奈美が強い刀使になる”ことに近付くのだということが分かった。

そうして、ただひたすら進んで行けば、可奈美の邪魔をするという大義名分で殺し続ければ、いつかは人々に災いを齎すと言われてきた”荒魂”となり、タギツヒメ達と肩を並べられる。タギツヒメ達をひとりぼっちにさせることもない。自分も仲間外れにされることもない。

……ひとりぼっちは何よりも辛いことを優は知っているのだから。

だからこそ、優は荒魂であっても、刀使であっても、親衛隊であっても、ＳＴＴ隊員であっても、どこの誰であれ、邪魔をする者は排除する。例え、それで自分が死んだとしても、可奈美が強い刀使になって自分達を救ってくれるだけで充分だったから、可奈美が履行できる約束であるかも考えず、全く疑わず、優はただひたすら進んで行くのみであった……。

……そう思うだけで、やっと『サイコパス』から脱し、家族の一員になれたような気がした。

そして、誰も築けないし、可奈美ですら築けない絆。タギツヒメ達と共に『荒魂になる』という絆を優が持てたことが何よりも嬉しかったし、可奈美には無く、自分だけが持つことができる部分だと思った。

ゆうくんのしあわせ

優は誰であろうとも殺し、やがてはタギツヒメ達がひとりぼっちにならないようにするため、タギツヒメ達と同じ荒魂になろうとしていた。……しかし、

「ねえ、優ちゃん聞いてくれる？」

ある日のこと。

「……あんまり、人を殺しちゃうのはダメだよ。お姉ちゃん悲しむから。約束、約束だよ。」

可奈美が優に人を殺してはならないと言ってきたのである。

そのことに優は不思議であったが、やがて可奈美が強い刀使になるべく自分が斬られる荒魂であるという関係を保つことで、家族の一員にもなれると考えていた優は、可奈美の言う事を聞く弟として振る舞うことにした。

「んっ、分かった。」

……心の中で、ジョニーに人殺しをさせていた大人とか、ニキータやタギツヒメ、ミカといった子供達をいいように使っていた大人達とかは殺してはいけないのだろうか？とか、人々の安寧のために斬っている荒魂とそんな人達はどう違うのとか、そんな可奈美達は人と同じで悪い奴も良い子もいる荒魂を斬りまくっているのに何で人は殺しちゃいけないの？とか、訊きたかったことは沢山有った。

……沢山有ったが、可奈美を疑えば、可奈美が強い刀使になるべく自分が斬られる荒魂であるという関係が崩れ去り、自分が荒魂になれず、孤独になってしまうことを恐れたため、何も聞かずにそう返事をした。

だから、優はＳＴＴ隊員は手足を撃った。人々に災いを齎す荒魂なら、残酷なことするはずだと考えながら……。だが、それを行ったとき、

「おまえ、人を痛めつけてそんなに楽しいか!?おい!!」

ＳＴＴ隊員にそう言われるが、何を言っているのか分からなかった

から、自分の首を掴むＳＴＴ隊員の指を躊躇いもなく撃てた。そうして、傷付いた部分を荒魂化させて、また一歩荒魂に近付いた。

自分が荒魂になるために必要だからこそ、自分が荒魂になるために必要で大切な可奈美の首を締めた夜見を肉の塊でしかないマイケルやシェパードを使って、夜見を気絶するまで殴打し、用が無くなったので雑に投げ捨てた。

……だが、不思議と優の中には高揚感があった。心が揺れ動いたのだ。

（……これが、楽しいってことなんだ。……そうだよね、そりゃ嬉しいよね、大切な人が喜んでくれたら。）

こうすればタギツヒメと同じように荒魂になれる。

こうすれば可奈美を強い刀使にすることができる。

こうすれば自分の世界が、自分の関係性を壊されることがないのだ。

――――良く頑張ったね。――――

――――偉いね。――――

そう可奈美が言っているようにも考えられたから、優は幸せだった。人を殺して荒魂になる理由ができた。

『荒魂化した人はもはや人ではない、』

その言葉が優は嬉しかった。荒魂になることは友達と一緒になれることだから嬉しかった。

舞草の隠れ里が襲撃された際、人であるＳＴＴ隊員をどう殺すか悩んでいた。

もし、自分が人を殺せば可奈美との関係が壊れるような気がしたから、どうやって排除すれば良いのか分からなかった。……しかし、

「〝荒魂〟が〝人を荒魂呼ばわり〟するか！」

それを聞いた瞬間、優はああ、そういう考え方があるかと姫和に感服していた。

西洋の中世ではジャンヌ・ダルクといった刀使のような聖女が魔女として扱われ火あぶりにされ、この国がキリシタンという聖職者を弾圧し処罰したように、今も続く荒魂という悪を倒す刀使を続けるよう

に誰かを荒魂扱いして始末すれば良いのだということが分かった。
嘗て、優のクラスメートが誰かを〝ウンコマン〟にして、イジメの対象にして攻撃したように、悪者にしてしまえばそれで良いのだと理解した。
ボウガンの矢を受ければ荒魂化が進むから喜んだ。
奪った銃と武器で殺せば荒魂に近付けるから喜んだ。
鈍器でＳＴＴ隊員の頭を潰す、死体を銃弾の盾にしたり、ＳＴＴ隊員の首を踏んで骨を折るといった凶行を行えば行うほど、人々に災いを齎す荒魂になれると思った。
……優はそれ故に、襲撃してきたＳＴＴ隊員を殺し続けた。殺し続け、遂には動ける者は居なくなり、そうして優は折神家の本殿で大荒魂と対峙したときも大荒魂をも取り込もうとしたが、失敗した。
自分が大荒魂になって、可奈美が大荒魂になった自分を殺すことができれば、可奈美がいつも語っていた強い刀使になり、自分達を救ってくれると信じたからだ。

……だが、鎌倉での騒動以降の４ヶ月、可奈美は何もしてこなかった。それが不思議だった。荒魂を殺すのが刀使なのに、自分という目の前に居る荒魂を殺さないことが不思議だった。
それ故に、優は考え、考えた先に辿り着いた答えが、
①自分が斬られるに相応しい荒魂ではないからなのかもしれないという答え。
②自分を殺したくないから、強い刀使になるという打算も何も無いというありえない答え。
だった。
だが、優は、その打算も無しに行うというありえない②の答えの可能性が高いということに恐怖を抱き始めた。何故なら、そのありえない方の答えであれば、自分が友達と一緒に荒魂になれない可能性が高いからだ。
優は、それ故に鎌倉での騒動以降も殺し続けた。

ＳＴＴ隊員も、荒魂も、テロリストも、自衛隊の人間も、暴動に参加していた人も、……そして、ソフィアの部下の綾小路武芸学舎の刀使をも荒魂の仕業に見せかけて殺した。殺し続けた。

全ては、自身の中にある『優しさ』という欠けた部分を埋めるために、自分もみんなと同じ人々に災いを齎す『荒魂』になり、そして可奈美が殺すに相応しい『荒魂』を殺すことで強い刀使になってもらうために……三千人以上を殺したタギツヒメと並ぶ大荒魂になるために人を殺し続けた。壊し続けた。

「みんなと一緒が良いな。」

タギツヒメがひとりぼっちで悩むことが無いように殺し続けた。

……自分はこの社会から『サイコパス』という怪物の烙印を押され、排斥されたのだから何の後悔もなかった。むしろ、荒魂を殺しても無罪になるのに、人を殺したら罪に問われる世界で『サイコパス』という怪物にされたのだから、追放された方が幸せとすら思えた。

むしろ、タギツヒメやジョニー、ミカやニキータと結芽が居る荒魂の世界の方がとても澄んでいて綺麗だった。美しかった。そこにずっと居たかった。……だから荒魂を悪と決めつける社会が嫌いだった。どうすることもできなかった自分も嫌いだった。

だけど、そんな考えを可奈美や姫和が赦さないということを大荒魂を取り込んだことによって強くなった龍眼の力で段々と解かって行った。

そして、可奈美と姫和は自分を苦しめる世界から解き放ってくれる存在ではないということに気付き始めた。

だから優は、可奈美と姫和が自分を苦しめる世界から解き放ってくれる存在に変えようとした。

鎌倉での紫に取り憑いた大荒魂との決戦の際に自身の身体を荒魂に侵食させたことが可奈美と姫和に知られたとき、可奈美と姫和は泣いていた。理由が分からないが泣いていた。

そして優は、涙を流す可奈美と姫和の姿を見たとき、色んなものを犠牲にしながらも自分のために戦ってくれる可奈美と姫和の姿を龍眼を通して視ることができた。……それを見たとき、優の心に何かが

芽生えていた。
「ああ、そっか。……これが『優しさ』なんだ。」
何かを捧げることが『優しさ』ということが理解できた優は、その『優しさ』を理解したいがために可奈美と姫和が自分のために尽くす姿をもっと見ることで理解したいというふうに思うようになった。
「……それと、可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんが荒魂との戦いで無茶して、まともに歩けないぐらいに大怪我して、僕に看病されることになったら、どう思ってくれるかな?僕を憐れむような、それでいて罪悪感に苛まれるような瞳で僕を見てくれるかな?」
それ故に、優は自ら進んで自分の身体を荒魂に侵食させた。その姿を見た可奈美と姫和が自分のために必死で戦い、そして荒魂との戦いで大怪我をし、身体が動かなくなったとしても自分が可奈美と姫和を甲斐甲斐しく世話をして、可奈美と姫和が自分を助けられなかったという後悔に涙し、悔やみ、そして自分のことを可哀想に見てくれることを想像した。
誰かのために尽くすことの意味を理解すれば『優しさ』というものが解るようになるような気がしたから、可奈美と姫和を必死に戦わせた。例え、二人が刀使ができない程の大怪我をしても、自分が甲斐甲斐しく世話をすることで『優しさ』というものが解るような気がしたから。
「……完全に荒魂になったら、可奈ねーちゃんと姫和おねーちゃんは僕に同情してくれなくなるから、今はまだ中途半端だけど、殆ど荒魂となった姿のままになっておこう。」
まるで、自傷跡を見せて同情を煽るミュンヒハウゼン症候群の人間のように、優は荒魂でも人間でもない姿のままでいることを決意した。
「……だって、可奈ねーちゃんはいつも言ってたもんね。”強い刀使”になりたいって。」
そうして自分が苦しめば苦しむほどに可奈美と姫和は自分のために今までよりも必死になって戦うということに喜んだ。
そんなことを口ずさみながら、優は可奈美と姫和との間に殺される

側と殺す側という変えようのない関係性になったことに喜んでいた。

しかし、そんな喜びは束の間でしかなかった。

姫和に舌を入れる接吻を受けたからだ。……優にとってその行為は大人がするものであった。優にとってそんな行為をする大人はミカを散々苦しめていた黒い欲望を持つ悪魔のような大人がする行為であった。

そんな思いを抱く様になったのは、優がタギツヒメと融合した際に一緒に居たミカという路地裏の角で〝花〟を売っていた少女だった荒魂の記憶も受け継いだからである。そして、ジョニーもニキータもそんな黒い欲望を持つ悪魔のような大人の犠牲者である。姫和も可奈美もそんな黒い欲望を持つ悪魔のような大人のように思えたのである。

故に、優は理解した。……刀使（こども）にも、タギツヒメやジョニー、ニキータとミカと結芽といった子供を苦しめてきた黒い欲望を持つ悪魔のような大人のような奴が居るのだと。

身体に這いずり回るミミズのような舌――――。人間の言葉を喋り、人間の姿をして、欲望をぶつけてくる悪魔――――。他の子供達も同様な目に遭わされているという現実――――。

姫和がそういったことをする大人と同じように見えたのだ。……それだけでなく、可奈美も自分を恐れて会わないようにしてきていることも気付いてしまった。

……それ故に、優は可奈美が自分達を救う存在ではないことにタギツヒメ達が気付くことを恐れた。タギツヒメ達に『嘘吐き』と言われたくなかった。可奈美との関係が壊れることで、タギツヒメ達との関係も壊したくなかった。

それ故に、夜見の中に有るノロすらも吸収すべく戦った。辛くなりたくなかったから、人を痛めつけて心をやすらぎたかった。それ故に、自身の身体を更に荒魂に侵食させた。脳も捧げた。

そうして、丹沢山に現れた荒魂も夜見も取り込み、更に荒魂化を加速させた。……そうすることで夜見と結芽が仲直りした世界を見る

ことができた。それを見たことで、周りの〝人間〟という名の肉細工の塊が言う荒魂の居ない世界が清浄であり、正しいことだとは思わなかった。

……それ故に、紫に言われたことに歓喜した。

「……もし、できそうにないなら私に言え。私と共に隠世の果てに行こう。それで全てを終わらせることができる。」

自分が隠世の果てへと行けば、可奈美が自分達を救えない存在であるということをタギツヒメ達に覆い隠せることと、自分がタギツヒメ達に『嘘吐き』と言われることも無くなると歓喜した。

……そのうえ、この気分のままで隠世の果てまで行けば、ずっと隠していた昔から悩んでいた欠けた心が埋まり、満たされる様な気さえしたし、タギツヒメ達のことを穢れた存在だと罵る穢い大人が支配する世界から解放されると思った。

こんな穢い世界から一秒でも飛び出したかった。

だからこそ、優は簡単に、何の戸惑いもなく、隠世の果てへ行こうと答えることができた。

「今の優ちゃん、強い？」

だが、可奈美が優に対してそう言ったとき、歓喜した。……これは、剣術の手合わせを所望する時の声だということが分かったからである。

エレンや薫といった周りの人間は可奈美の手合わせを所望したことを咎めるが、優は分からなかった。

手合わせを受け、自分が斬り殺されることで可奈美が強い刀使になって自分達を救ってくれればそれで良いし、もし自分達を救うことができなければ可奈美を嘘吐きと言って非難すれば自分に咎は来ないのだから、受けない理由が無かった。

それ故に、優は可奈美との手合わせを受けた。

……だが、可奈美との手合わせは叶わなかった。

何故なら、荒魂の侵食に優が耐えられなくなったから点滴で栄養補給するしかないこと、歩くこともままならないこと、記憶を失ったことを、周りの反応から察することができた優は、悲しんだ……。

「……。」

……歩くことも、荒魂になることも、可奈美に斬られる弟であることもできなくなったどころか、タギツヒメ達の記憶をも失うのではないかと恐れたのだから……。

病院のベッドで横たわるだけの日常、身体の激痛に苛まれるしかない身体。そんなことを考えながら、姫和がくれた線香花火を見て思った。自分は最後の力を振り絞るかのように一際大きな火花を散らすと、それを最後に消える線香花火のような終わり方を迎えるのではないかと……。

そう考えたとき、ある光景が目に浮かんだ。

自分が誰かに殺される前にタギツヒメを外に出せば、タギツヒメがみんなと一緒に居られる本当のネバーランドへ誘ってくれると。

その光景が見えたから、タギツヒメに自分が見た光景を話して外に出した。タギツヒメがくれた力だから信じれた……。

そう考え、タギツヒメを外に出した。……そして、維新派に捕まった。

そうして、自分が死ぬことでジョニー達も死ぬが、自分が言った『可奈美が強い刀使になったらみんな救われる。』という言葉が嘘にならなくなる。そうすることで、自分は友人のジョニー達から〝嘘吐き〟と言われなくなる。責められないで済む。それに、喜んだ。

「……まあ、……せいぜい……頑張ってよ。……強い者に縋った……悪者ごっこ……をさ。」

優の言葉を聞き、怒りで我を忘れたソフィアだった少女は優の首を絞め続けていた。

「早く……早く死んでよ……!!」

早く死ねと言われた優は、死について考え始めた。今まで自分が殺

した者達のことを考えた。
　綾小路の刀使を殺したこと国会前で暴動を起こしていた人間も殺したこと江仁屋離島での荒魂化した自衛隊員も殺したことイスラム過激派も殺したことＳＴＴ隊員も殺したこと小学校の庭で飼っていた鶏も殺したこと……そして、幼い時に蝉を殺したときのことも現在から過去の順に思い出していった。そうして、殺した蝉（せみ）が蟻（アリ）に喰われていく姿を見て理解した。
　……この死んだ蝉こそが本当の『優しさ』を体現した姿なのだと。
　この死んだ蝉の姿になれば、もう母と姉が望んだ姿になることを苦しむことなく、性といった黒い欲望に晒されることなく、タギツヒメみたいな大荒魂になる必要もなく、ただ大きな身体を持つ獣や小さな命の虫に自らの屍肉を捧げるかのように誰かに自分を捧げ続けるのだ。
　自分という者が死んだことで、【自らの末路】という完成品を見せれば、可奈美は強い刀使になることを努力してくれるだろう。姫和は自分達のために努力してくれるだろう。タギツヒメは自分達をネバーランドへ導いてくれるだろう。……誰かに自分を捧げる。これこそが本当の『優しさ』なのだ。
　そうすることで、可奈美も姫和もタギツヒメも僕達のことを忘れないのだから……。
「……ふふ……ふふふふふ。」
　そう考えるだけで、もうそろそろ命が消えるというのに笑みさえ浮かべる自分と今も生き続けなければならないソフィアと名乗る少女と比べたら自分はどれほど恵まれているのであろうか？……そんな考えが過ったがために、優は何かが充たされるような気がした。
「クソ、クソ、クソ!!何が可笑しい!!!!」
　怒り狂った少女の手は、優の首を更に力を籠めて締め続けていた。
「……だって、……人を殺すぐらい……誰でも……できるよね？……そんなことぐらいで……最強の荒魂になれると思ってるのが……滑稽過ぎてさ……笑っちゃうよ。」
　優は戦いを神聖視し縋る少女に対して皮肉気に言うと、少女は憧れ

た存在に自分の全てを否定されたことに裏切られたと感じ、この子は、人を殺すことにも戦うことにも何の感情も抱かないのだとやっと気づいた。人が何人死のうがどうでもいいのだ。

戦いを神聖視することでソフィアになることができる少女はその事実に激怒し、何事も力で捻じ伏せることで自分と”同類”だと思い憧れていた優の言葉を今は力で遮ろうと、更に自身の手の力を籠めて、優の首を締め続ける。

それだけでなく、タキリヒメを殺すのではなく、優を殺せばよかったのでは?という自身の中に芽生え始めた迷いを断ち切るかのように少女は優の首を更に強く締める。

「うるさい……うるさいうるさい黙れぇっ!!!」

そうして、遂には優の首が折れたと同時に優の口と身体は動かなくなり、憎かった存在の頬に水滴がぽたりと落ちていた。

その頬に付いた水が自分の目から落ちたものだと気付くと少女は、覚悟を決めなくてはならなかった。

「……それでも、狼の時代を……獣の世界を築いてみせる。」

少女ではなく、”ソフィア”として在り続けることを……。

そして優とソフィアが居た場所に残ったのは、

最初は欠けた心を埋めるべく現世に彷徨い続けたが、自らの死を以って全てが充たされたまま逝った9歳の幼子。

最初は復讐を清算すべく現世に彷徨い続けたが、尚も自らの理想を打ち立てるために現世を彷徨い続ける少女。

生者が苦しみ、死者が祝福される世界だけであった……。

――――ずっと、辛かった。

僕が『サイコパス』と言われ、化け物のように見られたことが、そ

れをずっと隠し続けていたことも。でも、そうしなければ僕のことを誰も相手にしてくれないから……隠し続けた。

だって、そうしないと自分の立ち位置が無いから、誰にも打ち明けることなんて出来なかった。

「それに、お医者さんが言っていたでしょ？大きくなったら身体が強くなれるから、強くなったら剣術を一緒に頑張ろう？ね？」

それだけでなく、いつも可奈美が言っていた言葉も重荷だった……。自分だけ親から受け継いだ剣術を自慢することが不快だったから。

お前は問題を起こし過ぎている。

父の言葉も煩わしかった。何が問題なのか分からなかったから。

「……あのね、僕の名前は衛藤　優っていうの。優しい子になって欲しいから『優』っていう名前にしたって可奈ねーちゃんから聞いたの。」

母の言葉も煩わしかった。

……僕はどう足掻いても衛藤家という剣術一家の一員にはなれない。

何故なら『優しさ』が分からなかったから、『剣を通しての会話』も分からなかったから、僕にとって可奈ねーちゃんが言う剣は人間という名前を付けられた肉細工を斬るための道具としか思えなかったから。

なのに、父と母と可奈ねーちゃんは努力すれば治るという言葉だけしか与えてくれなかった。それどころか、剣術に興味など無い僕にいつも剣術を押し付けていた。

だから、僕はこの刀使ばかり優遇する世界でひとりぼっちだと思った。自分のことを理解してくれる人は居ないと半ば諦めかけていた。

……けど、何処か心が欠けていたヒメちゃんに出会って、それだけじゃなくジョニーくんやミカさん、ニキータちゃんというヒメちゃんみたいな荒魂になろうとする人達が居た。そのヒメちゃん達の姿を見た時、僕は初めて思った。

この世界こそが唯一で全てだと。僕みたいな心が欠けた人が居ら

れる場所なんだと。
だから僕は、刀使が崇高でヒメちゃんや僕達を怪物扱いして、爪弾きにするこの世界が嫌いだった。荒魂や怪物と呼ばれるヒメちゃん達が穏やかに過ごせるネバーランドみたいな世界でみんなと一緒に過ごしたかった。……けれど、この広いようで狭い世界にそんな場所などなかった。
……それだけじゃなく、可奈ねーちゃんも姫和おねーちゃんも僕が追い求めていた物を否定する存在であり、ヒメちゃんも心が欠けている僕と違って段々と心が充たされていった。……それが辛かった。また、ひとりぼっちになるような気がしたから、だから僕は決意した。
死は救済だということ、それは自分もそうなのだと……。
「……だから、死んだ先で待ってるね。」
こうして、僕達は死んだ先の世界で心が欠けた荒魂でもみんなが一緒に穏やかで過ごせる世界へと旅立った。
こうすれば、誰も僕達を穢すこともできない。誰も僕達が願った『荒魂になる。』という想いを壊されることも壊すこともできない。ジョニーくん達と永遠に別れることも友達という関係性も無くなることも変わることもない。
それは、きっと刀使の可奈ねーちゃんですら手に入らない物。それを僕だけが手に入れられる僕だけの物。
それが、それこそが、
ぼくのしあわせ。

御刀を向ける先

「……穂積、コレをイチ子ちゃんに捧げろ。」
「よろしいので？」
「もう不要だ。」
ソフィアにそう命ぜられた穂積は、優の遺体を引きずりながら、無表情でソフィアの様子を見ていた。
「……。」
穂積は、ソフィアが優に対して失望し、感情的となり殺してしまった理由が何となく推察できた。
恐らくソフィアは、自由気ままに暴力を振るい、他者のためではなく好き勝手に殺す人間を欲していたのだ。それこそが暴力を是とする〝獣の世界〟の象徴として相応しい。故に、この物言わぬ死体となった優に己の全てをも捧げようとした。
……けれど、優はそうではなかった。他者のために戦っていたというソフィアの理想とはかけ離れていたから殺したのだと。そう理解できた。

しかし、ソフィアのことをそう推察し、ソフィア側に付いた穂積は、元は何の変哲も無く、そして特徴の無い娘であった。
家庭も両親が居て、愛情を受けて育った。
そして、刀使になったのも御刀にたまたま選ばれたからであると同時に先々のことを考え、福利厚生が充実している国家公務員であるために、親に勧められたからなった程度でしかなかった。
そのため、穂積には刀使の使命や剣術といったものに興味が無かった。剣術に対しても何の情熱も湧かなかった。
……だが、不満はあった。

ある人は言う。この国は平和だと。
またある人は言う。この国は武器を持つことは許されざることだ

と。

そんな中で、荒魂討伐任務に出向いていた穂積はチームとして組んでいた刀使の一人が重傷を負う姿を目の当たりにする。

……血が一杯出ていた。止めようと思った。傷口から溢れ出てくる赤い水を手で防ごうとしても力が及ばないせいで……手の隙間から次から次へと赤い水が漏れ出ていた。そのたびに重傷を負っていた刀使は「痛い」とか自分が苦しんでいるというサインを出していたり、「お母さんお父さん」とか家族のことだったり、あるいは「お兄ちゃんお姉ちゃん」とか親愛の情を持った人か誰か恋人の名前を叫んでいたと思う。

……その重傷を負った刀使と私は幼馴染の間の関係でもなければ、親友という間柄でもないし、同性愛という関係でもなかった。……ただ動物的本能に従って、彼女を助けたかったからそう動いたのだと思う。それに、そうしなければ多分この重傷を負った刀使の姿は未来の自分かもしれないのだからと思ったのか、みんな負傷した刀使の娘を助けようとした。

……けど、私の思い出の中にある重傷を負った刀使は片足を失ったことで刀使を辞めなければならなかった者も居たし、居なくなった者も居た。それを知った後も私達は必死で戦い続けた。深い傷を負って刀使を辞めた彼女達のために戦い続けなければならなかった。……仲間の仇も討ちたかった。憎い敵を何倍にもしてやり返したかった。

……ただそれだけだった。

そんな最中でも、ある人は言っていた。……この国は平和だと。

またある人は言う。この国は武器を持つことは許されざることだと。

あるいは争いは良くないことであり、話し合いで解決すべきだと。

……そう言われた私は、私達刀使が居る世界の外には、変わった別

の世界が在るのだと理解した。
もしも、外の世界の言うことが正しいのであれば、私達刀使は平和を害するとでも言いたいのだろうか？それとも、自分達の平和のために黙って荒魂に喰われろとでも言いたいのだろうか？
そう思ったとき、私は私が戦っている戦場の外に居る人達は違う世界に住む人達なのだと思った。……見るものも考え方も感じ方も生き方も全てが変わっているのだ。きっと道理すら、荒魂がどんなものなのかすら理解できない人……いや、人であるかどうかさら分からない人の姿をした生物しか居ない世界なのだと。……そう思った。

それでも外の人間もどきしか居ない世界に居る危機感が無くなった……いや、平和ボケしたと言った方が分かり易いだろう。そんな平和ボケした狂人共は私達をぞんざいに見て、そして好き勝手に言っていた。……この国は平和だと。武器を持つことはいけないと。
またある人は言う。この国は武器を持つことは許されざることだと。
あるいは争いは良くないことであり、話し合いで解決すべきだと。
……それだけでなく、子供が戦うものではないとも言われた。
ならば、成人前の少女しか選ばない御刀は何なのだろうか？子供が荒魂と殺し合いをさせる御刀に対して彼等は、彼女等は何か思うことはないのだろうか？御刀がそう望んでいると、もしそうなら、神様という奴は少女に御刀という人も斬れる凶器を持たせて、スマホのゲームで遊ぶ感覚で私が荒魂と斬り合っているところを見て、狂喜しているのだろうか？
……そう思うだけで、誰も私達のことを理解してくれる人が居ないことにイライラした。外の世界に居る奴等のこちらを見る目が気持ち悪かった。
……それ故に私は思った。私達、刀使は戦うことが全てだ。……なのに、この国はそのことに目を背け続ける。それどころか、外の世界の平和ボケした世界の大人も子供も自分達の友人が死んだことなどお構いなしに「平和って良いな。」とか言って私達を否定していた。

……その言葉を聞いたとき、誰も私達のことなど見ていないのだと気付かされた。

……そう考えたとき、何も感じなくなった。何も味がしない。何も見えない。全てが虚しく、全てが空虚に思えた。そして、次に平和ボケした狂人……いや、聖人君子もどき達を見たとき空虚な気分となった。

同じ星に住む人間とは思えなかった。

同じ星に住む生物とは思えなかった。

そんな心境にある私が結月学長のスパイを辞め、ソフィアの同志として付いて行った理由は至極単純な物だった。

ある日、ソフィアと共に荒魂討伐を行ったときのこと。

彼女、ソフィアが綾小路の刀使を殺したときに私は彼女に惹かれた。初めて心がゾクゾクとし、心がドキドキと動悸がしたことが実感できた。

多分、人が死んだことに久しぶりに実感できたことに喜んだのか？それとも何一つ歪んでいない真実の戦いに惹かれたのかは知らない。

ただ言えることは、ソフィアが刀使を殺している場所に惹かれている自分が居ることを実感できたこと、そして唯一この世界で生を実感できたことだろう。

そして、そんなソフィアの同志として活動していく中で知ったのが、冥加刀使という体内に荒魂を宿した刀使が居ること、折神家と柊家という刀使の中では特別荒魂と近しい者の家系であり、荒魂を身体の中に入れれば乗算の力を得ることができたということ。

……ハハ、何だそれは？荒魂を討伐することを使命とする刀剣類管理局の局長が荒魂と近しい？

何だそれは？私たちは敵だと信じ込まされていた荒魂に近い人間を頭（トップ）にしていたということなのか？それとも共食いしていたというのだろうか？

……ふざけた話だ。自分達は何のために血を流したのだろうか？何のためにコイツラは大言壮語を吐いていたのだろう？

そう考えたとき、人と荒魂の違いが分からなくなった。信じていた最後の何かが崩れ去る音がした。狂っているのは刀使の居る世界なのか外の世界なのかと悩んだ。……いや、或いは両方とも狂っているからこそ、こうなったのではないかと考えたことがある。

……だからこそ、刀使も荒魂も平和も戦場も目に見える物が歪んで見えた。信じれなくなった。刀使の使命だとか戦う理由だとか全てどうでもよくなった……。刀使も荒魂と一緒で嫌いになった。全てが紛い物に見えた。

それ故に、私をソフィアの内情を調べるスパイにした結月学長を見限り、ソフィアの同志となった。

だからこそ私はソフィアの言う〝獣の世界〟という考え方、強い者が世界を統べるような考え方に強く共感した。……そうか、荒魂と人間を同じ動物として扱い、互いに戦わせることで自分が何者なのかを再認識させるのか。

そうすれば、平和ボケした狂人……いや、聖人君子もどきを畜生に堕とし、それを理解させてやることができれば、どれほど愉快であろうか、痛快であろうかと考えただけで私は歓喜した。

……力によって、暴力によって全てを決める。

それこそが人間が在るべき姿なのだ。

この国は、いやこの世界は何時だってそうやって歪んだ社会を変えてきた。……戦争とは、闘争とは一つの革命でもあるのだ。私達人間にとって生きるうえで必要な潤滑油なのだ。

……乱。戦国。革命。維新。大災厄。

何れも言葉を変えているが、全て狂った社会を破壊し、その狂った社会を全て変革させ、以前の社会よりもより良い社会を形成していったのは〝戦争〟だった。

刀の一振りで幕府から明治政府に変わった。

銃弾の一発で世界大戦になって、富んだ国が居た。

ただそれだけ、……それだけを全ての人間に認めさせたかった。
お前たちは着飾った聖人君子になれない。強い者が弱い者を駆逐する野生の獣のように、荒魂が他の荒魂を襲って強い荒魂になるように、お前たちも荒魂と野生の獣と同じ獣なのだと理解させたかった。
もうお前たちに「平和って良いな。」という狂言を口に出させなくする。

そう思った穂積は、未だに旧態依然とした考え方を持つ結月学長を見限ると、荒魂と人間が戦い合う〝獣の世界〟を創るという革新的な考えの方を持つソフィア達の方が魅力的に感じ、ソフィア達の同志となり、隠世の門を開けることに賛同した。

――その一方、特別遊撃隊の一部隊の指揮を任された舞衣は沙耶香とエレン、薫、内里　歩や田辺　美弥等と共に首都上空の裂けた空から黒い雪となって振って来た荒魂の対処のために輸送防護車に乗って、ドローンで発見した脅威度の高い荒魂が出現した区域へと向かっていた。
何故、オスプレイやＡＷ１３９ヘリコプターではなく輸送防護車なのかと言うと、高層ビルが立ち並ぶ東京都でオスプレイやＡＷ１３９といった航空機を着陸させる場所が限られていたということもそうだが、飛行能力を有する荒魂も多く出現していたことでモガディシュの戦闘でのＭＨ―６０ブラックホーク、レッド・ウィング作戦のＣＨ―４７ヘリコプターのように墜落する恐れがあったために出撃させることができなかった。
だが、そんなオスプレイやＡＷ１３９ヘリコプターに反して輸送防護車は、空を飛ばないから墜落の恐れが無いだけでなく、地雷や即席

爆弾（ＩＥＤ）に対する耐爆性、更には７．６２ｍｍ弾に対する耐弾性を持つこと。……そして、車幅が２．５ｍ以下であるため公道走行時に許可申請が不要なこと、右ハンドルであるために日本で運用しやすいという扱いやすさという利便性だけでなく、オスプレイやＡＷ１３９ヘリコプターといった航空機は墜落すれば乗員の犠牲が出ることは避けられないが、輸送防護車が破壊、もしくは移動不可となっても、乗員が生きていれば防衛線を突破しようとする荒魂の行動を疎外するバリケード代わりにもなるのも強かった。

それだけでなく、自衛隊が邦人の陸上輸送を可能にするべく購入された経緯を持つ輸送防護車は、その名と経緯通りに逃げ遅れた民間人や負傷した刀使、ＳＴＴ隊員並びに自衛隊員の救出にとても使えたため、当初真希等が構想していた刀使といった人員を航空輸送で素早く送るという即応性といった面で活躍を期待されていたオスプレイよりも全く期待されていなかった輸送防護車がＳＴＴ隊員等に重宝されることになった。（なお、このＳＴＴ隊員達も刀使達も、真希は新型Ｓ装備とオスプレイとスカイレンジャーを特に重要視しており、それらを何とか一つでも調達するために輸送防護車も要求したということを知らない。……そして、輸送防護車が全く期待されることなく導入されたという内情を知らないＳＴＴ隊員と刀使等はその後、輸送防護車の導入を決めた真希と寿々花等を称賛し、オスプレイよりも輸送防護車の導入を熱望されたため、真希と寿々花が構想していた即応性の高い部隊の創設から遠退いた編制となり、部隊配置と部隊の移動に四苦八苦することになるのだが、それはまた別のお話。）

ただし、そんな完璧に見える輸送防護車も弱点が無いというわけではない。

輸送防護車に装備できる自前の武器が5．５６ｍｍ機関銃しか無いため、5．５６㎜小銃弾は身体の小さい荒魂に対してなら姿勢を崩すといった程度には役立つが、狗型といった中規模な荒魂に対しては火力不足感が否めなかったのである。そのため、そういった火力不足感をカバーすべく、５０口径の重機関銃を装備できる自衛隊の９６式装輪装甲車や１６式機動戦闘車または１０式戦車を随伴させていた。

そのため、舞衣等が乗る特別祭祀機動隊の所属車両として茶色に塗装された輸送防護車は自衛隊所属を表す濃緑色と茶色で塗装された16式機動戦闘車と96式装輪装甲車等と共に行動していたため、一つの車輌部隊となっていた。……それだけでなく、その車輌部隊を戦争を経験した者が見れば、戦時中なのかと思えるほどの仰々しさを見せていたことに誰も気付きはしなかった。

そんな輸送防護車の中で舞衣は、可奈美が居たテントでズタズタにされた……恐らくは可奈美自身が斬り刻んだ刀使の制服と共に見つけた舞衣当ての手紙を見ていた。

ごめんね舞衣ちゃん。ごめん。
重荷を背負ってくれると言ってくれたのに、その想いを踏み躙る行為をして、
お母さんが教えてくれた剣で誰かを守る存在になりたかったから刀使になった。
だから今まで荒魂を斬った。荒魂化した人も命令で人々を守るのに必要だからと必死に自分に言い聞かせて斬った。
けど、優ちゃんを殺したソフィアの存在が私の全てを変えた。
あの人は荒魂を身体に入れているのに、他国の交渉材料に使いたいからというそんな理由で荒魂化した人とならない。それどころか、人を殺したというのに裁かれもしない。
私はそう言われたとき、ああ、刀使は国家公務員なんだと、政府の都合の良い剣でしかないんだと自覚させられた。……そう理解したとき、刀使は人を守る存在でもなければ、優ちゃんと約束した正義の味方にもなれないのだと分かった。
だから、私は……私が刀使である限りはきっと、あの女に手出しができない。ソフィアが戦っている場所へ行くことができない。だから、国家公務員の刀使である必要が無くなった。そうすることでしか私はソフィアを討伐することができない。お母さんが刀使として戦っ

た意味が穢される。それだけは守らなきゃいけない。
舞衣ちゃん。それでも舞衣ちゃんだけは間違った道を行く私みたいにならないで、
私は今まで色んなものを斬ってきたから、それに目を背けることがないように、私はソフィアという荒魂を斬ることで私の意地を通そうとしていただけのことだから……だから舞衣ちゃんは私と同じ誤った道に行こうとしないで。
だから、私がやろうとしていることは間違っているのは分かっている。けれど、その間違った道に進むことでしか今までの私に、荒魂化した人を斬った私に折り合いがつけられないし、きっと後悔する。
許して欲しい。とは言わないよ。……もうそんなことを言う資格が私には無いから。
次に私と舞衣ちゃんが出会うときはおそらくなんだけど……舞衣ちゃんは私を裁く立場に居ると思う。それでも舞衣ちゃんは、そのままで居て欲しい。私を容赦なく裁いて欲しい。
だから舞衣ちゃんは、私のように信念を曲げることなく、ずっと……ずっと誰かを守る刀使で居続けて欲しい。私が出来なかったことをやり続けて欲しい。それが親友だった私の舞衣ちゃんへの最後の願い。……どうか、美炎ちゃんだけでなく、美濃関のみんなもエレンちゃんや薫ちゃんにもよろしくと伝えて。
最後に、こんな私でも親友で居てくれてありがとう。舞衣ちゃんと一緒に二年生に進級できたり、全国大会に行けてよかった。じゃあ、家族を大切に。

その手紙の内容は、今まで斬った人達のためにも敵を打ち倒すという決意や誤った道を選んだことで親友達を裏切ってしまったことに対する懺悔。という内容で埋め尽くされ、そのことについてずっと綴られていた。
だが、舞衣はその内容を読み、涙を流しながら心の中で呟いた。
（……馬鹿。）

馬鹿としか思えなかった。
……けれど、その思いとは裏腹に込み上げてくる感情は、この手紙と同じく後悔と懺悔であった。
もう少し、彼女の重荷を背負うことができなかったのだろうか？
もう少し、彼女の悩みを理解できればこうならなかったのではないか？
もう少し、彼女のことを感じ取り、見てやることができれば、止めれたのではないのだろうか？
舞衣はそればかりを考え、可奈美に対して罪悪感も抱いていた。そして、そんな可奈美を止めることができない自分自身にも……。だが、挫けてばかりもいられなかった。
理由は、紫が先の維新派との戦いにおいて、ボウガンの矢を受けたことにより、集中治療が必要となり、後方の病院へと送られたために今は戦線に居ないこと、そして孝子や聡美、真希といったベテランの刀使も各方面から出現した荒魂の対処のために出動していたことから、戦力となるのはベテランの域に達するエレンと薫、そして沙耶香の三名だけの状態なうえ、歩と美弥の面倒も見なければならない状況で各方面に現れる荒魂を対処しなくてはならなかった。
それ故に、舞衣は自分が後輩をちゃんと家に帰られるようにしなければと、気を引き締め直す。
……だが、そんなときにも折紙家支給の携帯端末から指令が届くのであった。
（……!?）
しかし、舞衣はその指令に驚き、二度見をするのであった。
何故なら、その指令の内容が『指示を無視し、イチキシマヒメの元に向かうタギツヒメを先行する姫和隊員と共に討伐せよ。』と記載されているからである。
「……何で!?タギツヒメを？」
舞衣はその司令内容に驚き、その決定を下した上層部を心の中で非難していた。
まさか、上層部は本当にたったそれだけのことでタギツヒメが造反

したとでも思っているのだろうか?とすら考える程に。

……しかし、時間と共に舞衣は冷静になっていき、そんな司令を出した刀剣類管理局……いや、寿々花と真希、そして刀剣類管理局と政府上層部の思惑を理解しつつあった。

彼女等、いや、刀剣類管理局と政府上層部は恐らくイチキシマヒメとタギツヒメを同時に始末したいのだろう。この二人はノロのアンプルだけでなく、二十年前の大災厄が米国のタンカーの事故から端を発したものであることを知っている。その事実を知る二人を始末することで闇に葬り、今後生ずるであろう中露の対立に最大の同盟国である米国と共に対処していきたいという思惑があるのだろう。

……そのためには、日米関係にヒビが入ることになるであろう二十年前の大災厄の真実を表沙汰にしないことで、日米関係が破綻することにならないようにする必要があった。そのためには、イチキシマヒメを取り込んだタギツヒメ、もしくはタギツヒメを取り込んだイチキシマヒメを姫和の一つの太刀で始末しようとしているのだろう。

表向きは、タギツヒメはこの戦闘でイチキシマヒメに取り込まれて消失したということにして。

それが彼等の目的であることは分かった。……だが、タギツヒメを殺したといってこの状況が良くならないのは誰の目に見ても明らかである。いや、むしろ薫の傍に居るねねの様にタギツヒメはもう荒魂でも何でもないのだ。……なのに、誰が敵で誰が味方なのか分からないのだろうか?

御刀を持つ意味

舞衣がタギツヒメ討伐の指令に疑問を抱いたのは、タギツヒメを信用しただけでなく、真希に寿々花が投降した維新派の刀使を過激派……所謂テロリストの仕業というふうに偽装して始末したことを報告したときのことであった。

「……ああ、そのことか。」

しかし、舞衣の報告を聞いた真希は、何事も無いかのような声色で、妙に落ち着き払った態度で返していた。それに違和感を感じた舞衣は、重ねて真希に寿々花の罪状を話すのであった。

「い、……いや、特務警備隊第二席の寿々花隊員の行いは、真希隊員の〝刀使が刀使を殺す事態を避けろ〟という指示に反していると思われるのですが？」

そう指摘して……。しかし、

「……そうだな。確かに僕は〝刀使が刀使を殺す事態を避けろ〟と言った。だが、僕は特務警備隊の職務上、朱音様の宸襟を悩ますのは得策ではないからこそ〝刀使が刀使を殺すことが明るみになる様なことは避けろ。〟とも僕は言った。」

真希は舞衣に冷たい声音で、背中を向けながらそう返すのであった。

「それに、維新派に属するように煽った彼女達を帯刀権の剥奪だけで処分したとしても、冥加刀使とこの戦闘の経緯といった情報が彼女達から漏洩する可能性が高い以上、帯刀権を奪って放逐することなどできると思うか？……更に言うとだ。刀使として復職させたとしても、反乱の扇動者を放置すれば、数年後には刀剣類管理局内部を瓦解させる要因にもなりかねない。」

それだけでなく真希は、彼女等を始末した理由を述べると、

「もし、君が言っていたことが事実だとしても、僕はその点を考慮すれば寿々花は良い仕事をしたと思うが……それに、寿々花が主犯であるという何か物的証拠でもあるのか？」

舞衣に刀使が刀使を殺したように見えないように、反乱分子の仕業として始末した寿々花の手腕を評価すると真希は述べると同時に、舞衣に寿々花が主犯であるという確実な証拠があるのかと問われた。

「……いえ。ですが、彼女達は冥加刀使でもなかったんですよ？」

そのため、舞衣は真希にそう返すしかなかった。それを聞いた真希は、

「ああ、そうだ。……だから〝テロリスト〟に殺されたんだ。違うか？」

と冷ややかに返すのであった。それだけでなく、

「……それにだ。君には妹さんが二人居るんだろう？今後、そういった過激派とか名乗る〝テロリスト〟はそういった〝子供〟といった弱い者をターゲットにするらしい。君としても、刀使がテロリストに殺されたことで特祭隊も対テロ能力が向上した部隊が必要になる。そうなれば、私達が住むこの国は所謂テロリストに対して強い国になるのだから、妹さんも荒魂事件やテロ事件に巻き込まれることなく安心して過ごせるだろう？」

真希は遠回しに妹二人を殺されたくなければ、寿々花のことについては黙秘しろ。……と肩に手を置いて舞衣を遠回しに脅迫していた。

「それに、明眼と透覚を使え、大企業の柳瀬グループの力を使って衛藤隊員を探し出し、衛藤隊員等を指揮下に置ける君の指揮能力を僕は高く評価している。……いずれは僕の後釜にと考えるほどにね。つまりは、君は刀剣類管理局の対テロ部隊と特祭隊を使ってこの国と君の家族を守ることができるということだ。……悪い話ではないと思うが？」

それだけでなく、黙っていれば舞衣を重要なポストに就け、家族を守ることができるようにしてやると囁くのであった。それを聞いた舞衣は、

「……分かりました。」

奥歯を強く噛み締めながら、そう答えるしかなかった。

そのため、舞衣はタギツヒメを討伐しようとしている刀剣類管理局並びに政府上層部の意思に不信感を抱いていた。

そのとき、歩が呟いていた。

「私は……タギツヒメを……衛藤さんも……助けたい。」

タギツヒメと可奈美を助けたいと。

静かな車内であったために、その歩の呟いた声は良く響いていた。

そのため、舞衣達は一斉に歩の方へと顔を向けるのであった。

「それに、おかしいですよ!!あんなふうに……あれだけ友達を大切にしていたタギツヒメが造反するなんて思えません。だって……、」

何故なら自分は知っているからだ。……タギツヒメは優だけでなく結芽といった大切な友達が居たこと、その子達が安心して暮らせる社会にする刀使になりたいという夢を叶えるべく歩はタギツヒメを討伐することに反対していた。

……ただ〝強さ〟を求める刀使ではなく、人から〝尊敬〟される刀使になると約束したのだと思い出した瞬間、歩はハッとなると、自身の御刀に触れる。

(……ああ…わかった気がします…衛藤さん…。)

そうだ。……自分が〝強さ〟ではなく、その人の〝在り様〟こそが全てであると考えた。ならば、御刀とは、神性を帯びた金属『珠鋼』を精錬して作り出された神器。刀使たる者は、御刀を使い荒魂になってしまったノロを祓い鎮めることを使命とする。……だが、そんな神器や使命に振り回されている人間は本当に強いのか?

歩はそこまで考えたとき、ある考えに至るのであった。

(……本当の強さに、刀なんて要らないんだ。)

強くなるには、御刀(こんなもの)など要らないのだと。本当に強い人は刀や使命なんかに振り回されないのだと。

……そう考えた瞬間、自分が本当に為さねばならぬことを考え始めた。
「……じゃあ、お前どうすんだよ？」
「それに、イチキシマヒメを囮にしてソフィアが逃げているかも知れませン。」
薫とエレンにそう言われた歩は、両者の目を見ながら答える。
「……そうですね。イチキシマヒメを囮にして、ソフィアという人は逃げるかもしれません。けど、あの人はイチキシマヒメの近くに居る。……多分、だからこそ舞衣隊長にそういう指示を出したんじゃないか？って思えるんです。」
ソフィアはイチキシマヒメの近くに居ると断言できないものの、歩は直感でそこに居ると何故かは分からないが、何となくそう感じた。
「ソフィアという人は何で隠世の門を開けたんだと思います？」
「……多分、権力の奪取か何かじゃないかと私達は推測してるけど。」
「もしくは、維新派が言っていた友人達や家族の仇のために荒魂殲滅の理念に共感したとか？」
歩のソフィアが隠世の門を開けた理由は何なのかと問われた舞衣は権力を得るために行ったという推測がなされていると答え、美弥は維新派の宣言通りに荒魂の殲滅のために動いたのではないかと答えるのであった。
「……ここからは私の推測なんですけど、多分、あの人は権力とか刀使の使命とかに興味は無いんですよ。隠世の門を開ける。その行為自体が目的だったように思えるんです。」
しかし、歩は淡々とソフィアの目的が隠世の門を開ける。そのこと自体が目的ではないかと語るのであった。
「もし、権力が欲しいだけなら、わざわざクーデターを起こさなくても実力はあった訳ですし、防衛事務次官の娘さんなんですから、クーデターを起こさなくてもそれなりの地位には就けたハズなんですよ。それに、栄誉ある御前試合に出ないのも不可解です。それに出場したという経歴があれば今後の刀使の活動や自分の地位向上に役立つのにそれをしない。」

権力の奪取が目的であるならば、防衛事務次官の養女であるという経歴を使ったり、名誉ある御前試合に出ればそれなりの箔が付くのだから、自分の地位向上が目的であるなら、刀剣類管理局内でも防衛省内でもそれなりの地位に就けることができるチャンスを幾つも捨てたという余りにも行動と目的が剥離している点。

「荒魂の殲滅が目的なら、イチキシマヒメと協力関係なんて結べるはずがない。……なのに、クーデターを起こすだけでなく、イチキシマヒメと協力している。」

維新派の理念に共感したのであれば、そもそもとして隠世の門を開けて荒魂を溢れかえらせる必要が無いし、イチキシマヒメと協力関係を結ぶはずがないという不可解な点。

この二点を考慮すれば、ソフィアの目的が権力の奪取や維新派の理念に共感したのではないと結論付けられると歩は舞衣等に話していた。

「……それに、彼女って黒色のベレー帽に灰色のトレンチコート、黒のジャングルブーツといった軍装的な…ちょっと変わった服装をしてたり、筋トレとかやっていたりそていているんですよね。……あれって多分、強さのシンボルに惹かれて軍服を纏ったり、筋肉質になったり、……権力とか復讐といった目的を持たないのにそういった〝強さ〟は求めていた部分があるように見えるんです。」

しかし、権力欲でも、報復でもないのに、力だけは求める傾向にあるということに着目した歩は、ある〝仮説〟を立てるのであった。

「恐らく、力強い何かを求めるかのように。……だからこそ、隠世の門を開けることで荒魂と刀使が争い合う世界を築き、自分が欲しかった強さを手に入れた強い何かを創造したかった。そう思えるんです。……そう考えると、彼女はこの荒魂と刀使が戦い続ける世界を一秒でも維持したい。そう考えるはずですから、彼女はイチキシマヒメの近くに居ると思います。であるなら、ソフィアを追っている衛藤さんと十条さん。その二人とタギツヒメと協力してイチキシマヒメを討伐できるはずです。」

ソフィアはただ単純に〝闘争〟しか求めていないということ。

そう歩は、ソフィアの行動を推測していた。
「……そう推察して、舞衣隊長に『指示を無視し、イチキシマヒメの元に向かうタギツヒメを先行する姫和隊員と共に討伐せよ。』という命令を下したんじゃないかと思えるんです。なら、私達がすべきことはタギツヒメか衛藤さん達と協力してイチキシマヒメを討伐すべきだと考えています。」
歩の推察を薫はニヤつきながら聞いていた。
「……可奈美と姫和、そしてイチキシマヒメとソフィアの動向を理解していなければ、そんな指示は出さないよな。だけど、何でそんな回りくどい文面なのかね?元親衛隊サマサマは。」
「多分、上の人達は自分達がタギツヒメの殺害を命じたということが公になれば、タギツヒメに同情的である世論を敵にしてしまうことになって、刀剣類管理局はまた非難の的にされることになるでしょうから、それを避けるために『指示を無視してイチキシマヒメの元へ向かうタギツヒメ』という文面を加えたんでしょう。……討伐した後に〝タギツヒメが荒魂のノロを吸収して負の影響を受けて暴走したから止む無く討伐した。〟というふうにして、荒魂対策の政府予算を少しでも欲しいのが刀剣類管理局上層部の目的かも知れませんけどね。……もしくは、姫和さんの一つの太刀で犠牲にして、姫和さん諸共口封じっていうところなんでしょうけど……。」
薫の回りくどい言い方をしたのか?という問いに対し、歩は吐き捨てるかのように、ノロを吸収したタギツヒメが負の影響を受けて暴走したために、止む無く討伐したと公表することによって、刀剣類管理局上層部は荒魂対策の政府予算を少しでも得ようと考えているのではないか?と答えていた。
「……歩?」
その様を見た美弥は、今までの刀使の仕事に使命感を持っていたり、可奈美に憧れていた歩とは雰囲気が違うかのように感じられた。
「……だから私は、タギツヒメを援護すべきだと思っています。この戦闘を終わらせるにはそれしか無いと思います。」
そして歩は、そんな美弥の内心を知ってか知らずか、そう宣言した。

……タギツヒメを敵として見るべきではないと。
それを聞いた薫とエレンは、
「……まあ、ねねみたいな奴が敵になるわけねーよな。」
「ねね～。」
「……私も、ねねを信じて来ましたカラ、ヒメヒメのこと信じまスヨ～～。」
タギツヒメの味方をすると答えていた。
それを聞いた舞衣は、方針を述べるのであった。
「……みんなの気持ちは分かったわ。なら、私達は今からイチキシマヒメの討伐に向かいます。……すみませんが、あの赤い奔流があるビルまで移動して下さい。」
タギツヒメの援護に向かうと。
そう答えた舞衣は、輸送防護車の運転手に裂けた空を創る赤い奔流があるビルに向かうよう指示すると、運転手は「了解しました。」と力強く頷いて答え、随伴する車輌にも舞衣の指示を伝えるのであった。
それを聞いた薫達は安堵の表情を浮かべるが、それとは対照的に歩の表情が暗かったことに気付いた美弥に何かあったのかと尋ねる。
「……歩、どうしたの？……何か怖い。」
美弥にそう言われた歩は、美弥に顔を向けるとそう答えた。
「……美弥、刀使が荒魂を助けることに御刀や神様って奴はどう思ってるんだろうなって、それを許さずに荒魂と殺し合えとか言ってるのかなって、……そんなこと言って、御刀に刀使の力を与えた神様は空高くから、荒魂と私達が戦っている様を眺めて愉しんでいるんだろうなって。」
歩は、御刀や神様という奴は刀使という荒魂と戦うことを使命にさせた少女とその荒魂が戦い合う様を見て喜んでいるのだろうと述べていた。
「……そう思った瞬間、無性にそんな神とかいうのと御刀とかいうのにムカついてきたんだよね。……いや、許せない。」
歩は憤怒の表情を浮かべながら、そんなことを言う御刀や神に対して”怒り”を感じたと美弥に述べる。そんな御刀や神を許せないと。

「もし、私が戦うべき荒魂と手を組むことに失望して、戦うことに消極的になったある刀使みたいに御刀が私を見放すんなら、見放して見殺しにすれば？そうして、私の代わりになる奴を捜せば？少子化の時代だから都合良く見つかるかどうか知らないけど見つかるといいね。頑張ってね御刀さん。って言ってやる。……私はもうこんなもの（御刀）に振り回されない。ただそれだけだよ。」

そして、歩は自身の決意を語る。

「私はタギツヒメやあの子達が帰ることができる世の中にする。……そのためには、荒魂を斬るだけしかない刀使の使命の全てを変える必要がある。……だから私も変わる。荒魂と協力しただけで荒魂扱いされるんなら、荒魂にも鬼にでもなってやる…！ただ、それだけだよ。」

タギツヒメや優、結芽達といった生きるために荒魂となったり、された人達が穏やかに過ごせる場所を創ると。

「そうして、荒魂と刀使が互いに争うことが無くなった世の中で私は言ってやるんだ。……もう御刀は必要無いって。例え私が死んだとしても、私がその御刀を捨てた道を最初に踏み出したことを知る人間が居ればそれでいいんだよ。」

それを成すために様々なものが必要であり、変わる必要があると言うのであれば、躊躇うことなくそれを行うと、自らの死すらも受け入れると歩は美弥に答えていた。

それを聞いた美弥は、あの剣術で強くなりたがっていた歩が御刀を侮蔑し、捨てようとするその姿に驚愕していた。

そうして美弥と歩が話し合っている内に、輸送防護車の車外で１６式機動戦闘車か９６式装輪装甲車がドドドと重い重機関銃の音がしたため、近くに荒魂が居ることを舞衣は察知し、周りの刀使達に指示を出す。

「みんな！Ｓ装備用意！」

舞衣は周りの刀使達にそう指示すると、刀使達はＳ装備の電源を入れ、舞衣が開けた後部ハッチから輸送防護車から出ると、舞衣に言われるまでもなく、彼女達は部隊を展開させるのであった。

すると、眼前には５０口径の重機関銃の銃撃を受けて怯んでいる狗型、栗鼠型、熊型の荒魂が居た。
「薫ちゃん！お願い!!」
「あいよー！……ねね!?」
状況を見た舞衣は、薫の第五段階の八幡力の力が加わった祢々切丸の一撃で道を塞ぐ荒魂達を一掃しようとするが、薫の頭に乗っていたねねが飛び出てくると、ねねは巨大な鵺の姿…いや、元の姿に戻って道を塞ぐ荒魂達を一掃し、舞衣達が通る道を作っていた。
それを見た薫とエレンが、
「おい、舞衣！ここは俺たちに任せろ!!」
「私達が此処の荒魂を掃討しマス!!」
舞衣に先に行くよう言うのであった。
「!!……薫ちゃん！お願い!!」
「私も行きます!!」
「え?……ちょっと！」
薫とエレンの決意を聞いた舞衣は、薫とエレンに場所の確保を命じると、歩は舞衣に命じられる前に先行していた。
（……御刀になんか頼って、振り回されてばかり居たら、強くなれないじゃないですか！……衛藤さん!!）
そんな思いを抱きながら……。その歩を舞衣と沙耶香、そして美弥も追うのであった。

信徒の恋文

そのビルの頂上には、天にも昇る赤い奔流が流れていることから、そこに大荒魂が居ることは検討が付いた。……そして、冥加刀使となった私は、荒魂を体内に宿した冥加刀使となったソフィアの気配も感じ取れた。

そして私は今、伍箇伝の制服を捨て、可奈美との逃避行の時に羽織っていたパーカーを羽織りながら、その赤い奔流が流れている大きなビルの前に居た。

〝私達〟ではなく、何故〝私は〟と言っているのかというと、可奈美が二手に分かれて目標の居るビルに向かうことを提案したからだ……。

理由としては、先ず二手に分かれることで追っ手を分散させられること。そしてもう一つが、もう一方が捕まったとしても、もう一方がソフィアを殺せるからだ。

それ故に、私と可奈美は二手に分かれて、目標の居るビルへと向かった。

そして、その道すがら、荒魂を体内に宿していたせいか、こちらに気付いた荒魂を討伐し、その討伐した荒魂のノロを吸収しながら進んでいたために、私は急激に刀使の力が強まったのだろう。以前可奈美と二人で戦ったあの羽がついた大きい百足のような荒魂でさえもバターを切るかのように容易く両断し、ほぼ一振りだけで簡単に討伐できた。

……そういえば、元親衛隊の寿々花がこんなこと言っていたな。

『……実は私達が御守りする折神家は特別荒魂と近しい者の家系であり、その力を持っていたからこそ荒魂と融合できたのです。その力は柊の家系。つまりは十条さんの母親である篝様も同様の力を持っていたそうです。……つまり、十条さんにも同じ力が流れているということになりますわ。』

自分には柊の力があるから、それ故に荒魂と融合できるというこ

と。

『……ですが、刀使と荒魂の融合は乗算。それに、今は近くに大荒魂に対しても致命傷を与える小烏丸がありますので、近くに居る荒魂を使えば簡単にイチキシマヒメ以上の力を手に入れられるでしょう?』

そして、刀使は荒魂と融合すれば乗算の力を得られるということ。

その力を得ることができれば、ソフィアなんて容易く殺せる。

「フフフ。」

そう思うだけで私は、私が刀使になろうとした理由が〝母の仇討ち〟だったこと、……つまりは、紫を殺そうとしていたことが始まりだったことを思い出していた。

そう考えれば、何ということはない。昔に戻ってソフィアを殺しに行くだけだ。

「……そうだな。そうだったはずだ。」

私はそう考えるだけで笑みがこぼれた。それだけでなく、私を悩ませる物があった。

『……姫和おねーちゃん。大丈夫?』

私の体内に宿る荒魂が〝優〟の幻覚を見せてくることだ。

「……ああ、大丈夫だ。」

荒魂が見せてくる幻覚であることは分かっていながら、私は嬉しそうに返事をした。……意味の無い行動だというのは分かっていたが、返事をすれば私の体内に居る荒魂が次の幻覚を見せてくれるのだから、私は返事をする。

『ホント!?姫和おねーちゃんダイスキ!!』

返事をすれば優は朗らかな笑顔を見せてくれる。私に向けて笑ってくれる。大好きとも言ってくれる。それが嬉しかった。だから返事する。

そうすると、優は笑顔でビルの中に入って行き、私もそれに続いて向かう。荒魂が見せる幻覚に乗ってやった。

『そんなダイスキな姫和おねーちゃんのために、僕も手伝いたい。荒魂を倒してくれるそんな姫和おねーちゃんのことを助けたい。こっちに荒魂が居るよ?』

多分、私の中に居る荒魂がノロを求めているからこそ、そんな言葉を私に投げかけ、イチキシマヒメが持つ膨大なノロを奪うように仕向けているのだろう。

だが、それは私にとって好都合なことでしかない。何故なら、イチキシマヒメを探す手間が省けるものだからだ。

そう考えるだけで、まるで、優がアリスを不思議の国か鏡の国かどちらかに通ずるウサギの穴へと導く白ウサギのようにすら思えた。

……となると、私はアリスか。白ウサギに導かれる少女のアリスか。……となると、ここは狂ったの国なのだろうか。

私はそこまで考えると、私が住んでいるこの国は狂っていないのかと考えてしまう。まともな物があるのかと考えてしまう。

私が今まで出会った〝物〟や〝者〟は全て、曖昧な〝物〟かもしくは〝者〟だった。

人か荒魂なのか立場が判然としない優やタギツヒメ。

刀使なのか荒魂なのか判然としない折神家親衛隊。

米軍兵士であり、傭兵でもあるトーマス達。

戦場なのか荒魂討伐事件なのか不明瞭な戦闘。

刀使は、荒魂は御刀による加害者なのか被害者なのか。

経済のために人も荒魂も殺す社会。

……そんなものばかりだった。

そんなことを考えながら私は、ウサギの穴へと入って行く。……いや、頂上に居るであろうイチキシマヒメとソフィアを目指してビルを上って行く。

そんなときだった。

物音がしたので、ビルの一室……会議室と書かれた部屋に入ったとき、6体の小型の蟲型の荒魂が居た。

それを私は斬った。

斬った斬った斬った斬った斬った斬った斬った斬った!!

そうして、確認のために次の部屋に入ると、

「ハハハハ!騒がしいと思いましたら、やせ細って飢えた猟犬が騒いでいただけですか?」

そこには、荒魂を周りに囲ませている妙な初老の男性が居た。
「……誰だお前は？」
「私はスレイド博士と申します。」
「！……お前か!!」
「おや？私をお知りで。」
……知っている。お前は、〝私の優〟をノロの実験台にした男のことは一時たりとも忘れなかった。
「ああ、知ってる。お前が、お前が優にノロを入れたんだ！タギツヒメを入れたんだろう!!……全部、全部お前が悪いんだ!!この世界の禁忌に触れたんだっ!!」
此処は戦争とは無縁の優しい世界だった。それを大人が壊した。だから私は叫んだ。
「あんな良い子をお前が人殺しの兵器に改造したんだろうっ!!?!!お前があんなふうに変えたんだ!!」
全部お前が悪いのだと。全部お前が変えたんだと叫んだ。
「……変えた？変えたとはどういうことですか？」
だが、この荒魂と人間を融合させることを目的としたマッドサイエンティストは、尚も白を切る積もりだったのか、「どういうことか？」と返してきた。……私はその何食わぬ顔にカチンと来たために怒号する。
「お前が私の優にタギツヒメを入れたんだろうがっ!!しかも、戦闘兵器にするべく殺人の抵抗を無くすように投薬や洗脳もしたと聞いているぞっ!!」
「？……タギツヒメ…タギツヒメ……ああ！あの子のことですか!?しかし、投薬や洗脳ですか？」
私の説明でどうにかこのスレイドという男は、私が何を話しているのかようやく分かったようである。
「……そんな処置をした覚えは無いんですけどねぇ？」
「……まだ、そんなこと言うのかっ!?」
だが、コイツは尚も白を切ろうとしていた。
「いえいえ、本当にそんな記憶が無いのですよ？そんなことをする理

由があるのですか?」
「しらばっくれるな!私は確かに聞いたんだ!!優を刀使を殺す兵器として改造したと、可奈美から確かに聞いたんだ!!」
そう、あれは確か私達が舞草の隠れ里にて、朱音様が紫はタギツヒメに取り憑かれているという話をしてくれたとき、可奈美が教えてくれたスレイドという人と荒魂を融合することを至上とするマッドサイエンティストみたいな科学者によって、大荒魂を入れる器にするべく殺人に対する罪悪感と抵抗を無くさせたこと、感情も薄くなったということを語ってくれたことは今も憶えている。
それをお前は忘れたのか!?
「ハハハハそうですかぁ。……でしたら、良い事を教えて差し上げましょう。私はそんなことしておりませんよ?」
……コイツは、まだ白を切る積もりか?そんなことで言い逃れができると思っているのか?
やはり、頭のおかしい人間は人の言葉を解さないということであろう。子供を戦闘員にして、荒魂と人間を一つにすることを至上とする人間は狂っているんだ。
……まともじゃない奴の言葉など、聞く価値も無い。
「お前は嘘吐きだ……!お前はまともじゃない……!まともじゃないから自分のしたことが分からない……!だから、お前の言葉を聞く価値など無い!!」
こんなイカレタ人間の妄言なぞ、もう聞く価値も無い。もう優は殺されたんだ。お前が殺したんだ。
……そう思いながら、私は目の前に居た人の姿に近い特殊廃棄物甲類に類する荒魂を斬った。そのとき、妙に鉄錆臭いノロとは違う赤い液体を撒き散らしたため、新しい荒魂の攻撃かと警戒したが、そんなことはなかった。
「おやおや、まるで獣のように襲い掛かってきますね?」
うるさい外道!!
私は裂帛の声を出しながらも、極めて冷静に周りに居る荒魂を斬り殺した。……そうすれば、スレイドは荒魂という自身の攻撃手段を失

い、刀使の力がある私に降伏するしかない。……そうなれば、如何に外道と言えど、荒魂化すらしていないただの人間でしかないスレイドを殺さずに済むのだ。

そう思いながら、スレイドの周りに居る荒魂を斬り殺していた。……だが、不思議なことに私が次に斬り殺した特殊廃棄物甲類に類する荒魂は斬った瞬間に何も着ていないマネキンとなった。

「!?」

私はそのことに驚くものの、人間の赤子によく似た荒魂を制作したスレイドのことだから、この荒魂も妙な小細工をしたのだろうと判断し、次の蟲型荒魂を突き殺した。……しかし、又も私が突いて殺した蟲型荒魂は何時の間にかパソコンのモニターへと変わっていた。

「……小賢しい真似をっ!!」

この荒魂は、赤子の荒魂を作ったスレイドによってこのような小賢しいことができる細工でもされているのだろうか?

私はそんな疑念を抱きながら、スレイドの周りに居る荒魂を斬り殺していった。

「諦めろ。……私にそんな小賢しい技など効かない!!」

そうして、斬った瞬間にパソコンのモニターやマネキン、造花へと変わった荒魂を斬り殺し続けた私は、スレイドのみとなったので、スレイドに降伏するように述べた。

「ハハハハハ!でも私を殺せないでしょう?それで、どうやって私を拘束するのですか?峰打ちでも当たった場所が悪ければ死にますよ?」

しかし、スレイドという男は往生際が悪いのか、私がスレイドを殺す気が無いことを知ると、そのようなことを言ってきた。

「……そうだな。だが、周りを見てみろ。」

私にそう言われたスレイドは、ノロの残滓が有る辺りを見て、どういう意味かと首を傾げていた。

「……今、私以外に居るのは、頭が狂った人間と3箇所も有るノロの残滓。……仮に私がお前を斬ったとしても、誰がどう見ても、お前は荒魂に殺されたと思うことだろう。……降伏しなければ、お前を斬る。」

それ故に、私はこの頭のイカレたマッドに説明した。
降伏しなければ、荒魂に殺されたと偽ってお前を殺すと。
「ハハハハハ！……なるほど、それは困りましたねぇ。私はまだまだ研究したいことがあるのですから……。」
スレイドは私にそう言うと、一本のノロのアンプルを見せびらかす。そうして、見せびらかしたノロのアンプルを一度に何本も自らの首筋に刺したのだ。
「……こうすれば、私は貴方を倒セル。こうスレバ荒魂と人間の融合という研究の正しさが証明されるっ!!!!」
不思議な物だが、荒魂化した人間の言葉がハッキリと聞こえた。
……だが、ハッキリと聞こえたところで、頭のオカシイ人間の言葉など気にする必要はない。そう私が決意し、御刀を構えると、
「うっ、ぐっ……が、あぁあぁあぁあぁあぁあぁあっ!!!!」
急にスレイドが苦しみ始め、もがき苦しみ始めた。
その様を私は見る事しかできなかったが、やがてスレイドの口から「クヒュッ」っと空気が抜ける音がしたと思ったら、次の瞬間には痙攣をし、スレイドの口の中から荒魂が這い出て来た。
それを見た私は、きっとスレイドという老いぼれの身体に取り憑くのが苦痛だったから這い出て来たのだろうと理解した。
故に、私は人を殺していないのだと理解した。殺さずに済んだのだと理解した。だからこそ、私は清純なのだと理解した。
「……まともな人間の相手をすることはないな。……この荒魂のように。」
私はそう呟くと、スレイドの身体から這い出て来た荒魂を斬った。まるで霞のように斬れた。斬ったという実感も湧かないほどに軽かった……。
そして、斬った荒魂はノロの残滓となって残っていた。それを私は他のノロと結合して荒魂にならないように吸収し、自分の力に変える。……そうすることで、不思議と力が湧いた。
いや、気の所為ではない。……確かに斬ったという感触がしたのだ。ならば、私が斬ったのは荒魂のはずだ。

『そういう君はまともなのか?』

すると、私の耳には誰かの声が聞こえたような気がした。

その声が聞こえた方に顔を向けると、パソコンの画面にもモニターの画面にも鏡にもガラスにもパソコンの画面にもモニターの画面にも鏡にもガラスにもパソコンの画面にもモニターの画面にも鏡にもガラスにもパソコンの画面にもモニターの画面にも鏡にもガラスにもパソコンの画面にもモニターの画面にも鏡にもガラスにも……

スレイドが映っていた。そのスレイドが私に語りかけていた。

『なあ、教えてくれ。刀使じゃない奴が荒魂を斬ったら、それは荒魂なのか?』『誰が言ったんだ?荒魂を殺すのが使命だと。』『君の言う優くんはそれを望んでいたのか?』『人と荒魂の共存を拒むのなら優くんは殺さなきゃいけないだろう?』『荒魂を身に宿した君はまともなのか?』『君は狂っていないとどうして言える?』『君にとっての家族とは何だ?』『君にとっての友人とは何だ?』『そもそも君は何だ?』

私のことを好き勝手言っていた。私のことを好き勝手語っていた。私のことを好き勝手評価していた。私のことについて何か言っていた。私のことについて何か喋っていた。私のことについて何か評価していた。私の使命を語っていた。私の好きな人のことを語っていた。私が狂っているとか言っていた。私のことを刀使かと聞いていた。私のことを荒魂かどうか聞いていた。私のことを友人が居るかどうか聞いていた。

自分のことに悩んだ私は、私の姿が映る鏡を見た。

……いや、そもそも私は何だ?誰だ?私は何だ?誰だ?私は何だ?誰だ?私は何だ?誰だ?私は何だ?誰だ?

いや、こんなふざけたことに付き合うから、頭がこんがらがるのだ。頭が狂うのだ。アリス症候群のように文字が大きくなったり、小さくみえたりするのだ。……いや、違う。不思議の国のアリスの世界か鏡の国のアリスに迷い込んだのかもしれない。だが、このビルを上ったということはウサギの穴に入っていないのだから違うだろう。とい

うより、そもそもこの社会……いや、この世界そのものが世も末と言えるほどに狂っているのだから、元々アリスの世界なのだから間違ってはいないだろう。そう思うと、この社会が狂っているように思えた。

そう思ったせいか、街のジオラマを見かけた時に私はスタンフォード監獄実験、ミルグラム実験、サードウェイブ実験、ローゼンハン実験、Ｕｎｉｖｅｒｓｅ　２５実験のことを思い浮かんでしまった。

この街、いや、この世界はこれら心理学を証明する実験場のようなんじゃないかとすら考えてしまう。

スタンフォード監獄実験やミルグラム実験のようにこの狂った世界、伍箇伝という特殊な環境下に置けば、荒魂を躊躇無く殺す攻撃性の高い人間になるのだろう。

サードウェイブ実験のように、ヒトラーの手法を真似て御刀という権威の象徴を作り、ユダヤ人のように荒魂という敵を作り、ナチズムを確立させたように刀使という優越性を抱かせる存在を作り、そして、荒魂討伐を使命とする思想をセットにすれば、何も知らない子供達はそれに殉ずるだろう。

……そうすれば、子供達はやがて個人主義を放棄し、全体主義に傾倒する。……まるでヒトラーの『民族がすべてであり、個人は無である』という言葉に則る物のように。

狂人のことは狂人しか理解できないことを証明したローゼンハン実験のように、誰も刀使が荒魂と殺し合う異常性に気づくことは無いだろう。……みんな、それに興じる狂人なのだから。

現実に、２５回もマウスにとって生存を脅かされることも争いも無い世界を２５回も創ったのに、２５回もマウスが絶滅したという結果に終わることを証明してしまったＵｎｉｖｅｒｓｅ　２５実験の過程で存在した〝引きこもり〟となるマウス。〝ストーカー〟となるマウス。私のように〝児童性愛〟に目覚めるマウスが現れたことに対して、誰もその危険性に気付いていないのだから、誰がこの社会が異常であると気付く？

そう思うだけで心が沈んだ。争いの無い社会の先には滅ぶ結末し

か無い世界に心が沈んだ。
『二次創作という言葉を知っているか?法的にグレーゾーンだとか、何も言ってこないということは合法だとか、プロや法律専門家がこう言っているから二次創作は黒に近いグレーだ!だとか、権利者の著作物を盗んでいるから１００％違法だとか、色んな人が好き勝手言っているアレだよ。アレ。』
だが、心が沈んだ私にトーマスが俯きながら二次創作について語っていた。
『だけど私は考えたことがあるんだ。この地球の上に在る自然な社会が大自然に囲まれることだというのなら、この地球の上に在る社会は全て誰かの二次創作なのではないのか?』
ロークが俯きながら二次創作について語っていた。
『誰かが築き上げた社会。誰かが作った規範。誰かが広めた神の御言葉。誰かが認めた社会的正義。……それら全てが誰が創ったか分からない数人で築き上げた二次創作ではないのかと。』
シェパードが俯きながら二次創作について語っていた。
『そう思って、この社会を見たときに思った。……この世界は一部の人間が法律や規範を作って思い描いた通りになる。刀使が居る世界にもできる。苦しい苦しい現実社会にもできる。狂った社会にもできる。Ｕｎｉｖｅｒｓｅ　２５実験のようなネズミの楽園みたいな世界にもできる。』
マイケルが俯きながら二次創作について語っていた。
『最強の自分や団体を思い描いて悦に入ることもあった。だけど、それは所詮「自分」という限界にやがて行き着くとは思わないか?そして限界が見えたとき、お前はこの社会や世界はどう見える?誰がイカレてる?』
死んだはずのロークが、トーマスが、シェパードが、マイケルが私にそう語りかけてくる。
まるで、この世界に生きる人達は、彼等死人のように俯きながら生きているのだと告げに来たかのように。
まるで、この現実や現世という世界の上にスタンフォード監獄実

験、ミルグラム実験、サードウェイブ実験、ローゼンハン実験、Ｕｎｉｖｅｒｓｅ　２５実験のような妄想、いや、誰かが意図せずにそのような二次創作を創り上げてしまえば、この世は終わるのだと告げに来たかのように。

……死者が生き返るという、まるで出来の悪い妄想……いや、出来の悪い創作物にある異様な展開に憤りしか感じなかった。だからこそ、私は死んだのなら墓の下に埋まっていろ!!と叫んだ。都合が悪くなって勝手に生き返った出来の悪い創作物みたいなことをするなっ!!と叫んだ。

ああ、癒しが欲しい。癒しが無い。

『……姫和。今あなたは幸せ?』

そう思ったとき、母が私にそう告げてくれた。今、幸せなのかと。

「だったら母さん。……一つ聞きたいことがあります。あなたは、悔やんでますか?」

そう言われた私は、衰弱していく母のことを思い出しながら、目の前に現れた母にそう尋ねた。……悔やんでいますか?と。

『そうね。姫和は好きな子が居たんでしょ?……だったら、貴女が幸せだったら、何の悔いもないわ。』

母さんにそう言われたことで、私は決心が付いた。……だから私は求める物を壁に書く。書き続けることで心を鎮めようとした。

ゆう優ユウゆうユウ優
優ゆうユウ優ゆうユウ
ゆう優ユウゆう優ユウ
優ゆうユウゆうユウ優
優ゆうユウゆうユウ優
ゆう優ユウゆう優ユウ

……何故だか分からないが、上手く優の字が書けない。だがいつかは上手く書けると思った。だから私は何度も書いた。そうすれば優に会えるような気がしたから。

その願いが叶ったのか、壁から優が生まれ出て来た。

『姫和おねーちゃん』

ああ、やっと会えた。やっと優に会えた。

そうして優が私に言ってくれる。

『ありがとう姫和おねーちゃん。僕に投薬や洗脳をしてくる悪い科学者を殺してくれて、本当にありがとう。』

『……姫和、お母さんは貴女が幸せだったら、何も悔いは無いわ。だから、大荒魂と一つになりましょう?』

こう言って、優は私を認めてくれた。私の幸せを第一に考えろと母は9歳の子供と一緒になることを認めてくれた。

……何が、「ハハハハそうですかぁ。……でしたら、良い事を教えて差し上げましょう。私はそんなことしておりませんよ?」だ。やは

り、頭の狂った科学者が言っていた言葉なんて信じる物じゃない。

……頭の狂った奴の言葉なんて、真実味が無い。自分が何をしたのかすら分からないのだろう。

そう思いながら、私は嘗てスレイドが居た何も無い部屋で、綺麗な星空が広がる空を見ながら、笑顔で佇んでいた――――。

ナザレの十字架

空は夜なのか朝なのか分からない程に黒くなっていて、朱く染まっている月を見ながら私は今、イチキシマヒメとソフィアの気配がするビルへと向かって行った。

その空を見ていると、まるでこの世界の終わりのように感じた。

……いや、私達がイチキシマヒメを止めなければそうなるだろう。

優ちゃんが死んじゃったからお母さんとの約束を果たせなくなって、剣術をする理由が無くなった。

この国の都合によって荒魂にさせられたり荒魂にならなかったりすることを知って、荒魂から人々を守るためになった刀使を続ける理由も無くなった。

私が学んだ剣術がこの国に良いように使われていただけだと知って、国家公務員である刀使で在り続ける理由も無くなった。

だから私は、伍箇伝の制服をビリビリに破いて私服でここまで来ていた。……姫和ちゃんとの逃避行のときに来ていたパーカーをも羽織りながら。

私は、何もかも失った。だから私は……そこへ向かうしかなかった。唯一つの目的、目標に向かって。

ソフィアも、イチキシマヒメも斬る。

それだけが唯一の……荒魂化した人も斬って、刀使である必要が無くなって、お母さんとの約束も出来なかった娘が唯一残った……唯一の刀を振るう理由。荒魂や荒魂化した人間を斬って斬って斬って斬り続けることで私が本当の刀使というものを表現することでお母さんが私に教えてくれた剣術が政治のために使われていたというものではなく荒魂の被害を受ける人達から守るために使われたものなんだと、そう証明することでお母さんの剣は政治のための人斬りをしていないと、人々を守ろうとしていたんだと証明することで……刀使の

仕事を誇りに思うって言って死んだお母さんが、私に剣術を教えてくれたお母さんが死ぬまで幸せだったと証明したかった。
だから私は斬り続ける。
それもこれも私の約束と剣術の意味と刀使の誇りも全て奪ったソフィアが悪いんだ。

全部ソフィアのせいなんだ。
全部ソフィアが悪いんだ。
全部ソフィアが悪い。

そう思えば自然と御刀を遭遇してしまった荒魂に向けて騙して荒魂を入れた姫和ちゃんや助けられなかった優ちゃんのことを思い出して震えた……いや、御刀を振るった。
……荒魂と戦っている最中だというのに、震えたと振るったというダジャレの積もりなのか何なのか分からないけど妙に変なことを考えてしまう。
だけど、そんなことを考えているにも関わらず、荒魂は私に向かって来たため、残りの二体の内、一体の狗型荒魂は真っ向から両断することで討伐し、もう残り一体の隠型荒魂を手足を斬って抵抗する手段を奪うと、最後は身体を両断して討伐した。……けれど、荒魂の残骸だったノロの塊が突如として荒魂化した人間となって私に襲い掛かる。
……違う、これは幻覚だ！現実じゃない!!私は荒魂化した人を斬っていない!!!
!!

《ｌｅｆｔ》「生きたかった」《／ｌｅｆｔ》「いたいいたい」
「殺さないで」
「何で殺されるの」
「僕は何回切られるの」
「死にたくないよ」
「僕は人間扱いされないの」「助けてよ」

「嘘吐き」
「酷いよ」
「ひとごろし」

……けれど、荒魂化した人達はそう言って私を助けを求めてきた。非難してきた。人殺しと言ってきた。

だから私は叫んだ。……いや、叫ぶしかなかった。

「しょうがないじゃない！！……だって、荒魂化した人は斬るしかないだもん。私は刀使だから、それしかできないじゃない。」

だから斬り続けるしかなかった。じゃないと、この人達が斬られた意味が無くなるからだ。だから私は剣を彼等に向かって振り回した。振り払うように振り回した。けれど、次に現れたのは赤子の荒魂だった。

おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、

おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、

おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、

おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、

と私の周りで叫び始めるのであった。

その叫びを聴いただけで吐き気が出てくるほどに不安に駆られ、心臓が早鐘を打ち続ける。

「衛藤さん!!」
……すると、歩ちゃんの声が聴こえた。歩ちゃんが私を抱き締めていた。
だからなのか、赤子の叫び声も止んだ。けれど、
「!……歩ちゃん!片腕がっ!!」
「大丈夫です。……写シを一回斬られただけですから。」
片腕が無い歩ちゃんが居たため、私は動揺して、大丈夫か尋ねた。
……すると、歩ちゃんは写シを斬られただけだから大丈夫だと答えていた。
「……私が、私が錯乱していたから……ゴメン。」
「ええ、そうです。貴女に斬られました。……悪いと思うのなら、手伝ってください。」
私が歩ちゃんに謝罪すると、歩ちゃんは冷たい声で私に手伝って欲しいと言っていた。……それだけで、私は目の前に居る歩ちゃんが私の知っている歩ちゃんとは違うような気がした。
「……手伝うって?」
「イチキシマヒメ……いえ、大荒魂の討伐を手伝ってください。」
歩ちゃんは私に大荒魂の討伐を手伝ってほしいと言う。……だけど、私は、
「……だけど、私は「私、決めたんです。」
ソフィアも殺さないといけないと言おうとした瞬間、歩ちゃんが私の言葉を遮って自身が決意したことを話し始めていた。
「あの子達が……優くんやタギツヒメといった子達が帰れる世界にしたいって、……それまでに多くの荒魂や人……いえ、違いますよね。生きている人達の血が多く流れる。……悔しいですけど、それを実現するには、こんな刀の形をした神様に頼らなければならない。だから、それが実現するまでは、こんな物でも使ってやろうと私は決めました。」
剣術が全てだった私にとって、歩ちゃんの御刀をまるで物のように扱う答えは斬新だった。
「私、強くなりたかったんです。……刀使になった以上、強くなる以外

無いって思っていました。そのために、真希さんや衛藤さんが剣術を教えてくれたり、美弥にもＳＮＳを使う方法も教えてもらいました。……けれど、どれも強くなった気がしなかったんです。」

　歩ちゃんは語ってくれた。色んな人に強くなる方法を教えてもらったが、どれも納得しなかったことを。

「そりゃそうですよね。……私が強くなりたかった理由は、きっとあいう子達や人達を守りたかったんだろうなって、それを忘れてたら、どんなに刀を振っていても強くなんてなれないですよ。……だから、私は剣に振り回されない人間になりたい。」

　歩ちゃんは答えてくれた。自分が強くなりたかった理由は、優ちゃんやタギツヒメみたいな子達を守りたかったのだと。そして、剣に振り回されない人間になりたいとも語ってくれた。

「……きっと、今も御刀（こんなもの）に頼っているのは私が今も未熟なだけなんですよ。……本当に強い人は、刀なんて必要ない。だから、私はまだまだ弱いままなんだ。」

　そして、歩ちゃんは本当に強い人は御刀なんか要らないと答えていた。御刀に頼って荒魂を斬るしか方法の無い自分は未熟なだけであるとも言っていた。

「だから、あの子達……タギツヒメ達が笑って安心して過ごせる場所を作る。それを築き上げるまで、人であろうと荒魂であろうとこの世界を壊そうとする奴は誰だろうと斬る。そうして、そんな私の戦いが終わって、御刀が要らなくなった時にこう言ってやりたいんです。」

　それだけでなく、歩ちゃんは私に語ってくれた。優ちゃんやタギツヒメ達が笑って過ごせる場所を作るために、人も荒魂も関係無くこの世を乱す者は斬り捨てると、そうして斬る者が無くなったときに御刀に対して言ってやることがあると、

「……もう、この世には〝神〟が居なくても私達は生きていける。そういう世界を自分達の手で築いたと、それを見た神様が私を殺しに来るかも知れないけど、私が……いえ、誰かがその一歩を踏み出すことが重要なんです。……そうすれば、誰かがその足跡を辿ってくれる。それだけで充分です。」

御刀が要らない世の中を自分達の手で築いたと、例え志半ばで倒れたとしても、誰かが自分の轍を見て、その跡に続くはずだと歩ちゃんは真っ直ぐな目で私を見つめて、

「……だから、タギツヒメ達が、あの子達が安心して帰って来れる場所を守るために、イチキシマヒメを倒すことを手伝ってください。……衛藤さん。」

そう答えていた。それを聞いた私は、

「……悪いけど、私はソフィアを殺すことを優先するけど？」

「大荒魂に頼るしか能の無い小物が最も嫌がることは何だと思います。……隠世の門を開けているイチキシマヒメが討伐されてしまうことだと思います。……現に、彼女はイチキシマヒメに協力していたんですから。」

ソフィアを殺すことを優先すると言うが、歩ちゃんはソフィアのことを大荒魂に頼る小物だと評すると、イチキシマヒメを討伐することでソフィアに対する嫌がらせとタギツヒメが帰れる場所を守れることができると私に諭していた。……そして、歩ちゃんは私を通り過ごしてイチキシマヒメの居る所へと向かって行こうとしていた。それを見た私は、慌てて歩ちゃんの後を追う様に走った。

「……歩ちゃん、何で……御刀を捨てようって思ったの？」

御刀を捨てようとする歩ちゃんを否定したかったのか、それとも御刀を捨てようとする歩ちゃんに惹かれたのか、私はそんなことを聞いてしまった。……それを聞いた歩ちゃんは、

「私、思ったんです。……刀を捨てた先にも道が有るんじゃないかって。そう考え始めたとき、その道の先に有る物こそが優ちゃんやタギツヒメ達が本当に望んでいた物なんじゃないかって思えたんです。」

刀を捨てた先にも道があり、その道の先に優ちゃんとタギツヒメが求めた物が有ると答えてくれた。

「……だから私は、御刀に頼らなくても生きていける強い人間になりたい。……今は、それを目指そうと思います。」

そうして、御刀に頼らなくなった人間が強いと歩ちゃんは言っていた。

……それを聞いた私は、剣術と刀使に固執していた私にとって、その考えは青天の霹靂だった。……そうか、私が本当に求めていた物は……剣術で強くなることじゃなくて……荒魂を多く斬ったことでもなくて……きっと、

「衛藤さん！荒魂です!!」

そう考えていたとき、私達の目の前には巨大なムカデ型の荒魂……私が歩ちゃんと初めて会ったときに最初に出会って、共に討伐した荒魂と同じ類型の荒魂が現れていた。それを見た歩ちゃんは、ムカデ型の荒魂へと突撃して行った。

「歩ちゃん!!」

突撃して行った歩ちゃんを見た私は、まるで親鳥の後に付いて行く雛鳥のように後ろに付いて行った。

だけど、私の心配を他所に、前の時は1機のヘリと銃の援護が有ったから上手くいったにも関わらず、歩ちゃんは恐れることなくムカデ型の荒魂の頭上へと跳躍すると、

「はあああああああ!!」

ムカデ型の角を両断したため、私は足を何本か斬って歩ちゃんの援護に徹していた。

そうして、ムカデ型の荒魂は両断された角から、まるで人間の頭から血が噴き出たかのようにノロを撒き散らし、苦しんでいるのか、動きを止めていたため、私はすかさずにムカデ型の胴体を両断し、それに続いて新型S装備を纏った歩ちゃんも私に続いてムカデ型の荒魂の胴体を両断していた。

……そうして、身体をバラバラにして、抵抗する能力を奪った後に歩ちゃんはムカデ型の荒魂の頭上に跳躍すると、ムカデ型の荒魂の頭部をまるで切腹の介錯のように斬り落とした。

そうして、頭部を斬り落とされたムカデ型の荒魂は命か力を失ったのかは私にはハッキリとはしないけど、そのままムカデ型の荒魂の身体はどうっと倒れ、そのままノロの残滓となっていた。

「……歩ちゃん。」

それを見た私は、私のように立ち回った歩ちゃんの成長に感動して

いたのか、それとも私を置いていって先に進んでいるということに頭が理解しないのか、そのまま、言葉を発することなく立ち尽くしていた。

「衛藤さん、このまま――――」

そのためか、歩ちゃんは私に早くイチキシマヒメの元へ向かおうと言うが、

ビルの壁が崩れると、突然、その中から荒魂が現れた。

それに気付かなかっただけでなく、ビルの崩れた壁の石礫に歩ちゃんが頭を受けたこともあり、歩ちゃんは崩れた壁から現れた荒魂への対応が遅れて、そのまま、写シを張ることも出来ないまま、荒魂の突進を受けてしまう。

……普段なら、いや、ムカデ型の荒魂を真正面から倒した歩ちゃんなら、小型の蟲型の荒魂になんか負けなかった。けど、不意を受け、頭に石礫を受けた歩ちゃんは対応が遅れ、そのまま蟲型の荒魂の突進を受け、吹き飛ばされたかのように向かい壁に激突してしまう。

「歩ちゃん!!」

それを見た私は、歩ちゃんを助けようとした。……けど、

「う、がああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!」

歩ちゃんは腹部を自分の血で、綾小路の白い制服を美濃関の制服の赤色の部分の色のように朱く染め、足と頭から血を流しているにも関わらず、それでも歩ちゃんは声を上げて蟲型の荒魂を斬っていた。

……そうして、歩ちゃんは蟲型の荒魂を討伐すると、仰向けになって倒れるのであった。

「歩ちゃん、……歩ちゃん!!」

それを見た私は、必死で歩ちゃんの元へと駆け寄った。そのときには、何故かは分からなかったけど、お母さんの顔が思い浮かんでしまった。だから私は必死で歩ちゃんの元へと駆け寄った。そして、私は抱き上げて、本部に戻って歩ちゃんを医務室へと送ろうとしたら――――。

「衛藤さん……私……謝らないといけないことがあって……。」

意識が朦朧としている歩ちゃんが、私に語りかけて来た。……謝ることがあると言って、でも、

「今はそんなことといいよ!早く傷の「私……はじめて優ちゃんを見た時、……本当は……怖かったんです。」

歩ちゃんは、私に優ちゃんと最初に出会ったときは『怖かった』と言っていた。

「……でも、優ちゃんや……タギツヒメを見ていると……私達と一緒で……悩んだり……内に抱え込んだりしてて……私達と変わらなかった。」

傷だらけで、血を流しているにも関わらず、歩ちゃんは私に語り掛けてくれた。

……荒魂は私達と同じように内に抱え込んだりして、悩んでいたと。

「……そう思ったとき、……衛藤さんもきっと、……それで悩んでいたと思うと……私って、勝手に衛藤さんのことを……そんなふうに見て……自分の理想を押し付けて……迷惑だったんじゃないかなって、……それで苦しめていたんだと思うと、悪い気がしたんです。……だから衛藤さん。ごめんなさい。」

そう考えるうちに、歩ちゃんは私のことを勝手に英雄視し、そして自分勝手な憧れを押し付けて苦しめたことを私に謝罪していた。

「……S装備を……私の近くに……お願いします……。」

それだけでなく、S装備のコンテナを投下するように言っていた。

……これから、イチキシマヒメとの戦いに赴く私のために。

……それを聞いた私は視界が滲み、歩ちゃんの顔がよく見えなかっ

た。私は……私の最大の理解者の声を聴いて、そしてその言葉を聞いた瞬間、声を出して泣きたかった。

「……衛藤さん。……泣かないで……涙は……あの子達に取って置いて……それが……私の……贖罪になるから。……だから……歩いて……進んで。」

だけど、歩ちゃんは私に泣かないでと言ってくれた。優ちゃん達のために涙は残して欲しいと言って、優ちゃん達が居る所へ向かって歩いて欲しいと言ってくれた。それと同時に、S装備のコンテナが到着し、地面にぶつかった轟音が鳴り響いていた。……その轟音が、S装備が到着したのだと分かった私は、歩ちゃんを背にして、S装備のコンテナに近付くと新型S装備を身に纏う。

「歩っ!?!!」

それと同じぐらい……ううん、違う。少し音量は負けるけど、私にはよく聞こえる声で「歩っ!?!!」と叫ぶ人の声が聞こえた。……確か、田辺　美弥っていう人だったと思う。その美弥っていう子が「歩、歩!!」と言って歩ちゃんの名を何度も何度も呼びながら近づいて行く。それを見た私は、

「……田辺　美弥ちゃん、だっけ?……私を捕らえに来たの?」

「そんなことより!!どうして、歩がこうなってるんです!?!!」

「荒魂に不意を打たれて大怪我を負ったとき、私に言ってくれたの……イチキシマヒメの元へ向かえって。」

歩ちゃんの友人……いや、親友である美弥ちゃんに何故此処に居るのかを尋ねたら、私は彼女に歩ちゃんが大怪我を負っていることについて罵倒された。……だから、私は簡潔に状況を説明するために、彼女に歩ちゃんが私にイチキシマヒメの元へ向かえと言っていたことを伝えた。

「……だから私は、友達の理想のために、私は行くよ。……イチキシマヒメの所へ。」

そして、彼女に私を止めるなとも言って。それが聞こえたのか、私の背後から足が遠ざかっていく音と気配した。だから、私は最期になるかもしれないから、彼女にあることを伝えようとした。

「……あと、歩ちゃんに伝えておいて、……また、こっちに来たら一緒に戦おうねって。」
「うっさい!!そんぐらい、自分の足で……口で伝えろっ!!」
また、こっちに来たら一緒に戦おうね。って、歩ちゃんに伝えて欲しいと美弥ちゃんに伝えたけど、良くなかったみたい。
……当然、だよね。勝手に刀使を辞めたり、誰にも言わずに行動したり……考えれば考えるほどに、
『可奈美は優しいね。優しいし友達思いだけど冷たくて自分本位。』
そんな言葉が思い浮かぶ。
『新型S装備の着用者を確認。……千鳥、所有者は衛藤　可奈美隊員。ナビゲートは私、鏑木　霞がしますのでよろしくお願いします。』
そうして、新型S装備を纏ったとき、箱根山戦でお世話になった霞さんの声が聞こえた。だからこそ、私も、
「……はい。おねがいします!!」
そう言って、イチキシマヒメの居るビルの中へと入っていった。
『私達も貴女に賭けてるの。……ちゃんと帰って来なさいね。ターゲットの居るビルまでの最適ルートを算出し、表示したマップをそちらのバイザーへ転送します。』
霞さんが、私が纏う新型S装備の頭部に有るバイザーにイチキシマヒメが居るビルまでの最適ルートが表示される。
……それを見た私は、このルートなら荒魂と接敵する機会が少なくて済むと思い、私は表示されたルート通りに進んだ。

そして、イチキシマヒメが居ると思うビルの前まで……いや、荒魂の気配が他の荒魂とは桁が違うくらいに強く感じるから、この最上階に必ず居る!!……そう思い、踏み込もうとしたとき、
『ビル内部の構造を表示しますので、そこで待機してください。』

霞さんにそう言われ、私は素直に待ってしまう。
『建築会社からの提供されたビル内部の構造をバイザーに表示、警備会社から提供された監視カメラからの映像を確認しましたが、冥加刀使と荒魂の姿は確認されていないので、そのままビル内部に突入してください。』
そして、霞さんの言葉に従って、私はビルの内部へと突入する。
……霞さんの言葉通り、ビル内部には居なかった。
『階段にはドローンの索敵により、荒魂は検知されていませんので、そのまま右に曲がり、階段で駆け上がってください。』
その言葉に従って私は、階段を駆け上がる。
『……会議室にノロの反応を探知。背後から強襲される恐れがありますので確認してください。』
それを聞いた私は、会議室と書かれている表札の扉の前へ向かうと、そのまま扉を蹴破って、室内に入った。
……そこには、破壊されたモニタと壊された椅子があっただけでなく、何故かは分からないけど、壁の至る所に切り傷があることに私は戦慄した。それだけでなく、
「!?」
ある部屋が不自然に開いていて、その扉がキィキィと音を出していたために、その扉の先に何があるのか気になり、中を見てみた。
『心拍数上昇。衛藤隊員、何かありましたか?』
私は、霞さんが私の体調を気にする声に返答することなく、部屋の中に入る。
すると、そこには、
「……え?」
初老の男性が死んでいた。
死んだ人間を前にしているにも関わらず、私は何故かは分からないけど、その死体を観察してしまう。
『尚も心拍数上昇、衛藤隊員!何かありましたか!?』
霞さんの叫びすら聞こえていないのか、私はその死体を観察する。
……一太刀でバッサリと斬られている。そして、周囲はパソコンの

モニタと斬られたマネキン、斬られた造花、そして割れた鏡しか無かったことから、荒魂に殺された訳ではなかった。

……すると、誰がこの初老の男性を斬ったのだろうか？

私は、そんな疑問を抱きつつ、周囲に気を張り巡らせていると、誰かのうめき声が聞こえた。

「!?」

それに気付いた私は、直ぐにそちらへと向かった。

『お願い、衛藤隊員！返事をしてっ!!』

霞さんの声に反応することなく、私はそのうめき声がした方へと向かうと……。

「姫和……ちゃん？」

「あああぁぁぁ、ううぅぅぅ……。」

口を半開きさせながら、ふらふらと彷徨う姫和ちゃんが居た。

そして、姫和ちゃんが私に気付くと、

「あ、あらだまあああああぁぁぁあっ!!!!」

私にそう叫んで、斬りかかっていた。

『……だから私は、友達の理想のために、私は行くよ。……イチキシマヒメの所へ。』

その姿を見た私は、不意に歩ちゃんのことを友達と言ったことを思い出してしまっていた。

……そうか、これが、私の罪なんだと。……私は、まともじゃなかったんだと。

……頭の狂った人の言葉なんて、真実味が無い。自分が何をしたのかすら分からないんだ。

毒麦が実るとき

私がこの国に来て、この国に対して、不思議な思いを抱くことがあった。

何故、荒魂が居る世界にて、皆がそれに応じた武装しないのかということだ。

平和は剣によってのみ守られた。

命は弱さを許してくれなかった。

自己をあらゆる武器で守ろうとしない制度は、事実上自己を放棄しているようなものだった。

……春を売るか強盗するしか生きられなかったストリートチルドレンだった私にとって、武装することは己を守ることだった。他人を殺して奪うのは当然のことだった。そうじゃなければ、いや、それを否定してしまえば獣の表情で私を守ってくれたソフィアが人間じゃなくなるから。

……だから、私は己の身を守ることをしない人達が不思議でしかなかった。ただ、生まれたから生きている。ただ、怠惰な平和を貪ることが権利と言わんばかりに生きている。そんな物は家畜……いや、ただ捕食されるだけの羊の考えでしかなかった。

だから、私は私の中に居る唯一人間だと認められる〝ソフィア〟を、私が信じたソフィアという暴力をまぬけ面で否定してくる平和だとかを宣う生物が嫌いだった。

私達を消費という暴力で贄にして見ることもなく、貪り続けるこの社会の象徴である鉄の塔が乱立するこの社会が嫌いだった。そこに住む人間も嫌いだった。壊したかった。全部……全て壊したかった。

私達を見降ろす〝ビル〟という名の鉄の塔が壊れるさまを、人々が苦しむ様を見たかった。

獣の表情になった姉のソフィア、私が強盗で殺した時に私を見るソフィアの顔、博物館で見た『皇女ソフィア』の憤怒の姿、だから私はこの感情と表現を〝ソフィア〟とも名付けた。

……この社会は際限の無い〝怒り〟で満たされ、何れ〝私達の怒り〟に怯え苦しむことになるだろう。私が育てた死の崇拝、テロリスト、無敵の人と名付けられた荒魂がこの世を席巻するだろう。

ここが聖書通りの天の国だとたとえるなら、……そう、人々が眠っている間に敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行き、毒麦という芽が実る。

私はその言葉通りに隠世の門を開いて、荒魂という毒麦を蒔いて、敵意という芽を〝ソフィア〟という感情を実らせた。

そして、毒麦を撒いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりを告げ、刈り入れる者は天使である。……そのように、何れは悪魔という毒麦は天使によって毒麦を集めるように刈り入れられ、集められた毒麦は燃え盛る炉によって、その火に焼かれることで、この世の終わりが告げられるのだ。

だが、悪魔は火にくべられて終わることはない。何故なら、それを見た者の中には泣きわめいて歯ぎしりする者が居るのだから。そうして、その感情から、過去の悪魔よりも強く新しい〝ソフィア〟が生まれる。それと同じ事が何度も何度も繰り返すのだ。

異常の定義が何度も繰り返すことであるのと同じであるように。

そうして私は、彼女達の……過去の悪魔の礎の一つとなり、新しくより強い悪魔の〝ソフィア〟の糧となるのだ。

そう思い、彼を見た。……何の抵抗も無く、笑って人の半殺しにする幼子、優という私以上の悪魔に、私の糧となるに相応しい者に、あの子こそが…いや、あの子のようになりたかった。そうすれば、そうすることで〝ソフィア〟は私以上となれる。

……だけど、彼は友愛を是とする者であった。私の望む悪魔でもなければ、私を見下ろし続ける鉄の塔を壊してくれる破壊の申し子でもなかった――――。

……私は、眠っていたのだろうか。
いや、眠っていた。戦争を望む私が……眠っているときに毒麦を蒔かれたらどうする。いや、その方が良いのだった。
何故なら、私は戦争を、天使が毒麦を刈り入れる時を望んだのだ。ならば、目覚めたときにそうなっていることを望むべきではないだろうか？そう自分に問答していた。
……だが、私が眠っている間に私は敵に殺され、イチキシマヒメが討伐されたら、それはそれで喜ばしくない展開だ。
もう少し、見ていたいのだ。……私が嫌った鉄の塔。ストリートチルドレンだった私達を下にして築かれた鉄の塔のようなビルは、あんな醜い建物は焼かれて、原型を留めぬほどに壊れ去ってしまう姿となった方が心地よいのだ。
鉄骨が顕となったビルと血と業火によって彩られた大地と〝平和〟という私達を消費の暴力の下へと晒した声が怨嗟の声に晒される様を見たいのだ。
この世が、地球が原作品であるならば、その平和に毒された大地の上を汚す私自身の二次創作ような物で彩らせる。そうして、怒りを憎悪を復讐をソフィアという形で表現することで、この耳障りで不快な社会に私達は打ち勝つのだ。
……だが、私が毒麦を蒔いた結果だろうか？毒麦を刈り入れ、毒麦を炉に入れ込もうとする天使が現れたため、私は座っていた椅子から立ち上がった。
「……誰かと思えば、貴女でしたか？」
確か、天使の名は、衛藤　可奈美だったろうか？多分、そんな名前だと思う。
そんなことを考えていたとき、可奈美という者は私に銃を向けた。
……だが、身体を横にして、右手だけで拳銃のグリップを持つだけでなく、身体の中心に銃の標準が合っていないという一目で狙って撃

つということからかけ離れているとしか思えない構え方からして、私にそうそう当たるような物ではないと直ぐ様に理解し、私は堂々と構えていた。

何故、そのようなことだけで判断したのかと言うと、銃という物は意外とデリケートな物で銃口が狙いより3ミリ少しズレるだけで10センチもズレる代物である。それ故に、身体の中心に銃の標準が合っていない構え方からして当たらないと踏んだのである。……だが、運悪く当たることがあるだろうが、一発当たったところで荒魂を体内に入れている私にとってみれば、何の支障も無い。

それ故に、私は可奈美という者が私に発砲するのを待っていた。……すると、爆ぜる音が聴こえたが、案の定に可奈美の放った弾丸は私の後ろの壁に風穴を開けるだけだった。

「…何で!?!」

それだけでなく、可奈美という奴は当たらなかったことに驚いたことで、彼女は銃という物は引き金を引けば当たる物となっていると思っている節があるのだろう。

……そう思い込んでしまった理由は、優という子供を見てそう思い込んでしまったのだろうか?

残念だが、引き金を引いただけでハリウッド映画の主人公のように簡単に当たる物であれば、世界の兵隊が素人を一人前にすべく3カ月もの期間を要する訳が無い。優という子供が銃を撃って外すことなく当てられたのは、タギツヒメの龍眼で弾道と敵の進路を予測して撃っているからこそ当てられた。ただ、それだけに過ぎない。

……無論、そういう私も、この情報は優を処分したいＣＩＡ側から齎された情報のため、当たっているとは思うが、私と優の共倒れを狙って重要な情報を伏せている可能性も有るために正確かどうかは分からない。

とはいえ、可奈美という者が、先程の声で銃を撃ったどころか、使い慣れていないということが分かった。

なら、やりようはある。そう即座に判断した私は、可奈美が少し前に右足を出しているという姿勢から、私から見て左に動き……いや、

そういえば、右足が利き足の者は右利きであり、右利きの者は利き目が右という可能性が高く、利き目が右な者は左から流れて来る物よりも右から流れて来る物の方が素早く見ることができることを思い出し、それを実行しようと考えていた――――。

……姫和ちゃんを気絶させた私は、そのまま上へと目指して行った。上を目指しながら、姫和ちゃんを気絶させたときのことを思い出していた――――。

「あああぁぁぁ、ううぅあああぁぁぁっ!!!!」

叫ぶ、叫んで、獣のように姫和ちゃんは叫んで、私に斬り掛かった。

……でも、これは私が追い詰めて、追い詰めて冥加刀使にした結果なんだと思うと、何も言えなかった。非難することもできなかった。

「あぁぁぁ……あああユウ優ゆうユウ優!!!!」

写シを張っていなかったから、斬ることもできなかった。

……これが、私の罪なのかな?これが、私が姫和ちゃんに行ってきたことへの報いなのかな?

「ユウ優ゆうユウ優ユウ優ゆうユウ優ユウ優ゆうユウ優っ!!!!」

斬られても仕方がないことをしたと思っている。だからなのか、私は写シを一度、姫和ちゃんに斬られるのを我慢する。姫和ちゃんの罪悪感からなのか集中が途切れて、張り直した写シをもう一度斬られてしまう。それでも私は、何度斬られても私は、姫和ちゃんに対する罪悪感が一杯で斬り掛かることすら出来なかった。

『私、思ったんです。……こんな刀なんか振り回していても意味が無

いって、そう思ったときに、刀を捨てた先にも道が有るんじゃないかって考え始めたとき、その道の先に有る物こそが優ちゃんやタギツヒメ達が本当に望んでいた物なんじゃないかって思えたんです。』

……それでも、

『……泣かないで……涙は……あの子達に取って置いて……それが……私の……贖罪になるから。……だから……あの子の下へ行って……歩いて……上げて。』

それでも、私はっ!!

もう一度、写シを張り替えて、

「ユウ優ゆうユウ優が一杯居るっ……《／ｘｂｉｇ》優ゆうユウ優が一杯居るっ!!!」

私は姫和ちゃんの嗚の羽返しのように両手を広げて、もう一度姫和ちゃんの御刀を受ける。

「……うぐぅっ!!」

姫和ちゃんの一撃を受けた私は、その痛みに顔をしかめ、気を失いそうになる。だけど、姫和ちゃんが御刀を振り下ろした体勢になる。それが、私の狙いだった。

私はそのまま御刀の千鳥から手を離すと、姫和ちゃんの御刀である小烏丸の柄に右手で掴む。そうして、時計回りに回すと、姫和ちゃんの手から小烏丸を奪い取って、投げ捨てた。

「う?……可奈美?」

そうして、小烏丸が手許から離れたことに驚いた姫和ちゃんの顎を左手の掌底で打ち抜く。

握り拳で殴ってしまえば、この先の戦い、イチキシマヒメとの戦いにおいて指を痛めて御刀が上手く握れないということになるから、手の一番硬い部分である掌底で打ち抜いた。

そうして、姫和ちゃんを気絶させると、私は、

「……ゴメン、姫和ちゃん。」

私は、イチキシマヒメを斬るために進まなければならないんだ!!

そう思って、私は……、

『……だから私は、友達の理想のために、私は行くよ。……イチキシマ

ヒメの所へ。』

私は重荷を背負うと言った姫和ちゃんを、自分の浅はかな考えの下に冥加刀使にして苦しめた姫和ちゃんを置いて先に進んだ。

歩ちゃんに言った言葉を思い出して、それで必死に罪悪感を誤魔化して。

『可奈美は優しいね。優しいし友達思いだけど冷たくて自分本位。』

どこまで行っても冷たくて自分本位な自分。相手の事情も考慮せずに剣術で理解し合えるという考えを押し付ける勘違いした人間。

……そんな私に、友愛を述べる口なんて、友情を語る資格なんて無かった!!

『衛藤隊員！心拍数と血圧が急上昇しているわ！返事をして!!……一体何が有ったの!!?』

そんなことを考えているとき、霞さんの声が聞こえる。……だから、私は、

「……大丈夫です。ここからは私が一人で!!」

データリンクを切った。……そうして、私は、私は一人になった。

一人になった私は階段を上り、ある人に出会う。……その人は、

「……誰かと思えば、貴女でしたか？」

優ちゃんを殺したソフィアだった。その姿を見たとき、私は銃を構える。

だけど、それを見たソフィアは何でも無いかのように堂々としていることに腹が立ったから私は、

パン――――。

引き金を引いた。

爆ぜる音と共に、手に衝撃を感じたけど、私は自分の頭の中だけで想像したソフィアが私の銃弾に当たって後ろに吹き飛ぶ様を、映画やマンガのように敵が銃弾に当たったときのリアクションを想像しながら引き金を引いていた。……だけど、

「…何で!!?」

私が想像していたのとは違って、弾は明後日の方向へ飛んでいた。

何故、それが分かったのかと言うと、私の目が着弾点を捉えたから。

でも、それにソフィアも気付いたのか、私が外した瞬間に私から見て右に動いていた。
「…くっ!?」
だからこそ私は、ソフィアに銃口を合わせるべく左に動かそうとするけど、身体ごと動かさないとならなかったために、右に動いたソフィアに銃口を向けるのが遅れてしまう。
それだけでなく、ソフィアは右から投げナイフを投げてくる。
「うわっ!?」
そのため、拳銃しか持っていない私は慌てて身体を捻って躱すけど、その隙に御刀を手に持つソフィアの接近を許してしまう。そうして、私は御刀で斬られる前に拳銃を手放して、急いで御刀を抜いてソフィアの御刀による斬撃を御刀でどうにか防いだ。
……間一髪だった。もしも、私が携えている御刀が抜くのに時間の掛からない刀身の短い千鳥でなかったら、刀身が長く抜くのに手間取る他の御刀を所持することになっていたら、私はソフィアに一度写シを斬られ、不利な状況で戦わされたかもしれない。
「……なかなか、しぶとい。」
ソフィアはそう言うと、私から距離を取って構え直していた。そうして、私が投げ捨てた拳銃を見ると、ソフィアは私に向かって話しかけてきた。
「ふふふ……ハハハハハ、遂に紛い物の神で出来た刀と剣術を捨てて、本当の〝殺意〟を手にしてくれましたか。それで、私の期待通りの獣になっているのですか?」
「……そう?でも、私は貴女のことなんかこれっぽっちも期待してないけど!?」
だから、私は返事をした。……お前のことなんかどうでもいいって。
「つまらないことを言うな。……お前も冥加刀使になってるだろう?」
「ふーん。何でも分かったつもりでいる気なんだ。……でも、最近分かってきたことがあるよ?……最初見た時の貴女は何処か子供っぽ

いって思ってたんだけど、でも今はそれがよく分かるよ。ただ、単純に自分がこの世で一番の悲劇のヒロインだと思っているんでしょ?」

だから、私は彼女を否定した。……お前は子供だと。

「それで、一番不幸な自分に気付いて貰いたくって、癇癪を起こして暴れているんでしょう?構ってもらいたくて、暴れるなんて子供のやることだよ?分かってる?」

だから、私は彼女を侮辱した。……まるで子供だと。

「私が癇癪を起こして暴れているだと?それは私だけのことですか?」

だけど、彼女は私にこう返してきた。……癇癪を起こして暴れる者は私だけかと。

「……ならば、この社会に〝怒り〟を感じない者など、何処に居ます?……復讐に駆られた者、横須賀湾での舞草と変革派の争い、国会前で暴れた人達、そして舞草での貴女達が行ったこと、貴女なら気付いているんじゃないんですか?」

だけど、彼女は私にこう返してきた。……〝怒り〟という感情に従うのは、誰なのかと。

「最早、平和など過去の遺物へと変わりつつあることを、これからは私が求めた〝獣〟や〝狼〟となった獰猛な戦士が必要となる時代が訪れることを貴女は理解しているハズだ。人間も荒魂と同様に互いに殺し合い、そして荒魂と同様に心の中に空いた部分から生まれた孤独と飢えに抗うことが出来ずに怒り出して他人を蹂躙することなく傷付けることを。」

だけど、彼女は私にこう返してきた。……平和の時代は終わり、戦乱の時代が訪れるであろうことを。

「復讐に燃える刀使、テロリスト、無敵の人、私のような獣。……いいか、世の中の人間、いや、この社会は、この現世(うつしよ)と言われる世界はな、誰かに蹴落とされたり、誰かに大切な物や者を奪われたりした喪失感から来る〝怒り〟で満ち溢れてた人間だらけなんだよ!つまり、人間はもう喪失感から来る怒りで異形の姿となった荒魂なんだよ!!だから、私は本音は誰もが待ち望んでいる〝獣の世界〟を

創ってやるんだ!!そうすりゃ、私を助けるために獣となったソフィアに何時でも会えるんだからなァ!!」

そして、彼女は感情的になったのか、私にこう告げて来た。

人間は…いや、この世に生きる者は全て荒魂なのだと。

そうして、私に斬り掛かったソフィアは御刀を前にして突っ込んで来た。だから、私は鍔迫り合いに持ち込んで、私の千鳥の鍔でソフィアが持つ御刀の鍔を持ち上げるように弾いて、胴に一本と考えるが、

「…え?」

その考えは読まれていたのかは分からないけど、ソフィアは自身が持っている御刀を私に向けて投げた。

「な!?」

それに虚を突かれた私は、ソフィアが投げたことで回りながら迫って来る御刀を私は御刀で防ぐけど、その隙にソフィアの接近を許してしまって、私の御刀である千鳥の刀身を彼女は掴む。……そうして、ソフィアは掴んだ私の御刀をぐいっと後ろに引っ張ると同時に私の鳩尾に肘打ちをする。

「ゲホッ!?」

……ソフィアの強烈な肘打ちを受けた私は、私が最も信頼する武器である御刀千鳥を手放すことになってしまった。刀使の最大の武器である御刀を捨てさせる。……いや、これは私が持つ最大の武器は剣術であり、そしてそれに適した武器は御刀であると想定した行動なのだと理解してしまった。

「くぅっ…!」

けど、写シのお陰で気を失うことは無かったために、直ぐに体勢を整えることができた。

「これで、貴女は剣術が使えない。」

勝利を確信したのかは分からないけど、私に対して笑みを浮かべたソフィアは掴んだ千鳥を放り投げた後にコートを脱いで、私服で身を包んでS装備を見に纏う歪な私とは対照的に綾小路の制服を見せながら自慢げに両刃のナイフを出して来た。

……けれど、

「……。」

私も、折り畳み式の片刃のナイフを用意していた。……神性なる御刀でも何でもない、ただの冷たい殺意の念が籠った片刃のナイフ。

「ほう、まだ殺意を隠していましたか。……だが、そのナイフと同様、貴女もそうでしょう?」

私のナイフを見て、ソフィアは私のことをお前も私と同じ〝存在〟なのだろう?と説いて来た。……その、何もかも分かったかのような不敵染みた笑みが苛つくが、私は気にせず、ナイフを構え続けた。

「誰も貴女の怒りを理解しなかった。……だから貴女は親から受け継いだ物も友情にも背を向けて、たった一つの居場所さえもかなぐり捨てた。……そんな貴女が、私の〝怒り〟を否定できるのですか?むしろ、理解できるハズでしょう?」

そう言って、ソフィアは右に持っているナイフで私に斬り掛かって来た。

それを私は横に少しずらすように躱すと、カウンター狙いでソフィアの左肩を刺そうとする。けど、ソフィアは空いている左手で私のナイフの刃先を掴み、そして下に流すと、次にソフィアの左手は私の二の腕を掴んで体重を加えて下で抑えつけるように振り上げられない様にしていた。……その一連の流れを見た私は、やっとソフィアが防刃グローブを着用しているのだと気付く。そうして、ソフィアはナイフを私に向けて振り下ろそうとするけど、私はソフィアのナイフがこちらに到達する前にナイフを持つ方の右の手首を掴んで、私に斬り掛かろうとしていた動きを制止させていた。

……そうして、私とソフィアは互いにナイフを持つ方の腕を抑えられながら、膠着状態へと入って行った。

(……ぐぐっ!何…この馬鹿力……!?)

そのため、私はS装備と自身の中に在る荒魂の力で力任せで外そうとするが、腕を下にして抑えつけているために体重が加わっているせいもあってか、ビクともしなかった。……S装備と荒魂の力を使っているにも関わらずだ。つまり、ソフィア……彼女は、かなりの量の荒魂を注入して強化しているということになることが今にして分かっ

た。
「だが、そんな貴女でも私は評価している部分はあります。……荒魂のように内に抱えている〝怒り〟と〝孤独〟を武器にして暴れる様をっ!!」
そうして、ソフィアの頭突きを顔に受けた私は鼻の穴から血が流れる程の打撃を受け、怯むものの、首筋を狙おうとするソフィアのナイフが見えたために、一旦は後ろに飛び下がって形勢を立て直そうとしていた。
だけど、後ろに飛び下がったことを確認したソフィアは追撃に出るべく私に迫って来た。今の私は御刀も無いから、剣術が使えない……。だけど、
「ふっ!」
私は、右の刺してくるナイフを右半身にずらして躱しながら、相手の懐に潜りこむと下から左手でソフィアの二の腕辺りを掴むと、そのまま右のナイフでソフィアの腕を切っていた。
私がソフィアの二の腕を掴んで切りつけたことで右手に持つナイフを警戒しているであろうことは理解していたので、ソフィアにそのまま右のナイフで流れるように身体を切ろうとするのは悪手であると私は判断すると、そのまま右足でソフィアの右膝側面を引っ掛けるようにして蹴ってバランスを崩すと同時に足に意識が行くように誘導しつつ、身体のバネを利用する形で立ち上がると同時に空いた右手のナイフのグリップ底部でソフィアの顎を殴打した後、左手で掴んだ手をソフィアの腕の裾を引っ張ることに変えつつ、ソフィアの右膝を強く引っ掛けてバランスを更に崩して転ばせていた。
そのことにソフィアは驚愕の表情を浮かべるけど、私は柳生新陰流を学ぶときに柔術も少し学んでいた。理由としては私が学ぶ柳生新陰流自体が『無刀取り』といった柔術の体捌き等を取り入れているために覚えていたというのが理由だった。
「ぐっ!」
そうして、転ばせたソフィアの顔を足で蹴ろうとするけど、足蹴を脇腹に受けてしまったため、私は追撃することが出来ずにソフィアと

距離を取ってしまった。
そして、私が距離を取ってしまったことでソフィアは悠々と立ち上がることができ、私は追撃のチャンスを失う。
「……仕切り直しですね。」
そう言われた私は鼻血を袖で拭いながら、脇腹がズキズキと痛む感触を感じていた。……だけど、私はソフィアの腕をナイフで切ったこと、ソフィアの顎に一発入れたことを思い出し、自分の体術とナイフが全く通じない訳では無いということを理解した。
だけど、ガッシャーンと窓が割れる音がして、その音に反応して振り向くとタギツヒメが居たことに気付いた。

灰は灰に塵は塵に

――――タギツヒメはソフィアと可奈美が戦っている向かいのビルに居た。……そして、
「……あそこか。」
　可奈美とソフィアを確認したタギツヒメは、彼女等が居る場へと八幡力を使って窓ガラスを割りながら突入した。
「た、タギツヒメ!?」
　そして、転びながら室内に入ったタギツヒメはソフィアを見るや否や、そのままソフィアに突っ込むと彼女に向かって走り出し、タギツヒメの進路上に有ったソフィアの御刀を拾ってソフィアに投げると同時にタギツヒメはソフィアに斬り掛かる。
「うおおおおおおおおおおおおおお!!!!」
　タギツヒメに御刀を投げられたソフィアは御刀を掴み取って、迫るタギツヒメの御刀を自身が先程掴んだ御刀で受け、鍔迫り合いに持ち込む。
「おおおおおおおおおおおおおおお!!!!」
　しかし、タギツヒメは尚も薙ぎと突きを流れるように繰り広げることでソフィアを押し続けていた。……そして、
「うおおおおおおおおおおおおおお!!!!」
　ソフィアとタギツヒメは窓を突き破り、そのまま外へ出て行った。
　……タギツヒメの激昂の声と表情に臆したのか、それとも気圧されたのか、可奈美はその様を遠目で見ているしかなかった。
「……タギツヒメ。……ゴメン。」
　窓を突き破って外に、そして地上に……いや、このビルよりも低い別のビルの天井に降りて行ったタギツヒメとソフィアを見ながら、可奈美はイチキシマヒメも倒さなければならないことを思い出すと、タギツヒメを援護できないことに歯痒さを感じながら、イチキシマヒメが居るこのビルの天井へと向かって行った――――。

――――そうして、可奈美達が居たビルよりも高さが低い別のビルの天井に降り立ったタギツヒメとソフィアは互いに構えながら、対峙していた。

「……ソフィア、答えろ！何で殺した!!私の友達を、何で殺した!!!!」

人とは異なる異形の怪物と言われた荒魂のタギツヒメは憤怒の表情と感情を露にして、ソフィアに何故自分の友人を殺したのかと詰め寄った。すると、ソフィアは、

「私が望んだ者とは違うからだ。」

自分が望んだ者ではなかったから、ただそれだけの理由で殺したのだと笑いながら答えた。……それが、自身の怒りを隠すための偽りの仮面であり、人間味の無い笑いであったとしても、彼女は笑っていた。

感情を露にして全てを曝け出すが、荒魂という怪物と呼ばれているタギツヒメ。

感情を隠して作り笑いを見せるが、御刀を持つことで尊敬される刀使であるソフィア。

「あの、慇懃無礼な……我とかの口調はしないんですか？」

「辞めた。痛々しかったから。……お前は、いつも作り笑いを浮かべてるな。」

ソフィアはタギツヒメに「我」といった古風な喋り方をしないのかと指摘されるとタギツヒメは、痛々しいから辞めたと答え。

それに対してタギツヒメは、ソフィアにいつも作り笑いをしているなと返すのであった。

まるで人間のように感情的となって叫ぶ異形の怪物と呼ばれる荒魂。

機械のように感情を殺して作り笑いを浮かべながら創り物となる刀使。

二人が抱えている事情を知らない者からすれば、人とは違う異形の怪物の荒魂とそれを討伐する刀使に見える事だろう。

だが、内情は違い、そんな対照的な二人は何も言わずにお互いに剣を向けながら、ソフィアはタギツヒメにこう述べた。

「……そんな狩られて当然の死にかけの子供が使った剣よりも、最強の刀使が使った二刀流にしないのですか？」

結芽が使っていた〝弱い剣〟よりも、折神　紫が使っている〝強い剣〟にするべきではないのかとタギツヒメを挑発していた。

彼女がそう言った理由は、トーマスからタギツヒメが一番情報を持っている技が長年取り憑いていた紫の二天一流であることを知っているからこそ、そのように述べていた。

最強と言われている刀使の技を踏み躙り、奪うことで、荒魂と刀使が蔓延るこの世に対して唾を吐くことが出来るような気がしたから、そのように述べたのもあるが……。

「……違う。私が知っている〝最強の剣〟はこの剣だ。」

しかし、タギツヒメは挑発されていることに気付き、冷静になっていくと、自分が憶えている最強の剣は――――、

『――――だったらさぁ……親衛隊の中で一番強い私の剣を上げるよ。……そうすれば、最強の剣と神様が組み合わせれば、もう敵う奴は居ないから、一人で外に出ても何も怖くはないでしょ？――――』

最強の剣は天然理心流……いや、教えてくれた〝結芽の剣〟だと思ったから、それを託されたから――――、

『ふ、ふはははは。……ま、まあそうであろうな！神である我とお主の最強の剣術が組み合わされば誰も敵わんのは当然のことじゃわ!!……それに、……それに我は時の呪縛を超越しているからな!!お前の凄いことを一生……一生憶えている事ができるぞっ!!』

それを誰よりもずっと一生憶えていると約束したから――――、

「だからこそ、この剣で勝たせてもらう!!」

だからタギツヒメは、……結芽の、貴女の剣は誰よりも強いということを証明するために、目の前に居る人間を倒そうと決意していた。

「悪いが、私が知っている最強の剣はこの剣しか知らん!!」

そうすれば、彼女は結芽の剣は誰よりも強いと言った私は嘘にならないと思った。……そして、自分を信じてくれたジョニーもミカもニキータも夜見も……優も結芽の剣は誰よりも強いと言っていた。その言葉を真実にすべく、結芽を踏み躙った者であるソフィアを倒すべ

きだと……心が、そう語っていたような気がした。
「そうすれば、私が知っている結芽の剣は……誰よりも強いと証明できる!!」
それが、人とは違う異形の怪物と呼ばれた荒魂であるタギツヒメの答えであった。
「そうか、……なら私はそれを踏み躙って、踏み潰してやろう!!」
その答えを聞いたソフィアは満面の笑みでタギツヒメが語る結芽の剣を踏み躙って、踏み潰してやると答えていた。
「そうすることで、私は私が信じた友情や親愛を踏み躙る獣の世界の力こそが真実なのだということを見せてやろう!!」
そうすることで、人が信じる友情や親愛を踏み躙ることで、一番強い感情はソフィア達が見せた〝獣〟の感情であることが証明されると叫んでいた。
そうすれば、彼女達が死の間際に見せた物が無価値な物ではないと証明することができる。私が信奉した『獣の世界』こそが真実なのだと、自分が信じた物こそが正しいのだと証明することができると叫びながら。
方や自分のせいで犠牲となった子供達のために戦うタギツヒメ。
方や自分のために犠牲となった者達のために戦うソフィア。
彼女等は根底は似ているものの、その経緯は違っていた。
それ故に、タギツヒメとソフィアはお互いに刃を交え、互いに信ずる友情と力を互いに否定するかのように鍔迫り合いに持ち込むのであった。……だが、
「くっ……!?」
タギツヒメは次第にソフィアの力に押され始めていた。……つい、先程までは自分が力押しできたというのに、そこから考えられることは、
「……誘い込んだのか!?」
「あんな女よりも、貴女の方が私が求める者に近いだろうと思っただけだ!!」
可奈美ではなく、タギツヒメと戦うことを選んだということを答え

ていた。
　そうして、力負けしそうだと判断したタギツヒメは後ろに飛び下がって形勢を整えようとするものの、ソフィアはそれを許すことなく更に追撃をする。
「くぅっ……！」
　そのため、タギツヒメは後ろに下がりながら、荒魂を注入したことで刀使の力が乗算化されたソフィアの剛剣をどうにか躱し続けることしかできなかった。……しかし、ソフィアがタギツヒメの足を踏んで、動きを封ずると肩でタックルをして来たと同時に足を離すのであった。そうすることで、ソフィアはタギツヒメとの距離を空けることでタギツヒメが持つ二尺未満のニッカリ青江では刃先が届かない距離で、且つ自身が持つ三尺程ほどある御刀の刃先が届く距離でタギツヒメを斬ることができた。……だが、ソフィアが持つ御刀は数珠丸でもなければ、千鳥や小烏丸でもなかったがために致命傷を与えることはできなかったのである。
「……どうも弱いような気がするのですが？龍眼は使っていないのですか？」
　だが、どこか手ごたえが無いと思ったソフィアはふとそう聞いてしまった。
「ああ、使わない。……私が知っている最強の剣は結芽が使っていた剣だ！みんなそう言っていた!!」
　そのソフィアの問いにタギツヒメは龍眼を使わずに、みんなが強いと認めていた結芽が託してくれた剣のみで戦うと答えていた。
「ああ、そうですか。下らない。……なら、もう一度その結芽の剣を砕いてやろう!!」
　その答えを聞いたソフィアは、それを力で捻じ伏せ、踏み躙ると宣言した。……それを聞いたタギツヒメは、
「……絶対に勝つ！一番強いのは託された剣だって証明してやる!!」
　ソフィアに上段から振り下ろすように斬り掛かる。しかし、ソフィアは刀を横にしてタギツヒメの斬撃を御刀で受けると、自らの刀身を左手の防刃グローブで掴んで左手を後ろに回しながら、タギツヒメの

右に回ると右手に持つ柄をタギツヒメの側頭部に目掛けて近付けると柄頭で殴打する。
「がっ!……そして、それを証明すれば、もうみんなのことを忘れないから!!」
そうして、タギツヒメはソフィアの御刀による柄頭の殴打によって、一瞬よろめくもののどうにか立ち直るのだが、左手で支えて掬い上げるように来るソフィアの斬撃を躱すことが出来ずに又も受けてしまう。
「ぐっ!!……だから、それが、私の償いであり、私がしなければならない――――」
ソフィアの剛剣を何度も受けながら、息を上げながらもタギツヒメはそう答えていた。
必ず、結芽の剣で倒すと。……そうして、タギツヒメは何度もあしらわれるように斬られても諦めることなくソフィアに向かって斬り掛かって行くが、経験の差であろうか、またもいなされ、カウンターの斬撃がタギツヒメに迫っていた。
――――そのとき、タギツヒメの耳に誰かの声が聞こえた。
『……あんま無理すんなよ。顔に出てんぞ。』
死んだジョニーが目の前で熱くなるなと言っていた。……それにより、タギツヒメは幾分か冷静になる。すると、何故かは分からないが、ソフィアの動きが見え始めていた。
「何!?」
それ故に、タギツヒメはソフィアのカウンターの斬撃を躱すことができた。……そして、タギツヒメは後ろに飛び退き、片膝を付いた体勢となったために、ソフィアは追撃するべく斬り掛かるが、
『立てっ!私の剣術を使っておいて、負けんなぁっ!!』
タギツヒメはまるで分かっていたかのように……いや、結芽の声に従うかのように、ソフィアの袈裟斬りを完璧に防いでいた。
『結芽おねーちゃんは弱くないってこと、証明させてあげてっ!!』
そして、何処からか聞こえて来たニキータの声により、タギツヒメは奮起する。……これは、そう。龍眼が見せる幻覚のような物だと分

かっていた。
（……これは……これは、そう、龍眼が見せてくれる物……。私の心が見せてくる光景だ。）
……分かっていたが、タギツヒメは結芽が持っていた御刀ニッカリ青江を見やると、こう思い始めていた。
（……みんな、此処に居るんだね。）
まだ、みんなは私の中に、この御刀の中に居るということを龍眼に教えてもらった。
結芽の剣が強いというのを私だけが証明することに何をそんなに剣術だけに拘る必要があったのだろうか？
結芽も夜見もジョニーもミカもニキータも優と居たみんなの記憶が私の中に在る。私の中に在る結芽と夜見がソフィアと戦った記憶の中にも、結芽が託してくれたニッカリ青江の中にも、私が使う天然理心流の中にもみんなが生きているというのに。
……なら、答えは決まっている。もう自分は一人で戦っていないと。
「……ついに、紛い物の剣術を捨て、龍眼を使う気になりましたか？」
その姿を見たソフィアは、感嘆としながらタギツヒメにそう述べていた。……しかし、タギツヒメは、
「……いや、違う。……これは、私の友人達が教えてくれたものだ!!」
そう言って否定した。
「何を言うかと思えば、……それらは私が殺したんですよ!?そんな世迷い言で自分が龍眼を使った事実に対して誤魔化そうとでも？」
「そうだ。お前が殺した。……だけど、お前は結芽と何度も戦っただろう？夜見とも戦っただろう？」
しかし、ソフィアは納得することが出来ず、タギツヒメに龍眼を使ったことを認め、純粋な暴力こそが全てであると認めろと迫るが、タギツヒメの中にはソフィアと戦った結芽と夜見の記憶が残っていることを話した。
「ええ。自分が不幸な人間だと思い込んでる馬鹿が苦しむ姿を見るのは、とても愉快ですからねえ!!それがどうしたって言うんです!?」

「……そのとき、何度も何度も結芽とお前が戦った記憶が私の中に有る。夜見がお前になぶり殺しにされた記憶が私の中に有る。……だからこそ、お前の戦い方が分かり易くなった。」

だが、タギツヒメの言葉の意味を理解できなかったソフィアは結芽と夜見をなぶり殺し同然に殺せたことが愉快であったと述べることでタギツヒメを更に挑発しようとするが、タギツヒメは怒るどころか、まるで理解していないソフィアに呆れたかのような声音を出して、ソフィアに結芽と夜見の二人と戦ってくれたお陰で、その両人の記憶を持つタギツヒメはソフィアの攻撃に対処出来るようになったと答えた。

……それは、嘗て優が紫に取り憑いていた大荒魂との戦いで燕　結芽の記憶から紫の動きを読み取って攻撃を対処していた物と同じ理屈であった。

「お前の戦いを見て分かったよ。……お前は、結芽と夜見の二人と戦ったときから〝何も変わっていない〟ということが、よく分かったよ。」

……つまり、それはソフィアが結芽と戦ったときから何一つ変わっていないという指摘でもあり、ソフィアにとってその指摘は、大事にしている〝ソフィアという写シ〟を意図せずに侮辱していることになってしまった。

故に、激昂したソフィアは無言のままにタギツヒメへと突っ込む。しかし、全ていなされてしまった。……そう、全て。

そのタギツヒメの姿を見るしかないソフィアは自然と自分が歩んだ過去の全てを否定されたかのように感じ、

（……何故だ!?何故、通じないっ!?）

次第に焦りの感情を出し始めていた。

だが、その一方でタギツヒメは自然とみんなが居ると、この自分達荒魂の天敵である御刀の剣戟の音が奏でる場所こそが荒魂である自分の孤独感が埋まっていく感覚がした。

刀使である可奈美は強くなりすぎて孤独を感じるのとは対照的に、常に自身の怒りを理解されることなく暴れるソフィアとは対照的に、

タギツヒメは剣を通して孤独感が埋まるということになったのである……。

（……ああ、分かっているこれは。）

そして、この感情は可奈美に教えてもらった物である。そのときの彼女は私ではなく、優に向けて言っていたのだろうことも分かる。……だけど、だからこそ、ニッカリ青江を託してくれた私がそれを言葉にする。

「……そんな魂のこもってない剣じゃ、」

それ故に、タギツヒメは述べる。ソフィアは在りもしない幻影を追い続けたことで、貴女自身の中は何も育たなかったのだと。

だから、貴女の剣はどう足掻いても貴女自身の魂がこもっていないのだと。……どんなに足掻いても中身の無い、空っぽでしかない空虚な剣だと。

「何も斬れない!!」

そんな貴女自身が入っていない空っぽの剣では、貴女自身の敵は何も斬れないのだと、強く反論しながら、ソフィアの身体にニッカリ青江の刃を食い込ませ、ソフィアの身体を引き裂くと、ソフィアの身体から大量の血が流れ出ることになるのであった。

「……私が!?……あんな荒魂に負ける!?!!」

そして、ソフィアは先程の力比べで自身よりも劣ると思っていたタギツヒメに斬られたという事実に驚愕し、自らの信奉する物が完全に否定されたかのような気持ちとなり、地に倒れ伏しそうになったために片膝を地面に付けてしまう。……しかし、その〝事実〟が彼女に否定する力を与えたのか、ソフィアは渾身の力を出し、タギツヒメから見ると地から這い出た悪魔のように立ち上がるとタギツヒメの首に手を絡めて首を絞め始めていた。……御刀以外の攻撃では荒魂には効果が無いということすら忘れたかのように。

「…違う。……チガウッ!!……力こそが……純粋な暴力こそが……獣となった者こそが本当の人の姿だ!!」

そして、ソフィアはタギツヒメに語る。力こそが、純粋な暴力こそが、獣のように力を振るう者こそが人の本当の姿だと、まるで今まで

見せて来たソフィアではない何かが取り憑いて答えているかのように迫っていた。

「……平和？……親愛？……そんな世界が何処に？……そんな下らん理想の下で……私達は理想の消費物として生きて来たよ!!」

そして、ソフィアはタギツヒメの首を締めながら、タギツヒメを持ち上げると、フェンスの手摺の所まで持ち上げていき、タギツヒメを転落させようとする所まで追い詰めてから問う。

平和や親愛の有る世界が何処に在ると？何処に存在すると？

「……責務。……血族。……名誉。……皆、本来の姿を……刀使も荒魂も忘れてる!!」

「……戦のみが、望みだったのか？」

そして、ソフィアはタギツヒメの首を絞めながら、タギツヒメの問いに答えた。

「望みはただ……お前達に認めさせることだ。……お前達が何で……あるかを……聖人君子のなりそこないだとっ!!」

妄執に囚われたかのように、ソフィアは呻くようにタギツヒメに答えていた。

お前達は平和主義を標榜する聖人君子ではなく、刀か銃を使う暴力の化身であると……。

聖人君子のように振る舞い、上から見下ろし続け消費という名の暴力を使い続ける者達であると……。

「お前達……皆に……子供を残せなくなった私の……私が横須賀湾やこの内乱……私が望んだ大災厄で育てた獣達に……感情を持つ生物は……私のように〝ソフィア〟になれることをっ!!」

お前達は……いや、名誉や血族、責務を抱く刀使も荒魂も……いや、感情を持つ生物は、嘗て無力だった少女である私のように〝ソフィア〟になれると答えていた。

……無力な少女の私を助けたソフィアのように、大人の黒い欲望によって流産したソフィアのように、私が殺したソフィアの憎悪の表情のように、皆がそのソフィアになれる。と地の底から這い出る亡者のように答えていた。……しかし、

（……力が弱まった？）

自身の首に絡まるソフィアの手の力が弱まったような気がしたタギツヒメは、そのままソフィアの腕を掴むと、そのまま後ろに引っ張って、ソフィアと共に、

「う、おおおおおおおお!!」

落下するのであった。

……落下しながら、タギツヒメはソフィアの腕の力が弱まった理由を理解した。……恐らく、ソフィアは〝刀使〟の力を失ったのだ。

刀使を荒魂と融合させれば、その力は乗算。ならば、刀使の力を失ったソフィアはその乗算の力を失ってしまい。今のソフィアが持つ力は荒魂のみとなった。

……だからこそ、ソフィアの腕の力が弱まり、首を締める力が弱まったことで意識がハッキリしたタギツヒメはソフィアと共に落下するという行動が取れた。……そして、タギツヒメは御刀以外の攻撃はダメージを受けないため、落下程度では負傷しなかったので直ぐ様立ち上がれたものの、人であるソフィアは運良くゴミ袋が沢山有るところに落ちたとはいえ、落下のダメージを大きく受け、何本か骨折してしまうのであった。

「……まだ、まだだ。」

……しかし、ソフィアは地の底から這い上がる悪魔……いや、亡者の如く立ち上がるのであった。

「まだ……終われない。」

体内に宿った荒魂によって強化された身体のお陰で息があるのだろうか？

……タギツヒメの一撃で大量の血が流れ、足が折れ、肋骨も折れていると言うのに立ち上がり、意識が朦朧となっても、御刀を持ってソフィアはタギツヒメに向かって行った。

「……私が……目指した世界は……」

嘗て無力な少女だった自分を助けてくれたソフィア、大人の黒い欲望によって殺されたソフィア、自分が初めて殺したソフィア、それら

を思い出しながら……。
「直ぐ其処に……っ!?」
しかし、タギツヒメの元へと辿り着くことはなかった……。後ろから何者かに刺されたから。
「……お前がソフィアだな？」
その者は……綾小路の制服を着ていることから、確か維新派の人間だったはず。なのに、何故此方に刃を向けるのか？
「私の姉さんを殺した報いを受けろ!!」
その言葉を発するところから嘗て私が殺した人間の中の親族なのだろう。
その綾小路の制服を着る少女が、私を刺した後、グリっと捻る。
……その感触を感じたソフィアは、
「……弱者が……私の邪魔をするなぁっ!!!」
と言って、そのまま綾小路の制服を着る少女の首を掴んで持ち上げ、自身が持つ御刀で少女の腹に深々と刺して、捻りながら引き抜くことで大量出血させ、綾小路の少女を出血性ショックに導くことで始末していた。
……そして、ソフィアも力尽きたのか倒れるのであった。ゴミ袋の中に有った不快な臭いを嗅ぎながら。
しかし、ソフィアにとってその匂いは……、
（……ああ、懐かしい。……この匂いは、私が居た下水道の匂いだ。）
嘗ての無力であった少女の頃に戻れる物であった。
その匂いを嗅ぎながら、ソフィアであった少女は嘗ての下水道の仲間達と再開していた。
（……待ってよ。……みんな、いっしょに。）
こうして、ソフィアは死に、少女は嘗ての仲間達と都会のゴミ捨て場で再開するのでした――――。

母の剣

こうして、都会のゴミ捨て場の様な場所で死んだソフィアの死を見たタギツヒメは勝利を感じていた。

「……みんな、やったよ。……天然理心流で勝てたよ。」

だが、それと同時にタギツヒメはソフィアに剣を突き立てた綾小路の少女の死を見たことで、結芽を思い出し、虚しさを感じ、勝利の味を霧散させていた。

……人は永遠の命が無いのだと。

そうして、ソフィアと綾小路の少女の死を見た後、この場は自分しか存在しないのだと理解してしまった。

それ故に、タギツヒメは戦いが終われば、剣が振るえる状況じゃなくなれば、みんな消えてしまうのだと理解してしまった。

そう理解したタギツヒメは、剣を振り続ければみんなにずっと会えるのではないかと考えてしまう。それ故に、

――――ずっと、戦いが続けば、みんなに会える。そうするには〝獣の世界〟にするのが一番ではないかと。

タギツヒメは、そこまで考えるとハッとなって、その考えを首を横に振って中断する。消そうとした。自分もソフィアに毒されることはないと考えながら。

そうして、タギツヒメは後ろ髪を引かれる思いをしながら、ソフィアと綾小路の少女の死体を後にして、タギツヒメは獣の世界を求める昏い感情を忘れ去るために、イチキシマヒメの元へと向かうのであった――――。

――そうして、タギツヒメとソフィアが別のビルへと飛び立つ

処を見た私はイチキシマヒメを討つべく上へと向かって行った。
ただひたすらに、一つの目標に向かって……そうして私はようやくイチキシマヒメに辿り着いた。
ここで、コイツを倒せれば、全てが終わると信じて……。
「……何の用？」
屋上のヘリポートまで来た私に気付いたのか、イチキシマヒメは振り向いて私に何の用で来たのかと尋ねていた。それを見た私は、イチキシマヒメにこう返事をした。
「……イチキシマヒメ、アナタを討伐しに来た。……この世界を守るために。」
自身の残っている信念や決意。それだけを理由にイチキシマヒメを斬りに来たと答えながら、私は御刀千鳥の切っ先を向けて構えていた。
……一応、背中を見せているときに喋ることも無くいきなり斬り掛かることもできたのだけど、私は敢えてそれをしなかった。
理由は、龍眼が有るため、不意打ちは効かないだろうということ。そして、私は前にイチキシマヒメを見た時に口を覆うマスクがしてあったのに、今はしていないということに気付き、念のために目標のイチキシマヒメなのかどうかを確認するためにイチキシマヒメを討伐すると言って私はイチキシマヒメ本人かどうか確認していた。
「……そっか、私を討ちに来たという訳か。」
そのイチキシマヒメの言葉を聞いた私は、大荒魂らしからぬ口調に違和感を感じながらも、黒かった上空が鏡合わせのようになっていると判別できるほどに隠世の境目が迫って来ていることを確認した私は、
（……時間が無い。ここで決める!!）
と判断し、イチキシマヒメへ向かって、後の先を取ることなく斬り掛かって行った。
自分が持つ御刀は千鳥であり、この御刀が大荒魂に対して有効な一撃を与えることができることを知っていたこともあって、私は勝利を感じ、負けないと思っていた。……いや、負けないと思わないように

していた。
「せやあああああ!!」
だけど、イチキシマヒメは右手で御刀を持っているせいか右足を少し前に出しつつ構えていた。
そして、御刀をくるっと回して円の軌道の様に描くと、不思議なことに御刀の刀身が私の目から魔法の様に消えてしまったように見えた。
「あっ!?」
それだけ、たったそれだけでも、御刀を切っ先を見失うため、私とってみれば死活問題だった。……それ故に、私はイチキシマヒメの御刀は何処に有るのかと目をしきりに動かすと既に目の前まで迫って来ていることに気付いた。
「うわあ!?!!」
そのため、私は頭と身体を後ろに必死で下げると同時に、運悪く背中から落ちるように落ちたけど、運良くイチキシマヒメの横斬りを私から見て右横を滑るように潜り込んだことでイチキシマヒメの切っ先から逃れることができ、イチキシマヒメの御刀をどうにか躱すことができた。
だけど、それを見たイチキシマヒメは、御刀を右手から左手に持ち替えることで、イチキシマヒメから見て私が居る左後ろの位置への攻撃が容易になり、左片手でイチキシマヒメは私目掛けて振り下ろして来た。
「えっ!?」
それを見た私は驚愕した。
御刀を回して円の軌道を描いて一瞬だけ、鏡のように研ぎ澄まされた刀を地面か空を映すことで景色と同化し、こちらから見るとまるで刀身が消えたかのように思わせ、刀の切っ先を見失わせるテクニック。
刀を左右の手で持ち替えるのは癖だといつも言っていたけど、本当は左右の持ち手を入れ替えることで剣の間合いを変え、相手に対して間合いを惑わせることができる所作。

……そのテクニックと所作は、

「……お母さん。」

お母さんがいつも私に剣術の稽古で見せてくれたものだったんだから。それ故に、呆然とした私はイチキシマヒメの御刀の斬撃を背中から受けることになる。

「……くっ！」

写シを斬られた私は、気を失いそうになるものの、どうにか気を保つことができ、バッタの様に飛び跳ねるかの如く前に、前に飛んで、イチキシマヒメの剣の間合いから脱することができた。

……アレはお母さんの技？何で？何でイチキシマヒメが使えるの？私ですら、あの技は習得できなかったのに!?

……いや、優ちゃんを取り込んでいるんだから優ちゃんの記憶の中からお母さんの記憶を読み取ったのかもしれない！いや、そうであるはずだ!!

そう判断した私は、攻め方を変えれば、お母さんの技は使えないはずだと判断し、イチキシマヒメが左手に御刀を持つ今がチャンスだと判断しつつ、攻め手を……斬り方を変える。

そう考えた私は、地を這う蛇のように背を屈めて、下から突き上げるように迫った。

「なっ!?」

しかし、先程と同じくイチキシマヒメは円の軌道を描くと今度は御刀の刀身に空を写すことで、下から向かってくる私の目に対して欺瞞を行っていた。

そして、先程と同じく、刀の切っ先を見失い、又も眼前に刀が迫って来た。

……けど、今度はどうにか横に転ぶことでどうにか躱すことができたんだけど、イチキシマヒメはそれを許すことなく私に対して追撃を行っていた。

そして、その追撃を写シを何度も斬られては張り直しつつ後ろに退

がることでどうにか捌くけど、左手から右手、右手から左手と持ち手を替えながらの連撃、御刀の刀身を景色と同化させることによって切っ先を見失わせたり、左手から右手、右手から左手へと剣を持つ手を変えられることで間合いが狂う様な感覚を感じながら、私は後ろに下がるしかなかった。

後ろに退がる。写シを斬られる。後ろに後退する。写シを剥がされる。

何度も写シを斬られることで私は形勢が不利だと悟ったために、一度バックステップで大きく跳んで距離を開ける様に後退して、形勢を立て直そうとした。

そのため、何度も写シを斬られたことで体力の消耗が激しくなった私にイチキシマヒメは、

「可奈美！久しぶり！」

と気さくに話しかけていた。……まるで私の母のように。

「……違う！そんな訳ない!!」

だから私は、頭を振って力強く否定した。……目の前に居るのは母ではないと、私は力強く否定した。

疲れによる消耗でそうなったのだと、自分に言い聞かせて否定していた。

「……だって、……お母さんは。「そう、死んだ。……簀の一つの太刀で命を分けた影響で死んだんだから。」

私がお母さんが此処には居ない理由を述べようとしたら、イチキシマヒメが代わりに答えていた。……二十年前の大災厄で姫和のお母さんを助けるために命を半分差し出したことで、短命となって死んでしまったことを。

……けど、それぐらいなら、二十年前の大災厄の当事者である大荒魂なら分かるはずだと反論しようとすると、

「可奈美、二十年前の大災厄の当事者である大荒魂なら分かるはずだと言いたいんでしょ？」

私の考えが読めるのか、イチキシマヒメは私に私が考えていたことを述べていた。

「……まあ、信じられないだろうね。可奈美は覚えてる？私が言った『可奈美は優しいね。優しいし友達思いだけど冷たくて自分本位。』という言葉。それか、『刀使って素敵だと思わない？人を守って、感謝されて、剣術も学べる。最高だよね。』……という言葉の方が私だって分かるでしょ？」

それだけでなくお母さん……いや、イチキシマヒメが私にその言葉を投げかけたとき、どうしてその言葉を知っているのか不思議だった。

「可奈美がそれを知っているのは可奈美が寝ているとき、私が稽古を付けていた時に話したんだよ？……だから、私はアンタと何度も稽古を行ってきた。だから、私の記憶を通して龍眼を使えば、可奈美の剣筋も大体分かる。だから、アンタの弱い所も分かるってこと。」

だけど、イチキシマヒメにそう言われた私は何故か否定することができなかった。

……何故かは知らないけど、私の中に在る心がそうだと告げていたからこそ、否定できなかった。だから、私は藁にもすがる思いで聞いてしまった。

「……そうだって言うんなら、何で私のお母さんがイチキシマヒメになっているの!?」

何故、私のお母さんがイチキシマヒメの中に居るのかと、するとイチキシマヒメは、

「……そうだねぇ。確かにこんな荒魂の姿だと分からないかもしれないけど、イチキシマヒメの中には私の息子が居るんだから、その繋がりで隠世と現世の狭間に居た私を捉えることができたと言えば分かる？」

優ちゃんが中に居るお陰で私のお母さんと繋がることができたと答え、

「でもって、私の息子の記憶から私が早くに死んじゃったことも知った。……と言っても、隠世に居る私が１７歳以降の記憶は無いから厳密には違うかもしれない。でも、私は可奈美と優の母親だってことは分かる。」

隠世に居るお母さんは17歳以降の記憶が無いため、それ以降の記憶は無い存在ではあるけども、私と優ちゃんのお母さんであることはハッキリと分かると答えると、

「だって、優の記憶に有る可奈美は、私のことを嬉しそうに、誇らしそうに語ってくれた。……それを見たとき、私は自分のことの様に嬉しかったし、可奈美と優のことがとても愛おしかった。」

私のお母さんだと名乗るイチキシマヒメは、優ちゃんの記憶に有る私がお母さんのことを語ってくれてきた時のことを視たと言って、その時の感想が私と優ちゃんのことをとても愛おしく思えたと答えていた。

「そうして、娘や自分の息子が居ること。……そして自分が死ぬのを見たときこう思ったんだ。……もう一度、可奈美と優と共にこの世に生まれ出たいと。まだ生きていたいと。」

そして、私の母だと語るイチキシマヒメは……いや、お母さんはもう一度この世に生まれ出たいとも答えていた。幸せそうな顔で死んだお母さんを知っている私からすれば、それは、

「……う、ウソだ。」

否定したかった。……けれど、本能が私の母だと告げてくれる。目の前に居るのは私のお母さんだと。

「ウソじゃないよ～。現に私はイチキシマヒメの体の支配権を奪ってでも、もう一度生を受けたかった私。」

だけど、私の気持ちなど知ってか知らずか、イチキシマヒメの姿をした荒魂は、笑みを浮かべながら、私の母親だと告げてきた……。

「……それに、貴女がニモに語ってくれた『……ねえ、何がそんなに寂しいの？』という言葉が切欠となって、ニモは何で寂しいのか考えたらしいよ？」

それだけでなく、急に舞衣ちゃんと行った特別希少金属利用研究所に居たニモのことを話し始めていた。

「そうして、何で寂しいのか考えたときに研究者がニモは母の温もりを求めている存在だからなのではないか？といつも言われていたから、もしかしたら、自分は母を求めていたのではないかと考えた。

……だから、私と融合し〝母親の愛〟を理解しようとした。」
そしてイチキシマヒメ……いや、私のお母さんは私がニモに語りかけた言葉とフリードマンさんが語ったノロの穢れの正体を聞いたことを切欠として、〝母親の愛〟を求めたと、そして理解しようとしたと答えていた。
「……だから可奈美。貴女の中に有る私の記憶を私が取り込めば、私は藤原　美奈都ではなく、貴女のお母さんである衛藤　美奈都になれる！……貴女もそれを望んでいるはずでしょう？」
そして、お母さんは私の中に有る記憶を取り込めば、１７歳当時の藤原　美奈都ではなく、私達の〝本当の母親〟である衛藤　美奈都になれると答えていた。
そして、私に本当は母がこの世に戻ってくることを望んでいるハズだと言って詰め寄って来た。
「今度は親子水入らずで、私がずっと過ごしていた隠世と現世の狭間で永遠に過ごそう？……あそこはとっても良い場所だよ？」
今度は親子水入らずでお母さんが居た隠世と現世の狭間で永遠に過ごそうと私に語ってきた。そして、
「……今、貴女は隠世と現世の狭間で生きていけるのか不安でしょう？……でも、大丈夫。貴女は、私のために荒魂を体内に入れたじゃない？……これで、私と貴女は同じ荒魂だよ？」
私が不安を抱いていたこと。
お母さんと一緒に隠世と現世の狭間に私が生きていけるのかという迷いに対して、お母さんは私に、私がお母さんのために荒魂を体内に入れたことを指摘すると大丈夫だと言うと、
「ありがとうね、可奈美。……私のことをそんなに想ってくれて、可奈美は私にとって最高の娘だよ。」
私のことを褒めてくれた。
……たったそれだけ、たったそれだけのことだった。それだけで私は御刀を掴む力を弱める。
「いつも、私のために剣を振るってくれてたんでしょう？でも、もう苦しむことは無いんじゃない？……少しぐらい、貴女も我儘を言ってい

いのよ?おねえちゃんだからって、我慢する必要が無いのよ?」
……いや、自然と弱めてしまう。お母さんがとても幸せそうな顔をしていたから。
「……。」
ああ、此処が私が求めていたもの。
此処が私の桃源郷。
此処が私の全て。
お母さんが幸せそうなら、私も幸せ。私が幸せなら、お母さんも幸せ。

けど、剣戟の音でハッとなった私は、慌ててお母さん……いや、イチキシマヒメから距離を取るようにバックステップで後ろへと跳んでいた。
剣戟の音は……タギツヒメとイチキシマヒメが互いに刃を交えさせたことによる音であった。
「……あのさぁ、せっかくの親子水入らずを邪魔しないでくれるかな〜?」
「今度はお母さんごっこ?……節操が無いな?」
「貴女だって、神様ごっこをしていたじゃない?」
タギツヒメと私のお母さんの振りをするイチキシマヒメはそう言うと、激しい火花を散らす剣戟を行うけど、
「……ぐっ!?」
流石にお母さんの剣を遣う……いや、お母さんの剣の真似をするイチキシマヒメにタギツヒメは苦戦を強いられていた。
タギツヒメは天然理心流……いや、あれは燕さんだと思う。それを遣っていたけど、とても勝てそうに無かった。何故なら、タギツヒメ

は胸部に少し斬られているのに、一方のイチキシマヒメは一つも掠りすらしていないのだ。

だから、私もタギツヒメを援護すべくイチキシマヒメへと斬り掛かる。

……だけど、イチキシマヒメはタギツヒメと私の二人がかりの攻撃をいともたやすく相手をして、タギツヒメに対して的確な攻撃を加えていたために、片腕を飛ばされてしまう。

……多分だけど、私とタギツヒメはこれが初めての連携でもあるために自然と拙い連携となって、強力な攻撃となっていないせいもある。それに何よりも、本当に私の剣が全く通じていなかったということも強いと思う。

そして、タギツヒメは痺れを切らしたのか、大きく振り被って行く。

それを見た私は危ないと言おうとした。

「ぐっ!!」

「駄目だよ。御刀をそんなふうに振り回したら、敵に弱点を晒すだけじゃなく、こんなふうに胸部を突かれて間合いの内に入り込まれたら、どうすることも出来なくなるよ？」

だけど、遅かった。……私が危ないと言う前にタギツヒメはお母さんみたいなことを言うイチキシマヒメの数珠丸に刺し貫かれていた。

……けど、

「……つかまえた!!」

タギツヒメは刺し貫かれているにも関わらず、イチキシマヒメが持つ数珠丸を握る腕を掴んでいた。……それを見た私は、タギツヒメの意図に気付き、裂帛の声を上げる。

「う、うおおおおおおおおお!!!!」

タギツヒメによって唯一の武器である数珠丸を抑えられたイチキシマヒメは必死に引き剥がそうとするけど、上手くいっていない。対して私は何の障害も無いという完全なフリーだった。

――――これなら、どんな技でも確実に当てられる。

そう確信して、私は確実に一撃で仕留めるべく、イチキシマヒメの首を刎ねる勢いで大きく振りかぶっていた。

「だから、言ってるじゃない？」
……けど、
「御刀をそんなふうに振り回したら、敵に弱点を晒すだけだって？」
イチキシマヒメは私にそう言うと、バッサリと私の写シを胴体と切り離して斬っていた。
「……えっ？」
そうして、私は何とも間抜けな声を出して、何が起こったのか理解できていなかった。
何故？今のイチキシマヒメはタギツヒメに御刀を封じられているハズ？……そして、目を巡らせていると、答えが分かった。
何故なら、もう一本の御刀である大典太光世をもう一方の手に掴んでいたのだから。
ああ、そうか。私はそれに斬られたんだ。私はお母さんの忠告を聞かなかったから、敗れたんだ……。
そうして、私の意識は闇に呑まれていった。
――――タギツヒメの悲鳴を聞きながら。絶望の音を聞きながら。

求めるニモ　求めた美奈都

最初にボクが目を覚ましたのは、ガラスという妙な透明な膜が四角となって形成されている所に……いや、その中にある祠みたいな物の中に有る壺みたいな物に入れられたのが物心付いた時の初めての記憶だった。

ニンゲンはどうしてボクをこんな所に入れたのだろうか?それが不思議で不思議でならなかった。

そうして、次はニンゲン達がボクに珠鋼を近づけてボクを放置した。そのとき、妙な温かさを感じた。……すると、

「フリードマン博士。想定通り、距離と時間に比例して穢れの減少は計測されました。」

「……そうか、やはりノロは珠鋼を求めている。……ということか。」

「やはりこれは、博士のおっしゃる通り、珠鋼という母を求めているということでしょうか?」

ニンゲン達がそう言っていた。

母?……母とは何だろうか?ボクにはそれが理解できなかった。何故ならボクには〝母〟という概念が分からなかった。

ただ、生まれた。塊となって生まれた。

それしか、分からなかった。

「フム。……なら、彼はニモ。寂しがり屋のリトル・ニモから取ってニモと名付けよう。この実験が成功すれば、人と荒魂の関係性は今よりもっと変わる物になるかもしれない。」

そしてボクはボクじゃなくなり、ニモとなった。

寂しがり屋のリトル・ニモから取ってニモ。母の温もりを求めているからニモ。母の愛を求めているからニモ。

でも、ボクは母の愛や温もりといった物の意味が分からなかった。

寂しがり屋のリトル・ニモから取ったニモなのに。母の温もりを求めているからニモなのに。母の愛を求めているからニモなのに……。

そんなことを考えていたときに、僕を呼ぶ声がした。

「……ねえ、何がそんなに寂しいの？」
僕を呼ぶ声。……御刀を持っているところから、刀使であることは分かった。
けど、僕のことを呼ぶ刀使も僕と同じように何処か寂しそうだった……。
「……私って、剣術が大好きなのかな？心の何処かで私、優ちゃんのこと疎ましく思ってる私って本当に何なのかな？」
僕にそう語り掛ける刀使。
……僕は、その問いに答えることができなかったけど、僕は何となく言いたいことが分かった。刀使である彼女は僕と同じ〝寂しい〟ということに悩んでいて、僕と同じように誰かを求めているということに……それで僕は分かった。
彼女の母になれれば、母のことが理解できて、母のことが理解できればニモの寂しいという意味も理解できるハズだと。
だから、僕は望んだ。……彼女の母になることを。そうして、僕は研究所の外に出ることができて……そして、イチキシマヒメという荒魂の中に入ることができた。
そして、イチキシマヒメの中にはある少女の記憶が入っていた。
……〝静〟という親の愛を受けて育った娘の記憶。
彼女は僕に凄惨な暴力が親の愛だと教えてくれた。
そして、イチキシマヒメの中にはある少年の記憶が入っていた。
……僕に語り掛けてくれた刀使の少女……名前は衛藤　可奈美。その娘の〝優〟という弟の記憶に彼女の母の姿があった。
そして、僕は彼女の母がどういった人間か一部分のみ知ることができた。……そのときの彼女、衛藤　美奈都は嬉しそうな顔をしていた。そして、僕に語り掛けてくれたまだ幼い少女だった可奈美は稽古ができて嬉しそうだった。
だから僕は、あの人のようになれれば、少女の寂しいという問いに答えられるような気がした。
そして、その問いに答えることが出来れば、寂しいという気持ちが分かり、そして母の愛が理解できるような気がした。

だから僕は衛藤　美奈都になりたかった。……だけど、少女の弟の記憶、これだけじゃダメだ。情報が足りないから本人になれない。だから、僕は少女の母親である衛藤　美奈都を求めた。

でも、ボクはニモにはなった記憶が有るからニモになれるけど、ボクは衛藤　美奈都の記憶が無いから衛藤　美奈都になれない、そう理解したとき、僕は絶望した。

母の愛が得られないから、自分の中に有る寂しさが理解できないのではと絶望したんだ。

……けれど、イチキシマヒメが隠世に居るヒルコミタマの力も得ようと繋がったとき、微かに彼女を感じた。可奈美の母である美奈都という人を感じた。

この優という〝美奈都の息子〟という特別な繋がりがある人間が居なければ、隠世に漂う小さな隙間に居る美奈都を見つけることはできなかっただろう。だけど、僕はこの優ちゃんの記憶にある可奈美の振りをして、

「……可奈美？」

……不意を突いて僕は美奈都という、あの娘の母と一つになれた。

こうして、僕は美奈都になれると、母の愛を知らずに居る寂しがり屋のニモではなくなり、母の美奈都となって彼女の問いに答えることができる。僕があの可奈美という娘の悩みを解消できれば、寂しくなくなる。そうなれば、母の愛が理解出来ると信じていた。

だからなのかもしれない。ボクが……僕が母の意味を求めたのは、だからなのかもしれない。

僕は〝ニモ〟なのだから……。

だけど、母を求める余りに意識まで一つになろうとして……意識が……意識が混濁して……私、美奈都のように……いや、私は美奈都。

そうして、私は私の息子の優の記憶から、大災厄の後の世界を見ることができた。

私の息子の優の友人、ジョニーやミカちゃん達が私達の世界の裏側で少年兵となったり売春させられたり、身体を物の様に千切らされて物乞いをさせられることが有ることを知った。

親の暴力を親の愛だと思い込むことで心の辛さを和らげてどうにか生きることができた静という刀使の娘。

……本当に荒魂だけが悪いんだろうかと。あの子達を食い物にする大人が本当の邪悪なのではないのだろうかとすら考えだしてしまう。

私達が戦った後も、いや前からなのかもしれない。……人に危害を加える荒魂とか関係なく私達が守った世界は悪意で充たされていた。いや、それしか無いのかもしれない。

私が死んだ後の世界は、政治に介入したタキリヒメの記憶から国会前でも荒魂のように暴動を起こす人達が居るのだということを知った。……だから、私は、この世に存在する荒魂と人間の違いが分からなくなっていった。

だからこそ暴動を起こす人を知ったとき、荒魂や人間といったことに関係無く、たった一人の行動で混沌とした世界にすることが可能なのだというほどに世界は脆いのだということも理解してしまった。

……それだけでなく、私と簪が封印した大荒魂が居ても居なくても、この世は地獄であり、この世に生きる人は私達のことなんて気に掛ける暇も無い程に淀んでいるのだということにも気づいてしまった。

……そんな世界で、私の息子である優の記憶から可奈美が泣いていたことを理解した。だから、私はあの娘の悲しみを拭って、あの娘の寂しさや孤独を無くさなければならないという衝動とこの世界から救って上げなければという気持ちに身を任せた。

もう刀使の使命とかどうでも良い。

あんなのは、神や親から継がれる業とまるでそれが当然のことであるかのように言って、子供に何の疑問にも抱かせずに荒魂を斬らせる都合の良い言葉だ。

……だから、また、あの娘と一緒に過ごしたい。刀使や御刀が無い世界で平穏に過ごしたい。それの何が悪いの？私があの娘の母親だと理解したら、そう思うのが自然でしょう？

私はあの娘の母親なのだから。

ねえ？イチキシマヒメ？

……だから、貴女の身体を頂くね？貴女が可奈美を相手にすれば勝てないことは分かり切っていることだよね？貴女が死ねば、貴女が想っている冥加刀使と静ちゃんの想いは叶えられないよ？

……え？お前は刀使なのに、荒魂の脅威から人々を守らなくて良いのか？だって？

……だって、もうそんなことどうだって良いんだもの。

私の息子の優の記憶わ静ちゃんが教えてくれたんだよ？私と簪が頑張って守ったこの世は、剣術も刀使も政治に利用されただけの世界になって、銃と御刀は同じ物のような世界になったんだって、そんなことを知ったら、この世界がどうでもよくなった。

私が今望むのは、可奈美と共に永遠に平穏に過ごせる場所。

……私が一人で２０年間という歳月で過ごしていたあの場所で可奈美と一緒に過ごし続けることだよ？あんな血生臭い物しか無い現世のことなんか忘れて、剣術の稽古でもいい。昔話で花を咲かせながら一生あそこで過ごすのも悪くないと思うんだよね。……そして、誰も踏み込むことができない隠世の果てで一生過ごす。

きっと、私が過ごした隠世の小さな隙間も今の現世よりもずっと居心地の良い場所だから、天国のような場所だよ？

だから、私は可奈美さえ会って、其処で悠久の時を過ごせれば、それでいいんだよ？

そういった声が私の中に入って行った。……これは、私がニモに語り掛けたことが切欠となって、こうなったということだろうか？こうして、お母さんはイチキシマヒメの身体を乗っ取ったということだろうか？

そんなことを考えていると、私は気を失っていたことに気付いて、バッと起き上がると、さっきまで私がお母さんと戦っていたヘリポートの上ではないことに気が付いてしまう。

そう、ここは……。

「……病院。」

白い監獄。何も写さない何も無い白い空間。嫌なぐらい静謐な白で満たされた世界。……そして、お母さんが死んだ場所。

そんなマイナスな語句が私の頭の中で一杯になるような世界が広がっていた。……そして、

「待っていたよ。可奈美。」

その声に惹かれ、私は声がした方へと視線を送ると、

「……お母……さん……？」

其処にはお母さんが居た。

だから私は、自然とそんな言葉が出ていた。いや、出てしまっていたんだ。……でも、違う。だって、母さんは、

「……違う。違う!!だって、お母さんは――――!!」

死んだ。と言おうとしたとき、私は口噤んでしまった。……心の何処かで私はお母さんが死んだことを否定したいのだろうか？

『でも……うちのお母さんは死ぬまで幸せそうでしたよ。死ぬまでってなんか変な言い方ですけど、剣術だっていっぱい教えてくれましたし、刀使の仕事を誇りに思うって。』

私はお母さんは幸せそうに死んだと言ったのに。

「そう、死んでいる。……私はさ、隠世の小さな隙間に居た藤原　美奈都をベースに貴女の記憶と優からの記憶から再現しただけに過ぎないけど、可奈美の目の前に居る私は紛れも無く衛藤　美奈都そのもの

だと言える。」
　だけど、目の前に居る私のお母さんと名乗る人は……私と優ちゃんからの記憶から再現したお母さんだと言ってきた。
　だから、私は言い返した。
「なら……なら、私のお母さんじゃない!!」
　私のお母さんじゃないと!私はそう言い返した!!
　……だけど、私の中に在る記憶の破片が私に『目の前に居るのは紛れも無く貴女の母親です。』と告げているようにも感じていた私が居たことも否定できなかった。
「落ち着いて、可奈美。」
　その証拠に、私は目の前に居る母と名乗る存在の言葉に耳を傾けて、その言葉通りに昂った心が落ち着いて行く自分が居た。……心の何処かで目の前に居る人がお母さんであると認めている自分が居ることを否定できなかった。
「私が死んだ後も私は可奈美と一緒に剣術の稽古をしていた。……それは、間違いの無い事実で今も私は可奈美が私のことを『お母さん』と呼んだことを今も覚えてる。可奈美は覚えていないかもしれないけど……そのときはさ、お母さんじゃなくて師匠と呼ばせていたんだけど、可奈美と一緒に剣術の稽古をしながら過ごすのも悪くないと思ってた。」
　そして、私はお母さんの優しい声に惹かれ、ただ静かに耳を傾けるだけだった。
「……けど、可奈美。貴女、此処まで来るのに、大変なことばかりだったでしょ?貴女の記憶を勝手に見たのは悪かったけど……でも、もう良いんじゃない?そこまで頑張らなくても?」
　だけど、急にお母さんは私に対してこう言ってきた。
　もう、良いんじゃないかと。もう頑張らなくて良いと言ってきた。
　だから、私は、
「お母さん……?お母さん、それはどういう意味?」
　思わず問いかけてしまった。どういう意味かと。
「……可奈美。今まで私のために頑張ってくれたのは知ってるよ?

……けど、可奈美の今までの戦いは酷いことばかりだったじゃない？そうでしょ？私の息子が、優がノロの軍事利用の被検体にされるだけでなく、私が誇りに思ってた刀使の力も戦争や政治の道具に利用しようとしていた人達ばかりだなんて酷いじゃない？」

お母さんにそう言われた私は、つい押し黙ってしまう。

……きっと、お母さんが生きていたら、こんなこと言うだろうと思ってしまったからだ。

「でも、可奈美。アンタは今まで頼る当ても無かった。帰れる場所も無かった。けど、それでも貴女だけは私の約束を守るために優のことを化け物のように扱わないように、おねえちゃんとして必死で頑張って、そして戦って来たじゃない？……けど、そんな貴女に対して管理局も国も、そんなに想っていた優を化け物として殺して、最期はその想いを踏み躙るように裏切ったじゃない？」

お母さんにそう言われた私は、視界がにじんでしまう。

……ああ、私の心の中に有った苦しみを理解できる人に出逢えたと。

「……だから、今度は貴女を裏切り続け、認めなかったあんな世界なんか捨てて、此処で過ごさない？……ここは、何でも願いが叶う場所だよ。」

お母さんにそう言われた私は、ただ立ち尽くしていた。

……けど、私の中には、この胸の中に在る『この世界を否定しろ。』という叫びが有ったから、私は立ち上がることができた。

「願いが……叶う？……どういうこと？」

「言葉通りの意味だよ。……ここは、龍眼の力によって望む世界を見せてくれる場所だけど、……私が居た隠世の小さな隙間の世界と酷似しているよ。」

「隠世の小さな隙間……？」

「そう、私が居たところは隠世にある一つ場所みたいなところで、此処みたいに自らの記憶から再現できる場所にもなっているんだよね～。

……だから可奈美、私と一緒に其処で過ごそうよ？きっと、今の現世よりかは良い場所だよ？」

だけど、お母さんは私の心を否定するかのように、今度はその隠世の狭間で一緒に過ごそうと語ってくれた。

……そう、お母さんに言われた私は、

「……お母さんはそんなこと言わない。……だって、お母さんは、」

お母さんは死ぬまで幸せそうだった。剣術だっていっぱい教えてくれたし、刀使の仕事を誇りに思うって言ってくれた。そんなお母さんが今も現世で大災厄が起こっていて、そんな中で荒魂の被害に苦しむ人達を放っておこうと言うハズがない!!

「お母さんは……そんなこと絶対言わない……!」

……だけど、私は、そう力無く言うしかなかった。すると、お母さんは、

「……そうね。アンタの記憶に在る美奈都は刀使の仕事を誇りに思うって言っていたね。……でも、私がそれを言えたのは、未来がこうなることを知らないから言えたんだよ?」

そう私に返して来た。

「だって、可奈美が知っている私って、可奈美がどんな目に遭ったか知らなかったんだよ?……だけど、優ちゃんやそのお友達、冥加刀使の願いを叶えようとしたイチキシマヒメ、静という母の愛を受けた娘の記憶を見て、現世がどんな酷い場所かを知った私はきっとこう思う。……私が素敵と思った刀使も剣術も戦争や政治の道具にするあんな現世の世界よりも、可奈美と共に隠世の隙間で悠久に続く平穏の時を過ごしたい。……それを叶えたいと思っている。」

そしてお母さんは、向こうの世界、現世の世界が剣術も刀使も戦争や政治の道具にされる酷い世界になった現世の世界に失望していることを述べると、私と隠世の世界で永遠に平穏な時間を過ごしたいと答えていた。

……私の知っているお母さんは、荒魂と融合したことで変わったのだろうか?そんな考えが過るほどにお母さんは変わってしまったんだと感じてしまう。

「それに、可奈美は刀使の使命という物がどういう物か分かる?……分からないなら、私の記憶を覗いてみたらいいよ?」

お母さんはそう言って、私に近付くと、お母さんは自分の額を私の額にくっ付けていた。

「……大丈夫、可奈美は私のために冥加刀使になったんだから、それで荒魂になった私と一つになれた。……だから、私の記憶を見ることができる。」

お母さんはそう言って、私にお母さんの記憶を見せると言って、

「だから私の記憶を見て、そして可奈美の内に在る意志と覚悟……嘗て私が言っていた『刀使の使命』に問いかけることで、刀使を続けるかどうかを考えてもいいんだよ？」

そんなお母さんの優しい声を聞いて、お母さんの酷く歪んだ笑み――

――いや、お母さんの笑みを見たとき、

「ああ、やっと、私の愛しの娘と一つになれた。……それに、これが親の愛なんだって、人の愛し方なんだって、ニモという荒魂もそれがようやく分かって喜んでいるよ。」

私はまた意識が深い闇の中へと沈んで行った――――。

刀使ノ使命

――――そうして、お母さんの声に促されるように意識を手放し、次に目を覚ましたとき、私は……

「……此処は……江ノ島？」

江ノ島に居た。

何故、そう思ったのかと言うと、過去の映像で見た相模湾岸大災厄と瓜二つの形をした大荒魂が江ノ島らしき所に居たから、私はそう判断できた。

そして、お母さんが言っていた〝私の内に在る意志と覚悟、そしてお母さんが言っていた『刀使の使命』にも問いかける〟ことをすると言っていたことも思い出すと、これは、何かを問いかける物なのだということも理解した。

……けど、江ノ島のことを尋ねてどうするのだろうか？

そんなことを考えていると、

『刀使の使命を継ぐ衛藤　可奈美に問います。……仮として、江ノ島にて死者3千人を超す大荒魂が暴れる大災厄が発生した場合、刀使の可奈美はどうする？』

と私に問う声が聴こえた。……だから、私は、

「……私は刀使だから、荒魂を討伐する！」

そう力強く答えた。……すると、

『貴女がそう決断し、江ノ島へ向かうと荒魂化した人間が3千を超すぐらい居て、何処かの国の暴動のように人々を襲うだけでなく、街を壊して暴れていた。……刀使の使命を継ぐ貴女なら、どうする？』

荒魂化した人間が3千を超す数となっているということを私は突きつけられた。……江ノ島で起きた相模湾岸大災厄の死者は約3千人、となると江ノ島で死んだ人間は荒魂と化した人間なのだと言いたいのだろうか？……だけど、私は否定できなかったそれを聞き、

「……それは。」

狼狽えてしまう。だけど、女の人の悲鳴を聞いた私は慌ててそちら

を向いてしまう。……すると、

女の人も男の人も性別も関係なく、子供も老人も年齢も関係なく、赤い血を流して、息絶えているのか死んでいるように倒れていた。

……みんな死んでた。左を見ても死体。右を見ても死体。……みんな、みんなみんなみんな死体になってた。

『刀使の使命を継ぐ可奈美は、荒魂化した人間を全員斬って討伐する。……正解。それが刀使の使命を継ぐ可奈美の取るべき行動。』

……そして、その声が聴こえた瞬間、荒魂化した人間3千人分の肉を裂く感触と呻き声、そして血の匂いが一気に頭の中に入って来る。

そう実感したとき、

「……うっ！」

猛烈な吐き気を感じ、胃の中に有った物を地面にぶちまけてしまう。

そうして、胃の中に有った物をぶちまけた後、余りの気分の悪さに息を荒げる自分が居ることを自覚する。……まだ、心は保っている。

そう実感しながら、どうにか立ち上がろうとしたら、

『……そうして、刀使の使命を継ぐ可奈美は、折神家の貯蔵施設に穴が開いたことが原因で起こったノロの大量漏洩と漏出事故を発端とした大災厄の解決のために向かう。』

そんな声が聴こえた。そして、私に問いかける。

『折神家の貯蔵施設に着いた貴女は、そこでノロの大量漏洩と漏出事故が原因で荒魂化した刀使含めた人間3千人がまたしても現れてしまう。……さて、刀使の使命を継ぐ可奈美はどうすべきだと思う？』

「……ちょっと、待って!!」

そんな叫びも虚しく、次の光景は……米村　孝子さんと小川　聡美

さん、それだけでなくエレンちゃんと薫ちゃん……真希さんと寿々花さん……それだけじゃない、多くの刀使と一般の人が混じった大量の死体がそこにあった。

それを見た瞬間、孝子さんと聡美さん、エレンちゃんと薫ちゃんに真希さんと寿々花さんの苦悶の表情と呻き声、そして見知った人の肉を裂く感触と血が御刀にこびりついて離れない光景が一気に頭の中に入って来る。それを感じた瞬間、もうお腹の中には何も入っていないというのに、吐き気を催して何度も何度も吐いて……そして、えずいてしまう。

『……3千人も居る荒魂化した刀使と人間を全て討伐する。……そう、それが刀使の使命を継ぐ可奈美が取るべき行動。そうでしょう？』

だけど、荒魂化した刀使を含む人間3千人を全て討伐した私は正しいと聞かされる。……でも、これは、

「……待って、おかしい。……おかしいよ。だって、だって孝子さんや聡美さん、それにエレンちゃんと薫ちゃんは荒魂化していない!!」

おかしいと答えた。……だって、孝子さんや聡美さん、エレンちゃんと薫ちゃんは自分の身体の中に荒魂を入れることなんてしていなかった!!……そう言うと、

『確かに貴女の記憶の中には彼女等は荒魂化していない。……けれど、孝子さんや聡美さんは〝荒魂化した刀使〟として対刀使用のボウガンで処分されようとしていたのは事実でしょう？』

この世界は孝子さんや聡美さんを〝荒魂化した刀使〟として処分するべく、写シ対策のボウガンで始末されそうになった世界だと言われると、

『それに、薫ちゃんやエレンちゃんが真希さん達のようにならない確かな保証があるの？……自分達が刀使のあるべき姿を取り戻すだとか言って相手が本流から外れていると決めつけて舞草だと名乗り、そして折神家にS装備のコンテナを使って勝手に敷地内に発射して、御刀という暴力で解決した貴女達がそれを保証できるの？……実際に荒魂を体内に入れる力を折神家や柊家は昔から持っていたのに？』

薫ちゃんやエレンちゃんが刀使のあるべき姿を取り戻すと言って活動する「舞草」のメンバーであるなら、折神家と柊家に倣って体内に荒魂を入れないといけないでしょ?とも言ってきていた。

『……そんな過去にしがみつく「舞草」が、窮地に陥られれば形振り構わず荒魂を入れた刀使、もしくは荒魂を利用して強化した刀使を戦力に加えるのは、目に見えた結果だと思うけど?……現に、折神　紫を倒すときにトーマスさんは優ちゃんも戦力にしていたよね?』

それに、舞草も同じことをすると言って……。

だから私は、どうにか否定しようとした。

『それに、荒魂に最も近くに居る人間は誰?……それを斬ろうとする刀使だよね?なら、荒魂化した刀使が現れることが絶対に無いと言える?』

だけど、荒魂に最も近くに居る人間は刀使であるという声がして、

「……それに、私は『これから私がやろうとしてることは荒魂退治だ。だが限りなく人斬りに近い。』と言ってた姫和ちゃんに言ってたじゃない?」

そして、私の顔をした人間が何時の間にか傍に居て、私に語り掛けていた。

「……『違うよ、姫和ちゃんは御当主様、…人に化けた荒魂を斬る。それだけだよ。それ以外は私が斬らせない、それが私の覚悟だよ。だから、姫和ちゃんの重たそうだから、半分私が持つよ。』……てね。」

……荒魂化した人間を斬ることを協力することは私が言っていたことだと、そんな私が荒魂化した人間を否定する権利など持ち合わせていないと。

「……なら、荒魂化した刀使を私が斬ること自体、おかしな話じゃないでしょ?」

もう一人の私とも言える私の顔をした人間は、無邪気な笑顔で、そして歪な笑みと思える表情でそう答えた。

「……これが、……これが見せたかったの?」

もう一人の私にそう言われた私は、延々と荒魂化した人間を殺し続けるのが刀使の使命だと言いたいのかともう一人の私に尋ねてしま

う。
「そうだよー。私と一つになれたことで、貴女は龍眼を使えるようになった。……そして、私が〝こういう可能性〟が有ることを囁くだけで、嫌でもその光景が見える。……可能性が有るっていうだけだけど、嘘とは言えないでしょう?ありえない話とは言えないでしょ?」
そう聞いた私に、もう一人の私は答えてくれた。
……これは、龍眼が見せる可能性の一つと言っても、絶対に無いと言えない光景だと。
「それに、大荒魂ほどのノロを入れても貴女は壊れなかった。龍眼が見せてくれた大災厄で幾度も貴女は殺戮を行っているのに壊れないのは、貴女の精神が既に壊れていたから。……今の貴女の精神は限りなく私達大荒魂に限りなく近いんだよ?」
そして、もう一人の私は、私がその光景を見て正常に振る舞えることが既に異常なのだと定義付け、
「荒魂の優ちゃんを守るために刀使になったり。」
荒魂と定義付けてられる優ちゃんを守るために刀使になったという歪な状態を指摘され、
「姫和ちゃんのを半分持つって言ったり、姫和ちゃんに人に化けた荒魂を斬ることを手伝ったりした衛藤　可奈美が言う〟刀使の使命〟っていうのはそういうことだよね?」
人斬りの手助けをすると決めた私が……異常者が語る〟刀使の使命〟とは、
「……つまり、私が言う〟刀使の使命〟とは、荒魂扱いされる生物を斬ることが使命。っていうことでしょ?」
そういうものだったのでしょうと問い詰めてきた。だから、私は、
「違う!!……こうなって欲しくないから、だから私は……私は人を助けたかったから……刀使になったんだ。」
私はこうなって欲しくないから、守りたい者が有ったから、刀使になったと答えた。
「だって!そうしないと、優ちゃんは……お母さんはっ!!」
答えるしかなかった。……それを聞いたもう一人の私は、

「うん？……お母さんにそう言ってもらいたいの？……なら、聞いてみようか？」

私にそう言うと、私の顔からお母さんの顔になり、

「可奈美、アンタは立派だよ。私との約束……アンタがおねーちゃんとして立派にやってきたんだから、私が保証する。」

お母さんの声で語った。

苦痛の顔、無念の顔、恨みが籠もった顔をする私が殺した人達を指差しながら……多くの骸が横たわる世界の中心でお母さんは私にそう語ってくれた。

「……私が教えた剣術でこんなに荒魂を斬ったんだから、剣を通して少しは荒魂が貴女に斬られた気持ちも理解出来たでしょう？」

……剣を通して理解できただろうと。お母さんの声で言っていた。

「でも、みんな……いや、違うよね。この世に生きている人や神様って奴は刀使と荒魂が殺し合ってくれることをきっと望んでいるんだと思うよ？」

だけど、お母さんの顔から私の顔に戻ったもう一人の私は、みんなが刀使はこうあって欲しいと、望んでいると言って答えていた。

それを聞いた私は、

「そんなことない!!」

それを否定した。……それを聞いたもう一人の私は、

「いいや、何も間違っていない。……だって、神性を帯びたとか言われている石ころの珠鋼を刀の形にしたのは誰？」

神様の力が宿る珠鋼を刀にしたのは誰かと問い質してきた。

「誰が御刀を造ったの？……私達が想像できない程の昔の人だよね？」

そしてもう一人の私が御刀を造ったのは誰かと答えていた。……昔の人、遠い祖先だったと。

「本当はさ、みんなみんなみんな……みーんな暴力が大好きだから珠鋼を鞘といった物ではなく、人とかよく切れる刀という武器にしたんでしょう？……こういうのを影、分析心理学で言うところのシャドウって奴だよね？」

そしてもう一人の私は、人の本性はよく切れる刀のような姿であると説くと、

「剣術にのめり込んで、刀使を打ち倒して五箇伝の代表に選ばれたことに喜ぶ私のようにね？」

それは、他の刀使を打ち倒して五箇伝の代表に選ばれたことに喜んだ私の本性と同じであると、もう一人の私は語っていた。

「でも人間とは違う荒魂を斬ることには何ら罪悪感を感じないけど、荒魂化した人間を斬ることには罪悪感を感じるからこそ、その罪悪感を紛らわせるために人は存在するかどうか分からない〝神様〟を使ったんだよ。……ちょうど、この人達が言っていたようにね。」

もう一人の私は、死体の一つを持ち上げる。……それは、

「刀使たる者、御刀を使い荒魂になってしまったノロを祓い鎮める。その行いはちゃんと人を救ってきたわ。」

累さんの首だった……。それだけじゃなく、

「刀使の起源は社に務める巫女さんだったそうだね。荒魂を斬る以上、その巫女としての務めも君達はちゃんと受け継いでいかないといけないってことさ。」

フリードマンさんの死体も私にそう語り掛けて来た。

「でもこの言葉って誰が造ったの？神様が言ったの？……この珠鋼という石ころを使って刀にして、年若い娘を斬り合わせろって珠鋼が囁ったの？……でも、この人はこう言ってたよね？」

もう一人の私が累さんの首を放り投げ、フリードマンさんの死体を持ちあげると、

「……『ノロは人が御刀を手にするために無理矢理生み出されたいわば犠牲者なんだ。』ってね。」

フリードマンさんが言っていた言葉を復唱させていた。

「これが、社会生活を送るうえで、求められた役割を演じられるよう機能する心……つまりはペルソナでしかない。そして、本性は荒魂も荒魂化した人間という生物を斬る罪悪感を無くすために神様やら受け継がれた物だとかそれっぽい理由を付けて巫女にして斬りやすいようにしたってだけ、そうでしょう？」

そうしてもう一人の私は……私に語る。
私のやって来たことは、神様や受け継がれた物といった崇高な物ではなく、人から求められた物の延長線に過ぎないのだと言う。
「それに、ナポレオンも魔女だったジャンヌを聖女にしたじゃない？……この世の中は人の勝手な都合で出来ているんだよ？」
そしてもう一人の私は……私に語る。
私のやって来たことは、神様や神聖な物といったこととは関係無く、昔っから人が望んだ結果であると。
「……無駄話が長くなってごめんねー。問答を続けよっか？……東京にて大荒魂が隠世の門を開け、空に穴を開けたことにより、荒魂が降り注いたことで……またしても！荒魂化した人間で溢れかえってしまった!!」
そしてもう一人の私は……続けて私に問いかけてきたと同時に力強く声を張り上げると、ある方向に指を指していた。
「さあ、どうする？」
その指した指の先には、

荒魂化した舞衣ちゃんが居た。
「さあ、どうする？」
それを見た私は、
「そんなのできない！」
と答える。すると、
「何を躊躇う必要があるの？……剣を通しての会話がしたいなら、剣で舞衣ちゃんの身体に刀を入れて、血を浴びて、舞衣ちゃんの心と心で語り合えば良いと思うけど？」
もう一人の私はそう言ってきた。
剣を通しての会話がしたいなら、舞衣ちゃんの身体に刀を入れて、血を浴びて語り合えば良いのだと。

「もし人斬りを楽しんでなく、刀使の使命でやっていると言うなら、……親友だからという理由で斬れない訳ないよね？」

もう一人の私はそう言ってきた。

刀使の使命でやっていると言うのなら、親友でも斬れるはずだろうと。

「……さあ、迷っている時間は無いよ。」

そして、もう一人の私がそう言ってくると、荒魂化した舞衣ちゃんが男の子を斬ろうとする場面を見せられた私は、

『凄いなぁ、可奈美ちゃんは……。』

私のことを認めてくれていた舞衣ちゃんを、

『……良いなぁ、上の妹は結構わがままで私を困らせてばっかなんだよ？』

私のことを信頼して、身の上話をしてくれた舞衣ちゃんを、

『……私は、助けるっ!!』

私のことを自分なりの言葉と行動で助けてくれた舞衣ちゃんを、

『……プッ、アッハハハハハ!!』

そして、殴り合って笑い合って仲直りした舞衣ちゃんを、

『最後に、こんな私でも親友で居てくれてありがとう。舞衣ちゃんと一緒に二年生に進級できたり、全国大会に行けてよかった。じゃあ、家族を大切に。』

……私は、荒魂化した舞衣ちゃんに御刀の切っ先を向けて、そして振り下ろしていた。

「正解。……ああ！でも不幸なことに舞衣ちゃんの命を犠牲にしてでも守った男の子も荒魂化しちゃった！……さあ、どうする？」

その男の子にも御刀を振り下ろした。

「その次は姫和ちゃん。」

荒魂と化した姫和ちゃんに御刀を振り下ろした。

「その次は妊婦。」

女の人にも御刀を振り下ろした。

「その次はその女の腹から這い出てきた赤児。」

荒魂にも御刀を振り下ろした。

振り下ろした。振り下ろした。振り下ろした。……振り下ろし続けた。

何度も何度も人の手による物だったり、或いは国の政府が大荒魂を保護した結果によるものだったり、人と大荒魂が結託して暴れた結果といった様々な理由で大災厄が起こり、その都度その都度に私は荒魂に向けて御刀を振り下ろし続けた。

……荒魂化した人間を何人斬ったかも憶えられない程に。

私との間にどれほどの物を築き上げたとしても、子供も大人も男も女も関係なく、赤児という新しい命の姿をしていようとも、私は関係なく荒魂に向けて御刀を振り下ろし続けた。

そうして振り下ろす度にただ痛い、痛い、痛い想いをしても……何度も何度も荒魂を討伐することを繰り返して、そしてその先には有るのはただ仄暗い、そして深い悲しみがずっと沁みついて離れない痛いと思える世界が広がっていた。

……もう一人の私が私のことを『異常者』であると定義付けていたけど、その通りだったのかもしない。

だって、心が痛い思いをすることになると分かっているのに何度も何度も疑問にも抱かず、ただ同じことを繰り返しているだけなのだから、これが異常でなければ、何なのだろうとすら思える程に酷い行いをしていたと思う。

……そう考えたとき、仄暗い何かが目の前を真っ暗にして、その闇に瞳が呑まれたかのように目を閉じると、意識を手放していた。

「可奈美おねーちゃん。」

そうして、人も荒魂も殺し尽くして、心も何もかも感じなくなった

とき、ある声が聞こえた。

衛藤　可奈美は刀使である

その声の先には、3歳の頃の優ちゃんと病院に腰掛けているお母さん……あの日、私におねえちゃんとして頑張ってと言ってくれたお母さんが其処に居た。

『……そうして、幾度も起きた大災厄の果てに残った最後の二人。……貴女が本当に、大切にしたかった者達。』

そして、お母さんと優ちゃんを見た私に対して、心の内の声……いや、先程までに居たもう一人の私が私にそう語り掛けてくれた……。

「待ってたよ。可奈美おねーちゃん。」

優ちゃんの声と……そして、3歳の頃に優ちゃんが居て……私に優しげな声でそう言ってくれた……。

……そして、私に抱きついてくれた。

「……お帰りなさい。可奈美。」

そして……そして、お母さんが其処に居た。あの日、死ぬ前に、最期の前に会ったお母さんが其処に居た。

「分かったでしょう?……刀使の使命というのは、こういうこと。私が貴女に教えようとした剣術は、このような結果しか生まないということにさ。」

そうして、お母さんは優しげな声で私にそう語り掛けてくれた。

「ゴメンね、可奈美。……私のせいでこんな苦しい思いをさせて、もう貴女は私のために剣を振るう必要なんてない。おねえちゃんをしなくても良い。」

そうして、お母さんは私に謝罪すると、もう剣を振るわなくて良いとも……〝おねえちゃん〟をしなくて良いとも言ってくれた。

「此処なら、誰かを傷付けることもない。貴女が傷付くこともない。」

此処は誰も傷付くこともないとも言ってくれた。

「私達と一緒に、此処で永遠に過ごしましょう?」

それだけでなく、お母さんはそんな素敵な提案をしてくれた。

……大災厄以外でも、友達といった斬りたくない人も斬らなきゃな

らない処へ戻るよりも良いと思えた。
ただひたすら、この静かで、お母さんと優ちゃん以外は誰も居ない世界だけど、争うことも誰かを傷付けることも無いこの世界で家族と一緒に過ごす。……それはとても……とても、良いことのように思えた。
辛い現実を見なくて済むから、誰かを傷付けたり、傷付くことも無い良い世界に思えたから、お母さんの言う通りに現実も、御刀も刀使であることすらも捨てて此処に居ようとすら思った。
『それに、お医者さんが言っていたでしょ？大きくなったら身体が強くなれるから、強くなったら剣術を一緒に頑張ろう？ね？』
けど、ある約束を思い出した私は、優ちゃんにそう尋ねてしまう。
「……もう、一緒に剣術できないね。」
私が此処に一緒に居ることを決めれば、もう私と一緒に剣術ができないことを告げた。……すると、
「ううん、良いよ。僕は可奈美おねーちゃんと一緒に居るだけで幸せだよ？」
優ちゃんはそう言ってくれた。……それを聞いた私は、
「優ちゃん……お母さぁん……。」
優ちゃんとお母さんの名前を叫びながら、泣いていた。……ただただ顔を歪ませて、むせび泣いていた。次から次へと涙が出てきて、視界が滲んでいた。
だけど、どれほどの涙を流しても、この胸の中に在る痛みから来る叫びは、……きっと届かない言葉となって、悲しみに染まってゆく。
……だから私は、今の内に泣いていた。
「……優ちゃん。……私ね、やっと気づいたんだ。……お母さんと優ちゃんのこと……本当に……本当のホントに大好きだよ？……それだけは……それだけは本当の私の気持ち……。」
だから、今の内に自分の正直な気持ちを打ち明ける。
優ちゃんやお母さんのことが大好きだと。
私の選択の先には、胸を締め付けられる仄暗くて、深い悲しみが降り注いで来ることが分かっていても、ずっと消えない忘れることがで

きない痛みを背負うことが分かっていても覚悟した。
……だから、わたしは、
「……さようなら、優ちゃん。」
私は、優ちゃんを撃った。
私が握っている拳銃で、荒魂を討伐する御刀でもない拳銃で、人に向けて撃つ冷たい銃で何度も撃った。
……撃ったことで、優ちゃんの身体に穴が開き、その穴から朱い血が穴が開いたワイン樽の様にとめどなく流れる。そうして、私に抱きついていた優ちゃんは、者から物言わぬ物に変わったということが、力が無くなって手がダランとしたことが私の身体に伝わる。
そして、力を失った優ちゃんはずるりと私の身体に付いた優ちゃんの血と共に落ち、優ちゃんは倒れた。
「……い、いやあああああああああ!!」
それを見たお母さんは金切り声を上げ、そして涙を浮かべていた。
私は、そんなお母さんの声を無視して、倒れたまま動かない優ちゃんに銃を向けて何度も撃つ。
「可奈美!……可奈美なんで――――!!」
私に向けて怨嗟の声を上げるお母さんに気付いた私は、歯を食いしばってでもお母さんに銃口を向けて撃とうとするが、弾が出なかった。だから私は、銃を捨てて、お母さんの首を掴み、首を締めていった。
そうして、私は手に力を加えるとお母さんは……お母さんは苦悶の表情を浮かべながら、私に困惑した声をかける。
「……あっ……あぁぁぁぁ……どうして……私はやっと……自分の息子と……娘に会えて……幸せだったのに……ああ、私の子供……優……どうして?……どうして、私達をぉ……?」
お母さんにそう尋ねられた私は、アレは優ちゃんではなかったのだから撃ったと答えそうになった。
だって、優ちゃんは……優ちゃんは、此処で一緒に過ごすことを望んでいない。優ちゃんが本当に望んでいるのは、タギツヒメ達と一緒に穏やかな場所で過ごしたいということ。……私はそれに気付いた

から、いや、最初から気付いていたけど、気付いていない素振りしかしていなかった!!

……剣術や刀使であることを理由にして、考えていることが分からないと言って逃げていた。

優ちゃんの中に居るタギツヒメさえ居なければ……タギツヒメさえ居なければ、化け物扱いされることのない普通の子供に戻って、それで救われるとしか信じていなかった。それで、元通りになると信じていた。

だから私は、優ちゃんの本当の願いには気付いていた。それに目を背け続けていた。……背け続けていたから、優ちゃんが何を考えているのか分からないと言って逃げた。そんな優ちゃんを見なくて済む様に剣術好きな少女の振りをして剣術に逃げた。

……だから、……だから、私は目の前に居る優ちゃんとお母さんが偽物であり、この争いの無い幸福しか無さそうな世界が虚構でしかないことにも気付いてしまった。

だから、私は目の前に有る作り物の様な虚構……幸せそうに見える偽りの誰かが作った創作物の様な、思い付きで創られた幸福を壊すことを決めた。

「……だって私は……私は!!」

だけど、私は目の前に居る優ちゃんとお母さんを偽物だと言って酷い思いもさせたくなかった。

このお母さんと優ちゃんも〝愛〟を求めた存在から生まれたのだと分かってしまったから。

『……ねぇ可奈美。刀使って素敵だと思わない?人を守って、感謝されて、剣術も学べる。最高だよね。』

だからこそ、私はこの胸の内に在る叫びを叫んだ!!お母さんが死ぬ前に言っていたことを思い出しながら、涙を零しながら、内にあるこぼした想いを叫んだ!!

「……私は……私はお母さんが言ってたように……刀使って…素敵だと思うからっ!!」

例え、私が刀使として帰る世界が、争いの無い此処とは違って、

人か荒魂かの基準を曖昧にして誰かを傷付けたり殺すことをする世界だったとしても、

人が怒りで荒魂のように無尽蔵に暴れる獣だらけの世界になったとしても、

未曾有の大災厄や国同士の戦争と経済的混乱に巻き込まれたとしても、

『だから、約束。…私はお母さんみたいに人を守って、感謝される、〝正義の味方〟のような強い刀使になりたい。だから、私は優ちゃんのことも怖い物から守るし、今度は何があっても救ってみせるよ。』

そのたった一つだけ、私に残った一つの約束を守ることで、たった一つ残された絆（想い）を繋げて、私は人を守って感謝される〝正義の味方〟のような強い刀使になる。

「私は約束したから……私は人を守る……〝正義の味方〟のような強い刀使になる!!」

そして、それだけじゃない。

『でも……うちのお母さんは死ぬまで幸せそうでしたよ。死ぬまでってなんか変な言い方ですけど、剣術だっていっぱい教えてくれましたし、刀使の仕事を誇りに思うって。』

お母さんは……お母さんは死ぬまで幸せそうで、剣術だっていっぱい教えてくれて、……そして、刀使の仕事をいつも誇りに思うって言ってくれたお母さんを幸せのままにしたい。

例え、目の前に居るお母さんと優ちゃんを殺せば、もう二度とこの光景と家族団欒が手に入らないことになるということを知っていても、私はお母さんの首にかける私の手の力を強めた。

例え、お母さんの首を締めることで、その先の現実に有るのが多くの流血と屍を築くことだったとしても、誇りに思った刀使の仕事を続けて、お母さんの幸せを守りたいと強く願って、強く思って、更に私はお母さんの首にかけた手の力を強めた。

……例えこれが、当ての無い救いの先に有る救いなのだとしても、私は手放さないといけない。

……大災厄によって滅ぼされかけている世界を守らなければいけ

ないから、
「……お母さんは死ぬまで……幸せで……剣術だっていっぱい……いっぱい教えてくれて……そして、そして刀使の仕事を誇りに思うって言ってたから、だから、私は!!」
だから、私は世界を救って、人に感謝されて、お母さんが誇りにだと思う刀使の仕事が素晴らしいことだっていうことを守りたいから、
「……お母さんが……お母さんが好きだから!!優ちゃんも好きだから!!」
私に剣術を教えてくれたお母さんも、私を正義の味方と言ってくれた優ちゃんも好きだから、
「だから!!私は……私はっ!!!!」
お母さんと優ちゃんを殺す。
……お母さんが誇りに思いながら、幸せに死んで逝った気持ちを守りたいから、優ちゃんと約束した〝正義の味方〟のような強い刀使になる約束を守りたいから、お母さんと優ちゃんを殺す。
自分でも、矛盾した行為だと思う。
私と優ちゃんという家族と共に過ごすことを望む目の前に居るお母さんの思いを踏み躙って、その夢を崩してしまう酷い行為を今していると思う。
……でも、それでも私はお母さんの首を自身の手で締めていた。
どんなに酷い現世の世界であっても、私は人に感謝される強い刀使にならなければいけないから……だから、お母さんの首を締めた。
「……悔やめ……苦しめ……っ!!」
私が強く首を絞めるお母さんは、今にも私を呪い殺さんとばかりに私を睨んでいた。
首を絞める私の手の甲に爪を立て、何度も引っ掻いていた。……その引っ掻かれた痛みに痛みが走って、痛かった。痛い気持ちになって、ただ痛かった。……この胸を締め付けられる痛みと同じくらいに痛かった。
「……お前は……この選択を……呪う……そして……私は……アンタを……絶対に……ゆる……さ……な……い

……っ!!」

そして、お母さんは私にそう言ってくれた。

……私を呪うと、私を絶対に赦さないと、それを聞いた私は、

「……お母さん。いいよ、恨んでくれて……恨んでくれても……私も……お母さんと優ちゃんのことを忘れないから。」

お母さんが居たこと、優ちゃんが居たことを忘れないと言って、

そして、首が折れる感触がしたと思った瞬間、お母さんはピクリとも動かなくなった。

「……だから、お母さんのこと、優ちゃんのこと、絶対に忘れないから……だから、お母さん……優ちゃん……さよなら……。」

ピクリとも動かなくなったお母さんを見た私の、こぼれた想いは、

お母さんと優ちゃんとの別れだった。

「……。」

でも、私の手の甲には、お母さんの首を絞めた時にお母さんが爪で引っ掻いてくれたことで付いてしまった消えない傷があり、

「……。」

そして、手のひらには、僅かに残るお母さんの首の暖かい感触を想い出しながら、私はどうしたらいいのか分からず立ち尽くした。

「……姫和……ちゃん?」

だけど、姫和ちゃんが近くに居ることを千鳥が共鳴で教えてくれたから、そこへ向かった。

頼る当ても無かったから、帰る場所は此処に無かったから、ただそこをさまよう枯葉のようにそこへ向かった。

『……可奈美?……可奈美!?其処に居るのか!!?』

姫和ちゃんの声が聴こえたと同時に、お母さんと優ちゃんの死体を跡にして、そこへ向かう。

……でも、この消えない傷の痛みとお母さんの首の暖かい感触はずっと忘れることはできないと想った。

だから大丈夫だよ?お母さん、優ちゃん。

……大好きな優ちゃんに向けて銃を撃った感触と私にかけてくれた血の温もり、そしてお母さんがくれた消えない傷とお母さんの首の

温もりを覚えていれば、もう悩む必要が無いから。
もう二度と、お母さんと優ちゃんが大好きだったという想いが有ったことを忘れることもない。
私はお母さんが刀使の仕事を誇りに思っていたということも忘れない。
私は〝正義の味方のような強い刀使〟になることも忘れない。

――――これが、私達が受け継いだ絆（おもい）。

――――こうして、この世から死んだことで全てを得た一人の男児とは対照的に、一人の少女は己の中に在った家族や無垢といった様々な物を失いながら、大人となってこの世に生きていくのでした――――。

「……こ、……ここは……？」
私が気付いたとき、知らない場所で横になって倒れていることに気付いた。
そして、ソフィアとイチキシマヒメを倒すために此処に居たのだと思い出すと、パッと起き上がると同時に小烏丸が有るかどうかを確認した。
確認すると、小烏丸は手許に無く、私の近くに有ることに気付いた私はそれを手にすると、強い荒魂の気配……恐らくはイチキシマヒメ

が近くに居るのだろうということを察した私は、其処へ向かって走り出すのであった。

……そして、その向かった先には、

「……イチキ……シマヒメ。……優。」

イチキシマヒメが居た。

それを見た私は、優がイチキシマヒメに取り込まれたことを思い出しながら、イチキシマヒメに御刀を向けて構える。

「……大丈夫だ優。……私が……私が…一緒に……。」

そう口に出して、私はイチキシマヒメに斬り掛かるが、イチキシマヒメは円の軌道を描いてきたと思った瞬間、イチキシマヒメが持つ御刀の切っ先が見失ったことで私は驚いてしまう。

「なっ!?」

そのため、私は必死で御刀の切っ先を捉えようとするが、既に私の腕の近くまで迫っていた。

「がっ……!」

そのため、私の腕は写シを張っていたお陰で実体にはダメージが通らなかったが、その代わりに腕と御刀が弾き飛ばされ、手許から離れてしまう。

「ちっ!」

それに気付いた私は、急いでイチキシマヒメの間合いから離れるとイチキシマヒメは私に向かってこう述べていた。

「アンタは其処で待ってな?……私と可奈美は、これから親子水入らずで過ごすんだから。」

親子?……何を言っているのだろうか?

私はそう思うものの、手許から小烏丸が離れたため、ひとつの太刀が使えるどころか、イチキシマヒメに有効な攻撃手段を失ったことに愕然としていた。

……それだけでなく、今の御刀の切っ先を見失わせるイチキシマヒメの方が私よりも剣術の技量が格段に上であると理解してしまったがために、例え御刀を手にしても勝てるのかと絶望しかけていた。

……だが、そんな中で、急に小烏丸が鳴き出したことに私は驚いた

が、その小烏丸の反応が千鳥が近く有った時の反応とよく似ていたことを思い出し、私は可奈美が近くに居ることに気付いた。

「……可奈美？……可奈美!?其処に居るのか!!?」

私が一縷の望みを願いながら、そう叫ぶと、

「う……ぐっ！……がああ!!」

可奈美はイチキシマヒメ……いや、イチキシマヒメではない。可奈美の母の衛藤　美奈都さんらしき人の身体の中から出てきた。それを見た私は可奈美に近付いていた。

「可奈美！大丈夫か!?」

そうして、可奈美に近付いた私は、可奈美の安否を気遣う言葉を出すが、……可奈美は、私に向けて手で制すると、可奈美は自身の母である美奈都さんに向けて、御刀を向けるのであった。

……すると、

「……可奈美！……どうして、私と優を……私と貴女の幸せを拒むのォ……!!?」

イチキシマヒメ……いや、可奈美のお母さんの美奈都さんは可奈美に向けてそう述べていた。

それを聞いた私は、

「優？……優が其処に居るのか!?」

優が美奈都さんの中に居るのかと美奈都さんに訊いてしまう。

……すると、美奈都さんは私の声に反応したのか、それとも気にしていないのか、可奈美に向けてこう言い放っていた。

「……私と優と……アンタが居れば、私はもう何も要らないのに……どうして……どうして拒むの!!?」

それを聞いて、私は理解した。

優が美奈都さんの中に居るのだと、それを理解した私は、

「……なら、私を中に入れてくれ！……私は、私は優が必要なんだ!!」

そう叫んだ。……すると、

「アンタに用は無い!!」

美奈都さんにも、優にも拒絶されてしまった。

……母も捨てて、優も居なくなった世界で意味も無く一人ポツンと

居るだけとなった私は、可奈美の母である美奈都さんにも拒絶されただけで、心が引き裂かれそうな思いを抱く。

だから、必死で手を伸ばして求めた。……だが、可奈美は、

「……やあああああ!!」

美奈都さんに斬り掛かっていった。

それを見た私は、可奈美に裏切られた気持ちとなった。

(……どうして?どうしてだ可奈美!?)

何故なら、可奈美は母である美奈都さん、優ちゃんのことを、

(お前のお母さんは、優は、)

大切な存在であると言った筈なのだから、可奈美が美奈都さんに斬り掛かる筈がない!

だから私は、美奈都さんに斬り掛かる可奈美に対して、

「辞めろおぉぉぉぉっ!!!!」

あらん限りの声で、涙を流しながら、喉の痛みを感じながら叫んでいた。

十条　姫和は復讐者である

私は叫んだ。
美奈都さんに斬り掛かる可奈美を止めるべく、叫んだ。
それだけでなく、立ち上がろうともしたが、写シを剥がされた影響か足に力が上手く入らず、転んでしまった。
だから、私は可奈美と美奈都さんが御刀を向け合い、互いにその刃を振るうという姿しか見れなかったことが歯痒かった。
……だが、勝負は私の目から見ても、その差は歴然だった。可奈美の剣を尽く捌き、躱す美奈都さんの一方で可奈美は写シを何度も斬られていた。
流石の可奈美も母には一度も勝てなかったと言っていたので、苦戦せざるを得ないのだろう――――。

……私はお母さんに斬り掛かっていた。
正直に言えば、勝てる見込みは薄い。
……剣術というのは、弱い相手には勝ち、強い者には負ける。それが当然の摂理として成り立っている。だからこそ、今も御刀に円の軌道を描くことで剣の切っ先を見失わせる技と左右の手に持ち替えるお母さんのテクニックに私は何度も惑わされ、翻弄され続けたことで、写シを何度も斬られていた。
そんなお母さんと私の技量の差によって何度も写シを斬られる私がお母さんに勝てる見込みは無いに等しかった。
もっとハッキリと言えば、今の私はお母さんの技量に遠く及ばなかった。だから、勝てる見込みは薄かった。
……だけど、私は一つだけ知っている。
弱い者には勝ち、強い者には負けることが剣術の摂理だけど、その

摂理を覆すことができる唯一の技が一つだけあることを。
だから、私はそれに賭けた。
写シを斬られ、剥がされた私は〝写シを張ることなく〟お母さんに向かって御刀を大きく振りかぶりながら行った。
「……だから、言ってるじゃない？御刀をそんなふうに振り回した……ら……？」
お母さんの言っている通り、私は御刀をそんなふうに振り回したから、腹に御刀が刺さってしまった。……けど、お母さんに、いや、大荒魂になったお母さんに千鳥という大荒魂にとって特効となる御刀の一太刀を腹に入れることができた。
「……可奈美!?……アンタ……わざと……？」
弱い者には勝ち、強い者には負けることが節理の剣術を覆す唯一の技。……それが、相打ち。
きっと、誰かが言っていた左の頬を差し出すということはこういうことなんだろう。そのお陰でやっとお母さんに一太刀入れることができた。
「……藤原　美奈都さんには分からなかっただろうけど……これが、私の剣……!!」
そうして、お母さんのお腹に一太刀入れた私は、刺した箇所を広げるために御刀を捻っていた。
「ぐっ…うぅ……――――」
すると、お母さんは激痛に耐えられなかったのか、顔を歪めながら獣のような奇声を上げながらこちらを見ていた。……私も同じ顔と声を上げていたと思う。
でも、これで同じ苦しみを共有し合うことができた。
「……私も……一緒に……行ってあげる……から。」
私がお母さんに向けてそう言うと、お母さんは柔和な笑顔でこっちを見てくれていた。……だから、私も嬉しくなって、同じ笑顔を向けた。
……これで、御刀なんて振るわなくて済むよね？そう思ったとき、お母さんの背中からタギツヒメが現れて、お母さんを刺していた。

「……た……タギツヒメ……！」

私が言ったのか、それともお母さんの声だったのかは分からないけど、自然とそう叫んでいた。

「……悪いけど、隠世の門は閉じさせてもらう!!」

タギツヒメはそう言うと、お母さんをもう一方の御刀で首を刎ねていた。

そうして、動かなくなり、ノロの塊となったお母さんをタギツヒメは吸収したことで私に刺さっていたお母さんの御刀は無くなり、私のお腹から急に赤い血が流れたことで私は背中から倒れてしまった。

……そのため、今、この場に立っている者は写シを斬られて倒れてしまっている姫和ちゃんと私を除けばタギツヒメだけとなってしまった。

可奈美と美奈都さんの戦いが痛み分けで終わると思った瞬間、美奈都さんの背中からタギツヒメが現れ、タギツヒメが美奈都さんを斬っていた。

そうして、美奈都さんをノロの塊へと変えたタギツヒメは美奈都さんを吸収して……禍神となった。

それを見た私は、三女神を吸収し、禍神となったタギツヒメを見ると同時に可奈美の方を見てしまう。

「ぁあっ！……ぐぅ……!!」

腹に御刀を刺されて、痛みで蹲っている可奈美を見たとき、もう助からないと思ってしまい。私一人でタギツヒメを倒せるかどうか悩んでしまった。

……すると、タギツヒメは可奈美に近付くと、お腹に手を当ててノロを入れているようであった。

「おい!!」

「黙って！今、ノロで傷を塞いでる!!」

それを見た私は、タギツヒメを止めようとするが、タギツヒメは可奈美の腹に出来た傷をノロで塞いでると言われたためについ黙って

しまった。
……いや、タギツヒメが可奈美を助けようとしているところを止めることは良くないことなのでは?とすら思えたのだ。
それは、私が大荒魂の影響を受けやすいタイプの後期型のノロのアンプルを入れた冥加刀使であるがためなのか、はたまたタギツヒメが人類の味方であると思ってしまったからなのかは定かではないが、私はタギツヒメの行動を止めることはしなかった。
「……これで、血は止まった。……あとは、繋がったヒルコミタマに。」
タギツヒメは隠世の境目が見える空を見上げると、そう呟いていたのが聞こえてしまった。だから、私は急いでタギツヒメの元に駆け寄るべく、立ち上がろうとする。
「……私は今から、隠世の境目の中に入って私達の本体であるヒルコミタマを斬りに行くよ。……そうしなければ、隠世を閉じることはできないから。」
だが、タギツヒメにそう言われても、私は立ち上がろうとした。
討伐するためではない。タギツヒメが何をしようとしているのか分かったから、
「待て!…行くな!!」
だから、私はタギツヒメに対してそう叫んだ。
「……ゴメンね。……仇を討たせられないで。でも、隠世の門を閉じるには、誰かが隠世の境目に居るヒルコミタマを斬って門を封印しなければならないから、それはできないんだ……。」
だが、タギツヒメは叫ぶ私に対して、私が抱えていた仇討ちのことをどこか悲しげに言うのだった。……タギツヒメは、私が母の仇を討つことで成就させられないことへの謝罪を言いたかったのだろう。
だけど、私が本当に言いたいのは!!
「違う!そんなことはどうでもいい!!」
……違う。……ああ、そうだ。
だから、私はタギツヒメにして欲しいことを言う。
タギツヒメが本当に望んでいることが痛い程に分かるからだ。
「……ありがとう。優だけでなく、みんなに会えたことを私は忘れな

いよ。」

だけど、タギツヒメは私にそう言うと、大きな声で…いや、みんなに聴こえるように叫んでいた。

「みんな!こっちにおいでよ!!もう辛いことなんて無いからっ!!」

笑顔でそう叫ぶタギツヒメが、私の目からは妙に神々しく見えていた。……私が大荒魂の支配力に強く影響を受ける冥加刀使になったからであろうか?

しかし、空を我が物顔で飛んでいる飛行型の荒魂がタギツヒメの近くまで来ると、傅くような行動をするのを見た瞬間に私はビルの手摺に近付くと真下を見てしまった。その真下には、刀使と戦っていた荒魂は急に戦いを辞め、突然興味が無くなったかのように眼前の刀使に見向きもせずにこちらに向かって来ていた。それだけでなく、もう一方の荒魂は刀使に御刀で斬られようが関係無く、こちらに向かって来ている者も居た。

……その様を見た私は、タギツヒメの声に応じて、一緒にヒルコミタマの元へと向かおうとしているようにも見えた。

何だこれは?何故荒魂が刀使……いや、人に対する憎悪を抱く荒魂が人を無視してこちら向かって来ているんだ?荒魂達にタギツヒメの想いが通じて人を襲わなくなったのか?

私がそう考えたとき、ある仮説が頭に浮かんでしまった。

タギツヒメといった大荒魂は、高い知能の他にも、隠世への高い干渉力だけでなく、広域に及ぶ荒魂への支配力を有すると。……それ故に、紫に取り憑いていた大荒魂は支配下にあったノロに大人しいフリをさせて、波長に合わせて電流を与え続ければノロはスペクトラム化しないように見せかけることができた。

つまり、それと同じ理屈でタギツヒメは荒魂を集めていた。

……一緒に隠世に行くことで、人と荒魂が傷付かないようにするために。だけど、それは……!

「行く気なのか!!?」

タギツヒメだけが、隠世へ行くということでもあった。……それは、私からしてみれば、この世界を救うために自分だけ何もかも背負

い込もうとしているとしか思えなかった。
「……何で？……何でお前がそんなことをしてまで、この世界を守ろうとするんだ!!?そこまでしてやる義理は無いだろうっ!!?」
だから私は小烏丸を受け継ぐ刀使であることを忘れ、ついタギツヒメにそう叫んでしまった。
お前は、此処に来るまで色んな人達に怪物扱いされ、石を投げられ、愛する者も自分勝手に奪われたのにどうしてそこまでするのかと、つい叫んでしまった。
母を殺した相手にこんなことを言うのは、妙なことなのかもしれない。
この世を荒魂の脅威から守ることを使命とされた刀使が言うのもおかしいのかもしれない。
だけど、私は何故かタギツヒメを引き止めたかったから、そう叫んでしまった。それを聞いたタギツヒメは、困ったようにはにかみながら私に答えてくれた。
「……そうだね。今までの私だったら、こんな辛いことしか無い世界なんか壊してやるって、まるで癇癪を起こした子供のようなことを思ったかもしれない。」
辛いことしか無かったと、それで癇癪を起こした子供のように暴れることも考えたと、
「……けどね、この辛いことしか無いとしか思えない世界のことを少しでも思い出そうとしたら、優達が私を不要な存在じゃなくしてくれたことだったり、潜水艦から覗ける綺麗な海の中をみんなと一緒に見たことだったりとか……私の友達との思い出ばかりが溢れてくるから、……そんな思い出が詰まったこの世界を壊したくない。」
だけど、そんな辛いことしか無かった場所について思い出そうとすればするほど、自分が優や結芽といった友人達と過ごした思い出しか思い出せなかったから、この世界を壊したくないと答えてくれた。
（私が頑張って、それでみんなと過ごした想いが有る世界が残って、みんなのことを忘れないようにすれば、みんな幸せになって私も幸せになる。それが私の幸福で、私は私の幸福を願う。……それが、正しい

と決めたんだ。）

　冥加刀使となったせいなのか、私はタギツヒメの心の声も聞こえ始めていた。……それが正しいのだと。それがタギツヒメの幸福なのだと。

（最初に会ったとき、私は神様みたいに振る舞うことで虚勢を張ることしかできなかった子供だった。……だけど、ジョニーやミカに茶化されて怒ったり、優や結芽といったみんなに今も嫌われてないかずっと一喜一憂してたから、今もどうしようもないくらい子供なんだって思います。）

　そして、タギツヒメは自分の友人達との思い出も思い出すと自分がどれだけ子供なのかを思い出していた。

（……眼下には、人が沢山居そうなごちゃごちゃとした街並みが見えます。……あの世界の中には、大人も子供も、人も荒魂も関係無くそれぞれの人が複雑に絡み合って、どうにもならないごちゃごちゃとしたしがらみの中で、みんな子供のように笑ったり怒ったり、泣いたり、自分は必要の無い人間なんだとか言って苦しんでいたりしているんだと思います。）

　それだけでなく、タギツヒメは私達が住む世界は複雑で大変な世界なのだということも思い出すが、

（……でも、そんな辛いことばかり起こる場所でも、私とみんなの思い出が有る場所を守るために、私は空に有る隠世の境目へと向かいます。……それを私だけでなく、みんなが気付いてくれると信じたいから。）

　大変なだけでなく、みんなの思い出が有る場所を守りたいから、それに何時かみんなが私の想いに気付いてくれると信じたいから、この地を壊したくない。

　だから、天にそびえ立つ隠世の境目へと向かおうとしていた。

（緩やかな風が下から吹き上げています。……そのみんなの思い出がある下からの風が吹いたことで、みんなが私のことを応援しているとつい思ってしまった私は、みんなに出逢えて本当に良かったと、心から思います。……だって、こんな気持ちになれるなんて、ずっと、も

うずっと本当に長い間……いいえ、冷たい貯槽層の中から産み出され……色んな人に御刀といった冷たい武器を向けられた時から想像も出来なかったんです。）

空へ向かうタギツヒメに緩やかな風が下から来たことに、その風が友人達の応援のように感じたタギツヒメは、嘗ての自分が冷たい貯槽層の中から産まれ、そして人々から武器を向けられるという出迎えを受けたときは、幸福を受けることはなく、人々と憎悪を向け合うしかないと諦めていたと心の中で思い出し、それを独白しながら、写し鏡のように写す隠世の境界の空へと向かうべく見上げていた。

（本当は今みたいにこの想いがふとしたことで消えそうで、……とても、とても怖いけど、それでも本当にとても幸せです。……だから、この一瞬が、この瞬間がずっと続けばいいのに。……そんな世界になりますように。）

それを聞いた私は、

「……辞めろ、」

刀使である私は、討伐するべき荒魂であり、母の仇でもあるタギツヒメを必死で止めようとしていた。

「辞めるんだ！」

御刀を手に持たない手でタギツヒメに差し伸ばした。……刀使の使命の象徴である御刀を忘れて。

「折角、居場所ができたんじゃないか!!」

……そして、母の仇も御刀も忘れて、そう叫んでしまった。

「居なくならないでくれ!!タギツヒメ!!!!」

ずっと此処に居てくれと。

復讐、使命、敵であることを頭の中から忘れて、私は彼女が必要だと叫ぶ。

それを聞いたタギツヒメは、にこやかにこちらに笑顔を向けた後、集まった荒魂と共に、隠世の境界へと旅立ってしまった。

「……。」

それを私は、ぼうっと見上げたまま立ち尽くすしかなかった。

……この世界の危機を刀使が救ったのではない。……荒魂…いや、

この世界の都合で仲間外れにされた者達がこの世界を救ったのだ。
ある感情を抱いて暴れる存在。
私がそう考えたとき、私は母を殺されたと思い込んで癇癪を起こし、タギツヒメや紫を敵視し、意味も無く暴れた。
だけど、タギツヒメは感情のままに暴れることなく、自制してこの世界を守ろうとしていた。……私の方が荒魂じゃないかと思えるほどに、
そう考えたとき、私には為すべき事があると理解した――――。

――――隠世と現世の狭間。
そこで、大勢の荒魂を引き連れたタギツヒメは、ヒルコミタマとその分身達と対峙していた。
「……。」
すると、タギツヒメは自らの本体でもあるヒルコミタマに無言で御刀を向ける。……すると、
「……ナンデ?」
ヒルコミタマは言葉を発した。タギツヒメに「ナンデ?」と。それだけでなく、
「……ナンデ?……ボクハ、ミンナニキラワレルノ?……ナンデ?ミンナボクヲテキシスルノ?」
……何で?……僕は、皆に嫌われるんだろう?……何で?みんな僕を敵視するの?
「……ボクハ、ワルイコトシテイナイノニ、……ナンデキラワレルノ?」
僕は悪いことをしていないのに、何で僕は嫌われるんだろう?
「……モウイヤダヨ。……クルシイコトモ、キズツクコトモ、モウイヤダ。……ナンデ、オナジアラダマニモキラワレルノ?」

もう嫌だよ。……苦しいことも、傷付くことも、もう嫌だ。……僕は荒魂にも嫌われるようなことをしたかと。

そんな弱弱しい声を上げるヒルコミタマを見て、独白を聞いたタギツヒメは、フッと笑うと、そう口ずさんでしまった。

「……ばっかみたい。」

私も、ヒルコミタマも……本当のことを言えば良かったのだ。

一人ぼっちは嫌だと、仲間に入れて欲しいと、……神様を気取る必要など無かったのだ。ただ単純に、そんな簡単なことすら出来なかった自分が馬鹿みたいだと思ったからこそ、そんな言葉が口ずさんでしまったのだ。

それを口ずさんだ後、タギツヒメは自分と同じ想いを抱くヒルコミタマに御刀を振り下ろすのだった。それと同時に、タギツヒメに引き連れられた荒魂達もヒルコミタマの分身に襲い掛かるのであった。

――――可奈美とイチキシマヒメが戦っていたヘリポートの上。

そこで、舞衣と沙耶香は、倒れている可奈美とそれを見守るように傍に居る姫和を見つけた。

「可奈美ちゃん!!」

そのため、舞衣は急いで可奈美に近付き、息をしていることに気付くと安堵するのであった。

「可奈美は今、タギツヒメのお陰で小康状態に保っている。……とはいえ、ノロは人体に悪影響を与えるから今直ぐ医者に行く必要がある。」

「……姫和ちゃん、タギツヒメは?」

可奈美が、タギツヒメにノロで傷口を塞がれていることで小康状態に保っていることを姫和から聞いた舞衣は、タギツヒメは何処へ行ったのかと問う。

「……タギツヒメは、隠世の門を閉じるために向こう側に行ってしまった。……アイツが、この世界を救ってくれたんだ。大切な友達の記憶がある大切な場所を守るためにと言ってな。」

舞衣に問われた姫和は、虚ろな目でタギツヒメがこの世を救ってくれたのだと舞衣と沙耶香に答えていた。
「……でも、やっと分かったんだ。人も荒魂もそんなに変わりないということに。」
そして、姫和は舞衣と沙耶香にそう告げると、舞衣と沙耶香の両者は「えっ？」と声を出して、姫和の方を見る。
荒魂を忌み嫌っていた姫和がそんなことを言い始めるとは思わなかったからである。
「……舞衣、可奈美を頼む。……私は斬る剣、対して可奈美は守る剣だ。この先は……斬る剣だけで良い。可奈美に守る剣のままで居てくれと言っておいてくれ。」
それだけでなく、姫和は可奈美を舞衣に任せ、何処かへ向かおうとしていた。
「……帰ろう姫和？……お母さんの処へ。」
そのため、沙耶香は姫和を止めようとする。……姫和の母である簪を出して。
「……違う。私はもう、柊の娘ではない。」
だが、沙耶香の声も虚しく、姫和は荒魂を鎮める……いや、斬って捨てる柊の娘として戻ることを拒否する。そして、
「……私は、今の私は荒魂であり、私は〝十条〟姫和だからだ。」
タギツヒメが世界を守ったという事実を覆い隠されないようにするために、相模湾岸大災厄の発端となった輸送タンカーの事故を二度と起こさないために、その犠牲にされた者達の無念を晴らす〝復讐〟を遂げると。
荒魂を穢れと言って怪物扱いするこの社会に対しての〝復讐〟をこうして姫和は、復讐を決意した〝十条〟姫和に戻ることを宣言した。

年の瀬の後

――――年の瀬の大災厄から数か月後。

「ほらみんな！腕が下りて来てるよー！」

よく晴れたグラウンド上で、可奈美は後輩達……刀使の卵というべき子達の鍛錬の担当官になっていた。そんな刀使の卵達の鍛錬を見ているときに舞衣が可奈美に近寄って来て、とあることを尋ねる。

「……可奈美ちゃん。大丈夫？」

「ん？……まだまだ大丈夫だよ。内臓のことで病院に行ったけど、これぐらいの運動なら支障は無い……かな？」

身体は大丈夫かと。

可奈美は、ノロの負の影響を受けた美奈都に乗っ取られたイチキシマヒメとの戦いで自ら腹部を損傷させたことで、辛うじて一撃を与えることができたが、それが内臓にも達していたことで致命傷となっていたため、タギツヒメがノロで傷口を塞がなければ命を失っていたであろうと言われたほどであった。

……だが、可奈美はその代わりとして、傷口を塞いでくれたノロが人体に悪影響を及ぼしていたため、内蔵の一部がガン細胞となり、内蔵の一部を切除しなければならなくなった。

そのため、以前のように激しい運動ができなくなってしまったが故に、可奈美は刀使の鍛錬の担当官という後方に下げられていたのであった。

「……でもさ、代表選はもう出れないかな。」

「可奈美ちゃん……。」

それだけでなく、可奈美は激しい運動ができなくなったことで、御前試合に出ることもできなくなった。……それを聞いた舞衣は悲しげに可奈美の名前を出していた。彼女はそれを悔やんでいないかと思って。

「でもさ、もうそれで良いと思ってる。……だって、剣を振るえなくても、あの子達がそれを体現してくれるよ。」

だが、可奈美は御前試合に出られなくなったとしても、後悔は無いと舞衣に答えていた。

何故なら、自分の剣は後輩達が継いでくれると信じられるから、可奈美はそう言うと、

「……そう考えたとき、お母さんが私に剣術を教えてくれた理由がやっと分かったような気がする。……きっと、お母さんも今の私と同じ気持ちだったんだろうなって思えるから。」

可奈美の母である美奈都はきっと自分の剣の精神を継いで欲しかったから、剣術を教えてくれたんだと答えていた。

「……それに気づいていたら、優ちゃんもタギツヒメも失うことにならなかったと思う。」

「……可奈美ちゃん。」

そして、可奈美は母の美奈都の剣の精神を理解していれば、きっと荒魂を斬る以外の方法を模索して、優もタギツヒメも失うことにはならなかったのではないかと舞衣にポツリと告げるのであった。

それを聞いた舞衣は、悲しげに可奈美を見ていた……。すると、可奈美はいつも通りの笑顔で舞衣にあることを尋ねていた。

「……舞衣ちゃん。私のことより、みんなは？元気にしてる？」

嘗て共に戦った仲間達のことを。すると舞衣は、沙耶香と薫のことを先ず話すのであった。

「うん。……沙耶香ちゃんと薫ちゃんは、特別遊撃隊に配属されたけど、薫ちゃんはいつも通りみたい――――。」

――――《うぉら薫！どこでサボってやがる！》

「警戒任務中だ……」

その件の薫は、御刀祢々切丸を横に置いて、ねねを枕にして寝転がっていた。

《遊撃隊の隊長はてめぇだろうが》

「沙耶香に任せときゃ大丈夫だよ。通信終わり。」

《って、コラーーーー!!!!!》

沙耶香に任せとけば大丈夫だと薫は言うと、本部長を続投するハメに遭った紗南の怒号を無視して通話を一方的に切るのであった。

……そして、年の瀬の大災厄にて負傷したにも関わらず、1カ月もしない内に傷を治して元気になり、本部長を続投することになった紗南には薫も驚いたものの、その本部長を続投することになった紗南と話したせいか、紗南が本部長となった経緯を思い出していた。

雪那元学長は、ノロのアンプルを使った拷問で特務隊に居た頃まで精神が退行し、沙耶香が自分の学校に所属していたことだけでなく、自身が人体とノロの融合実験をしていた事すらも忘れているために、学長等の業務をとても行える状態ではなくなっていた。……ある意味、自分が人体とノロの融合実験という非道なことを行っていたということを忘れたのは、幸福だったのでは?と思えるほどに。

そして、結月元学長も、自身の生徒である綾小路武芸学舎の刀使がクーデターに参加し、多数の死傷者が出たことに自傷行為と自殺未遂等を繰り返すほどに心を病んでしまったことで雪那元学長と同様に学長等の業務がとても行える状態ではなかった。

その両者が心身共にそのような状態であるために紗南が本部長を続投することになったのである。

……とはいえ、紗南がその両者に毒を盛ったのではないかという根も葉もない噂が鎌府や綾小路内で飛び交っているのだが、紗南はそんなことを気にすることなく本部長の役割を勤めているようだった。

それだけでなく、刀剣類管理局は維新派のクーデターや年の瀬の大災厄を起こしたことで世論から否定的な意見が頻発したものの、荒魂による被害は昨年に比べればタギツヒメが荒魂を隠世の境目へと連れて行ったことで少なくはなっているのだが、結局は管理局以上に荒魂討伐に適した組織は居ないということで組織は存続されることになった。

雪那と結月という両学長だけでなく、維新派のクーデターに加わった刀使も粛清……いや、表向きは年の瀬の大災厄で死亡となっている(そして、優が今まで偽装していた〟男の刀使〟も年の瀬の大災厄に

よる死亡リストの一員に加わっている。)ことで、刀剣類管理局は人員の不足と国内の世論からバッシングされるという非常に苦しい事情を抱えることになっている。

そして、刀剣類管理局だけでなく、防衛省も維新派のクーデターや年の瀬の大災厄という戦いにて夥しい数の死体を築き上げたことによる国内世論によるバッシングを恐れ、甲斐陸将補が重傷を負って意識不明の状態の時に全責任を擦り付けることに成功し、甲斐は陸将補を罷免させられることとなっただけでなく、年の瀬の大災厄にて自衛隊員が何名かの死傷者を出したことと、長期出向組の西田達は江仁屋離島での自衛隊員達の荒魂と人体の融合実験や年の瀬の大災厄にてタギツヒメが行ったことを口外させないようにするために中央基地システム通信隊に移動とすることで人員整理に追われているとかなんとかを聞いた。

……維新派のクーデターや年の瀬の大災厄という戦いの果てに在ったのは夥しい数の死体だけで、誰も得をしなかった。これが荒魂と刀使の戦いであると告げているかのようにも薫は感じていた。

「……いつまでも、こんなことしてる場合じゃねえんだけどな。」

薫はそんなことをポツリと零しながら、年の瀬の大災厄にはこの空は隠世の境目となっていて、タギツヒメはこの世界を守るために其処へ向かったことを思い出していた……。

「各隊員警戒急げ!配置に着き次第、攻撃に…」

荒魂が発生したとの報を受けた葉月は、部隊の指揮をしていたが、沙耶香がその荒魂の前に出ると、横に流れるように斬って討伐し、その様を見ていた周りの刀使は「糸見さん…」「特別遊撃隊の…」と言って流石だと称賛していた。

……だが、

「ゴメンね。……でも、あの子が帰ってきたら、もう何も考えずに斬ることは無くなるから。」

その称賛の声に反して、沙耶香は何処か悲しげにノロの塊へと還っていった荒魂にそう呟くのであった。

荒魂が人を傷付ければ荒魂と人との間に溝が生まれるが故に斬ったが、今もそれ以外にしか解決法が無い自分に悔しさも感じていた。

「……。」

そして、沙耶香は彼女のことを思い出してしまったからなのか、ふと空を見上げていた。

『……沙耶香。荒魂と人間は共存できるかな？』

タギツヒメ……いや、彼女が望んでいたことを実現するには、まだまだ遠いだろう。テロといった政治信条だけでなく、この世の中には荒魂や人といったことに関係無く、飢えと怒りで見境なく暴れる者がこの世に現れることは沢山見て来た。

……それでも、いつかは、やがては、嘗ての自分の様に何も感じずに考えずに荒魂を斬って来たのを辞めて、みんな少しだけでも立ち止まって考えるようになるだろう。

荒魂という怪物扱いされ、心が怒りしかなかったタギツヒメだって、それを乗り越えたのだから、みんな出来る筈だとそう心の中で強く信じながら、他者を傷付ける物を斬り続けることでやがてはタギツヒメも帰れる場所になれると信じて――――。

「――――そんな感じで、薫ちゃんは沙耶香ちゃんに任せっきりみたい。」

「……薫ちゃんっぽいな。それに、沙耶香ちゃんも元気そうだね。」

舞衣の話から、薫は特別遊撃隊の隊長として、そして沙耶香はその隊員として活躍していることを聞いた可奈美は、朗らかな笑顔で嬉しそうに答えていた。

「エレンちゃんは？」

「エレンちゃんは――――」

「ノロにも意識はあり、意志はある。」

エレンは祖父であるリチャード・フリードマンの講演会に来ていた。内容は、

「穢れの正体が珠鋼から分離させられた〝寂しさ〟であるならば、我々はよき隣人となり、その声を聞こうではないか？……それこそが、珠鋼を荒魂を斬るためでなくノロを慰めるために使う新しい……」

荒魂が抱える〝穢れ〟は人の手によって珠鋼から分離させられた寂しさが元であるならば、その声を聞き、珠鋼を荒魂を斬るためでなく慰めることによって新しい技術の可能性が生ずると述べようとしたが、フリードマンの中に〝技術〟という言葉に何かが引っかかった。そして、

『――――探求心、行動力、そして好奇心。どれか一つ欠けてしまえば辿り着くことなどできないというのが私の考えである!!』

そして、思い出すのはフリードマンの……友人でもあったスレイドの研究発表であった。

『自己修復、思考の有無と形成、然るに荒魂は紛れもない生物であると私は確信しているっ!!』

スレイドは御刀以外による損傷は自己修復され、人間を最優先で襲うという行動と執念から、荒魂にも生物と同じく自己修復と思考が有ると論じていた。

『そして、荒魂化した人間は稀に記憶を残し、言葉を話す個体もいる言われている。なら、人体と荒魂を融合させることは必ずや荒魂の思考を読み解く鍵となる!!相互理解を素として我々人類は更なる発展の道へと向かうであろうことは明白なのだっ!!』

そして、スレイドは〝知りたい〟が故に、人間と荒魂を融合させるべきであると主張していた。

しかし、彼の禁忌の主張を受け入れる者は居なかった。

……当然だ。過去に大災厄が何度も有ったあの時代には荒魂を怪物とでしか見れなかったのだ。

『何故否定する!!何故当たり前の結論で満足するのだっ!!?旧約聖書、人は幾度も神罰を受けながら今日まで追い求めてきた!!スプートニク二号、人は命を糧に知識を得て生きてきたのだ!!そして、今の我々は広大なイマジネーションの大海原に漂う小舟に過ぎんのに何故火を起こす方法を知りたいと強く願うことが禁忌なのだ!?前に進みたければ、知りたいと強く願う。たったそれだけのことではないかっ!!?当たり前の結論だけでは、何も解からないっ!!!』

それ故に、スレイドは狂気の科学者と言われ、追放された。

……そして、年の瀬の大災厄で死んでしまったようである。

『……なあ、お前は本当はどこから来て、どんな物が好きで、此処に来るまでにどんな物や世界を見て来たんだ?教えてくれ。』

友人でもあったスレイドが死んだことによるものか、２０年前の大災厄の元凶となったアメリカの輸送船のタンカーの中に有るノロに話しかけるというスレイドの奇行…いや、スレイドの行動を思い出したフリードマンは、手許にある原稿の続きである『……それこそが、珠鋼を荒魂を斬るためでなくノロを慰めるために使う新しい技術の可能性』と言うのではなく、

「……それこそが、珠鋼を荒魂を斬るためでなくノロを慰めるために使う新しい人間と荒魂の関係を築き上げ、私達は新たな可能性を得られることができる重要なことなのだと私は確信している。」

人間が荒魂との間に新たな関係を築くことで、可能性を得られる重要なことなのだと述べていた。

……禍神として恐れること、神として崇めること、ノロとして扱うこと、それら全てが間違いだったのだ。人間か荒魂か関係無く、ただ彼等もこの世に生まれた一つの命であると認める。それだけで良かったのだ。

「荒魂は異形の怪物でも禍神でも、ましては神でもない。……荒魂も全ての命を産み出す地球の上に居るただ一つの命であると認めることから我々は良き隣人への一歩を踏み出し、新たな関係を築けるのではないか?……珠鋼を神の力を有する物であるという考えから荒魂は禍神であるという偏見を持つのならば、いっそのことその考えから

脱却する時期を迎えているのではないか？」
　ただ、神でも怪物でもなく一つの命であると認め、語り掛ければ良かったのだ。
　タギツヒメに過去のことを尋ねるスレイドのように、タギツヒメをヒメちゃんと呼んだ優のように、
「そうすることで私達は、もう珠鋼という石くれを神の力を有する物という偏見から脱することができ、この星に新たな命が芽生える瞬間をこの目で見ることができ、彼等と手を携え新たな関係を構築、そして新たな可能性に向かうことができると確信しています。」
　……そう理解すれば、もう刀使は戦うことも無くなり、この星に新たなる可能性という命が芽生え、後に続く子供達に武器ではなく新たな愛と友人を与えることができるのだ。
（……最後は、君の方が正しく、私の負けだったかもしれないな。）
　フリードマンは、友人だったスレイドのタンカーの中に有るノロに語り掛ける行動を心の中で評しながら、講演を締め括っていた。
　講演を聞いていた観客達は拍手でフリードマンを送ったのであった。

　そして、講演会が終わった後に外に出たエレンと累はフリードマンの講演会について話していた。
「刀使が荒魂を倒さなくても良い未来か……現役の刀使が興味を持つにしては珍しい分野ね？」
「……そうデスネ。……でも、私は刀使になれて嬉しいデス。刀使になってなかったら、きっと薫やねね。タギツヒメ達にも出会えませんでしたカラ。」
　累に現役の刀使が荒魂を御刀で倒さなくて良い未来の話に興味を持つのは珍しいと言うと、エレンは薫とねねやタギツヒメ達に出会えることが出来た刀使になれたことに感謝していると言うと、
「だけど、刀使のチカラは期間限定。……ずっと、このままで居られる訳じゃないデス。……でも、チカラが消えたその時には尊敬するパパやママのような技術者の道に歩んで、タギツヒメ達が安心して過ごせ

る未来を築きたい。……今は御刀で、そして技術でタギツヒメがこの現世を護ったのと同じ戦いが続けられマス！」

エレンは、この現世を護ったタギツヒメの様に護る戦いをずっと続けられ、そしてタギツヒメ達が願った友人達と安心して過ごせる未来を築くことができると累に答えるのだった。

「……大丈夫？辛く、長い戦いになると思うけど？」

「大丈夫デス！薫とねね……タギツヒメを見れば分かるデス!!」

累は、エレンの決意が成就するには長く、そして理解されない者達から辛い目に遭わされることになるが大丈夫かと問われ、エレンは薫とねね、タギツヒメを見れば分かることだと言って返していた。

「……そだね～。」

それを聞いた累は安心したのか、エレンと同じく年の瀬の大災厄では、裂けた空となっていた空を眺めながら、タギツヒメのことを思い出していた。

「――――それで、エレンちゃんは荒魂を斬らなくて済む研究に没頭しているみたい。」

「……そっか、そうだね！」

舞衣から、エレンが祖父のフリードマンと共に荒魂を斬らなくて済む社会を実現することに没頭していると聞いた可奈美は何処か嬉しそうだった。

……きっと、優やタギツヒメといった子達が悲しまなくて済むと想って嬉しかったのだろう。

舞衣は可奈美の表情から、そう判断した。

「……舞衣ちゃん。姫和ちゃんは元気？もう、帰ってこれる頃じゃないかな？」

すると、可奈美は薫・沙耶香・エレンと話が続いたせいか、舞衣に姫和が帰ってこれる頃ではないかと尋ねていた。

……しかし、

「……可奈美ちゃん、実は。」

「？」

舞衣は可奈美に答えていた。

実は姫和は、相模湾岸大災厄における米国の輸送タンカーのこと、可奈美と姫和が大荒魂を討伐したことで鎮圧されたとされる年の瀬の大災厄におけるタギツヒメが行ったことを世界に告発し、逮捕され、刑務所に投獄されるが、交代された政権と世論により恩赦を受けたものの、現在行方不明となっていた――――。

自由となり

――――防衛省。

中谷防衛大臣に呼ばれた甲斐は、中谷が座る席の前に居た。

甲斐は、恐らく維新派のクーデターを鎮圧したことによる論功であろうと思い、期待に満ち溢れていた。……少女でもある刀使達を殺し尽くしたにも関わらず、自分が立身出世することを夢見ながら。

「今回の件、ＩＯＣ並びにＪＯＣ、それに総理も米国も君の働きについてお褒めの言葉を頂いた。」

「……ありがとうございます。」

中谷の東京にオリンピックをしたいＩＯＣとＪＯＣ、それに総理大臣も甲斐が維新派のクーデターを無人機等で鎮圧したことに感謝し、そして米国は荒魂で強化した人間の戦闘データと冥加刀使に対して使ったドローンと米国製の誘導砲弾の戦闘データの提供に喜んでいたと述べていた。

それを聞いた甲斐は、予想通りと内心喜びながら、次の言葉を待っていた。……自分の制服に三つ桜が付くことを想像しながら、

「早速、総理に「その必要は無い。」……は？」

だが、甲斐は、自身の言葉を中谷に遮られたことに不思議な感情を抱いて、中谷を見つめていた。……何故、遮るのかと。

そして、今更だが甲斐は気付いた。中谷がこちらに一瞥もせず、淡々と書類を見ながら自身に応対していたことに。そして、中谷は淡々と書類を見ながら甲斐のことについて話し始めるのであった。

「……だが、総理はこうも言っていた。……維新派のクーデターを刀剣類管理局と歩調を合わせずに独断で行動するとは何事かと。」

維新派のクーデターに対して刀剣類管理局と歩調を合わせずの独断行動？……そんな筈はない。特務警備隊の此花　寿々花と話し合ったからこそ今まで射出してきたＳ装備のコンテナの弾道データと荒魂退治の支援として使ったりゅう弾砲の弾道データを９９式自

走１５５ｍｍりゅう弾砲のコンピューターに組み込むことができたのだ。それによって、冥加刀使をりゅう弾砲による誘導砲弾とＭＱ―９リーパーによるミサイルで殲滅できた。

……なのに、何故、そんな話になっているのだと甲斐は困惑していた。

「……君が年の瀬の大災厄にて重傷を負い、匿名による告発が有ったので身辺を洗ってみると〝そのような命令書〟が出て来たのだよ？……異論は有るかね？」

しかし、中谷の甲斐の身辺を洗ったことで発覚した〝そのような命令書〟という言葉で全てを理解した。

……維新派のクーデターと年の瀬の大災厄にて発生した死傷者と騒動の責任。それらを全て自分に被せる気なのだと理解した。しかも、ご丁寧に自身が年の瀬の大災厄にて荒魂に襲われ、負傷して病院に入院している隙に自身が独断で行動したのだという体裁をも整えて。

甲斐はそれを理解したとき、自身の足の下に穴が開いたかのような感覚に囚われていた。

「し、しかし、私はそのようなことはしておりません！」

「ほう？君は衛藤隊員を刀剣類管理局に断りも無く帯刀権の剥奪、並びに刀使としての権限も剥奪しようとしたということは私の耳に聞き及んでいるぞ？」

「……。」

甲斐は、中谷にそう言われて初めて気付いた。

何故、寿々花だけでなく、あの甘さが残る三木一等陸佐が紗南に甲斐の進言を受け入れるべきであると述べたのか。

それは、私をこのように追い詰めるためにしたのだと。そして、中谷もそれに乗る形で維新派のクーデターと年の瀬の大災厄にて発生した死傷者と騒動の責任を自身に被せることで防衛省に責任が及ばないようにしたのだと理解した。

「……さて、異論はあるかね？」

甲斐は中谷の声に返す刀は無かった。

その後、甲斐は表向き東京２３区で発生した維新派との戦闘の騒動の責を取る形で陸将補の地位を失うということになってしまうだけでなく、命をも失うこととなる。

――――無機質な白い壁、何も表さない白い天井といったこの殺風景な部屋の中でも静謐さを感じさせる白い敷布団と文明を感じさせる液晶テレビがある部屋の中に十条　姫和は居た。そして、その姫和が居る部屋の中でも特に異質さを表しているのが白い鉄格子であった。……そう、姫和は投獄されていた。

表向きの罪状は『特定秘密の保護に関する法律』及び『信用毀損罪』等に抵触したということだが、……実際は、相模湾岸大災厄における米国の輸送タンカーのこと、可奈美と姫和が大荒魂を討伐したことで鎮圧されたとされる年の瀬の大災厄におけるタギツヒメが行ったこと、それらを暴露したことが理由で投獄されていた。

それだけでなく、姫和は投獄されたと同時に帯刀権と刀使の役職を懲戒免職させられたことで刀使ではなくなり、御刀小烏丸をも失ってしまった。

「……。」

姫和は、そんなことを思い出しながら、何も無い白い天井をぼうっと見ながら液晶テレビ、もしくは刑務所の自由時間内で読んでいた新聞といったものから得た情報を一つずつ思い出していた。

先ず、一つは相模湾岸大災厄は米国の輸送タンカー事故が発端となったものであるという告発から、トーマス達の上司……いや、雇い主といった方が良いだろうか?そのＣＩＡ長官が拳銃自殺したという事件が起こったこと。

……恐らくだが、自殺というよりも、殺されたという方が正しいような気がする。

米国主導ではなくＣＩＡ長官の独断によるものとして処分するた

めに殺したのだと。
　そして、姫和が相模湾岸大災厄は米国の輸送タンカー事故が発端となったものであるという告発をした理由は、ＣＩＡ長官を殺すことではなく、ノロの軍事利用によってタギツヒメのような子達が産み出されないようにするために告発したのだが、人死にが出たことに姫和は自分の思慮の無さを悔いていた。
　……何故なら、彼女は米国やＣＩＡ長官を殺すことが目的の復讐ではなく、タギツヒメを産み出すために生まれた欲望に対しての復讐を完遂することが目的だったからである。
　……なのに、拳銃自殺をさせてしまった。故に、悔いていた。彼にも家族が居るのだから、残った家族は苦難の道を歩ませてしまうからこそ、己の思慮の無さに悔やんでいた。
（……それだけでなく、私がこうしている間に色々と変わったな。）
　甲斐陸将補が東京２３区で発生した維新派との戦闘は彼の独断によるものであるということにされ、責を取って辞任した……いや、させられたという方が正しいかもしれない。
　恐らくは、維新派との戦いで死んだ刀使達だけでなく、市街地に置けるりゅう弾砲やドローンでのミサイル攻撃の件は全て甲斐の独断で行ったものということにすることで冥加刀使の遺族や親類縁者だけでなく、東京の街を壊された怨みを持つ国民達が防衛省と政府、そして刀剣類管理局に怒りの矛先を向けさせないために甲斐をスケープゴートにしたのだろう。
　……それだけでなく、強引な行動を取ることが多い甲斐を防衛省自体も疎んでいたというのもあるのではないかと姫和は推測していた。
　そして、タギツヒメが年の瀬の大災厄を鎮めたという告発の後も、刀剣類管理局は装備の拡充をすることを決定したそうである。
　Ｓ装備だけでなく、オスプレイ、輸送防護車、ドローン……それだけでなく、テロとゲリコマ対策に刀使にもボディアーマーだけでなく銃器類の装備も検討されるほどであったらしい。
　検討された理由は、刀使と自衛隊の共同運用（箱根山戦など）からの戦闘記録及びタギツヒメの力を有した優が非正規戦闘（群馬の山中

や江仁屋離島といったテロ集団や荒魂化した自衛官との戦闘）の戦闘記録から、迅移といった刀使の能力と銃器といった近代兵器との相性は良いことが証明されたためであると同時に刀剣類管理局にも銃器類を装備させることで銃器と弾薬の製造単価を安くしようとしていたとも言われていたが、国民からの反発の声が相次いだことで立ち消えとなった。

……それを聞いた姫和は、虚しさを感じていた。

結局、何も変わらなかった。

タギツヒメが年の瀬の大災厄を鎮めたと告発しても、何も変わらなかった。

荒魂事件はタギツヒメが荒魂を隠世の境目へと連れて行ったことで数ヶ月前よりかは少なくなっていったが、今も神性な御刀を使って荒魂を討伐することが正しいという認識は変わらなかった。

年の瀬の大災厄をタギツヒメが鎮めたと告発したのは、荒魂は人間に悪意を持つ者ばかりではないと認めさせ、荒魂を斬るということは生命が有る者、生きている者を斬ることと同じ意味なのだと理解させたかったからである。

なのに、変わらなかった。……その虚しさと悔しさで、自分の無力さを噛み締めていた。

「……こんな場所に彼女を帰らせるべきなのか？」

変わらなかった世界で、みんなと同じように扱われることを望んだタギツヒメという名の……いや、ヒメちゃんならぬヒメという人が帰ってこれたところで何になるのだろうか？そんな想いが渦巻いていた。

……すると、

「９６番、出ろ！」

女性刑務官の声に反応した姫和は、声がした方へチラリと目配せしていた。

……扉が開いていて、刑務官が「出ろ！」と言っているところから、

この部屋の外に出られるのだろうと思った姫和は、刑務官の指示に従って部屋の外に出ると、手錠を付けられた。
「ついて来い！」
刑務官にそう言われた姫和は、指示通りに後に付いて行く。
すると、何やら個室の中へと誘導され、その個室の中へと入ると、服装だけでなく両隣を刑務官が固めているところからして刑務所長（階級が矯正監か矯正長かは姫和は知らないので、こういう表現となっている。）らしき者が机の前に居たため近寄ることなく、机の前に少し開けた所で立っていることにした。
「極めて希な辞令であるが、書類では正式な物だ。……で、これは個人的に私が聞くのだが、満足かね？」
すると、刑務所長らしき人物が姫和に向けて何やら尋ねたいことがあるそうだった。そのため、姫和は、
「……何がです？」
刑務所長の声に反応し、聞き返してしまった。
「三ヶ月前の脅迫……いや、告発と言った方が良いか？アレは利口なやり方ではなかった。……それに、何故荒魂をあんなに憎んでいた君が荒魂の味方するようなことをしたんだ？」
刑務所長は姫和の過去の言動と行動を調べたのか、はたまた荒魂を倒したいからなるような職業でもある刀使という経歴から不審を抱いたのかは知らないが、刑務所長は姫和にそんなことを尋ねるだけでなく、
「荒魂の味方をした結果、君は帯刀権と刀使としての権利、自身の御刀をも失ったのだが、……それで、君は、勝ったのか？」
刑務所長は、得る物が無い戦いに挑んだ姫和に何を得たのかと尋ねるのであった。
「……勝った？……私は、ただ自分自身のケジメを付けたかっただけです。」
姫和は刑務所長にそう言うと、
「……だから、誰にも打ち負かそうとも思っていないですし、得る物ありませんでしたよ。……それだけです。」

勝利も得る物も無かったと答えるのだった。
「……なるほど、恩赦か、皮肉な物だ。……君自身が犯した罪が君自身を救った訳だ。」
姫和の言葉を聞いた刑務所長は皮肉気な態度で、且つ朗らかな顔となって、姫和を刑務所から釈放するサインをするのであった……。
「おめでとう。……君は自由の身だ。」

こうして、姫和は自由となった。
ただ、自由となった姫和は、これからどうすべきか悩んでいた。
今まで母の仇であるタギツヒメと折神　紫を討つべく復讐の旅に立った。……だが、その旅の終着点は、タギツヒメの味方をするべく年の瀬の大災厄にて隠世の門を閉じたことを述べたこと、相模湾岸大災厄の真実を暴露したことで折神　紫はタンカー事故の隠蔽に腐心していた米国から命を狙われなくなったことで、結果として母の仇として狙った二人を助けるというものになってしまった。
復讐の旅がどこをどうしたら、仇を助けることになるのだろうか？と考えるだけで刑務所長の言葉である「皮肉な物だ。」という言葉を思い出してしまう。
……確かに皮肉な物だ。仇を討つことばかり考えていたのに、その殺そうとした二人を助けることになるなんて。
そして、姫和は刑務所長の言葉を思い出してしまったせいか「君は、勝ったのか？」という言葉も思い出してしまった。
……相模湾岸大災厄、鎌倉特別危険廃棄物漏出問題、維新派のクーデター、鎌倉年の瀬の大災厄……それら全ての戦いに勝った者は居たのだろうか？

ＣＩＡ長官は拳銃自殺し、全てを失い。
タキリヒメは政治に謀殺され、消えて逝き。
甲斐陸将補も全ての責を取らされ、追放され。

衛藤　優は社会に殺されて、何も遺せず。
タギツヒメも隠世の向こうへと消えて行った。

……そして、私も母の実家である柊の家から刑務所に入れられたことを理由に絶縁を言い渡され、前科がある以上は刀使になることもできない。そして、可奈美も皆も……残った者も大災厄の傷跡に追われる。戦いの跡は、誰も幸福にならない。誰も勝利者になれない。
それが全てであった。
そんなことを考えながら、姫和は歩いていた。歩き続けていた。
こうも復讐という目的が無くなれば何もやることがないのかと考える程に……。それ故か、姫和はポツリと小さな声で呟いた。
「……家に帰ろう。」
実家に帰ろうと。

――――奈良県のとある某所。
目の前に広がる田園風景を通り、引き戸を開けると「ただいま」とも言わずに家に入り、玄関に靴を置くと畳が沢山有る部屋へと向かい、そこで姫和は寝転がる。
「……。」
寝転がった姫和は、天井をぼうっと見上げていた。
意味もなく、ただぼうっと。
ここから朱音からの手紙が届いて、その手紙から全てが始まった。
そして、御前試合で可奈美と優に出会った。
その旅路で色んな人間が死んだ。
そうして、復讐相手だと思っていた紫とタギツヒメを助ける形になった。だけど、その代わりなのかＣＩＡ長官といった人達が拳銃自殺したことに当初は報いを受けたと思ったが、監獄の中で段々と他人の人生を滅茶苦茶にした気持ちが強くなり、人を殺した気分となって

最終的には後味が悪いものしか残らなかった。
そんなことを考えながら、ぼうっとしていると車の音が聴こえてきたため、何事かと思い外を覗く。……すると、家の前に青い車が停まっていてそこには、
「……五條学長？」
今も平城学館の学長をしている五條　いろは学長が其処に居た。
そのため、姫和は自分を刀使にしてくれただけでなく、小烏丸も授けてくれた恩師のいろは学長を出迎えるべく、身支度を整えるのであった――――。

……こうして、姫和の実家に来たいろは学長は、姫和の母である簪の仏壇に線香をあげてから、姫和が落ち葉を集めて焚き火にしている庭へ移動すると、姫和はいろは学長がこちらに近付いている気配を感じたのか、いろは学長に実家のことについて聞いていた。
「……この家、私が居ない間も誰かが手入れしてくれてたようですが。」
「家は人の手が入らへんとすぐに痛むからね。朱音様が気を使ってくれはったんよ。」
いろは学長は、姫和が離れている間も実家の手入れをしてくれたのは朱音の指示によるものだと話してくれていた。……そう話しながら、いろは学長は姫和が焚き火の前で『十条　簪　様』と書かれている封筒を入れて燃やしているところを見ていた。
「……なぁ姫和ちゃん。……もう刀使に戻る気無いん？」
姫和が復讐の切欠となった封筒を燃やすところを見たいろは学長は、姫和にそう尋ねていた。すると、姫和は、
「ええ。……もう、戦う理由がありませんから。それに、みんなに合わせる顔もありませんし。」
いろは学長にそう呟くように答えていた。……もう戦うことも無

いのだと。刀を振るう理由も無いのだと。
「……それに、母方の実家から絶縁を言い渡されただけでなく、前科が有る以上は国家公務員である刀使にも戻れません。……でも、私はこれで良かったと思います。もう私は、荒魂を斬ることができないでしょうから。」
　そして姫和は、前科が有る以上は刀使に戻れないのだといろは学長に話すと、もう荒魂を斬ることも無いことに良かったと思うということも話していた。
「……変な話ですよね？二十年前、私の母はタギツヒメを討ち損じました。それを知った母は、全ては自分の責任だと悔やみ続けました。この世を去るその日まで……だから私は、母のやり残したことを私が成そうとしました。……なのに、なのに母の仇でもあるタギツヒメを助けてしまいました。欺瞞に満ちたこの社会に復讐するために全てを告発しました。」
　それだけでなく、姫和はいろは学長に母の仇を討つべく向かった復讐の旅の終着点は、その母の仇であるタギツヒメを助けることになってしまったこと。……そして、荒魂は穢れであるという欺瞞を流すことで成り立っているこの社会に、相模湾岸大災厄の真の犯人である者達に対して復讐しようとしたと告げた。
「……けど、私が入れられた刑務所の所長に言われた言葉を借りれば、私は一つも勝っていなければ、達成感も無かった。……有るのは喪失感だけです。」
　しかし、復讐しても誰にも勝てなかっただけでなく、荒魂を穢れだと言って忌み嫌う人が少しでも減ればと思って、相模湾岸大災厄が米国のタンカーが沈没したことが原因であるという真実とタギツヒメが年の瀬の大災厄にて何を行っていたかを告発しても、誰もその声を聞かず、荒魂は穢れで異形の怪物としか見れない人が多かったと言って、姫和はいろは学長にあの告発の後に得られたものは喪失感だけだったと自身の心情を漏らしていた。
「そうとは知らんと……ほんまに一人でよう戦うたね。」
「いえ、一人じゃありません。……多くの人に助けてもらいました。」

姫和の独白を聞いたいろは学長は「一人でよう戦うたね。」と姫和に言うと、姫和は小烏丸は学長が手配してくれたと心の中で呟きながら、いろは学長に背を向けたまま、多くの人に助けてもらったと述べていた。

実際、姫和一人で告発しても捕まって終わるだけだっただろう。だが、トーマスが武器商人を通じて遺してくれたＣＩＡ長官とのやりとりのデータ（特に、タンカー沈没はＣＩＡ長官が米国にノロが流れないようにトーマスといった工作員達に命じて沈没させたといった物が遺っていた。）が有ったからこそ、ここまでの大騒ぎとなったのだ。

「……だからもう、刀使に戻る気はありません。」

それらを経験した姫和は、いろは学長にそう告げる。

……もう刀使に戻る気は無いのだと。それを聞いたいろは学長は、

「それはそれでもええと思うよ。姫和ちゃんはもう十分戦うたんやから。それに、実は……あ、これは言わん方がええな。」

「……何ですか？」

姫和にそう言って、気を引かせていた。そのため、いろは学長の言葉が気になった姫和は聞き返していた――――。

――――特別希少金属利用研究所。
そこに姫和は居た。……理由は、

『また姫和ちゃんの力を貸して欲しいって直々の御指名らしいけど…ちょっとややこしい事になってて。』
『と言うと……?』
『タギツヒメが隠世の向こう側へと行ったやろ?特別希少金属利用研究所…いや、フリードマン博士等が珠鋼を媒介として隠世からエネルギーを取り出す研究が行われていたんやけど、無尽蔵のエネルギーを留めるやったかな?それが可能でないから、その研究を隠世の向こう側に居るタギツヒメとコンタクトを取ることで隠世の知識を得る手段に使えないかってことになってるんよ。』
『はぁ……?』

特別希少金属利用研究所が珠鋼を媒介として隠世からエネルギーを取り出す研究が行われていたが、その膨大なエネルギーをこちら側に留めておくことが難しいということでその研究は、隠世の向こう側に居るタギツヒメとコンタクトを取ることで隠世の知識を得る研究にシフトしているといろは学長は姫和に述べていた。
「その研究に隠世から力を引き出せることができる人の協力が必要らしいんやわ。……それで、今の姫和ちゃんならどうかなって。」
そして、その研究には珠鋼を通して隠世から力を引き出すことができる刀使だった者が必要だと聞いた姫和は少し迷った。
『でも直ぐには返事できひんやろうし、……一度よく考えてから返事くれる?』

それを聞き、一晩考えた姫和は、特別希少金属利用研究所に足を運んでいた。

タギツヒメと会うためなのか、それとも何かしらやっておきたいと思ったのかは自分でもよく分からないが、自然とそんな行動を取ってしまった。

「……。」

そのため姫和は、特別希少金属利用研究所の前で立ち尽くしていた。

何も考えずに足を運んだために、アポすらも取っていなかったので、どうやって研究所内へと入ろうかと悩んでいたのである。

滑稽な話である。

何も考えずに、感情で行動すればこうなるということは百も承知だったはずである。

なのに、コレだ。

そのため姫和は、早速後悔していたところ、

「姫和ちゃん？」

懐かしい声に呼ばれたと姫和は思い、振り返った。

そこには、可奈美が居た。

――こうして、可奈美のお陰で特別希少金属利用研究所内に入れた姫和は、用意されていたパイプ椅子に可奈美と共に座りながら隠世の向こう側に居るタギツヒメとコンタクトを取る実験の用意を見ていた。

「……ねえ、姫和ちゃん。」

すると、可奈美が姫和に話しかけてきた。それを聞いた姫和は「何だ？」と答えていた。

「……最近、獅童さんと此花さんが特務警備隊に配属されたのは聞いてる？」

「ああ、聞いてるぞ。」

「それで、特務警備隊になった二人はこれから大忙しみたいでね――。」

そうして、可奈美は姫和に特務警備隊となった真希と寿々花の話をするのであった――――。

その一方、真希と寿々花は、年の瀬の大災厄にてオスプレイではなく輸送防護車が活躍したことで、特別遊撃隊や特務警備隊といった精鋭の部隊をオスプレイといった航空機で迅速に荒魂事件の現場に送るという絵図を描いていたが、前述したようにオスプレイが年の瀬の大災厄で活躍できなかったために、現場の声も有って航空戦力が思うように得られなかったことで、刀剣類管理局の編制が輸送防護車といった車輛重視の編制となってしまった。

そのため、機動性を失った編制で各所に現れる荒魂事件の対処に追われていたのだが、

「――――ノロの分祀を行った神社周辺に不穏な動きが有ると？」

「ええ、私が放った〝草〟がそのような報告がありました。」

それだけでなく、国内に居る不穏分子の対処に追われていた。

寿々花の言う〝草〟は借金で頭が回らない者や半グレ、元警官やヤクザといった私立探偵といった人間を此花家の財力で従わせている連中達ではあるが、仲介屋を通して動かしているため、今のところは各国の諜報機関に此花家が主導していることは気付かれてはいないのだが、その〝草〟が不穏な動きを見せている連中が居ると寿々花に報告し、それを真希と情報の共有をしていた。

「中国の秘密警察やロシアの諜報機関だけでなく、中東の過激派が何やらノロを入手しようと動きを活発化させているようですわね。」

「ふむ。……ノロを？」

「恐らくは、ノロのアンプルの製造法を維新派の残党である山崎　穂積がバラ撒いていると考えられますわ。」

「……なるほど。維新派の残党は朱音様が主導するノロの分詞計画と刀剣類管理局の暗部を刺すことでこちらを悩ませることをしようという魂胆か。」

各国の諜報機関だけでなく、中東の過激派までもがノロを狙ってい

ると聞いた真希は、神妙な面持ちで答えていた。
「それと、紗南本部長が我々に対して反抗を抱き、対抗する戦力をかき集めている動きがありますわね。」
それだけでなく、本部長を続投することになった紗南が自分達特務警備隊に対して不穏な動きが有るということも報告していた。
「……考えられうる動機は？」
「恐らく、私達が維新派に対して行ったことについて、反感を抱いたものと思われますわ。」
「……なるほど。あの人の性格を考えるとそう考えられるか。」
真希が、紗南が自分達に対して反感を抱く理由は何であるかを”草”を使って内偵していた寿々花に尋ねると、寿々花は数ヶ月前の維新派のクーデターに対する対処が非道過ぎる故に反感を抱いたのが原因であると真希に答えていた。……そして、国外に敵、国内にも敵が居るという状況を聞いた真希は、
「もし、タギツヒメ達が居てくれたら、そいつらを纏めて処理してもらうことができ、朱音様の宸襟を悩ますこともなかっただろう……亡くすべきでは無かったのかもしれないな。」
真希は、タギツヒメと融合していた優を殺すのはまだ時期尚早だったのかもしれないことと、その国内の不穏分子を優やトーマスの代わりに始末する者達は居るのかと寿々花に暗に伝えるのであった。
「……いいえ、そのようなことはありませんわ。我々は朱音様直属であり、諜報活動といったことを主とする特務警備隊ですので、彼等を排除する者達は第二席の私が”調達”できますわ。」
そのため、寿々花は自分達は刀剣類管理局の現局長である朱音直属で諜報活動も行う権限を有する特務警備隊なのだから、彼等を暗殺といった手段で排除する〝人〟を用意することができると真希に進言していた。
「……分かった。それらの仕事は君に一任する。」
その汚れ仕事を引き受けると言った寿々花に対し、真希は力無くそう告げていた。
そして、寿々花が段々と甲斐みたいな人間になりつつあることに気

付くと、いずれ自分も甲斐のようにこの社会からも捨てられることになるのだろうと理解してしまった。

「……何か、ご不満なことがありまして？」

力無くそう告げる真希に何か違和感を感じたのか、寿々花は不満があるのか？と尋ねるが、

「いいや。……朱音様の宸襟を悩ます者が居なくなれば、不満は無いさ。」

真希は寿々花に不満は無いと言うと、タギツヒメが消えたとされる裂けた空が在った東京の澄んだ青い空を眺めていた……。

心の中では、国家公務員とされた御刀を持つ者は荒魂だけでなく、人間とも戦い続けなければならないのかと思いながら。

そして、真希のその懸念は遠からず的中することになる。

この先の未来には、東京でのオリンピックが中国から発生した流行病により、思ったような特需を得られなかったことで寿々花だけでなく現政権は批判の的にされる。

そして、それだけでなく、中東が燃えたことが発端となった物価高と年々高くなる税金（これには、刀剣類管理局の装備拡充を発端とした荒魂対策費と近隣諸国との軋轢によって生じた防衛費の増額も理由の一つとしてある。）により経済成長は更に止まり、刀剣類管理局だけでなく、その判断を下した政府にも強い批判の対象にされるのであった。

それだけでなく、ロシアが隣国に再度侵攻を開始し始めたことで西側諸国はその隣国に軍事支援をすることを決定するのだが、その軍事支援の中には荒魂事件と年の瀬の大災厄にて得た戦闘データを搭載した無人機と誘導砲弾が提供されることになり、刀剣類管理局と刀使は計らずも戦争協力させられたという形になってしまった。

これにより、敵性国家から刀剣類管理局は敵視され、それ以降は刀剣類管理局と刀使は敵性国家による工作活動にも対処せねばならなくなるのであった……。

そのため、真希と寿々花は今は知らないが、彼等の未来は国内の不穏分子といった人達だけでなく、国外の敵性国家による工作活動に従

事する工作員という人にも対処しなければならなくなったのである。

……まるで、国家公務員とされた御刀を持つ者は荒魂だけでなく、人間とも戦い続けなければならないかのように。

「――――みたいな感じで獅童さんと此花さんは特務警備隊として頑張っているけど、色々と苦労しているみたい。」

「……そうか、刀剣類管理局は今大変なんだな。」

そうして、可奈美は真希達がオスプレイといった航空戦力を得られなかったことに四苦八苦していることしか知らなかったので、それを姫和に言うと、姫和は苦笑いするしかなかった。

「……それと、舞衣ちゃんは近く特務警備隊へ向かうらしいし、沙耶香ちゃんと薫ちゃんも特別遊撃隊で頑張ってるみたいだし、それにエレンちゃんは荒魂を斬らなくて済む研究に興味が有るらしいよ。」

「……そうか、みんなそれぞれ、頑張っているんだな。」

それだけでなく、可奈美は自分の戦友達が向かった先について姫和に楽しそうに話していた。……それを聞いた姫和は、自分だけが刑務所の世話になるようなことを勝手に一人で行い。そして自分一人だけが牢屋の中で時を過ごしたことを悔やんでいた。

まるで自分一人だけが取り残されたかのように……。

「それと、歩ちゃんっていう刀使が居るんだけど――――」

そう思っていると、次は内里　歩という刀使の話をしたそうに笑う可奈美を見た姫和は静かに聞くことにした――――。

――――その件の内里　歩はリハビリを続けていた。

歩は年の瀬の大災厄にて荒魂に襲われたことで病院へ運ばれ、命を取り留めたものの重傷を負い、長く昏睡状態であったために足が歩ける状態となってしまった。

「大丈夫!?歩!?」

そのため、今も歩は田辺　美弥の付き添いのお陰も有って、リハビリに励むことができた。

しかし、リハビリの途中で倒れてしまった歩の姿を見た美弥は、歩につい「大丈夫?」と尋ねていた。

「うん!……大丈夫!!」

そんな美弥の声を聞いた歩は、笑顔で「大丈夫!」と答えつつ、駆け寄って来た美弥を手で制しながら、歩は必死で立ち上がろうとしていた。

「頑張って……また衛藤さんと一緒に……それと!!」

立ち上がることで、可奈美とまた一緒に歩くために……それだけでなく、

『――――私が居なくなった後の世界が私みたいな剣を振るしか能が無い子供でもヒメちゃんみたいな子と仲良くできたり、ヒメちゃんが居ても困らないぐらい広くて優しい世界にして欲しいな。』

タギツヒメ……いや、ヒメちゃんという友達を得た結芽が語った言葉を思い出した歩は、力を振り絞って歩き出すと、

「優ちゃんや結芽さん、それにあなた達の大切な友達が憧れる様な刀使にならなきゃいけないから……だから、ここで立ち止まっている訳にはいかない!!」

あの子達が憧れる人間にならなければいけないから、立ち止まる訳にはいかないと言うと、

「だって!……いつかは……私も、みんなも御刀なんて頼らなくて良い広くて優しい世界になるまで歩かないといけないから……早く歩けるようにならないと!!」

結芽の友達となったヒメちゃんや優、ジョニーやミカやニキータ達といった怪物扱いされる子達が生きていける広くて優しい世界にするために自身の足が歩けるようになると、歩は自身の決意を語りなが

ら、脂汗をかきながらも歩き始めていた。
　そのためか、歩は疲労で足がもつれ、倒れそうになるものの、
「……だったら、私も手伝わせてよ。だって、友達を助けなかったら、アイツにまた馬鹿にされるだろうし。」
　美弥はそう言うと、タキリヒメのことを思い出しながら歩を支えていた。
「……アイツ？」
「そ、自分だって友達が居ないくせに私に友達を大切にしろと言ったアイツ。そいつにバカにされないようにしないとね。」
　アイツ？と歩に尋ねられた美弥は、苦笑いしながらも穏やかな目で三日月宗近を見ながら、アイツのこと……タキリヒメのことを話していた。
「……多分アイツも、いつかは此処に帰ってくると思うから……だから、友達の歩のことを助けないとね。」
　美弥のアイツの話を聞いていた歩は、恐らくはタギツヒメ…いや、ヒメちゃんと似たような人なのだろうと結論付けると「そっか。」と言うのあった。
「だから、頑張って！」
「……うん!!」
　美弥の声援を受けた歩は自分の足で歩くために、リハビリを続けようと、再度歩き出すのであった――――。

「――――っていうことがあってね。もしかしたら、歩ちゃんは私以上の人になっているかもしれないから、楽しみなんだ。」
　そうして、可奈美は自分の後輩が自分以上に成長するかもしれないことに喜びを感じていたのか、嬉しそうな表情で姫和に話していた。
「ふうん。……それは手合わせしたいとかいう意味じゃないよな？」

それを聞いた姫和は、冗談めかして可奈美に〝手合わせがしたい〟とかいう理由ではないよな?と尋ねていた。……すると、可奈美は、
「それなんだけどさ。……私、何時までも剣術好きな少女のままで居られないと思うんだよね。」
神妙な面持ちで姫和にそう告げていた。
それを聞いた姫和は、
「……刀使を辞めようと思ってるのか?」
可奈美にそう訊いてしまった。
姫和に刀使を辞めるのかと問われた可奈美はこう答えた。
「……そうだね。刀使は続けたいけど……内蔵が結構やられてて さ、運動に支障が出るレベルだから、荒魂討伐に出られないって感じかな。」
自身の内臓は、タギツヒメが出血を抑えるために傷口を塞いでくれたノロが、人体に悪影響を及ぼしていたことが原因で内蔵の一部がガン細胞となり、内蔵の一部を切除しなければならなくなったことで、以前のように激しい運動ができなくなってしまったことを姫和に打ち明けていた。
「……それと、命も長くないみたい。」
「……そうなのか。」
それだけでなく、可奈美自身の命が長くないことも姫和に告げていた。
「でもね。考えてみると、舞衣ちゃんも沙耶香ちゃんも……そして姫和ちゃんも、みんなみんな子供から大人になっていくんだから、私も何時までも剣術好きな〝少女〟のままでは居られないってことだと思うから、これで良いかな。とか考えちゃうんだよね。……私の剣の真髄は、私が教えている子達に受け継がれていくと思うからさ。」
そして、可奈美は姫和に剣術好きな少女のままでは居られないと言うと、
「もし、刀使がダメになったら、この研究所がやろうとしているヒメちゃんとコンタクトを取ろうとしている研究に協力するつもりでいるよ。」

もしも、刀使の力を失ったらこのタギツヒメとコンタクトを取る研究に協力するつもりでいると答えていた。……それを聞いた姫和は、
「……そうか。刀使じゃなくなっても、お前は……可奈美はまだ進もうとしているんだな。」
停滞している自分とは違う可奈美の姿が眩しく思えた。
「うん。……それに、ヒメちゃんも言っていたんだ。……みんなに出逢えて本当に良かったと、心から思えたって。そんな思いがずっと続く、そんな世界になりますようにって。……だから、それを一つでも進めるために、頑張ろうと思うよ。」
それを聞き、タギツヒメが言っていたことを思い出した姫和は……
そうか、そういうことだったのかと思ってしまった。そして、
「……そうか、まだ始まっていなかったんだな。……勝手に絶望して、勝手に決めつけて、勝手に停滞していたんだな。」
ＣＩＡ長官を殺したことと、世の中を無茶苦茶にした罪悪感で勝手に絶望して、停滞していただけだと姫和は理解してしまう。
そう姫和は結論付けると、ある決意……いや、新たな決意を抱き始めていた。
「姫和ちゃん？」
「可奈美。……思い出したよ。」
姫和の呟きを聞いた可奈美は姫和の名を呼ぶが、姫和は自身が抱いた新たな決意を口にするのであった。
「私はもう少しだけでも、荒魂を……生きている人達を信じ直してみることから始めようと思ったよ。」
姫和がそう口ずさむと、特別希少金属利用研究所のスタッフが「隠世に居るタギツヒメとコンタクトを取る研究。『結びの巫女』プロジェクトを開始しまーす。」と告げるのであった。それを聞いた姫和は、
「……ああ、だから、私ももう少しだけでも良いから生きていたいな。」
「ええ？……姫和ちゃんは大丈夫でしょう？」
「……いや、私も長くはない。」
自分も長く生きていたいと言うと、可奈美は姫和は大丈夫だろう？

と返す。すると、姫和も長くはないと答えていた。
「……え？」
「……刑務所に配膳された私の食事に……毒が仕込まれていたようだ。……何だか妙に……少し……息苦しくってな。」
　困惑する可奈美を他所に、姫和は以前居た刑務所の配膳された食事の中に毒物が仕込まれていたと可奈美に告げていた。
　……恐らく、これ以上騒ぎを大きくして日米関係が危ぶまれることが無いように姫和を始末しようということなのだろう。症状からしてリシンかボツリヌス菌かの毒を仕込んだのだろうと姫和はまるで他人事かのように冷静に判断していた。
「……だから……最後は……あの家で静かに一人で……と思っていたが……そうはいかなかったみたいだ。」
　姫和は可奈美にそう告げながら、肩に寄りかかっていた。すると、
「……姫和ちゃん。……重たそうだから、私が……ううん、違うね。タギツヒメ……ヒメちゃんが居る世界を望むみんなが半分持つよ。」
　可奈美はそう答えると、
「……そうか。……それは、見てみたかったな。」
　姫和はそう返し、
「……多分。私もそう遠くない内に姫和ちゃんの居る所に向かうから。」
　可奈美も、眠るように瞼を閉じた姫和にそう告げるのであった。

篝火が向かう先

――――長い眠りだった。

長く、そして目の前は真っ暗で何も見えなかった。

まるで、この世の終わりかのように、真っ暗で何も見えなかった。

しかし、その理由が自分の瞼が閉じているからだと気付いた可奈美は、瞳を上げることにする。

すると、可奈美の目の前は、何も無い、ただ白く、遠い先を見回しても白しか映らない白い監獄のように思える広い空間が広がっていた。……いや、本当に何も無いのかもしれない。

可奈美はそう思うものの、自然と歩き出していた。

歩いた先に何かが有るという保証も無いが、歩き続けていた。

……そして、どういった経緯で自分が此処に居るのか分からなかった。

誰かに殺されたのか、それとも老衰で死んだのか、はたまた誰かに貶められて辱めを受けた上で消されたのか……それは、もう分からない程に記憶が曖昧となっている。

いや、記憶が曖昧ではなく、此処は現世（うつしよ）と重なり合った多重層の異世界と言われ、様々な層があり、各層ごとに物理現象が異なると言われた隠世の世界なのだから、１７歳当時の母である美奈都やノロを受け入れる前の結芽が居るように様々な〝私〟が混在し、それが一つになったのかもしれない。

言い換えれば、隠世というのは可能性の数だけ存在している数多の現世の影を全て集めたものなのだから、例えば何処かの現世の世界で辱めを受けて死んだ〝私〟が居たり、毒を盛られて死んだ〝私〟が居たり、どんな二次創作（パラレルワールド）的な世界に居る〝私〟が居てもおかしくないし、それが一つになったとしてもおかしくはない。

……そう考えると、そういった隠世のことを知っていることに合点が行く。

だから、自分が何千通りの何万通りの自分が居るということも理解できたし、そんな精神状態でも、自分達が居る現実という様々な人が居て〝しがらみ〟という複雑に絡み合った現世の肉体が無く〝魂〟という精神のみになった故か、そういったことに頓着する必要が無くなったという考えが優先され、此処に閉じ込められた怒りや焦りよりも自然と心が穏やかになっていくのが解かった。

ただ、在るがままに存在する。

ただ、在るがままに存在する。

ただ、在るがままに存在する。

それだけしか、入って来なかった。……そんなことを考えている内に、誰かの声が聴こえた。

「……可奈美？」

「……姫和…ちゃん？」

姫和だった。

……だが、見知った姫和と出会ったにも関わらず、不思議な気持ちを抱いていた。

こんな奇妙な世界でも、最初に出会うのが姫和だということに不思議な縁を感じた。

「……可奈美、此処に居るということは、お前はあの後に死んでしまったのか？」

「……多分。どういった死に方をしたのかは分からない。……ただ、此処にはありとあらゆる私が居て、何処かで癒やせない傷を負った私達が還る場所なんだというのは分かるよ。」

そして、姫和にそう問われた可奈美は、自分が幸福に死んだのか、それとも不幸に堕とされて死んだのかは分からないが、此処はその堕とされた不幸によって出来た治せない傷を癒やす場所であることは理解できたと答えていた。

「……そうか。此処は……疲れた人を癒やしてくれる場所なんだな。」

「うん。きっとそうだよ。……だって、死んだ先に逝ける場所まで救

いが無かったら、この世に救いなんて一つも無いじゃない？」
　その可奈美の答えを聞いた姫和は、此処が人が救われる唯一無二の世界なのかと可奈美に問うと、可奈美は死後の世界まで様々なしがらみに雁字搦めのように囚われている現実と一緒で救いが無かったら、何処にも救いは無いのだと答えていた。
　そんな実体もとりとめの無い会話をしていたせいか。可奈美と姫和は自分以外の人と出会えたと思えた。
「……でな、優と私の馴れ初めはね。」
「……ホント、そればっかだよね～。」
　そう思った理由は、その声に聞き覚えがあったから。
　何千、何万という回数であろうと思われる程に聞いたことがある声。容姿。
「なっ、何か悪いか!?私にとって見れば、一番の思い出なんだぞっ!!?」
　だけど、変わった部分は、自分のことを〝我〟とは言わず、まるで何処かの少女のように〝私〟と言っていて、無邪気に話す子供のような子供。
「……タギツ……ヒメちゃん。」
　それは、嘗ては大荒魂ともタギツヒメとも呼ばれていた子だったが、優といった子供達から〝ヒメちゃん〟と同じ子供のように呼ばれるようになった子。……それを可奈美はふと自然に口に出す。
「ふお!?か、可奈美お義姉さまぁっ!!?」
「……荒魂って、こんなのばっかなのかな。」
　それ故に、可奈美が居ることに気付いたタギツヒメは慌てながら可奈美の名を叫ぶと、その慌てるタギツヒメの姿を見た結芽は憐れむような何とも言えないような顔をするのであった。
「あっ！可奈ねーちゃん、こっちに来たんだっ!!」
　それだけでなく、優も隠世に居た。
　その姿を見た可奈美は、つい自らの瞳から涙が流れた。……優と結芽とタギツヒメと、他にも知らない子供が居るが、理由は何となく分かった。何処で聞いたのかは分からないが、確か、体内への荒魂注入を受け入れたことが理由で隠世側で彼等が生きているのだと。

優は体内にタギツヒメを受け入れたように、結芽も荒魂を体内を入れたのだから合点が行くと思いながら。

そうして、可奈美は声を少し荒げながらも優にあることを伝える。

「……ゴメンね。……もう、一緒に剣術できないね。」

嘗て、優と約束した一緒に剣術をやろうということが、もう出来ないということを。……今度は剣術を楽しむという意味を含めた物ではなく、もう荒魂とも人とも斬り合う必要が無いのだという意味を含めて伝えていた。

「……良いよ。僕はみんなと一緒に居るだけで幸せだよ?」

優はそう言うと、タギツヒメと騒ぐ子供達の方に目を向けると可奈美に言う。

「……みんな、良い子だから。」

親を殺された仇を取るために、少年兵になったジョニー。

金に目がくらんだ親に売られ、花を売ることをされたミカ。

攫われて、同情されるために大人に手足を切り落とされ目を潰されたニキータ。

不治の病で親が離れて行ったことに苦悩する結芽。

……そして、親と呼べる者が存在しないタギツヒメ。

そんな彼等を優は優しい声音で「良い子」だと述べていた。

「……みんなと一緒に居れば、悩んでいたことが無くなるから。」

だって、彼等は刀使だった親から何も受け継ぐことが出来なかった僕と同じだから、家族からも”サイコパス”という怪物扱いされる僕と同じみんなと一緒に居れば、何も悩むことが無いと優は答えていた。

「……そうなんだ。……優ちゃんって、そんなに悩んでいたんだ。」

その優の答えを聞いた可奈美はそう言いながら、タギツヒメやあの子達とただ一緒に、永遠に関係性も変わることなく終わることがないように過ごしたかったのが望みだということを知っていながら、それに目を逸らしていたことを思い出しながら、あることを考えていた。

「……剣を振るうことしか出来ない刀使じゃあ辿り着けない答えだね。」

もし、もしも、私が優の望みから目を逸らさずに真正面から受け止め、荒魂を御刀で祓うのが刀使であるという考えから脱却し、剣を捨てて違う道を模索すれば、私が望んでいた物が手に入ったのではないかと思えるほどに。

……すると、

「じゃあ、行こうか。」

優に「行こうか」と手を差し伸べられた可奈美は、その手を何も言わずに取ると、

「……何処に行くの？」

優に何処に向かうのかと尋ねていた。すると、優は、

「みんなが居るところ。みんながいつかは還ることができる場所。」

と言って、可奈美を誘っていた。

そうして、優に導かれるままにタギツヒメ達が居る所へと向かうと、後ろから誰かの声が聞こえたため、振り向いてしまった。

「……もう、寂しくはないの？」

声がした方、そこには幼い頃の可奈美……母が死に、母と一緒で剣術の稽古をしていた家の庭の縁側で一人で泣いていた頃の自分が居た。

「もう、辛くはないの？孤独に感じることはない？」

その一人で泣いていた頃の可奈美が、可奈美に問うていた。

もう、寂しくはないかと。

もう、辛くはないのかと。

もう、孤独ではないのかと。

それを聞いた可奈美は、

「……うん。……もう大丈夫だよ。」

過去の自分にそう答えるのだった。

それを聞いたもう一人の可奈美は、

「……そっか。それなら、良いや。」

と言って、笑みを浮かべるのだった。

「……可奈ねーちゃん？」

すると、急に立ち止まった可奈美を不思議そうに見つめる優に気付

いた可奈美は、
「ううん、何でもない。……行こっか？」
何でもない。と言って振り返ることなく、タギツヒメ達の居る所へと向かった。

――維新派の残党として、活動を続けている山崎穂積は自身の耳から銃撃の音を聞いていた。……そして、その銃弾を放ったであろう者から、最期の言葉を聞いていた。
「穂積――穂積隊長……穂積隊長!!やりました!!」
通信が途切れているせいか、携帯の向こうから断続的に聴こえるが、その者の最期の声は聴こえていた。
「甲斐を殺しました!!――後は……後は頼みます!!」
別動隊が政府要人を襲撃し、政府首脳が混乱している隙に荒魂扱いされる冥加刀使や維新派に参加した元ＳＴＴ隊員や暴動の参加者の中でも実力の有る大人組が集まった本隊が〝ノロのアンプル〟を中東の過激派に齎すことで、荒魂化した人間を故意に増やすことで世界に荒魂の脅威を植え付けることであった。
……それ故に、甲斐を襲撃した者達は生きて帰れないことを理解し、ソフィアと静が死んだことで生き残った〝冥加刀使〟の中で指揮統率が優れ、一番の腕利きでもある穂積に後を託したのである。
「……皆、我が同志達が甲斐を討った。」
そして、遺して逝く者の声をそのまま維新派の残党と冥加刀使等に伝えていた。それを聞いた彼等・彼女等は次の命はまだかと目をギラギラとさせながら、ただ静かにしていた。
……最早、維新派の残党と冥加刀使等に残っている者は〝怨恨〟しか無かった。
世話になった先輩か親友が荒魂事件によって引退、もしくは死傷したことが記憶に残る彼等は、分祀体制に移行しつつある現在の刀剣類管理局と政府に対し〝怨恨〟を抱いていた。……もしくは冥加刀使

である自分を荒魂扱いすることに〝怨念〟を抱いていたのもあったのだろうが。

ただ、それら〝怨恨〟が彼等・彼女等の戦う意味であり、自らを保たせる支えでもあった。

「元とはいえ、陸将補の一人を討ち取ったのだ。……手筈通り、その混乱に乗じ、貨物船に紛れて国外に脱出する。……急げ!!」

故に、穂積の命を聞いた維新派の残党と冥加刀使等は、その命を実行すべく、統率が乱れることなく、それぞれが動き出していた。

いつか、自分達の考えが〝正しい〟こととして認められることを信じて。

「……我々の〝篝火〟を絶やすな!!」

そして、その思いを維新派の残党と冥加刀使等が抱いていることを知っている穂積は、更に士気を上げるべく彼等・彼女等が唯一信じている〝怨恨〟の炎を〝篝火〟と称して導き続けるのあった。

「……ソフィア隊長……静……」

そうして、彼等・彼女等を見やる穂積は、ソフィアと静の名を小声で、口から呟くと、黒色のベレー帽に灰色のトレンチコートを着用し、静といった維新派の冥加刀使達と同じ冥加刀使になったことを思い出しながら、貨物船へと足を運ぶのだった。

「……いつかは、必ず。」

そして、自分達が思い描く〝暴力の世界〟、〝狼の世界〟こそがこの世界の在るべき姿だということを知らしめるためにこの国を一度捨てるのであった。

そうして、穂積等の活動により、アフリカか中東の何処かの国で売られた少女かゲリラに拉致された少女がノロのアンプルで荒魂を人体に入れられ、維新派が持っていた御刀を持って軍事活動を行っているということが発生し、その対応に刀剣類管理局は追われることとなった――――。

――――そして、暴力を望む者達が居る一方で、
「桜も散る頃か……ノロを祀る社の再建は？」
刀剣類管理局の病室にて、床に伏せる紫、その傍に居る朱音以外にも、共存を望む者達が居た。
「順調です。各自治体も協力的ですし、新しく創建するものも多くあります。」
それは、紫と朱音、かつては相争う組織の代表として立っていたが、今は紫から局長の任を譲り受け、朱音が現局長という立場となっていた。
そして、紫の援助と指示の下、朱音は順調に新しくノロを祀る社の再建を増やしつつあると紫に報告するのであった。
「これを機に、かつて人とノロが寄り添っていた古来のやり方に戻っていくことでしょう。……結果的に、タギツヒメ……いえ、あの子達が言うヒメちゃんのしたことは人々に届いたのですね。」
「……そうだ。あの子達が……荒魂のことを私達よりも知らない……いや、良く知っている子供達が得た物だ。」
朱音が荒魂の名前として遺っているタギツヒメではなく、一個の人、生命として受け入れた子供達が呼ぶヒメちゃんと言って、子供達が好きだったヒメちゃんの声が人々に届いたのだと述べると、紫もそれに同意していた。
「……不思議な話だ。荒魂とそれに関する研究を続けていた我々や刀剣類管理局よりも、あの子達の方が一番寄り添えていたのだからな。」
紫は、そう言いながら、衛藤　優のことを思い出していた。
彼は怪物のように見られるサイコパスであるということを診断され、そして荒魂という怪物扱いされる者と手を携えるのは、怪物同士仲良くできたとでも言えば良いのだろうか？そう見えれば良いのだろうか？
いや、むしろ、怪物というのは自らの心の中でしか存在せず、彼等のような使命や人を縛る常識の枠や荒魂は討伐すべきという固定概念から外れた者達が居たからこそ、やっと通じ和えたのではないだろうかと思える。

……道から外れることで見える道が在るということなのだろう。

「何十年、何百年後かにヒメが戻って来た時は、禍神（まがかみ）ではなく和御霊（かずみたま）としてお迎えします。……きっと、あの子達もそれを望んでいるはずですから。」

そうして、朱音は例え自分の命が尽きても、次の代の局長にヒメちゃんのことを語り、ヒメちゃんが此処に帰って来たときは、和御霊として迎え入れられる様にすると紫に語るのであった。

「そうか。……篝火を絶やすな。」

「……はい。」

ベッドで横たわる紫は、朱音のヒメが何十年、何百年後かに戻って来た時は、禍神ではなく和御霊として迎えるという言葉を聞き、安堵していた。

この先、遠い国で戦争が起きたり、経済が崩壊したりして、血が流れ続けるこの世界の何十年、何百年後かにタギツヒメや荒魂と呼ばれる者が居なくなり、ヒメちゃんと呼ばれた子が戻ってくることで血が流れなくなる世界になることを夢見ながら――――。

――――「ねえ、もう行っちゃうの？」

可奈美がそう言うと、タギツヒメは振り向いて答える。

「……ゴメンね。私を待ってる人達が居るから。」

現世に、自分の帰還を待っている人達が居ると言うのであった。

……内心、この隠世から出て現世に帰るとき、もしかしたら自分が居た時間とは違って何十年、何百年後か進んだ現世に自分が知っている者が居ない孤独な世界に戻ることになるかもしれないという思いがあった。

それに気付いたのか、ジョニーはタギツヒメにあることを尋ねる。

「なぁ、一人で大丈夫かよ？」

一人で大丈夫かと。……それを聞いたタギツヒメは、

「……確かに、この先には戦争があったり、お金ばっか取られたり、石を投げられてばっかりの色んな不幸があって、それだけでなくて親が居なかったり捨てられたことに絶望している人が居て、それで溢れているかもしれない。」

どこかの東欧の国と超大国の一つが戦争をして、物の値段が上がり続けたり住む家が無くなることで家族が崩壊し親なき子が増えて行き、皆が不幸になって、その不幸を糧にしてソフィアや静、穂積の様に暴力に頼り、死に救済を求め始める壊れた世界になっているかもしれないと言う。

「……でも、もし辛くなっても私には何時でもみんなが居る場所に還れるから、それさえ分かれば、……もう何が遭っても辛くはないよ。」

……けど、紫や朱音といった人達だけでなく、優やジョニーとミカ、ニキータだけでなく姫和や可奈美が居るこの場所へ何時でも還れるのだから、辛いことが遭っても、辛くはないと答えるのであった。

……それを聞いた優は、

「ねえ、それってもう僕達は終わったのかな?」

僕達は終わったのかとタギツヒメに尋ねるのであった。すると、タギツヒメは、

「まだ始まってないよ。まだ紫とかが……いや、みんなが篝火を絶やさない限りは終わりは無いよ。」

そう言うと、子供のように歯をむき出して笑ってそう答えるのであった――。

――こうして、荒魂のタギツヒメと刀使の可奈美と姫和のお話しは終わりを迎え、和御霊……いや、一人の子供となったタギツヒメは只の人となった可奈美と姫和や優達の声援を受けながら、心に在る篝火が照らす先へと向かうのであった。